
流浪一天

Lotus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流浪一天

【Nコード】

N0990D

【作者名】

Lotus

【あらすじ】

自分の生きる場所、確かな技を求めて流浪の旅を続ける者達。空しく消え去ろうとしていた薄倖の少女と、流離う『不敗剣』。土と埃にまみれて傷ついた儂い少女はやがて『紅門の翡翠』となって江湖を席卷する。中国武侠小説の世界を模した群像物語。

第一章（前書き）

※第五章まではまとめて投稿してしまったため一ページ分がかなり長めです。第一章の表示が最長で、二章から五章は一章の半分程度ずつに分割。第六章以降は一回分が短くなっております。特に携帯で見られている方、ご迷惑をお掛け致しまして大変申し訳ありません。

第一章

「流浪一天 第一章」

一

金陽きんようの都から真東に二千と四百里程、東淵とうえんの街の大通りで一際目立つ、五層の立派な楼閣に大勢の人々が出入りしている。この街で一番の華やかさを誇る料理店、紅門飯店こうもんはんでん。とても豪華な建築で、他所からきた旅人などは入るのを躊躇ちゅうちよってしまうが、実際は他の街の豪華な店とは少し違う。開け放たれた正面の扉を一步入ると、建物の装飾と比べると粗末にも見える卓が一杯に並べられており、比較的身形の良い者から薄汚れて破れたような着物を纏った者まで、みな一様に酒を飲み、話し込んだり歓声をあげたりしていた。部屋の左右には壁に沿って二階に上がる階段がある。二階からも客の笑い声などが聞こえてくる。

二階に上がると明らかに一階と空気が違う。皆、綺麗な着物を纏っており、豪華な料理も多く並んでいる。ここは間違いなく高級料理店だと思わせる雰囲気がある。調度品も洒落たものが多い。ここに比べると一階は大衆居酒屋と言ってもいいくらいの違いがある。一階と同じ所といえば、やはりここにも左右に上へ上がる階段が付いている事だ。ただ、左右それぞれの階段の上がり口には剣を帯びた男が一人づつ立っている。兵士という感じではない。だが、その眼光は鋭い。服装もこの二階の客と同じく若干華やかな着物で、この場に溶け込んでいる。

このさらに上を見たことのある者は、かなり限られてくるだろう。二階にいた客の中にも居ないかもしれない。一階の客達は……ただ上の様子について噂するだけだ。この店は一階も上の階も同じように広く中央部分が吹き抜けになっており、見上げれば上の階の中央

に面した欄干らんかんが見える。普段はその豪華な装飾の施された欄干しか見えないが、月に数回、一階で上機嫌になった客達はその吹き抜け部分に群がって上を眺めることがある。その時には、二階の客も同じだ。二階からの方がもっとよく見える。

この街へ来たならば、何を措いても見ておくべきである。東淵湖とうえんこの月と紅門こうもんの花。

春が近づき街のあちらこちらで花の蕾が膨らみ始め、都では喧騒の中にもどこか緩やかな時間が流れているようだった。しかしこのような平穏を感じられるのはこの金陽きんようの都や朝廷が強力に支配する一部の大きな街のみで、それ以外は経済的にも貧しく、治水もままならず毎年天災の被害に遭う。疫病に苦しみ、飢饉に見舞われる無残な街が数多く存在していた。そういった街から逃げてきた多くの難民が都を目指すが、余りにもその数が多く受け入れられる筈も無く、その殆どは強制的に追い出されていく。稀に都に住み着くことが出来て浮浪者として生きる者も居るが、果たして彼らの置かれた状況は好転したなどと、とても言えない。

西門の大通りから更に西に入った路地に二人の子供が寄り添うようにうずくまっている。間違はなく都の人間ではないだろう。まるで泥で姿を偽装でもしているかのように汚れ、何か模様が描いてあったのか無地なのかわからない着物を着ている。兄弟のようで、一人は十より少し大きいだろうか。もう一人は五つ六つ程の子だ。家を持たない子供は珍しくはなかった。大抵は物乞いをして生きている。中には窃盗などを働き、役人に捕まるものも少なくないが、そういった子供達は役人に痛めつけられて、命を落とすこともある。もともと死にかけているほど飢えているのだ。まさに彼らの命はどこに居ても風前の灯火の様だった。

深夜、西の外れにある酒楼から二人の男が出てきた。酒を飲んでいたようだが、足取りはしっかりしている。店の者が顔を出して覗いていたが、しばらくすると顔を引っ込め扉を閉めた。やっと二人の客を追い出せたのだろう、程なくして店の明かりが消えた。と、次の瞬間、

「泥棒だ！」

先ほどの店から大声が響く。しばらく中でがたがたと物音がしてから今しがた閉まったばかりの正面の扉がはじける様に開け放たれた。黒い二つの人影が躍り出る。

「発^{はっ}！ 走って！」

少し大きな人影が叫ぶ。一方の小さな人影は少しもたついていたが、路地を北に向かって走り出した。それを見届けると大きい方は南へ走り出す。

「くそっ！ あの餓鬼どもが！」

続いて店の者が飛び出したが、二つの人影はどちらもすでに遠のいていた。追いかけても捕まえるのは難しい。この辺り一体は都の中心から離れた民家の密集している場所だ。路地も複雑に折れ曲がり、隠れる場所はいくらでもある。店の主人が役所に届けるだろうが、おそらくどうにもならないだろう。

発と呼ばれた人影が通りを一目散に駆けていると先程店から出てきた二人が通りの脇にある大きな立ち木の根元に座り込んで話している。こんな夜更けにまだ喋り足りないのか、或いは帰る家がないのか。発は、彼らを気に留める余裕はなかった。というより見えていなかった。ただ、前に道が続いているかどうかだけを確かめられる程度にしか目を開いていない。全く速度を落とさずにその前を通り過ぎたが、少し行った辺りで急に頭を低くして、躓きそうになるのを堪えながらもそのまま倒れこんだ。

「ん……？ 何か、こけたぞ？」

一人の男は髪も髭も伸び放題の老人で、顔を向けて目を凝らしている。

「何がこけた？ 野良犬か？ いや、この通りを真っ直ぐ走ってすところぶならその犬はかなり間抜けだな。何も無い所でこけるのは人間くらしいのなんだ。しかしこんな夜中に何だ？」

もう一人の男はまだ若そうだ。夜中にこける者も怪しいかもしれないが、それを言うなら二人も同じだ。二人して地面に跪くようにしている人影を見ているが、ただ見ているだけだった。老人は若い男の方に向き直り、何も見なかったかのように再び話し始めた。

「今回は他にどこもまわらんのか？ 宮廷に参るのは明日だったな？ 赤い顔して行く訳にもいかんだろうに」

「別にかまわんさ。赤い顔だろうが青い顔だろうが文句は言うまい」

「しかしご苦勞な事だ。わざわざお前が出向かんでも長老衆から適当に見繕って使いにやればよいものを。どうせ報告……というより他愛も無い世間話だろうが」

「いや、この事は内部の者でも知るものはおらん。俺と奴、二人だけの話だ」

「おう、そうだ。儂は都に^{わし}来るのはかなり久しぶりだからな。しばらく留まろうと思うんだが」

「あてがあるのか？」

「そんなもんはどうとでもなるわ。昔はここに住んでおったんだからな」

「まあ俺もしばらく居ることになる。都は広い。遊んでいけばいいさ」

話が一段落したところで老人が再び通りに顔を向けた。

「ふむ、まだ生きておるようだな。見てみるか」

そう言って老人はゆっくり腰を上げて、うずくまる人影に近づいていった。

三

「おい、お前何をしておるのだ？」

老人がうずくまった人影に歩み寄りながら声をかける。が、返事をしない。

「ん？　口がきけんのか？　胸がどうかしたのか？」

どうやら右手で胸を押さえたまま細く細く息をしている。今まで気付かなかったが子供だ。顔が汚れているが良く見るととても幼い。

「おい坊主、いや、坊主かお嬢ちゃんかは知らんが、こんな時間に何をしておる。お前幾つだ？」

「……うっ……うっ」

子供はただ時折小さく呻くだけだ。

若い方の男はしばらく座ったままだったが立ち上がって近寄った。

「どう見てもおかしいだろう。病気じゃないのか」

「このまま死ぬかもしれんなあ」

「……そうだな」

「見なければよかったのう」

「……そうかもな」

二人はしばらく黙ってただ眺めていた。

不意に民家の影からもう一つ、人影が飛び出した。また子供だ。

今度のは少しばかり大きいようだが。老人と若い男は、さっと視線を送ったが身体は動いていない。口を開くのは老人の方が速かった。

「お前、これの知り合いか？　こんな夜更けに遊んでおるのか？」

子供はうずくまっている方の子供が苦しそうにしているのを見て驚いて駆け寄った。

「発！　発！」

「こっちは発というのじゃな？　で、お前は？」

「発、しっかりして！」

「儂らはいいつを見つけたただけだからな。何かしたわけではないぞ」
老人は、必死に発に声をかける子供の顔を覗いた。若い男は黙って発を見ている。

「お前、もう少し声を落とせ。役人が聞きつけて来るぞ。面倒は御免じゃ」

「役人……役人は駄目！」

子供は大きな目を開いて老人を見るなりまた甲高い声で叫ぶ。

「嫌なら少し黙れ！」

うずくまっている発は相変わらずだ。老人は若い男の方を向いて『困った』という顔をしたが、若い男は黙ったまま表情を変えない。

「こんな夜更けにお前達は何をしておったのだ？」

「……」

「お前、名前は何だ？」

「……媛、私は媛です……発を医者……」

「ほう、媛とな」

再び老人は若い男をみる。男はチラッと老人の顔を見たがすぐに発に視線を落とした。男が口を開く。

「この都で医者を知ってるか？大勢いるだろうが、俺は知らんな」

「ふん……医者……」

四

しばらく時間は経っていたが、まだまだ闇夜は深く静まり返っていた。そんな中一軒の屋敷に明かりが灯る。

「なんだなんだ。やっと平穏な日々を手に入れたというに、またおぬしか。今度はなんだ？」

屋敷の奥から現れたのは白い老人だった。顔も白いが、頭も長く垂れた髭も見事に白かった。そして露骨に嫌そうな顔をしている。

「医者に用があるといえば病か怪我に決まっておろうが。それ以外

に何がある？」

「おぬしが今まで病で儂の所に来たことなどなかったわい。今度は何だ？ 金か？ 飲みすぎて金が足りんようになったか？ 酒の匂いが屋敷に充満しておるわ」

「儂が用があるのではない。これだ。これを診ろ」

そう言って連れて来た子供を見せる。子供をおぶって来たのは若い男であったが。

「で、金はあるのか？ こんな夜中に叩き起こしておって。儂も商売をしておるのだからな」

医者 of 老人は、医術は商売と言って憚らない。子供には目もくれなかった。

「こいつは平大生へいだいせいといってな、都では随一の医者だ。皇帝を診たこともあるくらいじゃ」

「何を言っても診んぞ。金を見せろ」

「金などもう蔵にたんまり貯め込んであるだろうが」

「この都で金を取らずに人を診たなんて噂になってみる。儂はごまんと居る病人に全てを筆記取られてしまいうわ」

子供を連れて来たほうの老人は平老医師に少し待てというように手のひらを見せて、もう一人の子供に尋ねた。

「おい媛とやら。金はあるのか？」

「……ありません」

媛は発の手を握り締めながら消え入りそうな声で呟いて俯く。発の方は先程よりは幾分落ち着いてきたようだがまだ顔をしかめている。

「金が無くて死んでいくものは大勢居る。そういう世だからのう」
平は全く人の情など持たぬといった風で、よくその歳まで医者でいられたものだが余程の腕があるのだろう。

「俺が出そう。とりあえず診てもらえないか」

今まで黙っていた若い男が口を開く。そう言って懷から金を一分取り出した。

「足りなければ言ってくれ」

「ほう……なんじゃおぬし、新たな金づるを見つけたのか。まあ仕方ないな診てやるか」

平は老人に向かって言う子供に近づいた。

「おい小僧、どこがどうおかしいんじゃ？」

発が口を開こうとしたがすぐに声が出ない。

「それを調べるのがお前の仕事じゃろうが。ボケて診かたがわからんようになったか？」

「素人は黙っておれ！」

ぶつぶつ言いながら平は発の身体をあちこち触れたり押したりしていた。媛はずっと発の傍を離れなかったが、老人と若い男は部屋の隅の長椅子に腰を掛け、診察の様子を眺めていた。

五

平大生が繰り返し具合を尋ねるが、発はどうしても声を出せない。

「何とか言わんか小僧！」

媛が代わって言う。

「弟は胸を患っているんです！」

「お前達は兄弟か」

「なんじゃ、おぬしらこの子供らを知らんのか。どこの子だ？ 親はどうした？」

「そんなもんは知らぬわ。ほれ、はよう診んか。金は渡したのだからな」

「おぬしの金でもないのに偉そうに抜かすな！ 追い出すぞ！」

見た所この医者はかなり歳をとっている。ここまで怒りっぱなしでよく事切れないものだ。会話の様子から察するに、二人は古くからの知り合いであるようだ。仲は悪そうだが。

「ふむ、この子は肺を病んでおるな」

「さつきこの娘が申したのであろうが」

「胸としか言っておらんわ！」

媛はハッと身を強張らせた。老人が自分のことを「娘」と言ったからだ。しかしよく考えてみれば、ただ酷く汚れているだけで、男の振りを特別気を使ってやっているわけでもなく、ばれるのは当たり前だ。今までは男か女かを気にする以前に、誰もこの姉弟に近づこうとしなかっただけだ。

「とりあえず薬を出してやる。この病は時折発作を起こすがしばらくすれば治まり、それを繰り返す。ひたすら安静にするしかない。

家はどこだ？」

平大生が媛に尋ねる。

「安県……」

「何？ 安県！？ 安県からわざわざ旅をしてこの都まで来たのか？ お前ら二人だけか？ 小僧の病は安県に居た頃から患っておるのか？」

「……はい」

「馬鹿なことを……。死出の旅じゃ！ わざわざ命を縮めに来るとは！」

平大生は呆れた様に溜息をつく。

安県はここ金陽から遙か南に二千里。子供だけで来たというならおそらくふた月以上かかったのではあるまいか。

「まあ都一の医者に診せたんだからな。どうだ、直るのか？」

「直らんわい！」

「え？」

媛が驚いて老医師を見た。

「この病は直らん。薬で進行を遅らせて、後は死ぬまで安静にするだけじゃ」

「そんな！ ……発……発！」

発の身体にすがり付いて媛は泣き出した。

「すぐ死ぬわけではないのだな？」

「そうだ。しかし幼い子供は進行がはやいからのう、何とも言えん」
「なんじゃ。それでよく都一の名医と言えるな」
「わしが名乗ってるわけではないわい！　もしこれが直せるようになったらわしは医神を名乗ってもよいわ」
その後誰も口を開かなかった。ただ媛の泣き声だけが屋敷に響いた。

六

「もうじき夜も明ける。どこかその小僧を休ませる家でも探して連れて行くんじゃないな」

平大生はそう言って部屋を出て行こうとする。

「何じゃ病人を追い出す気か？　行く所など無いに決まっとうが」
「ここに居てもどうにもならんじゃろうが！　この都に留まって、たまに薬を取りに来い！　金を持ってな！」

「あーわかったわかった！　おい行こう。これ以上あの爺と居ると儂らまでおかしくなってしまうわい！」

老人は勢いよく立ち上がって一人さっさと部屋の外に出て行ってしまった。じつと発の手を握って傍に付いていた媛はどうしていいのかわからない。

「薬がなくなったらまた来ればいいのか？」

ずっと黙っていた若い男が発を抱きかかえながら尋ねた。

「そうじゃ。ちゃんと飲ませんとすぐ死ぬかもしれんからな。忘れるなよ。死ぬまでな」

もう媛は言葉も無い。涙も枯れてしまっていた。ただ、呆然と老医師を見送っていた。

「おい、行くぞ」

若い男は発を負ぶって部屋を出る。媛は力の無い足取りでついて行った。

「全く……こんな所に来た儂が馬鹿であつたわ！ あんな爺の顔を思い出すとは！ あー腹の立つ！」

先に表まで出ていた老人が門の前の立ち木に蹴りを喰らわせている。高さが門の倍以上ある巨木だが見れば先端まで激しく揺れている。尋常な力ではない。

「どうする？」

若い男は老人の怒りを無視するように短く聞いた。

「ふうう……。そうだな、……。おい、お前達、今日までどこにおつたんだ？」

「……どこかわかりません。夜遅くなったら民家の傍で寝てました……」

「……そうか」

老人は白髪を撫でながら黙ってしまった。

「しばらくこの都に居ると言ってたが、どこに泊まるつもりだったんだ？」

と、若い男が老人に聞いた。老人は口をへの字に曲げてしかめっ面をしている。

「考えとらん。わし一人ならなんとでもなるが……病人ではなあ」

「とりあえず都は離れられんな。薬が要る」

「あれの出す薬が効くものか！ 毒でも盛ってあるかもしれん！」

「都一の医者じゃなかったのか？」

「昔はな。今は知らん」

ずっと発の横に張り付くようにして話を聞いていた媛が口を開く。「どうもありがとうございます。薬も頂いて……。私達はこのあたりに居ます。今までずっとそうやって生活してきました。発の病も前からこんな状態でしたので……。覚悟はできているんです。」

後半は涙声になっていた。

「いかん！ ここまで関わったからには放っておく訳にはいかんぞ。この洪こうの名声が地に落ちてしまう」

この老人の名声がいかにほどのものか媛は知る由も無い。
「洪様と仰るのですね。しかしご迷惑はかけられません」
「迷惑？迷惑じゃと？　とうに迷惑を被っておる！　そんなもんは関係ないわ。いいから来い！」
ここで初めて名乗った洪老人は歩き出す。若い男は発を负ぶったまま黙って老人についていく。媛は発と離れまいと同じく黙ったまま従った。時折冷たい風が皆の頬を撫でて行く。

七

流石に小一時間も歩き続けていると手足が冷たくなってくる。この金陽の都では真夏以外、夜は肌寒く感じる。

「で、結構歩いてきたがどこに向かつてるんだ？」

洪老人は黙ったまま一人先を歩いているが、どこかに向かっているようには見えない。何度か同じ場所に出たりしている。若い男の方に近づいて少し小声で話しかけた。

「お前はどこで寝るつもりだったのだ？　そこへ行こう」

媛は若い男が背中に負ぶっている発のすぐそばに居て、洪老人の言葉ははっきりと聞こえている。

「決めていたわけではないがな。まあ行ってみるか」

今度は若い男を先頭に、媛と老人が続く。

媛が若い男に向かつて尋ねる。

「あの……あなた様のお名前は何と仰るのですか？」

若い男は何も言わない。すぐに洪老人が口を開く。

「こいつはな、か……かてんゆう夏天佑と云う名だ。わしは洪破天だ」

「私は、りようえん梁媛、弟は梁発です」

今頃になって初めて名乗りあう四人。発と若い男は何も言っていないが。

「安県から来たと言うておったな。よくここまでたどり着いたもの

だ」

洪破天は先頭を夏というらしい若い男に代わりただついて行けば良いだけになって、先程とうって変わって口が軽やかになったようだ。

「ずっと二人で旅をしてきたのか？」

「最初は……もっと大勢でした。知らない大人の人達でしたけど、みんな安県を捨てなければならぬ人ばかりだったんです。私達は都に向かうとか考えてなかったけど、ずっとついていきました。でも、途中ではぐれてしまつて……都に着いたときは九人でした。今ではその人たちもどこへ行ったのかわかりません」

（親は……おらんのだろうな……無事だったら今こんな所におるわけがない）

「安県か……遙か昔、若い頃に行つたことがあるが、そこまでひどい事になっておるのか……しかしよく無事だったな。おう、そうじゃ、お前は武芸ができるのか？」

「え？」

「ほれ、安県といえばおうりゅうもん黄龍門の……ほれ、何じゃ？」

洪破天は額をピタピタと叩きながら記憶を探っている。梁媛は思いがけず出てきた故郷の誇りとも言える名が出てきたことに嬉しくなつた。

「良くご存知なんですな」

「黄龍門は有名だぞ？ 安県周辺は赤子から年寄りまで得物を取つてやりあう物騒な所だとな」

「……」

梁媛は俯いて黙つてしまう。

「冗談じゃ、冗談じゃ。黄龍門の門弟以下、住民までも立ち上がった安県に巢食つておつた賊を一掃したんじやろう？ 安県黄龍門の名はこの都にも轟いておる」

そう言つて梁媛の顔を覗き込んだ。梁媛はそれを聞いてまた嬉しくなり思わず顔が綻ぶ。

「笑ったのう。笑ったのう。ハハ、ハハ」

そう繰り返して洪破天も笑った。

「私も発も、剣を習ってました。でもそれほど本格的というわけではないんです。ほんの基礎を黄龍門の門弟の方々が教えて下さるんです。でも段々生活自体が苦しくなって、剣の練習どころではなくなつて……。」

「何とも惜しいことよ。まさか黄龍門まで潰れてしまったのか？」

「いえ、今も安県に……多分」

「そうか……」

その後は二人で黙って梁発を挟む様に並んで夏天佑について歩いていた。

八

夏天佑が一軒の宿屋らしき建物の前で止まる。

「ここだ」

まだ明かりは点いている。大抵の都の宿屋は一晩中開いている。常に都は多くの人間が出入りしており、夜中に都に着く者もいるからだ。ここはそれほど大きな宿ではないようだが、おそらく今夜も客が休んでいることだろう。

「まだ酒はあるかのう？ 酔いが醒めてしまったわい」

そう言つて洪破天は先に中に入っていく。三人も後に続いた。明かりは点いているが、誰もいなかった。客はどうに眠っている時間だ。

「誰かおらんか？」

洪破天が厨房を覗いたりしながら店の者を探す。すると奥から誰か出てきた。

「はいはい、お泊りですか？」

店は開いたままなので仮眠でもしていたのだろうか。店の主人ら

しき男が目を細めながら夜更けに現れた客を見る。そしてすぐに目を倍以上に見開いた。

「あっ……！」

何を言いたいのかわからないが店の主人がものすごく驚いているのは梁媛にもわかった。夏天佑が洪破天に向かい、

「洪兄、俺は何て名だったかな？」

と聞く。

「あー……夏！　じゃ！　夏……儂は何と言うたかの？」

洪破天は梁媛に尋ねる。

「……夏天佑様とお聞きましたか？」

「おお、そうじゃなそうじゃな」

「俺は夏。夏天佑という。しばらく部屋を貸して欲しいんだが」
店の主人は相変わらず口が開いたままだった。

「か……夏天佑様……？」

「そうだ」

「は……はい、部屋は一部屋空いてございますが……」

夏天佑は再び洪破天を見る。

「一部屋か……そうじゃな、一部屋でよかろう。ちょっと広めの部屋がよいのう」

「一部屋しか無いんだから広いも狭いもないだろう」

「わかりました。すぐ支度を致しますので」

「待った！　その前に酒をくれんか。安いやつでよい。飲んで待つことにしよう」

「酒はございますが、料理の方は……」

「酒だけで結構。夜が明けたら飯をもらおう」

「かしこまりました」

主人は厨房に戻り、すぐに酒を運んできた。

「それではお部屋の用意をしてまいりますので……」

洪破天は早速手酌で飲み始めた。

「ゆっくりでよいぞ」

梁媛は梁発を近くの長椅子に寝かせ、自分の上着を掛けてやっている。店の主人は夏天佑の顔を少しでも覗き見る。夏はその瞬間、主人の目を真っ直ぐに見た。主人はあわてて、

「で、では……」

と逃げるように小走りで部屋の方へ向かった。

「なんじゃろうのう？」

「俺かあんたを知ってるかもな」

「お前はここを知っておったのだろうか」

「ああ、人に聞いた」

「わからん。まあどうでもよいわ」

広間には四人しか居ない。しばらくの間静かな時が流れていた。

九

ようやく酒が効いてきたのか、洪破天は卓上に頬杖をついて梁媛と梁発の姉弟を眺めていた。

「汚い格好だのう」

「……すみません」

「ぼろぼろで寒くないか？」

「寒いですけど、これしかありませんから」

「発は辛かろう、これを掛けろ」

洪破天はそう言って自らの長袍ちやうほうを脱ぐと梁媛に差し出した。

「ありがとうございます」

梁媛は梁発に掛けていたぼろぼろの汚れた上着を取り、受け取った長袍を梁発に掛けた。しばらく洪破天は、またさっきと同じように眺めていたが、

「……もう少しマシな服を買ってやるぞ」

そう言うと卓に頬を乗せて眠ってしまった。梁媛は黙ったまま静かに寝息を立て始めた老人を見る。夏天佑の方は何か考え事でもす

るかのようにじっとして、時折酒を口に運んでいる。梁媛が視線を自分に移した事に気付き、こちらに顔を向けた。

「今日も生きられたな」

「……はい」

夏天佑はまた視線を戻して酒を注ぐ。梁媛は急激に悲しみに囚われる。とにかく生きるのに精一杯な毎日だった。

（今日は生きられた。明日は……）

「媛。明日も生きるぞ。発もな」

夏天佑は何故そんなことを急に言い出したのだろう。しかし、梁媛は心の中で繰り返した。

（明日も、生きる）

「もう、今日だな」

奥から店の主人が戻ってきた。

「お待たせして申し訳ありませんでした。寝台を四つ運び込むのに手間取りまして」

「よし。行こうか」

夏天佑は立ち上がって梁媛に声をかける。梁発は既に落ち着いて眠っている。そっと抱きかかえて主人の方へ歩き出した。

「この爺さんは後で連れて行く」

「それでは、こちらでございます」

店の主人の後について部屋へ向かった。部屋は質素だが落ち着いた感じの綺麗な部屋だった。夏天佑は梁発を一番奥の寝台に寝かせてから、

「お前ももう寝ろ。心配はいらん。服の汚れを払ってから寝台に上がれよ」

梁媛に向かってそう言って部屋を出て行った。洪破天を連れてくるのだろう。梁媛は部屋の隅に掛けてあった手拭でボロボロの上着の汚れを払うと、梁発の寝ている隣の寝台に横になった。梁媛と梁発、二人だけの生活の中に突如現れた二人の人間。この先どうなる

かわからないという不安が媛の頭一杯に広がっていたが、身体は疲れ果てている。梁媛はすぐに眠りに落ちていった。その後しばらくは広間の明かりは灯っていた。

「どうした？昔でも思い出してるのか？」

洪破天は目を覚ましていたが相変わらず眠そうで眼は殆ど開いていない。

「もう十数年になるのう。忘れておったわ……」

「もうあの子らは部屋で休んでるぞ。俺達も行こう。風邪をひくぞ」「おう」

洪破天はゆっくりとした動作で腰を上げ、夏天佑と並んで部屋へ歩いていった。

十

春らしい暖かな日差しが窓から差し込んでくる。どうやらもう昼のようだ。梁媛が横になったまま隣に目をやると、隣の寝台は空っぽだった。反対側の寝台にも誰もいない。ハッと息を呑んで上体を起こす。それから昨夜この宿に来了ことを思い出したが、梁媛は何処へ行ってしまったのかと急いで寝台を降りると部屋の外へ飛び出した。ここは二階で部屋の前の廊下の端から大きく弧を描くように階段が一階に伸びている。下の広間では食事をしている泊り客や、茶を飲みながら歓談に興じる老人達、近所の者だろうか。梁媛も、洪破天も、夏天佑も見えない。梁媛はあせって階段を駆け下りる。近くにいた客は怪訝そうな顔を向けたがすぐに顔を戻した。丁度店の主人が広間に出てきたところだった。

「あの、すみません。弟は……昨夜一緒に来た人達は何処へ行っただのか知りませんか？」

「あ、表に居られるんじゃないかな？……と、思います」

主人の話し方はどうも変だ。昨夜もどこかおかしい様子だったが、

何故かはわからない。梁媛は軽くお辞儀をすると表に向かった。主人も丁寧にお辞儀を返している。

もう既に陽は高くなっている。表の通りは多くの露天が立ち並び、人でごった返していた。

「おう、こつちじゃこつちじゃ。ようやく目が覚めたか」

見ると宿屋の軒下に並べてある長椅子に洪破天と梁発が座っていた。

「発、大丈夫？ 苦しくない？」

「もう苦しくないよ」

梁発は肉饅頭を頬張っている。

「起きたばかりか？ お前も食うじゃろう？ ほれ、そこで売っておる。これで買って来い」

洪破天はそう言って梁媛に金を渡す。梁媛は少しばかり戸惑っていたが、洪破天に大きく頭を下げてから湯気の立ち込める屋台に走っていった。

「姉ちゃんは余程腹が減っておったようじゃな」

洪破天は梁発の頭を撫でながら目を細めて梁媛の後姿を見ていた。梁発は通りを行く人や物と肉饅頭を交互に見ながら黙々と食べている。しばらくして戻ってくる梁媛を見つけた洪破天、

「ほれ、姉ちゃんが饅頭を抱えて嬉しそうな顔して戻ってくるぞ」

そう言って梁発に顔を近づけて梁媛を指差す。梁発も梁媛の顔をみて笑った。梁媛は気付いていない。肉饅頭を眺めているからだ。

「何じゃ、よだれ落としそうな顔で戻ってきたのにたった一個しか買っておらんのか。もっと買えたじゃろう？ 遠慮はいらん。わしを買ってこよう。座って食え」

「よだれ……」

梁媛から釣り銭を受け取ると今度は洪破天が屋台に向かった。梁媛は梁発の隣に腰掛けると、梁発と同じように肉饅頭を頬張った。

「発、肉が一杯入ってるね。ご馳走だね」

「うん。美味しいね」

肉が多いといっても所詮は饅頭で、あっという間に腹に収まってしまうが、二人にとっては久しぶりの『まともな食べ物』である。

「発、昨日の事、ちゃんとお礼言った？」

「うん。……これからもずっと一緒に居るの？」

「え？」

「あのお爺ちゃん、ずっと一緒に居てくれるのかな？」

「それは……無理よ……」

食べかけの饅頭を持った手を膝に下ろし、寂しげな面持ちになる梁媛。ただ梁発が倒れた場所に居合わせて、親切にも医者に連れて行ってもらい、宿にまで泊めてもらった。しかしそれだけだ。この先ずっと洪破天がこうして食べさせてくれるなど考えることはあまりにも愚かな事である。この饅頭を食べ終えた途端、洪破天がどこかへ去っていったとしてもおかしくは無い。梁媛はとても寂しく、そして惨めな姉弟である事に変わりは無いという現実に打ちのめされていた。

十一

その後はあまり宿屋を離れず、陽が落ちるまで周辺をただぶらぶらしていただけだったが、梁媛、梁発の二人には初めて目にするものも多く、飽きることは無かった。やがて夜になり宿に戻って晩飯を食べると三人は部屋に戻った。洪破天は酒を持っていくのを忘れない。

夜も更けてきた頃、ふらりと夏天佑が宿に戻ってきた。朝からどこかへ出かけていたようだ。広間の奥の椅子に腰掛けて黙っている。少ししてから宿の主人が広間に出て来ると隅に居る夏天佑に気付き、一瞬身を強張らせて固まっていたが、意を決したかの様に夏天佑の元にやってくる。

「お、お帰りなさいませ。お食事は済まされましたでしょうか？」

夏天佑は主人が広間に出て来た所からじっと見ている。

「いや、まだだ。麺を少し貰おうか。少しな。あと、酒をくれ」

「はい。かしこまりました。暫くお待ちを」

神妙に聞いていた主人は深々とお辞儀をすると足早に戻っていた。辺りに目をやると客が二人、夏天佑とは離れた場所で酒を飲みながら話しているが、声は聞こえなかった。

「お待たせいたしました」

主人は余程急いだのだろう。しかし卓上に碗を置く時はまるで音を立てないように注意を払っているかのよう慎重に置いた。

「早いな。座ってくれ」

「え？」

「そこに座ってくれ」

夏天佑は主人が立っている前の椅子を指差した。

「は、はい」

主人は緊張しきって震えているように見える。

「あーすまんが酒杯をもう一つ持ってきてくれないか」

「は、はい！」

椅子を引いて腰を下ろそうとしていた主人は夏天佑の言葉を聞くと飛び跳ねるように立つと大急ぎで戻って酒杯を取ってきた。

「すまん。まあ座ってくれ」

主人はお辞儀をしてから先程の椅子に腰をかけたが背筋をピンと伸ばし夏天佑を真っ直ぐ見ている。その様子を見た夏天佑は微かに笑った。

「あんたも飲んでくれ。」

今持ってきた酒杯に酒を注ぐ。続いて自分の杯にも注いでから一口飲んだ。主人は固まったまま動かない。それを見て夏天佑は口を開いた。

「方崖ほうがいに行ったことあるかい？」

「えっ？」

「方崖で俺を見たんじゃないのか？」

それを聞いた主人はまたも飛び上がるように立ち上がった。体が円卓に触れ、ガタンと円卓が持ち上がり酒杯が倒れそうになったが、すかさず夏天佑が掴んだ。

「も、申し訳ございません！」

主人は円卓の傍で跪こうとする。

「やめろ！ 座れ！」

夏天佑は大声は出さなかったが鋭く低い声で言った。

「座ってくれ」

広間に居た二人の客が訝しげに顔をこちらに向けていた。

十二

宿の主人は震えながら椅子に座る。夏天佑は溜息をついて天井を見上げた。

「なあ、俺はそんなに怖いかい？」

「そ、そのようなことは……」

「あんた名は？」

「私は、史と申します。」

「史、何だ？」

「はっ！ 史小倚と申します！」

相変わらずこの史という主人は背筋を伸ばし、口以外は固まっている。

「史さんよ。この都には教徒は多いのか？」

「いえ、私の他には……五、六、六名居ります」

「これだけ多くの人間が居るのに六人か。まあそうだろうな……飲んでくれよ」

そう言って史の顔を見る。

「はっ。頂戴致します」

史は勢いよく目の前の杯を取ると一気に飲み干してしまった。

「……なあ史さんよ。普通にしてくれよ。俺はそんなんじゃないんだ。それに宿を世話になってるしな。史小倚の名は覚えてぜ？」

「は、はっ！ 有難き幸せにございます！」

「……好きにしてくれ」

夏天佑は少しぬるくなりかけている麺を食べ始める。暫くこちらの様子を伺っていた客は二人が普通に話し始めたのを見届けると顔を戻した。

「で、俺のことを誰かに話したか？」

「いえ、あ、いや、私めは何も存じておりませんので、一切誰にも申しておりません」

「そうか。いやまあ、別にいいんだけどな。他の六人も方崖に行っただことが？」

「勿論でございます。皆、太乙北辰教たいいつほくしんきょうに忠誠を誓っております」
史の背中が更に弓形に反っている。

太乙北辰教というのは数百年前この国の東北部に興った信仰で北辰が万物の根源であるとする宗教であった。初期は純粹な信者の集まりであったが、徐々に変質して国の各地から流れてきた者たちが信者を名乗って集団を作り始め、およそ百年ほど前、太乙北辰を名乗る組織全てが併呑されると武林ぶりんでも注目を集める大勢力となった。そして現在もその勢力を拡大している。信仰は既に無く、太乙北辰教という名前と、組織に所属する者を教徒、そしてその首領を教主と呼ぶことだけが受け継がれているだけだ。実態は強大な武装集団となっている。とは言っても北辰教徒達は普段はそれぞれ生業を持って生活をする庶民であって、軍のようなものではない。

「あんたらはこの都で何か役目があるのか？」

「いえ、特にはありません。ここに居る教徒は皆この土地の者です、この都で商いをしております」

「ふうん。俺がここに来たのは蔡長老さいに聞いたんだ。教徒がやる宿とは言ってなかったがな」

「左様でございましたか。蔡長老様はこの都の御出身でございますし

て、私どもはよく存じ上げております」

「ほう、そうだったのか。……あんたらは北辰教徒であることは隠してるのか？」

「それは……その、この都では……」

「そうだな。その方がいい。と言うより、ここで名乗って商売はできんわな」

夏天佑は麺を綺麗に平らげて酒壺を持つと再び史と自分の杯に酒を注いだ。

「俺は明日……いや、明後日だな。都を発つ。洪破天は知ってるか？」

「や、やはりお連れ様は洪破天様でしたか。勿論存じ上げております」

「あの爺さんと連れの子供二人、もう暫く……いや、かなり長く逗留するかもしれん。わからんが。構わないか？ 宿代は払う」

「お、お代などとても御座いません。誠心誠意、お仕えさせていただきます」

夏天佑は苦笑した。

「いや、普通にしててくれ」

離れて座っていた客二人が立ち上がった。

「親父、勘定置いとくぞ。おい親父」

史は夏天佑を見たまま動かない。

「行ってくれ。俺はもう寝る」

そう言っって夏天佑は立ち上がりまだ残っている酒壺を手取る。

「部屋に持っていくぞ？」

「はいどうぞどうぞ」

二人の客は史が全くこちらを向かないので少し腹を立てたようだが、

「置いといたからな。盗られても知らんぞ」

と言っって外へ出て行った。史は夏天佑が部屋に入るまでずっと直立不動のままだった。

夏天佑が部屋に入ると洪破天はまだ酒を飲んでいた。梁媛、梁発の二人は横になっていたが、梁媛は物音に気付いたのだろうか、寝台の上で起き上がった。

「さすが耳が聡いな。技だな」

夏天佑はそう言って笑うと梁媛は恥ずかしそうに少し微笑んだ。

「遅かったのう。引き止められたか？」

「いや、少し前に戻ったんだが下で少し腹ごしらえをな。酒、まだあるぞ」

持って上がってきた酒壺を洪破天の前に置いた。

「そんなにいつもお酒を飲んで、大丈夫なんですか？」

梁媛は洪破天がいつも飲んでいるのを見て心配になった。

「そうだな。この爺さん、お前達に会ってから酒が入ってない時は無かったな。今日も飲んだろう？ 医者に言った時は既に腹に入っていたしな」

「僕の体は血ではなく酒で動いておるのよ。気を巡らせば更に蒸留させることができる」

「そんな話聞いたこと無いな」

その後は梁媛が今日見た都の様子を夏天佑に聞かせたりしながら時間が過ぎていく。梁媛は梁発の前では落ち着いた姉の様だが、やはり子供だ。しかも都に着いてからまともに街を見て回る事など無かった筈である。どこの建物が綺麗だったとか面白い人が居たなどと顔を上気させながら話している。夏天佑が洪破天を見遣ると、目を細めて見たこともない柔和な面持ちで梁媛を見ている。

（どうなっちまったんだ？ この爺さんは。人を切ったって眉一つ動かさねえ癖に。この子はそんなに孫娘に似てるのか？）

十年以上前に洪破天は孫を亡くしている。相当美しい娘であった

と洪破天は言っていた。それは本当かどうか知らないが、確かにこの梁媛という娘もどうやら並みの器量ではなさそうだ。ただ、今は髪も整えられず、ぼろぼろの格好だが。夏天佑は梁媛を見ながら、「明日、お前達の着物を買いくか。その格好で表通りは逆に目立つからな。」

と言った後、洪破天を見る。

「おうそうじゃな。全く遠慮はいらん。明日、見に行こうな」

梁媛は必ず遠慮すると思い、洪破天は少し強くそう言うのと、自分の寝台にさっさと横になった。

「あの……」

梁媛が夏天佑に何か言おうとしたが夏天佑は顔の前で右手を振って、

「これも縁だ。心配することは無いぞ。あの爺さんは信頼していい人生、別れもあれば出会いもあるんだ。ちゃんとな。俺も休むでしょう」

「……はい」

夏天佑が寝台に上がるのを見てから、梁媛も横になると涙が不意に溢れ出した。悲しい涙ではない。初めてかもしれない、嬉しい涙だった。

翌朝、宿で食事を摂ってから四人は街へ出た。老人と若い男と子供二人。爺さんと息子と孫に見えなくもないが、どうも違和感がある。この親子、揃って女房に逃げられたといった感じだ。出る前に宿の主人に聞いておいた衣料品店に来た。ここの主人も宿の主人史小倚の仲間らしい。中に入ると店には中年の女が一人だけだった。「あんた、この店の人かい？」

夏天佑が尋ねると、四人の値踏みするかのような目つきでこちらを見てから、

「ああ、そうさ」

と、愛想の無い返事をする。

「この子らに綺麗な服を着せてやりたいんじやが、見てもらえるか」
洪破天は梁媛、梁発を前に押しやりながら、店の女に言う。
「うちに安い服は無いよ。高級な着物を扱う店だからね。その檻^{ぼろ}樓
の服の変わりになりそうなもんは無いねえ」
店の女は『お前達に売るものは無い』と言っているのだ。
「あんたらあっちこっち触って汚さないでくれよ」
そう言うと、店の売り上げの台帳だろうか、パラパラと捲りなが
ら四人を視線から追いやった。

十四

「か、金はあるんだぞ」
洪破天の声が若干高く、わずかに震えているのはこみ上げる怒り
を抑えているからだろう。しかし時間の問題だ。この爺さんは次に
言葉を発することは恐らく無く、あの女に飛びかかるだろう。

「ここのご主人は居られるか？」

夏天佑が女に尋ねる。

「ああ、居るよ。」

「呼んで頂きたいんだが」

「服を売るなら客と私が居れば問題ない……」

「用があつてな」

夏天佑は静かだが鋭く語気を強めて女を見る。女はその鋭い気に
飲まれて一瞬固まったが、黙ったまま店の奥に入ってしまった。

「媛、発。ここは服の種類が多いな。どんなのが好きだ？見てまわ
ると良いだろう」

梁媛達が不安そうに夏天佑の顔を見上げたが、洪破天が二人の手
を取って、

「さ、こっちじゃ。飾り物も一杯あるのう」
そう言って連れて行った。

少しして店の奥から男がやって来る。顔も体も丸く、派手な金の刺繍がその太鼓腹に広がっている。夏天佑の顔を見るなり「あっ！」と驚きの声を上げた。宿の史小倚と全く同じ反応だ。

「史小倚に聞いてきたんだが」

「私共の店にお出で頂き、誠に恐悦至極！」

「俺は今『夏天佑』で、ただの客だ。そういうことで頼む」

「……は！ かしこまりました！」

「あんたの名前は？」

「王喜勝おうきしょうでございます」

夏天佑は小さく頷いた。先程の女が王喜勝の後ろで訳が分からなといった面持ちで夏天佑を覗き見ていたが、近づいて夫の袖を引く。

「ねえ、こいつ誰なんだい？ちゃんと金持ってるんだろうね？」

「ばっ！ 馬鹿者が！ 引っ込んでおれ！」

王喜勝は凄まじい剣幕で女を奥に押し込む。蹴りでも入れそうな勢いだ。夏天佑に向き直り、

「大変失礼を致しました。申し訳御座いませぬ」

と、素早く床に跪いた。大きな丸い着物が床に転がっているように見える。

「いや、かまわん。あんたの嫁か？今の俺達はどう見ても金持ちには見えんからな。」

王喜勝は押し黙ったままぴくりとも動かない。

「さて、服を見てもらいたいな」

「はっ！ かしこまりました」

もぞもぞと立ち上がった王喜勝は商売人の笑顔を取り戻していた。

洪破天は手もみしながらやってくる派手な男を見てにやりと笑うと早速、

「この子らに綺麗な着物を着せてやりたいんじゃ。一着では足りんな。二、三着ずつ欲しいのう」

そう言つて梁媛、梁発の後ろに回つた。夏天佑が王喜勝に向かつて、

「あんたに任せるよ。頭のとっぺんから足の先まで全部だ。派手過ぎず落ち着いた装いにして欲しい。時間はある。ちゃんと金も払うからな」

と言うと王喜勝は梁媛、梁発を眺めてから胸を張り、
「かしこまりました。私めにお任せくださいませ。」

そう言つて梁媛、梁発に、

「まずはこちらで御座います」

と、付いて来るように促して店の奥に向かった。

十五

洪破天は夏天佑の傍に歩み寄り話しかける。

「おぬしの威光はこの都まで届いておるな」

「威光などあるもんか。この街で俺を知っている人間は七人程らしい。もっと有名人は沢山居るだろう。」

店の中には小さな円卓があり、二人はそこに腰を下ろして待つことにした。店にある着物は確かに女の言つた通り、華やかな色使いで上質の物ばかりだった。ここは都だ。身分の高い常連も多く居るのだろう。

「あのう……先程は失礼致しまして……」

店の主人の王喜勝に怒鳴られていた中年の女が態度を一変させて茶を運んできた。恐らく夫に命令されたのだろう。非常に居心地が悪そうだがこちらの反応を窺っている。

「ふん、お前はここの主の女房か？ あんな態度でよく今まで客が離れなんだものじゃ」

「……」

「あの二人を見事に変身させることができれば、礼は弾むぞ」

女はそれを聞いて大層喜んだ様で、

「うちの品物はどれも一級品で御座います。きつとお二人のお子様にお似合いで御座いますよ」

と、会心の笑みを浮かべている。

「ああ、楽しみだな。宜しく頼む」

夏天佑がそう言うとな女は深々と頭を下げた後小走りで店の奥に消えていった。洪破天は夏天佑に向かい口を開こうとしたが先に夏天佑が言った。

「あれが「人間」というものだな」

「ふん」

「湯は準備出来たのかい!？ さっさとやるんだよ！ お前は大急ぎで葛さんと呼んで来な!」

店の奥は騒然となっているようだ。先程の女が大声で家僕に色々と言いつけている。『服を』と言ったが、顔も髪も手入れなどしていない二人に服だけ着替えさせても駄目だと思ったのだろう。湯まで使わせてくれるらしい。夏天佑を満足させるために気合が入っている。

「しばらくかかりそうじゃのう。その辺で一杯引つ掛けんか?」

まだ正午にもなっていないが洪破天には酒を飲むのに早いも遅いも無い。

「そうするか」

夏天佑は立ち上がり店番を変わった娘に声をかけて洪破天と共に外へ出た。

「俺は明日ここを発つつもりだ。少し急用が出来てな。あんたはどうする? あの子らと一緒に居るつもりか?」

「……そうか。儂は……あの子らを捨てられん。可笑しな話じゃな。知り合ってまだ二日……。儂はどうしたんかのう」

「ふ……『洪破天』のする事だ。どこも可笑しくは無いと思うがな。発の病がどうなるかわからんが、とりあえず今の宿に居たらいい。

俺が話をしておいた」

「すまん」

「宿の主人は北辰教徒だが、問題は起きんだろう」

二人は近くにあった小さな庭園のあずまやで酒を出しているのを見つけるとそちらへ向かった。木蓮が淡い紫の花を開き始め、心地よい日差しが差し込んでいる。その傍に腰を下ろす。と、同時に少し離れた場所に座っていた一見書生風の男が立ち上がった。真つ直ぐに夏天佑、洪破天の二人の方を見つめ、近づいて来る。洪破天は夏天佑に目配せをしてすぐに気付かぬ振りをして酒を注文した。書生風の男が二人の前まで来ると抱拳して、

「謹んで御二方にお目通り致します。私、張撰修と申します」

と、よく通る声で挨拶した。

「ふん、知らんな」

洪破天は張と名乗った男に目もくれず夏天佑を見遣る。

「あんたは確か真武剣派しんぶけんはの人だったな。剣はお持ちで無い様だが」

「私めのような小者まで御存知とは恐れ入ります」

張撰修は再び抱拳ほうけんした腕を大袈裟に掲げて頭を埋めたが、その口角は僅かにつり上がっていた。

十六

「で？何の用じゃ」

洪破天は相変わらず顔も見ずに話している。夏天佑のほうはじつとこの張撰修を見ていた。

「いえ、御二方がこの都に御光臨ごこうりんになる事など稀な事。私は所用が御座いまして参りましたが運良くお二方に拝顔の栄に浴することができました事はこの上ない喜びで御座います」

「ほーう、とても真武剣派の人間の言う台詞とは思えんのう。近く

でお仲間が聞いておつたらおぬし、ただでは済むまい」

張撰修はそんなことは全く気にしていないらしく、薄く笑っている。

「確かに我が門派は太乙北辰教とは相容れぬと存じておりますが、御二方は武林屈指の英雄。私は常々御二方に敬服致しております」

「流石は江湖（しゅうこ）を席卷する真武剣派。一流の口をお持ちじゃ」

洪破天は一度も張撰修を見ようとしなない。その時丁度酒が運ばれて来た。

「わしらは時間を潰しておるだけじゃ。もうおぬしの用は済んだのじゃな？行ってくれんかのう。旨い酒を飲みたいんじゃ」

冷たくあしらう洪破天の物言いも全く意に介さず、張撰修は動かない。

（ふん、偉そうに何様だ？ いずれ北辰もろとも葬ってくれる。へっ、その前にくたばるか）

「誰かを待っているのか？」

夏天佑は張撰修から目を離さない。特に凄んでいる訳ではないが、張撰修は自分がまるで天敵に狙われた動物のような、何とも言えない嫌な気分が全身を襲った。

（……いくらあんたでもこの都で騒ぎは起こせまい。だがこっちは違うんだ。くそっ師兄（しけい）達は何やってんだ？ 早く来い）

「俺はもうじきここを離れる。この爺さんは北辰教徒でもない。お互い顔は合わせなかったことにした方がいいな。あんたも用が済んだら帰るんだろう？それとも仲間がここに集まるのか？」

「いえいえ、私はただ御挨拶をと……」

「ふん、どうだかな」

洪破天はとにかくこの男が嫌いらしい。いや、真武剣派が、だろ

う。
「行ってくれ」

「……それでは失礼致します」

張撰修はようやく先程まで自分のいた席に戻っていった。こちら

を窺^{うかが}える位置である。

「真武剣派の三下の癖して気取りおって。本当に仲間を集めておるんじゃないな」

「さあな。最近この都にまで進出してきたみたいだしな。どうやら朝廷の大物とやらと仲良くなったらしい」

「ふん。まだこつちを盗み見ておるわ。捻り潰してやろうかのう」

洪破天が張撰修の居る席に顔を向けると張撰修が慌てて視線をそらした。

「ふん。小物じゃな」

「だが、あんたがここに長居するのは止めたほうが良さそうだな」

「あんな奴等が何人来ようと屁でもないわ」

「だが今は媛と発が居るんだぞ？ そっちに目を付けるだろうな」

「許すものか！」

洪破天は声を荒げた。

「とりあえず避けたほうがいい。発は辛いかも知れんが、どうだ、東淵に戻ったら」

「確かに発の養生には良い場所じゃ……はあ、道中が長いもう
今度は長い溜息をついた。

「お、増えたな」

洪破天は夏天佑の視線の先に顔を向けると、張撰修の他に三人の若い男達が座り、何やら額を寄せて話していた。

十七

「あれか？ 思ったより若いな。俺達と変わらんのかないか？」

「江湖に敵無しとか、ふん、どうせ北辰の大法螺だろう？ 教主はまだ餓鬼だ。舐められないように虚勢を張ってるんだろ」

「隣の爺は洪破天だな。あの老い^{おい}耄れも殆ど北辰^{おいは}みたいなんだろう」

「なあ、なんとかしてあの二人とっ捕まえられねえか？太師父たじふの所に引ッ立てて行けば大手柄だぞ？」

「へっ、そりゃ大手柄には違いないが……まあ無理だな。若い方は知らんが、洪破天の爺は相当やるぞ？俺らが束になってもおそろく敵うまい」

「もうすぐ師父が来られる。師父の判断を仰ごう」

「師父が来たらあいづらどうするかな？こそこそと逃げ出したりしてな」

「ハハッあるかもな」

この男達は張撰修と同じく真武剣派の門弟達だ。まだ若く、総帥の孫弟子にあたる世代であろう。まだまだものを知らない若輩だが、太乙北辰教が敵であるとしっかり刷り込まれている。

「まだ増えるかのう？わしらは構わんが子供らを面倒に巻き込む訳にはいかん。早々に立ち去るか？」

「おいおい、俺も面倒は困るぞ」

夏天佑は笑ったまま、真武剣派門弟達の席を指差した。先程の四人は立ち上がり、青い袍ほうを纏った一人の男を迎えていた。小柄だが厳つい感じの黒髭の男だ。

「丁常源ていじょうげんか。奴の弟子達の様だな」

しばらく何か話していたが、後から来た青袍の男がこちらにやって来た。後の四人は立ったままこちらを見ている。

「はあーまだ何かあるのか」

「さあな」

「お久しぶりでございますな。都にお越しとは存じませなんだ」

丁常源の言葉は丁寧だが、張撰修のように遜へりくだつてはいない。

「別に隠れておった訳ではないがのう。おぬしの優秀な弟子はちゃんと見つけおったわ」

「私の指導が至らず、あれはまだまだ世間知らずの若輩者でしてな。」

失礼致した。お許し下され」

「いや、丁寧なご挨拶を頂いたところじゃ。胸が一杯じゃ。もういらん」

「ハハ、それでは失礼いたします。いずれまた」

丁常源はあっさりと話を切り上げて戻って行った。何も言わずに弟子達の席を通り過ぎ、四人の弟子は慌てて付いて行く。師父が早々と戻って来たのが内心面白くない。

「師父、放っておいていいんですか？この都であの二人が酒を飲んでいるなんて我が派の面目が……」

「黙れ！」

丁常源は張撰修を睨み付けながらも歩を緩めず先へ進んでいく。四人の弟子は皆一様に口をへの字に曲げて顔を見合わせながら付いて行った。

洪破天は出てきた酒を最後の一滴まで飲み干してから腰を上げる。

「よし、行こう。あいつらが戻って来んとも限らん。退散じゃ退散じゃ」

夏天佑も続いて立ち上がり、王喜勝の店に向かった。

「お前達、あそこで揉め事を起こしておったらとんでもない事になっておったぞ」

「師父、私はただ挨拶をしただけです。どうってことはありませんよ」張撰修は半ばふて腐れた様子で抗議の声を上げる。あの二人を放っておく事のほうがおかしいと考えている。

「お前達はわかっておらん！　よいか。我等真武剣派と北辰教の關係は今、不安定な状態にある。お前達の太師父様が慎重に事を進めておられるのだ。いらぬ波風を立ててはならん」

「しかし……」

「馬鹿者！　あのような人目の多い場所で、しかもあの二人に近づくとは！　身の程知らずにも程がある！　お前達程度の腕であの者達と遣りあう事になってみる！　あっという間に無残に殺されてこ

の都で晒されるのだぞ！ それこそ我が派の面目は丸潰れだ！」
「……申し訳御座いません」
張撰修達は神妙にしてうなだれていたが、自分達が未熟であると言われると無性に腹が立ってきた。無論、師父に対してではなく、自分達にでもなかった。

十八

洪破天達は王喜勝の店まで戻って来たが、梁媛、梁発の姿は見えなかった。

「まだかかるのか？」

洪破天が奥を覗き込むと、梁発は頭髮を整えており、梁媛は湯から出て着替えているところだった。洪破天が来た事に気付いて慌てて背を向ける。

「もう少しお待ち下さいませ」

着物を用意していた女中が洪破天の前に立ちはだかって視線を遮った。洪破天は黙って頷き、店に戻る。

「なかなかいい女になっておったわい」

「まだほんの一刻しかしか経ってないのか？　じきに婆さんになっちゃうな」

洪破天は子供達と居るとまるで別人の様な顔になる。先程、真武剣の者達と顔を合わせた時の、まるで苦虫を噛み潰したようなしかめっ面の方が、夏天佑が普段見慣れた洪破天だ。しばらく待っていると王喜勝が梁発を連れて店の奥から出て来た。

「如何でございますか？」

王喜勝は自信たっぷりといった感じだ。髪を綺麗に結上げ、艶やかな青袍を身につけた梁発は、本来の子供らしい姿をようやく取り戻した様だ。

「おお、よう似合っておるな。男前じゃ」

梁発は、はにかむ様に顔を綻ばせて、王喜勝の後ろに隠れたりしている。

「普段身に着けるには少し派手かもしれんな。これも貰うが、もう二、三、見繕ってくれ」

「かしこまりました」

王喜勝は再び梁発を連れて奥へ入っていった。洪破天は梁発の小さな後姿をじっと見つめる。

「……あの子を元気な体にしてやりたいのう」

「呼吸法と内功ないこうの鍛錬を教えてやったらどうだ？」

「まだ早かろう？ ……いや、急がねばならんか……役に立つかどうかは分からぬが」

「俺も子供の頃から胸を患っていた。多分、今もだ。無理やり病を押さえ込んでる感はあるがな。病を消すことは出来んだろうが、ある程度抑えることができるかもしれん」

「そうじゃな」

それからしばらく静かに待っていた。洪破天は黙ったまま、何か考えているようだ。そうしているうちに梁媛も戻って来た。洪破天は梁媛を見るなり大きく目を見開いたまま動かなかったが、何かを呟き始めた。

「どうした？ 惚れたか？」

夏天佑は、にやりと笑い洪破天に声をかける。

「……嬌えん……」

「何？」

「……何でもない」

見ると洪破天は目に涙を浮かべ、唇が僅かに震えていた。その目は梁媛を見ている様な、しかし焦点があっていない感もあった。夏天佑は、しばらく洪破天の顔を眺めていたが、梁媛に視線を戻す。

「どうだ？ 感想は？」

「はい。とても綺麗で……私には勿体無いです」

「いや、よく似合っている。服も顔も綺麗だ。別人のようだな」

夏天佑がそう言って笑いかけると、梁媛は頬を染めて俯く。

「王どの、急に押しかけて悪かったな。礼を言う。受け取ってくれ」
夏天佑は懷から金子を取り出して王喜勝に渡す。梁尧と梁媛は楽しそうに笑いながら真新しい服を見せ合っている。

「あ、いや、これは多すぎます」

「そうか？　そうでもないだろう？　手間賃も合わせてだ。そうだな……いろいろ用意してもらったが持ち運ぶものが無い。行李でもつけてもらおうか」

「はい、かしこまりました」

王喜勝は深々と頭を下げ、捧げ持つ様に金子きんすを受け取った。後から出て来た王喜勝の女房はその金子をうっとり眺めていた。

十九

その夜、史小倚の宿屋で洪破天と梁媛、梁尧の三人が話をしていた。夏天佑の姿は無い。

「わしの家は……家と言ってもずっとほったらかしのぼろ家だな。ここからずっと東の、東淵という所にある。ここを尧ってそこに帰ろうと思うんじゃが……」

梁媛はそれを黙って聞いていたが、不意に襲われた不安に、胸の鼓動が高鳴り始めた。

「あの……私達……」

何と言えば良いのかわからない。新しい服まで買って貰ってこの数日間ずっと一緒に居る。まさか洪破天がここで自分達を捨てるとは思えない。思いたくは無い。洪破天が良くしてくれるのは何故なのか全く分からないが、自分達にはもう何の当てもないのだ。洪破天がどこかへ行くと言うなら、ついて行きたかった。

「お前達、東淵に行かんか？　都に居ってもまたその服が汚れていくだけじゃ。わしと一緒に居れば何も心配はいらんし、東淵は美し

い街でな。発の養生にも良い場所じゃ。ただ、行くまでが長いが……」

「また遠くまで行くの？」

梁発は梁媛に聞く。梁媛は梁発の手を取ったが黙ったままだった。「長旅になるが、馬を買って、荷車でも引かせればよいな。歩かずにすむ。ゆっくり行けばよいのじゃ。急ぐことは無い。どうじゃ？」

「行こう？」

梁発は梁媛の袖を掴む。梁媛は梁発の頭に手をやって優しく撫でた。

「行こうか」

「うん」

「よし。決まりじゃ。支度は……何も無いな。お前達は元々何も持っておらんのだしな。わしも同じじゃ」

洪破天は破顔一笑して立ち上がると、

「酒をもらってくるかのう」

と言って部屋を出て行った。

階下に下りて宿の主人である史小倚と話しているところへ夏天佑が戻って来た。

「本当に古い荷車だぞ？まあ歩くよりはましだな。馬は二頭だ。媛は乗れんだろうし、これでいいだろう」

「おう、すまん」

「あの時の医者に発の薬を多めに貰ってきたほうがいいな」

「……あれか。まあ仕方ないわい。二人にはさっき話したぞ。一緒に行く」

「それしかなかろうな」

史小倚が尋ねる。

「すぐお発ちでございますか？」

「明日だ」

「真武剣の奴等が居ってのう。居心地が悪くなったわい」

「……左様でございますか。奴等、この都にも最近道場を開きまして」

「道場だと？ はっ、金儲けか」

「白という真武剣の者が仕切っているそうでございます」

「白？ 白千雲はくせんうんかな？ 陸総帥りくの二番弟子だが……。なんで奴なんだろうな？」

「ふん、この都に新たな拠点を作ったわけじゃな。前に言うておった朝廷の大物とやらも絡んでおるんじゃないろう。ま、真武剣派は昔から訳分からん事をする奴等だからの」

武林で名を知られた門派はそれぞれ長い歴史を持ち、その始祖が一派を打ち立てた土地で代々受け継がれてきた。その門弟となり武芸を身に着けようと志す者はその地に集まって数年、数十年と暮らしながら修行をするのである。修行を積んだ後、そこから離れて独立し、町道場などを開き生計を立てる者は居るが、”真武剣派”が離れた場所に道場を作ったというのは、どこか奇妙に感じられる。

「まあ、とにかくそういうことで明日発つ」

「はっ」

「では貰っていくぞ」

洪破天は酒を抱えて夏天佑と共に部屋に戻った。

二十

「おう、そうじゃ今のうちに薬を取ってきておこう。まだ平の奴は起きておるじゃろ」

前に梁発を連れて行った時は真夜中だったが、あの時は急を要した事もあり時間など気にもしなかった。だが洪破天は普段から先方の都合など気にする事など殆ど無い。とりあえず言ってみただけだ。

「あ、私も行きます」

梁媛が立ち上がると梁発も寝台から降りて、

「僕も」

と梁媛の服を掴んだ。

「皆行くことなかるうが。外はもう冷えてきておるぞ」

「いえ、弟の事ですから」

「……では行くか」

「はい」

「俺はここでこの酒をもらおうとしよう」

夏天佑は先程洪破天が持ってきた酒を杯に注いでから椅子に腰をかける。

「気をつけてな」

「心配はいらん」

洪破天、梁媛、梁発の三人は部屋を出て行った。

洪破天ら三人は初めてあった日に駆け込んだ医者の方大生の元へ向かう。少し肌寒い空気が街に漂い、辺りは静まり返っている。梁媛は梁発の肩を抱いて引き寄せ、時折擦っていた。方大生の屋敷へはそう遠くなく、道は覚えていた。都一と言われるだけあって名医の屋敷は大きく目立っている。やがて正面の門までやって来た。洪破天が扉を叩き、暫く耳を済ませたが、誰かが出てくる気配は無い。

「誰かおらんか？ 洪破天じゃ」

暫く門を叩いていたが一向に気配は感じない。

「おかしいな。ちと裏を見てこよう。お前達はここで待っておれ。じつとしておるんじゃぞ」

そう言うとは沿いに歩いて裏へ向かった。梁媛と梁発は門の前の小さな石段に寄り添いながら座って待つことにした。

その時、方大生の屋敷の正面の建物の隅で僅かに動く人影があった。梁媛達は全く気付かないが、じつとそこに身を潜めている。こちらの様子を伺っている様だ。

「おい、ここは医者の方大生だ。あいつら何の用だ？」

「わからん。それよりあの子供は何なんだ？ あの方大生の身内か

？ 聞いたことあるか？」

「いや、家族はおらんという話だぞ？家だつてあるのかどうか……」
微かな声で話している人影はどうやら二人の男で、洪破天らを監視していた。

「全く面倒くせえ仕事だ。ただ見てるだけだしな。どうせ用が済んだらさっきの宿に戻るだろう。おい飲むか？」

人影の一人がどこからか酒を取り出してもう一人に差し出す。

「お前、このあと旦那に報告しなきゃいかんのだぞ。酒なんぞ飲むな」

「へっ、何が旦那だ。明日の朝行けば良いだろう？ まったくあの偉そうな若造が……」

「ただ見てるだけで金くれるんだぞ？ ……おい、あの娘なかなか別嬪だな」

「何言つてんだ？ あんな餓鬼がお好みか？」

「まだまだ若いが、この先なかなかのもんになりそうだ」

「お前は酒もやらずに素面でそれなのが俺には理解できん。女なら誰でもいいのか？ しかも餓鬼までとは」

「いや、あれはもう女だぜ？」

じつと梁媛から目を離さない一方の男はにやりと下品な顔つきを見せる。

「爺は今居ない。連れてくるか」

「馬鹿、やめろ。見つかったらただでは済まんぞ」

「子供一人連れてくるくらいあつという間だ。その後ここから離れて……へっへっ」

酒を飲んでいたもう一人は酒を仕舞うときっぱりと言った。

「俺は手伝わん。知らんからな」

「ふん」

梁媛に目を付けた男の顔がゆっくりと月の明かりに照らされていた。

平大生の屋敷の裏手に回ってきた洪破天は裏にも割と大きな扉の勝手口があるのを見つけると、先程と同じように門を叩いた。

「おい、大生よ。死んだか？ 寝とるのか？ 出て来い」

他人が聞けばただの訪問客とは思えない物言いだが、相変わらず周りには誰も居る気配が無い。洪破天は苛立った。門を離れ、塀の上を見上げながらじりじりと足の裏を地面にこすり付けるように動かしだかと思うと次の瞬間、その体が塀の屋根まで飛び上がる。少しくたびれた袍の裾が僅かにバタバタと風を切るが、それ以外物音は起こらなかった。

「なんじゃ明かりはついておるな」

塀の上から中を見ると、屋敷の一角に明かりが点いている。洪破天はサッと飛び降りると明かりの方へ真っ直ぐ歩いていく。塀を越えて入ってきたが、別に盗人でもなんでもない。隠れる必要は無かった。

「おい大生、おるんじやろ？」

そう言って窓を叩く。すると中で何かが割れるような音がした。が、それだけでまた静かになる。

「洪じゃ。開けてくれ」

言った直後に窓に人影が映り、窓の小さな門かんぬきのようなものを外している。

「……おぬし、わしの貴重な薬をどう弁償してくれる？」

顔を出したのは平大生だが、その顔は怒ってはいない。もう薬は諦めがついたようだ。

「ハハッわしの声に驚いて飛び上がったじゃろう？ 心臓が止まらなんだのは僥倖うかつじゃな」

洪破天は言った後、顔の高さにある窓にヒラリと飛び上がって平大生を中に押しやると部屋に入った。

「で、何じゃ。盗人の真似事をしおって。商売換えか？」

「正面の門に來たのに誰も出んかったんじゃ。おぬしこの屋敷に一人で住んで居るのか？この間はもっと遅い時間に開いておったのに、急病の患者はどうするんじゃ」

「よそに行けばよいわ。都に医者が多い」

「庶民相手では金が取れんか」

平大生は平然と洪破天の言葉を聞き流している。

「この間診て貰った子供の薬が欲しい。ありったけ出してくれ。金はあるまいな？」

「何？ ありったけだと？ どうするつもりじゃ。一度に多く飲んでも意味は無いぞ？ ……まさか都を離れてどこか行くと言うのではあるまいな？」

「東淵に行く」

「だめじゃ！ 安静にしておらねば早死にすると申したじやろうが！ 東淵じゃと？ たどり着くまでに死んでしまうわ！」

「歩かせはせんわい。あれから苦しむ様子も無い。急ぎはせん」

「ならんならん！ 病の事に関してはおぬしは素人じやろうが！

儂の言う事を聞け！」

「そういうおぬしは薬しか出さなんだではないか。寝て、薬飲んで、その繰り返ししか手立てが無いなら、ゆるりと旅するくらいどうって事なからうが」

静まり返った屋敷に老人二人の遣り合う声だけが響く。

「おう、忘れて居ったわい。今表で待っておる。正面の門を開けてくれ」

洪破天はさっさと表の門を開けに部屋を出て行く。

「病人を出歩かせるとは。あの小僧が死んだらおぬしのせいじゃな！」

平大生はそう言いながら洪破天について行く。洪破天はその言葉を聞くと急に沈痛な面持ちになり宙を見つめるような眼差しになったが振り返らずに歩いて行った。

屋敷の前から門までちよつとした庭園が作られている。確かに慌しく急な怪我人病人を担ぎこむことを考えて作られてはいない。洪破天は庭などには興味が無い。まして今は暗く、前にある弱々しい木々達がどのようなものなのかも分からない。

「東淵か……。遠いな。もう二度と……」

平大生が話しかけたその時、突然門の外から子供の泣き声が響く。「発？」

洪破天は駆け出すと門へは行かずその横の塀の上にまたも飛び上がった。見れば、見知らぬ男が梁媛を担ぎ上げている。

「貴様何をしておる！」

洪破天は一声大喝すると塀の上を男の方へ駆ける。

「くそっ！」

その男は梁媛を連れ去るのは諦めたらしく梁媛を地に放り出した。向かいの潜んでいた場所の方へ向き直り駆け出そうとする。が、すぐ近くにいた梁媛にぶつかり纏れ合って地面に転がった。

「うおお！」

男はひどく焦っているのか、吼えるような声を上げると転がったまま梁媛の胸に思い切り蹴りを入れて突き放し、立ち上がって走り出す。

「貴様っ！」

洪破天は塀から勢いよく男の方へ向かって飛び上がるが、男は振り返る暇も無く一目散に走り出している。丁度その時門が開き、平大生が飛び出して来た。

「何じゃこれは！」

「おい大生！ 二人を頼む！」

洪破天はそう叫ぶと先程の男を追って駆け出した。

「はあ全く奴の周りは物騒すぎるわい……」

平大生は倒れている梁媛の傍に行き、脈を診た後、呼吸を確認する。気を失っているが、見たところ服も乱れておらず少し顔を擦りむいているが、他に外傷は無さそうだ。続いて梁発の方を見て驚いた。口から血を流し、服の胸元まで真っ赤に染まっているではないか。

「おい！ 小僧！ 聞こえるか？ しっかりするのじゃ！」

梁発は真っ赤に染まった唇を戦慄かせているが、眉間に皺を寄せ、苦しんでいる。

「これはいかん……待っておれよすぐ戻るからのう」

平大生は立ち上がると門の中に駆け込んで行った。少しすると平大生は家僕であろう男を連れて出て来た。

「だ、旦那様、これは……」

「さあ早く中へ運ぶのじゃ！ この小僧から運べ。慎重にな」

家僕の男は梁発の小さな体をゆっくり抱えると門の中へ運んだ。

平大生は梁媛の元に行き、

「おい、起きろ、しっかりしろ」

そう言っ肩を揺さぶったが、気を取り戻す気配は無かった。暫く思案したあと平大生は梁媛の後ろから両脇に腕を入れ、引き摺りながら門の中へ入れると、再び外へ出て洪破天が走って行った方の様子を伺うが、何も、誰も見えなかった。平大生は中へ入り、しっかりと門を閉じた。

屋敷の周りでは怪しげな声や物音に、家から顔を出して訝しげに見ている者も居たが、医者や屋敷の門が閉じられた後には辺りは静まり返り、皆顔を引っ込めていつもの夜に戻った。

静かに、冷たい風が流れている。昼間あればど賑やかになるこの都が、深い闇に飲み込まれていく。自らその闇に取り込まれる事を望み、物陰で男が身を震わせていた。

「くそ……あの馬鹿がつ……た、助からんぞ……奴に殺される！」
息が乱れ、必死に膝を抱え込んでいる。

（何処へ逃げる……？ あの爺はあいつを追ってんだ。俺じゃねえ……。張の奴に知られても駄目だ……始末されるかもしれない）

男は腰の小さな酒壺を取ると震える手で口元に持っていくが、ほんの少し垂れただけで空になってしまった。

（あいつ、どっちに向かったんだ？ 逆を行って都を出よう……。あいつは……あいつが悪いんだ自業自得だ。知ったことか）

男は意を決したようにゆっくり立ち上がり、大通りとは反対の民家の密集した路地をさらに奥に入っていた。角を曲がる時にそつと大通りの方へ目を遣る。その時、路地の正面に見える大通りを左から右へ人影が音も無く通り過ぎた。

「ひっ！」

大通りからはかなり離れているにも拘わらず、男は驚いて腰を抜かし、その場でへたり込んだ。あつという間だったが、まるで宙を飛ぶように、いや飛んでいたのかもしれない。物の怪のように全く音も立てず何かが通り過ぎたのだ。しかし男は、物の怪でないことは分かっていた。

「あ、あいつ……まだ逃げてるのか……駄目だ、無駄だ……」

男は這いつくばりながら路地の角を曲がって行った。

梁媛を連れ去ろうとした男は、全く振り返りもせず駆け続けていく。

（逃げろ！ 逃げろ！）

ただひたすら自分に命令しながら足を運んでいるが、もう相当息も上がり、絶望感がこみ上げてくる。男は腰に差していた短刀の柄を握り締めると、声を振り絞って雄叫びを上げながら一気に振り向

いた。

「殺ってやるぞ！ クソ爺！」

「ハッ、やれるか？」

男が振り向いた時には既に洪破天はすぐ後ろに迫っていた。男が短刀を振りかざすより先に洪破天の細い腕が男の喉元を襲う。あっという間に首を締め付けられ、うめき声すら上げられない。洪破天はそのまま男の首を掴んだまま飛び上がると押しつぶすかのように地面へ叩きつける。

「貴様っ！ 何者じゃ！？」

「か……は……」

男は答えられない。洪破天は左手ですばやく点穴てんけつすると更に蹴り上げて男を転がした。男が落とした短刀を拾い、男の鼻先につけると、

「おい貴様、死にたいか？」

激しい怒りの目と冷ややかな声が男を威圧する。

「ゆ、許してくれ……許してください……俺は……」

すっかり抵抗する気が萎えた男は命乞いを始める。

「お前は誰じゃ？ 何故あそこに居った？ 何故あの娘を連れて行くとした？」

「お、俺じゃねえ！」

「お前じゃろうが！」

洪破天は男の腹を踏みつける。

「張……張だ！」

「んん？ お前の名か？」

「違う！ 張の旦那があんたらを張れて……」

「張の旦那ではわからん！」

洪破天は言うことのはっきりしない男に苛々して思い切り男に張り手を食らわせた。このままここに居ればその内、人も集まってくる。梁媛、梁発の事が気かりだ。洪破天はぐったりして動けない男を肩に担ぎ上げると、再び平大生の屋敷へと飛ぶように走り出し

た。

二十四

平大生の屋敷に戻ると庭にある大きな立ち木に動けない男を縛りつけ、梁媛、梁発の許へ急いだ。部屋に入ると、横の寝台に梁媛、正面に梁発が横たわっており、その下には小振りの甕かめが置いてある。見れば寝台から血が滴り落ちている。

「は、発はどうしたんじゃ！」

傍らに立っていた平大生は力なく首を振っている。

「おそらく小僧の肺臓は完全に碎かれておる。この鮮血はそこからの出血じゃ。もうかなりの量が失われた……もうもたぬ」

「なんじゃと！ 何故じゃ……」

「わからん。わしが門を出て小僧を見たときには既に吐血しておった」

洪破天は梁発の許へ駆け寄り、下の甕を見れば真っ赤な鮮血が溢れそうになっている。

「発！ 発よ！」

洪破天は青白くなった発の頬に触れ、平大生に振り返った。

「本当に……本当にどうにもならんのか」

「ならん」

平大生は傍らにあった椅子に腰を下ろし、洪破天を真っ直ぐに見る。洪破天はゆっくり発の方へ顔を戻すと、

「お前が言うなら、そうなんじゃな……」

と静かに言う。いつもなら平大生に食ってかかるところだが、何か洪破天はただ力なく発の頬を撫で続けるだけだった。発の唇はまだ僅かに震えている。これだけの血を流していれば、もはや助からぬことは誰の目にも明らかだった。

「……あの男か」

「ん？」

「肺臓が碎かれていると言ったな？」

「そうじゃ」

「……お……ねえ」

発の口から、か細い声が聞こえてくる。

「発、発よしっかりせい……」

「おじ……い……ちゃ……おねえ……」

発の言葉が途切れた。その小さな唇はピクリとも動かない。

「おお……おお……発」

洪破天は震えるその手をもう一度、梁発の頬、そして艶やかな青だったはずの、血に塗れた梁発の胸を撫でた。洪破天の手のひらが真っ赤に染まっている。その赤をじっと見つめ、そして静かに立ち上がると後ろへ向き直り、そのまま真っ直ぐ部屋を出て行く。

「どこへ行く？」

平大生の声は届いていないようだ。

（あいつは何やってんだ？ 早く助けに来やがれ！ まさか逃げたんじゃないだろうな？）

庭の木に縛り付けられたままの男は肌寒い暗がりの中でじっとしている。まだ洪破天の施した点穴が解けておらず、口以外全く動かせない。ふと屋敷の方へ目を向けると人がこちらを向いて立っている。

「おわっ」

思わず男は驚きの声を上げた。洪破天がこちらを見てじっと立っていた。

「……張とは誰じゃ」

「え……ああ、俺は張撰修って男に言われてあんたらを……」

「張撰修……真武剣の張撰修じゃな？」

「……そうだ。金をくれるって……うわあああ！」

洪破天は音も無く男の目前まで迫る。

「ぜ、全部言われたことなんだ！　お、女さらえて！」

梁媛をさらうというのは命令には無かったが、なんとかこの場を逃れることができればあとは都を離れてしまえばいい。張撰修に会わないようにすればいいだけだ。男は咄嗟に出鱈目を口にした。

「死にたいか？」

「た、助けて……命ばかりは……」

男の命乞いを聞くと洪破天は少しばかり目を閉じたが、

「助からん……助からんわ！」

突然、声を張り上げた。暗くてよくは見えていなかったが無表情に見えていた洪破天の顔が、どす黒く、齒をギリギリと噛み締め凄まじい怒りの形相に変わった。

「貴様が死ね！！」

男は一瞬何がなんだか分からなかったが、すでに洪破天の真っ赤な手刀が男のみぞおちに深々と突き立っていた。

二十五

宿の主人、史小倚が先程から表の様子を伺っている。そこへ夏天佑が部屋から出て降りてきた。

「あ、あのう、洪破天様は今日はこちらにお戻りになられるので？」

「ん？　そのはずだが……遅いな」

「私が様子を見てまいりましたようか？」

史小倚は夏天佑の表情を窺っている。夏天佑は軽く手を振った。

「ああ、その必要はない。茶をくれ」

「はっ。しばしお待ちを」

夏天佑は近くの卓に着くと窓の外を眺めた。このあたりはまだこの時間になっても多少の人通りはある。そんな中、一人の男が辺りを窺うような所作で小走りに急いでいる。どう見ても不自然だが、夏天佑は興味が持てなかった。史小倚が運んできた茶を飲みながら

特に何をするわけでもなく、ずっと外を眺めていた。今夜は宿の客も少なく、史小倚は夏天佑の声が届く位置に控えていた。

「なあ、この都で商売できなくなったら、あんたどうする？」

「は……私は家族も親類も居りません……。しかし、私はどうなるうと太乙北辰教徒でございますれば……」

「教徒を名乗っていても飯の種にはならんな」

「はあ……」

「あらゆる状況を想定しておかねばな」

「……」

またしばらく夏天佑は黙って茶をすすっている。冷たい風が時折、窓から入ってくる。史小倚は開け放っていた窓を全て閉めていった。「見てくるか」

夏天佑は面倒そうに立ち上がると表へ出て行った。

「こっちの娘は気を失っておるが、じきに目を覚ますじやろう」

再び静まり返った平大生の屋敷。平大生は梁媛の顔色を見ながら洪破天に静かに声をかけた。

「あの男、何者だったんじゃ？」

「知らん」

「知らんのに息の根を止めてしもうたのか？ まったくおぬしは……」
白く垂れ下がった髭を撫でて嘆息する。

「あれは犬じゃ。飼い主がおる」

「ほう。誰じゃ」

「……真武剣」

「真武剣？ 真武剣がこの娘に用があったと？」

「いや……わしじゃ」

「真武剣と揉めたのか？」

「ふん……知らん。が……用があったのなら聞きに行かんな」

「洪よ。まだ、この娘がおるんじゃぞ？ それを忘れるな」

平大生は、洪破天を諭すように言う。

「僕は……何と言えばよい？ 媛に何と言えば……」

洪破天は顔を手で覆い、じっとしている。泣いているようにも見えるが、平大生は洪破天と長い付き合いだ泣いているところを見たことなど無い。

「おぬしが言わずとも、すぐわかる。見ればな。ひとまずおぬしが落ち着かねば。茶を入れてこよう」

平大生はそう言って部屋を出た。

丁度その頃、屋敷の門前にまたも三つの人影が集まっていた。先程、梁媛をさらおうとした男と違い、身なりの良い男達だ。

「ここに入って行ったのだな？」

「ああ、間違いない。洪の爺に捕まったようだ」

「おい、血だ。殺されたのかも知れんぞ」

「しかし、どう言うんだ？」

「そうだな……あいつは我が真武剣派の人間ではないが、ちょっとした顔馴染みということでもいいだろう。知り合いが連れて行かれたんだから様子くらい見に来るだろう？」

人影の一人、書生風の若い男が門へと歩き出した。

二十六

平大生の許へ家僕の男がやって来た。

「旦那様。今、表に真武剣派の者だと名乗る人が来ているのですが」

「なんじゃと？ ……何と言っておる？」

「洪破天様にお会いしたいと……」

「ふむ……わしが出よう」

平大生は門へと向かうと、小門ではなく正面の扉を開いた。

「このような夜更けに何事かな？ わしがこの主じゃ」

書生風の若い男が一步前へ出る。

「夜分に失礼致します。私共は真武剣の者で、私は張撰修と申す者でございます。実は先程、私の見知った者がこちらに連れて来られるのを目に致しまして……」

「ほう真武剣派の方々か」

平大生はわざとこの張という男の言葉を遮った。

「この都に道場を作られたそうじゃな」

「はい、左様でございます。それで……」

「確かこのあいだ、真武剣派のお人がここに参られてのう。何と言ったかな……？」

「我が派の者が？」

「丁……と言ったかのう？」

その言葉に、張撰修の後ろにいた二人は顔を見合わせるとヒソヒソと言葉を交わしている。

「おい……師父だろうか？」

「この都に向いている我が派の者で丁というのなら……おそらく」「それはそれは丁寧なご挨拶を頂いたのじゃ。まあわしはもはや干からびた爺じゃが、この都で三十年以上医者をしておるのでのう。それで来られたのじゃろうなあ」

平大生は真武剣派の人間の事など殆ど知らないが、挨拶に来た人間がこの都の新しい道場を仕切る者で、真武剣でも地位の高い者であらう事は気付いていた。

「この都は何をするにしても新参者には辛い所じゃ。しかし……わしはそのお人の謙虚な姿勢が気に入った。何かと大変じゃろうが、この老骨が口利きでもすれば、多少のお役に立てるかもしれんな」

「は……ありがとうございます」

張撰修と後ろの二人は神妙な面持ちで聞いていたが、全く面白くない。

（何だこのでかい態度の爺は。新参者だど？馬鹿にしゃがって。真武剣をなめるとどうなるかこれから思い知らせてやるぞ）

しかし、この平大生の言葉で張撰修達はすっかり威勢を削がれて

しまった。ここへ来たのが張撰修らの師父、丁常源で、この老医師に挨拶に來た事は確かなようで、ここで自分達が揉め事を起こすのはまずい。

「ほんの数刻前、こちらに運ばれた男はどうやら知り合いのようできて、見に参ったのです。会えますか？」

張撰修は平大生に遮られないように少し語気を強めて尋ねる。

「ここへ？ 男？ 誰も来ておらんぞ。」

「そんな筈はございません。男がここへ担ぎ込まれた筈です。洪破天殿が男を抱えてここへ入られたのを見たのですから」

「ほう、洪破天を知っておるか。あれはわしの古い知人でな。しかし……ハハ、あの爺さんが男を担いで医者に來るなどありえんのではないか？」

そう言つて平大生は笑っている。張撰修達は苛々して（この老人は放つておいて押し込むか）とも考えるが、相手が洪破天ではこの先の展開を読むことが難しい。男を使つて洪破天を見張ったりするのは真武劍の意向ではなく、単に仲間内で勝手に面白がつてやっている事だ。師父である丁常源には洪破天らに近づかぬよう言われたが、この若者達は真武劍の威光を背に怖いもの知らず、そして世間知らずとも言える。

「知り合いの男がここへ連れてこられたのは間違いないのです。我々はその男を渡してもらえればそれだけで……」

「何かあったか？」

不意に張撰修等の後ろから声がかかる。三人は全く気配に気付かず仰天して一斉に振り返ると、そこには夏天佑が特に表情もなく佇んでいた。

二十七

夏天佑がゆっくりと張撰修らの方へ歩き始めると、三人の男は揃

って思わず後ずさる。平大生が言う。

「おう、おぬしか。いやなに、こちらは真武剣派の方々でな。人を探しておられるのじゃ」

「昼に会ったな」

張撰修は何も言わずに軽く会釈をした。

（ちっ、またこいつか。いつも一緒に居やがるのか？　ここは退散するか……あいつの事など生きていようが死んでいようがどうでもいい）

張撰修は平大生に向き直り、

「どうやら私の勘違いだったかも知れません。夜分にお騒がせをして申し訳ございませんでした」

そう言って拱手きょうしゅした後、後の二人に目配せをしてから門を離れていった。夏天佑は平大生の許に歩み寄り、彼等の後姿を眺めた。

「なんじゃ、えらくあつさり引き上げおったのう」

「何を言ってきたんだ？」

「……とりあえず中に入れ。洪のやつも子供達もおる……」

平大生は夏天佑を連れて部屋へ戻ろうとしたが、ふと振り返り夏天佑の顔をじつと見る。

「何だ？何か付いてるか？」

「顔を良く見せてくれんか？」

そう言って近づくとき真剣な眼差しで夏天佑の顔を見た後、手を取って肌を見たりしている。

「病でも潜んでるか？」

夏天佑は薄く笑いながら聞く。

「いや、……おぬし、なんぞ妖術でも身につけておるのか？」

「妖術だと？　そんなもんは見たこと無いな」

「……ふむ、まあよいわ。こっちじゃ」

平大生は再び部屋の方へ向かい、夏天佑を連れて行った。

夏天佑は部屋に入り正面の梁発を見るなり怪訝な顔つきになる。

「何があった？」

ずっと梁発の方を向いたままの洪破天は、夏天佑の言葉に振り返りもせずつぶやくように言う。

「のう……儂は……儂では誰も守れんのかのう？あれから十数年……何も変われておらぬ。わしでは……」

夏天佑は梁発の傍に立ち、黙ったまま寝台に横たわる梁発の姿を見下ろした。平大生が洪破天の代わりに説明する。

「この小僧達が暴漢に襲われた。いや、狙ったのはこっちの娘のようじゃな。目的はわからん。小僧が巻き込まれたのは不運としか言いようが無からうな。どうやったか知らぬが暴漢が逃げる時にこの小僧に攻撃を加えたらしい。しばらくして小僧は……死んだ」

夏天佑は全く表情を変えずに梁発の顔を暫く見つめていた。

「その暴漢とやらはどうしたんだ？」

「もう生きてはおらん」

おそらく洪破天が捕まえて殺したのだろうと容易に察することができる。

「さっき居た真武剣派の人間と関わりが？」

洪破天はハッとなって立ち上がる。

「真武剣の奴等が居たのか!？」

「ああ、さっき俺がここへ来たとき三人来ていたが？」

「奴等を八つ裂きにしてくれる!」

「待て!」

洪破天が息巻いて出て行こうとするところを夏天佑は前に立ちはだかつて止める。

「もうおらん。落ち着け!」

「仇は討たねばならん!」

洪破天の怒りは当分静まることはなさそうだ。カッと見開いた両眼は獲物を探すかのように目まぐるしく動いていた。

「とにかく座れよ」

夏天佑は、半ば強引に洪破天を押し戻しながら尋ねる。

「媛はどうした？」

すると洪破天は梁媛の寝台の傍に行つて、まだ気を失っている梁媛の細い手を取った。

「媛……許せ……許してくれ」

普段の洪破天からは全く想像もできない程、弱々しい声である。平大生は夏天佑に小声で話しかける。

「一体どうしたんじゃ？ おかしくないか？ 儂の知る洪破天ではないのう」

「心の中など他人には計り知れん」

夏天佑はただそれだけ言うと、洪破天が先程まで座っていた梁媛の傍の椅子に腰を下ろし、黙って梁媛のすっかり白くなった顔を眺めていた。そうしているうちに梁媛の意識が戻ったようで、薄く眼を開けた。が、すぐに小さく唸って腹を押さえる。

「おお、媛よ」

「気がついたようじゃな。媛とやら、どこが痛む？」

平大生がすぐに梁媛の脈などを確かめる。

「……あ……少しお腹が……でも、少しだけです」

「当て身を喰らったようじゃが……ふむ、大丈夫そうじゃな」

梁媛はまだ少し顔をしかめて腹をさすった。洪破天は梁媛の手をずっと握っていたが、顔を上げることができない。

「……発は？」

辛そうに上体を起こした梁媛はサッと部屋を見渡すと、すぐに寝台に横たわる梁発を見つけて「あっ」と息を呑む。見えるのは赤く染まった梁発の胸元。寝台までも赤く染まっている。

「発？ ……発！」

驚いた梁媛はまるで寝台から落ちるように這い出すと梁発の許へ

行き、そのおびただしい血を呆然と眺めた。そして横に座っていた夏天佑に、

「発は？ 発はどうしたんですか？」

と、膝にすがりつくようにして尋ねた。

「……お前達は暴漢に襲われた。お前を連れ去ろうとしたんだ。その時に梁発はやられたらしい。この出血だ。とてもたなかった」
「そんな……」

何があだかわからないといった表情で梁発を見ていたが、全く生氣を感じられない梁発の顔が梁媛に恐ろしい現実を突きつける。

「発……発ー！！」

梁媛は梁発にすがり付くと、声を振り絞って泣き出した。夏天佑は全く表情の無いままその様を見つめる。

「媛……済まぬ！」

洪破天が床に崩れるように手をつき叩頭するかのように伏せると、しきりに梁媛に詫びているが、梁媛は振り向くことはなかった。平大生は洪破天のその姿を驚いて見ている。

（一体、この小僧達は何なのじゃ？ 洪よ……何があった？）

洪破天の孫達ではない事は知っている。子も孫も、二十年近く前に皆死んでいる筈だ。この子供達に孫の姿を重ねているのだろうか。それにしても……。

「おぬしら、今夜はここで休め。遺体の処置もせねばならん。部屋を用意させる。良いな？」

「そうだな……よろしく頼む」

夏天佑が、平大生の申し出に答える。平大生は部屋を出て行き、梁媛の泣き声を聞きながら暫く時が過ぎた。

「皆様お戻りにならないので心配しておりました」

夜が明けて一人、宿に戻って来た夏天佑の姿をみつけた史小倚が駆け寄ってきた。

「ああ、済まなかったな。ちょっとあってな。また戻らねばならん」

「私にお役に立てる事がございましたらお申し付け下さい」

「んー、今は特に無いな。そうだ、ここを発つのが少し延びるかもしれない」

「一体、何が……？」

「一緒におった子供が……怪我をしてな。死んだ」

「えっ？」

史小倚は大層驚いたが、夏天佑のその口調には全く感情が無い。

ただ、あった事を伝えただけというような口振りだ。

「ここにはおかしな様子の人間は来てなかったか？」

「あーいや、気付きませんでした……」

「そうか。あんたはこの都に來た真武劍の人間の顔は知っているのか？」

「丁常源の他、何人かは見知っておりますが、門弟達までとなるとわかりませぬ……お連れのお子様が無くなられたのは真武劍派の仕業なのですか？」

「……まだなんとも言えんな」

「申し訳ございませぬ」

真武劍派に何か計画的なものがあつたのなら、怪しい人間がこの宿を探りに來た可能性は高く、全く気付かなかったことを史小倚は詫びた。一歩下がって更に畏まっている。

「いや、いいさ。今夜は戻るだろう。」

「はい。かしこまりました」

二十九

あれから梁媛は一言も話さず、食事も口にしていない。洪破天も口を開かなかった。外はまた穏やかな春の日差しで溢れているというのに、部屋の中は重い空気で息が詰まりそうだ。

「小僧をどうするか決めねばならんぞ。いつまでもこのままにして

おけん。」

平大生は洪破天に向かって言った。

「この都の人間でもなく身寄りはないと言ったのう？この地に埋葬するのは難しいかも知れん」

「どうということじゃ？」

洪破天が久しぶりに口を開いた。

「小僧はいわば浮浪児であろう？ここでは毎日のようにそのような子供達が死んでおる。その者達は役人に運ばれて行って、まとめて茶毘に付されるのじゃ。ふん、茶毘に付すなどという上等なもんではないな。とにかく焼いて処分するだけじゃ」

「嫌です！」

突然、梁媛が叫ぶ。

「発が……発が焼いて捨てられるなんて！」

「媛……」

「ならばどうする？この都に得体の知れん人間を勝手に埋葬することはできん。役所に届け出ても相手にされんじやろうな」

「嫌……絶対に嫌！」

梁媛はどうすればいいかなど全くわからない。ただ再び泣き続けるしかなかった。洪破天は考え込んだ。自分が何とかせねばならない。梁発の為にも、梁媛の為にも。自分はもう身内だと決めたのだ。「埋葬できぬのなら、茶毘に付すしかない。無論ただ焼き捨てるなどということはできぬ。話を聞いてくれそうな寺がこの辺にあるか？」

「そうじゃな……よく知っておる者がおる。わしが言って頼んでみよう」

「どうか、よろしく頼む」

深々と頭を下げた洪破天に、平大生が言う。

「……頭など下げるな。わし等は……そんな間柄ではなからうが？まあこれは貸しではあるがのう」

平大生は部屋を出て行ったが、洪破天はそのまま頭を上げること

ができなかった。少ししてから夏天佑が部屋に戻って来た。

「どうなった？」

洪破天は梁媛を茶毘に付すという先程の話を夏天佑に伝える。夏天佑は梁媛の傍にしゃがんで、

「今日も良い天気だ。少し外へ出ないか？」

と誘った。梁媛は黙ったまま涙を拭っている。

「梁媛はまだここに居る。少しでいいから外の空気を吸え」

そう言うと言媛を待たずに部屋を出て行った。洪破天は梁媛の顔を見つめる。

「媛……」

梁媛は俯いたままだったが、すっと立ち上がると洪破天を見ないまま夏天佑を追って行った。

平大生の屋敷の庭はあまり広くはないが、空間を大きく見せるためにあまり物を詰め込まず、落ち着いた佇まいを見せている。風は僅かだが日差しはきつくもなく暑くはなかった。夏天佑は庭の中ほどにある石に腰をかけていた。梁媛は庭まで出てくるとその柔らかい日差しを眩しそうに眺めた。夏天佑は何も言わず周りの木々に目をやっている。

「……もう何も、考えられません」

静かに夏天佑のそばまで歩いてきた梁媛は、力なくそう言う。夏天佑は立ち上がると梁媛を座らせる。

「爺さんの事を怒っているのか？」

「私は怒ってなんか……誰のせいでもない……それは判っているんです。お爺さんは犯人を捕まえて……」

暴漢は真武剣派というところと関係のある者らしく、洪破天を見張っていたと聞いた。洪破天と一緒に居なければ、襲われなかったかもしれない。どうしてもその考えが頭をよぎる。

「家族を、愛するものを失う悲しみは、経験した者以外は計り難い。」

夏天佑は後ろ手に手を組み、周りの木々の前を歩いている。真っ直ぐ前を向いて立ち止まって言った。

「あの爺さんと俺は変な縁でな。爺さんも俺も、家族が居ない。突然、目の前から消え去った」

三十

小鳥のさえずりが聞こえる静かなこの庭園は平和そのものだ。夏天佑はこの柔らかな空気を乱さぬように話を続けた。

「俺も爺さんもここから遠く離れた田舎の小さな村で暮らしていた。だが、それが消された。村が殺された。人も……多くの人間が殺された。元々人が少ない村だが、残されたのはほんの数える程だった。爺さんと俺はその一緒に村を離れた。もう一人居たんだがな。……もう村でもなんでもなかったな……廃墟だ。それまでは爺さんとあまり面識はなかったが、その後各地と一緒に放浪してな。もう、二十年程前になるか……。爺さんが言っていた東淵という街に辿り着いて、そこに留まる事になった。俺は少しだけ居て、放浪を続けた。今、都に居るのは俺がここに用があつて、爺さんは暇だということから久しぶりに共に出てきた訳だ」

そこまで話して夏天佑はまた梁媛の前をゆっくり歩いた。

「誰に……家族は誰に……？」

「村から少し離れたところに近隣の街を度々荒らす賊の住処になっていた所があった。その奴等が突然襲ってきたんだ」

「……」

梁媛は俯いて黙り込んでいる。

「媛」

夏天佑は梁媛の前で屈んでその手を取る。梁媛は少し驚いたが、そのまま夏天佑を見つめた。

「愛したものが突然消え去るのは耐え難い。この先、何度も涙を流

すことになるだろう。梁発がお前の心から消えることは無い。……消してはならん。これからずっとお前の心の中に生きるのだからな。お前だけじゃない。この都で、俺も洪の爺さんも発に出会った。俺の中でも生き、爺さんの中にも生きるんだ。爺さんは発を守れなかった事を悔やんでいる。昔、家族を守れなかった時の様にな。出会ってまだ数日だが、爺さんにとってお前達はまだ家族なんだ。新しく出会うことのできた……」

夏天佑は立ち上がって、また歩き出した。

「変な話に思えるかも知れん。このあいだ言ったな。人は別れにばかり囚われて出会っている事に気付かなくなる。……今はまだ分かんなくてもいい。だが今のこの世で立ち止まっては居られん。媛、俺達は生きるぞ。明日もな」

梁媛は初めて洪破天と夏天佑に出会った時を思い出していた。あの日も、夏天佑は言った。

(明日も生きる……)

平大生と下僕の男が屋敷に帰って来た。柩を用意してきた様だ。

「智恩禅寺という寺が西にある。そこで小僧を茶毘に付す事になった。この都でも有数の大きな寺じゃ。その方丈をよく知っておつてな。引き受けてくれた。急な事でもあるし、あまり大袈裟にできませんがちゃんと小僧を送ってくれることじゃろう」

どうしても梁媛は溢れる悲しみを抑えることができないが、もともと野垂れ死にしても仕方の無い生活をしていたのだ。そこまでしてもらえる事は有難いことである。

「あ……ありがとうございます」

「用意をしてすぐに連れて行くぞ」

「わかった。媛、行こうか」

夏天佑と梁媛は、家僕の男が担いでいる柩の後について部屋へ戻って行った。

鮮やかな朱塗りの門をくぐった先、正面にそびえる堂塔へ向かう

石畳の道が真っ直ぐ伸び、小さな仏塔が立ち並ぶその周辺は丁寧に掃き清められている。都の喧騒から隔離されたような、その静寂と荘厳な佇まいに身を置けば、清い精神は安寧を得、乱れた煩惱は恐れをなす。数百年もの長い歴史を持つこの智恩禅寺は都の人々の厚い信仰と尊敬を集めていた。

平大生を先頭に正門をくぐった一行はそのまま正面には向かわずに、あまり人目に付かぬよう方丈の住まう僧坊の方へと向かった。暫く行くと一人の僧が待っていた。平大生とあまり変わらない歳であろうか、だが背が高い。威厳に満ちた容貌とその上背に初対面の者は威圧されてしまうかもしれない。

「お待ち致しておりました。儀正ぎせいと申します」

三十一

儀正の第一声は意外にも穏やかで、柔和な眼差しに変わっている。

「この方丈、儀正大師じゃ」

平大生は振り返って洪破天等に言うと、儀正に向き直った。

「無理を言って申し訳ない」

平大生がそう言って頭を下げるのに合わせて、洪破天と梁媛の二人も頭を下げた。夏天佑と下僕の男が梁発の柩を抱えている。

「いやいや、大切な故人を尊重し、御仏の許へと導く事は人として当然で、そのお気持ちは真に尊いもの。残念ながら、この都ではそれすら出来ぬ不幸が蔓延しております。我等はこの不幸を払うよう努力せねばなりません。ただ……今の現状では今回のことは表に出すことは出来ませぬ。情けないことじゃが、ご容赦下され」

「それは充分承知しておる。我等も他言はせぬ故、宜しくお願い致します」

方丈の傍にはまだ小さな見習いの少年僧が居るだけだ。この寺院の中でもこのことは秘されているのだろう。儀正の後に続いて歩い

て行くと小さな庵が建っており、その中に簡素な祭壇が設けられていた。夏天佑等が柩を祭壇の前に置き、後ろに下がる。すぐに静かな読経が始まった。梁媛はじっと柩を見つめたまま儀正の後ろに控えていたが、どこか考え込むような表情で涙は無かった。夏天佑が静かに立ち上がり、庵を出て行く。平大生も続いて出て行き、梁媛、洪破天と家僕の男だけが中に残った。

「おぬしら、この都には何か用でもあったのか？」

平大生は夏天佑の横に腰を下ろした。

「俺がな。爺さんは付いて来たただけだ」

「いつまで居る？」

「今日にでも発つ予定だった」

「なるほどなあ。それで小僧の薬を取りにきたんじゃな……医者に来て殺されてしまうとは……」

「……」

平大生が夏天佑の方を見遣る。

「……おぬし、名を偽るのは何かあるのか？」

「洪の爺さんに聞いたのか？」

「いや、あいつは何も言うてはおらん。北辰における男の噂を聞いたことがあるだけじゃ」

平大生はそう言って夏天佑の目を真っ直ぐに見る。

「どんな噂だ？」

「人ならぬ妖人が太乙北辰を奪う」

「ハッ、妖人か。それが俺か？」

「とてもそうは見えないな。じゃが、おぬしのその風貌に興味がある。医者としてな」

夏天佑がニヤッと笑った。

「名医は侮れんな」

「フフ、医者でのうても人ならば知りたがろう。妖人の、その妖術のからくりをな」

「妖術か……」

平大生はそれ以上その事には触れずに話を変える。

「洪の奴は東淵に行くと言っておったな。おぬしも行くのか？」

「いや、俺は途中までだ」

「……洪の奴と顔を合わせると必ず何かが起こるのじゃ。昔からの。今回はおぬしまで現れた。これから一体何が始まるのやら……」

平大生は溜息をついてから辺りに目を遣っている。

「当分は何も無いはずだ。おそろくな」

平大生は夏天佑の方に視線を戻したが、とても信じられんといった様子で口をへの字に曲げてみせた。

「北辰の者は仏道の儀式には出ることはないのか？」

「俺は別に教徒じゃない。フン、それが気に入らん人間も居るがな。あんたはどうなんだ？」

「我が屋敷からでた死人の葬儀には立ち会わぬ」

「そうか……よくわからんが」

後ろで庵の扉が開き、洪破天が出てきた。

「発を茶毘に付す」

神秘的な面持ちで言う洪破天の言葉で、二人は立ち上がった。

三十二

梁発の柩の前に立つと、梁媛は弟の頬に触れる。前に洪破天らしい『覚悟はできている』とは言ったが、このような最後など想像もしていなかった。

「発……ごめんね」

微かな、震える声しか出なかった。

「媛……」

洪破天が梁媛の肩に手を置くと梁媛は立ち上がって黙って柩から離れる。

「では」

儀正は連れていた少年僧に向かって頷くと経を唱え始めた。梁媛はどうしても柩の方を向くことができない。涙が枯れるとはよく聞く言葉だが、そのような事は本当は無いのではないか。近くに立っていた夏天佑にしがみついて、ただ、泣き続けるしかなかった。やがて炎が立ち上ると、洪破天がその前に仁王立ちになり、じっと柩を包み込む炎をにらみ続けた。

梁媛達は儀正に案内され、別の庵入った。

「遺骨はどうされる？　ここの納骨堂に収めることもできますが」
「……連れて行きます。離れたくありません」

梁媛は俯いたままだが、儀正は優しい眼差しを梁媛に向け、ゆっくりと頷く。暫くして少年僧が小さな骨壺を掲げるようにして運んできた。

「嚴重に封をして箱に納めなさい」

「はい」

梁媛が口を開く。

「あの……少し外へ出てもいいですか？　何だか……息が詰まりそうで……」

儀正に目を向けると先程と変わらない眼差しで頷いた。梁媛が出て行くと洪破天が続いて表に出た。洪破天は少し距離を置いて梁媛を見ていたが、意を決したように梁媛に話しかける。

「媛……媛よ」

「あの」

急に梁媛が振り返り、洪破天の言葉を遮った。

「私……一人になってしまいました」

梁媛はそう言って笑おうとした。笑おうとしたのだが、その頬にはまた新たな涙が一筋流れ出している。

「洪……洪お爺様と一緒に行きたいです。連れて行ってくれますか？」

涙が滂沱^{ぼうた}として洪破天の深く刻まれた皺を濡らす。

「おお……媛児よ……共に行こう、行こうな」

しっかりと抱きしめ合い、そして二人して声を上げて泣いた。

その頃、史小倚の宿に王喜勝とその妻、李軍りぐんがやって来て話をしていた。王喜勝は太鼓腹を揺すり部屋をうろつきながら声を荒げている。

「亡くなられたお子がどのような関係かはわからんが、殷総監いんそうかんと関わりのあることは間違いない。しかも真武剣の奴等の仕業となれば放っておけんだろう！」

「ではどうするというのだ？ここでは我等教徒は無勢ではないか。下手をすればこの都に居られんようになるんだぞ？」

「そうだよあんた。この都から出てどうやって生きてくのさ。あたしは田舎暮らしは嫌だからね！」

「どっちにしても真武剣がのさばる事には変わりはないわ！ いずれ我等にも難癖つけてくることは分かりきっておる！ 総監はどのように言われた？」

「何も。どちらかといえばあまり関係ないと言ったような感じもあったが……」

「それはきつと表向きの事だ。事を荒立てて面倒な事になってはならんということだろう。我が教も今は大事な時だ。すぐ発たれると？」

「おそらくあの子を葬ってから発たれるだろう。本当は今日、出立される予定だったのだ」

「……総監が発たれた後、真武剣が動き出すかもしれん」

「まさか……我等の事など奴らは屁とも思っておらぬであろう。何をするというのだ……」

「そんなことでどうする！ 太乙北辰教が舐められてはならん！……確かに我等だけでは何もできんかもしれんが、真武剣がこの都にやって来た時から懸念はしておったのだ。ともかく、身の処し方を考えるべき時が来たということだ」

三人は一樣に深い溜息をついて考え込んでしまった。

「声が外まで聞こえておりますぞ」

不意に男の声が聞こえる。三人はハツとして振り返ると若い男が二人、宿に入ってきていた。

三十三

「これは気がつきませんで、申し訳ございません」

史小倚はあわてて若者達の許へ急いだ。王喜勝と李軍はそそくさと立ち上がり帰ろうとする。

「フフツ……教徒の方々、我等のことはお気になさらずにお話を続けください」

男達はそう言うとおもむろに近くの席に腰を下ろす。王喜勝らは体を強張らせた。

「お、お前達何者だ！」

「名乗るほどの者では。真武剣派ではまだまだ駆け出しでして」

王喜勝らが驚いて固まっているのを見て一方の男がニヤツと笑った。

「この都にも太乙北辰教の方々は多いのでしょね。うっかりご挨拶を忘れておりました。ご容赦願います」

慇懃無礼なその若者の口調は明らかに北辰教を貶めている。

「あんたら！　ここは宿屋だよ！　客じゃないなら帰りな！」

王喜勝の妻、李軍が声を荒げたが二人の男は顔を見合わせてニヤニヤしながら三人の顔を見ている。王喜勝が二人の下へ歩み寄る。

「……早速か。真武剣、何の用だ」

「特別、用は無いんですがねえ。どうやら皆さん我が真武剣派を快く思っておられぬご様子。我等もこの都に来たからにはこれから仲良くせねばなりませんねえ。皆さんは教主様の御許から遠くこ

の都にあつて、変わらぬ忠誠心をお持ちのようですね。とても素晴らしい」

「何が言いたい？」

「いえ、別に何も」

王喜勝は若者のそのふてぶてしい態度に沸々と怒りがこみ上げてくる。

「……何も無いなら帰れ！お前達と話す事など何も無い！」

「そうですねえ。またいずれ都の真武剣派一同揃って顔見せに参ると致しますかな。今日はほんのご挨拶」

「我等を都から追い出すつもりであろうが！」

王喜勝は思い切り目の前の卓を叩くと丁度真ん中から真っ二つに割れて崩れ落ちた。二人の若者は目を丸くして、

「おお、図らずも絶技ぜつきをご披露いただけるとは」

と、相変わらず軽口を叩いている。机を割る絶技など聞いた事も無い。明らかに馬鹿にしている。王喜勝の後ろにいた李軍が何処からか取り出した短刀を手につかつかと若者に歩み寄る。

「それ以上口を開くと承知しないよ！ 減らず口を刻んでやるからね！」

短刀を若者達の方に突き出して凄んだ。二人の若者は顔を見合わせてからゆっくりと立ち上がる。

「たとお前達が太乙北辰教徒は屈したりはせぬからな！」

「それは……何とも頼もしい言葉だな」

急に加わった新たな声色に、その場に居た五人は一斉に声のした方を見ると宿の入り口に夏天佑が立っている。

「そ、総監！」

「あっ、お、お帰りなさいませ」

「あ、あんた……まだ居たのか」

若者二人は揃ってサッと王喜勝らの許から離れると夏天佑に対して身構えた。二人ともそつと腰に手を伸ばし、剣の位置を確かめる。

「まだ居たとは何だ。それはこちらの台詞だな。またお前か。フツ、張撰修。お前は何がしたいんだ？　いたずらが過ぎると師父が怒り出すぞ？　俺が言いつけてやろうか？　ハハ」

夏天佑は笑いながら中に入り二人の正面に立った。思わず身構えてしまった張撰修はその体制を誤魔化すかのようにもぞもぞと動いていたが剣から手を離して真っ直ぐに立つと、

「もうじき出立されるとお聞きしたので、ご挨拶に上がったまで。」

と作り笑いで答える。とにかくこの男が都を離れれば真武剣派は動ける。ほんの少ししか居ないが、まずは北辰教徒を追い出す。この都もまた、真武剣派の街にするのだ。張撰修はそう考えているが、実際のところ、これもまた真武剣派の総意でも何でもなく、この若者と同輩の取巻き数人がその気になって行動しているだけだ。しかもそれが真武剣派の為と思ひ込んでいる。今の北辰教との微妙な関係は真武剣派上層部が頭を悩ます問題だが、何も知らない若い者達はただ引っ掻き回すだけである。夏天佑の事ですらあまり知らない。よく知っていれば絶対に近づくことすら出来ないはずだ。北辰教はおろか、自分達のいる真武剣派の事すら理解出来ていない。

三十四

「お前が居ると安心して発つことができんな」

「……失礼いたします」

「二度と来るんじゃないよ！」

張撰修ともう一人の男が夏天佑の横を通り過ぎて宿を出ようとすると、李軍が再び調子よく大声を張り上げた。

「それは聞けん話だよな」

夏天佑が勢いよく振り返る。すると張撰修の後ろを歩いていたもう一人の男は襲われると思ったのだろうか、素早く剣を抜き切っ先を夏天佑に狙い定めた。それに反応して既に短刀を手にしている李

軍、そして王喜勝、史小倚がサッと剣を抜いた男を囲むようにすかさず展開する。普段の彼等からは想像できないほどの殺気を放っている。とは言ってもやはり王喜勝は鞠のような丸い図体で史小倚は痩せて得物を持てるのかといった風情だ。李軍だけはまだまともに見える。

夏天佑は自分に向けられた剣の切っ先に事も無げに近づくとサッと右腕を振り上げる。「キンッ」と金属音がしたかと思えば、なんとその剣が途中で折れてしまっている。何をどうやったのか誰にも分からない。周りに居た者たちは一様に驚きの表情で口が開いている。夏天佑は三本の指で折れた切っ先を掴み、張撰修の方へ投げつけた。それほど速く投げた訳でもないが、切っ先が真っ直ぐ張撰修に迫ってゆく。平静で居たならばそれを掴み取ることができただろう。しかし張撰修はハッと息を呑み、大きく上体を傾けてそれを避けてしまった。

「フン、見事な真武剣の絶技だねえ！ 何でも避けられる技かい？」
すかさず李軍が野次る。夫が馬鹿にされたお返しだ。

「く……おい行くぞ！」

「この先、我が教徒達に近づくな。もし何かあれば……お前を殺す。真武剣を相手にするには慎重にせねばならんが、お前は、殺す。俺が殺す」

夏天佑が感情を表さずに冷やかに言うと、張撰修らは振り返らず足早に宿を去っていった。

王喜勝が夏天佑の前に跪くと、史小倚、李軍もその横に並んで跪く。

「総監様！」

「おれは夏だが」

「ハッ申し訳ございません」

「ここは方崖から遠く離れた都だ。世話になったな。あんたらは俺の友人だ」

「なんと……勿体無いお言葉……」

「俺は気楽にいきたいんだ。立ってくれよ」

ようやく跪いていた三人は立ち上がる。

「あんたらには申し訳ない事になったな。この先、危険が及ぶ事になるかもしれん」

「とんでもございません。全ては真武剣の奴等が悪いのです。我々はいかなる事があっても決して屈することはありません！」

「まあ、真武剣はすぐにどうこうするなど考えてもおらんだろう。さっきの鼠がちよろちよろうるさいだけだ。しかし、用心はせねばならん」

「ハッ」

三人が声を揃えて答える。

「もし何かあれば……遠いが、俺に言ってくれ。明日、方崖に戻る。もうじき洪の爺さんもここに戻ってくる。そうだ、夜、時間はあるか？　ここにきてくれ。皆で飲もう。俺はまだ少し出てくるがすぐ戻る」

夏天佑はそう言って宿を出て行った。

夜、洪破天と梁媛は宿に戻って夕食まで部屋で休んでいた。前日、夏天佑が馬などを手配していたが、一日延びたこともあり洪破天は再び手配し直す為に出かけた。梁媛は部屋で寝台に横になって考え事をしている。視線の先には、梁発の遺骨の納められた箱が置いてある。寺を辞する時、儀正大師は梁媛に言った。

「そなたはその若さで苦難の道を歩んできた。その道は何処までも続いておる。しかし、その道を行くのはそなた一人ではない事を知らねばならぬ。今までは、いや、今も周りには誰も見えぬかも知れぬが、人の人生には「縁」が複雑に絡まっている。普段は気付かぬが、自身を、周りをよく見よ。聞きなされ。この世は決して狭くはない。我等は本当に小さな存在。世の中を狭く感じてしまうのは自身の無知から来るもの。孤独だと嘆く多くの者達が、そなたと同じ道にひしめき合っておる。大切な弟御の肉体は失われてしまったが、

忘れる事は出来まい。縁は切れることは無い。それでよい。行きなされ。広い世界を知り、多くの人間を見なさい。そなたの向いた先が道となろう」

梁媛はその言葉を呑み込めた訳ではなかったが、忘れないように繰り返し暗誦するように思い出していた。

三十五

史小倚の宿に再び王喜勝らもやって来て、夏天佑が酒を振舞った。無論豪華な宴席などではない。普段の夕食に王喜勝ら三人が加わっただけだ。

「他の教徒達にも宜しく言っといてくれ。これからはこの都の動きにも注意を払わねばならん」

夏天佑はその後それらの事には触れず、都の風物や人、歴史から他愛の無い噂話等を話していた。王喜勝らは先祖代々この都で商いをしていたらしい。彼等は都から遠く離れた街や人についても詳しくかった。真偽の程は怪しいが、この都にはあらゆる情報が集まってくるのだろう。

部屋には梁媛と洪破天が残っていた。

「皆さんと一緒にお酒を飲みたいんじゃないですか？」

梁媛は少し笑いながら洪破天に尋ねる。さっきから何も言わずにいるが、どこか落ち着かない様子でいる。

「そんなことはないわい。しかし……お前は何も食べておらんだろう？ 何か貰ってこようか？」

きっと間違いなく酒も貰ってくるだろう。

「いえ、行きましょう」

梁媛は立ち上がると前に置いてあった梁堯の遺骨箱を抱えて辺りを見回し、自分の寝台にゆっくりと乗せた。洪破天の傍まできた梁媛を洪破天は見つめる。

「よし、行こう」

梁媛の背中に手を添えて部屋を出て行った。

王喜勝ら三人は夏天佑と酒を飲むうちに、今まで抱いていた彼の印象が聞いていたものと随分違う事に内心驚くと共に、こうして酒を酌み交わせる事を大変喜んだ。彼等は夏天佑を「総監」と呼んでいる。本来なら太乙北辰教の末端である彼等が彼に近づく事など出来ない筈だった。勿論、本拠である景北港、方崖では有り得ない。たとえ教徒と言えども教主の御座す方崖はそう簡単に上がることは許されない。ただ年に一度だけ全国から教徒が集まり教主のお言葉を賜る事の出来る大会が開かれるが、無論、個人的に教主以下大幹部に目通りする事など殆ど不可能である。この場に居る事は太乙北辰教に忠誠を誓う彼らにとってはこの上ない喜びであった。

「媛、少し飲むか？」

梁媛が広間に降りてきたのを見ていた夏天佑は梁媛に声を駆ける。史小倚は近くの椅子を袖で拭うと、梁媛の為に用意した。王喜勝らは弟を無くしたばかりの梁媛に何を言えばよいのか分からず困惑していたが、取りあえず立ち上がり、梁媛を迎える。その光景を見た夏天佑が、

「ハハ、どこの姫君が現れたんだ？礼を逸してはならんな」

そう言って立ち上がった。そして新しい酒杯に酒を注ぐ。

「さあ、席についてくれ。そうしないと我々が腰を下ろすことはできません」

梁媛は洪破天と顔を見合わせてから破顔する。席に向かって一礼すると、芝居でもするようにゆっくりと椅子に腰を下ろした。洪破天も隣に座る。

「そういえば、まだお前の歳も聞いておらんんだな。まあいくつでも酒は飲めるが。爺さんは赤子の時、母親の乳より乳白色の艶やかな酒壺を選んだらしいぞ？」

「覚えておらんわい。確かにそのような酒壺があったのは記憶しておるがな」

「私は、もうじき十三になります。夏の暑い時に生まれたので」

「安県の夏は暑いんだろうな。俺は苦手だ」

「それにしてお前は白いのう。梁発も白かったな」

洪破天は言った後すぐに梁発の名を出した事を後悔した。梁媛の顔を窺うが、梁媛のにこやかな表情は変わっていないかった。

「私達の両親はこっちの方の出身だったので。都ではありませんが、北方だと言っていました。だから私も梁発も白いんじゃないかな」

王喜勝は頷きながら聞いていたが、ここはひとつ梁媛を楽しませねばとしゃべり始める。

「我等も代々この都ですからな。皆色が白い。私の自慢はこの腹でしてな。白い腹がまるで大きな玉のようだと……」

「何馬鹿な事言ってるんだい！」

李軍にあつという間に突っ込まれて言葉が続かなかったが、梁媛が口を押さえて笑うのを見て王喜勝は何故かホッとしていた。

三十六

「好天が続くのう」

翌朝、表に馬を引いてきた洪破天は宿の表に出ていた夏天佑に声をかけた。

「向こうに着く頃にはいやと言うほど雨が降るさ。向こうでな」

「気が滅入るのう」

「今から心配してもどうにもならん」

洪破天が宿に入ると、梁媛はもう出立の準備を終えて待っていた。準備と言っても洪破天に買ってもらった新しい衣服くらいしか荷物は無い。自分の物と梁発の衣服、そして遺骨である。梁媛が思いのほか穏やかな表情で、落ち着いているようだ。

「準備はもうできた。少し一服してから発つでしょう」

梁媛の隣に座って表の通りを眺める。夏天佑は洪破天が引いてき

た馬に荷を括り付けていた。

「洪破天様」

史小倚が洪破天の許にやってくる。

「東淵までの長旅、何かと入り用もございましょう。これは少のうございですが、お持ち下さいませ」

そう言っ金包んだ手巾を取り出した。洪破天は史小倚をじろりと見遣ると、

「金ならもっておるわい」

と、口をへの字に曲げる。

「あ、あの……」

史小倚は口ごもってしまい、どうしていいか分からずに首を縮めている。

「じゃあ、その金は梁媛にくれてやれ」

夏天佑が入ってきて史小倚の手から手巾の包みを取ると梁媛に差し出した。今度は梁媛が困ったような顔をして夏天佑と洪破天を交互に見る。

「私……」

「旅には金が要る。苦しい旅もあれば、楽しい旅もあるんだぞ。なあ」

「……そうじゃな。忝い。有難く頂こう」

洪破天は史小倚に向かい頭を下げた。

「では行くか」

「ああ、そうしよう。世話になった」

夏天佑が史小倚に声をかける。

「とんでもございません」

「くどい様だが、無理はするなよ。いざとなれば都を離れられるようにしておくんだ。皆まとまってな」

「承知致しました」

「まあ今はまだそう心配せんでもいいだろうがな」

梁媛も立ち上がって史小倚にお辞儀をする。

「梁媛様……」

「あの……身内は居ないと仰ってましたよね？ 私はこれから遠くに行きますけど、また都に来る事もあるかもしれません。私を知っている人はごく少ないから……私、史小父様の事も忘れませんか」

「わ、私めも梁媛様の事は忘れませぬ」

史小倚は思わず膝をついて梁媛を仰ぎ見る。梁媛の言葉をじっと聞いていた洪破天が言う。

「おぬし……媛児は身寄りの無いもの同士、家族となろうと言うておるのではないか。そのような礼はおかしкаろうが？ 媛児と家族というならわしもおぬしの身内となろう。都を離れねばならん事態になれば東淵に來い。良いところじゃぞ。遠いがな」

洪破天はそう言つて笑う。史小倚は床に跪いたまま涙を流し始めた。この都で長く宿を営んでいるが親しい人間は数人居るという同胞だけだ。洪破天は史小倚の肩に手を置いて軽く揺すつてから、

「では、また会おう」

そう言つて表に出て行く。梁媛は丁寧にお辞儀をして洪破天の後に続いた。

「さあ立つてくれ。人に見られるぞ」

夏天佑が声をかけ、史小倚はようやく立ち上がる。夏天佑が僅かに頷いたように見えた。そのまま黙つて出て行つた。

数人と言えども太乙北辰教徒が集まつて真武劍派を刺激すること避けるために、誰も見送らぬようにと王喜勝らに言い含めておいたが、今思えば大したことでもなかったと夏天佑は考えていた。興味を持つのはあの張撰修という若造くらいものだ。しかし、もし洪破天が張撰修を見なければ必ず一騒動になる。さつさと都を出てしまふに限る。洪破天は自分の馬に梁媛を乗せて夏天佑を待っていた。梁媛は梁発の遺骨をしっかりと抱えている。

「ほれ、さつさと行くぞ」

「ああ、そうだな」

夏天佑は馬に乗り、二頭並んで歩き始めた。まだ陽は高くなく、通りを行く人も少ない。何事も無く三人は都の東門を抜けた。都からはこの東への街道と、梁媛と梁発が歩いてきた南への街道がある。その二つの街道からそれぞれ更に分岐してこの国の何処へでも行く事ができる。洪破天と夏天佑の二人には馴染みのある街道だが、梁媛にとっては東門を出た所から既に見たことの無い場所だった。

「この世は決して狭くは無い。広い世界を知り、多くの人間を見なさい」

梁媛は儀正大師の言葉をまた思い出したが、梁発と一緒に知り、見たかったと、遺骨箱を撫でながら考えていた。

今はまだ日差しの柔らかい春だが、洪破天らが東淵に着く頃には雨季がやってくる。あまりゆっくりはしてられない。洪破天はただの暇つぶしにこの都にやって来たが、おそらくこの先忘れる事のできない旅となった。

第二章へ続く

第二章 一（前書き）

※第二章以降、Unicode文字の為表示できない文字があります。「ヒョウ局」ひょうきょく Ⅱ 「＜金票＞局」きんぴょうきょく その他「ひょう頭」「ひょう客」等

＜金票＞局は運送、護送、警備等を行う組織。

第二章 一

「流浪一天 第二章 一」

一

林の中を疾駆する二人の男。二人とも剣を抜いて並んで走っている。二人の足音と時折聞こえる獣の声、風の音以外は聞こえない。

「見失ったな」

「もう戻った方がいいな。奴ももう諦めただろう」

二人は声を掛け合うと足を止める。二人とも肌の色がやや浅黒く、南方の生まれのようだ。一人は背が高く体格もがっしりして、眉が濃く無精髭を生やしている。もう一人はやや細身で、整った顔立ち。どこかの御曹司と言っても違和感の無い瀟洒しょうしやな身形である。二人ともまだ若い。まだ二十には届かないだろう。

「本隊は無事だろうなあ？」

「魯ろさん達がもう一方を追って行ったけど、残りは皆残っていた筈だ。問題ないよ」

「もう少しで長道観に到着だ。ああ腹減った。さっさと行って飯だ、飯」

二人は剣を腰におさめると、今度は反対の方向へと同時に駆け出した。

「お前達、何処まで行っておった。追ひ払えればそれでよいと言っただろうが。皆待っておったのだぞ。行くぞ！」

二人が街道まで戻ってくると、十数頭の馬が連なった荷駄隊が待機していた。二人を見つけたこの一行の責任者らしき男が号令をかける。荷駄の列が進みだした。二人はその後ろについて歩き出す。

この二人、大きい方は范撞はんどう、細い方は楊迅ようじんといい今はこの荷駄隊

の用心棒をしているが、まだ雇われたばかりの新米であった。先程怪しげな数人組がこちらの様子を窺っているのを、この荷駄隊の護衛の責任者である朱不尽しゅふじんが気付いて人を遣ると、案の定その者達が逃げ出したため、数人がそれを追う事になった。しかしいつまでも追って賊を仕留めるのが仕事ではない。あくまでも安全に速くこの荷駄を目的地に運ぶ事が優先である。長い道のりになれば金品を狙う盗賊が現れる事は当然で、さして珍しい事でもない。稀に大規模な集団に襲われる事もあり、その時は総力を挙げて命を張らねばならないが、殆どは金に困って荷駄の一部をくすねようとする小物だ。少し脅かせば戻っては来ない。今通っている街道は比較的大きく、似たような荷駄が多く行きかう。賊の方も一つ逃せばまた一つ新たに狙えば良い。楊迅らの主な仕事は、荷駄隊の頭数に加わる事だ。それを仕事と呼べるのかは怪しいが、ちゃんと効果はある。先程のように不審者を追うのは初めてで、つい夢中になって追いかけてしまい、必要以上に荷駄隊の足を止めてしまった。新米二人とはいえ、このような事があるたびにばらばらになっていては、長旅を無事に終えることが難しくなってくる。護衛の頭、朱不尽は荷駄の多い少ないに拘わらず徹底して統制を乱す事を嫌った。そしてその名声は広く知れ渡って、新たな仕事を呼ぶのだ。

「充分日が暮れるまでに着くな。でもまた歩きか。あーまた誰か来ねえかな」

「何言ってるんだ。腹が減ってるんだろ？ 大人しくしてるに限るさ」

范撞は少し前で馬に乗っている男に声をかける。

「なあ魯さん。どれくらい経ったら俺達も馬に乗れるんだ？」

魯と呼ばれた男は振り返るとニヤリと笑う。

「そうだな、まあ十年もやれば乗れるんじゃないか？」

「十年だって？ 何だよそれ。十年先にまだこの仕事してるなんて……考えるだけで恐ろしいぜ」

大袈裟に身を震わせるような仕草をして、楊迅の方を見る。

「お前も十年先までやらないよなあ？」

「……そうだな、多分」

その後は二人とも黙々と足を前に運び続けた。徐々に陽が傾き、自然に荷駄隊の足も僅かながら速くなってきた。

「もう少しだ。荷の引渡しまで気を抜いてはならん。よいな！」

「応！」

朱不尽の声に一同が力強く応じる。もう目指す街が視界に入っていた。

二

雨季が迫り、徐々に黒い雲が空を覆う日が増えてきた。都より東南の方角に白珪山^{はくけいさん}というこの国でも一、二を争う、美しさで知られる山がある。古来より人々の信仰を集め、今でも国中からこの山を見る為に多くの人が訪れる。しかし、この山に登ることは出来ない。昔から様々な説があり、噂話まで生んでいる。「山をすっぽりと包む妖気が人を惑わせて一度入れば二度と出られない」「遙か古代より神仙の住処であり、入る事を許さない」といったものだ。ただ、「登ってやる」と言ってみて出て行ったものが誰も帰ってこないのは確かだった。

都から南に向かう街道は、途中で白珪山の東南、つまり都から見ると白珪山を越えた先にある緑恒^{りょくこう}という街に向かい、更に東に延びている。実際には都と白珪山は遠くその頂も望む事はできない。白珪山は南側の裾野が長く延びていて、街道は更に南に大きく迂回して緑恒に入る。裾野の低い辺りを越える事ができれば都から緑恒への道はかなり短縮される筈だが、先の理由により大きく迂回した街道以外に道が作られていなかった。雨季に入ると白珪山の妖気は更に高まるとされており、この時期は近い街道を行く者も若干減ると言う。

この妖しくも人を惹きつける山の南の街道沿いに、江湖にその名を馳せる幫会ほうかい、緑恒千河幫りよくこうせんがぼうがある。緑恒の街を本拠とし、その東南一帯で様々な商いを取りまとめる、元締めのようなものではあるが、傘下の細かな組織を強力に支配するようなものではなかった。偏に長くこの幫会を束ねる幫主、范凱はんがいの求心力が緑恒千河幫を一大勢力へと押し上げた。

まだ正午を過ぎたばかりだが空には暗雲が垂れ込め、緑恒の街は薄暗い。街の中心部の一角に緑恒千河幫の本拠である屋敷があり、頻繁に人が出入りしている。その中にヒョウ局の頭である朱不尽の姿があった。

「朱ヒョウ頭が参られました」

「入ってくれ」

朱不尽は部屋に入ったところで一礼してから奥へ進む。奥で幫主の范凱が待っていた。

「やあ朱さん。仕事の方は一段落かな？」

「おかげさまで全て順調でございます」

「今年に入って以降、かなり増えていると聞いたが、人手は足りておるかな？」

「依頼は増えておりますが、人を分けてやる程でもありませんし、規模もそれほど……。御息にもお手伝いいたしておりますゆえ」
「朱さん、あれに遠慮はいらん。この儂にも遠慮はいらんのだ。どうせまだ何も出来まい。また生意気言うようなら張り倒してもいい。儂に似ておるのは頑丈な体だけだ」

「ハハ……」

朱不尽の荷駄隊に加わっていた范撞は、この范幫主の息子で、確かにその風貌はよく似ている。范幫主も色黒で大きく、両肩の筋肉が異様なまでに盛り上がっている。しかしその容姿からは想像もつかないほど冷静沈着で思慮深いとの評判だ。息子の方はといえば、放蕩息子と言うのがぴったりである。素直でもない。范幫主は息子を鍛え直す為に朱不尽に預けたのだった。育て直すと言った方がいい

かもしれない。范撞には母親が居なかった。

「実は少々気に掛かることがございました」

「ほう、何かな」

「それほど気にも留めていなかったのですが、どうも最近、我がヒヨウ局への依頼に真武剣派しんぶけんはからのものが増えてきておるのです。まあ昔からある程度は請け負っておりましたが、ここのところ立て続けに依頼がありました」

「ふむ、どのようなものかな？」

「それが、中にはわざわざ我等に依頼せずとも……と思うような物も結構あるのです。で、実は新たな依頼がきておるのですが、たった今その目録を寄越してきました。ご覧下さい」

「どれ」

朱不尽は懷から真武剣派からの依頼の品々を記した目録を取り出し范凱に手渡した。范凱は黙って一通り目を通したが、視線を目録に落としたまま考え込んでいる。

「どうやら何か祝い事でもあるようだな。これはどこへ？」

「それが……景北港けいほくこうでございます」

范凱は顔を上げて眉間に皺を寄せながら朱不尽と視線を合わせた。

三

「景北港？ まさか……方崖ほうがいかね？」

「それが、そのまさかでして」

「……フツ、真武剣派はよく働くな。朱さんに依頼したこの荷ひとつで、我が幫会と北辰ほくしんを揺さぶろうというところか。前から依頼が増えていくというのは……フン、まあそうだろうな」

范凱は殆ど独り言のように呟いていたが、その顔には不敵な笑みが浮かんでいた。真武剣派の思惑に思い当たるふしがあるようだ。

「どういうことでしょうか？」

「今はまだ具体的な狙いは読めんが……しかし、それよりまず……方崖に祝い事？ 何も聞いておらん……」

「私も知りませぬ。知り合いにも当たってみましたが、見当がつかぬと……」

「依頼してきた者は何も言ってませんでしたかな？」

「はい。ただ、方崖まで依頼したい荷がある、と言うだけで」

「ふむ。時期は？」

「七月上旬に着くようにとのことでございます」

「あまり間が無いな……こちらで調べさせよう。朱さんは通常通り、準備を進めてくれればいい」

「わかりました」

「それまでに遠出の予定はあるかね？」

「いえ、ありませぬ。方崖までの仕事が決まれば長旅となりますので、日程を調整せねばなりませんゆえ今のところ近場の仕事しか受けておりません」

「わかった。こちらでも取り急ぎ調べを進める」

「では、失礼いたします」

「朱さんはいつも方々に出掛けておるからな、近々酒席を設けよう」
「ありがとうございます。それでは」

ずっと堅い表情だった朱不尽は最後だけ相好を崩して部屋を出て行った。

朱不尽のヒヨウ局もこの緑恒にある。范凱と朱不尽は古くからの付き合いであり、緑恒千河幫の中でも朱不尽とそのヒヨウ局は大きな存在であった。しかし数箇所支店はあるがそれほど大所帯というわけではない。范凱の居る屋敷から西に少し行ったところにある古めかしい屋敷がその総号である。朱不尽はヒヨウ局の主であるが、自ら「ヒヨウ頭」と名乗り、率先して現場に出ていた。

門を入ると魯ヒヨウ頭、解^{かい}ヒヨウ頭の二人が警護の番に就いてい

た。

「朱ヒヨウ頭、おかえりなさい。何か判りましたか？」

「いや、幫主もご存じなかった。幫会で調べてもらうことになったが、我等はいつも通り働くだけだ」

「しかし、何でしょうねえ？ 教主が御結婚とか？ それならとつくに知れ渡るはず……アツ、妹君かな？」

魯ヒヨウ頭がそう言うと言解ヒヨウ頭はすかさず突っ込む。

「どういう事情なら妹君の御結婚が秘されることになるんだ？ 人に言えん結婚をするのか？」

「わからんぞあの妹君は変わっておるらしいではないか」

朱不尽は笑いながら、

「勝手な想像でいらんことを言い触らしてくれるなよ」
と言って中に入ってしまった。

「へい」

魯ヒヨウ頭と解ヒヨウ頭の二人は朱不尽を見送って、またおしゃべりを始める。今度は解ヒヨウ頭から口を開いた。

「……逆は無いか？ 何か不幸が起きて、真武剣が嫌がらせにわざと祝いの品を送るとか」

「そのような事をすれば嫌がらせでは済まんだろうが。ただでさえ争いの火種が常に燻っておるというのに、それでは爆発してしまうわ」

「まあそうだな」

「とにかく真相が何にせよ、真武剣から北辰教への荷、絶対何か起こるぞ。そして我が幫も無関係では居られんということだ」

にわかには雨が降り始めている。二人とも空を見上げると、何か災いでも落ちてきそうな黒雲を不安げに眺めた。

雨が降り出し暗くなってきた中を、楊迅は少し歩を早めてヒョウ局を出て行く。

「雨は強くなる一方だぞ。遅くならんようにな」

門の所に居る魯ヒョウ頭が声をかけると楊迅は頷いて出て行った。出て少し行った所で後ろから人が走ってくる音がする。

「おーい、あの爺さんの所に行くのか？ 雨が降り出したってのに熱心だな」

走ってきたのは范撞だ。追いつくと隣に並んで歩いた。

「お前も行くのか？」

「まあ暇だしな。付き合ってやるよ」

楊迅はただ笑みを浮かべただけで黙って先を急いだ。緑恒の大通りからそれて民家も疎らな街外れまでやってくると、正面には白珪山がそびえているのが見えるが今は雨でかすんでいた。真っ直ぐ一軒の民家に向かう。そこは元は割と大きな屋敷であったようだが、今では家を囲む塀も所々崩れて中が見える状態になっていた。

「お、爺さんだ」

范撞は楊迅に声をかける。楊迅はサッと范撞の前に腕を伸ばして、目はじっと塀の向こうに見える人物を見つめていた。

「雨ん中何やってんだろうな？」

「すまん。ちょっと黙っててくれないか」

楊迅が真っ直ぐ前を向いたままそう言うと、范撞は首をすくめて黙って中を覗いた。崩れた塀の隙間から見えるのは一人の男。中背で特徴らしい特徴も無い、老人と言うにはまだ早いかもしれないといった年恰好の人物だ。そしてこの雨の中、濡れながらじっと立って動かない。ただ、僅かに腰を落とした感じで、身構えているようにも見える。楊迅と范撞は丁度真横から見ている。

彼の視線の先には何も見当たらない。見えない何かを凝視し、腕は出すのか出さないのかはつきりしない位置で止まったままだ。まるで呼吸までもが止まっているかのように全く動かない。それを見ている楊迅らも次第に体に力が入り、徐々に前のめりになってゆく。

暫くその状態が続いたが突然、中の人物は「フーッ」と大きく息を吐くと真っ直ぐ立って雨の落ちてくる天を仰いだ。

「おお……おいおい何だったんだよ！」

范撞は前へ体を傾けすぎて倒れそうになったのを辛うじて堪えると思わず大きな声を出した。

「おぬしらそんな所で何をしておるのだ？ 濡れておるではないか。さっさと入れ」

「……爺さんの方が濡れてんだろ。おい、行こうぜ」

范撞が小走りに堀の中に入って行き、楊迅もそれに続いた。

少し大きな小屋のような建物の中は、人が住んでいるとは思えない程何も無く、広めの板の間以外は小さな竈のある土間がくっついてるだけだ。老人は隅の方で濡れた衣服を着替えている。

「久しぶりだのう」

老人が声をかけると楊迅は腰を折り、

「申し訳ありません。ヒヨウ局の仕事に出ておりましたので」

「働かねば食っていけんわな」

「爺さんは食えてるじゃねえか。働いているようには見えねえがな」
范撞の物言いにはこの老人への敬意のかけらも見られない。だが老人の方も全く気にしていないようで、楊迅も諦めているのか咎めるような事は言わなかった。

「裏に畑がある。儂一人食うには何も困らん」

老人は着替え終わると何も無い広間の丁度真ん中に腰を下ろした。

「どうじゃ？ ヒヨウ局の仕事は」

「まだ仕事らしい仕事は何も……」

「ただ延々と歩くだけさ。もう飽きそうだ」

「それで飯が食えるのだろうか？ 結構なことではないか」

「仕事には遣り甲斐が要るだろ？」

「フン、一丁前の口を利くのう。どの道を行くにしても、行って見ないことには何があるか判らんものだ。先に在るものは行ったものによってそれぞれ違うのだ」

「まあ取りあえず暫くはやるさ」

老人は楊迅のほうへ視線を移す。楊迅は范撞が話している間に広間の壁際に移動し、その場に端座すると呼吸を整えて瞑想を始めていた。いつもここへ来るとまずはこの瞑想を始める。范撞もチラッとそちらを見てからまた老人に視線を戻した。楊迅が暫くそのままでいることをわかっているからだ。

五

「さっきは何やってたんだ？ 雨ん中……なんか修行か？ 氣失ってたんじゃないだろうなあ、ハハッ」

范撞は自分で言った事が面白かったらしく、そう言って笑う。老人は何も言わずにニヤツとしただけだった。

「なあ爺さん、あんたは何で今も武芸ぶげいの鍛錬やってんだ？ あんた、もう相当強いだろ？ 何で続けられるのか俺にはわからねえ」

「ふむ、何でだろうな」

「そうだ、爺さん。あんた今の武林ぶりんで自分の実力ってどれ位だと思う？ もっと強い奴って居るか？」

「勿論居るに決まっておるわ。きっと数え切れんほど居る」

「嘘だな」

范撞は急に真顔になって老人の言葉を即座に否定した。

「あんたより強い人間は……かなり少ない筈だ」

「ほう……お前の親父殿あたりは強そうだが」

「親父の武芸は知らん。殆ど見たことも無い。ただの筋肉の塊だろ？」

「全く……お前は勿体無い事をしておるわ。范幫主の武芸がどれほど凄まじいかわかっておらんとは。近すぎてよう見えなんだか」

「馬鹿力なのは知ってる。俺をぶん殴る拳が異常に硬いものな」

「ハハ、范幫主の拳に恐れをなして逃げ出す奴はとても多いな。こ

れは確かな事だ。そうなの……わしと親父殿が遣り合えば、わし
が負けるとは思わんな。しかし、勝てるとも言えん」

「何だそれ。多分爺さんの方が強いな」

「親父殿の武芸を知らんくせにいい加減な事を言うな」

「で、他はどうだ？ もっと強そうな奴は誰だ？」

「……何故そのような事を聞く？」

「いや、何となくだけだな。爺さん、いつかぶっ倒したい奴でも居
るんじゃないかってな。それなら、今でもずぶ濡れになってまで夢
中になるのがわかる気がしたんだ」

「フツ、お前も何か夢中になるものを見つけたくなったか？」

「ハッ、そんなじゃねえ。俺はそんな事考えねえよ」

范撞は少しムキになって否定した。老人は少し考えるように間を
空けてから、口を開いた。

「……いつかまた遣り合ってみたい人間が三人居る」

「え、三人？」

「三人だ。しかしその内の一人とやることは適わぬ……故人だ」

「死んだ奴まで数えて何になるんだ？ そんな凄い奴だったのか？ 誰
だよ。そんな強いんなら俺達も知ってんだろ？」

「亡くなったのはお前達が生まれた頃だ。それに、その人は自らの
武芸を江湖こうちうに売り出す事は無かった。……今となっては知る者はほ
んの僅かだろうな」

「ふーん、で、生きてる奴は誰なんだ？」

老人は范撞の顔を見ながら薄く笑い、何も言わなかった。楊迅の
方へ再び目を遣る。

「気が散ってしまったようだな」

楊迅は目を開けて立ち上がり、老人の前まで来ると再び腰を下ろ
す。

「済みません……お話が気になってしまっ……」

「なあ、お前も聞きたいだろ？ 爺さんの的が誰なのか」

「……」

「ほんの少しだけ教えよう。三人とは、一人はわしにその武芸を授けて下さった師匠。一人は兄弟子で、一人は弟子だ」

「何だよ、身内争いかよ」

「范撞！」

楊迅は堪りかねて声を荒げた。老人は「構わない」といったように手を振って続ける。

「確かにそう聞こえるわな。まあ、我等の関係は世間で言う師弟兄弟とは少し違って変わっておるがのう」

「で？ 見通しはどうなんだ？ 死んじまったのは師匠か？ 兄弟弟子の方はぶっ倒せそうなのか？」

范撞のその言葉を聞くと老人は、先程外でやっていたような大きな溜息について首を僅かに左右に振った。

六

老人はそれ以上は話そうとはしなかった。

「この雨だ。あまり遅くなつてはいかん。楊迅、やってみるか？」

「はい。お願いいたします」

楊迅は立ち上がると後ろを向き、少し背筋を伸ばすと腰に差していた長剣を抜く。しばらくそのまま目を閉じている。その間に范撞は広間の端に寄って壁にもたれかかり、老人は僅かな荷物と一緒に置いてあった長剣を持って戻って来た。楊迅は老人の方へ向き直り一礼するとすぐに剣を構えた。

「忘れてはおらんか？ もう一度見るか？」

「いえ、結構です」

「そうか。では始めよう」

老人は言い終わると同時にスッと剣の先を楊迅に向ける。だが構えているという感じではない。不意に真っ直ぐに楊迅に向かい刺突を送ると、楊迅は受けずに半身になり同時に剣を体の後方から切っ

先を老人へ向けた。そこから双方、全く止まる事無く瞬く間に十数合余り剣を交える。楊迅は真剣そのものだが、老人は余裕綽々、平然と決まった型を繰り返している。そこまでぼんやりと眺めていた范撞は壁から離れ、組んでいた腕を膝につけて二人の剣を凝視している。老人は僅かにニヤリと笑うと三手一気に繰り出した。楊迅はそこで「ハッ」と初めて気を吐くと、ある一点めがけて大きく剣を突き出す。すると老人は自らの剣を楊迅の剣に重なるように前に出し、剣をらせん状に回転させてそのまま楊迅の手首を狙った。楊迅は予想していなかったのか、急に焦って思わず大きく後方に飛び退いてしまった。

「おいおい待てよ爺さん!」

范撞が大声を上げて二人の間に割って入ったところで老人は剣を下ろし、楊迅もまた一礼して剣を腰に戻した。

「今のは卑怯だろうが」

「卑怯?」

「最後のくねくねしたやつだよ。あんなの今まで一回も見せなかったじゃねえか! 爺さんの方はいくらでも手があるんだからいつまで経っても先に進めねえだろうが」

今まで老人は楊迅に通りの型を何度も見せて、破る一手を考えようと断言していた。楊迅が先程見せたぎこちない突きはずっと考え続けてようやく辿り着いた答えであったが、それを老人は今まで見せなかった手でそれを退けたのだ。

「今先に進んだではないか」

「へ?」

「楊迅は先に進んだから、わしの手も先に進んだのだ。一手だけだかな」

「……何だよそれ……でも結局さっきの楊迅の突きは役に立たねえって事だろ? 防がれたんだから」

「防がれても良い。反撃されても良い。わしは最強の剣を見せろと言っておらん。ただ考えろと言っておる」

「……でもなあ……これ死ぬまでに習得できるのか？ 爺さんの剣が。一手って……」

老人は長剣を元あった場所に持って行き、無造作に置いた。

「もつと色々考えて試すがいい。ここでな。他所で試せば、ハハ、自分が危ういからのう。さっきのは屁っ放り腰だったが、次は大丈夫だな。さて、もう行け。もう随分暗くなった。雨も当分止むまい」

「先生、ありがとうございます」

楊迅が一礼してから范撞の方を向いて頷くと、范撞も「また来るわ」と老人に声をかけ、二人とも老人の家を出た。

「おい、あれで納得できるのか？ なんかひっかかるなあ」

「武芸の修練はそういうものだろう？ だから皆何十年と修行するんじゃないか」

「……だから嫌いなんだよ。何と言うかこう……気が遠くならねえか？」

「ならないね。もうさっきの先生の最後の手の次を考えるのに頭が一杯さ」

「フン、武林は変人ばかりだな」

范撞も帮会の者に武芸の手解きは一通り受けてきた。しかしある程度はそつなくこなし、大部分は遊んでいる。興味はあるのだがやはりやる気が続かない。雨の中わざわざここまでやってくる楊迅も、変人の一人に数えられていた。

来た時よりも更に雨が強まっている。二人は顔を見合わせてから意を決して雨の中に飛び出していった。

七

范凱は朱不尽の話を聞いてすぐに早馬を景北港へと向かわせたが、やはり方崖の祝い事について何も掴めていなかった。緑恒千河幫は太乙北辰教とは長年付き合いがあり、世間的には北辰の一派と思わ

れている。范凱は完全な独立した幫会としてその運営には氣を使っているが、関係が良好であるに越したことは無い。調べに走らせた者を問者の如く方崖に潜り込ませる訳にもいかず、結局何も得られないままだった。

「どうやら、何も無いか、或いは北辰の中樞のみに秘されておるか、そのどちらかの様ですな」

范凱は再び朱不尽を呼んで、真武劍派の荷について話していた。

「そうになると、この荷の意味が益々謎ですな」

「朱さん。この仕事、儂も同行しようと考えておるんだが……」

「えっ？ 幫主がですか？ 方崖まで？」

「おそらく朱さんのヒョウ局がこの真武劍の荷を持って行っただけでは、向こうの連中は色々と勘ぐるのではないか。儂も行って、どういふことなのか、我等の方から方崖で聞くという形にしたい。真武劍派には儂も同行することは秘しておく。まあ神経質になる必要も無いが、こちらから言う事はないな。どうだろう？」

「なるほど。確かに方崖で我等が真武劍の使いであると思われることはあまり良くありませんな。幫主のお考えなら我々、口を挟むことなど何もありません」

「では、そうしよう。朱さん、この旅は儂も用心棒として働かせてもらうよ。朱さんの指示通り何でもするから言っして下さい」

「ハハ……そんな」

「いや、実は昔を思い出して今から楽しみなんだよ。まあ昔の様に派手に立ち回るような事があってはならんのだがね」
そう笑いながら続ける。

「荷はこちらが取りに行くんでしたな」

「はい。武慶ぶけいの芙蓉ふようすい荘に参る事になっております」

「それもまたわからんところだ……近くまで来いというのではなくて家の中に入れるとは……。我が幫を真武劍に引き寄せる、ということか……」

「儂は緑恒に戻って来た後に合流しよう」

「わかりました」

武慶は都から南へ下り、緑恒方面と南へとの街道の分岐点から数百里南下した所にある「真武剣派の街」である。この武慶は役人よりも真武剣派の門弟の方が偉いと言われ、普段なら他の門派、幫会の人間は近づきたがらない位である。芙蓉荘は武慶の街に多くある真武剣派の屋敷の一つだ。

「おい二人とも、もたもたするな」

「へいへいわかってますよ。今行くって……」

「なんだ？ その口の利き方は」

魯ヒヨウ頭は馬の上から軽く鞭を振るう。

「うわっ危ねえな。ほれ、もう準備は出来たぜ。さっさと行こう、真武剣のねぐらによ」

范撞は武慶の街に行くのは初めてだった。緑恒からはそれほど遠いということも無いが、武慶に近づく事を范凱が許さなかった。行けば必ず何か問題を起こすに違いないからだ。朱不尽の部下として大人しく従っているようにとしつこく范凱に念を押されていた。

「お前は行った事あるんだったな？」

魯ヒヨウ頭が楊迅に訊く。

「はい。留まった訳ではありませんが、武慶を通らねばここまで来られませんので」

「では、出るぞ！」

ヒヨウ局の門の方から朱不尽の号令が聞こえてきた。まだ何も無い空の荷駄隊は一路、武慶に向かい出発した。

武慶までは十日程の行程だが、その間晴れた日は一日も無かった。例年なら雨季もそろそろ終わるはずだが今年はまだまだ愚図ついている。武慶に着くまでの間、范撞を除いて皆一様に口数が減っていた。

いよいよ武慶に入るといふ日、空はようやく久しぶりに青く晴れ渡った。武慶の北門までやって来た一行はそこで小休止し、朱不尽は五人居るヒョウ頭を集めて何やら打ち合わせをしている。この武慶辺りから南は少し気候も変わり、南国の植物もちろほら見受けられる。しかしこの街は大きな街道が真っ直ぐ金陽きんようの都まで繋がっており多くの人間が行き来する為に、街を行き交う人々の顔つきも衣装も都で見るそれと殆ど違いは無かった。向かう場所は芙蓉荘だが芙蓉の花を愛するにはまだ時期が早い。やはり目に付くのは南国を思わせる真っ赤な仏桑花だ。おそらくこの武慶辺りが自生する北限と思われる。街の造りや建物の様式等は殆ど都の物で、鮮やかな赤のその花との組み合わせは、初めて目にする者にはどこか新鮮に映った。

「はーでかい街だなあ、少なくとも緑恒よりは退屈しねえだろうな」
范撞は街に入って辺りをサッと見回すと、そう言いながら歩き出す。

「おい、一人で行くなよ、隊から離れるなって言われただろう」

「子供じゃあるまいし、一々細かいんだよな」

「遊びじゃなくて仕事なんだから、色々段取りがあるだろう？ こ

こは言わば敵地みたいなもんじゃないか」

「俺等は「来て下さい」って言われて来たんだぜ？ 出迎え寄越したっていいくらいだ」

そう言いながらも范撞は門まで戻って来ると、空の荷車にもたれかかった。

「よし、それでは街に入るぞ。皆持ち場を離れるなよ」

朱不尽が言うのと集まっていたヒョウ頭達がそれぞれ定位置に戻り、程なくして隊は前進を始めた。

武慶の中央を貫く大通りは賑やかで都と比べても遜色は無い。朱不尽の一隊が通っても特に人目を集める事は無かった。暫く行くと先頭の方で朱不尽が馬を降り、人と話をしている。どうやらそこが芙蓉荘らしい。先頭が屋敷に入り始め、朱不尽は再び馬に乗って最後尾の范撞と楊迅の後ろに回った。

「朱さん、あそこがそうなのか？　でかい屋敷だな」

「そうだ。大人しくしてるんだぞ」

「全く……わかってるって」

門には警備の者だろうか、両脇に一人ずつ立っている。真武剣派の門弟であろう。范撞は遠慮せずに二人の姿と腰の得物を眺めてから門をくぐった。

朱不尽は庭の中ほどまで入ってからここで待機するように一同に指示し、この屋敷の者に案内されて奥へ入って行く。結構な広さで部屋が多く、何度も来なければどこがどうなっているのか覚えられそうも無い。

「こちらでございます」

部屋の前でそう言われて、朱不尽は中に向かって一礼して入った。「朱不尽殿、この度は我等の願いをお聞き届けいただき、真武剣派を代表してお礼申し上げます」

いきなりの大仰な挨拶に朱不尽は少々面食らった。

「いえ、我がヒョウ局をお引き立て下さり、こちらこそ恐縮致しております」

出迎えた男は白千風はくせんふうと名乗った。細身で細長い口髭が綺麗に整えられている。纏う袍ほうは上質の絹。真武剣派の高弟らしい風貌だ。

（白千風……確か総帥の五番目の弟子だな……）

「少しお早いお着きでしたな。六月に入ってからお越しになるかと思っております。お預けする品の準備はできておりますが」

「景北港まで長旅となりますので万全を期したいと考えております」

「我等は素人ですからな。全て朱不尽殿にお任せ致しますが……」

その時、部屋の外がにわかに騒がしくなった。部屋の入り口に先

程朱不尽を案内してきた者が慌てたようにやって来て白千風に伝える。

「失礼致します。総帥が参られました」

「何？ 師父が？」

白千風が勢いよく立ち上がる。朱不尽も急いで立ち上がると部屋の隅に寄り、入り口の方へ体を向ける。

（総帥だと？ たまたま来たのか……まさか荷の引渡し of 立会いにわざわざ来たとしてもいいのか……？）

朱不尽は真武剣派総帥に会ったことは一度も無い。思わぬ状況に胸の鼓動が高鳴った。

九

杖を持ち、少し古びた黒の衣装を纏った小柄な老人と、その後が続いて一人の若い男が部屋に入ってくる。朱不尽は今までに経験した事の無い様な緊張感をその身に感じていた。白千風が老人の前に進み出て一礼してから脇へ身を寄せる。朱不尽が抱拳し口を開くより先に老人が声をかけた。

「真武剣派の陸皓と申す。緑恒千河幫、朱不尽殿じゃな？ ようやくお会いする事が出来たのう。朱不尽殿の名は永く江湖に轟いておると言うに、儂がこの武慶に引き籠もっておる故、お目にかかる事ができなんだ。至極光栄じゃ」

「わ、私こそ思いがけず総帥にお目通りが叶い、恐悦至極にございます」

范撞がこの朱不尽の様子を見ていたならきつと笑い出すに違いない。普段から冷静で少々の事で動じたりしない朱不尽だが、やはり思いがけぬ総帥の登場は少々の事どころでは無く、声がうわずつた。白千風が用意した椅子に陸皓が腰を下ろす。持っている杖は、歩くのに必要な訳では無さそうだ。足取りもしっかりしている。しかし

まだ武芸ができるのかどうかは判らなかった。一緒に入ってきた若い男はすぐ後ろに立っている。

「范凱幫主はお変わり無いかな？」

「はい」

「幫主の手腕、見事なものじゃのう。范凱殿は緑恒から東南一帯に磐石な勢力を築かれた。しかも力に頼まず、信と義に拠ってじゃ。朱不尽殿のような好漢が陸続と集うのも頷けるのう。羨ましいかぎりじゃ」

「は……」

「朱不尽殿。これまで我が派と千河幫は地理的にも近く在りながらあまり交流も無かったが、これからは是非懇意にしたいのう。協力し合える事もきつと少なくないと思うのじゃ」

「……必ずや范幫主にお伝え致します」

朱不尽はそう言うしかなかった。これは他愛の無い世間話では無く、自分如きが軽々に答えられるものではない。非常に機嫌の良さそうな笑みを浮かべているこの老総帥の言葉にどういう意味があるのか、裏はあるのか、或いは何も無いのか……頭の中に様々な考えが巡るが、どうしてもその眼を真っ直ぐに捉える事ができなかった。

「荷の用意は出来ておるのじゃな？」

陸皓は話を変え、白千風に訊ねた。

「はい。いつでも車に積み込みます」

「明日発たれるのかな？」

「その予定でございます」

「千風、今夜休んでいただく部屋は準備してあろうな？」

「全て用意させてあります。明日の朝までは荷はこちらで保管し、早朝に積み込みます」

「そうじゃな」

「あの……我等ヒョウ局の者はどこでも寝られます。寝所までお世話になる訳には……」

「景北港まで、長い旅じゃ。ゆっくり休みなされ。荷の積み方も指

示してもらえれば、早朝この者にやらせる。よいな」

陸皓は言葉の最後で後ろを振り返り、立っていた若い男を見ると、「かしこまりました」

と、男が初めて声を発した。

「朱不尽殿にお任せしておけば安心じゃ。ヒョウ局はこの国に多くあるが、朱不尽殿に勝る名は聞いた事が無いからのう」

陸皓がそう言うのと、若い男は薄ら笑いを浮かべる。

「左様でございます。しかし太師父様、それ以上申されてはかえって朱不尽殿に負担になりますよう」

太師父と呼ぶ割にはやけに気安い物言いだ。

「お預けする荷はどれも高価な物ばかり。慎重に行って貰わねば……」

若い男がそう言うのと陸皓は立ち上がり、持っていた杖で男の胸を二度こつこつと叩く。

「お前は、何様だ？」

「え……？」

「ひざまづ跪け！」

「は？」

突然、陸皓は持っていた杖で男の腹を突き、男は「ウツ」と短く呻き床に膝を突いた。

「朱不尽殿に向かってその態度は何じゃ！ お前は何も知らぬ小僧の癖に江湖の御先輩を愚弄するか！」

「は……も、申し訳ございません！」

男は床にひれ伏して詫びているが、朱不尽は呆氣にとられていた。

十

（……何だこれは……芝居か？）

何か変だ。男が自分に向かって生意気な口を聞き、陸皓がそれを

叱った。ごく普通の事なのだが、なぜか朱不尽は不安を覚えた。陸皓は床に平伏している男を冷やかに見下ろしている。すると男は床を這って朱不尽の前までやって来ると、

「朱不尽様！　どうかお許しを！」

そう叫んで頭を床に擦り付けている。

「いや……あの、お立ち下され」

（何だこの小僧は……下手な芝居をしておって。真武剣、何をする気だ？）

朱不尽は益々不安に駆られていく。顔に出さないようにするのが精一杯だ。

「庭閑！　出てゆくのじゃ！」

陸皓は杖を突き出し、男に命じる。

「も、申し訳ございませんでした……」

男は、今度は弱々しくそう言うのと立ち上がり部屋を出て行こうとする。

「待て！」

今しがた出て行けと言っておきながら今度は呼び止める陸皓。朱不尽は内心苛立った。

（何でもいいから早くこの小芝居を止めてくれ。俺を解放しろ！）

「朱不尽殿」

陸皓に急に名を呼ばれた朱不尽は僅かに体を強張らせてしまった。

「これは田庭閑と申す。全く恥ずかしい限りじゃが、我が派の不肖の弟子でう。御無礼お許し願いたい」

「いや、田殿の仰る通り貴派の大切な品々、命に代えても無事にお届け致します」

「庭閑、お前は明日より武慶を離れ、暫く戻ってはならん」

「え？」

「お前は朱不尽殿の供をせよ」

「……は」

朱不尽は焦った。

（勝手に決めるな！）

「そ、総帥、それは……」

「朱不尽殿、これはこの武慶で遊んでばかりで江湖を生きる厳しさなど全く判っておらん。朱不尽殿の稼業がいかに変なものかを知っておらぬ故、あのような生意気な口を利くのじゃ。今回は我が派の荷をお預けする訳じゃが、こやつに荷を担がせてやってくれぬかのう？好きなように使って貰えば良い。ただの人夫じゃ。庭閑、異存はあるまいな？荷を届けるまで武慶に戻る事は許さぬ」

「……」

「よいな！」

「……はい」

朱不尽は考え込んでしまった。

（最初から目付けを同行させる腹か。しかし何故だ？我等が荷を盗むとでも……いや、そんな事では無いな。我が幫の何かを調べる……我等に同行して何がわかると言うのだ？景北港に着いてから何かする……わからん。全くわからんではないか！）

「朱不尽殿？」

「あ、いえ、……承知致しました」

「それではそろそろ儂は失礼せねばならぬ。朱不尽殿、戻られたら是非一献差し上げたいのう。今から楽しみじゃ。お待ちしておりますぞ」

陸皓は再び上機嫌そうな笑顔を見せ、

「それでは任せたぞ。失礼の無いようにのう」

そう白千風に言うとな人で部屋を出て行った。

「急に、申し訳ありませんでしたな。我が師父は気さくなお人なのだが、かえって我等目下の者は氣を使って仕方が無い」

白千風が笑いながら言う。

「ハハ……」

「それでは外でお待ちの方々にも休んでいただきますしょう。部屋へ

ご案内致す。庭閑、お前はすぐ戻って支度をするのだ。太師父様のご命令だからな」

「あのう……本当に私も景北港に？」

「そうだ。さっさと行け」

「……はい」

田庭閑はうなだれて部屋を出て行こうとしたが、朱不尽が居る事を思い出したのか振り返って形だけの札をすると、肩を落としたまま出て行った。

「では、こちらへ」

朱不尽は白千風の後に続く。

（田とやらも気の毒だが、一体、どうしたものか……）

この場からとりあえず開放されたが、益々頭が痛むばかりであった。

十一

早朝、陽が登り始める頃、朱不尽とヒョウ局の者は全て出立の準備を済ませ、ずっと待機している。予定ではもう武慶を発っているのだが、まだ人が揃わなかった。

「もう行ったらいいんじゃないか？俺等は荷を運べばいいんだろ？人まで運べなんて依頼じゃなかったよな」

范撞は時折、欠伸をしながら辺りをぶらついている。

「朱殿、申し訳ございませんぬ。先程人を遣りましたのもう来るはず……」

白千風が言った丁度その時、表から田庭閑が駆け込んできた。

「遅れて申し訳ございません！これほど早い出立とは……」

「馬鹿者！皆様もう随分前からお前が来るのを待っておられたのだぞ！」

「申し訳ありません！」

田庭閑はそう繰り返すしかない。

「あの、私の荷物は何処へ積みめば……？」

「お前の荷物など、お前が運べ！ 太師父様は荷を担げと言っておられただろう。お前はこれを担げ。まだ手が開いておろう。お前のその物見遊山に行くかのような大袈裟な行李、その手でしっかり持っていくのだな」

田庭閑は確かに大きな行李を持っている。ヒョウ局の者も勿論、日用品など用意しているが、最小限の物を風呂敷に包み背負っている。田庭閑の行李には何が入っているのか知らないが、手に持って景北港まで旅をするのはおそらく普段の修行よりもきついだろう。白千風は別の荷を差し出して田庭閑に担がせる。こちらが本来運ぶべき品だ。中身は知らないがずっしりと重い。

「帰ってくる頃には強靱な足腰を手に入れる事ができるぞ」

白千風は真顔で言って、朱不尽の方へ向き直った。

「お待たせ致した。これは本当に好きなように使って下され」

「ハハ……助かります。それではそろそろ……」

「旅の無事をお祈りいたします」

田庭閑が慌てた様子で、

「師叔、急いで出てきたもので、剣を忘れてしまいました」

そう言った後、首を縮めて上目使いで白千風を見る。

「剣などいらん。お前はただ黙々と荷を運べば良いのだ」

「……はあ」

「出るぞ！」

朱不尽の号令でようやく荷駄隊が前へと進みだした。田庭閑はとぼとぼと最後尾に付く。不安か絶望か、泣き出しそうな表情になっていた。

（何か計画的なものでもあるのかと思ったが……気のせいかもしれんな。何かやらせるならもっとましな人間を付ける筈だ）

朱不尽は田庭閑の様子を窺いながらそう考えた。

「あんた、災難だな」

早速、范撞が田庭閑に声をかけるが、反応は無い。

「俺は范撞。こいつは楊迅。俺達の仕事は……しんがり殿だな」

ただ単に最後尾に引っ付いているだけだが、范撞は後駆のつもりらしい。

「あんた幾つだ？」

「……」

「今はまだいいが、この先一月ばかり、黙って過ごすつもりか？
それは無謀な試みだな」

范撞は鼻で笑って田庭閑の様子を窺った。

「……俺は田庭閑だ」

「それはもう聞いている」

「こっ、今年十九になる！ あんたも似たようなもんだろう！」

「ああそうだ。似たようなもんだな。宜しく頼むぜ」

「……」

武慶の北門を出る頃には眩しい朝日が一行を照らす。まだ歩き始めたばかりだが、田庭閑は自分で持ってきた行李を時々持ち方を変えながら恨めしそうに眺めていた。

十二

朱不尽と一行は、後は景北港を目指せば良いだけだが、再び緑恒を通るので一旦ヒョウ局の屋敷に戻る事になった。今回は范撞、楊迅の若い二人が役に立っている。真武剣派の人間、田庭閑の相手役だ。范撞が何だかんだと話しかけるので、当初は黙ったままだった田庭閑も少しずつ慣れてきた様だ。尤も、体の方はかなり辛そうにしているが。歳の近い若者が居なければ、朱不尽や各ヒョウ頭だけでは田庭閑をどのように扱うか苦しみどころだった。朱不尽はとりあえず范撞らに任せておくことにした。

「今夜はまともな寝台に寝られる訳だ。あんたも十日ぶりにぐっすり眠れるぞ」

范撞、楊迅の後に続いて部屋に入ってきた田庭閑は半ば放り出すように自分の行李を床に下ろし、床に座り込んだ。

「おいおい、ここには寝台もあるし荷を置ける卓もあるんだぜ？何もそんなところに座らんでもいいだろう？」

「……もういい。もういいんだ。もう、どうでも良くなってきた。汚れようが何だろうが構うもんか」

楊迅は田庭閑のその様子を見て微笑む。

「俺もそう思った時があったよ。都のど真ん中を歩くなら格好も気にしなければならいけど、こんな田舎の街道でそんな事に気を取られていては、自分で窮屈にしてるだけ。……江湖が厳しい世界であることは間違いないけれど、思っているよりも本来的な自由が、同時に多くあることを知って、とてもわくわくしたもののさ……ちょっとうまく言えないけど」

「お前は坊ちゃん育ちだからな」

范撞が楊迅に言う。

「お前だってそうじゃないか」

「うん？　ちょっと違うな」

田庭閑は床に寝転んで目を瞑っている。

「頼むから寝台に上がってくれよ。そこは邪魔になるんでな」

「ああ」

よろよろと立ち上がり寝台に倒れこむ田庭閑。部屋の真ん中に放り出した行李はそのまま、楊迅がそれを寝台の傍に置いてやった。

朱不尽は荷の管理を五人のヒョウ頭に指示するとすぐに范凱の許へ向かった。

「なるほど。向こうも人を出してきたと……」

范凱は考え込んでいる。

「その田という男を見る限り、何かあるとは思えませぬが……。陸

総帥と共に居りましたが、血縁者かも知れませんか。一介の門弟という感じではありませんでしたか」

「その男は儂を知っておるだろうか？」

「判りませぬ。幫主、やはり景北港へは私共だけで参った方が宜しいかと思います」

「なんとも煩わしい仕事だねえ。では朱さん、景北港へ入ったらまず蔡長老を訪ねてくれ。蔡元峰殿だ。書簡を用意する。それから、蔡長老から殷総監に取り次いで貰おう」

「はっ」

「明日早朝に出立ですな。発つ前に寄って下され」

「承知致しました」

夜になりヒョウ局では景北港へ向かう者たちは休み、それ以外の人間が荷の見張りに立った。

「少し飲もう」

范撞がどこからか酒を持ってきて楊迅に見せる。

「本当に少しか？ 心配だな」

「寝酒だよ寝酒。ぐっすり眠るにはこれが一番だろう？ 例外は居るけどな」

田庭閑はここに着いてからすぐに寝てしまっている。見るとまるで寝台に沈んでいる様にも見える。朝には一体化しているかもしれない。

「景北港か。久しぶりだな。遥か昔に親父に連れられて行った事がある」

「俺は初めてだ。緑恒より北へは何処にも行った事が無いよ」

「景北港は東北だけだな。これからの時期は氣候もいいぞ」

「楽しみだよ」

「楽しめればいいがな」

朝、范撞が表に出ると朱不尽と五人のヒョウ頭が集まっている。

「朱さん、田の奴がもう荷が担げねえってよ」

「何だと？ 真武剣派はそんな柔な奴ばかりなのか？」

魯ヒョウ頭が呆れたように言う。

「どうしたんだ？」

「さあ？ ぐっすり寝てたよ。で、起きたら腕が痛くて上がらねえんだと」

「フッ、担いでいた荷だけでもかなりの重さだったからな。そろそろ時間だ。ここに集まるように言ってくれ。俺は范幫主の所へ行つて来る。戻ったら出発だ」

朱不尽は馬に乗り、ヒョウ局を出て行った。

朱不尽が范凱が用意した書簡を持って戻って来た時には全員集まって出立の準備は整っていた。

「よし、揃ったな。皆準備はいいな？」

「応！」

そこで朱不尽は一番後ろに居る田庭閑の所に行き、声をかける。

「田殿、前の荷車にその荷が積める。積んでくれ」

「えっ？ いいんですか？」

「ハハ、そなたの事は好きに使ってよいと言われているからな。その行李も乗せて括っておいてくれ」

田庭閑は先程まで暗い顔をしていたが、一転して安堵の表情を浮かべた。

「助かります。いや本当に」

早速、背負ったばかりの荷を目の前の荷車に乗せ、その上に自分の行李を載せて括りつけるのに夢中だ。

「命拾いしたな」

范撞がニヤニヤしながら声をかけると、田庭閑は同じようにニヤ

ツと笑い、目の前の縄に取り組んでいる。余程嬉しいようだ。

「よし、大丈夫だろう。変わりにこれを持ってくれ」

「え……？」

「重いもんじゃない。安心してくれ」

朱不尽が差し出したのは一本の長剣だ。

「この先、田殿には用心棒として同行してもらう。真武剣派の門弟に荷担ぎ人夫をしてもらうのは勿体無い。旅は長いからな。すんなりいけば良いが、それなりの覚悟を持って進まねばならん」

「荷を狙う輩など、私にお任せください！ 私は剣が本分ですから」
「宜しく頼む」

武慶の芙蓉荘での態度とは正反対で、自分が荷を守ると言っている。恐らく今なら荷を運ぶ以外の事ならなんでもやってくれそうだ。
「よし！ 出るぞ！」

こうして、ようやく一行は目的地である景北港へ向けて進み始めた。雨季が過ぎ、野山に鮮やかな緑が映える。ここ緑恒の街はこれから暑くなっていくが、景北港は真夏でも爽やかな気候で、暑さを避けるには丁度良い。朱不尽は緑恒から景北港まで一月の行程を計画していた。

緑恒から景勝、東淵湖^{とうえんこ}で名高い東淵^{とうえん}の街まではこのまま街道沿いに進めばいい。遅くとも二十日以内に東淵に入らねばならない。これだけ長くなれば道中予期せぬ事で足止めを喰らう事も考えられる。朱不尽らは慎重になりながらも計画通りに進んでいった。

「今夜は良安寺に泊まるからな。少しばかり急ぐぞ」

魯ヒヨウ頭が振り返り、范撞、楊迅、田庭閑の三人に言う。

「良安寺だって？ 無理だろ。まだまだ先じゃねえか」

「じゃあ野宿するか？ お前が野宿するのは一向に構わんが、荷の警備が優先だ。どうしても辿り着けなければ仕方無いことだが、できる限り安全を確保する事を考えねばならん。どんなに凄腕を揃えてもこの長旅、数十日後も凄腕でいられるかどうかからんぞ。」

剣も持てぬようになるやもしれん。のう、田殿」

「ハハ……まあそうですね。気を張り詰めたままではいつか参ってしまうでしょうね」

魯ヒヨウ頭は田庭閑が荷物が持てなくなった事を皮肉ったが当人は良く判っておらず、適当に合わせている。

「馬に乗ってくれりゃあ足手まといにはならないぜ？」

「若いうちはその二本の足で馬のように走るんだよ。お前、軽功は？」

「さっぱりだ。楊迅、お前は？」

「んん、あまり自身は無いなあ」

「情けないな」

「魯さんはできるのか？」

「儂はこうして馬に乗っておる。ただ早く進む分には充分だろうが」

「そうだ、田、お前は？」

「フフン、俺は真武剣派の人間だぞ？それくらいできなくてどうする？」

「ふーん、頼もしいねえ」

「ほれ、間が空いてしまったぞ。急げ」

走るほどではないが、荷駄隊は俄かに進む速度を上げた。

十四

緑恒を離れて八日、何事も無く順調に進んでいた朱不尽の荷駄隊に、馬蹄の響きが後方から近づいてくる。魯ヒヨウ頭が振り返ると馬が一頭真っ直ぐ走って来ていた。向こうに気取られない様にしながらも馬上の人間の様子を窺う。もうすぐ追いつくが通り過ぎれば問題は無い。その者が真横に並んだ時、魯ヒヨウ頭は思わずハッと息を呑んだ。真っ直ぐ前を向いてこちらは全く視界に入っていない様だが、その横顔は白く、細長く整えられた眉に切れ長で長い睫を

湛えた目、微かに微笑んでいる様のはつきりと見て取れた。淡い浅葱の袍を纏い、小粒の耳飾が見える。

(女?)

横を駆け抜けていったその背中を見れば、長弓を背負っている。一般的な長弓よりも更に大きく、背負っているその女に扱えるのか疑問だ。腰には宝剣が光っていたし、その装いと得物の物々しさの組み合わせがどうも奇妙だ。

「あの弓、凄いな」

魯ヒョウ頭のすぐ後ろにいた楊迅が隣の范撞に話しかける。

「飾りじゃねえの？ あれ女だろ？ 芝居でもするんじゃないか」
会話を聞いていた魯ヒョウ頭が范撞に、

「ほう、ちゃんと見てるな。顔は見たか？」
と尋ねると、

「あまり見えなかったな。結構いい女みたいだったけど、あの弓背負ってる時点でお近付きになるのは慎重にしたほうがいいな」

冗談なのか本気なのか、真顔で答えた。

「あんなでかい弓見たこと無いよ。俺でも引けないかもしれない」
楊迅は感心したように女の背中を眺めている。

「真武剣派は弓は扱わないのか？」

范撞が田庭閑に話を振る。

「ああ、まあ、俺は……まあそれなりだ。だが我が派の剣は矢など物ともしないさ」

「放つほうの事を言ってるんだがな」

「ん？」

楊迅が前方を向いて目を凝らしている。

「何だ？」

「あの人、朱ヒョウ頭と知り合いみたいだ」

范撞が目を見ると、先程通り過ぎた女は朱ヒョウ頭の横に馬を並べ何やら笑顔で話している。朱不尽の方もどうやら懐かしい人に出会ったかのように破顔して話しかけていた。

「あの女も俺達と大して変わらない年恰好だな。どういふ関係だろうな。魯さんは知らないのかい？」

「知らないな。名を聞けば判るかも知れんが」

「怪しいな」

范撞はニヤつきながら様子を窺った。

「朱さん、御機嫌よう」

急に気取った様な声がかかる。朱不尽は荷駄の行列に並んで走ってきた馬には早くから気付き、注意を払っていたが、馬上の人物が突然話しかけてきたので少し慌てた。

「お久しぶりです。今日はどちらまで？ 今日終わらないお仕事かしら？」

朱不尽は隣に並んだ女の顔を見つめたまま、暫く誰なのか思い出せなかった。少ししてから「アッ」と声を上げる。

「傳殿ではないか」

「いやねえ、傳殿なんて。今まで一度もその様に呼んだこと無いのに」

女はそう言って笑いながら朱不尽を軽く睨む。

「ああ、いや、少し気が動転してしまつてな。朱蓮、懐かしいな。元氣そうだな」

傳朱蓮というのが女の名前だった。

「小父様も。何処まで行くの？」

「うん？ まあ、そなたの家よりもっと先だな」

「へえ、じゃあ……方崖かしら？」

朱不尽は少し驚いて傳朱蓮の顔を見る。

「当たり前って訳ね」

そう言つて笑つて続ける。

「じゃあ、私もヒョウ局の皆さんに同行します。きっと役に立つわ」

十五

傳朱蓮の突然の申し出に朱不尽は当惑した。

「同行？ それは困る」

「あらどうして？ 私の剣は役に立たないかしら？」

「いや、そなたには俺でも敵うまい。我等はこれだけの男所帯だ。だからこそ、この長旅もどうにかなるというものだ」

「フツッ、私はずっと一人旅よ？ 寝る所くらい自分で何とかするわ。移動の時には付いて行くって事にすればいいじゃない」

「東淵に帰るのか？ 我等はゆっくり行く訳にはいかんが」

「そっちの方が好都合だわ。私も遊びながら行く訳にはいかないの。あつ、そうだ。小父様、姐さんの事聞いてないかしら？」

「ん？ 紅葵こうきの事か？ どうかしたのか？」

「知らないのね。姐さん、東淵を出るのよ」

「何？ 何処へ行くのだ？」

「……何処だと思う？」

傳朱蓮の表情が僅かに翳った様に感じる。

「全く想像もつかんな……何処だ？」

「後宮」

それを聞いた朱不尽は言葉を失い、信じられないといった表情で傳朱蓮の顔を覗き込む。

「丁度、大暑の日に東淵を発つと聞いているの。小父様、その頃には東淵に入るでしょ？」

「ああ、まあその予定だが……」

「じゃあ、いいわね。決まり」

傳朱蓮の顔が再び輝きを取り戻し、明るい口調で朱不尽に言ったが、朱不尽の方は眉間に皺を寄せている。

「つまり、皇帝に召されたと？」

「らしいわ。まあ当然よね。皇帝って人種は国中の美女を欲しがるもんでしょ」

常に一人しか居ない者を人種というのも変だが、美女を欲しがる男は皇帝に限らずそこら中に居る。

「ねえ小父様。一番後ろの何人か、凄く若いのね」

傳朱蓮は話を変えた。

「凄くと言うほどでもなかろう。そなたよりほんの少し年下かな」

「一番大きい人、范凱幫主と関係が？」

「ハハ、そんなに似ているか？ 幫主の御子息だ。今は俺の部下だ
がな」

「へえ、じゃあご挨拶しとかなきゃ」

そう言ってるで何かいたずらを思いついた子供のように微かに笑うと馬首を翻し、朱不尽の傍を離れた。

「あ、戻って来た」

范撞ら三人は横に並んで歩いているが、端に居てずっと前の様子を見ていた楊迅があとの二人に言う。傳朱蓮は今度は最後尾の三人の横に来て再び馬首を前方へ向けた。范撞に声をかける。

「あなたが次の緑恒千河幫幫主？」

范撞は少し考えてから、少々勿体を付けてから答えた。

「知らん」

「あらそう？」

「朱さんが言ったのか？」

「いいえ。あなた、范幫主にそっくりだもの」

「で、何の用だ？」

「別に用って事も無いけど、幫主になるかも知れない人とは誼よしみを結んでおく事がこの江湖で生きるには必要でなくて？」

「誼みを結びたいなら」

范撞が言う。

「馬を降りるくらいのことはした方が良くと思うけどな。江湖の常識としてだ」

傳朱蓮は真っ直ぐ范撞の目を捉えていた。

「……いいわ」

そう言うとヒラリと馬を降りる。そのちょっとした動作がなんとも様になっている。

「東淵までお仲間に入れてもらう事になったから。宜しくね」

楊迅の横を馬を引きながら歩いている。

「で、あんたは誰だい？」

「私は傳。傳朱蓮よ」

前で聞き耳を立てていた魯ヒヨウ頭が振り返った。

「あんた、紅門こうもんの傳大人の娘御か？」

「ええ、そうよ。紅門にお出でになった事が？」

「朱ヒヨウ頭に連れて行って頂いた事がある。そうか、あそこの…」

やっと合点がいったという風に魯ヒヨウ頭は頷きながら再び前を向いた。

十六

傳朱蓮と范撞が楊迅を挟んで話すので、楊迅少し下がって歩いていた。年頃の女性がこれほど近くに居る事など今までに無く、どうすればいいのかわからない。もつとよく顔を見たいとも思うが、もし視線を投げればすぐに気付かれてしまいそうだった。田庭閑の方はしっかりこちらに顔を向けている。隙あらば話に混ざろうとも思っているのだろうか。

「あんた、戦にでも行くのか？」

「この先に戦なんて無い筈だけど、あつたら混ざってもいいかもね」
傳朱蓮は少しおどけた風に笑いながら答える。

「あの、その弓、大きいですね」

楊迅が思い切って傳朱蓮に話しかけた。

「この弓？ 私の旗印みたいなものね。目立つでしょ」

「そんなもんで目立ってどうすんだよ。災いが寄って来そうだな」
「寄って来たら串刺しにすればいいわ。私の矢なら三人位は貫けるもの」

「弓は誰かに師事されたのかな？」

ようやく田庭閑も話しかけることが出来た。

「まあね。少しだけど。范さん、この弓、引くことができるかしら？」

「フン、知らね」

傳朱蓮は背から弓を下ろすと楊迅の前に差し出す。

「あなたはどうか？」

「え、俺？ 俺はどんな弓も触った事ないけど」

「やってみて」

楊迅は恐る恐る手を伸ばして受け取る。想像していたよりも重かった。本当に弓を触った事が無かった楊迅は、取りあえず弦の中ほどに指を掛けて力を込めてみる。

「結構きついな」

そう前もって言うってから徐々に引き絞っていく。が、ある程度までは開くのだがそれ以上はいくら引いても動かない。すぐに腕が疲れてしまい、物凄い勢いで腕の方が戻されてしまった。

「やっぱり駄目だな」

照れながら傳朱蓮を見ると、何も言わずに笑みを浮かべて楊迅を見つめてくる。思わず視線を逸らしながら弓を返そうとすると、

「次、どうぞ」

と傳朱蓮は言った。

「俺に貸してみろ」

田庭閑が手を伸ばす。楊迅が手渡すと早速弓を引き絞った。

「ハハッ何だよその震えは。狙いが定まらねえぞ」

范撞が田庭閑を見て笑い出した。

「まだ……引けただけ……ましだろう……」

呼吸困難にでも陥ったかの様に声を振り絞りながら、腕は小刻み

に震えている。急に「バシッ」と音が響き、同時に田庭閑が叫んだ。
「ぐあっ！」

どうやら弦に掛けた指が外れてしまった様だ。范撞は腹を抱えて笑っている。

「おいお前ら！ 何やってるんだ！ 離れるな！」

前に行く魯ヒョウ頭とかなり間が開いてしまっている。四人とも小走りで追いつき、再び歩きながら范撞が田庭閑の手から弓を取る。田庭閑は赤くなった親指の付け根を触りながら時折息を吹きかけているが、皮膚の下細かな血管が破れてしまった様で、赤い斑が出来ている。

「こういう強い弓はゆっくり引くと駄目なんじゃねえか？ 知らねえけど」

そう言うのと范撞は勢いよく弓を引く。独特の曲線を持っていた弓の胴が綺麗に半円を描いている。まだまだ余力がありそうだ。前方を何箇所か狙う仕草をして見せる。弦をゆっくり戻してもう一度全体を眺めてから傳朱蓮に返す。

「流石ね。この弓は特別なものよ。この国では作られてないの」

「へえ、何処のなんですか？」

楊迅が尋ねる。

「詳しくは知らないけど、海の方こうから来たのよ」

「本当かよ。まあ確かに見ない形だな」

「貴重品なんだから。まあこの弓を引いて壊せる人は居ないと思うけど」

そう言いながら傳朱蓮は弓を背に戻す。

「何だよ、あんたは引いて見せてくれないのか？」

「機会があればその時見れば？」

「きつと俺より太い腕してるに違いないぜ」

范撞が楊迅に言う。だが声を潜めてはいなかった。

「なあに？ 私のこの腕が見たいの？」

そう言って傳朱蓮は袍の腕ほうの袖口を掴む。

「お嬢さんやめろ。お前等もちゃんと周りを見ろ」

黙って前を行っていた魯ヒヨウ頭が振り返って言う。

「じゃ、そういうことで、宜しくね」

傳朱蓮は引いていた馬に乗り、朱不尽のいる前方へ駆けて行った。

十七

傳朱蓮が荷駄隊に加わってから五日、特に変わった事も無く毎日黙々と進むだけだった。勿論それは仕事が順調に進んでいるということである。夜になって休む時には傳朱蓮はどこかへ消える。そこが街ならば宿にでも泊まるのだろうが、荷駄隊は時に廃墟と化した古い屋敷の址などに泊まったり、或いは全く何も無い荒れた大地の上で寝る事もある。そんな時にも傳朱蓮は居なくなるが、夜が明けて再び進みだす頃には馬に乗って姿を現した。

大抵は范撞ら三人と一緒に、喋りながら歩いている。しかし話す量は圧倒的に傳朱蓮が多かった。国中を一人で旅しているらしく、過去に見た風景から各地の人物、街の文化など、話題は尽きない。男三人は殆ど聞き役だった。范撞は傳朱蓮を「面白い奴だ」と思い、楊迅は彼女の話す自分の知らない物事に大いに興味を持って質問し、田庭閑は人から聞いた話で対抗しながら、赤みの消えない親指を気にしていた。そして時折、魯ヒヨウ頭が振り返って四人を急がせるのだ。

夜、陽が沈んでかなり経っていたが、一行はまだ休むことなく進んでいる。ここは小さな村で、この先に古い寺がある。誰も居なくなつて久しい寺だが、朱不尽は東へ向かう時には大抵そこに泊まった。朱不尽は先に数人、人を遣って寺の周辺を探らせていた。

「朱ヒヨウ頭、村の者に話しておきました。何も問題は無さそうですね」

先触れの一人が戻り、朱不尽に報告する。

「判った。」

朱不尽はそう言うの後方に下がる。

「もうすぐ着くぞ。この辺りは山が近いからな。警戒を怠るな！」
范撞が前方に目を凝らす。

「何にも見えねえけど。しかしこの辺は何もねえな。この村の連中は何を楽しみに生活してんだろうな」

辺りは真っ暗で、周りは畑らしきものが広がっている。民家が点在しているが、明かりも殆ど見えなかった。

「流石に腹が減ったよ」

楊迅が言うのと范撞がすぐさま反応する。

「言うなよ。折角忘れようとしてたのに」

「へえ、空腹を忘れる技なんてあるの？ 是非ご教示願いたいわ。
私もお腹空いた」

傅朱蓮がそう言いながら腹の辺りを擦っている。

「これから長旅する時はそんなでかくて邪魔な弓じゃなくて飯を背負う方が賢明だな」

「はいはい」

流石に疲れているのか傅朱蓮は相手にせず前を向いた。

そのまま暫く行くと古びた寺が見え、先に様子を見に来ていた者達数人が明かりを灯して待っていた。民家からも離れており、ひっそりと静まりかえっている。

「何か人じゃないものが居そうな寺だな」

范撞が言うと、

「ちよっと、変な事言わないでよ」

傅朱蓮が顔を顰める。

「何だ？ それがあんたの弱点か？」

「知らないわ。見たこと無いんだから」

「見たこと無いから怖いんだろ？……ん？ なんだ？ 今屋根に……」

「な、何よ？」

傅朱蓮は自分の襟元を握り締めて体を強張らせる。

「ハハハ！ 何もねえよ。よくそれで一人で旅が出来たもんだ」

范撞の冗談に傳朱蓮は白かった顔を赤くして睨みつける。手が腰の宝剣に伸びている。それを見て范撞は首を竦めた。

「俺はあんたの腰の剣と背中の弓の方が余程恐ろしいよ」

「塀はぼろぼろだね」

寺の崩れかけた門を入り、ようやく腰を下ろす事の出来た一行は前の街で調達しておいた食事を摂り始めた。荷駄は下ろさずに交代で寺に入って休む事になる。楊迅と范撞が辺りを見回っていた。

「緑恒の爺さんの家とあまり変わらねえな。ま、あっちの方が街に近くて便利だけだな」

「戻った時に行っておけば良かったな」

「そんな暇無かったじゃねえか。次の手、思いついたのか？」

「いや、まだだけど」

「こんな仕事してたら先に進めねえな」

「……でも、働かなきゃ、生きられないよ」

「……そうだな」

今夜は風も殆ど無く、塀の向こうに迫っている山もひっそりとしている。それほど広いわけでもないこの寺の塀に沿って一周し、范撞達も腰を下ろして用意してあった握り飯を頬張った。

十八

傳朱蓮が近くにあった桑の木に馬を繋いでいる。半ば枯れて殆ど実が見られないが、かなり高く寺の屋根を優に越えている。

「今日は何処にも行かないのか？」

范撞が声をかける。

「もうこんなに遅いのに、今から何処に行けって言うの？」

振り返った傳朱蓮は片手を腰に当てて范撞を見た。

「まだ夜中は肌寒いな。火の近くで休めよ」

「そうするわ」

寺に入って休む者も居るが、交代で入っても中は狭く、范撞らは表で焚いている火の傍で休む事にした。田庭閑はさっさと寝てしまったが范撞と楊迅、傳朱蓮は起きて話していた。

「お前達、ちゃんと休めよ。見張りの交代の時間が来れば叩き起こすからな」

声をかけた解ヒョウ頭は寺の周りを延々と回りながら辺りを見張っている。

「あんた、朱さんとはいつ知り合ったんだ？」

范撞が尋ねる。

「さあ、いつだったかしら？ 私が赤ん坊の頃じゃない？」

「へえ、朱さんその頃は東淵に居たのか」

「違うわ。朱小父様、この稼業始めてもうかなりなるでしょ。私の歳より長い筈だわ」

「魯ヒョウ頭が言ってたじゃないか。紅門って所が傳さんの家なんだよね？ お父上の知り合いとかじゃないの？」

「楊さんはすぐ話し方が丁寧ね。誰かさんも見習った方がいいわよね」

傳朱蓮は楊迅に顔を向けたままそう言う。

「ハハ、范撞の言葉は多分この先直らないよ」

「うるせえな」

「誰かさんって言っただけよ」

「紅門って、東淵一高級な店で有名なところなんだろう？ 金持ちか」

「お父様はお金を持ってるわ。私は持ってないけど。紅門飯店は別に普通の料理屋よ？ 人に恵んでもらったお金でお酒を飲みに来る物乞いだって居る位なもの」

「あんたに付いて行けば飲み放題か？」

「それは有り得ないわ。しっかりお代は頂きますからね」

「紅門にはすげえ美人が居るんだってな」

「よく知ってるじゃないの。ほんとはそれが聞きたかったんでしょ？」

「美人がいて俺も入れるんなら一度行ってみないとな」

「朱小父様が許さないでしょうね。景北港まで行くんでしょ？ 歸りに寄れば？ 美人は見れないと思うけど」

「そろそろ休まないと寝られないよ？」

楊迅が遠慮がちに口を挟む。

「そうだな」

范撞が脇に積んであった荷駄に被せる檻褸布いぼふを放る。

「ハア、仕方ないわね」

傳朱蓮は一枚を摘まみ上げて眺めた。三人はそれぞれ布を肩に掛けてその場で横になる。先に寝た田庭閑が一番良さそうな場所を確保していた。

「火だ！」

「早く消すんだ！」

突如響いた叫び声に真っ先に目を覚ましたのは田庭閑だった。

「な、ど、どうした……何だ!？」

傍に置いていた剣を掴み、辺りを見回すと、荷の一部が燃えているではないか。

「火を消せ！ おい起きろ！ 皆配置に就け！ 荷を守るんだ！」

朱不尽の号令が辺りに響き渡り、眠りに落ちてまだ間もない范撞らも飛び起きた。

「どうした!？」

「范撞！ 火だ！」

「くそっ！」

范撞と楊迅は被っていた檻褸布を手に荷車の方へ駆け出す。近づいてみれば数本の火矢が荷に刺さっている。

「范撞！ まだ狙ってるかも知れないぞ！」

「とにかく消さなきゃ荷が灰になっちゃうだろ！」

荷を覆っているのは厚手の布で、水や火に強く加工されている。幸いまだ完全に燃え移ってはいなかったので消す事は難しくは無かったが、矢はしっかりと荷の箱に刺さっており、傷ついてしまっている。

「何があつたの!？」

傳朱蓮はいつものように長弓を背負い宝剣を持って范撞の許へ駆け寄った。

「おい！こちら側に来い！敵はまだ来てない！矢だけだ！」

荷車を挟んで范撞の反対側に居た田庭閑が叫んだ。既に剣を抜いている。范撞ら三人も身を伏せながら反対側にまわった。

十九

「よいか、皆不用意に動いてはならぬ。それぞれヒョウ頭の指示に従うのだ。敵は左手の山に潜んでいる筈だ。まだ荷駄の向こうへは出るなよ」

朱不尽が表に出ている者達に冷静にそう言うと、剣を抜いて寺の壁に身を寄せながら山の暗闇を睨んでいる。荷駄は寺のすぐ前に着けてあり、全員が表には出られない。中に居る者も剣を手に表の様子を窺っていた。

「矢だ！気を付けろ！」

荷車のすぐ傍で身を屈めていた田庭閑が叫び、その下に潜り込んだ。今度は火矢ではない。かなりの本数が風を切る音を立てながら荷駄の上に降り注ぐ。

「何人だ？敵は何人居る？」

「全く見えねえな。この矢の数だ。一人二人ではないだろう」

范撞と楊迅も田庭閑と同じように荷駄の下に潜り込んだ。

「こんな所まで来てご苦労なことだな」

范撞が二人に顔を向けて言う。

「こんな所だから襲いやすいんだろう」

表に出ている者は皆物陰に隠れじっとしている。敵はまだ襲っては来ず、矢だけが上から降ってくるのだ。動きようが無かった。

傳朱蓮は朱不尽の後ろに駆け寄った。

「お嬢さん、じっとしてるんだ！」

魯ヒョウ頭が言うと、

「私は用心棒なのよ？ やっと仕事にありつけるというのに、隠れててどうするのよ」

そう言つて背の長弓を下ろす。

「朱蓮、敵はまだ見えぬ。このままじっとしていれば降りて来るしかない。そしたら存分に働いてもらうぞ」

朱不尽は傳朱蓮の顔を見て口尻を僅かに持ち上げた。それを見た傳朱蓮もニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「あいつ、やる気満々だな」

「お、俺だつてやってやるぞ。これは我が派の荷なんだからな。手出しを許すものか」

田庭閑は地面に這いつくばったままだが、とりあえず気らしきものを吐いている。

「でも、こっちは三十近く居るんだよ？ もし来るとしたら少なくとも同じくらいあの山の中に居る事になるけど……あんなここに居られるのかな？」

「ここで襲うって事は、敵はたまたま通りかかった訳じゃないだろうな。こっちの数も判つてる筈だ。ちっ、災難だ」

「でも、それを払うのが俺達の仕事だ。……矢、打ってこないな」

「魯ヒョウ頭、寺の裏を見てくれ。解ヒョウ頭は右手を頼む」

「応」

朱不尽の指示に魯と解の両ヒョウ頭は同時に答え、部下を連れてそれぞれ寺の周りを探りに向かう。矢が止まった。賊が近づいてい

るかも知れない。

「王ヒヨウ頭、弓だ。全部持たせるんだ。解ヒヨウ頭、見えるか？」

「こっちは畑が続くだけで隠れる所ありません。来てません」

「ならば裏に回ってくれ。見えたら数を」

「解りました」

「弓、左手の塀と正面」

朱不尽が言うのと即座に王ヒヨウ頭が射手を二手に分けて配置する。準備してきた弓は全て出して人員の半数以上が弓を手にすることになった。剣を持つものは殆ど寺の中から出られない。荷車の下から楊迅は朱不尽とヒヨウ頭達の動きをじっと見ていた。敵が近くに居る事を忘れたかの様に、見つめていた。

「アッ、飛雪^{ひせつ}を、馬をこっちに連れて来ないと！」

傳朱蓮が不意に両手に剣と弓を持ったまま、桑の木に繋いだ馬の許へ駆け出した。

「朱蓮、気を付けろ！」

「あいつ！」

范撞が荷駄の下から勢いよく転がり出ると、腰の剣を抜いて傳朱蓮の方へ駆ける。咄嗟の事で何が何だか判らなかったが、楊迅と田庭閑の二人も范撞に続いて飛び出した。

「戻れ！」

朱不尽が声を発すると同時に、再び上空から数多くの唸る様な音が傳朱蓮に襲い掛かった。

「ハッ！」

傳朱蓮は地面を蹴って物凄い速さで馬の傍まで跳躍すると、右手の宝剣で馬を繋いでいる縄を断ち切り、流れる様な身のこなしで馬上に飛び上がる。空を見上げるとすぐ上まで黒い矢の束が迫っている。しかし、見上げたその顔は恐れている者のそれではなかった。

馬で駆け出しながら傳朱蓮は右手の宝剣を振るって襲い掛かる矢を弾いてゆく。

「横だ！」

突然范撞が叫んで跳躍し、真っ直ぐ傳朱蓮に向かい放たれた矢を切り落とす。今度は上からではない。左手の塀の上から放たれたものだ。人影は見えていない。

「戻るんだ！」

朱不尽が再び叫ぶ。傳朱蓮が馬で荷駄まで戻り、続いて范撞が駆け出そうとしたその時、その背後へ黒い影が幾つも塀を飛び越えてきた。

「范撞後ろだ！」

「剣を取れ！」

楊迅と朱不尽が同時に叫ぶ。次々と黒い影が飛び越えて来る。守りの弓は塀の上を狙って待機していたが、傳朱蓮達が前で立ち回っている隙に賊の侵入を許してしまう形となった。賊は全身黒く、覆面もしている。十数人ばかりがあっという間に塀を越えた。

「かれ！」

朱不尽の号令に寺の中に居たヒョウ局の者達も剣を手に一斉に飛び出す。それほど広い訳ではない寺の境内は一気に混戦状態となった。賊の方もまだ侵入してくる。ヒョウ局の弓は王ヒョウ頭の指示でまだ敵の見えない正面、右手を警戒している。一番前に居た范撞は何とか荷駄の近くまで戻り、大きく息を吐いた。

「馬、繋いどいて！」

傳朱蓮が自分の馬の手綱を范撞に押し付けると、再び宝剣を手敵味方が入り乱れる中に飛び込んでいった。

「大丈夫かよ……」

范撞は手早く近くの荷車にその手綱を括ると辺りを見回した。ふと前を見ると荷駄の影に田庭閑が居り、目が合った。

「ひ、一息ついたら、行くぞ」

「……ゆっくり来い」

范撞も剣を握り締めて再び飛び出していった。

一気に始まったこの混戦状態が終わらせるには、賊が皆死ぬか撤退するか、こちらが全滅か、その三つしかない。何百、何千という大規模な戦闘と違って、比較的早くにそのどれかになる筈だ。しかし、予想とは違い、思わぬ長期戦となった。賊の動きは素早く手強い。その剣を振るう手筋もどこか似通っており、同じ剣を習得している様に見える。しかし、それがどの筋なのかは判らなかった。ヒョウ局の用心棒達も剣の腕に関しては決して引けを取ってはいない。范撞、楊迅らはまだ駆け出しだが他の殆どの者は長くこの稼業で命を張ってきた。出身は色々で、得意とする武芸も様々であったが、朱不尽の選りすぐりであった。だからこそ今の名声がある。

「さあ、来なさい！」

傳朱蓮の宝剣が中でも一際輝いている。賊は黒尽くめ、味方も皆地味な色の服装だが、派手とまではいかないが一人傳朱蓮のみが薄い緑の残像を作り出していた。范撞、楊迅も剣を振るい激しく応戦するが、敵も手強く疲れが見え始める。田庭閑も近くで戦っている。最初は慌てていたが段々と落ち着いたようで、意外にも颯々と剣を繰り出している。技量は兎も角、紛れも無く真武剣である。しかし皆、賊を仕留める事も引かせる事も出来ていなかった。

「かれ！」

魯ヒョウ頭の声がどこからか聞こえた。どうやら賊は寺は囲まずに一箇所に集中している様だ。裏手に回っていた魯ヒョウ頭らが戻ってきて参戦する。数ではヒョウ局が僅かに優勢となった。魯ヒョウ頭以下、新手が一気に前へ出ると同時に少しずつ入れ替わる。

(三十はおらんな二十程か……奴等、何故退かぬ……?) 玉碎覚悟とでも言うのか?)

荷駄の方まで下がって息をついた朱不尽は粘る賊を見ながら首を捻った。

「余り散らばってはならん! 荷駄の周りを固めろ! 王ヒョウ頭、

剣を！」

魯ヒヨウ頭達と入れ替わって下がってきた者達に朱不尽が指示をする。数人だけ残っていた弓の射手達も剣を取った。

「ふう、あんた大丈夫か？」

「勿論よ。それにしても、やけに粘るわね。このままではどっちも力尽きてしまうわ。普通もう引き上げるでしょ？」

「確かに変だな。荷が目的ではない……？」

「さあ？」

范撞と傅朱蓮が荷駄の傍で呼吸を整えていた。

「怪我人は居るか？」

朱不尽が辺りを見回す。

「何人か負傷しておりますが、大事には至っておりません」

近くに居た者が報告する。

（退かぬということは、まだまだ山に潜んでいるのか？これ以上増えれば不味い……）

「山の方を見ちゃ駄目よ。范さん、山に誰か居る」

傅朱蓮が真っ直ぐ前を向いたまま言う。

「誰が？」

范撞が傅朱蓮に顔を寄せた。

「判らないけど、動かないわ」

そう言うのと長弓を取って、矢を番える。

「どうするんだ？」

答えずに傅朱蓮は少し長く息を吐いた。

第二章 二

「流浪一天 第二章 二」

二十一

スツと短く息を吸ったかと思うと突如、傳朱蓮^{ふしゆれん}は立ち上がり弓を引き絞った。范撞^{はんどう}がやって見せたのと全く同じ、目一杯弓が撓っている。しかし狙いが定まっているのかは判らない。すぐさま矢が放たれた。何の羽だろうか、黒い矢羽が一際大きく唸り、山の暗闇目掛けて襲い掛かる。近くにいた数人が音に驚いて振り返った。

「……見えねえけど、どうなった？」

「……動いたわ」

矢の飛んだ方へ目を凝らしたが、やはり何も見えない。

「シッ！」

傳朱蓮が今度は更に強く短く息を吸い、宝剣を振り上げた。

「おわっ！ 何だ！」

「カンッ」

何かが宝剣で弾かれた。よく見ると先程傳朱蓮が放った黒い羽の矢が近くに落ちた。

「どうした!？」

朱不尽^{しゆふじん}が駆け寄る。

「いや、判んねえ、こいつが撃った矢が真っ直ぐ帰って来やがった」
傳朱蓮は真っ直ぐ山の暗闇を睨んでいた。するとその暗闇で甲高い笛の音が響く。

「何だ？」

朱不尽らは体を強張らせて剣を構えた。見れば黒尽くめの賊が次々に下がり、堀の上を飛んで戻って行く。笛は退却の合図のようだ。
(やっと退いたか……)

あつという間に黒尽くめの人間は寺の境内から姿を消した。残ったのは剣を手に半ば呆氣に取られているヒヨウ局の人間だけだ。何も落ちていない。あれだけの切り合いをしながら誰も倒れていない。そのおかしい状況に皆戸惑っていた。賊はおそらく再び山へ入って行ったに違いないが、その気配が感じられない。

「皆、荷の周りに集まるのだ！」

全員剣を抜いたままで荷車の前まで下がる。中には腕や足を押さえている者も居る。

「すぐに怪我人の手当てだ。怪我をした者は寺に入れ。無事なものもは続けて警戒しろ」

「朱ヒヨウ頭、全く不可解ですね。荷が目的でしょうか？」

魯ヒヨウ頭が賊の去った方を見ながら言う。他のヒヨウ頭も朱不尽の周りに集まっていた。

「わからん。向こうは誰も荷に近づこうとはしなかったな。」

「数日かけて我等を疲弊させるとか？」

魯ヒヨウ頭が言うと、

「こんな事を続ければ向こうだって疲れるだろうが」
解ヒヨウ頭がすぐに否定する。

「倍は居て交互に来るかも知れんぞ」

「倍居るなら何故さつき皆来なかった？入れた筈だ」

「様子見かもしれん」

朱不尽は考え込んだ。死人は一人も出ていない。かなり激しく切り結んでいたにも拘らずだ。「良く防いだ」とも言えるが、どうも敵の方が余裕を持っていた様に思える。こちらの用心棒達もより優れた者を集めてある。しかしながら、最強などとはとても言えない。もしどこかの武林の門派、例えば真武剣派の様な組織が襲ってきたらどうなるか。先程の賊は真武剣派では無いし、盗賊の真似をする事も考えられないが、もしその様な事があれば多分、太刀打ち出来ない。単なる物取りの集団ならば、あれほどまともに遣りあたりはしない。少しでも手間が掛かりそうなら見合わせるのが普通だ。

しかもこちらの荷が何なのか判っていない筈で、金銀財宝の山を引っ張っているなら多少犠牲を払ってでも奪おうとするだろうが、実際多少高価な品とはいえ、大量にあるという程でもない。三十人近い人間を使って狙う物とは思えない。

「小父様？」

傳朱蓮が顔を覗き込んでいる。

「ああ、朱蓮、怪我は……無いな」

「ええ。皆も無事よ」

「田殿はどこかな？」

朱不尽は田庭閑でんていかんを探して周りを見回した。

「はい。ここに居ます」

剣を腰に戻して衣服を整えていた田庭閑は朱不尽の許へ来た。

「田殿、我等は長くこの国の東を中心に渡り歩いているが、先程の賊がどの筋の者か見当も付かぬ。田殿は何か気付かなかったかな？」

「いや……わかりませんね。でも、皆同じ剣術を使っていました。見たこと無いものでしたけど、中々のものでしたね。流石に私も少し焦りました」

朱不尽は黙って田庭閑の言葉に頷く。

二十二

改めて休む事も出来ずに空が白み始め、ヒョウ局の用心棒達は皆いつもの配置に付き、出発を待っていた。殆ど寝る事の出来なかった者も多いが、何とか日中に次の街へ入っておきたい。不可解な昨夜の賊の襲撃を考えると予定を繰り上げてでも先へ進み、出来れば街以外で留まることは避けたかった。

「少しばかり強行軍となるが、次は充分休めるように皆、宜しく頼む」

「応！」

確かに疲れてはいるが、ここで足を緩めてはこの先さらに危険が迫る事になる。それに早く安全な場所で休みたい。皆気合を入れて寺を後にした。

「あー馬乗りてえなあ」

范撞は前を行く魯ヒョウ頭に聞こえるように言う。

「何を甘えた事言ってるんだ。腰の剣でも股に挟んでおけ」

「笑う元気はねえよ」

「ちゃんと周りを見ておけよ。おそらく様子を探りに来るぞ」

「黒尽くめならすぐ判るのにな」

皆辺りを見回したが、まだ人も少なく怪しい者は見当たらなかった。

それから数日、何事も起こらなかった。日が沈んでからも進む事が何度かあったが、安全な街中に入るまでは足を止めることは無い。そして不審な事は何も起こらなかった。

「何だか……余計に疲れるね。そりゃあ何かあるほうが大変だけど」
珍しく楊迅ようじんが溜息混じりに言う。

「結局何だったか判らねえもんな」

「このまま景北港けいほくこうに行ければそれでいいよ。もう面倒は御免だ」

田庭閑が言う。

「もう一息で東淵とうえんに入れるな。東淵はもう完全に北辰教ほくしんの縄張りみたいなもんだし、流石にあんな集団で襲ってくるような奴らは居ないだろうよ」

「北辰の奴等が襲ってきたんじゃないだろうな？　もしそうならこの先も……」

田庭閑はそう言って范撞へ不安そうな顔を向ける。

「北辰教か……もし北辰教が俺等を襲うならあんな半端はしねえだろうな、多分。とっくに荷は全部持って行かれてるさ。そして俺等はどう、生きてはいない……寺すら消えてるかもな。ハハ」

「フン、真武剣派ならば奴等を返り討ちにできる」

「おい、一応俺達千河幫は北辰教と仲良しなんだぜ？　ちよつとは考えて物を言えよ」

魯ヒヨウ頭が振り返る。

「田殿、我等は緑恒千河幫りよくこうせんがぼうの者であつて北辰教徒ではない。しかしこの先誰が聞いておるかわからん。真武剣派として、そなたの自負は結構な事だが、無事に武慶ぶけいに戻りたければ、良く考えてもらいたいな。行く先には北辰教徒数万、真武剣派はそなた一人だ。襲ってきたのは北辰教ではない。東淵に入れば危険はぐつと減ろう。兎に角、余計な災いを招かんようにな」

「……」

田庭閑は黙った。たった一人で敵陣に乗り込むような不安が今更ながら込み上げてくる。

「ま、お前を売るようなまねはしねえよ。それは保証する。さあさあ行こうぜ」

范撞が田庭閑の肩に手を置く。

（お前が保証して何になるんだよ……。朱不尽にちゃんとやっておけよ……）

「朱ヒヨウ頭。この先は如何なさいますか？　このまま東淵まで？」

「うむ、仕方が無いな。まだ陽は高いが今日はここで留まる。明日早くに出て一気に東淵を目指すぞ」

丁度街へ入った所だったがこの先、東淵の街までは何も無い。一先ず休息を入れて、東淵までを止まらずに行く事になった。少なくとも丸二日は進み続ける事になる。

「こりゃ本当に東淵に着いたら一杯出して貰いてえな。紅門こうもんとやらでな」

范撞は馬に乗っている傳朱蓮をチラツと見上げた。襲われた日以降は傳朱蓮はずっと馬に乗っている。しかし范撞はそれには何も言わなかった。

「そうね、まあお父様に頼んでみてもいいわ」

「おっ、いいねえ」

「俺も久しぶりに酒飲んでぐっすり眠りたいな」
楊迅も范撞の言葉に賛同した。

二十三

緑恒の范凱はんがいの屋敷に早馬が駆け込んで来た。緑恒の街はすでに暑く、馬も人も汗だくになっている。

「幫主ぼうしゅ！ 失礼致します！」

「どうした？ えらい慌てようだが……」

「あ、いや、大丈夫です、はい」

「ん？ 何を言っているんだ。伝える事があるのか無いのか、はっきりしてくれ」

「あ、ありますあります。朱不尽殿の一行が何者かに襲撃されて……」

「何だと！？ 今何処だ！？ 大丈夫とはなんだ！」

范凱は勢い良く立ち上がり、机を押し出すかのように前に身を乗り出した。

「今頃は東淵に入られたと思います。襲われたのは東淵まで五百里か……そこらで」

「朱さんは、荷は無事だったのか！？」

「は、はい。賊は引揚げて、それ、それで東淵に」

「……つまり撃退したということだな？」

「そうですそうです」

范凱は深く溜息を吐くと、後ろに倒れた椅子を戻してゆっくりと腰を下ろした。

「その賊については何か判ったのか？」

「いえ、全く判っておりません。奴等は襲ってきて、そして退いて行きました」

「……もう少し詳しく説明してもらえると有難いねえ」

「ヒョウ局の者と同じくらいの数が来たのですが、襲って来て戦って、何も盗らないまま退きました。あー、朱不尽殿は、もう東淵には無事に行けるから、後になって襲われたと伝われば幫主にご心配をおかけしてはならないので報告しろということ……」

「……そういった趣旨の事を朱さんが言った、そういうことだな？」

「そうですそうです」

「被害は？」

「何ありません」

「何？」

「あー少し怪我をした者は居ましたが、大した怪我ではありません。皆無事です」

「間違い無いな？」

「はい」

「……判った」

「あーでは、これで」

「ご苦労だったな。ゆっくり休んでくれ」

男は笑顔になって出て行った。

再び范凱は溜息を付いて机に肘を突き、考えていた。

「……ただの物盗りであろうか？」

静かに落ち着いた声が范凱に問う。部屋には范凱の他に老人がじっと座って男の報告を聞いていた。

「おそらく。しかし、東淵に近い場所でそんな集団が……？ 朱さ

んは三十名程率いて出たのですが」

「敵味方六十名が戦って無事か……。そのような事があるかな？」

「この国の遙か西方ならいざ知らず、そのような規模の集団で朱さんのヒョウ局を襲う様な盗賊など……」

数人のこそ泥の様な者ならいざ知らず、東北に於いて朱不尽のヒョウ局を襲う集団が殆ど居ないのは、その腕や人望も然る事ながら、最大の要因は、広く太乙たいいつぱくしんきやう北辰教が盗賊のような隠れた組織までも強

力に支配しているからである。しかし、「盗賊行為は許さない」というのではない。「北辰を差し置いてはならぬ」という事だ。つまり、盗賊行為を行うならば太乙北辰教の公認を得ねばならないのだ。朱不尽は緑恒千河幫の要の一人である。幫主范凱は太乙北辰教の今は亡き前教主と若い頃から親しく、現教主であるその息子は赤子の頃から知っている。幹部達との関係も変わらず良好である。千河幫に仇を成す者は北辰の敵、それは今でも同じ筈だった。

「真武剣はどうか？」

老人が再び尋ねる。

「何か企てがあるとすれば」

范凱は体ごと老人のほうを向いた。

「荷を届けさせる事の方でしような。朱さんの荷を襲いながら中途半端に退いたのであれば、少なくとも我等を力で潰そうという事ではない。荷が届く事で何かを狙う……もし何かあるのなら、という仮定の話ですが。どちらにしても、真武剣派とも北辰教とも関わりの無い者達の仕業と見るのが今の所妥当ですな」

「何か手を？」

「いえ、今は特に何も。予め私もある程度の指示を出してあります。ま、朱さんなら心配は要りません」

老人は窓から差し込む暑い日差しの当たった自分の細い手の甲を擦りながら、黙って見つめている。

二十四

「御息が怪我をされておらねば良いが……」

老人の言葉に范凱は老人の眼を真っ直ぐ見据える。

「あれは今、ヒョウ局の用心棒。自ら身を挺する事が出来ねば、フン、無事で居ようともあれに価値などありません」

老人はじつと范凱を見つめたまま口元を綻ばせ、そして少し上へ

視線を投げた。

「前に御子息に言われましてなあ。働いているようには見えんのに
儂は……生き延びている」

「何と！ 陸殿」

范凱は立ち上がろうとするのを老人は手を振って制止すると言葉を続けた。

「確かに儂は何もしておらん。ここは居心地が良いしなあ。しかし……本当にこれで良いのかとこの歳になって考えてしまった」

「陸殿、何処かへ……参られるのか？」

「いや、まだ何も考えてはおらんのだが。ハハ、情けないことだ……」

「楊迅は陸殿を先生と呼んでおります。剣の手解きを？」

「手解きと言う程の事はしておらん。ただ、あの子は熱心でな。良
い子だ」

范凱は立ち上がった。

「陸殿。私からもお願い致す。どうか楊迅を導いてやって下さらん
か。ヒヨウ局の仕事に就いてからというもの、明らかに眼の輝きが
変わってきております。緑恒へ戻れば真っ先に陸殿の許へ参るそう
ですな。ヒヨウ局の仕事は危険と隣り合わせだが、あれが江湖こうくの広
さを身で感じるにはうってつけ。暫くは続けさせたいが、この先楊
迅が剣を志すならば、陸殿の弟子に……いや、正式な師弟では無く
とも良いのです。どうかこの緑恒に留まって下さらんか」

そこまで言って深々と頭を下げた。

「あの子が通ってくれる事は儂も嬉しい。御子息と話すのも面白い。
先の事は分らんが、幫主のお許しがあるのならばここに留まりた
いと思う」

「陸殿は我が幫の大事な客人だ。何も遠慮は要りませんぞ」

「儂はもう何のしがらみも無い。この老い耄れにも何か仕事があれ
ば使ってもらえると有難い」

「それは心強い。何かあれば是非お願い致す」

老人は立ち上がった。

「とりあえずは朱不尽殿が無事に戻れることを祈るばかりだな……では失礼致す。」

老人と范凱は視線を合わせて、小さく頷き合って別れた。

朱不尽達は東淵の街のすぐ手前まで来ていた。小高い丘に挟まれた街道を進むと一気に視界が開け、穏やかな波が打ち寄せる浜が見える。

「おい、これは海か？」

田庭閑が遙か遠くの水平線を見つめながら言う。田庭閑は海を見たことが無かった。

「いや、違うな。これは東淵湖だ。遙か向こうは海にかなり近いらしいがな。底のどこかが海に繋がってるなんて話も聞くな」

范撞も遠くを見つめている。手前に見えるのは漁の為の船が何艘も並べてあり、傍には古い小屋のような物が点在している。鄙びた漁村といった感じだ。

「……あれが見ておかねばならない物か？」

「んなわけねえだろ。月だ、月。確かに、こんな所で月なんて見たら月明かりの中を水に入っってあの世に行きたくなるかもな」

「ちよつと！」

傳朱蓮が口を挟む。

「馬鹿な事言わないで。ここも東淵湖だけど有名なのはもっと先よ。北のあの山が湖のすぐ傍まで迫っていて崖がずーっと東まで続いているのよ。月夜に船を出すのも良いし、崖に上がっても良いし、岸にある酒楼から月を愛でるのもいいわね。凄く良いお店があるのよ」

「そりゃいいな。荷を届けてからここで一月も待てば東淵の名月が見れそうだな」

「無駄な妄想ね。朱小父様にお尻叩かれなら縁恒に着く頃が一番綺麗じゃないかしら。それにお酒が飲みたいだけでしょ？ 見たいのは美人ではなくて？」

「見られる物は見ておかないとな」

「お前等、本当に元気だな。普通じゃない」

呆れる様にそう言う田庭閑は、時折湖を見る以外はずっと足元に視線を落として重そうな足を運んでいた。

「こいつ、ずっと馬乗ってんだぜ？」

「こいつ？ こいつですって？ 誰に言ってるのかしら」

傳朱蓮は范撞を軽く睨んで前方へ馬で駆けて行った。

「おい、楊迅どうした？　ずっと黙ってるな」

「俺も、田さんと同意見さ」

「そうだろうそうだろう」

田庭閑は視線を上げる事無く、大袈裟に頷いて見せた。

二十五

「小父様、先に行ってお父様に知らせるから、必ず寄って下さいね」

「朱蓮、皆を休ませねばならんし、荷の警備の事もある。またいつかゆっくり訪ねることも出来るだろう。そうだな、帰りには少し寄れるな」

「この東淵の街で一番安全に休める場所は何処かしら？　ヒョウ局の皆さんがゆっくり休めてこれだけの荷をちゃんと守れる屋敷は一箇所しか無いじゃないの。それに東淵まで来て顔を見せないなんてお父様は何て言うかしら？　小父様、絶対に来て下さいね。それに……姐さんが発つまでに一目、小父様の顔を見せてあげて欲しいの」

朱不尽は考え込んだ。確かに傳朱蓮の父親の屋敷で世話になればこれほど有難い事は無かった。東淵一の富豪の家だ。警備も半端でない。

「紅葵ベニカキが発つのはもうすぐだろう？　忙しくしているのではないか？」

「どうせお父様は何もしないわ。きっと叔母様が仕切ってるに違いないもの。それにどんなに忙しくなっても家を空にするわけ無いし」
「分かった。取り敢えず挨拶に寄らせてもらおう」

「じゃあ、小父様、後で」

傳朱蓮は馬の腹を蹴ると、一足先に街へ向かう。朱不尽は後ろの魯ヒョウ頭の所に来た。

「まず傳千尽殿ふせんじんの所へ寄る。向こうの都合が良ければ今夜世話になるうと思う」

「おお、それなら今夜は安心ですな」

「まだ分かんがな」

再び朱不尽は隊の先頭へ戻って行った。

「魯さん、その傳千尽ってのが大金持ちなのかい？」

聞いていた范撞が声をかける。

「そうだ。失礼の無いように大人しくしておれよ」

「朱不尽に傳千尽か……ハハ」

「全くお前は……少し口を慎め」

東淵湖に沿って伸びる街道の先には、もう街が見えてきていた。

ここ東淵から北は避暑地としても知られており、この時期は国中から人が集まって来る。歓楽街は逆に人の熱気の方が強くなる事もあるが、東淵湖の水上から流れ込む柔らかい空気がその熱気を冷ましてくれる。街へ入ると東淵湖を右手に見ながら真っ直ぐ伸びる大通りが何処までも続いているように見える。この大通りを行き交う者の殆どが、他所から来た者達だ。東淵の住人の住まう場所は、大通りの左手、湖と反対側にある山の麓の谷に食い込む様に出来ている静かな集落であり、どこか享樂的な風情を見せる大通り周辺とは対照的だ。

「仕事じゃなけりゃ、こんな楽しい場所は他に無いんだがなあ」

范撞は通りに面して立ち並ぶ様々な店の中を覗き込みながら歩いている。

「この人たちはこんな昼間から遊んで、余程お金があるのかな」
楊迅も物珍しそうに辺りを見ていたが、范撞程あからさまに覗いたりはしなかった。

「ここはな、金があつて遊びたい奴が来る所さ。ま、夏の間だけだろう。この冬はかなり厳しいらしいぜ」

「フン、見ろ。もう酒で潰れてる奴とか居るじゃないか。こんな所に居たら墮落するだけだ」

田庭閑は侮蔑の眼差しで店の軒先を見ている。男が酔いつぶれて地面に寝転がり、その男に声をかけている店の者らしき女は着物も着崩れて肩も露わである。一体何の店なのか。

「由緒正しい真武剣派の高弟様には刺激が強かろうよ」

范撞の言葉に田庭閑は耳を貸さなかった。

荷駄隊は大通りから西に入り、山の方へ進む。大通りの喧騒が嘘の様に辺りは静かで、全く別な街に來た様に思えた。小道の真正面には大きな門があり、左右に純白の真新しそうな塀がかなり長く伸びている。

「……あれが個人の屋敷だつて言うのか？でかいにも程があるぜ」

「あんな屋敷、武慶には数え切れんほどあるぞ」

「ここにあるから凄えんじゃねえか」

まるで巨大な門の方が荷駄隊に迫ってくるようだ。

二十六

一行が門まで二十間程までに近づくと、その大きな黒い門扉がゆっくりと開き始めた。二人の男がそれぞれ全身を使って押し開いている。徐々に広がる門の先には真っ赤な扉が幾つも並ぶ朱の建物が見えており、門の黒との取り合わせが珍しく思われる。正面の道を挟むように十数人の男達が整列していた。中央には恰幅の良い中年の男。その後ろには薄い緑の深衣を纏った若い女性が立っていた。

整列していた男達の中から一人が歩み出ると、荷駄隊の前に進んだ。先頭にいた朱不尽は馬を降りて拱手する。

「朱不尽様。ようこそお越し下さいました。旦那様は朱蓮お嬢様からの知らせをお聞きになってから、御一行の御到着はまだかまだかと……」

「お前は何をごちゃごちゃと言っておるのだ」

奥に居た中年の男が門から出てきて朱不尽に挨拶をしている男に言う。傳千尽、この屋敷の主人である。男は脇に追いやられてしまった。

「不尽！ お前、この東淵を素通りするつもりだったらしいな！

最早儂如きは齒牙にも掛けんということか？」

「まさか。俺は今任務の最中だ。帰りにでも寄ろうと思っていたのだ」

「ならば尚更であろうが。我等の外に頼りになる者がこの一帯に在るか！？ 賊に襲われたそうだな？」

「お父様、こんな所で話してないで中に入りましょう。皆さんは一睡もしていないのよ？」

傳千尽と共に居た若い女性は傳朱蓮である。剣も弓も携えておらず、裳の裾が地に付いて今までと全く違う、落ち着いて淑やかな装いである。

「そうだな。さあ入ってくれ。荷の心配は無用だ。我等が責任を持つて預かる。超謙！」

「ハッ」

傳千尽の脇に控えていた男が答えた。

「荷を奥へ入れるんだ」

「ハッ」

超謙と呼ばれた男は門の中に整列していた者たちに手を上げて合図をすると、一斉に飛び出してきて荷を取り囲んだ。ヒョウ局の用心棒達は思わずたじろいだだが、

「荷をお預かりいたします」

と男達に言われて、皆、朱不尽の方を窺う。

「中に入れる。進め！」

朱不尽は号令し、屋敷の男達に囲まれながらゆっくりと門の中へ進んでいった。

傳千尽は一行のもてなしに過剰なまでの気配りを見せた。彼にとってはそれが普通であつたのかも知れない。全ては多く居る家人に命じれば良い事だ。ヒョウ局の人間全てに部屋が充てがわれたが、寝具は全て新しい物だつた。娘から一行が来る事を聞いてからの僅かの間にここまで用意出来る訳は無く、常にこの状態が保たれているのだらう。すぐに湯を使う事が出来、ヒョウ局の用心棒達の多くはまだ昼間にも拘らずその疲れた体を寝台に投げ出した。

朱不尽とヒョウ頭達は荷の警備について、屋敷の用心棒達と話していた。傳千尽の広大な屋敷には数十人の用心棒が雇われている。全員が傳千尽自ら人を見て選ばれた者たちだ。東淵一の富豪であることは周知であり、その資産は相当な物で盗賊の類は食指を動かされるが、事を起こす者はまず居ない。相当な数と手段を用意しなければ、生きて帰るどころか獲物を目にするすら叶わないのだ。この屋敷の中に居れば、荒れた原野で夜中に荷の警備をする事に比べると、遥かに安全、放って置いても問題ない位である。朱不尽はこの用心棒達の有能さは良く知っていたが、完全に任せきりするなどという無責任な事は出来ない。念入りに警備の内容を打ち合わせた。

皆、明るいうちから寝たせいとか、目覚めたのは深夜だつた。しかしこのような時間に出歩く訳にもいかず、部屋に居てぼうつとしていなければならなかつた。

「しかしよく寝るなこいつは」

范撞は田庭閑の方を見て言った。やはりここでも田庭閑は寝台に沈んでいる。しかしいつも大人しく、鼾などはまったく掻かなかつた。

「明けたらすぐ出るのかな？」

楊迅は起きて用意してあった茶を淹れるが、湯はすっかり冷めて
いる。

「そういえば朱さん何も言わなかったな。いつもなら出立の時間と
か準備とかうるさいのにな。多分明日はここに居るんじゃないか？」

もう今日だな」

「もうここから景北港けいほくこうは近いんだろ？」

「そうだな。七日、八日も掛からんだろうな。賊が襲ってきてくれ
たお陰でここまで予定より遥かに早く来れたしな」

「楽に来れた訳じゃないよ。あとはのんびり行きたいな。今日街を
見れたらいいなあ」

「無理っぽいな。朱さんが許可すると思えねえけど」

「あ、そうだ。傳さん……朱蓮さん、すごく綺麗だったね。あんな
格好もするんだな」

「あー、そうだったか？ 見てなかった」

「ふーん？」

「流石に朝まで起きてるのは不味いな。昼間に眠くなっちまう。な
んとか頑張って寝るとしよう」

「そうだね」

范撞は再び横になり、楊迅は淹れた茶を飲み干してから寝台に戻
った。

二十七

朝になると、全員広間に集められた。百人分の席を用意してもま
だ余裕のありそうな部屋で、高価な調度品が其処彼処に並んでいる
が、どうやら何も統一性などは考えられていないらしく、色調もば
らばら、落ち着く為の場所ではなさそうだ。まるで宴席のような食
事が載った席が並び、勿論酒もある。まだ陽が昇って大した時間も

経っておらず、寝惚け眼を擦っている者も居た。普段なら朝からこんな食べる事など到底出来ないが、今は皆、極度の空腹を感じていた。

「皆、ゆつくりと休まれたかな？次は腹ごしらえだ。緑恒からここまでまともな食事など無かったのではないかな？存分に食べてくれ。足りねばいくらでも用意させる。こんな朝っぱらからこれほどの物を用意できるのは此処だけだ。さあさあ、皆座ってくれ。お主達の頭は今、荷を見に行っておるが、もう来るだろう。先に食事を取らせるようにと聞いておる。さあさあ、酒を注ごう」

部屋に入ってきた傳千尽は一気に喋ると、近くにあった酒壺を手にとってヒョウ局の者達に近づいてた。まだ誰も席には着いていなかったが、この屋敷の主が酒を注ぐと言うのである。拒否して立ち尽くして居る訳にはいかなかった。周りの者と顔を見合わせながら順に近くの席に座り始めた。数名の侍女達が酒壺を抱えて部屋に入ってきた。そして傳千尽と同じように一斉に酒を注ぎ始める。

「料理はなかなか良い物みたいだな。いい香りだ。」

目の前の食事を見渡していた田庭閑は隣に座った楊迅に小声で話しかけた。

「腹が減ってるから何でも美味しそうに見えるよ」

「そこが重要だ」

不意に前から声が聞こえて二人して驚いて顔を上げると、傳千尽が酒壺を携えたまま立っていた。

「うちで出す料理は東淵で一番だ。間違はなく最高だ。お前達は腹が減っておって何でもいいと言うが、不味いもので腹を満たしても命拾いしただけで、如何って事は無い。腹を空かせたままでは、いずれ死ぬ。言わば窮地だな。大抵の者は泥水でも啜る事となろう。しかしお前達は最高の料理で窮地から脱する事が出来る訳だ。運が良いとかそういう事ではない。これは、儂と朱不尽の縁、儂とお前達の縁が最高の物であるからだ。解るか？江湖では人の繋がりが一番重要だ。今まで飯を食う苦勞をしたことがあるかな？極上の縁

を多く作る事だ。ただの腹ごしらえでさえも極上の物となる。さあ、酒を注ごう。これも極上の酒だ」

驚いた顔のまま聞いていた田庭閑は慌てて酒杯を手にとって前に差し出す。横の楊迅も傳千尽がまだ隣にいるのに酒杯を浮かせた。傳千尽は皆に声を掛けながら次々と酒を注いでいった。

「解った様な解らん様な話だが、あの旦那の言いたい事は解った気がするな」

楊迅の次に座った范撞が言った。

「……そうだね」

「何だ？」

「縁か……。まだ何も無いかな」

「ハハッ、これからだ」

范撞はそう言って正面を見つめると、ニヤリと笑った。

皆、手元の酒杯に酒がなみなみと注がれたが、誰も口をつけていなかった。朱不尽はまだ現れない。空腹のまま目の前の豪華な食事を眺めている。

「さあさあ、皆始めてくれ。朱不尽はもう来るぞ。皆ここに居る間は自由に振舞えば良い。遠慮はいらん」

朱不尽と魯ヒヨウ頭は姿が見えなかったが、他は皆揃っている。解ヒヨウ頭が杯を持って立ち上がった。

「お心使いに感謝致します。頂きまする」

解ヒヨウ頭が頭を下げると傳千尽は笑顔で頷いた。解ヒヨウ頭が皆の方を見回してから座ると、ようやく皆箸を取って豪華な食事に取り掛かった。

「朱蓮さん、居ないね。まだ寝てるのかな？」

「あいつも俺達とずっと一緒に居たんだから、一睡もしてないしな。久しぶりの我が家なんだろう？寝てるだろうよ」

范撞は少し小振りの骨付きの鶏肉を次から次へと手掴みで囓り付いて、時折骨をしゃぶっている。

「あ、ちよっと。この肉旨いな。まだあるかい？ あったらもう少

し持ってきておいてくれ」

前を通った侍女に声を掛ける。

「見事なまでの厚かましきだな。敬服するよ」

田庭閑は呆れて言った。

「より厚かましい者が一番腹を膨らませることが出来る。ここはそういう所だろ？」

「でも酒は控えたほうがいいよ。もし朱ヒョウ頭が今日発つなんて言ったら大変だよ」

「分かってるって。ほれ、これ旨いぞ。食ってみろよ」

酒杯を片手に范撞は楊迅の前の皿を指差した。

「またお前、こんな豪勢な……」

朱不尽が部屋に入ってきて真っ直ぐ傳千尽の許へ行った。一緒に入ってきた魯ヒョウ頭は開いている席を探してさっさと座る。

「ん？ 我が屋敷にはこれより粗末な食事は無いぞ？ さあ、お前も飲め」

傳千尽は空けてあった自分の隣の席に朱不尽を座らせて酒を注ぎ始めた。

二十八

「どうだ？ 帮会は。儲かってるか？」

「まあ、普通だろう。一昔前に比べれば平穩そのものだな」

「そうだろうな。何故だと思う？」

「一番大きいのは北辰が大人しくなったせいだろう。昔なら他愛の無いことまで争いの種にしていた感があったが、今は全然態度が違ふようだな」

「その通り。北辰教は取り敢えず大人しくなった。ハッ、商売もしやすいし結構な事だ」

「何だ？ 心外か？」

「儂は今、結構な事だと言ったんだ。現に儲かってるしな。争いで利を得るなんてのは頭の悪い奴が考える馬鹿な妄想だ。平穩なればこそ金は動く」

「ハハ、北辰の人間が聞けば怒り出しそうだ。お前は今も北辰と近いのだろうか？」

「どうだかな。もう、どうでもいいかも知れん……」

傳千尽は酒杯を胸元に持ったまま宙を見つめる。

「何かあったか？」

「いや、そういう訳ではないが」

「そうだ、肝心な事を忘れていた。紅葵が都へ参るそうだな。これは……めでたい、のか？」

「賭けだな。男子でも産めば凄い事になる。儂等まで貴人の仲間入りという訳だ。何も無ければ……」

「……本心ではあるまいが。紅葵は、お前にとって特別な……」

「もういい。いいんだ。儂は……あいつを売るのだ。金の為に」

傳千尽は睨むように力を込めて朱不尽を見た。

「フン、俺は信じないからな」

朱不尽は微かに笑って酒を呷る。酒杯を置くと傳千尽の方を向いた。

「ここだけの話だが、少し聞きたい事がある」

「何だ？」

「我等が今運んでいる荷は、方崖ほうがいへ持っていく」

「朱蓮に聞いた」

「近々方崖で何かあるのか？」

「何かとは？」

「あの荷は恐らく何かの祝いの品の様だ。方崖で祝い事とは？」

「……荷は誰に渡す？」

「ただ方崖へ運べとだけしか言われていない」

「ならば必ず教主の許へ届くな。誰の依頼だ？」

「それは、今は明かせぬ」

「……まあいい。まだ噂だが」

傳千尽は朱不尽の方へ体を傾けた。

「総監が副教主になるかも知れん」

朱不尽は眉根を寄せて傳千尽の顔をじつと見つめた。

「総監と副教主、何が違うと聞かれても答えられんが、まあ確かに副教主という肩書きは重い」

「……なるほど。それか。その噂はもうこの辺りでは広まっているのか？」

「いや、この儂だから聞ける、特別な情報だ。だから儂が興味があるのは、お前に依頼した奴の名だ」

「……秘密にして何になるかは解らん。だが、任務なのでな。すまぬ」

「フン、分かっているわ。お前が緑恒から運んできたと言うからにはそいつは遙か南方に居ながら知っている訳だな。千河幫幫主なら考えられるが、お前がその意図を知らんという事は有り得んよなあ。是非知りたいがその辺は自分で何とかしよう。」

「まだわからんぞ。殷総監への祝いと決まった訳では無い。それに、もしそうなら何故その祝いだと明かさなかったのかも解からぬ」

「それはお前、方崖が公表していないものをお前に言う訳にはいかんだろう」

「……どうも嫌な予感がするんだ」

「もう方崖まで近いんだ。さっさと引き渡せばおさらば出来るだろう。帰りにもうちで旨い酒を飲んで忘れればいいさ」

傳千尽が箸を取って前の料理をつまんだ。朱不尽は暫く何か考えていたが、急に空腹を思い出して食事に取り掛かった。

「小父様、ゆっくり休めたかしら？」

部屋に傳朱蓮が入ってきて、朱不尽に声を掛けた。

「ああ、久しぶりにぐっすり眠った。そなたには世話になった。礼を言う」

朱不尽は立ち上がりはしなかったが、膝に手を当てて頭を下げた。

「いいえ。どういたしまして。私は楽しかったわ」

近くに置いてあった酒壺を取って朱不尽の酒杯に注いだ。

「お前も腹が空いておろう。さあ、座れ」

傳千尽が言うと、

「あっちが空いてるから。小父様、暫く留まるんでしょ？ごゆっくり」

朱不尽に言ってから真っ直ぐ范撞達のいる辺りへ行ってしまった。

「なんだあいつは。久しぶりに帰って来たというのに儂には酒も注がんのか。益々生意気になっていきおる」

「ハハ、もう良いではないか。朱蓮は長く旅をしておった様だが、もう充分一人前だ。俺達は道中助けてもらったのだからな」

「大したことなどしておらんだろうが。賊が襲ってきた事も聞いておる」

「心配か？」

「ハッ、心配など。ただ注意せねばならんのは、不用意に敵を作る事だけだ。あいつはまだその辺が理解できておらん」

酒を注ぎに来た侍女の手から酒壺を取ると自分で注ぎ、勢い良く呷った。

部屋のあるあたりでは時折笑い声上がる等、皆緊張も解けて酒と料理を楽しんでいた。警護の道中は勿論、緑恒に居る時でもこのような料理にありつける事は滅多に無い。傳千尽が言ったように、本当に幾らでも料理が出せるらしい。殆どの者が自分の気に入った料理を何度も侍女達に頼んでいる。

「どうかしら？この料理は」

傳朱蓮は范撞の許へ来て聞く。その顔は自信有りげに微笑んでいる

るが、まさか自分が作ったわけではあるまい。

「まあ、俺達が普段食ってる物よりは遥かにいいな。あんたは生まれた頃からこんなもん食ってんのか？」

「私が生まれた頃は貧乏だったって聞いているけど」

「へえ、一体どうやってここまでになったんだ？」

傅朱蓮は范撞の隣に座ったが、置いてあった料理は下げさせて酒を持って来させた。

「詳しくは知らないわ。北辰教と仲良しになったんじゃない？」

おもむろに酒壺を持ち上げて范撞の方に差し出した。范撞も杯を上げて受ける。

「お嬢様なんだな」

「確かに皆私をお嬢様って呼ぶわ。でもここだけよ。旅に出れば誰も何も言わないわ。お嬢様どころか、武器を突きつけられることだってあるもの。余程そっちの方が面白いわよ。そう思わない？」

「そういう時もあるかもしれないが、いつも面白いとは思えそうに無いな」

今度は范撞が傅朱蓮の前の杯に酒壺を近づけると、傅朱蓮は遠慮せずに杯を取った。

「親父さんは昔からこの人間か？」

「いいえ。よそ者よ。私もね」

「どういう……」

「お父様はまだ赤子の私を連れてこの街に流れてきたのよ。……興味ある？」

「あるな。本当に貧乏人の流れ者がこの街で随一の富豪になったと言うなら」

「面白いかもしれないわ」

「面白い話が聞きたいんじゃないけどな。知りたいだけだ」

「どうやら傅の旦那は上機嫌の様だ。今聞いてみたらどうだ？」

田庭閑が急に話に入ってきた。杯を手立っている。結構飲んで酔っているようだが、顔は青白かった。

「俺如きが直接聞ける訳無いだろうが。朱さんはこの街に来てすぐあんたの親父さんと知り合ったのか？」

范撞はチラッと田庭閑の顔を見ただけで、すぐに傅朱蓮の方を向いた。

「ここに来てから暫く経ってからだと思う。まあ、充分貧乏だった頃ね。何？朱小父様に聞こうと言うの？」

「かなり親しそうにしてるしな」

「娘の私が居るのに、小父様に聞くの？」

傅朱蓮は真っ直ぐ范撞の目を見つめている。思わず范撞の方が視線を逸らした。

「ああ、あんたが知ってるなら、その、聞かせてもらえると、嬉しいな」

「あ、俺も聞いてもいいかな？あの、邪魔はしないから」

楊迅が二人を交互に見ながら言う。

「フフッ、そんなに畏まって聞くような話は何も無いけど。お父様が昔から何度も何度も言う昔話よ」

傅朱蓮は腰を浮かせて、楊迅の酒杯にも酒を注いだ。范撞が辺りを見回すと皆飲みながら話に夢中で、まだ料理も運ばれてくる。

三十

「私は、この東淵の生まれではないの」

傅朱蓮は范撞と楊迅の方は向かずに前を向いたまま言う。さっき聞いた話だが、二人は黙って話の続きを待った。

「ずっと西、都よりももっと西方の咸水かんすいというところらしいの。知ってる？」

「……一応な。今は何も無い事で有名な所だな。俺は話しに聞いただけだが、あんたは行ったのか？」

「そうね。一度だけね。見るものなんて何も無かったけど。お父様

はその出なの」

「生き残り……か。あんたも……」

「もう少し頂こうかしら」

傅朱蓮が酒杯に手を伸ばすとすぐに范撞が酒壺を取った。

「どういう……？」

楊迅が范撞に小声で聞く。

「お父様の居たその村は今は廃墟なのよ」

范撞が口を開く前に傅朱蓮が楊迅の質問に答える。

「お前聞いた事無いのか？ 咸水ってのは小さな村だったが、賊が大挙して襲ってきて跡形も無く潰された。何でその村を襲ったかは知らねえけど。それから何日もしない内に、今度はその賊八百人余りが一夜にして全て殺された。その噂はあっという間に広まったらしいぜ？」

「……知らなかったな」

楊迅は首を振った。

「村は住めなくなってお父様は同じ村に住んでいた生き残りの二人の人と一緒に国中を転々としたって。赤子の私を連れてね。本当に色んな所に行ったらしいけど、私も居るし大変だったようね。この東淵には叔母が居るの。詳しい事は知らないけど、お父様の小さい頃から離れて暮らしていたらしくて、それでここに来る事にしたんだって」

范撞は体を傅朱蓮の方に向けて、肩肘をついて反対の手に酒杯を持っで聞いている。楊迅は范撞の肩越しに傅朱蓮の方を覗いていた。「お父様は元々薬を扱う商売をしていたらしいわ。咸水でね。で、こっちに来てからも始めたんだけど、最初は思うようにいかなかったみたい。この辺りは凄く良い薬草も豊富にあるの」

「親父もわざわざこっちから漢方薬を取り寄せたりしてるな」

「でも、中々手に入らなかったって。何せ元手が無いもの。私の叔母様がお勤めしていた屋敷があるんだけど、長い間其処に世話になってたんですって。それから暫くして……北辰教の教主と知り合う

縁があつたみたい」

「おいおい、一体何したんだ？　どうやって教主と知り合う？　前教主だよな？」

范撞は思わず身を乗り出した。

「勿論そうよ。お父様が、と言うより、お父様の知り合いが教主と親しくなったの。しかもその人は……幹部になった」

「成る程な。天下の太乙北辰教の後ろ盾を得て……アッ、そうか」

范撞が急に自分の膝を打った。

「その知り合いってのが……そうか」

「ねえ、何？」

楊迅が一人納得している様子の范撞に聞いた。

「その幹部になったってのが、一人で八百人ばかり切った男なんだよ。北辰教が放って置く訳が無いな」

范撞は傳朱蓮を真っ直ぐ見たまま言った。

「その辺は良く知らないけど、まあ、そういう事なんじゃないかしら」

「つまり、その八百人切ったって人も咸水って所の人で、賊に報復したってこと？」

楊迅が范撞に訊く。

「まあ、そうだ。親父さんは商売を始めて、向かう所敵無し。街一番の金持ちになったと。成る程なあ」

「どう？　成功物語と呼ぶには余りにも……」

「いや、縁か……」

范撞は振り返って楊迅を見た。楊迅は范撞の目をチラッと見てから、下を向いて何か考えている。

「あの、朱蓮さんのお母さんは……村で？」

下を向いたまま楊迅がポツリと呟くように尋ねる。

「おい」

「あ、あの俺は両親は居ないんだ。あ、いや、だから何だって……話なんだけど」

「フツ、もう、そんな氣遣いしてもらわなければいけない歳でもないわ」

傳朱蓮は笑顔を見せる。

「村を潰した奴等に殺されたの。勿論、私には全く記憶は無いわ。あ、それと聞かれる前に言っておくわ。紅葵姐さんの話は聞いているでしょ？ 姐さんは私と血は繋がってないわ。姐さんは孤児だったの。お父様がここに辿り着くまでの間に会って、連れてきたのよ。私にはそんなこと何も関係ない。今までも、これからも、私の大切な人よ」

そう言っ顔を上げて前を真っ直ぐ前を向いている傳朱蓮の白い横顔に、楊迅は惹き付けられて暫く視線を外せなかった。

三十一

ヒヨウ局の者達はもう一晩傳千尽の屋敷に留まったが、朱不尽は出立の事は何も言わなかった。庭に面した回廊で、傳千尽と朱不尽の二人が立ち話をしている。庭に数本の百日紅が繁っており、夏のやや強くなった日差しの中、それぞれ白と赤の光を放っていた。

「もう数日居っても充分期限には間に合うだろう。紅葵は明日発つのだ。せめてそれまで待つてくれんか。そうだ。今から会ってやつてくれ。儂も店に行く。支度もあるしな。一緒に行こう。それから明日、見送ってやつてくれ」

傳千尽はそう言っ朱不尽の腕を掴んだ。

「俺も是非会いたいが、荷を離れる訳には……」

「だからそれは問題ない。おい、超謙は居るか？ 少風は？」

近くを通りかかった屋敷の者に傳千尽が訊く。

「超謙殿は先程、ヒヨウ局の荷を見に行かれました。馬少風殿は……紫蘭お嬢様と一緒にお店の方に」

「何？ またあいつは邪魔をしに行っておるのか。さっさと帰って

来るように言え。……いや、今から儂等も店に行くからいい」

「あの、紫蘭お嬢様は明日の支度のお手伝いに……」

「あれに何が出来ると言うのだ。遊んでおるに違いないわ。おう、そうだ。超謙を呼んできてくれ」

「かしこまりました」

家人はそそくさと下がって行った。

「俺も邪魔になると思うが」

「なるものか！ あれもお前の顔が見られれば喜ぶ。本当は支度などいらんのだ。都に行けば何も不自由など無いわ。向こうが気に入らなければとつと追い返して貰って結構！」

その時、魯ヒヨウ頭、解ヒヨウ頭の二人がやって来た。

「朱ヒヨウ頭、出立は……？ 皆、準備を気にしております」

「出立はまだ先だぞ。そうだ、街を見て回ってはどうか？ いつもこいつにこき使われて遊ぶ暇も無からう。おう、そうだ。儂の店は知っておるな？ 其処で好きなだけ飲んでもらってもよい。朱不尽のヒヨウ局の者だと店の者に言ってくれ」

朱不尽よりも先に傳千尽の方が二人に言った。

「……取り敢えず今日の出立は見合わせだ。外出は……もう少し待て。部屋で待機だ」

「お前は相変わらず堅物だな」

「旦那様、お呼びですか」

そこへ超謙もやって来た。この男、この屋敷の用心棒の頭であるらしい。

「おう、荷の警備は万全だろうか？」

「はい」

超謙は短く返事をしただけだが、当たり前だと言わんばかりの自信有りげな顔つきだった。

「おぬし、ヒヨウ局の出立の時には数人連れて景北港まで同行してもらいたい」

「ハッ」

「おい、どういふ……」

朱不尽は驚いた。

「ここから景北港までの道中には顔馴染みも多い。この者達と一緒に
に行けばより安全に進めよう。お前を足止めする変わりと言っては
なんだが、協力させてもらおう。超謙」

「ハッ」

「その時は少風も連れて行け」

「分かりました」

「ヒョウ局の皆にはまだ留まって貰うからな。頼んだぞ」

「かしこまりました」

超謙は朱不尽と二人のヒョウ頭に頭を下げてから、戻って行った。
朱不尽は深く溜息をついた。

「わかった。お前の言う通りにしよう。魯ヒョウ頭。交代でならば
外へ出てもよい。だが出るものは皆固まって行動するのだ。それで
手配を頼む。」

「わかりました」

魯ヒョウ頭と解ヒョウ頭は何やら笑って話しながら部屋へ戻って
行った。

「よし、では行こうか」

傳千尽が朱不尽に言った。

「おい、行くぞ」

「無理だって」

「いいから、お前は俺に引っ付いて黙ってりゃいい。……朱ヒョウ
頭！」

急に呼び止められて驚いた朱不尽が振り返る。聴き慣れた声だっ
たが、聴きなれない言葉遣いだった。見れば范撞が立っており、後
ろには楊迅が半ば隠れて見えていた。

「朱ヒヨウ頭、お供いたします」

「何？」

「お前達か。良いぞ。連れて行ってやろう」

「またも傳千尽が先に答える。」

「駄目だ。お前達は部屋で大人しくしているんだ」

「でも先程魯ヒヨウ頭に言ってた……仰ったじゃありませんか。出ても良いって」

范撞は慣れない言葉遣いで言った。傳千尽の前なので部下らしく振舞う事にしたらしい。尤も、ずっと前から部下の筈であるが。

「そうだ。魯ヒヨウ頭の指示に従え」

「ああじれったいな。不尽、行くぞ。お前達も来い」

傳千尽は苛ついて大声で言う、先に歩き出した。

「わかりました！」

范撞はサッと朱不尽の脇を抜けて傳千尽を追う。朱不尽が振り返って見ると范撞はまるで傳千尽に身を寄せるようにぴったりと張り付いて歩いている。再び朱不尽が顔を戻せば、楊迅と視線が合った。しかし楊迅は直ぐに目を逸らす。

「……行くぞ」

「……はい」

朱不尽と楊迅も歩き出した。

強い夏の日差しが街中に降り注いでいるが、緑恒に比べればかなり穏やかに感じられる。とは言っても大通りまで出ると人の熱気で温度が上がる。傳千尽の屋敷の周辺とは全く違い、通りは騒がしかった。朱不尽が何も言わずに歩いているのもう何も言われないだろうと、范撞は後ろに下がって楊迅に並んだ。

「旨くいったな」

「まあ、運が良かったんだろ？」

「魯ヒヨウ頭達と出かけたって紅門なんて入れねえって。さて、どんなもんか見てやるか」

東淵に入った一昨日の様に辺りを見回しながら傳千尽に付いて歩いていく。暫く行くと通りの左手に一際大きな建物が見えてきた。濃い赤が酷く派手に見えるのは初めて見る者だけだろうか。正面には『紅門飯店』と金泥で書かれた大きな扁額が掛かっており、それを見上げると五層に連なった上部がまるで道に迫出しているように感じられた。顔を下に戻せば、正面の開け放たれた入り口はまだ昼にもなっていないが既に人の出入りが多い。意外にも粗末な身形の者達が圧倒的に多かった。傳千尽と朱不尽の二人は全く足を止める事無く中へ入っていく。入り口に近い席に座っていた何人かが傳千尽に気付いた。

「おい、傳の旦那だ」

「そうだな。おっ、一緒に居るのは……」

「知ってるのか？」

「あれは……千河幫の朱不尽殿だな。知らんのか」

「ほう、あれが。名は聞いたことあるな。しかし……あまり良い身形じゃねえな。千河幫の幹部なんだろう？」

「お前が人の身形をとにかく言えるのか？ 恐らく仕事で来たのであろう。朱不尽殿はヒヨウ局の頭だ」

「へえ」

男達は酒を呷りながら眺めていた。傳千尽達はその横を通り過ぎると広間の端にある階段へ真っ直ぐ向かう。見れば反対側にも同じような階段が作られている。范撞達は広間を見渡しながら上って行った。

「広さも凄えけど、この時間からこの客の数も凄えな」

「ここの何が良いんだろうね。安いのかな」

「まあ、高い酒を飲めそうな客は見当たらねえな」

二階まで来ると、全く雰囲気違った。それもその筈、客は一人も居ない。一階と違うのは中央部分は円形の吹き抜けとなっており、

下を見下ろす事が出来る。それを囲む様に多くの席があるが、誰も座っていない。それに、広間の装飾は明らかに下とは違う高級感が漂っている。楊迅はこのような場所で食事をした事など無く、誰も居ないというのに何故か少し緊張しているのを自分で感じた。

「旦那様」

不意に声が聞こえる。進む先にはまた階段があり、前に男が拱手しながら立っていた。男は腰に剣を帯びている。

「おう、上に行く」

「ハッ」

傅千尽は男の横を通り過ぎた所で立ち止まった。

「そうだ。紹介しておこう。これは屋敷に居る超謙の弟でな、靖せいという。こちらは緑恒千河幫の朱不尽だ」

「ご高名は予々（かねがね）承っております。超靖ちようせいと申します。お見知り置きを」

非常に丁寧な物言いで男は恭しく低頭した。

三十三

朱不尽が礼を返すのを見るとすぐに傅千尽は階段を上がり始めた。范撞と楊迅の二人は取り敢えず超靖に向かって頭を下げてから後に続いた。

三つ目の階へ上がると、中央の吹き抜け部分は拡大され、更に上へ伸びる階段には非常に細かな装飾が散りばめられた紅色の欄干があり、その真下は二階の床が見えている。円の外側には幾つかの部屋があるが、見た感じではこの階は更に上へ伸びる階段の踊り場の様だった。外側の部屋の一つから一人の女が出てきた。女はこちらに気付くとその離れた場所でお辞儀をした。

「紅葵は？」

傅千尽が女に尋ねる。

「こちらに居られます」

女は即座に答え、今出てきた部屋の方へ腕を伸ばした。そして再び部屋へ戻って行った。

非常に高価である伽羅が生み出す甘い香りが漂う部屋は、通って来た広間や階段の強い紅色は全く無い、至極淡い色使いで統一された落ち着いた場所だった。先に入った傳千尽は何も言わずに正面を見てから横へ身をずらして朱不尽を通した。

「朱不尽様。久しく御無沙汰致しておりました。お許し下さいませ」
細く美しい声が朱不尽を迎える。正面には若い女が跪き、先程この部屋から出てきた女も後方で倣っている。

「……紅葵。俺にその様な礼はいらぬ。というか、困る。そなたは全く変わっておらん。」

朱不尽がそう言って笑いかけると若い女は静かに立ち上がり、真っ直ぐ朱不尽を見て笑みを浮かべた。今は特別着飾ってはいないが、その細く長い蛾眉と口許に控えめに注した紅が何とも麗しい。羽織っている薄絹から薄っすらと浮かぶ肩は華奢ともいえるが決して細過ぎず、全身から柔和な女性らしさが感じられる。傳朱蓮が姐さんと呼んでいるが、殆ど歳は変わらない様に見えた。これが、「紅門の花」である。しかしこの時はまだ普段の装いで、しかも幼い頃から良く知っている朱不尽にみせる顔はとても柔らかく、親しみ易ささえ感じられる。

「不尽は景北港へ向かう途中に寄ったのだ。数日遅れば会う事は出来なかった……」

傳紅葵は父の言葉を聞き、静かに頷いた。

「朱不尽様には私が幼い頃から可愛がって頂きました。私は決して……」

「紅葵、頼むからやめてくれ。お前が何処へ行っても関係は変わらない。お前の方はそうはいかんかもしれないが、俺はこれからも国中を渡り歩くんだ。お前の住まう事になる都にも何度も行くだらう。俺

から見れば都もこの東淵もさして離れてはおらん」

「そうね……この国は小父様の庭みたいな物ね」

傳紅葵は幼い頃を思い出したように、改めて懐かしむような眼差しで朱不尽を見ながら言った。

范撞と楊迅は何も言われないので朱不尽に続いて部屋に入る訳にもいかず、范撞の方は時折入り口を覗いて朱不尽の肩越しに部屋の主の容姿をしきりに頭を動かして窺っていた。

「やめろって。なんかみっともないよ」

「こっちからじゃ殆ど見えないんだぞ？ 向こうからだって同じことさ」

「で、見えたの？」

「おう、見えたぞ」

「で？」

「で？」

「だから、評判通り？」

「お前も見ってみろ」

范撞は楊迅に場所を譲って楊迅を押し出した。

「ち、ちよつと」

部屋の入り口に半分体を乗り出す状態になって楊迅は慌てたが、気付かれなかったかと中のサツと見渡し、その瞬間固まった。傳紅葵が真っ直ぐ自分を見ていたのだ。傳紅葵は少し驚いたような表情で目を見開いて口許に手を遣り、楊迅を見た後、朱不尽の方へ視線を移した。すぐに朱不尽が振り返る。

「ああ、この者はうちのヒョウ客だ。新米だがな。お前達、騒がずにじっとしておれ」

入り口を塞ぐ様に立ち尽くしている楊迅の隣に范撞も並んだ。傳紅葵はゆっくりとした動作で丁寧に頭を下げ、同時に二人も釣られる様に礼を返した。

「まあ座れ」

傳千尽が言い、中の三人は椅子に腰を下ろすと、傳紅葵の傍に付

いていた女が部屋を出て行こうとする。范撞と楊迅はやはり何も言われないので入り口の外で脇に下がって女を通す。女は部屋を出たところでチラッと二人を見た後、部屋の扉を静かに閉め、その場を離れていった。范撞と楊迅は話が終わるまで部屋の外で待つ事になった。

「どうだ？感想は」

范撞が楊迅に訊く。

「……きつと皇帝って人は物凄く徳を積んだ人か、天下一の極悪人に違いないよ。はあ、あんな綺麗な人がこの世に居るんだね」

「そうだな。もし極悪人の方だったら取り返しに行くか？」

范撞は笑いながら楊迅を見る。楊迅は考えている。

「冗談に決まってるだろ」

三十四

「で？ その美人とやらを見れたのか？」

田庭閑は寝台の上で、もう日が暮れようとしているのにまるで眩しい日差しの中に居るかのように目を細めて范撞と楊迅を見ている。

「ああ。しっかり見たぜ。確かにあれは滅多にお目に掛かれないな。今日は薄化粧だったようだが、それで充分な程だ」

范撞はそう言いながら自分の寝台へ腰を下ろした。

「お前も来れば良かったんだ。惜しい事をしたぞ？」

「ハッ、馬鹿な事を。俺はお前達と違って武林の正統、真武剣派の高弟だ。女に現を抜かす等考えられん事だ」

「ヘッ、そんな寝惚けた様な顔で言っても説得力無いぜ？ お前は睡眠欲に取り付かれてる」

「何だと!？」

田庭閑は范撞を睨んで勢い良く立ち上がったが、同時に范撞は全く気に留めず横になったので田庭閑は短く鼻を鳴らしてまた腰を下

ろした。

「ねえ田さん。いつも「高弟」って言うけど、普通の門弟とは違うの？」

楊迅が尋ねる。殆ど皮肉に聞こえる問いだが、楊迅は至って真面目で、本当に知りたがっている様だ。

「全然違う。俺はな、総帥の直弟子だ。数多く居る門弟の大部分は孫弟子、だから俺は田師叔なのさ」

「何だって!？」

今度は范撞の方が起き上がった。

「お前、俺達と歳が殆ど一緒なのになんで総帥の弟子なんだよ？俺はまたあの……白？って人の弟子かと思ってたぜ」

「白千風か？ 兄弟子だ。まあ俺は末弟子だがな」

「じゃあ総帥から剣を習ってる訳か？」

「……あ、当たり前だろう。これ以上は訊くな」

田庭閑はそう言って二人に背を向けて横になった。

（まだ寝る気かよ……）

傳千尽はその夜屋敷に戻らなかった。どうやら傳紅葵はずっと、この屋敷ではなく紅門飯店で暮らしていた様だ。親子水入らずで過ごせる最後の夜になるかもしれない。

朱不尽は夜遅くにヒョウ頭達を集めた。

「明日の昼前に出立する事にする。皆充分休めただろう。昼前と言ったが朝にはしっかり準備をしていつでも出られるようにしておいてくれ。俺は 朝、紅門飯店に行かねばならん。皆抜かりないように。魯ヒョウ頭、荷の確認を頼む」

「ハッ」

朱不尽の指示はすぐに全員に伝えられたが、誰も大して準備する事など無かった。中にはやっと先に進めると喜ぶ者も居る様だ。再び緑恒に戻るのはまだまだ先だが、既に此処は遠く離れた地だ。家が恋しくなる者が居てもおかしくなかった。

「おい、起きろよ」

翌朝、まだ眠っていた楊迅の肩を范撞が揺する。

「んん、何？ 朝？」

「ああ、朝だ。もう出る準備は出来てんだろ？」

「出るのは……昼前だろう？ まだ早いんじゃない……」

「もう朱さんは出掛けたぞ。俺達も行こうぜ」

「一体何処へ？ 魯さんに怒られるよ」

「大丈夫だって。荷の方も来てから全く動かしてないんだしそのまま出れば良いだけだ。此処の奴に聞いたんだが、今日はあの紅葵って人が街を離れるってんで見物人が集まるらしいんだ。都から迎える兵も来てるってよ。朱さんはあの人を見送るのに出掛けたんだから、俺達も行っ出て出立するまでは見物できるぜ。今なら魯さん達に見つからずに出られる。ほれ、起きろ」

「……わかったよ」

楊迅は目を擦りながら寝台の上に起き上がった。内心では楊迅ももう一度、傳紅葵を見たかった。彼女を見られるのはこれが最後だろう。

「おい、あんたもどうだ？ ここは武慶じゃないんだ。此処でしか見れないもんは見といた方が良いと思うがな。見識が広がるってもんだ」

「女が見たいだけだろ。何が見識だ」

「別に女だけでもないんだけどな」

既に田庭閑は起きていた。明らかに今まで寝過ぎだ。

「まあいい。付き合ってやるか」

田庭閑は立ち上がって剣を手にとった。何処に行くにもまるで何かの儀式のように大仰に剣を持ち上げてから腰に帯びる。武慶出る時に剣を忘れて来たのは何だったんだと、范撞と楊迅は思っていた。

「ちょっと何これ、通れないじゃない」

「……見物人だ」

「フン、お姐様は見世物……見世物なんかじゃないわよ!」

紅門飯店の前は入り口を何重にも取り囲む様に、街の人間で溢れている。少女と男が店の方までやって来たが、人が一杯で入り口も見えない。少女は整った顔立ちで美しい着物を纏っていたが男の方はあまり良い身形とはいえない。背が高く口が開きっぱなしで冴えない顔、しかも長い。

「お姐様の出立はまだなのに、間抜けな人たちばかりだわ」

少女は全く周りを気にする事も無くそう言った。幸い誰も聞いていなかった様だ。男の方は何も言わずに人ばかりを見ている。

「ハッ!」

男が振り返ると少女が後ろにあった大きな木の太い幹から伸びている枝の一つにぶら下がっている。

「ちょっとお馬さん、早く!」

男は駆け寄って眺めた。

「どうする?」

「足掛ける所がないんだから、肩貸してよ!」

男が真下に入ると少女はお馬さんと呼んだ男の肩に足を掛けて枝によじ登った。

「……紫蘭、それは、まずいと思うが」

「よく見えるわ。よく集まったものねえ」

少女は男の言う事は無視して、片手を幹に当てて枝の上に立ち上がった。背の高いこの男が普通に手を伸ばしても届かない高さだ。しかし少女は平気だった。女の子が木登り遊びをするかどうかは別として、この少女はもう十四、五にはなっているだろうか。しかもこのような街の中の木に登って背筋を伸ばして立っている絵は、奇妙なものだった。男は少女を紫蘭と呼んだ。少女は傳千尽の娘で傳

朱蓮の妹、傳紫蘭である。

「もういいわよ、お馬さん。飛び降りられるから」

傳紫蘭が言うとお馬さんは幹に持たれかかってまた大勢居る人のほうを眺めていた。

「兵隊が並んでる。……三、四、……五十人は居るわね」

「……道中襲われたら困るからな」

「あんな間抜け面ばかりでちゃんとお姐様を守れるのかしら？ 私が付いていった方がマシじゃない？」

「……兵隊の方がいいに決まってる」

「フン、私とお馬さんの二人ならどう？」

「……駄目だな」

「いいわ。あの兵隊達の顔を立ててやる事にする。……ねえあんた」

「……ん？」

「お馬さんに言ったんじゃないわ。あんたよ。ねえ」

傳紫蘭のしている先、男の後ろに辺りを珍しそうに見ている少女が居た。その少女は急に頭上から降ってきた声に大層驚いたようで、首を縮めた。

「アハハ、そんなに吃驚すること無いじゃないの。あんた見ない顔だけど、噂を聞いて見に来たの？」

下に居た少女は声のする頭上を恐る恐る見上げて目を見開いた。木の上に女の子が立っている。

「あ、あの、私は……」

傳紫蘭はニヤリと怪しげな笑みを浮かべる。

「お馬さん、この子も木の上に上げてやって。そっちの枝が空いてるわ」

「……何？」

「ほら早く！」

男は少女に近寄ると急に腰の辺りを掴んで持ち上げた。少女は驚きの余り思わず目を瞑った。

「……手を上に伸ばすんだ。早くしろ」

男が命令するので少女は慌てて目の前まで来ている枝にしがみつく。男が少女の足の辺りを枝の上に押し上げると少女は必死で幹に抱きついた。その間、全く声を出さなかった。

「大丈夫よ。ほら、よく見えるでしょ」

少女の方はそれどころでは無い。少しずつ足を動かしながら位置を確かめてしっかり幹にしがみついている。それに少女は人が大勢居るので見に來ただけで、見るべき物が何なのかすら知らない。しかしこの多くの人々が正面の真っ赤な建物の方を向いているのは分かった。

「私はここの娘なの。私のお姐様が今日都に行くから、街中の人が見に來たってわけ」

「そ、そうなんですか」

少女は取り敢えずそう答えたが、何が何だか解からなかった。しかしなんとか落ち着いて辺りを見回せるようにはなった。

「お姐様はこの国で一番の美人なのよ。ここからなら少しは見れるわ」

この少女は傳紫蘭よりは歳下だろうか。木の上に少女二人。群衆の中の数人が時折怪訝な顔をしながら後ろの木の上を振り返っていた。

三十六

丁度その頃、范撞達三人も紅門飯店の方までやって來た。ヒョウ局の人間は皆屋敷に居り、隠れる必要も無い。朱不尽が外をうろついている筈も無かった。

「凄えなこの人だから。こんだけ人気あったらそりゃあ紅門飯店も儲かるはずだ」

中には老婦人が幼い子供の手を引いて、人の隙間から前を覗いている。常連客であろう男達が大声で騒いでいた。

「泣くなよ恥ずかしいな！ お前の女房が見てたら殺されるぞ！」

「何だと！？ 紅葵はこの街の宝だ！ 嫁が何と言おうと俺は紅葵を忘れる事は無いぞ！」

「だがこの先は口を慎む事だな。これから紅葵は傳夫人だ。いきなり夫人だぞ？ 紅葵はすぐに貴妃になるに決まってる。下手な事を言うとならば捕まるからな」

「そんなことは分かっておるわ！ おお、紅葵よ……」

「……向こうはお前の事など知らんわ」

「お前は何とも思わんのか！？ お前は情も何も無い畜生だ！」

「何だとこの！」

人が一杯で立っているだけでやっとならぬというのに男達は取っ組み合いを始めてしまい、あつという間に騒ぎが周辺に伝播する。范撞達は騒動を眺めながら辺りをうろついたが余り前が見えそうな所は無かった。

「紅葵さんはこの店で何してたんだろう？ 昨日見た感じでは普通の料理店だけど。給仕ではないよね」
歩きながら楊迅が言う。

「あの人を給仕に使うなんて勿体無いな。何だろうな。この店、まだ上があるしな。きつとどっかのお偉いさんが来て、舞ったりするんじゃないか？ ……何だありゃ？」

「ん？」

范撞が見ている先に楊迅と田庭閑が視線を移すと、子供二人が木に登っている。しかもどちらも女の子だ。

「……この街の奴は子供から大人まで変わってんな」

「んーまあ今日はお祭りみたいなものだろう？」

「違うだろ！ ただ嫁入りがあるだけじゃねえか」

「フン、そのただの嫁入りをわざわざ見に来る緑恒の人間が居るんだからな」

田庭閑はずっと腕を組んだまま冷やかな目で辺りを見回していた。范撞達が木の近くまで来た時、人だかりの先の方でどよめきが起こ

った。

「ちょ、ちょっと何よ！　もう出るっていうの！？」

木の上から見ていた傳紫蘭が慌てた様子で枝から勢い良く飛び降りる。自分の背丈よりも遥かに高かったが、全く平気な様だ。

「ちょっと！　どいて！」

傳紫蘭は前の人だかりに強引に入って行き、すぐに姿が見えなくなる。木の下に居た男もすぐに追いかけて行った。

「何だ？　出てきたか？」

范撞達は背伸びをして入り口の方を窺うと傳千尽の姿が見える。他には迎えに来た一隊の責任者だろうか、鎧を着ている髭面の大男が入り口から出てきた。

「何だよあの男は。あの格好、もう少し考えろよ」

楊迅の方は范撞よりも背が低い。見るのに苦労しているようだ。

前方では兵士が店の入り口を囲むように整列し、店の前に押し寄せた人々を睨みつけている。

「出てきたか？　おっ……」

范撞は何か言おうとしたが言葉が続かない。楊迅も黙って目を見張っていた。傳紅葵がゆっくりと店の前に姿を見せる。首全体を覆うような高い詰襟に全体がゆったりとした赤の旗袍で身を包み、結上げた髪を眩しく光る金の飾りが包んでいる。やはり白粉の類は殆ど付けていないようだ。玉の様に白い顔に鮮やかな紅が浮かんでいる。しかしその姿はすぐに車の陰に隠れてしまった。傳千尽が何か話しかけていたが、その顔には全く表情が無い。

「見えたか？」

范撞が田庭閑に言った。

「ああ」

「それだけか」

「……まあ、いい女だな」

田庭閑はそう言った後、楊迅の方に顎をしゃくる。楊迅は背伸びをやめて、まるで前に居る男の背中を見つめるように何か考えてい

た。范撞は楊迅を僅かに見たが、何も言わずに辺りの人間の反応を窺う様に周りを見渡した。手を合わせて拜んでいる老女まで居るではないか。范撞は笑いが込み上げて来そうなのをなんとか押さえ込む。隣の木の上にもう一人居た事を思い出し、首を回して見上げた。「どうだ？　そこから良く見えたか？」

「わ、わかりません」

傳紫蘭が居なくなってたった一人木の上に居た少女は、もう周りを見るどころでは無い様だ。降りる手段が無いのだ。涙こそ見せてはいないが、その表情は殆ど泣いていた。

三十七

「降りられないのかい？」

楊迅が木の根元まで行って声を掛けた。少女は黙って頷く。

「大体お前、どうやって登った？　足掛ける所も無いのに。飛び上がった……訳じゃねえよな。飛び上がれるなら降りられない訳が無いな」

范撞は笑って言う。

「うーん、どうしようか？　梯子か何かを――」

「おい！　お前達何をしておる！」

突然背後から怒鳴り声が聞こえ、范撞が驚いて振り返ったところへ物凄い勢いで手が伸びてきて胸倉を掴む。次の瞬間、范撞の体が物凄い力で後方へ弾かれる様に飛んだ。楊迅と田庭閑は驚きの余り動けない。周辺に集まっていた人々の注目を集めたが、一斉に振り返った中の多くは隣同士で何やら小声で話しながらその場を離れて行く。残った者達は興味深々である程度の距離は確保しながらこちらを窺っていた。先程まで范撞が立っていた位置に居たのは白髪の老人で、その枯れたような手が大柄の范撞をいとも簡単に吹っ飛ばしたのだ。

「どうした!? 怪我は無いか!? 何故そのような所に居るのじゃ!?」

老人は早口で木の上の少女に問う。

「あ、あの、降りられません……」

少女は相変わらず幹に抱きついたまま、辛うじて老人に届く声で言った。

「消えろ!」

老人は近くで固まっている楊迅と田庭閑に向かって再び怒鳴り声を上げる。慌てて二人は吹っ飛ばされた范撞の方へ走った。老人は二人を睨んでから軽々と枝に飛び上がる。少女を抱きかかえ、ひらりと再び地に戻った。

「何があったのじゃ? 何故一人で此処へ来た?」

「あの……人が一杯居たので……」

「よいか。これからは一人で出歩いてはならん」

「……はい」

老人は腰を屈め、少女と話している。

「このクソ爺!」

老人が声の方を見遣ると范撞が怒りの形相で突進してくる。老人はサッと少女を自らの背後に下がらせると范撞に向かい真っ直ぐ立った。

「その人達は違うんです!」

少女が叫ぶ。それと同時に范撞は思い切り拳を固めて老人に殴りかかった。しかし老人はその拳をいとも容易く振り払い再び范撞の胸倉を掴む。あつという間だった。今度は飛ばされる事はなかったが、老人は范撞を前に押し遣る。それでも范撞はふらふらと後方へよろけ、危うく尻餅をつくところだった。

「その人達は何も悪い事してません……」

少女は老人にそう言ったが、かと言ってどう説明すればいいのか分からず混乱していた。

「そうだ! 俺達は何もしちゃいねえ! 此処に来た時には既にそ

の子は木の上だったんだからな！　つく……」

范撞は胸を押さえながらなんとか立っていた。

「俺達は、その子が降りられそうに無かったから手を貸してやろうとしてたんだ！　解かったか！？　クソ爺！」

楊迅が范撞に肩を貸して支える。范撞がこれほど声を荒げるのを見たことが無かった。老人は范撞の方を見ずに少女の前に屈み込んだ。

「そうなのか？」

「はい」

「そうか。ならば良い」

「何が良いんだ！　爺！」

「儂の勘違いじゃ。許せ」

「……そんな謝り方があるか！？」

「どこか怪我でもしたか？　お前は体は頑丈そうだ。大したことでは無からうが」

少女が慌てて范撞の前に跪いた。

「ごめんなさい！　ごめんなさい！」

少女は額を地面に擦り付けるように頭を下げている

「……お前は悪くねえよ。悪いのはあの爺だ！　クソ爺！」

老人は動かずに范撞を眺める。

「どうすれば良いのじゃ？」

「あんたが叩頭しろ！　そしたら許してやらあ！」

「嫌じゃ」

「い、嫌だと？」

「ごめんなさい！　許して下さい！」

少女だけが必死に范撞に謝っていた。

「もうよい」

「あんたが言うな！」

老人は跪いたままの少女に許へ行き、肩に手をやって立たせた。

「もう痛みはあるまい？ 申し訳無い事をした」

老人は叩頭はしなかったが、真剣な面持ちになり范撞に向かって頭を下げた。范撞の怒りはそう簡単に収まるものでは無かったが、言葉が出てこない。

「おぬし名は何と言う？」

老人が尋ねた。

「俺は……范て言うんだよ！」

「そうか。儂は……」

「知らん！ あんたはクソ爺だ！ 一生クソ爺と呼んでやる！ 目上だろうが古い先が短かろうが関係ねえからな！ あんたの名はクソ爺だ！」

老人はそう捲くし立てた范撞を呆気に取られながら見ていたが、僅かに笑った。

「それで許して貰えるか？」

「あ、ああ許してやるさ！ クソ爺……」

范撞は楊迅の肩から腕を下ろし、横を向いて老人の視線を避けた。

老人は少女の手を取り、通りに溢れた人々を眺める。

「一体何をしておるのだ？ この人だかりは……」

前を向いたまま言った老人の声は独り言にしては大きかった。楊迅が老人の表情を窺いながら恐る恐る口を開いた。

「その紅門飯店の傅紅葵さんが、都へ行かれるんです」

「何？ 何をしに参る？」

老人が勢い良く首を回して睨むように見たので思わず楊迅は一步後退る。

「詳しくは知りませんが、後宮に入るとか……」

老人は楊迅の顔を見つめたまま暫く口を開けて固まっている。急に我に返った老人は紅門飯店の前の人だかりへ向かって駆け出した

が、少し行ってから引き返して来た。

「来るんじゃ」

少女の手を掴み、再び歩き出した。

「止めにいくのか？　もう遅えよ。ほれ、もう出るぞ。クソ爺」

「黙れ小僧！」

老人は振り返って范撞を睨みつける。その時、店の前に整列していた兵士達が進み始めた。傳紅葵の乗った車が続き、その後にも兵士が居る。老人は少女の手を引き、ゆっくりと動き始めた車へと近づいていった。

「通してくれ。退いてくれ。おい、退けと言うに！」

老人は人でごった返す中を強引に進む。引っ張られている少女は、「ごめんなさい。済みません」

と繰り返し言っているが、その声は誰の耳にも届いていない。何とか人の壁を通り抜けた老人は車に向かって真っ直ぐ駆け出す。すぐに兵士が三人飛び出してきた。

「下がれ！」

兵は老人に向かって槍を構えた。

「紅葵！　紅葵よ！」

「おいお前！　下がらんか！」

更に数人兵士が槍を構えて老人の前に立ち塞がった。老人は槍の先を掴み、離れていく車についている小窓に掛かる白の垂れ絹に向かい叫ぶ。

「紅葵よ！　儂じゃ！　洪じゃ！」

「貴様！　下がらんと容赦せんぞ！」

じっと前方を見つめている老人には兵士達の怒声は聞こえていない様だ。

「紅葵！」

車の垂れ絹が白く細い手によって押し上げられ、傳紅葵が顔を覗かせた。そこにはいつもの嫣然とした笑みは無く、眉根を寄せて唇を噛み締めている顔にはただ、悲しみしか無かった。その表情も馬

蹄が巻き上げる砂煙によって老人の視界から徐々に消えていく。老人が足を止めて力なく佇んでいるのを見た兵士達は足早に隊に戻って行った。集まった人々もこの別れの最後に皆押し黙って、感慨深げに一行の後姿を見送っていた。

「もう戻った方がいいんじゃない？」

范撞達は黙って老人の様子を眺めていたが、楊迅が思い出した様に范撞と田庭閑に言った。

「そうだな……」

もう陽が高くなっている。ヒョウ局の一行は昼には出る予定で、朱不尽もすぐに屋敷に戻るに違いない。人だかりは徐々に方々へ散らばり始めている。三人はじっと動かない老人と少女を遠巻きに見ながら、傅千尽の屋敷に向かった。

三十九

傅紅葵を迎えに来た一行が紅門飯店を離れて見えなくなった頃にはすでに傅千尽は店の中に戻っていた。

「さ、今日も店は開けるんだからね。皆、仕事しておくれよ」

表で見送った店の者を引き連れて、中年の女性が店に戻る。紅門飯店の一切を取り仕切る傅英である。皆店に入るとそれぞれ黙ったまま自分の持ち場に戻って行く。

「千尽は居るか？」

急に入り口の方から聞こえてきた声に一階にいた全員が顔を向けた。

「あら！ 洪兄さん久しぶりじゃないの。何処に行ってたの？ 心配したんだから」

傅英は大層驚いて声の主に駆け寄った。入ってきたのは少女を連れた老人、洪破天だった。

「少しばかり出ておっただけじゃ。千尽」

広間をサッと見渡した洪破天は客席に腰を下ろしている傳千尽をすぐに見つけた。傍らには朱不尽が立っていたが、お互い面識は無かった。傳千尽は卓上に伏せるような体勢のまま顔を洪破天に向けて黙っている。

「何故紅葵は都へ行く？」

少女の手を引いたまま洪破天は傳千尽の傍に立った。傳千尽は全く動かず、少女を見つめたまま黙っている。少女の方は視線を避けるように俯いた。

「俺はそろそろ戻るぞ」

朱不尽が傳千尽に声を掛けるとすぐに傳千尽は頭を上げる。

「正午までには屋敷に戻る。それまで待っていてくれよ。必ずだぞ」

「……わかった。では後でな」

朱不尽は洪破天に向かって一礼してからその場を離れた。傳千尽は洪破天に視線を戻す。

「とうに嫁に行っておってもおかしくない歳だが？」

「しかし後宮に入れるなど……あのような所、碌な事はないぞ」

「ほう、後宮に居た事が？」

「ふざけるな！」

「ならば如何すれば良かったんだ！？ こっちから嫁にしてくれと頼んではおらん！ 差し出せと言うて来たんだぞ！」

「……」

「……あれは賢い娘だ。うまくやっていく筈だ」

傳千尽は宙を見つめたまま静かにそう言った。

「洪兄、その娘は？」

「……これからこの東淵で共に暮らす。儂の孫じゃ」

洪破天が天涯孤独の身であることは周知の事実。古くからの知人である傳千尽は洪破天に身内が誰も居ない事を知っている。しかし今はそれ以上訊く事はしなかった。顔を上げた少女を見て微かに微笑んでみせたがすぐに立ち上がる。

「洪兄、また改めて飲もうではないか。黙って街を離れるとはな。色々と聞かせて貰わねばならんな。儂は少し用事があったな、今居た男を知ってるか？」

「いや、知らぬ」

「千河幫の朱不尽だ。景北港へ行く途中に寄ったのだ。……紅葵を知っておるのでな。今日まで引き止めたのだ」

「ほう、あれが。名は聞いておる」

「昼には出るから儂は屋敷に戻る。また夜にでも来てくれ。その娘も連れてな。あの家に夜留守番させるのはどうかと思うぞ」

「家は何とかするわい」

傳千尽は初めて洪破天に笑顔を見せると、店の奥へ入って行った。

「洪兄さん、飲んでいく？ 店は夕刻からだけど」

すぐ後ろで話を聞いていた傳英が声を掛ける。

「……いや、また来る」

洪破天はそう言ってさっさと店の外へ出て行く。傳英は洪破天と共に出て行く少女の後姿をじっと眺めていた。

范撞達が屋敷に戻った時、すでにヒョウ局の荷駄は門の前で整列していた。ヒョウ頭達が集まって何やら話している間に范撞達は部屋に戻る事が出来た。あらかじめ用意しておいた自分達の荷物を背負って庭に出るとすぐに魯ヒョウ頭が三人を見つけた。

「もう朱ヒョウ頭も戻られる筈だ。うろろうせずに此処で待っている」

「承知」

范撞が答えて荷車の隅に腰を下ろした。

四十

程なくして朱不尽が屋敷に戻って来た。

「朱ヒヨウ頭、準備は全て整っております。いつでも出られます」

魯ヒヨウ頭が報告する。朱不尽は頷くと屋敷の中に入って行った。

「ちよつと休み過ぎたね。また歩き続けるのかと思うと辛いよ」

楊迅が溜息混じりに言う。

「まあ七日も行けば景北港に着くだろうし、向こうでも少しはもてなして貰えるかも知れんぞ」

「北辰の奴等がなんで俺達をもてなすんだ？　ただの荷物運びの一行じゃないか」

田庭閑が范撞に訊く。

「あー、あんたが真武剣派の人間って知ったらどうかは分かんが、前も言ったが俺達は千河幫だからだ。あっちの外交方針に変更が無けりゃあ、頭を撫でてくれるだろうよ」

「フン、お前達はそれでいいのか？　よく我慢できるな。舐められてるんだろうが」

「その辺は俺らなんか考えても仕方だねえことだ。千河幫は自分達の商売が順調に出来ればそれでいい。別にこの広い江湖の商い全部を独占したいとも思わんさ。東に来たなら北辰におべんちゃらの一つも言う。西に行ったら、そうだな、あんたと知り合えたしこれからは真武剣派さんもし非とも御贔屓に」

范撞は真面目な顔で話し始めたが、最後の方は少しふざけて小芝居を入れる。

「そんなどつちつかずな態度では千河幫はこれ以上大きくはなれんな。いずれ真武剣派が武林を制する時が来る。ま、その時まだ千河幫があれば我等がお前達の面倒を見てやってもいいな」

范撞は立ち上がった。

「本気でそのまま受け取って良いのかな？　それが総帥の意向である……」

真剣な眼差しで田庭閑を捉える范撞。急に回りに重い空気が流れ込んだように感じられる。田庭閑は慌てた。

「そ、総帥の考えを俺のような下っ端が知るわけなからうが。そん

などつつかずの態度では……」

「ハハッ何言ってるんだ？ そんな謙遜はいらんだろうが。田師叔」
范撞は急に真顔を崩してニヤリと笑う。

「俺はお前の師叔じゃない！」

田庭閑は立ち上がって屋敷に向かって歩き出した。

「何処行くんだよ？ ここで待機してろって……」

かわや
「廁だ！」

范撞は楊迅と顔を見合わせて笑った。

「不尽、歸りにもちゃんと寄れよ。方崖の様子も聞かせてくれ」

傳千尽は隊の先頭にいる朱不尽に話しかけている。傍には傳朱蓮も居た。

「小父様、多分この先は心配無いでしょうけど、気をつけてね」

「朱蓮、お前も行くか？ どうせうちに居ても暇を持て余すんだろうが。方崖は長く行っておらんだろう」

傳千尽が言うと、傳朱蓮は少し考える風であったが、首を振った。

「……やめておくわ」

「そうか」

朱不尽は二人とも目を合わさずに地面を眺めているのが気になったが、それについて今聞くことはしなかった。

「では、そろそろ出る」

朱不尽が言うと、傳千尽は頷いた。傍に居た超謙に声を掛ける。

「宜しく頼むぞ」

「はい」

屋敷の用心棒頭の超謙と部下が三人、それと傳紅葵が紅門飯店を出る時に表にいた馬面の男、馬少風の五人が同行する。屋敷の大きな門扉が開かれ、荷駄隊はゆっくりと進み始めた。

「じゃあな」

傳朱蓮は范撞が丁度真横まで来ると声を掛けた。

「ちゃんと朱小父様の言う事を聞いて、お利巧にしているのよ。帰

りにはお菓子をあげるから」

「そりゃあ……ヘッ、楽しみだ」

二人は顔を見合い、笑って離れた。

一行が緑恒を離れてから雨に遇う事は殆ど無く、この日も所々薄い雲が漂うだけで街中が眩しい光で溢れている。傳千尽の屋敷の正門を出ると正面には街の向こうにキラキラと光る湖面が僅かに見えていた。荷を届ける期限の七月が来る。朱不尽は残りの行程の計画を何度も頭の中で繰り返し返していた。

第三章 一

「流浪一天 第三章 一」

一

古びた小さな建物の隅、年季の入った櫛けやきの椅子に、梁媛りょうえんは一人静かに座っていた。開け放たれた窓の外には特に見るものも無く、少し離れて在る山の緑が時折ざわざわと音を立てる。この東淵の街に来てからというもの、何もすることが無かった。時折、洪破天こうはてんが表に連れ出すことはあったが特に目的も無く、ただ辺りを散歩して帰るだけだ。この日、洪破天は梁媛に家に居るように命じ、一人何処かへ出掛けて行った。何度この小さな家の中を歩き回っただろう。特に目を引く物も無く、何度も同じ椅子に座りなおした。かなり粗末な家で、初めて来た時には少し驚いたが、何故か食べる物は豊富にあった。ほぼ毎日、誰かがやって来て食べ物置いて行くのだ。しかもそれは野菜等の材料ではなく、出来上がっている手の込んだ料理なのだ。一体どういふことなのか梁媛は不思議に思ったが、何故なのかを洪破天に聞くことは出来なかった。

梁媛は懷から紫の手巾を取り出し、丁寧に広げていく。その手巾には一対の耳飾が包まれていた。緑色で少し大きめの環が付いている。古い物で細かな傷が無数に付いてくすんでいるが、硬玉で出来ているらしく、非常に高価な物だと洪破天は言った。梁媛は緑のその肌を撫でながら、ここへ来るまでの道中の事を思い返していた。

都から街道へ出た洪破天と夏天佑かてんゆう、そして梁媛の三人は、特に急ぐ事も無く真っ直ぐ東へ向かった。道中、洪破天と夏天佑の二人が交わす会話を、梁媛は殆ど何の話なのか分からなかったが黙って聞いていた。この国の政から通り過ぎていく風物まで、二人の会話は

尽きる事無く続く。しかしその殆どが洪破天から切り出していた。

「媛、大丈夫か？」

時折、夏天佑が梁媛に声を掛ける。

「はい」

「慣れんと尻が腫れるからな」

夏天佑が笑うと梁媛は頬を染めて俯いてしまう。三人が出会ってもう半月近くになるうとしていたが、今になってまるで人見知りする子供のように夏天佑を気にし始めていた。洪破天と夏天佑の付き合いは二十年近くになるという話は聞いていたが、この二人、どうみても親子以上の年齢差があるように見える。夏天佑は自分の年齢の事を一度も口にしていない。見た感じでは大きく見積もっても三十には届かないだろう。洪破天の方は梁媛にとって祖父と言ってもおかしくはない。しかし夏天佑を父と呼ぶには若く、兄と呼ぶには大きい。それほど口数は多くないが、梁媛には夏天佑の自分に対する振る舞いがとても優しく、そしてとても心地よい柔らかなものに感じられて、その度に不思議な鼓動が胸に響くのだ。

東淵とうえんまでの行程が半ばまで差し掛かった頃には天候も次第に悪くなっている、激しい雷雨の中、小さな宿に入った。

「さあ、酒じゃ。ずっとこの天候では気が滅入ってしまうわ」

「昼も飲んでたろう？」

「舐めておっただけじゃ」

「媛、お前も着替えろ。風邪をひくぞ。荷物は持ってきたな？」

「……はい、ここに」

部屋まで運んできた行李には、まだ一度も袖を通していない買っ
て貰ったばかりの服が入っていた。弟、梁りょう発はつの遺骨を濡らすまいと
気を取られていて行李の方は少し雨に打たれていたかもしれない。

「儂等わしが居っては着替えられんわい。さっさと出て酒を飲もう。媛
児、着替えたら来い。腹が減ったろう」

洪破天は手拭で軽く着物を拭いて部屋を出て行く。夏天佑も梁媛に頷いて見せてから続いて出て行った。梁媛は入り口の扉を少し開

けて、二人が広間の席に着くのを確認してから新しい服に着替えた。

「そういえばおぬし、急用がどうのと言っておったな。何かあったか？ 随分ゆっくりとここまで来てしまったが」

洪破天が訊く。

「まあちょっとな。大急ぎで戻らねばならないということも無い」

「東淵を回って行くことは出来んか」

「無理だな」

「方崖ほうがいに行つてからもう永いのう。十年は経っておるな」

「……」

「たまには、東淵にも顔を出さんか」

「ああ」

暫くして梁媛が二人の許へ来て席に着く。

「王喜勝おうきしょうとやらの見立ては、中々のもんじゃのう」

洪破天は梁媛の新しい装いを見て微笑んだ。

二

翌朝には雷も治まり雨は少し弱まったものの、当分止みそうに無かった。洪破天らが言うには東淵に着くまでずっと続くだろうという事だった。夏天佑は突然、信じられない程に驚く事を言った。

「ここでお別れだ」

梁媛は言葉を失ってしまった。洪破天は外の雨を眺めながら溜息をつき、暫く沈黙が続く。夏天佑も雨を眺めた。

「……あの、何処へ？」

梁媛はか細い声で夏天佑に尋ねる。

「俺も家に帰るんだ」

「フッ、家か」

洪破天が外を見ながらポツリと言った。

「俺は東淵の人間では無いのな。もっと北だ。ねぐらに帰るのさ」
そう言って夏天佑は微かに笑う。梁媛はこのまま三人で東淵という街まで行くものと思い込んでいて、それだけに衝撃が大きかった。梁媛は夏天佑にずっと傍に居て欲しいと思った。しかしとてもそれを口には出来ない。悲しみが襲い、項垂れた。うなだ

「方崖……景北港けいほくこうという街じゃ。東淵からはさほど遠くはない。気軽に行ける距離でもないが……。まあ都と東淵に比べれば遥かに近いからのう。また会えるぞ」

梁媛の悲しげな表情をみた洪破天は声を掛ける。夏天佑は黙ったまま表に出て行った。思わず梁媛は立ち上がり、入り口から夏天佑を探す。

「馬を見に行ったのじゃろう。あいつの荷はまだ部屋じゃ」

「……何故ここで？」

「この先で街道は分かれておる。真っ直ぐ行けば東淵じゃ。北へ向かえば景北港へ行ける。東淵からも行けるが、遠回りになるからう」

「濡れるのはどうしようもないな。そっちもそれなりの格好をしておいた方がいいぞ」

夏天佑が戻ってきてそう言いながら部屋に向かう。梁媛は何も言えずにじっと夏天佑の挙動を観察するかのように目で追った。しかし夏天佑の方はその視線を気に留める様子は無い。すぐに部屋から出てきて洪破天と話している。

「覚悟を決めて出ないと、雨季が明けるまでここに居る事になるぞ」
「分かっておる。ま、儂等はぼちぼち行くからのう」

「あの」

梁媛は二人の傍に駆け寄り、夏天佑の顔を見た。

「あ、ありがとうございます」

「ん？」

「あの、色々……」

「俺は何もしておらん。爺さんと東淵で達者に暮らせ。あそこは良い所だ」

「おい」

洪破天が夏天佑を見て顔を顰める。夏天佑は屈んで梁媛の顔を見つめた。

「無事で居ればこの先何度でも会えるだろう。……これを持っていけ。餞別だ」

夏天佑は懷から紫色の手巾を取り出した。広げると緑の輪っかが二つ、鈍い光を放っている。

「おい、それは……」

洪破天が驚いて身を乗り出したが、夏天佑は無視している。

「古ぼけてはいるが、これでも中々の品なんだぞ。耳飾りだ。まだしっかりしてるからな、磨きなおせば元の輝きを取り戻せる筈だ」

再び丁寧到手巾に包むと、梁媛の手を取って持たせる。

「今着けるには大きすぎるが、もっと背が伸びたらきつと良く似合うだろう。楽しみだな」

夏天佑はそっと手を伸ばして梁媛の耳を軽くつまんだ。梁媛は右手で手巾を胸に掻き抱き、左手を耳元にある夏天佑の手に添え、俯いたまま嗚咽する。

暫くそうした後、夏天佑はそっと梁媛の頬を撫でてから立ち上がった。

「じゃあそろそろ俺は行く。気を付けてな。暇が出来たら顔を出すことにしよう」

「そうじゃな……そうしてくれ」

夏天佑が表に向かって歩き出しても、梁媛は顔を上げることが出来なかった。

梁媛は椅子から立ち上がり、くすんだ耳飾りを外から差し込む光にかざしてみた。細かい傷に乱反射する細かい緑の光を、とても美しいと思う。磨かれた本来の姿がどんなものなのかは知らないが、夏天佑が自分に見せた時と同じ、このままがいいと思っていた。

「媛、媛児や」

洪破天の声がする。梁媛はまた椅子に座って膝の上で丁寧に二つの玉環を包んでいると、洪破天が部屋に入ってきた。

「昨日行った紅門飯店こうもんはんてんへ行かぬか」

「はい。……でもまたお酒を？」

「あー、いや、そうでは無い」

辺りに視線を泳がせながら言葉を搜している。

「媛児よ、聞いてくれ」

洪破天は近くにあった埃を被った木箱を引き寄せて腰を下ろした。「紅門飯店で話しておった男は傳千尽ふせんじんと言つてな。あれも古くからの付き合いじゃ。歳は離れて居るが、まあ義兄弟というか……でな、紅門飯店の主じゃ。千尽の家族も、店の者も皆身内の様なものじゃ。お前もこれから家族の一員となる。あ、いや、堅苦しい付き合いでは無い。それでじゃ……」

しきりに頭に手をやり、どうも話すのに苦労している様だ。

「お前はまだまだ若いからのう、本来ならばこれから色々な事を学んで……それだけではないな。こう、遊んだりじゃ。しかし、いつも儂とここに居るだけでは、お前の為にならんと思う。儂は教えるものなど何も無いし。千尽がお前を連れて来いと……いや、何と言うか……とりあえずじゃ、この先ここに閉じこもって居っても仕方ない。お前も楽しくないじゃろう？ あのお店に居れば、儂もいつも行っておるし、さっきも言ったが皆身内の様なもの。安心じゃ……」

とりあえず洪破天の話はひと段落した様で、じっと梁媛を見ている。

「……そうですね。私も働かなければいけないと思っていたんです。

あのお店は大きくて、置いてもらえそうですね」

「働けというのではない。そうではないぞ」

洪破天は慌てている。

「まあ、お前が働きたいと言うのであれば、それは……それで良いのだが。まだそこまで考えずともよい。お前が此処に来てからまだ皆に引き合わせておらんしのう。おう、そうじゃ。傳千尽には娘がおつてな。一番下の娘はお前と歳も近い。儂も孫のように接しておるし、友達に……いや、姉妹じゃな。姉妹じゃ。……媛児、新しい家族に会いに行かぬか？」

梁媛は少し不安を感じた。まだ殆ど知らない場所で多くの知らない人に会わなければならぬ。ふと紅門飯店の前の木の上で出会った少女の事を思い出した。気が動転していてあまり覚えていなかったが、確か「この娘」と言っていた。きっと紅門飯店の事だ。その事を考えると少しだけ、不安が増した。

「媛？」

「……わかりました。私、行きます」

梁媛はその不安を顔に出す事無くしつかりと洪破天を見て、まるで意を決するかのようにはっきりと答えたので洪破天はまた慌てた。

「遊びに行くだけじゃぞ。遊びに行くだけじゃ」

「洪兄さん、上に行ってくれる？ 今日も下は満席よ。あ、ちょっと」

洪破天と梁媛が紅門飯店に入ると、すぐに傳英ふえいが二人を見つけた。酒壺をいくつも抱えながら手招きしている。

「今ね、嫂さんが来てるのよ。兄さんと朱蓮しゅれんも居るんだけどね。嫂さん、今兄さんと喧嘩しててね」

「何？ どうしたんじゃ？」

「紅葵こうきの事よ。兄さん、紅葵を出す事を嫂さんに言わずに決めたのよ。それでね」

「何故話さんかったんじゃ。そのような大事を……」

「まあとにかく上で聞いてくれる？ 私も後で行くわ」

傳英は梁媛を見て微笑む。

「梁媛ね？ 私は傳英よ。また後でゆっくり話しましょ」

優しくそう言う奥の厨房に小走りで入っていった。一階の広間は相変わらず大勢の酔客で溢れている。店の者は皆休む間も無く動き回っていた。

「洪破天様。旦那様は上の左手奥の部屋に居られます」

二階に上がると此処も殆ど空席は見当たらなかった。今度は店の用心棒の超靖ちようせいが二人を見つけ、声を掛ける。更に上の階に上がっていく洪破天と梁媛を二階の客達は何やら話しながら見ていた。

「洪破天様が参られました」

「おう、洪兄、入ってくれ」

三階に上がればすぐに侍女が出てきて洪破天らを傳千尽の居る部屋へ案内した。

「洪兄さん、随分久しぶりね。一体何処に行つてたのかしら？」

部屋に入るとまず口を開いたのは傳婦人、王梨おうり。王梨は傳千尽が東淵に来てから出会った再婚相手で、朱蓮の義理の母、紫蘭しらんの実母である。元々細身の女性だったが、少し見ないうちに更に痩せたように見えた。しかしその身から感じられる気品は変わってはいない。

四

「ほんの二、三ヶ月見ておらんだけではないか。そなたは……元氣か？」

「そうね。少し病んでいるかもしれないわ」

「おい、やめろ！」

傳千尽が王梨に向かって声を荒げて顔を顰めている。

「耳は悪くなつてはいないのよ。良く聞こえます。大きな声を出さ

ずとも」

王梨は冷やかに言うと言顔を背けたがすぐに梁媛の方に視線を向ける。

「可愛らしいお嬢さんね。洪兄さん、色々聞かなくちゃ何が何だかわからないわ」

「ああ、これは梁媛。……出先でまあ偶然と言うか、知り合っている。この娘には身寄りが無い。儂も同じじゃからな。連れて帰って来たわけじゃ」

「洪小父様にとって私達は身寄りじゃなくなったのかしら？」

「朱蓮何を言う。あー、媛児よ。紹介しよう」

洪破天は慌てて言葉を濁して梁媛を前に来るよう促した。三人を簡単に紹介すると、梁媛はその場に深々と頭を下げた。

「梁媛と申します。あ、あの、何でもお申し付け下さい」

「お、お前何を言っておるのだ」

梁媛は恐縮しきっているのか、頭を下げたまま動かない。洪破天が肩を抱き顔を覗き込むと、梁媛は顔を紅潮させて目を閉じていた。

「媛……」

「媛。あなたは今日から私達の家族になるの。私の妹。そうね、何か手伝って欲しい時には頼み事するかもしれないけど、使用人になる訳じゃないのよ？」

傅朱蓮が梁媛の腕を取って微笑みかける。

「まだこの街に来て間もないでしょう？　一緒に外へ行かない？」

小父様、いいわよね？」

「ああ、勿論じゃ」

「さあ、行きましょ」

傅朱蓮は梁媛を連れて部屋を出て行った。

その後、部屋に残った三人は暫く黙ったままだった。王梨が口を開く。

「洪兄さん、あの娘をここに連れてくるのは止めた方がいいんじゃないかしら」

「何を言う。洪兄があの子を孫にするなら、儂等にとっても家族、娘も同然だ。家族は皆一緒に居るのが良い」

傳千尽がすぐに反論する。

「紅葵は居なくなつたわ。朱蓮も時々帰って来るだけ。私もあの屋敷に戻る気にはなれないわ。一緒になんて居ないじゃないの」

「紅葵も朱蓮ももうとつと嫁に行く歳だ。仕方の無いことではないか」

「そうね。紅葵は贅沢な暮らしが出来るんだから。朱蓮は少し心配だけれど、ここに閉じこもっていないだけマシね」

王梨の言葉は十分に含みが込められている。

「いい加減にしろ！」

傳千尽は怒声を放って立ち上がる。

「待て待て。落ち着かんか」

洪破天が二人の間に割って入った。

「儂はただ……梁媛を紹介したただけじゃ。あの子は此処へ来てからずっと儂と二人きり。皆に親しく接してやってもらえればと……」

「洪兄、分かっておる。あの子は儂の娘だ。何も心配はいらん」

「洪兄さん、目を離しては駄目よ。何年後か、突然他所へ遣られるかも知れないわ」

「な、何だと！」

王梨の冷やかな言葉に傳千尽は両眼を血走らせ、怒りの余り顔を戦慄かせている。

「やめろ！ 梨妹もじゃ。全くおぬしら如何したんじゃ」

その時、部屋の扉が少し開いた。

「あ、あのう、旦那様」

「何じゃ！」

「そ、そろそろお時間で……」

男が傳千尽を呼びに来たのだが、覗いた顔が一喝されて顔半分引っ込んだ。

「お忙しい事」

傳千尽はもう一度王梨を睨んだが、袖を大袈裟に翻して入り口に向かう。

「洪兄、すぐ戻るからな」

そう言い残して部屋を出て行った。

「洪兄さん、お座りになって。ちゃんとお酒もあるから」

洪破天は部屋に入ってからずっと立っている。溜息をついて近くの椅子に腰を下ろした。

五

「梨妹、屋敷には戻らんと言うが、紫蘭が居るではないか。放っておく訳にはいかんじやろうが」

王梨は小さく首を振った。

「あの子は父親が大好きだから。それに私のする事には全く興味無いようだし。いずれ朱蓮のように家を出るんじゃないかしらね」

「あれは出て行ったといっても方々を見て回っておるだけじやろう？現に今も帰って居るではないか」

「そうね。あの子はいいのよ。昔は剣に夢中になったりしてどうなる事かと心配したけれど、運が良かったのかしら。……強い子よ。紫蘭の方はどうなることやら」

「そなたは母親じゃ。母親が家を出るなど……」

「紫蘭だってもう少しすれば嫁に出してもおかしくない歳になるわ。まだまだ子供だけねど」

「何じゃ、千尽と同じ事を言うておるわ」

「……紅葵が、私の全てを受け継いでくれると思っていたの」

王梨は下を向いて声を落とした。

「私は紅葵を妓女にしたかった訳では無いわ。でも、あの子に教えた舞も、音律も、化粧の仕方に至るまで全て、私が持っていた、た

だ一つの生きる為の「技」だった。……でも、普通の人には関係ない物よね。紅葵は才能に溢れていた……私が、彼女をこんな目に……」

細い手で口元を覆い、声を震わせる。

「それは違うぞ。それと紅葵の後宮入りとは別の話じゃ。紅葵は頭が良い。まあ、最初は大変かもしれんが、うまくやっていくじやろう」

洪破天は慰めの言葉が見つからず傳千尽と同じ事を言ったが、後宮がどのような所かなど実のところは分からない。

「洪兄さん」

不意に王梨が頭を上げて真っ直ぐ洪破天を見る。

「あの子、梁媛を此処に置く位なら、私に下さらない？」

「何？」

「あの子はまだ真っ白なままだわ。器量も良いし。此処に居ても碌な事にならないわよ。私が色々と教えられる事はあると思うの」

「そなた、言うことがさっきと逆……」

「違うわよ。紅葵の二の舞になんか絶対にさせるものですか。剣も持たせないわ。あの子を……ごく普通の女性に育てたいのよ」

「朱蓮や紫蘭は普通じゃないと？」

「そうじゃないけど……あの二人はそれぞれ自分で道を見つけてゆく……」

王梨は寂しげだ。かつてこの東淵で妓女として名を馳せていた。幼い頃から芸事を仕込まれ、そのみが人生の全てであり、それを誇りに思っていた。自分の生きる「技」であるからだ。傳千尽に嫁ぎ、既に娘が二人。そして紫蘭も生まれた。大きくなった紅葵は義母に憧れた。ただの妓女としての義母には無く、その「技」に向かう精神性にある。王梨と紅葵は親子であり、そして師弟となる。王梨にとって血の繋がりが無い娘というのは、かえって良かったのかも知れない。親から子というよりは師から弟子へと「技」が注ぎ込まれる。天賦の才と言うのだろうか、紅葵は最高の弟子となり、

その名は東淵に留まらず江湖に広く知れ渡る事となった。そして、王梨は紅葵を失う。王梨が紅葵と向き合っている間に、あとの二人の妹は全く別の道を行こうとしている。紫蘭はまだわからないが、朱蓮の奔放さに憧れているようだ。王梨は突然、一人になってしまった様に感じていた。

「梨妹よ。媛児はまだ此処へ来て間もない。……あの子には弟がおってな。二人で故郷から出てきたのじゃ。苦労の連続じゃ。弟は、もう死んでもうたが……。働かねばならんと言っておった。しかし儂は少しでも、今は樂をさせてやりたい」

「洪兄さんの気持ちはわかるけど、あまり長くなるとあの子の為に良くないわ」

「わかっておる。しかしとりあえず……」

「とにかく、ここであちの人々に預ける様な事だけは止めて」

「遊びに来るだけじゃ」

王梨は洪破天に確認するように頷くと立ち上がった。

「私はそろそろ戻るわ。ゆっくりしていらして」

傳千尽が今の大きな屋敷を作る前に住んでいた、古い小さな屋敷に今は居るという。

「洪兄さん、近いうちに梁媛を連れていらっしやいな。遊びにね。忘れないで」

そう言う王梨は出て行き、部屋には洪破天だけになってしまった。まだ手をつけていなかった酒壺が卓上に置いてある。洪破天は頬杖について酒壺を手前に引き寄せた。

六

傳朱蓮は梁媛を連れて紅門飯店を出ると人でごった返す大通りを少し歩いてから脇に逸れ、東淵湖の畔に出る。穏やかな波が涼しげな音を立てていた。傳朱蓮は店を出てから脇目も振らずに梁媛を連

れて歩いた。

「ちょっと座らない？」

通りに面した屋敷の裏、放置されている庭石が幾つか転がっていた。二人は腰を下ろして寄せる波を眺めた。

「あの、綺麗な剣ですね」

梁媛は店を出てきた時から傅朱蓮の腰の宝剑を見ていた。特に凝った装飾があるわけでも無く古い物の様だが鞘もきちんと手入れされていて艶が際立っている。芝居に見られる飾り物のような宝剑ではなくもつと実用的な、良く判らないが優れた物という印象を持った。

「この剣はね。少し地味だけど有名な剣なのよ。あなた剣を触った事ある？」

「少しだけあります。本当に触るだけって感じですけど」

「習ったの？」

「習い始めてすぐに、住んでいた所を離れなければならなくなって……」

梁媛は真っ直ぐ水平線を見つめながら傅朱蓮に故郷の事を少しだけ話した。

「黄龍門おうりゅうもんが無くなってしまったのは本当に惜しいことだわ」

「えっ？無くなった？」

梁媛の話聞いた傅朱蓮の、溜息交じりの言葉に梁媛は驚いた。

傅朱蓮は小さく頷く。

「今の安県あんけんはとても人の住める所じゃないわ……」

梁媛は弟の梁発と共に長い旅をして出てきたが、安県で平穏無事に暮らしていたのはそれほど遠い過去の事ではない。洪水で荒れ果てた大地に襲う飢饉、跡形も無く崩れ去った屋敷。今でも目を閉じればくつきりと瞼に浮かぶ。

「洪小父様とはどこで知り合ったの？」

「金陽きんようです」

「安県から都まで歩いたのね。都か……洪小父様は何故都に行った

のかしらね。聞いてない？」

「詳しくは聞いてません。か、夏天佑様と仰る方について来たと言っておられました。あの、夏天佑様をご存知ですか？」

夏天佑の名を出した途端、胸が高鳴る。洪破天と家族同然という傳朱蓮は夏天佑とも親しいのかもしれない。夏天佑は殆ど自分の事を言わなかった。もしかしたら傳朱蓮から色々聞けるかも知れない。

「夏天佑？ ……わからないわ。この東淵の人かしらね？」

梁媛は落胆した。期待は即座に打ち砕かれてしまった。

「……景北港という所の方だそうです」

「そう。洪小父様は知り合いも多いから。いつも方々に出掛けてるのよ。私も人の事は言えないけれど」

傳朱蓮がそう言って微笑むと、梁媛も釣られて顔が綻んだ。

「朱蓮やないか？」

急に聞こえた声の方へ二人が振り返ると老人が立っていた。

「あら。狗さん」

「ちゃんと儂を覚えとったか、感激ですなあ」

粗末な身形の小柄な老人で、腰に小さな籠を下げている。あと、髪と前歯が無い。おどけた様に笑うその顔は皺だらけだ。

「私は若いのよ？ 狗さんが私を忘れる方が早いと思うけど。媛、

こちらは狗さん。いつも洪小父様と一緒にうちの店でくだを巻くのがこの人の生業なの」

「そうやがな。洪の爺、大事な仕事をほっぽり出して何処行きおったんや……おっ、こりやまた別嬪さんやなあ。どちらさん？」

「洪小父様帰って来てるわよ。この子は梁媛。洪小父様と一緒に暮らしているの。これからは私の妹ね」

「あかんあかん。あんなこんな綺麗なお嬢ちゃんが一緒におるやなんて絶対あかん。で、洪の奴は帰ってきたんか。そうかそうか」

「ええ。今店に居るわ。でも一緒にお酒飲みたいなら夜にして頂戴」
「別に飲みたいなんて思ってたへんわ。儂が行ったらいつでもあれが

居る。きつと今夜も居るんやろなあ。で、媛ちゃんかい？」

「はい。あの、宜しく願います」

「ん？ 儂は今何をお願いされたんかな？」

「ちょっと、狗さん」

傳朱蓮が老人を睨みつけ、老人は首を竦める。

「儂はなあ。狗。狗不死^{くふし}や。『いぬ』やな。死に損ないの狗や。おもういやろ？ 可愛いがったってな」

「はあ……」

この狗老人は舌が良く回る。しかも初めて耳にする訛りで一気に捲くし立て、梁媛が驚いている間に話が終わってしまう。

「狗不死って名前は狗さんが自分で言ってるだけよ。そんな名前付ける親居るわけ無いわ。でも他に呼び名が無いから皆「狗さん」て呼ぶのよ」

七

「で、ほんまに妹になったんか？」

「そうよ。だから、狗さんの孫ね。ちゃんと面倒見てあげてね」

「あかんあかん。お前のお母ちゃんに怒られるがな。儂等が拘ったらまともな娘にならんゆうてな。紫蘭なんかいっつも馬に乗って遊びまわっとるしな」

「馬？ ああ、馬^ばさんね。媛、うちには狗も馬も居るのよ」

傳朱蓮は笑いながら言うが梁媛は何が面白いのか分からない。犬も馬もその辺でよく目にする。

「こちらが狗さん。あと、家の用心棒に馬さんって人がいるの。紫蘭っていうのは私の妹。あなたより少しだけ年上かな？ 今日は見えないわね……。いつもどこかに遊びに行ってるんだから。まあまたいずれ紹介するわ。よく馬さんも辛抱できるもんだわ」

「あいつは今景北港行つとるやろ？ 骨休めやな」

「景北港、ですか？」

梁媛が狗老人の言葉に反応する。

「そや。紫蘭のお守りより仕事しとるほうが気が休まるわ。ハハ」

「景北港は遠いのですか？」

「んーどうかしら？歩いて十日ってどこかしらね」

「あの馬公一人なら三日で行きよるんとちゃうか？」

「いくら馬さんでも疲れちゃうわよ。…でも、行けるかもね」

梁媛は二人の言っている『馬』というのが馬なのか人なのか混乱してきた。

「その夏って言う人も恩人って訳よね。景北港の」

傅朱連は梁媛を見ながら言う。

「はい」

「狗さん。洪小父様の知り合いで夏っていう人知ってる？夏……」

「夏天佑様です」

「洪の知り合い？……知らんなあ。恩人でなんや？」

傅朱蓮が梁媛から聞いた都での話を掻い摘んで説明する。

「洪の奴、儂に黙って都に遊びに行ったんか。きつと旨い酒飲んで来たんやろうなあ。なんか腹立つな。それにしても……」

狗老人が梁媛の顔を覗き込んだ。

「お嬢ちゃん、運がええわ。あの爺に助けられるやなんてなあ。あれはな、ほんまはな、人が死にかけとったら止めを刺しに行くような奴やで」

「狗さん！ やめて！」

「違うか？」

「……もう行って頂戴」

「ああ、儂が悪かった。儂と洪は何ちゆうかこう……、こんな事言い合って仲良く暮らしとんや。お嬢ちゃん、夏天佑やな。儂が調べたるわ」

「別に調べて貰わなくなたって洪小父様に聞けば済むんだから狗さんの手を煩わせるまでもないわ」

「洪の奴、多分言わへんな。儂は奴の事は何でも知つとる。酒飲んだら儂の興味の無い事まで話しまくるんや。夏なんて名前一回も聞いた事無い。余程隠さなあかん何かがあるんやて」

余程自分の考えに確信があるのか、今までと打って変わって真面目な顔で話す。梁媛はじつと狗老人を見つめて話を聞いていた。

「都に知り合いの方が居られました。史さんと仰る方がやっておられる宿にお世話になって…」

「お嬢ちゃん、史なんて都に何人居る思てんねん。そんなん分からんわ」

「もう狗さん。もうちょっと優しく話せないの？」

「あの、総監そうかんと呼ばれる方も居られました」

「……何やて？ 総監て何処の総監や」

狗老人と傅朱蓮が顔を見合わせている。

「お嬢ちゃん。その総監て呼ばれとる奴も夏とやらの知り合いなんか？ そいつも都に居ったんか？」

「いえ、その、夏天佑様を総監と呼ぶ方が居られました」

「夏天佑を、かいな」

またも二人は驚いた表情で顔を見合わせた。

「景北港の奴で『総監』か……。夏天佑なあ」

「媛、どんな人だった？ 顔とか……」

八

梁媛は二人に夏天佑という人物の事を説明しようとするが、人の容姿をどう言えいいのか分からずに苦勞していた。若そうな人であるという事とどちらかと言うとぶっきら棒な印象、旅人のような出で立ち、少し細身、剣は持っていたが武芸が出来るのかどうかは分からない、史という宿の主人が緊張している様だった、そんなところである。

「朱蓮、なんかおもしろなってきたな。殷総監いんかもしれへんで」

「……あの人が？ 都に？」

「でも、洪お爺様が『夏天佑だ』と仰ったのです」

「儂が都に行った話を聞き出したる。なんか分かるやろ。朱蓮、夜に店行くわ。お前さんまたどっか行くんか？」

「んー今の所予定はないわ。暫くゆっくりする」

「そうか。ほんなら、またなあ」

そう言って句老人は大通りの方へさっさと行ってしまった。梁媛は溜息をついた。

「媛、きつとその人にもまた会えるわ。この街は景北港との繋がりが深いから」

梁媛には傳朱連の行った繋がりというのがどういう意味なのか良く解らなかった。傳朱蓮は話を続ける。

「この街は人が一杯居るけど、きつとすぐ慣れると思うわ。あの狗さん、変わってるけど良い人よ。店に来る人達もこう、仲間みたいな感じね。家族なの。うちに集まる人間って何故か解らないけれど大抵過去に家族を失ってるの。だからかも知れないわね。やたら家族が増えるの」

傳朱蓮は笑っている。

「媛、これからはここの人達に頼っていけばいいの。お互い様よ。時間はたっぷりあるわ。一杯話しましょうね」

梁媛は静かに頷いた。

「もうちよつと先に行って大通りを歩いて帰ろうか」

傳朱蓮は立ち上がる。梁媛もすぐに立ち上がって一緒に歩き出した。静かな東淵湖とうえんこの畔を眺めながら、梁発が居ればきつとはしゃぎまわっていたに違いないと思った。

「あら、何？ 洪兄さん一人？」

紅門飯店、洪破天が一人で酒を飲んでいる部屋に傳英が入ってきた。

「皆、忙しい様じゃな。店はいいのか？」

「ええ、大丈夫。ちよつと用があつて出てた郭さんが戻ったから。あの子は朱蓮と外へ出たみたいね」

傳英はいつも忙しく働いていて、開ければ常に客の溢れるこの店を切り盛りするのは大変な事だが、傳英は皆が感心する程よく動く。いつも他に用が無ければ必ず店に出て殆どの客に声を掛けています。

「梨妹は当分戻る気は無いようじゃ。紫蘭はどうしておる？」

「たまに嫂さんの所に行つてゐるみたいだけど長居はしないみたいよ？　あまり楽しくないって」

「……紅葵か。そんなに入れ込んでおつたとはのう」

「普通逆じゃない？　実の娘じゃ無いのよ？　まあ、血の繋がらないてうちでは殆ど関係ないけどね」

「時が経つのを待つしかないのう」

「そうね。でも、紅葵と入れ替わりで梁媛が現れた……きつと嫂さんが放つて置かないんじゃないかしら？」

傳英の言葉に洪破天は驚いた。まるで先程の王梨の話の聞いていたかの様だ。

「何故そう思う？」

「昨日、媛を連れてきたでしょ。あの時、何だか懐かしい気がしたの。ちよつと大人しい感じで顔立ちが整つてて、昔の紅葵みたいって」

「……そうだったかのう？」

洪破天は傳紅葵の幼い頃に思いを致す。傳千尽らと各地を放浪している時に出会った孤児。やはりあの時も亡くなった孫娘の影を拭えなかった。千尽が連れて行くと言つた時、育てられぬと反対した。本心はおそらく自分が紅葵の姿を見るのが辛かつたからだ。しかし千尽はどうしても連れて行くのと言い張り、赤子の朱蓮を背に括り付け、紅葵の手を引いて歩き出す。今でもはつきりと思ひ出せる。そしてこの東淵で美しく育つていく紅葵を見て羨ましく感じるようになった。千尽と紅葵は本当の親子になったのだ。自分も梁媛をそ

のようにしたいと考えたのだろうか？

「まだあの子も来たばかりだし何が何だか分らないんじゃない？それに弟を亡くしたって？暫くは彼女に負担を掛ける事は良くないわ。連れて帰ってきて正解よ。でも、今は兄さんと嫂さんがあんなだから、洪兄さんと一緒に居るのが良いと思うわ。」

洪破天は頬杖を着いたまま動かない。

「じゃあ仕事に戻るから。朱蓮達もじきに戻るでしょう」

九

傳朱蓮と梁媛は店に戻り洪破天と話していると、暫くして店に顔を出した傳紫蘭が部屋へやって来た。梁媛の許へ来ると大きな瞳をくるくると動かしながら眺めている。

「あんただったんだ。お爺ちゃんが拾った子って」

「紫蘭、やめなさい」

傳朱蓮が眉を顰めてたしなめる。

「いいじゃない。何か違う？」

傳紫蘭は梁媛に向かって訊ねる。

「いえ、……そうです」

「紅葵小姐様だってそうでしょ？ そんな事此処では何でもないわ。私は紫蘭。宜しくね」

「あの、こちらこそ……」

梁媛が返事し終わるのを待たずに傳紫蘭は出て行こうとする。大して梁媛に興味は無いといった感じである。

「ちよっと、今来たばかりじゃない。洪小父様にも挨拶を……」

「そんな改まって言う事何も無いじゃない。ねえお爺ちゃん？」

「まあ、そうじゃな。……何処へ行くんじゃない？」

「暇で仕方ないわ。お父様がお馬さんを景北港に行かせたから遊べないわ。帰って寝ようかしら」

「あなたねえ、一体幾つになったの？　そろそろ叔母様の手伝いでもしたらどう？」

「あら、あたしお父様に叔母様の邪魔をするなって言われてるからじゃあね」

「ちよつと」

傳紫蘭は聞こえない風でさっさと部屋を出て行った。いつも馬少風ばしょうふうを引っ張りまわして遊びまわっている傳紫蘭は暇を持て余している。その馬という男は元々用心棒で、いつの間にか傳紫蘭のお守り役にされてしまったが何も言わずにいつも付いて歩いていた。傳千尽はこの末娘が問題を起こさないように馬少風が付いてまわるのを認めていたが、今は朱不尽のヒヨウ局に同行させているので傳紫蘭には余り出歩かぬようきつく命じていた。

「ほんとこの先どうするつもりかしら……。お父様もほったらかしよ」

「馬少風を景北港にやったと？　何がある？」

傳朱蓮は朱不尽しゅふじんのヒヨウ局の話を洪破天に聞かせた。

「そういえば会ったな。話してはおらんが。そうか、方崖へ……」

「ねえ、こっちも聞きたいんだけど」

傳朱蓮はちらつと梁媛を見てから洪破天へ視線を戻す。

「夏って言う人、方崖の人かしら？」

「ん？　誰じゃ？」

「夏、天佑」

洪破天は額に手を遣って考え込む。

「はて……？」

洪破天は本当に覚えていない様に見える。梁媛は驚いた。

「あの、都で一緒に居られた、夏天佑様です」

「あ、ああ、そうじゃ。そうじゃな。夏天佑な」

傳朱蓮はじつと洪破天の目を覗き込んだ。

「つい忘れてしまっておったわい。夏がどうした？」

「どうしたって。その夏って人も媛の恩人なんでしょ。どういう人

？」

「どう、と聞かれてものう」

「何か隠さなければいけない事でも？」

「無い無い。夏という知り合いがおつて、二人でこの、梁媛達を見つけただけじゃ」

洪破天は大袈裟に手を振ってから腰を上げた。

「そろそろ帰るか。媛児や」

「洪小父様。……媛にはちゃんと教えてあげてね。あ、それと、狗さんが寂しがってたわよ？」

笑って言う傳朱蓮に、

「ハッ、あれが寂しがるだど。そんな馬鹿な事があるか」

洪破天は振り返りもせずになんか言いながら出て行く。梁媛は傳朱連に頭を下げてから急いで付いて行った。

十

朱不尽率いるヒョウ局の荷駄隊は東淵を離れて二日、順調に景北港へと進んでいた。真夏にも拘らず時折心地よい風が通り過ぎ、眠気を催す程である。ここから景北港までは特に難所と呼べる所も無く、暫く丘陵地帯が続いた後は何も無い。

「最近ほくしんは北辰の長老方もあまりお見えになりません。まあ、平和になったと言うんですかね。前はもっと物々しい雰囲気がこの辺の街道にはあつたんですが……」

東淵から同行している傳千尽の屋敷の用心棒、超謙ちようけんが朱不尽と馬を並べて話している。

「確かに。我等には有難い話かもしれんが」

「いや、そうとも言い切れませぬ。昔は北辰の方々を其処彼処で見受けられましたが、最近はお出でにならなくなって今度は得体の知れないごろつきが増えたのです」

「しかし……どのような者であろうとこの一帯で悪さは出来まい？
北辰の目はあろう？」

「どうなんでしょうねえ。あまり大きな声じゃ言えませんが、前は北辰の人間はこう……鬱陶しい位に北辰の威光を振りかざすというか……最近はその様な者達も減りました。あ、ここだけの話ですよ？」

「ハハ、分かっている。俺も、とてもそんな話を口には出来ん」

「北辰と全く縁の無かった人間も結構流れて来ています」

「ふむ。教主が代わられてもう数年……しかし、長老衆は入れ替わっておらんのだろう？ 殷総監も居られる。あと……何と言ったかな？ 教主に付いている……」

「張新様ちやうしんですか？」

「おう、そんな名だったな。その者も前教主に仕えておったのだろう？」

「はい。詳しくは存じませぬが前教主様が張新様を教主様の教育係に任じられたとか」

「何故変わり始めたのだろうか？」

「我等には全く見当もつきませぬ」

朱不尽は太乙北辰教の総監が副教主になるかも知れないという傳たいつほくしんきやう千尽から聞いた噂話を思い出した。北辰教の長い歴史の中で副教主が居た時代はおそらくあっただろうがそれはかなり前の筈で、長い間副教主という肩書きの人間は居なかった。

「傳……朱蓮さん、何処で剣を習ったんだろう？」

不意に楊迅ようしんが范撞はんどうらに話しかけた。

「ん？ さあ……何処だろうな」

「一応ちゃんとした基礎はある様だな。我等の剣と似た動きもあったぞ」

田庭閑でんていかんが言う。

「真武剣てのは正式な門弟じゃないと習えねえんだろ？」

「ああ、そうだ」

「ま、何処の何だろうと突き詰めれば似たようなもんになるんだろ」

「素人が分かった風な事を言うな。真武剣は武林でただ一つの剣、最高の剣だ。他の門派に真似など出来るか」

「ほーう、どう違うんだよ？」

「……一目瞭然だ。いずれお前達も真武剣の使い手に合えば肝を潰すさ」

「ハハ、お前はまだ使い手じゃないのか？ 残念だな」

「……」

「何だよ！ そこで何か言い返せよ！」

范撞は笑っているが、田庭閑は言い返すどころか黙り込んでしまっている。

「まあ、あいつが真武剣に入るなんて想像できねえし、関係ないだろうな」

「凄く綺麗だった……」

楊迅が呟くのを聞いて范撞は目を丸くした。

「もしかして、惚れたのか？」

「……え？ あ、いや、剣術だよ。こう、迷ってないというか、完成してる感じがした。俺なんか全く歯が立たないだろうな」

楊迅は傳朱蓮が羨ましかった。どのような縁で剣を持つようになったのか分からないが、凄腕の師匠にでも出会ったのだろうか。自分に比べればそれほど歳も違わないのに遥かに優れた腕を持っている。

「嫉妬か？」

「え？」

「女が自分より強いなんて癪に障るよな」

「別にそんな事は……。俺より強い女の人なんて山のように居るさ。それに俺はまだまともに 修行した事もないんだから、弱くて当然さ」

「お前、習ったこと無かったのか？」

黙っていた田庭閑が驚いたように楊迅に訊ねる。

「うん、まあ。小さい頃少し教えて貰っただけで」

「俺はてつきり何処かで習ってるものだと思ってた。割と、さまになつてたじゃないか。何処で教わったんだ？」

「……田舎だよ。安県って知ってるだろ？」

「黄龍門か……」

「緑恒りよくじょうに戻ったら爺さんに習うんだろ？ 本格的にやりやあ凄えとこまでいくぜきつと」

范撞が話に割って入る。

「爺さんて誰だ？」

「居るんだよ。緑恒にも凄え爺さんがな」

「緑恒に？ 聞いた事無いな」

「陸りくって爺さんだ。陸……何て言うんだ？」

范撞は楊迅に顔を向ける。

「それが、聞いた事無いんだ。ただ、陸って言うだけで」

「なんだそりゃ」

「陸……まさか陸豊りくほうとか言うんじゃないだろうな？」

田庭閑が言う。

「知り合いか？」

「いや、会ったことは無いが……緑恒に居るわけないか」

「ん？ 伊いさんが戻って来た」

楊迅は前方に目を凝らした。伊というのはヒョウ局の先触れの一
人で、先行して警戒に当たっている。

「朱ヒョウ頭！」

「どうした？」

「先の林の辺りに怪しい者を見ました。男が五人居ます」

「怪しい？　どのような？」

「林に入って行ったのですが、山仕事をする様な姿ではありません。皆、剣を帯びていました」

「顔は？　見たか？」

「離れて居りましたので……。旅の装束の様でしたが、剣の他に何も持っていないようでした」

朱不尽が辺りを見回したので周りの者も同様に目を凝らす。が、近くに異変は無い。

「よし、見てみよう」

朱不尽が言うと、横にいた超謙が、連れてきた部下を手招きする。
「我等も参ります」

朱不尽は頷き、後ろに居た王ヒョウ頭に声を掛けると隊を離れた。王ヒョウ頭が他のヒョウ頭達に朱不尽の指示を伝える。

「魯さん、何だって？」

「物見だ。不審な者が先に居るらしい。周辺を警戒しろ。離れるな」

朱不尽らが先へ進むと街道は右手前方の林のすぐ傍に向かって伸びている。反対側、左手一帯は畑がずっと続いており見通しは良かった。

「朱ヒョウ頭、この先の、道が林に接する辺りです」

朱不尽は頷いた。

「ゆっくり行くぞ。林を覗かぬ様にな」

一同は速度を緩めた。先触れの伊が朱不尽の横について進み、超謙らも後に続いた。朱不尽は周囲の景色を眺める様な仕草で時折林にも目を遣るが人の気配はない。先に目を遣ると数軒の民家、酒の看板も見えた。

「とりあえずあそこまで行って止まるぞ」

再び密かに注意を払いながら進んだが、怪しい者の姿は見えなかった。

「確かに入っていったのですが……。奥まで行ったのでしょうか？」

「かもしれん。だが、油断は出来ん」

朱不尽らは酒の看板の下がった酒店の前に着いて、立ち止まった。

「どうしますか？」

「どうしようもないな。引き返すしか――」

「朱ヒョウ頭！ あれを！」

超謙が突然、声を上げる。皆一斉に來た道を振り返ると、林から街道へ数人の男が現れた。男達は皆一様に黒の覆面をしており装束も黒い。

「くそっ！ 戻るぞ！」

「道が塞がれています！」

「突破する！」

林から姿を現し始めた男達は五人だけではない。あっという間に十数名となって街道を塞ぐように並び、黒い壁が出来上がっている。

十二

「離れるなよ！」

朱不尽が真っ先に剣を抜くと馬の腹を蹴って駆け出し、超謙と部下達も剣を手に続く。覆面の男達は朱不尽達が迫ってくるのをただ見ているだけで動く気配が無く、剣に手を掛ける者すら居ない。

（どういうつもりだ？）

朱不尽はその様子を不審に思ったが、速度は落とさない。別働隊が居てすでに隊を襲っている可能性があった。

「止まれ！」

覆面の男達の後ろから馬に乗った男が二人現れた。どちらも姿は同じ、黒い覆面姿である。

「朱不尽だな！ 止まれ！」

声を発しているのは左側の男だ。布で口が覆われているが凄まじい音量で、辺りに響き渡る。突如、朱不尽の乗った馬が声を恐れた

のか立ち止まろうとする。朱不尽は前のめりになりながら投げ出されそうなどころをなんとか堪えた。

「お前達、何者だ!? 前に寺で我等を襲ったのもお前達だな!?」

男達は答えない。黙ったまま腰の剣を抜いた。

「お前等何処の者だ? この地でこのような真似をするとはな! よそ者か!？」

超謙が剣をまっすぐ突き出して男達に問いたです。しかし馬上の二人の男は互いに顔を見合わせただけで何も言わない。覆面から僅かに覗いた目からは表情は窺い知れなかった。

「まあ少し遊んで行け。千河幫の朱不尽殿」

先程声を発していた男がゆっくりと馬を降りる。すぐに背後の手下が手綱を取って脇へ寄り、それと同時に道を塞いでいた者達が二手に分かれて道を空ける。

「馬鹿な……。何の意味がある? どけ!」

「意味は無いが、俺達は今、暇でな」

男は自分の剣を眺めている。

「フン、我等は遊んでいる暇は無い。通してもらおう」

「まあ、とにかく馬を降りた方が良いな。おい、お前等、朱不尽殿が馬で通られる時には馬を切って降りていただくのだぞ」

振り返って部下達に言う。覆面の男達は全く表情を見せないが微かに笑い声を発している様だ。

「奴等を切らぬ事には戻れませぬ。朱不尽殿……」

超謙が朱不尽の傍に寄って小声で言う。

「駄目だ……多すぎる」

朱不尽らは一旦引き返して覆面の男から離れる。追ってくる気配は無く、単に朱不尽の足止めが目的の様だ。馬で現れた二人が賊徒の頭目であろうか。それ以外は皆同じ配下の者だろう。馬を降りた男は腕に覚えがありそうだ。もう一人、まだ馬に乗ったままの男も腕が立つと見た方が良い。

「全部で十六名居ります。恐らくあの二人さえ抑えれば後は我等で

何とかできると思います」

「こっちは七人だぞ。……俺は何が何でも戻らねばならん。俺はいが、危険すぎるぞ？」

「こういう時の為に我等は来たのです。確かにいきなり不利な状況ですが、ここで働かねば」

超謙はそう言うのとニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「少風」

「ん？」

超謙の後ろに居た馬少風が答える。

「我等は今からあの覆面の奴等の所へ切り込む。お前、あの馬に乗った奴と隣をぶらぶら歩いてる男、剣を抜いている奴がいるだろ？あの二人に当たれ」

先に目を遣ると覆面の男達は全く動いておらず、時折こちらを眺めるだけだ。

「強かったらどうする？」

馬少風の口調は平坦で、今の状況を理解しているのか疑わしい程だ。

「倒せなくても良い。我等が他の奴に当たっている間、引き付けろ。そうだな……あの馬に乗ってる奴、あれも引き摺り下ろしておくんだ」

「解かった」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ」

朱不尽は慌てた。

「あの二人が一番厄介そうだぞ？いくらこの……馬殿が……」

「朱不尽殿。心配は無用。フフ、面白いものが見れますぞ。あ、朱不尽殿は隙を見て抜けて下され。我等が奴等を引っ掻き回してやりますよ。朱不尽殿は馬で」

「しかし……」

「朱ヒヨウ頭。朱ヒヨウ頭には何としても隊に戻っていただかねばなりません。私は超謙殿と共に奴等に当たります」

先触れの伊が言う。その目には強く力が込められていた。

十三

他の賊徒の中には腕の立つ者も居るかも知れないが、超謙は殆ど気にしていなかった。とにかく朱不尽を突破させればよく、こちらの倍以上居るとはいえ十六人程度。ヒョウ局の荷駄隊は遠く離れている訳でもない。頃合を見計らって逃げ出し、隊に合流すれば良いと考えた。荷駄隊が無事なのかどうかは分からないが、今それを考えても詮無いことだった。

「少風、これを使え。お前の剣と交換だ」

「ああ」

超謙が差し出したのは自分の持っていた宝剣で、キラキラと輝き切れ味も良さそうだ。馬少風は受け取り、変わりに古びた軟剣を超謙に手渡した。

「我等も適当なところで隊に戻ります。じゃあ、行くか」

「応」

超謙は馬少風ら四人の部下に声を掛け、ゆっくりと馬を進ませる。

「無理はするなよ……」

朱不尽が言う。それ以上何も言えなかった。超謙らの手管がいかにどの物が全く知らないが、何故かこの男達は何も恐れてはいない。一体どのようにして賊に当たるのか興味が湧いた。

「どうするね？」

超謙を先頭に再び覆面の男達に近づくと、先程から剣を手に辺りをぶらついていた男が声を掛ける。超謙が片手を挙げ、その場で馬を降る。同時に他の五人も馬を降りた。朱不尽は後方で男の挙動をじっと見つめていた。

「折角誘って貰ったんだ。少しばかり遊ばせて貰おうか」

超謙が剣を体の前に真っ直ぐ立てて男に見せる。

「俺は朱不尽殿に言ったのだが？ 出来る事なら名のある奴と遊びたいな」

「じゃあ、これを機会に名を覚えてもらおうか」

もう一人の馬上の男が下がり、配下の男達が再び横に並んで立ち塞がった。

「先に名を聞いておかんな。俺の名は求きゅう。あんたは何と言う？」

「……馬少風」

「馬少風？ どこかで聞いたが……」

「馬少風は俺だぞ」

馬少風が超謙に言う。

「何？ 訳が分からん。ふむ、確かにその馬面の方が名に合ってるな。で？ あんたの方は名無しかい？」

求と名乗った男が超謙に訊ねる。

「あんたが無事で居られたら教えてやろう」

「……俺はいつでもいいぞ。来いよ」

求が剣を突き出し、切っ先を超謙に向けて構えた。

「さっさと来い。そっちの馬面でもいいぞ」

「伊殿、始まったら俺達から離れん様にな」

超謙は男を無視するようにヒョウ客の伊に言う、朱不尽に目を遣り黙って頷く。朱不尽の方も頷き返した。

「おい、もういいのか？」

馬少風が超謙から受け取った宝剣を振りながら訊く。

「馬に乗った男が後ろに下がったろう？ まずはあの求とやらと遊んでやれ。もしカタがついたら他のは放っておいて馬に乗った奴だ。いいな？」

「解った」

「おい何だお前、そんな剣、本当に使えるのか？ 怪我するなよ」

求は構えを解いて馬少風の持った宝剣を見て笑った。馬少風は時折素振りのような仕草をして見せるが、そこには全く型も何も存在

しない。まるで子供が棒切れを振り回す様な動きだ。

「お前、構えなくていいのか？」

馬少風が求に訊く。

「必要になったら構える事にするさ。おい名無し。やるのかやらんのか？ 早くしろ」

「……よし、やろうか」

超謙は微かに笑みを浮かべながら馬少風の背中を軽く叩いた。

「おい、やるぞ」

馬少風が求に声を掛けた瞬間、求が後方によろめいた。超謙の横に居た筈の馬少風が先程まで求の立っていた場所に居る。後ろで見ていた朱不尽は目を見張った。

（な、なんだ！？ どうなった！？）

「て、てめえ……」

求は鼻から血を流している。手の甲で拭き取るが、すぐにまた流れ出した。周りの覆面の男達が一斉に剣を抜く。求は手を伸ばしてそれを制した。

「ちょっと驚いたが、フン、楽しめそうだな……」

「それは良かったな」

馬少風が相変わらず低調な声で答えた。

十四

求はいきなり剣を真一文字になぎ払うと馬少風は後ろに下がってよける。「見切る」などというようなものではない。体を大きく動かして逃げたのだ。その挙動があまりにも滑稽で、普通なら失笑を買うところだが、覆面の男達は僅かに覗く目を大きく見開いて固まっている。

「お前……お前が馬少風か」

「さつき言った」

馬少風は宝剣を構える事をしない。時折ぶらぶらと揺らしながらじっと求を見ていた。

「少風、早くしろ！」

超謙が言うと馬少風は宝剣を振り回し始めた。無茶苦茶に、である。求は剣を正面に突き出して構え、じっと目を凝らしている。

「いくぞ」

馬少風が言うや否や、宝剣があらゆる向きに回転しながら求に襲い掛かる。その凄まじい迅さは求自身は勿論、超謙ら傳千尽の用心棒を除いた全員が驚愕する。求は声を出す暇も無い。地面に伏せ、転がりながらなんとか宝剣を避けた。馬少風はすぐに向きを変え、求に襲い掛かる。が、相変わらず剣は出鱈目に振り回されているので求はなんとか自分の剣で受け流す事が出来る。

「お、お前何なんだ！」

ようやく立ち上がって体勢を整えた求が剣を突き返す。今度は馬少風が逃げ回り始めた。求の剣裁きは流れるようで、書の一筆書きの様に連綿と続き、馬少風を追う。

（あの男の剣術は中々の物だ……。一体どこの人間だ？）

朱不尽は求の手筋を探るべくその剣術に見入っていた。

求は焦り始めた。剣がこの馬面の男に届かない。無様とも言える馬少風の体裁きが異様に迅く、尋常ではない。暫くそんな状態が続いて、ようやく後ろで見ていた覆面の男達が剣を構えて馬少風を囲み始めた。

「そろそろ俺達もいくぞ。ほれ、あの少風を囲んでおる奴等からだ。一気に行くぞ」

超謙らが一斉に、馬少風に気を取られて背中を見せている男達に飛び掛かる。瞬く間にあっけなく四人が切り伏せられた。超謙らは息もつかずに残りの覆面の集団に切り込んでゆく。超謙の見立て通り、賊の手下達はそれほど使い手と呼べる者は居らず、次々に倒れていった。

朱不尽は半ば呆氣に取られていた。超謙らがいとも簡単に賊を切り崩してゆく。馬少風などは求の相手をしていたかと思えばいきなり跳躍すると賊の固ま^{けいこう}っている場所に飛び込んで暴れまわっているのだ。あれを輕功と呼べるのなら、凄まじい使い手だ。あれを驅使すれば劍は持っているだけでいい。実際に馬少風に突っ込んでいった敵はあっけなく傷付けられていた。

「朱ヒヨウ頭、早く！」

伊が近くに来て叫んだ。朱不尽はハッと我に返り、馬を走らせる。賊の一人が気付いて朱不尽の馬に飛び掛ったが、伊の劍がその体を貫く方が迅かった。

「クソったれめ！」

求が叫び、超謙に襲い掛かる。超謙は求の繰り出す劍を数手受け流して後方へ跳躍し、求が追いかけてようとすると再び上から馬面が舞い降りる。

「……化け物めが！」

「化け物？ 俺がか？」

馬少風は全く息が乱れていない。相変わらず低い平坦な口調で言った。二人の後ろでは超謙と部下が言葉を交わしていた。

「超さんどうする！？ そろそろ退くか！？」

「あと二、三人やったらな！」

「どうせなら全部やろう！」

まだ大して時間は経っていないが十六人いた覆面の男達は求と馬に乗った男以外、たったの四人しか残っていなかった。

「求！ もういい！」

突然新たな声加わった。ずっと馬に乗ったままの男だ。最初からじっとしたまま動いておらず、先程朱不尽が賊の間を抜けて行った時も、全く動かなかった。

「もう向こうも終わってる。おい、お前達、もう通っていいぞ」

男がそういうと残った四人の手下達は半ば逃げるように馬上の男の周りに集まった。

「終わるって何がだ？ 偉そうな口を聞くじゃないか。フン、本当は自分もやられそうなんで、逃げ帰りたいんだろ？」

超謙が言うと、

「俺はまだやられてねえ！！」

突然、求が咆哮する。さっきまで求と対峙していた馬少風がくると踵を返して超謙の傍に歩いて行くが、求はじっと背を見つめながら何も出来なかった。

十五

「終われるなら、終わった方がいい」

馬少風が超謙に言う。

「お前は黙っておれ」

超謙は剣を握り締めたまま男をじっと見据えている。求も男の傍に戻り、双方睨み合うように対峙していたが、男が馬首を翻して林へと走り出すと手下達も続く。求は再び馬に乗って超謙を見た。

「名は何だ？」

超謙はニヤリと笑い、

「超」

ただそれだけ言うと剣を腰に戻す。求は馬少風をもう一度眺める。馬少風は腰の剣の位置を気にしていて目は合わなかった。

「フン」

短く鼻を鳴らして、林の中へと駆けて行った。

「よし、急いで戻るぞ」

超謙らは馬に戻り、朱不尽の荷駄隊へ向かって走らせた。

街道を戻り荷駄隊の居た場所まで戻ると、超謙らは一様に言葉を失った。車にしっかりと括りつけられていた荷が辺りに散乱し、あちこちでヒョウ客達が倒れている。中には大量に血を流し、既に死

んでいると分かる者も居た。半数以上が地に倒れ、残った者達も傷を負いながら仲間の遺体の傍で呆然と座り込んでいた。

「朱不尽殿は！？ 朱不尽殿！」

超謙らは辺りを見回して叫ぶが、朱不尽の姿が見当たらない。

「おい！ しっかりしろ！ 朱ヒヨウ頭はどうされた！？ 戻ってこられただろう！？ おい！」

先触れの伊が地面に座り込んでいるヒヨウ客の肩を揺する。

「朱ヒヨウ頭は……奴等を追って……」

伊は再び辺りを見回すが、皆力なく項垂れてまともに動けそうな者は見当たらない。

「……伊……伊よ……」

微かな声が聞こえ、伊が振り返ると、顔が真っ赤な鮮血に染まった男が横たわって居り、腕を伸ばしていた。

「か、解ヒヨウ頭！」

伊はすぐさま傍に駆け寄る。見れば解ヒヨウ頭は腹を切られており、切り刻まれた衣服に混ざって臓物の一部が見えている。

「……解ヒヨウ頭……」

「伊……荷を……集める……まだ残って……朱……戻られる」
「解よ……」

魯ヒヨウ頭が剣を手にしたまま駆け寄ってくる。その剣はまだどす黒い血がべったりと付いていた。

「解よ！ しっかりせい！」

「景北……もうすぐ……だ……魯……」

解ヒヨウ頭は薄っすらと目を開けたまま動かなくなった。

「おお……おお……」

魯ヒヨウ頭は剣を落として解ヒヨウ頭に覆い被さるように付したまま、ただ嗚咽するばかりである。

超謙らと動ける僅かな者達で散乱した荷を集める。どうやら賊は荷の一部を持ち去り、残りは破壊しようとした様で、残っていた物は多くが傷つけられており、無事な物は僅かしか無い。荷車が一台

失われ、まともな荷は一台分。残りは多くの遺体を積む事になってしまった。超謙の部下の一人が荷車の下でうずくまっている田庭閑を見つけた。

「おい！ お前無事か？ 動けるか？」

田庭閑は自分の剣を抱えて震えている。黙ったまま何度も頷いた。「動けるなら出て来い。ん？ その者は……？」

田庭閑の傍にもう一人横たわっているのが見えたが、じっとして動かない。

「こ、これは楊迅です。怪我を……」

田庭閑が震える声で言う。

「生きておるんだな？」

「は、はい」

田庭閑がもぞもぞと這い出して荷車を動かすと、楊迅が苦しんでいる様子で体を丸めて横たわっていた。

「何処をやられた？」

超謙の部下は楊迅の押さえている胸元をそっと開けて見ると肩の辺りから腹部にかけて長く袈裟懸けに切られている。辛うじて致命傷になるほどの深さは無かったが、出血も酷く、相当痛みが激しそうだ。

「手を貸せ」

田庭閑に言って二人がかりで荷車に載せる。すぐ横には遺体が並べられていた。

十六

暫くして朱不尽が空になった荷車と共に戻って来た。荷車を引く馬に乗っているのは范撞であった。

「朱ヒヨウ頭……」

魯と王の両ヒヨウ頭が駆け寄る。朱不尽を見つめて言葉を待った

が、朱不尽は何も言わずに通り返る。散乱していた荷は殆ど片付けられ、空いた荷車には積み上げられたヒョウ客達の遺体。

「……この荷車にも並べるんだ」

そう言つて朱不尽は一番上の遺体を大事に抱きかかえると、一緒に戻つて来た荷車に寝かせる。魯ヒョウ頭達も続いて遺体を移し始めた。

「解ヒョウ頭……」

朱不尽は半眼半口の解ヒョウ頭の顔を見つけ、嗚咽を漏らしそうになったがぐつと堪え、その無残に傷ついた体を抱きかかえる。そのまま歩き出すと解ヒョウ頭の腹から溢れた臓物が流れ出すように垂れ下がった。それを見た范撞が急いで走り寄ると、地に届きそうになるところを両手ですくい上げた。

「解さん……俺、絶対……仇を討つから……皆の仇を討つからな！」
震える手で鮮血に塗れたまだ生暖かい解ヒョウ頭の一部を衣服の中に戻し、朱不尽に寄り添うように荷車まで歩いた。

「朱ヒョウ頭……とりあえず東淵に戻りましょう。旦那様なら奴等の事を調べる事が出来ましょう」

超謙が言ふと朱不尽は黙つて項垂れた。

「朱さん、そうしよう。奴等を見つけて仇を取るんだよ！」

范撞が大声で言う。朱不尽は何も言わずに田庭閑の傍に歩いていった。

「田殿」

田庭閑は急に話し掛けられて思わず体を強張らせ、恐る恐る朱不尽の顔を見た。

「……残った荷は私が景北港へ届ける。その後、武慶へ参り総帥にお目通り願ひ、お詫び申し上げたい」

「……」

「田殿は皆と共に一先ず東淵に戻り、それから武慶に戻られよ。総帥に全てをご報告して頂きたい。必ずやこの朱不尽、武慶に参上す

ると……」

「それは……」

「朱さん待ってくれ！ 俺達は確かに荷を奪われちゃったけど、こんな普通じゃねえって！ 奴等、百人以上は居たんだぜ！？ ただの盗賊じゃない！ ぜってえ何か裏があるに決まってるんだ！ おい田！ あいつらこの荷が真武剣のだって知ってた筈だ！ だからあんな大挙して来たんだ！ そうに決まってる！」

范撞が一気に捲くし立てる。ヒョウ局の仕事は荷の護衛で、今回完全に失敗した。しかし范撞はすなりとそれを受け入れる気にはなれなかった。今回のヒョウ客の数や行程の計画に問題があったとは言えないのだ。賊が何人来るか分からないからといってこの程度の荷の為に何百、何千という人員を用意するなんて事は常識的に考えて有り得ない。確かに荷の一部を奪っていったが殆どが破壊され、恐らく目的は荷をこれ以上進ませないこと、即ち真武剣派の依頼を潰す事に違いない。賊は真武剣派の敵の筈である。真武剣派の敵と言えば太乙北辰教が思い浮かぶが、そこには疑問が残っていた。千河幫に敵対する勢力というのも思いつかない。しかし今のところ朱不尽の言葉には賛同しかねた。これは、真武剣派の持つ因縁の問題だと言いたいのだ。

「朱……朱ヒョウ頭、調べてみませんか？ 私も范撞と同じ意見です……。これは……真武剣派に対する敵対行為、私もこのまま戻る訳にはいきません」

田庭閑はぼそぼそと朱不尽に言う。

「無論、このまま放っておく訳にはいらないが、私は任務に失敗した。まずその事のけじめをつけねばならん」

「ああそうだ！ けじめをつけようぜ！ 奴等をぶった切って武慶で晒してやりゃあいいさ……！」

「黙れ！」

朱不尽が声を荒げた。魯ヒョウ頭が范撞を制する。

「今はとにかく落ち着くんのだ。ああ、分かっているさ。『落ち着いて

られるか』と言うんだろう？ 范撞、仇を討つなら慎重にせねば成し遂げることは出来ぬ。まず景北港へ行こうではないか。その真武剣派の敵とは誰か、調べる事が出来よう。まず北辰を当ってみよう」

范撞は拳を握り締めたまま荷車の方へ歩き出す。

「魯ヒヨウ頭、おぬしは皆を連れて東淵に戻るんだ。范撞、お前もだ。ここで命を落とした者達をこのままにしておけぬ。超謙殿」朱不尽は振り返って超謙に声をかける。

十七

「誠に申し訳ないが、この者達を……お願いしたい」

朱不尽は並べられた遺体の方にゆっくりと顔を向け、見渡した。「分かりました。しかしながら、朱不尽殿も一度お戻りになって、改めて景北港に向かって下され。その時は私達も一緒に参ります。どうかお聞き届け頂きたい」

超謙は最後に語気を強めて朱不尽を見据える。朱不尽が項垂れて視線を逸らすと、超謙はさっとその場を離れて部下に指示をする。部下達がそれぞれ荷車を引く馬に跨って整列させた。

「少風、お前は先に東淵へ戻って旦那様に知らせろ。我等が戻るまで、三日、或いは四日掛かるだろう。道中医者を探して怪我人の処置をする」

「わかった。もう行けばいいのか？」

「ああ。急げ」

超謙が言うのと馬少風はすぐに走り出す。

「お、おい、馬は……」

馬少風が馬にも乗らずに走り出したのを見て范撞は驚いた。言った時には馬少風はすでに街道を離れて山へ入って行く。

「何処行くんだ？」

「あの山を真っ直ぐ突っ切るのさ。あいつは下が水でも無い限り東淵まで一直線に走る。馬は邪魔だ。あいつが「馬」だがな。明日には東淵に着くさ」

「明日だって!？」

「ああ」

超謙はそう言って朱不尽の許に戻った。

「朱不尽殿。参りましょう。重傷の者も居ります。一刻も早く」

朱不尽は険しい表情で考え込んでいたが、黙って頷くと馬に乗った。

「東淵へ戻る!」

朱不尽の号令に、いつもの勇ましい掛け声は返ってこなかった。

東淵と景北港の街道沿いには比較的街が多く、医者は容易に見つかった。楊迅ら数人の重傷者は処置を施されたが、暫く動かすことは出来ず、周辺の地理にも詳しい超謙の部下が付き添い、他の者は先に東淵に向かう事となった。東淵の街が見えた時には多くの遺体の傷みが酷くなってきて異臭が漂うようになっていた。

街道の先から騎馬が数騎、真っ直ぐこちらへ向かってくる。

「朱小父様!」

先頭を走って来たのは傳朱蓮だった。朱不尽の後ろに続く一行を見渡して絶句する。殆どの者が傷を負って足取りも重く、生気が無い。

「うわ……凄い臭い! 鼻が曲がりそうよ」

そう言って鼻を摘んでいるのは傳紫蘭だ。

「紫蘭黙りなさい! 何故ついてきたの! さっさと戻りなさい!」

傳朱蓮が珍しく物凄い剣幕で叱りつけると傳紫蘭は驚いて後ろに下がったが、しっかり鼻は摘んだままだった。

「小父様、お医者様も呼んであるから。それから……お父様はお屋敷に亡くなった方を埋葬するって」

「屋敷に? それは……駄目だ。それに、数人ではない。十八名が

亡くなった……」

「聞いてるわ。それでも……お父様はお屋敷に埋葬する準備をしてるの。あ、小父様あっちの道を通りましょう」

一行は大通りを避け、山沿いの小道に入る。

「小姐様、やっぱり先に戻ってるわ。耐えられない」

傅紫蘭がそう言って一人駆けて行った。

「何しに来やがったんだ！ あのクソ餓鬼！」

范撞が怒りも露わに声を荒立てた。

「御免なさい……本当に御免なさい」

傅朱蓮がそういつて項垂れる。范撞が怒りの目を傅朱蓮に向けると、その頬に涙が伝っているのが見える。

「お、お前に言ったんじゃねえよ……」

それから屋敷に着くまで誰も口を開かなかった。

屋敷の門は開け放たれ、表には傅千尽と数人の家人が待っていた。傅千尽は何も言わずに門の方に腕を伸ばして入るよう促す。勇ましく出て行ったヒョウ局の一行は静かな葬列となって、再びこの傅千尽の屋敷の門をくぐった。

「不尽。この者たちを速やかに埋葬してやらねばなるまい。この屋敷の西の一角に準備させた」

「……何故、此处に？」

朱不尽の声は震えている。

「この辺りでは遺体を焼く習慣も無いしな。遺品を残して、土に返してやらぬか。儂が此处で、責任を持って墓守となろう。なあ、……そうさせてくれぬか」

傅千尽は目を僅かに細めて朱不尽を見つめる。

「……すまぬ」

ここまですっと耐えてきた朱不尽は、この時初めて嗚咽を漏らし、泣き濡れた。

傳千尽はすぐに家人に命じてまだ戻っていない重傷の者達を迎えに遣る。先に戻った者達も応急の処置は施してあるため、東淵の医者に経過を見させながら、皆、傳千尽の屋敷で静かに過ごしていた。朱不尽は傳千尽と部屋で話している。超謙と馬少風の二人も同席していた。

「ここに来る前に襲ってきたのと同じ奴等だったんだな？」

「ああ、間違いない。数は五倍近く居たがな」

「超謙、何か気付かなかったか？」

「いえ、……何も。皆覆面をしておりまして、着ている物も揃えておりましたが今まで見たこともありません」

傳千尽は大きく溜息を漏らすと椅子の背にもたれ掛かった。

「……覆面か。お前に見られれば顔がばれる、ということか？」

そう言って朱不尽を見る。

「どうだろうな。盗賊の類は皆、顔を隠すだろう」

「あ、旦那様、求という男が居ました。自分で名乗ったんです」

「……それだけでは何も分からん」

「ただの手下では無かった様ですが……」

「武芸は？」

「どこの筋の者かは分かりませんが、かなり出来る様でした。ただ、少風が相手をしておりましたので、はつきりとは……」

「馬殿はどこでの武芸を身に付けられた？」

朱不尽が馬少風に向かって尋ねる。その表情は力無くどこかぼんやりとしている。

「おい不尽、今はそのような事はどうでもよからう」

「フツ、あの時、馬殿や超謙殿が本隊に居られたら、奴らを撃退できておったかも知れん。とても俺では……」

「馬鹿なことを！ 百を越える相手に誰が立ち向かえる！？ おい

不尽、しっかりしろ！　今は奴等が何処の誰かを――」

「今はまず武慶に戻ってこの首を差し出すのが先決だな」

「いい加減にしろ！！　おい不尽何処へ行く！？」

朱不尽が立ち上がり部屋を出て行こうとする。

「何処にも行かん。とりあえず、今日はな」

振り返らずに真っ直ぐ部屋を出て行った。

「……旦那様」

「しばらく不尽から目を離すな。東淵から出してはならん」

「はい」

超謙は頷くと馬少風と共に席を立った。

深手を負って隊から離れていた楊迅ら数人が傳千尽の屋敷に戻って来るまで、朱不尽は殆どの時間部屋に籠もっていた。夕刻、にわか黒雲がたち込め、激しい夕立が地面を叩きつけている。

「朱不尽様、ヒョウ局の方々が戻られました」

朱不尽の居る部屋の前で侍女が声を掛ける。表に出てみると范撞らが戻って来た者達を抱えて部屋まで運んでいた。楊迅達はまだまだ自分では動けず、暫く安静にしていなければならない。朱不尽は傷ついて床に伏せている者達の様子を見てまわった。

「不尽、緑恒りよくこうに早馬を出した」

部屋を出たところで傳千尽が声を掛けた。

「……范帮主の顔を潰す事になってしまったな」

無表情のまま言う朱不尽を、傳千尽がじっと見据える。

「お前は范帮主がどのようなお人か忘れてしまったのか？　今、そんなに面目が重要か？」

冷やかにそう言う傳千尽は踵を返してその場を離れて行った。

その時、傳朱蓮が水を汲んだ桶を抱えてやって来た。

「朱蓮、……すまん」

朱不尽が力なくそう言うのと、傳朱連は淡い笑みを浮かべて首を小さく振り、部屋に入っていた。

「お前、大したもんだよ。その傷で無事とはな」

范撞が楊迅にそう言って笑う。

「……普通、こんな傷、付かないよね。まるで切られるのを待ってみたいだ」

楊迅がそう言って胸の辺りを撫でる。しかし手が動かせるだけで殆ど上体は動かせない。傅朱蓮が寝台の傍で濡らした手拭を絞っている。范撞と田庭閑がその後ろの方で壁にもたれ掛かり、その様子を眺めていた。

「楊さん、体を拭くわ」

「え？ あ、いや……」

「大人しく言う事を聞いておけよ。この雨の中、外に放り出されても知らねえぞ」

「……自分で」

「どうやって？ 動けないのに？」

「手は、手は動くから、なんとかします」

「そう？」

傅朱連は笑いながら、

「じゃあ、どうしても届きそうに無い足ならいいでしょ？」

そう言って返事を待たずに手拭で楊迅の足を丁寧に拭いていった。

十九

「やっぱり、俺は何の役にも立てなかったな……こんな怪我までして」

「まあ、そうだな。でも俺だって同じだ。全く歯が立たなかった」

「それくらいにしておいたら？ もう……過ぎた事よ。先の事を考えないと」

田庭閑がそっと部屋を出て行く。范撞はその姿が見えなくなるまでじっと見ていた。

「あいつ、車の下で震えてたんだってよ。ま、お客さんみたいなもんだし、期待はしてなかったけどな」

「范撞、それは違う！。違うよ！ 勝手な事を言うな！」

楊迅が首だけ動かして范撞の方を向いて睨みつける。

「ん？ 何だ？」

「田さんは俺を助けてくれたんだよ。最初は俺もまともに戦えたけど、向こうはいくらでも出てきて、段々追い詰められてた。何度も田さんが俺を庇ってくれてたんだ。でもそのうち俺が……この傷を受けて倒れた。なんとか隙を見て俺を隠してくれたんだ。周りの皆はどんどん倒れていくし……もうどうしようも無かったんだ。ずっと震えてたのは……俺さ」

楊迅は顔を戻して天井を見つめている。

「そうか……そうだったんだな……」

范撞は体を起こし部屋の外に顔を出して首を回すと、すぐ近くの回廊の欄干にもたれて田庭閑が俯いている。

「うわっ何だよ居たんじゃねえか。……聞いてたか？」

「ああ、何だか聞こえてきたな」

「馬鹿なこと言っちゃったな。……すまん」

「俺はな、逃げるのは得意なんだ。自信がある。でも、あの時はやばかった。死んだと思ったよ」

田庭閑はずっと姿勢を動かさずに欄干にもたれているので腕の辺りが濡れ始めているが、全く気にしていない。范撞は部屋の外に出て壁にもたれる。田庭閑は頬杖をついたまま濡れた庭をぼんやりと見ていた。

「あいつじゃないけど、本当に俺も役立たずだ」

「そうか？ じゃあお前の師匠ならあの状況で奴等を追っ払えたと言っても言うのか？ あ、お前の師匠ならやりそうだな。兄弟弟子ならどうだ？ 誰だろうと、どうすることも出来なかっただろうよ」

「……前に俺は総帥の弟子だって言っただろう？ 確かに表向きはそうなんだけど、実際は違うんだ。俺は真武剣派に居て、誰の弟子で

もないのさ」

「どういう事だ？」

「俺は今以上に強くなることなんて出来ない。だって、修行なんてして無いんだからな。武慶で俺に武芸を教えてくれる人間は一人も居ないんだよ」

「そりゃまた……」

「まあ、関係ない事だな。誰にも」

范撞は言葉を待ったが、田庭閑はその後、口を開く様子はない。

「……一体俺達これからどうすりゃいいんだろうな？　ここできちしてるとこのまま寿命を終えちまう様な気がするぜ。何か、こう……何かしなきゃいけない気はするんだけどな」

傅朱蓮が部屋から出て来た。

「二人とも、何もすること無いでしょ？　休んだら？　そうだ、お酒でも持って来るわ。今は何も考えないで飲んで寝るべきよ」

「何だそれ」

「中入って。ほら、濡れるわよ」

傅朱蓮は持ってきた桶を抱えて歩いていった。

「楊さんはまだ駄目よ。代わりに薬湯をあげるわ。これは甘くしてあるから、美味しいわ」

傅朱連はちゃんと、楊迅が自分で飲めるように口の細長い水差しも用意していた。

「旨い薬湯だった？　効果あるのか疑わしいな」

「お父様が苦心して作り出したのよ。中々の評判なんだから」

楊迅が一口飲んでみる。

「ああ、これは良いね。旨いよ。飲んでみる？」

楊迅は范撞に向かってその薬湯を入れた水差しを差し出す。

「俺はいらね。もう薬は貰ってる」

范撞はそう言って酒壺の首をつまんで振って見せた。

「ん？ あの子は……」

田庭閑が酒杯を片手に部屋の外を眺めている。

「今、店の前の木に登っていた子が居たぞ？」

「ん？ あれも此処の娘か？」

范撞も窓の外を眺めたが、誰も見えなかった。

「誰の事言ってるの？」

「あんたの姐さんが都に発つ時に、店の前の木の上に子供が居たんだが、どうやって登ったのか分からねえけど、降りられなくて半泣きだ」

「その子が今、居たの？ 紫蘭じゃなくて？」

「違う」

田庭閑が外を眺めたまま言う。

「知らないお爺さんにぶっ飛ばされたんだよね」

楊迅がニヤリとしながらそう言うと言と范撞は顔を顰めた。

「ああ、あのクソ爺な」

「あの爺さんは、武芸が出来るんだろうな。どうやって身に付けたんだろうな、あの爺さん……」

田庭閑はぼんやりと自分の手の酒杯を撫でながら呟く様に言う。

「あれはだなあ、俺がちよいと油断してただけで——」

「朱ヒヨウ頭はこれからどうするんだろうな」

田庭閑が今度は顔を上げて范撞を見る。

「何だよ、急に……」

「本当に景北港に行くんだろうか？」

「多分な。俺も行くぞ」

「もし、あの賊が北辰の手の者だったら、危険だぞ？ 生きて帰れるのか？ 確かに少しばかり荷が残ったが、もう、どうでもいいんじゃないか」

「何だよ。お前んとこの荷だろうが。どうでも良いって……」

「とにかく、朱小父様はちゃんと考えてる筈よ。小父様の指示に従っていればいいのよ」

傳朱蓮が言う。

「……その朱小父様は部屋に籠もってるんだがな」

「そう簡単にいろいろと考えられる訳無いじゃないの」

「分かってるさ」

今は皆、多くのヒョウ客を失ったあの惨劇には触れまいと言葉を選んでいるつもりが、まるで見えない何かに引き摺られる様に気分が沈んでいく。どうしようも無かったんだと自分に何度も言い聞かせる程に、更に自分がその事に囚われて深みにはまっていく様に感じられた。

「さっきちょっと言ったが、真武剣の総帥って、強いんだろうな？」

范撞が田庭閑を見る。楊迅も視線を向けた。

「そりゃそうだろう。知らないけどな」

「知らないって、おい」

「田さんどうしたの？ 何だか、以前と別人みたいな……」

傳朱蓮が田庭閑の顔を覗きこむように見ると、田庭閑はまた俯く。

「そうだよな。『我が真武剣派は――』って台詞が出ねえしな」

「……虚勢だけでは、死ぬ」

田庭閑は短くそう言うと、酒を呷った。范撞と傳朱連は顔を見合わせた。

「真武剣が本当に優れた武芸だとして、俺が真武剣派に属していても、俺の腕には関係が無い」

「まあ、そうだろうな。ただ居るだけではな」

「聞いてもいいか？」

田庭閑が傳朱蓮に言う。

「私？ 何かしら？」

「あんたは何処で武芸を習った？ それと……前に言ってた、咸水かんすいの殷汪いんおう、あんたは会った事があるんだろう？ その武芸の来歴を聞

いた事が？」

「なんだその殷汪って。殷さんと汪さんの二人組か？」

范撞が笑って言う、

「殷汪って北辰教の殷総監かな。汪は名なんだよ。確か」

楊迅が范撞に言う。

「ああ。咸水って言うから分からなかった」

「……私の武芸は、そうねえ。お父様の知り合いの人に大体のところは教わったわ。弟子って訳じゃないけど。どこかの名のある門派に弟子入りした事も無いの。その教えてくれた人の武芸が何処の物かも聞いたこと無いわ。前にも言った気がするけど……どうして？」

田庭閑は「そうか」と小さく言っただけでそれ以上は何も言わない。

「あと、殷総監の武芸……あなたの期待には答えられないと思うけれど」

傅朱連は真っ直ぐ田庭閑を見る。

「私が聞いているのは、咸水でのあの人の武芸の出処は、あの人の頭の中って事」

第三章 二

「流浪一天 第三章 二」

二十一

范撞は田庭閑をじっと見ていた。武慶からここまで色んな話をしてきたが、田庭閑は常に真武剣派に属している事を自慢しているようだった。それが今になって「自分は武芸を教えて貰えない」と言い、はつきりとは言わないがまるで真武剣派に見切りをつけようかとでも考えているように思える。

（死んだと思った――）

賊に襲われて自分の腕の未熟さを思い知った。多分、そういうことだろうが、それならもっと真武剣を修行すれば良い事だ。真武剣派は政治的な駆け引きで大きくなったと噂する者もいるが、はつきり言ってそれはただのやっかみで、実は今の真武剣派の成立には込み入った事情があるのは確かだが、総帥陸皓の武芸が本物で中原を席卷したというのもまた事実である。それでも田庭閑が真武剣派から気持ちが悪く離れかけているとするなら、先程范撞に言っていた「表向きは総帥の弟子」「実際は誰の弟子でもない」という所に田庭閑の特殊な事情があるのだろう。傅朱蓮は田庭閑の揺れている気持ちを察して、「期待には答えられない」と言ったのだ。

「やっぱり、前に言ってた八百人切ったっていうのは北辰の殷総監だったんだ……」

楊迅が傅朱連を見て言うと、傅朱連は僅かに頷いた。

「お前、殷総監に弟子入りでもするつもりか？」

暫く黙っていた范撞が田庭閑に話し掛ける。

「まさか。でも、一体どうやって……。西方の街では子供だって殷汪の話は知ってる。まるで英雄伝説のように話すんだぞ。一体、ど

んな人間ならそんな風になれるんだろうと思ったのさ。誰に習ったとか」

「で、殷総監は教わったんじゃないかって編み出した、と？」

范撞は傅朱連を見た。

「私が聞いた話ではね」

「どんな奴だ？ 最近は会った事あるのか？」

「全然。もう十年も会ってないと思う……普通の、優しい人だった」

「どんなに凄えのか見てみたいな」

「まあ多分会えないわね。方崖から出る事は無いって噂……あ」

「あ？ 何だ？」

「あーちょっと聞いたんだけど、殷総監かもしれない人が都に行ってたらしいの。もう景北港に帰った様だけど。まあとにかくあの人の武芸が見れたところで何にもならないと思うけどね」

「何で？」

「本当に八百人を相手に出来る武芸があったとして、そんな物が身に付けられると思う？ 殷汪って人は、本当は人じゃないなんて噂されてるくらいよ？」

「おい」

不意に田庭閑が言う。見れば部屋の入り口に梁媛が立っていた。

「あら？ 媛、どうしたの？ どうして此処へ？」

「ん？ お前、あの時の……」

梁媛は少し慌てながら范撞にお辞儀をしてすぐに傅朱蓮の方を向く。

「あの、傅……傅の旦那様が呼んで来るようにと……」

「お父様が？ あなたに？ よく部屋が分かったわね」

「……探すようにと言われたので」

傅朱連は溜息をついた。

「全く……お父様は何を考えてるのかしら。媛、御免なさいね。あなたは此処の使用人じゃないんだから。私から言っておくわ。洪小父様も一緒？」

「あ、はい」

「洪！ 洪だ！ あのクソ爺！」

范撞が大声を出して楊迅に振り返った。

「確か紅葵さんの車に向かって叫んでたね。洪って」

「そうだそうだ。お前等、どういう関係だ？」

「もしかして、もう洪小父様に「ぶっ飛ばされた」訳？ この東淵にまだ数日しか居ないのに？」

そう言って傅朱連は笑い出した。

「何が可笑しいんだよ？」

「いえ、別に。この子は梁媛。私の妹になったの。あなたをぶっ飛ばした洪小父様はお父様と古い知り合いで、兄弟のようなものね。何度も言ってるけど、咸水からのね」

「ハッ、全くこの東淵って所は……」

「媛、行きましょう」

傅朱連はそう言ってさっさと部屋を出て行った。

「東淵に住む奴等は皆、身内か？」

「まさか。あ、朱蓮さんの武芸の師匠があの洪ってお爺さんだったりして」

「そうかもな……」

田庭閑が酒で少し赤くなった顔を両手で撫でた。

二十二

「なあ、お前、何で真武剣派に入ったんだ？」

范撞は酒杯を傾けながら田庭閑に尋ねる。田庭閑は椅子の背にもたれて両手をだらりと下げたままの姿勢で范撞を見た。

「入れられたのさ。母親にな」

「嫌だったか？」

「まあな。俺は都で生まれたんだけど遊んでばかりで、母親が鍛え

直すとか言い出してな」

「逃げりゃ良かったじゃねえか」

「そんな暇無かったよ。ま、真武剣派に入ればでかい顔出来るだろう？ 実際、そんな奴ばかりだったしな。田の家は陸総帥と繋がりがあるんだ。ちよつとは良い思いが出来ると思ったのさ」

「なるほどな。で、どうだった？」

田庭閑はそこで少し黙り込んで考える。今まで范撞達に自分は真武剣派の高弟だと自慢気に、いや、自慢していたのに急に本心を語るのが流石に恥ずかしく思えた。暫く待って范撞が口を開く。

「真武剣を出ることは可能か？」

「え？」

田庭閑は目を見張って范撞を見返す。

「まともに武芸を習えないと言うなら、居る意味がねえよ。もつと他に……」

田庭閑は范撞の言葉に戸惑った。

（真武剣派を出る？ 武慶を抜け出す事が出来る？）

「ま、とりあえず今の状況がどうにかならねえと先の事も決められんな」

傳朱蓮が梁媛を連れて向かった部屋には、傳千尽、洪破天、朱不尽の三人が居た。

「洪小父様、いらっしゃい」

洪破天は頷く。

「朱蓮、お前は此処に来る前の賊の襲撃の時に、何か気付かなかったか？ 何でもいい。指揮する者を見たか？」

傳千尽が尋ねる。

「それらしき人間が居たのは見たんだけど、暗くて容姿は分からなかったわ。そうね……小さかった。多分背の丈は低かったと思う。媛より少し大きい位だったかしら」

「それはかなり小柄だな」

傅千尽が洪破天の方に顔を向ける。

「ある程度当たりを付けんことにはのう。朱不尽殿は本当に景北港に参られるのか？」

「はい。きつと景北港で何か掴めるかと……」

「危険はこの上ないが……」

「実は今回の仕事にあたり、范凱幫主から蔡元峰殿宛てに書簡を用意しております。我等もあの荷には不可解な点があると考えて、まず蔡長老に会う事にしていたのです」

「ほう、蔡殿な。ふむ、そうじゃな。まずは蔡長老に話すのが良いな」

蔡元峰、蔡長老は長く太乙北辰教の長老を勤めており、長老衆の仲でも性格温厚、表裏の無い人柄と評され、実際そのような人物である。蔡長老の反応を見れば、北辰が関わっているのか、それとも蔡長老とは全く関係の無い所の話なのかが即座に分かると思われた。尤も、蔡長老までもが事件に関わっていれば、その時はもうこちらは絶対絶命であろう。景北港はおろか、東淵等東北部周辺は敵地のど真ん中という事になる。

「しかし、あくまで目立たぬように、じゃ。しかし単独で行動するのも危険じゃのう」

「朱小父様、私も連れて行って。景北港ならある程度は覚えてるし、私も知りたいの」

傅朱蓮が言々と朱不尽は力なく首を振った。

「いや、一人のほうがいい。少し考えるところもあってな」

「その、考えるところ、と言うのを聞きたいんだがな」

傅千尽が言う。しかし朱不尽は口を噤んだままだ。

「残った荷はどうする？ 持って行くと言うなら一人では無理だろう。大半が失われたとはいえ、車が必要だ」

「荷は……適当に見繕って一部を持って行くさ。どんな物だったか分かれば良い。目録もあるしな」

それだけ言っていると再び黙り込んだ。

傳千尽は此処に戻ってからの朱不尽の様子に違和感を感じていた。賊に襲われヒョウ客の多くを失い、しかも若き朱不尽が自らのヒョウ局を立ち上げて数十年来その仕事をしくじった事は無いという中で、突然の屈辱。その衝撃は如何ばかりであろうか。

しかしながら、ヒョウ局の全てを失った訳でも無い。まだまだ緑恒の総号も数箇所ある支店も健在だ。朱不尽の率いるヒョウ局の総勢は百を優に超えているのだ。

二十三

陰に籠もる様な朱不尽の様子はずっと変わらず、范撞は苛立ち始めていた。朱不尽の居室となつてゐる部屋の前で、出てきた朱不尽を捉まえる。

「朱さん、どうしちゃったんだよ？ 景北港、行かないのか？ ずっと此処で腐つてゐるつもりなら、俺が行く。いつまでもじっとしてなんか居られねえよ！」

「そうだな、……そろそろお前達は緑恒へ戻るんだ。準備をしろ」

「朱さん！」

「お前はうちのヒョウ客だ。言う事を聞くんだ」

「……楊迅達はどうすんだ？ まだ動けねえよ」

「動けるようになるまで此処に居る。さあ、行って支度をしておけ。魯ヒョウ頭達にも伝えてくれ」

「何だよ！ それはあんたのする事だろう！ 自分で言えよ！」

范撞は相変わらず覇気の無い朱不尽の口振りにかっとなり、声を荒げて言うとう足を踏み鳴らしながら楊迅の居る部屋まで歩いて行った。

「ん？ お前は……」

「あつ、クソ爺！」

「何じゃ？　まだ機嫌は直っておらんのか」
途中、洪破天が梁媛と共にやって来る。

「あんたには関係ねえ！」

「ほう、そうか」

洪破天はそれだけ行つてすれ違つて行く。范撞も足早にその場を去ろうとしたが急に足を止めて振り返った。

「なあ、クソ……爺さんよ」

「今度はクソ爺さんか？」

「何でもいい。暇そうだな。ちよつと寄つて行けよ。酒もあるぜ」

「何故暇だと思ふのじゃ？」

「違うか？」

洪破天は少し考える振りをしてから、

「暇じゃな」

そう言つて范撞を見る。

「すぐそこだ」

范撞は近くの部屋に入っていく。洪破天は梁媛を少し見てから手を取つてその部屋へ向かった。洪破天は部屋の奥で横たわっている楊迅をじつと見る。

「派手にやられたそうじゃな」

「ええと……洪さんですね？」

楊迅は顔だけ向けて尋ねた。

「そうじゃ。儂は洪。洪破天じゃ。お前は？」

「私は楊迅と言います」

「そうか。お前達は？」

他に居るのは范撞と田庭閑だけだった。二人とも名を告げる。

「座ってくれ」

范撞が空いている椅子を洪破天と梁媛の二人に差し出すと、洪破天は目に入つた酒壺を取つて軽く振ってから一緒に置いてあつた杯に注ぎ、それを持って椅子に腰を掛ける。梁媛も続いて座った。

「爺さん、俺等の事は殆ど聞いてるんだろ？　何か、思うことは無い

か？ 賊の事とか」

范撞が洪破天の目を真っ直ぐ見て真剣に尋ねた。

「儂はそんな奴等と関わりは無いがのう」

「あんた、この辺に住んで長いんだろ？ 俺達では分からない、何か無いかな？」

「ふむ」

洪破天は額を上に向けて右手で軽く撫でる。

「もし目星が付いたとして、どうする？ 攻め込むかな？」

視線を范撞に戻した洪破天はそう言って杯に口を付ける。

「俺達は必ず仇を討つ。だけど、ただ突っ込みたいだけじゃない。計画を練るさ」

「百人以上居ると聞いたが、攻めて来たのがそれだけ居たというだけで、その本拠には一体何人居るか分からんしのう。お前達だけでは何も出来まい。お前達の頭が何か考えておるじやろう」

「朱さんに会ったか？ 今の朱さんはおかしくなってるんだ。部屋に籠もってばかりだしな」

「ほう、普段の朱不尽殿はああでは無いのか？ 儂は、よくあれで名を上げられたものじやと思うておったのだが」

「洪さん、朱ヒョウ頭は……その、何て言ったらいいのか……凄く立派な方です。俺は尊敬しています。今は……」

楊迅は朱不尽の名誉を守る為、洪破天に言う。朱不尽のいつもの泰然自若としている様子や、その静謐さから一見、消極的な印象を持たれるのも解る気がするが、楊迅には朱不尽が困難に直面して退き下がるという様な姿を思い浮かべる事がどうしても出来なかった。

二十四

「フフ、そうじゃろうのう。恐らくその責任感が強すぎて今は混乱してしまっておるのかもな。いや、案外頭の中で綿密な計画を練っ

ている最中かも知れんぞ」

「だったら良いんだけどな」

「……洪さん、あなたは北辰教徒では無いんですか？ 此処の傳さ
らだって、殷総監と旧知の仲だと聞きました。しかも咸水から一緒
に出てきたという……俺達を襲った奴等はまだ何処の者かも知から
ない。もし北辰の者だったら、あなたは……」

田庭閑はそう言うってから床を見つめて口を噤んだ。范撞と楊迅は
洪破天が口を開くのを待った。

「殷汪の奴は確かに親しい間柄じゃ。しかしそれだけの事。儂は北
辰教徒では無い。もしも賊の首領が殷汪であつたとて儂には関係が
無いのう。儂は襲われてはおらん。安心せい、敵にはならん。同情
としてはおらんのう」

洪破天は全くの無表情のまま立ち上がって酒杯を置く。

「媛児よ、帰るぞ」

「はい」

梁媛が慌てて立ち上がり、その場で少し頭を下げた。ふと楊迅の
寝ている寝台を見ると、楊迅は首だけ横を向いていて視線が合う。
楊迅が少し微笑んで頷くと、お辞儀なのか下を向いただけなのか、
また頭を下げて洪破天の後を追った。

「何であんな事言っただよ」

范撞が田庭閑をじろりと見る。

「何かおかしい事言ったか？」

「じゃあ何か？ 此処の傳の旦那も、朱蓮も疑ってかかるべきだと
？」

「……」

「朱蓮はあの寺で襲われる前に俺達の所に現れたな。あいつが手引
きをしたとも思ってるのか？ 今思い返してもあいつに不審なと
ころは無いと思うけどな。考え過ぎだ。真武剣派はどうだ？ 疑う
余地はあるだろうが。そんな所にお前、帰れるのか？ この先お前

は一体、何処に行くんだ？」

田庭閑は顔を上げ、范撞と睨みあった。

「今はとにかく……動かない事には何も分からないよ。俺はまだ動けないけど」

楊迅が言うと范撞は思い出したように楊迅を見る。

「朱さんは俺達をそろそろ緑恒に戻す気にいる。お前はまだ動けねえから暫く此処にいる事になる。……お前も武慶に帰るように言われるぞ」

再び田庭閑を見る。

「俺は……帰らない。今度戻ったらもう出られない気がするんだ」

田庭閑ははっきりと言いつつ切った。范撞と楊迅は驚いて田庭閑を見つめたが、すぐに范撞がニヤリと笑って口を開いた。

「それ、いいな。どうするつもりだ？ 何処へ行く？」

「前は北辰、後ろは真武剣派……都なんかに戻ればすぐに見つかるしな」

「なあ、俺と景北港に行ってみないか？」

「俺は逃げると言ってるんだぞ？」

「景北港に俺達を知ってる奴が居ると思うか？ もし襲ってきた奴等が北辰の人間だったとしてもいちいち俺達の事なんか覚えてる訳ねえよ。南に帰るより余程良いと思うんだがな」

「お前は賊の事を調べたいんだろう？ そんな奴と一緒に居て無事で居られるかどうか怪しいもんだ。……朱ヒョウ頭の命令を無視するつもりか？」

「……そうだ。今はそれより大事な事がある。なあ、行こうぜ。武慶では見られなかった物が見れるかも知れねえぞ？ 人もな」

「……考えておく」

「楊迅は此処で傷を治して、緑恒の爺さんの所に戻らなきゃな」

楊迅は困惑した表情で范撞を見た。

「今は顔を知られてなくてもあちこちで探りを入れてたら気付かれる事にならないかな？」

「ま、上手くやるさ」

「もう少し待った方が良くないかな？　きつと幫主が手被打れると思うけど。うちのヒヨウ局だけの問題じゃないよ」

「幫会は幫会。俺は俺だ」

「そんな……無茶な」

「お前は自分の傷を治す事だけ考えてろ。お前が治るのが早いか俺達に戻るのが早いかは分からねえが、その頃にはヒヨウ局の動ける奴は皆引き上げてるだろう？　とりあえずまた此処に顔を出すさ」

「俺はまだ考えて無いぞ」

田庭閑が言って酒壺に口を付けて啜る。

「さっさと考えろよ。いや、あまり真剣に考えるなよ」

二十五

傳紫蘭が紅門飯店で馬少風を捉まえて話している。

「ねえ、お馬さん結局何処まで行ったわけ？」

「三江村の手前だ」

「何それ。半分も行っていないじゃない。そこでやられちゃって逃げて帰って来た訳？」

「……送る荷が無くなった。行っても仕方ない」

「でもお馬さんの仕事は早く終わって帰って来れて良かったじゃない」

「人が何人も死んだ」

「ねえお馬さんは何人やつつけたの？」

「……わからん」

「もう、それくらい覚えてなさいよ。……あ、叔母様が来るわ。行きますよ」

馬少風が傳紫蘭の見ていた方へ顔を向けると、傳英がこちらに歩

いて来る。傳紫蘭はさつさと店を出て行くが、馬少風は傳英と目が合ってしまった。流石にその場を直ぐに去ることは出来なかった。

「ねえ少風、あなたからあの子に……兄さんにちゃんと毎日顔を見せる様に言っただけでいいの？　あと、嫂さんの所にも。このままじゃあの子ずっとあのままだわ」

傳英が店の入り口の方に目を遣ると、顔を半分見せて中を覗き込んでいた傳紫蘭がサッと顔を引込めた。

「俺が言っても変わらないと思う」

「もうすでに誰が言っても同じになってるわ。何度も言うしかないの。お願いね」

そう言うのと傳英は仕事に戻って行った。

「さつと出てこなきゃ。何でこういう時はとろいのよ？」

馬少風が表に出ると傳紫蘭が口を尖らせて言い、そのまま大通りを先に歩き始めた。相変わらず人が多く、時折、人の間を縫うように歩いていくが、暫く行った所で傳紫蘭が急に足を止めて馬少風に身を寄せた。

「ちょっと、あれ」

傳紫蘭が前を指差し、馬少風はその先に目を遣った。

「朱ヒヨウ頭だ」

人込みの中を朱不尽が真っ直ぐ前を見据えながら大通りを横切って行く。

「何処行くのかしら？　お父様がうちに居るように言ってるんですよ？」

「別に外に出るなどは言っていない。街から出すなど言われてる」

「でも、誰も傍に付いて居ないじゃないの。逃げるかも」

「逃げる？　それはおかしい。何から逃げる？」

「うーん、分からないけど。跡をつけてみましょうよ」

傳紫蘭が再び歩き出したので馬少風は離れないように付いて歩いた。朱不尽は傳千尽の屋敷から真っ直ぐ大通りに出て来たようで、

大通りに曲がらずに真っ直ぐ進んで行く。先は東淵湖だ。

「散歩でもしてるんだろう」

「暢気なもんね。怪我人も居るのに。今、お屋敷は怪我人ばかりなのよ？ あんな所に帰ったら本当に気が滅入るわ。いつ出て行ってくれるのかしら？」

「……」

朱不尽は湖の傍まで来ると岸に沿って歩いている。急ぐ様子もなく、ただぶらぶらと歩を進めていた。今日は風も無く陽に照らされると流石に暑くなってくる。傳紫蘭達は見通しの良いこの湖岸で朱不尽から大きく距離をとって付いて行くが、朱不尽は一向に足を止める気配が無い。

（本当に散歩かも知れない。面白くないわね）

傳紫蘭がそう思い始めたところで朱不尽が僅かに向きを変えて岸から離れ始める。

「通りに戻るのかしら？」

物陰に隠れながら進んでいると朱不尽は急に真横に向きを変え、それを見て驚いた傳紫蘭は慌てて近くの立ち木の陰に逃げ込むが、馬少風はのんびりと付いて来る。

「もう、ちゃんと隠れてよ。見つかるでしょ」

そう言いながら前方を覗き込むと、朱不尽が居ない。

「きつと通りに戻ったんだわ」

大通りは湖岸と平行しており、傳朱蓮達は先程朱不尽の居た所まで行かずに隠れていた場所から大通りに出た。

「……見えないわね。行ってみましょ」

街の中心部から外れてこのあたりまで来ると人は少なくなっているが、朱不尽の姿が無い。

「もしかしたら、馬を買うつもりかも知れないわね。ほら、あの先の徐さんの所」

東淵の北門の手前には徐と言う男が営む宿があるが、そこでは馬も扱っていた。

「ちょっと、あまり近づいたら見つかるじゃないの」

「見つかったら何が困る？ 此処から出られると困る」

馬少風は徐の宿屋に向かって真っ直ぐ歩き始め、傳紫蘭もその背後に隠れる様にして付いて行く。

馬少風が宿の前まで来て中を見るが、朱不尽は見当たらなかった。
「此処じゃないわよ。そっち」

後ろで傳紫蘭が宿の横を指差した。馬が繋いであるのが見える。
二人が宿の横へ回ろうとした丁度その時、栗毛の馬が一頭、大通りに勢い良く躍り出る。二人は驚いて飛び退き、馬上を見れば騎乗しているのは朱不尽であった。

「あっ！」

傳紫蘭が馬少風の後ろにさっと隠れるが、その様子を朱不尽はしっかりと見ていた。しかしそれもほんの一瞬で、馬の腹を蹴ってそのまますぐ傍の北門を駆け抜けて行く。馬少風は勢い良く地面を蹴って朱不尽を追って飛び出して行った。

（お馬さんから逃げるなんて、他のどんな馬でも出来ないわ）
残された傳紫蘭は一人、大通りの真ん中で笑い出した。

街道を行き交う者達は皆、驚きの表情で目を見張っていた。疾駆する馬とその横にぴたりと付いて離れない男。そしてそれらは瞬く間に遠くへ飛び去って行く。

「馬殿！ お見事な軽功だ！ 敬服いたした！」

朱不尽はそう叫ぶと馬少風に向かって親指を立てて見せた。

「戻ってくれ！ あんたを東淵から出すなど言われてる！」

流石にこの時ばかりは馬少風も珍しく大声を出している。

「ほう、その様な事を千尽が！？」

「そうだ！ 行かせる訳にはいかない！」

暫く朱不尽は馬少風を見つめる。今自分の馬は殆ど全速力で駆けているが、この男、表情は全く変化が無い。大声を張り上げても平気な様子で恐らく抜き去る事も出来るに違いない。

「馬殿！ 千尽と出る前に話したのだ！ 私はヒョウ局の責任者だ！ あの時の賊の事も調べねばならん！ そなた達には世話になつてばかりだが、事の真相が掴めればまた、馬殿や超謙殿達にも御助力願いたい！ 馬殿！ 私は一先ず景北港へ向かうが必ず戻る！ 行かせてくれ！」

朱不尽の目は真剣そのもの、馬少風はじつと朱不尽の視線を受け止めながら暫く黙ったままだったが、ややあつて口を開く。

「わかった！ 俺は戻ることにする！」

「忝い！ 千尽に宜しく伝えてくれ！」

馬少風が走るのを止めると見る間に二人の距離が開いていく。朱不尽は暫く振り返りながら馬少風が立ち止まるまで見ていたが、前方に向き直るともう一度馬の腹を蹴った。

朱不尽は出る前に傳千尽には会っていない。隙を見て屋敷を抜け出して来たのだ。先程、「千尽に伝えてくれ」と言ったが、馬少風は何も思わなかったらしく、朱不尽の思った通り単純な男の様だ。朱不尽は景北港目指して夢中で馬を走らせた。

馬少風が北門まで戻ってくると、傳紫蘭はまだ辺りをうろつきながら待っていた。

「何よ、一人なの？ まさか逃げられたんじゃ……」

「逃げては居ない。景北港に行ったんだ。用事だ」

「知らないわよ？ お父様絶対怒るに決まってるわ」
「そうだな」

「勝手な事を……何故行かせた！」

傳千尽は予想通り馬少風に向かって叱り付けている。

「超謙！ お前見張って無かったのか！？」

「いえ、気を付けては居りましたが……」

超謙は困惑した表情で項垂れている。

「魯さん。俺達もすぐに追いかけよう。全く……なんで一人じゃなきゃ駄目なんだ？ 朱さんの考えてる事が解からねえよ」

范撞はそう言って魯ヒョウ頭に歩み寄った。

「まだ何も解かっておらんのに皆で動き回っても危険なだけだ。俺達は緑恒に戻るようにと朱ヒョウ頭は言われた。これは命令だ」

「まさか魯さん、本当に戻るのか？ 朱さん一人にして――」

「范撞！ 言う事を聞くんのだ！」

「嫌だね！ 俺は戻らねえ！ 気に食わなけりゃ、俺を除名にでもしてくれよ！ 朱さんは戻ってくるつもりでも、戻る事が出来なくなるかも知れねえだろうが！ それであんたは平気か！？」

「生意気言うんじゃない！ 朱……朱ヒョウ頭はお前と違って常に慎重で冷静だ！ お前が行けばきつと邪魔になるだけだ！」

「慎重に冷静に此処まで来て、この様か！」

「きつ、貴様！」

魯ヒョウ頭の顔が瞬時に真っ赤に染まり凄まじい勢いで拳を繰り出すと、范撞はその拳をまともに喰らって思い切り床に背中を叩きつけられた。

二十七

范撞は顔面を片手で押さえながらゆっくりと立ち上がるが、その場に立ったままだった。

「……じゃあな、魯さん。俺は今からヒョウ局の人間じゃない。勝手にするさ」

くると踵を返して部屋を出ようとする正面に傅朱蓮が立ち塞がった。

「あなた……本気なの？ 本当に朱小父様の事をそんな風に……？」

「どいてくれよ」

「あなた……何様のつもり？ 朱小父様は荷の警護もしながらあなた達ヒヨウ客の警護もしなきゃならない訳！？ 一体ヒヨウ客って何する人なのよ！？ まるで他人事みたいに……あなたみたいなのが部下に居たらどんな英雄だって何も成し遂げられないわね！」

「ああそうだな！ たった今役に立たねえ部下は居なくなっただんだ！ これでいいだろ！」

范撞は傳紫蘭を押し退けて部屋を出る。

「十八人も死んだのよ！？ 今更あなたが消えたってもう遅いのよ！」

殆ど叫び声に近い傳朱蓮の言葉が辺りに響く中、范撞はその場を離れた。

「范撞、行くんだな？」

不意に田庭閑が背後から声を掛ける。傳千尽の部屋でのやり取りを聞いていた様だ。

「もう此処に居る理由がねえからな」

「景北港だな？」

范撞が頷くと、

「俺も行こう」

田庭閑はそう言って歩き始めた。

「本当に、武慶には……真武剣派を出るってのか？」

「わからん。どうなるかなんて……とにかく今は武慶には戻らない。あんまり言うて気が変わるかも知れないぞ」

「じゃあ、その事は当分忘れよう」

部屋に入ると楊迅がゆっくりと視線を二人に向ける。

「急だが、俺達が出る。今すぐだ」

楊迅は意外にも「そうか」と小さく言っただけで後は黙って范撞を見ている。范撞の方は何か言おうと思ったが、何も浮かばない。

「あーじゃあ、……またな」

「范撞。それから田さんも」

「ん？」

「氣を付けて。もう少しすれば俺は緑恒に戻れると思う。必ず緑恒へ……」

「親父が勘当してなけりやな」

范撞がそう言って笑顔を見せると、楊迅も頬を緩めた。

「田さん。武慶に戻らないと決めたんなら、范撞と一緒に緑恒に来なよ。武慶が近いかも知れないけど真武剣派の人間は誰も来ないよ」
「……こいつと行って無事だったらその時考えるよ」

楊迅は二人を見て頷く。范撞も頷き返して黙ったまま部屋を出て行き、田庭閑も続いた。楊迅は二人の事はさほど心配はしていなかった。きっと朱不尽を探し出して共に帰ってくると、理由は無いが漠然とそう考えていた。

「あの、宜しいんでしょうか？ あの二人を出して……」

超謙が傳千尽に訊く。

「良いも何も、儂等はヒョウ局の者ではない。儂等がとやかく言う事は無い」

「はあ」

「朱蓮、怪我人の具合はどうだ？ 医者は何と言っている？」

「もう動ける人もいるわ。でも中にはあと一月は寝てないといけな
い人も居る」

「とにかく儂等は怪我人を預かった。此処で直して緑恒に返さねばならん。魯殿。そなた等は動ける者を連れて先に緑恒へ戻ってもらおうか。残ったものは儂が責任を持って面倒を見る。范幫主に宜しく伝えて欲しい」

「有難う御座います。この御恩は絶対に忘れませぬ」

「待って、お父様。緑恒までは長いわ。道中大丈夫かしら？」

朱蓮が言うが、魯ヒョウ頭がすぐに口を開く。

「お嬢さん。俺達にはもう奪われる様な物を持っては居らん。怪我

人ばかりで、フフ、疫病神すら敬遠するだろうな」

恐らくもう賊も自分達への興味は失っているだろう。何らかの計画があったとしても、奴等の仕事はあの時にもう成ったと思われる。「恐らく魯殿の言う通り、賊の方の心配は無かるう。しかし、用心は必要だ。しっかり準備をしてくれ。何か要る物があれば用意する」

「有難う御座います。では私は皆に伝えて参りますので」

魯ヒヨウ頭は深々と頭を下げ、部屋の入り口まで来ると再び振り返ってお辞儀をし、退出した。

二十八

范撞と田庭閑は屋敷を出ると紅門飯店を覗いた。中に入って辺りを見回す。

「何だ？」

「あそこだ」

范撞はそう言って真っ直ぐ客の間を進んでいった。

「ん？ あんた誰や？」

老人二人が飲んでいる席の傍で立ち止まると、一人が振り返って范撞の顔から足まで舐める様に眺めた。

「范。范凱の息子らしい」

范撞の変わりにもう一人が教える。その老人は洪破天、振り返ったのは狗不死である。

「范撞だ。爺さん、俺は今から景北港に行くんだが」

「朱不尽を追って、か」

「爺さん何でも知ってんだな」

「で？ 何だ？」

「いや、どう調べたらいいのか、正直よく分からねえんだ」

ここで洪破天も振り返る。呆れた様な表情で口が開いている。

「……まあ座れ。飲むなら自分の金で飲め。あれも一緒に行くのか

？ 二人だけか？」

洪破天は范撞の後ろで少し離れて立っていた田庭閑に目を遣る。

「まあな」

「おい、お前も座れ」

洪破天が言うので田庭閑も席に着いた。

「何の話しとんねん？ 范凱の息子が何で此処に……」

狗不死が洪破天に訊くが、「黙れ」とでも言うように腕を持ち上げた。

「お前、見た目は親父とそっくりというに、その計画性の無さは正反対じゃのう」

「親父と知り合いなのか？」

「范凱て千河幫のやろ？ 知らん奴探す方が難しいで。ほんま、似とんな」

狗不死が口を挟む。

「北辰の蔡長老を知っておるか？」

「聞いた事があります。確か都に居たと」

すぐに田庭閑が答える。洪破天は田庭閑の顔を見た。

「それはかなり昔の話じゃな。朱不尽は奴に会うだろう。そう言うておった」

「その人はどんな人だい？」

「お前等景北港行くんか？ あれ、めっちゃ金持ちやで。食うもんに困ったらあいつの所行ったらええねん。恵んでくれるで」

間が空くと狗不死がすかさず入ってくる。

「……朱さんは知り合いなのかな。聞いた事無いなあ」

「お前の親父から蔡に宛てた書簡があると言っておった。恐らく蔡から殷に話を通そうと考えたんじゃろうな」

「范凱幫主と殷総監は近いのですか？」

田庭閑が洪破天に質問する。

「どういう意味だ？」

范撞が田庭閑を見る。

「……そのままの意味だ」

「フン、お前のこだわりという訳じゃな。人の繋がりというものは本来曖昧な物じゃ。時の流れにも依る。お前とて変わってゆくのではないか？ 敵か味方か……始めからはっきりと決まっておるならこんな楽な事は無いわ」

洪破天は少し間を置いて再び話し出す。

「二人が直接的に繋がりがあるかどうかは知らぬ。じゃが、共通の知り合いが居る。陶峯というな」

陶峯といえば太乙北辰教の前教主で故人である。継いで教主となったのは息子で光という。

「親父が北辰教徒だったなんて聞いた事は無いけどな」

「知り合いなら教徒なのか？ この狗は真武剣の陸を知っておる。この飲んだくれの爺が真武剣派だと思うか？」

洪破天が狗不死を指差す。田庭閑は狗老人の顔をまじまじと見つめるが、見覚えは無い。

「おもろない。おもろないわお前等。何の話やねん」

そう言いながら狗不死が酒をどんどん呷るので、洪破天は酒壺を取り上げる。范撞がヒョウ局の話を狗不死に聞かせた。

「ほーう、そんな事になっとるんか。なあ、儂も行きたなってきたわ。連れてってえな」

二十九

「あ、あんた本気で言ってるのか？」

「おう、めっちゃめっちゃ本気や」

「もうすぐにも行くんだが……」

「儂もすぐ行ける。何もいらんしな。儂、蔡の奴知ってるで。殷総監もなあ。会わせたるか？」

「マジかよ……まあ、俺達二人だけで多少の不安はあったんだけどなあ。あんたは何者なんだ？」

「フン、これ連れて行ったら引っ掻き回されるだけじゃ。やめておけ」

洪破天が范撞に言う。

「お前はいらん事言わんでええ。儂は顔が広いでえ。絶対役に立つ筈や」

「真武剣派の総帥とはどういったお知り合いですか？」

田庭閑が尋ねる。

「あれか。あれはな、あいつが真武剣派を再興したちゅうてわざわざ儂に挨拶に来た位や。儂は最初知らなかったけどな、あいつの方が儂を知っとったんやで」

「再興？ 挨拶ってあなたは一体……？」

「お前達、そんな話しとる暇は無からうが。出るなら早くしたほうが良からう？」

洪破天が会話を遮って范撞と田庭閑二人の顔を交互に見た。

「儂も行く！ 道中でもっと話したるわ」

「お前正気か？ この者達は遊びに行く訳では無い」

「あーまあ、そうだけだよ。まあ爺さんの好きにすればいいんじゃないか？ とにかく、今から出るよ。あんたの名は？ 家族は居ないのか？」

「儂は狗や。家族なんておらん。儂は元々この東洲の人間ちゃうねん。遊びに来とるだけや。ほな、宜しゅう」

狗不死は満面の笑みを浮かべている。

「この爺に合わせて動いておってほ、いつまで経っても先に進めんど。放っておけ」

洪破天はそう言って目の前の杯に酒を注いで范撞に差し出す。范撞が一口で飲み干すと洪破天は再び注いで今度は田庭閑の前に置いた。

「まあ、気をつけて行くがよい。生きて戻って来れたら、酒の肴に

話を聞かせてもらいたいとう」

「ああ、必ず戻るさ」

范撞は勢い良く立ち上がる。田庭閑も杯を洪破天に返して頭を下げた。

「江湖を知るには、自分の眼を開いて自分で見ることじゃ。景北港は初めてか？」

「はい」

「ま、物見遊山に参るわけではないからのう、しかし、人を良く見しておくが良い。その背景もな」

田庭閑は改めて頭を下げると、范撞と共に席を離れて行った。

「ほな行くわ」

狗不死が洪破天の肩に手を置いて立ち上がる。

「景北港じゃぞ？ お前のその感覚は全く理解できんわ」

「絶対おもしろい事あるて。楽しみやなあ。ほなな」

狗不死はまるで近所の飲み屋にでも行こうかという感覚でいる様だ。何を言っても無駄な事は洪破天もよく知っていた。

「本当に行くんだな？」

「おう当たり前や。お前達は馬持つとるんか？」

「いや、この先で買えるって聞いたんだが……」

「ほんなら街の外れや。行こか」

狗不死が先に歩き出す。連れて行けと言っていたがまるで范撞らが狗不死に連れて行って貰うような状況になっている。

「金持ってんねやろな？」

「ああ、大丈夫だ。爺さんは？」

「何とかなる」

（ねえのかよ……）

暫く歩くと北門が見えてくる。再び景北港を目指してあの門をくぐるのだ。

「傳朱蓮が居たな」

田庭閑が前を向いたまま范撞に言う。

「……何処に？」

「店を出た時に見た」

「そうか」

「ここや。ここで馬買うて行こ」

范撞達は黙ったまま狗不死に付いて行つた。

三十

朱不尽は東淵を出て四日、景北港の一つ手前の市街へと辿り着いていた。地名はすでに景北港と呼ばれる場所なのだが、中心部とはかなり離れており、遠方から来た者は全く別の街と勘違いする事が多いが、朱不尽は何度も景北港まで来ているのでその事は良く知っていた。

東淵から此処まで殆ど休むことなく進んできたが、流石に馬の方がすぐに走れなくなってしまい、予定より時間が掛かってしまった。朱不尽は通りで見つけた茶館に入り、出てきた給仕に茶を所望する。辺りは比較的静かで客は老人達が多く、茶を飲みながら穏やかに談笑している。少しすると給仕の男が朱不尽の席に遣ってきて茶を淹れる。

「私は南方から来たのだが、この辺りはとても穏やかな風情がありますな」

朱不尽はまるで初めて訪れた旅人の様に給仕に話し掛けた。

「こちらは初めてで？　ここ景北港は良い処でございますよ。太乙北辰教の本拠ですから、この街には変な悪党も近寄りませんので治安も良いのですよ。教主様の御威光の賜物でございます」

給仕の男はそう言って朱不尽の表情を確かめるように見ている。

「ほう、それは素晴らしい」

朱不尽は感心したように頷いて見せた。

「ここへ来る道中で、最近賊が現れて旅の者が何人も殺されたと聞いたのだが……」

「ああ、それは東淵の方でございましょう。あそこは幾つもの街道が交わる所。色んな人間が流れ込んで参りますから。噂はすぐにこの街にも広まりましたが、すぐに方崖……方崖というのは教主様の居られる御山なのですが、そこから賊の討伐隊が出て行きました」

「討伐隊……方崖の精鋭が向かわれたのなら賊はひとたまりも無いでしょうな」

「勿論でございますよ。つい先日、討伐に参られた方々が戻って来られました。賊は一人残らず始末したとか。この太乙北辰教のお膝元で悪事を働くなど、その賊も焼きが回ったのでしよう」

給仕は自慢気に言い、一人悦に入っている。朱不尽はこの男から他にも色々聞けそうだと考えた。給仕の男の淹れた茶の風味を褒め、「甘い物が欲しくなったな。何かございますかな？」

そう言つて男を見ると、

「すぐに持ってきてまいります」

男はすぐに店の奥へ下がっていった。

（全て討ち取った？ どうやって見つけた？ あの悪党どもは恐らくすぐにあの場所から引き上げた筈だ。この街の方へ来るとは考えられんが……）

「これはこの辺りで取れる杏ですが、とても甘く疲れがとれますよ」

男はすぐに戻ってきて朱不尽の前に小さな皿を置いた。干し杏だ色が鮮やかだ。一つ摘んで口に入れる。かなりの肉厚があり、今まで食べた事のある干し杏よりも一層甘く感じられた。

「うん、これは良い」

給仕の男は満足げに笑みを浮かべる。朱不尽がこの店に入ってから新たな客は無く、すでに居る老人達は相変わらず話し込んでいる。給仕の男は特に忙しくはなさそうだった。

「お聞きしたいのだが」

朱不尽が顔を上げる。

「はい、何でございましょう？」

「私は昔、北辰教の長老蔡元峰殿にお世話になった事がありましたな。こちらに來た時には寄る様にと言って頂いておったのだが、何せ初めての土地で何も知らぬ。長老方は方崖にお住まいか？」

「おお、蔡長老様のお知り合いの方でございましたか。これは失礼を――」

男はそう言うと言を深々と下げたままじっとしている。

「あー、いや、もうかなり昔の話でしてな。知り合いというのも恐れ多い」

「蔡長老様は方崖の麓の市街にお屋敷を構えておられます。大きなお屋敷ですからすぐに分かりますよ。市街の中心部の方に参られましたらその辺りでお聞きになれば分かります」

朱不尽は頷いた。

三十一

「しかし、その賊の件、教主様の対応は迅速ですな。周辺の街の状況は常に把握しておられるのかな？」

「それはもう。この周辺の街は勿論、都や武慶の動きまで方崖では分かっておいででございましょう」

「ほう、武慶までも……。真武剣の動きは特に重要なのでしょうか」「ま、何をしようと教主様はお見通しですよ。今や北辰は敵無しですからね」

朱不尽は異論は無いという事を示すべく、頬を緩めて少し大袈裟に頷いた。

「賊は物取りだったのかな？ ……旅の者達は皆殺されたらしいが、集団で襲うに足る物を持ち歩いておったのだろうか？」

「さあ？ そういえば車を引いて戻っておいででしたねえ。一台だけですが、何でしょうね。南方の方では人が住めなくなるほどに荒

れた街などが多いと言うではありませんか。この景北港に逃げて来る者達だったかもしれませんね。この街にはそういう人間が多く流れて来ます。しかし、教主様が手厚く保護して下さる。おお、そうそう、蔡長老様は街で食べる物に困っている者達を集めて施しをなさっておいでです。勿論それも慈悲の御心に満ち溢れた教主様の御意向でございましょう」

給仕の男はよく喋る。余程「教主様」に心酔している様だ。しかし無理も無い。ここは太乙北辰教の街、教主陶光の街なのだ。

朱不尽は茶館を出て馬に乗ると景北港の市街へと向かうが、馬を走らせる事はしなかった。出来る限り余計な注目を集める事は避けたい。

先程の集落を出ると、のどかな田園風景が広がり先の北江まで続いている。北江というのはこの大陸に入り込んだ大きな湾であるが、外海と繋がる部分は狭く、一部が海と繋がった巨大な湖のようなものだ。東淵湖よりも遥かに大きく、東淵湖からここまで三つの川で繋がっている。東淵湖より流れ出た大きな川が途中の三江村と呼ばれる場所で三つに別れた後、そのどれもが北江に辿り着く。景北港は古い時代からある北江の港街である。東淵の街から船で景北港まで行く事も可能ではあるが、殆どの者が陸路を使う。その方が遥かに早いからだ。

市街周辺には水田が多く、この景北港は食料が豊富だと言われている。数百年前、太乙北辰教が興り、その教えに帰依し支えたのは殆どが為政者に虐げられていた百姓達、最下層の民衆だった。徐々に太乙北辰教の組織は変質し、新たに外部からも多くの人間が流れて来たが、やはりその生業は田畑を耕すか、北江に漁に出るかのどちらかが多かった。他所の街で他の商売をしていた者達が少しずつ市街地を拡大していった、景北港は今の姿になっていった。朱不尽が会おうとしている長老蔡元峰も、昔、都で財を成した商人である。

（一台の車……しかし……）

先程の給仕の男が見たという一台の車はヒョウ局の物と考えてほぼ間違いは無いように思える。問題は「奪い返した」のか、「奪った」のか。そんな事を考えながら進んでいると、同じ道を行く人の数が次第に増え始めてきていた。

朱不尽は街の中心部までやってきたが、相変わらず静かな佇まいの街並みが続いている。ここ景北港は昔から田舎町と言っても良い程で、みすばらしいとまではいかないが、東淵と比べると全く垢抜けず見劣りする。そんな風景を見てみると、先程の給仕の男などは都や武慶の様な大きい街を見たことは無いのだろうと思える。真武剣派の本拠、武慶を見たら何と言うだろうか。

朱不尽は馬を降りて目に留まった通りに面した一軒の店先に居た中年の女に声を掛けた。

「少しお聞きたいのですが、蔡長老、蔡元峰殿のお屋敷はどちらでしょうか？」

女は振り返ると愛想の良い笑みを浮かめた。

「蔡長老様のお屋敷ですか？ このまま先に行けばすぐにわかりますよ。この辺りで一番の立派なお屋敷ですから。でも、お忙しい方ですから、すぐお会いになれるかどうかは分かりませんが」

「忝い」

朱不尽はそう言うのと馬には乗らず、引いて通りを先へ歩き始めた。

三十二

暫く進んでまた、通りに居た男に声を掛ける。先の道が交差している場所を左手に入って真っ直ぐ行けば大きな屋敷が見えると男は言った。言われたように左に折れて行くと辺りの質素な建物とは明らかに違う大きな屋敷が見えていた。

「こちらは蔡元峰殿のお屋敷かな？」

朱不尽は丁度屋敷に入ろうとしている少年に声を掛けた。

「ええ、そうですね……」

「今、此処においでか？」

「……あなた誰ですか？」

少年は怪しい人物を見る様に朱不尽の全身を眺める。

「私は……」

一瞬、どう答えるべきか考えてしまった。出鱈目な名前を言ったところで会って貰えるとは思えない。本当の事を言っても会わないと言ったならその時は――

「あの……」

少年が怪訝な顔で朱不尽の顔を見ていた。

「私は……緑恒千河幫の朱不尽と申す。お取次ぎ願おう」

朱不尽は少年の目を真っ直ぐ捉え、はっきりと言葉を発した。少年は僅かに頷いた様で、すぐに中へ入っていった。

辺りを見回すと、屋敷の前も水田が広がり青々とした稲が時折、波打っている。都の商人であつた蔡元峰は何を思つてこの田舎にやつてきたのだろうか。

「どうぞ中へ」

先程の少年が現れ、そう言うとともに戻っていく。朱不尽は馬を引きながら門をくぐつた。

広い屋敷の中を通つて角にある一室に入ると、少年はお辞儀をしてから黙つたまま部屋を出て行つてしまった。屋敷の中に入つてから此処まで幾つかの部屋が見えていたが、何処も思ったよりも簡素な造りに地味な色調で、意外な印象を受けた。蔡元峰はどのような人物なのか――昔世話になつたという話は全くの出鱈目、朱不尽は一度も会つた事は無い。何故、自分に会うのか？ 自分の用向きを全く知らないのかそれとも……。

「お待ちせ致した。朱不尽殿」

急に聞こえた声に朱不尽はハッと身を強張らせた。振り返ると男

が立っている。確かに顔には皺が刻まれてはいるが、想像していたよりも若々しい精悍な顔つきの男。左右に引き締められた口許にまだ黒々とした髭が蓄えられていた。

「蔡元峰様でございますか。ご高名はかねがね承っております。緑恒千河幫の朱不尽と申します」

朱不尽は拱手し、やや早口で口上を述べると、蔡元峰は相好を崩して中に入ると奥にあった席を朱不尽に勧めた。

「朱不尽殿の名は私も良く承っておりますぞ。千河幫一の好漢といえば、そなたを措いて他に無いとな」

椅子に腰を下ろすと丁度、若い女性が茶を運んで来た。朱不尽は軽くお辞儀をした後、顔を蔡元峰へ向けると、蔡元峰の方はじっと朱不尽の表情を見つめていた。

「……お一人で来られたか？」

「はい。私一人でございます」

朱不尽が答えると暫く沈黙が続いたが、蔡元峰は相変わらず視線を朱不尽の目から逸らさない。朱不尽も真っ直ぐに見返している。

「……用件をお聞き致そう」

朱不尽はじっと蔡元峰を見たまま黙っていたが、ややあって口を開いた。

「私は、一切の覚悟を決めてこちらにやって参りました。是非にもお聞きしたい事がございます」

蔡元峰は黙って頷く。

「私のはるばるこの景北港へ参ったのは私めのヒョウ局の仕事があったからでございます。方崖に届ける荷を運んでおりました」

蔡元峰は口許に手を遣り、髭を撫でながら聞いている。

「……いや、このような説明は要りますまい。三江村に現れた賊を、北辰教の方々が討ち取ったとお聞き致した。まことでございますか」

「そのように聞いている」

蔡元峰は口だけを動かして答える。とても乾いた、平坦な声だ。
「賊が持っていた荷車は方崖へ？」

「私には分からぬ」

「賊に襲われたのが我々ヒョウ局の荷であるということをご存知ですか？」

朱不尽は「知っているのだろうか？」と詰問したい衝動に駆られたが、ここはぐっと堪えて蔡元峰の返事を待った。

三十三

蔡元峰が口を開いた。

「無論、全て把握しておる。ましてや三江村はここから目と鼻の先、その様な所で起きた事すら知らぬ様では、我等の目は節穴だ」

「私は、その賊徒共が何処の誰なのか、突き止めねばなりません。何故我等が襲われたのかを」

「……」

「討ち取った者達の素性は分かったのでしょうか？」

「私が行った訳では無い」

「しかし、蔡長老様ならその事をお聞き及びではないのですか？」

「聞いておらぬ」

蔡元峰の言葉は先程までと打って変わって鋭く、語気が強くなってきた。決して機嫌が良い様には見えない。

「蔡長老様！　どうか、どうかお教え下さい！　我等は十八名ものヒョウ客を失ってしまったのです。何としても真相を知りたいのです！」

朱不尽は声を震わせながら訴えかけた。すると蔡元峰は視線を逸らして立ち上がると、部屋をゆっくりと歩き始めた。

「……朱不尽殿。そなた、その奪われた荷はどういった物であったかご存知か？」

「真武剣派総帥から方崖へ。ただそれだけでございます」

朱不尽は即答した。

「我等もあの荷が何の為の物か見当も付きませんでした。ここに：千河幫幫主范凱様から蔡長老様宛てに書簡を預かっております」
朱不尽は懷から一通の書簡を取り出した。

「見せて貰おう」

蔡元峰は書簡を受け取り、立ったままその場で開いた。その内容は、真武剣派から方崖への荷が意図する処が全く不明であり、千河幫としてはその事について関知するものでは無いが、ただヒョウ局への一依頼として処理するという事、もし仮に何らかの陰謀の類があった場合に備え、直接方崖へは届けずにまず蔡元峰長老にこの事を伝え、必要であるならば殷汪総監の耳に入れる事も考慮し、事の秘匿には充分に注意が必要であろう、というものであった。

「なるほど。范凱殿は相変わらず思慮深く慎重なお人だ。荷が無事に私の許へ届いておれば……いや、これは朱不尽殿に責任は無い。我等の……」

「どういう事でございますか？」

朱不尽は半ば身を乗り出して蔡元峰に訊ねる。

「具体的にはどのような品であったか？」

「目録を持って参りました」

朱不尽が手渡すと、蔡元峰はサッと目を通す。

「預かって良いかな？」

「結構でございます」

「朱不尽殿」

蔡元峰は再び朱不尽の前に座る。

「少し時間をくれぬか？ そう長くは無い。暫く……この屋敷に留まって欲しい。この件については他で聞いてまわる事も謹んで頂きたい。いや、絶対にならん」

「な、何故ですか？」

朱不尽は勝手とも思える蔡元峰の物言いに色を作して問い質す。

「朱不尽殿。詳しくはまだ話せぬが、実は我等もこの件について調べておる所だな。もう暫く待ってくれ。この私を信用して欲しい。」

我等は決してそなたの敵では無い。これだけは……」

見れば蔡元峰は沈痛な面持ちで眉間に皺を寄せ、手にした范凱の書簡に目を落としている。

「……分かりました。私とて何も得られぬまま戻る訳にはまいりませぬ。真相を掴むまでは留まりましょう。しかし何も出来ないとなれば、蔡長老様から教えて頂くしかありません」

「勿論、もう少し待って貰えば今分かっている事はお話します。

その後の調べについては、是非そなたにも加わって欲しい」

再び蔡元峰は立ち上がる。

「宿はもう用意しておられるのか？ まだであればこの屋敷に――」

「いえ、まだですが、他で宿をとります」

「……そうか。くだい様だがこの事は今暫く他言無用だ」

朱不尽は完全に納得出来てはいないが、とりあえず頷いて見せた。

「宿が決まれば手間を掛けさせて済まぬが、この屋敷の者に教えておいてくれ。私は早速出掛けねばならん」

「わかりました」

朱不尽が先に部屋を出る。蔡元峰はその後姿を見送った後、范凱の書簡と荷の目録を持って足早に立ち去った。

陽が傾き、通りの何もかもが茜色に染まっている中を朱不尽は馬を引いて歩いていたが、その表情には疲れが見えて足取りは重かった。

三十四

一方、東淵を離れて朱不尽を追う范撞達はまだ景北港までの道程を半ばまでしか来ていなかった。

「おい爺さん、金出してやったんだからちよつとは急いでくれよ」

范撞と田庭閑は並んで先を進んでいるが、狗不死は少し行けば止まり、或いは姿が見えなくなったと思えば暫くしてまた現れるとい

う勝手気ままな旅をしていた。

「東淵よりこっちは長いこと来てへんかったんや。ちゃんと付いて行くて。心配せんかてええ」

そう言いながらやはり范撞らの後方でのんびりと馬を進めている。

「洪の爺さんが言ってたろ？ 放っておいたら良いんじゃないか？ 付いて行きたいって言ったんだ。俺達が連れて行かなければいけない訳じゃない」

「まあな」

二人は再び前を向いた。

「なあ、お前等もし襲撃の下手人が北辰やったら、方崖に乗り込むんか？」

狗不死はまるで何か察したかのように范撞らの横に並んで話しかけ始める。

「まさか。二人で乗り込んでもあつという間に始末されて終わりだ」

「何故二人だ？ 俺は――」

「そうや。今、三人居るやないか。お前等の親分見つけたら四人やな」

田庭閑は仇討ちなど考えていない、自分は関係無いと言いたかったのだが、狗不死は最後まで聞いては居ない。

「四人ならどうや？」

「二人が四人になったところで、どうやるってんだ？ 爺さん、方崖には一体何人くらい人間が居るんだ？」

「知らん。知らんけどまあ、そんな多ないんちゃうか？ 百もおらんやろ」

「それ本当か？ 方崖だぞ？」

「何や、方崖行った事あるんか？」

「ねえけどよ」

「ハハ、方崖なんて狭いとこやで。行きにくい崖の上やしな。そんな仰山、人居られへん」

「でも景北港には教徒が……三万かそこら……」

「景北港だけならそんな居らんやろ」

「とにかく今は、朱さんを探す。それからだな、調べるのは」

「狗さん。あなたは蔡元峰という人の事も、殷総監の事も良くご存知の様ですが、その、どういう関係なんですか？」

田庭閑が話に加わる。狗不死は少し考えていたがすぐに田庭閑に顔を向けた。

「別に、関係と言う程の事もないなあ。お互い知ってるだけや」

「では、教主は？」

「知ってるで」

「朱ヒヨウ頭はまず蔡元峰の所へ行くと言われました。そして殷総監に話を通すと……どういう事かよくわかりませんが、何故教主ではなくて殷総監なのか……」

「おい、爺さんに言ってもそんなこと分かる訳ねえだろ」

「荷の事はともかく、教主と殷総監は違うのですか？」

「違う？　どういう意味や？」

「北辰で殷総監は教主に次ぐ人間でしょう？　殷総監に話す事は教主には伝わらない？　その二人の関係は一体……？」

「あーまあ、なんちゅうか……」

狗不死は視線を上に向けて黙っている。

「何だよ爺さん、何かあんのかよ？」

「ちやうねん。憶測で物言うたらあかんしな。そやなあ、殷ちゅう奴は、元々北辰教徒やないねん」

「ああ、朱蓮に聞いたぜ。えーっと、咸水から旦那と一緒に東淵に来たんだろ？　あの洪って爺さんも」

「何や、知ったんか。ま、よそ者ちゅう訳や」

「よそ者って言ったってもうかなり昔の話だろ？　長い間幹部だつて聞いたけどな」

「教主と殷総監は仲はええ筈やで。教主いうてもまだ子供やけどな。お前らよりも若い筈や。多分」

「ふーん。じゃあ取巻きに問題ありか……」

「あれ、殷汪はな、先代が見つけた看板なんや」

狗不死の言葉に范撞と田庭閑は揃って顔を向ける。

「もう二十年にもなるけど咸水での話はあん時、国中に広まったさかいな。当然、前の教主の陶峯とうほうも知っとったわな。確かにあいつの強さは半端やない。仲間に引き入れたらええ宣伝になるわ。実際、陶峯はようあれを使ってな、敵の奴等は皆逃げていくがな。ほんま、重宝しとった」

三十五

「確かに昔の話だな。もう今じゃ大規模な衝突も殆どないもんな」

「そうや。先代が死んで息子はまだ幼かった。一応、その息子を教主に据えたけど實際色々まとめとったんは殷汪や。先代がそう遺言したさかいに長老衆も従わなあかん。殷汪ちゅう奴はほんまはめっちゃ面倒臭がりやねん。真武剣やら敵対しとった奴等とは揉めんようにゆうて徹底したらしい。先代は口より先に剣が出る人間やっただけ、それが居らん様になってやっとなできるっちゅう訳や」

范撞と田庭閑は初めて聞く太乙北辰教内部の話に、まるで子供の様に胸を高鳴らせながら聞いていた。

「それだな。腕力にモノを言わせるのが好きな幹部連中は面白くないってんだろ？」

「んーまあそやな。それもあるけど……」

「何だよ」

「いや、憶測で物言うたらあかんな」

狗不死は再びそう言う口を噤んだ。もう話は終わってしまったようで、范撞はがっかりして田庭閑を見ると、田庭閑は狗不死の方を向いて口を開いたところだった。

「殷総監は教主の後見という事なのでしょけど、そんな途中で引き入れた様な人物を、何故、前教主は選んだんでしょね。反発が

ある事は目に見えてるのに……」

「何や？ 北辰教にえらい興味あるんやなあ。言うたらいつでも入れて貰えるで」

「いや、私は……」

「殷総監に興味があるんだろ？ 爺さんは殷総監の武芸の来歴を知ってるか？ 誰も詳しく知らねえみたいなんだが」

「お前等は武芸を誰ぞに教えて貰っとるんか？ 他所の武芸に懸想なんてしてええこと無いで」

「別に教わってねえよ。こいつは……」

范撞は田庭閑を指差したが、思わず言葉に詰まった。

「俺はこれから、探す」

田庭閑が言う。

「探す？ 何探すんや？」

「……一人でも江湖で生きていけるように、強くならなければ……」

「ハハッ！ 強さか！ つよないと生きていけへんか？」

「そりゃあそうでしょう？ 俺はもう死んでもおかしくなかった」

田庭閑はそう言って手綱を持った手を強く握り締めた。

「……武芸でけへん奴も仰山生きてるがな。自分に見合った生き方があるやろ」

狗不死は先程までとは違い、低く穏やかな声を出した。

「フン、俺はようやくこの江湖に出る事が出来たんだ。親に守られて生きるなんて格好悪いしな。江湖じゃ弱い奴はさっさとくたばっちまう。そうだろ？」

范撞が言う。

「お前の親父かて不死身とちゃうで。いずれ誰かて一人になるけどな」

「まずは俺等を襲った奴の事を調べる。仇を討つにしても今の俺達じゃ無理だ。真剣に武芸を習って——」

「真剣？ 真剣か。真武剣やな。ハハ」

狗不死は冗談を言って一人笑っている。范撞は顔を顰めて田庭閑

の方を向いた。

「おい、もう少し急ごうぜ。次の街で宿をとろう」

「ああ」

二人は馬の腹を蹴り、狗不死を措いて駆け出す。それでも狗不死はまだ笑いながらゆっくりと馬を進めていた。

范撞達三人が景北港に入ったのはそれから二日経った夕刻だった。予定ではもっと早く付く筈であったが、結局、狗不死を無視して先を急ぐ事が出来なかった。

「しかし此処は何と言うか、相変わらず地味な街だな。もっとう……繁華街みたいなのが出来ても良さそうなんだが」

「初めて来たけど、意外だな」

范撞と田庭閑が辺りを眺めながらゆっくり進む。田庭閑は正直、少しばかり落胆していた。真武剣派の向こうを張る太乙北辰教の本拠ならばもっと活気に溢れて力強さを感じさせる何か、或いはそれらを誇示するような気風が在るものと思ひ込んでいたのだ。確かに人も多く賑わいはある様だが、通りを行き交う人々は皆、着飾る事もなく土を付けたままの百姓達が野菜を荷車に山積みにして通りのど真ん中を進んでいたりする。

三十六

田庭閑はふと気付いた。

「なあ、此処に武芸者は居ない訳無いよな？ この通りには全く、剣を帯びている者が居ないんだが……」

それを聞いて范撞も辺りを見回したが、確かに剣を持っている者が見当たらなかった。

「なあお前等、今日は何処へ行くんや？ もう宿決めたんか？」
いつの間にか狗不死が二人のすぐ後ろに来ていた。

「まだに決まってるんだろ。今さっき着いた処なんだぜ？　とりあえず街の中心まで言って宿を決めよう。此処に居る間の拠点だな」

田庭閑はそれからずっと剣を持つ人間を探したが、一人も見つける事が出来ない。三人は通りを真っ直ぐ進み、適当な所で宿の在りかを通行人に聞いた。街は広く、何処が中心なのかなど全く分からなかった。

比較的大きいと思われる宿に入ったがやはり此処も飾り立てる事も無く、くすんだ色の室内には粗末な寝台と小さな円卓に椅子、立て付けが悪く音を立てる窓の付いた部屋であつた。しかし不潔と言うわけではなくちゃんと清掃はされていた。

「とりあえず何か食うか」

范撞が言々と田庭閑も頷き、部屋を出た。すでに日は沈んで客も増えてきていた様だが、満席になるような事はまだ無さそうだ。

「ん？　狗の爺さんが来ねえな」

「放っておいても大丈夫だろ。あの人なら何処でも好き勝手に生きていけそうだ」

「お前、一々言う事が大袈裟だな」

「フン」

愛想の無い若い女が注文を聞きに来たので范撞が酒と料理を二、三品適当に注文する。

「どうする？　すぐにでも蔡長老を訪ねるのか？」

「んー朱さんはどうしたんだろうな？　いきなり蔡長老に会うのは勇気が要るな。博打みたいなもんだ。まあ行くまでに少し話を聞いてまわった方が良さそうだな。どっかで朱さんがひょっこり現れるかも知れねえし」

「きつと朱ヒヨウ頭は自分の素性は隠してるだろうな。朱ヒヨウ頭は此処では知られてるのか？　顔とか」

「いや……街の人間に覚えられる程来てねえんじゃないか？　北辰のある程度上の人間の中には見知った奴が居るかもな」

「俺達も襲われたヒヨウ局とは関係無いという事にしておかないと

危ない」

「まあ、言う必要も無いさ。緑恒の朱って人を探すだけだ」

先程の若い女が酒と料理を運んできたので会話を止めた。女が料理を置いて席を離れて行くと同時に田庭閑と背中合わせに座っていた男が静かに立ち上がった。范撞は僅かに視線を投げたがすぐに戻して食事に取り掛かろうと箸を取ったところで再びハツとなって顔を上げた。男は范撞と田庭閑の席の傍に立って二人の顔を見てから拱手して口を開いた。

「失礼致します。先程、朱ヒョウ頭と仰られたのが聞こえました。朱不尽様がこの景北港に御光臨なのでしょうか？」

范撞は黙って田庭閑を見ると顔を上げずに横目で気配を窺う体でじっとしている。

「……御光臨ってあんた、あんたの言う朱ヒョウ頭とやらは何処のお偉方だ？」

范撞は平静を装い、箸を動かしながら言う。

「緑恒の朱と言われませんでしたか？ 緑恒で朱ヒョウ頭といえは千河幫の朱不尽様でございましょう？ 私はお会いた事がございますませんが機会があれば是非にもお会いたいと常々願っております」「うーん、人違いみたいだけどなあ。朱不尽の名は無論俺も知ってるが、そんなに名が知れ渡っているとはな。あんたは此処の人か？ 緑恒に朱は割とある名なんだぜ？ ヒョウ局も大小幾つか在るしな」

范撞は一度も顔を上げずに男の気配を感じ取りながら箸を進めている。うまくあしらえそうな雰囲気を感じて田庭閑も初めて箸を取った。

「左様でございますか。実は少し前に緑恒のヒョウ局が賊の集団に襲われるという事件が起きまして、死人もかなり出たようでした。な。お二人のお話が耳に入り、もしや襲われたのは朱不尽様のヒョウ局では、と思ひまして。失礼致しました」

男はそう言うのと再び田庭閑の後ろの席に戻って行った。田庭閑が

少し前方に体を傾けて小声で言う。

「聞いてまわるのは止めた方がいいな。賊が北辰と関係ないなら何とも無いけど、もしそうじゃなかったら即、終わりだ」

「……」

三十七

范撞は黙って酒を飲みながら先程の男の方を見ていると、一人の客が新たに現れて笑いながら男と言葉を交わした後、男の向かいに腰を下ろした。その者も料理を注文して男と談笑している。范撞は暫くそのまま考え込み、田庭閑は黙々と料理を片付けていた。

丁度その頃、何も出来ないまま宿に籠もっていた朱不尽は蔡元峰の屋敷に呼ばれていた。

「何か分かったのですか？」

「朱不尽殿、今から方崖に参ろうと思うのだがそなたも来てくれ」

「それは……？」

「心配は要らぬ。殷総監に目通り出来る」

蔡元峰はそう言って朱不尽をじっと見つめる。

「先に……私が聞いておかねばならない事は？」

「そうだな、身を隠しながら行かねばならん」

「見つければどうなりますかな？」

「今すぐどうこうなるといふ訳ではなからうが、良い事は無いな。うむ。全く無い」

「……分かりました」

「よし。それでは早速だが参ろう」

二人は立ち上がると蔡元峰が先に歩き出し、朱不尽が続いた。ふと朱不尽が蔡元峰の腰に目を遣ると剣などの得物は携えていない。

「蔡殿。武器は持たぬ方が宜しいか？」

「いや、構わぬ。そのままで」

蔡元峰はそう言って屋敷の裏門へ向かって行く。庭に出て建物の間の細い小道を行くと正面に少し小さな門があり、二人はその門をくぐって裏の路地に出た。

「おっ、やっと来たんか。ほな行こか」

朱不尽は驚いて声の主を見ると、小さな老人がニコニコと笑って立っている。

「朱不尽殿、こちらをご存知かな？　この方は丐帮かいほうの――」
「あっ！」

朱不尽は思わず驚きの声を上げた。まさかこの場所に丐帮の幫主であった狗老人が居るなど思いも寄らない。丐帮とはこの国土一円に無数に居る乞食、物乞い達が作る組織で帮会の一つであるが、その組織の規模は他とは桁違いの勢力で、この幫会に属する人間を正確に把握することは不可能ではないかと思われる程国中に広がっている。全てが集まって何か事を起こすと言う事は無いが、単純に数を比べるならば此処の太乙北辰教と真武剣派という二大勢力を合わせても到底及ばない。その幫主とはこの国の乞食の元締め、盟主である。この狗不死は数年前にその座を後進に譲っている。尤も、丐帮には中心となる拠点がある訳ではなく、多くても年に一度、主だった者を集める大会を開く事はあるが、基本的に皆、国中に散らばっているので幫主であった狗不死も同じく放浪を続けており、今と全く変わらない。

「く、狗幫主様！」

「幫主ちゃうて。もうただの乞食爺やがな。ん？　幫主の時も乞食爺やったな。ハハ。あんたが朱不尽やな？　今回の件は難儀な事やなあ」

「はあ」

「朱不尽殿。実は偶然、狗殿に会ってな。なんでもそなたを追って来られたとか」

「……何故、私を？」

「まあええがな。儂も行くさかいに一緒に方崖に行ったらええんや
ゆうてこいつに言うたんや」

そう言って蔡元峰を指差す。

「私がそなただけ連れて殷総監の許へ行っても、その……うまく話
せるかどうか分からぬのでな」

朱不尽は意味が分からず眉を顰めて蔡元峰を見る。

「殷総監様は気難しい奴やからなあ。儂なら気楽に喋れるしな」

「気難しくは無いでしょう？ まあ、少々変わった感覚をお持ちだ
が……話の分かる方ですよ。だから范凱幫主も殷総監に話を持って
いくように考えられたのだ」

蔡元峰が狗不死の言葉にすぐに反論し、朱不尽に説明する。

「狗不死様。……今の私には何の力もありませぬ。お力添え感謝い
たします。このご恩は——」

「何の力も添えてへんがな。ただ付いて行くだけや。ほれ、はよ行
こ」

「では」

蔡元峰が先に路地を北へ向かって歩き出す。次に朱不尽、そして
狗不死が続いた。

三十八

「しかし、何処からあの方崖へ上がるんです？ 警備は相当厳しい
のでは？」

「特別警戒が厳しい訳では無いが、まあ、殷総監の居られる場所は
比較的手薄だ」

「あれが長いこと警備係させられとった位やしな」

「警備係？」

「殷汪より腕の立つ奴なんて方崖に居らへんしな。先代が自分の近
くに住まわせたんがあいつの出世の始まりや。まああいつは出世と

か興味無いけど生活が楽になるんやからこんなええ事無いわ」

「それでだ。忍び込むと先程言ったが、やはり此処は正面から参ろう。名を伏せるのはそなただけで良い。私は普段からよく殷総監の許へ参っておるし、狗不死殿も正面から行ってもらおう。酒の一つでも下げて行けば良い。そなたが酒を下げて狗殿に付いて行くのだ。狗殿のご身分から考えればお付の者が居ったとて不審な事ではないし、狗殿は殷総監と古くからのご友人。その事は方崖に居る皆知っておるゆえ心配無い。ただ、私が先に参る。その後暫くしてから来て欲しい」

「ほんなら儂等はその辺で一杯引っ掛けて行こか。そこで持つて行く酒も買うたらええな」

「狗殿、それは結構ですが、少しばかり量は控えて下され」

蔡元峰と狗不死は随分と落ち着いて余裕のある表情だが、朱不尽は流石に胸の鼓動が高鳴って仕方が無い。未だ何も知らないままなのだ。路地には明かりが少なく暫く暗い中を、必要は無いのだが若干息を潜めて歩いていた。

屋敷の裏の路地から少し広い通りに出た所で蔡元峰は狗不死と二三言葉を交わすと西へと向かい、狗不死は反対へ歩き始めた。

（狗老人は外部の人間だ。何処で俺の事を聞いてきたのか知らんが、これedyouやく全てが分かるかもしれん）

朱不尽は暗がりの中を狗不死に付いて歩いて行く。暫く行くとすぐに「酒」の看板が見つかり、二人は其処へ入った。

「あんたの部下は中々の忠義もんやなあ」

「は？」

店に入つてすぐの一番入り口に近い席に二人は座り、狗不死は酒を飲んでいたが朱不尽は口を付けるのを控えていた。

「あんたを追いかけて来た奴に付いて来たんや」

「……東淵からですか？ ヒョウ局の者には緑恒へ引き上げるように言つて来たのですが」

「さあ？ 来たのは二人やで。一人は范凱の息子らしいわ。もう一人もヒヨウ局のモンやろ」

「范撞……今何処に居るのでしょうか？」

「今日着いたばかりや。流石に疲れて宿で寝てると違うか」

朱不尽の胸中に不安がよぎる。范撞は一旦これと決めると猛進するという性分である。尤もその「決める」ところまで行くのに時間が掛かるのだが、この景北港まで本当に来たという事は、范撞は今の気になっているのだ。旨く立ち回ってくれば良いが、昔から范撞を良く知っている朱不尽はどうしても安心出来ない。もう一人居るという事だが、いつも一緒に居る楊迅はまだ動けない筈。誰なのか全く分からなかった。

「狗幫……狗不死様、方崖から戻った後、その宿をお教え下さい。放っておくのはその……危険と申しますか……」

「ハハ、あの小僧は危険か。あいつら、あんたを探す言うてたさかい、合流すれば勝手な事はせんやろ。儂もあいつらに「連れて行け」言うて東淵から来たさかいな。付き合ったらなあかん」

今夜は大人しく宿に居てくれる事を願うのみである。

「あんたもちょっと飲んだらどうや？ 緊張か？ 呼吸が浅なつてんで」

そう言われて朱不尽は再び普段より胸の鼓動が高くなっている事に気付き、目を閉じて深呼吸を試みる。しかし、そんなに簡単には治まりそうもない。

「教主様にも目通りなされるのですか？」

「まあ居ったらそうせな具合悪いわなあ。けど今日は旨い事に出掛けとるらしい。お供引き連れて狩かなんかに出とるんやろ。西の方に教主の別荘みたいなモンが拵えてあんな。明日戻るらしい。そやさかい蔡の奴、今日行こう言うたんちゃうか？ 教主はともかく、一緒に居る張新いう奴がうるさい奴やねん。全く若造の癖に。あんたより若いで多分。いっつも教主の近くに居るもんやさかい自分も偉なつたと勘違いしとんちゃうか。……って、儂の想像やで。今日

はそいつも居らんわ。教主に遊び教えとるんはその張新やでなあ」
狗不死はそう言って顔を顰めながら不味そうに酒を舐めている。

三十九

「狗不死様、そろそろ我々も向かったほうが良いのでは？」

「んん？ もうかいな。あ、そや、酒買っと言ってえな。ようけは要らんで。入るときに見せるだけやでな」

「分かりました」

朱不尽は立ち上がって店の奥に行き、持っていく酒を調達した。

景北港の市街から北の方角に、方崖と呼ばれる切り立った断崖がある。景北港の西から北の方へ山々が街を取り囲むようにそびえており東の北江まで続いているが、街から見て丁度真北にあたる場所に四角く突き出ているのが方崖である。街を見下ろすその崖の上に教主陶光の住まう紫微宮と呼ばれる宮殿が数百年の昔から建っている。宮殿と言っても方崖の上はそれほど広くは無い為、街にある大きな屋敷を幾つかそのまま移設した様な物で、特別な造りである訳でもない。

方崖へ上がるには西に少し離れた場所に山へ入る道が作られていて、山の中を大きく迂回して登って行くとやがて紫微宮の背後に出る。無論、その道の入り口には門があり、常に数十名の人間が警備に当たっている。それに加え紫微宮に至るまでの道、その周辺の山林にも多くの人間が配置されていた。

景北港に何度も来た事のある朱不尽であったが方崖に上がる用事など今まで一度も無かった為、そこへ上がる道が何処なのかも知らず、とにかく黙って狗不死に従って通りを歩いて行った。

狗不死が門の前に立つと警備の責任者らしき男が慌てて飛び出してきた。

「狗不死様！」

男が何を喋るのか朱不尽は興味があつたが、男は狗不死の名を叫んだ後その場に跪いて黙っている。その名を聞いた周りの者達も慌てて最初に出てきた男の後方にまわり同じように跪いた。警備に就いている人間まで一目で狗不死と気付くという事は、余程この方崖には足を運んでいるのだろう。しかし、丐幫と北辰教がそれほど密接な関係であるとは朱不尽は聴いたことも無かった。

「やめてくれへんか。陶教主がこんな見たら氣い悪するやろが」

「あーいや、教主様は出掛けて居られました……」

男は愛想笑いのような緩んだ表情を見せる。

「なんや、居らんのかいな。酒も持ってきたのになあ」

「ご冗談を……教主様はまだ……」

「酒飲む歳ちゃうてか？ そんなことないわ。まあそんならしゃあない、殷総監の顔見ていこか。居るんやろ？」

「はい。総監様は居られます」

「なら、失礼するで」

「あの、こちらの方は……？」

男が狗不死に言いながらチラッと朱不尽を見る。

「これはうちで使うとる奴や」

朱不尽は黙ったまま拱手して頭を下げた。

「ではお二人だけですか」

「そや。上がらせてもらうで」

「ハッ」

跪いている男達の傍を二人は通り過ぎる。朱不尽を不審に思う人間は誰も居ない様である。山を上がっていく道中に居る男達も狗不死に気付くと深々と頭を下げ、通り過ぎていくまでじっと動かなかった。

「簡単やろ？ 下手に違う所から忍び込んだりして見つかったらただでは済まんぞ。上にも守りの人間が仰山待機しとるさかいな」

「……」

朱不尽が黙ったままなので振り返って朱不尽を見遣る。狗不死は一人頷いて、

「そやな。黙っとった方がええな」

そう言った後、紫微宮に着くまで口を閉じていた。

方崖の頂上、紫微宮の入り口に来ると、狗不死と朱不尽が登ってくるのが見えていたのか、一人の男と侍女らしき女二人が既に待っていて狗不死の姿が見えると表に出て恭しくお辞儀をする。その後男が一步進み出る。

「ようこそお出で下さいました」

「教主は出かけとる様やな。明日には戻るんか？」

「はい。そのご予約でございます」

「ほんなら、今日は殷総監とこ寄って、また明日にでも出直すわ」

「教主様がお戻りになられましたら、お伝えしておきます」

「まあ、特に用事も無いんやけどな」

「ハハ、教主様は狗不死様とお話されるのをいつも楽しみになさっておいでですよ」

「儂はいつも阿呆な事ばかり言うとするさかいなあ。ほんなら頼むわ」

四十

狗不死が殷汪の居る建物の方へ行こうとすると、それまで控えていた侍女二人が案内する為に早足で二人の先に立つ。

「ええて。まだ忘れるほど耄碌もろうくしてへん」

狗不死はそう言って少し大袈裟に二人を振り払うような仕草をしたので、侍女達は慌てて脇へ退いて道を空けた。

先程入った入り口から少し行った処で通路が分かれており、庭の中を曲がりくねって進む回廊が伸びている。狗不死がそちらに曲が

っていくので朱不尽も黙って付いて行く。辺りを見回す余裕も無く、ただ緊張して床を見つめながら歩いていた。

「お、静か。久しぶりやなあ」

不意に狗不死が声を発したので朱不尽はハッとなって顔を上げた。長い回廊の先に白一色の衣装を纏った少女が立っている。色白で体つきは細く、風が吹けば飛んでしまいそうな程で、何かの病にでも掛かっているのだろうかと思わせる姿である。歳の頃は十代も半ば位だろうか。しかし、何処かとても幼い子供の様な雰囲気です。朱不尽は奇妙な感覚を覚えた。その少女は狗不死を見て満面の笑みを浮かべて小走りで駆け寄って来たが、その途中で狗不死の後ろに朱不尽を見つけて即座に足を止めた。その表情は驚いているという訳でも無さそうだが何やら不安げで、両手を胸の前に置いて何かを握り締める様になっている。朱不尽はその手を見るが、何も持っている様には見えない。もともと手を揉むような仕草だ。

「ん？ どないしてん？ 何も心配することあらへんぞ？」

狗不死が優しい声を出す、少女の目は朱不尽から一瞬たりとも離れない。狗不死は足を止めずに少女の居る前方に歩いていくので朱不尽も同じように付いて行くと、突然、少女は勢いよく身を翻して回廊の先に駆け出し、あっという間に姿を消してしまった。

「あの……あの方は？」

朱不尽が狗不死に尋ねる。

「あれは、陶静や。教主の妹やで。聞いたこと無いか？」

「あの娘が……」

教主、陶光には妹が居り変わった娘らしい、というのは世間に知れ渡っている噂であるが、それ以上の事は何も知らなかった。

「あの娘はほんまええ子やで。ハハ、殷汪の処に逃げ込んだか。儂等も行くなあ」

狗不死は笑いながら先へ進んで行く。殷汪という名に再び朱不尽は鼓動を高鳴らせた。

回廊の先には扉があり、その前で蔡元峰が待っていた。

「やっと来られたか。心配しましたぞ」

「まだそんな経ってへんやろが。総監は居るんか？」

「はい」

蔡元峰が扉を開き、狗不死が中に入って行く。朱不尽が蔡元峰を見ると頷くだけで動かないので狗不死に続いて部屋へと入る。中は少しばかり薄暗く、僅かに香の匂いを感じる。背後で蔡元峰が扉を閉め、奥へと歩いて行く。

「こちらへ」

奥の部屋へ入るとすぐ脇に一人の女が跪いており、朱不尽はその気配に気付かずに思わず体を引いた。侍女の様だがその身形は一介の召使いの物とは明らかに違い、煌びやかな装飾の施された衣装に高価そうな髪飾りが微かな光を放っている。三人がその前を通り過ぎると女は何も言わないまま立ち上がり、部屋を出て行った。

「総監様、狗不死様が参られました」

蔡元峰が更に奥に向かって言うと言物音が聞こえ、人の気配が近づいて来るのを朱不尽は感じた。

「爺さんの前で「総監様」とか言うな。この爺さん絶対腹の中で笑ってるに違いないからな」

そう言いながら出てきた男を見た朱不尽は、驚きのあまり顔を強張らせた。

「腹ん中位好きなようにしたってええやろが。ほんまおもしろいわ」

上半身は裸で淡い青色の薄絹を引つ掛けただけのような格好、身の丈は朱不尽と変わらぬ程で、透けて見える上半身はよく鍛えられており引き締まっている。何より――若い。いや、若すぎる。年齢は傳千尽が言うには四十はとうに越え、五十に近づいていると言っていた筈だ。傳千尽らと咸水から出てきたのが二十年近く昔で、その咸水に居た時には妻と子があったと聞いている。にもかかわらず、朱不尽の目の前に立ったこの男はまるで青年――いや、中年に差し掛かっても若々しい者はいくらでも居る。目の前のこの男の若さは

そんな程度では無い。ふと、楊迅のまだ少し幼い雰囲気を残した端整な顔を思い浮かべた。歳は殆ど同じと言われればきっと信じてしまうに違いない。

（人ならぬ妖人か……）

男の表情は全く感情が見えず、訪れた三人の方へ微かな光を帯びた眼で視線を漂わせている。この景北港で聞くことはまず無いが、昨今世間で噂されている太乙北辰教の総監がこの男、人ならぬ妖人と呼ばれる殷汪である。

第四章 一

「流浪一天 第四章 一」

一

殷汪いんおうは少しふらつくような歩き方で脇にあった寝台程の大きな長椅子に倒れこむように座り、掛けられている黒の艶やかな毛皮に身を沈める。それが何の毛皮なのか、朱不尽には分からなかった。

「今日は何だ？」

殷汪は気だるそうに蔡元峰さいげんほうに顔を向けてぼんやりと見ている。

「あの、先程申しましたが、朱不尽しゆふじん殿のヒョウ局の件でございます。こちら、こちらが朱不尽殿でございます」

蔡元峰は僅かに眉間に皺を寄せたが、すぐに戻して殷汪に朱不尽を紹介する。一步前へ進んだ朱不尽は拱手して丁寧ていねいに頭を下げた。

「ああ、あんたがそうか」

殷汪はそう言っただけで長椅子の上で大きく伸びをした後、じつと朱不尽を眺めていた。

「座らせてもらうで」

狗不死くふしがそう言って部屋の中央にある椅子に腰を下ろす。

「ああ、あんたらも座れよ」

殷汪が朱不尽に言う。

「失礼致します」

「冰冰ひょうひょう、もっと明かりを増やせ。おい！」

急に殷汪が半身を起こして大声を出したので朱不尽は驚いて下ろそうとした腰を止める。

「先程出て行きましたが……」

蔡元峰がそう言うと、

「そうか。ならいい」

殷汪はまた何事も無かったかのように毛皮にもたれ掛かった。氷とは恐らく先程居た女の事だろう。殷汪の側女だろうか。

「爺さん久しぶりだな。景北港けいほくこうまで来るなんて珍しいじゃないか」

「東淵とうえんで遊んどったんや。ついでやしお前の顔見とくか思てな」

「ハハ、そうだな。そろそろ歳が気になってきたか？」

「まさか。ほんでもまだまだ、くたばれへんで」

「だろうな」

部屋の入りの扉が開き、先程の女が酒を運んで来る。その時初めてその顔をしっかりと見ることが出来た。かなりの美人であると言えるがその気の強そうな鋭い眼差しを見て、朱不尽は苦手な女だと思った。

「冰冰、明かりを増やせ。暗いではないか」

女は持ってきた酒壺と杯を載せた盆を朱不尽らが囲む卓の中央に置いただけで、すぐ殷汪の傍に行くと屈みこんで殷汪に顔を寄せた。

「このくらいが丁度良いと、先程仰ったでしょう？ 近づけばこんなにちゃんとお顔が見えますよ。ほら、こんな感じがお好きでしょう？」

女はまるで自らの息が殷汪の顔に吹きかかるほど顔を寄せるとその白く細い手を殷汪の腕に絡ませながら撫で、長い睫を湛えたその瞳は殷汪の口許に視線を這わせている。

（何だこの女は。無礼にも程がある。俺などは無視されようとも仕方ないが、今は狗不死様も居られるのだ）

朱不尽はその様子を見て憤慨するが、狗不死の様子を横目で盗み見ると、何とも思っていない様で早速酒壺を取り上げて香りを嗅いでいた。蔡元峰も黙って見ているだけだ。

「此処の酒はええ酒やなあ。香りがええわ」

狗不死はそう言いながら朱不尽と蔡元峰の前に杯を置いて酒を注いでいる。

「都、行っとなんか？」

「ん？」

殷汪が訝しげな顔で狗不死を見る。

「洪の奴と都行つとったんちゃうんか？ 春頃やな」

狗不死の質問に殷汪は何か考えている様に見える。朱不尽には何の話か分からなかった。

「……洪破天こうはてんが言ったのか？」

「いや、あいつは何も言わへんけど、まあそれらしい噂を聞いたんや」

「総監様は何処へもいらっしやってませんわ。都だなんて。ずっと私と一緒に居られたのですから、ねえ」

女が口を挟む。相変わらず艶かしい視線を殷汪に向けて漂わせている。

「んーそうか？ 都に「総監」ちゅう男が居ったらしいんやけどな」「都となればそう気軽に行つて来るといふ距離でもありません。

総監様は都には行つては居られません」

蔡元峰も狗不死に言う。

「……洪破天に聞けば良いじゃないか。何故聞かない？」

この殷汪は見た目は若造であるが、かつての丐幫かいほうの大幫主に対し、て全く遠慮は無い様で、実の年齢を比べても狗不死の方が遙かに上だが目上を敬うといった概念は全く持っていないさそうだ。

二

「いや、聞いたんやで？ ただ知り合いの男と遊びに行ったとしか言わへん。そんで、なんか娘拾って帰って来とんねん」

「娘？ フン、あの爺さん、まだ女が要るのか？」

「あほな。孫みたいなんやで。浮浪児ふせんじんだった子を拾ってきたんや。傳千尽ふせんじんとこに預けるみたいな事言うてたわ」

「ふーん……」

殷汪は考え込む様に顔を前後に揺らしながら宙を睨んでいる。

「総監様、ヒヨウ局のお話を……」

蔡元峰が話を本題に持っていこうと声を掛ける。

「ん？ ああ、ヒヨウ局な。おい、静せいを連れて行け」

殷汪は不意に上体を起こし、女に言う。

「お傍に居ては駄目なの？」

「ああ、駄目だ。行け。また後で来い」

「フツ、じゃあまた後で」

女は殷汪の頬に掌を這わせた後立ち上がって背筋を伸ばす。まるで殷汪にそのすらりとした肢体を見せ付けるかのような立ち姿で、露わになった肩から襟元を押し広げている胸元の隆起にかけての曲線に、思わず朱不尽は目を奪われかけたが咄嗟に顔を背けた。殷汪はぼんやりとそれを眺めてから力なく頷く。女が身を翻して奥へ歩き出すと甘い香りが辺りに漂った。

「静様、総監様は大事なお話があるんですって。また後で遊びに参りましょう」

奥から女の声が聞こえてくる。どうやらこの部屋の手前で見た教主の妹、陶静とうせいはずっと奥に居た様だ。暫くすると女が陶静の手を引いて出てきた。朱不尽が陶静に目を遣ると、向こうもこちらをじっと見つめている。目が合っているにもかかわらず陶静は全く視線を逸らさず、まるでこちらの表情を観察するかのようだ。女に手を引かれているが空いた方の手は胸元にあり、やはり何かを持っている様に僅かに指を動かしていた。

部屋の扉が閉じられると、殷汪が朱不尽を見て口を開いた。

「あんたが運んできた荷の一部は教主の許に届いている」

「……賊を成敗されたそうですね」

「誰に聞いた？」

「街の者がそう申しておりました。賊が奪った荷を持って帰ってきたと」

殷汪はそこで大きく息を吐いて頬杖をついて朱不尽を見つめている

た。

「あんたはどうしたいんだ？」

「私は……今はとりあえず我等を襲ったのが何者なのかを知らねばなりません」

「何の為に？ 荷主に報告する為か？ あんた、襲われてからずっとこっちに居るんだろう？ 武慶ぶけいに行かなくて良いのか？」

「それは……下手人を突き止めてから参ります」

「そうか。しかし突き止めれば武慶に行くことは出来んだろうな。生きて帰れぬかも知れん」

「総監様は、ご存知と言う訳ですな？」

「さあな。俺には言えん」

「何故でございますか！？」

朱不尽は思わず声を荒げた。

「我等を襲ったのは……まさかあなた様では……？」

「朱不尽殿！ 言葉が過ぎますぞ！ 何故総監様がおぬし等を襲わねばならぬ？」

蔡元峰が気色ばんで朱不尽を睨みつけた。

「ならば殷総監様！ 何卒お教え下さいませ！」

朱不尽は立ち上がり殷汪を真っ直ぐ見据えた。その瞳には並々ならぬ気迫が込められている。殷汪を怒らせてしまうかも知れないとは考えていたが、ご機嫌を伺いにこの方崖まで来た訳では無いのだ。訳の分からないまま命を落とした多くのヒョウ客達の為にも、いざとなれば命をも張らねばならないと思っている。

意外にも殷汪は今までと変わらぬ気だるそうな表情で毛皮を撫でている。此処に来るまで朱不尽が想像していた殷汪像というものは完全に壊されていた。

「全く……困ったな。出来れば隠しておきたいと考えていたんだが」

「お、なんやなんや？ 何があったんや？」

狗不死が目を輝かせて殷汪を見る。来る前から酒を飲んでいるので既に顔が赤くなってきた。殷汪がチラッと蔡元峰を見た。

「朱不尽殿、座ってくれ。とりあえず分かっている事を話そう」
朱不尽は再び腰を下ろすと蔡元峰の方へ身を乗り出した。
「そなたの荷をこの方崖ほうがいに持ち帰ったのは……劉寨主りゅうさいしゅ、劉毅りゅうぎだ」
朱不尽は蔡元峰の出した意外な名前に驚いた。劉毅といえば永く北辰教ほくしんきょうに属しており幹部として知られているが、その稼業は真つ当なものでは無く、数百の手下を従えた盗賊の頭である。

三

朱不尽の表情が険しいもの変わったのを見て蔡元峰は言葉を続けた。

「劉寨主さんこうせんが三江村に現れた賊を退治して奪われた荷を持ち帰った。そういうことになっている。劉寨主がそなた達を襲ったという証拠は何も無い。確かに劉寨主率いる九宝寨きゅうほうさいは昔から盗賊集団としてその名を知られておるが、前教主、陶峯様とうほうと共に行動するようになってからはそれほど手荒い真似をする様な事も無くなっておる」

「まあそうやなあ。それ以前にあの劉ちゅう男がやる仕事ちゃうわな」

蔡元峰に続いて狗不死も話し始める。

「どういうことです？」

「あの男、若い頃は滅茶苦茶しおったがな。それでもその辺のこそ泥とはちゃうで。まあ盗みだの殺しだのちゅう話に感心しとる訳やないけど、とにかくあれの狙う獲物はでかいんや。普通誰も手え出さへん様なやばい仕事をしおる。ほんで何でもない様な顔して簡単にモノにしてしまうんや。変な話やけどあれを慕う奴も仰山現れてなあ。九宝寨に集まる人間が膨れ上がった訳や」

「左様。つまり、劉毅がそなたの荷を襲うのは奴をよく知る人間から見れば不自然に思えるのだ。何の利がある？聞けば百を越える人間が居たそうだが、以前そなたに見せてもらった荷の目録を見ても、

全て奪ったとて割りに合わんように思える」

蔡元峰と狗不死が互いの言葉を補うように交代で話している。朱不尽はじつと聞いていたが、今言われた賊の利については最初から考えていた事である。きつと蔡元峰はそれを踏まえて先を探っていた筈だ。

「そのような事は分かって居るのです。動機が何であれ劉寨主の独断で行った事では無いというのは分かりきっております。今、荷が教主様の許にあるという事ですからな」

「だからそれは……本当に賊が別に居たとも充分に考えられるではないか。三江村で起きた事は一両日中にはこの方崖にも伝えられる。それから劉寨主に賊の討伐を命じて現場へ付くのは更に一両日。確かにそれほど時が経ってから賊に出くわすなど普通は考えられんが、何もその現場で見つけた訳では無からう。詳しくは聞いておらぬがきつと別の場所で探し出したのだ。そなたは襲われた直後に東淵まで引き揚げた。劉寨主は襲われたのがそなた達であったと知っていなかったのではないか？ 賊は全て討ち取ったと言う。荷が残っていれば持ち帰るだろう」

「では、何故劉寨主なのです？ このような場合、賊の討伐を命じられるのはいつも劉寨主なのですか？ 街の者の話では討伐に向かったのはこの方崖の精鋭であったと申しておりました。劉寨主は方崖にお住まいでは無い筈。教主様はわざわざ九宝寨から劉寨主を呼び寄せられたと？」

「九宝寨はそれほど遠方にある訳ではない」

蔡元峰は僅かに口を曲げて少し投げやりに言う。

「蔡長老様。全てお話頂けませんか？ どうかお考えをお聞かせください」

そう懇願する朱不尽とは目を合わせずに蔡元峰は俯いた。

「あんたらを襲ったのは劉毅だ」

今までずっと黙っていた殷汪が不意に言う。その言葉に朱不尽は

驚いて振り返った。

「総監様！ それはまだ確かではございませぬ！」

殷汪は蔡元峰を無視して続ける。

「全く、くだらん話だ。こんな……くだらん事を本気でやるとは信じられなかったけどな、あんたの部下は……全く無駄死にだ」

朱不尽は一体どういうことなのか全く分からずに、ただ口をポカッと開けたまま殷汪を見つめていた。

「何や？ ちゃんと説明してもらわな分からへんがな。何で劉の奴が襲うんや？ 何の為に……」

「フン、あれはヒョウ局の荷に興味なんて無かったろうよ。命じた奴が居るのさ」

蔡元峰は大きく溜息をついて力無く項垂れた。

四

「劉寨主に命じる……そのような事が出来る人間は限られてきますな」

朱不尽はいよいよ話が核心に迫るとあって顔を紅潮させ拳を握り締めていた。

「俺はそんな物に興味は無い」

殷汪は吐き捨てるように言う。

「長老衆でも劉は動かせへんやろなあ。ほんなら一人しか居らん」
「狗不死は蔡元峰を見たが、蔡元峰は口をつぐんだままである。」

「一人？ まさか教主、陶光……様？」

朱不尽は驚いて狗不死を見る。

「んーちゃうな。まあしも教主の口から命令が出とったとしてもそれは教主の考えとちゃうで。いっつも教主にくつついとる張新やがな」

「張新……」

朱不尽は呟いた。

「張新殿のご身分は知りませんが、劉寨主を動かせると？」

「張新は……総監になる事が決まっておる」

蔡元峰がようやく口を開いた。

「ほほーそりやすごいわ。名実共に北辰を仕切るっちゅうんか」

「いや、そこまでは……もう陶教主様も幼子ではありません。これから陶教主様、殷副教主様の許に我等は結束せねばなりません」

「何だよ。それはそんなに簡単に喋って良かったのか？」

殷汪が口を挟む。

「あ、いや、まあこれは……」

「副教主やて？ そんな役目、北辰教にあったんかいな」

「無い。全ては張新が肩書きを欲しがったんだろうよ。俺はここ最近何もしておらんしな。俺を副教主様とか言って押し上げという総監になるのさ。俺は総監と言ってもなーんにもしてねえけどな。奴は総監になったら色々と働くんだろうな」

「……お前はそれでええんか？ 今言うたんがほんまやったら、いずれお前を追い出しに掛かるんちゃうか？」

「ハッ、もう始めてる」

「ん？」

「第何幕目か知らんが、ヒョウ局を襲わせたのもその為だろう」

朱不尽はじっと聞いていたが、頭の中は忙しく動いている。しかし殷汪の説明はまだまだ足りなかった。

「何やまた面倒な謎解きやなあ。どう繋がるんや？」

「……くだらな過ぎて外部の人間に聞かせるのが憚られる位だ」

殷汪が朱不尽に目を遣ると、朱不尽はじっと睨み返す。溜息を吐いて話を続けた。

「あんたが武慶から運んで来た荷は、陸皓から俺への祝いの品だった」

朱不尽はすぐに東淵で傳千尽に聞いた話を思い出した。方崖の祝い事とは何かと尋ねた時、傳千尽は殷汪が副教主になるという情報

を既に掴んでいた。

「あんたはあの荷を俺にこっそり届けろと言われたのか？」

殷汪が朱不尽に問う。

「いえ、ただ「方崖へ」と」

「つまり本来ならあんたはただ真武剣派からの荷だと言って誰か知らんがこの方崖の人間に引き渡した筈だ。当然、張新あたりが中身を確認して教主に見せる。書状くらいあっただろう？流石に張新が勝手に書状を開ける事は出来ない。書状に宛名は？」

「いえ、何も」

「なら、そうだ。教主が祝いの品を見る。陶光の事だ。きっと何も考えずに俺の処に持って来るだろう。それで終わりだ」

「……えらい勿体ぶるやないか？それを途中で襲わせてどないする？」

「あなたを追い落とす為に……真武剣派とあなたが秘密裏に密接な関係を持っている様に見せる……」

朱不尽が呟く様に言う。殷汪は僅かに頷いた。

「そうだな。一体、陶光に何て言ったんだろうな……いや、陶光に言うより長老衆に聞かせる方が効果あるな」

「お前、そこまで分かつんのに、ほっとくんか？」

「……俺はもう疲れてんだよ。好きにしろって感じた」

「何故……何故そんなくだらない事に付き合ってうちのヒョウ客達が死なねばならない？」

朱不尽が声を震わせながら搾り出すように声を出した。

「我等、緑恒千河幫りよくこうせんがぼうは長年北辰に協力してきたと言うのに、この仕打ちは何だ！」

朱不尽は完全に頭に血が上り、最早殷汪らが傍に居る事など頭から飛んでしまったかの様で、声を荒げて掌を傍の卓に振り下ろした。

「断っておくが、これも証拠は無い。俺がそう考えているだけだ。どうだ蔡長老？ そんなところだろ？」

殷汪の言葉は朱不尽の激しい怒りとは対照的に、とても冷やかで低調なものだった。

「……」

「何だ。どこかおかしいか？」

「いえ……」

「ほんなら副教主の話もう仕舞いか？」

「そりゃそうだろう。フン、その方がこっちは都合が良い。今まで通り、楽にしていられるしな」

「それはおかしいやろ。真武剣と繋がつとるさかい副教主は無し。それだけでは済まへんやないか。ほんまに追い出されるで」

「さつきも言っただろう？ もう疲れてんだよ。出て行って言われたら出て行くさ」

「総監様！」

蔡元峰が殷汪を制するように声を発したが、殷汪は何も気にしていない様子で再び毛皮に横たわる。暫く沈黙が続いた。

急に朱不尽が部屋の入り口へと歩き出した。

「もういいのか？」

殷汪がその背中に声を掛ける。

「お話は充分理解致しました。失礼致す」

言葉遣いは丁寧であったがその目は鋭く睨みつける様である。

「おいおい、もう行くんかいな。一人はまずいで」

狗不死は慌てて立ち上がり朱不尽について行く。

「明日、教主に会う言うてしもたからな、また来るわ」

朱不尽はその後一度も振り返らずに一人先に部屋を出て行った。

「総監様、あそこまで話される必要は無かったかと……」

「いいんじゃないか？ これで范凱^{はんがい}の耳にも入る。どう出るかは知

らんが、張新に噛み付いてくれりゃあこっちは楽になる」

「それでは我が教の立場が危うくなります。張新のやった事はどうも許されるものではありません。総監様、今の内に……いや、もう後は無いのです。張新を止めなければ――」

「蔡長老、悪いな……」

「さっきの話、信じるんか？」

朱不尽に追いついた狗不死が背後から声を掛けた。

「私はこの方崖の内部の事情など全く知りませぬが、先程の殷総監の話におかしい所は無さそうです。蔡長老様もどうやら同じように考えておられる様ですな。狗不死様はどのように思われましたか？」

朱不尽はそう言いながら真っ直ぐ前を見据えている。

「そうやなあ。ありえん事ではなさそうやな。しかしなあ、総監追い出す為やなんて、何ちゅうか……稚拙な策やな。とんだとばっちりや」

「……殷総監はいつもあのような方なのですか？」

「変やったな。ほんまに北辰から離れるつもりやろか。なんや具合悪そうにしてたな。あのけったいな技の修練で体に害が出てきとるんかもしれん」

「技？」

「いや、技と呼ぶんかどうかは知らんけどな。あの、若なっていく奇妙な……術か？」

「正直驚きました。あのような事が実際に可能とは……」

「儂は教えてもろてもやらへんで。あれ……かなり危なそうや。昔と別人みたいになりよったわ。ただ若なただけとちゃう。顔が全然ちゃうねん。それに雰囲気やな。あれがこの方崖に初めて来た時から知つとるけど、そら滅茶苦茶凄かったで。儂かて腕に自身はあったけど、下手に動いたら息の根止められへんか思うくらいでなあ。別に敵でもないのにな。ハハ」

「しかし今でも殷総監の武芸は……？」

「んーどうやらな。あれが自分の武芸を見せたんはほんま最初の頃だけや。後はぱったりと出るのを辞めてしもてな。もしかしたらあの技のせいで他の武芸を失ってしもたとか……いや、あかん。想像で物言うたらあかんわ」

「……」

「そんな事よりや。あんた、ほんまにすぐ緑恒に帰るんか？」

「はい。范凱幫主に報告せねばなりません」

「そうやな。何にしてもあんた一人ではどうにもならん。范凱の息子、あれもはよ帰した方がええやろ。殷の話はまだ聞かせん方がええで」

朱不尽は范撞はんどうの事を思い出してハッとなった。当然、暫く先程の話を伏せておかねば何をしでかすか分かったものでは無い。

「狗不死様。范撞の居る宿を教えて下され」

「ああ、儂も他に寝るとこ無いし、その宿に帰るさかい、行こか」

六

方崖を離れ、朱不尽と狗不死が范撞の居る宿までやって来ると、宿の二階から大声が聞こえてきた。酔っ払いが喧嘩でもしている様で、何やら罵り合っている。朱不尽はハッとなった。

「……全くお恥ずかしい。あれは范撞の声です」

「ああ、そやな。なんか聞いた事ある声や思とった。一体何があったんやろな。楽しみやで」

狗不死が手もみしながらさっさと宿に入って行くので朱不尽もすぐ続いた。

「俺はそんな事を言ったんじゃない！ いい加減にしてくれ！」

「何が違う？ 貴様この景北港で我が教を侮辱するとは大した度胸だな！ 緑恒の人間ということは千河幫の者か？」

「ハッ！ 緑恒だから千河幫だって？ なんて単純なんだ。この景北港に居る人間は一人残らず北辰教徒か？」

「そうだ！ お前等を除く全てが陶教主様に帰依しておるわ！」

「どうだかな。確かにあんたみたいに教主に心酔してる奴は多いだろうよ。だがな、本当に全員そうなのか一度冷静に見てみるんだな。これだけの人間がいりゃあその種類もいろいろに決まってる。自分の信じる教主様の許に集うのは英雄好漢ばかりか？ これだけでかい組織になりゃあ薄汚い盗人だって寄ってくるもんだ！ あんたみたいな狂信者が一番性質が悪いぜ」

「な、何だと？」

「確かに俺はよそ者だ。外から見るとあんた等のおかしさが良く判るってもんだ」

「おい！ もうよせ！」

すぐ横に居る田庭閑でんていかんが范撞の方に手を掛けて制止しようとするが、范撞の口が閉じられる事は無い。

「お前もそう思うだろ！ この奴等は真武剣と比べてどうだ？ 全く恐ろし過ぎる」

「貴様等、真武剣しんぶけんの者か！？」

「やめろ！」

朱不尽は范撞の大声が聞こえてくる二階に駆け上がり、すぐに范撞を見つけるとその前に飛び出した。

「おい、いい加減にしろ！ お前酔ってるのか？」

「あ、ああ朱さんじゃねえか」

范撞がいきなり目の前に立った朱不尽を認識するまでに僅かだが間を要した。

「なんだあんたは。こいつらの仲間か？」

「……これは私の連れでしてな。どうやら悪酔いしたらしい。失礼致した」

「フン、お前も真武剣派とか言うんじゃないだろうな？」

「いつ、いつ俺が真武剣派だと言ったんだ？　全く……信心深い奴は何でもすぐ信じるんだな」

「貴様！　もう許せぬ！　生きて帰れると思うな！」

范撞と対峙している男はそう言っ拳を握って突き出した。剣の類は持っていない。

「お待ち下され——」

「ここはかの有名な景北港やないか。北辰教徒も居るし、千河幫だつて居るやろ。真武剣の奴かつて居ったってええがな。丐幫かいほうも居るで」

朱不尽に続いて狗不死が、范撞を目を血走らせて睨みつける男の前に立った。

「何だ爺！　お前は丐幫の者か？　フン、どうりで薄汚い格好なわけだ。この景北港に何の用だ？　貴様等つるんで何をするつもりだ？」

確かに狗不死の着ている物はかなりくたびれて所々擦り切れているが、男の纏った青い袍も似たようなものでとても良い身形とは言えなかった。

「何もせえへんがな。今日はもう酒飲んで寝るだけや」

狗不死は近くにあった酒の入った酒杯を手にとると中を覗き込み、一気に呷る。

「おい！　それは俺の酒——」

「まで！　おい、この爺さん……」

今度は青袍せいほうの男の連れらしきもう一人の男が袖を引っ張って囁いた。

「もしかして丐幫の狗幫主じゃ……？」

「せやから儂はもうとくに引退しとるわ。もうかなり前やで？」

……いうて知らんわな。まあとにかく酔っ払い相手にしとつてもおもしろいやろが。儂はおもしろいけど。ほれ、お前等は外に出え」

狗不死が范撞にそう言うのと朱不尽を見る。朱不尽は頷いて、

「さあ、出るんだ」

范撞の体を押しながら田庭閑に目を遣る。朱不尽と田庭閑は范撞の両腕をとって階下へ降りていった。

七

朱不尽と田庭閑は范撞を宿の外まで連れ出した。辺りは薄暗く、人も殆ど居なかった。

「おい、しっかりしろ！ お前達今日着いたそうだな？ 着いた早々にこんな騒ぎ起こして一体どういうつもりだ？」

「向こうが范撞に絡んできたんですよ。あっちも結構飲んでた様ですから、お互い変な絡み合いになって……」

田庭閑が范撞の腕を掴んだまま説明する。

「朱さん、俺、俺達はあんたを追ってきたんだぜ……ヒョウ客は……辞めた」

「辞めた？ どういうことだ？」

范撞は体を前後に揺らしながらニヤついている。田庭閑が東淵をまるで飛び出す様に出てきた事を朱不尽に伝えた。

「……それで辞めただと？ 俺の承認無しに辞める事など出来ないぞ。おい、しっかりしろ」

その時、宿から先程范撞と罵り合っていた男が連れと共に出てきた。後ろには狗不死もついて来ている。

「おい貴様等、さっさと此処から離れるんだな。次に会ったらこの景北港から叩き出してやる」

男達はそう吐き捨てる様に言うとブツブツ言いながら歩いて行った。

「本当に申し訳ございません」

朱不尽が狗不死に向かって頭を下げる。きっと狗不死があつた男達をなだめてくれたに違いなかった。実際はなだめたかどうか分からないが、とにかく大人しくさせてくれただけで大いに助かった。

「ああ、爺さんも来たのか」

「さつき上で見とらんかったんかい。まあええわ。もう長居は出来へんで？」

「あんな奴等どうってことねえよ」

「いや、范撞。緑恒に帰るぞ」

范撞と田庭閑が揃って朱不尽を見た。

「もう何か掴めたんですか？」

「ああ、お前達が狗不死様をお連れしてくれたお陰で方崖に行く事が出来たのだ」

「方崖ですか？」

田庭閑は言葉を失った。相当な賭けだ。今無事に目の前に居るという事は、下手人は北辰教では無かったに違いない。尤も、北辰教の言う事をまともに信じる事は出来ないが、そんな事は朱不尽も重々承知の筈である。

「どうだったんだよ？ 全部分かったのか？」

「酔っ払いに聞かせる話では無い」

朱不尽は冷静で范撞を無視している。

「お前は酒入ってへん時でも危ないらしいやないか。今は秘密や」

「何だと爺……」

時折生ぬるい風が范撞の頬を撫でていくが、酔いを醒ます効果は全く無さそうで、相変わらずじっと立っていられずにふらついていた。

「まずは范幫主に報告する。あと武慶にも行かねば……」

そこで朱不尽は田庭閑を見たが、田庭閑は咄嗟に俯き目を逸らす。朱不尽は気に止めずに宿を見上げた。

「とにかく今夜は此処に泊まるのだ。俺は別に宿をとっているから其処に戻るが、朝まで絶対外に出るな。早朝迎えに来る。帰るからな」

「儂も居るし心配無いで。儂は明日も方崖に行かなあかんでな。一緒には戻らへんけど」

「狗不死様、この御恩は忘れませぬ。狗不死様が居られなければきつとこの街で途方に暮れておった事でしよう」

「そんならこいつらに感謝してもらわな。儂を連れて来てくれたんやからな」

朱不尽が范撞を見ると立ったまま殆ど寝てしまっている。田庭閑が踏ん張って倒れないように支えていた。

「さあ、范撞。部屋で休め。田殿、行けるか？」

「あ、はい。大丈夫です」

「頼む」

「ほんならな」

「それでは明日……」

田庭閑が范撞を連れて宿へ戻って行き、狗不死も後に続いて歩いていくのを朱不尽はじつと見つめていた。

朱不尽は自分の宿に戻り、范撞に殷汪の話を聞かせるかどうか思案している。范撞もそれを知る為に此処まで自分を追ってきたのだ。何も聞かせないままで納得する訳が無いが、話すにしても出来るだけこの景北港から離れてからにした方が良くと考えていた。

八

翌朝、朱不尽が宿を出て范撞達の許へ向かっていると、後方から馬が一騎追って来る。見れば蔡元峰であった。

「朱不尽殿、もう行かれるのか？」

「はい。緑恒へ戻ります」

蔡元峰は朱不尽の横に並び、二人とも馬上にて話している。

「昨夜の話だが……范凱幫主に報告するのは仕方がないが、まだ確証は無いのだ。広く知れ渡る様な事にならぬようにお願いしたい。我等からこの様な事を言うのをおぬしは納得出来ぬかも知れぬが……」

「しかしこれだけは言っておかねばならぬ。陶教主は……我等北辰教は決して千河幫と仲違いする様な事は望んではおらん。引き続き詳しく調べる」

「それは承知致しております。殷総監のお話は全て理解したと心得ております」

「……殷総監の事だが」

「……？」

「昨夜もご本人が言っておられたが、もう長い間体調を崩しておいででな。殆ど表には出ておられぬ。方崖の人間は皆知っておるが、まだこの街にも漏れてはおらぬ。しかしきつとまたお元氣になれる筈だ」

蔡元峰はじつと朱不尽を見つめる。これも他言してはならぬと言う事であろう。朱不尽ははつきりと分かるように大きく頷いて見せた。

「それでは……そろそろ参りますので」

「うむ」

蔡元峰も頷き返し、そのまま黙ったまま二人は別れた。

朱不尽は馬を進めながら考えていた。全てが殷総監と蔡長老の読み通りであったとして、一体どの様な具体的な方策が取れるのか？

今、北辰は教主陶光を中心に殷汪、張新、それに蔡長老ら十数名からなる長老衆が居り、その他劉毅の様な独自の配下を持つ北辰に名を連ねる集団の頭領達。それらが北辰を動かしている訳だが、どうやら張新という人間は教主に最も近く、教主を動かす様な位置に居る様だ。教主がまだ若いという事もある。教主が動けば長老衆は追随するだろう。蔡元峰も基本的には同じなのだろうが、「彼は殷汪派である」という噂がある。確かに殷汪と親しい間柄ではあるが、派閥と呼べる程、他の長老達と距離があるのだろうか。今回の問題が明るみに出た場合、自分達と対峙する事になるのは張新、そして教主陶光という事になろう。当然殆どの長老達でもある。劉毅が実行犯であるという読みから、結局、北辰全てが敵になるのだ。何

らかの事を進める為の頼みの綱となる筈の殷汪は、昨夜の様子では全く当てに出来ない。蔡元峰を加えたとしても恐らくどうにもならないだろう。

前教主陶峯が殷汪を呼び寄せた当時、既に殷汪は国中の者が名を知る英雄であつた。前教主が覇を唱えるに当たつてその旗印にした程の人間である。陶峯自身も傑物と呼ばれ、そして太乙北辰教の急拡大を成し遂げた人物で、そこに武芸天下一と言われる殷汪が加わつて北辰教徒数万がこの二人に心酔したのである。それが今や陶峯は亡くなり、殷汪は殆ど姿を隠すようになって数年。陶峯の息子の世話役であつた張新が自らの権力を揺ぎ無いものにするのに充分な時間が経つていた。本来、張新の横暴を止めるべき人物、それが殷汪でなければならぬのだ。しかし、どういうわけか当の本人は訳の分からない状態でまるで自滅していくかの様だ。

全てを范凱に報告しなければならぬが、結局何も出来ないという状況である様に思えて、絶望にも似た感情が朱不尽の中に湧き上がってくる。ずっと考え込みながら気が付くと范撞達の居る宿までやつて来ていた。何処を如何通つたのか、よく覚えていなかった。

宿に入ると狗不死の姿がすぐに目に入った。

「あいつ、まだ酒が残つとるみたいやな。さっきやつと起きたんや」
狗不死は席に着いて茶を飲んでゐる。朱不尽はその前に腰を下ろし、范撞と田庭閑の二人を待つ事にした。

九

范撞らが出てきた時にはとうに陽が登り、日差しがきつくなつてきていた。それぞれ自分の荷を背に括つて準備は出来ている様だが、范撞の方は未だ足取りが重い。

「さっさと出るぞ。緑恒まで急ぐんだからな」

「あの、東淵にも寄るのでしょう？」

田庭閑が尋ねる。

「ああ、通らねば戻れぬからな。まあ、顔を出しておかねば……」
朱不尽は傳千尽に何も言わずに急に飛び出してきた事を思い返す。
会って詫びねばなるまい。

「儂も少ししたらまた戻るわ。そうや、洪の爺にそう伝えといてくれ」

狗不死が田庭閑に向かって言うと、田庭閑は頷いた。

朱不尽達は狗不死に重ねて礼を述べ、宿を離れた。大急ぎで戻る、ということも無かったが、あまり休みもとらずに東淵へと馬を走らせた。

東淵の街まで戻った朱不尽達は、まっすぐ傳千尽の屋敷へ立ち寄った。

「えらく早いお戻りだが……話を聞かせてもらえるのかな？」

傳千尽は朱不尽の顔をじっと見つめたまま静かに言った。朱不尽が姿を消してから随分と気を揉んで、再び朱不尽を前にして安堵したのは確かだが全く面には出さない。

「方崖へ行って殷総監に会うことが出来た」

「なに？」

朱不尽は狗不死と共に方崖に上がった時の様子を傳千尽に話し始めた。

范撞と田庭閑は部屋の外で話が終わるのを待っている。黙ったまま二人並んで庭を眺めていると、部屋の前に傳朱蓮ふしゆれんが姿を見せた。

「……無事だったのね。早かったじゃない」

「……」

范撞は黙ったまま目を合わせない。

「俺達は何もしてないんだ。行っただけさ」

田庭閑が代わって答える。

「そう……」

再び沈黙が訪れる。しかし傳朱連はその場を離れようとはしない。

「あの、魯ろさんが……」

僅かに范撞が視線を上げた。

「必ず、あなたが必ず朱小父様を見つけて戻ってくるから、その時は宜しく頼むって……」

范撞は再び視線を落としたが、その口許は先程より少し緩んでいた。

「范撞！」

急に声がして三人が一斉に顔を向けると、こちらへ歩いてくるのは楊迅ようじんだった。もう傷を気にする事も無く、自然に歩いている。

「早かったじゃないか。無事で良かった」

「ああ、結局俺達は何も出来なかったけどな。お前こそ随分良かったみたいだな。まだ大して経って無いってのにな」

「もういつでも緑恒へ戻れるよ。で？ 何か分かったのかい？」

「あー、朱さんが方崖で話を聞いてきたんだけど、詳しく教えてくれねえんだよ。まず親父に報告するってさ」

「そうか……」

「洪の爺さんに言っとかなきゃな。狗さんの事」

田庭閑がそう言うのと范撞が急に思い出した様な素振りです、それまで黙って俯いていた傳朱蓮に向き直った。

「なあ、洪の爺さん、今日も店に居るかな？ 流石に毎日には居ないか？」

「え、ああ、居るかも」

急に声を掛けられて傳朱蓮は戸惑った様子であったが、前と全く変わらない范撞の話し方に思わず心が弾んだ。范撞が街を離れてからというもの、ずっと後悔し続けていた。つい感情的な態度で范撞と別れたが、その後の魯ヒョウ頭の言葉や楊迅と話しているうちに、范撞の真意はその表面的な態度からは窺えない物であると考えようになった。全ては死んだヒョウ客の為、危険と知りながら方崖へ

と乗り込んだ朱不尽の為、ただそれだけの為に范撞は行動する。魯ヒョウ頭は結局、范撞をよく知っていた。永く一緒に居る楊迅も。自分だけがずっと感情的になったままで居た事を心から恥じた。知り合ってまだ僅かな訳でそれらの事は全く気にするような事でも無いのだが、何故か傳朱蓮は自分だけ分からなかった事がとても嫌だった。

「居るんじゃないかな？ 梁媛りょうえんが言ってたから」

楊迅が范撞に言う。

「梁媛？」

「ほら、洪さんと一緒に居た娘が居たろ？ 木に登ってた――」

十

「ああ、あの子か。孫を放っておいて酒飲んでんのか？」

「そうじゃないわ。梁媛は私のお母様の所へ行っているのよ。お母様にここで楊さん達のお世話する様に言われたらしくて」

「ふーん。とにかく店に行くか」

「私も行っていい？」

傳朱蓮が尋ねると范撞は何も言わずにただ頷いた。

「爺さん、いつか死ぬぞ」

「何を言っておる。死なん奴が居るか？ お前だっていつか死ぬじやろう」

范撞は紅門飯店こうもんはんてんに入り、奥に居た洪破天をすぐに見つけた。酒壺が二つ転がっている。

「早かったのう？ 何も出来なんじゃないやろうが？」

「まあ、俺達はな」

洪破天を囲むように范撞と傳朱蓮、田庭閑、楊迅の四人が席に着く。

「あんたたち、無事だったのね。朱さんも一緒？」

傳英ふえいがすぐに范撞らの姿を見つけて酒を運んで来た。

「今、屋敷で傳の旦那と話してるよ」

「楊さんはもう飲めるかしら？」

「あー少し頂きます」

「本当に少しだけよ」

すぐに別の席の客から傳英を呼ぶ声が上がる。

「今日は兄さんの処に泊まるんでしょ？」

「あーどうかな。流石に世話になり過ぎてるしな」

范撞がそう言うのと、

「朱蓮、ちゃんとうちに引き止めておくのよ」

傳英は傳朱連にそう言い残して席を離れて行った。

「何が分かった？」

洪破天が話を切り出す。

「朱さんが方崖で殷総監に会った」

洪破天は全く表情を変えず范撞をじっと見ている。

「全く何も話してくれなかったの？」

楊迅が尋ねると、范撞は大袈裟に首を振って見せる。

「色々話してくれたらしい。総監様がな。でもその内容は緑恒で報告するまで俺達には言わないつもりらしい」

「そうか……でも、何か分かったんだね」

「どうかな」

田庭閑が言う。

「朱ヒヨウ頭、何だか時々物思いに耽る感じで何か悩んでいるみたいだけど」

「そりゃそうだろ。何て言うかこう……複雑な話に違いないぜ」

「何よそれ」

范撞の言葉に傳朱蓮が笑い出した。

「な、何だよ？」

「いいえ、何でも。複雑な話ねえ」

洪破天が酒杯を呷ってから静かに置き、口を開いた。

「殷汪には初めて会ったのじやろう？ 印象は言っておったか？」

「あーそうだ。なんか、病気みたいだぜ？」

「えっ？ 病気？」

傳朱蓮が驚いて目を見開き、声を上げた。

「ちよつと違うだろ？ フン、きっと妖術が暴走したのさ」

田庭閑はそう言って僅かに鼻を鳴らした。

「それも違うだろうが。爺さん、朱さんの話じゃあ殷汪って人は見た目俺達と変わらねえらしいけど、昔からそうなのか？」

「そんな、おかしいわ！」

傳朱蓮が再び声を上げて洪破天を見る。

「そんな事って……」

「会った者が言うんじゃから、そうなのじやろう？」

「小父様……？」

洪破天はしっかりと口を結んで自らの酒杯に酒を注いでいる。

「どういう事だい？」

范撞達は傳朱連を見る。傳朱連は視線を宙に漂わせながら何やら考え込んでいる様子で口を開くまでに時間が掛かった。

「殷兄さんがずっと若いのは……特殊な内功ないこうの作用で普通の人より体の衰える速さがずっと遅くなるのよ。もう十年近く会ってないけど、確かに凄く若々しかった……。お父様とあまり変わらない歳なのに。でも、十年前でもあなた達と同世代になんて見えなかった筈よ。そうよ。小父様、そうよね？」

「……そうだったかのう？」

洪破天があまりにもその事について触れようとしないので范撞達は訝しがったが、特に詮索しようとも思わなかった。傳朱連は再び黙り込んだ。

「景北港では――」

田庭閑が口を開く。

「北辰の者は武器を持たない？　携行している人間を見なかったけど」

傳朱蓮は首を傾げた。

「どうかしら？　私は小さい頃しか行った事無いから、よく分からないわ」

洪破天の方に顔を向ける。

「普段は武器を携行する者は居らんのう。武器を持つものはよそ者だとすぐに判る。しかし皆、無手の武芸を修めている訳ではない。騒動でも起こればたちまち何処からか大量の武器が運び出されてよそ者は包囲されるじゃろうな」

「なるほど。それで俺たちは一発でよそ者だとばれた訳か」

「何かあったの？」

楊迅が田庭閑の顔を覗き込む。

「何もねえよ。酔っ払いが絡んで来ただけだ」

范撞は上体を伸ばして頭の後ろで手を組み、前後に揺らしている。「しかし……俺が賊の事を突き止めて、それで朱さん連れて凱旋してくる予定だったんだがなあ。ただ行っただけで格好がつかねえよ」

「狗はどうした？」

「ああ、そうだ。狗の爺さん、朱さんと一緒に殷総監に会いに行ったらしいけど、教主にも会っていくって言って残ったよ。まさか教主とも知り合いとはな。丐幫の元幫主だって？　ただの飲んだくれかと思ってたけど」

「フン、当たっておる。昔からただの爺じゃ」

「あの爺さんが北辰教教主様と知り合いか……方崖も今までより身近に感じるな」

范撞はそう言って笑う。

「あのような場所、儂なら絶対に近づかん。たとえ招待されても断る。まあ、儂みたいな者に用は無からうがな」

洪破天はそう言った後、やおら立ち上がり、そのまま席を離れようとする。

「爺さん、帰るのか？」

「ああ。お前達はまた千尽の所か？」

「んー、たぶんそうなると思う」

「すぐ緑恒に戻るであろう？　まあ、よく幫主と相談するんじゃない」

洪破天はもう一度范撞ら三人に目を遣ってから、踵を返してさっさと店の外に出て行った。外は夕陽で赤くなっているが、通りは相変わらず人でごった返していた。

残った四人はそのまま店に残り、食事を取りながら朱不尽から聞いた殷汪の様子や、景北港までの道中での話し等を楊迅と傅朱蓮に話したりしながら過ごした。すでに陽は落ちているが、通りの赤い光が見えている。

「あんた達、戻らなくていいの？」

時折、傅英が様子を見に来ていたが、「大丈夫だ」と言うだけで腰を上げることは無い。

「あ、叔母様。私が持っていくわ」

傅英が片付けようとした皿を傅朱蓮が重ねて席を立った。そのままふと店の入り口付近に視線を向ける。

「あら？　……あれ」

「ん？」

田庭閑も振り返り、傅朱蓮のしている入り口に目を遣った。

「おい、范撞」

田庭閑は隣に座っていた范撞の肩を揺する。

「何だ？」

「狗の爺さんが居る……」

「何？」

范撞も振り返って立ち上がる。見れば狗不死に間違いない。入り口から少し入った所で辺りを見回して誰かを探している様子である。「何で此処に居る？　まだ景北港の筈じゃあ……」

十二

范撞らが立ち上がり一様に入り口の方を見ているので楊迅も席を立てて目を凝らす。

「あのお爺さんが狗幫主なの？」

「ああ。いや、前の、だけどな」

その時、狗不死が丁度こちらを向き、すぐに外に出て行く。

「何だよあの爺さんは。今絶対俺達に気づいたよな？」

范撞はそう言って入り口に向かって歩き出そうとすると、またすぐに狗不死が入ってきて今度は真っ直ぐ早足で近づいてくる。

「お、何だ何だ？」

「お前達、洪見てへんか？」

「ん？」

「洪や。洪破天やがな。来てへんかったか？」

「あーさっき会ったけど……なんで爺さん此処に――」

「何処行った？　帰ったんか？」

「ああ、まあそう言ってたけど」

「さっきって言ってももう結構時間経ってるよ。まだ陽があったからね」

楊迅が横から口を挟む。

「そうか」

狗不死はそれだけ言うと、すぐにまた外へ出て行く。

「お、おい。何があったんだ？」

范撞達はすぐに追って表に出ると、すでに狗不死は通りを南へ歩

き出している。隣には頭から檻褸を被った人物が一緒に居る。時折、足を縛れさせる様によるめきながら狗不死について歩いていた。

「あれ、誰だろうな？ 丐幫の人間か？」

店の前で狗不死の後姿を眺めていた范撞が田庭閑に言う。

「さあ？ 分かんらんが、景北港で何かあったのは確かだろう。今此処に居るって事は、俺達が出てすぐに爺さんも出てきた筈だ。俺達も結構急いだからな」

「おい、行ってみようぜ。きっと洪の爺さんの家に行くんだろう」
「行くって……どうするの？」

傅朱蓮も表に出て来て一緒に狗不死を見ていた。

「そうだ、屋敷に戻って朱さん連れて来てくれないか？ 何があったか知らないが朱さんが方崖に行った事と関係あるかも知れないしな。きっと朱さんも知りたがる筈だ。あんたは洪の爺さんの家、知ってるんだろ？ 俺達は狗の爺さんについて行く」

「いいけど……洪小父様を探すのとヒョウ局と関係があるのかしら？」

「分かんねえけど、今から確かめる」

「早く行かないともう見えなくなるよ？」

楊迅が前方に目を凝らしながら言う。

「じゃあ、頼むぜ」

「分かった」

范撞達三人は早速、狗不死を追って歩き出し、傅朱蓮は朱不尽の居る屋敷に向かった。すでに薄暗く大通りは所々に明かりが灯してあるが、通りを外れれば暗闇が続く。ようやく大通りも人の姿は疎らになり、狗不死の姿が遥か先に見えていた。

狗不死と、隣の謎の人物は山手に向かって大通りを離れて行く。先にある集落の辺りには民家の明かりが見えているが途中の小道は完全に暗闇になっていて、范撞達は道を端を確かめながら進んだ。どうやら傅千尽の屋敷のある集落とは別の場所のようで、せり出した山裾が二つの集落を隔てている。

「おい、爺さん何処行つた？」

「真っ直ぐ行つた筈だけど……見えないな」

「見失つたか？」

とりあえず真っ直ぐ前に進もうと歩き始めると、不意に背後の暗闇から声が掛かった。

「お前達、こんな方に何の用じゃ？」

「うわっ！」

范撞達は飛び上がらんばかりに驚いて振り返った。闇の中に立っていたのは洪破天で、すぐ横には梁媛が身を寄せてこちらを怪しむ様な表情で見つめていた。

十三

「じ、爺さんか。脅かすなよ……もう家に帰つたのかと思ってたけど」

「千尽の屋敷に寄つたんじゃ。この子を迎えにのう。お前達は……儂に用か？ この先には民家しか無いが」

楊迅が梁媛に目を遣ると梁媛は視線に気づいて軽く会釈をした。

「俺達じゃなくて、狗の爺さんだよ。狗の爺さんがあんたを探してたんだ」

「狗じゃと？ まだ景北港ではなかったのか？」

「その筈だったんだけどな。でも何故か居たんだよ。きっと何かあったと思ってさ。追って来たんだ」

「で？ その狗は何処に居る？」

洪破天は辺りを見回す。

「ついさっき見失つた。きつとあんたの家に向かつてる筈だ」

その時、洪破天がやって来た方角から馬蹄の響きが聞こえ、一同はまだ姿の見えない暗闇に向かつて身構えた。洪破天は梁媛を自らの後ろに回らせる。

「ん？ 朱蓮か？」

洪破天はすぐに気がついた様だが、范撞達には分からずじつと目を凝らしていた。

「あら？ 皆揃ってるじゃない。狗さんは？」

姿を現したのは確かに傳朱蓮で、後ろには朱不尽と傳千尽も来ている。

「范撞、何があった？ 狗不死様は？」

「何じゃ？ お前達まで来てどうすると言うのじゃ？」

「あんたの家に行けばきつと狗の爺さんが居るさ。さあ、行こうぜ」

「あれは？ 狗殿ではないか？」

傳千尽が言う。傳朱蓮達の来たのと反対の方角から、誰か近づいて来ていた。

「フン、狗じゃな。あの歩き方は……。横の人間は誰じゃ？」

顔が皆に見えるくらいまでやってくると、狗不死が声を発した。

「洪！ よう今まで騙しとったな！ 儂^{わし}、ほんまアホやないか！」

「何じゃと？ 儂が何を騙した？」

すぐ傍までやって来た狗不死は他の者には目もくれずに洪破天に詰め寄る。

「これや！ これ誰や思う？ お前は知つとる筈や。ほんまの素性までなあ！」

狗不死は隣に居る檻褌布を被った人物を指差す。その瞬間、その人物は洪破天にしがみつくように飛び出した。

「何をする！？」

洪破天は驚いて向かってきた腕を掴もうとしたが、思いのほかその人物の動きは早い。先に洪破天の腕を掴んだがそのまま崩れるように膝を突いた。

「お前は一体……」

洪破天はその人物を見下ろして呟いたが、内心は穏やかでは無い。（こやつ、儂より先に腕を掴みおった。もし武器の類を持っておっ

たら……)

心臓が早鐘を打つ。洪破天には随分と久しぶりの感覚である。

檻樓布の下の顔がゆっくりと上を向く。一同は皆その顔を覗き込んだが、その顔を知っていたのは狗不死を除くと洪破天と朱不尽の二人だけであった。

「い、殷総監!？」

朱不尽の驚きの声に皆、自分の目を疑った。范撞と楊迅、田庭閑の三人と梁媛は殷汪を見た事が無いが、他の者は昔から知っていた。

「殷……? お前が殷汪だと?」

傅千尽がもう一度、男の顔を覗き込んで凝視している。

「全然ちゃうやろ? 昔の殷汪となあ。朱蓮、どうや?」

「そんな……本当に殷兄さんなの……?」

朱不尽は傅千尽らの反応に一層驚いた。確かに男は方崖で会った殷総監に違いない。会ったのはたったの五日前だ。男の顔は青ざめて唇を震わせているが、どう見ても同一人物である。しかし昔からよく知る筈の傅千尽や傅朱蓮の様子を見ると、殷汪ではないと思っている様だ。

「こいつはずっと北辰の総監やった。それは間違い無い。でもちゃうねん。殷汪ちゃうねん。さあ、洪。種明かしして貰おうやないか?」

十四

洪破天は険しい表情でじっと男の顔を見つめてたまま黙っていたが、暫くしてようやく口を開いた。

「何故此処に來たんじゃ? 方崖の人間は知っておるのか?」

「フン、こいつが景北港を出た事は皆知っとる。もう探し始めとるわ。これはもうお尋ね者や」

「どういふ事です?」

朱不尽が尋ねる。范撞達はというと何が何だか訳が分からず、ただ狗不死と洪破天の会話を聞いているしかない。

「……もう無理だ……兄貴に、い、殷の兄貴に会わせてくれ……頼む。もう……」

洪破天にしがみ付いたままの男が弱々しい声で訴えかける。

「あ、あなたは殷総監ではなかったのか？」

朱不尽は男の傍に屈みこんで問い詰めると虚ろな視線が返ってくる。

「……もう何年も総監と呼ばれてる。この間……言った事は、嘘じや……無い」

朱不尽は呆然となって男の顔を見つめていた。

「こいつ、方崖で四人ほど切りおった。なんか発作みたいなものになって暴れたらしいわ。方崖出て逃げてくる所を儂が見つけたんや。景北港ではこれを捕まえる命令が出とる。蔡の奴なんか捕まってはおらへんけど屋敷で監視されとるわ。あんたと方崖に行ったあの後の事らしい」

狗不死が朱不尽に言う。

「洪兄、この者は殷汪ではないのだな？　殷汪だと言われても信じ難いが……」

傅千尽が確かめるように洪破天に尋ねた。洪破天は黙って前方の暗闇を見ている。

「少なくとも七、八年は方崖に居って殷総監と呼ばれとった。儂もそう思っとな。でもほんまに殷汪か言うたら、それはちゃうねん。洪、これは誰や？」

洪破天はもう一度男の顔を眺めてから口を開く。

「この者はかなり具合が悪そうじゃ。家に連れて行く。大勢居っても仕方ない。お前達、今日はもう帰れ」

「そんな訳にくいかいな。儂ら皆――」

「これは殷ではない！　お前達は知らぬ他人じゃ！」

「洪兄、確かに知らぬ男だが、具合が悪いのなら医者に見せよう。」

洪兄の家に連れて行っても寝かせる場所も無かろう？ 儂の家に連れてゆこう」

傳千尽の言葉に洪破天は睨む様に見返した。

「フン、そうか。ならば好きにするがよい。媛児や。もう遅い。さつさと帰るとしよう」

洪破天は男を無理やり押し退けると、梁媛の手を引いて歩き始めた。

「おいおい、爺さん……」

范撞は何か言おうとしたが、洪破天に睨みつけられて口を噤んで後退した。

「俺はもう、も、もたないんだ！ 頼むよ……殷の兄貴は何処、何処に居るかだけでも……」

男は地面に這いつくばる様な体勢で声を振り絞っている。洪破天は振り返って見下ろした。

「景北港じゃろう？ それ以上は知らん。会っておらんのか？」

洪破天の男を見るその眼差しは、どこか憂いを湛えていた。

「もう一年以上会ってない……。家にも行っただ。でも、居なかった……」

「ならば……わからん」

男が苦しそうに荒い息遣いで居るのを見て洪破天は項垂れた。

「本当の殷兄さんは、景北港に居るの？ 居るのに、総監では無かったの？」

傳朱蓮が洪破天の顔色を窺いながら恐る恐る尋ねた。

「千尽、この者を連れて行ってくれ。……儂も行く。媛児よ。帰るのは待ってくれ」

洪破天は項垂れたまま言う。

「はい」

梁媛は頷いた。梁媛もこの見知らぬ男に興味を持っていた。この「総監」と呼ばれている男はきつと洪破天の知り合いのあの、「総監」と呼ばれていた夏天佑かてんゆうと繋がりがあるに違いないと思っている。

「分かった。では行こう」

傳千尽が男を抱えて立ち上がりせると范撞と楊迅が脇を抱え、一同は暗がりの中を傳千尽の屋敷へと向かった。

十五

屋敷に向かう途中、傳千尽が男に話しかける。

「怪我をしておるのか？」

「……違う。結局、俺では……駄目だった」

男は下を向いたまま、か細い声で言う。

「何の事だ？」

「これはな、殷の編み出した内功の功夫を教わったんや。何年も経ってからどうもうまく制御出来ん様になっただけ。儂が見てみたけど、けったいな内力が暴走しとる」

狗不死が説明する。

「教わったって……殷兄さんから直接教わったの？」

「そうやろな。他のモンに分かるかいな」

暫く間が空いて、范撞が傳朱蓮を見る。

「なあ、なんで「殷兄さん」なんだ？ 親父殿と変わらん歳なんだろう？」

「それは……小父様って呼ぶにはちよつとね。でも、もう長く会ってないから今度会ったらもう小父様かもしれないわ」

「お……嬢さん、安心しろ。殷……殷の兄貴は全く変わってない。ちよつと……皺くらいは増えたらうが、あんたが兄さんと呼んでも……お、おかしくない」

傳朱蓮は男をじつと見つめ、その後は何か考え込む様に黙ったまま歩いていった。

「この男の素性は、ここにおる馬少風ばしょうふうの方が詳しかろう」

傳千尽の屋敷に着くと寝台のある部屋に男を連れて行き、少々狭い部屋であったが一緒に来た者は皆、洪破天の話を聞くために集まった。

「少風が？ 何故だ？」

傳千尽が洪破天に尋ねる。

「何故と聞かれてものう。昔から知った仲じゃろう」

洪破天は横になって体を丸めている男に顔を向ける。

「馬、少風か……あいつは此処に……居るのか……」

「ならば少風を呼ぶでしょう」

「もう遅いし、此処に戻ってるわね。馬さんと呼んで来るわ」

傳朱蓮が部屋を出て行った。その間に洪破天が男の腕を取って脈を見ている。

「どや？ おかしいやろ？ これが殷の内功か？」

「危ないのう。下手に手は出せんな。どのように気の流れを制御するのか？ うむ……」

「殷……兄貴はただ……背を丸めてただ……氣息を整える事だけに集中しろと……」

「それだけかいな？ んなアホなことあるかいな。そんな簡単な……」

「そうすれば……楽になったんだ、最初、最初は……。今はもう……効かない」

「別にそれは鍛錬の法ではない。具合が悪くなった時の処置じゃ。奴が考え出した功夫じゃ。他の者に理解できる筈も無い」

洪破天が狗不死に言う。

「あれの内功は誰一人真似できるモンちゃうしなあ。なんでそんなモン教わったんや……」

男は眉間に皺を寄せて細く息を吐いていた。

范撞は田庭閑に小声で話しかける。

「あんな事になると分かってても、殷って奴に教わりたいか？」

「まさか。あの男が教わったのには何か事情があるんだろう？あの男、本当に殷汪の技がモノになると思ってたんだろうか？教えた殷汪も自分と同じ技があつた男にも出来ると？技って言うのかどうか知らないけど。あの男、何歳かな？」

「さあ？でも多分、ただ若返る為の内功とは思えないんだよな。多分、副作用みたいなものじゃないか？」

「何故だ？」

「朱蓮は内功の作用で衰えるのが遅いって言ってたけど、さっきあの男は殷汪は皺は増えたかもしれないけどそんなに変わってねえみたいなき事言った。朱さんが狗の爺さんから聞いたって話では、あの男は確実に若返ってるってよ。顔が変わっていったらいい。おまけに体調に異変をきたしてる。殷汪って奴の内功の功夫とあの男のとは、多分違う」

十六

「馬さんが来たわ」

傳朱蓮が部屋に戻って来ると、続いて馬少風が黙ったまま入って来た。人が集まっているのに驚き、部屋を見回して誰が居るのかを確認している。

「少風、こっちに来い」

傳千尽が手招きして、奥の寝台の傍に呼び寄せる。

「おぬし、この男を覚えておるじやろう？」

洪破天が言うと馬少風は寝台に横たわる男に顔を寄せ、すぐに直立の姿勢に戻った。

「覚えている」

「……馬か。か、変わらん。まだ俺の……顔が判るか？」

「判る」

男は横目で馬少風を見上げ、馬少風の方はじつと顔を見たまふ黙

っている。傳千尽はじれったくなり大声を出す。

「少風、この者は誰だ？」

「これは、夏」

「夏？ 夏何だ？ お前とどういう関係だ？」

「夏天佑」

「えっ」

その時寝台の周りに集まる一同の後ろで、小さく驚きの声が発せられたが、傳千尽達は気付かなかった。

「同郷だ。俺が此処に来るまで、生まれ育った呂州にある小さい町で暮らしていた。この男も同じ町に居た」

「それが何故殷汪と名乗る？ 殷汪とどういう関係なんだ？」

「殷汪？ これは夏だ」

「……洪兄、説明してくれ」

傳千尽は洪破天の方に向き直って尋ねる。洪破天はまるで顔を洗うように両手で顔を撫でてから溜息をついた。

「フン、皆大袈裟じゃ。別に大それた謎がある訳でも何でもないわ」

「殷汪は儂にとっても兄弟同然だ！ 儂はずっと方崖にいるのがその殷汪だと思っていたんだぞ？ 方崖に行ってからもう十年にもなろうというのに一度も顔を見せぬ。儂は……北辰の総監になっても儂等の事など気にも掛けん様になったのかと正直、腹を立てていたのだ！ だが総監は殷汪では無かった。ならば、儂等の知る殷汪は今何処に居る！？」

洪破天は苦しそうな男を見つめながらまた溜息をつく。

「景北港の筈じゃ。会いに行った事は無い。この男、夏天佑は殷が自分の身代わりに方崖に連れて行った男でいう」

「身代わり？」

「そうじゃ。考えてもみよ。あの殷が北辰の幹部、しかも総監など望んでなると思うか？ 陶峯が呼び寄せた時は、まあ、手を貸す程度のつもりであつたろう。総監にしたのは陶峯じゃが、一年もせんうちに殷は北辰から抜け出す事を考え始めた。その後、陶峯が病で

亡くなった後、まず陶峯の息子の世話役でしかなかった張新という男を正式に新教主の補佐役に据えた。自分は出来る限り表に出ずとも良い様にのう。張新という男、どうやら中々の野心家らしいが、殷には好都合じゃ。そして教徒に対しては私闘を厳しく禁じた。自分が方崖を出るまで対外的な揉め事を徹底的に回避する為じゃ。そうしてその間に、もう一人の自分を作っておく……」

洪破天はぼんやりと男を眺め、また顔を撫でた。

「もう一人の自分……この者は全く似ておらんが」

傅千尽も男に目を遣る。黙って聞いていた狗不死が口を開く。

「今の顔はもうおかしな内功の作用かなんか知らんけど、別人みたいに変わつとる。ほんでも儂は総監になったばかりの殷汪、つまりほんまモンの殷汪も見とる訳や。思い返してみても、どこで入れ替わったんかさっぱり分からん」

「おぬしはいつも方崖に行っておった訳ではなからうが」

「まあ、そやな。そんな頃はまだ丐幫の面倒見とったさかいな」

十七

洪破天達の後ろで、傅朱蓮は梁媛の肩を抱いて顔を覗き込んだ。

「媛？ 大丈夫？」

「どうした？」

楊迅も傍によって梁媛に尋ねた。

「あの人じゃない……違います。夏天佑様では……」

「確か、あなたが都で会ったのが洪小父様と夏天佑って人だったわね」

「……はい」

梁媛は寝台の男から目を逸らさずにじっと見つめながら答えた。唇を震わせ、少し混乱している様子である。

「洪小父様。媛が都で会ったのは……小父様と一緒に居たのは誰？」

傳朱蓮の問いに洪破天は振り返り、傳朱蓮に支えられた梁媛を見て目を伏せた。

「媛児や。その……勿論この男とは違う。あの男は……本当の名は殷汪というのじゃ」

「殷……」

「お前を騙すとかそういう事では無い。知っている奴は知っているが、殷汪という名はあの時伏せておったのじゃ。だから――」

「殷汪様とおっしゃるのですね。本当のお名前を知ることが出来て私、嬉しいです」

梁媛はようやく僅かに微笑んで見せる。洪破天を責めるとかそんな気は更々無かった。

「なるほどなあ。この夏天佑は方崖に入って殷汪になった。で、代わりに殷汪は夏天佑を名乗つとる訳やな」

「……そういう訳でも無いが、まあ都ではそういう事になったんじや」

「い、今も殷兄貴……は都に……？」

男が声を搾り出す。

「いや、こっちに戻ったのは春頃じゃ。途中で別れ、奴は景北港へ行った。確か……何か急用が出来たと言っておったが、その頃方崖で何かあったか？」

「……春、か。いや、何も無かった……と思う」

「とにかく、景北港へ戻る、と言っていた。それ以降は知らぬ」

「何で景北港なんや？ 折角入れ替わったのに何年も近くに居るなんておかしいやないか」

「そんな事、儂は知らん。儂が知っておる事はこれで全部じゃ」

暫く沈黙が続く。それぞれが何か考え込むように押し黙っていた。「不尽、お前達ヒヨウ局の者はすぐにでも此処を離れた方がいいな。方崖の連中はこの夏という男を捜しておるのだろうが、お前が会いに来た事も知っておるのだろう。出来るだけ早く緑恒へ……」

「そうじゃな。此処へは確実に来る。もう迫っておるやもしれぬ。これが方崖を飛び出したのとヒヨウ局は関係無い事じゃ。一緒に居つてはあらぬ疑いを招く。もう疑われておるやも知れぬがのう」

傳千尽と洪破天は二人とも朱不尽の方を向いて言った。

「……この、夏殿が此処に居たら、お前達はどうなる？」

朱不尽が傳千尽に聞き返すと、洪破天が話に割って入る。

「よいか。これはもう夏では無い。殷汪じゃ。入れ替わって以来、ずっと殷総監なんじゃからのう。方崖の者も用があるのは本物の殷ではなく方崖で暴れて逃げてきた、この「殷汪」じゃ。今、殷汪はこの男だけじゃ。死ぬまでな」

「なんや、ややこしいな。……儂等かて一緒に居たらまずいやないか？」

「そうじゃな。千尽、お前の言った通り「殷汪」は方崖に行つてから一度たりともこの東淵には帰ってきておらぬ。儂等の繋がりとは絶たれておるのじゃ。儂等も、関係無いぞ」

傳千尽は「関係無い」という洪破天の言葉に顔を顰めた。しかし、確かにこの男は本当の殷汪では無いうえに、北辰の追っ手が迫っているとなれば、洪破天の言う様に振舞わねばとんでもない災いが自分だけでなく家族まで及ぶ事になる。寝台の上で苦しんでいるこの男を捨てなければならぬかも知れないという状況になってしまうのである。

「でも……それじゃあ」

傳朱蓮が声を上げる。

「この人は、どうするの？ 苦しんでるのに……」

十八

「狗不死様、景北港から此処までは夏殿も馬で？」
朱不尽が狗不死に顔を向けた。

「えらい難儀したで。まあなんとか馬にしがみ付く位は出来るしなあ」

「ならば……我々がこの夏殿を連れて此処を離れましょう」

「この男を連れて……？」

傳千尽は眉を顰めて朱不尽を見る。

「どうするつもりだ？」

「夏殿が此処に居るのはまずいのだろう？ 我等も同じ。どちらも離れねばならぬなら一緒に行けば良からう。夏殿は……一人では無理だ」

「それはそうだが……」

傳千尽は声を落として朱不尽に身を寄せた。

「この男、もうそれほど持たぬのではないか？ 例え殷汪が此処に居ったとしてもどうにもならぬだろう。緑恒にすら辿り着けぬかも知れん」

「ではどうすれば良いというのだ？ 何処かへ置き去りにでもするのか？ とにかく、我等が連れてゆく。別にこの夏殿に対する義理でも何でもない。俺が此処を離れるのは俺の為。夏殿が此処を離れるのはお前達の為だ。千尽、随分と世話になった。礼を言う」

「何を言う」

「范撞、楊迅。準備が出来次第、此処を経つぞ。すぐに準備をしろ」
朱不尽が范撞達の方へ振り返って命令する。

「俺は此処に着いた時のままだしな。すぐにでも出られるぜ」

范撞が答える。

「楊迅、李と方ほうの二人にも伝えろ。二人とももう体は良いのだな？」

「はい。二人とも回復しています。伝えてきます」

楊迅はそう答えてすぐに部屋を出て行った。二人とは大怪我で楊迅と一緒にこの傳千尽の屋敷で養生していたヒョウ客である。

「狗不死様。夏殿の馬は今何処に？」

「あっそうや。店の前、紅門の前に繋いだままや。すっかり忘れつつたわ。儂の乗ってきた馬もや」

「じゃあ、俺が行って持ってくる」

「頼む」

范撞は朱不尽に言うのと部屋を出て紅門飯店に向かう。田庭閑も黙ったまま後に続いた。

「不尽、帰るまでもう一度酒でも酌み交わしたかったが……」

ヒョウ局の者達は暗く静まりかえっている屋敷の門前に集まっている。傳千尽が朱不尽に声を掛ける。

「フ……これが最後でもあるまいが。まあ、暫く此処には来れぬだろうが」

「儂等のほうがお前を頼って緑恒へ行かねばならぬかもしれんな」

「そうならないのが一番だが、もしもそうなれば、遠慮はいらん。歓迎しよう」

朱不尽はそう言ってニヤリと笑って見せた。

楊迅が洪破天の傍に立っている梁媛に近づいた。

「随分世話になったね。ありがとう」

「いえ、私は何も……もう痛みませんか？」

「うん。もう心配ない。他の二人ももう大丈夫だから」

楊迅と一緒に居た二人のヒョウ客も口々に梁媛に礼を述べる。梁媛は小さく頷いてそのまま俯いてしまった。

「お前達、とんでもない目に会ったな」

洪破天が話しかける。

「いや、まあ、ヒョウ局という家業はこういうものでしょう。私はまだ未熟だったのです」

「ならば……まだ続けるのじゃな？」

「それは……正直分かりません。でも、逃げる事だけはしたくない。緑恒に戻ったらもっと修行するつもりです。武芸は勿論ですが、何ていうかこう……精神的にも強くならなければ」

十九

「それは簡単な事ではないが、お前達はまだ若いからのう。今回の件は確かに悲劇には違いない。じゃが、生き延びた。忘れてはならぬが拘るのもどうかのう。自分をどのように成長させるのか、常に冷静に見定めながら精進するが良からう」

洪破天はいつもの酒の入っている時と違い、じっと楊迅の目を見据えながら言った。

「おい、解^{かい}さん達に会ってから行こう」

范撞が後ろから楊迅達に呼びかける。楊迅達は洪破天に一礼すると范撞と田庭閑についてその場を離れ、傅朱蓮もその後に続く。洪破天と梁媛はその後姿を見送った。

傅千尽の屋敷の広大な庭の一角に、新たに移植された木々に囲まれた場所がある。庭の中をうねるように流れる小川がそこへも引き込んであり、小さな橋まで作られていた。

「これは、桃か」

范撞が傍の木の幹に触れて言うと、先を歩いていた朱不尽と傅千尽が振り返る。

「そうだな。これだけあれば春はさぞ賑やかになるだろうな」

「これは実が生るのか？」

「この品種は実も取れる」

傅千尽は范撞の横に来て桃の枝を見上げた。

「本来ならそろそろ実が取れる時期だが、移したばかりだからな。ここは特に良い土を入れさせた。春には美しい花が咲き、来年初秋には良い実が取れるだろう」

「花の観賞用はすぐに手に入るけど、実の生るものをこれだけ集めるのは大変だったのよ」

傅朱蓮も傍に立ち、范撞に言った。

「春だけでは寂しいではないか。此処に葬った者達は故郷から遠く

離れた場所できっと嘆いておろう。まだ他の木を植える余地もあるからな。他にも植えれば良い」

「千尽、此処に居る者は皆、お前に感謝している筈だ。我等ヒヨウ客はいつ何処で体を刻まれて山野に晒されるか分からぬ。このような立派な墓所に葬られるなど考えられぬ。俺が皆に代わって礼を言おう。この通りだ」

朱不尽は傳千尽に対して深々と頭を下げる。

「このくらいの事は何でもない事だ。このくらいしか……」

傳千尽はそう言うと、先に木々に囲まれた墓所に入って行った。

傳朱蓮が脇にある燈籠に火を入れると、正面に並んだ墓標が浮かび上がる。范撞らが見慣れている南方の大きく石を積み上げた共同の墓所とは違い、子供の背丈程の墓石が綺麗に並べられていた。

「十八も並ぶと……」

楊迅は呟くように言うが、すぐに言葉に詰まる。朱不尽は一つ一つを手で撫でながらゆっくりと歩いた。

「范撞？」

楊迅がふと范撞に目を遣ると俯いて手で口元を覆っている。泣いているのか、初めて見る范撞の姿だった。

「きつと戻ってくる。仇を討つために、きつと……」

「うん。必ず」

「はよ出た方がええな。儂も行きたいんやけどなあ」

再び戻った朱不尽に狗不死が言う。狗不死は勘違いしていたとはいえ長く殷汪を名乗っていた夏天佑と親しく付き合っており、この男がこの先どうなるのか心配していない訳では無いのだが、北辰の追手は必ず朱不尽達に追いつくだろうと読んでいる。今以上に北辰に目を付けられるのは避けたかった。

「狗不死様、お気を付け下さい。北辰は既に……」

「ああ、わかつとる」

朱不尽は後方に居る夏天佑の元に歩み寄る。

「夏殿、そろそろ出発致す。よろしいな？」

「……それはいいが、多分ついては……行けんだろうな。遅れたら、捨て置いてくれ」

「……」

朱不尽は何も言わず振り返ると、すぐ後ろに田庭閑が立っていた。

二十

「どうした？」

「朱ヒヨウ頭、私は緑恒へは戻りません」

「何？」

「……思うところがありまして、ここから都へ向かうかと」

「都へ？ そなた一人でか？ 武慶へは？」

「……まあ」

田庭閑は言葉を濁す。

「私は戻ったらすぐにでも武慶へ陸総帥に会いに行かねばならぬ。

……報告と謝罪の為にな。そなたが居らねば何と言えば良い？」

「総帥は私の事はそれほど気には掛けておられないでしょう」

「そのような事……」

「あの時、賊に襲われたあの時に、逃げて行方知れずという事にして頂けませんか？」

朱不尽は考え込んだ。確かにそう言えば納得出来ない事も無い。

「范撞！ 楊迅！」

朱不尽は二人を呼び寄せる。

「田殿は我等とは行かず都へ向かうと言う。何か言うことがあるか？」

田庭閑は何故朱不尽は范撞達にそんな事を聞くのか分からなかった。黙って下を向いている。

「一人でか？ 大丈夫……だよな。朱さん、心配無いんじゃないか

？ 都は実家があるんだったな。いいんじゃないか？

范撞は朱不尽に事も無げに言う。

「田さん……前にも言ったけど、何かあったら緑恒へ……」

「ああ、……ありがとう」

范撞と楊迅の言葉を聞き、田庭閑は唇を噛み締めて不意に溢れそうになった涙を堪える。朱不尽は改まって田庭閑と話したことは無い。范撞達の様子を見て頷いた。

「解った。そなたは逃げて行方不明。本当にそれで良いのだな？」

「逃げたって……。田、お前は逃げてなんか無い。これから逃げる訳でも無い。ちゃんと俺達は知ってるからな。俺は……お前が羨ましいぜ。きつとまた会おうぜ」

「ああ」

范撞が田庭閑の肩に手を置いて小さく揺すった。

「あの、この剣、お返しします」

田庭閑は腰から外した長剣を朱不尽に差し出す。

「ん？ ああ、いや、持つて行くがいい。そなたの剣は武慶の家に置いたままではないか。安物だが無いよりマシであろう？ これも一緒に持つて行け。餞別だ」

朱不尽は懐を探り、小さな粒を幾つか取り出す。見れば小粒の馬蹄銀だが結構な量がある。

「うお！ 朱さん太っ腹だな。もっといい剣も買えるかもな」

范撞がそう言って笑い、楊迅もつられた。

「朱ヒョウ頭……」

「そろそろ我等は出る。そなたは景北港でも出歩いておらぬし、まあ北辰の者が来ても大丈夫だろう。改めて出立すればいい」

「はい」

「よし、では行こうか。范撞、夏殿を馬に」

「ああ」

范撞と楊迅が夏天佑を立たせて馬へ乗せる。夏天佑はとりあえず手綱を手にとったが背を丸め、馬の首にしがみ付いている様にも見

える。

朱不尽は傳千尽達と言葉を交わし、狗不死、洪破天にも挨拶を済ませると馬に乗った。

「準備は抜かりないな？」

「ああ、大丈夫だ」

洪破天が夏天佑に話しかける。

「夏よ……」

「……自業自得だな。でも、方崖で少しはいい思いも出来たんだ。誰も恨んだりしてない……殷兄貴にはもう会えないな……もし兄貴に会ったら、俺……感謝していたと伝えてくれ」

「……感謝、か」

夏天佑は頷く。

「ああ。出来ることなら、本当に兄貴の弟子になりたかった……今更言っても仕方ないな」

洪破天は何も言わずに夏天佑の手を掴んでいた。

第四章 二

「流浪一天 第四章 二」

二十一

「よし。出るぞ！」

朱不尽は今までと変わらない、出立の号令を掛ける。配下のヒョウ客はたったの四人。

「じゃあ、元気でな。世話になった」

范撞が傍に居た傳朱蓮を見る。

「気を付けて。私は自由だから、今度出る時は緑恒にも行くわ」

「そうだな。夏は暑いから避けた方がいいぞ」

「朱蓮さん、本当に有難う。何て言ったらいいか……」

「楊さん、無理はしないで。傷は残るでしょうけど。」

「うん。じゃあ、元気で」

「またな」

「ええ、必ずまた会いましょう！」

一同は皆、馬で暗闇の中を屋敷の門を出て行く。先頭は朱不尽とその隣に夏天佑、馬少風が進む。馬少風は傳千尽に夏天佑と共に行くよう命じられていた。追手が迫るかもしれない状態で朱不尽達はあまりに無勢過ぎた。もっと多くの人間を付けたいところだが自分のところの用心棒が多く手を貸す事は別の問題を生む。若い頃ならば自ら剣を手に行き事にしたはずだ。その決断をどうしてもすることの出来ない自分を情けなく、そして悲しく思いながら朱不尽の背中を見つめていた。

「さて、お前は どうする？ 北辰の者はすぐにも来るじゃろうが お前も尋問されような。方崖で総監と何を話したのか――」

「僕はとうっちゅう事あらへん。いつともみたいに世間話しに行っただけやがな。あーでもなあ、せめてあん時教主に会っとけば良かったなあ、そんな時間無かったけどな」

「洪兄、媛と一緒に暫くうちに居たらどうだ？あの家に二人で居って媛に危険が及んではいかん」

「……そうじゃな。世話になるうかのう」

洪破天達は部屋に戻っていく。その後方でじっと立ったままの田庭閑が空を見上げている処に傳朱蓮が歩み寄った。

「田さん、随分と思ひ切った決断したわね」

「決断？ ……そうだろうか。今はまだ、決断なんて言えないな。やっぱり俺はこれから逃げるんだよ」

「それは何の為かしら？ 今までの、武慶に居た頃の自分を捨てて……違う自分になる為なんでしょう？」

田庭閑は見上げていた顔を戻して傳朱蓮を見た。

「范さんから色々聞いたわよ？ フフ、あんまり重要な事はあの人に言わない方がいいわね。……不満を感じているのに変わりたくなと思う気持ちは誰にでも起こるわ。そうね。あなたはやっぱり逃げるのよ。あなたを追いかけてくる「変わらなくていいじゃないか」っていう思いから。偉そうな事言えないけど、この江湖で生きる者にとってそれは大事な事だと思わない？ この先大変かも知れないわ。凄くね。もう戻れない。そう決めたあなたは既に今までのあなたから変わってる。それと、逃げ足の速さも重要ね。逃げるのが得意ならそれをもっと磨けばいいわ」

傳朱蓮がそう言いながら笑い、田庭閑もつられて微かに笑った。

「そうか。江湖のご先輩がそう言うんだから、自信を持つことにするよ」

「やめてよ、ご先輩なんて。旅に出て若い女性との話し方の修行もすることね」

二人は並んで部屋に戻って行った。

その夜は何事も無く洪破天達は普段通り休んだが、超謙ちようけんら屋敷の

用心棒達はいつ北辰の者が来るかと気が気では無く、ゆっくり休む事は出来なかった。

夜が明けてすぐ、珍しく早くに目が覚めた田庭閑は僅かな荷を小さくまとめてこの屋敷を出る準備を整えた。武慶を出た時に持って来た大きな行李は、賊の襲撃にも耐えて無事だったが、その後大部分は処分して本当に必要な物だけをまとめ、随分小さな荷になっていた。

二十二

部屋を出るとほんの少しだが微かな風が冷たく感じる。ここ東淵は武慶や緑恒など南方の街よりも遥かに早く秋が訪れる。田庭閑は大きく上体を伸ばしてからその澄んだ空気を胸一杯に吸い込んだ。辺りはまだ音が無く、回廊の欄干にもたれて庭を眺める。

(前もこんな事していたな)

そう思いながら頬杖をついた。

「何故まだ居るの？」

不意に音が発せられ自分に迫ってくる様な感覚を覚えた田庭閑は急いで首を竦める。暫く固まったまま耳を澄ますが何も聞こえない。

「何やってるの？　びっくりした？」

(……確か妹だったな)

田庭閑は欄干から上体を起こし、澄ました顔を作って振り返った。少し離れた所に傳紫蘭ふしらんが立っている。

「アハハ、本当はびっくりしたくせに。ぼんやりしてよくそれでヒョウ局に居るわね」

「……俺はヒョウ局の人間じゃない。起きたばかりなんだからぼんやりもするさ」

再び田庭閑は平静を装って元の姿勢に戻る。

（なんだこの娘は。朝っぱらからうるさいな）

「ねえ、あんたも緑恒って所の人？」

傳紫蘭は田庭閑の隣に立った。

「違う」

「じゃあ何処よ？」

（なんて生意気な口の利き方だ……こいつの姐さんも同じ歳の頃はこんなだったのかも……）

そんな事を考えていると可笑しく思えて口元が緩んだ。

「何よニヤニヤして気持ち悪い。あんたは何処の誰だって聞いているの」

「名は田だ。俺は真……いや、別に何処の者でも無いな」

「ふーん。じゃあなんであの朱って人達と一緒に居たの？」

「成り行きだ」

「やっとあの人達居なくなっと思ったらまたお馬さん連れて行っただのよ。頭にくるわ」

（馬少風って人の事だな。この娘、まだ子供なのにあの人に惚れるとでも言うのか？もう中年親父じゃないか）

「お前、朱ヒヨウ頭とはあまり親しくないのか？」

「知らないわ。お父様や朱蓮姐さんは昔から良く知ってるみたいだけど、私は子供だったから覚えてないもの」

（今だって子供だろうが）

「馬少風って人が朱ヒヨウ頭達について行ったのはお前の親父さんの命令だろう。この用心棒だってな。お前に仕えてる訳じゃない」

「何よ。偉そうな事言わないで」

（お前も十分偉そうだ）

「いつまで居るの？」

「フン、すぐにでも出て行くさ。心配するな」

「何処行くの？」

「決めてない」

「ふーん」

傳紫蘭は田庭閑と同じように並んで欄干にもたれて顔だけを横に向けて頬杖をつく。

「何だ？」

「あんた、劍持ってるけど使えるの？」

田庭閑は苛ついた。

（いちいちうるさいな。暇なのか？ 暇なら寝てろよ）

「ねえ、どうなのよ？ 何処で習ったの？」

傳紫蘭の質問は止みそうも無い。

二十三

「……武慶で少し習ったのさ」

田庭閑はボソッと呟く。

「武慶？ それって何処？」

傳紫蘭は至って真面目な表情で、田庭閑は少し驚いた。

「武慶を知らないのか？……真武剣は？」

「知らないわよ。そんな名前。何処の田舎の武芸よ？」

「此処の方が余程田舎だ」

（全く子供だ。物を知らん）

「嘘。此処は国中の人間が遊びに来るのよ？ いつも賑やかで都より活気があるわ」

「馬鹿な。お前は都に行った事あるのか？」

「行かなくても分かるわ」

（そんなわけあるか。井の中の蛙大海を知らず、だ。……俺もこいつと大して変わらないか）

「あんたはどうなのよ？ 都、行った事ある？」

「俺は都の生まれだ。此処よりも遥かに巨大な街で、人も数え切れない程居る」

「面白い？」

「何？」

「都って面白いの？」

「……そんな事、自分で行って確かめたらどうだ？」

「お父様が許さないわ。朱蓮姐さんには何も言わないのに。きっと何度も都とか行ってる筈よ」

「何故だろうな？」

今度は田庭閑が疑問を口にする。

「お前の姐さん、どうして旅とかするようになったんだ？」

傳紫蘭を見ると頬杖のまま庭の木々を退屈そうに眺めている。

「きつと武芸が出来るからよ。よく分からないけど、凄いんだって姐さんは」

「それだけじゃ無いだろうけどな。お前が旅に出るなんて言ったら周りの者は皆、心配というより不安になるな」

「あんた、私の事知らない癖に何が分かるのよ？ 偉そうに」

傳紫蘭は真っ直ぐ田庭閑を見据えて睨みつける。田庭閑は無視している。

「フン。分かるもんか。何が分かるか？ そう言う奴は決まって自分を人に理解させようとはしない。他人に理解して欲しいと願う癖にただ待ってるだけ。人がお前に興味を持って何か言えば「違う、分かってない」と言うだけだ。なぞなぞ遊びは他所でやれてんだ」「うるさい！ うるさいのよ！ さっさと消えなさいよ！」

傳紫蘭は拳を握り締めて声を荒げると、踵を返して走り去った。

（……俺は何を言ってるんだ。全くどうかしてるな。……フ、自分に言えよ。俺は馬鹿だな……）

その後暫くしてから傳千尽が田庭閑を自室に呼んだ。

「お前はこれから何処へ行くんだ？ お前を待つものは居らんのか？」

「居ませんよ。全く」

「そんなことはあるまい？ 家族は？ 親は何処にいる？」

「都です。ですから、都に行こうと思っています」

田庭閑は色々聞かれるのが煩わしく、とりあえず親の元へ行くのだと思わせる事にした。

「そうか。都なら真っ直ぐ街道を行けば良いだけだしな。無事に行けるだろう。お前、一人で長旅の経験はあるのか？」

「……いや、でもいつかは経験するでしょう？　それが今という事で」

「なるほどな」

傳千尽は暫く田庭閑をじっと見ていたが、暫くして再び口を開く。

「都にはいくつまで居た？」

「十六です」

「今は？」

「十八……もう十九になります」

二十四

「都で田家と言えば有名だが」

「都ですよ？　田なんて山ほど居ます」

「ほう、そうか？」

傳千尽は真っ直ぐ田庭閑の目を捉えたままだ。

「何が言いたいんです？　まさか田宰相の事を言っているのですか？」

「ほう、よく知ってるな」

「……当然でしょう。国の宰相ですよ？　都では子供でも知ってますよ」

「ハハ、そうか。僕は田舎の人間だからな。都で田を名乗る者は皆縁者かと思っておったわ」

傳千尽はそう言って笑うが、田庭閑は眉を顰めて傳千尽を睨んでいる。

「そんな顔せずとも良からう？ 宰相の縁者と思われる事はそんなに嫌な事だったのか？ それは悪かったな」

「別に……そんなことは」

「で、親の許に帰るのだな？」

「分かりません。都に戻ってから考えます」

「そうか。ま、儂が心配する事も無いな。お前はもう大人だ」

田庭閑は傳千尽から視線を逸らす。

（だったら放っておいてくれよ。何なんだよ）

「おう、そうだ。儂は都に知り合いは少ないが、宿を営む史しという男が居るんだが、知ってるか？」

「知りません。宿なんて沢山ありますからね」

「だろうな。史小倚ししょういという男だ。家に帰るなら別によいが、そうでないなら探して訪ねるが良い。傳千尽から聞いたと言えば宜しく取り計らってくれよう」

「……有難うございます」

「いつ発つ？」

「すぐに出ます。もう用意はしてあります」

「分かった。儂もそろそろ出掛けねばならぬのでな。まだ北辰の者は姿を見せぬ。早い方が良からうな」

「はい。あの、色々とお世話になりました」

「うむ。達者でな」

傳千尽は先程までとは違い優しい眼差しを見せ、田庭閑に向かって頷いた。

「もう出るの？」

傳朱蓮が慌てた様に田庭閑に駆け寄って来た。田庭閑は丁度馬を牽いて庭に出てきたところであった。

「御免なさい。こんなに早く出るなんて思ってたから」

「君の妹は俺よりも早く起きてたよ」

田庭閑はなんとか笑顔を作って見せる。

「紫蘭？ 話したの？」

「少しだけ。怒らせてしまつてさ。申し訳なかったと伝えてくれな
いか」

「良いけど……あの子は扱うのが難しいから、あまり気にしないで」

「親父さんにも挨拶しといたよ」

「そう」

「それじゃあ……」

「気を付けて」

「ああ。ありがとう」

何か言おうにも言葉が思い浮かばず、田庭閑はすぐに馬に乗った。
チラッと傳朱蓮を見ると視線が合つてしまい、慌てて目を逸らす
が不自然な動作になつてしまった。田庭閑は恥ずかしくなつて勢い
よく馬の腹を蹴り、屋敷の門を飛び出した。

（まったく、俺は情けない。まともに別れの挨拶も出来ないなんて。
あいつ、范撞ならこんな事何でもないんだろうな……。ああ、俺は
何故こんな人間なんだ！）

二十五

朱不尽ら一行は東淵を出て四日、緑恒に向かい順調に進んでいた
が、居るのか居ないのか分からない追っ手が気にかかり、ゆっくり
と休む間もない。

「ああもう、何かこう……来るなら来るでさっさとして貰いてえな。
一気にカタをつけちまつてよ」

「カタをつけるって……どうするつもり？」

「んーそれは、分かんねえけど」

いつも無表情な馬少風以外は皆、疲れの色が見え始めていた。夏
天佑の体調は殆ど変わつておらず、時折楽になる事はあるようだが
長くは続かない。

「夏殿、追手が来ているとすればどれくらい居るだろうか？」

朱不尽が夏天佑に声を掛ける。

「追手自体は……大した数ではないだろうな。だが、そのうち北辰の息のかかった者達に命令が行き渡る。俺を……見つけ出して、どうするかな？ 連れ戻せとは言わないだろうな。「殺せ」か。フン、奴らに俺が殺れるものか……俺は、殷汪だからな……人の手にかかって死ぬ事は、あつては……ならない」

夏天佑は胸元を撫でるように腕を動かしながらゆっくりと答えた。「でもあんた、他人が手を出さなくてもやばそうだぜ？ その体を直す方法は考えてるのか？」

范撞が夏天佑に尋ねる。この「夏天佑」の年齢は誰も知らないが、見た目が范撞達と変わらないので范撞は話し方に気を使うことは無かった。

「……考えても無駄だな。もう既に手遅れだ。北辰の者が俺を見つけるまでもたないかもな……ハハ」

夏天佑はそう言って力なく笑う。

「殷汪って奴に出鱈目教えられたんじゃないやねえか？」

「黙れ！」

突如、夏天佑が折り曲げていた上体を起こして歯を食いしばりながら范撞を睨みつけた。

「若造！ 貴様如きに何が分かる！？ この技は……このっ」

夏天佑は胸に激痛を覚え、言葉が続かずに再び背を丸める。

「范撞、殷総監は長く武芸天下一と言われたお人だ。その技の深奥は我等凡人には計り知れぬものであることは間違いない。殷総監に直接教わったからといって全く同じ様に体得する事はこの上ない難事。出鱈目と言うのは軽はずみだぞ」

「殷総監はお、俺だ！ 俺が死ねば殷汪は居ない！ 何度言えば――」

「夏殿。それは、本物の殷汪殿が他に居る事を北辰教に気付かせない為か？ 何故そんな事を？ あなたは「殷汪」によって苦しむ事

になったのではないか」

「違う！俺は兄貴にかっ、代わって……」

「天佑、落ち着け」

馬少風がふら付いている夏天佑の体を支えた。

「本物の殷汪殿は今何処で何をしているのか……今も北辰で目を光らせておれば張新などという男の専横な振る舞いを許すことにはならなかったのだ」

朱不尽は冷ややかに言い、前方を見つめている。

「フン、何か？ あんたらが襲われたのは殷の兄貴のせいだと？」

馬鹿馬鹿しい」

「馬鹿馬鹿しい？」

「真武剣派からの荷など何故引き受けた？ 方崖への荷だと？ そんな怪しい物を何の疑いも無しにはるばる持つてくるとはな！ 受けなければあんたの部下は死ななかった！」

それを聞いた朱不尽は怒りが込み上げてきたが、言い返す為の言葉が見つからない。

「そんな事俺らが知るもんか！ 本物だか偽者だか知らねえけどよ、仮にも総監様なら北辰の奴をちゃんと飼つとけよ！ 自分の怠慢を棚に上げて偉そうな事言ってんじゃねえ！」

范撞が朱不尽に代わって夏天佑に詰め寄ろうとした処に、馬少風が長い体を割り込ませ立ちはだかった。

「もういいだろう。無駄だ。何か結論が出そうなのか？」

比較的大柄である范撞を、更に上から見下ろす様に馬少風が言う。范撞は、胸を手で押さえてこちらを見ていない夏天佑を見て舌打ちすると、黙って馬少風の前から離れた。

二十六

この日も何事も無く日が暮れて、朱不尽達は疲れた体を休める為

に街道沿いの宿に入った。街道に面して建っているが看板の類も全く出しておらず、何も言われなければそこが宿だとは気付かないだろう。朱不尽はヒョウ局の仕事の関係で何度も利用した事のある宿だった。

「おお、朱ヒョウ頭、ご無事でございましたか」

中に入ると主人らしき初老の男がすぐに朱不尽に気付き駆け寄って来た。

「……ああ、うちのヒョウ局の者が立ち寄ったか？」

「はい。緑恒に戻る道中にお泊りになりました。魯ヒョウ頭にお話を聞かしまして、朱ヒョウ頭のご無事をお祈りしておったところですよ。いやあ、本当に良かった」

どうやら本当に心底心配していた様で、笑みを浮かべた顔の皺が一層深くなっている。

「いや、それがまだ気を緩める事は出来んのだが……とりあえず何か食べる物を貰おうか。少しでいい。酒は止めておこう」

「まだ何か……あるんですか？」

「あー、かもしれん、という程度だ」

朱不尽達は近くの席に腰を下ろす。范撞がまだ何もない卓上に突っ伏した。

「あーもう疲れた。もうこのまま眠っちゃいそうだぜ」

「眠いけど、腹に何か入れないと多分熟睡できないよ」

楊迅は背に括り付けていた荷を脇に降ろしてゆっくり息を吐いた。

「お前達、傷はどうだ？」

朱不尽がヒョウ客の李と方に声を掛けた。

「もう全然平気です。剣も持てますから大丈夫です」

方の言葉に李も腰の剣を拵んで大きく頷いて朱不尽を見る。この二人はまだ若いが范撞や楊迅よりヒョウ客になって長い。李が腰の剣に手を遣っているのは再びヒョウ局の為に剣を振るう事が出来るという意味だ。朱不尽は口元を綻ばせてゆっくりと頷いて見せた。

「無理してもし、また悪化でもしたら事だぜ？」

「病氣になった訳じゃない。もう傷は完全に塞がったからな。ただ、医者が言うには冬とか冷えたりすると痛み出す事があるらしいけどな」

「ハハ、爺さんみてえだな」

「ま、緑恒に居ればそんなに寒くならないからな」

「東淵はかなり寒くなるんだろうね」

「景北港なんてもっと北だぜ？」

范撞がそう言うってから少し離れて座っている夏天佑の方に目を遣った。黙って俯いたままじっとしている。

「……なあ、夏さんよ。横になったほうがいいんじゃないか？」

「……殷だ」

夏天佑は下を向いたまま言う。

「ああ、じゃあ殷総監さんよ。部屋を――」

「俺だって……」

夏天佑がゆっくりと顔を上げて范撞を見る。

「腹は減る」

「……ヘッ、そうだな。飯だ飯」

暫く待っていると主人が料理を数品持ってきて並べ、朱不尽の傍に来ると小声で話しかけた。

「あの……殷総監というのは……あの人が殷総監なのですか？」

「ん？ あー、まあ……そうだ。だが、この事は一切他言無用だ」

「ええ、ええ、それはもう。それでは……あ、足りなければご遠慮無くお申し付け下さい」

「ああ」

主人は席を離れる時もう一度チラッと夏天佑を見た。すぐ目の前に食事が置かれたが、夏天佑は再び下を向いて僅かにその肩が揺らしていた。

「ああ、これ食ったら即効で寝ちまいそうだな」

皆、黙々と食事に取り掛かるが腹を減らしているわりには箸の進みが遅い。時折息をついて茶を少しだけ啜る。辺りはしんと静まり返って、逆に音も無く近づいてくる見えない追っ手の姿を想像してしまう。

「朱さん、今日は此処で休むんだろ？ 奴ら来たらやっぱまずいよな。何処でもだけど……」

「仕方あるまい。流石に体が持たないからな。今のうちに休んでおこう」

宿は余程の事でも無い限り部屋が埋まる事は無い。朱不尽以下ヒョウ局の者は皆一つの部屋で雑魚寝の状態で休むことにしたが、野宿が多いだけに屋根があるだけマシと言える。夏天佑と馬少風の二人は別の部屋を選んだ。

深夜、朱不尽達の部屋の扉が静かに開き、主人が入って来た。真っ直ぐ朱不尽の許にやってくると腰を屈める。さすがに朱不尽も深く寝入っており、主人が声を発するまで気付かなかった。

「朱ヒョウ頭、朱ヒョウ頭」

「ん……んん？」

「北辰の——」

「北辰!？」

朱不尽はいきなり目を見開いて飛び起き、主人の方が逆に驚いてしまった。朱不尽の声と一緒に部屋に居た者達も目を覚まして各自自分の獲物を手にする。皆、朱不尽同様寝入っていてまだ何が起きたかも理解できていないが直ぐに眠気も飛んで一気に緊張状態となった。

「皆さん、落ち着いて下され。朱ヒョウ頭。先ほど北辰の人間が三名、前を通って行きました。一人は北辰の旗を背負っておりまして」

「旗？ 珍しいな」

「はい。一体何があったのでしょうか？」

北辰教の者が背負っていた旗と言うのはおそらく北辰を表すのぼりの事だろう。黒地に白の星の印が配置されているだけの物だが、上に北辰、下に北斗七星を置く。他に取り立てて飾り付けてある訳でもないが、北辰教以外の者の目にはその黒が不気味に映る。

「通って行っただけか？」

「時折立ち止まって話している様でしたが、とりあえず此処の前は過ぎて行きました。しかしまだ近くに居ると思いますが」

「ふむ……夏殿は、夏殿はまだ部屋か？」

「いや、見ておりませぬが……」

朱不尽は剣を手に立ち上がり、すぐに部屋を出て行こうとする。

「朱ヒヨウ頭」

楊迅が声をかける。

「少し様子を見に行くだけだ。お前達は此処に居ろ。外に出てはならん」

楊迅達は浮かせた腰をゆっくりと床に戻す。朱不尽は静かに部屋を後にした。

朱不尽は隣の夏天佑らの部屋の前に立ち、中に声をかける。が、反応は無い。

「夏殿、失礼致す」

ゆっくり扉を開け、中の様子を窺った朱不尽は驚きの表情を浮かべた。中には夏天佑、馬少風の姿は無い。その場で振り返り辺りを見回すが、人の気配は無かった。

「朱ヒヨウ頭？」

宿の主人が傍にやって来る。

「誰もおらん。外か……」

「全く気が付きませんでした」

「表を見てください」

「朱ヒヨウ頭、お気をつけ下さい」

朱不尽は表に出る前から足音を消し、入り口の戸をそっと開くと耳を澄ます。暫くそのままの体勢で居たが、僅かに空けた戸の隙間にそっと体を差し入れ表に出た。また静かに戸が閉められた。

二十八

宿の周りは静まり返ってとりあえず人の気配は無い。朱不尽は暗がりの中を進む。この村は街道沿いに旅人を相手に商売する者達が住むくらいで民家の集落も無い。少し行けば辺りには建物も無くなる。

（もう通り過ぎたか？　しかし……夏殿は何処へ？）

生ぬるい夜風が時折緩やかに通り過ぎる。

（ん？）

朱不尽は耳を澄ます。が、何も聞こえてはこない。

（気のせいか……）

再び歩き出そうとしたその時、風に乗って声が朱不尽の耳に届いた。しかしそれが何と言っているのかまでは聞き取れなかった。朱不尽は剣を持ち直して声のした方へ歩き出す。視界の悪い中を暫く行つて初めて、声が発せられたのが村から程近い林の中である事が分かった。

微かな月明かりを頼りに雑木林へと足を踏み入れる。音を立てぬ様に注意しながら進んで行くと、今度ははっきりと男の声が聞こえてきた。

「もう時間の問題ですけど、きっと張新様もお咎めにはなりますまい。お体の事もご存知なのですから……」

「フン、何故俺が張新ごときの機嫌を窺わねばならん？　教主は何と言っている？　教主の言う事など聞く気にならんか？」

「教主はまだ――」

「いつまでそのような事を言い続けるつもりだ？　教主はもう子供

では無いぞ……もういい、俺はもう関係ないからな」

朱不尽は木立の陰で息を潜めて耳を傾けている。人影らしきものは見えているが、北辰の黒い旗までは確認出来ない。しかし一方の男の声は間違いなく夏天佑のものであった。

「戻られなければ本当に謀反とみなされますぞ」

「どうするつもりだ？」

「張新様は七星^{しちせい}をお召しになられました。もう景北港を出られたかも知れませぬ」

「ハハ、知れませぬ？ 知っておろうが！ 七星か。俺を始末させる為だな。とうに謀反人な訳だ」

「大人しくお戻りになれば……」

「戻らん。七星でも何でもよこすがいい。で、お前達はどうする？ とりあえず俺と遣り合っていくか？」

「……」

「今は少しばかり体調も良くてな。遊んで行け」

夏天佑が腰の剣を抜き、朱不尽の目に一瞬剣のきらめきが映る。

「総監！ 我等は……貴方様の行方を――」

追手らしき男の声が急に聞こえなくなった。

「そ、総監！」

人影が二つ揺れたかと思えば急に走り出す。

「逃がさん！」

夏天佑の声が響き、更に人影が現れて先の二人を追いかけ始めた。朱不尽も暗闇から飛び出して距離を保ちながら追う。先程まで夏天佑らが話していた場所には一人の男が鮮血にまみれて横たわっており、その背には黒字に北辰の旗。

「……馬殿は何処だ？」

朱不尽は辺りを見回しながら夏天佑を追いかけるが馬少風の姿が見当たらない。少し行った処で前方の人影が立ち止まり、朱不尽はすぐにまた近くの暗闇に身を隠す。どうやら追手の二人は大して逃げる事も出来ずに夏天佑に捕まってしまった様だ。

「総監様！ わ、我々はただ命じられただけで――」

「そりゃそうだろう。命じられただけの者がこれから俺を殺しに来るんだろう？ 俺はどうすればいい？」

「天佑！」

突然、馬少風の声が辺りに響き渡り朱不尽は驚いて身を強張らせた。あまりに大きく何処から発せられた声なのか見当がつかなかった。

二十九

夏天佑は尻餅をついている二人の男を見下ろしたまま動かない。

「三人だけか？」

「え？」

「お前達は三人だけで来たのか？」

「ほ、他にも……こっちの街道は俺達だけで……」

「フン、それは本当か？」

顔を上げて辺りを見回す。暫くして突然頭上の木の葉がざわつき、新たな人影が落ちてきた様に見えた。

「どうした？」

夏天佑は全く動じずが降ってきた男に声をかける。その男は抜き身の剣を持った馬少風で珍しく息が切れており、左の袖が数箇所切れている様であるが怪我をしているのかどうかは朱不尽には見えなかった。

「お前を探している男が、もう一人居た」

「フン、で？ そいつはどうした？」

「……すぐにやって来るだろう。足は俺の方が速いようだが剣は齒が立たない。危ないぞ」

「ほう」

夏天佑は再び追手の男達に向き直る。

「誰だろうな？」

「……わ、分かりません」

「俺だよ」

突如更に新たな声が加わり、先程馬少風が現れた頭上から剣が真っ直ぐ突き出された。弾かれたかのように身を転じて馬少風と夏天佑が飛び退る。二人とも着地と同時に剣を構えた。

「いやあ、そこのひよろ長いの、凄まじいな。見失わない様にするのが精一杯だ」

「りゅ、劉毅様！」

（何！？ 劉毅だと！？）

朱不尽は暗がりから目を凝らして男を見る。暗くてよく分からないが、どうやら夏天佑と変わらぬ背格好、しかし顔は恐らく全く違うだろう。方崖で聞いた劉毅ならば若くは無い筈だ。先程の話し方は軽い口調だが声自体は低く安定しており氣息が充実している様子が窺える。劉毅は自分に向かって身構えた夏天佑を見て嘆息を漏らした。

「あんたのそんな姿が見られるとはな。体を壊すとやはりそうなってしまうものか」

「……」

夏天佑は構えを解いて胸を張って見せる。

「張新に命じられたか？」

「おいおい、俺はそう何でもあれの言う事を聞くって訳じゃない。ま、あんたを追えとは言ってたがな」

「それを命令と言うんだ」

「んー少し違うな。俺は自分の意思で此処に居るんだ」

劉毅はそういうとおもむろに剣を一振りしてから鞘に納めた。

「他の者はどうした？ お前だけ抜け駆けすれば快く思わんだろうな」

「止めてくれ。あんた忘れたのか？ 十年前、あんたが方崖に来てすぐ、俺達は揃いも揃ってこっぴどくやられちゃった。そりゃそう

だよなあ。あの、殷汪だからな」

劉毅はニヤリと笑みを浮かべる。自分がやられたという話をして
おきながらまるで夏天佑を嘲笑うかのような面持ちだ。

「お前達、もう用は済んだのか？」

劉毅は未だに腰を抜かしている男二人に言う。

「あ、あーもう……劉毅様に此処はお任せして……」

「そうか。ではもう行け」

「は、はい」

男達は朽ちて落ちている木の枝に足を取られながら穴倉から這い
出す獣のように四つん這いで走り出し、暫くしてからようやく立ち
上がって駆けて行った。

三十

「じゃあどうする？ 何しに来た？」

「……ずっと隠れてるつもりだったんだが、この男に見つかってし
まったからな。まだ名を聞いてなかったな？」

劉毅が馬少風に言う。

「馬だ。お前は誰だ？」

馬少風は剣の切っ先を劉毅に向けたまま口を僅かに動かした。

「俺か？ 名乗る程でも……と言いたいんだが、既に俺の名を口に
した奴が居るのにそれは変だな。俺は劉と言う。こちらの殷総監と
は知り合いでな」

「俺に用が無いならさっさと行ったらどうだ？」

夏天佑が苛ついた口調で吐き捨てる。

「いや、あんたに用があるんだ。しかし、あんたをどうこうしたい
訳でも無いし、あんたに何かして欲しい訳でもない。ま、気にせず
に旅を続けていただきたいな」

「何を訳の分からん……」

夏天佑がまた胸元を押さえる。

「ほれ、また具合が悪くなるぞ？　すぐにでも発った方が良くないか？」

劉毅の言葉に夏天佑は訝しげな眼差しを向ける。

「お前、何を……？　いいか、はつきり言おう。お前達七星が手下すまでも無く、俺はもう長くない。何処へ向かったとしても辿り着く前におしまいだ」

「七星？　ハッ、止めてくれ。そんな名、今では何の意味も無い。殷汪がやってきて俺達七人は無様な負けっぷりを披露してしまったからな。北辰の七星は地に堕ちた。あの時から俺は元の、九宝寨の劉毅だ。ま、今はそんなことはどうでもいいな。あんた、何故諦めた？」

「諦めた？」

夏天佑が鸚鵡返しに聞き返す。丁度その時馬少風は剣を腰に収めて夏天佑の傍に寄った。劉毅は今のところ争う気は無さそうだと判断したのだろう。朱不尽はずっと同じ体勢で暗闇の中で身を硬くしている。

「あんたのその内力の暴走、止められるかもしれない人間が居るんじゃないのか？」

劉毅は横目で夏天佑を見ながら静かに言う。

「お前……お前は……」

夏天佑は言葉を続けられない。

「あんたが方崖を飛び出したと聞いて驚いたよ。驚いたが……何かこう……胸が躍った」

「……どういう意味だ？」

「フフ、張新はあんたと真武剣を結び付けたがっているらしいな。証拠を得たとも聞いている。ついにはあんたは方崖を飛び出して真武剣に走ったと景北港ではもっぱらの噂だ」

劉毅の言葉を聞いて朱不尽は額に手を当てて考え込む。

（何だ？　あの男が俺達を襲ったんじゃないのか？　いや、まだ分

からない。張新の命令の意 図は知らされずにただ荷を奪えと言われただけかも知れん)

劉毅は話を続ける。

「俺はそうじゃないと考えている。殷汪はそんな男じゃない。正反対だ。そう思わないか？ 北辰だの真武剣だの、どうでもいいと思ってる筈だ」

「……」

「あんた、もう何年も景北港を出てないだろう？ 体が言うことをきかなくなっただからか？」

「……そうだ」

「あんたは急に出て行き、俺はすぐに閃いた。いや、ちょっと違うか。何て言うかこう……」

「さっさと言え！」

「ああ、言おう。あんたは真武剣派の許に行くのではない。行き先は、殷汪の処だ」

「……」

「あんたは殷汪じゃない。この事は他の誰も気付いておらん。張新もな。うまくやったもんだ。あんたをよく見ていれば分かりそうなモンなのにな。普通ならすぐばれる筈だが、フツ、殷汪はその珍妙な功夫をあんたに授け、誰も近付かせなかった。さすが殷汪、やる事が普通じゃない。あんたが苦しむ事になると最初から分かっていただろうな」

三十一

夏天佑は浅い呼吸を繰り返しながら目を閉じている。

「……何故張新に言わない？」

「否定しないんだな」

「……」

劉毅は夏天佑に真っ直ぐ向き直った。

「俺はあんたが何と名乗ろうとどうでもいい。あんたは本物の殷汪の居場所を知る人間だ。俺は会いたいんだよ、十年前方崖に現れた本物の殷汪にな」

「俺について来れば会えるത്?」

「そうだ。これは俺のごく個人的な興味だ。北辰は関係無い」

「……残念だったな。殷の兄貴にはお前は会えない」

夏天佑は微かに笑みを浮かべている。

「おい、兄貴って何だ? まさか本当の兄弟ってんじゃないよな?」

「そんな訳ないだろう」

「会えないというのは? あんた、会いに行かないつもりか? 本当に諦めたのか?」

劉毅は驚いた様に夏天佑の表情を窺った。

「殷汪ならその体がどうなってるのか分かるんじゃないのか?」

「お前は会えない。俺も会えない。これでおしまいだ」

「そう簡単に――」

「お前、何故殷兄貴に会いたいんだ? 昔やられた仕返しでもするのか? フン、たった十年でどれほど腕を上げたのか知らんが、兄貴に敵う奴はこの世に居らん」

「そんな事は考えてない。今はな。なあ、あんた、会いに行かないだけか? まさか居場所を知らないのか?」

「……」

「教えてくれないか。何処に居るんだ?」

劉毅は先程までの態度とはうって変わってまるで夏天佑に懇願するかの様に夏天佑の顔を覗き込んでいる。夏天佑もじっと劉毅の顔を見ていた。

「張新に言え。教主が探し出せと言えれば皆競い合う様に探し始めるだろう。すぐ見つかるかもな。だからといってどうにも出来はせんだろうがな」

「……そうかもな」

「お前の個人的な用事はこれでもう――」

夏天佑が急に咳き込んだ。右手で口元を覆い、左手は襟元をきつく握り締めている。持っていた剣が地に落ちる。劉毅は腰を屈めてその剣を拾った。

「あの剣じゃないんだな……」

屈んだまま拾い上げた剣を眺め呟く。夏天佑の咳は止まらない。

「恨んでないのか？ 殷汪を。あんたはあいつの身代わりにさせられ、しかもそんな危なっかしい技を……」

「う、恨むものか……お前には……関係ない事だ」

「そうか」

劉毅は剣の柄を夏天佑に向けて差し出すが、夏天佑は視線を上げる事無く喘いでいた。劉毅は剣を地面に突き立てると立ち上がり踵を返して歩き出した。

「どうした？ まだ……命令が残っているだろう？ 俺を殺す……命令が」

劉毅は立ち止まって振り返る。

「あんたはもうもたないと言っただろう？ ならば放って置くさ。俺が興味があるのは殷汪だけだ。此処に来たのはあまり意味が無かったな」

劉毅はそれだけ言うのと再び歩き出した。その時、

「待て！」

鋭い声が響き渡り、劉毅を立ち止まらせた。朱不尽が暗がりから飛び出し夏天佑の傍に立っていた。

「ほう、やっと出て来たな。誰か知らんが俺に用があるのか？ それとも其処の……殷汪か？」

「あなたに聞いておかねばならぬ事がある。私をご存知無いか？ 顔を見た事は？」

「何だ？ 自分がどれだけ有名か確かめたいのか？ どれ」

劉毅は近付きはしなかったが大袈裟に朱不尽の顔を覗き込むような仕草をしてみせる。

「んー知らんな。名を聞こう」

「朱不尽と申す」

「ほう、その名はわりと有名だ。千河幫だろう？ ん？ 何故こんな処に居る？ あんたまさか、緑恒に逃げるつもりだったのか？」

劉毅は夏天佑に視線を移す。

「俺は何処にも……行かん」

「死ぬまで彷徨うって訳だな」

「……」

「劉毅殿と言われたな」

「ああ。何だ？」

朱不尽はじつと劉毅の目を見据えて呼吸を整えた。

「我がヒョウ局が三江村で賊に教われた事はご存知か？」

「らしいな。景北港で噂になっている」

「……我等を襲ったのは九宝寨の者ではないかと聞いた」

「ほーう。そうか」

「あなたはその頭領だ。認められるのか？」

「さあ、俺は知らんな」

「知らぬと？ では、誰が知っているのだ！？」

朱不尽は剣を持った腕を劉毅に向かって突き出した。確かな証拠を掴んではいないが劉毅のとぼけた様な答えを聞いて怒りが込み上げてくる。

「誰が知っているか？ そんな事は自分で調べろ。自分のヒョウ局の話だろう？ 俺は関係無いな」

「わ、私はこの夏殿にあなたの仕業だと聞いたのだ！」

「夏？ 誰だ？」

「ここに居る、夏天佑殿だ！ どうやら蔡元峰殿もそう考えておら

れる様だが、それでも知らぬと？」

「あんた、夏と言うのか。ハハ、初めて聞いたな。夏天佑か。ふーん」

劉毅は朱不尽を無視するかのように夏天佑に喋りかけた。夏天佑が顔を上げる。

「お前は三江村には行ってないな。喬はどうだ？手勢を連れて出ていた筈だ」

「そうなのか？よく調べたな。じゃあ喬高か。俺じゃないな」

「喬高とは？九宝寨の者か！？」

全く他人事の様には話す劉毅を見てみると朱不尽は益々頭に血がのぼり顔が紅潮している。それとは対照的に劉毅は朱不尽に冷ややかな眼差しを投げた。

「喬高というのは九宝寨の寨主になる男だ。九宝寨の事が知りたければ会いに行くがいい」

「誰が寨主か知りたいのではない！我等を襲い、身内を殺した下手人だ！」

「わからん奴だな。俺は知らんと言った。これ以上は何も無い。あんた調べるのが面倒になってもう此処で俺を下手人に仕立てようつてのか？あんたの名声には相応しくないな」

完全に開き直っているのか本当に知らないのか、どちらにしても朱不尽にはもう言う言葉が出て来なかった。夏天佑が劉毅に問い詰めるのを期待したが俯いて喘ぐだけである。

「ではあと一つだけ聞く。九宝寨に求もとめという男が居るか？」

「ああ、居るかもな。大勢人間が居るんでな。求という名はそう珍しくも無い。どうしても言うなら二、三人見繕みとって来てやっても……いや、駄目だな。そんな暇は無い」

劉毅は朱不尽に口を開かせない為に間を空けず夏天佑に話しかける。

「じゃあ……夏とやら。これで最後だな。俺は自分で殷汪を探す。ま、あんたもご苦労だったな。ゆっくり休んでくれ。息のある間は

何処かに落ち着いた方がいいぞ」

劉毅は朱不尽には目もくれずに再び歩き始める。朱不尽はただその背を睨む以外何も出来なかった。

「本当に俺が殷汪では無いと何故言い切れる？」

先程まで苦しんでいた夏天佑の声が変わった。劉毅はぴくりと肩を持ち上げ、ゆっくりと振り返る。朱不尽も突如変わった夏天佑の様子に半ば呆然とその顔を眺めた。

三十三

虚ろな眼差しが揺らいでいる。夏天佑の体が前後に揺れ、だらりと下がった両手の指先もゆらゆらと動いていた。劉毅は豹変した夏天佑の気配に驚き真っ直ぐ見据えて対峙する。

「あんた、夏と言うんだろう？ 今更——」

「俺は太乙北辰教の総監、殷汪……殷汪だ。劉寨主、試してみるか？」

「夏とやら、もうやめておけ」

夏天佑は手を持ち上げ両の手のひらを眺める。

「殷汪……何が違う？」

ゆっくりと指を折り曲げ、そしてしっかりと握り締める。次の瞬間、夏天佑が音も無く地を蹴った。

劉毅は即座に腰の剣を抜く。凄まじい勢いで劉毅に迫る夏天佑はまるで地面ぎりぎりを滑空する猛禽さながら、駆けるのではなく飛んでいる。朱不尽はその物の怪と見紛う程の夏天佑の姿に思わず後退った。馬少風の方は夏天佑が飛び出すのと同時に後ろに下がって観戦する構えで居る。得物を持たぬまま襲い掛かった夏天佑はそのまま劉毅の足を掴もうとする。劉毅が真正面から剣を地に突き立てる様に腕を振り下ろした瞬間、初めて夏天佑は左足を出して再び地

を蹴り、体を回転させながら横へ避けた。すぐに劉毅が追う。すると今度は大きく蜻蛉を切って劉毅の上を飛び越えた。その速さは電光石火、しかも今は闇夜で夏天佑の姿がはっきりと捉えられない。

（奴の輕功は馬殿よりも上か！？）

朱不尽は目まぐるしく飛び回る夏天佑を大きく見開いた目で追った。しかし劉毅もそう容易く夏天佑の挙動に惑わされはしない。常にその手に持った剣の切っ先は夏天佑の体すれすれまで迫っている。「得物も無しでどうするつもりだ？」

「どうかしよう」

夏天佑が動きを緩めた処に劉毅が鋭い突きを入れる。剣が夏天佑の胸元に触れそうになったその時、夏天佑の手が一瞬消え、劉毅の突きが止まった。

「なっ……」

見れば夏天佑が両手の指を綺麗に揃えて劉毅の突き出した剣の先端を摘んでいる。すぐにキーンと甲高い金属音が響き、劉毅は何かを避ける様に後方へ飛び退って地に膝を着きながら再び剣を構えた。

「何だと……」

劉毅の視線は自らの剣先を向いている。剣は縦に裂けた様で前方にある筈の剣の切っ先が失われて細くなり、長さも半分程になっていた。すぐに夏天佑を見遣ると両手にきらきらと光を放つ劉毅の剣先を摘んだままだ。左の手に剣の半分、右の手にはかけらと言ってもおかしくない刃のごく一部。しかしそのどちらも裂けた事によって更に鋭利な刃物となっている。

夏天佑はその二つを持ったまま腕をだらりと下げ、劉毅に向かって笑みを浮かべる。

「劉寨主、……楽しくなってきたな」

「あんた本当に殷注……いやそんな事は無い筈だ。しかしあんたも凄いな。今まで知らなかったなんて何とも惜しい」

「さあさあ、仕切り直しだ。お前の本気を見てみよう」

夏天佑は口調までも変化しており別人の様である。その体に緊張は一切無い。

「殷汪に教わったのか？ あんたの動きそのものは特別変わっては
おらんが細かい挙動は確かに似ているな……」

「ほう、よく見てるな。しかし似ているというのは当たらん」

不意に左手長い方の折れた剣先を劉毅に向けて投げた。劉毅はすぐに反応して折れた剣を前に掲げて目を見張った。夏天佑の投げた剣は一直線に飛んでくるにも関わらずその速度が異様に遅く剣に重厚な内力が込められている。劉毅は急いで立ち上がり叩き落そうと剣を振り上げる。

「そんなに大きく隙を作る奴も珍しい」

劉毅が息を呑む。何故か迫り来る剣よりも先に夏天佑の右手が劉毅の胸元を襲う。凄まじい勢いで突き出される光。

「おわっ！」

思わず劉毅が驚きの声を上げた。

三十四

劉毅はただ夢中で自ら倒れこんで地面を転がり、その後すぐに地を蹴って更に後方へ跳躍して逃げた。

「おい、凄えな。あの夏って奴。相手は逃げてばかりじゃねえか」

茂みに潜む数人の影。宿から出てきた范撞らヒョウ客達である。

朱不尽の戻りが遅いので出てきたのだが村は小さくすぐに林の中の物音に気付いた。

「朱ヒョウ頭は無事みたいだね」

「ああ。あれが北辰の奴か？ 何で一人なんだ？ 宿の主人は三人
と言ってなかったか？」

「あの夏さんが倒したのかも」

「そうかもな。しかし体の方はどうなってんだ？　普通に動ける……どころじゃねえな。異常だ」

夏天佑の投げた剣は劉毅に届いておらず、かと言って地に落ちた訳でもない。再び夏天佑が指で掴み取ると凄まじい勢いで旋回しながら劉毅を追う。益々速度が上がり僅かな月明かりが夏天佑の両手の金属片を光の輪へ変える。もはや劉毅は攻めの手を繰り出すことは不可能に思えた。

「ちよっ、待ってくれ！」

劉毅は声を振り絞って叫ぶが夏天佑に反応は無い。ただひたすら劉毅を襲うからくり人形の様である。

「天佑！」

再び聞き覚えのある声が辺りに響き渡り、夏天佑が声の方へ首を回してようやく足を止めた。声の主は馬少風であった。

「……なんだ？」

「夏天佑。もう勝敗は明らかだ。そうだろう？」

劉毅はそのまま逃げ続け、かなり距離をとってからようやく息をついた。

「勝敗？　そんなことは始める前に分かってる。俺は負ける事は無いからな」

「夏天佑。もう引き上げよう。あいつももうやる気にはなれんだろう」

馬少風は劉毅の方を向く。劉毅は口を開きかけたがすぐに口を噤んで夏天佑を見た。再び襲って来られれば命は無いかもしれない。

劉毅は混乱していた。

（こいつは本当に殷汪なのか？　そんなはずが……。いや、殷汪は動きの全てが奴より遥かに精妙だ。こいつはまるで……ぶっ壊れた殷汪だ！）

「夏天佑」

馬少風は三度「夏天佑」と姓名を口にした。

「呂州はどうだ？ 随分戻ってないな。一度行って見ないか？」

何故か馬少風は随分と穏やかな口調でそんな事を夏天佑に話しかけた。

「呂州……呂州か。咸水……」

「ん？ 咸水がどうした」

「いや呂州、呂州は何処だ？」

夏天佑は誰に言うでもなく宙を見つめて呟いた。

「咸水って何処だ？ そうだ！ 咸水！」

「おいどうした？」

「殷兄貴！ 助けてくれ！ 俺を……俺を！」

突然、夏天佑は叫んでそれまで持っていた剣の破片を落とし、そのまま崩れるように地に膝をついた。殷汪は咸水に居ると思いついたのだろうか。一体この夏天佑は自分を夏天佑だと分かっているのか殷汪だと思いついて入っているのか、傍目には判断がつかない。

「殷汪は……咸水に戻っているかもしれないぞ……」

劉毅が夏天佑の表情を窺いながら恐る恐る言う。すると急に夏天佑が顔を顰めたので慌ててしまい折れた剣を掴んだ手に力が入る。

「……劉寨主、お前はまだ解っておらん——」

夏天佑は険しい表情でゆっくりと顔を向け劉毅を睨みつける。劉毅が後退りすると急に夏天佑は口元を両手で押さえた。目が思い切り開かれている。しっかりと閉じられた筈の指の間から真っ赤な血が漏れ出した。

三十五

「夏殿！」

「天佑！」

朱不尽と馬少風が同時に叫ぶ。夏天佑が手を口元から離して驚きの表情で眺めるがすぐに再び喀血し、崩れる様に地面に突っ伏した。

「天佑？　しっかりしろ！」

抱きかかえて仰向けにすると夏天佑の真っ赤に染まった唇が震えており目が殆ど開いていなかった。

「再び血を吐けば呼吸出来なくなる！　横に向けるんだ！」

朱不尽が言うのと馬少風は夏天佑をゆっくりと横向きに地に寝かせた。数回咳き込んでまた新たな血が口から流れ出た。

「これが最後か……」

不意に背後から聞こえた劉毅の声に朱不尽と馬少風がすぐに振り返って立ち上がり、二人同時に剣を抜いた。

「待ってくれ。いくら俺でも今のその男を襲う程恥知らずでは無い。俺は完敗だった。今生きているのが不思議な位だ……」

「夏殿をどうするつもりだ？」

朱不尽は剣を下ろして劉毅に尋ねる。

「どうもしない。……総監の身はあんたらに任せる」

劉毅は横たわる夏天佑に近付いて見下ろす。その眼差しは怒りか哀れみか、判断のつかない複雑な色をしていた。

「劉……毅」

夏天佑が声を振り絞った。

「忠告……兄貴を追うのは止めろ。お前如きに、興味など無い。俺、俺の相手にもならん奴が……兄貴に適うものか。お前などは相手にせん」

夏天佑は大きく呼吸をしてからまた続ける。

「^{ぼく}穆ご先輩の^{てんせいだ}天棲蛇……失われた今、兄貴は……」

「穆とは？」

劉毅はすぐに聞き返す。

「穆……？　俺は……い、殷……汪……」

夏天佑がそう呟いた後、暫く沈黙が流れた。

「天佑？」

馬少風が顔を覗き込む。

「どうした？　夏殿？」

「……死んだ」

「何だと!？」

朱不尽も傍らににじり寄って夏天佑の様子を確かめる。薄く開いた唇と目。肩を揺すって見てもその表情が変化する事は無かった。

「死んだか……」

劉毅は一人呟いた。

「殷……殷総監は逃亡中に死亡した。方崖へはそう伝える。何ともあつけないが、これで終わりだ」

「……終わってはおらん」

朱不尽は夏天佑を見つめたまま劉毅に言う。ヒョウ局を襲ったのは九宝寨なのかどうか、詳細を知っているであろう人物はこれで景北港の蔡元峰だけになってしまった。

「気の済むようにしろ。だが、景北港で調べるなら慎重に事を運ぶんだな。何故か張新は最近調子付いている。一筋縄ではいかんな。フン、俺が言うことでは無いな」

劉毅はそう言うとき夏天佑から目を逸らし、その場を去って行った。朱不尽はその背中を睨む様に見つめ、馬少風は夏天佑を見たまま顔を上げることは無かった。

「……この男に一体何があったんだ? 何故こんな……」

馬少風は夏天佑の暖かい頬を撫でていた。そんな事を言いながらもその長い顔はいつもと比べて変化は見られなかった。

三十六

「朱ヒョウ頭、一体何が……?」

「連れの夏殿が亡くなった。少し行った左手の林の奥だ。うちのヒョウ客の者達はまだそこに居る」

一人宿に戻ってきた朱不尽が宿の主人に告げる。

「亡くなった? まさか北辰の……」

「いや、夏殿は前から病があったのだ。我等は先を急がねばならんのだが緑恒はまだ遠い。夏殿を連れて行くのは無理だ」

「あの……あの方、総監様は何処へ向かっておられたのですか？」

「……決めてはいなかった。方崖から逃げて来たのだ」

「えっ？」

「とにかく、夏殿の遺体をなんとかせねばならんのだが……」

「この先に墓地……と言っても行き倒れの者を埋葬している空き地みたいなものですが、其処に埋葬しては如何でしょう？ 総監様には気の毒ですが……」

「仕方あるまい。そうしよう。案内してくれ」

暗闇の中を男達が遺体を運ぶ。自分達が手を下した訳でも無いのだがどこか後ろめたく思われてならなかった。つい先程まで圧倒的な技を見せ付けた北辰教総監のこの男の体が急激に冷たくなっていく。何故自分達が北辰教内の揉め事に巻き込まれなければならないのかヒョウ局の仲間が殺された事は無論この上ない一大事であるが、少し前まではもっと事は単純な筈だった。下手人を探し出して仇を討つ。必ず成し遂げねばならないこの事が今ではとてつもない難事に思われて、朱不尽の中に憂鬱に思う気持ち少しづつ大きくなってきていた。

「この人、望んで総監になったのかな？ それとも殷汪って人に無理やり押し付けられたんだろうか……。何だか、不憫な気もするな……」

自分達で掘った穴の底に横たわる夏天佑を見下ろしながら、楊迅は呟く。

「そうだな。殷汪ってのがこの姿見たら何て言うんだろうな。眉一つ動かさねえかも知れねえな」

暫く皆で眺めていたが、やがて馬少風がおもむろに土を被せ始めた。

「お前達も手伝え。長居は出来ん」

朱不尽がそう言うとその場の全員で土を運ぶ。あつという間に夏天佑の体は冷たい地中へと消え去った。墓標も何もない。色も音も無い終焉の地。

馬少風が一人黙ったままその場を離れ、さっさと宿へ向かって行き、朱不尽もその後が続いた。

「あの馬って人、夏さんの知り合いだったよね？」

「ああ」

「あの人、何も感じないのかな？」

「さあ？ 同郷って言ってただけだしな、あまり知らないのかもな。ま、あの人に感情があるのかどうかも怪しいけどな」

「馬殿、思わぬ事になってしまったがここまでだな。そなたもあまり深く関わっては千尽達にも累が及ぶ事になろう。最初から無関係では無いが……」

「俺は夜が明けたら東淵に戻ろうと思う」

朱不尽は頷いた。

「分かった。もうあまり寝る時間も無いがとりあえず休もう。我等も夜が明けたら発つ。お前達も少しでも寝ておけよ。北辰教の者がまた来ないとも限らん。急いで緑恒へ戻るぞ」

「朱さん。あの戦ってた奴は誰だったんだ？ 帰ってっみたいだけどまた来るのか？」

「あれは……もう来ないだろう。しかしどうやら追手は方々に何人も出している様だ。最初に見た三人組とも別々に行動している。次に誰が現れるかは分からん。恐らく今夜はもう来ない筈だ。さあ、部屋に戻ろう」

朱不尽が先に部屋へ向かう。皆部屋に戻り、再び疲れた体を横たえて眠りにつく中、楊迅は一人仰向けのまま暗い天井を見つめていた。

（殷汪か……どんな人だろう？ 確か梁媛は都で会ったんだっけな。もっと話を聞いておけば良かったな……）

早朝、馬少風は言葉すくなく朱不尽達と別れて街道を北へと駆けて行き、朱不尽はじつと後姿を見つめて見送った。東淵から此処まで夏天佑について来ただけだったが、何を思っていたのか、夏天佑の死をどう感じていたのか、何も分からないままだった。傅千尽に雇われた一介の用心棒に過ぎないと思っていたが、一体どのようなにして傅千尽と出会ったのか、あの時見せた軽功は何処で習ったものなのか、いつも黙ったままのあの男にはどんな人生があったのか。ふと浮かんできた考えに朱不尽はハツとなった。

（夏殿は呂州から景北港、馬殿も同じく呂州から東淵？ 一緒に呂州を出て来たのか？ 夏殿はいつ殷汪と知り合ったのだ？ 馬殿の軽功も夏殿のあの動きに近いものがあつたが……馬殿は殷汪と名乗っている夏殿に殷汪とは誰なのか聞かなかった。もしや馬殿も殷汪を知って……いや、夏殿と同じ、もっと近い関係なのではないのか？）

「朱ヒヨウ頭、準備が出来ました」

楊迅達がそれぞれ馬を引いて朱不尽の傍に集まる。

「朱ヒヨウ頭？」

「ん？ ああ、もう出られるな」

「はい」

朱不尽も自分の馬の許へ行き、近くに居た宿の主人に話しかける。

「夏殿……北辰の殷総監がここで亡くなった事は方崖に伝わると思う。見に来るかも知れん。遺体を掘り返すくらいの事はするかもな。主人、あそこには行き倒れの者が埋葬されていると言ったな？」

「はい」

「夏殿も病だった。遺体には刀傷も無い。行き倒れを埋葬したとい

う事にしておいてくれ。北辰の者が来て万が一河幫の事に触れたら、此処に居たのは俺ともう一人の、二人だけだったと言う事に。向こうが触れたら、だ」

「は、はい。でも本当にそれで……?」

「ああ、それで良い。頼む」

「分かりました。朱ヒヨウ頭、皆様もお気をつけて」

「よし、では行こう」

朱不尽達五人は一斉に街道を南へと駆け出した。

荷を運びながら景北港へと向かっていた時とは違い、皆馬に乗り休息もそこに街道を一気に南下し、往路の半分程の日数で緑恒へと舞い戻った。此処を出立してからもう三月が経とうとしている。東淵ならばもう秋が訪れているがこの緑恒の夏は長い。

眩い日差しが差し込む中を一先ずヒヨウ局の総号へと向かう。

「やっと帰ってきたな。もう暫く動きたくねえな」

范撞が目を細めて辺りを見回している。

「……そうだな。当分仕事は受けん。存分に休め」

朱不尽が答えるが、どこか力なく急に疲れきった様な声になっていた。

「朱さん、親父の所に行くんだろ?」

「ああ」

「俺も行っているのか?」

朱不尽が振り返って范撞を見る。

「……そうだな。フ、俺に断わる必要も無かろう?」

「別に親父に会いたい訳じゃねえ。俺は朱さんの話が聞きたいんだ」

「……まあ、いいだろう。先にヒヨウ局に寄ってからな」

通りを暫く行ってヒヨウ局の門が見えてくると中から数人のヒヨウ客が飛び出してきた。

「朱ヒヨウ頭!」

「ご無事でしたか!」

朱不尽は口元を緩めて頷いて見せた。

三十八

「皆、無事に戻ったか？」

「はい。道中は何もありませんでした。朱ヒヨウ頭、何か分かったのですか？」

「たった今戻られたばかりではないか。こんな所で訊いてどうする？ ささ、朱ヒヨウ頭、中へ。お前達ももう体は大丈夫か？」

「ええ。もうすっかり良くなりましたよ」

楊迅達も他のヒヨウ客達と言葉を交わしながら中へ入った。

「朱ヒヨウ頭！」

門をくぐり中に入ると、魯ヒヨウ頭を先頭に更に数人が飛び出してきた。

「魯ヒヨウ頭、ご苦労だった。道中変わった事は？」

「ハッ！ 何もありません。皆、朱ヒヨウ頭のお帰りをお待ちしておりました」

「皆に迷惑をかけてしまったな。すまぬ」

「いえ、我等は朱ヒヨウ頭が無事に戻られて再び号令を下されれば何も申す事はございません。朱ヒヨウ頭、范幫主の処へ行かれますか？」

「ああ」

「では私も参ります。実は戻ってすぐに幫主と共に武慶に行ったのです」

「何？ 武慶に……范幫主がか？」

「はい。朱ヒヨウ頭はすぐには戻られぬので、その……荷が奪われた事を報告に……」

朱不尽は項垂れた。

「……そうか。俺は、幫主の顔を潰してしまった……」

「朱ヒヨウ頭、そう気を落とされますな。我等の失態であったことは否めませんが……真武剣の反応は少し意外でした」

「どうということだ？」

「范幫主がお話になられるかと思いますので詳しくはそこで」

「ふむ。よし、では幫主に目通りしてこよう」

朱不尽は魯ヒヨウ頭に言うのと再び外へ向かう。後ろに居た范撞と魯ヒヨウ頭の目が合って范撞は下を向いて頭に手を遣った。朱不尽が先を歩いてゆくので二人並んでついて行く。

「……朱さんが、勝手に辞めるのは認めないってさ」

魯ヒヨウ頭は少し間を置いてからニヤリと笑う。

「当たり前だろうが。これからが大変な時だ。しかし、よく無事に戻れたもんだ。もしお前一人ならどうなったやら。ん？ 田の奴はどうした？」

「あー後で朱さんに聞いてくれよ」

幫主范凱の屋敷までの道中で朱不尽の顔見知りが次々に駆け寄って来ては声をかけた。或いは朱不尽の無事を喜び、或いは無くなったヒヨウ客達のお悔やみを述べる。その度に朱不尽は丁寧に頭を下げて礼を返していた。

「朱ヒヨウ頭が参られました！」

屋敷に声が響きわたり、朱不尽達が奥に向かって歩き出すと范凱が庭に下りて来ていた。

「おお、朱さん、帰ったな」

「幫主、戻るのが遅れて申し訳ございません」

「いやいや、無事で何より。さあ、部屋へ行こうか」

范凱は朱不尽の肩に手を回し共に歩いた。その顔には笑みがこぼれていた。

四人が部屋に入って腰を落ち着けると早速、范凱が口を開いた。

「朱さん、体の調子はどうかな？ かなりきつい旅になってしまったが」

「此処に帰ることが出来なかった者達に比べれば私などは……」

「まあ、そうだ。しかし、ここは冷静にならねばな。ヒョウ客の事は常に命を張って江湖こうちうを渡らねばならん。安い命などというものは何処にも無いが、ヒョウ局に居る者達は皆その覚悟が無ければならない。そして、朱さんのヒョウ局に居る者は皆その覚悟のある者ばかりだ。どうかな？」

范凱は魯ヒョウ頭に視線を向ける。

「勿論です。朱ヒョウ頭、私は此処に戻ってから無くなった者達の家族に会って参りました。亡くなった本人は勿論ですが、家族の者たちも無念を訴えておりました。そして今は生き残った我等が必ずこの無念を晴らすと皆が信じております」

三十九

朱不尽はそれまで伏目がちだった顔を上げた。亡くなったヒョウ客は十八人。皆、待っていた家族が居た。貧しい家を支える若い働き手であった者や妻子と年老いた親を養う一家の大黒柱であった者達である。危険な家業であることは理解していても、突然その者達を失う悲しみと苦しみは耐え難いものであることは間違いない。残された家族もまたヒョウ局の身内なのである。自分がこれから父となり兄となって亡くなった者達の恩に報いなければならない。

「遺族の方々はこれから大変であろうが、我が幫会が責任を持って面倒をみよう。我等はこのような時にこそ助力を惜しまず団結せねばならん」

范凱は落ち着いたゆったりとした口調で、そして力強く朱不尽に言った。

「それから、真武剣派だが」

「武慶に参られたと先程聞きました。申し訳ございません」

「ハハ、武慶は比較的近いというのに行っただのは十数年振りだ。懐

かしかつたよ」

范凱はそう言って笑う。

「陸総帥に会って来た。朱さん、総帥は儂が言う前から殆どの事は知っておった。儂は報告と今回の損害の補償をする為に行つたのだが、総帥は補償金以外は受けとらなんだ。賊は我等共通の敵。共に協力して事に当たるといふのが真武剣派の意であるといふ事だ」

「真武剣は我等をつけて……荷について来ていたのでしょうか？」

「もしそうなら朱さんが気がつかぬ筈が無かろう？」

「いや、私にはとても……」

「朱さん、どうしたんだ？ 絶対に朱さんなら気付いた筈だ。間違いない。それに熟練のヒョウ客達も居る。皆揃って気付かない等という事があるだろうか？」

范凱は魯ヒョウ頭を見る。

「絶対はありませんが……しかし今回そのような人物は居ませんでした。居ない者を朱ヒョウ頭が見る訳がありません」

魯ヒョウ頭は范凱に向かって話しているが、その言葉は朱不尽に向けられていた。

「まあ、真武剣派は北辰教を常に張っているだろうからな。東淵近辺の情報等は逐一報告されているだろう。で、まあそういう話だけで終わったんだが、どうも総帥の態度には違和感があった。儂も会うのはかなり久しぶりで昔の印象と違いがあるのは当たり前だと思ふが、どうも落ち着きすぎているというか、達観しているとでも言うのかな？ 元々只者では無いのは確かだが……ああ、それと朱さんもわざわざ武慶まで来ることは無いと――」

「それは……？」

「朱ヒョウ頭には引き続き調査を続行して頂きたいとな。引き続き、だ。朱さん、景北港まで行つたそうだね？」

「はい。方崖に初めて上りました」

「おお、そうか。方崖まで行つたのか。ふむ、真武剣派はそれも知つて居るのかもな。私も聞かせてもらおうかな？」

朱不尽は賊に襲われてからの事を順を追って話す。特に北辰の蔡長老に会って方崖に上ってから殷汪を名乗っていた夏天佑という男の死までを事細かに范凱に伝えた。朱不尽の話に出てくる名は范凱も殆ど知っており、実際に会った事のある者が多かったが、馬少風、そして夏天佑という者については知らなかった。

「それでは、今の処襲ってきた賊、或いはその背後にある者の狙いは直接我等にあったのでは無いと言える訳だな」

「はい。どうやら北辰教の張新、この者の意思が最も強く絡んでいる様でございます」

「ふーん、張新と殷汪か……」

「幫主、張新という人物をご存知ですか？」

「いや、儂が方崖に行ったのは前教主の亡くなった時が最後だからな。殷総監や長老衆には対面しているが、張新という男は今の教主の……召使いのようなものだと思っておった。まあ、そうだな、陶峯殿が亡くなって殷総監も居ないのと変わらぬ状態ではそのような者がたかだか十年かそこらで権力を手にする事も可能か……」

范凱は腕を組んでじっと考える様に宙を見据えた。陶峯の頃の太乙北辰教の事を思い起こしているのだろうか。

四十

「とりあえず現状では我等に出来る事は殆ど無い。陸総帥も分かっている筈だが……どう調べろというのだろうか」

「でも的は北辰で決まりだろ？」

魯ヒョウ頭の後ろでずっと黙っていた范撞が、初めて口を開いて范凱に言う。

「今のところは、な。そう推測出来るというだけだ」

「だったら――」

「証拠を見せねば下手人はシラを切るだけだ。何か手掛かりがある

とすれば一番それに近いのは蔡長老だとは思いますが……恐らく今となつては近づけぬな」

「はい。景北港はおろか、東淵周辺も近付くのは危ういかと」

朱不尽はそう言いながら傳千尽達の事を思い浮かべた。傳千尽と洪破天の処にはもう北辰の者が来たに違いない。あの劉毅が方崖へ戻って報告していたなら傳千尽達にはあらぬ嫌疑がかかることも無いだろうが。

「……殷汪か」

范凱が呟く。

「長く会っておらんが、どうにかして探し出すか……本物をな」

「どうやら東淵の洪破天殿が春頃に殷汪殿と共に都に行ったらしいのですが、その後別れてからは洪破天殿も殷汪殿の所在については全く分らないそうです」

「まあ、あまり期待は出来ぬが殷汪ならたとえ長く方崖を離れていても人を良く知っておろう。我等の為に動いてくれるかどうかは分からんが、全く知らん間柄でも無い。とりあえず搜索に人を出しておこう」

范凱が言くと朱不尽は黙って頷いた。

朱不尽達は范凱の屋敷を出て再びヒョウ局へと戻ったが、道中三人とも押し黙ったままだった。珍しく范撞も物思いに耽っている体でじつと足元を見ながら歩いていた。

「朱ヒョウ頭、お疲れでございました。食事を摂られますか？」

「……いや、まだ陽が高いが少し眠りたい。范撞、お前も眠いんじゃないのか？」

「んー、そうでもないかな。朱さん休みなよ」

范撞の言葉に少し驚いた表情の朱不尽だったがすぐに相好を崩した。

「ハハ、お前にそんな言葉を掛けて貰えるとはな。ではお言葉に甘えるでしょう」

朱不尽と魯ヒョウ頭はヒョウ局の屋敷に入って行く。范撞は辺りを見回した。

「楊迅見てないか？」

門の所で警備に就いているヒョウ客に声を掛ける。

「戻って暫くしてから出て行つたよ。陸先生の所とか言つてたけど、あの爺さんの事だろ？」

「ああ、そうだな。俺もちょっと出てくるわ」

范撞は門を出て陸老人の家へと向かった。

楊迅は陸老人と話し込んでゐる。報告という訳でもないが、賊に襲われた事は勿論、道中見聞きした事をつぶさに陸老人に聞かせた。陸老人は黙って楊迅の言葉に耳を傾けていた。

「早速来てんのか」

范撞が入って来て楊迅に言う。

「お前は無事だったのか？」

陸老人は目を細めて范撞を眺めている。

「ああ。俺は運が良いからな」

「なるほど。それは良い事だ。しかし、運というのは急に強まったかと思えばすぐに消え去ったりもする。過信は禁物だ」

「なあ、あんた、名は豊ほうって言うのか？」

「……范撞、もう少し口の聞き方を改めてくれないかな？」

楊迅が呆れた様に范撞に言った。

「難しいな。で？」

范撞はすぐに陸老人に顔を戻した。

四十一

「いかにも。儂の名は豊。言つてなかったか？」

「ああ。初めて聞いたな。真武剣の人間から聞いた」

范撞はそう言つて陸豊の反応を窺つたが、陸豊は全く表情を変え

ず眉一つ動かさなかった。

「儂もこの歳まで武林の隅で細々とやってきたのでな。真武剣派にも幾らか見知った顔はある」

「まあ、そうだよな」

范撞は軽く頷いて床に腰を下ろした。

「ヒョウ局は暫く休業か？」

今度は陸豊が尋ねる。

「いつまでか分からねえけど当分仕事は請けないって朱さんが言ってたな」

「先生」

楊迅が改めて陸豊に向き直り背筋を伸ばした。

「私を……弟子にしてもらえないでしょうか？」

「弟子？」

「はい。今の私ではとてもヒョウ客など務まりません。先生、私は先生に武芸を学びたいのです」

陸豊は真剣な眼差しで真っ直ぐ自分の目を見つめてくる楊迅を眺めている。

「ヒョウ客を続けたいのか？」

「それは……まだ分かりませんが、これからの私にはもっと……本格的に武芸を身に付ける事が必要だと思うのです」

「ほう。この世に生きる術は無数にある。武芸はその中のほんの一部。いや、武芸に優れていたとしてもそれが飯の種になるかといえど、もっと他に良いものがあるう。それでも、武芸を選ぶのか？」

陸豊の声は少し小さく、呟いている様にも聞こえる。

「じゃああなたは何で武芸者を選んだんだよ？」

范撞が口を挟む。

「儂か？ 儂は農民だ」

「は？」

「儂は幼い頃からずっと百姓だった。剣は……田畑を耕しながら仕事の合間に教わった。今でこそすぐ其処の狭い畑を弄る程度だがな」

「そんな片手間に剣を振るってそこまでなったってのか？」

「お前の言うそこまでというのはどの辺りか知らぬが、とにかくこうなった訳だ」

「先生」

再び楊迅が言う。

「私にはとても片手間では先生程の剣を習得する事は到底出来ません。今まではその片手間の様なものでしたが、これからは先生の弟子となって真剣に学びます。どうか、お願い致します」

楊迅は床に額を擦り付ける。

「……楊迅。そのような礼は要らぬ。この儂とて我が師父に叩頭した事も無い。前にも言ったが儂と師父の関係は普通とは違ってな。教えてもらったから師父と呼んでいるだけだ。ハハ、お前が教えてくれと言うなら何も拒む理由は無い」

「あ、有難うございます！」

楊迅は一度起こした頭をどうするか一瞬迷ったが、やはり叩頭するしかなかった。

「ただし――」

陸豊はじつと楊迅を見据える。

「わが師父の剣は並みの剣では無い。たとえ近付く事は出来ても完全に習得する事は非常に難しい。かく言うこの儂も師父の往年の剣には遠く及ばぬ。速成など望むべくも無い。この事は、他の門派の武芸とは比較にならぬ程だ。しかし、完全でなくてもこの優れた剣術ならば正しく修練していけばいくほどそれだけ威力を増す……ハハ、今、全部言う必要は無いな。お前なら問題は無いだろう」

陸豊は一人頷いた。

四十二

「あーじゃあ、俺は帰るわ」

范撞が立ち上がる。外をじっと見つめ、楊迅達から目を背けたままだった。

「あ、じゃあ俺も……」

「何言ってるんだ。お前はたった今から爺さんの弟子だろ？　これからは何をするにも爺さんにお伺いを立てないとな」

「あ……」

楊迅は浮かせかけた腰を戻して陸豊に頭を下げた。

「申し訳ありません」

「ハハ、気にするな。今まで通りで良いではないか？　当分何も無いなら今までよりもっと多く此処へ来れば良い。儂はずっと此処に居る」

陸豊はにこやかに話している。

「さあ、今日はもう帰ってゆっくり休んでまた来い。范撞、お前も暇なら一緒に来るがいい」

「邪魔する気はねえよ」

「フフ、邪魔、か。まあ良いから来い」

「……暇ならな」

「それでは失礼致します。明日、来ても良いですか？」

楊迅が陸豊に尋ねる。

「お前が来たい時に来い。たとえ儂が手が離せんでもお前が出来ることはあろう？」

「分かりました。では失礼致します」

「うむ」

楊迅の挨拶を聞いて范撞が先に家を出て、すぐに楊迅も続いた。

「范撞」

「ん？」

「これから暫く、きつと暇だよ。一緒に先生の所に来ないか？　剣を教えて下さるよ」

「師父って呼ぶのが普通じゃないのか？」

「あ、そうか」

「ま、気が向いたらついでに行くさ。でも北辰の、あれだ……色々調べたり手が要る時とかあるだろ。何も無い訳じゃないさ」

「勿論、その時は俺も行くよ。俺だって、半人前だけど一応ヒョウ客だ」

范撞と楊迅がヒョウ局の屋敷に戻ってきた時には、陽は僅かに西に傾いていたがまだまだ夜までは時間がある。しかし、もう今日しなければならぬ事は何も無い。范撞は仲間を殺した賊について思いを巡らす、今自分に出来ることは何も無かった。すでに父、范凱が数少ない手立てを考えて人を動かしている。楊迅はついさっきこの緑恒に戻ったばかりだというのにもう陸豊に剣を本格的に習うことを決めた。

（当分何も無いな……俺は、何したらいいんだ？ 俺達は仇を討てるのか？ いつになったら……あーもうわからん！）

范撞は久しぶりの自室に戻り、寝台に身を投げ出した。

今、太乙北辰教を敵に回せば、緑恒千河幫は仇を討つどころか逆にあつという間に踏み潰されてしまうだろう。千河幫はあくまで商売人の集団であつて武林の各門派といくらかの誼を結んではいるが相手が北辰ではとても太刀打ち出来ない。ただ、今まではどちらかというと千河幫とは縁遠かった武林の大勢力、真武剣派が此処に来て急接近してきている。幫主范凱はどのように動くべきかをずっと考えていた。安易に真武剣派に近付いて良いものか、北辰教と必ず争う事になってしまうのか。はつきりとした事が何も分からぬまま、気が付けばいつの間にか緑恒千河幫は訳の分からぬまま、その未来への重要な岐路に強制的に立たされていた。

第五章 一

「流浪一天 第五章 一」

一

秋が過ぎ、さすがに武慶^{ぶけい}の街にも時折肌寒い空気が流れているが、街の様子は殆ど変わらない。真冬でも雪が降ることは殆ど無く、北の街ではもう冬支度にかかっている筈であるが此処武慶には必要が無い。

年の暮れが近付いて新年を迎える準備に加え、今年の武慶は例年とは違っていた。

「総帥の古希の祝いは去年だったか？ いや、一昨年か……？」

「そうだ。一昨年だな」

「今回は前よりも多くの人が来るんだろうなあ」

「そりゃそうだ。なんてったって総帥が真武剣派^{しんぶけんは}を興して四十年という節目の祝いだ。正月過ぎてすぐだが、来ぬわけにはいくまい？」

街の茶館で数人の客が話している。中で一番年長らしい老人が口を開いた。

「もう四十年か……。陸総帥^{りく}の直弟子はそう多くは無いが、筆頭^{せんとう}の千雲殿^{せんうん}にはもう孫弟子が出来たらしいではないか？ 正式な内弟子だけでも相当な数だ。まさかここまでなるとはな」

「また爺さんの昔話か。若い頃総帥とやりあったってんだろ？ よく生きてられたもんだ」

一人が言くと周りに笑いが起こる。

「儂が何故総帥と命のやりとりをする？ 儂と総帥は親しい間柄。昔からよく知っておるわ」

「じゃあ爺さん、もっと身形を気にした方が良くないか？ 総帥の

ご友人がそんなみすばらしい格好じゃ総帥もお嫌だろうて。ハハ」別の男が老人に話しかける。

「しかし陸総帥が真武剣派総帥を名乗ったのが三十と……二つか。普通考えられないよな。そんな若……若いうちに」

男は思わず若造と言ってしまうようなところをぐっと堪えた。

「フン、お前達は総帥の武芸を直に見たこと無からう？ 儂はある。相当な……いや、そんな程度ではないな。まあそれは当然として、総帥は類稀な処世術も身につけておられる。そして人を統率する才能だ。全てが見事に揃っていたからこそ今の真武剣派がある。今では都にまで進出して朝廷からの信頼も厚い。弟子入りしたいという都の若者も多いそうだ」

「ふーん。俺らみたいなモンは直接総帥に会った事はねえけど、よく知っているというあんたはなんで総帥に弟子入りしなかったんだ？ 今とは違う人生になったろうに」

男は老人を見ながらニヤついている。

「儂は……事情があったんだ！」

「ま、同世代の者からは妬まれたりもしたんだろぅなあ」

「わ、儂は総帥より年下だからな！」

「おいおい爺さん。俺達は分かっているよ。爺さんみたいに総帥の凄さを良く知ってる人間も居ただろうし、そうでない奴も居た筈だって話さ」

そう言いながら周りの男達の嘲笑ともとれる表情は変わらなかった。

「新年早々、この武慶まで来るのは難儀だろうなあ。各派のお偉方も気が重いんじゃないか？」

「そんな訳あるか？ 真武剣派とは懇ろにしておくに越したことはないだろうが。いや、そうじゃないな。陸総帥の御威光は今やこの国中に満ちていると言っても良い。きっと大勢この武慶に押しかけるぞ」

「なるほど。じゃあきつとここの主人も少しは恩恵に与れるって訳

か」

「そうだ。盛大な祝いになるだろう」

総帥陸皓が真武剣派総帥となつてから丁度四十年を迎えようとしており、この武慶では街を挙げて盛大な祝いが催される事になっている。この街の住人達はその殆どが何らかの形で真武剣派の隆盛の恩恵を受けて生活していた。四十年の歳月が経ち、真武剣派の興りを知る者はかなり少なくなっており、真武剣派という名称は総帥陸皓が用いる以前から存在していた事を知っている人間ももう数える程しか居ない。

二

街の中心部には古めかしくそれほど大きくは無い屋敷が建っている、表に掲げられた扁額には「真武観」しんぶかんと書かれている。建物が完成してすぐの頃はきつと色鮮やかな扁額であつたろうが、今は色も殆ど落ちて文字の部分に少し残っている程度であつた。修復することも十分可能な筈だがそうしないのは陸皓の意向だろうか。古来、観と呼ばれるのは古代から存在する民間信仰の宗教的な建造物であるが、何故この真武剣派の中心となつている建物をそう呼ぶのかはあまり知られていない。総帥陸皓の住まう屋敷だが、陸皓とその信仰を結びつけるものは何も無いと思われる。

そこから真西に行つてすぐの所にある、高弟、白千風はくせんふうの屋敷から一人の女弟子が表に出ようと門までやって来た時、背後から声を掛けられた。

「程青さん、程青さん！」

程青と呼ばれた娘は少しうんざりした面持ちでゆっくりと振り返る。

「小絹、何かしら？」

娘は後ろから小走りで追いかけて来た少女をじっと見据える。呉程青、白千風の弟子の中で唯一の女弟子である。真武剣派に女性の門弟は少なくは無いが、白千風の許に居る女弟子はこの娘一人である。追いかけて来た少女は李小絹。こちらは弟子ではなく、白千風の屋敷で給仕見習いとして来て間もない。

「あの、奥様に――」

「小絹、ちゃんとあなたの事は言っているから、待ってなさいな。あまりうるさく言うとは逆効果よ？　今は年明けにある祝賀の事で師父も師娘も頭が一杯よ。師娘の方はわりと好感触だったから、忘れてしまわれない程度に言っておくから。あなたも今は色々と仕事があるでしょう？　そっちを放り出して師娘の心証を悪くすれば、弟子入りなんて不可能よ」

「……はい。すみません」

李小絹が俯いたのを見て呉程青はにっこりと微笑んだ。

「小絹。一緒に剣の修行が出来るのを楽しみにしてるわ。師娘もいっつもっと女弟子をとるべきだって仰ってる。年明けの祝賀が一段落するまでの辛抱だから」

「はい」

李小絹は再び顔を上げて少しはにかみながら笑みを浮かべる。小さなえくぼが愛らしいこの少女は料理などの家事を学ぶよりも真武剣を身に付けたいと思っていた。

「お前達、如何した？」

二人が居るところへ門を入ってきたのは屋敷の主、白千風だった。

「あっ、師父。先程、師娘が探しておられました」

呉程青は急いで振り返り、早口で師父に告げる。

「そうか」

白千風は短く答えてから李小絹に目を向けたが、すぐに視線を前に戻して屋敷に入って行った。

「やはり、旦那様は怒っておられるのでしょうか……？」

李小絹は小さい声で呉程青に尋ねる。

「何を怒るといふの？ 弟子入りの話は多分師娘から伝わってると思うけど、怒る理由なんて何も無いじゃない」

呉程青は続ける。

「師娘さえ味方につければ、師父も従うわ。大丈夫よ」

そう言ってニヤリと笑うと李程青も小さく頷いた。

呉程青は師父である白千風を呼びに行くつもりだったがその師父は自ら帰ってきたので再び屋敷に戻り、李小絹も後について戻って行った。

「師妹、何かあったか？」

白千風は妻の郭斐林かくひりんを見つけ、声を掛ける。白千風と同様、陸皓の弟子であったが兄弟子である白千風の嫁となった。呉程青が師娘と呼ぶこの郭斐林も陸皓の直弟子の中では紅一点の末弟子である。少し皺が増えてきた事をいつも嘆いているが、凛々しい顔立ちに気性もさっぱりとして郭女侠かくじょきやうと呼ばれる事を好んでいた。

三

「兄さん、千雲師兄が都から戻られたそうね。もう会った？」

「……師妹、大師兄と呼べといつも言ってるだろう？ お前がそうでは弟子達も混乱する」

「ごめんなさい。だって長年そう呼んできたんだからもう癖みたいなものよ。でね、大師兄はすぐに師父の所へ来られたんだけど……」

「それが何かおかしいか？ 戻ってすぐに師父にお目通りするのは当然だろう」

郭斐林が千雲師兄と呼んだのは白千雲はくせんうんで今は陸皓りくこうの直弟子の筆頭であり、都である金陽きんようにおいた真武剣派の道場を二番目の弟子である丁常源ていじょうげんと共に任されている。二人の高弟を同じ所に置いている事

から外部の人間はいよいよ真武剣派は都進出を本格化させてきたと見ていた。

「ねえ、やはり師父の跡を継ぐのは千雲大師兄よねえ？」

「何だ？ 何が言いたい？」

白千風は怪訝な眼差しで妻の顔を見返した。直弟子の筆頭である白千雲が陸皓の跡を継ぐのは道理であり、他の者が口を挟む余地は無い。もし反対したならば総帥の座を欲しがっていると思われるが当然、まさか妻は白千雲が後継である事に今更不服だとも言うのかと疑いの眼差しを向けた。郭斐林は夫の考えを察して慌てて声が少し大きくなった。

「勿論それは当然なんだけど。その事じゃなくて、よ。ねえ、我が派で総帥のみに伝えられる絶技^{ぜつき}って聞いた事あるかしら？」

「何？」

「ちょっと聞いてしまったのよ。師父と大師兄が話してたのを」

郭斐林は白千風の表情を窺いながら言った。

「何だ？ 盗み聞きか？」

白千風は眉を顰めた。

「お前、師父達の話が聞こえる所に居たのならすでに師父も大師兄もお前に気付いている筈だぞ。何を聞いた？」

「はつきりとは聞こえなかったけど、何か新しい我が派の絶技を大師兄に授けるとかなんとか……大師兄によ？ もう孫弟子がいるくらいなのに」

「ふむ……聞いた事はないな。しかし師父の武芸、つまり我が派の武芸の出自は誰も知らん。弟子の分際でその事に言い及ぶのは許されない事だからな。知る必要も無い」

「まあ、師父が創始されたと聞いてるし私達はそれ以上何も知る必要は無いけど、久しぶりにちょっとびくりした話だったから」

白千風はずっと立ったままだったがようやく腰を下ろしたところに丁度、李小絹が茶を淹れて運んできた。まだ慣れずに挙動の一つ一つがぎこちない。白千風と郭斐林は話を中断して暫く黙って李小

絹に注目している。

「小絹、あなた、程青から幾らか我が派の剣について聞いた？」

郭斐林が急に声を掛けたので李小絹はびっくりして体を強張らせた。

「いつ、いえ、何も」

「そう？」

郭斐林はそれ以上何も言わない。実は李小絹は呉程青からいくつかの我が派の剣技の初歩について聞いていたが、これは絶対に秘密であり白千風と郭斐林に知れば弟子入りなど到底許してもらえぬだけでなく、呉程青も初歩の数手とはいえ同門の弟子にもならない者に教えたとなれば破門になりかねない。李小絹は努めて平静を装い、意外な質問だともいうような表情を作った。

「失礼致します」

李小絹は二人に向かって腰を折り、郭斐林は黙って頷いた。白千風は運ばれてきた茶を手にとって目を向けなかった。

「ねえ兄さん、陸大師……陸さんはご存知なんでしょうね？」

李小絹が退室するとすぐに郭斐林が再び口を開いた。

「師妹、その名はもう口にするな。弟子達にも聞かせてはならんぞ。陸……あれは我が派を裏切って破門となった身。もう何の縁も無い」

「分かってるわ。分かってるけど……師父が大師兄に授けるっていう技、あの人も知っているのかもね」

四

「……かもしれん」

ほんの少し考え込む様子を見せた白千風だったがすぐに顔を顰めながら手を振った。

「どうでもよい。千雲大師兄が師父の跡を継ぐとなれば、師父は全てをお授けになるだろう。その技というのも最上の物とは限らんぞ。

変な色気を見せてはならん」

「分かってるわよ。ちよつとどんなものかと思っただけ。兄さんは気にならないの？」

「ならん」

「あら、そう」

郭斐林が白千風の表情を窺う。白千風の方は真っ直ぐ見返して全く表情を変えなかった。

「それよりも」

白千風はずっと手に持っていた茶を置いて言う。

「お前が自分で言っていた祝賀の手配は済んでいるのか？ あと一月程だが、すぐだぞ」

「勿論分かってます。実家の父上と叔父様にもちゃんとやってあるから、抜かりないわ」

郭斐林の実家は北方の地方の有力者で様々な方面に顔が利く。郭斐林の手配というのは今までよりも盛大な祝いとする為により多くの各界の大物を呼ぶ事である。今までも二十年、三十年という節目に人を集めていたが、当然いつも正月明けてすぐの為に招待しても来られない者が多かった。今回の四十年というのは特別な数字ではないが、巷では今度の英雄好漢を集めての大会で陸皓が総帥の座を弟子白千雲に譲るのではないかと噂されていた。陸皓は高弟達にはその様な事を一言も漏らしてはいないが、とにかく今回の準備は念を入れるようにと命じていた。

「別に師兄達と争う気など更々無いが、我等は幸いにも常に師父のお傍に居る。我等が取り仕切るつもりで事に当たらねばな」

白千風は自分にも言い聞かせながら言い、郭斐林もしっかりと頷いた。

その夜遅くに、白千風の屋敷に白千雲が訪れ、陸皓に会った帰りだと告げた。

「大師兄、都はもう寒さが厳しかろう？」

白千風は家人に命じて酒を用意させる。

「ああそうだな。流石にまだ慣れん。郭師妹はどうした？」

「今ちよっと出ておってな。遅いしもう戻るだろう」

「そうか」

白千雲、白千風は実の兄弟である。共に陸皓の弟子となつてからは弟は兄を師兄としか呼ばなくなつたがそれ以外はとも親しく言葉交わす。白千風は細身で長身、兄の白千雲の方は同じく長身ではあつたががっしりとした体格で髭も常に綺麗に剃り、いつも厳しい顔つきで鋭い眼差しがどこか他人には近寄り難い。

白千風が注いだ酒杯を持ち、お互いに杯を顔まで挙げて視線を交わしてから口を付ける。白千雲はあつというまに飲み干してしまい、白千風は驚いた。

「大師兄がそんな勢いで酒を呷るなんて何とも珍しい。酒は都の方が断然旨いんだろうな？」

「別にやけ酒でも何でも無いぞ。実は武慶を出て都へ行つてからは酒は全く飲んではおらんのだ。だから都の酒が旨いか不味いかも知らぬ」

白千雲は僅かに口尻を持ち上げただけで笑つた様なそうでない様な表情を見せた。

「それは勿体無いな。何故だ？」

「……何故だろうな。最近はどうやく落ち着いたが、都と我が真武剣派は元々縁は無かつたからな。色々と気を回すことも少なくなかつた」

「丁師兄も居られる事だし、少しは休むくらい出来よう？」

「まあ、いろいろある」

白千雲は短くそう言つてまた注ぎ足された酒を口に運んだ。

暫く世間話等が続ける中で、都の田家に話が及び、白千風が尋ねた。

「陸蓉お嬢様は何か言つてきたか？ 田庭閑の事を……」

「頻繁に来るぞ。何か分かつたかとな。まあ当然だが、未だ皆目見

当もついていない。田庭甫殿は我等に全てお任せすると言っておられるが」

「全く、朱不尽しゆふじんとその一党は一体何をしておったんだ」

五

白千風は語気を強めたが、白千雲は淡々と答える。

「ヒヨウ局は荷を見ておったのだろう？ あれの事など二の次だ。状況を知らぬ者には何とも言えん。しかし大体、何故あれをヒヨウ局について行かせた？」

「あれは師父が急に……何故だろうな？」

先程話に出てきた田庭甫でんていほとは行方の判らなくなった田庭閑でんていかんの父、陸蓉りくようは陸皓の娘で田家でんけに嫁いだ田庭閑の母である。

「とりあえず今は何も判らない方が良いかもな。年明けの大会が終わるまでは……」

白千風が言々と白千雲も小さく相槌を打ってから椅子の背にもたれかかった。

「あら、大師兄、来てらしたのね」

屋敷に戻ってきた郭斐林が姿を見せた。

「姉妹、真武観では何故姿を見せなかった？ 儂が居るのは知っておったのだろう？」

白千雲は少し睨みつけるように郭斐林を見る。しかし本気で咎めている訳でもない。元々あまり笑顔を見せて話す事が無い事は郭斐林達もよく知っていた。

「だって、あれはとても入って行ける雰囲気じゃなかったわ。きっと私には分からない話でしょ？」

郭斐林はそう言って笑う。

「それにしても暫く聞いていたようだが」

「そうかしら？ あれから……どうしたかしら」

郭斐林は軽く誤魔化しながら白千風の隣に腰を下ろした。

「ねえ、大兄さん、あ……大兄さんでいいわよね？ そっちの方がとても言い易くて助かるわ」

郭斐林は白千雲の顔を覗き込む。白千雲は初めて口元を緩めて微笑んだ。

「フ……かまわん」

「我等だけの時は構わんが、他では言うなよ」

白千風が言う。

「分かってるわよ。大兄さん、都はどう？ 楽しい？」

「お前、何を子供みたいな事を言ってるんだ。大師兄は遊びに行ってるんじゃない」

「ねえ、こうしてると昔みたいじゃない？ 久しくこうやって三人で話す事なんて無かったでしょ。大兄さんは忙しくしてるし、正式に総帥になったら益々話せなくなるわ」

白千雲が顔を上げて郭斐林をじっと見た。

「姉妹、何故そんな事を言うのか分からんが、我等の師父は引退どころか古希を過ぎて益々意気盛んだ。その辺の事は噂に過ぎない。そなたがそのように軽々しく口にする様では困るな。お前達、師父の……我等真武剣派の目指す処はまだ先にある。これからも我等は師父に付き従ってゆくのだ」

神妙な面持ちで語る白千雲の言葉に、白千風と郭斐林は思わず背筋を伸ばした。

「お前達はずっと師父の傍に居るのだからな。これから忙しくなるかも知れんな」

「……大兄さん、何かあるの？」

「心配するな」

少し不安げな声を出した郭斐林に、白千雲が言う。

「今はまだ言える事は無いが、どうやら我が派の外でも色々動きが出ている様だ」

「北辰ほくしんだな」

白千風がすかさず言う。郭斐林は白千風の方を向いた。

「どうして？ 北辰は総監が死んで対立が無くなったんでしょう？ 動くと言ったって、もう引っ張る人間なんて居ないじゃないの。一体何を……」

白千風は答えずに白千雲を見る。

「何もしないならそれで良い。ただ、変化するならどのようなに変化するのか注視せねばならん。……まあこれは言っておこう。今、千せ河んが幫ぼうと北辰に昔のような繋がりはない。しかも先のヒョウ局襲撃以来、完全に決別する可能性も十分にある。師父は、千河幫に注目されている」

白千風と郭斐林は顔を見合わせた。

六

冷たい風が吹く中、李小絹はくすんだ深緑の包みを抱えて隅にある納屋までやってくると、微かに自分の名を呼ぶ声を聞いて足を止めた。

「もう、何？ 何処に居るのよ？」

首を回して庭の木々や石の陰や屋敷を囲む塀の上までも目を凝らす。何も変わった様子も無いが何度も辺りを見回した。

「遊んでいる暇は無いの。私に見つかからないからいい気になってるんでしょけど、何が面白いの？ またこの間みたいに此処のお弟子さん達にすぐ見つかってつまみ出されるわよ？」

李小絹はそう言うと言の納屋に入り、戸を完全に閉めてしまった。その納屋の周辺は静まりかえっていたが、暫くするとその納屋の屋根から一人の少年が戸口の丁度前に飛び降りてきた。うまく着地出来ずに少しよろめいて地面に手を付いたが、かろうじて土の上を転がらずに済んだ。少年はすぐに李小絹が閉めた戸にもたれ掛かるよ

うに身を寄せて、中の物音を確かめるように耳を付けている。そうしてまた暫くじっとしてから辺りを見回してその場に腰を下ろした。もう一度少年は首を伸ばして辺りの様子を窺ってから、懷から古ぼけた紙の束を取り出してそっと表面を撫でてから膝の上で揃え、黙って眺めている。後ろの納屋に入った李小絹はまだ中で荷を動かしているのか時折ガタガタと音を立てていて出て来ない。少年は膝を抱えてじっと待っていた。

「……今日は何？」

持っていた包みは中に片付けたのか、納屋から出てきた李小絹は手ぶらで扉の前に立ち、少年もすぐに立ち上がった。李小絹の白い頬には薄っすらと埃の跡が付いており、少年は笑みを浮かべたが黙ったままで自分の頬を指差し頬が汚れている事を伝え、李小絹はさっと手を上げてまるで顔を洗うような仕草で自分の両の頬を撫でる。すると少年はまた笑って頷いた。

「何よ。何か言いなさいよ」

「これさ。これを君にあげようと思って」

少年はここで初めて口を開く。その瞬間、李小絹が少年の着物の袖を掴んで引っ張った。

「こっち！」

李小絹が屋敷から隠れる様に納屋の後ろの方に向かって走り出したので少年も急いで付いて行く。

「どうしたの？」

「今、旦那様が表に出て行ったわ。見つかったら困るのよ。特に今は」

「どうして今は特に、なの？」

「あなたには関係の無いことよ。で、それが何なの？」

李小絹は少年の手にある古ぼけた紙の束に目を遣った。

「これ、きつと凄い物だよ」

少年は李小絹の顔と手元を交互に見遣りながら紙を見せる。何や

ら古い字体の小さな文字がびっしりと書かれている。元はちゃんと綴じられた冊子だった様だが今では四方の端は皆ぼろぼろで文字が失われている処もあった。

「……読めないじゃない。何の本なの？」

李小絹は全く興味が無いわけではなく、この古めかしい謎の文章に引き込まれていくように目で追っていく。

「読めるところが何処にも無いじゃない……何よこれ！」

何枚かめくっていったところで急に李小絹が顔を上げて少年を睨みつけた。

「こんなの私に見せるなんて！」

李小絹が紙の束を少年に付き返す。

「ちよっと待って！　これが何について書かれた本なのか分かったのかい？」

少年は乱暴に付き返された紙を落とさないように丁寧に揃える。

「フン！　知りたくも無いわ。あなたはこれが楽しいんでしょね！　　こんな……女の人の裸の絵を大事そうに抱えて、なんて人なの！」

七

「だから！　ちよっと説明させてよ。これは、武芸について書かれた古い書物なんだ！」

「武芸の本にどうしてそんな絵があるのよ！」

「それは……ほら、気功法とかあるだろ？　全身の気の流れを説明したり……とかじゃないかな？」

少年は必死に説明しようとするがどうやら自分も良く解っていないかった。何通りかの姿勢をとった裸の人物像に無数の点が付けてあり、その幾つかが線で結ばれている。そしてその描かれている人物は皆、女性である。

「ほら、この文字、これは東涼^{とうりょう}、全然そんな風に読めないけど、そう読むらしいんだ。東涼^{とうりょう}といえば東涼黄龍^{おうりゅう}だろ？ 東涼の黄龍門はその始祖も女性で、代々の掌門も女性、弟子も皆女性だよ。そこに伝わる物ならこの絵だって女性なのは当たり前さ。男の絵だったらその方がおかしいよ」

「私は何も知らないと思ってるの？ 東涼の始祖様は確かに女性で、弟子も皆そうだったって聞いてるけど、伝わってる武芸は西涼黄龍^{せいりょう}、つまり安県^{あんけん}の黄龍門と変わらないでしょ？ それにもう数十年前に途絶えて今は無い筈だわ。誰が書いた物が解らないの？」

女性の裸の絵という点については納得したのか何も言わずに李小絹は再び少年の手から紙を取る。

李小絹は実際に武芸を教わった事は無いが何時の頃からか興味を持ち始め、人から聞いた話ばかりだが武林の門派や人物、その武芸の特徴等をまるでよく見知っているかの様にいつも少年に話していた。

「本物なら」

少年はじつと李小絹を見つめた。

「東涼黄龍門の始祖、洪淑華^{こうしゅくか}ご先輩の筈さ」

「ハッ、よくその名前知ってたわね。誰かに教えてもらったの？」

大体、これが本当に本物ならあなたが今手にしている事自体在り得ないわよ。何処から持ってきたの？」

「僕のお爺さんの家の蔵だよ」

「……あなたのお爺様と黄龍門に接点はある？」

「聞いた事無いけど」

「まあいいわ。本物だと思ってるんならちゃんと元に戻して嚴重に保管するのね。知れ渡ったらすぐにでもあなたのお爺様の屋敷は襲われるわ。あなたも無事に生きていられるといいけど」

李小絹はそう言って眺めていた紙の束を少年に返し、くるっと踵を返した。

「ねえ、興味ないの？」

「読めないじゃない。誰かに聞けるとでも？ 私ね、もうじき真武剣派の弟子になるの。そんなの読んでたら叱られるわ」

「じゃあ、何とか読める様に直して、また見せるよ」

「だから、要らないの。私忙しいのよ。じゃあね。ちゃんと見つからないように出るのよ」

その後、李小絹は一度も振り返らずに屋敷へと戻っていった。少年はその後姿を口を空けたまましばらく見つめていたが、急に我に帰ってまた紙の束を懷に入れ、辺りを見回して近くの塀をよじ登った。

「小絹」

屋敷に戻った李小絹は急に背後から声を掛けられた。振り返ると郭斐林が立っている。

「あ、奥様」

「小絹、来客だったのかしら？」

「え？」

郭斐林はどこからか李小絹と少年が話しているのを見ていたのだろうか。李小絹は焦った。

「えっ、あの……」

「あの子、何度も来ているようだけど――」

「申し訳ありません！ もう来ない様に言っておきますから！」

「誰も来るなんて言わないわ」

郭斐林は笑う。

「ただ、一度もちゃんと門から入って来た事は無いようね。次来たら正面から普通に入って来るように言っておきなさいね。その内、うちの誰かが捕まえて役人に突き出しかねないわ」

年が明けて武慶の街も新年を祝う人々で賑わっている。しかし、この街は昔から都や他の比較的大きな街と比べると地味な印象を受ける。行き交う人々の装いはいつもより華やいでいて賑わっているのだが、他所ではよく見られる過剰に騒ぎ立てる者や喧嘩などの騒動が全く起きない。武慶は決して小さい街ではない。どこかで酒でも飲んで周りの人間に絡む者が居てもおかしくないのだが、まず見つからなかった。

代わりに何処へ行っても見るのが、真武剣派の門弟達である。街中を巡回するのだ。本来ならそれらは役人の役目であろうが、彼らは真武剣派の人間を見ればすぐに引き上げてしまい、影の薄い存在になっている。事実、真武剣派の者達の方が腕が立ち荒事にも慣れており、何より庶民である事から武慶の人々から親しみと共に絶大な信頼を得ていた。

街の中心から外れた所にある少し大きな料理屋で、急に男の怒鳴り声が響く。外は大勢の人間が行き交い騒がしかったが、その男の声には重厚な気が満ち、通りを行く人々の殆どがその料理屋の方へ顔を向けた。その時、人込みの中の二人がサッと顔を見合わせて頷き合うと、声のした店に向かって足早に歩き出す。人々の間を縫うように進む二人の体裁きに誰も特に注目はしなかったが、見る者が見れば明らかに素人のそれではない。この二人も真武剣派の門弟であつた。

二人が料理店に入るとすぐに給仕の女がやってきた。

「何かあつたか？」

「なんだかうるさい客が来ているようで……」

「うるさい？ 酔っ払いか？」

「さあ……？」

はつきりしない女の物言いに少々うんざりしながら二人の男は声のした二階へ上っていく。

「あつ、孔様」

二階に居た店の者が上がってきた二人の真武剣派の弟子を見つけ、すぐに駆け寄る。孔と呼ばれた男は二階の全体をサッと見渡すと、一人の客の男と目が合った。一人だけ立ち上がってこちらを睨むように見ている。粗末な着物を纏っているようだが、眼光は鋭い。黒々とした髭が顔を覆った中年の男である。

（この御仁か……先程の声は）

「何があった？」

孔は自分に擦り寄る様に立っている給仕の男に訊ねると、男は口を尖らせて、立っている客の男の方へあごを突き出した。

「あの客、あの席の横の二人も一緒なんですがね、やたら多くの料理を注文するもんで勘定は大丈夫かと言ったんですよ。揃いも揃って皆あの身形ですからね。でも別に私はちよつと軽く訊いたんですよ。なのにあの男、急に怒り出して……」

孔が客の男とその周辺をもう一度見ると、確かに同じように粗末な身形の男が二人。しかしその者達は立っている男の怒りとは何の関係も無いといったふうで黙々と食事を勧めていた。

「で？あると言ってるんだな？」

「ええ、まあ」

「なら、とりあえず信用するしかないな」

「おい、何をゴチャゴチャ言っておる？」

客の男が再び大声を出す。

「はいはい、分かりましたから、お静かにお願いしますよ」

給仕の男が面倒臭そうな声で言うと、

「何だその態度は！我等は客だぞ！ しかも金も持っておる！」

「あーそれは申し訳ありません」

（金を持っているのは当り前ではないか。金が無かったら客とは言わんわ！）

「おい中大、ちゅうだい金を見せてやれ」

客の男が横に座っていた男に声を掛けた。中大と呼ばれた男は料理を頼張ったまま顔の前で手を振っている。どうやら「無い」と言

っている様だ。次いでその男は更に隣の男を指差した。

九

「小^{しょう}、金を出せ」

立っている男は中大の隣の男に声を掛ける。

「小と呼ぶな！何度言えば分かる？」

その男は三人の中で一番体が大きく、確かに小と呼ぶのは変に思われた。

「何を馬鹿な事を。お前は生まれた時から小だ。親父がそう名付けたのだからな。金を出せ」

「親父が俺に付けた名は小大^{しょうだい}だろうが！何故、大を省く？フン、小大だって気に入らないが仕方ない。せめて大を付けろ！」

小大という男は口に飯を入れたまま捲し立てる。

「大は儂だ。一番上の儂が大でこいつが中、お前が小、こんな分かりやすく道理に適った名があるか？」

「フン、何が道理だ」

「いいから金を出せ。奴に金を見せねばならん」

奴というのは店の給仕の男の事だろう。立っている大と言うらしい男は給仕を指差している。

「金なんかあるか」

小大は即座にそう吐き捨てて残っていた飯を掻き込んだ。

「金が無いだと？」

小大という男の言葉を聞いて、給仕の男が再び早足で男達の席へ戻る。目を大きく見開いて男達を睨み付けている。

「あんたらどういう見だ！？金も無いのにこんなに食いやがつ

て！おい！食うな！」

給仕の男は黙々と食べ続けている二人の男を怒鳴りつける。つい先程まではまだ少しばかり丁寧な物言いだったが、本当に男達が金

を持つていないとなればもう客では無い。しかし男達は二人揃ってチラッと視線を上げて給仕の男を見ただけでまた食事を続ける。

「おい！ 聞こえないのか！？」

今度は男達がそれぞれ手にしている腕を奪いにかかる。すると男達は腕を持った手をさっと引っ込めて立ち上がり、給仕に背を向けて食べ続けている。

「こ、この野郎！」

ついに給仕の男は大声を上げて肩に掛けていた手巾を床に叩き付けると真ん中の男、中大に飛び掛る。すると隣に居る大という男の太い腕が伸びてきて給仕の男は胸倉を掴まれてあつという間に吊り上げられてしまった。

「やめろ！」

真武剣派の孔が飛び出し大の手首を掴む。手を離そうと力を込めるが大の腕が真っ直ぐ前に突き出されたままびくともしないのに驚いた。

「御免」

孔が残っている左の手で大の穴道を突かんと素早く伸ばすと、驚いた事に大は同じく空いていた左腕を後ろ手に回して孔が伸ばした腕を容易く掴んでしまった。

「フン、そんな小細工は通用せんわ」

「くそっ離しやがれ！」

給仕の男が手足をバタつかせて暴れるので大は給仕の男の胸倉を掴んだ腕を、孔に掴まれているにも関わらず更に持ち上げて給仕の男を放り投げる。給仕の男は大きな音を立てて少し先の床を転がった。孔は掴まれていた左腕を振りほどいて給仕の男の転がった方へ跳躍して下がる。

「あなた方はその食事代をどうされるおつもりだ？ 金が払えないのならばあなた方を役人に引き渡さねばならん」

「フン、本当に儂を捕まえられると「今でも」思っているのか？」

大は立ったまま孔に向かって言い、料理の切れ端を少し摘んで口

に運んだ。

転がってきた給仕の男の様子を見ていた孔の連れの男が立ち上がり孔に身を寄せた。

「どうしますか？」

孔は答えずにじっと大という男を見ていた。

「私は真武剣派の門弟、孔秦こうしんと申す。あなた方は何処から参られた？ 名をお聞かせ願いたい」

十

「おう、真武剣派か。儂等はあるたらの主の為に遥々、清稜山から参ったのだ。儂は武大ぶだい。こっちは中で、そっちは――」

「小大だ！ 俺は武小大だぞ！」

武小大は「小」と呼ばれる前に叫ぶように名乗る。それを聞いてずっと腕を抱えて口を動かしていた中も顔を上げた。

「こっちが小大でいくなら、儂だけ、「中」ってのはおかしい。儂の名は中大。武中大ぶちゅうだいだ」

「どっちでも同じであろうが！ ごちゃごちゃ言うな！」

「いいや、違う！ 親父が付けたのは小大だ！ 俺は小と大、中兄貴は中と大。大兄貴は大だけだ」

「何だと？ 一番上の儂が一番少ないなんて道理があるか！」

何の量を比べているのかよく分からないが、この武の兄弟はそろって五十にはなろうかという歳格好だが孔秦達をおいて子供の様な言い争いをしている。孔秦と弟子であろう男は呆氣にとられてしばらく男達を眺めていた。

「それでだ」

武大が孔秦の方へ向き直る。

「儂等は客だぞ？ 清稜山しんりょうざんの木の爺もくさんを連れてここまで来たのだ。お前達真武剣派が呼んだんだからな。金が無いなんて事があるか？」

孔秦は驚いて目を見開いた。

「木……？ 清稜派の木道長、木傀風様……？」

「ああそうだ。お主も知らん筈は無かろう」

「では、あなた方は清稜派の？」

「あー、こいつらは爺さんの弟子だ。儂は違うがな」

武大は武中大達を指差す。

「師父を爺さんとか言うな！」

「何？ あれが爺さんで無ければこの世に爺さんなんて一人もおらん。男の年寄り皆、爺さんと言うのだ。農民だろうが皇帝だろうが例外は無い。それが道理——」

「あーもう分かった！ 好きにしろ！」

武小大はがたがたと手荒に椅子を引き寄せて腰を下ろして目の前の料理をつまむ。

「武大殿」

孔秦は口調を改め武大に話しかける。

「して、木傀風道長はどちらに？ 此度の我が派の祝賀にお越し下されたのでしょうか？」

「おう、そうだ。それ以外に此処に何の用がある？」

「おお、そうでございましたか。ならば皆様は我が真武剣派の大事なお客様。此処での皆様のお食事代はこちらにお任せくだされ」

「孔師兄」

孔秦の傍に居たもう一人の男が孔秦に小声で話しかける。

「いいんですか？ 確かめたほうが……。木道長らしきお人は居ないようですけど。それに木道長のお弟子さんに武という名は聞いたことが……」

孔秦は僅かに頷いてみせただけで声は出さなかった。

「皆さん、木道長がこの武慶に入られたのならすぐに我が太師父にお伝えして真武観にご案内しなければなりません。太師父はさぞお喜びになられましょう。今、木道長はどちらに居られるのでしょうか？」

武大は武中大の方に首を捻じ曲げる。

「おい、お前達の師匠はまだか？」

「多分もう少し掛かるだろう。嫂上と一緒にだからその内来るさ」

「全くお前達弟子が付き添うのが道理だろうが。儂の女房は爺さんの世話係ではないわ」

孔秦は内心イライラしてきている。

（この男はどうしてはつきりと質問に答える事が出来んのだ？　しかし……木道長はまだ来ないという事ならどうしたものか……本当に清稜の者達なのか判断出来んな。あの木道長の弟子に武という者が居るというのも聞かないが）

「まあとにかく暫くすれば爺さんは来る。それまで儂等は待っているのだ。金は来たら払う」

十一

「来なかったらどうする？　払わないとかいうんじゃないだろうな？」

先程、武大に放り投げられて床に転がっていた店の給仕の男が孔秦の背中から武大に向かって言う。

「来るに決まっておる。儂等は少し先に来て腹ごしらえをしておるだけで、清稜からずっと一緒に此処まで来たのだからな」

武大はそう言うと言を下ろし、武中大、武小大の二人も再び腰を据えて食事を続ける。

「とりあえず我が派の客を名乗る以上、我等が相手をせねばならん。そなたはもう仕事に戻ってくれ。若し金が無いという事になればとりあえず私が払おう」

孔秦は給仕の男に言う。

「まあ……それなら結構ですけどね……」

給仕の男はそう答えると、もう一度武大達を見遣ってから下がっ

ていった。

「武大殿」

孔秦が声を掛ける。

「まだ何かあるか？」

「木道長はこの店に来られる事になっているのですか？」

「んん？」

武大は顔を上げて孔秦を見つめた後、すぐ横の武中大の方を向いた。

「おい、どうだ？」

「師父は儂等が此処に居る事は知らん」

武中大が言うとすぐに武小大が口を開く。

「知る訳ないだろう。俺達は先に来て適当に選んだこの店に入ったんだからな」

再び武大が孔秦の方に向き直る。

「そういうことらしいな」

孔秦はこの者達がどういうつもりなのかさっぱり理解出来ない。

（ではどこから金をひねり出すつもりだ？ 自分達の師父を差し置いて

金も持たずに飯を食って、しかも師父の居場所も分からんとは……）

「まあ心配はいらん。おい中、もう終わりか？ 爺さんを探して来い」

武大が横で食事を終えて腹をさすっている武中大に言う。

「まだ食べ終えたばかりだ。少し休ませてくれ」

「そうか」

（そうか、じゃないだろう！ さっさと探しに行ってくれ！）

孔秦の険しい表情に気付いた武小大が、

「大丈夫だって。逃げやしない。って、あんたらこの店の者じゃないんだから俺達に付き合う必要ないだろう？ 行ってもらって構わないぜ。真武観での大会にはちゃんと行くさ。俺はそれがいつか知らないがな」

そう言つて笑っている。

「ま、そういう訳にもいくまい。探しに行くでしょう」

武中大がおもむろに立ち上がり、孔秦の元に歩み寄り、そして振り返る。

「ちゃんと此処に居てくれよ。でないと本当に役所にしょつ引かれるからな」

孔秦は、一人階下へと降りて行く武中大の背を眺めながら溜息をつき、一先ず武中大に続いて階下へ戻った。

武中大が店を出た後、孔秦達は茶をすすりながら待っていた。

「孔師兄、我々だけで大丈夫でしょうか？ 本当に木道長が来られれば良いですが、あの男達は何だか油断なりません」

「ではどうする？ 今は待つしかない。木道長が来ておられるかも知れんのに放つて帰る訳にもいかんしな。師父や大師父に知れたら大変だ」

「確か屋敷には鄭師兄達が戻つて来ていた筈。ちよつと行つて呼んでみましょうか？ 何があるか分からない」

孔秦の弟弟子は不安で堪らない様だ。あの武大という男が何かの拍子に暴れ出しでもすれば手が付けられないかもしれない。まともな武芸を見せた訳ではなく、ただ怪力であるという事しか今は判らないが、兄弟子と自分だけでは分が悪いとでも思っているらしい。

十二

「大丈夫だとは思ふが……まあそうだな。呼んできてもらおうか。しかし大勢連れて来るなよ」

「はい。ではすぐ戻りますから」

孔秦の弟弟子はそういうとすぐに店を飛び出して行つた。外はもう陽が傾いて薄暗くなり始めている。ようやく行き交う人々の姿も減り始めていたが、店の中は逆に客が増え始めている。

暫くして、出て行つた武中大が戻るより先に、孔秦の兄弟弟子達が店にやって来た。

「孔師兄、木道長が来られたのか？」

先頭に立って入ってきたのは鄭ていという、これもまた孔秦の弟弟子だった。

「そういう事らしいが、まだ会っておらん」

「もう陽が暮れ始めてる。本当に来ているなら真武観に行くんじゃないのか？ 太師父と昔から親しい方なんだから遠慮する事も無いだろうしな」

「では、上に居る男達は何だろうな？」

「ちよつと見てくるか」

鄭が階段の方へ向かおうとすると孔秦はすぐに行く手を遮る。

「やめておけ。とりあえず仲間の一人が木道長を連れて来ると言つて出ているところだ」

「信じられんなあ。木道長がこんな……この店に来るだろうか？」

それに、武という弟子なんて……木道長の弟子といえば、董とうの御兄弟お二方だけというのは有名な話じゃないか」

「それはそうだが、その後新たに弟子をとつたのかもしれないな。

新たな弟子にしては歳が大きすぎる気もするが――」

清稜派は数ある武林門派の中でも歴史は古く、およそ五百年の昔、時の皇帝の一族であった者が理由は分からないが都から西方に下り、清稜山に住み着いたのが始まりとされる。当時の事は何故か殆ど分かかっておらず、その者から数えて三代か四代後の頃には清稜派という名の一派が成立していたと考えられている。現在、清稜山には清稜派開祖の像と言われる古い木像が祭られているが、その像に名前はない。

その謎多き開祖が残したと伝えられている数々の品が清稜山の宝物庫に収められている。それらの中にはとても豪華な、まさに宝物と言える宝石がちりばめられた装飾品等が数多くあり、確かに持ち

主がその辺の庶民では無かった事が窺えるが、それらの他に、これこそ清稜派の最も大切な宝物と言うべき、開祖の手であろうと思われる膨大な数の書があった。それらは富を持つ者が集めるような古の大詩人の書や遠き神代の古文書とかいう類の物ではなく、唯一人の手によって編み上げられた清稜派武芸書九十二巻である。

そこに書かれた武芸の真髓については門外不出であるが、この九十二巻の書には武林のみならず広く江湖に知れ渡る古い話がある。

まだ清稜派があまり知られていない時代、かつての皇族が残した膨大な書が存在することを知った皇帝が都へ運ぶように命じた。清稜派の長であった韋親いしんという者が命令に従い書を携えて都に上りその全てを皇帝に見せるが、あまりに多くの量であった為、文官数名にその内容を確かめるように命じた。

後日、皇帝は文官達に内容について訊ねるが、文官達は返答に困っている様ではつきりしない。皇帝が改めて問いたですと、答えは「よく解らない」というものだった。文官達は選り抜かれた秀才揃いでその者達が「よく解らない」というのは、どうやら文字は誤りが多く、文のつくりは稚拙で何について書いているのかが理解できず、しかもそれが最初から最後まで全九十二巻続くというのだ。文官達は皇帝の先祖が遺した物を悪く言う訳にもいかずに困り果てる。

そこで皇帝は自ら目を通し始めたが、最初の一卷も読み終える事はなかった。選りすぐりの文官が解らぬ物は誰にも解らない。皇帝は韋親に、内容を理解しているのかと問う。韋親は答える。

「この書には武芸が記されておりす」

十三

皇帝が文官達に尋ねると、たしかにそのようにも思える記述はあった、と言い、しかしとても理解は出来ないと付け加えた。皇帝は、どのようなものであるか、と再び問うと韋親は答える。

「もうすでにこの書の武芸は私の体に宿っております。これらの書は我が派の至宝であります、再び読む必要はありません」

皇帝はその武芸を見るために配下の者に韋親の相手になる適当な人間を見繕うよう命じ、すぐに立ち合いの場が設けられる。韋親の相手は皇帝の身辺の警備にあたる兵士であった。その兵士はそれなりの剣技を身に付けてはいたものの、韋親に対して全く歯が立たなかった。韋親は謁見の間に入る為に一切武器の類は身に付けておらず、兵士の鋭利な宝剣に対し自分の持参した巻物の中から一枚の細い木片を抜き取って、それを剣に見立てて清稜派の武芸を披露する。当時はまだ細い竹片や木片を紐を使って編んだ物に文字を書く巻物が殆どであり、清稜派に伝わるその巻物も同様である。韋親が手にした木片にも文字が書かれていた。韋親はその頼りなげな細い木片を使って兵士の宝剣を払いながら動き回り、時折兵士の体に木片を当てる。その時に「ぺち」と何とも拍子抜けする様な音が鳴る。暫くその様な状態が続き、兵士の剣もかわされ続けるだけでこの先永遠に続くように思える。皇帝は二人に止めるよう命じた。確かに韋親は兵士の剣を全く危なげなく避けながら自分の手の木片は確実に兵士に届いている。兵士より強いという訳だが周りの者からはどう見ても韋親の動きは武芸というより踊り、しかも子供の拙いお遊戯とでも言った方が良さそうなものだった。

皇帝はただ「変わっている」とだけ言い、後は黙り込んでしまう。韋親は皇帝に言う。

「全てこの巻物にあるとおりでございます。私は負けておりません」
韋親の妙な踊りのような動きと韋親の持参した九十二巻の書は確かに通じているように感じる。「よく分からないおかしなモノ」という共通点によって、である。

皇帝の興味はそこで潰えてしまったようで、巻物を持って清稜山に帰っても良いと韋親に告げる。韋親は何も言わずに膝を折って深々と頭を下げ、皇帝の前から辞去した。

韋親は九十二巻の書を持って帰っても良いと言われ、安堵する。

誰が何と言おうと清稜派の宝である。都に置く事になればきつと誰も理解出来ず、宮中の巨大な蔵の片隅に何百年と埋もれてしまうに違いなかった。役人の計らいでそれから数日都に留まってから、韋親は清稜山に向かつて発つ。

丁度その二日後、都で事件が起こった。近衛府このえふに属する武官の一人が宮中の金を横領し、配下数十騎を連れて都から脱走したのである。その武官は都から真っ直ぐ西へ向かったという。すぐに追っ手が差し向けられた。追手の騎馬隊は逃走した武官とその手勢を都の西方二百里程の処にある咸水かんすいという鄙ひなびた農村で発見する。咸水から程近い街の役人が村まで来ており、既に一人残らず縛り上げられていた。聞けばそのお尋ね者達は近くの街まで来ていたが一部の者が騒ぎを起こし暴れだして手が付けられずにいた処に、丁度凄腕の武芸者が村を通りかかって役人を助け、この咸水まで追いかけて捕まえたと言う。そう胸を張って報告するその役人はたった一人で、他には見物に集まっているこの村の住人しか居ない。

助勢してくれたその凄腕の武芸者とは誰かと訊ねると役人は、旅の途中の様で名乗らずに行ってしまったが、その武芸は素晴らしい、見た事も無いと興奮しながら言う。まるで舞うように敵の間を飛び回ると面白いように皆バタバタと倒れていき、どうやったのかは全く解らない。しかも腰には剣を下げていたにも関わらず使った得物は何に使うものか解らないが文字の書かれた細い木切れで、あれこそ最高の武芸の絶技に違いないと役人は言った。

十四

捕らえた者達を引き連れた騎馬隊は都に戻り、皇帝に報告する。皇帝は驚き、すぐに清稜派の韋親を呼び戻すように戻ったばかりの騎馬隊に命じた。木切れを持って踊りながら敵を倒すのが清稜派の武芸だと皇帝は得意気に言うのである。それから十数日後、再び韋

親は都へと戻された。

その後、少なくとも四年、韋親と九十二巻の書は清稜山には戻っていない。詳しい事は伝えられていないが、皇帝の命により武芸の指南役を務めたという。清稜派の武芸そのものを教える事は無かったと思われるが、この時韋親の許で学んだ者の中から後年名を上げる武芸者が何人か現れる。中でも偉才を發揮したのが王志劫おうしきやうという男で、後に武慶に真武派という剣術流派を開き、武名を轟かせた。

この真武派の剣術と清稜派の武芸には共通する部分が全く見られなかった為、王志劫が一から創始したものとされている。この真武派はおよそ百五十年前まで存在していたがその末期には分裂を繰り返して事実上消滅するが、詳しい状況は分かっていない。ちなみに現在、武慶を本拠とする真武剣派はこの真武派の武芸を受け継いだものであると総帥陸皓は公言している。かつての真武派の剣術は散逸してしまった筈で、その内容を現在知るものは他に見当たらない。陸皓が真武剣派を名乗った四十年前の当時はそれが本当かどうかが武林の最大の関心事であったが、検証する術も無く今となってはその事について口にするものは皆無となった。

清稜派の掌門しやうりやうは道長と呼ばれている。韋親の頃はどうかやらそういう呼び名は無かったようであるが、後の代で道教の思想が取り入れられたようである。しかし今の清稜派を見る限り宗教色はかなり薄い。現在の道長、木傀風は韋親から数えて十一代目となる。

木傀風は掌門となってから長く弟子を取らなかったが、清稜派は木傀風以降途絶えるのではないかと噂が江湖に広まり始めた頃、ようやく三人の兄弟を揃って正式な弟子とした。董全とうぜん、董仰とうやう、董奎とうきという、清稜山に程近い村に住んでいた兄弟で、木傀風はその兄弟が幼い頃から可愛がって面倒を見ていた。

三人は木傀風に常に付き従いよく武芸を修練して清稜派の武術を身に付けていき、江湖の噂は後継者は三人の誰になるのかというものに変わっていく。腕前は肉薄しており木傀風にとって悩ましい問

題であつたが、長男である董全が最も常に思慮深く落ち着いた性格であつたので今後清稜派をまとめるのに相応しいであろうと考えた。

木傀風は真武剣派の陸皓と同世代だが未だその腕と気概は衰えをみせず、後継について公言することは全く無かつたが、今から五年前に思いも寄らぬ事態が起こる。不意に弟子の董全が不明の病にかかり急逝してしまつたのである。心の中では後継者は董全と決めていた木傀風は落胆したが、まだ二人の優れた弟子が居る。今江湖では真武剣派が次の代に変わるのではないかと噂されているが清稜派については何も聞かれない。木傀風は相変わらず代を次に渡すという事に関しては全く口にしていなかった。

「……木道長がこの武慶に来られるのもこれが最後になるかもしれないな」

鄭は孔秦の横に座ってぽつりと言つた。

「清稜は今雪に閉ざされているだろうが、木道長は雪が降る前に発たれたのだろうか？」

「んん？ 多分そうだろう。あそこはとんでもなく雪が積もるらしいじゃないか。超えねばならん山が幾つもあるしな」

鄭という男は孔秦を「孔師兄」と呼んだが、それ以外は特に上下関係は意識しないようで友人と話しているような口振りだった。

十五

孔秦達はずっと店の入り口の近くで待っていたが、一向に武中大が戻ってくる気配は無く、二階に居る武大達も降りて来ない。外はもう暗く、店の入り口の辺りをうろついたり腰を下ろして茶を啜ったりしながら待っているが、さすがに孔秦も苛つき始めていた。

そんな時、一人の女が店の入り口に立つ。孔秦らは店に人が来るたびに一斉に顔を向けていたが、この女の時も同様に視線を送る。

急に幾つもの鋭い視線を浴びせられた女は驚いて後退った。

「あ、ああ、すいません。どうぞお入りください」

孔秦が慌てて入り口まで行って頭を下げる。

「はい」

女はまだ少し驚いた顔のままだったが、孔秦に丁寧にお辞儀を返した。

年の頃は三十半ばから四十程、若干ふくよかな丸みを帯びた身体つきがどこか可愛らしい風情の女である。つい見つめてしまった孔秦は再び頭を下げて入り口の脇に避けた。

女は少し頭を下げながら孔秦達の横を通って店に入ると辺りを見回している。どうやら客の誰かを探している様で、しばらく見渡してから二階にあがる階段を見つけて、上がっていった。鄭が孔秦の横に立つ。

「フフ、孔師兄、動揺してるな？」

「動揺？ 何故だ？」

「隠したって分かる。ああいうのが孔師兄の好みだろう？ 確かになんていうか、こう——」

「何を言ってるんだ。口を慎め」

孔秦は階段に背を向けて近くの席に腰を下ろした。

「ちょっと歳くってるみたいだが……そこがまた……なんとも……」

「鄭、下品だぞ。師父が聞いたら無事では居られんな」

鄭は肩をすくめて孔秦の傍に腰を下ろした。

「孔師兄」

最初に孔秦と共にこの店に来た弟子が孔秦の顔を見てから階段の方を向く。二階から武小大が降りて来るところで、孔秦達は一斉に立ち上がり注目した。

「何だ？ 増えてるな。みんな真武剣派のお仲間かい？」

武小大は階段を下りながら声を掛ける。

「まだ木道長はお見えになりませんが……」

孔秦が行く手を塞ぐ様に武小大の前に立つ。

「金なら来たぜ」

「は？」

「中大の兄貴は戻らねえよ。今頃、師父の所だろう。俺も行かないと怒られる。まだ大の兄貴が上に居る。金は払って行くから、あんたらももう帰って休んでくれ。ご苦労さん」

武小大はそう言って孔秦の横をするりと抜ける。

「おい！」

鄭がすかさず腕を伸ばして武小大の肩を掴む。

「おっ」

武小大は驚きの声を上げたが顔はおどけた風ですぐに鄭の腕を取りに行く。

「武殿！」

「お止めなさい！」

孔秦が発した声に鋭い女の声が被さった。

その女の声が辺りに響き渡ったので、孔秦達だけでなく他の店の客達までも目を見開いて声のした方へ顔を向けた。見れば先程店に来た女が階段を上がりきった所でこちらを見下ろしているが、自分で自分の声に驚いてしまったのか手で口元を押さえて眼を丸くしている。

「あー嫂さん、この方々が俺達の見張りの人達だ。宜しく頼むよ」

「分かったから早く行きなさい！」

「はいはい」

武小大は女と言葉を交わすと呆氣にとられている孔秦たちを置いてさっさと店を後にした。

十六

女は階段を下りて孔秦達の許へ真っ直ぐやって来る。

「あの……」

「うちの者達がご迷惑をおかけした様で、申し訳御座いません」
女は孔秦に向かって丁寧ていねいに頭を下げた。

「あの、あなたも清稜派の方ですか？」

孔秦の質問に女は顔を上げて目を見開いた。

「常施慧じょうしけいと申します。私は門人ではありませんが、長く清稜山で道長様にお仕えさせて頂いております。此度は木傀風様に同行して参りました」

「そうでしたか。して、木道長はどちらに……？」

「今はこの近くの宿でお休みでございます。流石に道中お疲れになられたようでございまして。あの……道長様が仰るには、お招き頂いた大会の日取りよりもかなり早くこの武慶に着いてしまったので、そちらにご迷惑をお掛けしないよう後日改めて陸総帥様にご挨拶に伺うとの事でした」

常施慧はゆっくりとした動作でお辞儀をする。その佇まいが何とも上品で孔秦はこちらがただ立っているだけで礼を損なっている様な気になってしまう。

「ああ、いや、そのようなお気遣いは要りませぬ」

孔秦は常施慧の屈めた肩に思わず手を伸ばしそうになって慌ててその手を引っ込めた。

「確かにまだ十日程ありますが、早過ぎるなどという事は……。逆に太師父……陸総帥は木道長のお早いご到着にお喜びになられましょう。遠慮は要りませぬ。あの、この近くの宿というのは、もしや……」

孔秦は僅かに眉根を寄せる。

「はい。ここへ来てすぐに宿を探しましたところ、あいにく何処も一杯の様でこの先の環龍かんりゅう……とかいう宿が空いておりましたので其処へ――」

孔秦と鄭が顔を見合わせる。

（孔師兄、あそこは不味いんじゃないか？ 木道長があんな宿に泊まってる事を知って放っておいたなんて太師父や師父に知れたら

ただでは済まんぞ？」

鄭が小声で孔秦に耳打ちする。

「あの、何か？」

「いや、あゝ是非にでも我が派の屋敷にお越し頂きたいのです。あの宿はその、あまり……」

「あら、道長様は氣に入られたご様子でしたけど。私達がこの武慶に入った事は内緒にして頂ければ皆様が咎められる事もございませんでしょう？ 道長様もその方が良いと仰られると思います」

「それは……？」

「いえ、何でもありません。どうかそのようななさって下さい。改めてご挨拶に伺います」

「はあ……」

孔秦はこれ以上言葉を返す事も出来ず、口を噤む。

丁度その時、二階から武大が降りてきた。丸い腹をさすりながらゆっくりとした動作で、酒も結構入っている様だ。

「お前らまだ居ったのか。もう問題は無いぞ。おい！ 金だ！ 払ってやるからさっさと来い！」

武大は料理を運んでいる給仕の男を見つけて大声で呼ぶ。給仕の男は顔を顰めて睨んでいたが、料理を客の所に運ぶと真っ直ぐ武大の許にやって来る。

「その態度は無いでしょう？ 皆さんにご迷惑をお掛けして。あなたは良いけれど道長様に恥をかかせる気なの？ あなたは黙って出るの。いい？」

常施慧がそう言うって武大に歩み寄るとその腕を取って店の入り口の方へ引っ張っていく。

「おう、わかったわかった。お前の言う通りにするぞ。儂は素直だろう？」

武大は上機嫌で笑いながらヨタヨタと歩く。

「ええ、そうね。いい子だからそこで待ってるのよ」

目の前を通り過ぎる常施慧と武大を眺めていた孔秦達はまたも呆気

にとられている。

十七

武大を店の外に押しやった常施慧は給仕の男の許に戻ると、武大達の飲み食いの代金を支払った。

「それでは、大変申し訳ございませんでした。失礼致します」

「あ、ああ、あの……お氣をつけて」

孔秦がそう答えると常施慧はまた丁寧^{ていねい}に頭を下げ、やや早足で店を出て行った。

「どうする？ 放っておくのか？」

鄭が孔秦に訊ねる。

「どうしようもない。お前達は何も知らなかった事にしろ。何も見していない。俺だけ知っていたという事にする。明日にでも俺が宿の様子を見て来よう」

木道長一行が入ったという環龍客棧^{かんりゆうきやくざん}という宿は武慶で最も程度の低い安宿で、街の者はあまりお近づきにはなりたくない輩の溜まり場の様な宿である。役人もあまり近寄らず、真武剣派の人間もあのような場所には近付く^{きつ}くな^なと言われている。木傀風ならばそんなごろつき共によって危害が加えられるなど考えられないが何が起こるか分からず、やはり放って置く訳にはいかない。

孔秦と弟子達はようやく店を出て真武剣派の屋敷に引き上げて行った。

真武剣派高弟、白千風の屋敷では真武剣派四十周年祝賀の英雄大会が迫り、準備の為に弟子達が慌しく動き回っている。武林各派の重鎮達や総帥陸皓と昔から誼を結んでいる者達には招待の書状が送られているが、それ以外にも多くの侠客達が武慶を訪れる事になる。武林の名手が一同に会する事など滅多にある事では無く、ただ興

味本位で各地から押しかける者達も少なくない。招待状が送られた名だたる者達が集まる宴席には上がれずとも、真武剣派への祝い金を幾らか出せばその会場である真武観には入る事が出来る。「何か」起きた時に名手達の手を見る事が出来るかもしれないという期待に胸を膨らませて押し寄せるのだ。しかしながら過去数回行われてきた英雄大会ではせいぜい集まった者達が酒に飲まれて小競り合いを起こす程度で、名手が剣を振るう様な出来事など一度も無かった。白千風達の役目は貴賓として招かれた各派の重鎮のもてなしは勿論、英雄大会が無事に行われる為のありとあらゆる手立てを講じる事である。分別をわきまえた名士達に混じって得体の知れない輩も少なからず訪れる英雄大会は、主催する側にとっては思いのほか骨の折れる行事であった。

好天が続き、武慶は真冬とは思えぬ陽気に包まれている。相変わらず人出の多い大通りから一筋入った道を、特に何処へと向かう訳でもなく男が散歩していた。大きな体躯を揺らし、まるで子供の様に何も持っていない手をぶらぶらと振って歩く中年の男、武大である。

（退屈だ。実に退屈な街だな。何処まで行っても似たような屋敷が並んでいるだけではないか。観るべき物も無さそうだ。酒も不味いし……あのまま都に留まって居れば良かったわい）

武大は大きな屋敷を囲む長い塀に挟まれた道を進む。武大の住んでいる清稜山と違う処は、この季節には清稜山では見られない木々の緑がこの南方の街武慶では街中で見られる事だ。しかし、どうやら武大はその緑に目を向けて何か感じ入ったりするという感覚は持ち合わせていなかった。

武大がぼんやりと前方に目を遣る。

「お？」

視線の先は右手の屋敷の長く続いた塀の上である。武大は足を止めて目を凝らす。丁度その時、塀の上に誰かが外からよじ登ったところで、その者は塀の屋根に這いつくばって辺りを見回した。咄嗟に武大は右手の塀に体を張り付かせるようにして隠れる。武大からその者まではまだ距離があり、塀の上からは見えなかった様でその者は体をもぞもぞと動かすとゆっくり塀の向こう側、屋敷の中へと降りてゆく。

「なんだ？ こんな真昼間に盗人か？」

武大は塀の上の人物が見えなくなったので足を早めて近付く。塀には朽ち掛けた短い丸太が立て掛けてある。先程越えていった者が足掛かりにしたのだろう。

（不審な者を追いかけるんだから儂が越えても文句はあるまい）

武大もその丸太に右足を掛けて勢い良く塀の上に登る。塀の屋根に伏せて中の様子を伺うが、人影は見えなかった。

武大は塀に張り付きながらずると体を屋敷の中へ下ろし、静かに地に降りる。数本の本が並んで立っており、それに身を隠しながら近くの納屋まで来る。

（あいつは何処へ行ったんだ？ 屋敷に入ったのか？ 此処の人間だったらまずいな。不審者は儂だけになってしまおうわい）

納屋の陰からそつと顔を覗かせると建物に囲まれた何も無い広場があり、三人の女が立っている。一人は中年の女であとの二人は若い。若い方の二人は木刀の様な物を持っているが、中年の女だけがきらきらと光る本物の宝剣を手にしていた。

（……何してるんだ？ 切りつけられたらかなわんな。やはり危うきに近寄らず——）

武大が顔を引っ込めて首を回して横を向くと、別の建物の陰に先程塀を越えて侵入した男がじつと三人の様子を窺っているのが見えた。良く見ればまだ幼い顔の少年である。

（んん？ 怪しい。怪しいわい）

そっと忍び足で後ろに下がり、少し大回りをしてじっと前を窺い見る少年の背後に近付く。ゆっくりと両腕を持ち上げると一気に少年に飛び掛かり、その腕と口元を思い切り押さえつけた。

「ん——！」

少年は体をよじらせて声を上げようとするが、武大の大きな掌が顔の殆どを覆い締め付けられている。

「おい、黙れ。声を出せば見つかるぞ。儂も見つかれば困る。お前が何者か知らんが、どうでもいい。大人しくするなら離してやる。いいな？」

少年は両目を思い切り見開いて武大を凝視し、まるでにらめっこの様な状態が暫く続く。

「おい、分かったのか？ 返事くらいしろ」

武大は少年の口元を押さえたまま言う。少年は答えようにも声が出せないで、頭を縦に動かした。

「お前、さっきあの塀を乗り越えたらう？ 此処に何の用だ？」

武大が訊ねるが少年は胸を押さえながら息を整えていて返事が遅れた。

「おい、何か言え！」

思わず武大が声を荒げる。言ってしまった後慌てて自分で口を押さえた。そっと少年が立っていた場所に行き、そっと前の広場を覗く。

「うわっ！」

武大はまたも声を出してしまう。広場に居た三人がそろってこちらを注視していたのだ。

「おい小僧逃げるぞ！ 見つけた！」

武大は少年の腕を引っ掴むと最初に上った塀に向かって走り出す。少年の方はといえば武大の動きに反応出来ずに殆ど引き摺られる格好になってしまっている。

「待ちなさい！」

武大達の後方から中年の女がまるで飛ぶように迫ってくる。しかも手には宝剣が光り、流石に武大の焦りが一気に高まった。

「待った！ 待ってくれ！」

武大は少年を離し、大きな両の掌を女に向けて思い切り叫んだ。

十九

「何だ！？ 何事だ！？」

「師娘！」

屋敷から次々に男達が飛び出してくる。男達が女の傍まで走り寄ると、女は腕を伸ばして制止するがその眼はじっと武大を睨みつけている。

「あっ！ あんた……」

男の一人が武大を見て驚いた。

「鄭兄貴、こいつ昨日の――」

「お前達、この者を知っているの？」

「あ、いや、知っているという程では……」

今度は武大が大声を出して男達に話しかける。

「お、おお、お前ら昨日の！ そうか此処はお前ら……そうか此処は真武剣派のお屋敷か。それならそうと言ってくれれば――」

「いつの間にやら此処に入ってきたあなたに、いつ言えば良かったのかしら？」

女は宝剣の切っ先を真っ直ぐ武大に向けて言う。

女は郭斐林でこの屋敷は真武剣派白千風の屋敷だった。昨日料理屋で顔を合わせた真武剣派の男達は白千風の弟子である。皆、郭斐林の傍に固まって武大と対峙している。先程広場で郭斐林と一緒に居たのは呉程青、李小絹で、二人も傍に来ているが李小絹は人の後ろに隠れて武大と少年を見ていなかった。

「儂はこれ、この小僧が此処の扉をよじ登るのを見かけてだな、盗

人かも知れんと思つて後を追つて入つただけだ。別に儂はこんな所に用は無いわい」

「わ、私は盗人じゃありません！」

武大に腕を掴まれたまましゃがみ込んでいた少年が叫ぶ様に郭斐林に言う。

「あなた、確か小絹の……」

「ん？ こいつは知つた奴なのか？ じゃあ儂の勘違いだな。失礼しよう」

武大が少年の腕を放して堀に向かう。

「待ちなさい！」

郭斐林が声を発すると同時に再び宝剣を突き出して武大の背に迫る。

「うわっ！」

武大は背に突きつけられた宝剣と真つ白な堀の壁に挟まれて身動きが出来なくなつてしまった。

「私達を見た途端に逃げ出したのは何故かしら？」

郭斐林が冷ややかに言う。

「あんたみたいな恐ろしい形相の女がそんなガラガラした剣を手に襲い掛かつて来れば誰でも逃げ出すに決まつてとうろが！」

「何ですって！？ ……志均しきん！ この者は何者なの！？」

「あ、あの、師娘、本当にあまり知らなくて……」

しどろもどろに鄭志均ていしきんが答える。

（鄭兄貴、全部言つた方がいんじゃないですか？）

他の弟子が鄭に耳打ちする。

（孔兄貴は何処行つた？）

（環龍ですよ。でもあいつが此処に居るんだからあつちにはきつと何も起こりやしませんよ）

「あなた達何を言つてるの？ 全く知らない訳では無い様ね。全部話しなさい！」

「し、師娘、そいつは……西、西の方から来た旅の者らしく、昨日、

西大路の料理屋でちょっとした揉め事があつたらしくて、最初、孔兄貴が――」

「秦？ 秦は何処なの？」

「あー今ちょっと出かけている様で……」

「おいお前ら！ 昨日は何事も無く解決しただろうが！ 儂が何をした？ はっきりとこのばあに言いやがれ！」

武大が壁にへばりついたまま鄭志均らに向かって叫んだ。

二十

「貴様っ！ 師娘を――」

鄭志均らが武大の言葉にカツとなって飛び掛ろうと地を蹴るより先に、郭斐林の宝剣が武大の首めがけて猛然と突き出されてまばゆい光を放ち、武大が獣の咆哮に似た大声を発した。するとその直後、何と武大の行く手を塞いでいた白い壁がガラガラと音を立てて崩れ、武大は表の通りに勢い良く転がり出た。あまりの出来事に武大を除いた誰もが呆然と崩れた壁に向かって眼を瞠っている。

「このアマ！ 儂を殺す気だったな！？ 真武剣派はお前みたいな物騒な奴ばかりか！？ こんな屋敷に用なぞあるものか！ 二度と来んわ！」

武大は大声で郭斐林に向かって言うと、ぶつぶつと悪態をつきながら通りを早足で歩いて行く。

鄭志均らがようやく我に帰って壁の穴に向かって走り出した。

「おい！ 待ちやがれ！」

「待ちなさい！ 追っては駄目！」

表に出かけた弟子達を郭斐林が制止する。郭斐林は何故か焦っている様子で、弟子達は訳が分からなかった。

「師娘、早くあいつを捕まえないと……あの、師娘？」

郭斐林は鄭志均の言葉も聞こえていないようで、じっと崩れた壁

を見つめたままだった。

暫く沈黙が続く。

「師娘のあの突きは今まで見たことはありません。こんな――」

鄭志均がわざと大袈裟に抑揚をつけた声で言いながら崩れた壁を触っている。

「ハハ……あいつ命拾いましたね」

他の弟子達も口々に言いながら壁の傍に集まって眺めている。

郭斐林は黙ったまま宝剣を腰の鞘に戻すとまだ地面に座り込んでいる少年に歩み寄った。

「あなた、名前は？」

「あの……劉、劉馳方りゅうちほうといいます」

「うちの小絹の友達なのね？」

「あ、あの……」

劉馳方と名乗った少年はちらっと李小絹を見遣るが、視線は合わなかった。

「師娘、一応こいつの懐を確かめておいた方がいいのでは？　こいつ、今までも何度か此処に忍び込んでましたから」

鄭志均が劉馳方のすぐ傍にしゃがみ込んで襟元に手を遣る。

「御免なさい！　僕、何も盗ったりしてません！」

「何も盗ってないのに何で謝るんだ？」

「ご、御免なさい……」

「いいわ。調べなさい。調べたら連れて来て。小絹、あなたも来るのよ。いいわね？」

「……はい」

郭斐林は他の弟子達の後ろに隠れている李小絹に言うと、消え入りそうな返事が返ってきた。

崩れた塀の修理の手筈が整うまで弟子を立たせる事にして郭斐林は屋敷の中へと戻って行った。

部屋には椅子に腰を下ろしたまま体を強張らせている李小絹と、

立ったまま窓の外をじっと見つめて考え込んでいる郭斐林だけで、暫く静かな時間が過ぎていく。李小絹は不安で堪らない。つい先程、郭斐林から真武剣派四十周年祝賀の英雄大会の後に正式に弟子とする旨を伝えられたばかりで、劉馳方のせいでそれが取り消されるかもしれないとそればかり考えている。郭斐林は夫の白千風の弟子ではなく自分の弟子にすると李小絹に伝えた。今まで郭斐林は弟子はとっておらず、李小絹が最初の弟子となる。李小絹はこの先も郭斐林が弟子をとっていけば自分が一番弟子となるという事まで思いを巡らせて一人悦に入っていたのだ。

李小絹も劉馳方もまだ子供で特に問題を起こした訳でも無くどうということも無いのだが、黙ったまま何も言わない郭斐林の様子を盗み見ながら李小絹の幼い心は恐れ戦いていた。

第五章 二

「流浪一天 第五章 二」

二十一

「師父」

部屋の扉が静かに開いて白千風が入ってきた。李小絹はすぐに立ち上がり、鄭志均は部屋に入って来た時からずっと立ったままだった。先程屋敷に忍び込んだ少年、劉馳方も連れて来られて李小絹の横で身を縮めている。

「師妹、あれは何だ？」

白千風は脇目も振らずに真っ直ぐ郭斐林の傍に立ち、座っている郭斐林を見下ろした。

「兄さん、……さっき変な男が入ってきて塀を壊して出て行ったわ」「何だと？ どういうことだ？ そいつは今何処に？」

「……さあ？ 別に物盗りとかそういう言う類では無さそうだった。もう……来ないと思うわ」

「おい、師妹、どうしたんだ？ お前変だぞ？」

郭斐林はまた何かを考え込んでいるようで、手許に視線を落としている。その手には古びた冊子が乗っていた。

「それは？」

白千風がその冊子に目を向ける。

「兄さん、きつとただのゴロツキよ。心配ないわ。塀以外何も被害は無いし、……関わる事自体煩わしいわ」

「しかし、あの塀をどうやってあんな風に壊したというのだ？」

白千風がそう言いながら古びた冊子を手に取った。

「それより兄さん、それ——」

「何だ？ これは」

白千風が冊子をめくるがかなりボロボロでうまく開けず指先で一
枚ずつ摘んでゆつくりと開いている。郭斐林は何も言わずにその様
子をじっと見ていた。

「古い文字だな……」

「兄さん。それ黄龍門の秘伝よ」

「何？」

白千風は一瞬まるで睨みつけるかのように郭斐林を見たが、すぐ
に視線を戻してもう一度冊子の表を凝視する。

「黄龍門？ 秘伝書の類が存在するなど聞いたことが無いが……？」
再び表紙をめくる。

「私もちゃんとは読めないけど、それ、洪淑華の手によるものだと
言うの」

「洪淑華？ 東涼のか？ 誰がそう言った？」

郭斐林は答える代わりに劉馳方を振り返った。

「ん？ お前は？」

どうやら白千風は今始めて見た事の無い少年が部屋に居る事に気
付いた様で、眉根を寄せて少年を観察する。

「小絹の知り合いらしいわ」

「あ、あの、私は別にこの子とは……」

李小絹が慌てた様に口を開くが、言葉が続かず何が言いたいのか
分からない。

「友達なんでしょ？ それで良いじゃないの」

郭斐林が優しく声を掛けた。

「で？ この書は？」

白千風が郭斐林に訊ねる。

「この子が持ってたのよ。で、見せて貰ってたところよ」

郭斐林は劉馳方が扉を乗り越えて忍び込んで来た事は白千風には
告げなかった。

「ふむ。そなたはこの街の者か？ 名は？」

白千風が今度は少年に訊ねる。

「劉馳方と言います。あの、招寧寺しやうねいじの南門の傍に住んでいます」
招寧寺というのは北東にある古刹こせきで、かなり有名な寺である。

「それで？　これはそなたの……」

「それは……私の祖父は行商人なんですけど、祖父が持っていた物なんです」

「ほう。名は何と申される？」

りゅうけんせき

「劉建碩と言います。その、店も構えてませんし、ご存知無いかも」
白千風は黙って頷いた。

二十二

白千風は何度もぼろぼろになった冊子の中身を見返しながら徐々に胸が高鳴っていくのを感じていた。読める文字が少ないので郭斐林の言葉が当たっているかどうかはまだ分からないが、そう言われると見れば見るほど洪淑華が遺した秘伝書に思えてくる。陸皓や白千雲に見せれば何か解ってくるかも知れない。

「何故此処へこれを持ってきたのだ？」

再び劉馳方に訊いた。

「えっと、あの……」

劉馳方はちらっと李小絹を見たが、李小絹はまるで何も知らないといった様子で下を向いていた。

「それをうちで見つけたので……小絹に見せようと思って」

劉馳方はその冊子を今日初めて持ってきたのだという様に、ただそれだけ言った。

「ふむ。これは売り物かな？　本物の秘伝書ならばとても値が付けられる代物では無いと思うが」

「あー、どうなんでしょう？　それは結構長くうちの蔵にあったみたいで……蔵と言ってもちょっと大きな目の小屋ですけど。いずれは行商に持って出るのかもしれませんが」

白千風は冊子を閉じて劉馳方に真っ直ぐ体を向けた。

「出来れば、しばらくこれを貸してもらえぬか？　これの中身を吟味して値打ち物だと分かれば是非買わせて頂きたいのだが」

白千風はじつと少年を見つめていた。白千風が言った事は何でも無い事の様ではあるが、もし聞いていたのが商人である劉馳方の祖父だったら即座に断るだろう。怒り出すかも知れない。売り物は書物で、しかも秘伝の武芸書という事なら金を貰う前に中身を見せるなど出来る訳が無かった。吟味などされれば最早、秘伝書では無くなってしまう。

客にしてみれば本物かどうかはつきりしないと金を出す訳にはいかない。しかし売り手の方も恐らく、本物だと証明する事は出来な
いと思われた。劉馳方の祖父が黄龍門の人間でしかもその中で身分の高い者であったか、或いは洪淑華と繋がりがあるか、或いはその秘伝書の武芸を体得しているか――。物が物だけに通常の取引の様にはいかない筈である。

しかし、劉馳方はすぐに拒否をする訳でも無く、思案する様子を見せた。

「祖父は今、都へ行ってるんです。だからすぐに必要にはなりません。というか、恐らく祖父はその書の内容を忘れてるかも知れないんです。あの、ちゃんと返して貰えるのならお貸します」

その言葉を聞いて白千風の表情に一瞬喜色が浮かんだがすぐに消された。

「勿論約束する。そうだな……小絹の知り合いという事ならまた此処に来る事もあるう？　それほど時間は掛かるまい。ともかくお借りしよう」

白千風はそう言って郭斐林の方に振り返った。

「師妹、僕は今から真武観に行ってくる」

そう言う劉馳方から借りた書を持って表に向かい歩き出し、入り口の手前でまた振り返る。

「師妹、あの壁を破ったという者、放って置く訳にはいかんぞ？」

「……そうね。調べておくわ」

白千風は表に出て行った。

「あなたはさっきの男と関係は無いのね？」

「さっきの男……？ ああ、ありませんありません」

劉馳方は郭斐林の急な質問に戸惑ったがすぐに慌てたように答える。少し声が大きくなっていった。

「あの、急にあの人が現れて……で、すぐにあの……お、奥様に見つかった」

郭斐林を奥様と呼んだところで急に声が小さくなった。

「わかったわ。じゃああなたは今度からはちゃんと門から入る事。いいわね？」

劉馳方は首を縮めて頷いた。

二十三

「あなたの持ってたあの本、ちゃんと返すからまた来なさい。小絹、此処の弟子達は皆一緒に暮らしてるけれど、別に隔離してる訳じゃないわ。出掛けたって構わないし、知り合いが訪ねて来るのも普通の事よ。隠れる必要も無いわ」

「……すみません」

李小絹は小声で答えたが心の中では、

（私があいつと隠れて逢う？ 冗談じゃないわよ！ 勘違いしないで！ あいつなんてこの先一生会わなくなってるってどうってことないんだから！）

と、叫んでいる。しかし劉馳方は咎められて出入り禁止にもならずにあることか白千風にまた来いなどと言われている。李小絹の顔が怒りで紅潮してきていたが、周りの者の目にはまた別な意味にとられてしまっていた。

その日の夕刻、一人の女が屋敷を訪れた。

「奥様、環龍客棧の紅玉麗こうぎょくれいが来ております」
家僕の男が郭斐林に告げる。

「紅玉麗？」

紅玉麗という女は環龍客棧の女主人である。

「何かしら？」

郭斐林は怪訝な面持ちで呟く様に言う。

「奥様にお渡ししたいものがあると申しておりましたが……」
「分かったわ」

郭斐林が表に出て門を見遣ると、派手な真紅の衫さんを身に纏った女が柱に持たれかかって腕を組んでこちらを眺めていた。得体の知れない男共が頻繁に出入りする環龍客棧を長年取り仕切ってきた紅玉麗には常に宜しくない噂ばかりが流れ、まず普通の人々は近付きたがらない。紅玉麗という名は本名ではなく、自分で付けたらしい。いつも派手な格好で胸元を開いて白い肌を見せている。そんなには若くないが心持ちの良からぬ男達を引き付けるには十分なのだろう。しかし艶というよりだらしが無い様にも見える。

（はあ、一体何の用かしら？ 今日……厄日ね）

郭斐林が門の方へ歩いて行くと、紅玉麗はニヤツと笑ってからその薄い唇を開いた。

「こんにちわ、奥様」

紅玉麗は柱にもたれたままの姿勢で言う。

「……お久しぶりね。今日は何の用かしら？」

「奥様。そんな、あんまりじゃありませんか。そんな、突っ返すように言わなくても」

郭斐林は普通に言ったつもりだが、案の定、この女はいちいち細かく絡んでくる。

「そんなつもりは無いけど。相変わらずあなたのお店は繁盛しているようね？」

「おかげさまで。色んな所から来ていただいてましてねえ。こちらのお屋敷の方にも来ていただける位ですから」

郭斐林はその言葉を聞いて眉を顰めた。

（まさかうちの弟子がこの女の所へ？）

泊まり客でもないのにこの女の店に行くという事はもうやる事は決まっている。博打もしくは女買いである。紅玉麗は認めないだろうが、環龍客棧の商いは賭場に女郎屋を引っ付けたものだところこの街の誰もが思っている。そしてそれはほぼ間違いなかった。

「……どういう事かしら？　うちの者があなたのお世話に？」

「お相手したのは私じゃありませんけどねえ」

紅玉麗はニヤニヤしながら郭斐林の顔を眺めている。郭斐林は涼しい顔で見返していたが内心穏やかではない。

「こちらのお弟子さんがねえ……もう腰が立たなくなっちゃって帰れない様なんでお連れしたんですよ。私も暇じゃありませんけど、名高い真武剣派のお弟子さんですからわざわざ私が付き添って来たんですよ」

紅玉麗はそう言って口元に手をやり笑っている。郭斐林は込み上げてくる怒りを抑えて拳を握り締めた。

二十四

「入りな」

紅玉麗は柱にもたれていた体を起こして門の外に声を掛けた。すると表の通りから数人の男が戸板を寝かせた状態で運びながら門の中に入ってきた。その戸板の上には若い男が横たわっており、薄汚い麻袋を開いた様な布が腰のあたりに掛けられている。

郭斐林は目を見張った。横たわっている男は弟子の孔秦ではないか。腰より下は布で見えないが上半身は裸である。郭斐林の怒りが一気に噴出す。

「秦！ 起きなさい！」

郭斐林はすぐに駆け寄って孔秦の肩を掴み激しく揺さぶった。裸で眠っているように見える孔秦が紅玉麗の店で一体何をしていたのか、想像に難くない。こんなことが街中に知れ渡ればどうなる事か――紅玉麗がこうして街中を運んできたのだからもう噂になっているかもしれない。真武剣派の、しかも自分の家からそんな恥知らずな不肖の弟子を出してしまうとは。

「秦！」

郭斐林は殆ど叫びに近い声を上げ、その声で再び屋敷中の弟子達が飛び出してくる事となった。

「あっ！ 孔師兄！」

駆け寄ってきた弟子達が横たわる孔秦の姿を見て驚いている。紅玉麗はその様子を見ながら相変わらずニヤついていた。

「……秦？ ……これは」

郭斐林が目を閉じたままの孔秦の顔を覗き込む。良く見れば口元に血が滲んでおり左の頬が少し紫がかったている。他には特に外傷らしきものは無いが、どうやら何者かと争った跡の様である。

「一体何があったの？ 笑ってないで言いなさい！」

郭斐林は紅玉麗に詰め寄った。

「そんな大声で怒鳴らなくたっていいじゃありませんか。私はねえ。この人がうちの店から一人で帰れない様だから運んであげたんですよ。さっきも言ったでしょう？」

「どうして帰れなくなったのかを聞いてるのよ？ 何故、秦は怪我をしてるの？」

「さあ？ 最初は機嫌よくしてらしたんじゃないですか？ 遊びのお相手を怒らせてしまったのかも知れませんねえ。私はそんなトコまで関知しませんよ。あ、そうそう。服もお渡ししないとねえ」

紅玉麗がそう言うと、傍にいた男が孔秦の服を乗せた腕を郭斐林の前に伸ばした。郭斐林はそれを少し乱暴に掴み取り、一瞬紅玉麗を見てから踵を返した。

「秦を部屋に連れて行きなさい」

他の弟子達にそう言う一人先に部屋へ戻って行った。

「おいあんた！ 孔の兄貴に何しやがった!？」

鄭志均が紅玉麗に向かって言う。

「私は何もしやしないさ。うちにきたそいつに聞けば良いじゃないか。時期に目も覚めるだろうよ。じゃ、ちゃんとあんたらのお仲間はお返ししたからねえ」

紅玉麗がそう言って表に出ると、孔秦を運んできた男達も黙って続く。

「お、おい待て！ まさかあんたら……」

「何なのさ？」

紅玉麗が面倒そうに首だけ回して鄭志均を振り返った。

「……あんたの所に木……木傀風様と仰る方が泊まってる筈だ。その方はどうした？ まさか無礼を働いたんじゃないだろうな？」

「誰だって？ うちにそんなお偉いさんが泊まってたかねえ？ 私に聞いてもいちいち客の名前なんて覚えちゃいないよ。そのなんとか様の様子が知りたいならあんたもうちに来たらどうだい？ ついでに遊んでいきなさいな。先に言っておいてくれればいい娘を用意しとくからねえ。ああそうだ、その何とか様ってのが女が嫌いじゃないならあんた奢ってやれば喜んで貰えるんじゃないの？」

そう言って紅玉麗はまた笑った。

二十五

「なっ！ 何だと!？」

「鄭兄貴！ 戻りましょう。あんなの相手してても仕方ないですよ。孔師兄に聞けば事情は分かるんですから」

「じゃ、もういいんだね？ 遠慮せずに何時でもおいでなさいな」

紅玉麗は男達を引き連れて通りの真ん中を歩いていく。

「あばずれ女！」

鄭志均は紅玉麗を罵りながらその背中を睨みつけていたが、その声は彼女に届くほど大きくは無かった。

それから暫く鄭志均達は孔秦を見守るように集まっていたが、一向に目覚める気配は無かった。他に外傷がないか体をあらためて見たが、気を失ってしまうような強い衝撃を受けた痕跡も無い。呼吸も脈もしっかりしており、とりあえず様子を見るしかない。

「どう？」

郭斐林が部屋に入ってきて孔秦を囲んでいる弟子達に声を掛け、静かに扉を閉めた。

「師娘、孔師兄は環龍に遊びに行ったんじゃないやありません。本当です」鄭志均が言う。郭斐林は軽く頷いて孔秦を見た。

「……きつとそうね。秦がそんな事する訳が無いわねえ……」見つめながら呟く。

「で？ 何しに行ったのかしら？」

「あー、それはですね……」

「志均、あなた、あの壁を破った男も知ってる様な事言ってたわね。それも合わせて教えて貰いましょうか」

郭斐林は真っ直ぐ鄭志均に向き直る。

「はあ」

（もう隠せない）

と、思ったがすぐに、

（隠すって何だ？ 大した話でも無いじゃないか。そもそも木道長があんな所に居るからいけないんだ。師娘に言って師娘の指示を仰げば何の問題も無い。このままほっといたらあの武大とかいうおっさんとか、もっといろいろな仕出かしそうだ）

そう考えて顔を上げた。

「何ですって!？」

鄭志均がまず初めに清稜派の木俣風道長が環龍客棧に滞在している事を告げると、郭斐林は椅子から跳ね起きて身を乗り出した。

「木道長が……志均! 何故それをすぐ言わなかったの!？」 誰が道長をあそこへお連れしたの!？」

鄭志均はうろたえた。

「いや、道長様は街に着いてすぐに環龍に入られた様で……誰がつて事は無いみたいで……」

「誰から聞いたの? 他の清稜派の方々も御一緒なの? あんな所、まともな客が入れる部屋なんてあるのかしら? 真武観へはもう行かれたの? ……そんな筈無いわね……もしそうなら師父がきつと私達にお世話をするように言われる筈ね……」

郭斐林は次から次へと独り言のように疑問を呟きながら視線を泳がせていたので鄭志均は口を挟めず、暫く間が空いた。

「秦も知っていたのね?」

「ええ。最初にあの武大って男を見つけたのは孔師兄ですから」

「武大?」

「あの、壁を壊した奴ですよ。この前あの男、金も無いのに飯を――」

「どういうことなの!？」

急に郭斐林は鄭志均を睨みつけるように見て詰問する。

二十六

「あなた達、あの男と何かあったのね!？」 まさかそれで今日あの

男は此処に忍び込んで何か仕返しを――」

「違います違います!」

鄭志均は両の手を突き出した。

「あの武大って男は道長様に付いて清稜山から来たらしいんですが、着いてすぐ金も無いのに料理屋に入って飯食ったところを孔師兄が見付けたんです。でも別に悶着を起こしたって程ではありません。結局他の人間が金を持ってきて払って、それで……終わりです」

「清稜派の人間が無銭飲食？ そんな事する訳無いでしょう？」

「いや、道長様はご存知無かったと思います。あの武大って男は門人では無いようです。本人が言っていたらしいですから。それに料理屋に行ったのも道長様をほったらかして勝手に来ていたみたいです」

「木道長の知り合い……あの技……」

郭斐林は呟いて宙を見つめた。

「師娘？」

「とにかく」

郭斐林は顔を上げて周りの弟子達を見回した。

「一刻も早く木傀風様をお迎えに行かないといけないわ。……秦は木道長に会いに行ったのかしら？」

「それは……どうなんでしょう？ ただ、ごろつきの溜まり場ですし何かあってはいけないという事で時々様子を見に行っていました」
「分かったわ。環龍客棧に行きます。志均、それから程青、一緒に来なさい。他はいいわ。そうね……此处に来ていただく事になるでしょうから、王さんにそう伝えて準備をしておきなさい」

「分かりました」

弟子達は揃って答えた。王というのはこの屋敷に長年仕えている小間使いの女だが屋敷に人が多くなり李小絹のように新たに雇い入れた家人達を取り仕切る立場にあった。

陽が傾き冷たい風が強くなっている。流石にこの南方の街武慶でも完全に陽が暮れば冬を実感する。しかし木傀風達清稜山の住人にとっては冬とは思えない程の暖かさと感じている事だろう。清稜山は北方に位置するという訳では無いが中原とは違ってかなり

の高地でもありその険しい地形によって冬は降雪量も多く殆ど他の土地と隔離されると言って良い。きっと木傀風一行はかなり前から山を降りて来たに違いなかった。

郭斐林と弟子二人は環龍客棧の前までやって来た。此処の女主人、紅玉麗はいつも派手な服を身に纏って華美な風情だが、この店は質素というよりぼろ宿と言った方が相応しい程荒れ果てている。無論、出入りする客もそれ相応である。木傀風が氣に入るなどという事があるだろうか。それほど酔狂な人物では無かった筈だが――郭斐林は店先を眺めながら思った。

「おっ、今度は何だ？ 孔秦の奴が泣きついてきたのか？」

店の前にたむろしていた三人の男の内の一人が、店の前に立った郭斐林に声を掛ける。

「これはこれは師娘様。勘違いしてもらっては困るぜ？ 孔秦の奴をぶっ飛ばしたのは俺達じゃないんだからな。名門真武剣派のお弟子さんを俺達がどうこう出来る訳が無いしなあ」

別な男が言い、三人ともにやにやしながら郭斐林らを眺めていた。「程青、たまにや俺達と遊んでくれよ。お前も剣ばかりじゃ飽きないか？ たまにやあもつと違うもん握りたいだろ？ へへッ」

男は腰帯の端を振り回しながら下品に歪めた口元を呉程青に向けて突き出した。

「な……何を」

「ふざけるな！ 許さんぞ！」

呉程青の顔が凍りつき、同時に鄭志均が怒声を上げて男の前に飛び出す。

「ほう、許さなけりゃあ、どうするんだ？」

男は先程の緩んだ顔を一变させ、鄭志均に向かって凄んだ。

「どうもしないわ。あなた達に用があつて来たんじゃないの。通して貰えるかしら？」

郭斐林が代わって答える。その平坦な声と見る物を突き通す様な鋭い視線が男達に向かつて放たれた。

「フン、好きにすりゃいいんじゃないかねえか？俺たちや関係ねえ」

男達は語気は強いが塞いでいた店の入り口の前から離れて行く。

郭斐林にへつらうつもりは毛頭無いが、本気で怒らせて敵う相手では無い事は良く知っている。それでも真武剣派高弟の一人である郭斐林に対して不遜な態度を取るのは此処にたむろする男達くらいのものだろう。

郭斐林を先頭に店に入ると、中には十数人の男達が居り一斉に入り口に顔を向けた。郭斐林は男達には目もくれずに真っ直ぐ奥に向かって進み、二人の弟子達は横目で男達の様子を窺いつつ後に続く。「誰か。居ないの？」

店の奥を覗くが店の者が誰も見当たらない。店に居るのはじつと三人の方を窺っている男達だけの様で、客が居る様にも見えない。

「可愛い弟子の仇討ちかい？」

男達の中から声が掛かる。郭斐林はゆっくりと振り返った。

「そのつもりは無いけれど、此処に今その「仇」とやらが居るのならそれもいいわね」

「居るぜ」

郭斐林に声を掛けた男は髪も髭も伸び放題の痩せた男で頬と眼窩がひどく窪んでいる。夜道でいきなり出くわせば思わず悲鳴を上げてしまいそうな不気味な顔だ。老けて見えるが実際は若いらしい。

郭斐林も二人の弟子もこの男の事は見知っていた。この店に集まる男達はどういう繋がりの方達なのかは知らないが、この骸骨のような男が常に中心に居る。男は徐じょと名乗っていた。

「あなたかしら？」

「ハッ、まさか」

徐は細い腕を顔の前まで持ち上げて、すぐに戻す。

「俺とやってあんな程度で済むかな？」

「……」

郭斐林は黙って徐を真っ直ぐ見ている。徐は目を伏せ、暫くしてから鼻を鳴らして微かに笑う。

「いや、あんな風にはならないと言った方が良いな。こっちにもやられた奴が居る。まだ目は覚めてない。あんたの弟子と一緒に仲良くぶっ飛ばされちゃったのさ」

郭斐林は意味が解らず眉を顰めた。徐は続ける。

「あんたが来てくれて良かったよ。あんたの弟子とうちのを遣りやがった奴はすぐ傍に居るんだが、どうにも手が出せそうに無い。あんたなら何とかしてくれそうだ」

「……用事が済んだら是非会ってみたいものね。此処の人は何処に行ったのかご存知かしら？」

「知らないな。いつかは戻って来るだろうよ。まあ待つんだな」

徐を取り囲むように集まっている男達は全く動かず無言のまま郭斐林達を見ている。まるで徐がしゃべるのを邪魔しない様に気を使っているかの様だ。明らかに徐がこの男達を仕切っている様だが、何故こんな痩せこけて一見弱々しき様子にも見える男に皆従うのかは解らない。周りには徐よりも遥かに体格も良く腕っ節の強そうな男は何人も居た。

「師娘、部屋を見てきましようか？　こんな所で待ってる訳にもいきませんよ」

鄭志均が言う。

「そうね……行ってみましよう」

郭斐林の言葉に呉程青も頷き、三人は部屋の並んでいる二階へ上がる階段に向かって歩き出す。すると丁度その時、入り口の扉が開いた。

「大人しく此処でじっとしてるの。いいわね？」

「ただでさえこの街は退屈だというのにこんなぼろ宿に閉じ込める

気か？ 勘弁してくれ」

声を聞いて郭斐林達は足を止めて振り返った。最初に入ってきたのは女だったが、次に姿を見せたのは昼間屋敷にやって来た武大であった。

二十八

中に居る男達は皆揃って今度は今入ってきた武大と女を見ている。その中で徐だけが薄ら笑いを浮かべながら酒の入った椀に視線を落としていた。

「師娘、あれ――」

鄭志均が言うのを郭斐林はサツと手を上げて遮った。

「私の言う事はもう聞いてくれないの？」

「そんな事あるか」

「そう？ もう少しの辛抱よ。道長様が真武観に行くって仰ったら出られるわ」

会話を聞いた郭斐林は静かに二人に歩み寄って拱手する。

「清稜派の方々ですね？ 真武剣派、郭斐林と申します」

「えっ」

女は少し驚いた様に見開き、武大の方は口まで大きく開けて郭斐林を見つめている。

「先程は失礼を致しました」

郭斐林はにこやかな表情を作って武大に話しかけた。

「こっ、こんな所まで来て儂をどうするつもりだ？ あれはあんたが――」

「木傀風様と共に参られたそうですね。お待ちしておりました。先刻のご無礼お許し下さいませ」

郭斐林の態度が一変しているのを見て武大は少しばかり混乱してしまった。

「お、あ、ああ」

女が郭斐林に向かい拱手して返す。

「常施慧と申します。私共は清稜派の門人ではございませんが、木道長様のお供をして参りました」

郭斐林は笑みを絶やさず小さく頷いた。

「まだ道長様は真武觀に行かれていないそうですね。我が師は道長様がお越し下さるのを心待ちにしております。是非すぐにでもお越し頂きたいのですが……」

「私も道長様に申し上げているのですが、まだ早いと仰っておられます」

「そんな事はございませんわ。もうそろそろ他のお客様もこの武慶に着かれる頃。此処では何かと不自由でしょう？ 私共がお世話させて頂きますので是非私共の屋敷にお越し下さい」

常施慧は頭を下げる。

「有難うございます。あの、道長様にお会いになりますか？ あなた様から言って頂ければ道長様もお聞き届け下さると思います」

「それは是非。今お部屋に？」

「はい。こちらでございます」

常施慧は少し腰を屈めて郭斐林に付いてくる様に促しながら歩き出す。すぐに郭斐林も続いたが、武大はその場に立ち尽くして後姿を眺めていた。

「道長って誰の事だ？」

不意に徐が声を発した。郭斐林と常施慧の顔を交互に見遣って答えを待っている。常施慧が徐に向かって口を開こうとするのを郭斐林は押し留めて一歩前へ出る。

「こちらの話。あなたには関係ないわ」

「……ここに泊まってる爺だな？ そうだろう？」

「我々の大切なお客様よ。あなたはお会いしたの？」

「フフッ、お客様か。それはまたややこしい事になったな。その爺

があんたの弟子に手をかけたんだがな」

郭斐林は驚いて徐を睨みつける様に見たが声は出さない。代わりに常施慧が口を開いた。

「そんな事……道長様がそんな事なさる筈がありません！　あなた達一体何を……」

「構わないで。行きましょう」

郭斐林が常施慧に向かって言う。郭斐林達四人は武大を残して二階への階段を上がって行った。

二十九

階段を上がると常施慧は真っ直ぐ木傀風の泊まっている部屋へ向かい静かに扉を開く。後に続いた郭斐林は背筋を伸ばして常施慧が入るのを待った。

「道長様、只今戻りました」

常施慧がそう言って頭を下げたのですぐ後ろの郭斐林にも部屋の中が見えた。質素を通り越して粗末な部屋で、置いてある調度品は近寄って眺めるまでも無く壊れかかっている。

正面の古い寝台の上で、こちらに向けた背を真っ直ぐ伸ばし足を組んで端座している人物が居る。

「んん」

常施慧の言葉に答えたのだろうか、唸る様な小さい声が聞こえた。鄭志均達は会うのは初めてかもしれないが郭斐林はその人物の後姿にも見覚えがあった。この人物が清稜派掌門、木傀風である。

「道長様、真武剣派の方々が参られました」

常施慧はそう言ってから郭斐林を招き入れる。木傀風はまだこちらに背を向けたままだったが、郭斐林は頭を下げて一步入り、再び低頭した。

「道長様。真武剣派、郭斐林が参りました」

他に音は無く、郭斐林の声は先程までと違い少し低く僅かに力を込めてあり、後ろで聞いていた呉程青は狭い部屋に師娘の声がゆっくりと満ちていくかのような感覚を覚えた。

ほんの少し間が空いて、寝台の上の木傀風がゆっくりとした動作で体ごと振り返った。

(……ずいぶん痩せられたわ。お体は大丈夫かしら?)

郭斐林は木傀風の氣息が弱くなっているのを感じ取り、密かに顔色を窺う。木傀風は郭斐林を見たが何も言わずに頬を緩めていた。老人であるから痩せているのは普通で、長く会っていないのだから不自然という程でもない。其処彼処に繕った跡のある薄いねずみ色の古い上着を纏っている。白い髪は少なくなってきた。

「お久しぶりでございます」

「うん」

木傀風は短く声を発して微笑み、また郭斐林を眺めている。

「道長様、ご気分は如何です？」

常施慧が木傀風の傍に寄って声を掛けた。

「うん。すこぶる良いぞ」

「それは宜しゅうございました」

この二人の間に流れる時間は他所よりも遅いのだろうか。微妙な間を挟みながらやり取りが行われ、郭斐林達には少し変わった感覚だった。

「斐林、そなたは幾つになったかな？」

不意に年を訊かれて郭斐林は戸惑う。随分長くそんな質問を聞いていない。

「もう四十一になってしまいました」

そう言って目を細めて微笑する。

「ほう、儂はそなたが陸の弟子になってすぐの頃を今でも覚えておる」

木傀風の口から緩やかに言葉が流れ出る。

「私も道長様に初めてお会いした時の事ははっきりと覚えております」

す」

郭斐林はそう応じながら、

（何故そんな昔の話を？ あれから何度もお会いしてるのに……）

と、不思議に思った。

「結局、陸はそなたの後に弟子は取らなんだのう。何故かな？」

「……それは今まで師父は仰った事がありませんわ。私にも解りません」

「後ろのはそなたの弟子かな？」

「この者達は兄弟子白千風の弟子でございます」

ここで初めて鄭志均と呉程青の二人が拱手して挨拶する。

「うん」

木傀風は柔らかい表情のまま頷く。また少し間が空いて、

「都に行つてのう」

話が飛んだ。

「え？」

急に話が変わるので郭斐林は思わず声を出して聞き直した。

三十

木傀風は組んでいた足を解いて寝台から下ろし、素足を床に付けて座り直す。両手で顔をさすってからまた郭斐林を見た。

「中原へ足を運ぶのはもう最後になるかも知れんでな」

「そんな……お元気そうではございませぬか」

「そう見えるか？」

「はい」

郭斐林は間を空けず即答する。

「この歳になると明日があるかどうかとも怪しくなる。まあ若くても同じかもしれないが少なくともそんな事は忘れて居られる」

木傀風はそう言って再び顔をさすった。

「そなたは若いのう」

「そのように仰って下さるのは道長様だけですわ」

郭斐林は少しおどけた様言って笑みを浮かべた。

「都でそなたの兄弟子に会った」

「丁常源師兄でしょうか？」

「うん。中々やり手だのう。若い弟子が増えておるな」

「正式に弟子入りしている訳ではありません。我が派の武芸を通じて心身を鍛える場を提供するという総帥のお考えなのです。特に都は誘惑も多く若者達の暮らしは堕落しがちの様ですから、入った当人達よりその親の方が熱が入っているそうです」

「ま、結構な事だ。剣の扱い方も碌に知らんのに腰にぶら下げて、何かあればすぐに抜いて振り回す輩も多い。剣とは何ぞや？ 武とは何ぞや？ ハハ、儂にも難しいが、若い連中が今から頭をひねっておればいずれ悟ることであろうな」

どうやら木傀風はまだまだ喋り続ける様子である。郭斐林もこの老道長と話したいことは多々あるが、今である必要は無い。木傀風はこの先当分この武慶に滞在する事になるので話す機会は十分にあった。

「道長様、もう陽が暮れます。どうか私と一緒に屋敷にお越し下さい。そうでなければ私が師父に叱られます」

「その師父が言うた日取りはまだ先だろう？ 儂は勘違いしておつてな。早う着いてしもうた。もう日数もまともに数えられんようになったかと笑われてしまうなあ」

そう言って木傀風は溜息をついた。

郭斐林は木傀風が冗談を言ったのかと思ったが、どうやら本気でそんな事を気にしているようである。

いつの間にか常施慧は部屋の隅で身の回りの荷物を整理していた。まだ木傀風は此処を出るとは言っていないが、全く気にしていない様子である。

「道長様、あまり遅くなつてはお迎え下さる皆様にご迷惑となります」

しょう。宿の人に言って参りますので」

常施慧は丁寧な口調ではあったが一方的に言って部屋を出て行ってしまった。郭斐林にはとても従順そうな女性に見えていたのだが少し意外な気がした。

「はあ。行くしかないか。そうだなあ、行くか」

木傀風の言葉に郭斐林は微笑みながら頭を下げた。

「店の者は居りましたか？」

暫くして戻ってきた常施慧に郭斐林が尋ねる。

「誰も居られないようですわ。どう致しましょう」

「後でうちの者に託けさせましょう」

「お手数をお掛けして申し訳御座いません」

そう言っ腰を折る常施慧は柔和そのもので、そんな女性がこの環龍客棧に居る事が不自然に思える程である。

「あれはどうした？ 何処へ行った？」

木傀風が常施慧を見遣った。

三十一

「大さんなら先程一緒に戻りました。弟達は……まだ戻ってませんが、大さんに呼びに行つて貰いましょう」

「うん」

木傀風は立ち上がる。

「それでは私達は下でお待ち致しますので」

郭斐林と二人の弟子は部屋を出た。

階下に下りると近くの椅子に武大が腰掛けて何をする訳でもなくぼんやりとしていたが、郭斐林達の姿を見ると顔を逸らして縮こまった。

「木道長様は我が屋敷に来て頂く事になりましたので」

郭斐林が話しかけると武大はチラッと振り返ってほんの少し頷いただけだった。

郭斐林達は入り口の近くまで来て立ったまま木傀儡風が降りてくるのを待つ。再び徐が話しかけてきた。

「あんたらは清稜派と喧嘩はしたくないのかい？」

郭斐林は眉を顰めて徐の方へ顔を向ける。

「ついさっきあんたらが「道長」って呼ぶのを聞いて思い出した。

あの爺さんが清稜派の道長なんだな。道理でお強い訳だ」

「お前ら、爺さんに何をした？」

郭斐林に背を向けて座っていた武大が立ち上がり徐の方を向いた。
「何もしてない。出来る訳が無いしな。いきなりあの爺さんがうちの奴と真武剣派の弟子に手を掛けた」

「フン、信じられん。爺さんがお前ら如きに関わるものか」

「ハハ、そうだな。俺ら如きをいたぶるとは清稜派道長とは思えん所業だ」

「あなた達はまだそんな事を言っているのですか」

常施慧が荷物を持って階段を下りてくる。下に着くと荷物を置いて徐の方へ体を向ける。

「何があったか知りませんが、道長様が何の理由も無しにあなた方のお相手をなさる筈がありません」

常施慧は、絶対に在り得ないという様に断言する。

「何があったのか知らないんだろ？ 知らん事に口出ししない方が良いな」

徐はそう言って常施慧を睨んだ。しかし常施慧は相変わらず涼しげな顔で徐を見つめている。徐をはじめ、柄の悪い男達が皆一様に常施慧を睨みつけていたが、意に介さない様子だった。

（この人、見かけに寄らず相当腹が据わってるわね）

郭斐林は黙って常施慧を見つめながらそんな事を考えていた。

「私は長年、道長様にお仕えしてますから分かります。何かあった

としたらそちらに非があるのは明らかです」

流石にこの物言いには徐達でなくとも腹を立てるに違い無かった。
「ケツ、清稜派ってのは随分勝手な奴らの集まりなんだな」

徐は窪んだ眼窩の奥で目をぎよろつかせて吐き捨てる様に言う。

「さあ？ あなた達とどちらが――」

常施慧が応じようとしたその時、徐が目の前に置いていた椀に手を伸ばした。次の瞬間、椀が卓を離れ、一直線に常施慧に向かって飛んだ。

（危ない！）

郭斐林が即座に常施慧めがけて飛ぶ椀に向かって跳躍しようと身を僅かに屈めた瞬間、脇から大きな影が凄まじい勢いで追い越して行くのが見えた。常施慧に向かっていた椀は大きく反れて壁に叩きつけられ粉々に飛び散る。武大が常施慧の前に立ち、椀を払い除けたのだ。常施慧と言えば微動だにせずじっと徐を見ている。

三十二

郭斐林は一瞬の出来事に目を見張った。

（この男、木道長の弟子なのかしら？ あの体軀であの速さは尋常じゃない。でもあの時の技は……。あの常さんも武芸を修めているのかしら？）

常施慧は全く動いていないが、椀に何の反応もしていないのは、出来なかったからなのか、武大がそれを退ける事を分かっていたのか――。今の態度は自信の表れとも取れるが、微動だにしておらず武大が間に合わなければ椀は確実に常施慧まで到達していた筈である。

「お前、何の真似だ？」

武大が常施慧の前に仁王立ちになり、徐を睨み返す。徐は椅子の背に体を預けて言う。

「フン、俺達は見ての通りただのゴロツキだ。あんたらに用など無い。そっちから突っかかって来ない限りはな。清稜派だろうが真武剣だろうが知った事か」

徐は今度は身を乗り出して続ける。

「相手が誰だろうが例外は無い。今日、清稜派の木という爺さんが俺達の仲間を傷付けた。意識が戻らねえ程の重症だ。こっちは爺さんに対して何もしてないのに、だ」

「出鱈目だわ。その意識を失った人は何処に居るのかしら？」

「こんな所に置いとく訳無いだろうが。すぐ医者に運んだ」

「医者は何と言ってるんだ？」

武大が訊ねる。

「手に負えんらしいな。爺さんにやられたのは確実だ。此処に居る奴ら全員が見てるんだからな。勿論俺もだ。だが外傷が無い」

「……それで、どうしたいのだ？」

「そうだな。清稜派道長に俺達の前で土下座でもしてだな、きつちり詫びを入れてもらおうか。そうだ、真武観に行くんだろう？そこが良いな。それと奴を医者に見せるのはタダじゃない。金だ。もしもの事があれば奴の家族は困り果てるだろうな」

「ハハッ！」

武大は急に笑い声を上げる。

「何とも稚拙な脅し文句だな！ それに世間知らず……ちよつと違うか。爺さんに土下座しろと？ あんな爺さんでも清稜派の道長だぞ？ 武林屈指の使い手だ。お前らとは格に雲泥の差があるのだ。爺さんとともに渡り合える者は少ない。何があったか知らんがもし爺さんがぶち切れたら、お前ら全員皆殺しだ！」

「何だと！？」

「何を言うの！？ 馬鹿なこと言わないで！」

武大の言に気色ばんだ男達と後ろの常施慧が同時に声を上げた。

「道長様がそんな事なさる筈が無いでしょう！」

男達の中には既に腰の剣に手を掛けている者も居る。徐は表情を

変えていないがその場の空気は一気に張り詰めた。郭斐林の体にも少しばかり緊張が増した。

（この武大って人、意外にまともな事言いそうだったけど、結局煽ってやっぱり期待出来ないわ）

「徐さん。木傀風道長があなたが言う様な乱暴を働くなど考えられない。あなた達は一体何をしていたの？」

郭斐林は徐にそう訊ねながら常施慧と武大の傍に歩み寄った。

「……帰って孔に聞け。意識が戻ったらな」

徐は言った後顔を上げて不敵な、不気味な笑みを浮かべた。

「……皆殺しか。いいか、俺達にそんな台詞は何の意味も無い。木だろうが陸だろうが相手の名前など知るか。とことんやるまでよ」

「お前らみたいなのは皆そう言うだろうな。そう言えなければお前らは本物の屑共になってしまふ。そして爺さんはお前らの相手などしない。相手がお前らではお遊びにもならんからな。そしてお前らは無事で居られる。世の中はうまく出来ておるわ」

武大はそう言ってこちらも負けじと笑い返す。徐は再び眉を顰めて武大を睨み付けた。

三十三

徐はとことんやると言ったものの、内心考えあぐねていた。自分達の同類が相手なら何も考える事は無い。頭を空っぽにしてただ腕力で相手をしていれば良いのだ。相手に少しばかり強力な後ろ盾があるうとも怯む事など無かった。

今までとは違う妙な気分だった。ゴロツキ同士の揉め事など当り前の日常で、そればかりが続いていると飽きてくる。徐は常々もつと手応えのある者を相手にしたかった。別に喧嘩の類を生業にしている訳でも無いのだが、放って置いても仲間内の誰かがどこからか揉め事を持ち出してくるのでそれが今の生活の大半を占めていた。

だから殆ど徐達の拠点と化している此処、環龍客棧は街でも一、二を争う物騒な店と囁かれているのだ。其処へ突然、武林に名高い清稜派道長が現れた。自分達のねぐらに、である。退屈な日常の中でまどろんでいた徐は珍しい玩具を見せられた子供のように目を見開いていた。

一人の老人と少しばかりのお供がくっ付いているだけで街の人間はまさか清稜派道長の一行だとは気付かない。そんな一人のちっばけな老人だが、徐はちゃんと理解している。この老人たった一人こそが広大な武林における巨大な一角なのだ。今、武林に強い影響力を持つ勢力とは、この街の真武剣派を筆頭に清稜、襄統の二派と遼慧、媚の三岳。各地に無数に存在する幫会では特定の本拠を持たない最大勢力である丐幫と緑恒の千河幫。そして太乙北辰教である。

その他の無数の門派幫会は殆どがこれらの支配下に収まっていると見て良いだろう。そんな中でも特に他に影響力を持つのはやはり、より古くから武林に存在し続けている系統で、清稜派、丐幫、北辰教である。陸皓の興した真武剣派は特殊な存在なのだがこれも加えられる。三岳については歴史は深いものの、どれも自ら進んで他と交流する事が無い為、どちらかと言うとあまり意識される事が無い。

木傀風はその中の清稜派の長であり、本来なら徐の様な男が出会う機会などあろう筈が無かった。この武慶には陸皓が居る。しかし徐は陸皓の姿を見た事があるだけで近付いた事は無い。真武剣派の弟子達を街中で見かけて仲間がちょっかいを出すと言う事はあるが、基本的に真武剣派の人間は自分達を相手にしようとはしない。徐達にしても用が在る訳でもない。別世界の住人なのだ。

徐は郭斐林を見知っており、郭斐林も徐という男が居る事は知っていた。話すのは今日が初めてだったが、徐は何の遠慮も無く郭斐林に対して口をきいている。たとえ今、郭斐林が腹を立てる様な事があつたとしても大した問題にはならないと考えているからだ。実際何度も（相手にされていない）と感じていた。

（陸皓はこの程度の事で俺達に構う事などしない）

清稜派の長、木傀風はどうやら陸皓とは違う様だ。陸皓とは対照的にボロを纏ってこんな宿に平気で泊まる。自分達の喧嘩に首を突っ込む。徐は意外に思っていた。武林の長老たる木傀風が平気で自分達に近付いて来るのだ。何か今までと違う面白い事が起きそうな気がしていた。しかし下手な事は出来ない事も分かっている。うまく弄れば自分の名を上げる事が出来るかも知れない。しかし勿論そんな考えはおくびにも出さずにいた。

「あんたらの親分の誕生祝いか？ あれに出る為に来たんだな？」
徐は郭斐林に向かって言った。

三十四

「それはもう終わったわ。道長にお越し頂いたのは我が真武剣派の四十周年を祝う英雄大会に御出席頂く為」

「そいつは是非俺達もお祝いに伺う必要があるな。俺も長くこの武慶に住み着いてお世話になってるしな」

そう言う徐に対して武大が口を開く。

「お前、金あるのか？ 儂等みたいに名が通っておらん奴は相当祝儀を積まねば入れて貰えまいて」

「ケッ、金のある奴以外お断りか。真武剣派は名ばかりでかくてその実は随分しみつたれた奴らだな」

徐は郭斐林に侮蔑の目を向ける。

「私は何も言っていないわ。純粹に祝いに駆けつけて下さる方なら拒んだりしません。無論、あなたでもね。手ぶらで来て頂いても結構よ」

郭斐林は笑顔を作って返した。

丁度その時二階から木傀風が姿を現し、ゆっくりと階段を下りてきた。

「儂等も手ぶらで良かったかのう？ 随分苦勞して金を工面してな

あ

「道長様？」

すぐに常施慧が傍に走り寄った。

木傀風は徐を見てから郭斐林に顔を向ける。

「知り合いか？」

「あ、……いえ、何と申しますか」

「知り合いなら具合悪いだろう？ あんたは俺達を傷付けた。しかもうやばいんじゃないか？」

徐は椅子に腰掛けたまま木傀風に言う。

「あんたがやった二人の内、一人は真武剣派白千風の弟子なんだからな」

そう言ってニヤリと笑う。

「ほう」

木傀風は全く表情を変える事無く、ただそう言うだけである。郭斐林は口を開こうとしたが、何を言えば良いのか咄嗟に声が出なかった。常施慧に武大、鄭志均、呉程青らは木傀風に見入って、ここで何があつたのか言葉を待った。

徐は苛ついた。

（この爺さんは呆けているのか？ 意味が分かってない訳ではあるまい）

「斐林」

木傀風が郭斐林に言う。

「そなた達が来る前に此処で喧嘩があつてな。ひどく暴れておるゆえ儂が止めたのだ。しかし、息の根まで止めたわけでは無い」

木傀風はそう言って一人笑った。

「もう結構時間が経っておるが……あの二人は何処へやった？」
今度は徐に向かい訊ねる。

「医者に決まってるだろう！ もし奴が死んじまったらどうしてくれる！？」

徐が初めて椅子から勢い良く立ち上がり、木傀風に向けて指を突

き出した。

「死にはせん。もう回復しておろう。迎えに行つてやるがいい」

木傀風は相変わらず平然として事も無げに応じるが、何故か徐は何も言えなくなつてしまった。舌打ちして顔を背け、また椅子に身を投げた。

「そっちの弟子はこの紅つて女が屋敷まで運んだ筈だ。あんた見たか？」

徐が郭斐林に聞く。郭斐林は何も言わず僅かに目を伏せて答えない。

「千風の弟子が何故此処で喧嘩しとつたのか知らんが、とにかく心配ない。ただ気を失つておるだけだ」

郭斐林は声は出さずに木傀風に頷いて見せた。

「では参ろうか」

木傀風はそう言つて先に店を出て行く。郭斐林らも続いたが誰も徐の方を見ることは無かった。徐の方もそっぽを向いて酒を呷り始めた。

三十五

「道長様、これを」

常施慧が真っ白で長い毛足の毛皮を取り出し木傀風の背を覆う。

郭斐林にはそれが何の毛か分からなかった。

「うん」

木傀風は小さく頷きその毛を少し撫でる。冷たい風が毛並みを揺らしていた。

通りは既に薄暗く人も疎らになっている。郭斐林と二人の弟子は木傀風と常施慧を挟んで両脇について歩いている。武大だけが一人後方に離れていた。

「そうだ、忘れてたわ。大さん、中さん達を呼んでこなければ」

常施慧が後ろを振り返り武大に言う。木傀風が立ち止まって振り返った。

「どこまで行っておるんだ？」

「あーそんな遠くじゃない。いつもの店さ」

「大さん、すぐ呼んで来て」

「こんな所で待つのは寒いもう。一旦、斐林の屋敷に行つてからにせよ。一度行けば場所も分かるだろう」

木傀風は背の毛皮の端を両手で掴んで首を縮めている。

「……場所は知ってる。先に行つて貰つて結構だ」

武大はそう言つて踵を返し、来た道に戻り始める。

「ちよつと、大さん何故郭さんのお屋敷を知ってるの？」

「この街では有名なんだろう？ 儂がすでに知つても良いだろうが。此処に何日居ると？」

常施慧が声を掛けると武大は面倒そうに顔を顰めて大声を出した。

「そんな……そんな言い方しなくても……」

常施慧は急に呟くように言つて俯いてしまった。それを見た武大があわてて駆け寄る。

「あー、すまん。その、ちよつと喉がおかしくて何故か大声が出てしまったのだ。はは……もう辺りは静かだというのに……びっくりしたか？ 施慧、許してくれ」

武大は常施慧の両肩に手を添えて体を曲げ、常施慧の顔を覗き込んでいる。

郭斐林はその様子を見ながら微かに微笑んでいた。

（この二人、夫婦かしら？ 二人ともちよつと変わったところがあるようだけれど、仲が良いのね。まあ木道長にお仕えしてる人なら変わつても別に不思議じゃないかも。それにしても……この武大という人はどういう人なのかよく分からないわね）

武大は暫く常施慧に優しく声を掛けながら時折その白い頬を撫でている。たとえば夫婦でも街中でこんな振る舞いを見せるなど郭斐林にはとても考えられない。じつと二人を眺めている訳にもいかず、

傍に居る鄭志均に声を掛ける。

「志均、先に行って王さんに部屋を暖めておくように伝えて」

「分かりました」

鄭志均はすぐに小走りで屋敷に向かう。

「おい、はよう行って二人を連れて来い。儂等は先に行っておるからう」

木傀風が毛皮に顔を半分埋めて目を細めて言う一人、先へ歩き出した。

「ああ、すぐ戻る」

武大は答えたが顔は常施慧に向いたままだった。

武大が通りを戻って行き、再び四人が歩き出す。もう人とすれ違う事も殆ど無くなった。

屋敷の前の通りまで来ると、前方の門の前に数人の人影が見えている。郭斐林はすぐにその一番前に立っているのが白千風だと気付いた。白千風は屋敷に帰ってすぐに郭斐林が木傀風を迎えに行った事を聞いていた。

「木道長、ようこそお出で下さいました。白千風でございます」

白千風は真っ直ぐ木傀風の前に早足で歩み寄りその場で拱手して頭を下げた。

「うん。世話になる」

木傀風は短く答えて目を細めた。相変わらず首を縮めて寒そうにしている。

「さ、中にお入り下さい。陸総帥がお待ちでございます」

白千風はそう言って木傀風の脇に立ってその前に手を伸ばしたが、木傀風はじっと白千風の顔を見て動かなかった。

「陸……総帥が居るのか？」

「え……？ はい。既に道長様がこの武慶にお越しと聞きましてすぐに総帥にお伝え致しましたところ、大層お喜びになられました我が屋敷まで参られたのです」

「うーん」

木傀風は小さく唸って眉根を寄せたが、

「ま、仕方ないか」

そう呟いて歩き出した。白千風は怪訝な面持ちで郭斐林を見たが、郭斐林はただ頷き返しただけで木傀風の後に続いて行く。

「師妹、お連れの方々……あの御婦人だけか？」

白千風が郭斐林の腕を引いて小声で囁いた。

「もう少ししたら来られるわ。と言ってもあと二、三人じゃないかしら」

前庭の奥、建物の入り口付近には白千風の弟子達や家人達が木傀風を迎えた。皆整列して頭を下げている。木傀風はその前まで来ると、

「すまんなあ。寒かろう。さ、皆一緒に入ろう」

そう言って一番手前に居た弟子の肩に手を置いて皆に向かって屋敷に入るよう促した。弟子達は顔を見合わせて驚いて居たが、木傀風が皆を前へ押しやるように腕を伸ばし、

「さ、入ろう。寒いわい」

と言うので皆笑みを浮かべてぞろぞろと中へ向かった。

白千風と郭斐林に連れられた木傀風と常施慧は、弟子達が戻って行くのとは反対の方向にある一室に通された。そこにはただ一人、真武剣派総帥、陸皓の姿があった。

陸皓は木傀風を見るとゆっくりと立ち上がり、口尻を持ち上げてニヤリと笑った。対して木傀風の方は陸皓とは逆に口尻を下げて首を引っ込めるような仕草を見せる。二人の老人が言葉を使わずに奇妙な挨拶を交わした。少しの間を置いて陸皓が口を開いた。

「おぬし、あの宿に居ったそうじゃな。どうだったかな？」

陸皓の声はまるで笑いを堪える様に普段より高めだった。木傀風は自分の白い後頭部を撫でながら、

「別にどうもこうも無い」

木傀風の視線は陸皓から外れて彷徨っている。周りの白千風達には話の脈絡が見えない。

「あの宿はどうに無くなったのだぞ？ 今あるのは到底まともな人間の近付く所ではない。いずれ一掃せねばならんが……」

木傀風は黙ったまま引き続き辺りを眺めながら聞いている。

「前の主は亡くなった」

陸皓の顔から笑みが消えてそう言った時、木傀風の視線が一気に陸皓へ戻された。

「別に病でも何でも無かった。老衰じゃな。それにしては早すぎたが……。しかしもう満足だと儼に言ったのじゃ」

白千風と郭斐林の二人は、今陸皓が話しているのが今の環龍客棧の場所に昔あった宿の女主人の事だと悟った。喬儀きょうぎという女性で陸皓と同世代で旧知であるという事は知っていた。宿を営んでいたのはもうかなり前で、郭斐林が陸皓の弟子となった十代の頃、つまりもう三十年近く前に店を人に譲っている。ずっと独身を通し、堅実な商売で財を成して比較的若くして隠居生活を送っていた。婦人の一人暮らしでしかもそれなりに金を蓄えているとなればおかしな輩がすぐに群がりそうなものだが、その時すでに真武剣派を興してまさに向かう処敵無しと言われていた陸皓と親しくしていた事はよく知られており、それによって守られていたと言っても過言では無かった。その喬儀が無くなったのは五年程前の事である。どうやら木傀風もその女性を知っていたのだろう。偶然に環龍客棧に入った訳では無い様である。

「おぬし前に来たのはいつだったかな？」

「さて、覚えておらんなあ」

「もう十年前でございます。前回の真武剣派三十周年のお祝いにお

越し下さいました」

郭斐林がそつと進み出て二人に告げた。

三十七

「儂等は今もう年寄りだ。儂とおぬしとて次があるか分からんのだ……」

陸皓がいつに無く力なく言葉を発する。普段、矍鑠かくしゃくとした師を見ている白千風と郭斐林はハツとして陸皓の顔を見た。陸皓は顔を上げて笑顔を再び見せる。見慣れた血色の良い顔つきで二人の弟子はホッと胸を撫で下ろす。

「よく来てくれた」

よく通る声を発して木傀風に歩み寄った陸皓はゆっくりとした動作で木傀風を包み込むように両腕を回し、木傀風も同様にして応じる。しかしすぐに、

「昔ならこんな事をすればお互い無事では居られなんだろう」

木傀風はそう言いながら腕を下ろした。

「ハハ、そうじゃな。お互いその両の手で急所をいつでも攻められる。しかし」

陸皓はじつと木傀風の目を見つめる。

「おぬしと知り合って数十年、互いの急所など興味も無かった。さあ、座ってくれ」

木傀風は陸皓の前に卓を挟んで腰を下ろした。

陸皓と木傀風だけを残して他の者は部屋を出ると、郭斐林が常施慧達に用意した部屋へと案内する。廊下を二人が歩いていると前方の明かりの漏れていた部屋から孔秦が家人の男に脇を抱えられながら出て来た処だった。

「もう大丈夫な様ね」

「アッ、師娘……申し訳ありません」

孔秦は慌てて郭斐林の方に体を向けようとしたが思うように動かず体勢を崩す。支えていた男が必死で孔秦が倒れるのを防いだ。

「話は後で――」

「あの……」

郭斐林と常施慧の言葉が重なった。

「あ、あなたは……」

孔秦は目を見開いて常施慧の顔を見たがすぐに頭を下げる。

「ハハ……あの……すみません」

「秦、何を言ってるの？ まだ混乱でもしてるのかしら？」

「いえ、そんな事はありません！」

「あの、本当に……道長様が？」

常施慧が訊ねた。

「いや、私が勝手に転びまして……それでどこかに腰をぶつけたのでしょうか。何ともみっともない処をお見せ致しまして……」

「そうね。後で話は聞くから休みなさい」

郭斐林が少し強い口調で言うと、孔秦は頭を垂れて再び男に支えられながら脇に避けた。

「常さん、参りましょう。この先に部屋を用意しましたから」

「はい」

常施慧は孔秦に軽く会釈をして郭斐林に従い、孔秦は黙って常施慧の後姿を見つめていた。

木傀風が屋敷に着いてからかなり後になって武大は二人の弟を連れて現れた。武大は孔秦を見つけて言った。

「木の爺さんが本気なら瞬殺だ。今お前さんが生きていると言う事は体は全く問題ない筈だ。爺さんはそういうのがうまい。やたらとうまい」

「全く、木道長には敬服致します。あんなみっともない処を道長にお見せしてしまってお恥ずかしい限りです」

「なあに、恥ずかしい事などあるものか。爺さんから見ればおぬしが少々武芸が出来たところで素人も同然。この屋敷の人間も皆同じだ。ハハ」

確かに木傀儡風と比べればそうかもしれないが、この言葉を郭斐林が聞いたら何と言うだろうか。孔秦は周りで誰か聞いてないか気配を確かめた。

「で？ 爺さんはどうやった？」

「私はあの時、環龍に居た連中に絡まれて……あの連中が木道長に無礼を働いたりしてないか様子を窺いに行っただのですが……」

三十八

「爺さんはそんな事気にしたりせんわ。此処に来てから退屈な毎日だ。あいつらが絡んでくればそれはそれで面白いではないか。まあ、あんな奴らでは爺さんも物足りんだろうがな」

「ハハ……それで、私が隠れて中の様子を窺って居た処を見つかってしましまして、あの者達は何かあればすぐに暴れたがる様な連中ですから、まあちょっと遣り合う羽目になってしましまして」

「ほう。おぬしが真武剣派の門人である事はあつちは知らんのか？ そんな訳あるまい。余程腕に自信があるか、それともおぬしを弱いと思っているのか――」

武大の物言いには全く遠慮のかけらも無い。思いつけば口に出す性分の様だ。孔秦は苦笑いしながら話を続ける。

「我が派では、いや、どこも同じでしょう。あの手の輩と喧嘩する為に武芸を師から教わって居る訳ではありませんから出来るだけ関わらない様にしています。向こうに怪我でもさせては後々色々と難癖を付けられて面倒な事になってしまいます」

「そうなたら皆で押しかけて叩き潰せば良いではないか。あんな奴らは居っても碌な事無いだろうが」

「まあ、場合によっては……」

「爺さんの話だ。何で爺さんが出てきた？」

「あそこにはいつも連中がたむろしてますから騒ぎになってしまつて、それで木道長は気付かれたのでしょうか。私は気が付かなかつたんですけど突然私と相手の男は引き離されました。正直、道長がどのような手を下されたのか全く解らないんです」

「で、すぐに気を失ったという訳か」

「はい」

「拳けんであつたか掌しょうであつたか、それとも点穴てんけつによるものか、それも解らんか？」

「点穴の類では無いと思います」

「では掌だな」

「どうでしょう？」

「多分あれだな」

「どのような？」

「それは言えん」

武大はニヤニヤしながら孔秦を見た。

「ほれ、あそこの壁の穴——あれの話は聞いたか？」
「え？」

武大は殆ど見えなくなっている暗がりを指差している。昼間武大が壊した塀の場所である。

「壁に穴？ 何も知りませんが」

「そうか。明るくなったら見てみる。掌の技だが壁に穴が開いた」
武大は自分がやったにも拘らず他人事のように平然としている。

「木道長が……？」

「あの壁、爺さんの機嫌でも損ねたかな？ ハハ、ハハ」

「まさか」

「爺さんの手ではないが、非常に近い系統の技で凄まじい衝撃を生み出す。おぬしにやったのとは違う。同じだったら木っ端微塵だ。しかし原理は似ているな。出所は一つだ。それ以上は秘密だがな」

孔秦は武大が一つの技について真面目に語っているのが少し意外に思えた。

「清稜派の技なのですか？」

「儂は清稜派の武芸など知らん。爺さんと一緒に居るが習った事も無い。だが、爺さんの持つ技の中で一つだけ儂にも使えるものがある。それがあの壁の穴を作ったという訳だ」

「あ、あなたが壁を壊したのですか？」

黙っておくつもりがつい口が滑ってしまい、武大は慌てた。

「あー……事情だ。事情があったのだ。おぬしの師匠か？ 郭という女……あれが知ってる。もう聞くな。儂も言わん」

「武大殿……その方は私の師娘で我が派総帥の直弟子。その、あまり……」

「真武剣派のお偉いさんという訳だな？ 爺さんもよく知っているよ。うだし、ま、儂も覚えておく事にしよう」

三十九

翌朝、孔秦は早くに目が覚めて体を確かめる。昨日あれほど痛んでいた腰も何とか一人で歩けるところまで回復していた。特に何をすることも無かったが陽が十分に昇るのを待ってから木傀風に挨拶をする為に、郭斐林が客室とした部屋を訪れた。

「本当に此処の者だったのか。何故喧嘩しておったのだ？」

孔秦は昨晚武大に話したのと同じ事を木傀風にも言った。木傀風を心配して見に行ったら連中に絡まれたなどとは到底言えなかった。

「もう具合はよろしいのですか？」

常施慧は心配そうに孔秦を見ている。

「はい。ご心配をお掛けしまして……」

「痛めつけた訳ではない。何か感じたか？」

「いえ、何も……」

「そうだろう。そうしたのだから」

木傀風は淡々とそう言って孔秦を見つめた。孔秦は黙ったまま少し俯いたが他の誰も口を開かず妙な間が空いた。

「では……失礼致します」

「うん」

廊下へ出て部屋の扉を閉めた孔秦は少し大きく息を吐いた。緊張したという程でも無いのだが木傀風と言葉を交わしたのはこれが初めてで、何を言えば良いのか分からなかった。とりあえずの挨拶を済ませてこの場を離れた。

孔秦はふと足を止め、廊下から庭に下りて昨晚武大が指差した方へと歩き出した。角を曲がり堀の方へ目をやり思わず足を止める。壊れた堀の前に郭斐林と白千雲の二人が何やら話し込んでおり、何故か孔秦は咄嗟に建物の陰に身を隠した。

（白千雲師伯だ……何事だろう？）

孔秦はその場で耳を澄ました。

「大兄さん、師父にお見せしたら何と仰るかしら？」

「……それはならん。師父はあの時、これ以上何も言わぬし儂にも聞いてはならんと仰ったのだ。一切関わらぬという訳だ」

「じゃあ、何故師父はあの技を大兄さんに見せたの？ 一度見せて

「何も教えない、何も聞くな」なんておかしいじゃないの」

「それはおそらく」

白千雲は少し間を空けてから続ける。

「師父の編み出された我が真武剣の技では無いからだと思う。師父は少なからず掌法も修めておられるが、今までそれらを弟子に伝えられた事は無い。お前は見た事があるか？」

「いいえ、無いわ。大兄さんが師父の気まぐれで見せてもらったこの技だけでしょう。私は直接見てないけれど」

「まだ同じかわからんぞ。先程お前が見せたその武大とやらの技の様子では近いものがあると思うが……」

「大兄さんはあの時からこれを修練しているの？」

「……フツ、それは秘密にしておこう」

「師父も知らない？」

「ああ。あれから一度もこれについては口に出されない」

「それにしても興味は尽きないわね。別物なら何ともないけど、もし同じなら……あの武さんと師父の共通点は何？ 技は誰が考え出したのかしら？」

「掌法の秘伝は古くから各地にあらう。その中の一つに過ぎんかも知れんぞ？」

「それなら何故師父はそんな思わせぶりな態度を？ きつとこの技と師父には私達が思いも寄らない過去があるんじゃない？ あの武大つて人……あつ、もしかして木道長も御存知かも知れないわ！」

「師妹、そのくらいにしておけ。お前が色々探るのは勝手だがそれを師父に知られん様にな」

「分かってるわ」

四十

二人の会話は孔秦にもよく聞こえていたが内容はあまり理解出来ていなかった。

（あの塀は武大殿が壊したのに何故太師父様が関係してくるんだ？
そもそも何故武大殿が塀を……？ 何か揉め事があったのだろうか？）

そう考えていると白千雲の言葉が再び聞こえてくる。

「師妹、いよいよ英雄大会が迫ってきた。取り急ぎ此処は修復してそっちに専念するんだ。抜かりの無い様にな」

「ええ。あ、そうだわ、今回師父は千河幫はんぼうしゅの范幫主にも声を掛けられたそうね。来られるのかしら？」

「うむ。とりあえずは伝えてあるが、どうだろうな。向こうも協議

している事だろう」

「もし真武観に范幫主が姿を現したらきっと誰もが驚くわね」

「ん？ お前は会ってないのか？ 先のヒヨウ局の件で一度武慶に来て師父と会ったと聞いているが」

「私は会ってないわ。それと今回の英雄大会とは全く別じゃないの。皆、范幫主を見たらどんな反応するかしら。見ものだわ」

「確かに我が方とは長く疎遠だったが、范幫主は優れた人物であると評判だ。私もそう思っている。ヒヨウ局の話も知れ渡っているから今回范幫主が来たとしてもあまり不思議には思わない」

「そうね」

「さて、そろそろ私は戻るぞ。師父と打ち合わせねばならん事がまだ残っている。お前達も早めに真武観に参れ」

「ええ」

どうやらこの場での話は終わる様だ。孔秦は音を立てないように注意を払いながら離れる。

（范幫主？ 緑恒の范凱幫主も来るのか。これは凄いぞ）

具体的に何が凄いのかその場では解っていなかったが長らく何も無かった真武剣派と北辰の関係が再び動き出す様な気がして孔秦は胸が高鳴るのを感じていた。

郭斐林の声が響いている。

「秦と程青は私に付いて真武観へ来なさい。ちゃんと段取りを把握して他の弟子達にも伝えるのよ。志均は二人選んで豊撰堂の岳さんの所へ行つて。調度品の用意が出来ているから真武観に運ぶのよ。それから王さん、申し訳ないけどあの塀の修繕をしてくれる所を探してくれないかしら？ 一番早く取り掛かってくれるところを」

「分かりました」

皆それぞれが郭斐林の指示に従ってこの場を離れて行く。何も言われなかった弟子達も部屋を出て行くが、李小絹だけが残っていた。

「あの……私は、何かありませんか？」

「無いわ」

郭斐林は目もくれずに即答する。

「……そうですか」

「大会が終わるまでは忙しくなるから、あなたには色々雑用を頼むからそのつもりで」

「……はい」

李小絹はまだ郭斐林の正式な弟子ではなく殆どの時間を以前と同じ小間使いとして働いていた。大会が終わるまで当分変わりはないだろう。仕方の無い事だとは思うが面白くない。肩を落として部屋を出ると、丁度そこへ孔秦が戻ってきた。

「小絹、どうしたんだ？ 元氣無いな」

「あ、こ、孔師兄」

「ハハ、孔師兄か。何だかそう呼ばれると変な感じだなあ。じゃあこれからは君を師妹と呼ぶべきかな？」

李小絹は気恥ずかしくなって俯いてしまう。

「君が早く剣を習いたがっていると程青から聞いてるよ。弟子入りを頼むのも随分熱心だったって？ 今回の大会は我が派にとって重要なものだから皆そっちに忙しくなるが、終わったら一緒に稽古しよう。楽しみだよ」

孔秦の笑顔がとても柔らかい。李小絹はチラと視線を上げたがまた俯いて頬を染めた。もうすぐ弟子になれる。真武剣派四十周年の英雄大会はまもなくであった。

第六章 一

人が溢れている。比較的大きな街であるこの武慶でもこれほどの人出になる事は滅多に無い。出歩いている人間の大半は他の街から遙々やって来た者達で、通りに溢れんばかりの話し声には時折何を言っているのかさっぱり解らない様な訛りが混じっていた。

この日の空は雲が多く陽が隠れるとすぐに空気が冷たくなり、通りは幾ら人でごった返していても流石にこの季節は寒さが肌に染みる。特に急ぐ必要も無い者達は通りにある様々な店に暖を求めて集まり、客商売をしているこの街の人間は忙しく仕事に追われながらも滅多に無い自らの店の盛況ぶりに笑いが込み上げて仕方が無い。

「真武観しんぶかんに足を向けて寝る訳にはいかんなあ」

「もつと頻繁にやってくれないもんかねえ」

「無理言うな。とにかく十年に一度の貴重な稼ぎ時だ。気合入れにやらん。仕事、仕事」

料理屋の類は幾ら大勢客が押し寄せたとしても中に入れるには限度がある。そこで普段なら置いていないみやげ物の類を店先に陳列したり道行く客に酒を一杯ずつその場で売るような事もしている。どこの店もだ。そのために見た感じ何処も同じような店に見えてしまう。それぞれの店の前にはこれまた同じような新たに雇い入れた売り子の威勢良い掛け声が響き、その音量を競い合ってた。

「都に負けず劣らず、この街もなかなか賑やかだな」

「それはどうでしょう？ 真武剣派の催し物が終われば意外に静かな街かもしれませんよ？」

「俺は初めて来たが旦那もそうなのか？」

「確か、初めてでは無い筈です。しかしそれさえはつきりしない程昔ですよ、来たのは。この風景にも全く見覚えがありませんし」

高そうな濃い青の衫さんを纏い手に扇子を持った書生風の男と、背に

大きな荷物を背負い左手には白い布で覆った棒状の物を杖の様に持っている褐色の肌の男が、ぶらぶらと歩き辺りを眺めながら話している。すぐ後ろには褐色の男と同じ格好で同じように荷物を担いでいる男が三人、前の二人の話を聞きながら付いて歩いていた。

「旦那、今日は此処に泊まるんだろ？ 早いとこ宿見つけて荷を降ろしてえな」

褐色の男はそう言って背中荷を揺すって担ぎ直す。

「そうですね……実は真武剣派の英雄大会とやらをちよつと覗いてみたいと思うんですが、そうすると二、三日滞在しなければなりません。どうですか？」

扇子の男はそう言いながら褐色の男を見た後、振り返って付いて来ている他の三人にも目を遣った。持っている扇子は広げてはいない。この肌寒い通りで扇子を広げて使う者などいる訳が無い。

「儂等あは別にかまへんですけど」

三人の真ん中の男が言う。荷物を背負う男達は褐色の男も含めてがっしりとした体つきで短めの袖から伸びている腕は太くかなり逞しかった。喋りが変に年寄り臭いが方言のせいだと思われた。見た目は三十代後半か四十代辺りか。扇子の男は細身でその身形は全然雰囲気が違うが年齢は同じ様なものだろう。

「俺達は旦那がそうしたいなら従うだけさ。早く戻らにゃならん用事がある訳じゃないしよ」

褐色の男が言う。扇子の男はにっこりと笑みを浮かべた。

「何処が宿なのか分かりませんし、とりあえずその辺で休みましようか。何か食べましよう。そこで宿の事も聞いてみます」

扇子の男がそう言った後再び男達を見回すと、皆揃って頷いた。その後、五人は立ち並ぶ店を覗いて回るが何処も人で溢れていて入れそうな所が見当たらない。運良く席を確保できた者達は皆大声で楽しそうに笑いながら酒を飲んでいる。

「お祭り騒ぎだな。そんなに面白い事があのかねえ？」

「さあ？ しかしこういった催しはそうあることでは無いでしょう

から、特別、関係していなくても騒ぎたくなるのが人情というものでしょう」

引き続き見て回るがどこまで行っても空いている店は見つかりそうに無く、暫く歩いていると少し大きめの屋敷の門前を掃いている老女を見つけ、扇子の男が声を掛けた。

「失礼致します。お伺いしたい事があるのですが」

扇子の男が老女の隣に立って丁寧な頭を下げると、老女は腰に手を当ててゆっくりと上体を持ち上げて話しかけてきた男を見た。

「宿を探しているのですが、この辺りにございませんでしょうか？」

「宿？ あーあ今頃」

老女は変に言葉を切って顔を顰めながら手を大きく振った。

「どこも空いてないよ。あんたら何処から来なさった？ もっと早く来ないと駄目だね」

「英雄大会、ですか？」

「そう。そうだよ。色んな処から人が来てるんだよ。この近くはまづ無いね」

老女はそう言うのと再び腰を曲げて足元を掃き始めた。

「そうですか……では、此処から離れた所ならなんとかなるでしょうか？ かなり大きな街の様ですが」

「そうだねえ、無い訳じゃあ無いけど、真武観から大分離れるよ。あんたら真武観に行きたいんだろう？」

「ええ、まあ折角ですから見て行こうかと考えています」

「まあ野宿が嫌ならどうにかしないとねえ。此処は街の北側でこの通りを真っ直ぐ南に行った所に真武観がある。其処を中心にして宿は埋まっているだろうから、そうだねえ、此処から西か東か端まで行ってまた聞いてみるんだね」

老女はそう言って地面を掃きながら少しずつ離れて行く。

「分かりました。有難うございます」

扇子の男は一礼して老女の傍を離れた。

「どうやら食事は宿を探し当てるまでお預けになりそうですよ？」

「やれやれだな。まあまだ暫くは腹減らしてぶっ倒れる事は無いな。どうだ？」

褐色の男が他の三人の男を見ると、

「大丈夫だ」

と一人が言い、残りの二人も頷いている。

「では、他を当たってみましょうか」

五人は再び歩き出し、今居る通りから西に向かった。

もうかなり歩いていたが、荷を背負った男達は全く疲れを見せる事も無く扇子の男に付いて行く。武慶を取り囲む西の城壁が間近に見えてくる頃には先程の中央の通りとはうって変わって人の数はかなり減っている。辺りは民家ばかりで何かの店らしい建物も見当たらなかった。

「人は減ったが宿があるのか怪しいな」

褐色の男が言うと共に扇子の男が此処の住人らしき男に声を掛けた。

「宿？ この辺には普通の家しか無いけどなあ。こんな街のはずれじゃお客が来ないからな」

住人の男はそう言って荷を担いでいる男達を眺めている。

「そうですか……」

「昔はあったんだ。……今は小さい居酒屋をやってる所があるんだが、行ってみるかい？ 今は使ってない部屋があるらしいが」

扇子の男はそれを聞いて振り返ると、褐色の男が頷く。

「ご紹介頂きますか？」

「いいよ」

住人の男は早速歩き出した。

先頭に行く住人の男が立ち止まったのは周りにある民家と何ら変わったの無い古い建物の前で、居酒屋を営んでいるなど想像も出来なかった。近くの知り合いだけが集まる様な店なのだろう。住人の男は中に声を掛ける訳でもなく無造作に扉を開いた。

表は普通の民家だが中には確かに客の為の卓が三つ用意しており、

その内の一つには男が二人腰掛けて話している。一人が首を捻って入り口の方に振り返った。

「どうした？　こんな時間に。また嫁さんにどやされるぞ？」

「そうじゃない」

案内してきた住人の男はその身をずらして後ろの扇子の男に入るよう促した。

第六章 二（前書き）

※表示できない文字
青コウⅡ青＜金工＞

第六章 二

扇子の男はすつと前へ進み、丁寧な頭を下げた。

「失礼致します。私共は宿を探して参ったのですが、あいにく空いている所が見当たらず、こちらの方にお尋ねしたところ、此処へお連れ頂きました。私共五人なのですが、泊めて頂けないでしょうか？」

扇子の男の上品な身形と丁寧な口調に中に居た二人の男は改めて目を見合わせている。

「あんた……ちゃんと目は見えてるのか？　こんなボロい家に泊まりたいと？　それにとつくの昔に宿屋は廃業してるんだが」

「あなたが此方のご主人ですか。私は城南じょうなんの商人で周維しゅういと申します。長旅をしておりますので雨露がしのげて横になれる場所さえ貸して頂ければ良いのです。どうかお願い出来ませんか？」

「んー、まあ部屋はある事はあるが……誰かを泊める準備なんてしてないからなあ」

この家の主人の男はそう言って困ったという様な顔つきで周維と名乗った扇子の男を見る。続いて表にも居る周維の連れの様子を窺った。

「この者達は私の所で商いを手伝ってくれている者達でして……私を含めまして五名でございます。一部屋だけで構いません。勿論、急に押しかけたのですからその分もちろんと上乘せして代金をお支払い致します。何卒お願いいたします」

周維は深々と頭を下げる。

「あんたら、真武剣派のアレで来たのか？　招待客以外が真武観に入るのは明後日だけだが、それまで居るのか？」

「出来れば」

「んー」

主人は腕組みをして考えている。

「一部屋で良いって言ってるんだし、貸したらどうだ？ 金も払ってくれるんだし」

主人と話していたもう一人の男が目の前の椀に酒を注ぎながら言った。

「んーそうだな。いいよ。泊まっていけ。だが飯は作れんぞ。安物の酒とちよっとしたつまみ位は出せるがな。あー、泊まるのとは別料金だな」

「有難うございます」

周維は繰り返して頭を下げる。

「皆早く中に入ってくれ。風が冷たい」

表に居た四人が中に入ると、案内して来てくれた住人の男が笑って周維の肩を叩いた。

「んじゃ、またな」

「ああ」

家の主人と短く言葉を交わして出て行くのを周維と連れの男達は揃って頭を下げて見送った。

「また随分と大荷物だな。城南からずっと担いで来たのか？」

「いや、都からの帰りです。都で仕入れた物が幾つか」

周維達は主人に促されて近くの卓を囲んで腰を下ろす。荷物を担いでいた四人はそれを背から下ろすが皆自分の膝に置いて床に下ろそうとはしない。結構な大きさなので邪魔な様に思うが貴重な品でもあるのか注意を払っている様に見えた。褐色の男の荷は手に持った棒状の包み以外にも背負っていた荷から何か棒が突き出している。四人共抱え込むようにして座っているので奇妙な光景である。

「その荷物、先に部屋へ持って行くか？ それじゃあ邪魔でしょうがないだろう？」

「いや、お気遣い無く」

「じゃ、酒でも出そうか？ 茶もあるぞ。どっちも美味くは無いがな」

自分の店の売り物を不味いという人間はそうは居ないだろう。しかし主人はそう言って返事も聞かずに奥へ向かった。

「城南か……あんた商人と言ったな。てことはその荷の中身は南方の異国から来たのかな？」

主人と居た男が尋ねる。男はつい先程の主人と周維の会話を聞いていなかったようだ。

「いや、私共は都からの帰りです。これらは都で買った品です。しかし大した品ではありません。城南は遠く離れた田舎ですから都の品というだけでほんの少しは利が出るでしょうが、大した商いではありませんね」

「都か。俺もつい先日都から此処へ帰ってきたばかりでね。方々を回って商いをしている」

男は手酌で酒を舐めながら話している。

「ほう。では同業のお仲間という訳ですね」

「俺は劉だ。一応この武慶ぶけいの人間だが、他所に居ることの方が多いな。城南は行ったことが無いが」

店の主人が酒を持って戻って来る。周維達の卓に置くと、また先程と同じように劉という男の隣に腰掛けた。

「城南か。南方から来る品物売り歩けば相当儲かるんだろう？」

主人が訊くとすぐに劉が口を挟んだ。

「いや、確か……あれだ、城南にはあれがある。何と言ったかな……？ 南の国から入る品は全部持って行かれちまうのさ」

「あ？ さっぱり分からんぞ？」

「商いの元締めというか、交易の全てを牛耳る親玉みたいな奴が居るんだよ。そうだな？ だからあんたはわざわざ都まで出向かないといけないんだろ？ 違うか？」

そう言って劉は周維に顔を向けた。周維は微笑を浮かべ、

「確かに。私共の様な小商いは辛いものがあります。いっその事中原に拠点を移した方がましかも知れませんね」

城南とは武慶から遙か南のこの国の国境に位置し南方の国々との

交易の拠点と言える場所である。南方の国境は古くから城壁が造られて堅く守られ城の南側は異国の土地であったが、先の皇帝の時代にその城壁からさらに南へと領土が拡大される。新しくこの国に併合されたのが城南の街である。

「それもどうだろうな。すでに旨みのある商いは大概押さえられちゃってる。余程うまくやらないとな」

「ではどうやると言うんだ？ お前も都に行ってただろう。稼げたのか？」

主人が劉の顔を覗き込む。

「稼げたとしても無駄足だったとしても人に言う気は無い。この先どこかで俺が行き倒れてたら「失敗したんだな」とでも思ってくれ」「お前とこの爺様がたんまり金を溜め込んでるじゃねえか。しかも未だに現役だ。今度は何を仕入れて来たんだ？ 古代の聖王の剣か？ それとも仙人の書いた秘術の書か？」

「フン、今回の都行きは失敗だ。実は都にとんでもない出物があつたんだが……あんたらは見たいかい？」

劉は周維に訊ねる。

「……何でしょう？」

周維は少し考え込むがすぐ劉に訊き返した。

「何だ？ 何があった？ 幸運を呼ぶ壺か？ 不老不死の丹藥たんやくか？」
主人が茶化す様に言うが、実際に都で話題となる物の中には時としてとても信じられない様な「とんでもない出物」が存在する。真偽は別として、そういう触れ込みの品々が運び込まれる、或いは生み出されるのである。

「剣だ」

劉は短くそう言ってからまた酒を口元に運ぶ。どうやら勿体つけているらしい。

「ほーう。珍しいのか？ 装飾品か？ 抜けば本当に血の雨でも降ると言うんじゃないな？」

「そんな事は……いや、使う奴によってはそうなるかもな」

「それならどの剣だろうと同じだろうが。うちの包丁だって手鍊が手にすりゃ――」

「倚天いてんの剣」

劉は静かに言って主人には目もくれずに真っ直ぐ周維を見つめて反応を窺った。

「ほう」

周維は眉根を寄せて顔を少し傾ける。

「それはまた「とんでもない」ですね。一体何処から来たのでしょ
う？」

「倚天？ 聞いたことあるな。大昔の王が作らせた名剣とかいうやつだろう？」

劉がニヤリと笑う。

「そうだ。今回都に現れたのはその内の一振り。倚天青コウの倚天
さ」

第六章 三（前書き）

※表示できない文字
青コウⅡ青＜金工＞

第六章 三

「しかし、剣だろう？　とんでもないって程では無い様に思うが？」
「だがこれほど有名な剣も無いぞ。かなり古い物だが今の世にあっても並ぶ物無しの名剣だ。伝聞だけじゃない。実際にその二振りの恐ろしさを味わった人間が居るんだからな」

劉が話すのを周維は黙って聞いている。既に聞き及んでいる話なのだろう。主人はといえば興味が沸いてきたのか少しばかり身を乗り出している。

「誰だ？」

「誰って……そうだな、此処にも目にした者は結構居るんじゃないか？　真武剣派の人間とかな」

「ではその倚天剣の持ち主は真武剣派の方々と遣り合った事があるという事ですか？　その人物は青コウ剣までも持っていたと？」

真武剣派という名が出て来ると古の二振りの剣が急に身近な物に感じられる。主人が口を開こうとしたが先んじて周維が劉に訊ねた。
「まあ目にした誰もがそれを手にとって眺めた訳じゃ無いからな。本物であるという確証は無い筈だが、しかしその二振りを相手にしなきゃならなかった奴らは相当恐ろしい想いをしただろうよ。真武剣だろうが何だろうが相手にならん」

劉は主人や周維達をまるで脅かそうとでもするかのように声を低く抑えゆっくり視線を動かした。

「なあ、誰が持ってたんだ？　どうやって手に入れたんだ？　何故都で売られてたんだ？　誰か買ったのか？　お前の商いとどう関係がある？」

主人は半ば面白がって立て続けに質問する。

「……お前本当はどうでも良いんだろ？　都でそいつを目にした時は喉から手が出るほどだったが、とんでもない値が付けれられててな。手が出なかった。まあそれは仕方無い。……一緒に行ってたうちの

爺さん、俺の親父なんだがその時とんでもない事を言い出しやがった」

「爺さんは大抵とんでもない事ばかり言ってるだろ」

「まあな。その爺さんはその倚天に匹敵する品を持ってるとか言い出した。倚天剣が売りに出されたのを聞きつけた人間が大勢集まってきたからな、そこでなら法外な値をふっかけても買う人間が居る筈だという訳さ」

「じゃあその倚天の剣ってのは誰か買ったんだな？ 幾らだ？」

「残念ながら買った奴の顔を拝む事は出来なかったんだが後で聞いた話では、黄金二千五百両」

金額を聞いた主人は言葉を失った。何か言おうとしたのに声が出なかったという感じで口が開いたままだ。周維も目を大きく見開いていたがその驚きは主人程ではない様である。

「一体……何処で何やってる人間なんだ？ 幾ら凄い剣と言っても剣だぞ？ 全く……大金持ちってのは金だけあって頭は空っぽなんじゃねえか？」

「ハッ、頭空っぽでどうやってそれだけの金が作れる？ まあとにかく買った奴が居るんだよ」

「で？ 爺さんの売り物はどうなった？ 何だったんだ？」

「持ってなかった」

「あ？」

「爺さんの言う凄い品とやらは持って行ってなかったんだ。うちの蔵に眠ってるんだと。呆れたね。そんな凄い物なら忘れてんじやねえよ……」

「ハハッ、爺さん呆けたな。しかし次また持っていけば良いじゃねえか。もし今回そいつを持って売り出したとしてもだ、とんでもない剣に対抗したところで後出しでは怪しまれるかも知れんだろう？

そいつは何なんだ？」

「今は言えん。と言うか俺もまだ目にしてないんだ。あの蔵にまともな品があるって事が怪しいんでな。言った後で実はがらくただった

たなんて事になれば大恥だ」

「ふーん」

主人は前方に乗り出していた体を起こし背筋を伸ばして腕を組み、ずっと黙っている周維と周りの男達に目を遣った。周維は微笑を浮かべながら主人を見返す。一緒にいる男達は特に感想も無いといった表情で劉の方を見ていた。

主人は周維を見て話題を変えた。

「あんたはこれから城南か。えらく遠いな。まさかずっと歩きか？」

周維は微笑を崩さず涼しげな表情は変わらない。横に居る褐色の男とは対照的な白い顔で、南の城南で暮らしているなら余程日差しを警戒しなければすぐに黒くなってしまふ筈だった。

「いや、馬があるのですが中央の通りに入った所で馬は邪魔だと言われまして。今は預けてあります」

「ああ、そうか。ま、今だけだ。明後日の真武剣派の英雄大会が終われば騒ぎは治まる」

「私は今回が初めてなので楽しみにしています。御高名な方々がお越しになるんでしょうね。もう武慶には入られているんでしょうか？」

「居るんじゃないか？ 俺は会ってもわからんが」

劉が口を開く。

「此処に戻ってすぐに見たぞ。都の田家でんけの一行をな」

「田？ ああ、総帥の娘婿だな？」

「そうだ。陸蓉りくようの姿は見えないが多分一緒だろう」

「田家といえば宰相、田偉様でんいの御一族ですね？ 真武剣派は朝廷とも繋がっていると……」

周維は劉に視線を移し、

「意外ですね。真武剣派と言えば今や江湖こうしにおける象徴的存在になりつつあると認識していたのですが」

「そいつは随分と持ち上げたもんだが、実際の真武剣派は言うほどのモンじゃ無い。そもそも真武剣派の人間は特別多いという訳でも

無いんだ。少し前までは真武剣派と東北の北辰教ほくしんが武林ぶりんの二大勢力なんて言ってたが、はったりだ。あっちの一人勝ち、圧倒的な差だな。何万も居るんだ。万だぞ、万。それに比べてこっちはどうだ？ 真武剣派に属する人間は武慶以外にも居るが、全部かき集めたって……千にも程遠い。全然足りん」

「なるほど。そこで今回の様な大会ですか」

「ああそうだ」

劉はまたニヤリと笑う。劉は此処の主人よりも周維の方が色々と話しやすい様である。主人は黙って劉と周維を交互に眺めていた。

「陸皓は自分の作った真武剣派そのものをでかくしたいとは思っていない様に見える。そのかわりに国中のあらゆる組織と繋がりを持とうとしている。武林のお仲間は何論だが都だけじゃない各地の名士達とも接触するにやぶさかではないさ。それこそ「象徴」的なのが都の田家だ。娘を嫁にやったのはもうずいぶん昔だが、きっと何か思惑があったんだろうな」

「では今回の大会は真武剣派と繋がりのある人達が集まって結束を固めるのが目的なんでしょうね。やはり今でもそれは対北辰教という事を意識したものでしょうか？」

「今までならそうだが、今回はどうだろう？ まあ共通の目的、共通の敵を持てばやり易いだろうな。だが近年東北方面は静まり返ってる。今、雁首並べて打倒北辰を叫んでも白けるだけじゃないか？

怪気炎だな」

劉の言葉を周維は頷きながら聞いていた。

「おい、お前随分と話に力入ってるがそこまでの分析がお前の商売に役に立つのか？」

主人は劉の話を初めて聞いたかの様に目を丸くした。

「役に立つと言うよりも、この位の事は理解して当然だな。俺達はこの国のあらゆる所が商談の場になるんだからな」

「その通りですね」

「余談だが、倚天剣の出所は北辰だぞ。方崖ほうがいにあった品だ」

「本当か？ ……北辰教が金に困って売り出した——なんてことは無いよな。と言う事は誰かが盗み出したか。それもとんでもなく難しいな。あ、ああそれで真武剣派の奴らが震え上がったって話か。持ち主は北辰の奴……。そんな凄い剣なら教主の持ち物だったんだろう？」

「違う」

劉はまたもニヤリと笑うがその視線は手元の酒に注がれていた。

第六章 四

劉はそのまま暫く口を閉ざしたままで一向に続きを言う気配が無い。しばらく主人は待っていたが諦めたのか肩を竦めた。

「それは、あの殷汪いんおうでしょうね」

劉の代わりに周維が主人に言う。

「あー、なるほどな。そんな奴が居たな」

「しかしながら」

周維は主人を見た後、劉に視線を移す。

「彼は死んだそうですね」

「あんたはそれを見たのか？」

劉が顔を上げて周維を見返した。

「いや、見てはいません。そんな話が遥か城南までも聞こえてきたのです」

「じゃあ、当てにならないな」

「お前何言ってるんだ？ その話はそりやもうそこら中で話題に上ったじゃないか。そいつが死んで武林での対立の構図が変わっていきつつ、いや、もう北辰を恐れる事も無いとか何とか」

主人が劉に怪訝な目を向けた。

「さっき言っただろう？ 向こうは数万、一人死んだらもう取るに足らんなんて馬鹿な話があるか。もう一つ。殷汪が死んだところを見た人間が本当に居るのか？ この武慶がその話題で持ちきりになってから何度も東へ行ってるが、どうもその辺が納得できない。どこまで行っても「そういう話」に過ぎないんだ。俺は、何かあると思ってる」

「……そこまで考えるか。まあ国中に名の知れた奴だったし興味が無い事も無いが、全然縁もゆかりも無い奴だ。どうでも良いけどな」
「調べに行った訳じゃない。商いのついでに色々聞くだけだ」

その後は劉が単なる好奇心なのか仕事の一環なのか分からないが周維に城南の様子を事細かに質問したりしながらすごし、最初は酒には手を付けなかった周維も舐める程度に口にしていた。一緒にいる四人の男は見た目は酒に強そうにも見えるのだが遠慮気味に口を付けていて全く顔色には変化が無かった。

「あんたら、膝大丈夫か？ 少なくともこの家の中は安全だと思うんだがな」

主人は此処に来てからずっと膝の上の荷を抱えている男四人に声を掛ける。褐色の男は頭を掻いた。

「あー俺達は城南の田舎もんですんでこうしてると安心するとか……」

「洪さん、此処なら安心です。荷は降ろして下さい。皆も」

周維が男達に声を掛け、皆頷いて膝から卓の下に降ろす。丸い卓を囲んで座っているのも荷は変わらず男達に囲まれている。

「用心はし過ぎる事は無いからな」

劉がその様子を眺めながら言った。

周維達がこの家に来てから他に客らしい人間は誰も来なかったが、夕暮れが近付いた頃になって入り口の扉が開き、一人の老人が顔を覗かせた。中に居た全員が一斉に顔を入り口に向けると老人は一人一人の顔を見回してから中に入ってきた。

「お、爺さん久しぶりだな」

主人が声を掛けるが返事は無い。口は開いた様だったが何も聞こえなかった。老人は真っ直ぐ劉の隣に立った。

「おい、家に戻れ。馳方がとんでもない事をしでかしたんじゃ。はよう」

老人は劉に顔を寄せて小声で喋る。しかし此処は狭く他に客も無い。主人にも周維達にもはっきりと聞こえていた。

「ハハ、とんでもない、か。爺さんの周りにはとんでもない事が山積みだな」

主人が言っていると老人の顔は丸く口を開けて主人の方を向いた。

「何？ 何の話じゃ？」

「あーいや、何でもない。で、何があったんだい？ 可愛い孫がどうした？」

「お前には関係無いわい。ほれ、はようせい」

「何なんだ？ もう少し説明してもいいだろうが。あいつがどうしたって？」

劉はうんざりした様子で首を捻って老人を斜めに見上げる。

「とにかく来い。すぐじゃ！ わかったな！」

老人は声を荒げてそれだけ言うと言主人や周維達には目もくれずに店の外へと出て行った。

「……全く」

劉は腰を上げて背を伸ばし大きな欠伸をする。

「済まんが失礼するよ。また明日来る」

「大丈夫か？ 全く解らねえが」

「どうせ大した事では無いだろうよ。またな」

「ああ」

劉は周維達の所で足を止め、

「真武観に入れるのは明後日だ。俺も覗きに行くつもりだが都合がつけば一緒に行こう。宴席には上がれないけどな」

「おお、それは是非ともお願い致します」

周維が会釈を返すと劉はそのまま出て行った。

「一体何事でしょうね？ 大事なければ良いのですが……」

「どうだろうなあ？ さっきの爺さんの言ってた馳方ってのは孫、今出てった劉の息子でな。まだ子供だが、何かいたずらでもしたんだろ。命に関わるような一大事なら隠す事無く此処で言う筈さ」

劉が行ってしまったから急に静かになってしまふ。言葉を交わすのは殆ど周維と主人で、他の四人の男達は黙ったままだ。

「部屋を教えとくよ。本当にぼろの物置状態だからな」

「宜しくお願い致します」

周維が立ち上がるとすぐに男達も腰を上げて卓の下から荷を引ッ

張り出した。ちょっとした事なのだが妙に動きが揃っている様に見えて主人の視線が一時男達の方に止まった。しかしすぐに、
「こっちだ」

部屋の隅にある奥への通路へ向かって歩き出し、周維達も従った。

淡い黄色の花を付けた蠟梅が民家の軒先に溢れるように咲いている。真武剣派の英雄大会で多くの人が真武観に詰めかけるというこの日、周維は褐色の男、洪と共に表に出た。持っていた荷を放つてはおけず、かといってずっと持ち歩く訳にもいかなないので他の三人の男達は借りている部屋で待っている事になった。

「見て下さい。此処でも蠟梅がこんなに綺麗に咲くんですね」

「ああ、城南に比べれば遥かに北だからなあ。俺は花なんてあまり知らないけどね」

「寒椿まで見かけましたよ。しかし、普通の品種では無いのでしよう。此処では雪も見られませんから、少し残念ですね」

「旦那、店をもっとこっちに移す事は考えないのかい？ 城南は確かに美味しい商売出来るかも知れねえが、旦那の好みそうな風情なんて全く見当たらないだろ？」

「フフ、そろそろ飽きましたか？」

「あー、いや、そうでも無いけどね。まあ俺はあっちの何て言うかとお散らかった感じが合ってるしな」

柔らかく差し込む日差しの中、少しゆっくりと歩きながら街の東へ向かう二人。風もあまり無くじっとしていれば暖かく感じる。

「……彼はどうなんでしょうね。城南を気に入ってくれるかどうか」

「ん？ ああ、夏^かさんの事かい？ どうだろねえ」

「どうです？ 正直な処を聞かせてください。皆さんの彼に対する印象は？ どう感じているんでしょう？」

「ん」

洪はその太い腕を組み、前方を見たまま考えている。

第六章 五

「そうだなあ……俺が前から知ってる人だから普通じゃないかねえ。ただ単に新しく加わった人員という事になるとちよつとな。何故いきなり特別扱いだ？　って事になりかねない。かと言って、じゃあ急に俺達の頭だと言われてもな。基本的に腕っ節が序列の基準みたいなもんだしな。そりゃああの人が腕を見せる事の出来る場面でもあったら、手っ取り早いよな。口を挟む余地無しだ」

「……そうですね。フフ、今の頭であるあなたでも文句は無いと？」
「他の奴ならいざ知らず、あの人だけにはどうやっても敵わないさ。しかし……当の本人がそんな気にはならないと思うけどな。旦那だってただの用心棒頭にしかくて城南に連れて来た訳じゃ無いんだろう？」

「まあ、そうですね。当分は客人として居て貰う事になるでしょう」
「旦那、一体何をするつもりだい？　わざわざ都まで行って剣も手に入れた。大金はたいてどれ程の価値があるのか、ま、俺にはさっぱりだけどな」

「まあ、徐々に、です。あの剣だけでは特に効果は無いでしょう。それにあなたも知っている通り、あれには対になるもう一本がある。いや、それを手に入れたとしてもまだです。それらは後になって彼が手に入れた物ですから」

「じゃあやっぱり、あの二本の「小太刀」^{こたち}とかいう異国の剣を探すのか？　あの人の……」

「そのつもりです。その二本こそが彼を完成させる。いや、失った欠片を再び——というところでしょうか」

「それは……単なる旦那の興味かい？　それとも何か——」

「ハハ、そうですね、興味……趣味かな？」

「旦那」

洪は足を止めて周維をじっと見遣る。周維も立ち止まり見返した。

「何でしょう？」

「……剣だけでも俺が持ってきた方が良かったか？」

男達の担いでいた荷の中に話に上っていた都で買った剣というのがあるのだろう。周維は微笑を浮かべる。

「あなたが彼らだけでは安心出来ないと判断するならそうして下さい。しかし、私は彼らに荷を預ける事に何の不安もありませんよ？」
「そうか。何でもない」

洪は周維の言葉を聞いてニヤツと笑い、再び歩き出した。

丁度大きな通りに突き当たると周りには人が大勢行き交い、二人はそこで話を中断して街の更に東へ向かう通りを探した。

今世話になっていく居酒屋で出会った劉という商人の男は街の東の方に住んでいるらしく、周維と洪は居酒屋の主人から聞いた劉の家の近くにある招寧寺という寺に向かっていた。劉は真武剣派や今回街に来ていた招待客達の顔をよく知っているらしく、一緒に真武観に行く事になっていた。無論、劉と武林の名士達がお互い知った仲という訳では無く、劉の方が顔と名前を覚えているというだけである。

「ちよつと早かったかな？ 誰もいねえな」

洪が辺りを見回している。二人は招寧寺の古びた門の前までやって来たが、劉の姿は無かった。真武観では正午に真武剣派総帥陸皓が集まった者達の前で何か話す事になっているらしいが、早めに真武観へ行くとしてもまだかなり時間がある。二人は寺の門をくぐってかなり古いらしい寺の境内をぶらぶらと見物していた。

「洪さん、この扁額、真武派の始祖、王志劫おうしきょうによって寄贈された物だそうですね。このお寺は相当古い様ですね」

「陸じゃないのかい？」

「違います。今の真武剣派の前身の真武派です」

「ふーん。何かややこしいな。真武剣って陸が編み出した訳じゃないのか……」

「それは何とも言えませんね。戻ったら夏さんに聞いてみればその辺の事は分かるかも知れませんね」

「ん？ 何でだ？ 夏さんどう関わりがあるんだい？」

「真武剣派と、ではなく総帥の陸皓、それに弟子の筆頭である陸豊りくほうとはかなり深い縁がある様ですよ。聞いてませんか？」

洪は驚いて周維を凝視している。

「ま、そのあたりも彼の謎の中枢部分ですから、簡単には教えてくれないかも知れません」

「……初めて聞く話だ」

周維がゆっくりと振り返りながら扁額の掛かっている本堂に背を向け、戻り始めると丁度そこへ劉が門をくぐって入って来た。

「ああ、此処か。すまん」

「いえいえ、丁度見るものがあって良かった」

周維はそう言って笑う。

「実は……ちょっと今家が騒がしくなってるな。今行けそうに無いんだ」

「何かあったのですか？ あ……劉さん、その血は……？」

周維が劉の唇に血が付いているのに気付く。劉は慌てて指でそれを拭った。

「つつ……ハハ、ちょっと口の中を切っただけだ。何でも無い」

苦笑いをする劉を洪が眉根を寄せて観察するように見る。

「家が騒がしくなっているとは？ それは誰かに殴られた跡では？」

「劉さん、何か問題が起きているなら私達も行きますよ。何が出来るという訳でもありませんが、第三者が立つ事で状況は変えやすいと思います」

劉はまだ何も説明していないが、何故か劉の家で起きている事を見透かした様な事を周維は言う。

「ハハ、気持ちは有難いがあんたらには関係ない事だ。とにかく今は行けない。すぐ戻らねばなんのですまんが先に行ってくれ。俺達も行く事になると思うがきつとすごい人出だ。向こうでは会えん

かも知れんが……。真武観の場所は分かってるか？」

「いや。聞いていけばすぐ分かるでしょう」

「そうだな。今夜この間の店、あんたらの泊まってる所に行くよ。じゃあ……」

劉はそう言っただけで踵を返して足早に去っていく。家に戻るのだろう。

「旦那、どうする？」

洪が周維に訊ねる。

「そうですね……。劉さんが気になりますね。誰かに殴られたのは確かでしょうか？」

「ほぼ間違い無いんじゃないか？　ちょっと痣になってたしな。嫁さんに殴られるなんてのはちょっと考えられねえけど」

「時間はたっぷりあります。ちよつと行っただけ見ましようか。いいですか？」

「分かった」

周維と洪の二人は劉が戻っていった方向へ歩き出す。後をつけるような形になってしまふが劉本人が来なくていいと言った以上、無理やり付いていくとは言えない。とりあえず家の近くまで行って何も無いようなら夫婦喧嘩か親子喧嘩の類だろう。その時は放っておけば良い。

劉の家はすぐ近くにあり、少し行った所の屋敷の門に入っていく。彼の商売はなかなか順調の様で比較的立派な屋敷であった。洪が先を行き、劉の入っていた門の中をそつと覗く。次の瞬間、洪はその首を勢い良く引つ込めた。そしてすぐに周維の許に駆け寄る。

「何か分からねえが、男が四人居るな」

「ほう」

洪は再びそつと門に近付いて中の様子を窺う。周維は少し離れた処に立っていた。中には四人の男達がぶらついて居り、どの顔も若い。洪は気付かれない様に注意を払いながら引き続き中を窺った。

「あんたは黙ってろ！」

暫くして怒鳴り声が辺りに響き渡り突然の大声に洪は思わず身を引いて顔を隠す。それからまた徐々に門の中を覗くと、中の男達は皆声のした建物の方を注視していた。

「おい！ やめろ！」

再び大声が聞こえる。今度は劉の声だ。どうやら何か逼迫した雰囲気だった。

「洪さん、そろそろいいですか？」

周維が洪に近付いて言う。

「ああ、いいよ」

洪の返事と同時に周維は数歩進み出て門の正面に立った。

第六章 六

周維は青衫の胸のあたりをすつと撫でてから取り出した扇子を両手で持った。

「失礼致します」

すぐ斜め後ろに洪が立つ。中にいた男達が一斉に振り向き近付いてくる。

「んー？ 何だあんたは？」

「私はこちらの劉さんの知人ですが、あなた方は？」

「今その劉さんは忙しい。出直してくれ」

「はて？ 時間は間違えていませんが……。皆さんは何を？」

「あんたには関係無い」

周維はゆつくりと頷いて見せる。

「そうですね。劉さんにお聞きしましょう」

周維が一步踏み出したところで男の一人が正面に立って行く手を遮った。

「出直せって言ったんだ。聞こえなかったか？ 帰れ」

男は顎を突き出して周維を睨んだ。他の三人が周りを囲む。

「私は劉さんと約束があるのです。その約束を破棄することになったらそれは劉さんから窺わねば。あなた方は劉さんとはどういったご関係でしょうか？」

「うるせえな！ ごちゃごちゃ言わずにさっさと出て行きやいいんだよ！」

「フフ、それは聞けませんねえ。何の権利があつてそう言うのです？ あなた達は此処の人では無いようだが……。どいて頂けませんか？」

「何だあてめえなめてんのか！？」

「とんでもない。ま、あえて言わせて貰いますと、声の大きな人が前に居て邪魔だ、という——」

「この野郎！」

男が逆上し周維の胸倉を掴もうと両腕を伸ばした瞬間、何の前触れも無く周維の胸元で真っ白な扇子がほんの一瞬開き、そしてまた閉じられた。

「うわっ！」

正面の男は右手首を掴んで後方によりめいてたたらを踏み、その様子を見た他の三人は驚き後退って身構えた。洪は後ろを向いてその三人に対峙する。

「てめえ何しやがった!？」

「あなたは何をしようとしたのですか？」

周維は落着いた表情のまま閉じた扇子を手にはずんでいる。

「こ……この……」

男は右手首を押さえたままでじりじりと後退る。周維の視線はその男の後方へ移っていた。

「何やってる？」

正面の建物の入り口にも男が立っている。自分の身形になど興味は無いといった感じの伸び放題の髪が顔の殆どを隠している様な痩せた男。周維と洪を囲んでいた男達はその痩せた男の姿を目にする、主に助けを求める犬のように一斉に駆け寄った。

「あんた、何だ？」

ひどく落ち込んだ眼窩に鈍い光が見える。周維は一礼した。

「こちらの劉さんに用事があって参った者です。つい先程此処に戻られるのを見ましたのでお会いしたいのですが」

「ふーん」

痩せた男は暫くだまって周維を観察する様に見る。微笑を浮かべる周維。その後ろの洪は無表情でずっと痩せた男を見ていた。

「徐さん！ こいつ俺の手を切りやがったんだ！ ほらこれ見てくれ！」

周維に掴みかかろうとした男が右腕を差し出す。痩せた男は視線だけを落として何も言わない。

「あの扇子に何か仕込んでやがる！」

「そうかい。次から気を付けるんだな」

痩せた男はそれだけ言ってまた周維に目を向けた。

「劉なら爺さんも息子も居る。入れよ」

「それでは失礼致します」

中へ戻って行く痩せた男に続いて周維と洪が四人の男達の睨む中を通り過ぎた。

「あんた……何故此処に……？」

部屋には劉と二日前に周維達の泊まっている店に来た老人の二人、あと見知らぬ男が一人居た。

「何じゃ？ 何の用じゃ？」

老人が怪訝そうな面持ちで周維と洪を見ている。上質で金糸の刺繍があしらわれた着物を纏った老人はいかにも裕福な商人といった風情で、周維が前に見た時とは少し印象が違う。家に居る時の普段着といった感じでは無い。

「……薩さつの店で知り合ったんだ。親父も見ただろう、この間」

「何しに来た？ 今は相手をする暇が無いのでな」

薩というのは周維達が世話になっている居酒屋の主人の事だ。この老人、殆ど初対面と言える来客に対して随分と素っ気無い。どこか苛立っている様である。

「私は城南にて商いをしている周と申します。城南に帰る道中ですが、真武剣派の英雄大会が丁度開かれるので立ち寄った次第です。薩さんのお店で部屋をお借りしているのですが、そこで劉さんとお会いしまして」

「フン、儂はこれの父じゃ。とにかく今は帰ってくれんか」

老人は殆ど睨みつける様な眼差しで周維を見ている。すると先程の痩せた男が口を開いた。

「爺さん、丁度良い。この周さんとやらにも聞いてもらおうじゃないか？ 城南の商人だって？」

「はい。ほんの小商いではありますが」

「待て待て。関係無かろうが。よそ者の、しかも商人じゃと？　いらん色気を出されたらかなわん」

老人がすぐに反論するが周維と洪の二人にはまだ何の事かさっぱり分らない。

「爺さん、同じ事だろうが。俺達はこれから真武観で集まった奴らに聞かせなければならんのだからな。半端な事をやってたんじゃ何の効果も無いぜ？　相手は真武剣派だからな。良く考えろ」

痩せた男が語気を強める。腕組みした痩せた男の傍にはもう一人の男が周維達四人に向かって鋭い眼差しを向けていた。

「それは……そうじゃが」

「周さんよ、まともな話じゃ無いんだ。聞いても禄でもない事に巻き込まれるだけだぞ」

劉が真剣な面持ちで言う。周維はにこやかな表情で微かに頷くと、痩せた男に体を向けた。

「一体何の話でしょう？　とても興味がありますね。私に理解出来る事なら是非お聞きしたいものです」

「なあに、話は至って単純だ。あんたは武芸の秘伝書の類を見た事があるか？　取引をした事は？」

「武芸の秘伝書ですか。……どうでしょう、そういった物は真偽を確かめるのが非常に難しい。取引は困難でしょう。第一、秘伝書なのですから出回らないのでは？　私は本物の証拠のある物は目にした事ありません」

「証拠か……。実はな、その爺さんが持ってたんだ。そいつはなんでも秘伝中の秘伝とか言う代物らしい。で、どうやら本物とみて良い様だ」

「ほう？　何故でしょう？」

痩せた男は口を曲げて不気味な笑みを浮かべる。

「天下の真武剣派に盗られたからだ。まさかあいつらがそんな真似をするとはな……」

「おい！ 徐^{じょ}！ 適当な事を言うな！ まだ何も分かってない！」
劉が痩せた男に向かって怒声を発する。徐という痩せた男はじろりと劉を見て、

「だから今から真武観に行って聞いてみるって言ってるだろうが。どうだあんた、何処かおかしいか？」

徐の視線は周維へと戻った。

「何故その秘伝書が真武剣派の手に渡る事になったのでしょうか？
今それが真武剣派にあるというのは確かな事ですか？」

徐に代わって老人が喋り出す。

「間違い無い。奴……真武剣の白の奴が秘伝書を貸せと言いおつたらしいんじゃ」

第六章 七

「……どういう事でしようか？ 誰に言ったのです？」

「これの馬鹿息子じゃ。勝手に持ち出しおった」

老人は劉を指差している。その息子なのだから自分の孫だろう。

「今はそんな事どうでもいい！ 問題は今真武観に行つてそんな事を言い出すのはやり過ぎだとさっきから言ってるだろう！」

劉は拳を強く振りながら老人に食つて掛かる。二人を眺めながら考えを巡らす周維はすぐに劉の言葉の意味を察する事が出来た。

「確かに、本当に秘伝書が今真武剣派の手にあるとして今日の英雄大会の場で持ち出せば、一気に追い詰める事になりますが……。その後向こうは――」

「なあ、あんたら」

徐が劉と周維を交互に見ながら少しにやついている。

「つまりあんたらは、真武剣派の奴らが悪事を暴かれて報復に出ると思う訳だな？ 此処の奴は皆真武剣派の人間をまるで崇めるみたいに扱うが、あんたらはそうじゃないと？」

「私は他所の人間ですし真武剣派の事を良く知りませんが、まあそうなるのはよくある構図ですよ。ただ、その秘伝書を借りたという事が「悪事」と呼べる程の事かは分かりません」

「儂の秘伝書を台無しにしおったんじゃないぞ！ きつともう書写でもして修行しておるやもしれん！ 真武剣派に知れ渡ったような武芸はもう秘伝では無い！」

「まあとにかくだ。真武観に行つて、返して下さい、と言うだけだ。その秘伝書は爺さんの物で俺達は返してもらうのを手伝う。爺さん一人では相手にされんかも知れんからな。お前は此処に居ればいい」
徐は劉に諭す様な口調で言うが、その眼の光は相変わらず鋭く劉に向かつて放たれている。

「家に居ても同じ事だ！ この武慶にも居られん様になるかも知れ

ん！」

「そう思うなら」

この時、徐の隣に居た男が初めて口を開いた。ごく普通の体つきの様だが痩せ細った徐と並んでいるので随分と良い体格に見える。声は太く、低かった。

「街を出る用意をしておくんだな。お前はいつも出歩いているんだから簡単だ」

男は徐に向き直る。

「もう人が集まり始めている頃だ。もう行かないと遠くから眺める事になる」

「そうだな。爺さん、そろそろ出るぞ」

「うむ。行こう」

徐が言うとすぐに老人も歩き出す。劉が慌てて入り口を遮った。

「やめろ！ やめてくれ！」

「邪魔だ」

徐の仲間らしい男が乱暴に劉の襟元を掴むと部屋の外へと勢い良く突き飛ばした。劉は抵抗らしい抵抗も出来ないまま庭まで転げ落ちる。

「おい！」

部屋では一言も喋っていない洪が男の肩を掴んだ。同時に周維はその脇をすり抜けて劉に駆け寄った。

男はじろりと洪を睨むと無言のまま洪の首を取ろうかといった勢いで握った拳を繰り出した。しかしすぐに男の顔には驚きと苦痛の表情が浮かぶ。洪はいとも簡単に男の拳を掴み取りそれを握り締める。褐色の太い腕の逞しい隆起が一層増した。

「フン、意外だなあ。あんた本気で真武剣派の所にこいつと乗り込む気かい？ てっきりこいつが用心棒代わりかと思ったんだが、違った様だな」

洪は同じ体勢のまま笑いながら徐に向かって言った。

「お、お前……」

男はもう一方の腕までもいつの間にか洪に取られてしまい、じりじりと体を押し下げられていく。

「俺達は話をしに行くんだが？」

徐はそれだけ言ってすたすたと先を歩いて行ってしまう。

「ほら、ついて行けよ」

洪は男を見下ろしながら言うと、一気に取った腕を引き上げて庭へ放り投げた。

「ハ、ハハ。あんた凄いな」

劉は周維に抱きかかえられ腰の辺りを擦りながら立ち上がった。洪に投げられた男はすぐさま立ち上がり、何事も無かったような顔を作ると徐を追いかけて走り出す。庭で待っていた四人の男達も同様に屋敷の門を出て行った。

「いや、あんなので凄いと言われても……」

洪は苦笑する。先程の男は少なくとも見かけだけは結構やりそうな雰囲気但实际上に劉を簡単に投げ飛ばしたが、洪にしてみれば拍子抜けする程何も出来ない男だった。

「ハハ、そうだな……あいつらはただのゴロツキでな。弱い奴にはやたら強気だ。まあ、その弱い奴の一人は俺なんだがな。まさかあんなに投げ飛ばされるなんて思ってもいなかったろうよ」

「真武剣派があるのにあんな連中が大きな顔出来るのですか？　ちよつと信じられませんね」

周維は洪と顔を見合わせた。

「奴らは真武剣派の人間には近付かないさ。自分からはな。うちの爺さんの話に乗ったのは意外だったが……。爺さんの後ろに居て真武剣派を引っ掻き回して遊びたいだけだろう」

「それは少し……危険な遊びですねえ。後悔する事になるかもしれない」

「ただ、あの徐って男はごろつき共の親玉みたいなもんでなかなか頭は回るらしい」

「ほう」

「旦那、どうする？ あいつら追って行くか？」

「俺は行かねばならん。具体的にどうするつもりか知らんが爺さんを止めないとな」

「では私達もお供しますよ。最初から真武観を見に行く予定だったのですから。それに、この洪さんは先程の男等より遥かに腕が立ちますからいざという時役に立つと思いますよ。真武剣派の人が相手でも大丈夫でしょう？」

周維は笑顔で洪に尋ねる。

「冗談だろ？ 少なくとも陸総帥やその直弟子相手なら俺は大人しく引き下がるよ。と言うか俺にそんな仕事が回って来ない様にしに行くんだろう？」

「ハハ、そうですね」

「……迷惑をかけて申し訳ない。しかしまだ大した説明もしてないのに何であんたは……？」

「劉さん、旦那は何にでも興味を持つんですよ。でもまあ大丈夫。今までも何とかうまくやってきましたからね。何かあってもこっちの責任だ」

劉は丁寧に深く頭を下げる。

「良いんですよ。では行きましょう。見失うのはあまり良くないでしょう」

三人は徐と劉老人を追って真武観へと向かった。

英雄大会で多くの人間が押し寄せるこの日の早朝、真武観の中央にある広間は来賓を迎えるべく整えられ、前日までに武慶を訪れた招待客ですでに幾つかの人の輪が出来ていた。その中には清稜派道長、木傀風と真武剣派の白千雲の姿があった。木傀風の隣には若い青年が座っている。

「もう一通り挨拶は済ませたのかな？」

「はい。道長様にご紹介頂けたおかげで助かりました。私は皆さん

を存じ上げておりますが私の様な若輩者を見知っておられる方は極僅かでしたので」

「ハハ、そんな筈は無かろう？ 恐らく皆そんなふりをしておるんだ。大抵、新しい遼山の掌門がどのような者なのか探りを入れた筈だ」

木傀風は青年を見てニヤリとする。

「それは……そうだったのでしょうか」

青年は落ち着かない様子で視線を彷徨^{せう}わせる。

「雪殿、心配することは無い。ただ、遼山派は武林の名門。新総帥と顔を会わせて誰か分からぬなどという事の無いようにしなければ」

白千雲が青年に言々と、

「では真武剣派は遼山に忍び込んだんだな？」

木傀風の冗談に白千雲は笑顔で返し、

「まさか。我等は雪殿を昔から知っておりますからそんな必要は。すぐに書状を届けて頂きましたし、雪殿が新たな遼山総帥になったらと聞いた時にすぐに納得致しました」

第六章 八

青年の名は雪凌過せつりょうかと言ひ、清稜派と同様に長い歴史を持つ武林の門派である三岳の一つ、遼山派の総帥である。とは言つても総帥の座に着いたのはつい最近の事で、しかも若くまだ慣れない様子である。遼山派は前総帥が病に倒れて長く臥せて居たが、一年近く前に若い弟子達を残して世を去ってしまった。直弟子の中では最も入門の早かった雪凌過でもまだ三十を越えたばかり。若すぎると思われたが病の床にあつた前総帥はもしもの時には雪凌過を次期総帥にする事を堅く決めていた様である。雪凌過の上の世代、前総帥の兄弟弟子等年長者は他にも居たのだが、何故かすんなりと決まつた様である。その話が広まつた時には武林の関心を誘つたが、昔から三岳は他の門派を敬遠とまではいかないが一定の距離を保ち独自のやり方を貫いてきた。多少変わったことをやつたとしてもそれは三岳のする事、どちらかと言うと江湖の揉め事とは縁が薄くなっている。遼山派は若い総帥になつたとしても特に問題が発生するようにも思われなかつた。

「慧山けいさん、媚山びさんは誰も来ておらんのかな？」

木傀風が白千雲に訊ねる。

「いえ、どちらも総帥にはお越し頂けなかつたのですが、代理の方が参つて居られます」

「うん。遼山は総帥自ら参られたのだから、陸の覚えも良からう」
木傀風はそんなことを言い顎の辺りを撫でながら天井に眼を遣っている。

「道長様ご冗談を。陸総帥は常に三岳に敬意を抱いておられます。雪殿は総帥になられて早々この武慶に足を運んで下さいました。陸総帥以下真武剣派は皆感激しております」

「大袈裟だなあ」

木傀風が笑う。雪凌過はどんな顔をすれば良いのか分からないと

いった風に顔を強張らせていた。白千雲は随分と雪凌過を持ち上げているがこの二人は親子程の歳の差がある。しかし遼山派の総帥となれば陸皓や木傀風といった武林の重鎮と呼べる者達と肩書きの上ではその肩を並べる存在である。白千雲はこの新総帥とどう接していくべきかを計っているところだった。

「こちらこそ、まだ若輩の私を招待して頂けて光栄です。正直な処、不安も多々ありました」

雪凌過は言いながら頭を掻いている。

「このような機会はそう無いからな。せいぜい顔売っておくんだな」

真武観の正面に広がる広い庭は既に人が集まり始めている。屋敷をもう一軒建てられる程の敷地があるがそれでも今までの英雄大会では人が入りきらず、中には屋敷を囲む外堀の上に登る無作法者が必ず居る。真武剣派の門弟達を各所に配置して何も問題が起きないように目を配るのだが、人で一杯になるにはまだ早い。数人が辺りを掃き清めている中に白千風の弟子の呉程青ごていせいと屋敷に仕える李小絹りしやうけんも居た。

「凄いですね。どんどん人が集まってくる……」

「私も初めてだけど、前回は凄い人数だったようね。何処から沸いて来るのかしら」

二人は笑いながら正門をくぐって来る者達を眺めた。

「でも何だか……ちよつと怖そうな人ばかりの様な……」

「まあそうね、ちゃんとした招待客の方々は此処じゃなくて奥の間だから、此処に集まるのは得体の知れない渡世人とかそんな感じでしょ」

「あつ」

ずっと正門に目を向けていた李小絹が小さく驚いた様な声を出す。

「どうしたの？」

「今、女の人があつ、ほら」

「何あの人、何持ってるのかしら？」

呉程青が目を凝らす。その先には浅葱色した旅装束で背に何やら長い棒の様な物を背負っている女。隣には小柄な老人が並び、話しながら歩いていった。

「何処の人かしら？ 剣も持ってるし」

女の反るようにすらりと伸びた背中に黒髪が揺れている。顔ははつきりと見えないが耳元に赤い耳飾りが見える。腰に剣があるという事は彼女も武林の人間なのかもしれない。李小絹は思わず見とれてしまっていた。

（私もいつかあんな風に……）

「やっぱり私は遠慮したほうが……」

「何でや？ 儂も呼ばれてへんけど儂も遠慮せなあかんのか？」

「そうじゃなくて。狗さん一人で行ってよ。私は表で待つわ」

「あかん。外で待たれとったらゆっくりでけへんやないか。それにおもろないわ。儂が紹介したる。多分、中の連中は皆知った奴ばかりの筈や」

真武観中央の建物の正面に立った老人と若い女は立ち止まって話している。老人は狗不死、女は東淵とうえんの傳朱蓮ふしゆれんである。

「でも……」

「別にええがな。お前のその姿見たら皆面白がる……ちやうわはれ、はよ行こ」

「何よそれ……」

狗不死が先に入り、広間までやって来ると直ぐに呼び止める声が聞こえた。

「狗不死様！」

背の低い小太りの中年男が後頭部から奔放に伸びている髪を揺らしながら小走りで駆け寄って来る。その後にも二人の男が付いて来ていた。

「一体、何処へ居られたのですか？ 随分探しましたぞ！」

「ああ、お前か。呼ばれたんか？ どっから来たんや？」

「都に居りましたので……」

「都かあ。何かあったか？」

「いえ、これといって何もありませんが」

「そうか」

男は狗不死の後ろに立っている傳朱蓮を見る。

「幫……狗不死様、こちらは……？」

「何やお前知らんのか？ この背の弓見てもか？」

傳朱蓮の背には長弓があり、正面から見ても上端は頭よりも大分高い所にある。

「……はあ」

「疎いやっちゃなあ」

「ちよつと狗さん」

傳朱蓮が狗不死の腰の辺りを指で突付く。

「紹介するわ。これは丐幫かいほうの幫主きゆうたつの休達や。んー、そんだけや。達、このお嬢さんはなあ東淵の傳家の令嬢なんやで。傳朱蓮や。よう覚えとけよ」

「狗さん真面目にしてよ」

傳朱蓮は休達に正対し、拱手する。真っ直ぐに伸びた上体に凛々しい表情、腰の剣と背の長弓がその辺に居る普通のお嬢様では無い事を物語っている。

「おお、あなたが。お会い出来て光栄でございます。休達と申します。狗不死様より丐幫幫主の大任を仰せつかりまして――」

「お前の話は長なる。もうええやろ？ 折角来たんやからもっと他に会いたい奴おんねん。ほなあ」

「狗不死様、是非後ほどお時間を頂けませぬか？ この期を逃せば次お会い出来るのは何時の事やら……」

「分かった」

狗不死はさっさと行ってしまう。休達は二人の男を従えてその後

ろ姿を拝しながら腰を折りじっとしていた。

「あの方……本当に丐幫幫主なの？ 随分腰の低い幫主様ね」

「あんなにも居ってええやろ。丐幫は頭数だけはごっつい組織や。あれ一人で動かす訳や無い」

「ふーん、狗さんもちゃんとそんな事考えるのね」

狗不死は振り向き眉根を寄せて傳朱蓮を見つめる。

「……ごめんなさい」

二人の關係の経緯を知らない者から見れば、丐幫前幫主である狗不死に対する傳朱蓮の物言いは信じられない位だ。しかし狗不死の頬はすぐに緩んだ。

「考える仕事はとっくの昔に終わりや。もう空っぽやで。あーおもろい」

第六章 九

木傀風が顎を突き出し目を細めて、誰にとも無く言う。

「あれはこの武林で最も顔の広い奴と言っても過言では無い。そなたは知っておるか？」

雪凌過と白千雲は同時に木傀風の視線を追った。

「おお」

白千雲だけが一人立ち上がり、こちらに向かって来る老人に歩み寄る。続いて雪凌過もその場に起立した。

「狗不死様、まさかお越し頂けるとは。是非お知らせしたかったのですが休幫主にお尋ねしましても狗不死様の所在が分からぬと仰られまして」

「ほんまか？ そんな事もあるんかなあ？ あんたらは何でも知ってる筈やろ？」

「ハハ、まさか」

狗不死はそのまま木傀風の座っている席に近付き、片手を上げた。
「何年ぶりやろな？」

木傀風は僅かな笑みの浮かべて静かに頷く。

「んー、あんたは？」

「狗不死様、こちらは新しく遼山派の総帥となられた雪凌過殿でございます」

「ああ、そうか。儂は狗や。よろしゅう」

「丐幫前幫主、狗不死様のお噂は予々お聞き致して居りました。お会い出来て――」

「ほんま何でも無いねんて。今の儂はなあ」

「それが本当なら、ここから摘み出されるはずだが？」

木傀風の言葉に狗不死は肩を竦めた。少し間が空いて、狗不死は白千雲に言う。

「あ、そや、あんたはこの娘知ってるか？ 知つとるんやろなあ？」

白千雲は狗不死の指差した傳朱蓮をじつと見た後、

「確か以前、至東山しとうざんにてお見かけ致したかと……もう一昨年の事になりますか」

「至東？ 襄統派じょうとうはいか？ 朱蓮、誰か知り合いでも居てるんか？」

白千雲の言葉を聞いて狗不死は傳朱蓮の方へ振り返った。

「襄統派の悌秀師太ていしゅうしだいには時折お会いしております」

木傀風達が居る手前、傳朱蓮が丁寧な口調で答えると狗不死は今にも吹き出しそうなのを堪えている。それを見た傳朱蓮は殆ど表情を変えないものの僅かに右の眉を吊り上げた。

狗不死が傳朱蓮を紹介すると木傀風は黙って頷き、白千雲は改めて拱手して挨拶をする。雪凌過は名を聞いて小さく「おお」と感嘆した様子で白千雲に習って礼をする。本来なら遼山総帥が傳朱蓮の様な一介の女侠客に対してこのような礼をとるのは不自然な事だが、まだ一門弟の感覚の方が勝っている様である。傳朱蓮の方は雪凌過以外の顔と名前は覚えていた。

「まあ座ったらどうだ？」

木傀風が言うと、白千雲が近くから椅子を持ってきて傳朱蓮に勧める。狗不死は自分で椅子を引き寄せて腰を下ろした。白千雲は直立したまま、

「私は失礼致します。他の御来賓の方々が御到着されておりますので」

「あ、では私もご挨拶に……」

白千雲と雪凌過は揃ってその場を離れていった。

席には木傀風と狗不死、傳朱蓮の三人だけとなった。急にやって来た狗不死と傳朱蓮の前にもすぐさま茶が運ばれて来た。

「茶か。まあええわ」

狗不死は茶を啜り、木傀風は傳朱蓮を眺めた。

「随分と長い弓だな。あまり見かけないがそれは何処の物かな？」

傳朱蓮は背の弓がそのままでは腰を下ろせないでその位置を変

えている。

「これは……頂いた物なんです。何処で造られたのかは私も知りません」

「うん。その腰の剣は……見覚えがある。少し見せてくれぬか？」

「はい」

傳朱蓮から受け取った古びた剣を木傀風は顔を近づけて観察するように視線を動かしていく。取り立てて何の特徴も無い鞘には細かい無数の傷が付いており、それらを撫でる様に指を這わせてからそっと柄を握り、音も無く一寸ばかり剣を抜く。まるで狙う獲物に気付かれない為に全ての音を絶つかの様な木傀風の動作だった。それから徐々に鋭い光を帯びた刃が現れる。木傀風はただじっと目を凝らし続けた。

「どうや？」

木傀風が何も言わないので狗不死は剣を覗き込んで訊ねた。

「儂は不思議でしょうがない」

ようやく顔を上げた木傀風は傳朱蓮を見る。

「そなたはこれをずっと腰に帯びて、よう無事で居られるものだ」

「どういう意味や？」

「おぬしもこの剣は知っておろうが。手に入れたいと願う者は大勢居る筈だ。奪いに來た者は居らんのか？」

傳朱蓮は微笑み、

「鞘はご覧の通り随分みすばらしい物ですから、誰も気付かないのでしょう」

「抜いた事は無いと？」

「そう頻繁には……」

「これは良家のお嬢さんやで？ そんなもん振り回すかいな」

狗不死はそう言って笑い出すが傳朱蓮の視線に気付くと首を縮めて舌を出した。

「うん……。その昔、この剣身に宿る凄まじい殺気に背筋を凍らせたが……今となっては……」

木傀風は感慨深げにもう一度剣に視線を落とす。

「ほおー、あんたでもそんな事あったんや」

「ああ」

木傀風は静かに目を伏せて頷き、それから剣を傳朱蓮に手渡した。

「狗よ」

「ん？」

「儂はつくづくおぬしが羨ましく思えてならんだ」

「ほーう、この、国中をふらふらしとる死に損ないの儂がか？」

「おぬしはこの武慶だろうが景北港だろうが何処へでも気ままに行ける。自由に会いたい者に会える。中には節操が無いと言う奴も居るがな」

「おう、儂は自由や。何処でも行くでえ。此処来たんも旅のついでや。通りがかっただけやしな」

「何処へ行く？」

「そんなん知らん。出てから決めるがな」

「そうか」

「あんたかてその気になったら何処でも行けるやろ？ 山は若い奴に任せたらどないや？」

「ちよっと狗さん、木道長様に失礼じゃないの」

「札なんて最初から無い。儂等にはなあ」

「うん。今更望んでも無理だろうな」

木傀風は表情も変えずにそんな事を言い、何か考える様に間を置いてから再び口を開いた。

「此処に来る道中、都に立ち寄ってな」

「そうか。儂等はこれから行ってみよう思てんねん。何か用事でもあったんか？」

「いや、無い。無いが、最後かも知れぬからなあ」

「もうこっちに住んだらどうや？お互い先はもう長あ無いで」

「フン、おぬしは口ではそう言いながら儂が死んだ後何十年と遊んでそうだな」

「ああ、そうなたらええなあ」

「殷に……アレを習っておいたか？　それとも完全に失われてしまったか……？」

木傀風は過ぎ去った昔を思い起こしながら物憂い気分を味わう様に視線を彷徨わせている。

第六章 十

「何や？ あんたあんなものに興味あったんか？ 意外やなあ。此処の人間が聞いたらびっくりするで。」あんな邪な妖術に惹かれるなど以ての外や。木道長は邪道に堕ちた！」言うてなあ」

「ん？ おぬしはそう思ってるのか？ それこそ意外だのう」

じっと木傀風を見つめていた傳朱蓮は恐る恐るといった感じで口を開く。

「あの、道長様。道長様は殷……殷汪という人をどう思っておられますか？ その……私や私の父も東淵の……」

「それはつまり、北辰の人間かもしれないそなた達をどう見ているか、と言う事かな？」

木傀風の話す声は程良い重みがあり気が充実している。傳朱蓮の問いから殆ど間が無く、淀みなく発せられる。

「かつて北辰を敵と見なした者達、その大部分は今もそうであろうが正直な処、そなた達の様に近くに在る者達との付き合い方に苦慮していることだろう。太乙北辰教……たいいつほくしんきょうこれは我らの様なそれぞれの持つ武芸を伝えていくだけの門派とは一線を画す存在。全く違う物だ。その教えは成立した当時に比べれば今は無いに等しいかもしれない。しかしながら北辰教というのは今やこの国の東北部に暮らす民の持つ価値観の名であり文化の名でもある。勿論その中には我等同様武芸の伝承もある。いや、我等よりも長い歴史によって練られた緻密かつ多彩で強力無比な業が存在しているのだ。武林に生きる我々はどうしてもその優劣に眼が行ってしまう。さらに異なる価値観からくる主張の食い違いが起これば何故か剣によってどちらが正しいか決めようとする。これはとても、とてもおかしい事だな。自分より勝る技を見せ付けられれば邪悪だと言う。こちらに理解出来ぬ理を知る者には魔の使いだと言う。愚かしいことよ」

木傀風は目を閉じて長い息を静かに吐き出している。傳朱蓮は神

妙にして聞き続ける。

「殷汪……。殷汪の名が世に知れ渡ったのは……十……二十年前にはなろう？ あの者は元々北辰とは無縁だった筈。生まれは呂州りょしゅうの辺りではなかったかな？」

傅朱蓮は目を見開いた。物心が付く前から共に居た殷汪が呂州で生まれたという話は初めて聞く話だった。呂州は都の南西に位置する街で都からの距離は武慶とあまり変わらない位の処にある。

「何でそんなん知ってんねん？ 儂等一回も聞いた事無いで。朱蓮、知ったか？」

「いいえ」

「儂は本人から直接聞いた訳では無い。あの者が赤子の頃から知っている人物が居るのでな」

そのように幼い頃から知っているのなら肉親なのかも知れないが、殷汪は親兄弟の話など一度も口にしなかった。恐らく一番よく知っている筈ふせんじんの傅千尽こうはてんと洪破天も口にした事は無い。傅朱蓮はそれが誰なのか知りたかったが、木傀風の方が先に口を開く。残念ながらその人物の話では無かった。

「殷汪が北辰の陶峯とうほうに縁あって方崖に上がり、総監であったのは十年程の間。実際何をしておったのかは分かんが、あまり表立った行動はしていなかった様だ。儂よりもそなた達の方が良く知っておろう。確かに北辰で幹部となったからには殷汪を敵視する様になるのは自然な流れだな。陶峯はあの者を旗印にしようとしたのだから当然だ。しかし……。儂はどちらかと言うと、同情した」

木傀風は話を止め、目の前の茶で喉を潤す。

「そうやなあ、まああいつを多少なりとも知ってる奴なら皆言うやろな。難儀な事に巻き込まれたもんやてな。あいつが望んで方崖に上がるなんて信じられへん」

「そもそも、殷汪の名は広まったが実際に顔を見た者はこの武慶にもそんなには居まい。見たことも無い人間、それも天下一の武芸でもって半ば英雄譚の様に語られる人物が敵方に居るとなれば気分が

悪くなるというものだ。……死んだと聞いた時、反北辰を自称する者達は手を打って喜んだだろう」

そう言った後、木傀風は俯いて小さく溜息を付いた。

「話が少し逸れたかな？ 儂は、殷汪が陶峯に呼ばれる以前に会っておる。そなたの父達と共に旅をしている時期だな。覚えて居るまいがそなたにも会ったのう」

「儂はその頃は知らんなあ。初めて会ったんは陶峯が方崖にあいつを連れて来た時や」

「おぬし、そんなに頻繁に方崖に行っておったのか？」

「しゃあないで。陶峯はいつをすぐに幹部に据えたんや。多分新体制の始まりっちゅう節目と考えたんやろな。今の此処みたいなもんや。いうてもこんな方々から人呼ばれへん。中原で付き合いのある目ぼしい人間言うたら儂くらいのもんや」

「全く……それが我等を悩ませる問題であつたのだぞ？ 陸も儂も、各派の総帥達もおぬしを昔から知っておる。丐幫の勢力は武林最大でその幫主は北辰とも懇ろらしい。我々が個人的に知っておらんのだらそれならそれで割り切る事も出来ようが、残念ながらおぬしの嗜好については熟知しているのだ。敵と見るべきか味方と見るべきか、それに答えは出ておらん。しかも今此処に居る事によって益々分からなくなる」

「陸の奴、どうするやろな？」

「……どうもすまい。まあ、方崖から戻って来たのなら土産話の一つでも聞かせてやるのだな」

「何で儂が方崖からの帰りと分かる？」

「確証など無いが、おぬしら二人の組み合わせはそういうことであらう？」

木傀風は視線を狗不死から傳朱蓮へと移す。

「道長様」

傳朱蓮は真っ直ぐ見返して、

「私達、傳家の人間は皆北辰教徒ではありません。無論、東淵に住まう以上彼等と無関係では居られませんが、決して私達は道長様や此処の真武剣派の方々を敵視したりなど……そもそも父は商売人であって武林の侠客でもありません」

きっぱりと言い切る傳朱蓮の瞳には力が籠もっている。

「うん、分かっておる。いや、すまなんだ。この狗が東淵でそなたと会ったのならついでに景北港にも行っておる筈だと思ったのだ。いや、そなたが東淵の住人だからといって東淵から来たとは限らない。済まぬ」

「いえ」

「儂はそなたの父もそなた自身も敵対する存在であるとは考えては居らぬ。昔からな。あの殷汪にしても……ただ陶峯が名を利用したに過ぎん。どちらかといえば……歳は離れておるがもつと話す機会があつたなら、更に理解してやれた筈。何よりあれの武芸は儂が最も興味のある物の一つだ。当人は世を去ってしまったが実はまだ手掛かりがあつてな。フフ、このような事、今の儂の立場ではあまり人に聞かせられんがのう」

木傀風は個人的には殷汪という人物を好んでいたらしい。その上、傳朱蓮も知らない殷汪についての事柄を多く知っている様である。

「儂もそなたを朱蓮と呼んでも良いかな？ そなたの幼い頃を思い出してしまつてな」

「そう呼んで頂けるなら、これほど嬉しい事はございません」

傳朱蓮は顔を綻ばせる。真剣な表情になれば背と腰に得物を持つという身形から凜々しい青年侠客と思わせる程だが、嫣然とした笑顔を見せると別人の様になる。傳家の姉妹は美人揃いと噂になる程なのだ。

木傀風と狗不死は話に夢中になっている。と言っても昔話を始めては言う事が無くなれば間を置き、どちらとも無く何かの話の種を思い出してはまた話し始めるといった事を繰り返している。それでもその話の種というのはどうやらいくらでもある様で終わる気配は

無い。傳朱蓮にはさっぱり分からない事も多かったが、好奇心だらうか、熱心に聞き入っていた。

「おお、何か忘れておると思っておったが、都に寄ったのだ」
「さっき聞いたがな」

第六章 十一

「偶然といえは行き過ぎておるな。朱蓮、そなたに会いその剣も見せてもらった。都でもう一振りの殷汪の剣を見たのだ。そなたの旅と関係があるかな？」

「え？ いえ、私は何も知りません。もう一振り……まさか、倚天でございますか？」

「そうだ」

「何でや何でや？ 見たって何や？ 誰が持った？」

「方崖にあった様だが、何でも、殷汪の死後方崖から逃げ出した女が持ち出したらしい。何があったか知らぬが金が無くなったのだろう。金に変える事にしたようだ」

狗不死と傳朱蓮は揃って身を乗り出している。

「金にするて……勿体無い事しよるなあ。誰やねんその女」

「儂に分かる訳が無からう？ おぬしは心当たりは無いのか？」

「んー……女か。あれかもなあ」

「……狗さん、誰なの？」

「よう知らん。けどいつともあいつと一緒に居った。妾……ちゅうのもおかしいな。あれずっと嫁ももろてへんし」

「……そう」

傳朱蓮は何も聞かなかったかの様に狗不死から視線をはずして背筋を伸ばして前方を眺めている。

「どうやら買い手がついた様でな。誰が買ったのかは分からぬ」

「そうかあ。あの剣も流浪の旅に出たっちゅう訳やな。殷の奴もそんな長いこと持ってた訳ちゃうやろしな」

「ああいった剣がやたらと方々を渡り歩くのはあまり好ましくはないのう」

「買った奴大丈夫やろか？」

「他所の商人らしい。あの剣は朱蓮の青せいコウとは違って見た目も派

手だからのう。身に付けて出歩く様な真似をすれば目を付けられるだろう。余程奪われぬという自信があれば別だが……」

「儂は見たこと無いなあ。どんななんや？」

狗不死は傳朱蓮を見る。

「朱の鞆に銀の装飾が施されているの。作らせた人物は遙か昔の王だっけ言うんだから相当豪華な造りよ。私のこの剣も一緒に造られたいのに何故かみすばらしいけど。普通の格好でそれを腰に帯びれば剣だけ浮いてしまふんじゃないかしら。その刃がどんな物なのかは私も知らない。私は……殷兄さんが手に持つてゐるのを見ただけ。抜いたところは見たこと無いの」

「あいつもあんまりええ格好してへんかったもんな」

正午が近付いた頃、にわかに広間がざわついた。そこかしこで談笑していた者達は一斉に立ち上がり、奥側の入り口に向かい正対している。

「陸総帥」

広間に入って来たのは陸皓である。招待客達は皆その名を口にしながら抱拳して迎える。陸皓はいつも黒を基調とした服装で居るが、今日も変わらない。ただ、普段よりは多少艶やかな光沢のある袍で、大きな袖を揺らしていた。

「皆ゆっくり休まれたかな？ 遠方よりお越し頂いた方々にはしばらく此処に逗留していつて貰いたいのう。この様な機会でもなければゆっくり話す事もままならぬ。懐かしい顔ばかりだ。実に嬉しい」

広間に居並ぶ客達を見回した陸皓は満足げな表情で頷いている。

そのまま表情を崩さずに、

「先に皆に紹介しておきたい。個人的には良く知っておる者も多いと思うが、こういった場で皆と会うのは初めてと思う」

そう言っただけで先程自分が入って来た入り口の方へ振り返った。

「入られよ」

陸皓のその呼びかけは短かったが随分と丁寧で、まるで慈父の愛

息に向けられた声の様に優しくかった。しかし、その声に呼ばれて姿を現したのは幼い少年でも少女でもなく、陸皓よりも遥かに上背のある、いかめしい面構えの男である。

「アッ」

広間に現れた男を目にした客人達は皆同じように短い声を発して目を丸くした。

「千河幫、せんがほう 范凱幫主殿はんがいほうしゅ」

陸皓が告げると、

「おお……」

それまで息を呑んで呆氣に取られていた者達がようやく息を吹き返したかの様に感嘆の声を漏らした。

范凱は腕を高く上げて抱拳し、低く太い声を発する。

「范凱でございます」

挨拶の言葉はそれだけだった。范凱の表情はどちらかと言うと堅く笑みは無い。恐らく普段からそんな風なのだろうが、がっしりとした体躯が昂然と立つ姿が初めて会う者には威圧感を与える。陸皓は自分から范凱の隣に歩み寄る。

「我が派と千河幫については皆も聞き及んでおると思うが、それはほんのきっかけに過ぎぬ。緑恒と武慶は近いが今まではお互いまるで最も遠い存在の様に感じてきた。これはとても不自然な事じゃ。今回思い切って范幫主の来駕を請うた処、范幫主は快くお受け下された。皆も知っての通り、范凱殿といえど丐幫に次ぐ大勢力である緑恒千河幫を率いてこの江湖でその名を知らぬ者は無い程の英雄。これを機に是非皆も誼を結んで貰いたいのう」

狗不死がそっと隣の木傀風に顔を寄せる。

「さすが陸の奴、仕事が速いわ」

木傀風はじっと范凱を見つめたまま、

「うん。しかし、范幫主は困惑しておる様だ。無理もないのう」

「儂には解るで。多分こうや。もううちの事はほっといてくれんか

？北辰も真武剣も知らん」

「それはおぬしの考えではないか？確かに千河幫はもう殆ど北辰との繋がりは無いと言えるだろうから、このまま中立を保ちたいと考えるのが妥当ではあるが……陸皓が自ら動き出せばそう抗えるものではない」

「やっぱり陸の奴、今でも北辰ぶっ潰したいんかなあ？」
「……」

木傀風はじつと范凱の方を見て黙っていた。

狗不死が傳朱蓮の方をチラッと目を遣ると、傳朱蓮も范凱を見つめている。驚いたような表情だった。

「朱蓮、口、開いてんで」

「え？ あっ」

傳朱蓮は頬を染めて慌てて俯く。

「何や？ あのごつい親父に一目惚れかいな？」

「馬鹿な事言わないで。そんな訳無いじゃない」

「まあそうやなあ。あんなにかつい顔が好きな訳無いか」
「……」

「あの親子、ほんまそっくりやなあ」
「……」

「息子、何ちゆう名前やったかいな？」
「……」

「挨拶、しといたほうがええな」

「な、何故私が――」

「んん？ 范幫主はあの朱不^{しゅふじん}尽^{じん}やったかいな？ あれんとこの責任者な訳やろ？ ああ、そやな。あっちが挨拶に来るべきや。儂等は協力したったんやし」

「狗さんは何もしてないでしょ」

「まあ後で顔見に行ったらええがな。何かくれるかも知れへんで」

「何子供みたいな事言ってるのよ」

「んん？ そっちかて子供みたいに顔赤あしてどないしたんや？」

傳朱蓮は狗不死を無視するように顔を背け何でも無いといった表情を作って辺りに視線を漂わせた。

第六章 十二

陸皓が脇に控えていた白千雲に顔を向ける。すると白千雲はすぐに頷き返した。

「準備は整っております」

「では、参ろうか」

陸皓が歩き出す。白千雲が范凱に何やら伝えてからその他の客達にも声を掛ける。

「それでは皆様、あちらへ」

広間に集まっていた者達は外へ向かう。前庭は既に数百人に上る群衆で溢れており、派手に着飾った者も居れば殆ど浮浪者の様な姿も多くあった。

真武剣派に限らず武林と呼ばれる武術界の各派は遥か昔から江湖の秩序を守り庶民の平穏を守る存在であると自認し、そう認識されてきた。どれほど名を上げようと官職を求めず常に自らも江湖の民である事を示す事で多くの支持を得るのである。武術の習得に関する事柄には各派とも内に秘される事も多いが、その存在そのものが江湖から隔絶されてしまつては全く意味が無い。真武剣派とその親派、対する太乙北辰教の対立は近年下火になりつつあったが全く無くなった訳ではない。今、真武観に集まった群衆の多くはどの門派にも属さない渡世人、侠客達である。いざという時にこの者達がどちらを支持するのか、これは非常に重要な事であった。

陸皓や木傀風ら武林各派の代表達の姿を目にした群衆は一斉に勝ち鬨の様な声を上げ、真武観を揺らすかの様である。

「総帥！おめでとうございます！」

「真武剣派、万歳！」

真武剣派が陸皓によって開かれてから四十年の節目の大会であり、真武剣派に縁のある者達がそう口々に祝辞を述べるのは当然だが、中にはただ騒ぎたいだけの者も少なくない。しばらく歓声が続いた

が、陸皓がおもむろに右手を掲げると徐々に治まっていた。

群衆に語りかける陸皓の声は力強く広い前庭に響き渡る。気の充実した音が真武観の外へも溢れ出している。七十を越えている陸皓はどちらかと言えば小柄で黙って佇んでいれば好々爺然とした風貌だが聴衆を前に声を発すると明らかにその印象が変わり、時には本当にこの体から出た声なのかと思える程の重厚さを持つ。真武剣派は一般的に剣術を主体とする流派とされているのだが、老総帥のこの雄渾な内力ないりよくでもって放たれる声を聞けば単に剣術だけではないと言ふ事が素人にも窺い知れる。

これも真武剣派の謎の一つであった。内功ないこうの鍛錬と言ふものはどの門派でも重んじられており、真武剣派でも白千雲等、総帥の直弟子達ともなれば皆一流と呼べる程の内功を保っているのだが、やはり彼等真武剣派の本筋は剣術であると言われている。しかし、総帥陸皓個人に限ってはそうではない。武林にあって一流を知る武芸者達は陸皓という人物の武芸は剣ではなく氣功が主ではないか？と考える向きがあった。既に総帥となって四十年、自ら剣を振るう事など弟子の指導以外には殆ど無くなり、部外者がその光景を目にする事は無くなっている訳だが、この場に居る木傀風や各派の高弟達にはそれがはっきりと分かる。総帥陸皓の内力の充実ぶりは弟子の筆頭である白千雲と比べても圧倒的であった。

総帥の内功はどうやって練成されたのか？陸皓は誰かに師事していたのか？これも真武剣派の興りに大いに関わっている。

「あの爺さんの話、長くなりそうだな。何だかくたびれたぞ」

「まだ少ししか経ってないでしょう？ 我慢するのよ。それと陸総帥様なのよ？ そんな風に呼ぶのは止めて。人に聞かれたらどうするの？」

陸皓の話を聞く群衆の中に武大ぶだいの姿もあった。隣には常施慧じょうしけい、すぐ後ろは武中大ぶちゅうだい、武小大ぶしょうだいも居る。

「儂はずっと木の爺さんを爺さんと呼んでるんだぞ？　しかも面と向かって言える。あの陸ってのは木の爺さんと同輩だろう？　だったら不味い事など何も無いわ」

「陸総帥と面識無いじゃない。道長様と同じ様にいく訳無いでしょ？」

「まあ呼び方はともかく儂等は他の奴等と違って招待客だぞ？　こんな所に立たされるなど――」

「とにかく！　今は黙ってるの！　いいわね？　言う事を聞いて頂戴」

常施慧が語気を強めて嗜めると、武大は口をへの字に曲げて陸皓のいる正面に目を遣った。

「あんた方は清稜しんりょうのお人かね？」

急に武大の隣から声が掛かる。

「んん？」

武大が横に目を遣ると老人が立っているが顔は正面を向き目を細めていた。真っ白な髪が丁寧に結っており、同じく真っ白なあごひげも綺麗に整えられている。目を細めて一層皺の寄った辺りに長い眉が垂れ下がっていた。仙人というものが実在しているとすればこんなだろうかと思える風貌である。首も手もまるで枯れ木の様に痩せているが、不思議と弱々しいと思える様な雰囲気は無い。老人はにこやかに微笑んでいる。

「あんたが言ったのか？　儂に？」

「ああ、そうじゃ。儂が、あんたに」

「何だって？」

「あんたらは、陸総帥に招待されて来たのかな？　清稜から？」

「ああ、そうだ」

「ご苦労さん」

「……ああ」

ここで老人は顔を武大に向けた。老人は目を細めているのではな

く、もとから開いているのかどうか判らない程目が細い様だった。

「あー、あんたは誰だ？ 何処から来たんだ？」

「儂か。何処から、という事も無いのう」

「……意味が解らんが。住まいが何処かにあるんだろう？」

「今日の住まいは此処にする。昨日はもう少し西であつたのう」

「……ふむ、爺さんは此処の、真武剣派の関係者か？」

「まさか。もしそうじゃったらこんな所から総帥の演説を眺めてはおらんじゃろう？」

「そうだな」

「清凌を知ってるのか？ 木の爺さんを？」

「今此処に居る者は殆ど知っておるじゃろう。名くらいはのう」

「……」

「儂は此処でこのように人を集める時には必ず来るのじゃ。真武剣派というのは太っ腹でな。集まった者に酒を振舞ってくれる」

「酒？ それを目当てにわざわざ来たのか？」

「そうとも」

「なるほど。じゃああの陸の爺さんの話などどうでも良いって訳だな」

武大がニヤリと笑う。この老人も自分と同じなのだ。常施慧が行くと言って聞かず、興味も無いのに渋々付いて来ただけである。同じく出歩く気など更々無かった弟二人を巻き添えにして。

「一応、聞いておるよ。酒の方は先に確認した。後はその段になれば並んで頂戴するだけじゃ」

「確認って何だ？」

「あんたは酒呑みかね？」

「ああ飲むとも。此処に来てからもかなり飲んだ。あーだが此処の酒は不味いぞ？」

「今日振舞われる酒は違うんじゃない。武慶のものではない。この日の為に都から運ばれてきた酒でのう。ほれ、あっち」

老人は左手前方、建物の脇の方を見ている。そこには人の腰辺り

まである大甕が幾つか並べられており、この屋敷の者だろうか、四人の男が番をする様に立っている。

「ほう、あれがそうか」

「あんたは遠くから来たんじゃないから特別に教えても良い」
「ん？」

「あれの手前に並んでおる甕、あれには黄色の封がしてあるじゃろう？ 見えにくいがああ後ろに二つ、赤い封の甕があるのじゃ」

第六章 十三

「どう違う？」

「黄色のやつも悪くは無い。香りでしか判断出来なんだんじやが、黄酒、おそらく老酒の類じゃな。似た様なものは都でならすぐ見つかるが、あれは中々のものじゃ。儂等が飲むには高価じゃな」

「じゃあ赤い封のやつは？」

「それじゃ。儂は赤い方を頂く事にした」

「事にしたって……もつと良い酒って事だな？」

「あれはすこぶる良いのう。白酒じゃが……うむ、あれは……」

老人は顔をやや上方に向け目を閉じ、香りを思い出している様だ。
「何とも濃い……んん……汾酒ふんしゅの類では無いのう。あんた、五粮液ごりようえきは知っておるか？」

「ああ、西方の最高級の白酒とかいうやつだろう？ まさかそれだと？ 俺は飲むどころか匂いを嗅いだ事も無いぞ。大抵は偽物らしいではないか」

「ハハ、本物が無ければ偽物も無かろう？ 儂が思うにあの赤の封はその辺じゃな。しかもかなり長く熟成されておる」

「赤の封二つ共か？ あんな甕二つ一体幾ら掛かるんだ？ 相当金が掛かってるな」

「だろこのう。今回は幸運であつたわい」

「しかし、そううまくそいつが飲めるのか？ 今此処に居る人間が皆押し寄せれば選んでなど居れまい？」

「此処じゃ」

「ん？」

「この位置に居ればあの赤い封の甕に当たる。儂の計算ではのう」

「……そううまくいくもんな」

「あんたは初めてかもしれないが儂は違うんじや。まあその時になったら儂に着いて来なされ。ご馳走して進ぜよう」

「ハハ、まるで爺さんの振舞い酒みたいだな」

武大と隣の老人が話していると突如、再び辺りは歓声に包まれた。武大は辺りを見回してから正面に目を遣ると、陸皓が両手を上げて応えている。

「お？ 何だ終わったのか」

常施慧は呆れて、

「本当に何も聞いてなかったのね？ しょうがない人ね」

「儂が聞いておっても解らん。おい、この後良い酒が飲めるらしいぞ？」

武大は後ろの弟達の方を振り返って言う。

「本当か？ ま、そんな事でもなけりゃこんな所に来た意味が無いしな」

武小大が言い、武中大が頷いて賛同する。

「口を慎みなさい。あなた達がそんな事ばかり言って、道長様に恥をかかせるつもり？」

「爺さんは気になどせんわ」

「馬鹿な事言わないで——」

「おい、どうした？ 何だ？」

急に武大が常施慧の言葉を遮った。武大は首を伸ばして前方に目を凝らしている。

「どうしたの？」

常施慧は武大の腕を取って思い切り背伸びをするが前に居る者達が皆同様に背伸びをしているので全く見えない。

陸皓が話を終えて大きな歓声に応えながら群衆を見回していると、急に新たなどよめきが起こり人が動くのが見えた。一人や二人ではなく、ある点を中心にして人の波が放射状に広がって穴が開いた様になっておりただでさえ人でごった返していたその周囲は押し潰されそうになって悲鳴に近い叫びまで聞こえてくる。陸皓の両脇に並んでいる木傀儡風や各派の代表者達もそちらに顔を向けて何事か窺う。

控えていた白千雲以下真武剣派の高弟達が警戒の表情で飛び出した。群衆の中にぽっかりと開いた輪の中心には真紅の衣装を纏った女性、その周囲を見張る様に黒装束の男達六人が女性を背に囲んでいた。

「景北港方崖臣子林、真武剣派陸皓総帥様に御目文字致します」おめもじ

そこに居た女は赤い唇を小さく動かして言った。その声は、陸皓の位置まで三十間近くはあったが周囲のどよめきを物ともせずに通る抜けた。

「何だあの女？ 誰だって？」

「おい押すな！ お前知らんのか？ 今も言っただろうが北辰七星の林、押すなって！」ほくしんしちせい

「俺じゃねえよ！ 林だって？ 林汪迦……あの女が？」りんおうか

「でも何だってこんな所に……やばいぞ」

「やばい？ 何がやばいんだ？ こっちにはこれだけの人数が居るんだぞ？ 事が起きれば向こうの方が不利だろう？」

「お前は何も知らんのだな！ あの女が袖を一拍りすれば取り囲んで俺達は皆仲良くあれの毒針を頂戴する羽目になるんだぞ！ こっちは幾ら人間が居てもこんな状況では皆同時にかかれる訳も無い！ おい下がれ！」

女が周りの黒装束の男達に視線を向けるとその内の二人が先頭に立ち進み始める。人々は少しでも遠く離れようと後退していき、女の居る場所から陸皓らの居る方へ道が出来ていった。

赤の裙を身に着けてその裾を少し引き摺り、同じく真紅の袖の大きな襦じゆを纏って首には柔らかな純白の毛を巻いている。随分と暖かそうではあるが、胸元の丸い襟が大胆に開いていた。雪の様に白い胸と顔。微笑む豊かな唇に伏せた長い睫が人々の視線を釘付けにする。

女、林汪迦を見知っている者達は皆一様に怪訝な表情を浮かべていた。間近でその姿をじっくり眺めた事のある者は居ないが、今此

処に居る林汪迦は全く印象が違っている。それだけに余計警戒心を強めた。

「林……玉賦ぎょふ」

女を警戒し白千雲ら兄弟子達と共に前へ出た郭斐林が呟く。隣に居る白千風は視線は女に向けたまま口を開く。

「今は汪迦と名乗っている様だな……師妹しめい、油断するな」

「ええ」

郭斐林はゆっくりと進んで来る林汪迦を凝視しながら、ふと環龍かんりゅう客棧きやくざんの女主人、紅玉麗こうぎょくれいの姿を思い起こした。しかし二人が似ている訳ではない。年齢はこちらの林汪迦が若いだろう。派手な衣装も紅玉麗は普段から好んで身に着けている様だが、林汪迦の方はこの場に居る人間の記憶の中には着飾っている姿は無い。北辰教教主直属の配下、七星と呼ばれるその内の一人。対峙した敵を怪しげな暗器でもって笑みを浮かべて弄ぶ使い手である。戦いに邪魔になりそうな長い裙など好む様には思えない。その女が今、煌びやかな衣装を纏い、美しいその素肌は紅玉麗などとは比べ物にはならなかった。

林汪迦が連れた者達は黒装束の六人だけではなかった。最初は分からなかったが林汪迦がこちらに向かって歩み始めると同時にその後方に居た群衆の中の数人が林汪迦の後に従って進み出てきた。周りの者達と変わらない平服姿の男達で、三人がそれぞれその手に黒い箱を掲げ持っていた。

（おっ、何やおもろなってきたわ）

狗不死は急に姿を現した林汪迦とそれに対する陸皓や来賓達の反応を暢気に眺めながら眼を輝かせている。狗不死と林汪迦は親しいという程ではないが北辰の本拠、方崖で何度も会った事がある。

（いくら何でも喧嘩売りに来た訳や無いな。ほんでもあいつ、ええ度胸しとる。まあ「行け」言われて来たんやろけど）

「久しぶりに見るが、歳を経て益々腕に磨きがかかっておるな。あ

の気の充実ぶりは見事だのう」

木傀風が呟くように言ったがすぐ隣に居る狗不死にははつきり聞こえる。

「ええ女やろ？」

「うん、儂等の様な老いぼれが言う言葉ではないが、否定はせんよ」
木傀風は林汪迦から視線をはずし、狗不死を振り返って真顔で言った。

第六章 十四

林汪迦はゆっくりと歩を進めて陸皓の正面まで来ると恭しくお辞儀をする。

「太乙北辰教教主、陶光とうこうより真武剣派陸皓総帥様へ、祝賀の品と書簡を持参致しました」

そう言ってから顔を上げる。柔和な眼差しでなんとも愛らしい。各派の総帥、高弟達は冷静を装って神妙な面持ちでその様子を見ているが、かつて北辰教と苛烈極まりない闘争を繰り広げた際に恐ろしいまでの強さと残虐さを見せつけたのがこの林汪迦らの七星と呼ばれた者達であることを良く覚えていた。直接見ていない若い世代でもその様子は何度も繰り返し聞かされていた。その記憶が林汪迦の嫣然と微笑む姿をより不気味に感じさせる。

（北辰は一体、何を企んでいる？）

「林どの、ようお越し下された。教主のお気遣いには痛み入る。こうしてそなたを遣わされたのは何より嬉しい事じゃ」

礼を受けた陸皓は林汪迦に対して優しく語りかける。傍目には林汪迦を全く警戒する素振りを見せず、とてもにこやかな笑みを浮かべていた。

「こちらが、祝いの品でございます」

林汪迦が言うとは後ろに控えていた箱を持った男達が進み出て、一人が林汪迦に手渡す。林汪迦は両手でそれを自分の顔の高さに掲げ持った。陸皓はそれを見て頷く。いつの間にか陸皓の傍らに来ていた白千雲が、前庭に降りて林汪迦の前に立ち大仰に両の袖を振って抱拳すると、林汪迦は再び微笑んだ。

「よもや白千雲様の様なお方に直にお受け頂けるとは……。光栄でございますわ」

林汪迦は顔以外ぴくりとも動かしてはいない。白千雲はほんの僅

かだが眉をしかめた。

（なるほど、こちらが警戒してその品を受け取らぬと思っておったのだな。フ……我等は何も恐れぬわ。それにどんな仕掛けがあるうとも儂には通用せぬ。我等に危害を加えるつもりならすぐにその品、そなたに返してくれよう）

白千雲は林汪迦に近付いて箱に両手を伸ばす。その間どちらもお互いの目から視線を逸らさない。目だけでは無い。白千雲はその五感を駆使して周囲の空気の流れをも読まんとばかりに神経を研ぎ澄ます。

「頂戴致す」

短く言葉を発して箱に手を触れる。

後方に居る群衆には何が行われているのか良く分かっていなかったが、二人の様子が見える場所に居た者達は固唾を呑んでその光景を見守った。林汪迦が白千雲に対して何かするかも知れない。しかし白千雲は真武剣派では第一の高弟であり、また林汪迦などという得体の知れない女に遅れを取るなどあり得ないという期待感もある。ただ、そう思っている多くが林汪迦を全く知らない者達であるのだが。

白千雲が箱に手を触れた瞬間、見ていた陸皓が密かに眉根を寄せる。木傀風や狗不死達も同様にそれを注視した。僅かに白千雲が身震いをしたように見えたのである。恐らくそれに気付いた者は少なく、周りの群衆の中では皆無であろう。それほど僅かだった。

「おい……どうなったんだ？ 二人とも何やってる？」

「静かにしろ」

「二人ともピクリとも動かんぞ？」

「わからん」

辺りがざわつき始めた。

林汪迦と白千雲は共に同じ箱を両手で持っている。いや、持っているというよりはまるで宙に浮いた黒い箱に二人とも両手を添えて

いる、といった感じである。陸皓らの方からは白千雲の表情は窺えない。林汪迦は――笑みは消えているが焦燥感も無い。無表情である。

「……陸総帥」

不安を覚えて陸皓に話しかけたのは襄統派から総帥代理として来た羅鉄指^{らてっし}。襄統派の弟子の筆頭である。襄統派総帥も陸皓と同世代で高齢であり、その直弟子であるので白千雲と同輩、年齢も近い。

「心配は無用じゃ」

陸皓は羅鉄指に言う。

「何も起こりはせぬ」

白千雲の方も冷静にじっと林汪迦を見据えていた。

（フン、このような遊びに何の意味がある？ さっさと終わらせるに限る）

下腹に僅かに力を込め、そこから勃然と興り来る内力が両の腕へと導かれた。白千雲はそれを手に触れている箱へと注ぎ込む。しかしそこにはかなりの抵抗が感じられる。異質の気、それは林汪迦のものに他ならない。

林汪迦が白千雲の内功を試しているのだ。そうでなければ完全なる悪ふざけとしか言い様が無い。差し出した物を強く握って相手に取らせないのは子供のよくやる悪戯であるが、傍目にはそうは見えない。箱を引っ張り合っている様でも押し合っている様でもない。ただ腕力を比べるなら林汪迦が伸ばしている細い両腕が白千雲に勝る筈が無いのである。しかし林汪迦の掌に乗っている黒い箱はぴったりと手に張り付いて動かない。林汪迦は自らの内力で満たされた箱を完全に支配していた。

「林どの？ これはどういう……？」

「白千雲様、あなた様の内力が私に伝わって参ります。ああ、なんと力強い……」

林汪迦は頬を上気させ目を細めて恍惚の表情を浮かべている。や

や上目遣いで微笑みかけた林汪迦に白千雲は怒りを覚えた。

（ふざけるのはここまでだ！）

白千雲の眼差しが鋭くなりサッと顔色が変わる。その瞬間、林汪迦が後方に弾かれる様に身体を引いた。それと同時に白千雲の手に残った黒い箱が音を立てて崩れ、中の品が白千雲の手の間からこぼれ落ちる。黄金色に輝く細長い塊。

「アッ」

林汪迦は袖を口元に当てて目を丸くした。まるで自分も周りで注目している群衆の一人であるとも言いかの様である。白千雲は素早く腕を下方に伸ばしてその塊を掴み取る。それを手にするとそのまま流れる様に身体を回し再び林汪迦と向き合った。かなりの速さである。林汪迦に隙は見せていない。白千雲は冷静だった。箱に一層力を込めたものの破壊する程ではなかった。それでも箱が壊れてしまったのは林汪迦が注ぎ込んでいた内力を急激に引っ込めて力の流れの向きが突如変化した為であろう。

林汪迦は身体を引いたその位置で微笑み、傍に並んでいる黒装束の男達も動いた気配は無かった。手にしたその塊を見るとそれは黄金で造られた短剣を模した装飾品で、切れる程鋭利には作られておらず先端も丸くなっている。白千雲は改めてそれを両手で掲げ持った。

「ご無礼を致した。お許しください」

白千雲はそう言って林汪迦の返事を待たずに恭しく礼をすると数歩後退る。そこで林汪迦が声を発した。

「他の品をこちらに並べなさい」

脇に居た二人の男が別の箱を林汪迦の前へ並べて置く。その様子を見ていた白千風と郭斐林かくひりんも前へ出て白千雲の脇に立った。

「有難くお受け致します」

白千風がそう挨拶したところで林汪迦は懷から巻紙を取り出した。北辰教主からの書簡である。白千風が受け取ろうと数歩近付くと、

「これは破る訳には参りませんので、こちらに」

林汪迦はそう言って書簡を下に置かれた箱の上に重ねた。

（普通に渡せば良いものを……まったくこの女、訳が分からん）

白千風は苛立ったが面には出さず、黙っていた。

「それでは私の役目は済みましたので、これで」

林汪迦は再び陸皓に正対する。陸皓は微笑んでゆっくりと頷いた。

「教主に宜しくお伝え下され」

「それはもう」

にっこりと陸皓に笑みを見せた林汪迦はくると踵を返しさつさと歩き出した。陸皓の正面、群衆のひしめくど真ん中に、である。

（師父に対して何と無礼な）

林汪迦の後姿を睨みながら、郭斐林は拳を握り締めていた。

第六章 十五（前書き）

※ヒョウ局Ⅱ＜金票＞局

第六章 十五

林汪迦が進んでいくと、自ずと道が出来てゆく。その中を来た時と同じ様にゆっくりと歩く。人々はその様子を眺めながら近くの者達とひそひそと言葉を交わしていた。

「二度と来るな！」

群衆のざわめきの中からそんな言葉が聞こえた。前庭の中央あたりまで来ていた林汪迦は声と同時にピタリと足を止める。ほぼ同時に連なって歩いていた黒装束の男達も止まった。林汪迦が声のした方へ顔を向ける。笑っていた。

「誰が言ったのか分からないとでも？ この場に何千、何万居ようとも私には分かるんですよ？ ……あなた」

林汪迦の視線は揺らがない。身に覚えの無い者達は一斉にその視線を避ける。見えない何かに押されていく様に人の波が割れていき、林汪迦の真正面には若い男が一人。射竦められたその男は震えていた。

「あなたの望みはしかと聞いたわ。多分また来るけれど」

林汪迦はその男に軽く会釈をして再び門の方へ向かって歩き出す。群衆は黙り込んでその様子を見つめ、やがて太乙北辰教の一行は門の外へ消えていった。

「……何だったんだ？ あの箱、どうなった？」

「そりゃあ、あれだ。あの女、大人しく渡していけば良いものを事も有ろうに白千雲様に内功でちょっかいを出したのさ」

「おめえ何で分かる？」

「あれくらい見ていれば分かるうが」

「へえそうか。で、どうなったんだ？」

「全く……それくらい分からんでどうする？ 白千雲様の勝ちに決まってる。あの女、白千雲様の重厚な内力の攻めに面食らって身を

引いたのさ。白千雲様の凄まじい内功の力にあんな箱が耐えられる訳が無い。お前も見たとおり、木っ端微塵よ。七星だか何だか知らんが命拾いしたって事だ」

「凄えな」

「さすが、白千雲様よ」

「凄えな」

白千雲らは林汪迦の残していった品と書簡を持って陸皓の傍に戻り、それらを持ったまま建物の奥へ入っていく。陸皓が再び目の前の群衆を見渡した。

「永きに渡り我々と北辰教は闘争を続け、多くの血が流されてきた。今だ仇を持つ者も多い。とても重要な事じゃ。しかしながら良く考えねばならぬ。忌まわしい歴史を繰り返すべきか否か――。とても拭い切れぬ無念があるのも事実。此度の英雄大会には多くの武林の名士達が集って下された。この良い機会によくよくこの事を論じ合いたいと思うが、如何であろう？」

陸皓の言葉は程々に多過ぎず。思慮が浅く血氣に逸りがちな者達の感情の高まりを一時とは言えども散じるには十分であった。群衆の反応はただ雄叫びの様な声だけで、否とも応とも取れるが、陸皓は再び両の掌を群衆に向けて掲げ、しばらくしてから振り返って建物の中へと入って行く。脇に並んでいた各派の来賓達も続いた。

酒宴の用意が整っている広間に来賓達が戻って来ると、皆それぞれ席に案内されて早速祝杯があげられた。改めて真武剣派総帥である陸皓の挨拶を受け、その後皆思い思いに酒を飲みながら歓談する。陸皓は最初一杯だけを口にして直ぐにその場を中座していた。

来賓の席の最も上手には木傀風が座り、隣には急に現れた狗不死の席が用意してあった。丐幫の前幫主という身分が江湖に於いてどれほど高いものかを表しているが、総帥陸皓と古い付き合いだという意味合いも含まれている。

狗不死の次の席に傳朱蓮が案内されたのは異例であつた。陸皓とは面識も無い。傍目には狗不死の付き人の様にも見えなくもないが、それならば木傀風や狗不死と同様の席が与えられる筈もない。傳朱蓮は何度も案内した下女に確認したが、この席で間違いないという事だつた。

木傀風と狗不死の処へ次々と他の客達が挨拶にやって来る。傳朱蓮は隣でその様子を眺めながら、面白いと思つた。人々はまず木傀風の前に立って何やら声を掛け、それに対して木傀風はまるで慈父の如き面持ちで言葉少なに応じている。それからその客は隣に居る狗不死の処へ来る。狗不死は満面の笑みを浮かべてその客が口を開くより先に喋り掛け、時には自分も立ち上がつてその客の肩を叩きながら声を出して笑っている。

(なんて陽気な……ジジイ)

そんな事を心の中で呟いて笑いが込み上げてきた傳朱蓮は慌てて袖を持ち上げて口元を隠す。

(ジジイ……か。今の声は絶対、あの范さんね)

隠した口元の笑みは暫く消えなかった。

「朱蓮、行こか」

「え？」

「范幫主やがな。ほれ見てみいな。肩身狭そうにしとるがな。それでも儂より遙かに肩幅あるけどな」

范凱は自らの席に着いて何やら考え事をしながらじつとしている。今日まであまり緑恒千河幫と接点の無かつた者も多く、幫主范凱が居るこの酒席は誼を結ぶ貴重な機会である。酒宴が始まつた直後は大勢の客達が范凱の許へ挨拶に行つていた様だが、その後はあまり近寄る者は無かつた。

狗不死が自分の席に置いて確保していた酒壺を引っ掴んで范凱の方へと歩いて行く。傳朱蓮は慌てて席を立ちその後を追つた。

自分の席に真っ直ぐ近付いてくる人間の気配を感じ取ってその方へ目を向けた范凱はすぐに立ち上がった。

「これは狗不死様」

拱手して迎える范凱。狗不死は手をひらひらと顔の前で揺らした。「ご挨拶もせず申し訳ございませぬ。我が幫の朱不尽に助力頂き、何を差し置いても狗不死様に――」

「ええんやて。別に儂も行ったからうちゅうて何の得も無かったがな。まあ座ろ」

狗不死は面倒臭そうに范凱の言葉を遮って、近くに居た下女に椅子を持って来るように言った。

直ぐに用意された椅子に腰を下ろした狗不死は早速喋り始める。

「さつき、林に見られたか？」

「ハハ……。しっかり私を見ましたから、気付いたでしょうな」

「ええんか？ まあええわな、此処に来とるんもすぐ知られるしな」

「はい。その事については最早氣にしてはおりません。失礼、こちらの方は……」

范凱は狗不死の斜め後ろに立っていた傳朱蓮に目を遣っている。

「あんたらにとっては儂なんかよりずっと大事な恩人やでえ？ 聞いてへんか？ これが東淵の傳朱蓮や」

「お……おお」

傳朱蓮の名を聞いた范凱はすぐさま再び立ち上がる。

「あなたが……そうとは知らず私めの非礼、何卒お許し下され」

范凱は腰を折って深々と頭を下げる。范凱の様な一際目立つ大男が若い娘に頭を下げている姿は周囲の注目を集めた。

「あ、あの……」

「本来ならば私めが東淵に参りお詫びせねばならぬところでございます。傳家の皆様にご助力賜らねばヒョウ局はどうなっていたか知れませぬ。傳千尽どの、並びに傳家の皆様の義氣に我等千河幫悉く感服致しております。命を落としたヒョウ客を東淵の地で懇ろに葬って頂いたと聞きましてその遺族達もいたく感激し、傳千尽様にお

礼を述べに参りたいと申し出ております。必ずや東淵に参ります。
このご恩に報いねば私共は畜生にも劣りましょう」

第六章 十六（前書き）

※ヒョウ局Ⅱ＜金票＞局

第六章 十六

余りにも謙った范凱の口上に傳朱蓮はすっかり面食らってしまい、何と言って良いやら声を出せずに居る。

「そんなん言うたら話しにくいやないか。そんなくらいにしとけ。ほれ、朱蓮も座りいな」

狗不死の横にも椅子が用意されたが初対面の范凱の前に狗不死と共に腰を下ろすのは憚られ、傳朱蓮は立ったままで居た。

「お掛け下され」

范凱が勧めるので傳朱蓮は黙ったまま会釈をして腰を下ろす。范凱はそれを見てから席に着いた。

「朱不尽からよくよく伺っております。傳千尽どの、あなたのお父上と朱不尽は永い付き合いですね。お父上は真に友誼に厚いお方。ヒョウ局の者達から傳家の皆様の話を聞く度に私は目頭を熱くしております」

「大袈裟やなあ」

「偽りではございません」

范凱は傳朱蓮が知る中でも一、二を争う程の逞しい体躯を持つ大男である。武林に名立たる幫会の主であるその男がこれほど丁寧な言葉遣いでまだ若いほんの小娘に対して礼を尽くし、その態度は誠意に満ちている。傳朱蓮は戸惑い一つも何か心地よい、安心感の様なものを感じていた。

「あれからもう結構経ったけど、何か分かったんか？」

狗不死は持参した酒を范凱の酒杯に注ぐ。范凱は慌てたように腕を伸ばそうとしたが狗不死はすでに范凱の酒杯を手にとって注いでいた。

「儂ら、暫く東淵に居ったけど特に何も無かったなあ」

「朱不尽から聞きました、何でも東淵から緑恒^{りよくへい}へ戻る時に方崖か

ら逃げ出した男を伴って出たとか。追手が皆様の所へ行っているやも知れぬと心配しておりました」

「おう、来たがな。誰や思う？　なんとわざわざ張新ちやうしんの奴が自らお出ましや」

傳朱蓮が狗不死の袖を捕まえる。

「ちよっと狗さん、声が大きいわ」

それから范凱が自分を注視している事に気付き、

「あの、この話はまだあまり知られない方が……」

傳朱蓮の言葉に范凱は頷いた。

「まあ別に何も起きなかったけどな」

狗不死の声はほんの少し小さくなっていた。

「殷汪知らんか？　言うてきただけや。なんせ殷汪の知り合いで想い付くんは傳千尽と洪破天、この二人だけやろ。儂も他には知らん」

「そうですか。張新が……」

「あいつだけやのうて、劉毅りゆうぎとかその辺も駆り出したらしいで。見てへんけど」

「あの、さつき居た林玉賦も」

傳朱蓮が付け加える。

「ああ、見たんか。朱蓮はあいつらよう知っとんか？」

「知ってるって程じゃないわ。ほんの一、二度会った事があるだけ」

「ずっと考えておりました」

范凱が切り出す。

「我等のヒョウ局の件と殷汪が方崖を出た事に何か繋がりがあるのか——。張新は恐らく、ヒョウ局を襲った賊が北辰と関わりがあるのではないか——と我々が考えるであろうと理解している筈です。張新自ら東淵まで来たという事は、自分は関わりが無いので傳千尽どのに会うのは何でも無いという事を示しているようにも思えますが、これはどちらとも取れます。それが本当ならそうしても構わない。嘘であったなら欺く為にそうする。とりあえず今の時点では繋

げて考える事の出来る様な事柄は何も見つかっておりませぬ。残念ながら、八方塞がりの状態」

「范幫主様」

傳朱蓮が口を開く。

「方崖から逃げた男は、その、殷総監ではなかったのですが、それは――」

「存じております。しかし世間では殷汪が方崖を出奔して、そして死んだという事になっていますから、そのままにして置く方が都合が良いでしょう。これからその「殷汪」を探し出すには。今はまだ手掛かりが何も見つかっておりませぬが」

「何で探す？ ヒョウ局とはとりあえず関係無いんやろ？」

「それが、私にもはつきりとした理由は述べられませぬ。ただ漠然と、方崖を良く知っている筈の殷汪に手を借りられれば何か打開策が見つけれられるかも知れぬという淡い期待なのです。私も永く会っておりませんが、知らぬ仲という程でもありません。見つかったとしても手を貸してくれるとは限りませんが」

「きっと殷兄さんには面倒な話……」

傳朱蓮が呟く。

「確かに。関わりを絶ちたいが故に身代わりを置くまでして方崖を離れたのですから」

丁度その時、木傀風が范凱の席に近付いてきた。

「何やら話しこんでおるなあ」

「木道長様」

范凱が立ち上がって迎える。

「うん。随分久しぶりだな。またこうしてまみえる事が出来ようとは、嬉しいことだ」

「道長様にそう仰って頂けるとは光栄にございます」

「それはそうと、そなたらは方々の噂話にも随分と明るかろう？」

木傀風は范凱と狗不死、傳朱蓮を見てから言った。

「何や急に」

とうりようおうりゅうもん

「東涼黄龍門の秘伝とは？」

「ん？ 何やそれ」

「この真武観にはその様な物があるらしい。今此処に、奪った秘伝書を返せと息巻いておる者が来ておってな」

「ほう」

「此処の者が応対しておるが、その者はこの武慶に住まう商人だと申しておる」

「東涼黄龍門の秘伝書……初めて聞きますな」

范凱が首を捻っている。

東涼はこの国の東の海に程近い街で、緑恒千河幫の勢力範囲に含まれていた。東涼の黄龍門はその始祖、洪淑華こうしゅくかの時代が最盛期でありそれ以降は徐々に衰退の一途を辿り、今から数十年前に潰えてしまふ。後年には、東涼黄龍門がその名を知らしめたのは偏に始祖、洪淑華の卓越した技量に依るものであり、武芸そのものは特筆すべき物ではないとされた。

「で？ 陸皓が見つけてぶん取った言うとする訳やな？」

「ちよつと狗さん、やめて」

「ちよつと見てくるわ」

狗不死は早速立ち上がると木傀風が指差した方へ歩いて行く。

「……っ、ちよつと」

傳朱蓮が声を掛けるが狗不死は取り合わずさっさと行ってしまう。

「申し訳ありません。失礼致します」

傳朱蓮は木傀風と范凱に会釈をしてから狗不死の後を追う。木傀風がさっきまで狗不死が座っていた椅子に腰を下ろした。

「駄々っ子に手を焼く母親のようだのう。これほど手の掛かる子供は居るまいが」

「ハハ……」

范凱は傳朱蓮の後姿を見送ってから座った。

真武観正面の入り口までやって来ると、外の歓声が聞こえてくる。集まった群衆達は酒を振舞われて上機嫌の様である。しかし、建物の入り口から少し入った所にはこの真武観の人間に囲まれて声を荒げている老人が居た。

第六章 十七

この武慶の商人であるというその老人は綺麗な身形で裕福そうではあるが、後ろに従えている男数名は見るからに柄の悪そうな風体で、じっとこちらを睨みつけていた。

「白千風を出せ！ いや、陸じゃ！ 陸を呼んで来い！ 関係無いとは言わせんぞ！ 秘伝書を見たに決まっておるわ！」

「お待ち下され。秘伝書とは初耳でございますよ。何故、千風が――」

「ではさっさと行って聞いて来るがいい！」

老人は益々いきり立って顔を真っ赤にする。老人に詰め寄られて面食らっているのは真武剣派総帥陸皓の三番目の弟子、杜越原^{とえつげん}。朴訥な人柄で真武剣派高弟の中では一番癖が無く親しみやすいと評判で、人当たりは良く身形も質素な男である。杜越原はかなり前から住まいをこの武慶から他所に移し、弟子を取って暮らしていた。今回の英雄大会の為、数人の弟子を連れてこの真武観に詰めている。

「秘伝書って何や？ そんな凄いモンかいな？」

早速、狗不死が首を突っ込む。

「何じゃおぬしは？ 此処の者か？」

老人はじろりと狗不死を睨み付ける。

「あつ、狗不死様……いや、これは……」

杜越原が言葉を濁していると狗不死は老人に向かって笑った。

「ちやうで。儂は客や。丐幫の狗いうモンや。あんたは？」

「劉じゃ。……此処の人間じゃないなら引っ込んでもらおう」

「爺さん、待てよ。ここは第三者である狗さんとやらにも聞いて貰うべきだな」

急に劉老人の後ろにいた男の中の一人がそう言って進み出た。

「俺は徐だ。俺の名はどうでもいいな。あんた……もしかして丐幫

の前幫主の狗さんかい？」

「ああそうや」

「ほう、これはこれは」

徐は狗不死を見てニヤリと笑う。それから劉老人の方に顔を向けた。

「狗前幫主ならあの秘伝書がどれだけ貴重な物か分かってもらえる筈だろ？」

「んん……そうじゃな」

劉老人が狗不死に話しかけようとした時、真武剣派の者であろう数名が駆け寄って来た。先頭は郭斐林で、他は恐らく呼びに言った下男達だろう。

「杜兄さん、何が――」

「ああ、師妹」

「あ、あなた……」

郭斐林は驚きの表情を浮かべた。

「旦那はどうした？ 白千風を連れてこんか！」

狗不死に話そうと少し冷静を取り戻しかけていた劉老人は郭斐林を目にして再び声を荒げる。

「師妹、黄龍門の秘伝書とは何だ？ 知ってるのか？」

杜越原が郭斐林に小声で訊ねる。

「あー、それは……」

「ほう、秘伝書の事はこちらの師兄には内緒だったのか。では知っているのはあんたと旦那の白に、総帥様くらいか？ まさか自分達の師父にも内緒にしてる訳じゃないだろう？」

徐は周りの人間にも聞こえるようにわざと声を大きくして喋っている。

「ほんまにあるんかいな？ そんなんあったら儂も見てみたいわ」

狗不死が郭斐林を見て言う。まるで劉老人の味方について、秘伝書を出すように要求している様に見える。

「狗さん！」

後ろでずっと黙っていた傳朱蓮が狗不死の服を引っ張る。狗不死はわざとらしく体をよろけさせながらも郭斐林から目を離さない。しかし郭斐林はそれを無視しながら劉老人に向かって口を開いた。

「劉さん。あの秘伝書はお返し致します。ただ、夕刻まで待って頂けませんか？ ご覧の通り今は立て込んでますので総帥も今席を外しております。お借りした秘伝書は総帥の許で嚴重に保管しています。夕刻には必ず、必ず私が持ってお伺い致します」

そう言って深々と頭を下げる。少しばかり大仰に見えるその様子に周りの者達は口を噤む。郭斐林は今日必ず返すと言う。劉老人は返せと行ってきたのだ。これ以上言う言葉は簡単には見付からない。江湖の名士を遍く集めたこの場であの武芸書の事が知れ渡るのは好ましくないのは明らかで、郭斐林は憂慮する。

（もっと慎重にするべきだった）

あの時、自分は劉馳方の取り出した書物を目にして興奮を覚えたが、確かその時は直前に現れた武大の事が気になって他派の秘伝書が自分の手許にあるという事の重大さに気付いていなかった。夫である白千風も同様だったろう。すぐにこの真武観へとそれを持って出て行った。師父、陸皓に見せる為だ。その後は師父の手許にあると聞いていただけで中身の真偽などの事は知らなかった。すぐに結論が出せる程簡単なものではない事は理解している。自分如きの知識では全く読めなかったのだから。

他者の武芸を知る――。武芸の習得を目指す者にとってこれは重要な事である。武林と呼ばれる世界に身を置く者達は常に自ら命を張る覚悟を持つ。永い年月を掛けて演舞を修行しているのでは無く、極論すれば命のやり取りに関する効率的かつ最大限の効果を得る方法を学び、手段を身に付ける。単にそれのみを目的とする訳では無いが、今の江湖は安寧がもたらされているとは言い難く、人の争いが無数に存在する中で剣など各種武器の扱いや体術は、今や一介の庶民ですらある程度の習得の必要を迫られている程だ。より優れた

武芸を身に付ける事が生き延びる唯一の術であると考える者も多い。他人と力で争い、勝つ為の能力を得る事だけに夢中になる人間を、誰もが表では蔑み、嫌う素振りを見せながら、内心では「自分よりも優れた技を得るのではないか？ 自分を脅かす存在になりはしないか？」と警戒し、対抗しようと模索する。彼我の優劣を見極める為に、相手の修めた武芸はどの様な物であるかを知らねばならない。それは個人のみならず、江湖に名を立てる大小様々な組織に於いても同様である。

武林の武術門派ではどうか？ 各門派は永い歴史の中で受け継いできた自らの存在の拠り所となる武芸を持っている。優れた武芸者によって創始され、師から弟子に伝えられながら、時には優れた弟子が現れて技により磨きが掛けられ、更に精妙に、更に奥深く練り上げられていく。それこそが一門の誇りである。皆、「我等の武芸こそ天下第一である」と自負し、信じて研鑽に励むのは当然の事だ。だが、武芸の世界というものは他を凌駕する技を学ぶだけのものではない。

剣を手にするのは何の為か？ 全ては「侠」の一字にある。正義を学び培った己の信条によって行動する事こそが武林の侠客である事を証明する。武芸そのものが主なのではないのだ。ただの殺人技でしかない武芸は確かに使う当人を守るものかも知れないが、それは同時に江湖を敵となすも同じ。その者に、その技に対して最初は畏敬の念を抱くが、いずれ恐怖となる。

（その者はいとも簡単に自分を殺せる術を持つ）
そして憎しみへと転じる。

第六章 十八

武林にある優れた技というものは、拮抗していなければならない――。

武林の先達の残した言葉にある通り。否、そうならねばならぬというよりも、必然的にそうなってしまうのだ。永い年月を経て作り上げられる様々な技は、無限に強さを増すなど考えられない。そしてそうでなくては困る。己の存在を危うくする程の強さが他にあるなど認めては生きていられない。その存在を強制的に忘れ去らない限り。遠くに追いやらない限り。自らの欲望から益々思考が乖離していく。しかし無理やりにでも、それら相容れぬ考えを、継接ぎだらけだろうが不恰好だろうが、なんとか、繋ぐ。

現実は何んとも拙い。なんとも覚束ない。欲望が隠せない。澄ました顔をして君子然と理想を語っている間に貪欲な盗人が、力を、知を、かつさらっていく。己が名も無い欲望の塊ならば、何も隠す必要は無い。敵も同じ。ただ力の応酬を繰り返すのみ。ついこの間までそれを繰り返してきた。だがいつまでも続けている訳にはいかない。我が派が最も優れていなければならない。上手い方法があるはずだ。

力で、秩序を――。

「あんたが来るんだな？」

「……え？」

「あんたが、返しに来るんだな？」

「……必ず」

郭斐林は徐のしつこい問いかけに少々苛立ったが面には出さない。「なら、それでいいだろう。ここには証人が一杯居る。安心だな」

徐は劉老人に言った。

「……フン、儂がこうして来なければ返すつもりは無かったんじゃない。日が暮れるまでに儂の屋敷に持って来い。よいな？」

「分かりました」

この武慶で郭斐林らを相手にこのような物言いをする者は殆ど居ない。誰もが陸皓とその弟子達を敬い、中には総帥陸皓のみならず「郭斐林様」と両手を合わす年寄りすら居る程である。しかし、常識的に考えれば真武剣派を拝む年寄りが特殊なのであって、劉老人の振る舞いは至って普通なのだろう。眉を顰めてこの光景を眺める者があっても、面と向かって「無礼な」とは言える者は居ない。

「話は終わった。行こう」

徐がそう言って引き上げようとする。それからほんの数歩行ってから郭斐林を振り返る。

「劉さんの屋敷はまあでかい方だが、あまり大勢で押しかけたら入れないぜ？ 一冊の書物を持ってくるだけだ。あんた一人で十分だな」

徐が再び歩き出すと取り巻きの男達もぞろぞろと続き、表へ出て行った。

「ほんまにあったんか。見たいなあ」

狗不死はまるで菓子をねだる子供の様に郭斐林に言う。

「かなり痛んでいますし、書かれている文字も読めないものばかりで、本物かどうかは疑わしい物です。我が師が目を通しましたがやはり――」

郭斐林は言葉を濁す。陸皓が中身を理解したのか全く分からなかったのかは知らない。

「師妹、何故そのような物を……」

杜越原が怪訝な面持ちで郭斐林に訊ねると、

「後でお話いたします。私は師父の許へ戻らないと……。皆様、お騒がせして申し訳ありませんでした」

郭斐林はそう言ってさっさと奥へ戻ってしまった。

「あんたは知らなかったんか？」

郭斐林の後を追って行こうとする杜越原に狗不死が声を掛けた。

「はい。最近の事であれば、私は武慶には居りませんので……」

「何で此処にあるんやろなあ？」

「狗不死様、私は何も……」

「そうか」

広間では何事も無かったように客達が酒杯を手語に語らっている。

劉老人達は広間まで押し入って騒いでいった訳ではなく、客の多くは広間の外の出来事には気付いていない。しかし、ほんの数人でも耳に入れた以上遠からず話は広まり、真武観に留まっていまい。劉老人と真武剣派の秘伝書を巡る遣り取りもだが、突如武林に姿を現した東涼黄龍門洪淑華の秘伝書の中身についても然り。話は大いに膨らんで武林を駆け巡る事になるだろう。

「随分久しぶりのおもろそうな話やな。もうこんな出尽くした思つとったけどなあ」

狗不死達は范凱の席まで戻る。范凱は木傀風と話していた。

「陸が持つとるんやて」

「ほう」

「すぐ返す言うてたけど、怪しいなあ」

「おぬし、少しは口を慎んだらどうだ？　ここが何処か忘れておるのか？」

木傀風は呆れた様に言って溜息をつく。

「そやけどなあ、偶然やろか？　あんたも知つとるやろが。黄龍門と陸やで？」

「また古い話を持ち出しおって。その話は儂の居らぬ処でしてくれんか」

「……ほんまはごっつい興味あるくせに」

「知らぬ」

木傀風は狗不死の言葉を拒絶する。しかし特に機嫌を損ねた風でもなく、のんびりと酒に手を伸ばした。

范凱と傳朱蓮には何の話か想像もつかなかったが、木傀風がしたくないと言う話を訊ねる訳にもいかず、少しの間沈黙が続いたが范凱が傳朱蓮に話しかけた。

「東淵からこちらに参られたのなら、緑恒を通られたのではございませんかな？」

「……はい。ご挨拶に立ち寄らせて頂こうかとも考えたのですが、突然お伺いしてご迷惑をお掛けしてはいけませんし……あの、狗さんがこの英雄大会に――」

「儂かいな！ 何でやねんな。儂、何遍も寄っていき言うたやないか。そら、幫主様に挨拶するんは面倒臭いけどヒョウ局くらいどうっちゅう事無い言うてなあ」

「ハハ、迷惑などんでもない。今は特に忙しいという事もあります。また機会があれば是非お寄り下され。朱不尽、朱さんになら気兼ねも要りますまい」

「有難うございます」

「そや。あんたの息子元気か？」

「え？ ああ、お蔭様で元気しております。それだけ取り柄でございますゆえ。東淵から景北港まで狗不死様にご同行頂いたとか」「あーもう、そんな話ええねんで。いらん。息子が元気で良かったなあっちゅう話や。なあ？」

狗不死は急に傳朱蓮へ顔を向ける。

「え？」

「話聞いてへん――」

「あ、楊さん……とかも、お変わりなく？」

傳朱蓮は少し慌てたように、狗不死を無視して范凱に訊ねた。

「楊……楊迅ようじんですか？ あれが一番元気かもしれませんな。東淵より戻ってからずっと、剣の修練に明け暮れて居るようです」

「楊……ああ、あれか。大怪我しとった奴やな」

「すぐに手当てして頂いたおかげで――」

「ああ終わり。その話終わりや。やめや」

范凱がまたも堅苦しい礼を述べ始めるのを狗不死が即座に遮る。

「おぬしに言ったのではなからうが……」

木傀風が手の酒杯を眺めながら呟いた。

第六章 十九

酒宴は長く続いていたが、依然、陸皓の姿は無い。変わりに白千雲ら弟子達が時折広間に顔を出して客の相手をする。そろそろ陽が傾き始め、窓からやや赤みを帯びた光が差し込む。

表は昼間程ではなくなったがまだ多くの人が居て、地べたに座って何やら話し込んでいる人の輪が幾つも出来ていた。

「お、爺さんまだ居たのか」

広場の隅でたった一人、塀にもたれて座っている老人を武大が見つけ、声を掛けた。老人は腕を大事そうに両手で抱えていた。

「なんだ爺さん、まだ酒あるのか？」

真武剣派の振舞い酒はもう随分前に無くなって終わっている。かなりの量を用意していたようだったが、広場一杯に集まった群衆に酒を遠慮する者など居る筈も無く、早いうちに全て飲み干されてしまった。それでも腕に一杯ずつは行き届いた様である。

武大が老人の持つ腕を覗き込むと、まだ腕の半分は残っている。

「そんなに時間掛けて、さすがの銘酒もくたびれないか？」

「そんな事は無いが……それは構わん。儂も酔うておるからのう」

老人はゆっくりと喋りながら上体を揺らす。酔っているとは思えない程顔は青白い。

「しかし、あれでは少なすぎるわ。飲み直さないと」

「これは五杯目。ぜんぶ赤じゃ」

老人はそう言って気持ち良さそうに顔を綻ばす。

「五杯？ 五杯だと？」

「うむ。五杯じゃ。これはきついからのう。酔うには十分。時間を潰すにも十分じゃな。ハハ」

「ハハ、じゃないだろう。五回並んだのか？ あの赤い甕なんてすぐ無くなったではないか。あの間に五回だと？」

「上手くやらねば。上手くのを。あんたも飲んだではないか。どう

じゃ？」

「んー、そうだな。確かに高級な酒の様だったが……正直言つて分
からん。不味い酒はすぐ分かるが、美味過ぎるのも良く分からんな。
ハハ、いや折角、爺さんに飲ませて貰つておいて済まんな」

「良い。この手の白酒は修練を要す。そう簡単に口には出来んから
のう、ほれ、これを飲みなされ。今日はこれでしまいじゃ」

老人が酒の残った碗を差し出す。

「いや、遠慮しとくよ。爺さんのだろうが。儂はその辺の安酒で我
慢するさ」

「いいから飲みなされ。もうこれだけじゃ。儂はちゃんと腹に納め
たからのう」

老人は押し付けるように碗を武大に手渡す。

「そうか？ では頂くか」

武大は碗に残った酒を半分程口に含み、眉を顰める。

「……やはりきついな」

「もうそれだけじゃ。悪酔いしたくても出来んよ」

「なんだか、こう……体に良さそうだよな。ハハ」

「そうとも。何とも楽しい薬じゃ。だから死ぬまでやめられぬ」

老人はそう言ってゆっくりと立ち上がる。細く骨ばった手で尻や
足元の埃を掃う。武大は残りを一気に飲み干した。

「う……爺さん、あんた名は？ 儂は武。武大だ」

「儂は、穆^{ぼく}」

「この辺の……じゃなかったな」

「生まれは呂州じゃ。しかし若い頃に家を出てからは根無し草。そ
ろそろ枯れかけておるがのう」

「そうか……。是非またいつか酒をご教授頂きたいな」

「嬉しい事を言うてくれるのう」

「清稜山に木の爺さんを連れて帰ったら、またこっちに出てきて久
しぶりにこの中原を回ろうと思ってる。方々の酒を飲み比べるのも
良いな。ま、最も不味いのは此処で決まりだけだな」

「では、達者で行きなされ。またいずれお会い致そう」

「爺さんも元気でな」

老人はにっこりと笑みを浮かべて武大に頷いて見せ、纏った袍の袖を棚引かせながら去って行く。

江湖は広く、ただ旅をすると言っても隅々まで巡ろうとすれば急いても一年以上、じっくり各地の風物を愛でる旅となれば必ず数年を要す。こんな広い場所では時と場所を約束でもない限り偶然再び会うなどまず期待出来ない。

（あの爺さん、もうかなりの歳だが……、もしまた会えるとすれば、奇跡というやつだな）

まだ夕暮れの前ではあったが広間での宴会は一先ずお開きとなり、客達はそれぞれ宿や真武剣派が用意した宿泊の為の屋敷へと引き上げて行った。真武観の庭を開放して招待客以外の者を入れるのはこの日だけだが、招待客達は時間の許す限り長く逗留することが出来る。特に陸皓と個人的にも親しい間柄の客達は陸皓の要請に応えて留まる事になる。総帥陸皓はこの英雄大会の間も忙しくしているらしく、なかなか古い友人達とゆっくり語らう時間が持てない様子だった。

郭斐林は木傀儡風と共に自らの屋敷に戻った。武大や常施慧らは何処かへ行っているらしく姿は見えていない。

「斐林、少し横になっても良いかな？ 何もせずに昼間から酒ばかりで体がたまぬよ」

「そんなに召し上がられました？ 道長様、此処を我が家と思って好きにお使い頂けば結構です。師から、特に道長様とはまだ話すことが山ほどあるから絶対帰してはならんとの厳命を仰せつかっておりますから、当分此処でゆっくりしていつて頂かなければ」

「うん」

郭斐林は普段からは想像も出来ない程無邪気で心の底から楽しさ

が溢れ出ている子供の様な笑顔を見せた。周りに誰も居ないせいもある。しかしそれよりも相手が木傀風だからであろう。近年はあまり会えなくなっていたが昔は良く遊んで貰った記憶がある。木傀風は幼い頃から清稜山で修行していたが、一時中原に出て各地を廻っていた時期があり、丁度その頃、十代だった郭斐林は真武剣派入門した。木傀風はすでに陸皓と親しく接しており、陸皓の弟子達を可愛がった。郭斐林達にとって陸皓は父も同然である。しかし、それ以上に「師」だった。単なる親子ならあるであろう親密さというものの子供心には感じられず、その代わりという事でもないが木傀風は武慶に来る度に郭斐林らを遊びに連れ出した。木傀風が何時までも武慶に留まって居られる訳も無く、またそう頻繁にも来られなかったが、その短い間木傀風は「父」であった。

「昼間来ていた商人の所へ行くのだろうか？」

「……はい」

郭斐林の顔から笑みが即座に消える。

「急いの方がいいのう。儂は休ませて貰うでしょう」

「はい。それでは」

郭斐林は礼をして木傀風と別れた。

木傀風は秘伝書の話はどう思っただろうかと思いを巡らせながら、郭斐林は少し急いで部屋に戻る。

「小絹は戻っているかしら？ 呼んで頂戴。急いで」

下男にそう告げて待っていると、直ぐに李小絹が郭斐林の許にやって来た。

「奥様——」

「小絹、劉さんの、あの子の家は知ってるわね？」

「え？ あ、はい」

「今から行くから一緒に来て案内して頂戴。何も要らないわ。そのまま」

「分かりました」

第六章 二十

李小絹も昼間はずっと真武観に居たので劉馳方りゅうちほうの祖父が来ていたという話しは既に聞き及んでいる。あの劉馳方が持ってきたよろの書物を取り返しに来たという事も。

（あの家の人間はほんと鬱陶しい。この街から消えてくれないかしら！）

李小絹は厄介事を持ち込んだ少年には勿論、真武観まで乗り込んできたその祖父に対しても腹を立てていた。

郭斐林が李小絹を伴って昼間の老人、劉建碩りゅうけんせきの屋敷を訪れたのは完全に陽が沈む僅か前だった。郭斐林が中に声を掛けるとすぐに劉老人が出てきてその後に孫の劉馳方も顔を出した。

「フン、まあ日暮れ前じゃな。さあ、早う出せ」

「はい」

郭斐林は懐から古い書物を取り出す。劉馳方から預かった時と全く同じ状態であったが、劉老人はひたたくる様に受け取ると表、裏、中身にサツと目を通し、

「全く……ぼろぼろにしおってからに」

そう呟いてからまた「フン」とこれ見よがしに鼻を鳴らしてさっさと奥へ戻って行く。「もう用は無いから帰れ」という事だろう。

「あの……」

劉馳方が呟く様に言う。

「あの、すいませんでした」

郭斐林は微笑を浮かべて、

「いいえ、勝手にお借りした私の責任だから。御免なさいね」

劉馳方はただじっとしていた。

「それじゃあ、戻りましょう」

劉老人はもう会いたがらないだろう。それにあの様子ならもうこれでこの件は終わりに出来そうだ。郭斐林が後ろに控えていた李小

絹に言うと、劉馳方が慌てた様に李小絹に駆け寄った。

「あの、小絹。ほんとにごめん」

「……なんであなたが謝るのよ」

李小絹は小声で応えるが冷たく突き放す様な口ぶりである。郭斐林にははっきりと聞こえていたが、劉馳方が何故謝って李小絹が何故怒っているのかまるで分からない。

「小絹、あの、話せないかな？」

「何を話すのよ！」

急に李小絹が甲高い声を出して劉馳方も郭斐林も驚いた。

「小絹、どうしたというの？　今、私達は劉さんにお詫びに伺ったのだから、その態度は無いでしょう？」

「も、申し訳ありません！」

李小絹はびっくりした様な顔をして今度は郭斐林に対して何度も頭を下げて謝る。やはり良く分からない。

（あの秘伝書の事とは別の何かが二人にあるのかしら？　若すぎる気もするけど、まあ年頃だし……）

「小絹……」

劉馳方が声を掛けるが、反応は無い。

「小絹、私は先に戻るから、あなたは少し話でもしていきなさい。もう暗くなり始めてるから少しだけよ」

郭斐林が言うと李小絹はすぐに顔を上げた。

「は、話なんてありません！　私も帰ります！」

「小絹！　少しいいんだ！　僕が送って行くよ！」

劉馳方が李小絹の袖を掴んで懇願するように言った。

劉馳方は李小絹の胸の内を良く理解していた。自分が秘伝書を真武剣派に渡した事が祖父に知られて、祖父が真武観に乗り込んだ。この事が街の噂になればやはり他所の秘伝書を勝手に見た真武剣派に非があるという雰囲気になる。持ち主である祖父が取り返しに乗り込んだという事実がある以上、人々はそれを勝手に見たという事の裏付けとするだろう。

李小絹は最近ずっと真武剣派の弟子になるその日が来るのを待望しているといった事をいつも口にしていた。自分はもう真武剣派の人間なのだ、と。だから李小絹は怒っている。自分が他所の秘伝書などを持ち込まなければ「私達」にあらぬ嫌疑が掛けられる事など無かったと思っっている筈だ。しかも自分が「李小絹に見せる」と言っ
て秘伝書を持ち込んだ事も更に怒らせる要因になってしまった。
李小絹も厄介事を持ち込んだ犯人に数えられる恐れがある。もう直ぐ真武剣派の正式な一員となれる筈なのに、その真武剣派の人達から嫌悪されるも知れない。だから、怒っているのだ。今日、このまま別れたら、もう会ってもらえない――。

（彼女に嫌われたくない……）

「小絹、君はもう……真武剣……派の弟子になるんだろ？　きっと修行で頭が一杯になるんだろうな……なかなか会えなくなるかも知れない。それなのに……このまま、このまま会えなくなるのは……」
劉馳方は自分の足元をじっと見つめたまま話し、李小絹は顔を背けて辺りに視線を彷徨わせている。郭斐林は黙って二人を眺めていたが、

「じゃあ、小絹。あまり遅くならない様に。そんなに遠くないけど送ってもらいなさい。劉さん、お願いね。それから後でお爺様に伝えて下さい。、郭がお詫び申し上げていたと」

そう言っ
て李小絹の返事を待たずに屋敷の門を出て行った。

夜になり真武観の片付けを終えた孔秦こうしんと鄭志均ていしきんが白千風の屋敷へと帰って来た。白千風は二人よりも先に戻って来ている。

「師父、只今戻りました」

「秦か。真武観は？」

「来賓の方々はもう戻られました。あ、丐幫の狗不死様とお連れの方が太師父様とご一緒でした。太師父様が、もう戻って良いと仰られたので帰ってきました」

「そうか。ご苦労だった。今回は太師父様も忙しくしておられる故、

来賓の方々のお相手がなかなか出来ぬのでな。まだ数日は多くの方が真武観に来られるだろう。明日以降も朝から真武観に詰めておくのだぞ」

「承知致しております」

「お前達、食事はまだか？」

「あ、いや、……実は真武観の厨房で、その、少しばかり料理を分けて貰いました」

「ふむ。それはまたこの上ない贅沢をしたものだな。うちではあのような料理はとても食べられぬからな」

「……ハハ」

「そうだな……今日はもう休んで良い。明日、遅れぬ様にな」

「はい。それでは」

孔秦と鄭志均は白千風の部屋を出て自室に向かう。外はすっかり冷え込んで来ており二人が吐く息も白い。こんな日は武慶では一年の内でも数える程しか無いだろう。二人とも袖の中に手を引っ込めて首を縮めて歩いていると、そこへ呉程青が駆け寄ってきた。

「ねえ小絹見なかった？」

「ん？」

「小絹は随分前に真武観から戻ってる筈だろ？」

鄭志均が寒そうに袖を擦り合わせながら怪訝な顔をする。

「夕方に師娘と一緒に出かけたのよ。ほら、あの劉っていうお爺さんの所」

「ああ、あれか。でもなんで小絹も？」

「だってあの劉って人の家を知ってるのは小絹だけだもの」

「全く……うちに忍び込もうとするあの小僧に、真武観でわめき散らす爺さん……あの爺にしてあの孫あり、だ。小僧の親父もまともかどうか疑わしいな」

鄭志均がしかめっ面をすると、

「いや、まあ今回の事についてはあの劉さんが真武観に来たのも別におかしい事じゃないだろ？　それだけ大事な物だったって事だ」

孔秦は、直ぐに悪態をつきたがる弟弟子を諭す様に言う。

第六章 二十一

呉程青はじれったそうに腕をばたばたと振った。

「そんな事より小絹よ。師娘は結構前に戻られたのに小絹がまだ帰って来てないの。今から師娘と一緒に劉さんの所へ様子を見に行くところよ」

「じゃあ俺も行こう。もう真っ暗だし、劉さんの所に居なかったら探さなきゃならないだろ？」

孔秦が言くと鄭志均はフーツと溜息を一つ。

「やれやれ。こんな寒い夜にあいつ何やってんだ」

「ちよっとは心配したらどうなの？」

呉程青はむっとして鄭志均を睨む。そこへ郭斐林がやって来た。

「師娘」

孔秦と鄭志均が抱拳して迎える。

「師娘、私も行きます」

「そう？ そうね。こっちに向かっているかもしれないけど、もう暗いし何かあったら大変だわ。行きましょう」

「はい」

孔秦と呉程青の返事が綺麗に揃う。するとすぐに郭斐林が鄭志均に目を向けた。孔秦と呉程青の返事が余りにも揃って聞こえたので、何も言っていない鄭志均がかえって目立ってしまった。

「どうかした？」

「あー、いえ、お供します……」

鄭志均がそう言って神妙に頭を下げるのを見て、孔秦と呉程青はまたも揃ってニヤリと笑みを浮かべた。

郭斐林を先頭に弟子三人が後に続き、夜道を少しばかり早足で進んだ。暗くなったと言っても深夜ではない。通りには明かりも多く人も全く居ない訳でもなく、そう遠くないこの距離を歩いたなら道

中何かが起こるといふのは考え難い。郭斐林は劉馳方に李小絹を送るよう言ったのだし、李小絹が余程強硬に拒まない限り二人で来るに違いない。尤も、あの時より二人の仲が改善されていればの話だが。

結局、道中に二人の姿を見る事無く劉老人の屋敷の近く、招寧寺の南門の前を過ぎる。もうすぐ劉老人の屋敷の門が見えるという所まで来て、前方にちよつとした人ばかりが出来ているのを見つけた。

「師娘、何でしょうね？」

「あそこが劉さんのお屋敷よ……」

郭斐林は険しい表情でそう呟くと更に早足でその人だかりに近付いて行き、後の三人も追った。

「すみません、あの、こちらで何か？」

郭斐林は屋敷の門前で話している四、五人の輪に声を掛ける。するとその者達は郭斐林を見るなり「アッ」と驚きの声を発し、しばし言葉を失った。

「こちら……劉さんに何か？」

集まっていたのは近所の者だろうか。中年の男女に老人、子供までも来ている。郭斐林が話しかけた者達は戸惑うように互いの顔を見合わせている。少し間を置いてその中の一人の男が口を開いた。

「……ここ」

男は屋敷の方へ向けて顎をしゃくる。

「劉の爺様が死んでるんだ」

「えっ？」

男がそう口にした途端、周りの者達がこの場を離れて行く。そして別の人の輪に加わって時折こちらを盗み見ながら、郭斐林達が現れた事を他の者に伝えている様だ。

三人の弟子達は皆一様に驚いて顔を見合わせ、郭斐林は目を大きく見開いて男を凝視する。

（……そんな！ 私が此処を離れてからまだ……）

「郭さん。あんた……行って見てくるかい？ 役人も来てるが」

男は眉を顰めて郭斐林を見返している。

「行きましょう！」

少し語気を強めて郭斐林が弟子達に言う。その声で孔秦らに緊張が走る。

（劉さんが死んでいる？　では小絹は？　まだ此処に居るのだろうか？）

突然の事態にさすがの郭斐林もその胸に激しい動悸を覚えた。

幾人もの近所の住人達が中を覗き込んでいるその門を郭斐林らが入ると、松明を掲げた男がすぐに駆け寄ってきた。

「ああ、郭さん、えらい事になりましたよ。ここの主人が死んでるんですよ」

男は役人で、どうやら他にも何人が連れてきている様で、同じ格好の、松明を持った者が数名居た。

「郭さん、ここに来られたそうですね。見てませんか？」

「何をかしら？」

郭斐林は辺りの様子を窺いながら淡々と応じる。

（私に尋問したいけれど、出来れば自分から言わせたいというところかしら？）

「ここには、うちの李小絹という娘も来ていたの。こちらの息子さんと知り合いなので。でも、まだ戻らないので見に来たんです」

「娘さん？　いやいや郭さん、ここにはそのような娘は居りませんよ。息子というのは……殺された劉建碩の息子で？　今、奥に居ますよ」

「劉さんは、殺されたの？　確かに？」

「ええ」

役人の男は顔を顰めて溜息を付いている。

「短剣で腹を。何度も刺されて、もう血の海ですよ。今、片付けていますけどね。郭さんのところの娘、というのは真武剣派のお弟子さんで？」

「……ええ。もうじきそうなるわ」

「あ、知り合いというのは孫の事ですかね？」

「……劉馳方よ」

「ああ、孫ですね。郭さん、その孫も居ないんですよ。何故か」

「居ない？ 出掛けているの？」

「全く分かりません」

「あなたの言った息子というのは、劉馳方の父親？」

「そうです」

「会わせて貰えるかしら？」

「それは構いませんよ。私達も郭さんが来られた時の様子を窺いた
い」

郭斐林は頷いてから、後ろを振り返った。

「あなた達は此処で待ってなさい」

「……分かりました」

孔秦が答える。郭斐林は役人を後ろに従えて、屋敷の中に入って
行った。

中にも結構な人数が居り、役人や遺体を処理した近所の男達らし
い。郭斐林が部屋に入ると、大きな寝台の前に座っていた男が立
ち上がった。周りにも数人居る。その寝台には劉老人が固く目を閉
じて横たわっている。

「劉建和だ。あんた、此処に来たんだってな？ 爺さんの言っただ
秘伝書とやらを持って」

男の声は至って冷静だった。微塵も震えてはいない、郭斐林はそ
う感じた。ただ、目が少し赤くなっている様である。

「……ええ。私は李小絹という娘を連れて、丁度、日没の頃に参り
ました」

「で、渡したんだな？ それを」

「確かに。そしてすぐに帰りました。ただ、うちの小絹はあなたの
息子さんと親しいそうなので、少し残って話していた筈です」

第六章 二十二

「……息子はまだ帰ってない」

「小絹もです」

「……」

沈黙が流れる。郭斐林も劉建和も同じ事を考えていた。

（まだ戻らないのは、巻き込まれた……）

「劉さん」

郭斐林が一步進み出る。

「この状況では、私が最もこの事件に近いのは確か。しかしながら、この所業、私共では断じてございません」

「フッ」

劉建和は小さく笑った。

「今のところ、俺もそう思ってるんだ。実は、その秘伝書とやらが消えた」

郭斐林は僅かに眉を顰めたが、既に予想していた事だ。秘伝書を奪う為――。

「それから、この街のごろつき共も結構な数が消えたよ」

「えっ？」

「今日、真武観に爺さんと一緒に乗り込んだ奴等さ。あんた、見たかい？」

「……徐という男ですね」

「その取り巻きとな」

「それでは……」

「普通に考えれば、そうだな。奴等としか思えん。だが――」

「これでは余りにもあからさま過ぎる、と、今話していた所なんですよ」

劉建和の言葉を引き継ぐように、傍らに居た男が不意に口を開いた。

「私はこちらの劉さんの知人で、周維と申します。真武剣派の高弟であられる郭斐林様にお目に掛かれて光栄です」

郭斐林は急に話しに入って来た男を一通り眺めて、軽く会釈をした。

「まずは真武剣派はどうか？　と考えました。真武観にまで乗り込んだのですから、真武剣派の皆様はさぞかし気分を害されたことでしょう」

周維は閉じた扇子を手許で弄びながら、郭斐林を見つめて話す。

「しかしながら、これも短絡な発想ですね。お許し下さい。とにかく犯人が誰であれ、この凶行を隠しもしないとは、まったく意外な事です。あの徐という男は、先ほどお役人が確認に行かれましたがすぐに姿を消した様です。『自分が盗った』と言っている様なものですよ。あの男、そんなにあの秘伝書が欲しかったんでしょうか？　奪うにしても、もう少し計画を練っても良さそうなものです」

周維はやはり郭斐林から目を離さない。口では徐が疑わしいと言いつつ、その目は真武剣派の容疑は消えた訳ではないと言っている。「計画が稚拙でぼろを出した、という様な状況ではありませんからこれは……逆に複雑な何かがあるのでしょうか？」

（何故、それを私に聞く？）

郭斐林は不快に思いながらも表情には全く出さずに、

「私共はまずうちの李小絹を探します。きっと息子さんと一緒に筈です。それから、徐を追う手配を致します」

「それは、助かるな。真武剣が人を出してくれば俺が方々を訪ねて廻るよりも遥かに効率が良い」

劉建和はそう言って、再び寝台の傍に腰を下ろした。普通に話している様だが、やはりどこか力が入らない、そんな様子である。

「真武剣派は必ず、全力で徐を見つけ出します」

郭斐林の力の籠もったこの宣言に、ただ、薄く笑うだけであった。

郭斐林は孔秦らに、まず屋敷に戻って他の弟子達と李小絹を探す

様に命じ、それから一人で徐がねぐらにしている環龍客棧へと向かった。

この環龍客棧の正面には常に数人の男がたむろしていたのだが、やはり今は見当たらない。中に入ると女が一人、店番の様に座っていたがそれ以外は誰も居らず、宿の主人である紅玉麗も姿が見えない。女は『居ない、知らない』を繰り返すばかりで埒が明かなかった。

すぐに李小絹の搜索が開始された。李小絹は殆どの弟子達と親しく、弟子達は次々に李小絹の居そうな場所、好んでいる場所を挙げて搜索に向かうものの一向にその行方は知れない。皆、慣れない寒さの中、武慶中を探しまわるが、夜も更けて来た頃、どうやらこの街には居そうに無いと思い始めていた。

「小絹、小絹が……」

呉程青は涙を見せて呟く。普段泣き顔など一切見せる事の無い呉程青だが、夜を徹して探し廻って疲れ果て、ただ李小絹の名を呼んでさめざめと泣き続けていた。

「皆、もう休め。まだ我が派の英雄大会は終わってはおらぬからな、そちらに支障があつてはならん」

郭斐林と他数名はまだ戻ってはいなかったが、白千風は先に戻った弟子達を部屋に集めて言う。弟子達は疲れきった様子で肩を落としてうなだれていた。李小絹はまだ正式な弟子では無いが誰もが妹の様に思い接してきた。このまま放っておくわけにはいかない。しかし今は英雄大会を疎かに出来ないのだ。弟子達も良く分かっていた。真武剣派にとってこの件はあきらかに失態である。しかも武林の名立たる名士をこの武慶に招待している今、このような事が起きるなど、下手をすれば体面を失いかねない。『秘伝書を借りた』という事だけでもすでに問題がある。それに加えて劉建碩の死は痛恨の極みであろう。一体、武林にどのような話が広まる事になるのか、想像するに難くない。

郭斐林が屋敷に戻って来たのは、弟子達が自室に戻ってから随分

後だった。

「兄さん、私の責任です。……御免なさい」

沈痛な面持ちで詫びる郭斐林の肩に白千風はそっと手を置く。郭斐林は目を閉じて俯いた。

「師父に、何とお詫びすれば……」

「お前のせいではない。あの秘伝書を借りると言ったのはこの私だ。私が軽率だったのだ。……あの娘、小絹の事は私が師父にご報告する。……師妹、心配するな。明日も真武観だ。少しでも休んでおう」

「総帥がお呼びでございます」

真武観で客と話していた郭斐林は陸皓に呼ばれ、総帥の部屋へ向かった。

「郭斐林が参りました」

「入れ」

郭斐林に命じたその声は白千雲のものだった。

中に入ると、白千雲、杜越原、白千風の三人と、何故か緑恒千河幫幫主の范凱が居た。正面には陸皓が、黙ったまま郭斐林をじっと見つめている。郭斐林はすぐにでも陸皓に詫びようと考えていたが、部外者である范凱も居る為、躊躇していた。すると陸皓が話し始める。意外にも優しい声だった。

「斐林、何としても徐と申す男を見つけ出して劉殿の品を取り戻さねばのう」

「は、はい！」

「お前はその男を知っておるのか？」

「あ、いえ、環龍にたむろするならず者で、顔は何度か見かけて覚えておりました」

「人相書きを用意せよ。この英雄大会の後、お前達は……この武慶に居る必要は無い」

「えっ？」

郭斐林は驚いて思わず声をあげる。

「師妹、可能な限り迅速にこの件は終わらせねばならん。すでに都の常源には知らせを出した。都だけでなくその周辺でも東涼黄龍の秘伝書の噂が無いか調べるようにな。私もこちらが片付き次第、すぐ戻る。全てを尽くして徐を追う」

白千雲が言うつと、杜越原、白千風も頷いた。杜越原は前日まで一切を知らなかったが、つい今しがた説明を聞いたところだった。

第六章 二十三

「范凱どの」

陸皓が范凱に体を向ける。

「まったく情け無い事じゃ。我が派は方々からわざわざ人を招いて恥を晒した様なもの。真武剣派など、この程度のものであったという訳じゃ。……范凱どの、恥を忍んで范凱幫主にお力をお借りしたい」

「……何でございましょう？」

范凱は一瞬、眉を顰めたが、すぐに取り繕って怪訝そうな表情を消した。

「この徐という者、秘伝書をどうするつもりか知らぬが、もし……東に逃げれば我等は動きにくくなるであろうのう」

（東？ 我が幫か？ ……北辰か）

「東方についてはやはり我等はまだまだ疎いと言わざるを得んどのう。北へ向かうかも知れぬし、或いは東涼へ還るかも知れぬな。巡り合わせは異なるもの。范凱どののお手を煩わせる訳にはいかぬが、いやなに、少しばかり気に留めておいて貰えれば有難いのう。東涼の秘伝書をのう」

（……我らに手伝わすでにお互い気脈を通じていると知らしめる為か）

「どうかお願い出来ぬかのう？」

「……分かりました。その男、いや、集団でしたかな？ 欲の為に人の命まで奪う様な輩を追うのは当然の事。私もこの話を耳にした以上、見過ごす訳には参りませぬ」

「有難い事じゃ。范凱どの……有難い」

陸皓はそう言って笑う。范凱も合わせて頬を緩めたが、何か、やや重苦しいものを胸の内に感じていた。

暫く范凱を交えてこの件について話し、その後陸皓と白千雲だけを残して他は部屋を辞去した。

「……奴等の手に渡るでしょうか？」

「さて……他に買い手が見つかるかのう？ まともな者は手は出さない」

「しかし、今までに繋がりは無かったようですが」

「徐とやらが賢ければ、まず北じやろう。国の外では無駄じゃな。ただの紙くずに過ぎん」

「……范凱どのはまったく抵抗する様子はありませぬな」

「フ……しかし、これ以上は危うい。あの男はただの大男では無い事は確かじゃ。慎重にな」

「はい」

「では僕は客の相手をしてこようかのう。あまりこの件に執着されるのは困りもんじゃ」

「狗不死様が色々聞きたがって居られる様ですが」

「あれか……さすがに奴は厄介だのう。どうやらまたすぐ何処かへ行くとか言うておったし、そうじゃな、奴にも頼んでおくでしょう。あれは単純じゃが……。千雲、お前は何も言うな？ あれをうまく扱える者はこの江湖にごく僅かしはおらんでのう」

「ハハ、心得ております。……師父、狗不死様に同行している東淵の傳家の娘にはお会いになれましたか？」

「逆であろう？ 狗があの子についてまわっておるのじゃ。初めて会ったが、少しばかり変わった娘じやのう。フン、幼い頃から洪破天だの殷汪だの、それに狗不死か。あれらと付き合っておればまあまともにはなるまい。お前は会った事があるのか？」

「あの娘、襄統の悌秀師太とも親しいようです。至東山を訪れた折、あの娘が暫く客分として滞在しておりました」

「ほう……。あの若さでのう。何をしておるのじやろうな？」

「……今、狗不死様と共に旅をしていると申しておりましたが、どうやら人探しの様です。それを范凱どのと話しておりました」。

「フン、殷汪であろう？ ……そう簡単には見つかるまいて」

「……殷汪は、生きていると？」

「当り前じゃ！ お前は知らんじやろうが、あれは、死なぬ。まだじゃ……」

白千雲はそう呟く陸皓を見つめたが、一体何故そう思うのかがどうも分からない。陸皓が口にしない過去をどうにか知る事は出来ないものかと、思索していた。

数日間、真武剣派は自ら呼び寄せた遠来の客をもてなしてきたが、徐々に客の方が氣を使い始め、早々と帰って行く者が増えてきた。真武剣派は随分氣を使って例の秘伝書や劉建碩に関わる話題を避けるが、特に追求したいと思っている訳では無い客の方がその雰囲気、特に追求したいと思っっている訳では無い客の方がその雰囲気に氣が重くなる様だった。勿論、中には疑いの氣持ちを抱いてすぐに武慶を離れた者もあったが、それらはまだ真武剣派が憂慮する程影響力を持った者達ではなかった。

庭に木傀風が居たのを見かけた郭斐林は暫くその様子を眺めてから自分も庭に降りた。

「道長様」

木傀風はすぐに振り返り、頷いた。

「うん」

「この庭も冬は寂しいものです。特に今年は一段と寒いのでこの様な有様。恥ずかしながら私共は季節の花や木々に疎くてこのようなみすばらしい庭になってしまします」

すっかり葉の落ちた木々を眺めている木傀風の傍らに立ち、郭斐林ははにかんだ。

「どうかのう？ この木はみすばらしいか？ 儂には一年の内でもこの命が力を増している様に思えるがのう。木や花というものは強いものだ。命を脅かす苦難の中に常にその身を晒しておるが、必ず毎年色を付けて我等を和ませてくれる。人ではこうはいかぬ」

木傀風は幹に手を触れて、目を細めている。そして固さを確かめるかのように指に力を込める。

「儂の手の方が枯れかかっておるのう」

「まさか……そのような事は――」

「斐林、世話になった。我等もそろそろ山へ戻ろうと思う」

「えっ？　もう……」

「そなたもこれから忙しくなるのだろうか？　そうゆっくりもして居られまい」

郭斐林は顔を伏せる。徐を追わねばならないのだ。自分達の浅はかな行いが問題となり、更には木傀風にまで気を使わせてしまう事になるうとは。郭斐林は俯いたまま、拳を握り締めた。

「あの男は儂も顔は覚えておる。施慧も、武大達もな。帰りに見つけたら捕まえて連れて来よう。見つけたら、のう」

「……道長様、申し訳ございません」

「何を謝る事がある？　そう気に病むな。暫く陸の許を離れて自由に出来るのだろうか？　良いではないか」

木傀風は笑っている。郭斐林と一緒に笑うわけにはいかないのだが、頬が緩んで苦笑いとなった。

「儂ももう一度、この江湖を見て廻っておきたいのだ。動けぬ様になるまでにのう。それには……しておかねばならぬ事があるしな。帰りは真っ直ぐ清稜に帰るつもりでいる」

「それでは……道長様は……」

木傀風はニヤリと笑い、顔の皺が一層深くなった。

「全く……儂は死ぬまで清稜派をまとめていくつもりであったがのう、狗のせいじゃ」

「狗不死様？」

「あれは早々と丐幫幫主の名を後進に渡して、好き勝手ばかりしておる。全くもって……羨ましい」

そう言って口をひん曲げる木傀風に、思わず郭斐林は吹き出してしまふ。

今の若い世代から見ればこの武林の長老はどちらかと言うと生真面目な人物として通っている。それは、特別派手な事を好む訳ではない木傀風があまり目立ってはいないというだけなのだが、木傀風と同世代、或いは郭斐林の様に昔からよく知っている者にはその人物評は当たらない。そんな目立たない人間がこの武林に名を轟かせるなどというのは矛盾している。木傀風や陸皓、狗不死らは歳が近く、この三人は現在、紛れも無くこの武林の重鎮と言える。狗不死の言動が『重鎮』らしいか？　という多少疑問に思えるが、木傀風と陸皓の名が並ぶとすれば、必ず狗不死の名も挙がるのだ。時が経つに連れて徐々に老人が孫に語る昔話になりつつあるが、いずれも若い時に国中を旅しながら自らを鍛え、未だその身の在りかが定まらないという時に、その名を成したのである。

第六章 二十四

郭斐林ら彼等の弟子となる世代にとって、師が武林に名を轟かせる事になった武勇伝は憧れであった。自分達もそうなりたいと夢を抱いて憧れの師に弟子入りするが、武林も含めて江湖は日々移行く。今日の武林は師の若かりし時代とは違う。平穩が訪れた、とまでは言えないが、ある程度の安定が保たれている。そしてそれは師の世代が作り上げたのだ。

弟子達はこの広い江湖に何かを求めて流浪の旅をする必要は無い。真武剣派を興した陸皓の弟子は皆、子供の頃にこの武慶で弟子入りし、陸皓が江湖に学び悟ったものを受け継ぐだけだ。若い世代は『それで良いのだ』と自分に言い聞かせながらも、外へ、広大な江湖へ飛び出してみたいという未練を残している。ほんの十数年前まで真武剣派にとっては敵対する組織であった太乙北辰教とそれに従属する勢力との争いが各地で絶えず、弟子達は剣を取って戦ったが、それらはかつて師が江湖をさすらった旅とは全く違うものだ。今ではそれすら無くなった。

木傀風の言う江湖を見て廻るという旅はどのようなものだろうか？ 丐幫前幫主の狗不死の『好き勝手ばかり』な旅とは？ きっと何処へ赴いてもそこは懐かしい土地なのだろう。江湖を我が庭とする――。こんな事が言えるのはやはり木傀風ら古い世代の者達だけなのだ。

「そなた、まずは何処へ向かうのだ？」

木傀風が不意に訊ねる。

「……それはまだ決めておりません。出来る限り早く……目的を達する為には皆で良く相談して決めなければなりません」

「うん。恐らく簡単にはいくまい。この広い国で人を探すのはなあ。そなたの師父もよう分かっておろう。焦っても仕方無い事だ」

「……はい」

「道長様」

木傀風の許に常施慧がやって来る。郭斐林に向かって一礼してから木傀風に言う。

「支度は済んでおります。大さん達にも道長様の指示があるまで外に出ぬよう言っております。いかが致しましょう？」

「うん。そうなの……」

「道長様、もう出立なされるおつもりなのですか？」

郭斐林は驚いて木傀風に訊いた。

「うん、……いや、すぐではない。もう一度総帥に会ってからだのう」

「……師父にお叱りを受けるところでしたわ。安心しました。今回はこの武慶にお越し頂いた時から道長様にはご迷惑をお掛けして……」

「迷惑？ 儂は最初から好きにやっておったがのう？」

「郭さん、私共の方こそ……。うちの皆さん達がこちらのお弟子さんにご迷惑をお掛けして申し訳ございませんでした」

常施慧が郭斐林に向かって深々と頭を下げた。

「おお、そうだ。武大がここの壁を壊したらしいが、儂からも詫びよう。済まぬ事をした」

「いえ……私がその……勘違いをして武大さんに失礼な事をしてしまったのです」

「まったく、あれは何処へ行っても騒がしい奴でう」

「……おかげで武さんの素晴らしい掌法を拝見する事が出来ました。壁の修理など、安いものですわ」

郭斐林はそう言って笑顔を見せる。偽りでは無い。詳しい事は何も分からないが、郭斐林にとってあれはまさに瞠目すべき技だった。本当は武大に色々と訊ねてみたかったが、きっかけが掴めなかった。「あれか。詫びに少しだけそなたに聞かせようかのう」

木傀風は自分の頬を撫でながらそんな事を言う。

思わぬ申し出に郭斐林は目を輝かせた。武大から聞くことが出来なければ他に知る者は師父、陸皓だけだろうと白千雲と話していたのだ。武大は木傀風の弟子ではないそうだが清稜山に居て古い付き合いであれば木傀風があの技を知っているもおかしくは無い。

「うーん……」

木傀風は微かに唸ってしきりに頬を撫でるというよりは擦っている。

「あまり話せる部分が見つからんなあ」

郭斐林は少し落胆する。『聞かせよう』と言ったからにはきっと木傀風はあの技についての何か、来歴くらいは知っている筈だ。『話せない部分』とは何だろう？ 郭斐林がそれを知るのは好ましくない事なのだろうか。そこで郭斐林は密かに常施慧に目を遣る。武大についてはよく知っている筈だが、この時常施慧は少し俯き、黙って聞いているだけだった。

「実は儂と武大は同輩での中」

「えっ？」

「あの掌法の手はある人物から教わったものでな。儂と武大は一緒に聞いたのだ。我が派の掌法にも様々な手が少なからずあるが、あれは儂も初めて目にするものだった。儂等はすっかり虜になつてのう、武大と共に研鑽したという訳でな」

「そうでございましたか。道長様を夢中にさせてしまう程素晴らしい技なのですね」

「一手、ただの一手だが、その奥底は未だ儂にも測れぬ。武大も同じであろうの中」

常施慧が口を開く。

「大さんはどうして道長様と一緒にその様な技を学ぶ機会を得たのでしょうか？」

「ハハ、その人物を儂の許に連れてきたのが武大であつたのだ。よくは知らぬが割と親しい付き合いであつたようの中」

「初めて聞きました」

常施慧は少し驚いたように目を丸くしている。武大について自分にまだ知らない部分があったのかとでもいう様な表情であった。

「斐林、儂は色々調べてのう、その技がどこから来たものなのかが分かってきた。そなたも興味があるなら追ってみるがいい。自分の手でな。その方が面白からう？」

木傀風はそう言って笑っている。

（その『どこから』が言えない部分ね……何かしら？ 私の想像通りなら、師父、それから……陸大師兄……そんなこと、調べられない……）

「何も知らぬのなら手掛かりが必要だのう。儂はこれについて余り話せん。儂が話した事を知ったら怒り出すであろう人物が居るから。それは教えてくれた人物とは別。それから……そなたが知っても余り良い事ではないかもしれんな。そなたにとって、な」

「それは……技の内容ではなく、『来歴』の事ですな？」

「まあ、そうじゃな。探るのは止めておけと言うべきかも知れぬが、武林にはこのような思わせぶりな謎めいた部分が幾らでもある。フフ、武林に関わりを持たぬ者にはそんな、たった一手の掌打に謎など……何の興味も沸かぬ事だが、何故か我等武芸者はそんな事まで気に掛かって仕方が無いもの。大きな声では言えぬが、儂も未だに追う者じゃ。斐林、秘密の話だ。秘密」

木傀風はおどけた様に言い、郭斐林はつい顔を綻ばせる。武林で名の通った清稜派の掌門ですら謎の武芸と聞けば食指どころか腕を伸ばして掴みたくなくなってしまう。歴史の古い清稜派の武芸を余すところ無く受け継いだ木傀風がそのようなことでは他の門下に示しがつかないが、意外にも木傀風は目に留まった優れた武芸には清稜派以外のものでも貪欲に迫ろうとしている様だった。

「儂と武大以外に使えるであろう人間は、恐らく武林に三名。他に儂等の様に教わっていなければのう。一度失伝したと思われていたが、受け継ぐ者が居た。あの一手だけではない、全てをな。このご

先輩は亡くなってもう数十年になるのう。その弟子は三人。いずれも存命しておる。この者達はその技を秘しておる訳でも無さそうだが、別にそれを売り出そうという気も無い。それゆえ武林に知られておらんのだ。……言えるのはこんなところかろう」

「益々興味が沸いてまいりましたわ。道長様、感謝致します」

「儂が言った、という事は忘れて貰いたいのう」

第六章 二十五

一変して真剣な表情に戻った木傀風は郭斐林の目を真っ直ぐに見て言う。

「この事は一切、他に知られぬ様にな。言うまでも無い事だが名立たる一門の弟子、とりわけそなたの様に総帥の直弟子が他所の武芸を漁っておるなどと噂になればただでは済まぬ」

「それは充分に承知致しております。それに……我が師の武芸と全く無関係ではないのではと……」

郭斐林は木傀風の様子を窺う。

(ほう……)

木傀風は郭斐林の読みに少し驚いていたが面には微塵も出してはいなかった。

木傀風は翌日に陸皓に会いに行き、その後武慶を出る事になった。「儂はまたこの中原に戻る事にしておる。山で仕事を済ませてからのう」

この武慶に来るとは言っていないが、恐らくまた顔を出すに違いない。すぐに清稜山に戻るという申し出で最初は驚いたが、再び会える日はそう遠くないだろうと考えて郭斐林は納得した。山での仕事というのはきつと清稜派の掌門の責を弟子に渡すという事に違いない。木傀風には董仰とうやう、董奎とうきという二人の弟子がある。兄弟揃って人品に優れ、今ではそれぞれが多くの弟子を教えている。どちらも木傀風の跡目に相応しい人物だと目されているが、ここはおそらく順当に兄の董仰が次の掌門しょうもん、董道長と呼ばれる事になるだろう。

それにしても木傀風は今まで全く清稜派掌門を弟子に渡すなど考えていないかのようには振舞っていたのに、突然そんな事を言い出したのは本当に狗不死のせいだろうか？ 昔の様に江湖を気促に旅してみたくなったのだろうか？ もしそうなら、木傀風は本当に自ら

の年齢、体の事を気にしだしたのかもしれない。無限に生きる人間など居る筈もないが、郭斐林は木傀儡風との古い思い出を振り返り感慨に浸るのだった。

真武観から程近くにある宿の一室で、傅朱蓮は狗不死が戻るのを待っている。真武観を最初に訪れてから狗不死は丐幫の現幫主である休達から『話を聞いてくれ』と付き纏われ、適当にあしらっては逃げ続けていたのだが、武慶を離れるまでに一度はちゃんと会ってやろうと言い出して出掛けて行った。

この宿は英雄大会の初日、人が最も多かった時だが当然部屋は空いていなかった。それを狗不死は無理やり一部屋自分達の為に用意させたのだった。一体何を言ったのかは知らないが、普通では考えられない。傅朱蓮は只々呆れるばかりであった。狗不死という老人の出鱈目っぷりと何故かそれを受け入れてしまう人を、いや、江湖をであろうか。

傅朱蓮は何度もこの武慶を出ようと狗不死に訴えていたが『今日は誰々に会ってくる』と言って中々此処を離れようとしなかった。傅朱蓮は基本的に旅をする時は一人であり、狗不死をおいて行こうかとも考えたが、今回の旅は今までと違うものにしなければならぬ。一人では今までと同じだ。狗不死には各地に人脈と自分には無い土地に関する知識がある。人探しの手掛かりが一人の時よりも掴みやすくなるだろう。そう考えて待っていたのだ。ようやく狗不死が『そろそろ行くか』と言い出して傅朱蓮は喜んだが、朝、『達に会ってくる』と言いままた出てしまった。昼までに戻れば今日この武慶を離れられるが、遅くなれば明日だ。傅朱蓮は頼杖をついてぼんやりと窓の外を眺めていた。

「失礼します。あのー、狗様？」

部屋の外から狗不死に呼びかける声。宿の者だ。

「……居ませんよ。出ています」

傅朱蓮は同じ体勢のまま扉の向こうに答える。

「あっ、あのーお客様でして。范と申される方が来られておりますが……」

「えっ？ 范……あ、行きます。下？」

「ええ。下でお待ちになっておられます」

「分かりました。すぐ行きますから」

傅朱蓮はすぐに立ち上がり、壁に掛かったあまり綺麗とは言えない鏡を覗き込んでから部屋を出た。部屋を出てすぐの所から下の様子が窺える。入り口の近くに立つ大男。范凱だった。

「もしや、もう出立されたのではないかと思っておりました」

范凱はそう言って優しい眼差しを傅朱蓮に向ける。傍に立てば圧倒されそうな大きな体軀だが、いつも落ち着いた低い声と柔らかい微笑を浮かべている。無論、何があってもこの顔で居られる訳では無いだろう。千河幫で幫主をしているのだから険しい表情も、それに怒る時もあるだろう。怒りが爆発したら一体どんな風になるだろうか？ 慣れた者でなければ腰を抜かして慌てふためくだろうか？ 怒り狂った范凱を見たい気もするが、それは絶対に自分ではなく他人が怒られている様子をどこからそっと覗き見るという状況でなくてはならない。

「傅さん、どうなされた？」

范凱が傅朱蓮をじっと見ている。傅朱蓮も范凱をじっと見つめている。范凱に呼び掛けられ、はっと我に返った。

「えっ、いえ、何でもありません」

「もう聞いておられるかも知れませんが、一応、お話しておかねばならない事があって来たのです」

范凱は真剣な面持ちだった。

傅朱蓮と范凱は宿の一階に並んでいる卓に着いた。周りには他の客も居たが疎らだ。范凱が周りを一瞥してから話し始める。

「真武観での英雄大会の初日、北辰の林玉賦が……今は林汪迦です

ね。あの者が教主からの祝いの品と称して持参した数点の箱、あれの一部はうちのヒョウ局が真武剣派に方崖に運ぶよう依頼された品であつたそうです」

傳朱蓮は目を見開いて再び范凱を見つめたが、言葉が咄嗟に出ない。范凱は続ける。

「陸総帥に呼ばれてね。『これは我が派を挑発しているのだ』と――。総帥は落ち着いていましたが、恐らく放っておく気は無いでしょう。今すぐにどうするという訳ではないでしょうが……例の東涼の秘伝とやらが思わぬ大事になってきている様ですから」「ではこれで……北辰の仕業である事がはっきりしたのですね?」「その品が元々真武剣派の物であつたという認識が教主には無かつた、と言うことも出来ます。林が真武観に現れたのは本当に陶教主の指示であつたのかという疑問もあります。しかし――」

范凱は少し間を置いてから、ゆっくりと息を吐き出す。

「フッ、私は北辰と対峙する事を心のどこかで恐れていたのです。近年は穏やかになったとは言うものの、やはり北辰教というのは何をするか分からない危険な存在に違いない。私は今の陶教主が幼い頃から知っているのも、彼自身が危険な事では無い事は良く分かっています。しかし今の北辰を動かすのは教主を取り囲むようにして方崖に居る幹部達なのです。前教主を崇拜していた長老衆はやはり過激な人物揃い。陶教主はきっと太乙北辰教が江湖に覇を唱えるという父の悲願を受け継ぐようにと言われ続けている筈です。前教主が亡くなったからといって、北辰全体の意思はきっと大人しくななどなっていないのです」

傳朱蓮は神妙にして范凱の話を聞いている。北辰に関する話を身近に感じてしまうのはやはり自分が東淵の人間で北辰に近い生活を送ってきたからだろうか。しかし傳の家は北辰教徒ではなく、そのように振舞った事も無い。北辰の本拠に近い場所に住まうというだけで自分もその一員である様な本来望んでいない感覚と、朱不尽のヒョウ局を襲ったのが北辰教徒でほぼ間違いないという現実が相ま

って、何とも言えない嫌な気分が胸中に湧き上がってくる。

「賊を仕留めて荷を奪い返したというのなら、真武剣派にそっくり返すのが普通で、その賊が何者であったのか、知らせるべきだったのです。それをしないという時点で、疑いようが無かった。私としたことが、何とも情けない……」

第六章 二十六

普通なら誰もが北辰の仕業と確信するところを、自分はどうかその結論を避けられないかと考えていたと言うのである。

傅朱蓮は理解している。北辰教に真っ向から対峙すれば如何な勢力であろうとも無事で済む筈も無く、必ず浅からぬ傷を負う事になる。范凱は幫主なのだ。全ての判断において慎重にならざるを得ない。

「では……今後はこの件に関して真武剣派が動き出す事になるのでしようね？」

「今すでに動いているのかもしれませんが、まだそれは僅かなものでしょう。今後は分かりませんが、当分はそう大きく変わらないと思います。我が幫が積極的に動く事はまだ難しい。真武剣派が何らかの動きを見ればそれをきっかけに出来る事が増えるでしょう。情けない話ですが、真武剣派に頼る事になりそうです」

「范幫主、私には何の力もありませんから、引き続き……殷兄さんを探すしかありません」

傅朱蓮は微笑を浮かべて范凱の沈んだ気分を和らげようと試みたが、却って范凱はその表情を歪めた。

「申し訳ない。本来我々の問題であるというのにあなたにそこまでして頂いて、私は己の不甲斐無さに恥じ入るしかありません」

「私は、自分のやりたい事をしているだけです。狗さんも同じ。私は……殷兄さんに会いたいんです」

再び傅朱蓮は范凱に微笑み、ようやく范凱もその表情を和らげた。

「もう、此処を出られるのですかな？」

「狗さんがまた出掛けてしまつて……戻ったら出ようかと」

「ハハ、あの狗不死様は実に奔放な方です。あなたでなければ狗不死様を……いや、私如きにはとても口に出来ませぬ。ハハ」

丐幫の前幫主、狗不死を『狗さん』と呼んで対等に口を利く者を范凱は他に知らない。それだけで傅朱蓮は只者ではないと言う事が出来る。

「私もそろそろ緑恒に戻りたいのですが、中々陸総帥のお許しが出ないのですよ。ただ、例の秘伝書を持って逃げた男について我が幫でも調べて欲しいと直々に依頼されたので、そろそろ開放して貰えるとは思いますが」

「洪淑華ご先輩の秘伝書……もし本物なら私も見てみたいものです。女性の身でありながら武林に名を馳せたお方ですから。襄統派も代々女性が継いでおられます。同じ女性だからといって肩を並べたいなどと言うのは痴がましい限りですが、やはり懂れずには居られませんか」

傅朱蓮は顔を上げて背を伸ばし、前方を見据えている。凛々しく整ったその横顔を見た范凱は眩しそうに目を細めて微笑んだ。

「洪淑華という人物は、出家して仏門に入られた襄統派歴代掌門の方々とは違って剣一本で江湖を渡り歩いた大女侠であったと伝えられています。東涼黄龍門の名を掲げたのは随分歳を重ねた後の事らしいですから、きっと、若い頃はあなたの様な方だったのでしょうか」
范凱の言葉に傅朱蓮は慌てた。もし他の人に聞かれていれば、きっと鼻で笑われてしまうに違いない。その辺にいるこの宿の客ですら洪淑華の名は知っているだろう。

「とっ、とんでもありません。私などと……」

顔を赤くして言う傅朱蓮を相変わず笑顔で見つめる范凱。傅朱蓮の顔は益々紅潮していく。とんでもない話だ。しかし、そう言われて嬉しい気持ちも確かにある。

（そうであったならこれほど嬉しい事は無い。洪淑華という女性の様に、強く生きたい。それが、私の望み——）

「それでは私はそろそろ戻らねばなりません。狗不死様にご挨拶しておきたかったのですが……仕方ありません。どうか宜しくお伝え

下され。それから、道中くれぐれもお気をつけて……。是非緑恒へもお越し頂きたい。朱さんや楊迅、それに倅も喜びましょう」

「あっ、……はい。いずれ必ず」

「……倅はあなたとそれほど歳も違わぬというに図体だけがでくなるばかりで中身は……あなたを見習わせたものだ」

「ハハ……」

范凱は立ち上がり、傅朱蓮に体を向ける。背筋を伸ばし高々と腕を上げて抱拳してみせる、威厳に満ちた風格の大男。

（フフ、ちよつとこういうの、気分良いかもね）

傅朱蓮は范凱の礼を受けながら平静を装いつつ心の中で呟いた。

狗不死は意外に早く宿へと戻ってきた。丐幫の幫主、休達と会っていたのは確かな様だが、話の内容には一切触れない。普段の狗不死の態度からしてきつと適当に話を聞き流していただけだろうと傅朱蓮は勝手に想像している。

「どないする？ もう此処に用は無いな」

「私は元々無かったけど？」

狗不死は首を竦めて唇を突き出す。この丐幫前幫主には『威厳』とかそういう概念は全く無いのかもしれない。

（こういう人生を送ればこういう老人が出来上がるのかしら？ 木道長も陸総帥も全く雰囲気が違うけど、面白いものね）

「何や？」

「何でもないわ。狗さん、范幫主が来られたのよ、此処に」

「ああ、そうか」

傅朱蓮は先程の范凱の話を伝える。狗不死は別段驚く様子もなく聞いている。

「そら、喧嘩吹っ掛ける様なもんやなあ。持って来たんが林やなかつたらすぐ追いかけて捕まえとるな」

「捕まえてどうするの？」

「そら、誰が持っていけ言うたんか、とか聞くことは色々あるやろ。」

ま、林を使っただけで怪しいけどな」

「他の人では、真武観になんて怖くて入れないと思うけど。特にあの日は」

「ハハ、そやな」

確かに北辰が真武観に使者を立てるとなれば林汪迦の様によく知られていて、腕の立つ人物でなければならぬ。そうでなければ全く相手にされないか、若しくはあっさり殺されてしまう可能性が大きい。使者を切るなどという事をするのは北辰教くらいのものだが、自分達が平気で行える事は相手がしてもおかしくないと考えている。適当に選んだ教徒の中の下っ端が消されたところで方崖は痛くも痒くもないに違いないが、わざわざ武慶に遣わすのなら少しくらいの威嚇効果はある方が良さだろう。北辰教の七星、林汪迦は妥当な人選だと言える。

「林……汪迦か。ようあんな名乗ったなあ。確かあの名前使い出したん最近や。多分、殷汪が死んでもうたからやで」

「……じゃあ方崖は信じてるのね。死んだって……」

「そうやろな。ん？ いや、どやろ？ 汪迦やで？ 今から汪に会うっちゅう意味かも知れへんで」

「えっ？ そういう……意味なの？」

「字ひっくり返してごまかしとるつもりか知れへんけど、『汪に会いたい』言うてんのやろ？ あいつ……惚れとったんか？」

「私が知る訳ないでしょ。方崖の事なんか何も……」

第六章 二十七

傳朱蓮は考え込む。殷汪も林汪迦も方崖に居た。そこで二人に何があったのかなど全く窺い知れない。親しかった殷汪がどのような生活をしていたのかさえ分からないのだ。林汪迦ととても親しくしていたとしてもおかしくはない。

（あっ、殷兄さんはもう随分前にあの夏^かって人と入れ替わってたじゃないの。あの人が方崖に長く居たのだから林汪迦と親しかったのはあの人の可能性が高い。そうよ、きっとそうだわ）

ふと別の考えが頭に浮かぶ。

（殷兄さんが方崖に短い間しか居なかったのなら、私達は殷兄さんを見つけてどうすればいいのかしら？ 今の方崖の事なんて全く知らないかも知れないのに……）

「ん？ どないしたんや？」

「狗さん。私達、殷兄さんを見つけて何が出来るのかしら？ 方崖の人達はヒョウ局を襲ったのが自分達でも、本当は全く関係無くて、『知らない』としか言わないんじゃないの？」

「んー、そやなあ。方崖に乗り込んでほんまに知らんのかどうかはつきりさせなあかん。張新捕まえてな。殷なら出来そうやで？」

狗不死は事も無げに言うが、実際方崖に乗り込んで張新に問い質すなど、今の所あまり現実的ではない。乗り込むというのは『攻め入る』のと変わらないのだ。

「つまり、無理やり張新って人を捕まえるって事よね？ 方崖で。」

……殷兄さんに切り込んでもらうって？」

傳朱蓮は言ってから深い溜息を漏らして俯いた。結局自分も、殷汪に期待するところはそういう事なのだ。勿論、殷汪が方崖に僅かしか居なかったとしても何らかの繋がりが今でもあって情報を得ている可能性もあるし、自分達よりも殷汪の方が詳しいであろう北辰の人物や決して方崖の外に出ることは無い内部にある『何か』を手

掛かりにする事も出来るかも知れない。それでも――やはり殷汪といえど不敗の武芸なのだ。そんな人物が見方に居ればこれほど心強い事は無い。方崖に行けば抵抗があるだろう。そこは教主の居城でありかなりの手錬が守っている。とても自分達では太刀打ち出来るように無い。しかし、殷汪ならどうだろう？ 全てを切り伏せるのではないか？ 咸水かんすいの時の様に――。

方崖を自らの意思で離れた殷汪を再びあの地に向かわせるなど、出来る事だろうか？ 傳朱蓮は考えながら力無く首を横に振った。

「私達は殷兄さんを使いたいから、探すのね……。私は、殷兄さんを……」

「朱蓮」

狗不死が穏やかな声で呼びかける。

「長いこと会ってへんやないか。会いたいんやろ？ 殷に。そんてええ。そんてええんや。いっぺんに全部考えてもしやあない。殷は『物』と違う。なんか考えるがな。口もあるんや。何か言うがな。話すことは一杯あるんやろ？」

傳朱蓮が顔を上げると狗不死は笑う。顔中が皺だらけで前歯だけが無い口元を薄く開いたこの顔はたやすく人を笑わせる事が出来る。傳朱蓮はもう見飽きる程見てきたが、それでも頬を緩めずには居られない。

「ほれ、早よ行こ。ちよつと寄り道が長なつたけどな。せつかく木道長に会うたのに、もつと話を聞き出したら良かつたなあ」

「そうね。多分私の知らない殷兄さんの話、まだまだご存知なんでしょうね」

「さつき聞いてきたんやけど、もう此処を発つたらしいで。もつとゆっくりしてつたらええのにな」

「えっ、そうなの？ でも木道長様よ？ きつと『私達』よりずーっとお忙しいに決まってるじゃない」

「んん？ 儂等も忙しいでえ。ほれ、さっさと行かんと」

「私は今日半日ずっと狗さんを待ってるだけだったのよ？　いつでもどうぞ。本当にもう良いの？」

「あっ、そや」

狗不死はまた何かを思い出した様で、傳朱蓮は再び溜息を洩らす事になる。

「……まだ何かある訳？　狗さん、これじゃあいつまで経っても――」

「ちやうがな。出る時にちょっと寄って行きたいところあるんや。ほれ、真武観に怒鳴り込んできたあの爺さんとかや」

二人はその後すぐに荷物をまとめ、宿を後にする。傳朱蓮と狗不死の二人旅は、どちらも旅には慣れていて大形な準備も何も無く、狗不死が妙な物に興味を抱いて足を止めない限りは順調に進んでいた。狗不死が真武剣派の英雄大会の事を口にした時、傳朱蓮は（何て間の悪い）と観念するしか無かった。人があれだけ集まっているというだけでも狗不死が放って置く筈が無い。しかし今となっては来て良かったと傳朱蓮は思う。計らずも范凱と木傀風に会う事が出来たのだ。どうせならもっとじっくり話をしたかったが、自分の如きは一介の娘に過ぎない。真武観の宴席に上がったのも狗不死と共に居たからというだけで、これ以上は望むべくも無かった。

「爺さん、気の毒になあ。下手人捕まえて懲らしめなあかん」

狗不死はそんな事を言いながら馬を進めている。向かっているのは洪淑華の秘伝書らしいという書の持ち主だった劉老人の屋敷だ。傳朱蓮が『家を知っているのか』と聞くと、すでにしっかり誰から聞いておいた様で、迷う様子も無く進んで行く。狗不死が言うには全くのいい加減な寄り道などはしておらず、出来るだけ無駄を無くした寄り道を心掛けているそうだが、他人にはどちらでも同じに思える。兎に角、それが狗不死の江湖の歩き方という訳だ。

しかしながら、どうやら今回は明らかに無駄足になってしまった

様である。劉建碩の屋敷まで来たものの誰も居らず、近くを通りかかった住人が言うには朝の内に出掛けて行ったらしい。

「何の用だったの？」

傳朱蓮が狗不死に訊ねる。

「いや、秘伝書奪っていった男っちゅうんは、真武観に爺さんと一緒に来た奴らしいんや。親しかったんならよう知つとるやろし、まあ色々聞いとこかなあ思てな」

「顔、覚えてるの？」

「何人も居ったしなあ。どれやろ？」

「私は全然覚えてないわ。一人も」

「ま、ええわ」

狗不死はあっさりと諦めて自分の馬の手綱を取る。

「どっかで秘伝書の噂でもあったら何とか辿れるやろ」

「なるほどね。秘伝書を取り戻して読んでから真武剣派に返して恩も売れるって訳ね？」

「何で真武剣やねん。此処に返すんやで？ 爺さんの息子も此処に居るっちゅう話や」

「じゃあ、お礼が貰えるのね？」

「……朱蓮、人の気持ちを無駄にしたらあかんで？ 有難く受け取つとく。そんでええんや」

まだ下手人が誰なのかも知らないというのに狗不死は大真面目に話している。

（ああ、また狗さんを誘惑して旅の邪魔をする奴が現れたのね……。真武剣派がもう追ってる筈だけど、さっさと捕まえて欲しいものだわ）

傳朱蓮も馬に乗る。ずっと以前、東淵を初めて出た時から共に旅をしてきた愛馬、飛雪。もう若くは無い馬だが、どうやら今回はかなりの距離を歩いてもらう事になりそうだ。

「じゃあ、もう良いのね？」

「ええで。行こ」

二人は劉建碩の屋敷を後にして、街の西門へと向かう。次は何処の町と決めている訳ではないが、武慶を出て暫く行けば自然に決まるだろう。

暫く西へ向かう。景北港から遠く離れた地。離れれば離れるほど殷兄さんに会えそうな気がする――傳朱蓮の期待も西に行けば行くほど高まっていく。

傳朱蓮と狗不死が武慶の西門を出た丁度その頃、真武劍派、白千風の屋敷を劉建和が訪れていた。白千風は屋敷には居らず、最初に応対した弟子は郭斐林の処へ劉建和を案内した。

「劉さん？」

突然訪れた劉建和に郭斐林は何かあったのかと不安になった。

第六章 二十八

そんな郭斐林の懸念をよそに劉建和は笑顔を見せて言う。

「ハハ、もう徐は見つかったかなんて言う気は無いから安心してくれ。それに真武剣派にまかせっきりにする気も無いんだ」

「……劉さん、どこかへ出掛けられるのですか？」

郭斐林は劉建和に一瞥をくれるなり問い掛ける。劉建和の装いは明らかに普段着ではなくどこか遠方へ向かう旅人の様で、黒の短衣とコ（※ズボン）という出で立ちに背には包みを負っている。革の脚絆が目に残る。上は割と質素な装いだが足元だけは上質な物の様であり結わえてある紐がきらきらと小さな光りを放っていた。

「可笑しいかい？ 俺は行商人だからこれが普通なんだが」

劉建和は郭斐林が目立つ脚絆を見ていた事など気付いていない。

「武慶を離れるのですか？」

「ああ。何せ家には俺一人しか居ないんでね。息子も居ない。全部真武剣派にお任せして大人しく待っているという訳にはいかないしな。それに、外へ出ていた方が気が晴れる」

「……私達ももうすぐ息子さんの搜索に向かいます。我が派は全力を尽くして徐を追います」

郭斐林は言葉に力を込める。無論、本気であり、一氣に方を付けて真武剣派の面目を改めなければならなかった。そして真武剣派が本気になればそれは容易だと考えている。

「宜しく頼む。俺は南に向かうつもりだ。徐がどっちに向かったのかは分からんが、知り合いが南方の情報に詳しいから少しばかり世話になろうと思ってな。それで暫く此処を離れる事にしたんだが、まあ恐らくあんたらが先に徐を見つける方が早いとは思う。……もし息子が無事で居たならその時は、宜しく頼みたい。秘伝書も預ける」

真武剣派が徐を捕まえて秘伝書と劉建和の息子劉馳方、それから

李小絹を取り戻した時には劉建和はこの武慶に戻っていないかも知れないので、息子と秘伝書は真武剣派に預けたいという要請であった。

「分かりました」

「秘伝書はともかく、息子が無事でいる可能性は低いだろうな……」
劉建和はそう呟いたが、その顔はとても落ち着いている。きっと劉馳方が消えた時からその事は何度も何度も考えたのだろう。徐が劉建碩を殺して秘伝書を奪った時に劉馳方と李小絹に見られ、二人とも連れ去ったに違いない。徐には手下の様な男達が大勢付いているから子供二人を連れ去るのは難しい事では無かった筈だ。

『何故殺さなかったのか』という疑問もある。劉建碩と同様に殺してしまえば騒ぐ子供二人を抱えて逃亡などという困難を避ける事が出来た筈なのだが、徐が何を考えたかなど全く知る由も無かった。徐が平気で人を殺める人間だったかどうか分からない。あの見る者を不安にさせる大きく窪んだ眼窩の奥に潜む光りは得体が知れない。

兎に角、劉馳方と李小絹の死体は見つかって居ないし、連れ去られたと思って間違い無い。ただ、徐が二人を連れて逃亡したなら、この武慶から離れれば離れる程、時間が経てば経つ程、足手纏いの子供を生かしておく意味が分からなくなってくる。

「今はただ、無事を祈るしかありません」

郭斐林も同様に考えている。李小絹が無事にこの屋敷に戻る可能性は低いかもしれない。

「なあ、陸総帥は秘伝書に目を通したのか？」

「……その筈です。真武観に届けましたから」

郭斐林は沈痛な面持ちで目を伏せる。もうその件には触れないで――そう念じる。

「陸総帥には解ったのかな？ あれが本物かどうか……。もし秘伝書が戻ったら、じつくりと陸総帥に中身を吟味して貰いたいんだ。」

頼んでも良いかな？」

郭斐林は少しばかり驚きの表情で劉建和を見つめる。この男はどうやら勝手に見た事を責めるつもりはない様だ。

「陸総帥が武林に於いて最も、あらゆる武芸に造詣が深いと言われている事は知っている。陸総帥に解らないなら誰にも理解出来ないという事だろう？ 俺が武芸の秘伝書を持っていてもなんとか叩き売るくらいの事しか考えられないしな。本物かどうか、じっくり確かめて貰いたいんだ。本物なら買ってくれとなお有難いな」

劉建和は笑い、郭斐林はその言葉と表情に安堵した。

「まあ、そんな訳で、宜しく頼む」

「南、ですか。今、南方の地はどこも荒れ果てていると聞いています。徐が暫く身を隠すには良いのかも知れませんか」

「どうだろうな。俺はあまり近付いた事は無いが、かなり質の悪い賊が無数に居るらしいな。フッ、徐が無事で居られればいいがな」

近年起こった大規模な洪水と飢饉は国の南部に集中していた。最も酷かったのは比較的大きな街だった安県あんけんとその周辺で、ほぼ壊滅状態と言える。都から南下する大街道が武慶を抜け安県を通って更に南に伸びている為、安県でも街道沿いの地域は徐々に人が戻り始めた様だがそこに居つくのは街道を往く人々を相手に商売をする者だけで、その他の地域は未だに土地が荒れて耕す事も容易ではなかった。都はそれらを殆ど放置しており無法地帯と呼んでもおかしくは無く、良からぬ輩が徒党を組んで旅人を襲い始めるのは当然の様に考えられた。

「城南に向かう。あそこまで行けばそれほど危険では無いらしくてね。都もあそこだけは押さえておきたいんだろう。役人もかなり送り込まれているそうだし、元々あそこには強力な組織がある。自警団の様なものが発達しているらしい」

「城南……稟施会りんしかいですか」

「ああ。俺はそこが国外との交易を仕切っている組織、位しか知ら

ないんだが、何か知ってるかい？」

どんな組織にも表裏が多少なりともあるものだ。交易を行う組織というのは広く一般に知られている情報だが、真武剣派ならば人やその動きを別の視点から見るのではないかと劉建和は思っている。武林の他の門派なら活動の分野がまるつきり違い、あまり興味を持たないかも知れないが、真武剣派は、陸皓は、違う筈だ。

「特に不審な点は無いではありませんか？　少なくとも私の耳には何も入ってきていません」

郭斐林の表情は至って普段と変わりなく、多分正直な答えだろう。武慶と城南はかなりの距離があり、それに稟施会は武芸の門派ではない。意外に真武剣派もそれほど注目はしていないという事だろうか。ただ郭斐林が聞いていないというだけかも知れないが。

「知り合いが城南の人間なんでね。付いていって色々見てこようと思った訳だ。それにあそこでは国内の様々な情報が仕入れられるという。うちの息子や此処の――」

「李小絹です」

「そう、その娘の名は出ないかも知れないが、秘伝書の噂くらいは分かるだろうと言ってる。ま、国の端だからどんなにその稟施会が凄くても情報は遅れるだろうが、徐が南へ向かう可能性もある訳だから、行ってみる価値はある」

「そうですか。我が派も私の兄弟子である杜越原が南方を当たる手筈になっています。道中は危険が多いでしょうから、宜しければ杜師兄と共に――」

「いや、いい。好きにさせて貰いたい」

劉建和は掌を郭斐林に突き出して強く拒む。

「とりあえず、秘伝書と息子の事を頼みに来ただけだ。……宜しく頼む。人を待たせてあるので、失礼する」

郭斐林は頷いた。

「承知致しました」

劉建和は頷き返してから踵を返し、早足で部屋を去って行った。

正直なところ、郭斐林の願いは李小絹を無事に取り戻す事で、秘伝書の事はあまり考えていなかった。劉馳方は李小絹が無事ならきつと一緒に居るだろう。『ついで』とまでは言わないが、それで問題は無い筈だ。

弟子達の『小絹を救い出したい』という気持ちは強い。武慶を離れる準備はもう出来ていた。

白千風の屋敷を出た劉建和はその足で知り合いの薩という男が営む小さな居酒屋へと向かった。

真武剣派の英雄大会の間この武慶は晴天に恵まれていたが、次第に増えてきた灰色の雲が空を覆い隠し始めている。

第六章 二十九

一見、ただの民家に見えるその居酒屋に入ると、主人の薩と周維が話をしていた。

「お？ 遅かったじゃないか。どうにかなっちまったんじゃないかって思ったぞ？」

薩が笑いながら迎える。横に居る周維も笑みを浮かべて和やかな雰囲気だった。

「どうにかって何だ？ 俺まで襲われたとか？」

劉建和も同じ卓に着く。

「劉さん、どうしますか？ 明日の朝でも構いませんよ？ ま、今からでも……まあ泊まる所はなんとかなるでしょう」

「俺は何処でも寝られる性分だな。屋根が無くたって構わないが、あんたらの都合に任せるよ。俺は付いて行くだけさ」

「ハハ、私達も同じですよ。それから、劉さんは大事な客人としてお迎えするんです。我々は商売に関してのその活動範囲はせいぜい都までですから、この国の東部や北部の商いに関するお話もお聞きして、勉強させて頂きたいのです」

「まさか……。俺みたいな小商いに、何も言える事なんて無いさ。それより、『商売に関して』以外の活動にも興味があるんだが、聞いたらやばい事になるのかな？」

劉建和が真面目な表情で言うど、周維は頬を緩ませ笑い出した。

「いやいや、大したものは何も無いですよ。まあ、何でも商売にしてみようという事はあるでしょうが、特別、他におかしな事をしてる訳ではありませんよ。遠く城南の地で稟施会という名だけがこちらに噂で流れて、色々とあらぬ事を想像されているだけです」

劉建和は周維と初めてこの薩の店で会ったが、その時城南の商人と聞いて稟施会の事をすぐに思い浮かべた。ただ噂を耳にしていたというだけでその名をはっきりと覚えては居なかったのだが、周維

が昨夜、『稟施会の者だ』と言い、やっと名を思い出したのだ。周維は最初は稟施会とは関係は無いというような口振りであったというのに今になってそれを告げたという事は、出来れば隠そうと思っていたに違いない。こちらでは良くない噂になってしまっているという周維の話を信じれば、そういう態度になるという事は理解出来る。

昨夜、周維は突然、『城南を見てみませんか?』と切り出した。

劉建碩が殺害されたあの屋敷に一人で籠もっているのは良くないという事と、徐の行方の手掛かりが得られるかも知れないという話だった。徐は秘伝書をすぐにどうにか出来るという訳ではないだろうし南に向かう可能性は充分にある。稟施会に居れば国中のあらゆる話が聞けるので一緒にどうかという訳だ。それで、自分は稟施会の者だからと劉建和に明かしたのだった。

劉建和は笑っている周維にあわせて笑みを浮かべていたが、『商売はせいぜい城南と都辺りまで』と言いながら情報は国中から集められるという周維の言葉がどういう事なのか気になっていた。しかしそれは単なる興味に過ぎず、自分も周維に付いて行くというのはもう決めた事である。連れて行って貰えるなら自分の目で確かめられるかもしれないし、城南行きを迷ってなどいなかった。

「また行っちゃうのか。俺としてはこの店の売り上げが激減で困るんだがなあ」

薩はそう言って頭の後ろを掻いている。

「たった一人客が減るだけで危うくなるのか? 別の道を勧めるな」「ヘッ、今更何も出来ねえよ。かといってこの武慶を離れる勇氣も無いしな。何とか食い繋ぐよ」

「俺はもう帰って来ない訳じゃない。今まで通り、戻ったら此処で一杯貰う。何とか続けて貰いたいね」

「ああ」

劉建和と薩は静かに言葉を交わす。どちらも武慶の住人で古い付き合いらしい。

「旅慣れてるお前に俺が言える事なんて無いんだが――」

「ちよっと行って来るだけだぞ？　大袈裟だよ」

劉建和は笑って薩の肩に手を置き、立ち上がる。

「では、もう出ますか？　もう準備は済ませました。あまり遅くならないほうが良いでしょう」

周維も立ち上がり、同時に洪と三人の男達が部屋から出てきた。此処に來た時と同じ、重そうな荷を全員が背負っている。

「では、行きましょう。それでは薩どの、大変お世話になりました。是非また近くに來た時には寄らせて頂きます」

「ああ、劉を頼んだぜ」

「子供みたいに言うな」

「馳方だよ」

まだ何も手掛かりは無い。ここ数日の間にあらゆる事を考え尽くした。暫くはただ、南へ向かって進む事だけを考えようと劉建和は思った。

流浪一天 第七章へ続く

第七章 一

この国を縦に貫く様に、都から国境の街である城南へと伸びる大街道。行き交う人々は絶える事が無く、恐らくそれは遠い古の時代から変わっていないに違いない。他と比べるとこの南への街道には特に多彩な文化が流れ込んでくる。旅人の装束を眺めているだけでもそれが感じられるだろう。街道は城南で終わっているのでは無い。国境を越えて更に南の国々をも貫いているのだ。

しかし、この長大な大街道には所々に色を失ってしまった場所があった。かつては華やかだった街並みは醜く崩れ、全てが色褪せた廃墟。浮浪者が住み着く事も無い。そこには居る意味が無いのだ。かつては在り、今は何も無い場所。街道を往く者達は立ち止まろうとはせず、出来るだけ早く通り過ぎようとする。そうしなければまるで目聡い客引きの様に、死が擦り寄ってくるのである。

黒雲が陽を覆い隠し、止まない雨が視界を遮る。皆一様に編み笠を乗せた頭をやや前へと傾け、先を急いでいた。

此処には人の住まう場所がある。通りを往く旅人以外にこの雨の中を出歩く者は少ないが、民家が立ち並び人の気配がした。ただ、雨の音と薄暗い風景に自ずと意識を己の身の内に閉じ込めようとするので、それは微かなものだった。

街道の傍にぽつんと建っている小さな小屋の軒下で、雨宿りをしているのか三人の男が身を縮めて話している。

「本当にやるのか？ どうせ齒が立たねえぜ？」

「お前もあいつの腕、見ただろうが。今回はそう簡単にやられるものか」

「確かに多少はやる様だがあいつら相手じゃあどうにもならない気がするんだよなあ」

「何言ってんだ。今回は違う。今度こそあいつを這いつくばらせてやる！」

「お前どうかしてるぞ！ 俺達はいいつを入れても四人であっちは六人居るんだ！ 絶対無理だって！」

「……俺も無茶だと思う」

「いつもならもつと多いんだぞ？ 今回は六人だからこんな機会はまだもう巡って来ないだろう。しかもあの周が直々しきうに都まで行ったんだ。獲物はでかいに決まってる！」

「で？ その頼みの綱はまだなのか？ 俺達だけじゃ絶対に勝てない。あいつに全部切って貰わねえとな。ほんとに洪こうに勝てるんだろうな？ 他の三人も半端じゃねえ。一人は知らねえが周のほうはまだ大丈夫だろう。先に言っておくが、もし洪があいつじゃなくて俺を狙ってきたら、即刻逃げるからな？」

「……俺は、やりたくない」

「いいか。全員でやらなきゃやばいんだからな。手抜いたら承知しねえぞ！」

「おい、もう来るぞ？」

三人とも似たような背格好に着ている物まで殆ど同じ。どこをどう走り回ったのか分からないが上半身にまで泥を被っている。ずっと話続けていたが誰が何を言っているのかなど、話に加わらなければ解らないだろう。少ししてから雨の中を一人の男が小屋に向かって駆けて来る。三人はその男を同じ軒下に迎え入れると、それぞれが口々に何やら話し掛けている。これで四人。得体の知れない汚い男が一人増えただけだった。

六騎の馬が街道を南下してくる。激しい雨に絶えながら駆けるという事も無く進んでいる。人間以外に大きな荷の包み二つを背に乗せた馬が二騎。それに速度を合わせながら前後左右囲むように四騎。此処のような大きな街道では特に珍しくも無く、遙か長い道のりを往く旅人は馬に乗るのが普通なのだ。買う金が無いものは延々と歩

かねばならない。そして力尽きる者も居る。

「旦那。これ以上雨に荷を晒すとまずい。どこかで乾かさないと」
「そうですね……街はもうじきでしたか？」

「ああ。あの河を越えてすぐにある。宿みたいなものはないんだが
とりあえず雨をしのげる場所はある。行くかい？」

「じゃあ、そうしましょう。洪さん、案内して下さい」

周維達^{しゅうい}、城南を目指す一行は洪の案内で街道沿いの小さな集落で
休む事にした。しかしこの激しい雨は少し待ったからといって止み
そうにない。恐らくまた雨の中を出て行く事になるだろう。

「まあ濡れても良いとまでは言いませんが、万が一そうなくても駄
目になってしまうような品はありませんから何とかかります」

周維は隣に居る劉建和^{りゅうけんわ}に言う。

「車を用意するほうが良いんじゃないか？」

「微妙なところですが、このままで。着いたら荷を降ろして出る時
に私と洪さんの馬にませ変えましょう」

四つの大きな包みは周維達が武慶に來た時に洪と三人の男がそれ
ぞれ担いでいた物だ。都で仕入れたという品々が入っていると周維
は言った。

「南に持って行くのは、国外に売るからなのか？」

劉建和が訊ねる。彼もまた同様の商いを長年やっており、周維ら
稟施会の商売には大いに興味がある。

「そういう物もあります。しかし大半はとりあえず手許に置いてお
きたいと考えている物です。あとは……お土産といったところでは
ようか？」

周維は少し微笑んで答えた。いつもは優雅な貴人のような雰囲気
を漂わせている周維だが、この時ばかりは流石に皆と同様に頭に乗
せた笠から滴り落ちる水に顔を顰めつつ少し前屈みになる。いつも
手にしている扇子は濡らす訳にはいかないのだろう、どこかに大事
に仕舞った様だった。

「商いというより、私個人の楽しみの様なものですよ。稟施会りんしかいの商いとして都に赴くならばもっと大人数で大量の品を仕入れます。高価な装飾品とかそういった物ばかりではないんですよ。あらゆる物がその対象です」

「一体どのくらいの人間が稟施会に居る？」

劉建和の質問は当分尽きる事は無いだろう。聞きたい事は山ほどあるのだが、子供の様に一度に全て聞くような真似はしない。立て続けに腹を探られる様な質問を浴びせられれば相手は機嫌を損ねる恐れがある。劉建和にとって周維は商売相手ではないが、客商売に慣れきっているで商い以外の場合でも自然に言葉を選んだり話す頃合を見計らったりといった事に慎重である。その辺は周維も同じであらう。

「うーん、千には満たないでしょう」

周維があっさりと口にした数に、劉建和は驚いた。

（千に満たない？ そんなに居るのか？ 一体こいつらは……）

「徐々に増えていったんです。洪さん、あなたはもう何年になりますか？」

周維が前に行く洪に声を掛けた。

「ん？ そうだな……まだ三年、もう少しで四年目かな？」

洪は振り返ってそう言うのと、すぐにまた前を向いた。

「しかし……千とは、凄いな」

劉建和はじつと周維の表情を窺っているが、薄く微笑んでいるその顔に変化は無い。

「千に満たない、と言ったんですよ？ かの殷汪なら一晩で片付ける程度の数です……ハハ」

そう言うってから急に周維が声を上げて笑うのを見て、劉建和はまた驚いた。

「待った」

不意に洪が腕を真横に伸ばし、『止まれ』という仕草を見せる。

荷を乗せていない一騎がすぐ洪の真横に付く。

「……またか」

「ああ。よく俺達を見つけられたものだが、もうここらで痛い目に会って貰わんといつまでも調子に乗る」

洪らは頭を寄せて話している。先には街道の脇に小屋があり、どうやら隠れているつもりらしい男が数人居た。

第七章 二

「洪さん、どうしました？」

周維の問い掛けに洪は馬首を返して傍に寄った。

「あー、ちよつと俺達と遊んでいきたい連中が居るみたいなんだ。よく知った奴……いや、本当は全然知らないんだが、とにかく何度もうるさく絡んでくる奴らでね。俺と石でちよつと行って来るから此処で待機してくれないかな。すぐ追っ払うさ」

「数は？」

「四人ほどだな。いや、ほんとに大したことない奴等なんだ。すぐ済むよ」

「四人で私達にちよつかいを出そうというのですか？ それは何とも……頼もしい方々ですね」

周維は平然として笑いながら言う。

「本当に大丈夫なのか？ そいつらは殺しに来るのか？」

劉建和の反応は真っ当なものだ。旅人を襲う輩の出現にちゃんと不安を抱いている様子がその表情から窺える。

「ああ。しかし問題ない。ちよつと待っててくれ」

洪は再び戻り、待っていた石という男と供に駆け出した。

「おい、来るぞ！ 洪だ」

「よ、よし！ まずは洪の奴を片付けるんだ！」

「もう一人来る！」

「一人も二人も一緒だ！」

やはり誰が何を言ったのかよく分からない。四人の男は小屋を離れて洪が向かってくるその真正面に飛び出してきた。

「おいお前等！ この雨ん中を足止めしようってんなら容赦しねえからな！」

馬上で洪が声を上げる。洪と石は男達の所まで来て止まったが、

腰の剣には触れていない。石は黙って男達に鋭い視線を送っている。

「おい、洪！ 今度こそは俺達の本気を見せてやるぞ！」

「ああそれは何回も聞いたよ」

「フン、きつとお前は腰を抜かずぜ！ 凄腕を連れて来たんだからな！」

「……お前の本気を見せるんじゃないのかよ。んん？ で？ どれがそうなんだ？ どれも見た顔のようだが……」

洪は他の三人の男を眺めるが、皆同じ格好に同じ汚れ方だ。凄腕の助っ人ならそれらしい面構えに身形の者が居ても良い筈だが、どの顔も皆、こそ泥の類にしか見えない。

「餓鬼じゃないんだからいつまでも泥んこ遊びなんぞしてられん。

俺とやりたいならさっさとやろう。で、大人しく帰るんだ。いいな」
洪は馬を降りて男達に平然と近付き、剣を抜いた。

「うわっ」

一人がその姿を見ただけで声を上げる。

「びびってんじゃねえ！ おい！ 殺ころ！」

一人が言い、一人が僅かに進み出る。抜き身の剣を持っている。

「殺だって？ それが名か？ 確かに凄い名だが……」

先程から言っていた凄腕というのは進み出てきた男の事だとは思うが、見た感じでは特に何も感じられない。どう見ても昔からの仲良し四人組の内の一人だ。洪には違いが分からない。ただ、今まで見た事は無い男、というだけだ。

洪は自分の剣を顔の高さまで持ち上げて、映った自分の濡れた顔を気にするかの様に覗き込みながら話し出す。

「いいか。俺達は善良なる旅人で、お前等はそれを襲う盗人だ。本来ならとつくに切り捨てていてもおかしくなかったが、あまりにお前達がみすばらしいもんだから見逃してやってたんだ。しかし、もうこんな事は終わりにしなければ永遠にお前達に付き合わねばならん。凄腕の助っ人とやら。お前さんは俺を切るつもりでいるんだな？ 俺は素直に切られてやる訳にはいかないから、この剣で抵抗す

る。あんたを、殺す。すぐ終わるさ。本当に凄腕なら、こんな奴らに加担して賊に身を落とさずとも生きる道はあるんだが、此処に居るって事はそれほどの腕じゃないんだろ。それとも、何か訳があるってのかい？」

「……知らない人間を襲うのに……訳なんて……」

「ん？」

どうやら殺という男が呟いた様だった。

「何も無い。勝負だ。勝ったらまだ生きるし、負けたら死ぬ。それだけだ」

「覚悟があるなら、まあそれでいいんだが……」

洪は剣を下げて構える姿勢を見せる。同時に殺も腰を落として腕を大きく開き、剣を横に寝かせた。

「殺！ やっちまえ」

他の三人が口々に声を上げながら後方に下がる。

「おいお前等、一人にやらせようってのか？ 囲むくらいしてやったらどうだ？」

洪は顔を顰めて三人を見遣る。しかし皆、洪を睨みつけるだけで動かない。丁度その時、石が馬から降りた。洪はちらっと視線を送って、

「馬を見ててくれ」

「ああ」

それだけのやり取りがあった後、洪と殺は改めて対峙して互いを注視する。

「本当に大丈夫なのか？ いくらなんでも……」

洪の遙か後方で様子を窺っている劉建和が周維を見る。

「洪さんが大丈夫と言うなら、それは大丈夫なんですよ。それから、洪さんはもし途中で危険を感じたら手を貸せと言いますよ。意地になって一人で当たるなんて事は絶対にしません」

「俺は何も出来ないが……」

「ハハ、心配要りませんよ。あの石さんも、それから関さんと凌さんもうちの選りすぐりです。この四名でなら都行きに問題は無いという私の判断なのですが、実際退けられなかった障害はありません。ましてや、あのような輩など。道中ひっきりなしに現れますが、あんな無駄な事はせずに真面目に稼ぐ事に頭を捻った方が良いでしょう。時間の無駄です」

「……」

薄い笑みを浮かべて眺めている周維を、劉建和はじっと見つめている。

（実際、何の考えも無しに盗賊に身をやつす者など、殆ど居ないぞ。どうやってももう食えない連中が生まれて初めて剣を人に向けるようになるんだ。『それで食えるようにならなくて良い。生きなくても良いようにいつか誰かが俺を殺してくれる』、そう言った奴も居た。あんたはそんな風に考える奴の事など想像も出来んのだろうな）

「あんたから来てくれた方が良いな。俺は襲われる側だしな」

洪は殺を睨みながら、僅かに口を動かす。洪は笠を被ったままだが殺と他の三人は雨を遮る物を身に着けてはいない。顔を流れる大量の雨が殺の目や口に入り込もうとしていた。

「フン！」

鼻から思い切り息を吐いた様な音がして、殺が踏み込んで来る。横に大きく伸ばしていた剣はそのまま横から薙ぎに来るかと思われたが意外にも素早く向きを変え、洪への突きに転じる。速い。洪も素早く体をかわして同じく剣突を送った。

双方の手許だけを見ていればそれほど大きくは無い動きだったが、地面に溜まった雨が泥を巻き上げて吹き上がる。その光景がすでに激しい応酬が行われている様に見せていた。

（おっ？）

洪はすぐに認識を改める。殺は最初の一手の後再び腕を伸ばし剣

先を体の右下へ向けて、じりじりと洪との間合いを計っていた。足を開いて腰を落とし、いかにも隙あらば飛びつこうと考えている蛙にも似た構えは粗野で品が無く武林の名立たる武芸では見られないものだが、本気の命のやり取りに品があるか無いかは果たして意味があるだろうか？ 持っているのが鍬か何かだったらきつと真面目な百姓の親父に見えるに違いないこの殺は、全神経を研ぎ澄ませ、洪を、洪の命を狙っていた。

（ふむ……確かにあいつらとは違うな。雲泥の差だ。こいつは……フン、見た目はともかく、紛れも無く武芸者の類だな）

第七章 三

盗賊と一口に言っても大小様々で、中にはもはや『軍』と呼んでもおかしくないのではないかという大集団まで存在する。その者達は自ら『盗賊』などとは決して名乗ったりしないがやることは同じだ。しかし規模が違う。盗人は密かに金のありそうな屋敷に忍び込んで金品をちよろまかす程度だが、大集団は街全体を襲う。金を奪うのは当然で、全てを壊し、女をさらう。今でもそのような事をやろうと思えば出来なくもないのだが、近年は鳴りを潜めていた。実際にやればその時は良いが確実にお上に目を付けられる。今上皇帝の代となってから朝廷はそれらに対して厳しい姿勢を見せ始めており、そのような派手な動きは後々自分達を苦しめる事になる。大規模な略奪行為があった事件は直近のものでも二十年近く前で、都からそう遠くない咸水の村を襲い、直後に自分たちまで何故か全滅してしまったという『百槍寨』^{はくそうさい}と人々が呼んだ砦を根城にした集団によるものだった。

そういった大規模な集団が大人しくなると同時に、小単位で動き回る盗賊集団がかなり増えていった。ただ、規模を保ったままの例外はある。東北部にある九宝寨^{きゅうほうさい}が江湖に於いて最も大きい盗賊集団であるとされていたが、いつの頃からか少しばかりその性質は変わっていったらしく、太乙北辰教^{たいいつほくしんきやう}との関係が深まっていった様である。噂では、丸ごと吸収されたのではないか、という。

一度大規模な略奪に味をしめるとなかなか止められなくなる。多くの仲間と共に街を襲い、逃げ惑う人々を平気で後ろから剣を振るって骸にする。抵抗出来る者は殆ど居ないので、やりたい放題だ。

殆どは剣を使うが、剣術を修めた人間がそういった集団にはそれほど多くは居ない。とにかく場慣れした素人で、運良く生き残った者達が顔や体に刀傷を作り、迫力だけは増す。市井の庶民を相手にするのだからそれだけで脅す事が可能になるのだ。剣の振り方など

は何度も人と切りあっていればその内、多少の閃きもあるだろう。しかし剣術をちゃんと学んだ者から見れば、やはりただ振り回すだけの児戯に等しい。

剣の扱いに長けた武芸者は需要がある。賊はとにかく手錬を多く集めたい。しかし武林の名のある門派で学んだ武芸者が盗賊に加担する例は少ない。それなりの腕が確かにあれば集団の首領に請われて待遇も良いだろうが、実際に事を起こすとなれば先頭切って剣を振るう事を期待されている訳で自分も表に立たねばならず、期待通りの働きをすれば目立つ。問題はそこで、自分が見つかってしまうのだ。かつて同門であった連中に、である。かつての門派を何の理由があつて離れたにせよ、大人しくしていれば関わってこない。しかし表立って悪事を働いていると分かれば、必ず始末に来るのである。

これほど恐ろしい事はない。武林というものの恐ろしさは盗賊などとは話にならない程、違いがある。確かに盗賊連中は残虐で数が充分であれば敵無しにも見えるが、その動きはとも感情的だ。襲われたとしても冷静に対処すれば逃げる位は出来るだろう。しかし武林の門派が自分を狙えば――彼等は目的を定めれば非情で冷徹だ。かつて同門だった者が離れて悪となつて江湖に害を成しているとなればそれを消し去る事に躊躇は無い。悪逆の徒となつた者が自派の出であるなど認められる筈が無かつた。同門の連中だけでなく武林が一体となつて自分を殺そうとするだろう。児戯などではなく、本物の武術をもつて、である。

邪道に堕ちた者に容赦はしない――。これが武林の掟なのだ。

かと言って、洪と対峙している殺という男が武林の出であつたとしても、まだそのような目には会わないだろう。今のお仲間である三人の盗人はあまりにも――小物過ぎる。どの様にして知り合つたのか知らないが、出来る事なら今の内に縁を切っておくべきだ。しかしこの殺も何の考えも無しに今こうして剣を構えて居る訳では無

さそうだ。『訳は無い』などというのは真実では無い筈である。

再び殺が攻撃を仕掛ける。今度は様子見では無く、最初の突きは同じだったが素早い動きで二手、三手と重ねてゆく。一切無駄は無く、やはりそれは『剣術』であった。洪は慌てる事は無かったが、先ず防御に徹した。

「なるほど！ 確かに前等とは格が違うな！ 何とも勿体無い！」

洪は殺ではなく後ろで見物を決め込む三人に向かって叫ぶ。

「フン！ 敵わないなら降参しろ！ 荷を全部置いて行けば勘弁してやるぞ！」

「……敵わないとは言わんが」

洪はそう言って殺を見つめた。直後、洪は地を蹴って間合いを詰める――が、殺はほぼ同時に弾かれた様に後方へ下がる。これもまた凄まじい速さの退き足で、洪との距離は少しも縮まっていなかった。再び腕を広げた体勢で構える。

「あんた……一体？」

「……」

殺は何も言わずじっと洪を睨み激しい雨に打たれながら地面に溜まった濁った水を足でかき出すような足運びで徐々に位置を変えていく。そして三度目の剣突。今度は洪も攻撃の手を入れる。この男とは遊んでなどいられない――そう感じた。

再び殺の剣が流れる様に繰り出される。傍目には洪が難無く捌いている様に見えるのだが、当の本人の心中は穏やかではなかった。

（型が完成されている……しかし一体、何処の……？ これはちよいとやばいかもな……）

洪は殺の剣技が何処のどういったものなのか必死に記憶を探るが該当するものが見当たらなかった。武林に遍く存在する武術は千変万化、ありとあらゆる変化を持つが、基本の大筋においてはそれほど大きく違ったりはしない。剣の型にしても人の挙動の流れは無限と言う程の組み合わせがある訳ではないのだ。無論、一つや二つの

流れを覚えるだけでは全く足りない。優れた武芸者はそれらのより多くを長年かけて体で覚え、自らも用い、また敵のそれに対処し得る知識と技術を蓄える。洪は武林の武芸門派の人間では無いが、剣を振るう事を生業としている以上それらを疎かにすることは出来ない。可能な限り、今の武林にある武芸についての知識を蓄えてきた。相手の次の手を読み、先に行動するという事が戦いを有利に運ぶ為に最も効果的で、何より命のやり取りとなればそれは必須であるとも言える。

（くそ……もつとじっくり見たいが……旦那をこれ以上待たせるのは良くないな）

洪はスツと息を吸い込むと勢い良く殺に向かって踏み込む。先程と同様に殺も素早く反応するが今度は洪の体は止まらず殺に迫っていく。いくら退き足が俊足であったとしても正面を向いて追撃する洪からいつまでも離れて居られる筈も無い。殺は突如、跳躍して洪の上を飛び越えようとした。洪の視界にあった殺の体の輪郭がぶれる。しかし見失いはしなかった。

洪の剣が天に向かって突き上げられると、チィィンと甲高い金属音が響く。洪の頭上で剣を受け止めた殺がニヤリと笑うのがはっきりと見えた。

（一体……何処の誰なんだお前は！）

洪は焦り始める。殺は余裕の表情で軽々と洪を飛び越え、三間ばかり離れた場所にヒラリと着地すると再び腕を広げた。

「洪さん」

石の声が背後から掛かる。

「……ああ、ちょっと手に余る……いや、ちよつとどころじゃないな」

「いや、樊^{はん}さんだ。多分そうだ」

「何？」

「うちの馬がこっちに来る」

洪は殺から目が離せずにいたが、樊という名を聞いて殺の肩越し

に街道の先を見ると確かに馬が駆けて来る。赤地に金糸の派手な刺繡が施された帯を首に下げており、まだはつきりと見える距離では無かったが、洪もすぐに気付いた。

（何だ？ ……何故此処に？ ヘッ、まあいい。不意だがもしあれが樊の奴だったらいつを押し付けてしまう手もあるな。来てるのは一人じゃない筈だ）

洪はそんな事を考えながら殺に視線を戻す。殺にも石の声は届いていた様で、後方から迫る気配を気にしている様だった。

第七章 四

「殺！ 何やってんだ早くしろ！ あいつらが！」

見物客となつてゐる三人の殺のお仲間達は後ろを振り返りながら、やって来る馬を見て騒ぎ始めた。

「あーもう間に合わねえ！ 出直しだ！」

一人がそう叫び、街道の脇の林に向かつて駆け出し、他の二人もすぐに追う。山の中に住処があるとは思えないが、とりあえず逃げるなら山と考えていたのだろう。近くの村とは正反対の方向に三人は駆けて行く。

あつという間に三人の男が居なくなり、殺だけが一人残された。殺は男達が駆け出すのを僅かに見ただけで、『自分も付いて行かなければ』とは全く思わないらしく、洪をじっと見ている。

「あいつらは俺達をよく知ってるからな。今こっちに来る奴は俺達の仲間だ。どうだい？ あんたも退いたら。それとも、どうしても譲れない事情があるのか？ あの三人とは別に……？」

洪が殺に話しかける。殺の剣を持つ姿勢に変化は無かったが、僅かに目を伏せた様に見えた。もっともこの激しい雨の中では殆ど分からない。

「殺どのと仰いましたか？」

周維が石と一緒に洪のすぐ傍まで来ていた。殺は周維をじろりと睨め付けるだけで返事は無い。洪は構えを解いて見せる。

「今来る奴も一人じゃない。出来れば退いて欲しいんだが……。一人でもやるのかい？ まあ最初からあんたは一人だったか……」

「洪さん。この方の用件は聞きましたか？」

周維は全く警戒の様子も見せず、洪に話しかける。

「あー、聞いて無いな。ハハ、あんたの、用事は何なんだい？」

洪が訊くと、殺はようやくやく上体を起こして剣をだらりと下げた。納める鞘の類は無い。

「俺も同じだ。……お前達の持っている荷を奪いに来ただけだ」

「それは？ 荷を全部ですか？ それとも、あの中の『何か』をご希望でしょうか？」

周維がそう訊ねると殺は黙り込む。

「……俺達を追っていたのか？ あの三人はずっとこの辺に居付いてる奴等だからな。他所へは行かない筈だ。あんた一人ですつと？」

「どうやら殺は周維の一行をずっと狙っていた様である。荷の中の『何か』に用があったという訳だ。此処へ来てあの三人に出会い、何を話したのか知らないが周維達を襲うという話になり、それに乗ったのだろう。」

今ある荷は城南から持ち出した物は無く殆どが都で手に入れた物ばかりで、中身を知るとすれば『それ』を手に入れた都においてでしか有り得ない。都を出てからかなりの日数が経っている。その間全く気付かないとは——洪はただ驚くしかなかった。横の周維を見るといつもの様に薄く笑みを浮かべていた。

「んん？ おっ！ 旦那！」

街道をやつてきた馬が周維達の傍まで来ると急に足を止めた。

「これは樊さん。意外な所で会いますねえ」

馬上の人物に声を掛けたのは周維だけで、洪と石は殺から目を離さない。

樊というこの人物は周維達と同じ城南の稟施会の者で、洪や石らと同様、用心棒の様な事をしている四十がらみの男だ。腕や首周りが太く、いかにも腕力に優れている様に見える。この男も洪のように褐色の肌をしていた。

「いや、旦那、実は……」

「樊、今ちよいと取り込み中なんだ。お前、一人じゃないよな？」

洪が殺に目を向けたまま言う。

「ああ、鉄と子旦那が居る。もう来ると思うが……取り込み中って何だ？」

「ハハ、ちょっと待っていて下さい」

周維が言って殺を見る。樊も初めて見る顔に気付き、鋭い視線を向けた。

「我々の持つ、何が必要なのですか？」

「……なんだ？ まさか盗賊か？」

樊が言うのを石が手で軽くないなして遮る。樊は口をへの字に曲げ、とりあえず馬を降りた。関と凌、劉建和も周維の傍に集まって来ている。樊は劉建和にも目を向けるが関と並んで立っているので特に不審には思わなかった。

殺は口を開く。

「……取り戻す。倚天を取り戻す」

「イテン？ 倚天剣……？」

呟いたのは劉建和だった。都で倚天の剣が現れたと聞いたばかりだ。

（まさか、買ったのはこいつら……稟施会か？ ……稟施会なら有り得る——か）

「倚天の剣はとても有名な剣ですが、あなたとはどういった繋がりがあるのですか？ 取り戻すとは？」

周維が再び訊ねる。殺はぼそぼそと話し出した。

「倚天は凡人の持つ剣じゃない……。あれは返して貰う」

「あの剣、あなたの物でしたか？ あなたは相応しい……？」

周維は茶化す様な口調で言う。

「北辰教の教主様の物だ。稟施会になど……」

「違いますね。あの剣は陶光とは縁が無い。たまたま方崖にあっただけなんですがねえ」

『教主様』と言った時点で殺は北辰教の者でまず間違い無いと思われるのだが、周維はその『教主様』を陶光と呼び捨てにしているというのに殺は特に反応を示さない。北辰教に属する者は教主を絶対視する者が殆どで、教主の名を呼び捨てにするだけで殺されてしまう者さえ居る。知らない者には冗談の様な話だが、それは本当にあ

る話なのだ。殺はそこまで狂信的では無いというだけだろうか？
或いは北辰とはあまり近くないのか――。

「お前は……何故それを知っている？ 城南に持って行ってどうするつもりだ？」

今度は殺が周維に訊ねた。

「どうしましょうかね。私は剣は持たないので、人に使ってもらう事にしますよ。勿論、あなたの言うようにあれば稀代の名剣です。並みの使い手の佩剣となるのは役不足というものは、心配には及びませんよ。陶光などよりもっと、いや、最も相応しい人物にお渡ししますから」

「ほう……名は？」

殺の様子はあまりにも不可解だった。教主陶光の為に剣を取り戻すという様な事を言いつつ、それにしてはあまり熱心でも無いような雰囲気、本当は自分が興味があって追ってきただけなのかも知れない、と周維の周りに居る者達は思い始めた。

「まあまあ。まだ全然有名ではありませんから聞いても知らないでしょう。……そうだ、あなたは私を知っているのですね？ 稟施会の……」

「周維。稟施会の主で守銭奴の悪人だそうだな」

「ふむ……名が知られるのは有難い事です、悪人とは……守銭奴というのも当たらない。あなたはそう思いませんか？ あの倚天にどれだけお金を積んだことか」

黙って話を聞いている劉建和は矢継ぎ早に想像を繰り返す。

（この……周維が稟施会の主？ 何て事だ。同業とか言っていたが、それすら憚られるくらいに桁違いじゃないか。しかしあの若さで……世襲なのか？ あんな法外な値段で倚天剣をいとも容易く買い付けておいて、人にやるだと？ 一体何を考えて……全く分からん。俺は……城南まで行って、どうなってしまうんだ？）

沈黙が続き、雨の音だけがうるさく辺りに充満する。ずぶ濡れになった殺に周維は話し続ける。

「あなたは……北辰の者ではないですね？　あなたは、そうであるとは一言も言ってませんが。倚天は教主の物では無いので『返す』というのはおかしい。返すなら『殷汪に』、ではありませんか？　方崖の殷汪と共にあったのです。違いますか？　それとも、知りませんでしたか？」

第七章 五

殺は何も答えない。その時、街道の先から新たに二騎、樊の馬と同じ飾りを付けた馬が駆けて来た。

「おや、……皆揃って、城南でも何かあったんですかねえ？」

周維はそちらに目を移して言う。殺も振り返って眺めると持っていた剣をその場に落とした。

「……降参だ。好きにしろ」

「行って構わないんだけどな。追う程暇じゃないんだ。この後もあんたがまだうちの荷を狙うってんなら話は別だが……」

洪も剣を腰の鞘に戻す。殺は初めて口尻を僅かに上げ、微かに笑う。

「諦める。あの剣を俺が手に入れるなど、元々在り得ない話だった……」

「手に入れたとしても、方崖には持って行かなかったのではないですか？ あなたは中々の剣の腕をお持ちですが、もっとあなたの事が知りたいですねえ。興味が沸いてきましたよ。『好きにしろ』と仰ったのだから、言う事を聞いて貰いましょうか。雨に打たれ続けて体が冷えてきました。この先で休む事にしましたから、あなたも付き合って下さい。いいですね？」

周維が殺にそう言うと、洪と石が顔を見合わせて肩を竦める。『旦那』の興味はいつでも何処でも、対象が何であっても不意に湧き出すのだ。殺は折角、諦めると言ったのに再びその気になってしまいかも知れない。しかし、洪も石も、他の誰も周維に異を唱えた経験が無かった。

殺も目を見開いて周維を見つめたが、何も言わず小さく頷いた。

「おお？ 旦那？」

駆けて来た二騎が周維を見つけて足を止め、馬上の男は揃って樊

と同じ反応を見せる。

「三人で来たのですか？」

周維が二人を見上げて訊く。

「はい。旦那、実は……」

「あなた方の話も、屋根のある所で聞かせて貰いますよ。洪さん、行きましようか。殺さん、……本当の名は何ですか？　まさか本当に殺という訳ではないのでしょうか？　教えて下さい」

殺の返事は皆が思うよりも速かった。

「俺は求、求持星だ。別にもう殺で良いんだけどな」

「では求さん。私の後ろに乗って下さい。この馬に」

「おいおい、旦那、それは――」

洪が慌てて周維を遮る。この求持星という男は今しがた自分達を襲った賊なのだ。周維のこの感覚は流石に洪も理解出来ない。そして求持星も洪と同じ気持ちだった。

「あんたが来いと言うなら、大人しく付いて行く。本当だ。だが馬は遠慮したい」

周維は求持星をじっと見つめてから、

「私は、あなたを疑ったり恐れたりしませんよ。では、付いてきて下さい」

一行は皆それぞれ自分の馬に乗り、洪と周維が先頭に立つ。荷がそれに続き、その後ろに今しがた合流した樊と後の二人が付く。

石が黙って馬上から求持星を見降ろしている。暫く見合ってから求持星が歩き出すと、石がその後ろに付いた。

暫く行って小さい川に掛かった古びた橋を渡ると、その先に民家が点在していた。どこもしっかり戸が閉まっていて人の姿は見えない。更に先へ進むと街道に面した場所に古い廟の様な建物があり、旅人らしき者が十数人くらいだろうか、壊れかけた軒の下で雨宿りをしている。

「ひどい雨ですなあ。当分止みそうにない。どこから来なすった？」

「とりあえず休息です。武慶からですが出てすぐにこの雨ですから。もう何日になるか……」

周維は話しかけてきた老人に答えながら馬を降り、被っていた笠を取って雫を払う。随分長い間雨に打たれていたのでその内側まで濡れていた。

他の者達も続いて馬を降りるが廟の外に雨が避けられる場所はそれほど無く、馬には引き続き濡れていて貰わねばならなかった。馬から荷を降ろして並べ、洪が中身を確認している。

「一度全部出して乾かしたいが、当分先になるなあ。旦那、とりあえず中に入るかい？ 腰を下ろすくらいは出来るぜ？」

「そうですね。少し休みましょう」

「中はもう結構人が居ますよ。皆入れるかな？ でかい荷物ですなあ」

先程の老人が言う。横には一組の夫婦と、じゃれ合う幼い子供が二人。時折、老人の足に絡み付いているが、孫なのだろうか。一家で何処かへ向かうのだろう。老人達もそれなりの荷物を大事そうに抱えていた。

「旦那、大丈夫そうだ。入ろう」

先に中を見てきた樊が周維に言い、洪らが四つの荷を中へ運んでいく。

「求さんも、どうぞ中へ」

周維が求に手招きをして微笑む。求は黙って従うがやはり戸惑いを隠せない。これから自分をどう扱うつもりなのか？ 剣を抜いたのだ。洪という男が剣など全く扱えない素人であったなら恐らく――切っていただろう。何事も無かったかのように自分に接する周維と、それに文句も言わず従う、僅かな時間ではあったが剣を交えた洪。警戒らしき事をしているのは後ろにいる石とかいう者だけに見えた。ただ見ているだけではあるが。

その石は、求持星が僅かに足を止めている間にその脇を抜けてさっさと先に廟の中へと進んで行った。

この廟の様に雨を避けて旅人が集まる事の出来る場所はこの周辺には殆ど無く、此処には多くの者達が押しかけて来ている。それぞれ車座になって話す声がそれほど広くは無い廟の内部で響き、騒がしかった。

片隅に四つの大きな包みを寄せ、その周りを囲むように周維達も腰を下ろす。周りの先客達は少しだけこちらに視線を向けたが、特に気に留める風でもなくまた自分達の話に戻った。

此処には何も無かった。何かを祀る廟であったのは確かな様で正面には祭壇らしき物があるが、肝心の神像なり何なりの対象物が見当たらない。何かがあったであろう場所がぼっかりと空き、かなり以前からこの廟は主の居ない空き家であった様だ。

「ここは、俺の聞いた話では黄龍門の開祖……梅……、なんとかって人が祀られていたらしいんだ」

洪が皆に向かって説明する。

「梅慈心……か」

劉建和が言うと、

「おう、それぞれ。……『それ』って言うのは流石に不遜だな。その梅ご先輩だ」

「面白いですねえ。梅磁心という方は元々出家の身。それが滅後に祀られる事になるなど、ご本人が知ったらどう言うでしょうね」

周維は穏やかな笑みを絶やさず、言いながら皆を見回して反応を確かめるかの様だ。

「ここはもうかなり古いだろう？ 人物を祀っていたなら像があった筈だが朽ちたとかそういう感じでも無さそうだ。持って行かれたか」

劉建和が廟の奥や天井に目を遣りながら言う。

「そうですねえ。出来が良ければ売れますね。この近辺では無理ですが。此処はもう安県に近いし梅磁心は信仰の対象になるほどです。その像の出処等にも目が行きますから捌き難いでしょう。劉さんな

ら、どうします？ かなりの値打ち物だったとして」

「俺なら……触らないな。盗み出して売るといふ事自体、まあ俺には縁の無い話だ。一応表向きは道義上……そういう事にしておくが、正直、そんな大掛かりで危険な商いは俺如きには無理だよ。……稟施会ならすぐに捌けるかい？ 国外に売るか？」

「おいおい、人聞きの悪い事を言わんでくれよ。稟施会だってそんな事しやしねえよ」

劉建和の言葉に樊が口を尖らせて答える。

「ハハ、そういう事になってますねえ。手に入れる方法はともかく、その後なら色々方法がありますね」

第七章 六

周維は言葉を続ける。

「その辺りは出来れば内緒にしておきたいのですが。樊さん、紹介しておきましょう。こちらは劉建和どの。武慶から我々と共に来られたんですよ。国中を商いで渡り歩いておられる同業の方です」

「渡り歩くなど……食い扶持を求めて流離っていると言った方が当たってる」

劉建和はそう言ってから樊を見る。

「劉さん、この三人は洪さんや石さんと同じ、稟施会で主に各種警護の役についてもらっています。樊樂、はんがく胡鉄、こてつ劉子胆りゅうしたんです」

樊樂は背も大きいが横にも大きい。褐色の肌に常に大きく見開かれていて目は用心棒と言われて納得しやすい容貌だが、他の二人は割と普通の男達である。樊樂らは揃って劉建和に体を向けて礼をする。その少しばかり仰々しい礼に劉建和は慌てて拱手し礼を返した。周維は輪から少し外れて座った求にも目を向けた。

「求さん、あなたもほら、こちらに加わってください。さあさあ」

周維が言うと洪が少し体を後ろへやって求が入れる隙間を作る。

「遠慮するなよ。最初は変な感じだったが、何だかよく分からんが俺は楽しくなってきたぜ。ほら求さんよ、あんたの話も聞きたいしな」

洪が笑いかけると、求はじつと見返してから、フツと鼻を鳴らして頬を緩めた。

「求さんは中々鮮烈なご登場でしたからねえ。皆ちゃんと覚えましてよ。私達の事も存じておられる訳だから、これからは友人となりましょう」

周維は何とも突拍子も無い提案をするが、異論を唱える者は居ない。状況を殆ど知らない樊樂らは洪や石の反応を窺って、特に問題が無いらしいという事を把握した。

「あんたの、名は？」

輪には加わったもののじつと床ばかり見つめていた求持星が、隣の洪に訊ねた。

「ん？ おれは洪だ。洪……破人はじんという。嫌な名だろ？」

それを聞いた求持星はハツとなって顔を上げ、洪破人と名乗る男の顔を凝視した。他の者達にもこのやり取りは聞こえているが、『何でもない』といった表情で二人の方を眺めている。

「洪、破人？」

「ああ。そうか、あんた北辰がどうのって言ってたが、あっちの方から来たのか？」

「……そうだ」

「なるほど。じゃあ、俺の名に引かかる処があるって訳だな。しかし、何も無い。あんたが今思い浮かべた人物は、無関係だ」

「……」

求持星が沈黙したところで、周維がフツツと意味ありげな笑いをこぼす。が、次に顔を向けたのは樊樂の方だった。

「樊さん。聞きましたようか？ 城南はどうになりましたか？」

周維の物言いは大袈裟で、冗談のつもりだろう。本当に城南がどうにかなってしまったのなら樊樂らが大人しくしている筈が無い。樊樂が改まって周維に体を向ける。

「旦那、ついに蘇その奴がやりやがった」

「……蘇さんが？ 何を？」

「万乗閣ばんじょうかくで暴れてな……。それから、旦那の屋敷にも押し入って荒らした。何人か怪我してる。で、その後逃げたんだ」

「おい、本当か？ で、お前達は蘇を追って来たのか？ 奴は一人だったのか？ どうして止められなかったんだ？」

洪破人が立て続けに質問を樊樂に浴びせる。

「すまない」

樊樂がそう言って周維に対して頭を下げると、胡鉄と劉子旦の二

人もそれに倣う。

「ふむ、蘇さん一人なら城南を出る前にすぐ捕まえられそうなものですが、やはり同調した者も居たんですね？」

周維の表情に変化は無く、落ち着き払っている。

「風と項も一緒に居たそうだ」

「居たそうだって……樊、お前は見てないのかよ」

「旦那の屋敷に行つたつてのを聞いて急いで駆けつけたんだが、もう遅かった」

樊樂は大きな体を何とか縮めようとしているかの様に俯き、沈痛な面持ちだ。

「お前らは？ 鉄、子旦、お前らも同じか？」

洪破人が強い口調で問い質すと、

「すみません……蘇さんが荒れてるとは聞いていたんですが、まさかあそこまでやるとは……」

「全く、何をやって――」

「まあまあ、洪さん」

周維が扇子をひらひらと振りながら言い、洪破人は浮かせていた腰を再び下ろした。いつの間に周維は扇子を取り出したのか知らないが、時折扇いである。外は冷たい雨で冷え切っているが、この廟の中は人の熱気が充満し始めていた。

「被害は？」

「最初は色々持ち出そうとしたらしいが、万乗閣にある金には手が付けられないからな。あとは……旦那の屋敷を滅茶苦茶にしてやつてから逃げようと蘇は言っていたらしい。項は捕まえたんでな。奴がそう言ってたんだ」

劉建和と求持星だけは全く話が分からない。蘇とかいう者が暴れて逃げた、らしい。蘇というのは稟施会に居た者だろうか？ 樊樂は『ついに蘇が――』と言ったので、前から何やらしでかしそうな人物であつたに違いない。周維の様子を見ている限りでは大した事では無い様なのだが、周維を無視すればやはりただ事では無い話を

樊樂はしている。とりあえず劉建和も求持星も黙って話を聞いていた。

「うちに押し入りましたか……大丈夫だったんですかねえ？ 夏かさんはどうしました？」

周維はそう言ってちらっと洪破人を見る。洪破人はただ変わらないう表情で目を合わせたただだった。樊樂が僅かに首を捻ってから、「夏？ ああ、旦那のこの客人だな？ あの人は大丈夫だったそうだ。昼間は居ないらしいからな」

「居ない？」

周維と洪破人の声が重なる。

「ああ。周漣しゅうれんさんの話では、王おうさんを手伝って——今、西の郊外で開墾やってるだろ？ あそこの仕事を手伝ったり、新しい田の準備に行ったりしてるらしい。あの人、元は農民だってな。王さんも驚いてたってよ」

「ハハ、なら大丈夫だったんですね。夏さんも、蘇さんも、ねえ」

周維はそう言ってまた、フフ、と意味ありげな笑みを浮かべた。

「驚くといえば、旦那。蘇は逃げたんだが、風が死んだ。旦那の屋敷で暴れた時、周漣さんも居たんだが……」

「そうだ！ 周漣さんに怪我は無かったんだな！？ 風は……死んだ？」

洪破人が再び身を乗り出す。

「洪、お前本当に分かりやすい奴だな。とにかくそれより、驚くぞ？」

「……何だ？」

「周漣さんがあの美しくかつ愛らしい顔をして言うには、だ」

「樊！ 余計な事は言わんでいい！」

「蘇と風と項の三人がやって来て荒らし始めて、風の奴が周漣さんに剣を突きつけて脅いたらしい。『一緒に来い』ってな」

「フン。周漣さんが大人しく従うものか」

「その通り！　で、彼女は、どうしたと思う？
『怖くなったので、
風さんを刺してしまいました』とさ」

第七章 七

洪破人と石、関、凌の四名だけが樊樂の言葉に呆気に取られている。劉建和と求持星も『刺した』という言葉にそれなりに反応はしたが、洪破人ら程の事は無い。言った樊樂はその反応を見てにやり、周維は――平然と聞き流している。

「あの風を、だ。奴の体は確認した。急所を一突き、周漣さんは返り血を一滴たりとも浴びてなかったんで最初は疑ったんだが、他の者が何人もその様子を見ていたんだ。『とにかく凄かった』らしい」
「風を……」

洪破人の声がかすれている。

「そうだ。周漣さんは実はとんでもない剣の使い手だったって訳さ。いや、剣か？ 風は自分の剣でやられてたんだが……それを見た蘇は脇目も振らずに逃げ出したってよ」

「その、風というのは武芸の腕は良いのか？」

不意に求持星が口を開いた。眼差しが鋭い光を帯びている。

「ええ。彼の腕はうちでも指折りです。随分と頼りにしていたのですが……悪さをされてはどうしようもありませんね。周漣さんが始末をつけてくれて助かった訳ですね」

周維が答え、

「身内か？」

求が再び訊く。

「いや、私と同じ周姓ですが、そういった繋がりはありません。もう一年にはなるでしょうか、うちで色々お手伝って頂いているお嬢さんです。お嬢さんなんて言ったら彼女は嫌がるでしょうかね。とても素晴らしい女性です」

「使い手で、似た名前の女を知ってる。知ってると言っても個人的な知り合いではないんだが、見た事はある」

「周婉漣しゅうえんれん、かな？」

劉建和が言うと、求持星は頷いた。

「劉さんも周婉漣を知っているのですか？」

周維が尋ねると劉建和はすぐに首を振った。

「名前だけだ。あっちに行った時に耳にしたくらいなんだが」

「有名人かい？」

樊樂が訊く。すると洪破人が呆れたといった様子で、

「ハ、お前知らないのか？ 北辰の七星だよ」

「し、七星くらい知ってるぞ！ でも確か……女って居たか？」

「お前、全然知ってねえじゃねえか」

周維が笑い出す。

「ハハ、樊さん。北辰教の七星には女性が二人居るのですよ。一人はこの間、武慶に現れましてね。運良く拝見させて頂きましたよ。

この世で最も恐ろしい女性だと噂の、林玉賦りんぎょくふです。実に美しい女性ですよ。だからでしょうかねえ？ 余計に恐ろしさが増すのかも知

れません。もう一人が周婉漣。この方は名前しかあまり知られてない様ですねえ。求さん、どんな方です？ 見たのでしょうか？」

「林玉賦を見たんなら……そうだな、全て正反対な女を想像すれば大体当たってる」

「ほう……では、きつととても清楚で控えめ、淑やかで物静かな感じでしょうか？ ハハ、林どのを良く知らないのにこんな想像をして、彼女に知れたら恐ろしい事になりますね。しかし……そうなる
と、うちに居る周漣さんは本当に北辰七星周婉漣によく似ている事になりますねえ」

周維の笑みが変わる。口元だけが僅かに歪んでいるが、その眼は力を増した。

「樊、蘇は何処へ行った？ 目処は付いてるんだろうな？」

洪破人は少し語気を強めて詰問調になる。

「項の話では都へ行こうと言っていたそうだ。おそらく都へ――」

「そんな事で捕まえられるか！ どうやって探し出すんだ？ 隠れ

る場所なんていくらでもあるんだぞ！」

「じゃあどうしろってんだ？　行き先をちゃんと蘇から聞いてなかった俺が悪いってえのか？」

洪破人と樊樂のやり取りを聞きながら劉建和は考え込む。

（どうやって探し出す？　この広い国に隠れる場所は幾らでも……奴は今、街中を両脇に子供を抱えて歩いている訳じゃない。何を手掛かりにすれば……？）

秘伝書と、恐らく息子をも連れ去った徐を本当に探し出せるのか、劉建和には自信が無い。今、話に出ている蘇という男はたった一人で逃げているらしいが、それに比べれば徐は複数の手下の様な取り巻きと、息子、劉馳方りゅうちほうに真武劍派の娘、李小絹りしやうけんまで連れている筈で、少しは目立つ様な気もする。しかし、それはほんの些細な違いだ。探し出すにはこの国は広過ぎる。自分一人では到底無理だろう。真武劍派が何人の人間を出すのか知らないが、それでも困難な筈だ。徐はじっとして何処かに転がっている訳ではなく、捕まるまいと逃げて行くのである。

街に居るのか、それとも人の入らない山の奥深くに潜むのか？　そんな事を考えていると、すでにもう見つけ出すのが不可能な状態になってしまっている様な気になってきた。

「二人共、落ち着いて下さい。こうしましょう」

周維が二人の間に割って入り、二人を黙らせる。周維が決めれば、洪破人も樊樂も従うだけだ。

「蘇さんは、放っておきましょう」

「え？」

全員が周維の顔を一斉に見た。劉建和と求持星もだ。周維は真顔で喋っている。

「三人も人を出して追う程の事はありません。そんな価値はありませんよ。蘇さんの追跡は終わりにして下さい」

「あ、ああ。旦那がそう言うんなら……」

樊樂は驚いた顔のまま周維の命令に応じる。

「それより、城南から此処までわざわざ出て来た訳ですから、このまま戻っても全くの無駄足ですし、樊さん達はこのまま進んでもらって、調べて頂きたい事があります」

「……それは？」

「東涼の古い秘伝書とやらが現れました。真武剣派が今、追っていますが、それを探して頂きたいのですよ。出来れば真武剣より先に見つけるのが良いですねえ。その秘伝書は武慶から表に出ました。何処へ向かったかは分かりません」

「つまり、誰かが持って移動してる訳か」

「そうです。城南にはまだこの話は行ってないでしょう。私達が戻ったら他にも増援を出します。樊さん、秘伝書を持っているのは徐という男です。十数人の手下を連れている様ですね」

「なるほど。俺達だけでは難しいな。他にも声を掛けて良いのか？」

「勿論構いませんが、厄介な事にその徐は人質を連れています。子供を二人。皆を動かすには東涼の秘伝書だけで充分ですが、実はそちらの方が重要なんですよ。その二人の確保が最優先なんです」

樊樂がその太い腕を組んで考え込む。眉間に皺を寄せ真剣な顔つきで、

「そいつはその秘伝書を処分するかな？」

「恐らくそのつもりでしょうね」

「あまり間が無いか……」

「樊、その子供の一人は、こちらの劉さんの息子さんだ」

洪破人が補足する。樊樂は劉建和に目を遣ると微かに顔を縦に数回振った。劉建和はじつと床を食い入るように見つめたままで何も言わない。樊樂はまた周維に視線を戻す。

「秘伝書は無くても良いのかい？」

「まあ、仕方ありませんが……皆には秘伝書を追わせて下さい。そうでないと彼等はやる気を起こしてくれないでしょうから。徐の消

息が分かった時にすでに秘伝書を処分していた場合、あなた方は徐の方を頼みます。いや、その前に……」

「人質と先に別れる可能性もあるな」

「ええ。樊さん、最大の目的は二人の子供を取り戻す事。それを念頭に置いてお願いします。それから、先程言った通り、真武剣が動いています。もう一人の子供というのは真武剣派の弟子らしいのですよ。この先、鉢合わせする場面が何度もあるかも知れません」

第七章 八

樊樂は更に顔を顰める。

「やりにくいな……。真武剣は秘伝書も手に入れたがってるんだよな？」

周維はその言葉を聞くと、フツと鼻から息を洩らして嘲笑する。

「彼等は何としても手に入れなければならないんですよ。そうでなければ真武剣の面目は丸潰れとなる」

樊樂が首を傾げるが、周維はそれ以上説明しようとはしない。真武剣派が躍起になっているという事が分かれば良かった。

「俺達も秘伝書を手に入れたがってると思うたら面倒な事になるんだな」

「そうですねえ。ましてや稟施会の者だなんて知れたら向こうも黙っては居ないでしょう。何処に持っていて売り捌くか、知れたものではない。ハハ」

「樊」

周維が笑っている隙に洪破人がすかさず口を開いた。

「秘伝書はどうでもいい訳じゃない。それも劉さんの物なんだ」

「……なるほどな。旦那、多分まだ武慶よりこっちではその話が出てない。ここに来るまで一応、蘇を追うのに色々当たってみたが、そういった話をする奴は居なかったからな。秘伝書なんてもんの噂が流れてりゃあすぐに聞こえてくる筈だ」

樊樂はほんの少し、劉建和を見ただけだった。

「ええ。しかし秘伝書の話が出るのは徐が秘伝書を処分しようとしたその後ですよ。それまでは隠し続けるでしょうし、今の段階では『子供を二人連れた不審な集団』を探す以外にありません。或いは『連れていた』――」

劉建和は周維の言葉を聞いて俯く。

（子供を『連れていた』集団は、その子供をどうしたのか？ ただ

逃がしたりはしないだろう。息子は、馳方達は逃げ出すという事があるだろうか？

劉建和は首を振る。

（あれにそんな事が出来る筈が無い……。真武剣派の娘も今から弟子入りしようかというまだ幼い子だ。徐からは、逃れられない……）

「範囲は？ どこまで拡げる？」

「そうですね。とりあえず――」

劉建和は周維と樊樂らが話す声が徐々に遠くなっていく様に感じた。一番の当事者である自分には何の術も無く、ただ呆然と立ち尽くす様な感覚。周維が居なければ、今頃自分はまだ武慶で屋敷に籠もっていただろう。惘然としたまま成り行きを見ているだけか、或いは真武剣派の人間を見る度に全ての責任を彼等に押し付け、憤慨しですか。

周維は何故自分を助けようとしているのかという疑問が浮かんでくる。いや、助けようとしている訳ではないのかも知れない。周維は、というより稟施会が、秘伝書に興味を持ったのかとも考えた。あの倚天剣を法外な値段で容易く買い付ける程だ。秘伝書が本物なら『それも欲しくなった』と言い出しても不思議は無い。

（くれてやればいい）

劉建和はそう思っている。何せ自分は一度もその秘伝書とやらを見ていない。父、劉建碩りゅうけんせきが持っている間もその存在を全く知らなかったのだ。最初から無かったと同じである。金に換えるのも難儀な代物だ。秘伝書などどうなったって構わない。

しかしながら、『最初から無かった』物の為に息子がさらわれるなどという事に納得できる筈も無く、劉建和は頭を抱えてしまう。

「あんた、東涼と関係が？」

求持星の声が聞こえた。劉建和はゆっくりと顔を上げ、そちらを見る。

「いや、全く。何の秘伝だと聞かれても、全く分からない。見た事もないんだから」

劉建和は力なく微かに笑う。求持星はその様子をじっと見つめ、やがて口を開く。

「東涼黄龍門の武芸を調べている人が居てな。そのものを直接調べている訳じゃ無くて洪淑華こうしゅくかの縁者についてなんだが、今も居るかも知れないって話だ」

劉建和は首を傾げる。

（縁者？ 既に無い東涼黄龍門に繋がる人間が今も？ 親父はそこから……秘伝書を手に入れたのだろうか……？）

「縁者とは？」

樊樂と話していた周維の耳は求持星の言葉もしっかり聞いていたのだろう。すぐに周維は反応した。

「さあ？ 俺は知らない」

求持星はそう言っただけで目を伏せる。

「調べているのは北辰の人ですね。あなたの上役か何か……」

周維は求持星から目を離さない。反応を窺う様にじっと見ていると、求持星も再び顔を上げて見返した。

「あんたは何でも知っている様だな。俺が何か言う必要はあるまい」若干吐き捨てる様に言う。はっきり言わずに『知っているんですよ』という様な事をほのめかす周維の態度には、確かに誰でも不快になるだろう。

周維は真顔で言う。

「求さん。あなたには今後を決めて頂かなければならないのですよ。この後、あなたはどうしますか？ 倚天を手に入れると命じた誰かの許に帰りますか？」

「俺は命じられてなどいない」

求持星は周維を睨んでいる。しかし周維はにやっと笑うだけだ。「倚天の在りかを探れという事でしたかな？ 或いは……行き着く

先を……？ 求さん。どうか全てを教えてくださいませんか？ そのかわりに……」

「……かわり？」

「あなたの知っている事を私に教えて頂けたなら、城南へあなたをお連れしましょう」

「フン、城南はそんなに良い所なのか？」

求持星には周維の言葉の意味が分からない。『自分達に襲い掛かったお前を生かしておいてやる』というだけならば大した価値は無い、と求持星は考えている。

（殺してもらって構わない――）

そう、心に呟く。

他の者達にも何の話をしているのか分からない。周維は突然現れた求持星の事を良く知っている様な口振りだが、普通に考えてそんな事は在り得ないと思われる。剣を持って自分達を狙った求持星を見て懐かしげに声を掛けるといふ事も無かった。北辰がどうのと最初に言い出したのは求持星だが、それは倚天剣を狙う理由として挙げた出鱈目だと誰もが感じた。それ以外には彼自身の事を知り得るような話はまだしていない。

ただ、洪破人や樊樂らの稟施会の者達は黙って周維が話すのを待っている。周維は他の者には全く知り得ない事柄について信じられない程詳しくったりする事が往々にしてあるからだ。

「求さん。もしあなたがまた元の場所に戻ったとしてそこがあなたにとって良い場所でないのなら、そんな所は放っておけば良いのです。私に何が分かるのかと問われる前に言っておきましょうか。あなたは九宝寨の求持星、そうですね？」

うつ、と呻く様な声が聞こえた様に思えた。一瞬、求持星は身じろぎをしたのだ。その場の全員が求持星を注視している。

「更に言いますと、私は稟施会の周維ですよ？ あなたも聞いた事があったのではないですか？ 『御山』おやまを知っています。中々の太

い繋がりが、ねえ」

「何だ？ それは」

質問を挟んだのは樊樂だった。

「ハハ、私の秘密です。皆には内緒の話ですよ。しかし求さんはご存知な筈だ。どうですか、求さん？」

「……俺如きが知らされる様な話じゃない」

求持星は床を見つめ、膝の上に乗せた拳を握り締めている。周維はそれを見て再び笑った。

第七章 九

「ハハ、私の想像は当たっていたんですねえ。いや、聞いた話は本当だった訳だ。求さん、あなたは運に恵まれましたよ。是非城南に行くべきです。あなたの、今後を大きく変える事になると思いますよ。戻るよりも悪い事にはなりません。絶対に」

周維の言葉には力が籠もっている。

「命令……か？ 俺は、命令なら何でもやるのさ……」

求持星はゆっくりと顔を上げて周維を見つめた。

「んー、そうですねえ。とりあえず求さんの身は私が預かった訳ですから、城南までは従って貰いましょうか。倚天も城南に行く訳ですしね」

「もう、俺の城南行きは決定か？ まだ何も喋ってないが」

「それは追々、お聞きしますよ。城南はまだ遠い」

「ああ……」

求持星の掠れた返事を最後にその場が沈黙する。

樊樂が組んだ足を暫く小刻みに揺すってから口を開いた。

「さっぱり話が見えないだが？」

見えていたのは周維と求持星の二人だけだろう。他の者に理解出来たのは周維が城南に来いと言い、求持星が従う事にしたらしい、という事だけだった。

「お前等はこれから劉さんのご子息を見つける事だけ考えてれば良いんだよ」

洪破人の言葉に樊樂は口をへの字に曲げる。

「フン、もうとつくに大まかな算段は出来てるさ。途中、聞き込みしながらまず呂州へ向かう。孫の幫会を――」

「まだまともに動けるのか？ あいつら……」

「とにかく、暫くは全て樊さんにお任せしますよ。我等も早く城南

へ戻って手を打たねばなりません。雨の具合は……どうですか？」

周維はそう言って廟の入り口の方へ首を伸ばす。まだ入ってくる者の方が多く、もう中は人で溢れそうになっていた。洪破人が言う。「あまり変わってない様だ。旦那、足を伸ばして休むなら此処を出て街へ行かないと遅くなる。次の街の先は当分まともな宿は無いしな。安県を抜けるまでは……」

「そうですね。では皆さん、行きましようか。もう少し辛抱すればまともな寢床を確保出来るでしょう」

周維が手にしていた扇を胸に仕舞うと同時に、洪破人らが一斉に立ち上がる。すると、廟の入り口の方に居た数人の集団がこちらを指差して話した。どれも知らない顔で、どうやら場所が空きそうなので入れ替わりに座ろうという事らしい。

洪破人らが再び荷を表に運び出す。雨は相変わらず激しく、屋根から落ちる滝のような流れが廟の前に水の壁を作っていた。来た時に居た老人や子供達の姿はもう見当たらない。

「こんな雨は見慣れているとは言うものの、慣れはしませんねえ」
「確かに。雨季になれば城南は凄い事になるもんな。とりあえず止むまで我慢するしかない」

洪破人が周維と自分の馬を牽いて来る。雨を気にしては何も出来なくなってしまう。劉建和も空を眺めるのを止めて馬の方へ小走りで駆け出した。

「求さん、乗りませんか？」

周維が求持星に言う。しかし求持星は頭を振って、

「いや、いい。必ず、城南に向かう。本当だ」

「ハハ、何も我々も大急ぎで駆けて行こうって訳ではありません。次の街で馬を用意します。そこまではゆっくり行きますよ」

「じゃあ旦那、俺達はとりあえずこのまま北へ向かう」

樊樂、胡鉄、劉子旦の三人が馬に乗り、雨の中に整列する。三騎ともお揃いの派手な赤い飾りを下げ、馬だけは大層立派に見えるが、

乗っている樊樂らはお世辞にも品があるとは言えず、若干不釣合いな感もある。ただ、樊樂の逞しい体躯と褐色の肌を見れば、この組み合わせはまた違った迫力を生む。

「呂州、でしたね。真武剣派は既にあの辺りから都にかけて動いている事でしよう。いいですか？ あちらが先に徐を――劉さんのご子息を助け出していたならそれで終わりです。無事ならそれで良いのですからね」

「了解だ。秘伝書は……別だよな？」

樊樂が言うと、周維はにやりと笑う。

「真武剣派が手に入れていなければ。樊さん、出来るだけ真武剣派を怒らせない様にして下さいよ？ フフ、取り合いにならない様に」

「ああ、それも了解だ」

「樊、真面目にやれよ。鉄、ちゃんと見張っておけ」

洪破人が荷を馬に乗せて出立の準備を終え、周維の傍に戻って来た。

「ハハ……樊さんが私の言う事を聞く訳がありませんよ」

胡鉄は笑い、隣の劉子旦と顔を見合わせた。

「フン、俺はいつだって大真面目だ。洪、全部俺に任せて、お前はさっさと周漣さんの所へ戻るんだな。彼女にお守りして貰えばこんなに安心な事は無いな。ハハ」

樊樂は洪破人に対して遠慮する事も無く平気で挑発する様な物言いだ。かと言って仲が悪いという雰囲気でもない。おそらく今までこんな事を言い合って過ごしてきたのだろう。洪破人もまともには取り合わない。

「旦那、行こう。樊、さっさと行けよ。徐に敵わないと思ったらちゃんと周漣さんに助けを請うんだぞ？ 彼女は優しいからお前を助けてくれるだろう」

「ハハハ、どうやら最初から周漣さんに頼んだ方が良さそうですね。フフ……。さ、もう出ましょう」

一行は二手に分かれ、それぞれ北と南を目指す。樊樂ら三名は威

勢の良い掛け声と共に駆け出し、残った周維らはゆっくりと進みだした。

「おい、殺は洪達と一緒に行くみたいだぞ？」

「どういう事だ？ あいつ寝返ったのか？」

「くそっ！ あいつ買収されたに違いない！ 奴等は金持ちだからな。何であいつだけ！」

「……俺達は逃げたからだろう？」

「あいつ……いいなあ」

「おい……俺達も行くぞ」

「ゆ、許してくれるだろうか？」

「洪とは永い付き合いだからな。俺に任せろ」

街道を進み始めた周維らの前に、男が三人飛び出してきた。しかし、誰一人として驚く者は居ない。その者達が街道の傍の林でこちらを窺っていたのを皆知っていたからだ。

「いい加減にしないと、本当に容赦しねえぞ？」

洪破人が進み出て、馬上から男達を見下ろす。

「おい！ 殺！ お前、何故一緒に行く？ お前だけ抜け駆けか！

俺達は放っておくのか！」

一人が求持星に向かって怒鳴る様に言うと、洪破人はその男の顔を塞ぐ。求持星は黙ってその男を見ているだけだった。

「何言ってるんだ？ ここに『殺』なんて男は居ない。人違いだな。こちらは求さんていうんだぞ？ さあお前ら、これ以上邪魔すれば、切る。もう俺も我慢の限界だからな」

現れた男達は、先程求持星と共に襲ってきた——実際は求持星の後ろで見ていただけだったが——盗賊もどきの連中だった。

「待ってくれ！ 洪！ ……さん。どうか！ どうか俺達もそいつと一緒に！」

そう叫んで先頭の男が足元のぬかるみに座り込んだかと思うと、

まるで水溜りの濁った水を啜ろうとでもしているかの様に頭を地面に擦り付けた。後の二人も慌ててそれに倣う。

「は？　一緒に？　何言ってるんだ？」

「頼む！　何でも、何でもやるから！　どうか俺達を、連れて行って……下さい……」

最初の内は威勢良く声を張り上げていたがやがて言葉の最後の方は震え、男の手は、地面の泥を思い切り握り潰していた。

第七章 十

「あのなあ……」

洪破人は呆氣に取られて言葉を失ってしまう。この男達はいく先程見知った訳では無く、何年か前から洪破人の前に姿を現し始めた。此処は城南からは程遠く、洪破人も年中旅をしている訳では無いのでそう頻繁にはないのだが、この辺りに来れば必ず現れた。

男達は勘違いしていた。調子に乗っているという洪破人の言葉は当たっているのだ。洪破人はいつも追い払うだけで済ませていたのだが、本来、とうの昔に返り討ちにあつて殺されていてもおかしくはなかったのである。彼等は荷を奪おうとする盗賊なのだから当然だ。しかし洪破人はずっとそうはしなかった。彼等はあまりにも――全てに於いてお粗末過ぎた。

未だに無事生きているという事は恐らく、少なからず悪事を働いて空腹を満たしていたに違いない。しかし、彼等はいつも痩せこけていて、いつも同じ檻^{ぼろ}樓を纏い、本当に上手くやっているのかと思えてしまう程、その姿は哀れを誘う。盗賊に同情など断じてしないと洪破人も最初の内は考えていた。が、しかし仕留める事もしない。だから、この男達は何度も何度も現れる。

彼等が殺戮を繰り返す本物の悪党であつたなら、洪破人も容赦などしない。しかし、今日の前にいる男達は泥水の中に頭を埋めるようにして土下座までしてしまう様な男達なのだ。

「困りましたねえ」

周維が誰にともなく溜息と共に言った。

「うちは一応、人を選びますからねえ。誰でもという訳にはいかないんですよ」

「……」

洪破人は黙って聞くだけで何も言わない。

「頼みます……頼みます……」

男達は顔を上げる事無くひたすら繰り返す。もはやあの威勢はすっかり消え去り、形振り構わず『助けてくれ』と懇願する。もう、こんな生活は嫌だ――そう、泣いて訴える様に。

「こんな人々を、方々で見かけたよ……」

周維の隣に居た劉建和は、男達を見つめながら呟いた。

「俺もいつこうなるか……不安を抱えているんだ。今でもな。あなたの処は安泰だろうからそんな気持ちになる事も無いだろうが、生きる為に形振り構ってられないという人々を見る度に、俺もそう考えるだろうと納得した。同情したとかじゃない。『同じ』になるんだよ。……そんな人々が国中に溢れてる。救おうと思っていても救いきれるものでもない。辛い事だが……」

周維は男達から劉建和へと視線を移す。

「フフ、私とて血も涙も無い男ではありませんよ？　うちに『使ってくれ』と言って来る者は少なからずいますが、泥に顔を埋めて土下座までする者は初めてです。こんな雨に恵まれて、この人達は幸運ですなぁ」

洪破人が周維を振り返り、

「旦那……連れて行くのか？」

「足手纏いになりますよ。更に馬を買うのも勿体無い」

周維は男達の願いを聞き入れるかの様な事を言ったかと思えば、すぐに否定する様な事も言う。劉建和が眉を顰めると、周維は男達の直前に馬を進めた。

「我々はあなた達の旅の用意をする余裕はありません。本当に私の許へ来たいと言うのなら、ひと月以内に、城南まで来て下さい。そうすれば、あなた達の願いを聞き入れましょう。ただし、あなた方三人だけです。他の人間も連れてきたら、この話は無かった事にします。いいですか？」

「お……」

男達は一斉に顔を上げる。三人共顔の汚れ具合まで同じである。

そしてまた揃って頭を下げる。

「必ず！ 必ず行きます！ 有難うございます！ 有難うございます！」

男達はまた繰り返す。きつとこの姿が、本当の彼等の姿であろう。いつまで経っても慣れない剣を捨て、ようやく人らしい真つ当な生活を取り戻す幸運を、思いがけず手に入れたのである。

周維達は再び進み始めるが、ひれ伏す男達の傍に洪破人と求持星が留まっていた。

「……おい、もう良いだろ。立てよ」

洪破人が声を掛けると、「へへ……」と照れた様な顔をして男達が立ち上がる。泥を拭う事もせず、全く気にならない様だ。顔も濡れている。目を赤くしているのも三人とも同じだった。

「名は？」

「俺は、許よで、こいつは仲なつ。こっちは克こく」

いつも最初に喋るのは許という男で、三人の中では一応この許が中心となっているらしい。泥だらけで見分けが付き難くなっているが、少し背が高く髭の濃いのが仲、一見、気が弱そうで小柄なのが克。洪破人は今になってようやく名を知った事に可笑しい感覚を覚えた。

「俺も今、知った」

求持星はそう言って微かに笑う。

「俺達だってお前が本当に『殺』だなんて信じてなかったさ」

許はそう言ってまた「へへ」と笑った。

「お前ら、城南は遠いぞ？ ひと月あれば行けるとは思うが、ひと月あれば餓死だって出来る。いいか、うちに来る以上、悪事を働く事は許さない。この長旅をどうやって遂げるつもりだ？」

洪破人は少し厳しい口調で許に向かって言う。すると男達はすぐに俯いてしまった。

気俤な旅というものは、その資金がふんだんにあって初めて出来るものだ。長期間移動し続ければ宿代だけでもかなりの額になる。それ以前に腹に何か入れなければその内動けなくなってしまう。

ひと月以内に城南に來れば面倒をみるという周維の言葉は随分優しいものに聞こえるが、實際はそう簡単ではない。のんびり行けばひと月では足りない程の距離があるが、それなりに急げばそこは問題は無さそう。この三人にはそれ以前の問題――そのひと月近くを食い繋ぐことが出来るのか――が困難なのだ。そんな蓄えがある様には到底見えない。

「……無理だろうが」

洪破人は三人に目を遣るが誰とも視線が合わない。顔から泥水を滴らせながら俯く男達を眺めながら溜息をつく。

「これを……やるよ」

求持星が許の顔の前に腕を伸ばした。小さな袋を持っている。

「たいして入ってないが、これで何とか行けるだろう。宿は諦めるんだな」

そう言って求持星はもう一方の手で許の腕を掴み、袋を持たせた。

「い、良いのか？」

「ああ、持って行け」

そのまま男達の間を抜け、求持星は先に行く周維らを追って歩いて行く。三人の男は呆然とその後姿を見送っていた。

「……おい、無駄にするなよ。酒に変えたりしたら終わりだぞ。それから、馬は買うな。道中も金が掛かるからな。ひたすら歩いて行け。城南の街に着いたらすぐに周の旦那の屋敷に來い。誰に聞いてもすぐ分かる。子供でも知ってるからな。……城南に無事に辿り着けるかはお前等の運次第だ。じゃあな」

これで何とかするだろうと、洪破人もそれだけ言い残して行ってしまう。

許、仲、克の三人は何も言えないままじっと洪破人と求持星を眺

めていたが、随分後になってから急に歓声を上げ、またぬかるみに膝を突っ込んで男同士抱き合っていた。

「太っ腹だな」

求持星に追いついた洪破人が声を掛ける。求持星はじっと前を向いたままで、

「何故あいつらだったんだろうな……」

「ん？」

「縁ってのは本当におかしなもんだ」

そう、独り言ちた。

第七章 十一

周維らが次の街に入った頃にはもう辺りは暗くなっていた。厚い黒雲が一日中、空を覆っているせいで、時間の感覚が少しおかしくなっている。晴れた日であればまだ充分明るい筈だった。

一行はすぐに宿を見つけ、そこに泊まる事にする。ここから先は暫く荒れた土地が続いており、まともな宿は無い。先の安県の旧市街を越えた次の街までは殆ど廃墟と言って良い集落が点在するだけであり、先程の許たちとは違う本物の賊が跋扈するというこの街道で一番危険な場所となっていた。

「部屋を二つ空けてもらったから、俺達は荷と一緒に四人で休むよ。旦那と劉さん、それから求さんは隣で」

洪破人が宿の者と話をつけて戻って来て言った。

「今日はゆっくり休みましょう。明日から少しばかり強行軍となりますからねえ」

「とりあえず飯だ。ちょっと酒も欲しいな」

洪破人以下、用心棒組四人は武慶で初めて劉建和と会った時の様に荷物を足元に置いて卓を囲んで座り、隣に周維らも腰を降ろす。すぐに給仕が食事の注文を取りにやって来た。

この先が危険なのは確かだったが、洪破人らはこの街道を何度も行き来しており、特別不安になったりはしない。しかしそれは単なる慣れでもない。この街道での旅というものを熟知しているからで、周維もそう頻繁に出歩く訳ではないが洪破人と他の三人には絶対の信頼を寄せているらしく、懸念を抱くという事は無い様である。

いつも通りに休み、そしてまたいつも通りに準備を整え、着実に目的地に近付いていく。

一方、北へ向かう三騎はまだ走り続けていた。三頭の引き締まった筋肉が拍子を揃えるが如く躍動している。皆同じ艶やかな栗色の

毛並みを持ち、素人目にもかなり良い馬である事が分かる。しかしすでにかなりの距離を走り続けており呼吸がかなり荒くなってきた。

「樊さん！ そろそろ休まないか？ 樊さん！」

先頭に行く樊樂に胡鉄が声を掛ける。何度か叫んだところでようやく樊樂が気付いて速度を落とした。

「んん？ 俺は絶好調だぞ？」

「馬が潰れたらどうするんだ？」

「このくらい大丈夫だろうが。こいつならこのまま武慶まで突っ走れるぞ？」

「そんな馬鹿な！ まだまだ先じゃないか。数日は掛かるよ！」

今度は劉子旦が叫ぶように言う。

「お前らそんなに休みたいのか？ つつ……仕方ねえなあ」

樊樂はそう言いながら前を向く。とりあえず駆ける事は考え直した様だ。

「馬の扱いに気を付ける様にうるさく言われてるんだから。馬草まで指定してくるぐらいだ……」

胡鉄はうんざりした顔で言う。

「んん？ 沙の爺さんか？ 放つときゃいいんだよ。あの爺さんはこいつらを溺愛してるからな。可愛がりすぎると良くないに決まってる。馬も人もよ」

沙というのは稟施会で馬の世話をしている老人で、城南に限るが馬を育てる事にかけては最高の名人と呼ばれていた。胡鉄が馬を三頭借りに行くと、最高の奴を出してやると言って連れて来たのが、今、三人が乗っている馬だったが、沙老人はその扱いについて何とも細かな指示を出してきたのだ。沙老人の言う事は確かにおかしいところは無く、理に適っていると言えるものばかり。しかし、馬を使うのはいつもの厩舎ではなく旅先である。馬草をこのように配合しろなどと言われてもまず無理というものだ。無論、胡鉄は『分かった』と言って借り出したのであるが。

「こいつらはそんなヤワじゃない」

「樊さんはもう少し気を使っても良いくらいだ。可愛そうにならないかい？」

「何言ってる？ 俺とこいつはもはや一心同体だ。その辺の加減はもう熟知してんだよ」

胡鉄と劉子旦は顔を見合わせる。

（この間初めて乗ったんじゃないか。やっと暴れなくなったとこだろ）

仕事熱心だ——と言えば聞こえは良いが、樊樂はとにかく胡鉄らを急かせる。本来、樊樂は落ち着いた性格などでは到底なく、何も無くても何故か動き回っていた。

そんな樊樂のおかげと言うべきか、胡鉄らが思っていたよりも数日早く武慶の街に到達した。しかし馬の方はたまったものではない。樊樂も流石にこれ以上は無理と思ったのか、武慶に入ってすぐ休息を自ら決める。まだ陽は充分に高かった。

「徐つてのはこの人間だったな？ まさか戻って来てるなんて事はあるまいな？」

樊樂は辺りを見回しながら言う。三人は馬を降りて牽きながら通りを進んでいた。道中の雨が嘘のように、この武慶は晴れ渡っている。

「ここは真武剣があるから戻ってくるなんてありえないですよ。すぐにとっ捕まっちゃおう」

「ここでは色々聞いて廻るのは止めた方がいいでしょうね。俺達まで怪しまれる」

劉子旦が言う。樊樂は頷き、

「ああ。長居するつもりは無い。このまま呂州に行くぞ」

「……いつ出ます？ 暫く馬を休ませないと。その辺の駄馬だったらまだ此処にも来れてませんよ。いや、それ以前に馬が逝っちゃってる」

「あーもう分かつてるって！ 何処か厩舎があるだろうから探そう」
胡鉄と劉子旦は妙に馬に愛着を持っていて、らしく何度も何度も樊樂に馬を休ませるよう言い続けていた。それも偏に樊樂の扱いが荒すぎるからで、特に胡鉄は足を止めれば必ず馬の体を擦りながら優しく語り掛けるまでになったのだった。

「此処って特に何もねえよなあ？ いつも通り過ぎるだけだ」

「真武剣が邪魔ですよ。この街は隅から隅まで奴等が関わってる。旨い商売ネタも無さそう。その何とかって言う秘伝書があったって事自体、驚きですよ」

樊樂らは馬を扱う店を見つけ、連れている三頭の面倒を見るように頼み込む。樊樂が少し多めの金を差し出すと店の主人は喜んで引き受けた。

その後、三人は近くにあった小さな飯屋に入った。客は少なく、樊樂は給仕の男に話し掛けて徐という男について訊いてみた。今この街一番の有名な男だ、と給仕の男は言い、かつてねぐらにしていたという場所を教えてくれた。

「飯はまあまあだな。しっかしこの酒……」

樊樂は声を落として言う。

「此処で作ってる酒だよな？ 一体、どうやったらこの味になるんだ？」

顔を顰めながらまた一口啜る。

「無理に飲まなくなっただけいいじゃないですか。この街の酒は大昔からこういうもんだと有名ですよ」

胡鉄と劉子旦も一応飲んではいるが、明らかに普段より遠慮がちに口を付けている。

「この武慶の人間ですら眉を顰めずには居られないという訳の分からない代物ですからね。まあ、名物と言えば名物……ですよ」

劉子旦はそう言いながらどうにか杯を干した。

「とりあえず腹は膨れた。出るか。宿も探さなきゃならんしな。あと、

徐の居た処にも行ってみよう。ん？ たしかさつきそこも宿だって言ってたな？ そこにするか？」

「まともな所なら良いんですがね」

樊樂らは店を出ると、先程聞いた『環龍』という宿に向かった。そこは比較的大きな通りに面した所にある宿で、容易く見つけることが出来た。汚れた額が入り口の上に掛かっており、『環龍客棧』の文字がなんとか読み取れる。

中に入ると女が三人、揃ってぼんやりした表情で樊樂に視線を向けた。

「あら、お客さんかい？ 嬉しいねえ」

口を開いたのは三人の中で一番歳を喰ってそうで一番化粧の濃い女だった。他の二人はかなり若そうだ。

「あらあら、三人も？ ああ、大丈夫さ。ちゃんともう一人、この娘達みたいな若いのをすぐ用意するからねえ」

女の喋り方は随分間延びしており、体がゆらゆらと小さく揺れている。横の若い娘二人も眠そうな目をこちらに向けていた。

第七章 十二

「此処は……宿か？」

樊樂が尋ねると、

「ああ、そうさ。泊まって行くなら、一晩中この娘達を付けてあげ
るからねえ。うちは他所みたいにケチじゃないんだ。フフ、帰ら
なくなる事請け合いだよ」

そこまで言って女はようやく立ち上がる。

「今すぐでも構わないよ？ 丁度今、この娘達も体が空いたところ
だからねえ。どっちがいい？ フフ……先にもう一人呼んで来た方
がいいね。それから選んでおくれよ。ほら、酒をお出しするんだよ」
女はどうやら此処を仕切る立場の人間の様だ。呂律の怪しい状態
で娘達に指示を始めるが、どうもまともに伝わっていない様で、二
人の娘は動こうとしない。胸元まで露になった体をくねらせながら、
微笑むと言うよりはにやついていいる。目も半分閉じかかっていた。

胡鉄が樊樂に耳打ちする。

「樊さん、阿芙蓉（阿片）^{あふよう}か何かじゃないですか？ 匂います」

「一体何処から手に入れてんだ？ 是非教えて貰いたいものだな……
：なあ、姐さん^{ねえ}。遊んで行きたいのは山々なんだが、ちと忙しくて
な。此処に、徐って奴居るかい？」

聞かずとも知っているのだが、樊樂は何も知らない態を装い女に
尋ねた。すると女の緩んでいた口元がすっと引き締まった。

「……あんたら、何処の誰なんだい？ そんな奴は此処には居ない
よ。この街の人間は皆知ってる筈なんだけどねえ。何か用なのかい
？」

口調はそれほど変化していないが、その眼差しは先程とはうって
変わって警戒するかの様に鋭くなっている。

「徐を知ってるんだな？ 俺は古い知り合いでな。遠方から来たん
だが何でも徐の奴が大変な事に巻き込まれたとかどうとか聞いてよ。

それで寄ったんだ。この街には居ないのか？」

「フン、巻き込まれただって？ 誰が言ったのさ？ あいつが騒ぎを起こしてとんずらしたのさ。ずっと此処に居ただけどねえ、全く……いい迷惑だよ。真武剣派の奴等があいつを追いかけててねえ。何度も来て商売の邪魔はするし、おまけに此処を潰すとまで言い出してさ。私は置いてやってただけなんだ。何人も人様に迷惑なんか掛けちゃいないんだ」

女が話しながら不機嫌さを増していくのが手に取るように分かる。目に留まる物全てを睨みつけている。

「ふうん、そうかい。じゃあ、あいつは今何処に居るか分からない訳だな？」

「当り前じゃないか。フン、私が知るもんか！」

「姐さん、そんなに怒らないで。楽しく遊びましようよ……フフ」
若い女が弛緩しきった四肢を気味が悪くなる程不自然にくねらせて言葉を発する。明らかにただ酒に酔っているのでは無い事が分かる。

「……なかなか楽しい遊びしてんだな。何処から手に入れる？」

樊樂は若い娘二人に目を遣る。完全に中毒を起こすところまで来ている様だ。

「んん欲しいの？ 楽しいよう？ あげようか？」

虚ろな目とだらしなく開いた真っ赤な唇。一人が突然よろけながら立ち上がり、樊樂の許まで来るとその胸にしなだれかかる。娘の肩に辛うじて掛かっていた着物は完全に肘まで落ち、前方に大きく迫り出した二つの白い乳房が樊樂を押しした。

「ほら、手をお出しなさいな」

娘は樊樂の左の手首を掴み、前に回す。そのまま少し前屈みになったかと思えば着物の裾をはだけ、掴んだ手をそのままずりりと腿の間に滑り込ませた。

「フフ、此処かも」

「ほう、こんな処に？」

樊樂は表情を変えず娘を見下ろしながら言い、自ら手を更に奥へと進める。

「……どう？ あるかしら？ そこはよく探さないと分からないわ」

「……無い様だな。何処だ？」

「んん、じゃあねえ、此処は？」

娘は空いた方の手を胸元に持って行きその細い指を自らの乳房に這わせながら、樊樂を見上げた。

「ん？ そこか？」

樊樂がそう言ってそこに手を伸ばそうとした時、急にその腕が後方に引っ張られた。

「樊さん！ 何やってるんですか！」

「ん？ 何だお前らまだ居たのか？」

「当り前でしよう！ 徐は居所は分からない。もう出ましょう」

「なあに、あなた、あんな男が好み？ この人おかしいんじゃない？」

樊樂に密着したままの娘は後ろで顔を顰めている胡鉄を眺める。相変わらず締まりの無い空いた口から赤い舌をちらつかせる娘の方が、どう見てもまともではなかった。

「この広い江湖にはそんな男も居るんだよ」

「樊さん！」

「冗談だろ。怒るなよ。お娘ちゃん、おじさんはもう行かなきゃならねえんだ。楽しい遊びはまた今度な」

樊樂は娘のずり落ちた着物を肩に戻す。

此処の主らしき女——歳を喰った方の——が言う。

「うちの『商品』に触れた以上はお代を頂かなくちゃならないんだけどねえ。まあ、勘弁してあげるよ」

「……まさかこうやって客集めてるのか？ 危ねえ……引っかかるどころだったぜ」

「もう引っかかってたでしょうが」

胡鉄が唇を尖らせて呟く。

「あいつ、何処行っちゃったんだろうなあ……やれやれ」

樊樂が少し大きめの声で、それでも独り言の様に言う。すると女は数歩近付いて来てから、

「あんた達、本当に徐の連れだって言うなら、見つけたら何処に居るのか知らせておくれよ。でももし違うなら――」

サッと樊樂の後ろの二人にも目を遣る。

「徐に近付かない方が良いと思うねえ。……殺されるよ?」

少し、ほんの少しではあったが樊樂らは沈黙し、女はくすくすと笑う。

「大丈夫だ。あいつは俺達にはそんな真似しねえよ」

「そうかい? フフ、じゃあ良いんだけどねえ」

「じゃあな。邪魔したな。続きを楽しんでくれ」

樊樂ら三人が外へ出ようとすると、先程の娘が呼び止める。

「本当に要らないのお? フン、ほんととはこれが欲しくせに」

振り返って見ると娘はいつの間にか腰の帯を解いており、白く細い腰を撫で上げるとやがてその手は胸の二つの隆起を更に押し出す様にして鷺掴みにする。

首から下だけ眺めていれば、実際に行動するかは別として聖人君子か余程の変人でもない限りその若く艶かしい姿態の女を抱きたいと思わない男は居ないに違いない。しかも向こうから誘うのだ。ここが怪しい店でなかったなら拒む理由も見当たらない。あったとしても即座にそんなものは捨ててしまふだろう。

しかし、娘の顔――目をぎよろつかせ頬を痙攣させて歪んだ真っ赤な口――に、樊樂らは揃って眉を顰めた。

「若くて気の毒ですけど、もう、駄目ですね。この娘……」

劉子旦が樊樂に小声で言い、胡鉄も頷いている。樊樂は娘に笑いかけ、

「次、俺が一人で此処に来た時には宜しく頼むな」

「ケッ! もう来ないつもりだろう! 徐に殺されて、殺されて……」

：死ねっ！ ヒヒッ

殆ど全裸のこの娘は、もはや人ならぬモノになってしまったかの様に奇妙な笑い声を上げたかと思えば宙を見つめて立ち尽くし、そして停止した。

「やはり西方か？」

樊樂が言うと、後ろに行く劉子旦が答える。

「恐らく。南方からは阿芙蓉は入って来ていません。うちでも扱った事は無い筈ですから。相当値が張る筈ですけど、何処から手に入れているのか興味はありますね」

「……全部かき集めて、焼いちまうに限るな。あの娘、まともなら随分器量が良さそうだったが」

「ああなってはもう……どうしようもありません」

第七章 十三

異国の物品が入る場所は限られており、陸の東端に位置しているこの国では南は城南、あとは都から遙か西方、延々と砂漠の続く先にある起離きりとこの国の人間が呼ぶ場所の二箇所だけである。東は何処までも広がる海、北にはとても人が越えられるとは思えない山脈が連なっている。

そのたった二箇所だけしかないというのは、かなり以前の為政者がそう定めてそれが今も続いているからで、実際にそれが厳密に守られているかどうかは疑わしいのだが大まかな物流は大体そういう事になっていた。

起離という場所を訪れた事のある人間は殆ど居ない。この国の最西端であると現王朝は主張しており、周辺諸国もそれを承認しているが、本当に朝廷の支配が及んでいるかと問えばその答えはとても心許ない。果てしなく感じられる程の大きな砂の海を数ヶ月費やして進み、無事辿り着けるかどうか自体が賭けとなるその場所にこの国の庶民はまず用は無く、その場所に行ったことのある者といえば西方の国々への使節と、交易を生業とする商人だけである。

城南の先にある南の国々と起離を越えた西方の国々とは大きく文化も歴史も異なっていて、もたらされる産物も当然異なっている。環龍客棧に居た娘を狂わせている麻薬を含む『阿芙蓉』は、西方の国から僅かずつではあるがこの国に入ってきていた。その希少さと砂漠を越えるという非常に困難な経路によってその価格は跳ね上がる。何故、あの環龍客棧などという薄汚い小さな宿にそれがあるのか、誰もが首を傾げるところであろう。

樊樂らが武慶に滞在したのは丸二日程だけだった。徐について知る為にあちこち歩き廻りもしたがどうもやり難い。『真武剣派でない者がそれを尋ねて廻る』という事を不審に感じる者が意外にも少

なくなかった。真武剣派に属していないにもかかわらず、まるで自分も真武剣派だと思ひ込んでいた様な住人達。全てがそうでは無いのだが下手を打てば即座に真武剣派の屋敷に突き出されかねないと樊樂らは感じた。訊いて廻るだけで真武剣派に引つ立てられるなど理不尽この上ない事で理解し難いのだが、何故かそんな空気がこの街にはある。

次に向かったのは呂州で武慶から北西に八百里程度。緑恒へ向かうのとはほぼ同じ距離であり、急ぎ気味に馬で進む樊樂達は武慶を出て六日で呂州に入った。距離的には武慶よりも僅かに都に近い場所であったが、直接都へ向かう街道が無かった為に街の発展の度合いは武慶に比べれば劣る。しかし歴史の古い街であり肥沃な土地に恵まれて農業の規模と質が非常に良く、他に目立った産業は無いが豊かな街——そう、この国の人々からは認識されていた。

「しかし……この呂州ですらここ数年の不作で疲弊してきています。王さんはいつも此処で学んだ時の事を話しますが、まるで田に黄金がなびいている様で、それがどこまでも続いている風に見えたそうです」

「確かに、昔は景気が良かったよな。殆どが百姓だったってのに、他の何処よりも金持ちも多かったしな。豪農って奴か？ ……俺もまだこの辺は良く覚えてるが、変わっちゃったな……」

呂州に入り郊外に広がる広大な農地を貫く細い道を樊樂らは馬で縦に並んで進んでいる。时期的に空いている稲作用の水田を除いて荒地に見える場所がかなり多く見受けられる。そんな中にちゃんと緑が規則正しく並ぶ畑が点在していた。

「あいつら、まだ此処に居るんだろうな？」

「孫さん達ですか？ ……どうでしょうか」

「あいつの処に世話になる訳にはいかねえから、最初に宿に行こう」
樊樂らは広大な田畑の向こうに見える市街地へと向かった。

古い建物が通りに面して立ち並ぶ呂州の中心部は樊樂の記憶とほ

ば同じで、変わっていない様に見える。樊樂はこの近郊の小さな村の出身である。樊樂がこの呂州をよく訪れていたのは二十歳前後の頃で、もう二十年は経っていた。とは言っても二十年間全く来ていなかった訳では無く、縁あって城南の周維と出会い稟施会で仕事を貰うようになった後も都やその周辺まで来る機会が度々あり、この呂州にも足を運んでいた。今回訪れたのは三年振りくらいだろうか。胡鉄や劉子旦も殆ど樊樂と行動を共にするので同様であった。

今から向かう先の孫という人物は、稟施会とは少なからず繋がりがあった。樊樂ら稟施会の者が『孫の幫会』と呼ぶ孫を中心とした呂州に住む者達で作った幫会があり、かつては稟施会からの様々な仕事の依頼を引き受けていた。ヒョウ局のような単なる荷の護送から情報収集、実際に品物を探し出して手に入れるというようなものまで多岐に渡り、必ず稟施会の期待に応えて信頼されていた。しかし近年、稟施会の仕事の依頼は途絶えている。特に何か孫の幫会が問題を起こしたとかいう訳でもなく、単に仕事が無くなっていったのである。ちなみに、『孫の幫会』にはこれといった名前が無い。ゆえに、『孫の幫会』である。孫は名を怜れいといい、樊樂が若い頃から親しくしていた人物だった。

宿を確保し、そこを出た樊樂らは迷う事無く中央の通りから細い路地に折れ、真っ直ぐ孫怜の家へと向かう。鶏の一団が闊歩するその間をすり抜け、一軒の古い屋敷に着く。朽ちかけた小さな門をくぐると、一人の中年の女と目が合った。その女は樊樂らを見るなり「アッ」と小さく声を上げ、家の中へ小走りで逃げるように行ってしまった。

「今の、奥さん……でしたね？」

胡鉄が言うと、樊樂は頷いた。

「別人みたいだったな。だが、間違いない」

孫怜の妻、呉琳こりんである事は確かだった。前に会ったのは三年前。たった三年の間に誰であるか疑ってしまう程、顔はやつれ随分と老

けて見えた。

呉琳が孫怜を呼びに行ったのかどうかは分からない。樊樂らは家の中へと進んだ。

「失礼する」

短くそう言つて中に入る。人の気配は無い。先に入っていた呉琳の姿も見当たらず、三人は家の中を見回した。

「樊樂だ。怜、居ないのか？ 呉琳、俺だ。怪しい者じゃない」

樊樂が屋敷に響き渡る声で言うが、全く反応が無かった。聞こえるのは外に居る鶏の声だけである。

「居ない様だな。呉琳が出てきてくれればいいんだが……」

「呉琳さん、何かあったんですかね？ あの変わり様は病の類か……」

「彼女は怯えている様に見えました。とりあえず今は表で孫さんが戻るのを待ったほうが良いと思います。孫さんが今もこの街に居るなら、彼女を放っておく訳が無いでしょうし遅くならない内に戻られるでしょう。もし戻られないのなら……彼女を保護するべきでしょうね。もしそうなら、彼女はずっと一人という事に……」

劉子旦が真剣な表情で樊樂に言う。樊樂はもう一度家の中をサッと見回してから、

「そうだな。一先ず出よう」

そう言つて外に出る。そのまま三人は再び小さな門をくぐった。外といつても門のすぐ近くにたむろしている訳にはいかない。もし呉琳が自分達に怯えているのなら、顔を出して様子を窺うくらいはするだろう。そこでまた樊樂らと目を合わせる様な事にでもなればその場で卒倒してしまいかねない。孫怜の家には表の通りからこの路地に入るしか道は無い。樊樂らは大通りまで出て待つことにした。

すでに夕刻となり、徐々に辺りが西日で赤く染まっていく。この呂州も武慶と同じく好天が続いていたらしく、雪などが降った痕跡

は一切無い。武慶で雪は珍しいが此処は普通に降る地域である。ただ、もう春は近く、雪は終わったのだろう。

呂州の大通りは、都や武慶とは違い、商店以外の普通の民家も多く並んでいる。巨大な屋敷に住む家族が朝早くから野良着に着替え、鍬や鎌などの農具を担いで出て行くという、他ではまず見られない光景が、この街にはあった。

第七章 十四

陽は沈んだ。だが西の空はまだ赤い。通りの人通りも変化は無かった。

「あっ、孫さんです」

劉子旦が通りを往く人の中に孫怜が混じっているのを見つけて腰を上げた。

「やれやれ、やっとお帰りか」

樊樂と胡鉄も揃って立ち上がる。樊樂は劉子旦の向いている方向に目を遣ると、すぐに孫怜を見つけることが出来た。孫怜もこちらをじっと見ていたからだ。

孫怜は樊樂と歳が近く四十には届いている筈である。少しばかり細身であるが締まった身体つきで歳の割には若々しく、性格の穏やかな男である。いつも綺麗に髭を剃って精悍な面構えだと樊樂らは記憶しているが、今こちらに歩いてくる孫怜は、不精髭を生やしていた。

「聞いていいか？」

樊樂らのすぐ傍までやって来た孫怜は、三人に視線を配りながら開口一番に質問する。

「何だいきなり」

再会の挨拶は無く、樊樂は苦笑いを浮かべた。

「呉琳は、話をしたか？」

胡鉄、劉子旦の二人は黙ったまま樊樂を見る。樊樂は少し間を置いてから口を開いた。

「いや、何も。何か……あったのか？」

孫怜は答えず、路地へと入って行こうとする。

「俺達も、行っているか？」

「此処に来たのが俺に会う為だって言うならな」

「他に何がある？」

樊樂らも再び路地に入る。孫伶と共に居れば呉琳も普通に接してくれるのかも知れない。

先頭の孫伶が門をくぐると呉琳が姿を現す。しかし、近付きはしない。すぐ後ろに樊樂らを見つけたからに違いなかった。

孫伶が何も言わないまま家に入ろうとすると、一定の距離を維持するかの様に呉琳は中へと戻って行く。

「いいのか？」

樊樂の問い掛けに、

「ああ」

ただそう言って孫伶は三人を中へ入れる。

「その辺に適当に」

孫伶は手を伸ばして辺りを指し示した。粗末な卓と埃を被った椅子がいくつか積んである。

「ちょっと待っててくれ」

そう言って奥へ入って行った。

三年前に来た時にはこの部屋も綺麗に掃除しており、常に人が出入りしてこの卓を囲んでいた。『孫の幫会』の者達だった。実際の人数は『幫会』と呼ぶ程では無かったのだが、稟施会の依頼する仕事に関する分野においてそれらを成すのに秀でた人材ばかりが集まっておりその人数に数倍する能力を発揮する集団であった。周維からの信頼も厚く、それは今も変わっていない筈だった。

「樊さん、どうやら孫さんのところは、もう……」

劉子旦が呟いた。

「たった三年だぞ？」

「洪さんがよく言うじゃないですか。『ひと月あれば飢えて死ぬ』」

「ヘッ、その間何もしない馬鹿な奴は居ねえだろうが」

「何も出来ない状況というのもあるんじゃないですか？」

「……うちが放っておいたから、か？ あいつは、あいつらはそん

な柔い奴らじゃねえよ」

「……」

三人は椅子を取り出して埃を払い腰を降ろしてそのまま黙り込んだ。

（遅いな）

そう思い始めた頃、奥から孫怜の気配が現れる。変わらず無表情のままに戻って来ると薄っすらと埃を被って白くなっている椅子にそのまま腰掛けた。

「呉琳は、どこか具合悪いのか？」

樊樂がまず先に尋ねた。

「分かん」

孫怜はじつと樊樂を見つめて顔を横に振る。

「分かんって何だ？」

「いや、……分かってるんだ。本当はな」

「ん？」

「あいつは、心を病んでしまったんだ」

孫怜の声が小さくなって急に憔悴しきった様な面持ちで俯く。樊樂ら三人がこんな孫怜を見るのは初めての事だった。

「三年前は何とも無かっただろう。何があったんだ」

「特別、何かが起こった訳じゃないんだ。何かあった方がよく分か
って、フン、そっちの方が良かった」

樊樂らは孫怜が続けるのを待つ。

「お前達が前に来てから三年経つんだな。その直後からあいつは少
しずつ変わり始めていたんだ」

俯きながら話していた孫怜が何かを思い出した様にサッと顔を上げ
た。

「前の仕事の時は、俺達も色々ヘマをやらかしたな。周の旦那は何
か言ってたか？」

「おい、違う違う。勘違いするなよ。俺達が三年仕事を持って来な

かったのはそれが原因とかじゃねえんだよ。大体、こっちには何の問題も無かったんだ。稟施会にはな。周の旦那も、あれからも何か仕事が無いかって気に掛けてたんだよ」

樊樂が身を乗り出して孫怜に言い、胡鉄がそれを引き継ぐ。

「孫さん、本当ですよ。ただ、うちもこのところこっちでの仕事が続いてますから我々もこの街へ来る機会がありませんでした」

「怜、本当だ。信じてくれ」

「……そうか。いや、どちらにしても今の状況を招いたのは俺だ」

三年前に稟施会から孫の幫会に依頼した仕事というのは稟施会が手配した品々を都から運んで稟施会に引き渡すという単純なものだったのだが、幫会の仲間であった数人がその一部を持って逃走するという事態が起こった。孫怜はすぐにそれを追って品を取り戻し、無事期限までに仕事を終えたのだが、孫の幫会に綻びが広がり始めたのはそれがきっかけであった。孫怜はその数人を、あっさりと始末したのだ。

当時すでに仕事は減っており幫会の者達の生活にも影響が出始めている頃で、問題を起こした者達は特に借財を抱えて苦しんでいた。だからといってやった行為が許される訳では無いが、『すぐに切っ捨て捨てるなどあり得ない』という意見が幫会の仲間内で広がった。

そんな中で次にまた仕事があったなら今までと同様にこなす事が出来たかどうかは疑わしい。しかし、それを最後に仕事は途絶える。

「呉琳がおかしくなっちゃもう程、……生活に困ってんのか？」

樊樂は乗り出した身を引いて、今度は椅子の背もたれに体を預けた。

「まあ、それも影響あるだろうな。あれからうちの奴等がばらばらになるのに大して時間は掛からなかった。此処にももう、誰も来ないしな。あいつ……琳にとっても失う物は大きかったんだ。俺達には子も無いし、フフッ、本当に何も、無い」

「でも、それだけであの呉琳さんが……」

劉子旦が呟くと孫怜はゆっくりと視線を向ける。

「俺はあれから何もしなくなった。あいつと話す事さえ少なくなつてな。人間の心ってのは、想像以上に早く変化していくものらしい。ずっと一緒に居た俺にだって、あいつの心の全てが分かつてる訳じゃない。分からない。……分からないんだよ」

第七章 十五

もう、『孫の幫会』は存在していない。仕事を依頼する事は無理になった。樊樂はその事と孫怜の話が頭の中でごちゃ混ぜになって暫く黙っていた。

「すぐに、支度を致します」

不意に女の声が聞こえ、皆、ハツとなって声のした方へ顔を向ける。孫怜だけがゆっくりと振り向いた。いつから近くに居たのか分からぬが、呉琳が奥に歩いて行く後姿が見えた。

「支度？」

樊樂は孫怜と顔を見合わせたが、孫怜は呉琳の言葉にあまり反応を示さなかった様だ。ゆっくりと後ろを向き、呉琳の背中に声を掛ける。

「琳、もう休め。今日はもう何処にも行かないぞ」

しかし呉琳は聞こえていないのかそのまま奥に消えた。

「俺達が、仕事を持ってきたと思ったのでは？」

胡鉄が言うと、孫怜は姿勢を戻し樊樂を見る。

「うちはもう何も出来ないんだ。すまんが……」

「……」

樊樂は腕を組んで考え込んでいる。今回、周維に命じられた仕事は何も必ず幫会の人間を全て駆り出さなければならぬ訳では無い。誰を使うかという具体的な指示も無い。無論、人手は多い方が良いに決まっているのだが、全ては自分に任されている。孫怜一人だけでも手を貸して貰いたいと考えていた。

しかし、それでは呉琳は一人になる。特に今の呉琳を一人にしてこの街を離れる事など孫怜がする筈が無かった。

「ごっ、呉琳さん？」

不意に劉子旦が少し慌てたような声を出した。また皆一斉に顔を

挙げ、家の奥に目を遣る。呉琳が、戻ってくる。その手には剣。右腕にも、左腕にも、剣が抱えられていた。

「琳？ 何だその剣は？ それにその数は――」

「怜さん。もっと持ってきましたから、お待ちになって」

ここで初めて呉琳は笑顔を見せる。先程とは殆ど別人で、樊樂らにも微笑んで見せていた。それはどこか、自分の存在を顕示するかの様にも感じられる。氣――。そう、まるで突如として呉琳の細くなった体に充実した気が満ち、そして溢れ出したのである。

「もっと？ おい、こんなはどうしたんだ？」

「私にお任せになって」

呉琳は踵を返してまた奥へと消える。孫怜が追おうとしたが樊樂の声が聞こえて、その場に留まった。

「話した事あったよな。昔、俺がここの通りで呉琳に会って、そんな時、彼女はお前のその腰の剣を抱えてた」

「……ああ、聞いたな」

「呉琳はきつと、あの時と同じじゃないか？」

孫怜は樊樂から聞いた事のある、昔の呉琳の姿を思い起こした。

樊樂が稟施会の人間として城南で暮らし始めて間もない頃、初めての仕事で中原に戻った折、この呂州を訪れた。孫怜に協力を依頼する為で、その時が後の『孫の幫会』の最初の仕事となった。樊樂は孫怜に話をした後、久しぶりの呂州の大通りをぶらついていると、呉琳がどこかへ向かって歩いているのを見つける。呉琳は一振りの宝剣を抱えていた。この時その剣は布で丁寧包んであり、呉琳から聞くまでは気付かなかった。

呉琳は派手な装いを嫌い、いつも淡い色目の着物を身に付ける。顔立ちもいわゆる美人では無かったが目を細めてよく笑い、いつも明るい表情でいるその姿が愛らしく、この時は孫怜と祝儀を挙げてから間もない頃で樊樂はこの初々しい若妻を眺める度に「怜の奴……」と密かに嫉妬心を抱いたものであった。

「これは、怜さんの剣。怜さんにはこれが無ければ。だって、怜さん程の剣の達人は他に居ないんですよ？ 私は慕容さんぼようの様に武芸で怜さんを助ける事は出来ないけれど、これは私がとても有名な職人さんに頼んで造って頂いた剣なんです。怜さんがこれを使えばきつと、怜さんの名は天下に轟く筈です」

「……呉琳、お前の旦那は確かに、まあ多少出来るが、それ程でもないぞ？」

樊樂は呉琳の様な娘を娶って上機嫌になっている孫怜を思い浮かべながら口をへの字に曲げる。

「フフ、これから分かるんですよ。怜さんの凄さがあなたにも」

そんな事を恥らう事無く堂々と言つてのけるのも新婚のゆえか、呉琳はそう言つて笑つた。

剣とは恐ろしいものだが、孫怜はそれと完全に一体となる術を持つ。体の一部となり気が腕から剣へと通い、同じ精神が宿る。孫怜そのものとなった剣はもはや恐ろしい物では無い。それは愛する孫怜なのだから。孫怜は無敵となりその義侠の道を阻む者は居なくなる。自分は『孫大俠だいきやう』の妻。夫を江湖一の男に――。

孫怜の下に集まつて来た者達は『呉琳さんが幫主でも良い』とよく冗談を言つた。孫の幫会の者達にあれこれと世話を焼いてよく働く呉琳は、一番歳が若いにも関わらずまるで母親の様に慕われた。孫怜を、孫怜の幫会を江湖一に、という呉琳の言葉は本気だったのである。

樊樂は随分後になってから呉琳とそんな話をした事を孫怜に言つた。孫怜は最初苦笑いを浮かべて聞いていたが、その内に真剣な表情になりじつと黙つて話を聞いていた。

「これといつてめばしい剣はありませんね。しかし、こんなに集めて、安くは無いでしょ」

孫怜は回想から覚め、卓上に並べられた数本の剣をぼんやりと眺める。劉子旦が一本一本を手にとって鑑定するかの如く顔を近づけ

ていた。

一体何処にこんな物を置いていたのか、見当も付かない。
(安物だとしても金はどうした？ しかもまだあるのか？)

孫伶はそう思いながら呉琳の向かった奥に目を遣った。すると、
丁度再び呉琳が姿を現した。今度も剣を抱えているが、その中に幾
つか長物まである様だ。

「琳……お前」

「これだけあれば、怜さんに敵う人なんて居やしないもの」

「琳！」

孫伶は呉琳の両肩を掴む。

「待って、そこに置くから」

呉琳の両脇に挟まれている剣がずれて落ちかける。孫伶は肩から
手を離してそれらを抜き取った。

卓上に新たに加わった得物を含めて数えると十四本。刀や短槍ま
で混じっている。

「さあ、樊さん。次は何処へ行くのかしら？ 急ぐ？ すぐ皆に知
らせるわ」

呉琳は間違いない、三年前の様に、いや、もっと昔の孫の幫会が
最も精力に満ち溢れていた頃の様に樊樂に話し掛けている。増えた
皺は消えたりはしないが、当初のやつれた表情は微塵も無く、怯え
るように隠れてしまった呉琳は既に居ない。一体いつの、何がき
かけとなって変化したのか、一同は狐につままれた様な表情で呆気
に取られていた。

「今度の仕事は、人探しなんだが……あー、大勢で動くのは具合が
悪いんだ。だから、怜だけ手を貸して貰えば充分なんだ」

樊樂は呉琳に向かって努めて昔と同様に振る舞い、伝える。しか
し今、呉琳は恐らく現在の孫伶と幫会の状況など全く頭には無いだ
ろう。

「無理だ」

孫伶は樊樂を見据えて口調に力を込めた。

「頼む。もう、そっとしておいて欲しい。稟施会には随分世話になったが、もうしまいにしてくれ」

「怜……」

樊樂は何も言えない。孫怜がそう言うのは今の状況では至極当然の事なのだ。胡鉄と劉子旦も黙って項垂れ、この辛く、重い空気に耐えていた。

第七章 十六

呉琳がスツと腕を伸ばし卓上の剣を一振り手に取った。他の四人は声こそ出さなかったものの、僅かではあるが場に緊張が走る。呉琳はそれをどうするのか。

「怜さん。……駄目よ。もう随分久しぶりの仕事なのよ？ やらなければ」

手に取った剣を眺めながら呟く。

「琳？」

「『孫怜』が何をやるのか、江湖は注目しているわ。さあ、これを持って。怜さんじゃなければこの世の悪は払えない。怜さんと、この剣でなければ！」

呉琳は剣を孫怜の胸に押し付けた。

昔の呉琳に戻ったのかと孫怜は思っていたが、どうやらそうでは無いらしい。樊樂は今まで一度も『この世の悪を滅する仕事』など持って来た事などは無い。悪人を懲らしめると言えば稟施会を狙う小悪党に灸を据えた事があるが、その程度であった。

「琳。俺が行けばお前は一人だ。もう此処には随分前から誰も来ないだろう？」

孫怜の声は随分と柔らかく、まるで幼い愛娘に接するかの様である。しかし呉琳は孫怜を睨み返す。

「私の事なんか気にしてどうするの！ 私なんか捨て置けばいいの。この先、私は『孫大侠』の足枷になる。だから私は消えるわ。私は、もう消える」

次の呉琳の動きはこのほか速かった。新たに卓上の剣の柄を掴んだかと思えば、勢い良くそれを引き抜く。腕を剣と平行に真一文字に振ると卓上に鞘のみを残してその刃が姿を現した。

呉琳にこんな芸当が出来るのかと一同驚愕する程その挙動は速く、そして美しく決まっていた。だが皆黙って眺めてはいない。呉琳の

動きが速ければ速いほど、孫怜や樊樂らの警戒と反応の度合いも増す。呉琳の後方からその腕を掴み剣を素早く奪い取ったのは樊樂だった。

「お前が消えたら、さすがの怜も……孫大俠も仕事の手が鈍るってもんだ。呉琳、お前が無事に待っていられるなら何も問題は無いんだ。今度の仕事はなかなかでかい話でな。時間が掛かるかも知れない」

呉琳は一切の動作を止め、樊樂の言葉に耳を傾けている。「消える」と言った呉琳は放っておけば抜いた剣で自らを傷付けようとしたに違いないが、それにしては全く取り乱してもいないどころか、すでに自分のしようとしていた事を忘れてしまったかの様に静止していた。

「琳、お前が、必要だ」

孫怜は呉琳を引き寄せて抱きしめる。呉琳は感情を高ぶらせている様子も無く、ただじつと孫怜の胸に頬を寄せて宙を見つめていた。

胡鉄が口を開く。

「樊さん。お二人に城南に来て貰ったらどうですかね？」

「……」

「多分、何も問題は無いでしょうね。うちとしても助かるんじゃないですか？」

劉子旦もそれに同意する。

「まあ、そうだな」

「樊、待ってくれ」

孫怜は呉琳を抱いたままで顔を樊樂に向けた。

「樊、今日のところは……。明日、俺が行く。宿を覚えてくれ」

一先ず呉琳を落ち着かせなければならなかった。孫怜の腕の中でじつとしている呉琳はもう充分落ち着いている様にも見えるが、先程の様に突然変化してしまう事も考えられる。おそらく不用意な言葉が耳に入る事は好ましくないだろうと、心の病には全く明るくない

樊樂にもそう思えた。

「そうだな。俺達が此処に来るのは……具合悪いか」

樊樂は自分達が泊まる宿の名を告げ、それから呉琳に言う。

「これだけ剣があれば助かる。明日、怜一人で持つて来るのも大変だから、一先ず預からせて貰うよ。呉琳、恩に着る」

この家には他にも刃物の類はあるに違いないが、とりあえず呉琳が出してきた剣だけでも遠ざけておこうと考えた。呉琳は何も言わず、それを拒む事は無かった。

宿に戻ってから樊樂らはどうも落ち着かなかった。孫怜が宿に来る事になっているが無事に呉琳を落ち着かせて、自分達が来る前と同じ様に出掛けられるのか分からない。呉琳が自刃して果てたなどと言って飛び込んで来やしないか？ 万が一そんな事にでもなれば、それは自分達のせいなのだろうか？

そんな事は決してあってはならない。呉琳も大切な、古い友人なのだ。

翌日、陽が昇って間もない頃に孫怜は宿に姿を現した。こんな朝早くに来ると思っていなかった樊樂は少し慌てたが、宿の入り口で待っている孫怜の姿を見てホッと胸を撫で下ろす。孫怜は無精髭を綺麗に剃り、髪も整えられていて昨日とは随分印象が違う。腰には昔呉琳が用意した宝剣。その宝剣を樊樂が近くで見たのは呉琳が『作らせた』と言っていた時から随分後になってからだった。正直、樊樂は剣について造詣が深い訳でもなく『良さそうな剣』としか感じなかったのだが、ちょっとは詳しいらしい劉子旦が随分と褒めちぎっていたので、まあそうなんだろう、くらいに思っていた。昨日も孫怜はそれを腰に帯びていた。しかし、今の方が数段優れた剣の様に思えてくる。呉琳が剣と同様に用意していた物だろうか、濃い青の真新しい袍に、その腰の宝剣が映える。

「派手だとは思わないか」

胡鉄と劉子旦も出てきて三人で出迎えると、孫怜はそんな事を言
って胸の辺りを撫でた。

「地味な方ですよ。いかにも呉琳さんの好みらしい」

胡鉄が言い、樊樂と劉子旦は笑う。紺に近いその袍には飾りも一
切無い。大通りに目を遣ればもっと派手な格好の者は幾らでも居た。

「部屋へ行こう」

孫怜は樊樂の後に続いて三人の泊まっている部屋へと向かった。

「樊。城南について聞きたい。俺と呉琳、二人の居場所はあるだろ
うか？」

孫怜は開口一番に尋ねる。昨日僅かに出た『城南へ』という話の
事だろうが、確かにそれを考えるのが今の状況では最善に思われた。
「ああ。俺達も昨夜話してたんだが、城南に二人を迎えるのは大歓
迎だよ。特に今はな」

「周の旦那はどう思うだろうな？ 『今』というのは？」

「旦那がお前を拒む理由なんてねえよ。実は、うちに居た蘇と風が
もう居なくてな。蘇は何処に行ったか分からねえし、風は死んだ」

「死んだ？ 風という者の事は覚えてるが……」

「殺された」

「樊さん！」

劉子旦が樊樂の表現に抗議の声を上げる。

「蘇さんと風さんは、我々を裏切って、さらに旦那の屋敷で狼藉を
働いたんです。だからこれを成敗した、という事です」

「成敗ってお前……」

樊樂が劉子旦に顔を向ける。

「そういう事です。違いますか？」

「まあ、形は、な」

「それで、風は『殺された』のか。誰に？ 誰にそれが出来た？
洪か？」

孫怜はどうもはつきりしない樊樂らのやり取りを見ながら訊い

た。稟施会の風という男が中々腕の立つ者であるという事を孫伶は記憶している。

「あー、俺達がだ。情けない限りだが奴は手強かったしな」

樊樂はそう言って肩を竦めた。周維の屋敷に居る若い女が風を一剣で仕留めた話をする気配は無い。劉子旦が続ける。

「風さんの腕は周の旦那は勿論、俺達全員が認めていました。しかしもう居ない。うちには痛手ですよ。でももし孫さんが来てくれたら……孫さんと風さん、比べるまでも無い。風さんには悪いけど、孫さんの方が数倍腕が立ってうちにとってもこれほど得する事は――」

第七章 十七

「得とか言うな」

樊樂が劉子旦を軽く睨む。すると孫伶は軽く笑った。

「いや、損得で言ってくれた方がいかにも周の旦那の考えそうな事で想像し易い」

「おい、旦那は別に全てを損得で決めてる訳じゃないぞ」

「フツ、分かってるさ。……城南か」

孫伶は呟いてから考え込む。頭を整理しているのか、ゆっくりと頭を前後に揺らしている。

「氣候が慣れるまで大変かも知れないな」

「こっちの奴等はどんな想像してんのか知らねえが、真夏に外でじっと陽に当たり続ける訳でなし、それなりに暮らしてりゃあ暑さはそれほどでも無いんだがな」

「お前みたいに肌が焦げた様な奴が言っても、説得力無いがな」

「呉琳は、どうだ？」

「ああ。俺が居なくなると分かれば少しは元気が出る様だ」

孫伶は真顔で言ったが、すぐに笑った。

「お前が家で燻ってるからあいつも……」

「まあそうだろうな。勿論それだけじゃないとは思う。そんな単純なものじゃない。……琳は夢を見てるんだ。フツ、俺が『孫大俠』？ 一体、何をすればそんな呼び名が付くのやら」

「で、どうする？ 呉琳を置いては出られんよな……」

樊樂はそう言って孫伶の表情を窺い、孫伶は真っ直ぐ樊樂の視線を受け止める。

「暫く待って貰えないか？」

堯家村ぎょうかそんに琳を連れて行きたい。昔から

世話になってる人が居てな」

「堯家村か……」

樊樂は腕を組み、しばし考える。

堯家村は金陽から西へ向かう街道と、樊樂らが武慶からこの呂州へ来た街道を更に北上して交わる位置にあり、今は廃墟である咸水の村もその近くである。金陽を出て最初の大きな宿場でもあり街の規模はこの呂州とあまり変わらない。

「そこなら琳を置いて貰える筈だ。お互い良く知ってるんでな」

「俺は……仕事の内容を言ったかな？」

樊樂は胡鉄と劉子旦に振り返って尋ねた。

「あー、いや」

「まだ聞いてないな。でかい仕事とか言ってなかったか？」

「本当は、そんなでかくは無いんだがな。ハハ」

「それなら……うちの幫会は要らないだろう？」

「いや、人手は欲しかったんだ。ま、別にそれはもういいんだ。実は、人探しでな」

樊樂は周維に命じられた内容を全て孫伶に教えるが、元々、周維が樊樂に伝えた内容も大して多くは無い。仕事の内容の説明はあっという間に終わった。

「なるほどな。しかし、旦那の狙いはなんだ？ その劉建和って男と長い付き合いなのか？ それとも、その武芸の秘伝書が真の目的か？」

「子供だよ子供。秘伝書はおまけだ。無くたっていい」

「旦那は『無くたっていい』なんて言っていないって」

胡鉄がすかさず樊樂の言葉を訂正する。

「その秘伝書もその劉建和って人の物だから取り返したほうが良いんです。それに真武剣派も探してますから、もし奴等が先に手に入れたら中身を見てしまうに違いありませんよ」

「ん？ もう見たんだろ？ 旦那、言っただけだったか？」

「え？ まだ見てないでしょ？」

「確か真武剣派に貸して、戻って、今度は奪われて――」

「……もういい」

孫怜が口々に言い合っている樊樂らに割り込むように言い、腕を上げて揺らした。

「つまり、その辺はどうでも良い事なんだな？ 出来るだけ早く子供を見つけ出し保護して、秘伝書も出来れば手に入れると」

「まあ、そうだ」

「なるほど。確かに人が足りないな。その徐という男は手下が居るって言ったな？ どれくらいだ？」

「さあ？」

樊樂は真顔で首を傾げる。捕まえようとすれば必ず抵抗すると思われる賊の数は不明。

「あ？」

孫怜はぼつかりと口を空けたまま樊樂の傾いた顔を眺めた。

「十数名……です。……おそらく」

劉子旦が慌てて孫怜に言う。

「仕事というより『お使い』か？」

孫怜は呆れ返って樊樂らを眺めれば胡鉄と劉子旦は俯いて目を逸らし、樊樂は肩を竦めていた。

「ま、俺は何でもいいがな。楽できるならそれに越した事は無い」

「いいや、きっちりやる。それだけは言うておくぞ。細かい事は道中考えるさ」

樊樂は随分と心に余裕があるらしく、のんびりと構えている。

「人質だと言うのなら一刻も早く探し出さないと――」

孫怜は真面目に言うのだが、樊樂はニンマリと満面の笑顔で、

「よし！ 分かった！ では一刻も早く飯にしよう。俺達はまだ起きたばかりなんだからな。お前も付き合え。その後、堯家村には俺達も一緒に行こう。探し回るんだからあっちから行っても良い。それから都に廻るか」

樊樂は勢い良く立ち上がるとそう言って孫怜も一緒に来るよう促す。孫怜は食事を済ませていたが、三人に付き合う事にした。

「お前、城南に行ってもうかなりなるな」

樊樂らが食事の間、孫伶は茶を啜って過ごした。樊樂の手許には酒があり朝っぱらから飲んでいる訳だが孫伶は勧められても断っていた。

「そうだな。もう二十年程か……歳ばかり喰ってるな。『若造』に戻りてえよ。何も考えずに無茶出来るしな」

「樊さん、今も充分無茶だろ。やることが」

胡鉄がニヤつきながら言う。孫伶は口元に寄せかけた茶碗を戻して薄く笑った。

「樊、お前はあの村には戻ってないのか？」

「んん？ ああ、あそこにはもう俺に関係あるものは何も無い。知った奴も居ない筈だ。行く暇もねえし、いいんだよ」

孫伶の言った村とは樊樂の生まれ故郷の村の事である。この呂州から近いが樊樂は城南に行ってから一度もその村の事を口にした事は無い。昔、孫伶が樊樂から聞いた話では呂州で孫伶と出会う前は親と共に各地を転々としており、その村の事もあまり覚えていないらしい。

「伶。俺はお前らに出会って、生まれて初めて江湖ってのは面白いもんだと感じたんだ。この呂州でな」

「随分馬鹿をやったな」

もう樊樂と孫伶二人だけの話で、胡鉄と劉子旦には分からない。食事を続けながら耳を傾ける。樊樂は自分の杯に酒を注ぎながら話を続けた。

「そーいや、あいつらどうしてる？ おっ、そうそう、あの女、：

…嬋？ あれ、どうした？ 元気か？」

「嬋……慕容嬋か」

「あれも俺達と歳が変わらんだろ。もう小母さんだな。まさかとは思うが誰かあいつを娶ったんじゃないかな？」

「どうだろうな」

「何だ。知らんのか？」

「もう随分昔にどこか行ったまま行方は分からん」

「そうか……あいつ、じっとしてればいい女だった……今どうなってるか見たいもんだな。他は？」

「他？」

「ほれ、武のおっさんやら、あと……うーん、夏^かに、それから馬^ばだつたな？　もう皆バラバラか？」

第七章 十八

「よく覚えてたな」

孫伶は言いながら樊樂が勧めるのを断り続けたその酒杯を手に取り、空いた茶碗に注ぐ。

「おい、こっち酒」

「はい、只今」

「やはり昔話には酒だろ。朝だろうと何だろうと、酒だ」

樊樂は新たに酒を追加で注文すると、僅かに残っていた自分の杯を干した。

「樊さん、ちゃんと加減して下さいよ？」

劉子旦が眉を顰めて言うのを樊樂はそれをさっと手を振って軽くあしらう。

「まったくお前ら揃いも揃っておかしな奴ばかりだったな。嬋はおつかねえし、俺はあの夏が苦手だった。何考えてんのかよく分からん奴だったしな」

「……そうだな」

「あいつらも今は何処に居るか判らないのか？」

「ついこの間、武さんがこの街に来た」

孫伶は酒に少しづつ口を付けながらゆっくりと話す。

「ほう。昔から老けてたからな。もう爺さんになってたか？」

「いや、今は歳相応だろう。武さんは俺より十程大きいから、もう五十になってるな」

「今、何処に居るって？」

「樊、驚くぞ。武さんは清稜派の木傀風道長と一緒に居たんだ。向こうに住んでるらしい」

樊樂は驚いて暫し表情が硬直した。口を開けて詰め込んだ飯がこぼれそうになる。

「木道長だって？ 伶、お前会ったのか？」

「まさか。武さんだけが家に来たんだ。いや、武さんだけじゃなかったな。なんと、嫁を貰ったそうだな。しかもつい最近らしい。嫁も見た。若くはなさそうだったが中々の人物の様だったな」

「お前、人の嫁を評するのに『中々の人物』っておかしいだろ」

「そうか？　とにかく武さんが何故、清稜なんかに住む気になったのか分からなかったんだが、そういう事だったんだな。納得した」

「あの、木道長が来られたというのは、真武剣派の英雄大会に行かれたんでしょね」

劉子旦が言うのと孫伶は大きく頷いた。あまり酒に強くはないらしく、酔っているという程ではないが、普段の孫伶とは少しばかり様子に変化が見られる。

「その帰りだった様だな。なんでも、木道長が先を急ぐらしくてあまり時間は無かったんだが、まあ、色々と話したよ」

「武のおっさん、まさか清稜派に弟子入りしたとかじゃないよな？」

「違うそうだ」

「ふーん。おっさんは清稜か……。他の奴等は不明か？」

「嬋てんゆうと天佑てんゆうは行方知れずだな。少風は分かってる。東淵とうえんだ」

「馬公な。あいつが一番相手してて面白かったな。滅多にしゃべらねえけど。ハハハ」

「樊さん。もう酒は止めときなって」

樊樂が愉快そうに声を上げて笑うと、横の胡鉄が腕を引っ張った。日焼けした顔では赤いのか青いのかその顔色は窺えないが、樊樂が色白であったなら恐らく酒で赤くなっているに違いなかった。

「分かってるって。これで仕舞いだ」

樊樂は先程この宿の者が運んできた銚子を掴み、胡鉄の眼前で振って見せる。まだ半分も減っていないそれをまた元に戻すと再び孫伶の方に向き直った。胡鉄と劉子旦は顔を見合せて口を曲げる。まだこの小さな酒席は暫く続きそうである。まだ早朝であるという事を樊樂は覚えているのだろうか。

「東淵とはまたえらく遠くまで行ったもんだな」

「最初は天佑と一緒に此処を出て行ったんだがな。今は東淵の金持ちの家で用心棒として雇われているそうだ」

「……あいつ確か、剣、出来なかったよな？」

「フフ、そうだったな」

「その金持ち、何を思って雇ったんだろうな、ハハ」

「さあな。天佑と一緒に居たなら多分、天佑の方を雇うだろうな。東淵に行った時にはもう一緒じゃなかったんだろう」

「あのう、その天佑って人は、夏天佑というお名前ですか？」

樊樂と孫怜の会話の隙を見計らって劉子旦が口を挟んだ。

「ん？ 知ってるのか？ 知ってる訳が無いか。俺がこっちに居た二十年程前にそいつも居たんだからな」

「樊さん、今、周の旦那の所に居る客人、確か『夏天佑』という名だったかと……」

「んん？」

「……城南に？」

劉子旦は樊樂と孫怜二人揃って自分の方に身を乗り出してきたので慌てて体を引いた。

「樊さんも見たでしょう？ 確かあの人、夏天佑——」

「何言ってるんだ。全然違う」

樊樂は劉子旦に体を向け改めて椅子に座り直し、

「いいか、今、怜と話してるのは俺らと歳も同じくらいで昔よくつるんでた奴だ。顔くらいは覚えてる。旦那の処に居る奴は結構若いぞ？ 旦那よりも下なんじゃないか？」

「……まあ、そうですね。私達くらいか、もう少し若いか……。珍しい名でもないし、関係無いのかな」

劉子旦はあっさりと納得する。周維が屋敷に迎え入れた夏という男は大きく見積もっても三十代前半くらいに見え、とても樊樂や孫怜と共に二十年前この呂州で過ごしていたとは思えない。

「……若い夏天佑、か」

孫怜が呟くと、樊樂はまた体ごと向きを変えて孫怜を見る。

「別に似てもいねえし、別人だ」

「そうか」

「もう皆揃う事はない……か？」

「どうだろうな。嬋と天佑の行方は微塵も手掛かりが無い。フツ、本気で探そうとした事も無かったがな」

「馬公が東淵か……。遊びに行きたくてもそんな暇はねえなあ。金も要るしな」

樊樂は椅子の背に体を預けて天井を眺めながら溜息をついた。

この国の人間が東淵に行くといえは大抵、夏の暑さを避けて物見遊山に赴き湖に船でも浮かべて楽しむのである。わざわざ遠く東にある東淵まで行くからにはとても普段は出来ない遊興、三昧といきたいところであるが、一介の庶民風情では如何せん東淵にたどり着く頃には路銀も尽く——といった具合で、特に東淵から遠い場所に住む者にとっては『一生に一度くらいは』と考える程、縁遠い街であった。

「仮にその徐という男が景北港けいほくこうに行ったと判ったらどうするつもりだ？ 金も日数もかなりのものだ。断念するのか？」

孫伶は樊樂だけでなく胡鉄や劉子旦にも顔を向ける。樊樂はまた『何とかなる』くらいの事しか言わないに違いない。殆ど脇士のような存在である二人が『何とかする』のだろうと考えていた。樊樂の言動がいつもいい加減なのは昔から理解している。そして何故か稟施会の仕事はうまくやっている。常に脇に控えている胡鉄、劉子旦が樊樂に度々苦言を呈するのを孫伶も目にしているが、かといって二人の不満が高まってきている様な気配も無かった。要するに、樊樂は『うまくやっている』のである。

胡鉄と劉子旦は黙って樊樂を見ている。

「都に行けば金はいくらでも都合出来る。しかし時間が掛かり過ぎるからなあ……。旦那に確認を取ったほうが良いだろうな。それも時間掛かるけどな。旦那はもう城南に着いた頃だ」

樊樂は腕を組んで少し考えた後、

「返事待つより徐を追った方が早いな。旦那はとりあえず俺に任せ
るって言ってたし、とにかく居るのが何処だろうと追っかけてとっ
捕まえるさ」

「都の稟施会の者も使えるのか？ 徐を見つけたとして俺達四人で
そいつらを相手にするのか？」

「なあに、心配はいらん。ただのごろつき連中だ。お前一人でもど
うって事無いだろ」

「俺か。お前じゃなくて、俺か」

第七章 十九

「孫さん。呉琳さんを待たせているのでは？ そろそろ戻らないと」
胡鉄が言うと、樊樂が目の前の酒杯を勢いよく呷った。これで注文の品はすべて腹の中に収まった。

「俺達も行って大丈夫か？ 会ってみないと分からんか」

「……おそらく大丈夫だとは思う。昨夜あれから琳と随分話してな。お前達の名もちゃんと覚えていた。稟施会が仕事を依頼してきたという事も理解してる。昨日は一時的なものかと思ったが、あいつはもうちゃんと俺がお前達と共に仕事に出ると分かってるんだ。堯家村に行くというのも二人で話し合って決めた」

孫伶は真剣な眼差しだが頬には一切の緊張もなく、昨日とは違う。
(ああ、少しは愁いを払う事が出来たんだな)

樊樂らは孫伶の表情を読み取り自然と緩やかな笑顔となった。

食事を済ませ、早々と僅かな荷物をまとめて宿を出た樊樂らは孫伶と共に再び呉琳の待つ家へと向かった。宿に持ってきていた呉琳が集めたらしい十四本の武器の方が自分達の荷よりかさばっている。
『私が持ちましょう』と劉子旦がまとめて縛り肩に下げた。

朝早くから田畑に出て働く者が多いこの街は、日中は市街地が比較的静かである。まだ朝早い事もあってひんやりとした空気が通りを満たしていた。

孫伶の家の門を入ると、そこに二人の若者が立っていた。随分くたびれた野良着で体を包み、まだ肌寒い中を腕を組んで小刻みに体を動かしていたが、入って来た孫伶を見るなり二人並んで孫伶と正対した。

「お前達……」

若者二人は何か言いたそうにはするものの言葉が出ないといった様子で視線を逸らす。僅かな沈黙の間に、呉琳の声が割って入って

きた。

「ほら、あなた達人入りなさい。あら、怜さん、戻ったのね」

呉琳の装いが旅の装束に変わっている。表情も明るく、樊樂におびえる様に行ってしまった昨日とは全く別人であった。

「あの」

若者の一人が孫怜に向かって言う。

「呉琳さんに聞きました。……仕事、ですか？」

「怜さん、私が呼んできたのよ。他は誰も居なかったけど、この二人はちゃんと待ってたのよ。中々見所があるわ」

「そうか。ありがとう」

孫怜は呉琳に向かって微笑みかけてから、若者の方を向いた。

「……まだ、俺と行くのか？」

「あー、その顔見覚えがあるぞ。名は聞いたことがあったかな？」

孫怜の後ろに居る樊樂が辺りに響く大きな声で割り込む。明らかに酒によって気分が高揚しているらしかった。

「樊さん！」

胡鉄が腕を引っ張って、黙ってくれという様に首を振った。

「比庸ひようです」

「私は、可龍かりゆうといいます」

二人の若者は樊樂に向かって名乗る。どちらも似たような背格好でこれといった特徴も無さそうである。まるでお揃いのぼろの野良着に、他には何も持っていない。覚えるまでは名を取り違えそうだ。

「あの、俺達」

比庸という若者が孫怜に言った。

「ずっと話してたんです。もし、孫さんが何かする時には、俺達も一緒に行こうって」

可龍が続ける。

「三年前の最後の仕事、俺達はあれが最初の仕事でしたから、何も分からなくて……。あの後、先輩の皆さんが、その……幫会はもう終わりだからって……。それで……」

「何言ってるのかよく分からんだろうが。もっとはっきり物を言えよ」

樊樂が再び大声を出す。

「樊さん！ ちょっと黙って！」

胡鉄も負けじと声を張り上げて今度は樊樂の体を自分の後ろへと追いやる。樊樂は口をへの字に曲げて引き下がった。

孫怜は微かに微笑みながら若者二人を眺める。

「何故『終わった』のか聞いてないのか？」

「俺達！ 幫会を裏切る様な真似は絶対しません！ だから孫さんに付いていきます！」

「俺もです！」

比庸と可龍、二人とも同じ様に拳を握り締めて叫んだ。孫怜は幫会を裏切った人間を殺した。それは当然であり、自分達は絶対に裏切らないから関係ない話だ——おそらくそういう事なのだろう。粗末な身なりからしてかなり生活に困窮している様だ。生活を支える術は殆ど尽きかけているに違いなかった。

「確か、お前達は家族が無かったな」

孫怜は三年前の記憶を辿った。当時『孫の幫会』にこの二人が入る事を認めたのは自分である。その時に二人の事は調べてあった。

「はい。だからずっと二人で居ました」

呉琳が若者二人のそばまで来ると、比庸の方に手を置く。

「怜さん。この子達はきつと役に立つわ。二人ともまだ若いから、怜さんと一緒に居ればきつと立派な侠客に育っていく筈よ。後継の若者を鍛える事も考えないとね」

孫怜や樊樂からみればやはり呉琳の感覚はやや飛躍している気がして、何も知らないであろうこの若者二人がどう思うのか？ 説明が必要か？ などと考えてしまうが、その二人は何もおかしく感じてはいないらしく、決意の程を孫怜に見せんとまるで睨み付けるかの様に孫怜を見つめていた。

孫怜は呉琳に向かって大きく頷いてみせた。

「今回は荷の輸送とは違う。お前達にも説明しておかないとな。中へ入ろう」

孫怜が言うと、若者二人はお互いの顔を見やって目を輝かせ、また孫怜に顔を戻して「はい!」と叫んだ。

再び孫怜と樊樂が仕事の内容を説明する。複雑な事は何も無く、比庸、可龍の二人もすんなりと理解出来た。その後、樊樂が一言付け足す。

「洪淑華の遺した秘伝書だっていうんだから、お宝だぞ?」

「何だと?」

ここへきて説明する側である孫怜が驚きの声を上げた。武芸の秘伝書と聞いていただけでそれ以上は孫怜も聞いていなかった。そういった類の書物は真贋を別にすれば珍しくも無いのである。実際、多く出回っているのだ。

「ん?」

「洪淑華か? 東涼の」

「言わなかったか?」

「……それは、真筆か?」

「さあ、どうだろうな。でもよ、洪淑華の武芸ってあまりぱつとしないんだろ? 確かに俺達も餓鬼の頃から名前を知ってる程の江湖のご先輩だ。そんな人が遺した物ってだけで価値があるとは思うんだが、それ以上は――」

「分かっているのはその後の東涼黄龍門がぱつとしない、というだけだ。それでも……喉から手が出る程欲しがらぬ奴は、居るんだ」

孫怜は「絶対だ」という様に真剣な面持ちである。

「ほう、知ってるのか? 洪淑華の秘伝書が是が非でも手に入れたって奴を?」

「確かに誰でも欲しがらって訳ではないだろうが、ある一部の人間にとってはきつと、重要な書物だろうな。真筆ならばな」

孫怜はそう言って暫く宙を見つめて考えている。奥で何かやって

いる呉琳を除き、この場に居る若者二人を含む全員が孫怜の言葉
を黙って待った。

第七章 二十

「例えば、俺だ」

孫怜はそう言うのとニヤリと笑った。

「何だよ。今回の件に関係しそうな奴が、つまり手を出して来そうな奴の名が出るかと思えば……。そりゃあ俺だって見てみたい。読めるんならな」

「もう手は出てる。真武剣派総帥、陸皓だよ。それから、弟の陸豊。まあそっちは積極的に手に入れようとまではしないかもしれない。……いや、わからんな。物が物だけに……」

「陸皓はもう見たってよ。で、劉建和って人に返したんだ。お前の言う様に興味があったんなら全部書き写したか、或いは思っていたより大した事無かったか、だな」

「かもな」

「弟って何だ？ 真武剣を離れた陸豊も関係があるのか？ 何処に居る？」

「さあ、何処かは知らんが、あの兄弟は洪淑華の武芸に縁がある」

樊樂が急に真顔になり、孫怜を見つめる。

「お前、何故そんな事を知ってるんだ？ 真武剣と近い訳でもないだろう？」

孫怜が真武剣派に近いなど、樊樂は今まで一度もそんな気配を感じた事は無かった。真武剣派の総帥が他派の武芸に縁があるとすれば武林に話が広まらない筈が無い。そんな話が広まっていないという事は、それが事実ならば総帥陸皓と陸豊、当人達が秘している事になる。では孫怜はどのようなにしてそれを知ったのか？ それを思えばとても信じられる話ではなかった。

「その二人だけではないからだ。他にも何人か……その内の一人と俺は、俺達は縁があったんだ」

「誰だ？ 俺は知ってるか？」

「いや、昔この呂州に居た人だがお前は知らないだろうな。殷って人だ」

「ふん……知らねえな」

樊樂はそう言いながらも記憶を辿る。昔、此処で孫伶と居た頃にそんな人物は見たことも聞いたことも無かった。

「あとう」

可龍が遠慮がちに口を開いた。

「もしかして、あの殷汪って人の事ですか？」

「ん？ お前、知ってるのか？」

「殷汪だって!？」

孫伶と樊樂の言葉が重なった。樊樂は眼を目一杯見開いて孫伶を見た。

「殷汪って北辰の殷汪か？」

「……亡くなったそうだな」

孫伶は呟いてから、

「可龍、何故知ってる？」

「あの、幼い頃よく父に聞かされました。『咸水の英雄殷汪はこの街の出だ』と。私もずっと憧れてました」

「私も、私も聞きました」

比庸も会話に加わろうと慌てながら可龍の言葉に頷いている。

「何い？ 俺はそんな事聞いたこと無いぞ。本当かそれ」

樊樂は納得がいかない様子で首を捻っている。孫伶がそれを見て笑い出した。

「ハハ、当然だ。殷さんが『英雄』なんて呼ばれる様になるのはお前が此処を出てから後の事だ。お前が城南に行ったのはこの若い二人がまだ赤ん坊くらいの時だな？ その頃、殷さんは咸水に移り住んでそれから後に百槍寨の奴らが村を襲った」

「そうだったのか……」

樊樂はようやく理解し、今度は感心したように頷いている。

「孫さんがあの殷總監とお知り合いだとは……。先程、『俺達』と

仰いましたね？ 殷総監と縁のあったという他の方は……」

劉子旦が尋ねると、

「さすが、樊樂組の軍師どのだ。よく聞いてるな。ハハ」

孫伶は愉快そうに笑ってから樊樂を見る。しかし樊樂は何の事か気付かなかった。

「さあ、怜さん、行きましょう！」

不意に呉琳の声が家中に響き、皆一斉に奥を見ると、呉琳が微笑みながら姿を現した。「こうしている間にも、さらわれた子供達が辛い思いをしているのよ？ 私達で助け出しましょう！ 私達にしか出来ないわ」

呉琳はそう言ってまっすぐ孫伶を見る。最初に反応したのは若い二人だった。二人ともさっと立ち上がり、呉琳に向かって抱拳する。

「呉幫主のご命令だ。行くか」

孫伶が笑いながら言うのと、比庸と可龍の気合いの籠もった返事がすぐさま返ってくる。

「こういうのは苦手なんだがなあ」

樊樂らも笑って立ち上がった。孫伶の家の前に朝陽が差し込み始め、出立には良い頃合である。

「孫さん、話の続きをまた聞かせて下さい」

劉子旦は孫伶と殷汪の関わりに興味があるようで、子供の様に目を輝かせていた。

「古い話だからな。結構忘れてるかもな」

「馬はどうする？ 若いの二人増えたからな。もっと大人数なら二手に分かれるところだが、これだけだ。それにただの人探しじゃないから皆一緒に居た方が良いな」

孫伶が家の裏から一頭の馬を牽いて来たが、此処に居るのはその一頭だけである。

「確か、どちらか馬に乗れたな？」

孫伶は若者二人を交互に見ながら言うと、比庸が進み出た。

「はい。私が乗れます。前も私が可龍を乗せました」

「前って、三年前か？」

樊樂が尋ねると比庸は「はい！」とまた大声で答える。

「お前ら……もっと楽にしろよ。お前らは良いかも知れんがこっちが疲れる」

「はあ」

「若者ってこういうものじゃないの。樊さんもそんな時期があったでしょう？」

呉琳がそう言いながら笑う。樊樂はその姿を思わずじっと見てしまった。

どこから見ても昔と変わらない、あの呉琳だった。昔のように『樊さん』と自分を呼ぶ。そんな当たり前の事がとても貴重な出来事のように思えて胸の奥から嬉しさや楽しさの様な何かが込み上げて来るのを、樊樂は確かに感じた。

「樊さん、馬はうちが用意すればいいよな？ 孫さん、馬を買える処は？」

胡鉄は樊樂に一応尋ねるが形だけの確認で、樊樂の返事を待つ事はなかった。

「ああ、では街を出る前に寄ろう。比庸と可龍はそれまで歩け」

「はい！」

「若いなあ」

樊樂も自分の馬に戻ろうとすると呉琳が呼び止める。

「樊さん。昨日、剣を渡したでしょ？ この子達に渡してあげて」

「おう、子旦。剣だ」

劉子旦が剣の束を肩から下ろしながら、

「お前達、使えるのか？」

「あ、その……振るくらいは……」

「ハハッ！ 『振る』って何だよ」

比庸の小声の返事を耳にした樊樂が仰け反るほど笑う。習ってい

なくても振る事は誰でも出来るに違いない。だが己の身に迫り来る危機に対して手を振るよりはましである。

「可龍、お前は確か家伝の槍法があるとか言っていたな？」

劉子旦が広げた十四本の武器を手にとって眺めている可龍に孫怜が訊く。

「槍？ 槍ならあるはずよ。確か……」

呉琳が自分の集めた武器を覗き込んだ。

「いや、槍は……」

劉子旦が遠慮がちに呉琳に声を掛けるが、呉琳はそれを無視して探す。

「ほら、これよ」

剣よりは長い得物を一本手に取って呉琳は孫怜を振り返った。

「琳……それは――」

「確かに！ そいつは正真正銘、槍だ。怜、見たこと無いのか？

ハハ」

樊樂が孫怜の言葉を遮る様に大声を出した。

第七章 二十一

呉琳が持っているのは確かに短槍なのだが、長さが呉琳の背丈よりも短い。槍には長短あるが長槍といえど大抵大規模な戦いくさにおいて用いられ、少なくとも十五尺程度はあるだろう。短槍と呼ばれる物は十尺程、呉琳の背丈の倍程あってもおかしくは無い。しかし武器というものは使い手によって創意工夫がなされてあらゆる種が存在する。このような極端に短い槍があっても良いわけだが、この長さなら槍の形状ではない方が良いでしょうにも思われた。

「……そうだな。短くて持ち歩くのにも適している。可龍、それを持って行け」

孫怜の言葉に呉琳の表情がぱっと明るくなり、

「さあ、可龍。これはあなたを生かし、仲間を生かし、あなたの俠気の証を立てる為の大切な物よ。肌身離さず大事にするの。いいわね？」

「はい！」

呉琳が大仰にその妙に短い槍を掲げ持つと、可龍は一礼して受け取った。家伝の槍法があっても果たしてそれでその技を使えるのか怪しいが、可龍に文句が無ければそれでいい。呉琳も満足そうに微笑んでいる。何も問題は、無い。

劉子旦が一本の剣を取り上げた。

「じゃあお前は……これが良いな。これは硬剣だ。軟剣だと、とにかく振り回すって言うなら慣れないと扱い難いからな」

「ありがとうございます」

比庸は呉琳から有難く頂戴する事は出来なかったが、劉子旦から受け取るとそれを捧げ持って一礼した。

「あいつら、面白いな」

樊樂がその様子を眺め、胡鉄に笑いながら話し掛ける。

「『礼』ってやつをわきまえてるんでしょ。樊さんには無いけど」

「お前も面白いな」

「……冗談ですよ」

こうして樊樂らは孫伶と呉琳、新たに加わった比庸、可龍を伴って呂州を出る事となった。たった一晚留まっただけであったが胡鉄と劉子旦はちゃんと働いていた。しかしこの街には成果に繋がるものは何も無く、徐の一味とさらわれた子供の影も、秘伝書の類の話も一切無い。ただ、真武剣派の人間が来ていた事だけは知る事が出来た。

このままではこの先も真武剣派の後手に回り続ける事になる、と樊樂も理解している。

「いっその事、奴らが真武剣の手の届き難い、うんと東まで逃げてくれりゃあこっちにも分があるんだが」

「人手が十分にあるならな。しかし時が経てば経つ程、人質が危うい」

樊樂と孫伶が馬を並べて先を進んでいた。孫伶が言葉が続ける。

「その人質の価値がよく分からん。言ったかも知れんが、今も生きているという可能性は……正直なところ、俺は低いと思う」

「怜さん」

孫伶の胸にもたれかかる様にしていた呉琳が顔を上げる。

「何だ？」

「諦めては駄目。私は怜さんがその子達を救い出すと信じてるわ。

だって、その光景が見えるんですもの。怜さんならやれる。きっと」

呉琳の顔をこれほど近くで見るのは随分と久しぶりだと孫伶は思った。呉琳も自分と同じでもう中年だが、今話している呉琳は時折少女の様な雰囲気を漂わせ、孫伶を戸惑わせる。しかし孫伶は徐々にはあるが、今の呉琳の状態は必ずしも悪くは無いのではないかな？　と思いはじめていた。呉琳が言うほど自分が優れた人物だなどとは到底思えなかったが自分を信じ続ける妻はいとおしく、長く燻り続けた自分の体の中から何かしら新たな気のようなものが勃然と沸

き起こって来るのを確かに感じていた。

子供達を救う――。全く知らない子供ではあるが、我ら夫婦が子を救う。ふとそんな言葉が頭に思い浮かんで孫伶は思わず笑みを浮かべた。

「そうだな。やろう」

呂州以北の大地にもようやく春の息吹きが感じられる様になり、柔らかな陽の光が徐々に体を温めていく。街道を進み都に近づけば近づく程、人々の暮らしが活気付いていく様子が手に取る様に分かる。しかしそれはこの国というものがいかに弱っているかを示していた。都周辺から少し出ればそこからは離れば離れるほど、街の活力は薄れ大地までもが荒廃しているのである。

治安は悪化し、人々は生まれ住んだ土地を捨てて移動する。何処へ向かうかといえやはり金陽の都であったり、武慶や緑恒の様な比較的大きく治安の良い街である。孫伶の住んでいた呂州という土地は、武慶などに比べると流浪の民にはあまり魅力を感じられないらしく、他所から来て住み着く者はあまり居なかった。此処まで来たならもう少し辛い旅を何とか持ち堪えて都、金陽へ――と考える。都までもが荒れ果て人が離散する様な事になれば、もうこの国は終わりである。しかしまだその様な気配は無い。外から押し寄せるのは何も難民だけという訳ではなく、玉石混淆ぎよくせきこんこう、清濁併せ呑むせいだくあわといった具合で、とにかく人と物が集中し始めていた。

武慶、緑恒といった、都から離れていても未だ活気を保ち続けている街はそう多くは無いが、幾らか点在している。他の寂れていく土地との違いに思いを巡らせば、まず思い当たるのは――これに尽きると言えなくも無いが――國中に名の知れた組織が存在している事である。武慶なら真武剣派、緑恒なら緑恒千河幫。特に治安維持という点で力を発揮し、武慶は真武剣派が治める街、と言われる程であった。武慶をそこまで言うのは言い過ぎの感があるのだが、『まさしくその通り!』と誰もが膝を打つであろう土地が存在する。

この国の東北の端、景北港である。

太乙北辰教の街である景北港は、教徒三、四万人——正式な組織の構成員としての数だが正式に把握されていない——に加え、準教徒——これは景北港に住まう全ての住民二十数万人——の街で、完全に太乙北辰教が作り上げた街である。そこに『官』の姿は見られない。この景北港は都から遠く離れた地に在って栄え続ける街の中でも例外中の例外であった。

「その徐とやらは何処の生まれだとか、縁の深い土地があるのかとか、まだ分かってないんだな？」

孫伶と樊樂は話し続けている。

「ああ、まだな。全く小物すぎて扱うのが大変だぜ。堂々と都を歩いてても気付かれないかも知れん」

「都は真武剣派があるだろう。武慶に居たんだからその辺は分かってるだろうから近づくかないな。逃げるなら東、そこから北か南かは分からないが、東淵、景北港辺りは都合の良い場所だな」

「一人や二人ならそうだろうが、十数人のごろつきがぞろぞろ歩ける場所でもないだろう？ 特に景北港はな。北辰教徒の警戒が凄くないか？」

「というより、徐が教徒に襲われて秘伝書盗られるかもな、ハハ」

樊樂は笑うが孫伶は真剣な面持ちで徐の行動を推察する。

「秘伝書を売るか……。しかし、高く売れるかな？ 景北港で買い手といえはやはり方崖の連中だろう？ 話を持ちかけた途端に徐が殺されかねん。教徒の中では是非手に入れて方崖に献上したいって奴を探すとしても……。やはり話はすぐに方崖に届くな。『それ奪え！』って事になりそうだ。フツ、徐とやらの身が心配になってきたぞ」

眉を顰めて宙を睨む様であった孫伶が頬を緩めた。

しかし事は相変わず深刻である。可能性が高いと思っていた徐の東への逃亡もかなり危険な道の様で、秘伝書と子供二人を奪っていったからには、当分の間、息災であって貰わねば困る。徐が窮す

れば共に居るであろう子供達に未来は無いのだ。

「もう周の旦那が手を打ってるさ。徐についても分かってくる筈だ。とりあえず都の稟施会と連絡を密にすればこっちにも情報は流れて来る」

樊樂が言うと孫怜は頷いた。樊樂の話から察するに周維はもう城南に戻っている頃である。このまま堯家村へ呉琳を連れて行き、そこから都へ向かえば、着いた頃には都の稟施会に何らかの知らせが入っているかも知れない。

遙か南の端の街ではあるが、恐らく今頃そこから周維は国中を見渡していることだろう——と、孫怜は思った。

第七章 二十二

城南――。

都周辺が春を感じ始める頃には南端の城南ではもうすでに暑さを感じ始める日がある程、氣候が違ふ。南へ向かった周維一行が城南に戻ったのは、樊樂らが呂州を出た丁度その日であった。道中出会った激しい雨は城南のすぐ手前まで追い続けて後によりやく周維らを解放した。

「ほれ、もう旦那様が戻られるでえ、。皆戻れゆうて言え」

「もう戻ってますよう。会の方が知らせてくれたでしようが」

「お疲れだろうで――」

「準備してます」

「……そんならええ。あつ、周漣さん、出て行ったとちゃあうんか？」

「すぐ戻るゆうとんなったで大丈夫だあ」

「……ほうか」

「先に稟施会んとこ行きなるでしようで」

「分かっとなるっちゃ」

劉建和と求持星の二人は城南に来るのは初めてである。噂程度のこととは耳にしていたが、実際に街の色を目にするとつい言葉を発するのを忘れてしまう。

まず街にひしめいている建物の壁や屋根の色が北方の街では見られない赤みがかった黄色を基調とした明るい色ばかり。通りにある商店などの看板も派手な色使いで、漢字に混じって何やら模様のよきな異国の文字も多く使われている。

人は皆一様に褐色の肌を持ち、その中にも明らかに異国の者と見て取れる顔がちらほら見受けられた。周維の様に比較的肌の白い者

も居るには居るが、白い者はみな大抵肌を隠しており、肌自体が見えない事の方が多かった。

「そんなに珍しいですか？」

周維は目を丸くして忙しく首を回している劉建和に声を掛けた。

「いや、何だか落ち着かないな。こうまで今まで見て来た街と景色が違うとな」

「確かに、此処は特殊な街です。きっと劉さんも慣れれば好きになりますよ。暑さ以外はね。ハハ」

周維とその一行は雨を避ける為に身に着けていた笠や道中に調達した粗末な蓑を脱ぎ捨て、城南に吹く風をそれぞれの胸元に導き入れる。陽がある間なら上半身裸でも居られる程の暖かさがあった。

「此処は雨は降ってなかったみたいだな」

洪破人が眩しそうに目を細めて空を見上げた。雨を生みそうな黒雲は見当たらず、真っ青な空に、ところどころ僅かな白の雲が浮いているだけだった。

「早速ですが、劉さん。稟施会にご案内致しますよ。もう徐について何か掴んでいるかも知れません。こちらからも劉さんにお聞きしたい事もあるでしょうから」

「俺達もそんなにゆっくり来た訳でも無いのに、此処にはもう伝わってるのか？ しかもすでに探りに入っていると？」

稟施会がただの商会では無いという事くらいは劉建和も理解しているが、流石にそこまでいくと眉唾物と言わざるを得ない。しかし周維は薄く微笑むだけである。

（ま、わざわざ此処まで来たんだ。俺には全てをこの男に任せるくらいしか出来ないんだ。せいぜい驚かせてもらおうさ）

「近くですよ。洪さんも来てもらえますか？ 石さん達は荷を屋敷に運んで下さい。求さんもお連れして。ああそうそう、石さん、周漣が居たら『求さんは私の大切な友人である』と伝えておいて下さ

い。必ずですよ」

周維はそう念を押すと、

「分かった」

石は洪破人の持つ荷を受け取った。

何層にもなるそびえ立った楼閣に、劉建和は案内された。随分派手で大きな建物に目を奪われたが周維や洪破人は此処が何という建物で、何をする処であるかについては触れない。入ってすぐに上へ向かう階段があったが、周維はその脇を通って一階の奥へと進む。

「旦那様、お帰りなさい」

中に居た者達は周維に気付くと、にっこりと笑いかけながら軽く会釈をする。『旦那様』と呼ぶ割には随分と気安い態度である。周維も微笑み返しながら進む。

正面奥には部屋があった。扉も何も無い、ただ入り口の穴だけを造ったという様な、風通しの良さそうな部屋である。その真ん中には机があり、そこに居た人がこちらに気付いて立ち上がるのが見えた。

「お帰りなさいませ。早うございましたな」

「そうですか？」

此処でもまたその人物と周維が笑顔で言葉を交わした。

「劉さん。こちらは太史奉^{たいしほう}どの。此処の、稟施会の黒幕ですよ」

「旦那様が冗談でそう仰るのは構いませんが、表でその様な話が広まっては困ります。私が本当に黒幕なら、こんな良く見える場所には居ませんよ」

「まあとにかく、うちでは偉い人——という事です。太史さん。こちらが武慶の劉建和なのです」

「よく此処までお越し下されましたな。城南は劉どのを歓迎致します」

（城南が、か？　そう言えるということは確かに偉い人だろうな）

劉建和は思ったが無論口には出さない。

「劉と申します。武慶で――」

「劉さん、この太史さんは物知りなんですよ。それはもう凄まじく。ですから劉さんの事も既にご存知です」

周維が言うので劉建和は口を噤んで太史奉を見た。太史奉は『物知りである』という周維の言葉を否定するつもりは無いらしく、微かな笑みをこちらに向けていた。

太史奉は歳は六十前後、細い顔にあご髭、深緑の地味な着物で体を包み落ち着いた雰囲気の男である。勝手な想像ではあるが、若い周維を補佐して稟施会を取り回す経験豊かな者――、劉建和にはそう見えていた。

「旦那様。もうお屋敷には戻られたのですか？　旦那様はともかく劉どのはお疲れでございましょう？　一先ずお戻りなさいませ。私も劉どのにご報告する内容をまとめておきますゆえ」

太史奉の話し方はどこか相手に有無を言わせないといった感じである。相手が周維であろうと関係ないらしく、周維に向かってそんな風に言える人物が居るということは劉建和には意外だった。

「ハハ、着いて早々に新たな情報を劉さんの耳に入れて稟施会の凄さをお伝えしたかったんですがねえ」

周維は声を上げて笑い、ちらっと劉建和を見た。

「こんなすぐに分かる事なんて、そうは無い――」

「いえ、ありますよ。ただ多くあり過ぎて整理しなければ役に立ちませんので」

劉建和の言葉を太史奉は遮って『我々は情報を掴んでいる』と主張する。

（ま、ちゃんと聞かせてくれるなら何も言う事は無い）

「劉さん。稟施会は『もう少し待て』、だそうです。太史さんには逆らえませんので、私の屋敷に行きましようか」

周維の言葉に劉建和は頷く。全くの無駄足で一氣に疲れを感じた

劉建和であるが、周維との付き合いとはこんなものなのだろうと思
い始めているところだった。

太史奉が洪破人を呼び止めて『残ってくれ』と言ったので、先に
周維と劉建和だけ出る事になった。

「劉さん」

歩いていた周維が不意に呼びかけたので劉建和は首を横に向けて
周維を見た。周維はまっすぐ前を向いて歩きながら、口を開いた。

「今、この城南は面白いですよ。特に人がね。その気になれば此処
から世の中を動かしていけないか？　と思う程です。ま、
私だけかも知れませんが。今、劉さんは人生の中でも一番大変な時
ですが、そんな時こそ人との繋がりです。私はあなたとの出会いを
蔑ろにはしません。絶対に。今此処には色んな人が集まって来てい
ます。多くの出会いを我々の力に出来る筈です」

周維は言ってから劉建和に目を向けてにやりと笑った。

「わざわざ此処まで来て頂いたんです。劉さんに後悔させる訳には
いきませんからね。フフ」

劉建和はただ愛想良く笑い返すくらいしか出来なかった。

周維が何を考え、何をしようと思っているのかは分からない。道
中襲ってきた求持星までも連れて来るような人物である。相当変わ
った来歴の人物が周維の周りに居てもおかしくなかった。そういう
意味では自分もまた、新たに加わった訳ありの客人というわけであ
る。

（武慶で燻ってても何も変わらん。此処まで来たんだ。何か変わる
さ。きつと）

再び表に出た二人は陽の光を浴びながら目を細め、賑やかな人通
りをほんの少し眺めてから、周維の屋敷へと向かった。

第八章 一

数年前まで人の手が入っていなかった荒野が徐々に切り開かれて、耕された黒い大地が遠く南に見える山の麓にまで続いている。

この国の最南端。山を越えればそこは異国の地である。かつてこの城南じょうなんの地がこの国に併呑された際、朝廷はちっぽけな集落とそれを取り囲む広大な荒地であったこの土地の開発に力を注いだ。

しかし新たな国境の街となる城南に砦が設けられる事は無く、朝廷はこの城南の地を他国との緩衝とした。これは異例の事であるが、城南はその名の如く永く国境であった以前の城壁の南、つまり外にあり、しかも当時はこの土地を手に入れる事による益は殆ど無いと考えられており国境の城壁を移す計画も無く、当初は軍を駐留させてはいたがそれに掛かる費用を抑える為にその大部分を撤退させ、城南の街づくりの計画を変更する事となったのである。

交易の地。城壁の無い交流の地。そう位置付けて街を内外に開放する。これを聞いた人々は皆、「そこは『我が国の領土』なのか？」と首をかしげた。しかし朝廷は方針を変える事無く、僅かな軍と一つの組織を配置して街づくりを推し進める。その組織りというのが稟施会らんしかいであった。

稟施会ちゅうげんという組織はこの時に作られた訳ではなく、かつては中原に本拠を置いていた交易商の団体であったのだが、朝廷の命により城南に移された。しかしこれは表向きの事で、城南の地に於いて主たる交易と城南の統治に関わる権限を広く与えるという条件付きの誘致であった。この事を知る僅かな者達の間では、「朝廷は城南をまともに治める気など無いのだ」と噂されている。少しの軍と商売人に任せて土地を守る筈も無い、という訳である。

ではいずれ攻め取られるか？ といえばそれも考え難い。何しろ今まで誰も手を付けなかった土地なのだ。しかも未だ街として完成していない鄙ひなびた集落となればそこを奪い合って戦を起こすなど、

まさに不毛である。

一方、「中々うまく考えたな」と唸る者達も居る。稟施会が城南を新たな拠点と定めて以降、急激に集落は拡大し、あつという間に交易の為の街が作り上げられたのである。土地の開発は勿論の事、異国との取引の仕組み等も稟施会が全てを作り上げて運用を開始した。絶大な権利と国の入り口となる土地まで与えられたのだから稟施会の様に力があつて貪欲な者達にとっては絶好の商機であった。朝廷は殆ど動いていない。稟施会が朝廷の庇護の下で活動を行っているという名目さえ保たれていればそれで良かった。

稟施会は『窓口』ではなく国交の場そのものとなり、城南のほぼ全てを取り仕切る。軍と中央から派遣されている城南の長官は目付け役に回っているが、しかしそれすらも表向きの事であつて、中原から遠く離れた辺境の地に赴任させられる者は大抵中央への忠誠心も薄れるというもので、まさしく傀儡かいらいである。

「交易を牛耳っている組織」

と、城南を訪れた事も無かった武慶の商人、劉建和りゅうけんわの言は当を得ていたが、牛耳っているのは交易だけではなかった。

稟施会が荒れた土地を開墾して農業に力を入れ始めたのはごく最近である。他国との交易の為の準備は随分早くに整いそれに伴って街は拡大したが、周辺の広大な荒地の用途は長く決まっておらず、数年前、稟施会はようやくその荒れた土地に手を付け始めた。その主たる動機は、各種作物の新たな取引手法の開発である。

農業ほど人々の生活に密着し最も重要な産業は無い。有史以来、知恵と技が新たに生まれ、人々を生かし続ける。城南の残った土地をこの国で最高の農地とする計画を稟施会が公表すると、それが可能かどうかはともかくとして人々は諸手を上げて賛同した。広大な土地を開墾するとなれば人手が要る。商いに必要な知識を持たない者でも仕事にありつけるのだ。

稟施会は城南で人夫を集めるだけでなく、国中から農業に関する

経験と技能を持った人材を集めた。ひとえに農業といってもあらゆる分野があり、何よりそれぞれに関する豊かな経験が重要となる。

稟施会がやることである。利を最大限に引き出す努力を惜しむ事は無かった。

市街から西の丘陵地帯には未だ手の届いていない林が広がっていた。林といっても殆どの木が枯れ、或いはすでに朽ち倒れて人の背に届こうかという茂みに埋もれている様な場所である。その周辺は開墾が進んでおり、ようやくその林に取り掛かれそうなところまで来ていた。しかしこうした場所は何箇所も在り此処だけに人を集中させて作業出来る訳ではない。まるで敵と対峙しながらをじわりじわりと陣を前進させていく様な、根気と忍耐力を必要とする作業だった。

「王^{おう}さん、こんな早よ切り上げてええんか？　こんな明るい内に帰ったらかみさんに『さぼったんか？』言われるちゃあうか」

「丁度区切りだでなあ。明日から中行くで今夜はゆっくり休んどきにゃあな」

西の林へと続く道の傍らで鍬を担いだ中年の男が喋っているが、遠くからは相手の姿は見えない。道より随分低い位置にある用水路の中に老人が居て鍬や鋤といった道具を洗っていた。

「久しぶりに明るい内に酒が飲めるわ。ありゃあええ気分だで」

「ハハ、お前赤い顔して帰ったら益々かみさんに疑われるで。飲みすぎたら明日大変だで程々にせえよ」

「ああ。そうする。じゃ、王さんお先」

「ああ」

もう随分陽は傾いているのだが十分に明るい。普段は暗くなってから仕事を終えるのだろう。家に帰るのか、それとも街の酒場へ向かうのか分からないが、鼻歌まじりで帰っていく男の足取りは軽かった。

王老人は黙々と道具を洗い続ける。綺麗になった物から上げてい

き、各種道具がまるで展示品の様に道に並んでいく。最後に鎌が一番端に加えられ、王老人はようやく用水路から這い上がった。

道で腰を伸ばしながら王老人が眩しそうに目を細め、そして微笑んだ。一人の女が赤い陽を浴びて長い髪をたなびかせながら静かに歩いて来る。女は音も無く王老人に近づくと首を小さく傾けて会釈した。長い睫は伏せられ、まるで目を閉じている様にも見える。若いがおそらく三十は過ぎているであろう落ち着いた雰囲気の年恰好の腰の前で両の手を組みその場でじっとしたままの女はまるで人形の様で、全く変化しない表情に初めて会う者は奇妙な女と訝しむだろう。この女だけが周りとは別の、時の中に佇んでいる。

「もう、周の旦那は帰ってきなかったか？」

初めて会う訳ではない王老人はそう親しげに女に声を掛けた。

「どうでしょうか。まだ私はお屋敷に戻っておりませんので」

極めて小さく動いた唇から丸い玉の様な声が放り投げられ、王老人に届けられる。王老人はうんうんと大きく頷いた。

「まあまた寄らせてもらうわあ。」

女は黙って小首を傾げ、僅かに口の両端を引く。きっと、微笑んだに違いなかった。

第八章 二

女は再び王老人に向かって僅かに頭を下げると西の林の方へと再び歩き出した。この道の先は暫く林の脇を通ってから山へと登っていく。女で、しかももう夕暮れが近い今頃からこの道の先に用があるとは考え難い。王老人は思い出した様に女の背中に向かって言う。「下の滝しもだろうで。天佑だろう？」

女はゆっくりと振り返り、また小首を傾げる。やはり瞳は見えない。口は——確かに、僅かに微笑んでいた。

西の林に向かって暫く進むと水の音が聞こえ始めて徐々に大きくなる。柔らかなせせらぎの音ではなく、大量の水が落ちて岩を打ちつける激しい音だった。女は王老人に出会った道から、林の中へと続く細い獣道ひしに入って行く。長い裳の裾を気にするように腿の辺りを押さえながら人氣ひとけの無い林を進むと、やがて林の奥の方で滝が作り出す白い霧が立ち木の隙間から漏れているのが見えてきた。

女はそちらへと真っ直ぐ向かうが、滝から二十間ばかり離れた位置で足を止めた。女は顔を上げ、滝の方を向いている。女の目は薄く開いているがやはり何を映しているかまで知る事は出来ない。ただ、滝の方を見ているのは確かである。

女の頬が僅かに動く。再び微かな笑み。滝の下の辺りに一人の男が居るのを見つけた。女はそのまま暫くその後姿を見ていた。その男は裸で、滝に打たれている訳ではないが落ちてくる水を汲んで体を洗っている。引き締まったその肉体が濡れて光っていた。

女は再び歩き出し、やや俯いて目を伏せながら真っ直ぐ滝へと近づいた。土で汚れた古い野良着が滝つぼの際にある小さな岩に掛かっている。岩の上に放り投げただけなのか地面に落ちかかっており、女は傍まで来ると腰を屈めてそれを拾い上げ、埃を払うような仕草で撫でると両手で抱え持ってその場に佇む。その時、男が女の方に

振り返った。

男は何も身に着けていない。腰に手を当てて女をじっと見るが、女も相変わらず表情も変えずにじっとしている。女はただ待っているといった感じで何も言わないので、男はまた滝の方を向いて落ちてくる水を頭からかぶった。

やがて男は再び振り返って、ざぶざぶと音を立てて水の中を歩きながら女の方へ戻ってきた。その間も女は微動だにせずに待っていた。

「何かあったか？」

そう言いながら男は水から上がると女の腕の中にあつた服を掴み取り埃を落とすように二、三回振り、それを濡れた体に当てる。せっかく洗った体を汚れた野良着で拭くのでまた体を汚す事になりそうなものだが男は全く気にしていない様子であつた。

「いえ、特には」

女はただ、そう答える。

近くで見る男の体は鍛えられた筋肉で張りがあつて無駄なぜい肉は何処にも無く、少し日に焼けた皮膚が光を帯びている。女と殆ど変わらない歳の様で、二人で居ると夫婦の様に見えなくも無い。男が服を身に着けるのを待っている女は黙ったままで、従順な妻の姿を連想させる。

「じゃあ、何だ？ 俺の水浴びを見に来ただけか？」

「それだけでも十分な価値があります」

男も女も、真顔でそんなやり取りを交わす。男は服を身に付け終わると、傍に置いてあつた鍬を手に取った。

「今日はもう仕舞いだ。帰る」

「はい。結構でございます」

女が顔を上げて男の顔を見上げる。女の目は確かに開かれ、その双眸にははつきりと男の顔が映っていた。

二人が林を出てから向かったのは周維しゅういの屋敷で、着いたのは陽が

もうじき西の山の稜線に触れるという頃だった。

「あ、夏さん。今日は早いね。旦那様がもう帰って来なったで。周漣さんが呼びに行ったんか？」

屋敷に長く仕える老夫婦、葛林と李施が隅にある納屋に居るところへ、滝で水浴びをしていた男、夏天佑が鍬を置きに来た。夏天佑はこの屋敷に周維の客として滞在しているがまだ一年は経っていない。滝から一緒に戻った女は周漣といい、屋敷の主人である周維が何処からか連れて来た者で夏天佑と同じく客なのだが、何故かこの屋敷の女中の様に振舞っていた。周漣がこの城南に来たのは夏天佑よりもふた月ばかり後であった。

納屋の前で葛林と夏天佑が言葉を交わす。

「……明日から西の林に入るんだ。『やっ』って感じた」

「おお、もうそこまで進んだんか。いやああんたもよう働くなあ。

最初にその鍬担いで出てったゆうて聞いた時、ほんまに出来るんか思ったで」

「もう何度も言ったと思うが俺は元々百姓の倅だ。さすがに開墾やらやるのは初めてだったが。王さんが居なけりや遣り方も分からん」

「王さんは何でも知っとんなるでなあ。若い頃から国中を廻って、この――」

葛林は二度、地面を踏み鳴らす。

「大地を学んだゆうてなあ。ほんま、凄いわ」

「そうだな」

夏天佑が鍬を持って納屋の中へ入ると、葛林の妻、李施が中の棚を漁る様に手当たり次第引っ張り出していた。

「何してるんだ？」

「旦那様がまたお客人を二人も連れて来てなああ。部屋はあっても何も置いてへんさかい」

李施はそれだけ言うともた棚の奥を覗き込む事に夢中になっている。

「おい、もうえかろうが。とりあえずはあれで足りるっちゃ」

「ほうだねえ。とりあえずあれでええか」

「あつ！ おみやあ酒用意したんか？」

「そんなん昨日周漣さんがちゃあんとやっとななるわな」

「ほうか。ほんならええ」

夏天佑が納屋の隅に鍬を置いて出ようとする、葛林が袖を掴んで引いた。

「周漣さんがあんた呼びに行つたんか？」

「呼びに来たのかどうかは知らんな。俺の所に来たのは確かだ」

「ほうか。周漣さん、あんたの事よう氣に掛けとるでな。多分あれ、あんたを――」

「葛さん。恐ろしい事は言ってくれるなよ。あれほど得体の知れん女は他に知らん」

夏天佑は笑みを浮かべながらも葛林の言葉を即座にあしらい、背を向けて歩き出した。

その夜、周維は屋敷の者全てを集めて宴席を開く事にした。宴席といつてもまだ屋敷に戻ったばかりで家人もその支度を整えて待っていた訳でもなく、広間に皆集まって食事をしようという事だった。新たに連れて来た劉建和と求持星を皆に紹介する為でもある。

「ん？ 夏さんはもう戻っているのかな？」

周維が食事の準備をしている下女の一人に声を掛けた。

「はい。夕刻に戻られましたので、今はお部屋に居られるかと。お呼びしてきましようか？」

「……いや、私が行きます。此処の準備が出来たら皆さんをお連れしてください。洪さん達も呼ぶんですよ」

「かしこまりました」

周維は一人、広間を出て行った。

第八章 三

部屋の扉は開け放たれていた。この日は風も殆ど無く陽の落ちた後でも特に寒くなるという事は無い。しんと静まり返った部屋の奥には寝台があり、中を覗くと夏天佑が仰向けに横たわっていた。

周維は笑みを浮かべて部屋の前に佇む。声を掛けるでもなく、そこで夏天佑が起きるまで待つかの様に立つ。

「何か用か？」

待ったという程でも無い。周維が部屋の前に立ったほんの僅か後に、夏天佑が体を横たえたまま声を発した。目は閉じたままであった。

「そうですね。久しぶりに帰って来たので挨拶を」

周維はにこやかな表情を浮かべて言う。まるで周維の方が客の様だ。

「お疲れですか？」

「丁度良い位だな。適度に充実してる」

夏天佑は目を開けて、ゆっくりと上体を起こして寝台の横に足を下ろした。真っ直ぐに周維を見るその顔は寝起きの様には見えない。

「早かったな」

「そうですね？ 結構ゆっくりしてきたつもりですが。武慶にも寄りましたから」

「ほう。何かあったか？」

「ありました。また後でじっくりお話しますよ。それから――実は会って頂きたい方をお二方お連れしたんですが」

「……俺にか？」

夏天佑はじっと周維を見つめる。周維は穏やかな表情のまま見つめ返し、言葉を続けた。

「今晚は広間で皆一緒に食事しましょう。その時にご紹介します。それから、夏さんにはお土産もありますから」

「土産？」

「喜んで頂けるかは正直、私も不安ですがきつと懐かしい物ですよ」
「そうか」

夏天佑は微かに笑うと再び寝台に仰向けになった。

「もう支度も出来ると思いますから、広間に来て下さい」

「ああ。格好はこのままで良いか？」

夏天佑は外で着ていた汚れた野良着を着替えていたが、今の服は『汚れていない野良着』である。

「ハハ、全く構いません。集まるのはうちの者だけです。では夏さん、お願いしますね」

「分かった」

夏天佑は寝台の上でじっとしたままだったが、周維は一瞥の後に部屋を離れた。夏天佑は睡眠をとろうとしている訳ではないという事を周維は知っていた。

周維が再び広間に戻ると既に劉建和も求持星も呼ばれて席に着いており、洪破人らも広間にやって来たところだった。

「おい、あんた、どうかしたか？」

入って来たばかりの洪破人が怪訝な表情を求持星に向けた。その言葉を聞いた周りの者も一斉に求持星を見る。

「求さん？ あんたどこか具合でも悪いのか？」

隣に居る劉建和が求持星の顔を覗き込んだ。

求持星は額に汗を滲ませ、しきりに唾を飲み込みながら運ばれてきたばかりの料理を見つめている。一見、料理を前にしながら必死に空腹に耐えている様にも見えるが、視線は忙しく泳ぎ続けながらもまるで体を縛られているかの様に硬直させる求持星は明らかにおかしかった。

周維がそっと求持星の傍に寄り、耳打ちをする。

「求さん。心配は要りませんよ。何も」

「おっ、俺を、どうする……つもりだ」

求持星は乾ききった喉から声を絞り出した。

「お部屋でお休み頂いた方が宜しいのでは？ 私がお連れ致します」
求持星の正面に座っていた女が立ち上がり周維に向かって言うと、
求持星は勢い良く顔を上げて女を凝視した。その女は周漣であった。
「ん……そうですね……」

そこへ、夏天佑が入って来た。広間に集まっている者達をさっと
見回し、周維の方へ歩いてくる。

「随分賑やかになるもんだな」

「夏天佑様、こちらへ」

周漣が声を掛け隣に来るよう促すと、夏天佑はそちらへ向かう。

「あっ！ 夏天佑？ あんた……夏……」

求持星はついに立ち上がり、震える腕を夏天佑の方へ向けて持ち
上げた。周りの者は皆怪訝そうに求持星と夏天佑を交互に見ている。
「ん？ 私をご存知か？」

一瞬、鋭い視線を求持星に向けた夏天佑であったが、すぐに口元
に笑みを浮かべて周漣の隣の席に腰を下ろした。

周維が夏天佑に向かって言う。

「この方は求持星さんと仰る方で、武慶からこちらに戻る道中でお
会いしましてねえ。此処まで一緒にさせて頂きました」

夏天佑は黙って頷いた。求持星というこの男に見覚えは無い。

「求さん。お部屋へ参りましょうか」

不意に周漣が求持星に声を掛ける。すると、

「いや、だっ大丈夫……このまま……此処で」

求持星はすぐさま椅子を掴んで座る。『部屋には戻りたくない』
と拒んでいる様に見える。或いは周漣を、拒むのか――。

求持星は黙ってまた体を硬直させており傍目にはとても普通には
見えなかったが、周維はそれを放って劉建和を夏天佑に紹介した。
「そうか、真武剣の四十周年か……。あれからもうそんなになるん

だな」

劉建和は明らかに自分より若く見える目の前の男が四十年前を懐かしむような事を言い違和感を覚えた。四十年前といえば自分ですらまだ赤子である。

「俺は夏天佑。呂州の生まれでね。方々をうろついて今は此処で面倒を見てもらっている」

そう話す夏天佑に、求持星がちらと目を遣りすぐに戻す。この時夏天佑は一切、求持星を見ていなかったが、隣の周漣は違った。瞳は相変わらず伏せた睫に隠れて見えない。しかし俯いてじっとしている求持星の様子を窺っていた。

求持星の様子がおかしくなったのは明らかに自分の姿を見たからに違いない。その後、夏天佑を見て驚いていたのは我々二人を知っている？ この求という男は何者なのか？ どうやら求持星は恐れの戦っている様だが、我々に何かされると考えているのか？ 何を？

周漣は求持星を観察し続ける。

「さて、遙々都まで同行して頂いた皆さんも、留守を預かって下さった皆さんもご苦労様でした。稟施会の蘇と風が問題を起こし、皆さんを危険な目に合わせたと聞きました。本当に申し訳ない」

周維は急に真剣な表情になり、集まった皆に向かって言う。一瞬、広間は静まり返ったが、すぐに葛林の声が沈黙を破る。

「どうってことあらへんっちゃ。あんな周漣さんがあつという間に片付けたでなあ。気にする事あらへん」

「あんたは慌てとるだけだったあろうが。黙ったときにゃあ。恥ずかしい」

横に居る李施が葛林の袖を引っ張り、それと同時に今度は一斉に笑い声が響いた。

第八章 四

「特別な物は何もありませんが、酒は周漣さんがたっぷり用意してくれたので皆さん今夜は大いに飲んで下さい」

「ああ。よばれようで」

葛林夫婦をはじめ屋敷に仕える者達、洪破人ら用心棒達も皆それぞれ酒を注ぎ、食事に取り掛かり始める。特に酒を飲まない者を決めておくといった事は無い。用心棒達はちゃんと自分の加減というものを知っていて、一応、杯は酌み交わすが口を付けるのはほんの少しだけであった。

周維が洪破人の許へ行き、

「洪さん。持ってきてくれましたか？」

「ああ、これだ」

洪破人は布に包まれた棒状の物を手に立ち上がって、それを周維に手渡す。都から持ち帰った荷の中にあった内の一つである。周維は受け取って夏天佑の横の自分の席へと戻った。

「夏さん。これが都の土産です。なかなか値が張りましたよ。ハハ」

夏天佑は椅子の背にもたれ、周維とその手にある土産とやらを眺める。

「それが……倚天剣か？」

そう訊いたのは劉建和だった。その存在を知る者なら是非見たい品である。ましてやそういった類の珍品、骨董を扱う商人なら尚更で、劉建和は身を乗り出して物を覆った布を見透かさんとばかりに凝視している。

「ハハ、劉さん。種明かしが早すぎますよ。もっと勿体ぶってお披露目したかったんですがねえ」

「ああ、……すまん」

劉建和は後頭部を撫でながら身を縮める。隣の求持星はといえば

いつの間にか顔を上げ、倚天剣が姿を現すのをじっと待っている。ずっと追いかけてきた物が目の前にあると聞いてさすがに他の事は頭の隅に追いやられてしまった様だ。そんな姿も——周漣は観察し続けている。

「倚天剣？」

夏天佑は眉を顰めて周漣を見た。

「倚天剣です。都で売りに出されました」

周漣がゆっくりと布を捲り取り自らの肩に掛けると、手には銀の装飾が光を放つ鞘に納まった剣が残された。

朱色の鞘を銀の細かな細工が覆い、柄の先端から剣の全長と同じくらいはあるかという真っ赤な紐が下がっていて芝居で用いられる様な派手な造りである。

「これが……」

求持星が半ば呆然と見つめている。

「そうです。求さん。これが倚天剣です」

周漣は求持星を見て笑みを浮かべ、しばらく求持星の顔を眺めていた。

「誰が持ってたんだ？」

夏天佑が訊く。

「分かっているのは景北港^{けいほくこう}方崖^{ほうがい}から、ある女が持ち出したとの事です。その女はどうやら方崖から逃げた様ですね」

「『殷汪』は方崖を出る時、そいつを忘れていったという訳だな」

夏天佑はそう呟く様に言うと言腕を組み、思案顔を天井に向けた。

「そんな芝居……もう意味が無い」

求持星の搾り出す様な声が聞こえ、それと同時に周漣がすつと立ち上がる。しかし求持星は夏天佑から視線を外さなかった。夏天佑は少しばかり目を見開き驚いたような表情で求持星を眺め、この男はいきなり何を言い出したのかと不思議そうにしている。

時折、笑い声が響く。葛林や用心棒達が何やら賑やかに話しており、周維らの会話は聞こえていない。周維をはじめその周りに居る夏天佑、周漣、劉建和は黙って求持星の次の言葉を待っていた。

「あんたの言った意味が分かった」

求持星は周維に顔を向ける。ぼんやりとした、力の抜けた視線だった。

「戻るか、此处に来るか――。劉毅様か、殷総監か……」

「あなたは、『何』ですか？」

不意に周漣が求持星に訊いた。腰の前で手を組みやや俯いた控えめな印象の立ち姿。だがその物静かな佇まいが求持星の体を振るわせた。

「あ、あなたこそ、何故此処に居る？ 何故殷総監と共に居るんだ？ 周……婉漣」

「任務の内容をあなたに聞かせる事はありません。劉毅と言いましたね。殷総監が死んだと方崖に報告したのは劉毅ですよ？ あなたは劉毅の部下、九宝寨の人間ですか？」

「……今はもう……違う」

「申し訳ないが」

周維の声が二人の間に割って入る。

「その話は後で改めてして下さいませんか？ 今は劉さんも居られるのですから。劉さん、何が何やらさっぱりでしょう？」

「あ、ああ……」

劉建和はたった今我に返ったという感じで小刻みに頷いて見せた。確かに何の事を言っているのかは分からなかったが、出て来る名は全て劉建和も知っている。求持星が急に挙動不審に陥ったのも理解し始めていた。目の前の二人、夏天佑と周漣の正体は、北辰の総監であった『不敗剣』殷汪と北辰教主直属の部下である『七星』が一人、周婉漣だという。もしそれが本当なら全く縁の無い自分にとっても驚愕に値する事である。

商いの為に行く先々で聞いた伝聞が本当ならばまず間違はなくこ

の二人は武林の実力者であり、こんな近くで顔を見る事などまず在り得ない。それともう一つはその武林の大物がこんな辺境に居て、しかも野良着を纏った青年――。周婉漣にしても一見、慎ましやかな淑女である。北辰の七星といえば北辰の前教主、陶峯に付き従う冷酷無比な暗殺者集団の様に囁かれていたが、全く雰囲気が想像と違う。それらが益々劉建和の頭を混乱させた。

「とりあえず、求さん。私にあなたをどうしようという気は無い事を分かって頂けたでしょう？　こちらのお二人はあなたを知らなかったのですから。言った筈です。『戻るより悪い事にはならない』と」

周維が言うと、

「この者が何をしに来たか――それによってどうするかを決めます」周漣の冷ややかな声が辺りに染み渡るように広がった。

「まあまあ、周漣さん。また改めて話しましょう」

「何の話をしてるんだ？　さっぱり分からん」

夏天佑が卓上に肘を着いて目の前の料理を突付きながら言った。

「あんたが此処に来たのは劉毅の命令なのか？　奴は何をしたいんだろうな？」

夏天佑のこの発言は、自分が殷汪であると認めるも同然である。その名を耳にした事があるといったものではなく、間違いなく、劉毅を知っている。

第八章 五

周維が剣を夏天佑の目の前に差出し、

「どうぞ」

夏天佑の顔を覗き込むようにして見ている。とにかくその話を止めさせようという訳で、そのままの姿勢で夏天佑が剣を取るのを待っていた。

「懐かしいな」

夏天佑は剣を持つと椅子の背にもたれて剣を持ち上げ、じっと鞆の装飾を眺めている。

「抜いて見ないのですか？」

周維の言葉に、

「これはこの装飾に価値があるんだろう？ 此処に飾っておいたらどうだ？」

夏天佑はそう言って卓上に置くとまた椅子にもたれてぼんやりと眺める。

「確かに豪華な造りですし、古代の王が作らせた名剣というだけで高値が付きますが、これの真の価値はそんなものでは無いと思いますねえ。これを『剣』として使う事の出来る人間に価値がある、と私は思うんですが。あ、劉さんにお見せしても良いですか？」

「ああ」

周維は再び剣を取ると、今度は劉建和に差し出した。劉建和は受け取る前から目を皿にして見入っていた。

「手に取って見て頂いて結構ですよ」

「……」

劉建和が夏天佑にお伺いを立てる様に視線を送ると、夏天佑は体を起こして組んだ腕を卓上に乗せる。ニヤツと笑って頷いた。

劉建和は無言のまま鞆の装飾を見る角度を変えながら値踏みするかの様に考え込む。きっとこれが劉建和の仕事をする顔なのだろう。

「ハハッ、どうして誰も抜かないんです？」

周維は劉建和の動作を暫く眺めてから笑い出した。劉建和は一向に柄を握ろうとはしない。

「いや、ハハ……俺は正直なところ剣はよく分からなくてね」

そう言つて周維に返そうとする。

「求さんは……どうです？ わざわざ追いかけてこられた訳だから、一度ご覧になっては？」

周維の言葉に、求持星はゆっくりと顔を上げる。隣で劉建和が倚天剣を眺めている間、一度も視線を上げずに俯いていた。

「いや……いい」

掠れた声。視線は倚天剣から逸れている。

「……話させてくれないか。大した話じゃない。だがもう話してすつきりしたいんだ。そして周……漣、さんに『どうするか』決めて貰いたい」

「言っておきます」

殆ど間を置かずに周漣が口を開く。

「無駄な話は要りません。あなたが夏天佑様の敵か否か。それだけで判断します」

口以外は全く動かない。まるで空気の振動を察知して気配を掴む盲目の使い手――。

「俺はどっちでも構わんが」

夏天佑はそう言つて求持星を見つめた。

暫く沈黙があつて後に、求持星が話し出す。

「今の俺は多分、殷総監の敵でも味方でもない、と思う」

「では、去りなさい」

即座に周漣が言う。すると夏天佑が隣に立っている周漣を見上げた。

「お前は黙れ。そろそろお前が去ったらどうだ？」

無表情で視線を投げる夏天佑は不機嫌そうな声を出す。

周漣の表情は変わらないが一瞬、肩がぴくりと動く。ほんの少し間があり、それから周漣は黙って椅子に腰を下ろした。

「俺は倚天剣を――」

「待てよ。まだよく聞いてなかったが、あんたは九宝寨で、劉毅の手下？ 周維、……客なのか？」

求持星の言葉を遮った夏天佑は周維へと視線を移し、

「つまり、俺を探しに来た北辰の者なのだろう？ これと、同じ――」

首をまわして周漣を見る。周漣は変わらず前を向きやや俯いたままじっとしていた。

「何故そんな客ばかりなんだろうな？」

「ハハ、私が探してお連れしている訳ではありませんよ？ 偶然ですねえ。ほら、劉さんは北辰教とは無縁の方ですよ」

にこやかな表情で愛想を振りまく周維を夏天佑は頬杖について眺めた。

求持星は夏天佑に向けた目に力を込める。

「劉毅様に、『倚天剣を追え』と命じられた。都で見つかり、稟施会が買ったという事も劉毅様から聞いていた」

「うーん、『私』が買ったんですがねえ」

周維はそう言って肩を竦めるが、誰もその様子は見ていなかった。結局、求持星の話を遮る事は出来ない様だ。

「それと、倚天剣の行く先に、『殷汪』若しくは『夏天佑』という人物が居るかも知れない。その辺りを探っておけという事だった」

「何故、俺の名を劉毅が知っている？」

夏天佑は眉を顰めて求持星を見返した。

「それは聞いていない。どっちにしろ殷総監の搜索だろうと俺は思った。夏天佑という人物は殷総監と何らかの関係を持つ者の筈。劉毅様は『殷汪』か『夏天佑』が居る――と言ったんだ。北辰では、いや、今江湖では殷総監は死んだとされているが、劉毅様はそうは思っていない。劉毅様の考えは当たっていたという訳だな。『夏天

佑』が居たんだからな。しかもそれが……あんたが、殷総監だったなんて……」

「あなたは――」

周漣の少し小さくなった声が聞こえる。周漣は声を発して何かの様子を窺うように間を空け、続けた。

「本当に北辰の者ですか？ 夏天佑様を殷総監であると知った上でそのような口がきけるとは思えません」

確かに北辰教徒で殷汪をあんた呼ばわりする人間は居ない。命が無いからである。一教徒が本人に直接言う機会はず先が無いが、何処で誰に言ったとしても相手が北辰の縁者であればまず無事では居られなかった。

周維達の前に姿を現した時、教主陶光を呼び捨てにした周維に対して何の反応を示さなかった事からも求持星が北辰教の者なのかどうか疑わしい。

「何言ってるんだ？ 俺は方崖で人を切って逃げたそうだが、すでに俺は反逆者といったところだろう。総監でもなんでもない。お前だって俺を捕まえにわざわざ来たんだろう？」

夏天佑の冷やかな目が周漣に向けられると、周漣は再び口を噤んで俯いてしまった。

第八章 六

「しかしそうになると、求さんの行動は変ですねえ。あなたは倚天を追うという命令に反して道中で手に入れる事にした訳ですから、行った先に殷総監が居るかどうかわからなくなる。劉毅の命令はどうなったんです？」

周維は言いながら微笑を浮かべた顔を求持星に向けた。

「ほう」

夏天佑が求持星と周維を交互に見比べる様に視線を動かした。単に道中で知り合って少なくとも表向きは仲良く旅をしてきたという訳でも無いらしいと想像する。

「俺は今は……もう九宝寨の配下とは違う。劉毅様の後、喬高様きやうこうが寨主となられた事は知ってるか？」

「喬高？ ……あれが九宝寨の寨主に？ 劉毅はまだ引退する歳でもなかろうに」

「きつとあんたを探す事に夢中で、他の事は煩わしくなってきたんだろう。正式に寨主になる以前からうちの殆どは喬高様が仕切るようになっていた。俺は喬高様の配下だった」

「喬高か……。周漣、知っていたか？」

夏天佑は周漣に顔を向ける。先程までは傍目には随分冷たくあしらう様な接し方を周漣に対して行っていた夏天佑だったが、今度は唇を緩めてそっと見つめるような優しい顔を見せた。

「喬高を寨主にという話は聞いていました。最近では私達七人は何もする事がありませんから殷総監が出奔した時、方崖に召集されたのは久しぶりの事でした。でも……あの時喬高は方崖に来ていません。劉毅は、突然の事で喬高は九宝寨の方で手が離せないから自分が命を伝えて当たらせる、と言い、張新はそれを了承したのです」

周漣は顔だけを夏天佑に向け、答える声は少しばかり明るさを取り戻している。

喬高という人物は九宝寨寨主劉毅の部下であつたが劉毅の弟分のようなもので、特別な存在であつた。周漣が言つた様に北辰の七星が召集される時は喬高もその命に含まれる。彼は劉毅と同じ、北辰七星の一人なのである。

「では、喬高様が……、死んだ事は？」

「何？」

「どういふことですか？」

求持星の呟きに、夏天佑と周漣は即座に反応して聞き返した。二人には相当意外な事だつたらしく、求持星を見る目に力が籠もっている。

「喬高様は殺された。俺は……まだ生かされているだけだ」

「誰にだ？」

「……多分、劉毅様だと思う」

「周漣、劉毅に喬高が殺せるか？」

夏天佑が周漣に尋ねる。

「それは……出来ない事はないと思います。本人が直接手を下さずとも方法はあるでしょうし、仮に直接二人が対峙してもやはり劉毅の方が上手です。でも……何故に？」

歓声に似た笑い声が再び響く。葛林夫婦とその周辺は何やら大いに盛り上がっている様で、こちらの話は全く耳に入っていない。ただ洪破人だけが体をこちらに向けて聞き逃すまいとしていた。

「皆さん、その話はまた後でじっくりしませんか。劉さん、すみませんねえ」

周維が酒壺を取り上げて劉健和の杯に酒を注ぐ。流石にもう話が理解出来るのは求持星と夏天佑、周漣の三人しか居ない。

「ああ、いや、大事な話の様だし、俺の事は気にせず……」

「武慶の酒は少しは旨くなったかい？」

夏天佑は求持星の話など全く聞かなかつたかの様に笑みを浮かべて劉健和に向き直つた。

「あー、いや、どうもあそこの連中はただあれを造り続けるだけでして……あれ以上良くしようという気はさらさら無いらしく……」

劉健和の話し方がきこえない。かなり若く見える太乙北辰教の元総監にどんな口をきけば良いのか判断しかねている様で、明らかに戸惑っていた。

「劉さん。俺は夏天佑という若造だ。何も遠慮はいらないさ。歳も、あんたより大きく見えるかい？」

「いや……ハハ」

劉健和は噂なら良く知っていた。殷汪は若返る秘術を習得している――。

「あんたはどうしてこんな処まで？ やはり商売か？」

「それについては、夏さん。後では是非聞いて頂きたい話があるんですよ」

周維の言葉に、

「後で、か？ お前は何でも勿体ぶるんだな。じゃあ今は何を話せばいいんだ？」

夏天佑は『分からない』といった風に首を振り、目の前の杯を掴んだ。

「まあまあ。ほら皆さんまだ食事が進んでいませんよ。さあ、求さんも。飲みましょう」

周維は酒壺を差し出して求持星が杯を手取るのを待つ。求持星は周維をじつと見てから、

「……貰おう」

そう言うてようやく杯に手を伸ばした。

その後は皆、主に周維の土産話を肴に酒を飲んだ。都で倚天剣を手に入れるまでの話や武慶で見た真武観の話である。劉健和も自らの商売の事や武慶について、夏天佑に聞かれるがまま答えていたが、自分の息子と秘伝書の話は周維が改めて話すという事の様なのでこの場ではあえて話さなかった。話すのは三人のみで、周漣と求持星の二人が口を開く事は全く無かった。

広間でのささやかな酒宴がお開きとなり、劉健和と求持星はそれぞれ用意された部屋へと案内され、他の者もそれぞれ戻っていった。「ああ、洪さん。お疲れ様でした。ゆっくり休んで下さい」

広間を出たところで洪破人が居るのを見つけた周維は、そう声を掛けた。

「旦那、……周漣さんの事、知ってて此処へ？ 流石に驚いちまったよ。まさか本当に北辰の……」

「ハハ、流石に自分を知る求さんが目の前に居たのでは隠せませんしねえ。周漣さんも諦めたんでしょうね。まあ、此処ではその事を隠そうが明かそうがあまり関係無いでしょう。夏さんだって自分が殷汪である事を否定はしなかった。ま、彼なら仮にいくら追っ手が来ようが気にしないでしょうがね」

「やつぱり、殷総監を探す命を受けて？ しかし夏さんに対して特に何かする訳でもなし……。もし周漣さんが方崖にこのまま報告しなかったら、周漣さんも夏さんと同じ……。いや、違うな。夏さんは一応死んだ事になってるし、それを疑ってるのは七星の劉毅とやらだけなんだろう？ けど周漣さんは北辰教から追われる事になるんだろうな」

洪破人は力無く俯く。

「洪さん。周漣さんが心配なんですわね？」

「ん？ あー、いや、俺が心配してどうかなる話じゃねえよな。ハハ……」

「そうでしょうか？」

薄く笑う洪破人を、周維は真顔で見ながら言った。

第八章 七

「もしそうならばいくら彼女とていつものように余裕で居られる筈は無いでしょう。夏さんを今追っているという劉毅ですが、おそらく彼は北辰に夏さんの事を教える事は無いと思います。彼は個人的に……そう、個人的な感情でもって殷汪を探している。北辰の張新あたりに横槍を入れられるのはとても不本意な事。夏さんを追う者は今後も劉毅のみと考えて良いでしょうね。しかし……周漣さんは劉毅と同様に殷汪搜索の命を受けながら、既に殷總監が死んだと劉毅が方崖に報告した後も、戻らず此処に居る。もしその事に対して方崖がなんらかの疑いなどを抱いたならばこれは少々不味い事になる。まあ彼女の事ですからその辺の微妙な匙加減を我々が案ずる事も無いでしょうが、仮に、仮にですよ？ 万が一北辰が彼女に叛心ありとして動き出したら、いくら七星といえども一人だけではかなり危ない。もしそうになったら我々にも出来る事はいくらかある筈です。既に彼女にはうちも世話になりましたからね。しかしまあ、彼女はとても賢い人です。何も問題は無いんじゃないですか？ そう判断して今も此処に居る筈です」

「……夏さんも居るしな」

「夏さんは……彼女をどう思っているのか良く分かりません。追ってきた北辰の人間な訳ですからねえ、彼女は。案外彼女が危機に晒されても傍観するだけかも知れません。それはそれで仕方の無い事。追っ手の組織の中枢の人間です。となれば、彼女に助勢出来るのは洪さん、我々ですよ」

周漣がにやりと笑うと、洪破人は思わず視線を逸らしてしまった。
「あー、まあそうだな。そうならない事を願うばかりだが」

「周漣さんは確かに太乙北辰教の七星、周婉漣な訳ですが、七星のどんな噂を聞いても、彼女は普通の女性と変わらない部分を多く持っていると思えてならないんです。風をたった一手で仕留めたとし

ても、です。そう思いませんか？ いや、洪さんはそう思っているからこそ、彼女に魅力を感じていると――」

洪破人はフツと鼻を鳴らして首を竦める。

「ハハ……何だか笑えるな。俺如きが七星周婉漣に……夏さんの方が……」

「夏さんが今興味があるのは、流石に私も驚きましたが、西の開墾でしょう？ それを今から洪淑華の秘伝の武芸に向けてもらいます。周漣さんは一先ず方崖へ戻るでしょう。あらぬ疑いを持たれる前に洪さん。これからです。これから色々動かししていきますよ。我々がね。今は思いもよらない様な変化が我々個人にも起こります。そしてこの江湖にも」

周維はいつの間にか取り出した扇子を顔の横でくるりと回して円を描く。

「旦那の言う事はいつも大袈裟な様でいて、本当にしちまうからなあ。何をするつもりやら……」

「まあまあ。ぼちぼち行きましょう。劉さんの件はそうゆっくり出来ませんがね。さて、休みましょうか。明日、また万乗閣ばんじょうかくに行って報告を受けなければ」

「ああ」

二人は立ち話を終えてその場を離れて行った。

劉健和と求持星に貸し与えられた部屋は手入れが行き届いていて、寝台も上質の物である。求持星は部屋で一人になると真っ先にその寝台に体を俯せ、久しぶりの心地よい弾力を全身で感じる。

（もう、どうにでも好きにしろ……。誰でもいい。俺を開放してくれ……）

求持星は酔っていた。劉健和らが広間で話している間、ずっと黙って周りが分からなくなるまで酒を呷り続けた。

（気に入らないなら……。殺せ……。もう端まで来ちゃった……。もう逃げる場所も無い……）

意識が薄れていく。寝台に埋もれていく様な感覚を覚えながら、『眠りに落ちていく時にはきつと体も下に向かって落ちて落ちているに違いない』と、そんな事を考えたのを最後に何も分からなくなった。

深夜、求持星の耳に音が微かに届いていた。しかしまだ気にする程でもない。屋敷のどこかの扉か何かが風に押されて鳴っているのだろう。寝台に密着させた顔を少しずつ動かして今までと逆を向き、鼻から長い息を吐いてから無意識に喉を鳴らす。

音が、止まない。キイ、キイト、早く閉めろと言う様に鳴り続ける。

(んん……うるさいな……)

徐々に大きくなっていく様に感じる。音自体が大きくなっていつているのか、それとも酔い潰れていた意識が音に集中し始めたのか――。

「ピイイイイ！」

不意に甲高い音が屋敷中に響き渡り次の瞬間、求持星は驚きの声を発するより先に跳ね上がる様に寝台を下りた。

指笛。誰かがこの屋敷のどこかで指笛を鳴らしている。

(何だ？ どうした？)

求持星はすぐに窓の脇に身を寄せて外の様子を窺った。しかしこの部屋の窓の外は屋敷の塀が近く、しかも明かりが無いので見える範囲は狭い。

(さっきから聞こえていたのは、この音だったのか？)

指笛は鳴り止まない。思い切り吹き鳴らされる音が屋敷の全ての人間に警戒を促していた。

「求持星」

「おわっ！」

窓の反対側、部屋の入り口の方から名が呼ばれ、求持星は飛び上がらんばかりに驚き左手で胸を押さえる。

入り口の扉には人影が映っている。中庭に面した回廊に誰かが立

っていた。

「求持星、まだ居るのですね？」

（周婉漣……）

声の主は女。周漣であった。

「なっ、何か、あったのか……」

求持星は乾ききった喉からなんとか声を出したが、周漣に聞こえたかどうかは分からない。

「求持星。出なさい」

周漣の影は動かず、声だけが聞こえる。丁度その時、指笛の音が止んだ。

「あなたの仲間が二名、到着した様ですね。紹介して貰いましょうか」

「……仲間？」

求持星はゆっくりと近づき、扉を開ける。扉から距離を置いて回廊の欄干のすぐ傍に周漣は立っていた。

「来なさい」

周漣はそう言うと言き出す。その動きはまるで衣服を出来るだけ動かさぬ様に注意を払っているかに見え、長い髪だけが一瞬ふわつと揺らいだ。

求持星は暗い中庭に目をやる。風は全く吹いていない。扉が鳴るのを聞いたのではなくあのけたたましい指笛を朦朧とした頭が勘違いしていたのだ。眠気は完全に消え去ったが、酒を含んだ頭が重い。

広間の方に複数の人の気配。慌しく動いている様で、やはり何かが起きていた。だが前に行く周漣の足取りは変わらず急いでもない。

「一体何があったんだ？」

求持星は周漣の背中に声を掛けたが、何の反応も返って来なかった。

第八章 八

広間を抜けて屋敷の正門までの前庭に出ると、洪破人ら用心棒達の姿があった。みな剣を構え、じっとしている。彼らと向き合い、同様に身構えている人物が二人。顔の下半分を黒い布で覆っていた。用心棒達の後方に周維が立っている。

「求さん。彼らはあなたを訪ねて来たと言っています。二人とも手土産を持参して来られましたが、何とも物騒な土産です。それに全く渡そうとはしません。よく分からない方々ですねえ」

「一体……彼らは？」

「求さんはご存じない？　ならば、家を間違えたんでしょかね。ハハ」

周維は随分余裕があるようで暢気に冗談を言ったが、二人の来訪者はどちらも刃物をこちらに向けている。一人は刀、一人は短剣の様な物を両手に持っていた。

「求持星！」

一人が求持星の姿を認め、辺りに響く大声を出した。

「倚天剣は手に入れたか？」

求持星はその場で応じる。

「お前は誰だ！？」

「劉毅様がお待ちだ。此処まで来たのならもう命じられた『もの』は手に入れただろう？　すぐに戻るべきだと思うが？」

覆面の男は名乗るつもりは無いらしい。洪破人らに注意を払いながら時折求持星に視線を送る。

「劉毅様？　お前達は九宝寨の人間か？　顔を見せろ！」

求持星は歩き出し、洪破人の隣まで進んだ。得物は何も携えていない。

「何を言っている？　俺達は、どう見ても賊だ。顔を晒す訳が無かろう？　お前とて我々と同じ筈だが……お前は何故顔を隠さない？」

此処の者達に親しげに近づいて後に倚天剣を奪う算段だったか？」
「……お前達は、九宝寨の者じゃないな。そんな声には聞き覚えが無い」

求持星は両手を握り締めて直立の姿勢のまま二人の賊を睨み付ける。

「ハッ。おぬし、九宝寨の全ての人間の声を覚えているのか？」
もう一人も布で隠れた口を動かした。

「お前達が居ても居なくてもどうでもいい下っ端なら、俺にも分かるがな」

「……求！ お前は劉毅様の命を遂行する意思があるのか！」
得物を突き出して吼える賊に、洪破人らが反応して皆僅かに間合いを詰めた。

洪破人は賊を睨み付け、

「こんな夜中に叫ばないで貰いたいな。用件をさっさと見えよ。それからそれを呑むかどうかを相談しなければならん」

「その男、求持星は九宝寨の盗賊だ！ お前達が手に入れた倚天剣を奪うために此処に居るのだ！」

「お前らもなんだろう？」

「……倚天剣とその男を渡せ！ そうすれば大人しく出て行こう！」
求持星が一步前に進み出る。すぐに洪破人が声を掛けた。

「求さんよ。行く必要は無いんじゃないか？ 戻って寝てても構わないぜ？」

「フッ、あいつらと行こうなど……微塵も考えてない。おい、お前達、俺が受けた命を本当に劉毅様から聞いたのか？ 倚天剣を奪うだど？ 奪ってしまっただけじゃどうにもならなくなるんだがな」

求持星の言葉を聞いた二人の賊は顔を寄せ、何やら話している。その時、求持星の許へ周漣が静かに近づいた。

「九宝寨の者でないのなら、この二人は何者ですか？」

「……少なくとも北辰の者では無いだろう」

求持星は小声で呟いた。

洪破人は身構えたまま求持星と周漣をちらっと見る。

「お二人さん、あー、一応下がって貰えんと有難いんだが……」

二人とも丸腰で賊と向き合っている。周漣などは相変わらず白く細い指を揃えた手を重ねて腰の前に置き、一切の感情が途絶されたその表情と目の前の殺気に満ちた刃が、かなり不釣り合いである。

「お前達……よくこの人の前でその得物を出して居られるものだ。相当腕に自身があるのか……まさか知らぬ訳ではあるまい？ 九宝寨の、北辰の人間ならば……」

求持星は二人の賊を見ながら僅かに周漣の方に体を傾ける。その言葉を聞いた賊は、また何やらひそひそと言葉を交わしてから、
「お前と倚天剣に用があるのだ。他人を傷付けたくないのなら大人しく来て貰おう。倚天剣を見せろ。手に入れたんだろう？ ん？」
賊は求持星以外は全く興味が無い様で、ただ立っているだけの周漣を無視している。

（周婉漣を見た事が無いのか……。北辰なら有り得ん。しかもたった二人で此処へ乗り込んでくるとは……。何も知らないのか。そこは俺と、同じか……）

求持星は賊を暫く眺めてから、

「そんな物は無い」

両手を広げて何も携えていないのを見せる。

「此処にあるのは確かなのだろう？ ならば、本来の役目通り、奪って帰ろうではないか。求持星、我々も助勢しよう」

その時、ずっと後ろで見ていた周維がやって来て周漣の横に並んだ。

「持ち主に掛け合って貰えませんかねえ？ 確かに私が都から持ち帰りましたが、もう人に差し上げましてね」

「ほう。その者は何処に居る？」

「あちらに」

周維は後ろを振り返る。先程まで居たその近くに建物に上がる為の小さな石段があり、そこにいつの間にか来ていた夏天佑が腰を下

ろしていた。手には剣がある。

夏天佑は何も言わず、ただ求持星らのやりとりをぼうつと眺めているだけだった。

「それが、倚天剣か？ 本物かな？」

賊の一人が周維にそう言ってから持ち主であるという男を観察する。

「求持星」

周漣が賊を見たまま言う。

「決まりましたか？」

「……」

「あの者達を、どうするのです？」

求持星はじっと周漣の横顔を見る。その白い頬を見つめながら、

「あれは、うちの……九宝寨の者じゃない。あんたを知らない人間は居ないからな。追いつくまでだ」

「追いつく？ 始末せずとも良いと？」

「あんたやあの、夏天佑どのなら容易いだろうが、俺はどうかな。

奴らの目的は俺の監視か何かだったのだろう。俺が――」

「ならばあなたに任せます。私達は関係の無い事。見せて貰いましょう」

周漣は求持星を見ないまま言い、口許だけが微笑んだ。

第八章 九

周漣は踵を返して後方へと戻って行く。石段に座る夏天佑の傍まで行くと再びこちらを向き、静止した。

求持星は賊に言う。

「お前達の要求を呑むことは出来ない。俺も、もう戻る気は無くなった。力づくで来ると言うなら抵抗させて貰う」

「フン、劉毅様はお前を許さんぞ？ 後悔する事になる。まあよいわ。だが倚天劍の方はどうか？」

賊は夏天佑の方に目を遣り、

「おいその。あるお方がどうしても倚天劍が欲しいと仰っておられてな。どんな事をしてでも持って来いと仰せだ。大人しく渡してくれぬか？ どんな事をしても良いと言うんだから、お前を切っても、という意味だ。分かるな？」

夏天佑は賊の顔を眺めてから、手に持った劍を見て考える様子を見せる。

「本当に劉毅様の命令なのか！？ そんな命は出ていない！ 劉毅様の目的は劍じゃない！ お前達、九宝寨の名を騙った偽者だろう！」

求持星は叫ぶ様に言い、まっすぐ賊に向けて指を突きつけた。

「ハハッ！ 我らは一言も九宝寨など言ってはおらん。フン、では好きにさせてもらおうか」

二人の賊は再び得物を構える。同時に洪破人らも劍を握る手に力を込めた。

「求さんよ」

求持星の背後にから聞こえた夏天佑の声。求持星は敵に背を向ける訳にも行かないので僅かに顔を傾けて聞く。

次の瞬間何かが飛んでくる気配を感じ、求持星は即座に顔を後ろに向けて見ればそれは自分に向かって飛んでくる劍だった。劍の柄

が、真っ直ぐに迫って来る。

求持星は即座に独楽こまの様に体を回してその柄を掴み取り、そのまま構えて賊に再び向いた。

「おお？ 求、どうだ？ それが倚天剣か？ あの者がおぬしに渡したという事は持つて行けと言う事であろう？ さあ、戻ろうではないか」

賊の一人はまた求持星を誘う。しかしその時求持星は殆どその声を聞いていなかった。

（これが、倚天剣……）

求持星は構えて後、初めてその剣身を目にした。この場合は暗がりの中に幾つか明かりが灯っているだけだったがその光が刃に反射して求持星の目に飛び込んでくる。あの派手な装飾の外見に隠れていた中身はやや紫がかった青を含んだ光を放ち、その刃はただ人を切る事だけを考えて作られていて見る者を嫌な気分にする、そんな姿をしていた。

（俺に渡したのは……まさか持つて行けという事では無いよな。フッ、当たり前か）

「求よ。行くか？ それともここで遣り合うか？」

「俺は戻らん！」

「そうかい」

短剣を両手に持った賊の一人が言葉と同時に地に蹴って求持星に向かつて襲い掛かった。

「本気か！？」

そう叫んだのは洪破人だった。賊はたった二人で求持星と自分達用心棒十人を相手にする気にいるらしい。

すぐに短剣が後退する。洪破人の声が合図にでもなっているかの様に退いたが、実際は求持星が短剣の最初の一撃を防いだからである。その直後、今度は求持星が倚天剣を胸の前に構えて跳躍した。

洪破人が横に居た石せきに言う。

「囲め」

「ああ」

石が腕を上げて他の用心棒達に何やら合図を送ると、あらかじめ決められていた様に展開して賊を取り囲んだ。すでにその輪の中で賊二人と求持星は目まぐるしく立ち回っている。

洪破人と石の二人も同時に踏み込み、それぞれの剣が賊を狙う。

「俺達もこれが役目なんぞな！ あんた一人にやらせて眺めてる訳にはいかねえんだ！」

洪破人が求持星に向かって叫ぶように言うと、求持星は僅かに視線を送っただけですぐに短剣の賊の攻撃をかわして飛び回る。

石は刀を持った方と物凄い勢いで得物を交え、甲高い金属音が辺りに響く。洪破人もそれに加わり攻撃の手が増していく。しかし賊の刀も更に速さを増して石と洪破人の二本の剣を弾いている。流石に二人で乗り込むだけあってかなりの使い手であると言える。

一方、求持星と短剣の賊はどちらも縦横無尽に飛び回り一所で切り結ぶという事は無く、得物が交わる音は殆ど聞こえない。しかし攻撃の手を出していない訳ではない。二人は軽功を得手としている様で体の裁きもかなり速い。賊の短剣は両手に二本あり求持星を執拗に襲うがこれを倚天剣では受けず、前に洪破人と遣り合った時と同様にかなり速い退き足で遠ざかる。周りを囲んだ他の用心棒達はこの二人が跳んで来れば求持星に加勢しようと飛び込もうとするが、次の瞬間にはまた別の方へと跳んで行ってしまふ。

洪破人らの剣の音とその頭の上を飛び交うバタバタという衣服の音がずっと聞こえ続ける。

「流石、彼らはやりますねえ。長引きそうですよ？」

周維が夏天佑と周漣の傍までやってくるとそんな事を言って笑った。用心棒と求持星が勝つと信じて疑わないのか、全く心配する様子も無い。

「暢気なもんだな。洪と石、あの二人がもし傷付いたらお前にとっても痛手だろう？」

「それは、困ります」

周維は扇子を手に夏天佑の方に体を向けたままでちらっと戦いの様子を見る。夏天佑と周漣、そして周維の居るこの周りだけが全く別な空気が流れている様で、観劇の客といった感じであった。

「求さんはどうやら遠慮してる様ですねえ」

「んん？」

「賊に、では無く剣に。あれを傷付けない様になっているんでしょう。ハハ、もっと程度の悪い長剣なら思う存分振れるんでしょうが」

「フツ、そんな氣を使わなければならん剣か？ あれが。剣なんてすぐに欠ける。剣として使うならな。折れさえしなければまた研げばいい。いつか無くなったら、それが天命というものだ」

「そう思う事が出来るのはあなただけかも知れませんか？ あれは、名が大きい過ぎます」

夏天佑は答えず、またぼんやりと目の前で繰り広げられている激しい剣戟を眺め、周維もようやく体を向けて観戦する。

刀の賊は洪破人と石の二人を相手に互角。短剣の賊と求持星も互いに決め手が出せないまま、延々と跳躍し続けた。

第八章 十

「やはり！ 九宝寨の者では無いな！ これほどの動きが出来る者なら俺が知らん筈が無い！」

「お前も評判通りという訳だな！ 求持星！」

（評判？ ……そんなものあるか）

「まさかここまで動けるとはな！ お前を殺すのは惜しいがしかし

劉毅様の命だ。逆らえん」

評判とやらのとおり腕は認めるが、しかし殺す、と言う短剣の賊はにやりと求持星を見た。

（劉毅様には逆らえない——そんな筈は無い。確かに後悔するほど辛く危険な目に合わされるかも知れない。だが、だから逆らいたくないだけで出来ない訳じゃない。俺は受け入れる。後悔だってきつとするだろう。たとえ最後は肉を切り刻まれ骨を粉砕されつくしても、構うものか。苦しくなったら、『苦しい』と地を這い、痛かったら泣いて叫ぶさ。今、最も重要なのは、俺の望みは無事で居られるとかそんな事じゃない。過去の俺と決別する事だ）

求持星は短剣をかわしながらも落ち着いた声を出す。

「劉毅様が九宝寨を総動員して俺を追わせたとしても、どうでもいい。俺如きにそこまでする事は無いがな。それにお前達の仲間が加わったとて大差無い。どこの者か知らんが大方この倚天剣を横取りしたいのだろう？ 本当に劉毅様に献上するか？」

短剣の賊は暫く黙ったまま相変わらず跳躍を続け、答えを考えている様にも見えたが、結局それについては何も言わなかった。

「お前の武芸は何処の物だ？ 短剣二本使うのは、物まねか？」

「フン！ 何とでも言え」

賊は急に跳躍の方向を変え、短剣を掴んだ両腕を大きく旋回させながら求持星に襲い掛かる。だがやはり届かない。求持星が後方へ退く方が速かった。

「俺は腕にも、この足にも自信があつたんだが、この広い江湖には更に上を行く者が、フツ、ただの金持ちに雇われて用心棒をやっていたりする。お前の短剣も今此処にある倚天剣も、多分意味が無い程、桁違いの技を持つ者がな」

「ほう、そいつはどこだ？ そんな者は見当たらないが」

「此処じゃない」

「だろうな。この用心棒にそんな技は無さそうだしな。お前、あの二人を助けに行ったほうがいいんじゃないか？ そろそろ限界が近そうだぞ？」

短剣の賊のいう二人とは洪破人と石。求持星も時折様子を窺うが刀の賊の動きには余裕まで感じられた。

「夏さん」

周維が再び体を夏天佑に向け、いつに無く真面目な表情を作って言った。

「どうか手を貸して頂けませんか？」

夏天佑は膝の上に立てた腕で頬杖を付いたまま、立っている周維を見上げた。

「何に？」

「まずは……」

「まずは？」

「あの二人の男、うん、多分男で合ってるでしょう。あれを退けるには洪さん達だけでは難しそうです。加勢して頂ければ……」

「……よくこの用心棒は今まであんたに付いてきて無事で居られたな。あの賊がもっと腕が立つ奴らだったらもう終わってる。まあ、まだあいっらは終わらないと思うがな」

「ハハ……いや、今は夏さんも周漣さんもいらっしやる訳ですから、気が大きくなって油断しましたかね。反省致します」

そんな話を周維がしている間にも求持星は足を止めず、洪破人らも必死に防戦して耐えていた。

「ま、食わせて貰ってる訳だし、嫌とは言わん」

夏天佑はそう言って石段から腰を上げた。すると周漣が夏天佑の正面に立ち、

「私が参ります」

「……あの求さんにやらせたのはお前だろう？ 何と言ってあそこに行く？」

「もう少し出来るのかと思っておりますが――」

「姿を眺めるだけで分かるのか。当たれば凄いが出鱈目だった訳だ。もっとその眼力を磨くんだな。というより、最初からお前が行けば良かったな。あいつらを見つけたのはお前が最初なんだろう？」

「それは……求持星が何者かを知る為に――」

「……死んだら死んだで、どうでも良かったか？ フン。どけ」

夏天佑が周漣の肩を押しつけ、周漣は足をもつれさせてよろめいた。それを見た夏天佑は顔を顰めて睨んだがすぐに顔を戻す。数歩歩いてから周漣に振り返った。

「生かして返すのか？」

「……いや、あの者達のお仲間が何処の、どれほどの者達か分かりませんが、生かして返せばすぐにまた来るでしょう。しかも、次はこんな丁寧なご挨拶ではないでしょうね」

「殺したことがばれても同じだがな」

「どちらがの可能性が高いか、という話ですよ。最悪はそうですが、二人だけでやって来たのなら時間は稼げますし、それなりのおもてなしの支度もしておけるといいうものです」

周漣が話す言葉は普段と変わらない軽口であるが、表情は真剣そのものである。

夏天佑は再び歩き出した。

洪破人と石はどうやらかなり疲れてきたらしく、殆ど攻めの手は出ていない。対して衰えを見せない賊の刀は派手に風を切る音を立てながら二人をじりじりと後退させていた。

「洪、代わろう」

夏天佑は洪破人の背後から声をかけた。刀の音が消える。

「お前は、倚天劍の持ち主とかいう者だな？ あの名劍を所有するからにはさぞ腕が立つ事だろう。クク」

刀の賊は顔を覆った黒い布の下からくぐもった声を出して笑う。

その隙に夏天佑の横まで下がった洪破人と石はどちらも上体を前に傾け肩で息をしていた。

「……夏さん、すまねえ」

「周維は生かして返すのはまずいと言ってる。何故皆でやらない？ 周りには用心棒が八名、周りを取り囲んでいる。全員で当たればかなり状況は好転しそうにも思える。」

「……もう少し持ちこたえてとにかく……逃がさない様にすれば他にも……うちの会のが駆けつける筈だ。それからの方が捕らえやすいと思ったんだが……俺がこんな腕だから……」

ほんの一瞬だけ洪破人が笑ったが、荒い呼吸を抑えるのに精一杯であった。

「おい、お前」

刀の賊が言う。

「あっちで飛び回ってる倚天劍、あれはお前の物だろう？ では、もしお前が負けたら差し出すという事にしないか？ 求持星や他の者達が傷付く必要など無いのだ。今、お前が持っていけと言ってくれたら、お前も危ない目には会わない」

第八章 十一

「随分と、勝手な言い分だな。こっちが勝ったら、何が貰えるんだ？」

洪破人がゆっくり言葉を継ぎながら言うと、

「何を言ってるんだ？ お前のその命だ。さっきまで消えなかったではないか。ハハ！」

刀の賊は上体を仰け反らせるほど大袈裟に笑った。

不意に夏天佑が賊に向かって歩き出す。

「ん？ どうする？」

賊の持つ刀がぴくりと反応する。夏天佑は真っ直ぐ、その刀に向かって進んでいく。

「やるのか？ やるんだな？」

不意に賊に向かって大きく踏み込んだ夏天佑の姿がぶれる。同時に下がっていた刀も再び勢い良く跳ね上がった。

後方から見ている洪破人からは夏天佑の背中しか見えていない。その背中が刀の賊を覆い隠していた。

ほんの一瞬、賊の短いうめき声の様な物が聞こえた。

「こっ、これは……」

すぐに「カーン」という少し低めの鈍い金属音が聞こえたかと思うと、夏天佑が僅かに下がって間合いを取った。

「な……何をした？」

刀の賊の体は無事な様で刀の柄をしっかりと掴んだままで、だが呆然と立ち尽くしている。持っている刀の先が半分ほど失われているのである。

「驚いてもらえて嬉しいな。これはなかなか面白い技だ。これは皆まで奪わないところが肝心だな。何だか凄そうに見えるだろう？」

夏天佑はそう言って笑った。右手に刀の半分、その先端を指で摘んで持ち上げて見せる。

「倚天劍は貸し出し中だ。得物は半分ずつでいこう」

「貴様……何者だ？」

賊は短くなった刀を顔の前に突き出して構えながら徐々に後退する。眼だけしか見えていないが明らかに先程までとは違う警戒の色を見せていた。

「あんたが何処の誰か名乗ったら教えんでもない」

夏天佑は奪った刀の一部のその両端を両手で摘んで眺めている。

賊は何も言わず後退し続ける。

求持星の相手をしていた短剣の賊が、相方の刀が折れているのに気付いてすぐさま隣に駆け寄った。

「おいどうした？」

「こいつ……」

短剣の賊に続いて求持星も夏天佑の傍に寄った。夏天佑が求持星に声を掛ける。

「こいつらが何処の者か、全く予想もつかないのか？ 本当に、全く？」

「……ああ。……いや」

「ん？」

「後で話す」

夏天佑は軽く頷き、

「剣を」

求持星の前に手を差し出した。求持星はもう一度改めて手にした倚天劍を眺めてから夏天佑に渡す。

夏天佑は左手に倚天劍、右手に刀の一部を持って賊二人の前に進み出た。

「これで終わりにしよう。寝る時間が無くなる。フツ、負けた方は永遠に眠れる訳だが……」

「ハ！ その刃、そのまま使うつもりか？ 怪我をしないように気を付けるんだな」

短剣の賊は両手を前方に突き出し二本の短剣を見せ付ける様に構

えた。

夏天佑はまだ両手を下げたままじっと二本の短剣を見つめている。周りの者には賊は単に身構えているだけに見えるのだが、夏天佑は怪訝そうな顔つきで賊を観察する。

「……もつと長いのが良いとか思わないのか？」

「……」

賊は答えずに足をじりじりと地面に擦り付け足場を確認する様に動きながら、眼は夏天佑をしっかりと捉えている。

夏天佑が相変わらず動こうとしないのでそのまま時が流れていく。そんな状況が続けば続くほど賊の方も緊張の度合いが高まっていく様で、求持星と対峙していた時の余裕はすっかり消え失せていた。

（倚天剣を持つ男……何なんだ？ 誰だこいつは……）

短剣の賊は時折両腕の構えを変えながらただ睨み付けるだけで、隣の刀の賊も折れた得物を構えて同様に体を硬くしている。

夏天佑が急に歩き出す。前にはなく、短剣の賊を横から見ようとでも思ったのか顔を傾けて、やはり観察している様である。しかし賊の方も二人揃って夏天佑の方を向くので横から構えを見る事は出来ない。

「貴様、やる気があるのか！」

短剣の賊が叫ぶと、

「やる気が必要なのはあんたらだろう？」

夏天佑は右手の刃を持ち上げて賊を指しながらも視線は顔を向いてはいない。それはまるで弟子の構えを細かく確認する師の様である。

短剣の賊は一気に怒りが込み上げて夏天佑に向かって踏み込んだ。
「おっ」

夏天佑の右手の刃が短剣に向けられる。ほんの一瞬の間に賊の短剣は様々な角度に変化した。夏天佑が摘んでいる刃の先端も遅れる事無くついていく。短剣はすぐに退いた。

短剣の賊は何やら言葉の様なただの音の様なものを吐き捨てなが

ら、いらついた表情を見せる。そして次の瞬間、賊は二人同時に更に後ろに退いて再び身構えた。

「夏天佑様」

夏天佑の背後からゆっくりと現れた白い人影に賊の二人は警戒する。それは周漣であつたが賊の二人はこの女も誰なのか全く知らない。

「……何だ？」

夏天佑は賊の方を向いたまま、横に立った周漣に答えた。

「どうか私に……お命じ下さいませ」

「何を？」

夏天佑の声には一切感情が無く、乾いている。

「この者は私が、処分致します」

「何故だ？ 何故お前なんだ？」

「どうか……、ご命令を。私に……」

不意に短剣の賊が跳躍する。話していた夏天佑と周漣は即座に反応を見せたが短剣の賊を迎え撃つ様に跳躍したのは周漣だけだった。周漣の纏った袍と裳の裾が微かな音を立てながら宙を舞う。幅の広いゆつたりとした袖が数回バタバタと激しく音を立てて振られるのが黒い夜空の中に見えた。

刀の賊は夏天佑を睨んだままじっとして動かない。夏天佑がちょっとでも上を見上げる様な事があればそこへ襲い掛かるつもりだったが、夏天佑はそっちには一切興味が無いといった体で真っ直ぐ刀の賊を見返していた。

第八章 十二

男の呻き声が頭上で聞こえ、短剣の賊が勢い良く落ちてきて地面に叩きつけられた。その後、白い周漣の影がふわりと舞い降りる。その両の手には何故か賊の手に使っていた短剣二本が握られていた。

「ぐうっ」

地面に這いつくばった賊は唸りながらゆっくり立ち上がろうとすると、周漣が再び舞うように飛び上がってから曲芸の様に賊の背に乗り、再び賊は地面に押し付けられる。

背筋を伸ばして立つ周漣は短剣を握り直し、足の下の賊の首筋に視線を落としていた。

「待て」

夏天佑は周漣に向かって言い、それから洪破人の居る方へ顔を向けた。

「来たんじゃないか？」

洪破人の隣に居た石がすぐに塀に向かって走り出し、そのまま塀の上へ飛び上がる。

石は外に向かって「入れ」という様に腕を振り、そのまま塀の上を駆けて正面の門へと向かって行った。

夏天佑は刀の賊に顔を戻し、

「もう諦めてくれ。……全てを」

刀の賊は顔を顰めて睨み返してから、相方を見る。女に踏みつけられて全く身動きが取れない様子で、その腕を考えればただ女に乗られただけであのようになってしまふなど考えられない。ならば、あの女が「普通では無い」という事だ。数手の内に得物を二本取り上げられ、いつそれを体に突き立てられてもおかしくないという、完全に勝負がついた状態にある。自分の方はといえば得物の刀をへし折ってしまう様な相手に睨まれて、全く勝算が見えない。

（こんな筈は……。この二人は一体何だ？　くそっ！　さっきまで

は何も問題は無かったのにこいつらのせいで……)

「不思議ですねえ。こちらの夏さんが相手になった途端、こんなに静かな闘いになってしまおうとは。夏さんはまだ何もしてないというのに」

決着が付いたと判断したのか、周維が洪破人の傍に歩み寄りながらこの場に居る皆に聞こえる様な大きい声を出して言った。

「あれが全部やってればさぞ盛大な血祭りになった事だろうよ。敵が二人でも四人分の血飛沫があがるからな」

夏天佑はあごで周漣を指し示した後、右手にあった刃を地面に突き立てると倚天剣だけを持って後ろを振り返りそのまま歩き出す。丁度その時、屋敷の門が軋む音を立てながらゆっくりと開き始めた。門から溢れ出すかの様に屋敷の中へなだれ込んで来る男達。全て稟施会の者であり全員が武器を手に行っている。全部で三十名程居り、彼らは最初から賊がどれか分かっていたのではないかと思う程速く二人の賊を取り囲んで得物を構えた。中心に居るのは二人の賊と、周漣。

「あとはお任せ頂けますかな？」

周りを囲んだ稟施会の者達の中から周漣に呼びかける声。低く落ち着いたこの声は太史奉たいしほうのものだった。

「まさか太史さんにお出まし頂けるとは思いませんでした」

応じたのは周漣ではなく周維で、笑みを浮かべて太史奉に歩み寄った。周漣はじつと短剣の賊——すでにその手に短剣は無いが——その上に立ったままである。

「この屋敷の守りを見直さねばなりませんな。周漣さんが居て下さって助かりました」

太史奉は周漣の姿を眺めながら言った。

洪破人が再び賊の前に進み出て、

「さすがにこれでは諦めるしかないだろ？ その短くなった刀を捨ててるんだ」

刀の賊はまだ壊れた得物を構えたまま全方位の気配に神経を集中

させていた。

「此処が稟施会の周維の屋敷だという事は最初から分かっていた事。この位の人数を相手にする事くらい考えておったわ」

「……一人でも、か？」

刀の賊は少しずつ移動を始める。隙あらば逃げるつもりだろうが、少し動けばそちらの方に包囲する者達が集まっていき方向を変えればそちらに、といった具合で逃走を阻む壁は厚かった。

「……確かに、少しばかり油断したようだ。さっさとお前達を切つて倚天剣を奪い逃げておれば……」

刀の賊は構えを解いて呟く様に言う。

「俺もあんたらの事を甘く見ていた。最初から――」

洪破人が話しているその時、いきなり賊は持っていた刀を周漣に投げつけ、次の瞬間一番近い方の屋敷の塀に向けて飛び上がった。

その速さは求持星と共に飛び回っていた短剣の賊と同じ程であり、周漣に刀を投げ付けたのは自分を捕らえられる者はおそらくあの女だけと踏んだからである。その投げた刀を折った男はすでにこの場から消えているのである。

「ハーツ！」

刀の賊は長く気合を発して屋敷の外に向かって跳ぶ。囲んでいた者達は急いでその方角へと駆け出し、塀の近くに居た者はその上に飛び上がる。今、刀の賊の手には得物は無いが、洪破人と石の二人を同時に相手して押す程の力量があり、拳法や掌法が全く出来ないとは考えにくく安易に飛び掛って捕らえられるものではない。

賊が塀の上に到達する直前に数人がその前方を塞いだが、賊は宙にあって姿勢を変える事など出来る訳も無く、すぐに塀の上でぶつかり合つてそのまま外へと転がり落ちていった。

「逃がすな！」

太史奉の声が響いて中に居た者達が一斉に塀に跳び上がる。それらの先頭を切つて塀を飛び越えたのは周漣であった。

賊が周漣に放った刀は何の効果も無くすぐに払いのけられたが、

投げた本人は周漣がそれをどうしたかなど見てはいない。すぐさま跳び上がり堀の上で稟施会の男達とぶつかった時にはすでに周漣の体も地から離れていた。

中に取り残された短剣の賊は、無残にも血を吐いて動かない。周漣はその背に乗ってから刀の賊を追って跳ぶまで地に足を付けてはおらず、賊の背を蹴って跳んだのである。軽功の達人の技というものはまるで体から重さが失せたかのようにふわりふわりと宙に浮かび上がるが如く見せるものが多いが、実際に何もせずにいきなり浮くなど有り得ず、体重を無くすなどという技も存在しない。外功と内功は別物の様でいて実は密接な関係にあり、周漣のような華奢な女性であっても十分練られた内力が体を満たせば筋力は勿論、体の各器官までもが強靱となるのである。周漣の体を一回の跳躍で堀の外まで運んでしまう力が短剣の賊の背に集中し、そんな力を無防備な背に受けて無事で居られる筈も無かった。

堀の外側で、数人がもつれ合いながら転がっている。屋敷は大きな通りに面しているのだがすでに深夜であり明かりもごく僅かで、どこか暗闇から住人が『何事か』と顔を覗かせているかも知れないが、今の所は表に人の気配は無かった。

第八章 十三

賊と絡み合った者達も必死である。何処の誰で何しに來たのかは知らないが逃がしてはならない悪党だただけは認識しており、立ち上がろうとする賊の体に喰らい付く。自分達が持っていた武器が近くに転がっているのだが、それを持たせてはならない。

しかしそんな掴み合いはすぐに止んだ。塀とその下に居た賊と稟施会の男達をも飛び越えた周漣が着地すると同時に振り返り、大きな白い袖が音を立てながら舞う。丁度周漣を見た賊の胸元に迫る一本の短剣。賊はそれを払おうと空いていた左手を思い切り振り上げたが空振りに終わった。

「ぐっ！」

短剣の速さの方が勝り、賊の腕が上がるよりも先にその先端が黒い装束に触れ、そのままその奥へと押し込まれた。

「うう……」

賊は胸に突き立った短剣を包み込むように両手を広げたが、触れられない。地面に座り込んだ格好でひたすら痛みに耐えようと体を震わせている。

周りの稟施会の男達は、余りに早い出来事に半ば呆氣に取られてその様子を眺めていた。周漣の存在は知っていたが、ただ短剣を投げただけとはいえその攻撃の鋭さは思いも寄らない。それ以前に周漣の普段の物腰から武器を手にするという事自体想像し難いのである。短剣は深々と賊の胸に沈み込んでおり、構えて体当たりをしたと言うならまだしも、余程修練を積まねば投げてこうは刺さらない。周漣の手にはまだもう一本残っている。それを握り締めたまま賊に近づいていく。

「待ってくれ！」

そう言って塀の上から外へ飛び降りてきたのは求持星だった。

「確認したい事があるんだ。待ってくれ」

求持星は地面に座って背を思い切り丸めている賊に駆け寄った。賊の口から鮮血が溢れ、まるで真紅の帯をくわえている様に見える。時折痙攣する肩に、腰を屈めた求持星が手を置いた。

「おい！」

「何を確認するのですか？」

周漣の冷ややかな細い声が背後から掛けられる。

「九宝寨の人間は余程の下っ端じゃない限りあんたを知らない者は居ない！」

求持星は周漣を振り返って言ったが、すぐに顔を戻して賊の表情を覗き込んだ。

「お前はこの人を知らないのか？ お前は……」

求持星は途中で声を落とし、賊の耳元に口を近づけた。

「……『山』から来たんじゃないのか？」

痛みに耐えながら歯を食いしばっていた賊も、どうやら意識が朦朧としてきた様で、求持星の言葉に特別な反応はしなかった。

「お前……こんな奴らが居た……とは……」

時折、口から血の飛沫があがる。

「おい……白珪山じゃないのか？ どうなんだ」

求持星は小声ではあるが語気を強めて賊の肩を揺すりながら訊く。

「ぶっ……んん……」

もはや賊は喋る事も出来ず、今にも事切れそうになっている。

「それで、何か分かりましたか？」

周漣がいつの間にか求持星のすぐ傍で見下ろすように立っている。いつもの俯いて目を伏せている様な姿勢だったが、賊の隣に屈んだまま周漣を見上げた求持星には暗闇に光る周漣の瞳がはっきりと判り、暫く体を強張らせて言葉を失った。

「捕らえろ！」

太史奉の声が再び響き、屋敷の外で稟施会の男達が賊と求持星の周りに集まってくる。急に周漣は求持星から目を逸らし、残った一本の短剣を持ったまま歩き出した。塀を再び飛び越える事はせずに

門のある方へと去って行く。

「……もう、終わった」

求持星は男達に向かって眩き、賊が抱き起こされて連れて行かれるのをぼんやりと眺めていた。もう、生きていないのかも知れない。「戻ろう」

いつの間にか傍に立っていた洪破人がそう言っ求持星の肩を叩く。思わず求持星はびくつと身を震わせる。

「……正直、もう体が動かねえよ。戻ってきたばかりだったのにな。求さん、済まなかったな」

洪破人は笑ってみせる。求持星は俯いて暫く何か考えていた様だったが、再び顔を上げて洪破人を見た。

「俺のせいだ。俺を追って来たんだからな」

「あんたが訳ありだったのは旦那も知ってて此処まで連れて来たんだから、あんたが気にする事は無い。後の事は全部うちが処理する。あいつらに関わる事は全て調べ上げてうまくやるさ」

求持星は洪破人の目を見ながらその言葉の意味について考えを巡らせる。

「とりあえず、もう休もう」

洪破人が歩き出したので、求持星も続いて屋敷の門に向かった。

中に戻ると、短剣を持っていた方の賊が稟施会の男達に運ばれていくところであった。こちらでも口から血を流した骸むくろと化している。洪破人と求持星は立ち止まってその姿を見つめた。求持星が言う。

「圧倒的に奴らの方が上手うわてだった。ああなるのは俺達だったとしても何ら不思議は無い。奴らもまさかやられる事になるなど思ってもみなかっただろう。しかもあんな、突然に、あっけなく、だ」

「そうだな……俺と石は粘って粘って、結局力尽きるところだった――」

「それを、出て来ただけでひっくり返すんだから……」

「夏さんかい？ 実際、二人に手を下したのは……周漣さんだった

けどな……」

「周……婉漣ならば造作無い事だ。お前達が『夏』と呼ぶ殷総監も……どうやったら、あんな人間が出来るんだ？」

求持星の問いは洪破人には向いていない。ただ、そんな疑問が口からこぼれただけであつた。

男達はぞろぞろと門を潜って出て行く。太史奉の命で寝ていたのを叩き起こされて召集されたのだろう。洪破人はその後姿を見送ってから呟いた。

「全く、俺達は役立たずだって証明しちゃった……。って、あんたは違うぜ。あんた……俺とやった時、加減してただろ？ 全然動きが違ったもんな」

「そんなつもりは無かったが……ただあの時既に、本当は倚天剣などどうでもよくなっていたのかも知れないな」

薄明かりの中で浮かび上がる求持星の横顔を洪破人は見つめた。

出会ってから今まで、この求持星の顔には常に影が差しているとでもいうのか、疲れきった表情しか見ていない様に思われた。

「行こう」

再び二人は歩き出し、屋敷の中へと戻って行った。

第八章 十四

翌朝、求持星は既に日が昇って気温の上がった部屋で寝苦しさを感じて目を覚ました。もう昼近くになっているだろうか。外は快晴で、重い体をゆっくりと動かして寝台の近くにある窓を開けると緩やかな風が顔を撫でた。

暫くそのまま佇み、目を閉じる。何かを考えようとしたが思う様にいかず、軽く頭を振ってから寝台を離れる。陽に当たるとじんわりと熱を感じるが、窓の反対側は日陰になっていて裸足でそこに入ると足の裏がひんやりとしてこれもまた心地良かった。

（これから何をすれば……？ 何を、させる？）

徐々に頭の中が動き出し、そして周維の言葉を思い出す。

『御山おやまを知っています。中々の太い繋がりが――』

（……あいつらが山から来たんだとしたら、あっちは稟施会仲間だとは思っていないという事か？ 太い繋がりが……周維は俺と『山』が関わりを持っている事を確実に知っている……。だが俺の知っている事を教えろ、とも言った。知っているのか知らないのか一体……？ まだ……まだ分からん……）

その時、部屋の扉を軽く叩く音がして求持星はそちらを向いた。扉の向こうに人が立っている。

「……」

求持星はどう声を発しているのか分からず沈黙したままだった。

「夏かだ」

立っているのは夏天佑だった。その声を聞いて寝起きの頭が一気に覚めたが、安堵した様な気持ちになる。

（周婉漣じゃなくて良かった……）

求持星は扉に歩み寄り、ゆっくりと開く。夏天佑は昨晚と変わらないよれよれの野良着姿で、すでに一仕事してきたのか膝の辺りが土で汚れていた。

「起きたばかりかな？ すまん」

「いや……」

求持星は後は何も言わずに夏天佑を部屋に招き入れ、

「閉めた方が？」

扉に手を掛けたまま訊く。

「今日は久しぶりに風が気持ちいいな。あんたが良いならそのまま。誰か来たらすぐに分かるしな」

夏天佑はにやりと笑い、

「話を聞きたくてな」

部屋に一脚だけあった椅子に腰を下ろす。

「あー、横になってもらっても俺は構わないぞ」

他に座れる所は寝台くらいしかない。求持星は寝台の端に腰を下ろした。

夏天佑は足を放り出して椅子の背もたれに体を預け伸びをした後、目を閉じて長く息を吐いた。

（若い……どうみても俺より若い……）

求持星はちらっと目を遣り、夏天佑の姿を観察する。

（これは……人か？）

「あの二人組の事じゃないんだ」

両手で顔をさすりながら、夏天佑は言う。

「劉毅に殺されたっていう喬高の話をもっと詳しく聞きたくてな。

二人組の方は俺は関係無い」

求持星は夏天佑を真っ直ぐに見る。もう何も隠す必要は無くなった——そう考えている。

「……喬高様と俺は関係がある。あの二人組は俺と関係がある。……繋がると思う」

「ほう」

夏天佑の口の端が僅かに上がる。面白そうだとも思ったのか、求持星の話に期待を示す様に上体を起こして今度は前へ傾けた。

「劉毅が喬高を殺すなど、方崖は何も言わなかったのか？ まさか

隠し通せる筈も無かろうに。それとも……まさか方崖の意思、か？
喬高の奴は一体何をしでかしたんだかな？」

夏天佑が訊ねると、求持星は体を夏天佑に向けて改まった。

「その前に、あんたが殷総監なのか、そうでないのか、知りたい」

「ん？ 俺はてつきり、もう俺を殷汪だと思い込んだに違いないと諦めていたところだが……殷汪は死んだろう？ 劉毅が確認した」

夏天佑は真顔で淡々と答える。

「殷総監かどうか、というよりも、あんたがどういう人物で北辰と『今』どんな関係なのかが知りたい」

「なるほど。得体の知れない者には話せない事を知っているという事かな？」

求持星は沈黙をもって答えた。間を置いてから口を開く。

「……『死んだ』という話は方々に広まって誰でも知っていておかしくは無いが、劉毅様が確認したというのは北辰の人間か、かなり近い者にしか知り得ない事の筈。あんたはどうしてそれを知っている？」

「近いというか……俺は殷汪と昔から付き合いがあったな。その繋がりで北辰の中にもそれなりに見知った者が出来た。求さんよ。俺は殷汪とそんなに似ているか？ よく見てくれよ」

夏天佑は微かに笑ったが、顔がよく分かるように求持星を見る。

「いや……。似ているという程ではないと思うが……。周……周婉漣との関係は？ 教主でも殷総監でもないというあんたに、随分と……丁寧な接し方をするのはどうも違和感を感じる。七星の、しかもあの周婉漣が、と」

「あの周婉漣、か。ハハ、一体あいつはどう思われているのやらそれも興味があるが……。求さん。俺は呂州の出で、殷汪もそうだ。俺がまだ餓鬼の頃知り合った。歳は向こうが一回り程上だ」

「殷総監は確か、五十も半ばの筈。ではあんたは四十は超えている筈だ。しかし、そうは見えない」

求持星はまるで問い詰めるような鋭い視線で夏天佑の反応を窺っ

ている。

「ま、色々と教わってな。あんたも聞き及んでいると思うが殷汪は人じゃないなんて噂もあるくらいだ。『死ぬ』なんて意外だった……」

「殷総監と、そんな口調でいつも話していたのか？ 歳が一回りも違えばそれなりに――」

「江湖の殷汪に対する印象ってのは随分変わっているからな。殷汪も俺も、ただの田舎の百姓なんだがな。元はな。呂州に居た頃っていうのはつまり、殷汪が咸水に住むよりも前の事だ。仲が良かったというか……歳の違いをそう意識した事も無かったな。北辰に行つて総監なんていうお偉いさんになっちまった後も、変わらなかった。お偉いさんと親しいというのは色々と得する事も多かったよ。方崖にだって上がったんだぞ？ ま、あまり堂々とは入れなかったけどな」

「あんたは昨夜話の中で周婉漣に『自分を捕まえに来たんだろう』と言っていた筈だが」

「よく覚えてるな。殷汪が人を切って飛び出したんだぞ？ あいつらは俺が殷汪と親しかった事を良く知ってる。俺が匿ったりするかも知れんと思っただんじゃないか？ 劉毅もそうだ。だからあんたに『夏天佑』の名を聞かせた――」

「……少し無理がありそうだが」

求持星が少し遠慮がちに呟くと夏天佑はにやつと笑って、

「フフ、ちよつとずれたな。倚天劍だろう？ 劉毅は倚天劍と俺を直接繋げて話していたんだったな？ 殷汪と夏天佑ではなかったと

……。ふむ、その辺はもう少し練る事にしようか」

第八章 十五

この男の態度は一貫していない。自分は夏天佑であって殷汪では無いと主張し続けたかと思えば、不意に夏天佑を装っている風な言葉を恐らくわざとに言う。殷汪ではないと思わせたいのではなく、ただ混乱させて楽しんでいるのではないか？ 殷汪という人物は人々の噂から来る印象だけみてもかなり特殊な存在であり、本当に別人であったとして人々に殷汪だと思われて平然としていられるのなら、この目の前に居る百姓姿の男もやはり只者ではなかうと求持星は考える。

（周婉漣も、この者を殷汪と思っている様だが……顔も少し違うのに何故そう思える？ 俺だって方崖の殷汪の顔は覚えている……）

「とにかくだ。俺は北辰教に追われる立場だ。いや、正確には劉毅や周婉漣だけかもしれないが。方崖では殷汪は死んだとちゃんと思っ込んでくれているらしいからな。今のところは」

夏天佑はまた求持星の頭の中をかき回す様な事を言って微笑んでいる。

求持星はじつと夏天佑の目を見つめた後、静かに話し始めた。

「喬高様の件……俺もはっきりと知って把握している訳じゃない。全ては想像でしかない」

「言ってくれ」

「……殷総監が、方崖を出る少し前だ」

夏天佑が僅かに頷く。

「喬高様と我々、つまり九宝寨の一部の人間に命が下された。劉毅様によってだ。その時既に劉毅様は九宝寨を喬高様に預けていたんだ。真武剣派から方崖に向かう一行を襲え、という事だった」

「劉毅の命令？ もっと上からじゃないのか？ 引退した寨主一人の考えで九宝寨は動くのか？」

「実際に劉毅様が喬高様に何と言ったのかは知らないが喬高様がや

る事を決めた。方崖が――劉毅様に何か命じる事が出来るのは方崖だけだが――劉毅様に命じたのか、若しくは別なところが依頼したのか――。どうも他にその実行を望む者が居た様に思う。今思えば、だが」

「……それで？」

「真武剣派から殷総監に何やら贈り物をするらしいから、それを奪って方崖に行かせるなど……」

求持星は夏天佑の顔を注視して、『殷総監への贈り物』に反応を示すかどうかを窺った。夏天佑の視線はやや上を向いており何か考える風だったが、その様子以外は何も分からない。表情を読むのは諦めて求持星は話を続ける。

「真武剣派からの贈り物は……何故か千河幫せんがほうのヒョウ局がその護送を請け負った」

「北辰の一派が千河幫を襲う……か」

「俺は何かおかしいと思ったが喬高様は……そのヒョウ局の一行を完全に潰す、と……」

「奴は正気だったのか？ 方崖の命だったならまあ、それでも良いんだろうが、もしそうじゃなかったらただでは済まん。千河幫を敵に回すんだぞ？」

夏天佑は眉を顰め、本当に驚いている様子である。

「方崖からの命令だと言われたならその通りやるしかない。俺達には何も分からないから、ただ従うだけだ」

「それで、実行してしまった訳か。喬高はそれで殺される。方崖の命だったとしても『やり過ぎた』……劉毅に嵌められたか」

「本当にそういう事なのかは分からない。ただ、劉毅様と喬高様の仲はあの頃……良いとは言えなかった」

夏天佑は頷いて、また椅子に体を預けた。

ここまでは表面上はそれほど複雑な話でも無い。劉毅と喬高が仲違いでもして争い、喬高が敗れた。ただの喧嘩で緑恒千河幫りよくしやうのヒョウ局を襲わせるなど随分と大袈裟な罠を用いたものだが、そこには

幾つか疑問が浮かぶ。

喬高は既に劉毅にとってただの部下では無い。かつては部下であったが今は太乙北辰教教主の下に同列。しかも自らが方崖に喬高を七星に推し、それが認められたのである。劉毅は元々序列といったものに執着する様な者でもなく実利があればそれで良しとする類の人間であり、この方崖での序列等が仲違いの原因にはならないだろう。ただ、喬高がそうして七星の一人となったのは北辰の前教主陶峯が亡くなってすぐの頃、つまり十年程前の事であり、それから現在までの間に劉毅と喬高、それぞれの立場に何か変化が起きていてもおかしくは無かった。それでも特に教主に近い存在である七星の一人が死んだとなれば方崖は放っておける筈が無い。まだ、何かがある。

北辰の七星。これはそういった名の北辰教における職名ではなく、元々前教主陶峯が選んで身近に置いた者達を、その存在を知る江湖の人々が呼んだだけの名である。七という数字も現在七名居るからに過ぎない。前教主の生前には六名で、その後に喬高が加わる。方崖の長老衆も折角名の知れたその者達の存在を活用しない手は無いと、陶峯死後、『北辰七星』の名を前面に出して強力な武闘派は新教主の許にも健在である事を武林に知らしめようとした。喬高が加わる事には特に反対は無かった様である。九宝寨という大規模な盗賊集団で寨主を継ぐ人間であり、武で身を立てる事が全てといっても良いその世界で喬高が非凡であったのはまず間違い無い。

「で？ 喬高に付いて仕事しに行ったんだろう？ あんたはその後も劉毅に使われていた。今度の仕事は、俺か」

夏天佑は眉を持ち上げて軽く言った。それから窓の方を向くと眩しそうに目を細めて外を眺めている。風で顔の横の髪が揺れている。求持星はその様子を眺めた。

（この男も、俺も、逃げ切る事は出来ないんだろうな。この辺境ま

で来ても……。此処まで来ても、昨夜の様に追ってくる。この夏天佑も北辰を忘れ去る生活など出来ないのだろう。ましてや今は傍に周婉漣が居る。この男を追って――」

「劉毅を裏切るのか？ 辛いぞ」

夏天佑は窓の外を向いたままだった。求持星はそれを聞いて顔を持ち上げたその一瞬、ハツとなる。何も変わってはいない様に見えるが、今さっき夏天佑が口を開いた時の雰囲気はほんの僅かだけ、本当の年齢の殷汪に戻った様な、そんな声、そんな匂いに思えた。無論そんな殷汪の本当の姿など求持星は知らない。この世に知る者が居るのかどうかすら定かでは無い。ただ、今のは若い者の気ではない――そんな感じがした。

「劉毅様は俺を、喬高様と一緒に殺しても良かったんだ。ただ、殺す前に一仕事させようという事だろうな。逃げるかもしれないのに俺一人を放すという事は……。俺がこれから何をしようと、それは全て劉毅様の望んでいる事になるのかも知れない」

「フッ、求さんあんた、難しい事を言うな」

夏天佑は椅子の上で体を伸ばし、また目を閉じて長く息を吐いた。

第八章 十五（後書き）

※ヒョウ局Ⅱ＜金票＞局

第八章 十六

「昨夜の二人は……恐らく……」

「ん？ 思い出したのか？」

夏天佑は椅子にもたれ掛かったまま視線だけを求持星に向けて訊いた。求持星はぼつりと呟く様に言う。

「白珪山に上がった事が？」

「上がる？ ……まあ、おかしくは無いか。俺は『登った』事は無いな。登ってたら此処には居ないんじゃないか？」

夏天佑は笑って答えたが、求持星の堅い表情は変わらない。

「あんたは、登った事があるのか？ あの得体の知れない不気味な山に？」

夏天佑の問いに求持星は口を開く。だが音が無かった。

「登った」

掠れた小さい声で言い直す。

「本当か？ 白珪山だぞ？」

「ああ」

夏天佑は沈黙してじっと求持星を見つめた。

白珪山はこの国で知らない者は居ないという、誰も近寄らない霊域の山――。そしてこの国第一の壮麗さを持つ山である。その頂を目指して山に入った者は一人たりとも戻らない、魔の山とも神の山とも呼ばれている。

「……何があった？ それとも何も無かったか？」

「本当に知らないのか？ ……殷総監でも知り得ない？」

夏天佑は首を傾げ、

「何だそれは？ 北辰の総監と何の関係がある？」

「白珪山に人を閉じ込めているのは、邪悪で恐ろしい、人だ」

「……ハ、何だって？」

求持星は眉を寄せて鋭い視線を夏天佑に向けている。対して夏天

佑の方は薄く口を開いたまま呆然としている様子である。

「……邪悪で、恐ろしい？ 人？ 求さん……大丈夫か？」

「前教主と繋がりのあった一派が今もあの山に居るんだ！」

求持星は語気を強めて夏天佑に向かって怒鳴るように言った。

「それは……初耳だが……本当か？ 入った者が帰らないのも、そのせいだと言うのか？」

「近づいた者は全て殺すからだ。絶対に生かして帰さない」

「……無理だろう？」

白珪山の名で呼ばれるその範囲は広大で、一体どれだけの人員を配置すれば求持星の言う様な事が可能なのか、考えるのも困難である。どこまで山に分け入れれば近づいた事になるのだろうか。

「……頂は一つだ」

「まあ、そうだろうな」

「方崖との今の関係は知らない。だが、劉毅様は度々山に上がっている。昨夜の二人は、その白珪山の者だと思う」

夏天佑は今度は開け放たれたままの部屋の入り口の方を眺めて黙っている。陽を浴びた明るい緑が中庭で揺れていた。

「まだこの江湖にも面白い話があるんだな」

そう言って夏天佑はゆっくりと立ち上がる。

「……信じない、か」

求持星は膝に視線を落とす。確かに信じ難い。白珪山に棲むのが魔物から謎の集団に変わっただけで全く信憑性は増していない。国中の人々が畏敬の念を抱く神秘の山には人間よりもまだ魔物の方が似合っている。実際に見ない限り信じられるものでは無い。

「いや、そうじゃない」

夏天佑は寝台に座る求持星に背を向け、入り口に向かって立ったまま言った。

「一度に聞いても理解出来そうにないしな。またいずれ聞かせて貰おう」

「……ああ」

「邪魔したな」

夏天佑は求持星の方には振り返らず、そのまま部屋の外へと歩いて行く。求持星はその後姿を見送りながら、

（既に知っているのか？ 聞きたくないのか？ 興味が無いのか？）

と、疑問を繰り返す。

（あの殷汪だ。相当変わってる）

ぼんやりと見ていた夏天佑の体が、部屋を出た所でぴたりと止まる。求持星は目を見開いた。

（何だ？）

夏天佑は真っ直ぐ中庭の方を向いて立ったままじっとしている。

次の瞬間、求持星が体を強張らせて目を細めた。

風――。夏天佑がこちらに向けている背中から猛烈な風が一気に巻き起こる、そんな感覚を覚えて求持星の胸が早鐘を打つ。

動けない。いや、今から動いてももう遅い。風は既に求持星にぶつかり、後方へと去っている。求持星は恐る恐る瞼を開き、正面の夏天佑の背中を見た。それはまだじっとしたままそこにある。その体からは刃物の如き鋭い気が放射されている様でありながらもその輪郭がまるで陽炎の様に揺らぎ、夏天佑は力を込めた拳を下げたま顔を正面に向けていた。

（い、殷汪……）

夏天佑の顔が僅かに左に向く。後ろからではその目は見えない。しかし、口の端だけが求持星にも僅かに見る事が出来た。

（……笑っている？）

確かに夏天佑の口元は僅かに笑みを浮かべていた。

夏天佑の顔はゆっくりとまた正面を向き、そのままこちらに振り返ろうとする。それに合わせるかの様に求持星は思わず背中を仰け反らせた。頭が考えるより先に体の芯から沸き上がる反応――。

こちらを向いたその顔からは笑みが消えていた。その後改めて求持星に向かってにやっと笑いかける夏天佑。先程の口元だけの笑み

とは全く違う、ごく普通の表情だった。

夏天佑は歩き出し、部屋の前から姿を消した。

（な、何だったんだ？ 今のは……）

求持星は寝台に腰を掛けたまま、先程夏天佑の立っていた場所を呆然と眺めている。そうしていると、暫くしてから不意にふわりと白い色が視界に入ってきた。そしてそのまま留まる白。求持星はハッとなって顔を上げた。

（周婉漣！）

部屋の正面に夏天佑と入れ替わるように立ったのは、周婉漣であった。ずっと部屋の近くに居たのか、偶然、今通り掛かったただけなのかは分からない。

周婉漣は部屋の中の求持星を見る事無く、俯いた姿勢で通り過ぎて行った。

第八章 十七

その後は暫く周婉漣の姿を見る事は無かった。殷汪を追ってこの城南まで出るばるやって来て、一体、今此処で何をしているのか見当もつかない。

（まさか殷汪が此処に居付いているから自分も此処で暮らす……？

そんな女じゃない筈だ）

そんな女かどうかなど分かる筈が無いのだが、漠然とそう考える。同じ北辰教の人間であったと言うだけで今まで接点があった訳でもなく、声を聞いたのも昨夜が初めてである。求持星の中の『周婉漣像』は北辰のかつての仲間や江湖の噂で出来ている。

（俺が九宝寨の……北辰の人間だったから警戒しているのか？ もしそうなら本気で殷汪にこのままついていく……？ フツ、確かに俺に対しては『七星周婉漣』だが、あの殷汪の前では、ただの女になってしまいうらしいな。俺はもう北辰を捨てた。何とか警戒を解いて貰いたいものだ……）

求持星は時折部屋を出てはみるものの、何をすれば良いのか本気で悩んでいた。前日この街に着いたばかりである。寝て過ごしても良いのではないかとも思うが、部屋にいてもどうも落ち着かない。夏天佑は鍬を担いで何処かへ土を掘り返しに行っているらしい。確かに、何もせずこの屋敷にじっとしているよりは遥かにましに思える。

「えー、求さん、でしたなあ？」

部屋の前の回廊から中庭を眺めていた求持星に声を掛けたのは通り掛かった葛林であった。

「よう休みになったか？」

「……まあ」

「この街に何か用で来なったあな？」

「いや」

「旦那様は何だかんだゆうてうみやあぐやあに人を連れて来なるでなあ。あんたもご苦労さんだ」

葛林の言葉は訛りがひどく、あまり長く話されると意味が分からなくなる。九宝寨にも様々な土地の者が居て色んな方言を耳にしたが、この葛林の喋る言葉は初めて聞くものだった。

求持星は苦笑いを浮かべて相槌の様にも見える曖昧な反応を返し、

「あの周漣という方も、周維どのが？」

「ほうだ。どっかで出会ったゆうて。最初、嫁にするんか思ったっちゃ。こんな処まで来るくらいだで？ 普通けえへんわやあ。女の人が」

「周維どのはまだ独り身かな？」

「ほうだっちゃ。はよ嫁さんもらわんと」

葛林は眉間に皺をよせて首を振った。この老人は周維の父親がそれ以上の歳で、こんな話をしていると本当に父親の様に見える。

「夏天佑どのの知り合いだった――」

「それでだあな。こんなとこまで来たんは。旦那様から聞いただろうで。夏さんが居るゆうて。あれは相当想つとるんだろうでえ。見とって分かるものに」

「ほう？」

「夏さんはまだ若いで鈍いだあな。男はあほだでなあ、気付けへんだっちゃ。まあ儂らあくらい長いこと女を見てきとるもんはちょっと見ただけで分かるで？」

「ハハ……それは凄い」

「周漣さんみたいない別嬪に惚れられるなんて羨ましいわ。それに武芸まで出来るわやあ。昨日の変な奴ら周漣さんがやつつけただってなああ？ ほんま凄いわ」

葛林の舌の動きは益々加速していく様だ。求持星は相槌を打ちながら、

（確かに凄いさ。その本性を、女を見る目の肥えたあんたでも気付

かない様に隠してるんだからな……)

そう心の中で呟いて葛林から中庭へ視線を戻した。

「あーそうだ。一緒に来なった劉さんは、なんだ、旦那様と出て行きたったで。あんたも街見て来なかったらええわ。中原から来なかったら結構面白いやあうか」

求持星が頷いて見せると、葛林は笑って顔を皺だらけにしながらこの場を去って行った。

(……秘伝書、と、息子か。どうやら此処には訳ありの者ばかりが集まるようだな……。集めている?)

求持星は暫く中庭の緑を眺めてから立ち上がり、部屋に戻った。

「求さん? よろしいですか?」

午後になって部屋の寝台でまどろんでいた求持星は声のした方へゆっくり顔を向けた。

(今度は……周維か)

求持星は体を起こして寝台に座り、声に応じた。

「お休みのところ申し訳ありません」

「この先ずっと休んでいる訳にもいくまい? ただ飯を喰らって寝るだけの客を抱えてあんたに得は何も無い。何か、仕事でもくれるのか?」

周維は何か思惑があって求持星をこの城南まで連れて来た筈で、稟施会の金持ちなら尚更金にならない事などしないに違いない。

「んーそうですね。仕事、と言えば仕事ですね。求さんが宜しければ手を貸して頂きたいのです」

周維はいつもの扇子を手いつもの微笑を湛えた表情で言った。求持星は周維の持つ扇子が開かれるのを見た事が無い。扇子として使う事は殆ど無いようだが相当気に入っている物なのか、大抵、手に持っている。

求持星は目の前の瀟洒な身形で佇む青年を改めて観察した。だが特別変わった処は何も無い。ずっと同じ、一風変わった男のまま

あつた。

「俺は土いじりは出来ないぞ？ 全く経験が無い」

「ハハ、勘違いしないで下さいよ？ 夏さんが西の開墾に行っているのは、彼の趣味の様なものです。誰も命じてはいません。夏さんに命令なんて……誰に出来るでしょうか？ フフ……」

周維は怪しい微笑を浮かべて求持星を見ている。求持星は周維が気付かない程度の小さな溜息をついた。

（この男はいちいち回りくどいな。言いたい事をそのままはっきり言う事は無いのか？ ……あまり人に好かれる男では無さそうだ）
「取り急ぎ私を取り掛からねばならないのは、劉さんの件です。戻ったばかりですがゆっくりはしてられません」

「本当に、あの劉の息子がまだ生きていると思ってるのか？」

此処に来る道中、劉健和は『覚悟は出来ている』と言っていた。

既に息子が殺されている可能性は高い。まず間違いないと言っても良い程に――。

周維はどう思っているのか？ 稟施会を使って探すのだろうか、本気で息子を助けるつもりでは無いだろうと求持星は想像している。稟施会の狙う的は秘伝書の方だろう。息子を助けるなどと言うのは表向きの事であって、そしてそれはごく普通の態度である。噂に聞こえる稟施会は『情』は取り扱わない。

「死を確認した人にとって、その人は死人です。しかし確認していない者には、そうじゃない。『死んだ』と聞いたとしても、それだけでは完全に死んでないのです。劉さんも私も、まだ息子さんを見てもいない。だから彼は今、生きています」

周維はそう言って求持星を見つめる。求持星は視線を床に落とし黙っていた。

第八章 十八

「ですから、我々は探します。求さん、手を貸して頂けますか？」

「俺は……追われている人間だ。具合が悪いだろう？」

「フフッ、ではもう一人追われている人を付けますよ。二人なら求さん一人が気にしなくても良いでしょう？」

「……殷汪を使うつもりか？」

「彼は、夏。夏天佑さんですよ、求さん。ハハハ」

どこがどのように面白いのか分からないが周維は破顔し声を出して子供の様に笑う。

（この男の腹を探るのは難しい、というより疲れる。何か訊いても真っ直ぐ返ってきやしない）

求持星は周維に訊きたい事が幾つかあるのだが、そのどれもがまともに答えを得られそうに無いものばかりなのでとりあえず当分は諦める事にした。

「求さん。今宜しければ一緒に来て頂きたいのですが。稟施会です。劉さんも行ってますし、今、夏さんも呼びに行かせてます。是非皆さんのお力をお貸し願いたい」

求持星は黙って周維に向かって頷き、立ち上がった。

求持星が周維に連れられて来たのは随分立派な目立つ建物だった。何も言わずにさっさと入っていく周維の後ろで求持星はその楼閣を見上げてから入り口へと向かった。何をやる場所なのかは何の説明も無いので分からないが、恐らく稟施会の屋敷は此処だけではあるまいなどと考えながら周りの様子を窺いつつ奥へと進む。

「求持星どの」

周維に続いて部屋に入ると、すぐにその部屋の中央に居た男が声を掛けてきた。男は周維では無く求持星を見ている。

「あなたは……」

「稟施会の太史奉と申します。我々の不手際で賊の侵入を許してしまい、申し訳ござらぬ」

太史奉は腰を折って深々と低頭し詫びた。

「いや、あなた方はもう良くご存知と思うが、あれは私が招いた様なもの。こちらこそ――」

「あの者達は稟施会の主の屋敷に侵入したのですから、もうあなたと奴らだけの問題でもない。既に素性を調べるよう手配致しました」

「あいつらは……」

「また後ほど、あなたがご存知の事もお聞かせ頂きたい」

昨夜の二人組の事は求持星が一番良く知っているという事を、太史奉は理解している様子である。周維あたりが聞かせたのだろう。

太史奉はとりあえず今はこの話は終わりだ、とでも言う様にさっと身を翻して中央の席を周維に明け渡し、横に控える様に立った。

部屋には太史奉の他に劉健和と洪破人が居る。

「で、求さん。今私達は徐を追う為の算段をしていたんです。出来るだけ早く動く方が良い」

中央の席に着いた周維は、腕を伸ばして求持星に空いている席に座るよう促しながら話し始めた。

「この城南の稟施会には色々な情報が集まって来ます。しかしやはり辺境ですからそれなりに日数も掛かります。既に届いている知らせだけではまだ厳しいのですが、うちの者が各地で情報を今も吸い上げている事は確かですから、それらをこちらから拾いに行く方が早い。やっと旅を終えたところで何ですが、出来るだけ早くに。求さん。是非協力をお願いしたいのです」

「求どの」

劉健和が周維の話の後を継いで求持星に向き直った。

「いきなり無理難題をお願いして申し訳無い。その……私の様な……」

劉健和は中々言葉が思いつかない様子で、困惑の表情を浮かべている。この城南に来る途中で突然同行する事になり、会ってからま

だ半月も経っていない。お互いまだ何も知らないというのに、この広大な国の何処かに居る自分の息子を一緒に探してくれというのは随分と厚かましい要請である事は劉健和もよく分かっていた。

「あんたが気にする必要は無い。稟施会が俺を雇いたいと言っている——そういう事だな？」

求持星は劉健和に言ってから周維に向き直って訊いた。

「『そういう事』ですねぇ」

周維は横に居る太史奉を見上げた。太史奉が言う。

「あくまでも求持星どのにもご協力をお願いする、という事です。ご要望があれば必要な物は全て準備、手配致します。無論、報酬も……」

「俺の命は周維どのに預かって貰っている。何が出来るのか分からないが逆らいようが無い」

求持星がそう話すと、太史奉は訝しげな表情を周維に向けた。『まだ聞いていない』話だったのだろう。

「そうでしたかねえ？ いや、そう思ってもらえているのなら気が楽です。ハハ」

周維だけが笑い、他は真面目な表情を崩さない。洪破人は少し離れて控えており一言も喋っていないかった。

「で？ 既に入っている情報とは？」

「暫しお待ちを。もう夏天佑どのも見える頃でしょうから、皆揃ってから……」

太史奉はそう言う一人、部屋を出て行った。

城南市街地の西の端、視界一杯に荒野を望むの丘陵の麓に、少し大きめの納屋らしきものが建っている。そのすぐ近くに数人、辺りの開墾作業に従事している男達が集まって地面に座り込んで話していた。若者も老人も居て皆同じ様な格好をしている。作業の合間の休憩といった感じであった。

「王さん。そろそろこの手前の方は働かせんとあかんちゃあうか？」

奥はまだ見通しが立ってへんし、こっちはもうだいぶ放つたらか
しだあや。草あ育てとるわや」

「そうだなあ。しかしまだ具体的にどう使うか決まっとらんからな。
太史さんの話ではもう何人か人を呼ぶ事は決まっておるそうでな。
実際に使う者とも協議せねばならん」

「全部王さんが仕切ったらええだあな。その方がぜってやあ（絶対）
効率ええっちゃ」

「恐ろしい事言うな。ただでさえくたびれておるというに、これ全
部面倒見ろと言うのか？　すぐに腰が立たん様になつてしまいうわ」

「でもなあ。儂らあが王さんに色々聞いても難しすぎるわ」

「それゆえ太史さんが国中から『凄腕の百姓』を集めようとしとる
のではないか」

「ハハ！　凄腕か。そりや確かにすげえなあ。でもその人らあを待
つとる間にまた土がくたばつたらあかんわやあ？」

「その辺もちゃんと考えておる。お前達は奥をいかに早く進めるか
だけ考えておれ」

中央に居るのは王という老人で、周りに居るのは喋り方からして
この地元の者であろう。この王老人が稟施会が進める開墾事業の中
心人物で、この者もまた稟施会がこの城南に招いた事業の指導者で
あった。今、王老人を囲んでいるのは稟施会に雇われた地元の住人
達だが、雇われているのは地元の者だけではなく、この開墾事業の
話を聞き職を求めて他所の街からやって来た者も数多く居る。未だ
荒野を切り開くといった段階であり、とにかく人手が必要なのであ
る。

第八章 十九

納屋の前で話している者達からほんの少し離れた処に、弱々しく傾いている小さな柵にもたれて地面に足を投げ出して座っている夏天佑の姿があった。目を閉じ、手も地面にだらりと下げたままゆつくりと深呼吸を繰り返している。傍目には居眠りをしている様にも見えるが本当のところは分らない。夏天佑は少しでも仕事に間があればこんな風に目を閉じて深呼吸をしていて、共に作業している者達は当初『どこか具合でも悪いのか』と尋ねたが、夏天佑は『大丈夫だ』とだけ言って薄く笑うとまた目を閉じる。皆もうその夏天佑の様子を見慣れてきていた。

「夏さんはほんまよう寝るなあ」

「それが力の源っちゅう事か？ あんだけ動いて汗一つかかへんだもんにい」

「あいつ、武芸が出来るちゃうだ？ 剣でも鋤でもお手のもんだあや。ハハ」

話し声が聞こえない距離でもないが夏天佑は呼吸の度に腹を動かすだけで他には何の反応も示さない。王老人も夏天佑の方を向いて僅かに微笑んだ。

「武芸では食っていけへんだあ？」

「さあ？ それこそよっぽど凄腕とかだったら仕官の口もあるだろうけどなあ」

「なんだ、周の旦那が雇ったちゃうだあ？」

「ちゃうだろ？ そうだったら何で毎日此処でこの作業に加わる？」
王老人が夏天佑を眺めながら溜息をつく。

「ずっと此処で儂らと共に働いてくれれば良いが、そうもいかんのだろうのう……」

「え、何でだ？ どっか行くんか？」

「そもそもこの仕事したくて此処来たんちゃうだったら、何しに来

ただ？」

「天佑は、週の旦那が招いた客人。あの旦那が何の理由もなく人を連れて来たりはせんだろう。今はする事が無いと言っておったな。天佑は元々農と同じ呂州の百姓であったそうだから暇を潰すのには良いのだろう。だからこうして農らと居るのだ。多分、稟施会は別の仕事で呼んだのだろうな」

「何するだろうな？」

「そんなもん、農らに分かるかいや。稟施会だで？」

「まあ、そうだあ」

一日中肉体労働に従事している男達であるがどの顔も特別疲れた表情も見せず、この休憩の合間ずっと話で盛り上がっていた。

「さて、そろそろ戻るぞ。今日の分はきっちり終えておかんとな」

王老人が言くと、周りの男達はのそのそと体を動かして立ち上がった。夏天佑もその気配を感じて目を開け、ゆっくりと立ち上がる。男達は皆、鍬に鋤、或いは斧などを手にぞろぞろと歩き出す。王老人がその後ろで夏天佑の方を振り返った。

（ん？ あれは……）

夏天佑の傍にいつの間にか男が一人居て話し掛けていた。王老人はその男を見知っており、それは稟施会万乗閣にいつも居る小間使いの男であった。王老人は引き返して夏天佑とその男の傍へ歩み寄った。

「稟施会の呼び出しかな？」

「太史奉様が夏天佑様に万乗閣へお越し戴きたいと……」

稟施会から来たその男はそう言って王老人に向かって低頭する。

「話をすれば——だな。気味が悪いな」

夏天佑は王老人に向かって笑い掛けながら言った。

「全くだのう。まあ、まだ何の用か分からんからな」

「長くならなければまた戻る」

「ああ、そうしてくれ」

夏天佑は手にしていた鍬を肩に担ぎ、王老人と別れた。

「正直、俺は今何を望んでいるのか、自分でも分かっていない……」
劉健和はぼつりと呟く。稟施会、万乗閣の一室。周維と洪破人、求持星は黙って劉健和を見つめていた。

「息子はわからんが、親父が殺された事は紛れも無い事実。見つけた時のあの無残な姿を一生忘れないだろう。だがそれで、俺は……何かしなければならぬのか？ と……」

劉健和はずっと俯いたままで誰とも目を合わせない。

武慶で周維や洪破人と初めて会った時、劉健和は方々を渡り歩く世慣れた商人といった感じであったが、今の、心情を告白するその姿はまるで叱られるのを分かっている子供の様で、身を縮めて小さくなっている。

「俺は徐を捕まえてどうしたいのか……？」

親を殺されて黙っている子。これは不孝であると人々は言うだろう。仇を措いて責めない者は人ではないと、人々が『子』を責めるに違いない。

劉健和の言葉は弱々しい。しかし、そのように責められる事はどうに覚悟していると言う様に、続けた。

「分からない。自分が分からない。徐は……奴は憎い。しかし、俺に何が出来るんだ？」

「あんた……、だから稟施会に頼んだんじゃないのか？」

求持星が劉健和に尋ねる。まだ多くを聞いていない求持星はてっきり劉健和が自らの復讐の為に稟施会に助力を依頼したと想像していた。相手の徐というのがどういう人間なのか知らないが、恐らく一介の、ごく普通の商人である劉健和が一人でどうこう出来る相手では無い筈で、その復讐を遂げる為により力のある者に助太刀を頼むのは当然の事である。

大抵、人に仇なす者というのは凶悪な江湖のあぶれ者で、その被害者は何の力も無い善良な庶民。泣き寝入りするしかない場合も多いが、そういった時には助太刀を買って出る者が出てきたりするも

のだ。それは個人であつたり組織である場合もある。特に武林に属する勢力は、これらを耳にして放って置く事は殆ど無い。どんな小さな事件であつても余程手間のかかる事態でなければ、彼らはまめに動き仇討ちに加勢する。それは義侠の行いであるからである。少なくともその義侠心というものを江湖に示す事が出来る。穿った見方をすればそういう事なのだが、実際に仇討ちを望む、力の無い者にとつてはこれほど心強いことは無い。仇を討つというのは戦う事であり、武林の人間はそれが生業と言って良い。お互い利害が一致するのだから当然となる。

「劉さんに頼まれた訳ではありませんよ。私の方から言い出したのですから。『力になれる』と。私が言うのもなんですが、稟施会にも、色んな事が出来るのでねえ」

周維が求持星に答え、劉健和の方を向いた。

「劉さん。深く考えなくても良いのです。誰でも突然こんな事になれば戸惑い、迷う事になる。縁あつて私はこの事件に立ち会う事になった。こんな言い方は失礼かとも思いますが、私は他人だ。劉さんの不幸を外から見ている。しかしだからこそ冷静に考える事も出来るのです。私は何としても徐を劉さんの前に引っ張り出します。その時、劉さんは自分の思う事をすればいい。私達にさせても構いません。当事者のあなたが徐に対してどうしようと、それを外からどうこう言う権利は誰にもありませんから」

第八章 二十

「なぜあんたはそこまでする？ 他人である劉さんに？」

劉健和に代わって訊ねる求持星。

「それは……私がそうしたいと思うからです。フフ、それが出来れば私は気分が良いでしょうね。劉さんを助け、『良い事をしたな』と感じる為ですよ」

「……」

求持星も劉健和も黙っている。周維の言った事は本心に違いない。ただ、実際に自分の欲する事として口に出す人間を見たのは、二人共初めてであった。求持星が問う。

「……劉さんの為では無い、と？」

「はて？ 何故そう思うのですか？ 劉さんが徐はもう放っておくと決めたのなら私の出る幕はありません。しかしまだ大事な息子さんも捕らわれたままではないですか。息子さんを助け出す事が劉さんの為にならないなんておかしい」

周維は穏やかな表情のまま求持星を見つめている。求持星は視線を逸らして下を向く。

「……偽善も善の内、か？」

求持星の呟きを耳にした周維はその口元に微笑を浮かべる。

「さて、どうでしょう。夏さんはどう思います？」

急に周維が夏天佑の名を呼んだので求持星と劉健和が顔を上げ、後ろの部屋の入り口を振り返る。そこには太史奉に呼ばれて戻ってきた夏天佑が鍬を杖代わりにもたれかかって立っていた。その後ろには太史奉が居る。

「そうだな……程度の問題だ」

夏天佑は鍬を入り口の横の壁に立て掛け、空いている椅子に向かって歩きながら言う。

「偽物にも使い道はある。真なるものは一切弊害を生まないという

のは幻想だ。そもそも人は真か偽かという二つのみに分類して短絡的に処理したがるものだが、それは怠慢というものだ。人には、畜生よりはましな頭が付いているのだからな。……何をするのか知らんが、する事が既に決まってるのに今更善だの何だのと考えるのか？ 自分にも善くて人にも善いなら善は二つだ。実に結構な事だと思うが。目的を達するには何が有用で何が害をもたらすか――投げずに根気良く時間を掛けて考えていれば少しは答えに近づくだろう」

「ゆっくり考える時間は無いんですよ。残念ながら。しかし、私は劉さんが望まぬ事をする気は全くありません。絶対に。求さん。それでも駄目ですか？」

「俺は何も……駄目とか思ってる訳じゃない。稟施会の手を借りるしか手は無いんだから……劉さんが決める事だ」

求持星は再び周維から目を逸らし、劉健和の表情を窺った。劉健和は周維を真っ直ぐ見ている。

「情けない話だが正直言って、俺一人だけだったなら何もかも捨てて逃げ出したかった。だが周さんが手を貸してくれると言ってくれたおかげで徐々に、何と言うか……やる気みたいなのが湧いてきたのも確かなんだ。まだはつきりと自分の気持ちが整理出来た訳ではないが……こんな俺でもまだ手を貸してくれるのならこんなにも有難い事はないと思ってる」

劉健和の声はまだ力強さを取り戻してはいなかったが、その表情は僅かに明るなものになっていた。

太史奉が進み出て周維の横に立つ。

「稟施会は当主の意向に違わず、劉健和どのに助力致します」

太史奉のあまりにかしこまった物言いに夏天佑は眉を顰め、首を回して後ろに控えている洪破人を見る。しかし洪破人は黙ったまま何も言わなかった。

「劉さん、一体何をする気だ？」

夏天佑の問いに劉健和が答えるより先に周維が口を開いた。

「夏さんにもお手伝い頂きたいのです」

周維は武慶で劉健和と出会ったところから話し始め、徐という男を捕まえる為に夏天佑にも手を貸して欲しいという事を丁寧話す。夏天佑も、他の者達も一切口を開かずに周維の話を聞いている。周維は自分の知っている今の状況と予測をつぶさに説明したが、その話は劉健和や求持星は既に聞いている内容で稟施会が得た新しい情報というのは含まれていなかった。夏天佑はゆっくりと首を振る。「それが何故求さんや俺なんだ？ わざわざ此処まで来たのにまた中原へ戻れと？」

「特に問題は無い様に思えますがねえ？ 夏さんを追う者は恐らくたった一人だけではありませんか。求さんもです」

「劉毅か？」

「ええ。求さん。他に誰か居ますか？」

「劉毅には色々とお仲間が居るらしいぞ？ 求さん、そうなんだろう？」

夏天佑が言い、求持星は夏天佑と視線を合わせた後、周維を見た。「劉毅様だけではないかも知れない。だが今後は俺を追い続けるとは思えない。昨夜の二人組は倚天劍を手に入れたがっていた。劉毅様はあくまで殷総監を……。俺より夏どの方が危険になるだろう」
「おいおい、こんな汚い形なりの若造捕まえて『夏ど』は変だろう？
そうだな……。天佑でいいぞ。いや、そう呼んでくれ」

まるで話を完全に断ち切る様に夏天佑は笑いながら求持星に言う。自分が狙われるという話よりそっちの方が重要とでも言う様である。周維がすぐに話を戻す。

「求さん。昨夜の二人は劉寨主……。いや、今は違いますかね？ ああ、喬高が亡くなったのであればやはり劉毅が再び寨主かな？
……彼の配下では無いと？」

「……かも知れないと思ったただけだ。そっちで調べてもらった方が確実だ」

周維の横に立っていた太史奉が周維の傍に体を傾け、
「手配しております」

「ふむ……。どちらにしてもそれなら大丈夫ですね。狙いが皆、夏さんに向いているなら」

「どういう理屈だ？」

椅子にもたれて手足を投げ出す様に座っている夏天佑が目だけを周維に向けている。

「劉毅は、夏さんの居場所を知ったなら、自分で来ますよ。何をするつもりか知りませんが相手が夏さんなら手下になんか当たらせないでしょう。全くの無駄だ。劉毅が来たら夏さんがおもてなしをして、そしてお開き。終わりです。他にも夏さんにお会いしたいという人が居るのなら、劉毅と同様に訪ねて来ますが、来客はそう多く無いでしょう」

「フン。ちゃんと正門から来るなら出迎えもするが、大抵ああいう客はひねくれてるからな。特に劉毅なんてのはな。……面倒な話だ」

「それに劉毅なら、夏さんが何処に居ようがやって来るんじゃないですか？」

「おっと、劉毅が探してるのは殷汪であって俺じゃないからな」

「ええそうですね。全く彼の勘違いは本当に迷惑ですねえ」

周維は一人満面の笑みを浮かべて楽しそうに話しているが、夏天佑は無然として溜息をつく。求持星と劉健和は周維と夏天佑、二人の妙な掛け合いを黙って聞いているだけで何が何だか話が良く分かんなくなってきた。きつつあった。

第八章 二十一

「人は大勢此処に居るだろう？」

「此処からは既に樊^{はん}さん達が出ています。各地の支店の者も。しかしただ手を増やせば良いという状況でもないんですよ。色々ね」

「人探しの経験なんて俺には無いがな」

「では、秘伝書を追うというのはどうです？ 洪^{こうしゅくか}淑華の遺した秘伝。一番欲しがるのは誰でしょうねえ？」

「洪淑華？」

夏天佑が椅子に預けていた体をゆっくりと起こす。

「ええ。洪淑華ですよ。夏さん」

周維は急に笑みを消し、真剣な表情で夏天佑を見返した。

「劉さんが持っていた秘伝書がそうだと言うのか？」

周維は大きく頷き、劉健和に視線を移した。劉健和は夏天佑に顔を向ける。

「殺された親父が持っていた物で……本物かどうか分からなかったんですがとにかくそうだとしか言わず……」

劉健和は随分と丁寧な口調で夏天佑に説明する。求持星の時の様にその喋り方に夏天佑が何も言わなかったのは、劉健和には自分に親しく話し掛けさせたくないという事では無さそうである。洪淑華という名を聞いて夏天佑は顎に手をやりながら床を見つめて何やら考え込んでいた。

「洪淑華……」

「もし本物であつたなら持ち主である劉さんの手に戻さねば。手を離れる事になったとしても倚天劍同様、持つべき者の手にあるのが望ましいと思いませんか？ 徐が売り払ってしまえば行方は益々分からなくなります。夏さん。中原ではすでにこの話は結構広がっているのです。真武劍派も動いて――」

「真武劍派が？」

周維の言葉を遮り夏天佑は顔を上げて即座に訊いた。

「ええ。その秘伝書は一度真武剣の手に渡っています。総帥も見たと思います」

「……」

夏天佑は今度は周維の顔を見たまま固まってしまった様に動かない。

「すぐに劉建碩^{りゅうけんせき}どの、劉さんのお父上に返されましたが、直後にお父上は何者かに殺されている……」

「何者か？ 徐という奴じゃないのか？ まさか真武剣派がやった可能性もある、という事か？」

「それは何とも。しかしまあ徐が武慶から消えて、真武剣派はこれを追う体勢を取っています。そうなのか、そう思わせたいのか……」

「徐と真武剣派が繋がっているという事は無いのか？」

「んー、今の段階では考え難いですねえ。劉さんはどう思いますか？」

劉健和は首を捻る。

「全く考えもしなかった。今思い返してみても……全く接点は無さそうだが……。もし繋がりがあったのなら奴らに度々何かをさせたりする、という事だろう？ 徐と他のごろつき共はいつも何もしないで決まった宿にたむろしていたんだが、いつも周辺をぶらぶらするばかりで街の者から忌み嫌われていた。何かをしようとしていたとは聞いた事が無いな」

「秘伝書が本物、或いは陸皓が本物と思ってしまう程の内容だったなら、陸皓は絶対に手放さない。洪淑華の秘伝は絶対にだ」

夏天佑はまた床を睨んで考える姿勢のまま言った。その後は黙り込んでいる。

求持星は夏天佑の様子を横目で見ながら、

（陸皓を良く知っているのか？ 真武剣派の総帥と北辰の総監ならお互い見知っては居るだろうが……今のは、もっと深い繋がりがある様な……。何故陸皓が洪淑華の武芸にこだわるんだ？ 武林の大

家だから、それだけ興味を持つという事か？)

求持星の視線に気付かないのか無視しているのか、夏天佑はただじっとして考え続けた。

「他にもそんな人は居ますかねえ？　どうしても欲しがる人とか」
周維が夏天佑に訊ねる。そんな事を夏天佑に訊くという事は、夏天佑は洪淑華の秘伝書となにかの關係が昔からあったという事なのだろうか？　求持星と劉健和はそんな事を考えつつ夏天佑の様子を窺っていた。

「随分と良い餌を手に入れたものだな。それで劉さんを連れて此処まで戻ってきた訳か」

夏天佑の言葉に周維はただ笑みを返すだけである。

「何処まで行くつもりだ？　東方にはあまり近付きたくはないな。求さんはどうなんだ？」

「俺は……確かに北辰に近い処は遠慮したいが……だが徐がそっちに行ったのなら仕方が無い」

「洪、お前も行くのか？」

夏天佑は後ろを振り返って洪破人にも訊く。洪破人はこの時初めて口を開いた。

「命令なら」

「東淵でもか？」

夏天佑が洪破人の目を覗き込むように顔を傾けると洪破人はスッと目を逸らし、

「……仕方無い」

「ハッ、誰一人乗り気じゃないんだな」

夏天佑が呆れた様に言う。洪破人はあわてて、

「そんな事ねえよ。何が何でも徐をひっ捕まえてやるさ。俺も旦那も武慶で徐に会ってる。全くの無関係じゃねえんだ」

「ふーん」

夏天佑は正面に顔を戻して腕を組んだ。

「夏さん。真武剣派も人質を取られています。彼らが先に徐を捕まえるかもしれませんが、それでも良いんです。劉さんの息子さんも助け出される訳ですからね。秘伝書の方はどうなるか分かりませんが。あ、そうだ、太史さん。新しい知らせがありますか？ 皆さんの居る間に聞いておきましょうか」

「はい」

太史奉は皆を見回してから、おもむろに口を開いた。

「この徐という男、全く名が出てきませぬ。昔付き合いがあったという者でさえ『徐』としか知らないと言っているそうで、いつから武慶に居たのかも良く判ってはおらず、その昔の知り合いという者が言うには都に居たそうです。劉どのお聞きしたのですが武慶でも徐の存在が知られ始めたのはせいぜい四、五年前。知られる様になったといっても武慶の誰もが知っているという程ではないようですね」

「武慶も広いのでね。中心の市街周辺の住民はまあ、知っているといった程度」

劉健和が補足し、再び太史奉は続ける。

「先程夏天佑どのが東淵と仰られました、徐は東淵に縁者があるという様な事を言っていた事があるらしく、あまり近い親類では無い様で今も付き合いがあるのかどうかは不明ですが、その者も徐と申すそうです。これについては此処からは非常に遠い街ですから確認はまだ先になります。報を待つよりこちらから行って調べる方が良いでしょう」

第八章 二十二

「ハ……東淵だそうだ」

夏天佑は首を捻って求持星、それから洪破人を見遣る。東淵は太乙北辰教本拠、景北港の手前であり、『北辰に近い』どころではなく『北辰の中』と言っても良い。夏天佑も求持星も行きたくない場所なのである。洪破人もやはり東淵には何かあるらしく溜息をついていた。

「それともう一つ。徐との関連は今のところ薄いと思われませんが、北辰の人間の小規模な集団が幾つか南下、各地に姿を現し始めている様です」

周維が横に立つ太史奉を見上げ、

「何をしているのです？ まさか北辰まで探し始めたとか言うんじゃないでしょうね？」

「いえ、判っておりません。これも此処で知るには暫くかかりますな」

「夏さん。これは急いだ方が良いでしょうね？」

「……そうだな」

「前に少し話したと思うが」

不意に求持星が話し出した。

「洪淑華の武芸について調べている人が居ると――」

周維らと求持星が出会ったその日に雨を避けて入った、あんけんおうりゅう安県黄龍門うもんの創始者、梅慈心ばいしんが祀られていたという廟での求持星の話である。

「あれは、劉毅様なんだ」

「何故、劉毅がそれを調べる？」

即座に訊いたのは夏天佑であった。

「詳しくは知らない。洪淑華には今伝わっているものとは別に、もっと違う優れた武芸があったのではないかと劉毅様は考えていたんだろうと思う」

「だから何故『洪淑華』なんだ!？」

夏天佑は珍しく、むきになった様に語気を強めた。しかし求持星は熱の入った夏天佑とは対照的に、力なく首を振るだけである。

「北辰も秘伝書を追っているとしたら、劉毅とは別なんでしょうねえ。劉毅は北辰に取りたく無い筈です。方崖に持っていけたら、自分が見る事は出来ない。まだ北辰が秘伝書を追っているかどうかは分かりませんがね。夏さん。どうです? お願い出来ますか?」

周維がもう一度訊ねると、膝を小刻みに揺らしていた夏天佑はサツと立ち上がり、

「ああ。お前の思惑通り、大人しく命令に従ってやろう。いつ出る?」

「もう少しやっておかねばならない事もありまして……でもそんなに先にはなりません」

夏天佑はそのまま踵を返してさっさと部屋を出て行こうとする。

「あ、夏さん。もう少し、お願いしますよ。今日のところはこまでにしましょうか。他の皆さんは戻って戴いて結構です。せっかくですからこの街も見ていって貰わねば。洪さん、宜しく願いますね」

周維が椅子から腰を上げると劉健和らも立ち上がり、部屋を出て行く。

夕刻に差し掛かっているが外はまだまだ明るい。この後洪破人が街のその辺を劉健和と求持星に見せて廻るのだろう。わざわざ遙かこの城南までやって来たが、ゆっくり出来る時間はあまり無さそうである。周維に呼び止められた夏天佑は部屋の入り口に立って三人の後姿をじっと眺めていた。

部屋には周維と太史奉、そして夏天佑の三人。

「夏さん」

周維が呼び掛けると夏天佑は再び椅子に戻り溜息をついた後、両手で顔を擦った。

「俺を使う為の、お前の仕掛けた罠じゃないだろうな？」

「ハハッ、違いますよ。私も武慶で聞いた時には驚きましたからねえ」

「王さんにうまく言っといてくれよ」

「ええ」

「……今頃になって洪淑華とはな」

「ええ……」

暫く間が空いて、その後周維は言う。

「周漣さんですが、どうしますかねえ？」

夏天佑はちらつと周維を見てから顔を天井に向け、

「知らん」

「夏さんが此処を離ればもう此処に居る理由は無くなりそうです
が、景北港に戻るか、それとも夏さんを追うか――」

「勘弁してくれ。お前が連れてきたんだからな。お前が何とかしろ」

「夏さん。実は私は同行出来ないので、周漣さんが此処を出た後は
どうする事も出来ません」

「旦那様にはいい加減に此処の仕事を片付けて貰います」

太史奉の言葉に周維は首を竦める仕草をしてみせる。都行きだけでも城南からではかなりの日数が掛かり、その間は稟施会当主としての働きは何もしていない。本来なら都まで行ったのも会の者に命じれば済む話だったのだが周維がどうにか太史奉を説得して城南を離れたのだ。次の旅は更にいつまで掛かるか判らない。どうやらもう太史奉は折れる気は無いらしかった。

「あいつがこのまま此処に居ても良いんだろ？」

「それは構いません。彼女は働き者ですしねえ。助かりますよ」

事実、今の周漣は周維の屋敷に仕える下女の様なもので、その働きは申し分無い。本当にただの下女であつたなら何の問題も無く、ずっと居て貰いたいと思うのも当然の事である。

「彼女も『ではついて行きます』とも言えないでしょう。言いたくてもね。暫くは此処に居続ける事になるのかも知れませんがその後

は分かりませんので、その点、夏さんに理解しておいて戴きたい」
「……ああ」

暫く沈黙が続く。夏天佑は自分の膝の辺りを眺めて時折汚れを払う様な仕草をするが、ただ撫でているだけにも見え汚れが落ちてはいない。周維はその様子を暫く眺めてから口を開いた。

「夏さんは絶対引き受けてくれるとは考えていました。そんな私が言うのもなんですが、やはり今でも……失われつつある師の業^{わざ}を忘れる事は無いのですか？」

夏天佑は顔を上げる。斜めに差し込む日差しが夏天佑の顔の普段は目立たない細かな皺に影を作る。その双眸は周維を真っ直ぐに捉えているが鋭さは全く無かった。

「逆だ。今の俺にはそれ以外思う事は何も無くなった。此処へ来てようやく自分の好きに出来ると思っていたんだがな」

「でも、土を耕すくらいしか今のところ何も無いでしょう？」

「おかしいか？ 鋤の持ち方を教えてくれたのは、その『師』だ。お前は土に鋤を入れた事があるか？」

「幼い頃遊びで持った事はあったと思います」

「剣の相手は大抵、生きている。鋤の相手も、生きている。それなりの業を修めねばならん」

第八章 二十三

「その話を聞く度なるほどと思うのですが、やはり夏さんの師であるその御先輩は相当変わった方だったのだなと思ってしまいますねえ」

「だろうな。知っている者は少ないが、皆そう思っていることだろう」

夏天佑は一度腰を上げ、横を向いて座り直すと、椅子の背を脇に抱える様な格好でもたれかかった。昔を思い出そうとしているのか、額に手を当て視線を宙にさまよわせる。

「夏さんと陸総帥にとって洪淑華の秘伝が特別な意味を持つという事は、陸豊りくほうどのも同様ですね？」

「無論」

「陸豊どのの居場所が判りました」

夏天佑はすぐに顔を周維に向ける。

「意外な場所でした」

「教えてくれるのか？」

周維はフフ、と息を漏らして微笑んだ。周維の会話は誰に対しても『気を持たせる』事がその基本形となっているらしい。短気な者ならすぐに怒り出しかねない。が、夏天佑は慣れているのか、それとも耐えているのか、待っている。

「何処かの秘境で隠遁……などと想像してたりもしたのですが、なんと、緑恒です」

「緑恒？ 確かか？」

「ええ。范はん幫主の許に身を寄せておいでです。これもまた面白くなってきましたよ？ 范幫主は真武剣の英雄大会に御臨席でしたから。この先どうなさるかは分かりませんねえ」

「千河せんがほうち幫が真武剣に……」

夏天佑の呟きの後、また静かな時が流れる。

太乙北辰教に属すると考えられていた緑恒千河幫が真武剣派に近付きつつあるという事から武林の勢力図は大きく塗り変えられる事になると見て間違いない。近年は一見穏やかな空気が流れているかに見える武林であるが、皆、剣を捨てて融和の道に進み始めているという訳では決して無く、逆に最初に動き出すのは北辰か真武剣派か、と互いに警戒し合っている。

太乙北辰教はいつでも即座に動く事が可能である。それに追従するであろう大小様々な勢力が存在するがそれらの準備を待つまでもなく北辰単体で十分な人的規模を持ち、教主に忠誠を誓う信者達の士気は高い。一方、対する真武剣派は単独で北辰に当たる能力は無く、かつて武林制覇を狙った北辰教主陶峯に抵抗する為に真武剣派と協調した各派が再び陸皓の許に結集せねばならない。様々な不利が重なる真武剣派に出来る事といえば更に自分達に味方し北辰に対抗する勢力を増やす事意外に無く、そんな中で緑恒千河幫が真武剣派に付いたのならはその勢力は倍化したと言っても過言では無い。かつての武林の騒乱を覚えている者は良く知っている。緑恒千河幫はいざとなれば商いを営む者達のただの互助団体などではなくなるのだ。この江湖に於いて丐幫、太乙北辰教に次ぐ第三勢力である事は間違いなく、一度事が起こればその表情は一変すると武林の誰もが信じて疑わない。

「真武剣がうまくやった、と見るべきでしょうねえ」

「陸豊の破門はその為だったと？」

「いえ、それは違う様ですよ？ 陸豊どのが真武剣を出たのは随分昔の事ですし、何より、陸豊どのが陸総帥と袂を分かつ事になるというのは夏さんには良く理解出来る事なのではないですか？」

「……」

「千河幫が揺れるきっかけとなった出来事は、陸豊どのは関係が無さそうですが」

「ヒョウ局の件だろうか？」

「ええ。些細な事件の様にも思えますが、謎が多くて色んな想像が勝手に膨らんでしまったのですねえ。ま、今更どんな真実であろうとも范幫主が武慶を訪れたという事でもう後には引けないでしょう。北辰が放っておかない。林玉賦が范幫主を見ているからねえ」

「見ている？ 林が？」

「あれ？ まだ言ってますでしたかねえ？ 林玉賦が真武観までわざわざやって来ましてね。総帥にご挨拶にね。そこに范幫主も居られた」

「大人しく帰ったか？」

「ええ、まあ。大人しい……彼女にしては大人しいほうだったんですかねえ」

周維がフフ、と声を漏らす。

「おい。北辰は千河幫に対して動き出したんじゃないのか？」

夏天佑は周維から横に立っている太史奉に視線を移して訊いた。

「具体的な目的は先程ご報告致した通り、何も分かっておりませんが、本当に小規模——ほんの数人ずつで行動している様で、未だ物見といった段階でしょうか。何を探るのかも不明ですが」

夏天佑は頷いて再び周維を見る。

「とにかく出て行って調べる方が早いという訳だな。で？ 何故稟施会を使う？ 本当に劉さんを助ける為だけか？ 秘伝書の方もお前達にしたら大した物でも無いだろう？ 北辰やら真武剣派の間に割り込む様な事になればいらん災いを被る事になる。そこまでして何を得る？」

「まあまあ、その辺はなんというか、我々の商売にも色んなものがありますね。勿論、ご協力戴く皆さんにも悪いようには致しません。そんな事をすればただでさえ芳しくない稟施会の評判が……ねえ？」

周維が太史奉を見上げながら言うと、太史奉は真面目な顔でただ頷くだけであった。

夏天佑は長い溜息をつくと再び席を立ち上がった。

「もういいか？」

「ええ。そういう事で宜しくお願い致します」

「急に出ると言われても困るからな」

「ええ。分かっていますよ」

周維は笑みを絶やさず夏天佑が出て行くのを見送った。

「夏どのにはこれほどあっさりお引き受け戴けるとは正直思っておりませんでした」

「そうですか？ 私には至極当然に思えますけどねえ。これが他の秘伝書だったら全く興味を示さなかったでしょう。彼が最も注目する武芸、いや、彼にとって見るべき武芸は昔から洪淑華に繋がるものしか有り得ない。んー、まあこれもちよつと違うんですけどね。とにかく、まずは予定通り進んだ、と」

「しかしこの先はどうなるか全く予測出来ませぬが？」

「それで良いんですよ。此処でのんびりしたいという夏さんには申し訳ないですが、彼には常に武林を刺激して貰わないと。特別何かしなくてもいい。彼はただ居るだけでこの武林を引っ掻き回せる唯一の人物なのですからね。フフ、『夏』という架空の名はすぐに引き剥がされてしまうでしょうねえ。彼は紛れもなく真正銘の殷汪である、陸皓、陸豊兄弟が証明してくれます。あの二人だけは騙せる筈がありません。北辰と真武剣が彼をどう扱うか、そして彼は一体どうしようとするのか。これは見ものですよ？ 是非一緒に行つてこの目で見たいものですが……」

「それは諦めて戴きましょう。このままでは稟施会の商いに支障をきたします故」

「太史さんは大袈裟だなあ。ま、すぐにどうこうなるとも思っていないから、暫くは言う事を聞きますよ」

「結構ですな」

第八章 二十四

洪破人が夏天佑に城南を発つ日取りについて話したのは二日後の夜だった。『明日でどうか?』という周維の言葉を伝えに夏天佑の部屋にやって来た洪破人はあまり元気がない様子で、そんな姿を見せるのは珍しい事だった。

「誰かに代わって貰えば良いだろう? どうしてもお前じゃなければ駄目なのか?」

夏天佑は寝台で右腕を枕に横たわっている。その顔の丁度正面に洪破人が部屋の壁にもたれて立っていた。

「行くのは劉さん、求さんに俺と夏さんの四人だけだ。徐を知ってるのは劉さんと俺だけだしな」

「石^{せき}とか他にも居るだろう?」

「徐に会ったのは俺と旦那だけだ。人手はまあ、必要なら行った先でうちの者を使えば良い」

「……そうか。もう少し多く居ても良さそうだがな。まあ気楽で良いか。で? 何をそんなに憂えているんだ? 洪破人どの?」

夏天佑は少しおどけた様に笑みを浮かべ、薄目を開けて洪破人を見る。

「求さんに訊かれたんだ」

「何をだ?」

「……周漣さんが此処に来てもう一年程になるって旦那が話したんだが、良く考えたらそれだと方崖を脱走した殷総監を追って来たんじゃないって事になる。一年前ならまだ殷総監は方崖に居た筈だ」

「……」

「周漣さんは、本当に北辰を離れたんじゃないのか、ってさ。殷総監の様に……」

洪破人が夏天佑の様子を窺うと、全く表情は変わっておらず薄い笑みがまだその顔に浮かんでいる。

「本人に訊いてみればいいのにな。お前はどうか？　確かお前もあの周漣が周婉漣だとは知らなかったんだろう？」

「旦那が言わないんだから分かる訳が無いだろ？」

「残念か？　あれが周婉漣であった事が？」

夏天佑は意地悪を言っただけで、楽しむ子供の様に洪破人の反応を窺う。

「俺は別に……あー、もう北辰と縁が切れたというなら求さんも少しは安心出来るんだろうけどさ。そうじゃなかったら――」

「求さんはあいつに捕まるか。ハハ」

夏天佑が珍しく笑い声を上げ、寝台の上で体を揺らしている。

「もう此処を離れるんだから問題無かろう？　これから求さんは大事な旅の連れだ。手を出させない様に俺も気をつけよう。……フツ、明日発つのなら危ないのは今夜か？　ハハ」

「笑ってられるのは、周漣さんはそんなことしないって思ってるからだよな？　夏さん。周漣さん……もし、もう北辰に戻らないなら、どうするんだろうな？　俺達が出た後……」

洪破人は俯いた。『夏さんが此処を離れた後』と言うつもりだった。夏天佑が居るから周漣は此処へ来たのであり、それ以外にこの城南に用があった訳ではない。周漣の様子をずっと見ていた洪破人はそう確信している。

（周漣さんが見ているのは夏さんだけだ。俺は関係ない……）

洪破人は、横になった姿勢は同じままであったが先程よりも大きく目を見開いてこちらをじっと見ている夏天佑を黙って見返す。夏天佑の視線は鋭く、いつの間にか笑みは消えている。

「そんな心配はするだけ無駄だな。あれは七星の中でも唯一、陶峯子飼いの猛禽の類だ。人と思って油断すると喉許を食い千切られるぞ？　俺はあれが来てからというもの熟睡出来たためしが無い。離れられれば少しは快適に過ごせるというものだ」

夏天佑はそこまで言っただけで目を閉じる。洪破人は顔が熱くなるのを感じた。

「夏さん、本気で言ってるのか？」

「ああ。北辰に戻ろうが一人で何処かに行こうが、自分で好きなだけ獲物を捕らえて生きるだろうよ。お前、周婉漣を知ってるか？」

不意に夏天佑はおかしな質問をした。

「それはどういう……？」

「北辰七星周婉漣を知っているのか？ 周漣じゃない。周婉漣を」

眠っているように口だけが動いている夏天佑を見つめ、洪破人は言葉に詰まる。

（俺が知っているのは周漣さんだ……周婉漣……あの時の、二人組をやったのが周婉漣という事か？）

「お前が『周漣』に惚れるのは分からんでもない。だが……『周婉漣』は切り離せない」

「……どういう意味なんだ？」

「あれは特殊な人間でな。……説明するのも億劫な程だ」

そう言っただけ夏天佑は大きく息を吐き、本当に今から寝るという様に黙り込んでしまった。

「夏さん！」

「明日、出るんだったな。心配するな。周維が周漣に話す。ずっと此処にいるかも知れん。あいつが連れて来たんだ。任せておけば良いだろう」

「旦那が？ ……旦那は何故此処に周漣さんを……」

夏天佑は答えない。こんなに速く寝てしまう訳が無いのだが、もう話す気は無いという事なのだろう。洪破人は夏天佑の顔をじっと見つめた後、静かに部屋を出て行った。

夏天佑は閉まる扉の音を聞くと目を開けてほんの暫く扉を見つめ、その後寝返りを打った。

夏天佑の部屋を出た洪破人は暫く暗くなった廊下で一人佇んでいたが、その後意を決した様に歩き出した。向かった先は中庭を挟んで丁度反対側に位置する、周漣の居る部屋だった。

部屋の扉から少し手前で立ち止まり、じっと扉の方を見つめる。

部屋の正面に立てば声を掛けずとも周漣は気付いて出てくる。いつもそうだった。常に表の気配を窺っているのかと驚いてしまうほど、周漣はいつも自分の気配を察知した。

（気配を感じているのは、周婉漣か？）

洪破人はそんな事を心の中で呟いてみってから力無く首を振った。

（フッ、何馬鹿な事を……。意味が分からん）

再び扉を真っ直ぐ見据え、その前へと進む。

「洪さん？」

すぐに部屋の中からしっとりとした女の声が洩れ出てくる。

（周漣さんの声だな……）

この部屋には周漣一人しか居ない。だが洪破人はその声が自分の知る周漣の声である事を確認し、安堵した。

「ああ。急に来て申し訳ない」

洪破人は自分の声が思いがけず弱々しいものであった事に驚き、慌ててしまう。その時、ゆっくりと扉が開き、周漣が姿を現した。

第八章 二十五

「急も何も、あなたが少しずつこの部屋の前に立つ事の方が怖いわ。どうやるのかは知らないけれど」

周漣の表情は常に僅かしか動かない。しかし洪破人にはその声に楽しげに感じているという音が含まれている事が分かる。本当のところはともかくとして、そう思う。

「周漣さん」

周漣は僅かに小首をかしげたままじっとして洪破人の話を待っている。洪破人はその薄く赤い唇につい目が行ってしまい、一瞬、言葉を忘れていた。

「洪さん。何か？」

「ああ……えー、実は俺、と、夏さんもなんだが、暫く此処を離れるんだ」

すぐに周漣は顔を真っ直ぐ洪破人に向けた。周漣は今の様に誰かと二人だけで話していても真っ直ぐ相手の目を見る様な事は滅多に無い。洪破人がそんな周漣を見たことがあるのは夏天佑と話している時くらいしか記憶に無かった。周漣の瞳を見た事が無い訳ではないのだが、それでも胸が弾む。

「あなたは、戻ったばかりでしょう？ どちらへ……行かれるのですか？」

洪破人にはその声が微かに震えている様に聞こえた。

「あー、うちの仕事を夏さんにも手伝って貰う事になったんだ。いつまで掛かるかまだ分からない。何処まで行くかも――」

「何処まで行くのかも分からない？ どういう仕事なのですか？」
周漣の眼差しが鋭く変化する。自分にこんな視線が向けられるのは初めてで洪破人は焦りを覚えた。

「人探し……なんだ」

「人探し？ 樊さん達が今追っていますね？ ……蘇？」

「樊？ ああ、蘇の奴も見つかればそれに越した事はないんだが、違うんだ。実は此処に一緒に来た劉さんの親父さんが殺されて、息子がさらわれた。そのさらった奴らを追う。まだ居場所は判っていない」

「何故？ どうして夏天佑様もその者を探さねばならないのですか？ 関係無いでしょう？」

周漣の口調が徐々にきつく、大きくなっていき、それが更に洪破人を焦らせる。

「いや、旦那が依頼したから……その……」

「夏天佑様は何と？」

「引き受けたよ」

「……」

周漣は完全に洪破人を睨みつけている。滅多に見ることの無い周漣の双眸――。それが自分を非難するかの様に見つめている。洪破人は思わず視線を逸らした。

突然、周漣が洪破人の横をすり抜けて歩き出す。周維に抗議しに行くつもりには違いない。まるで自分が周漣を怒らせてしまった気がして、洪破人はすぐに動けなかった。

「周漣さん――」

少し遅れて周漣の方を振り返った洪破人は、先に歩き始めた周漣の体が目の前で静止しているのに気付き、ぶつかりそうになって慌てて体を後方に仰け反らせた。

立ち止まった周漣が見ているその先には、夏天佑の姿があった。先程まで寝台で横になっていた夏天佑が部屋の外に出て来ており、前の廊下にある欄干にもたれながら中庭を挟んだ正面、周漣の部屋の前の二人を眺めている。

洪破人が目を遣ると夏天佑は欄干から離れて直立する。既に暗く、少し離れているのでその表情は良く判らなかったが、スッと横を向き、そのまま進んで姿を消した。

「周漣さん……」

洪破人は周漣の艶やかな黒髪を見つめながら声を掛ける。が、返事は無い。

「まあ、運が良ければ早く帰って来れる――」

「あなたは、稟施会は何がしたいのですか？　どうして私をこんな目に合わせるのです！」

周漣の声は泣いていた。震えている。周漣がこれほどまでに感情をあらわにするとところを洪破人は見た事がない。ましてや悲憤の涙など――。周漣は背を向けたままであり、洪破人にその顔は見えない。だが、涙を流しているに違いないと思った。

洪破人はそっと腕を上げて周漣の肩に触れようとする。しかしその肩は洪破人の手のひらをするりと避けた。周漣は再び洪破人の横を通り抜けてそのまま部屋の中に消え、僅かに手を掛けた扉がゆっくりと閉じられていった。

（どうしてこんな目に会わせるのか――？　何の事だ？）

重い足取りで周漣の部屋の前から離れる。ほんの少しの間に急激に高まった周漣の感情とその少ない言葉に思いを寄せると、洪破人の心は千々（ちぢ）に乱れた。

（判りきった事じゃないか！　夏さんと居たい。だからこんな処まで来たんだろ！　夏さんは何だって周漣さんが気に入らないんだ？

あんなに想っているのに！）

『お前、周婉漣を知っているか？』

不意に夏天佑の声が洪破人の頭の中で再び訊ねてくる。

（周婉漣は、周漣さんだろ！　だから何なんだよ！　あんたと居る時は、あんなに優しい顔を持った、あんたを慕う周漣さんじゃないか！）

胸の内で感情を迸らせながらも、安易にそんな青臭い台詞を口には出来ない諦める自分が頭のどこかに居る事も判っている。

太乙北辰教総監殷汪と北辰七星周婉漣。辺境の用心棒風情には窺い知る事も出来ない北辰教の深奥、景北港方崖に居た二人。今まで

どのような出来事があり、どのような関係があったのか。その辺で楽しみに戯れる男女とは全く異なる領域にあった二人である。

（俺如きが口を挟む事じゃない……）

いつもの結論が熱くなった胸を制圧していく。洪破人は歩きながらじっと耐え、それが完了するのを待った。

「まだ帰ってきたばかりだにゃあか。体、大丈夫か？」

「ハハ。そんな軟そうに見えるか？ 俺が？」

洪破人は一年中変わらない褐色の腕に力を込める。葛林はそれを見て笑っている。

「今度は夏さんが旦那様と交代かあ。太史さんに怒られただってえ」
葛林の横でその古女房、李施はそう言ってまさに会心の笑みを浮かべている。洪破人はそんな二人を見ていると自然とその笑顔に釣られた。

すでに陽が昇って眩しい日差しが降り注ぐ前庭で、洪破人は再びこの城南を離れる支度を整えていた。洪破人と同様に来たばかりである劉建和と求持星は大した支度も必要無く、すでに準備は出来ている。

「こんなばたばたして、何が何だ分からへんわや。結局何しに行くなあ？」

「うん。まあちよいと悪者退治してくるだけだ」

「ほんまきやあな？ ほんなら周漣さん連れて行けえや。頼りになるでえ」

葛林が言えば李施がすぐにその腕を引っ張る。

「あかへんちや。周漣さんおらんようになったら私らあが大変だあな。あかんで、連れてったら」

「ハハ……」

そこへ、夏天佑がいつも通りの野良着にぼろの笠を頭に乘せてやって来た。鍬は担いでいないが背中には小振りの包みを負い、その隙間に剣が挿してある。銀の装飾が光る倚天剣だった。

「馬は沙さの爺さんの処か？」

「俺が行くよ。夏さんはもう準備は良いのか？」

「ああ」

夏天佑はぼろの笠に手をやって頷いた。

第八章 二十六

「夏さん。まさかその格好で？」

「ん？」

夏天佑は数日前の二人組の賊がやって来た夜と同じ、前庭に面した屋敷の正面にある小さな石段に腰を下ろす。そこへ周維の声が掛かる。

「背中の剣が目立ちますよ？」

「ああ、そうか？」

背にある倚天剣を抜き取ろうとして後ろを振り返った夏天佑は、周維の後ろに立っている周漣に気付いて顔を更に捻り上げる。周漣の視線はその足元に落ちていた。

「……何処にあっても同じだろう」

夏天佑は顔を戻し、手に取った倚天剣の鞘を眺めた。

「こちらに持ってくる時は布を巻いて隠していました。盗られたら大変ですからねえ」

周維は夏天佑の横を通過して石段を降り、夏天佑の正面に廻る。周漣は動かず後ろに立ったままである。

「面倒だ。やはりこのままにしておこう」

夏天佑は手にした倚天剣を背中に廻してそのまま背負った包みの隙間に押し込み、再び元の位置に納めた。夏天佑はこの剣を初めて手にしてから一度も隠し持った事など無かった。

「それにしてもその格好は無いでしょう？ その笠……壊れてますよ？」

「丐幫の奴らの格好よりはマシだろう？」

「まあそうです」

そこへ劉健和と求持星もやって来る。来た時と全く同じ出で立ちである。

「道中の諸事は洪さんに任せます。うちの支店を使って頂けばかな

り楽な旅が出来ますよ。お二人とも、もう宜しいですか？」

周維が劉健和と求持星に訊くと、求持星は『ああ』と短く答え、劉健和は黙ったまま、しかしはつきりと判るように頷いた。

「洪さんはどうしました？」

「沙さんところ行ったで。馬もらいい」

葛林が答える。此処には二頭の馬が繋がれており、もう二頭を稟施会の馬を世話している沙という老人に借り受けねばならない。すでに沙老人には話が行っている筈である。

「洪さんには言いましたが、皆さんには此処から北上、つまり武慶方面に向かうのではなく、東へ向かい、それから北へ向かって貰いたいのです」

周維が劉健和ら三人に説明する。おそらくそちらの方にも稟施会があり、何らかの手筈を整える事になっているのだろう。遠い場所である。こちらから四名が向かう事をすでに知っていてその準備を終えているとは考えられない。劉健和らが辿り着く少し前に周維の命令か何かが伝わる事になる。

「東涼か？」

劉健和が周維に訊ねた。

「そうですね。一先ず東涼を目指して下さい。道中、徐が見当たらなければね」

「北に行けば少しは涼しくなると思ったんだがな。このまま東か」
夏天佑がそう言いながら頭上の笠をいじって陽の光が当たる位置を調整していた。最南端であるこの城南はすでに初夏と言っても良い程、天気の良い日は暑くなる。この日は少しばかり雲が出ているが、時折強い日差しが照りつけていた。

「武慶に向かっても意味は無さそうですからねえ。暫く辛抱して下さい」

「……俺はそっち方面は全く知らないな」
ぼそっと求持星が呟く。すると周維は笑みを浮かべ、

「全く心配は要りませんよ。洪さんが良く知ってます。劉さんは東南には行かれた事は？」

「あまり多くは無いな。詳しいとは言えない」

劉健和の言葉を聞いて、周維は夏天佑の方に首を廻す。

「俺も同じ様なものだ」

「ハハ、まあ洪さんに付いて行って下さい」

「皆さん、中で洪さんを待ちましょう。うちの沙さんは話が長くてねえ。少し掛かるかも知れません」

周維が屋敷の中に入るよう促し、劉健和と求持星は建物の中に戻っていく。しかし夏天佑は石段に座ったまま立ち上がろうとはしなかった。周維は夏天佑とその後ろに立っている周漣を見てにわかに微笑を浮かべ、黙って求持星の後に続き中に入ってしまった。

「あんた、行くでえ？」

「分かつとるっちゃ」

「私らあが邪魔になるわな。ほれ、はよ」

葛林と李施の二人も周維らの後を追ってそそくさと屋敷の中へ入って行く。

夏天佑と周漣だけになった前庭は何処かで鳴いている鳥の声と風で揺れる緑の音だけになり、そんな時が暫く続いた。

夏天佑は相変わらずぼんやりと辺りを眺め、後ろの周漣は微動だにしない。

「漣、座れ」

先に口を開いたのは夏天佑だった。しかし周漣はまだ動かない。少し俯いたいつもの姿勢だが、今の周漣は俯いているというよりもうなだれていると言った方が当たっているのかも知れない。

「聞こえないか……」

夏天佑は独り言の様に呟き、膝に肘を立てて頬杖を突いた。周りに椅子の様な物は無い。あるのは夏天佑の座っている石段だけであ

る。

少し間が空いて、ようやく周漣が口を開いた。

「聞こえて、おります……」

か細く、弱々しい声。明らかに普段の周漣では無い。

「……漣。ここに座れ」

夏天佑は狭い石段の自分の隣を指差す。

周漣はこんな所に腰を下ろした事など無かった。今は晴れているがそれでも座れば衣服が汚れてしまう。しかし周漣が躊躇したのはそんな事ではない。石段の幅はそれほど広くは無く、夏天佑の指差した場所は人が一人通れるといった程の幅しか無かった。

夏天佑は笠を頭から外す。大きく広がっている顴^{つば}の部分が悪魔になるからである。それでも周漣は戸惑う。そこに座れば肩が触れ合う程、夏天佑の傍に寄る事になってしまうのだ。腕を伸ばせば触れる、くらいには近くに立つ事もあるが、腕以外の身体に触れさせる程、傍に近付いた事は今まで一度も無い。それをためらうのは恐れ多くも殷総監だからなのか、それとも――。

「戻るまでにかなり時間が掛かるかも知れんな。お前は、どうするつもりだ？　ここに居るのか？」

傍に座るべきか悩んでいる内に、夏天佑は話し出してしまう。

「私は……」

周漣はほんの少しだけ夏天佑の背に近付く。しかしそれ以上は動けなかった。

第八章 二十七

「周維は何か言っていたか？」

夏天佑の問いに周漣は何も言わずただ下を向くばかりである。この日の朝になって周維は周漣に夏天佑らが此処を出る事を伝えたが、昨夜洪破人が告げた事と殆ど変わらないものであった。

周維は『今後どうするか』と周漣に訊ねる事は無かった。表向きは夏天佑が何処かへ行く事と周漣とは何の関係も無いのだから今それを訊くのはおかしいという事になるのだが、周漣の此処に居る目的を全く知らないのであれば当然であろう。本当に、知らないのであれば。

夏天佑は石段から立ち上がり、周漣を振り返る。

「お前は奴をどう思う？」

「……奴、とは？」

依然、顔を上げようとはしない周漣を顔を顰めて眺めた後、夏天佑はまた周漣に背を向けて石段に腰掛けた。

「ハッ、お前まで偽物じゃあるまいな？ 周婉漣？」

うなだれたままの見るからに弱々しいこの女は、夏天佑の知る周婉漣とは程遠かった。

（またか……）

夏天佑は賊がこの屋敷を襲ってきた時の事を思い出す。夏天佑に肩を押されて足をもつれさせよるめく周漣の姿。周漣を良く知らない者から見ればどうという事は無いのだろうか、そうでない者の目にはかなり下手な芝居に見える。足がもつれよるめくなど、周婉漣には有り得ないと思うだろう。その前に自分の肩に伸びる腕を即座に折ってしまったとて『周婉漣ならば』と、皆唸って首を縦に振りがねない。

「私が……偽物？」

「いや、何でもない」

夏天佑が脇に置いた笠に手を伸ばす。すると突然周漣は、

「失礼致します」

そう言って夏天佑の隣に進み出ると、そのまま石段に腰を下ろした。身を寄せて座る事をためらっていた周漣であるが、夏天佑が再び笠を頭に乗せればその隣に腰を下ろす事はもう出来なくなる。

並んで石段に腰掛ける二人の間に隙間は無い。夏天佑はすぐ近くにある周漣の白い横顔を見てから、手に取った笠をまた脇に戻した。

「漣」

「はい」

「まだ方崖に戻る事は出来るのか？」

夏天佑は周漣の方を向いてその顔をじっと見つめる。周漣はそれを見返す訳にはいけない。顔が近付き過ぎてしまうので少し先の地面をじっと見るしか無かった。

「戻れます」

「今まで此処に居た事を何と言う？ 張新が黙ってはいまい？」

「特別……私達に注意を払う事はありません。あの者は教主様さえ意のままに出来れば良いと考えているのです」

「ほう？ それはお前達にとっては問題では無いのか？」

「……」

北辰七星に限った事では無いが、前教主陶峯は自分亡き後は息子の陶光に変わらぬ忠誠を尽くす様、遺訓を残した。七星は教主陶光の直属となり、その手足とならねばならない。

夏天佑の問いは、張新は教主の味方か、それとも敵か、と問うに等しい。教主ではない人物が教主を操れば北辰教徒の忠誠は誰に向いているのか？ 七星は誰の為に働く事になるのか？

周漣は、夏天佑が何故急にそんな事を話し始めたのか良く分からなかった。未だ北辰の事が気に掛かるのか？

（私はもう、そんな事はどうでも――）

「漣」

夏天佑は石段にもたれる様に体を伸ばし、また呼び掛ける。

「方崖に戻れ」

周漣は何度もこの言葉を聞いた。自分が傍に居る事をこの人は快く思っていないと、何度も何度も思い知らされていた。

「方崖に、戻るんだ」

「夏天佑様。私は――」

周漣は夏天佑を振り返り目が合った途端、ハツとなって言葉を失った。夏天佑の顔が僅か、ほんの僅かだが微笑んでいる様に見えたのである。いつもの、嫌悪をあらわにしたような厳しい視線ではない、穏やかな眼差しだった。

「長老衆も今頃真つ二つだろうな。いや、二つに割れるだけまだマシか。揃って張新の方に転ぶよりはな。お前達はどうだ？ 教主ではなく張新に付く者が出るか？」

「ありえません」

「何がだ？」

「教主様が張新かという選択肢は、我々七星には存在しません」

「……そうか」

夏天佑は自分の手の爪を見遣りながら、今度ははっきりと分かる様に笑っている。

「そうだと良いがな」

「夏天佑様」

周漣は急に立ち上がり、夏天佑のすぐ前に立つとその場に片膝を付いた。真っ直ぐに夏天佑の視線を捉えている。

「何だ？」

「もしや、また方崖、北辰にお戻りになられるおつもりですか？」

「何故そう思う？」

夏天佑は体を起こし周漣の顔を覗き込む。

「それは……」

もう少し近付けば互いに息が掛かる程で、周漣は顔を背けるしかない。流石に周漣の頬が微かに赤みがさしている。夏天佑はまた顔を離して後ろの石段に肘を付き、まじまじと周漣の顔を見つめた。

「方崖を離れてみて、どうだ？ 何か変わったと思うか？」

「え？」

「お前自身、何か感じるか？」

「いえ……特には……」

「俺にはお前が別人になった様に見えるが？」

「私が――？」

「今のお前は周漣だ。周婉漣は何処へ行ったんだろうな？」

周漣には何の事なのかさっぱり分からない。自分は周婉漣であり、此処では北辰七星周婉漣の名を伏せているだけの事。この辺境では顔を知る者は居なかったのだ。あの求持星が来るまでは。

「今のお前の顔をこうやって眺めながら過ごすのも、まあ、悪くは無い。だが、周婉漣が消えてしまうのは困る」

「……どういう、事でしようか？」

夏天佑は再び体を起こすと今度は周漣の肩に手を置いて立ち上がった。脇に置いた笠を拾い上げ、埃を払う。

「また此処に戻ってくるのか、別な場所へ行くのか、自分でもさっぱり分からんな。全く……奴の企みは一体何なのやら、だ」

「夏天佑様？」

周漣もすぐに立ち上がり、夏天佑を見つめる。

「漣。周維の奴に何をさせられるか分からんからな。注意しておけよ」

夏天佑は正面の門に向かって真っ直ぐ歩き出す。すると丁度そこへ二頭の馬を牽いた洪破人が戻って来た。

第八章 二十八

「夏さん。どうだ？ 笑っちゃうだろ？ どうするかねえ。これ」
洪破人は馬を指差して苦笑いしている。

「これに乗らせて戴くのは気が引けるな。分をわきまえんな」

夏天佑は馬に近付くと黒光りしているその逞しい首を撫でる。洪破人が借りてきたこの二頭は、どちらも赤の煌びやかな戦袍せんぽうを纏った将さながら、武者震いをするかの様に体を揺すり地面を力強く踏みつける。実際は戦袍などではなく大きな一枚の錦繡きんしゅうが背に掛けられているのだがその端で首を包み、遠目にはそれらしいが、近付いて良く見れば子供が悪戯で括り付けた様にも見える。

「沙の爺さんの趣味は益々我らの常識では測れない方向へ向かって
いる様だな」

夏天佑は馬の周りを一周してから洪破人を見た。

「でも物は相当上等な織物みたいだぜ？ ああ、そうか。こんな立派な錦繡、盗られたら大事だから残して行っちゃって事にしておこう。とりあえず旦那に預かって貰う事にするよ」

「洪さんが戻りましたよ」

表に顔を出して洪破人を見つけた周維が、劉建和と求持星に声を掛けた。すでに陽は高く、遠出するわりには皆ゆっくりしている。

「なんなら車を付けても良いですねえ。野宿も楽ですよ。皆さんの腕があればおかしな輩も手出しは出来ませんし」

「手え出して来る様なモン持ってねえよ」

洪破人はそう言って笑った。

その洪破人らから少し離れて周漣が立っていた。その傍に李施が歩み寄る。

「寂しなるねええ？」

「……そうですね」

「王さんが『あー困った、あー困った』ゆうてそればかり言うとななるわな」

周漣は王老人の口真似をする李施に目を遣り微笑む。

「はよ帰って来て貰わなあ」

「……」

洪破人と求持星が馬に乗るのを見て李施は歩き出す。周漣も少し遅れて出立する四人の許に向かった。

周維は洪破人の傍に行き、馬上を見上げる。

「洪さん。全支店に話は行ってますから、宜しくお願いしますね」

「ああ。旦那、樊の奴には何か指示してあるのか？ 今何処だろう？」

「あーそっちは分かりませんねえ。多分、孫さんの所に向かったでしょうから、一旦都に行くでしょうね。西の可能性も無い訳ではありませんが、徐が砂漠を突き進むというのも想像し難いですし、恐らくあちらも東に向かうでしょう。都周辺はもうとっくに真武剣が搜索済みですからね」

「そうだ、旦那。あの、此処に戻る途中のあの三人組なんだが」

周維は眉を上げて首を傾げる。

「求さんと一緒に居た――」

「ああ、あれですか。ハハ、忘れてましたねえ」

「本当に来るかどうか知らないが、もし来たら……王さんここにも遣って仕事をやってくれないかな」

正直なところ洪破人もついさっき思い出したのだが、求持星を連れて現れた『顔馴染みの盗賊まがい』という奇妙な縁の三人の顔を思い浮かべると、ほんの少し心配になる。求持星に金を貰ってあれからどうしたのか分からないが、もしこの城南を目指しているのなら無事に辿り着いて欲しいと思う。腐れ縁などとはよく言うが、過去何度もしつこい程出会っている事を考えると、腐ってはいてもどうやら切れてしまうところまではいかないらしい。

「そういえば……ひと月と言いましたが、もうあまり日が無いです

ねえ。まあ遅れたとしても、この街なら仕事もありますからね。安県の方のあんな辺鄙な処に居るよりは遥かにマシです。無事に来れたらね」

「そうだな」

「ま、来たらちゃんと面倒見ますから安心して下さい」

「ああ、頼む」

周維と洪破人は頷き合って離れた。

「足手纏いにならないければ良いが……」

劉建和も馬に乗り、そう言って後頭部を撫でている。

「劉さん、あんたが探すんだぞ？」

声のした方を振り返ると、夏天佑が馬を牽いてすぐ隣に来ていた。「徐を追うのはあんだ。そうだろう？」

劉建和は夏天佑の射すくめる様な厳しい眼差しから思わず顔を背けた。確かに何処まで続くか分からない旅に手を貸して貰いながらいつまで経っても煮え切らない態度の自分は情けなく、皆に申し訳無く思う。

「……そうですね」

「ハハ、そうですねって何だ？ 『お前ら付いて来い！』 くらい言っても良いんだぞ？ なあ？」

夏天佑は一転して笑顔を見せ、周維の方を向いた。

「フフ、劉さん。きつとうまういきますよ。息子さんの事だけを考えて居て下さい。いつもあなたの後ろに我々が居ます。安心して。洪さん、あなたは夏さんがはぐれない様に見張る役です。良いですね？」

「それはまた面倒なお役目だな」

洪破人は肩を竦めて夏天佑を見る。

「俺はそこまで餓鬼じゃないつもりなんだがな」

馬に上った夏天佑は腰を動かして座り心地を確かめていた。

四人とも背に包みを背負うだけで他には何も無い。特にこれとい

った準備をするまでもなく出立の支度は整った。

「何か必要になれば洪さんに言ってお下さい。うちが用意しますからね」

「じゃあ、旦那。そろそろ」

「ええ」

洪破人が同じく馬上の三人を見遣ると皆頷き返す。

「土産頼むで」

不意に葛林が大声を出し、子供の様に腕を振り上げている。

「だから遊びに行くんじゃないよ」

「そんな当たり前だあな。仕事はきっちりやって、ほんで土産もきっちり買って、帰ってくるだあな。頼むで？」

「分かったよ。じゃ、行こう」

洪破人が手綱を廻し、続いて三頭の馬もゆっくりと歩み始める。

求持星がちらつと後ろを振り返り周漣を見るが、やはり俯いておりその表情を確認する事は出来なかった。求持星の後ろには夏天佑が居たが、振り返る様子は無い。すぐに求持星の視線に気付いた夏天佑は、

「少しは気が楽になったろう？」

と、にやりと笑う。

「まあ、少しは」

求持星はそう言って顔を前に戻す。本当のところは周漣の事は既に気にしていなかった。

（俺如きをあの周婉漣が気に掛ける筈も無いさ。殷総監と何かあるだけだろう。やはり戻るのだろうか？ 北辰に？）

「とは言え、また北辰に近付く事になりそうだ。そっちの方が厄介かも知れんな」

背後から聞こえる夏天佑の言葉に思いを巡らす。

（俺にとっては本当に厄介なのは『北辰』じゃないんだがな……）

第八章 二十九

「体壊さじゃあええがなあ」

「ま、皆さんその辺の加減は良く分かってますよ。劉さんも方々で商いをされている方ですから旅には慣れている」

「でも、息子さんがなあ。それ思ったら並大抵だじゃあで？」

「ほんまだあ」

洪破人らを見送り、葛林と李施は話しながら屋敷の中へ戻って行き、周漣だけがその場に一人佇んだままだった。

周維がその傍に歩み寄る。

「周漣さん？」

周漣は答えず、さっと目頭を押さえて表情を見られまいと顔を背けた。

「夏さんとは話せましたか？」

「……あなたに何をさせられるか分からないから、注意しろと」

「ハハ……うーん、変な誤解をお持ちの様ですねえ。夏さんは。で？ それだけですか？ 暫く会えなくなるというのに？」

「何の事です？ あの方は私など……。いつもの様に方崖に戻れと仰るだけです」

顔を背けたまま小さい声で呟く。

「周漣さん」

周維は扇子を取り出し顔の前に持ち上げると思案顔を浮かべ、

「私の予感なんですがねえ。夏さん……殷総監はいずれ方崖に戻れるのではないかと思うのです」

周漣はようやく顔を上げる。その双眸が赤味を帯び、潤んだままだった。周維は続ける。

「たとえ死んだと思われていてもやはり本物は本物なのです。今戻れば北辰は大騒ぎするでしょうねえ。しかし、方崖の態度は決まっています。たかだか数人を切って飛び出したとはいえ、教主に

次ぐ身分を与えられていた殷総監です。即座に討つべき反逆者……。何もしないで再び方崖に上げれば教徒達は混乱するだけだ。ま、それ以前に張新どのが殷総監の復権を許さないでしょう。ようやく念願かなって殷総監のあったその座に昇った訳ですからね。やはり副教主ですか？ 殷総監を副教主にという話はまさに今の為。もう副教主という肩書きが復活してもおかしくありませんね。あまりいい顔をしない長老衆はもう抑えてある」

周漣は眉を顰めて周維の表情を凝視する。

「あなたは……北辰に興味があるのですか？ どうしてそんな事まで知って……？」

周漣は今まで周維を稟施会の若き当主とは知っていながらも羽振りの良い一介の商人風情としか考えていなかった。どれだけ稟施会が有名になろうと、武林とは縁の無い人間。たまたま夏天佑と知り合ったと本人が言っていたのだ。武林の噂は絶えず江湖の話題の一つであり、稟施会の様なあらゆるものを商機と捉える大規模な商会ならば市井の庶民などよりも多くの事を知っていてもおかしくはない。今周維の話した事は恐らく今も江湖のどこかで話されているであろう内容だった。しかし周漣には周維が『耳にした噂話』として話した訳ではない様な、何故かそんな気がした。そしてその話は全てがその通りであった。

「興味ですか？ 勿論ありますよ。東の果ての謎の組織が今どうなっているとか、話を聞くだけでわくわくしますよ。更に夏さんに出会い、そしてあなたまで来られた。これほど楽しい事はありません。それはもう仕事を忘れて太史さんにお説教くらう程に」

周維は訝しむ様子の周漣の表情も全く意に介さず子供の様に目を輝かせながら笑っていた。

「しかしですね……」

そんな周維が急に真顔に戻る。周漣を見つめ返し、

「夏さんが聞かせてくれる北辰の話は、どうも『元総監』のする話ではないようです」

周漣は黙って続きを待っている。

「今も、総監のままなのかも知れません。気持ちね。北辰の現状をあまり良く思っておられない様です。いずれ張新を遠ざけて再び方崖へと……こんな話、北辰の大幹部であるあなたに話しても良かったのかな？ フフ」

北辰七星を北辰教の幹部と言う者はまず居ない。どちらかと言うと教主の私兵という印象の方が強く、それにしても今の周漣に大幹部などと言うのは皮肉にしか聞こえない。この辺境にただ一人、流離^{すろ}う女――。周漣は周維の笑顔を無視していた。

「その根拠は？ 夏天様は戻るとは仰っていないのでしょうか？」
教主の補佐役となっている張新を良く思っていないからと言うだけでは話にならない。今更どうでも良いのではないか？ 殷汪は元々北辰教に興味を持っていなかった筈なのだ。

「根拠と呼べるものは何ありませんよ」

視線を宙に泳がせ、考える仕草を見せながら、

「ただ……人というのは、いや、人だけじゃありませんね。明らかになった点においてのみ判断を下す、という訳ではない。あらゆる事柄をもって推し量り我らは何らかの判断をしています。これという確たるものは私は持っていませんが、そうですね。例えば……」
周維は目を細めて周漣に微笑みかける。

「夏さんは何故、あなたに『何処かに行ってしまった』とは言わないんでしょう？」

「えっ？」

「なぜ『方崖へ』としか言わないんです？ その前に、あなたが嫌いなだけだったら「消えろ」くらいな事は夏さんでも言いそうですよ。ああ見えて結構乱暴な気性もお持ちの様だ。滅多に見られませんがねえ。……方崖に何かあるんですかね？」

「私が……方崖で何を……？ 何をすれば……？」

周漣は額に手を遣り小さく呟く。

「……もし夏さんが北辰に戻るとしたら、あなたが方崖に居た方が

良いとは思われませんか？　今は何もしなくても良いのかも知れない。内部に味方となる者が居る事で随分違ってきますよ？　ま、その時にあなたが夏さんを見限って敵だと思ってなければ、ですが」

嫌な男だ――周漣は面には出さないが目の前の男を嫌悪する。何故、北辰に縁の無いこの男はそんな処まで首を突っ込んできてこの私に向かって教示するかの様に話すのか。夏天佑様が言うならともかくお前は関係ないだろうと、自身の中にある『別な自分の様な何か』が周維に対し苛立ち始めていた。

周維の屋敷で働くとは、周維に仕える事である。半年近く周維は城南を留守にしていたが、周漣はそうにして過ごしてきた。自分分は周漣であると名乗りながら。そして夏天佑の傍に居たいと願い、そうしてきた。だが、周維が都から帰ってくるなり状況が変わる事となる。夏天佑以外に自分をはっきりと周婉漣と呼ぶ人間、求持星が現れた事によって周漣の意識は一気に現実に取り戻された。北辰を忘れる事が出来ない――。

（『周漣』で居る事は無理なのだろうか？　北辰の周婉漣で無くなる事は許されないのだろうか？　夏天佑様がそう望む？　私は……いつまで陶峯様の呪縛に苦しまねばならないのか……）

「周漣さん？　大丈夫ですか？」

片手で顔の半分を覆い、じっと目を閉じている周漣を覗き込むようにして周維は訊ねた。

「中に入りましょう。部屋で休んで下さい。今日は……というか暫く仕事らしい仕事も無いでしょうしね」

「方崖へ――」

「はい？」

周漣はゆっくりと顔を挙げて背筋を伸ばし、いつも伏し目がちであった大きな瞳を真っ直ぐに周維に向けた。外見は変わらない。しかし今まで内に潜んでいたものがその瞳を通して溢れ出てくる。

「景北港へ、戻ります」

周漣の低く力の籠もった、短いその言葉を聞いて笑みを消した周維は、少し間を置いて後、頷いた。

「それが、良いでしょう」

第九章へつづく

第九章 一

スツと息を吸うとすぐに体内に満ちてゆく程、近くを薄い靄もやが漂い、辺りの景色は少し青味がかった。冷えた空気が肌に当たると微かにチリツと音を立てて熱を帯びる。

ぎょうかそん堯家村の夜がもうじき明ける。都から真西に七百里余り。都から東と南へ向かう二本の街道に比べると殆ど手の加えられていない粗末な、しかし西方へ向かう唯一の道沿いにある街である。

昼は賑やかになるこの街もこの時は未だ静寂に包まれており、そんな中で数人、遠慮がちな音を立てながらゆっくりと表に姿を現した。この街の中央の通りから少し奥まった場所にある小さな屋敷。とは言っても広い庭園などは備えていないというだけで建物は周辺にある家々よりも大きく、また、歴史を感じさせる旧家といった風情がある。

その中からまず出てきたのは稟りんしかい施会はんがくの樊樂りゅうしたん、劉子旦こてつ、胡鉄そんれいの三人。その後が続いて歩み出てくるのは二人の老女、そして孫怜であった。老女の一人は黒衣で右に杖を突き、左手はもう一人の老女に支えられる様にしてゆっくりと歩を進める。支えている方の老女は薄い緑の衣を纏い、まだ足腰がしっかりしているので杖の老女よりは幾らか若い様にも見えるが、それほど大きくは違わないだろう。ようやく表まで出るとその後に呉琳、比庸、可龍が続く。

「ハア、もう此処まで出てくるだけでも大変。ありがとう、もういいわ」

杖の老女は隣の緑衣の老女に声を掛けると両手を杖の上に重ねて一人で立つ。建物の入り口からほんの数歩出た処だった。

「急に押しかけたうえに私共わがままの我俥をお聞き入れ下さり、有難うございます」

孫怜は杖の老女の正面に立ち、姿勢を正して抱拳する。そのまま恭しく頭を下げると、杖の老女の落ち着いた声が辺りに染み渡るよ

うに聞こえてくる。

「怜。何も気兼ねする必要はありませんよ。もっと早くに此処へ来ても良かったのよ？ 此処にも何も無いけれど、皆で一緒に居る方が良いに決まっているわ」

続けて緑衣の老女が口を開く。

「年寄り二人だけだと色々不便なのよ。琳が居てくれるならとても助かるわ。怜、あなたは何かあるうと、必ず琳の許に帰って来ない。いいわね？」

「……はい。必ず」

孫怜は暫く頭を上げる事が出来なかった。

すぐ傍に居た呉琳は落ち着かない様子で辺りを見回した後、馬を牽いてやって来る樊樂らの方へと駆け出す。しきりに馬を撫でながら樊樂と何やら話している様だった。

「フフツ。琳は元気じゃないの」

杖の老女は呉琳の様子を目を細めて眺めている。

「そうね。少女時代に戻ったのかしら？ 羨ましい事。ホホ」

緑衣の老女も同様に目を細めて笑っていた。孫怜もそちらを見つめながら、

「正直、まだ不安ではあるのですが……。呂州りょしゅうを出てからはとても落ち着いています。ですが私が離れた後の事は、分かりませぬ……」

「私達に任せておきなさい。何の心配も要りません」

杖の老女はゆっくりと首を振り、孫怜に微笑みかける。精神が不安定な状態にある呉琳をうまく扱う自信がある、というよりは、全てを包み込む慈愛に満ちた二人の老女の気——。呉琳だけでなく孫怜までも安心させてしまう、そんな二人であった。

「怜さん。何も忘れてない？」

樊樂らと共に戻ってきた呉琳は孫怜の腕を取り、その全身を眺めて言う。

「大丈夫ね。怜さん、あの二人を守ってあげてね」

「ん？」

「あなた達、来なさい」

呉琳は馬の傍に居た可龍と比庸を呼んだ。二人は呉琳の前まで来ると並んで背筋を伸ばした。

「いい？ あなた達はまだ出来る事はとても少ない。でもそれは仕方無い事だわ。これからこの江湖で自分を鍛えていくの。まずあなた達が覚えなければならぬ事は、何が何でも生き抜く事よ。あなた達はまだ若い。少々格好がつかなくても何とかして生き延びるの。そして何処までも怜さんに付いて行きなさい。そうすればいつか必ず立派な侠客になるわ！」

呉琳は力強くそう言うと言と孫怜の顔を見上げる。孫怜は同意を求める様な呉琳の眼差しに思わず言葉に窮してしまった。

「あ、ああ……まあそう、だな」

「おいおい、お手本とならねばならん孫大俠がそんなで良いのか？」

少し離れて様子を眺めていた樊樂が冷やかす様に声を掛ける。呉琳は樊樂に顔を向け、

「樊さんもちゃんとお手本になって貰わなくちゃ困るわ。この子達が変な事覚えて帰って来たら、樊さんのせいね。怜さんは変な事なんてしないから」

「その通り！」

胡鉄の声が辺りに響く。樊樂はゆっくりと胡鉄の方を振り返って睨みつけ、胡鉄は舌を出して首を竦める。この者達と居ればよく見る光景である。

「ホホ、楽しい旅になりそうね」

緑衣の老女が口元に手を遣って笑う。続けて今度は杖の老女が口を開いた。

「己を軽んじてはならないよ。その若い衆も、怜、お前達も」
一同を見渡しながら続ける。

「琳の言う通り、何としても生きなさい。今日生きたら、明日も生きる事を誓いなさい。命を掛けなければならぬ事というものは確

かにあるけれど、本当にそれがそうなのかは簡単には分からないよ。命を掛けるという事は、死ななければならぬのとは違う。勘違いをしてはいけない。いいね？」

杖の老女の視線が可龍、比庸の二人に留まる。若者二人は揃って杖の老女に向き直り、威勢の良い返事で応えた。

「良い子だね」

顔の皺を一層深くした老女は微笑み、頷いた。

「怜さん。遅くなるといけないわ。まずは都ね？」

「ああ。そうだ」

不意に呉琳が孫怜の返事と同時にその首に抱きついた。

「怜さん。私はずっと此処に居るから。ずっと此処に……」

人目も憚らず孫怜に頬を寄せる呉琳。孫怜はほんの少し戸惑ったが、ゆっくりとその腕を呉琳の背に廻した。

「……済まぬ」

「家を……守れなくて、ごめんなさい。ごめんなさい……」

孫怜は呉琳のその小さな声になからず衝撃を覚えた。家を、帮会を失ってしまったのは自分の責任なのだと、呉琳はずっと悔やみ続けていたのか。

「琳、それは――」

「琳、まだまだやり直せるんだよ。新しい縁がいくらでも生まれて来る。二人で、この子達を育てていくの」

杖の老女の声が、孫怜と呉琳の許へ真っ直ぐ伝わってくる。杖にもたれてじっと立っている老女に呉琳の微かな声が届いていたのかは疑わしい。だが微動だにせずじっとこちらを見つめる老女の眼差しは呉琳の背中にそっと手を置いて優しく撫でる様だった。

呉琳は孫怜の首を離し、今度は手を取ってその甲を頬に押し当てる。孫怜はその愛しい妻を胸に抱き、その髪を撫でた。

「あら、まあまあ」

緑衣の老女がその様子を見ながら楽しそうに笑っていた。

第九章 二

樊樂がそつと孫怜の背中に近付く。

「怜、そろそろ……」

その声に応じたのは呉琳だった。

「もう、大丈夫。怜さん、しっかりね」

「ああ」

孫怜は何か気の利いた言葉の一つでも掛けてやりたかったのだが咄嗟に思いつく事が出来ず、そう短く答えるのが精一杯だった。呉琳の頬に手を遣り、頷いて見せる。それから杖の老女に向き直った。「それでは……行って参ります」

杖の老女は何も言わず、ゆっくり目を閉じて頷く。緑衣の老女は呉琳の傍へ行くとその手を取り、並んで孫怜の方を向いた。

「宜しくお願いいたします」

孫怜は緑衣の老女にも礼をした後、劉子旦から馬の手綱を受け取った。

「よし。行こう」

樊樂が言うのと皆一斉に馬に乗り、顔を見合わせて頷き合う。

孫怜はもう一度呉琳を見る。今回の仕事は数日で終わる事はまず有り得ない。長引けば数ヶ月は離れる事になるだろう。かつて『孫の幫会』^{ほうかい}として仕事をしていた頃は呉琳と離れる事を何とも思わなかった。呉琳は留守を預かるのが役目——いつの間にかそう考えていた。一旦表に出れば呉琳を忘れていた。

孫怜は馬上から呉琳を見下ろす。呉琳はすぐ傍で顔を思いきり上げてこちらを見て笑っていた。

（琳、これからはお前の為に生きよう）

胸の奥からこみ上げて来たものが目から溢れそうな感覚を覚えたが、呉琳の笑顔のお陰で孫怜も笑顔を返しながら屋敷を後にする事が出来た。

「なんて言うかこう……ただの人探しにしては大袈裟だったな。すぐ済んでも帰りづらいぞ。ハハッ」

「いや、俺は帰るぞ」

先頭を行くのは樊樂と孫怜で、次に胡鉄と比庸、可龍、その後ろに劉子旦が続く。辺りはまだ静まり返っており、樊樂の笑い声がよく響く。

「呉琳、大丈夫そうだったな？」

「……恐らく」

「しかしあの二人の婆さま、本当は何者なんだ？ 二人並ぶとなんか奇妙な感じだぜ。姉妹とかか？」

「いや、違う。だが若い頃から一緒に暮らしておられた。俺達夫婦を本当の子供の様に面倒を見てくれてな……穆^{ぼく}さんも元は呂州の人だ」

「優しいんだかおっかねえんだか良く分からん。あの杖を持つ手が怪しいな。もし怒りだしたらあれで殴られそうな気がする」

「昔ならそうかもな。しかし今はもう体を悪くされて動くのも大変だ。鮑^{ほう}さんは確か三つほどお若いのだったかな？ それでもたった三つだ。お二人とも快く引き受けて下さったが、本当に良かったのか……」

「あの婆さまがまかせろって言うんだから大丈夫なんだろう」

「そうだな」

穆というのが杖の老女の名で、緑衣の老女は鮑といった。孫怜が若い頃に縁あって知り合い、呉琳と夫婦になった後もずっと交流が続いていた。

「で、どうする。まずは都か」

孫怜が訊ねると、

「あー、それなんだが……ちょっと待ってくれ」

樊樂は馬を止め、皆が周りに集まるのを待った。

「子旦、咸水はどうだ？ 行ってみねえか？」

それを聞いた劉子旦は、ぽかんと口を開けたまま樊樂を見た。

「は？」

「は？ じゃねえよ。寝てんのか？ 咸水は見に行った方が良くないか？ 今は廢墟だろう。隠れるには良い場所じゃねえか」

「今から、咸水まで戻るんですか？」

「そうだ」

「それなら此処に来る前に寄れば良かったじゃないですか」

劉子旦は呆れ顔で樊樂を見返した。咸水の村は呂州からこの堯家村までの道の丁度中程から西に逸れて山岳地帯に分け入った処にあり、数日前に素通りしている。馬を急がせても二、三日は掛かり、その後に都へ向かうならまたこの堯家村に帰ってくる事になる。

「もう少し計画というものを考えた方が良さそうだな」

孫伶も劉子旦と同様に樊樂を見ている。

「あのなあ、呉琳が一緒に居たのにに行ける訳無いだろ。もし何かあったらどうする？ まず此処に呉琳を無事送り届ける。全てはそれからだ。そういう計画なんだよ」

「……」

孫伶は樊樂をまじまじと見つめて黙り込んだ。樊樂がそんな氣を使うとは思っても寄らず、呉琳の為を思ってたのならば孫伶には何も言えない。

「それはそうですが……」

劉子旦もさすがに異議を唱える事は出来ず、隣の胡鉄に視線を送る。胡鉄は肩を竦める、

「ま、俺達は樊さんの言うとおりに動くのが仕事だし？ 俺は良いと思うけど。ただ、もうあの辺も真武剣が調べてそうだけど」

「真武剣も動いてるが、的の方も常に動いてんだよ。調べられた後に逃げ込む事だって考えられるだろ？」

樊樂は一同を見回しながら力説する。もう誰も反論は無さそうだった。

「そうだな。行ってみよう」

孫怜が言うと、劉子旦らが頷く。樊樂はその様子を見て、
「全く……お前らは俺以外の奴には素直なんだな」

半ば拗ねた様に一人さっさと馬を進め始める。残された者達は一
度顔を見合わせてから樊樂を追った。

「樊、……すまん」

孫怜は再び樊樂の横に付き、ちらっとその横顔を見遣る。

「フン。計画通りだぜ。俺の計画通り、咸水に向かう」

いかつい褐色の顔は真っ直ぐ前を見据え、ほんの暫くだがこちら
を向く事は無かった。

堯家村に向かう途中もそうであつたが、咸水に向けて引き返す道
中も全く何事も無く、新たな情報を耳にする事も無い。咸水までの
数日、樊樂はひたすら『暇』を連呼していた。

「暇というのはおかしいでしょう？　こうして搜索してるじゃない
ですか。この後東に向かう事になれば遥かに長い日数をこうして過
ごさないといけない訳ですから、今からそんな事言ってたんじゃ、
やってられませんよ」

咸水のすぐ手前まで戻ってきた一行は、表に『茶』とだけ書かれ
た古い店に入って体を休めていた。ずっと歩いていたのは馬の方だ
が、その上でじっとし続けるのも長時間になれば苦痛になってくる。
「そうだな……早々に徐じよの奴にお出まし願ってだな、ずっと追いか
けて行けりゃあ『暇』じゃねえだろ？」

「暇つぶしに追いかけるんなんておかしいでしょ。出てきたんなら
さっさと捕まえて終わりにしたほうが良いに決まってます」

劉子旦はそう言い捨てると茶を呷り、長い息をついた。

第九章 三

まだ正午を過ぎたばかりだったが、外は徐々に暗くなり始めていた。灰色の厚い雲がいつの間にか空を覆い、誰が見ても雨が予想出来る。夏が近付いているこの時期のこんな雲は大抵、かなり激しい雨を降らせてから去って行く。

「今の内に村に行った方が良いな。雨が来るぞ。どのみち今夜はこの近くで泊まる事になる」

孫怜が、触ると取れそうな窓に近付いて空を眺めている。

「村にも一応、壊れてはいるが雨が凌げる家がまだあるがな」

「行った事あるのか？ 最近」

樊樂が訊ねると孫怜は席に戻り、

「何年か前だが。あれから誰か移り住んだとも聞かない。今も無人だろう。もし誰か住みだしたらすぐ噂になるぞ。二十年近く経っても、あそこは当時のままで、生きてるのは伸び放題の草と山から下りてきて何も見つけられずに肩を落として戻って行く獣くらいのものだ」

樊樂が言ったなら非常に微妙な冗談だったが、孫怜がこんな言い回しをする事は珍しく、皆思わず笑ってしまう。

「そんな処で野宿なんてごめんだ。一夜にして住人が惨殺された村だからな。気味が悪い」

樊樂が大袈裟に震える様な仕草をして見せると、可龍、比庸の二人は微かに顔を強張らせて固まっていた。孫怜は笑いながら、

「二十年だぞ？ もう昔の話だ。無念を抱いて死んだ者達もさすがに他所へ行ってるさ。誰も来ないんだからな。お前じゃないが、『暇』に違いない」

「それに、北辰の殷総監が恨みを晴らした訳ですしねえ」

劉子旦が言うのを樊樂は目を剥いて睨み、

「分かるもんか。そんな単純じゃねえだろう……あんな処、徐の奴

も行きたがらねえかもな」

樊樂は真面目な思案顔で、本気でそんな事を考え始めたらしい。

「まさか樊さん、やっぱやめとこうとか言うんじゃないよな？　徐が居るわけ無いから？　それとも何となくおっかないから？」

胡鉄が横合いから樊樂の顔を覗きこんでニヤニヤしている。

「行くに決まってるだろうが！　よし、もう行こう。遅くならんよ
うにな」

樊樂は膝を打って勢い良く立ち上がり、先程孫怜が居た窓に歩み寄ると同じように空を見る。

「雨も降りそうだしな」

「さっき孫さんが言った」

樊樂がじろりと胡鉄を振り返る。胡鉄は慌てて顔を背け、茶の残りを啜った。

孫怜も脇に置いていた剣を手にとって立ち上がり、可龍と比庸に、「お前達は、此処で待っている。村はもうすぐそこだ。遅くはならんだろう。……何事も無ければ、だが」

若者二人は互いに顔を見合わせる。

「あの、俺達も――」

「そうだな。此処に居ろ。万が一、徐と手下共と出くわせば危険だ。街の中ならともかく、あそこは孤立した場所だし逃げるのも難しくなるかも知れんしな」

樊樂は孫怜の傍に戻り、二人に言う。

「逃げませんよ！　俺達も一緒に行きます！」

可龍が椅子を蹴るようにして勢い良く立ち上がり、比庸も同じく並んで孫怜を見た。

孫怜はゆっくりと頭かぶりを振る。

「逃げる奴は尚更連れて行けん。俺達は逃げる必要があればいつでも逃げるが、お前達をおいて俺達だけ逃げる訳にはいかんだろう？」

孫怜の言葉に可龍と比庸は困惑の表情を浮かべた。劉子旦が可龍

の肩に手を置いて笑い掛ける。

「ちよっと変わった場所だし、今回は待っててくれよ。この先お前達にもうんと働いて貰うさ」

「……はあ」

若いこの二人も、もし何かあったら——と考えない訳ではない。徐の一味やそんな類の輩と一戦交える事になったとしたら、今の自分達には何か出来そうにも無い。

足手纏いと思われるのは我慢ならない。が、やはりどう考えても何の経験もない今の自分達が必ずそうなってしまうのは明らかだった。

「そう気を落とすな。ハハ、これからだ。これから」

樊樂もそう言って笑みを浮かべる。しかし可龍と比庸は再び『はあ』としか返せなかった。

「念の為だ。金を少し預けておく」

孫怜は懐からいくらか金を取り出し、可龍に持たせる。

「少しの間だが俺達と離れるからな。万が一俺達が戻らなかったら、咸水には絶対に近付くな。すぐに来た道に戻って堯家村の穆さんの処へ行くんだ。或いは……ここからなら一先ず呂州でも良い。お前達が安全だと思う場所に行け。それから堯家村だ。分かったか？ 絶対、咸水には行くな」

孫怜は厳しい眼差しを向けながら、そう念を押す。自分達を戻れなくしてしまう様な『何か』は咸水の村にあるのなら、可龍と比庸が様子を見に行くだけですぐにその『何か』の餌食となることだろう。絶対に逃げなければならない。

「まあ大丈夫だろうけどなあ」

生唾を飲み込みながら直立不動で居る可龍と比庸を眺めながら（脅かし過ぎだ）と感じた樊樂が空気を和らげようと少し甲高い声を出した。

「無論、俺もそう思うが絶対じゃない。常に最悪の事態も想定しておかんな。金は預けるだけだぞ？ 戻ったら返して貰うからな」

孫伶は硬い表情をようやく元に戻して二人に笑い掛ける。可龍と比庸、どちらも納得した様で、揃って頷いていた。

茶屋を出て暫く進むと、川と交差する。丁度そこから川沿いを西の山の方へ向かう道に入れば、その先が咸水の村である。

横を流れる川は幅二丈あるか無いかといったあたり、とても水が澄んでいる美しい川である。正面の山から流れ出しており、視線を川に沿って先へ遣るとそこは奥深そうな谷になっていた。

「何だか、嫌な感じだよな。この、あの村に向かうだけの一本道を行くってのは」

樊樂はじつと正面を見つめたまま顔を顰めている。

「あの集落で行き止まり……。なんて言うか……」

「この先がこの世の終わり……。とでも？」

劉子旦が後ろから声を掛け、冗談の様な事を真面目に訊く。すると、

「着いた途端、この道が消えたりしてな」

胡鉄が冗談を冗談らしく言って笑った。劉子旦も声を出して笑ったが、樊樂は全く反応が無い。相変わらず前方をじっと見ながら黙っていた。

「樊、大丈夫か？ まさか……」

孫伶が体を前に倒して横に行く樊樂の顔を覗き込む。まさか本当に怖がっている訳ではあるまいと思いつつ、普段あまり見る事の無い樊樂を観察する。

まだ見えていない咸水の村を注視している様でいて、しかしどこかぼんやりとしている風に見えたりもした。

第九章 四

谷の間近まで来ると、既に今居る場所が道なのかそうでないのか分からなくなるほど、背の高い草が生い茂っている。孫怜によれば道は川に沿って村まで続いているらしいので右手に川を眺めながら勘でもって進む。

「人が入った様な跡は無いな……」

馬の足元に目を遣りながら樊樂が言う。この辺りでの生存競争に勝ち抜いた雑草の群れは何者にも邪魔されず奔放に生きている。人に踏まれて倒されている様な者は見当たらなかった。孫怜も辺りを注意深く眺めながら、

「しかし余程多くの人間でも来ない限りその跡は見つけられないだろう。こいつらはあつという間に仲間を増やして何事も無かったかのように再び辺りを覆い尽くすからな」

「孫さん、以前来られた時もこんなだったんですか？」

劉子旦が訊ねると孫怜は大きく頷いた。

「ああ。殆ど同じだな。昔はこの辺りにも民家が点在していたんだが、咸水の事件の後に『村から近すぎる』と言って皆他所へ行った。もう誰も居ない場所だ。見ろ、あそこに殆ど潰れた家が少し見えているだろう？」

孫怜は左手の草原と化しているその先を指し示す。緑の中にポツンと木の色が混ざっており、よく見ればそれが人の手で加工された木材である事が分かる。

「草に食い尽くされてる……」

胡鉄がそれを眺めながら呟いた。

「あれが一箇所によく集まった場所……それがこの先の咸水の村だ」

左右に山が迫る細い谷に入っていく。その幅の殆どが川であり、すぐ傍の道も所々崩れていて人の通れる幅は僅かしか無い。しかし

それがずっと続く訳では無く、一里も進めば一気に視界が広がった。周囲を完全に山に囲まれた小さな村。道は此処で終わり、後は川が山を登っていくだけである。

村が失われてからも訪ねた事のある孫伶以外は完全に草原となった場所を想像していたが、意外にも地面の見えている処が多かった。朽ちた家々の並びから考えてそれらはかつて住人達によって踏み固められた村の通りであった様だ。道が見えるといっても草むらの中に地肌が見え隠れする、といった程度である。

「此処が咸水ですか……」

一同、村の入り口に身を寄せて辺りを眺める。『無残な廃墟』を通り越して遙か古代の遺物でも眺めている様で、現実との距離を感じずには居られない珍しい風景。既に二十年経った咸水の村には思い描いていた殺戮の生々しさは微塵も無く、文字通り枯れ果てていた。

「此処に、こんな処に何があったんだ？ 百槍寨はくそうざいとやらは此処の何を欲しがったんだ？」

樊樂の問いは誰もが思っていた事で、廃墟になる以前を想像してみても賊が大挙して押し寄せる理由が良く分からない。

「それは解ってない。当時此処を襲った人間は誰一人生きてはいない。百槍寨は完全に江湖から消えたからな」

孫伶は目を細めて村を見渡している。

「それにしても……此処で生活する事は不可能ですよ。徐もさすがに此処に身を隠そうとは思わないでしょうね」

「食う物さえ調達出来れば何とか出来るんじゃないか？ でも人が来たら気が気じゃないな。逃げられない。入り口塞がれたら山登るしかないぞ」

劉子旦と胡鉄が話しながら馬を進める。

「おい、勝手に行くな。まだ誰も居ないと決まった訳じゃないぞ」
樊樂がすぐに呼び止め、孫伶と一緒に二人の傍まで進む。

「冬は居られないぞ？ 雪が深いからな。こんな所では完全に何も

出来なくなる。入ってくる事も、出る事も無理だ。雪の無い時期に一時的に隠れるくらいには使えるだろうが……」

「そうですね……」

孫怜の説明に劉子旦らは頷いた。樊樂は真面目な顔で孫怜に訊く。「じゃあ此処に住んでた奴らはどうなんだ？ 冬は他所に行つてたつてのか？」

「そんな訳無いだろう。小さな村とはいえ、人手はそれなりにあったのだから、冬には何らかの備えもあったろうし、雪もある程度は動かせる。人が少なければ厳しくなると言つたんだ」

「樊さん、空がいよいよ怪しくなってきましたよ？ 一応、一通り見て戻りましょう」

雲が黒ずんでいる。雨に濡れるのは旅をすれば良くある事だが、樊樂は何となくだが（此処で雨に会うのは勘弁して欲しい）と思つた。

完全に崩れて土の山の様になっている家や、どうにか形は保っているがかなり危うい角度に傾いた家が混在している。屋根まで雑草に覆われている建物まであり、全く人の居る気配が無い。それでも一箇所から見渡しただけで全体を把握する事が出来るほど狭い村という訳でもなく、樊樂らは辺りを注意深く見回しながら村の奥へと進んでいった。

「……待て」

「どうした？」

孫怜が腕を伸ばして樊樂らを制止する。それから孫怜はゆっくりと顔の向きを左右に変えながら何かに神経を集中させていた。

「声……か？」

「声？」

樊樂らも辺りを探るように見ながら耳を澄ます。風が辺りの雑草や山の木々を揺らす音がそれほど強くは無いが絶えず聞こえている。声と呼べる様なものは聞こえない。

「人の声ですか？」

劉子旦が小声で孫伶に訊く。もし誰かが居るのだとすれば警戒しなければならず、それがどういう者なのか知れるまでこちらも存在を知られない方が良いと思われる。

「ああ。だが、気のせいかな……？」

「馬を降りて行きますか？」

「……いや、多分勘違いだ。このまま進もう」

孫伶はそう言い、樊樂は黙って頷いた。

四人は今まで以上に辺りに目を凝らし音にも注意深く進んだが、特に怪しい事は何も無い。そのまま通りの跡を進んで行くと、やがて道が十字に交差している場所に出た。どちらを向いても同じ様な壊れた家が並ぶ通りである。

「意外に民家が多いな。もっと人の少ない村だと思ってたが」

樊樂はいつもよりは声を抑えて皆に届く程度の声を出した。

「襲われる前から空き家は多かったらしいから、この家の数に対して人は少なかった様だ」

劉子旦が孫伶を見ながら、

「もっと昔、此処は何かを山から掘り出す拠点だったなんて話を聞いた事があった様な……何だったかな……」

「さすが良く知ってるな。それもかなり前に出なくなったそうだ。その頃は人も多かったんだろうな」

孫伶が山を眺めながら言ったので、樊樂らも同じ方向に目を遣った。

「何が掘れたんだろうな？」

「翡翠だよ。しかもこの国では未だに他に出る処が見つかっていない、硬玉だ」

第九章 五

「そいつは凄いな。本当にこの国でも出るのか……」

樊樂は大きく目を見開き、かなり驚いている。孫怜が言った通り、翡翠の硬玉は国内で産する処は無く、すべて他国から入って来たもののばかりでありその価値は黄金を超えるとも言われていた。

「もう掘ってないぞ。発見された当初は軍まで動員して掘らせたらしいが、何年もしない内に量も減って割に合わなくなったそうだが。軍が手を引いたその後、入れ替わりに各地から掘り当てる事を夢見た者達がやって来たそうだが、もう人の手の届く範囲には全く無いらしい。稟施会もやってみるか？」

孫怜が笑いながら言う。樊樂が劉子旦に視線を遣った。

「多分、旦那も此処の話は知ってるんじゃないですか？ もし見込みありだったらとくに手を出してますよ」

「だろうな。周の旦那がやらないって事は、もう此処には無いって事さ」

孫怜の言葉に樊樂は首を竦め、

「そりゃ残念だ。でもまあ、此処で穴掘り人夫させられるのは勘弁して欲しいしな。……あ、そうか」

「何だ？」

「その翡翠狙って百槍寨の連中が此処に来たんじゃないのか？」

「違うな。掘り尽くしたのはもつと昔の事だ」

即座に孫怜に否定され、樊樂はまた首を竦めた。

「まだある可能性があるならやってみたい気もする。掘った物は自分の物にして良いなら」

胡鉄も山を眺めながら言う。すると孫怜と樊樂はその言葉と同時に笑みを消し、揃って眉を顰めた。胡鉄はそんな二人の表情を見ると目を丸くして、

「……俺、何か変な事——」

樊樂がすぐに胡鉄の顔の前に手をかざし、ゆっくりと辺りを探る様に顔を動かす。孫伶も同様である。

『……何をする？』

突然、誰かが話し掛けてくる。低くしわがれた年老いた女の声。あまりに咄嗟の事で劉子旦と胡鉄は訳が分からなかったが、孫伶と樊樂が剣に手を掛けているのを見ると、すぐに自分達も剣に手を添えて上体を低く構えた。

「何処だ……？」

樊樂が眉間の皺を一層深くして呟きながら、辺りを睨みつける様に声の主を探す。孫伶も周囲の気配を探るのに全神経を集中させている。しかし、見当たらない。

『此処で何をするつもりだ？』

今度は四人ともはっきりと耳にした。声は辺りに響く程のものではなく、まるで四人の中に混じって普通に話し掛ける様に、すぐ傍で聞こえていた。それが、全くその姿が無いのはどうということか？四人は緊張と焦りで全身を強張らせる。

『此処には何も無い。誰も居らん。去ぬるが良いわ』

意を決して孫伶が剣から手を離し、背を伸ばして声を発する。

「我らは……我らは人を探して参りました。怪しい者では——」

『誰も居らぬ』

「あんたは！ 誰なんだ？ 姿を見せてくれ！」

樊樂が叫ぶが返事は無い。人が隠れる事の出来そうな民家はいく

つもあり、そのどれかに隠れているに違いない。しかし、不用意に動く事は出来ない。声の感じからして年老いた女、恐らく堯家村の二人の老女とあまり変わらないのではないかと思われるが、どう考えても普通ではない。すぐ近くに居ないにもかかわらず淡々とした声が耳元まで届く。枯れそうなその声には意外にも極めて妙なる内力が込められているのである。

「樊！」

孫怜が不意に叫び、樊樂が馬の上で大きく仰け反る。何かが、樊樂の胸の辺りを掠めていった。

「やる気か！」

樊樂は一気に腰の剣を抜きその何かが飛んで来た方向を睨みつけるが、やはり人の姿は見えない。

『フン、我流か。立派なものだ』

声が消えると同時に再び何かが前方から放たれた。

「カン！」

孫怜が剣を抜き、そのまますばやく振り上げると剣に何かが当たった音がした。すぐ下に転がり落ちた物を劉子旦が目で追う。

「……石？」

『フン、それだけでは分からないね』

「何の話してんだ！」

「おい、大体の見当はついた。馬をあそこに」

孫怜がすぐ近くの民家を指差し、すぐに皆そちらに移動すると馬を降した。

先程石が飛んで来た方角から民家を挟んでその反対側に隠れた四人はそれぞれ剣を握り締めて様子を窺った。

『何をする気だね？』

「ツツ……何なんだこの声は」

樊樂は思わず耳を押さえて顔を顰める。何処に居ようと声はまるで真っ直ぐ耳元に向けて囁かれている様に聞こえる。

「いいか、まだ敵かどうかは分からないからな」

孫怜が他の三人を見ながら念を押す。

「敵だろうが！ 仕掛けて来たんだぞ？」

「樊さん落ち着いて下さい。向こうはただ帰れと言っただけです。まだ向こうも本気じゃない。下手に怒らせない方が良いでしょう。お婆さんの様ですが、相当出来るんじゃない？」

劉子旦は同意を求めるように孫怜を見た。

「相当かどうかは分からないが、確かに普通のご婦人では無さそうだ」
「本当に人かな？」

胡鉄が不安そうな声を出した。何処からともなく纏わり付く様な老婆の声を聞いていれば確かにそんな風に思えなくもない。此処は悲惨な過去を持つ廢墟なのである。

『はて、何処へ行ったか？』

「……分かってる癖によ」

『ああ。そうさ』

「うわああっ！」

突然、胡鉄が他の三人の耳をつんざく様な渾身の叫び声を上げる。皆一斉に振り返り、「ウツ」と声を詰まらせた。先程石が飛んで来たのとは正反対の、四人の背後数間先にある背の高い草むら。風にたなびく緑の隙間に、こちらを凝視する老婆の顔が見えていた。

第九章 六

樊樂は勿論の事、『刺激しない方が良い』と言っていた劉子旦も即座に剣を向け、胡鉄も慌てて剣を持って体勢を整える。もし老婆がこちらに迫って来るとしたらどれだけの速さなのか想像もつかない。

「待て待て！」

孫怜が慌てながらも即座にその前を遮って老婆の覗く顔に向かって進み出ると、

「突然お騒がせして申し訳ございません。私どもはある者を追っておりまして、此処にその者達が隠れていないかと見に参ったのです」
恭しく礼をし、そのままじつと返事を待つ。すると老婆は草むらからスツと出てこちらに向かつて数歩進む。

初めて見せるその姿は、ひどい檻褸を纏う至って普通の、老いた『人』であった。

老婆は草むらから出るには出たが、すぐに立ち止まる。孫怜の位置から五、六間程離れており、そこで互いに無言で相手を観察し合っていた。

老婆の羽織る袍ほうは足の先まで隠してしまう程長く身の丈に合っておらず、そこら中が破れ、擦り切れてほつれた糸が無数に風にたなびいている。淡い黄色というよりは土色の、その辺に落ちていたものを拾って引っ掛けただけの様な、奇妙な風体であった。

「あの……この村にお住まいで？」

孫怜が訊ねてみる。

「徐というのを探しておるのか？」

老婆は孫怜の言葉を無視して質問で返す。それを聞いた四人は驚き、互いに顔を見合わせる。

「おい、知ってるのか？」

樊樂は剣を腰に納めて孫怜の横に立ち更に訊き返す。話せるのな

ら無用な警戒の色を見せない方が良いと、劉子旦と胡鉄もすぐに剣を戻した。

「その大きいの。お前は真武剣派の人間では無かろう？」

老婆の言った『大きいの』というのは樊樂の事らしい。それにしてもこの老婆が『真武剣派』という名を口にするなど思いもよらず、四人に再び警戒心を抱かせる。真武剣派は子供でも知る名だが、何故初めて会った自分達にそんな事を訊くのか。老婆は真武剣派とどういう関わりがあるのか？

「あの時も居らなんだが、あれからも居らん。何度来ても居らん者は居らん」

「前に、真武剣派の者も探しに来たという事ですね？」

孫怜が訊ねると老婆は目を細め、

「お前達は真武剣派ではないのに探しておるのか？ 放っておけば良いものを。この江湖で急に消えた者など大抵、既に生きてはおらぬわ」

吐き捨てる様に言い、また四人を睨め廻す。

「あなたは……ずっと一人で此処に居られるのか？」

樊樂は心持ち丁寧な言葉を選び、老婆に話しかける。それを聞いた胡鉄が、どんな顔で言ってるのかと樊樂の表情を窺っていた。

「此処に居る事を許されておるのはこの私だけだよ。お前達は早々に去れ」

「……誰の許可が要るってんだ？」

『頭が悪いね。お前は』

不意に老婆の両手が跳ね上がり、二つの小さな礫が音を立てて樊樂に迫る。

「くっ！」

樊樂が体を捻ると同時に横の孫怜が再び腰の剣を抜き、礫の一つを叩き落す。さすがに二つ同時には捉えられず、もう一方は樊樂に

は当たらなかったが後方の何処かへと消え去った。

「速いね。お前は中々良いね。頭も賢そうだ」

老婆は孫伶に視線を移してそう褒めるが、その目は相変わらず鋭く睨めつける。

「私はこの村の住人さ。昔からね。お前達は違うだろう。見た事が無いからね」

「ではあなたも、生存者……四人目の……？」

孫伶はまた腰に剣を戻し、老婆に尋ねた。

「四人目？ もっと居る。死にぞこないはね。でももう皆此処には戻りたがらないさ。私くらいのもの……この村を守らないとね。お前達からね」

生き残った者が多く居るというのは孫伶にも初耳だった。二十年前の事件で有名になったのは洪破天、傅千尽、殷汪の三名。たった三人だけが生き残り、その内の殷汪がただ一人で百槍寨へ乗り込んだのであり、孫伶も噂の通り咸水で生き残ったのは三人だけと思いついていた。しかし考えてみれば村が襲われた時に村人は全て此処に居たというのも十分有り得る事だがそうでなかった可能性も同様だ。他所へ出掛けていた者もあるだろう。何年か前に孫伶が此処を訪れた際には誰も居なかったのだから、老婆は難を逃れてからそのまま他所で暮らし、後に村に戻ってきたのかも知れない。

「用は済んだね？ さあもう去ね。そして二度と来てはならん。此処は村人達のもの……」

老婆は言いながらゆっくり目を閉じ、微かに頭を前後に揺らす。

咸水の、昔の賑やかだった頃を思い出しているかの様に。

「伶……もう行こう。あの婆さんは気味が悪いぜ」

二度も石で狙われた怒りをなんとか腹に収め、樊樂は険しい視線を老婆に向けつつ、孫伶に言う。

「……」

孫怜は老婆をじっと見つめたまま答えない。

「おい、怜」

「待って！ 樊さん、あそこです！ 孫さん！」

急に劉子旦が樊樂と孫怜の傍に駆け寄り、視線で老婆の後方、山へ少し上がった辺りを示す。

「あれは……？」

揃ってその方向を向いた樊樂と孫怜は目を見開いて注視する。そこにあったのは、確かに人影である。

立ち木で体を半分隠すように人が立っている。黒装束である事とその立っている雰囲気から男であろうという事は判る。肩の辺りまで伸びている黒い髪が顔を覆い隠しており、また遠い事もあって表情等は窺い知れない。

樊樂と孫怜は老婆に視線を戻す。すると老婆は一層強く睨みつけてきた。

『お前達は今、死人を見ている。関われば命は無い』

声が再び樊樂らの耳に纏わり付く。新たに攻撃を仕掛けて来るかも知れないと、老婆に意識を集中させる。

そんな中、孫怜が老婆に向かって数歩進み出た。

「私は、この村と無関係という訳ではありませんね」

「……ほう？ 一応、聞いてみようかね。お前と、この咸水の関係とやら」

老婆の表情は一貫して変わらない。本当に一人で居て誰か来ると必ずつこうして睨みつけているのならば、この老婆は普段微笑んだりする事は皆無ではないのかと思える。

樊樂が時折、山の人影に目を遣る。向こうはじっとして動こうとはしなかった。

第九章 七

「私は呂州の孫怜と申す者。この村に居られた殷汪どのは昔から懇意にしております、何度も此処を訪れておりました」

「殷汪様とな？ 嘘ではあるまいな？」

老婆は聞くなり即座に返し、孫怜に向けた双眸を大きく見開いた。「殷汪どのがこの咸水に移り住む前、呂州に居られた事はご存知でしょうか？ 私はその頃縁あって知り合ったのです」

「……おかしいのう。殷汪様と懇意であつた者が真武剣派のお使いかね？」

「我々は真武剣派とは関係ありません。むしろ我らは真武剣派より先んじて徐を捕らえたいと考えて――」

「ホッ、もう既に出遅れておるではないか？ 真武剣派の者が此処へ来たのはもう随分前だ。さっさと追いかけるがよいわ」

老婆は殷汪という名に反応を示しておきながらそれ以上は触れず、とにかくさっさと行けというように腕を顔の前まで持ち上げて払う仕草をして見せた。殷汪は仇を討った英雄である。きっとこの老婆にとつてもそうであるに違いないが、急に話をするのが煩わしくなったのか、老婆は向きを変えて歩き出す。そんな急な変わり様が不自然にも思えたが、それを問い質せる雰囲気では無かった。

「……あの」

『去ね』

孫怜は後ろを振り返り樊樂らを見る。四人は集まって去ってゆく老婆をただ眺めるしか無い。

「……俺達も、もう行こうぜ」

「あれは、徐とは関係無いんだろうな？」

胡鉄が山に視線を投げ、他の三人もそちらを見上げると人影は変

わらず同じ位置にあったが、皆一斉に見ているのが分かったのかその者は立ち木の後ろに隠れた。

「……あれが死人ねえ。んな訳ねえだろ」

「若い男の様な気がするんだが……ま、恐らく徐とは縁もゆかりも無かろう」

孫怜が言うと、皆一様に頷いた。

それにしても老婆の行動は不可解である。隠れている男の事を『関わるな』と言いながら、その男も樊樂ら四人も放って立ち去ろうとしている。もし男を捕まえに行こうとしたなら、それでも無視するのか、それともいきなり向きを変え襲い掛かって来るだろうか？隠れている男といいあの老婆といい、とにかく謎だらけで一体どういう者達なのか調べたくもあるが、徐は居ないと分かればこの村に用は無い上、余計な事をして老婆の逆鱗に触れでもすれば時間の無駄どころか無事にこの咸水を出られるかどうか。

樊樂らはあの隠れた男は徐ではないと結論し、村を出る事を決めた。老婆はゆっくりと歩いて行った筈だが、いつの間にか姿が消えている。何処かの民家に入ったのか、そうでないのかは分からなかった。

「この村の住人とか言いながら、お前が来た何年か前には居なかったんだろ？ たまたま里帰りして来ただけじゃねえか。偉そうな婆さんだぜ」

樊樂らは再び馬に乗り村の外に向かう。村の全部を見た訳ではなかったが、徐とその仲間が人間だったならこんな所に居たくない筈だと樊樂は言う。

「あの婆さんは物の怪の類だよ。こんな所に居られる事自体おかしい」

「徐が逃げ込むかも知れないって、樊さんが言い出したんじゃないですか」

「ああ。だから今初めて来て認識を改めた訳だ」

樊樂が孫伶に目を向けると、孫伶は何やら考えている様子だった。
「伶？」

「……確かに今のこの村で暮らすというのは並大抵の事じゃない。
ずっと他の街に居て、何故此処に戻ろうと思ったんだろう？」

「さあね。もう先も短くなって、昔住んだ此処を死に場所に決めた
とかそんなところじゃないか？」

樊樂はそう言いながらも一度村を振り返る。最初に見たのと同じ、荒涼とした風景に人影は無かった。

空の黒雲が時折唸り声を上げ始めている。遠い山の稜線に目を遣
ると既に霞んで見え、恐らくそこは激しい雨となっているだろう。

四人は時折頭上を見上げては顔を顰め、先を急いだ。

「樊さん」

「ああ」

樊樂らが来た時と同様に川に沿って草むらを進んでいると、その
先からこちらに向かってやって来る者があった。二人居て、どちら
も馬に乗っている。劉子旦が樊樂に声を掛けると樊樂は正面を見据
えたまま応じ、孫伶と胡鉄もじっとその二人の様子を窺う。まだ顔
が見える様な距離ではないが、きつと向こうもこちらの四人を見て
いるに違いない。

「用があるのは咸水か、俺達か、だよな」

樊樂が孫伶に顔を寄せるがその目は先を見つめたままである。

「真武剣派の者だろうか……？」

「さあ？」

先方は速度を緩める気配は無い。二人並んで真っ直ぐ向かって来
る。

「片方、女みたいだな」

後ろから目を凝らしている胡鉄が言った。二人並んでいるその左
側の人物の服装がどうやら女物の様で浅葱色、右側は簡素な白っぱ
い服装で、男の様に見えた。

このような場合、妙に気まずい思いを互いにする事になる。何者なのか気になって仕方が無いのだが、かといってじろじろとその顔を窺うのも憚られる。そうこうしている内に互いの身なりを確認出来る程度の距離まで近付いた。

「何だ？ あの子……」

「一体何処のお嬢さんなんだかな？」

右側は確かに女で若い。左は老人であつた。老人の方はその身一つで他に何も持たずに馬に乗っているだけといった感じだが、女の方は違った。腰にはちゃんと剣があり、背にも何か得物らしき物を背負っている。しかもその女は顔を背ける事無く大胆にもじつとこちらを見ている様だつた。

「どうする？ 無視するか？」

樊樂は孫怜に向かって訊ねる。孫怜は樊樂を見返し、

「俺が話を聞いてみよう。お前はいらん事を言うなよ」

「どういう意味だそれ……」

双方互いに顔がはつきりと見える辺りまで近付いた。女は若い割には泰然として穏やかな表情をこちらに向けており、樊樂はどんな顔をしていれば良いのか分からずそわそわとして視線を彷徨わせる。孫怜が話し掛けようと口を開くと、同時に女が軽く馬の腹を蹴りこちらに向かって進み出て来たので、思わず四人は緊張してしまった。

第九章 八

「失礼致します。あの、この先の咸水に行かれたのでしょうか？」
若い女の声は厳しいという程でも無いが、しかし凜とした強さを持ち、どうやらその辺のお嬢さんといった風では無かった。この江湖を旅しているというのであればどの様な身の上なのか知らないが、孫伶はこの女に（かなり慣れている）といった感じを受けた。

「そうだが、あなた方は、咸水の？」

咸水にあの老女と男以外に住人が居ると思えなかったが、孫伶はそう訊ねてみる。横の老人の服は粗末であの老婆に近いものがあるが、女の身なりは整っていてあの村で暮らす者の格好とは思えない。

「あ、いえ、違いますが――」

「この先に誰かおらへんかったかなあ？ 見とらへんか？」

老人が女の言葉を継いで訊いてくる。言葉は軽いがその目はこちらの反応を僅かも見逃すまいと注意深く窺っている――と、孫伶は見る。

「誰かを、お探しか？」

「まあそうや」

「あの、咸水は今廃墟の筈ですが、皆さんは――？」

今度は女が老人の言葉を遮る様にして話し出した。

「あんたらはどうなんだよ。廃墟に誰探しに来たんだ？」

樊樂が女を睨みながら訊き返す。本人にそのつもりは無くても樊樂がそのいかつい顔で目をぎよろつかせれば、大抵の子女は怯えてしまう。

「樊！」

「樊さん。そんな言い方は無いでしょう？」

孫伶と劉子旦がすぐに樊樂をたしなめる。だが女は樊樂の物言いを全く意に介さない様子で、

「誰も居ないならそれでも良いのです。しかし私が訪れるのは久しぶりの事なので、もしかしたら現在は廃墟で無くなっているのかも知れないと思ひまして。私の記憶では本当に何も無い村……。ですから皆さんが行かれたという事は以前と変わっているのかとも思ひましたのでお尋ねしたのです。不躰に失礼致しました。それでは」

女はそう言つて老人に向かい頷き、再び馬を進めようとする。

孫怜が女に声を掛ける。

「待たれよ。今あの村には年老いたご婦人が居られる。それと、もう一人、若者が居た様だが……。なんでも真武剣派の者が徐という男を捜しに來たという話を聞いた。あなた方も真武剣派の？」

「徐かいな？ 武慶で強盜働いた奴やな？」

老人がすぐに応じ、女は孫怜を振り返り黙つたままである。

「儂らは真武剣派ちゃうで。関係あらへん。全く別の知り合い探しとるだけや。若者っちゅうのはどんな奴やった？」

「遠目に見ただけではつきりとは……」

「そうか。ま、行つてみるわ。おおきに」

老人と女は再び村に向かつて進み出し、樊樂ら四人はその後姿を暫く黙つて見送る。

「……あれ、弓かよ。あの女、何者だ？ なんだか生意氣そうな奴だったな」

「普通じゃないですか？ 樊さんが変に突っかかっただけでしょ」

劉子旦が呆れ顔で樊樂を見ている。

「ま、あの婆さんに追い返されて戻つて来るんだろ」

不意に空が光を放ち、続けて地面を揺らすような大音量が辺りにこだまする。

「怜、急いで戻ろう」

孫怜は老人と女の方をじつと眺めていたが樊樂に呼び掛けられて我に返り、馬の手綱を引いた。

「あの娘が雨に濡れる様を見てみたかったなあ。きっと良い眺めに違ひない」

胡鉄が後ろでそんな事を言っているので樊樂と孫伶は振り返る。二人とも揃って口を開けて胡鉄を怪訝な表情で眺めていた。

「たおやかなお嬢さんでも風情がありますが、あの娘さんは劍客の様ですから、また違った美しさがありますね」

胡鉄の隣で劉子旦が言うのと、樊樂と孫伶の口が開いたままのその顔が同時に劉子旦に向いた。

樊樂らは急いで茶屋に戻ったが少し手前で雨が降り出し、少し体を濡らしてしまった。可龍、比庸の二人は皆が無事に戻って来たので安堵し、わざわざ表に出て来て出迎えた。

「徐は居ない。次は都に向かう」

孫伶が濡れた肩を拭いながら二人に告げると、
「休んでからな。此処、泊まれねえかな？ 親父に聞いてみよう」

樊樂が先に店に入って行く。此処は近くに街も無く宿を探すには時間が掛かる上に、雨は激しくなっていくばかりで再び外へ出て行くのは億劫である。

店の主人は部屋は無いがその辺に雑魚寝するなら構わないと言い、一行はこの店に泊まる事にした。

「あの二人連れ、どうしたかな？ 此処に来るだろうか？ 婆さんにやられてねえだろうな？ ハハ」

「さあ、どうだろうな」

樊樂と孫伶が話していると、可龍と比庸が顔を見合わせて話し合ってから、可龍が口を開いた。

「お爺さんと若い女の人ですか？」

「ん？ お前達見たのか？」

「皆さんが出て行って暫くしてから此処に来て……茶を飲んで暫く話していて、また出て行きました」

「どんな事を話してた？」

樊樂が訊くと可龍はまた比庸と少し話してから、
「咸水に戻る、とか、二年ぶりだ、とかあまり聞こえませんでした」

けど、女の人はどうも咸水の村の出身の様に聞こえました」

「出身？ あの娘はまだ若いぞ？ あの事件当時生まれていたのかどうかも怪しいが……」

孫怜が首を捻る。咸水で生まれたのでなければあの村の出身とは言うまい。二十を超えていれば村で生まれたというのもおかしくは無いが、生まれて間も無い赤子があの事件を生き延びて一人で逃げたなどあろう筈が無く、一緒に連れて逃げた者が居る筈である。

（あの老婆……関係があるのだろうか？）

咸水に居た老婆が関係無く、村に居て襲われたのであれば他にあの娘を連れた生き残りが居る事になる。老婆は村の者で生き残った者は他にも居ると言ったが、あれは恐らく事件の時に村を離れていたという事に違いない。あの若い女も生まれたのは咸水であったがすぐに他所へ行ったのなら辻褄は合う。そして村が襲われたその時に村に居ながら生き延びたのはやはり噂通り三名しか居ないのだ。

孫怜が眉根を寄せてじっと考える風なのを見て、可龍が続ける。

「女の人は朱蓮しゅれんというらしいです。お爺さんがそう呼んでました。お爺さんは狗く、だったかな……」

「狗！」

突然、孫怜が目を見開いて樊樂の方を勢い良く振り向いた。

第九章 九

孫伶は膝を叩いて一人大きく頷いている。

「なんだ？ 知ってるのか？」

「いや、何処かで見た事がある様な気がしてたんだ。何処でかはい出せんが」

「で？ 誰だよ」

「あの老人、丐幫かいほうの狗幫主だ」

孫伶がそう言うのと、皆驚いて目を丸くする。

「あれがか？ 前齒無かったぞ？」

「それは関係無いでしょ」

劉子旦はすぐに樊樂から孫伶に向き直り、目を輝かせた。

「あの方が狗幫主ですか。噂は聞いていましたが、変わった方様ですね。あ、確か前幫主でしたね。いやー、こんな所でお見かけするとは……こんな処で何してるんでしょうね？」

確かに丐幫幫主の名は江湖に知れ渡っているが、実際にまみえる事などまず無いと言って良い。劉子旦は興奮気味に声を弾ませるが、樊樂にはその劉子旦があまり良く理解出来ない。

「女はあの格好からして丐幫の者では無さそうだな」

「そうだな」

「その狗幫主は、あの婆さんにやられたりしねえのか？」

樊樂は孫伶の横に腰を下ろした。

「どういう意味だ？」

「狗幫主って武芸とか出来るのか？」

「何言ってるんですか樊さん。そんな事も知らないんですか？」

劉子旦も横に腰を下ろして話に割り込んで来る。

「丐幫には古くから幫主に相伝される武術があるんですよ。無論、武林中が一目置く程の。だからこそ丐幫は幫主を中心に昔も今も最大の組織なんじゃないですか。子供でも知るところですよ」

劉子旦は益々興奮してくる様で、樊樂に対する物言いに遠慮が無くなってきている。

「へっ、単にこの江湖には乞食が多いだけじゃないのかと思ってたぜ」

「それはあるな」

「孫さん！」

「あのご婦人がお前の言う様に物の怪だったとしたらいくら狗幫主でも無事では居られぬかも知れんが、まあまずそんな事はない」

孫伶は樊樂を見てニヤリと笑い、樊樂は首を竦める。胡鉄は可龍、比庸と共に黙って三人の会話を聞いているだけだった。

老人と女の二人連れは茶屋には戻って来なかった。六人は文字通り雑魚寝して休んだが深夜になっても雷は鳴り止まずとても熟睡出来る状況では無く、皆少々寝不足気味で朝を迎えた。

空を覆う雲は幾分白さが増していたが、まだ僅かに雨を落とし続けている。

「んー、仕方ねえな。雨だからって出ない訳にもいかん」

「随分空も明るくなってきてるし、じきに雨も止むだろう。出るか？」

孫伶は樊樂の指示を待つ。

「よし、行こう」

六人揃って再び北へ。また堯家村に入る事になるのだが、孫伶は呉琳の居る穆家には寄らないと言う。

「別に良いじゃねえか。呉琳の様子見といった方が良い。元氣そうならこの先もきつと大丈夫だし安心出来るってもんだろ？」

樊樂は顔を出していくべきだ言う。しかし孫伶はついこの間見送りを受けたばかりなのにまだ戻れないと言い張った。

「ただ顔を見るだけでは済まんだろう。また穆さんに気を使わせる事になる」

「……まあお前がそれで良いなら別に良いんだけどよ」

翌日には雨が上がりその後は暫く晴天に恵まれ、咸水を出て三日後の昼、一行は何事も無く再び堯家村に入った。この街から真東の都までは呂州から此処までくらの距離であり、普通に行っても十日も掛からない。ただ、今の樊樂らには余り余裕は無い。徐が何処かに落ち着いてゆっくりしてしてくれるのなら話は別なのだが。

「咸水行ってなかったらもう都に近い処まで行ってますね」

樊樂は劉子旦が言うのを聞き流して胡鉄の方を振り返り、

「おい、ちよつと見て来いよ」

「何を？」

「呉琳だよ」

孫怜が頑なに拒むので穆家には行かない事にしたが、樊樂は胡鉄の様子を覗いて来る様に言った。

「ばれたら『何で顔を出さない？』って訊かれるに決まってるからな。何事も無さそうならそれで良い。ちよつと見てくるだけな」

すぐに胡鉄は樊樂らと別れて呉琳の居る屋敷へと駆けて行き、樊樂らは進んで来た呂州からの道と都から西へと伸びる道とが交わる街の中心の大通りで待つ。

この堯家村は都から西への道沿いの街の中では大きい方で、中央の通りはかなり賑わっていた。尤もこの西への道には街はそう多くなく、此処より西に暫く行けば砂漠が広がっている。そこからは此処の様な街らしい街は最西端の起離きりしか無かった。

胡鉄が一刻が経ったか経たないかといった程度で樊樂らの許に戻ってきた。

「えらく早いじゃねえか。どうだった？」

「何も問題無さそうだったよ。呉琳さん居たよ」

「当たり前だろうが。居なきゃ困る。……って、会ったのか？」

「まさか。あの屋敷の近くまで行ったら表に呉琳さんと、あー、鮑さんだっけか？ 一緒に居るのが見えた。何か作業してたな」

「『何か』って何だ？」

「さあ？」

「さあつて、それぐらい見たら分かるだろうが」

「とにかく、呉琳さんは楽しそうにしてたんだ。言う事無しだ！」
胡鉄はそう言つて胸を張り、そして皆一斉に孫怜を見た。

「そうか。言う事無しか」

孫怜は皆を見回してから珍しく微かに、ほんの微かにだが俯き、笑つた。

それから一行は咸水への後戻りの分を取り戻すべく真つ直ぐ都へ向かつた。都に着けば真武剣派周辺の話や稟施会の動きについても幾らか聞く事が出来る。城南じやうなんからの知らせが早ければ周維しゅういの指示か何かがあるかも知れない。樊樂らの徐の搜索と人質奪還の役目は都からようやく本格的に開始されると言つて良く、既に真武剣派は東へ向かつている筈であり、現在の状況を把握してそれらに追いつき追い越さねばならない。何も真武剣派と争わねばならない理由はないのだが、何故か何となく、皆対抗心を燃やし始めている。

樊樂ら六人は、都に六日と半日で到達した。

第九章 十

雨の日が続く。しかしながら予測しなかった雨ではない。五月に入り、本格的な雨季を迎える。城南に居なくて良かったと樊樂ら稟施会の三人は思っていた。都など北方の街で迎えるこの季節は、最南端にある城南の暑さとじめじめした空気に比べれば随分と過ごし易かった。

都、金陽の中央に、北の宮城正面から真っ直ぐ南へ伸びる最も広い大通りがあり、街のほぼ中心で東西を結ぶ大通りと交差する。そこを境に北と南ではこの大通りの様相が随分違う。北は朝廷に仕える高官の邸宅等が建ち並び雅やかな雰囲気が漂い、南は北とは対照的に庶民で溢れかえり、常に活気があり、騒がしい。と言ってもこの大通りの周辺に民家がある訳ではなく、そこはこの都に於いてのあらゆる商いの中心地であった。およそ取引が可能な物は何でも扱われており、都に住む者だけではない、各地から売り手、買い手が連日押し掛けていた。

大通りの南北を隔てている街の中央の、やはり南側、少し入った場所に稟施会が屋敷を構えている。稟施会は商いをする集団だが此処は一般の客を招き入れて商売する場所では無く、個人の邸宅の様な造りで表とは全く別の、閑寂な佇まいである。

「……誰も居ないんじゃないだろうな？」

屋敷の門をくぐった一行は馬を降りて辺りを見回すが、しんと静まり返っていて人が居ない。

「奥、見てきます」

劉子旦が先に中へ入って行く。

周りを堀で囲んだこの屋敷には建物以外に殆ど何も無い。本来ならば庭を造成する広い空間が、文字通りただの空間となっており木の一本すら存在しないのだ。その景色は極端に色の種類が少なく、全体が非常に簡素な造りであった。

劉子旦が後ろに此処の使用人らしき男を連れて出て来た。

「ええと……いらっしやいませ」

「……まあ、間違っちゃいねえな」

樊樂は男を眺めてから訊ねる。

「沈^{ちん}さんは今居るのか？」

「今出掛けてます。でもすぐ戻るかと。待たれますか？」

「ああ、勿論待つとも。中でな」

「ああ、そうですね。中へどうぞ」

男は此処に来てまだ間が無いのか慣れていない様子で、樊樂に言われ慌てて中へと案内した。樊樂らは教えて貰わずともこの屋敷の事は昔から何度も来て良く知っていたが、黙って男に従った。

「あいつ、俺達も稟施会の者だって分かって無いんじゃないか？」
部屋に通されてようやく体を落ち着けた樊樂はそう言つて笑う。

「最初に言いましたよ。城南から来たつてね。でもまあお客さんの待遇が受けられるなら良いじゃないですか。沈さんは遊ばせてくれないでしょうけど」

「皆出掛けてるのかな？ えらく静かだ」

胡鉄が窓の外を覗くが人影は無く、しとしとと降る雨音だけが聞こえてくる。

「何だか……物が無くなつてねえか？ 物が」

この部屋には必要最小限の調度品しか用意されておらず記憶と少し異なつていて、樊樂は部屋を見回しながら怪訝な表情を浮かべる。人が出払っているのはよくある事でどうという事は無いが、ただでさえ飾り気の無いこの屋敷から更に無くなつていく物があるとするば、何か異変でもあったかと心配になる。

「確かに、そうですねえ。もつと色々とあつた筈ですが……」

「何だか、金目の物は何も無い、って感じだな」

劉子旦と胡鉄も樊樂と同様に前に来た時の事を思い返しながら部屋を見回したり外に顔を出して別の部屋を覗く。

孫伶も来た事があるのだがあまり記憶に残っておらず、樊樂らの言う違いは判らない。可龍と比庸は初めて来たので、もの珍しさから辺りを眺めていた。

使用人の出した茶を皆が飲み干してその器が乾ききった頃、部屋の外からばたばたと足音が聞こえてきた。

「おお、来たか、来たか」

早足で慌しく入って来たのはこの都の稟施会を預かる沈斉文、顔も腹も丸いが上背のある五十がらみの男である。何かは判らないが両腕に抱えた物をがちやがちやと柵に押し込み、また早足で樊樂らの許に歩み寄った。樊樂らは一斉に立ち上がる。

「皆元氣そうだな。孫さんも随分久し振りじゃないか。呉夫人は達者かな？」

「ハ……なんとか、やっております」

「そうか。おう、掛けてくれ」

部屋には大きめの円卓が一つあるだけなので、沈斉文も加わって腰を下ろした。

「また随分若いの連れて来たな」

「可龍、比庸と申します。どちらも呂州の者でして」

孫伶が若者二人を紹介し、沈斉文は二人を眺めて頷いた。

「結構な事だ。うちは若いのが入らん。樊、城南の方はどうだ？」

「んー、こんなに若いのは居ねえな。暫く誰も入れて無いしな」

樊樂は沈斉文に対しても随分気安く話す。当主である周維に対しても同様であるので、稟施会の中で樊樂が言葉遣いに気を使うような人物は存在しない。

「なあ、何だかこの屋敷、いろいろ無くなってねえか？ 随分と広くなっちゃった様に感じるんだが」

「ああ。無くなった。今、うちには何も無いわ。どうすれば良いものか……？」

沈斉文は急に視線を手許に落とし、溜息を一つ。樊樂らは本当に

何かあったのかと驚き、顔を見合わせる。

「一体、何があったんです？」

劉子旦が沈斉文の顔を覗き込む。それから少し間を置いて沈斉文が重い口を開いた。

「うちの金が出ていかれた……」

「何だって！ いつだ？ 誰がやったのか判ったのか？」

「城南には報告、されてますよね？」

「……」

沈斉文は答えない。その様子を黙って見ていた孫伶も驚きを隠せず、啞然としている。

「どういう事なんだ？」

「……二人組みでやって来てな。うちの黄金二千五百両を持って行ったのだ。もう半年程経つか」

「二千……五百……」

黄金二千五百両――、この都の一等地にもう一軒、此处よりも遙かに豪華な屋敷を用意出来そうな額である。

沈斉文は顔を挙げ、沈痛な面持ちのまま告げる。

「南方から来た周維と洪破人という二人組でな。金が要るからよこせと……ああ、儂は何も言えずにその二人がせつせと蔵から運び出すのをただ眺めるしか無かったのだ」

両手で顔を覆い隠し肩を震わせながら再び項垂れる沈斉文を、皆ぼかんと口を開けたまま眺めている。何を言っているのか理解出来ていなかった。

第九章 十一

沈斉文は両手を卓上に戻し、また溜息をつく。

「だから今、うちは懷が寒い。外は暑くなつていくというのにな。売り掛けが随分とあるんだが入るのはまだ先でな」

「ハ……旦那かよ……脅かすな」

樊樂が大きく息をついて椅子の背に体を持たせ掛けると他の皆も同様に緊張を緩めた。沈斉文はもう笑っている。結局、沈斉文の冗談だった訳だが皆の反応は宜しくなかった。周維と洪破人の名を出すのを後にすればもう少しマシであつたのかも知れない。肝は最後にくるからこそ『落ち』なのだ。

「旦那が金を何に使つたんです？」

「洪さん達が運んでいた荷……あれかなあ？ 何だつたんだろ？」

胡鉄と劉子旦が頭を捻る。周維が都から城南に戻る際、同行した者達は全員荷を運んでいたが、余程の品が入っていないとあの量で黄金二千五百両が必要になるとは思えない。

沈斉文はしかめっ面になり、樊樂を見る。

「金二千五百両、さて、何だと思うね？ 若旦那の言うには、土産だそうな」

「土産だつて？ 誰にだ？ 城南の人間全てに何か配つたりするんだろうか？ ……それなら俺達も急いで帰らないとな。その何かを貰えなくなつちまうからな」

「樊さんも見たでしょう？ 周の旦那はそんなに大量の荷を持ってませんでしたよ？」

「まあ、そうだな」

都で何を仕入れたのか聞いていない樊樂らには何も思い付く事が出来なかった。沈斉文は更に忌々しげに話し出す。

「若旦那が来られた頃、運悪く珍しい物がこの都に持ち込まれてしまった。フン、たった一本の剣だ。倚天青コウ（せいこう）は知っ

てるか？」

「イテン……勿論ですよ！ 倚天の剣と青コウの剣！ この世で最高の二振りじゃないですか！」

突然、劉子旦が大声を上げ、沈斉文に喰らい付く様に身を乗り出した。とにかくこの劉子旦という男は意外な所で突如興奮する性質で、長く共に居る樊樂らを未だに驚かせる。しかし今『倚天青コウ』と聞いて反応を示したのは劉子旦だけではなく、ずっと黙って聞いていた孫伶も明らかに驚いた顔をして沈斉文を見つめていた。

「落ち着け。……それで、その内の一振り、倚天の剣が売りに出てな。それを若旦那が買うと言い出したのだ」

「そうだったんですか！ じゃあ旦那は手に入れたんですね？ ああ！ あの時持ってたのか！ 何故教えてくれないんだ！ 稀代の名剣を拝めたのに！」

興奮して立ち上がる劉子旦の横で樊樂は耳を押さえて口をへの字に曲げている。

「子旦、少し黙れ。もう此処にはその剣は無いんだぞ？」

「土産って……誰に？ 誰に渡すんだろう？」

劉子旦は樊樂を無視して考え込んでいる。

「とにかく！ 人にただでやる為にそんな大金を使うんだぞ？ 全く信じられない」

沈斉文は天を仰ぐ様に顔を挙げ、両腕を広げて顔を左右に揺らししている。

「あの周の旦那にしては珍しい事ですな」

孫伶がぼつりと言う。

「目的は商いとは全く別なのかそれとも――」

「おおっ！」

不意に樊樂が何かを思い付いたらしく、背筋を伸ばして視線を宙に投げた。

「子旦、その剣はやはり剣の腕が立つ奴が持つべきだよな？」

「それは当然です」

「誰だ？」

「え？」

「誰が、その倚天の剣に見合う腕が在りそうだ？」

樊樂はニヤつきながら劉子旦を見ている。思い付いたその中身に相当自身がある様だ。劉子旦は少し考えてから、

「前は北辰の殷総監の佩剣でした……今は居ない……？」

「そうじゃなくてだ。旦那が城南に持って帰ったんなら、城南で一番剣が出来そうな者を考えてみる。本当にその剣に見合う奴かどうかは置いといてだよ」

「ん……あっ！……いや、でも」

「誰か思い当たるのか？」

孫怜が劉子旦に訊ねる。その視線が幾分鋭くなっていたが、他の者達は気付いていない。

「うーん、殷総監の名前を出してしまうと格が違い過ぎてアレですが、まあ城南ではうちの風^{さん}とか？ 剣の腕が買われてうちに来たんですたよね？」

「風か……死んだそうだな。フン、裏切り者には当然の報いだ」

稟施会の蘇^そ、風、項^{こう}の三名の裏切りは既に此処にも伝わっているらしく、沈斉文は吐き捨てる様に言い、珍しく険相^{けんそう}を作る。樊樂は沈斉文に同意を示すべく頷いて見せてからまた劉子旦の方を向いた。
「風の奴は殷汪とかその辺と比べれば話にならないだろ？ 俺達よりはまあ出来るって程度。怜なら確実に風の上を行く筈だ」

「そうでしょうね」

劉子旦は即答する。聞いている孫怜は特に何も言わず肯定も否定もしない。それよりも樊樂の話の続きをじっと待っている。

「格が違うと言えば、やはりあの周漣さんだよ。あの風をたったの一撃で仕留めたんだ。相当な腕の差がある筈だ。奴も油断はしたろうが、剣に関してはそれなりに出来るんだからああもあっさりやられたりしねえだろ？」

「周漣とは？」

沈斉文と孫怜は同時に訊ねた。劉子旦が二人を見遣って説明する。
「実は、風さんを殺した……殺したって言うか、まあそうなんですけど仕留めたのは旦那の屋敷に居る周漣という女性なのです。旦那が何処からか連れてきた女性で屋敷で働いてまして、風さん達が旦那の留守に押し入った時にその女性が風さんの剣を奪って刺したんですよ。その一剣で風さんは絶命しました」

「それはまた凄い女だな。一体何者だ？」

沈斉文は訝しむどころか笑みを浮かべて訊いてくる。稟施会の敵を始末したと聞いただけでその女を気に入ったのだろうか。

「風はお前達がやったんじゃないかったのか？」

樊樂は最初、風は自分達で始末したと言っていた筈だ。孫怜は周漣という名を初めて耳にした。

「本来なら奴をやるのは俺達の役目だからな。その周漣さんってのは普段剣を持つような女じゃなくてただの使用人だと思ってたんだが……、そんな女が一人であっさりうちの用心棒の中で一番腕の立つ風を事も無げに始末しちまったなんて、格好つかねえ」

樊樂は後頭部を撫でながら孫怜から顔を背けた。

「で？ お前が考えたのは旦那は倚天の剣をその女に、という事か？」

「何もそんな剣じゃなくても、もっと手頃な奴があろうに。あんな大金を持ち出すなんて若旦那もどうかしている。そもそも普通、女に剣を贈るか？」

沈斉文は周維が金を持ち出した事で本当に相当困ったらしく、まとも苦渋の表情を浮かべた。黄金二千五百両というのは確かに桁違いの大金ではあるが此処の全財産という訳でも無い。しかし突然それだけの資金が消えると商いの計画に支障が出るのも頷ける。もしかしたら屋敷から消えた物は皆、金に変えたのかも知れない。

「旦那は周漣さんが風をやったところは見ていない。こっちに來てたんだからな。でも旦那が連れて來たんだから元から剣術に優れている事を知っていたんじゃないか？ ただそれだけの理由でそんな

金の掛かる贈り物するのも変だ。もっと他に理由があるとするば…
…周漣さんを娶るつもりとか…どうだ？」

第九章 十一（後書き）

※ 青コウⅡ青＜金工＞

第九章 十二

孫怜と沈斉文は、周漣という者がどんな人物であるのか全く知らない。樊樂の突飛な勘ぐりがどの程度のものであるか、周漣を知る劉子旦や胡鉄の反応で量る。

「……有り得なくは、無い？」

「んん……少なくとも歳は釣り合いそうだなあ。でも今まで旦那は周漣さんに気があるようなそぶりを見せた事あったか？」

胡鉄が唸りながら劉子旦に言うのと、劉子旦も頭を捻った。沈斉文が笑い出す。

「あの若旦那の事だ。お前達にすぐばれるような振る舞いなどするまい？ 若い娘なのか？」

「……三十は超えてますね。俺より二つかそこら……若いと聞いた様な。しかし美しい女性です。凄く控えめで。剣を持たなければ、でしょうけど」

劉子旦の説明に樊樂が小さく頷いている。劉子旦は用心棒の中で一番若く三十代も丁度半ば、周漣が嘘を言っていないければ三十を超えているのは間違いない。

「なるほど。ならば若旦那がその気を起こしてもおかしくは無い訳だな。しかし……何も倚天の剣でなくても良かろうに」

「あの風をたった一手で倒すとは、相当なものだ。何処で習得したのかもわからないのか？」

孫怜は風の腕の程を知っており、あっさりとそれを片付ける女は到底只者では無いと考える。武林の名のある門派の出なのか、或いは野に伏せた名手の弟子か――。何の為に周維に同行して城南まで行ったのか？ 孫怜は周漣という謎の女に興味を引かれていた。

「私達も直接現場を見た訳では無いので、どの様な剣筋であったかも知りません。剣が持てるという事自体、初めて知りましたし」

「どうだ？ 俺の読みはかなりいい線いってないか？ 俺達が戻る

頃には嫁に、いや、長引けば子が生まれてるかも知れんな」

樊樂はそう言つて得意げに皆を見回した。

「まあ、あつても不思議ではないですけど、そこまで想像するのは気が早いですよ」

「そうなつてくれた方が良くかも知れんな。若旦那もいい加減落ち着いてこの稼業に専念して貰えればいう事は無い。太史たいしどの大喜びだろう」

沈斉文や城南の太史たいし奉など、長年稟施会を切り盛りしてきた者達は周維の当主としての能力については特に異存は無いものの、若さ故か腰を据えてその責務に当たる自覚がまだ足りないと感じている。妻を得て子でも成せば、この前の様に気まぐれでふらりと都までやって来たりする事も無くなるだろうと沈斉文は考えた。

樊樂らが沈斉文と話している間、孫伶は黙つて物思ひに耽る。

（旦那が来たのと合わせて倚天劍がこの都に現れる……偶然だろうか？ 客人で城南に居るといふ夏天佑かてんゆうという男、まさかあの天佑では？ もしそうなら……まだ、殷さんの影を追いつけているのか……）

「今、他は誰も居ないのか？」

樊樂は沈斉文に訊ねた。依然として此处に居る筈である他の連中の姿は見えない。

「ああ、商いの方も忙しいが、ほれ、徐騰じょとう探しが厄介だからな。かなり範囲を広げて調べているがそろそろ限界だ。真武劍派が調べた跡を追っかけて取りこぼしが無いかを探る様なものだ。まったく……これも結局は若旦那の遊びの一つだろう？」

稟施会の商いとはまず関係の無い命令であり沈斉文は正直うんざりといったところだが、城南から届いた命令は太史奉が出したものである。周維の思い付きを商いと絡める算段でもあるのかも知れないと考え、大人しく従っている。

「徐騰？ それが徐の名か？ 武慶ぶけいの？」

「お前達そんな事もまだ知らなんだのか？」

樊樂らは此処へ来てようやく追う人物の姓名を知る。

「昔、この都に居た者らしいな。だが当時の徐騰を知る者はかなり少なくてな。何故武慶に行ったのかも判らない。東淵とうえんに血縁関係のある者が居るそうだが、その他の地名は我々が探った中では出ていない。今はそこまでだな。これ以上の事はこの都近辺ではこの先出て来るとは思えん」

「城南には？」

「もう伝わっているだろう。たったこれだけだが報告しない訳にはいかん」

「ッ……東淵行きは決定かよ」

樊樂は椅子の上で体を仰け反らせてから両手をだらりと下げ、脱力する。予想していた事ではあるが、城南からこの都までと同じ程の行程を今から往かなければならないと改めて考えると辟易へきえきしてしまう。

「真武剣派しんぶけんだが――」

沈斉文は続ける。

「早々と武慶からこの都近辺は搜索を終えている。これはもう東方しかないと見ている様だが、思う様に進んではおらぬ様でな」

「何故だ？」

樊樂はすぐに体を起こして沈斉文に見入った。搜索を妨げる何かがあるのならば自分達にも関係してくる事は十分に考えられる。

「北辰ほくしんが邪魔まがをしているらしい。東方に近付かせぬ為だ。向こうはあからさまにそう言っている訳では無いが、真武剣派の者達が東へ向かおうとすると何だかんだと言って絡んでくるそう。実際やりにあって怪我人も出ている。真武剣派のみではやはり人が少ない。それらを掻い潜かぐって例えば東淵まで至ったとしても北辰の真っ只中で孤立する事になるからな。無理には進めないという訳だ」

「北辰は、真武剣派が何故東へ行こうとしているのかを知っているのでしょうか？」

孫怜が沈斉文に訊いた。

「確實に知っておろうな。そうすると北辰はすでに徐騰を捕まえたか、或いはまだ捕まえてはおらぬが邪魔になるであろう真武剣派を排除して自分達が先んじようとしているか——どちらかだな」

「いや、待って下さい」

沈斉文の話を聞いて劉子旦が声を上げた。

「まだ捕まえてはいないので？　もし既に徐を捕まえているなら秘伝書を奪ってすぐに放り出せば良いのです。真武剣派に捕まるなり逃げ延びるなり好きにすれば良いと考えるのではありませんか？　徐が真武剣派に『秘伝書は北辰教に奪われた』と言ったとしても、真武剣派はどうすることも出来ませんし、北辰もそれを解っている。真武剣派が来てもしらを切り通せば良いだけです。真武剣派のみで北辰の相手は出来ません。きつと東へ行くのを妨げるのは自分達が捕まえるから手を出すなという事かと思えます。勿論、そんな事を北辰は言わないでしょうけどね。真武剣派は一応表向きには武慶で人殺しをした犯人を捕まえる為に動いている。なぜ北辰が首を突っ込んでくる？　という事になりますから。狙いが秘伝書なのはみえみえですがね」

劉子旦の話の後、暫く沈黙が続いた。全員真剣な表情で考え込んでいる。可龍と比庸の若者二人は話をあまり良く理解していないが、孫怜に倣い神妙な顔つきで黙っていた。

「じゃあ……真武剣は今足踏み状態なんだな」

樊樂が顎をさすりながら顔を上に向けぼんやりと天井を見上げる。

「少しづつは進んでいるぞ。千河幫せんがほうを動かしているからな」

沈斉文はそう言って再び皆の視線を自分に集めた。

第九章 十三

「真武剣派が千河幫を動かす？」

樊樂と孫怜が顔を見合わせ、劉子旦らもどういふ事か判らず眉根を寄せた。昔程ではないがどちらかと言えど真武剣派と緑恒千河幫りよくこせんがぼうは敵対する勢力であると認識している。どういふ事なのかさっぱり解らない。

沈斉文は自分達が調べ上げた千河幫と真武剣派の接近について事細かに説明して聞かせた。

「そんな事になってるのかよ……旦那は知ってるのか？」

「真武剣派の英雄大会に行ったのなら范幫主はんを見ているだろうから知っているのだろう」

樊樂の疑問に孫怜が答える。それにしてもそれが事実なら武林に於いて重大な変化である。孫怜も驚きを隠せない。

「真武剣派は徐の搜索を千河幫に依頼していると？ まさか命令とまではいかないのでしょうか？」

「ハハ、まさかそこまでは出来んよ。千河幫はその辺の小さな組織とは訳が違う。まあ今までの微妙な関係が、ごく普通のものに変わっただけだろう。北辰はまだ千河幫の裏切りとは見ておらん様だから、まだ東方を自由に動ける」

樊樂は両膝を叩いて背筋を伸ばし、沈斉文を見る。

「ゆっくりしてられねえな。沈さん、他に何かあるかい？」

「徐騰に関する事は、残念ながら他には無いな。関係無い話ならある」

沈斉文はそう言うってから口を噤む。樊樂らは沈斉文が話し出すのを待ったが一向に口が開く気配が無い。

「何だよ。待ってんのに」

「いや、関係ない事だからな。それに耳にしたばかりで確かかどうかどう

かもまだ判らん。それに、金にはならん」

「勿体ぶるじゃねえか。何なんだよ？」

「いや、だからお前達の徐騰探しには関係が無い。うちの商いにも関係が無い」

「……だったら最初から言うなよ」

沈斉文はニヤツと笑い、

「紙に書いてやるから買うか？」

「天下の稟施会がせこい商売すんなよ！」

沈斉文は急に真顔になり、卓上をコツコツと指で叩く。

「うちは取引出来るものは全て、取引して金にする。知らなかったのか？」

一瞬、沈黙が訪れる。沈斉文は皆の顔を見回してから、

「二千五百両があつと言う間に消え去った今は尚更だ。質屋と馴染みになるとはな。これもまあ取引か？」

今度はしよげ返るような表情で肩を竦めた。

「……俺達あまり路銀に余裕が無いんだ。此处で都合して貰おうと考えてたんだが」

樊樂がそつと沈斉文の顔色を窺う。沈斉文は薄く笑って、

「拒否して若旦那に睨まれると困るからな。まあ何とかしてやろう。生きて東淵辺りまで行ける位はな」

そう言って溜息を洩らした。

「俺達はすぐにでも発とうと思ってる。ま、今晚くらいは泊めて貰ってだな。必要そうなら人も出して貰おうかとも考えてたんだが」

「いや、あまり大人数で動くと目に付く。お前達だけで動く方が良からう。都を出れば北辰がうろついているからな。……あー、特別にタダで話を聞かせてやる」

「本当に金に余裕は無いからな？」

樊樂が念を押すと、

「判っておる。金を持っているかどうかなど儂の目で見ればすぐに

判る」

樊樂らの身なりは決して良い方ではなく、孫伶の姿が幾らかマシといった程度である。沈斉文が真っ先に客として選ぶ部類の人間では無いだろう。

沈斉文は円卓に肘を突いて体を前に傾けた。

「真武剣派が至東山しとうざんの近くで北辰の者達と鉢合わせてな。少々派手に遣り合ったらしいんだが、それに襄統派じょうとうはいの弟子が巻き込まれた」

「それはまたなんとも……災難な」

劉子旦が呟く。

「襄統派の総帥、悌秀ていしゅう師太は近々、清稜山しんりょうざんに向かう予定だった。だが北辰の奴ら、その件があつて以来襄統にもちよっかいを出し始めた様だ。恐らく末端の者達が調子に乗って勝手にやっている事だと思ふが」

襄統派の悌秀とは真武剣派りくごうの陸皓、清稜派もくかいふうの木傀風らと同輩、武林の名門襄統派の総帥であり、尼僧である。

襄統派はその有様が他の門派とは一風変わっており、その門弟達には様々な人間が居る事で知られている。現総帥は尼僧であり、襄統派は至東山開山以来仏道修行を主として続いているが、弟子には出家して至東山で生活する若い尼僧も居れば近隣の街で生業を持つ者も居り、その男女も問わない。滅多には口に出しては言われないが、その形態は太乙たいいつ北辰教に近い。

襄統派の始祖は都の東千里にある至東山に上った一人の尼僧で、小さな庵を立て、ただひたすらに仏門に仕えた。山に上がって二十年の後に弟子を教え始めたが、皆、仏門の弟子であり、武芸のそれでは無い。現在の襄統派には真武剣、清稜に比肩する武芸がある訳だが、それがいつの時代の誰がもたらしたものであるかは不明であった。しかしながらその要諦の全ては仏に帰依して法を守護し、悪を果断に責め、民衆を救わんとする慈悲を主眼としている。かつて陸皓は真武剣派を創始する以前、江湖に名を成している武芸をつぶ

さに吟味し研究を重ねていた折、襄統派の武芸について、『襄統の始祖と武芸の繋がりは見当たらないがその業に籠る襄統の根幹である仏道精神との融合は実に精妙なものであり、襄統派武芸は恐らく襄統の極めて初期の時代に始祖の教えの全てを受け継いだ者の手に依って成されたものであろう』と、その出処にも言及していた。

現総帥、悌秀師太は陸皓や木傀風同様、高齢であり、近々弟子の羅鉄指らてつしに跡を継がせる事を公言している。羅鉄指は在家の弟子、そして男性である。

「悌秀師太が清稜に？ 何かあるのでしょうか？」
孫怜が訊く。

「清稜派の道長しやうちやう、木傀風きくふうどのは真武剣派の英雄大会から清稜山に戻って早々、隠居する事を決めたそうだ。英雄大会で何かあったのかも知れんな。弟子の……董……」

「董仰どうやうどの？」

「それだ。その董仰という弟子が跡を継ぐ。清稜派ともなれば大々的に人呼んで継承式を執り行うのが通例だが、真武剣派の英雄大会の直後でもあるのでそのへんは内々に済ませて知らせだけを各門派に送った様だな。恐らくそれを受けて襄統派は総帥自らが清稜山に赴くつもりだったという訳だ」

第九章 十四

「襄統の総帥ってもう歳なんだろう？ 清稜山までご苦労な事だ。ついこの間武慶に行ったとこじゃないのか？」

「悌秀師太は武慶には行っておらん。代理の者を行かせた様だな。これがまたちよつとした噂を生む」

「陸総帥には会わないけど武慶より遠い清稜山の木道長にはわざわざ会いに行く、という事ですな」

劉子旦がすぐに答えを言ったので沈斉文は大袈裟に顔を顰めて見せる。沈斉文の話が売り物だとすれば客の前に並べるよりも先にネタをばらされて値を吊り上げる事が出来なくなってしまう。見れば劉子旦は得意満面の笑みを浮かべている。

（やはりこいつは用心棒だな。商いの場には連れて行けぬわ）

「悌秀師太と陸総帥は仲が悪いのか？」

沈斉文は樊樂の方へ視線を戻して話を続ける。

「仲が悪いとまでは言えぬ様だが、あの陸総帥と対等にもものが言い合えるのはやはり襄統、清稜の二派の総帥くらいの物だからな。それに武林にあまたある門派の中で真武剣派は新参者だ。二派三岳とは到底比べ物にならぬ。そういった歴史の違いからも自然に距離を置いてしまうとも考えられるな」

「しかし悌秀師太はそれだけの事で人を避ける様な方では無い様に聞いておりましたが」

孫怜は首を傾げる。悌秀師太と面識などある訳が無いが、江湖の噂では慈悲深く徳の高い高僧であり優れた人格者だと言われている。新参者が幅を利かせているという理由でそれを嫌うなど――凡人ならばごく普通の感情かも知れないが――想像し難い。まして陸皓は実力でもって一から真武剣派を興して名声を得ている。もし悌秀師太がそれを苦々しく見ているとすれば噂とは随分違う人物となってしまう。

「悌秀師太と陸総帥は付き合いが長いからな。我らには解らぬ事の方が多い」

流石にその辺の事までは稟施会には関係の無い話で沈斉文も調べようとも思わない。「それともう一つ。木道長が隠居を決めて、次は悌秀師太だ。弟子に継がせる事をもう公言している。あの世代の者で総帥をしているのは陸総帥だけになるな。真武剣派も次期総帥は白千雲はくせんうんと囁かれ始めている今、他の同輩が後進に道を譲っているのに陸総帥だけまだその座にしがみつくのかと言われるのは目に見えている。陸総帥にしてみればなんとも忌々しい事だろうよ」

「武林は過渡期に差し掛かっている。そんな折に北辰も俄かに動き出した。何が起こるか分かりませんな」

孫伶はそう言って樊樂らに視線を移した。

此処に居る皆は武林の人間ではない。しかし、稟施会はこの江湖で広く渡世を送る集団であり、武林の波風は確実に自分達をも撫でてゆくのだ。しかも今回の仕事では武林の中核である真武剣派に付き、更に北辰教まで関わって来ている。何かの拍子に再び武林に騒乱が起これば巻き添えを喰らう可能性が高まっていた。

「とにかく、出来るだけ早くに片付けてしまうより他に無い。孫さんもこんな面倒な話に付き合わせてしまっって申し訳無いが、力を貸してやってくれ」

沈斉文が孫伶に向かって頭を下げる。

「いや、私は仕事を貰えるだけ有難いと考えております」

「うちの金は減ったが、報酬はしっかり用意させてもらうから安心してくれ」

孫伶は微かな笑みを浮かべながら俯いた。

樊樂ら一行は屋敷に留まり、改めて旅の準備を整えた。他の街とは違いこの都では何でもすぐに揃える事が出来る。

稟施会の屋敷は夜も静まり返っていた。昼間出かけていた者達は夜になってから数人戻って来て樊樂らと久しぶりの再会を喜んだが、

今夜は戻ってこないという者も多く、また樊樂らは夜が明ければ発つという事で、普段なら酒盛りでもするところだが劉子旦らの説得で樊樂に自粛させた。それでも酒は一滴も飲まないなどという事は有り得ず、仲間達と機嫌良く盛り上がっていた。

翌朝、樊樂らは日の出と同時に稟施会の屋敷を出発した。沈斉文は別れるまで『金はない』と言い続けていたが、樊樂が求めて用意された追加の路銀はこの長旅に充分足るものであった。実際、黄金二千五百両というのはこの都の支店で扱う資金のごく一部に過ぎない。沈斉文は恐らく思い付きで大金をいとも簡単に使ってしまう周維に、それでは困ると伝えたいが為に繰り返す樊樂らに話すのだと思われる。それなら城南に訴えれば良い事であり沈斉文なら周維に直接言える筈なのだが、何故かそうはしていない様子である。

樊樂らは東に向かうが、この都で得られた情報によって具体的な目的地や行動を決められた訳ではなく、行く先々でその都度、徐騰の行方を調べて行かねばならない。今のところはとにかくこの金陽から真東へ伸びる街道を進む、ただそれだけしか無い。

「孫さん。もしかして倚天の剣を見た事あるんですか？」

一行は他愛の無い雑談に終始しながら進む。ふと劉子旦が思い出した様に孫伶に訊いた。

「まさか。何故だ？」

「いや、倚天の剣は殷總監が長く持っていたんでしょ？ 呂州に居た頃からだったら孫さんも見せてもらったりしてたとか……？」

「あの頃はそんな良い物を持っていたなんて聞かなかったな。そもそも剣なんて持っていなかった。あの人は常に鍬だの鎌だのをいつも持っていた。大抵、畑に居てな」

孫伶は顔を上げて昔を思い出しながら話している。二十年以上前、孫伶はまだ二十歳前後である。

「……そんな人があの北辰で總監にまでなるなんて、何が起ころの

か分からないものですね」

「そうだな。亡くなるまでにもう一度会いたかったが……フツ、いつの間にか簡単に会える様な身分じゃなくなっていた」

「なあ、殷汪ってのはその頃全く剣を持たない奴だったなんて訳無いよな？ お前達との接点は何だったんだ？」

樊樂が孫伶に訊ねる。後ろに続く胡鉄や可龍、比庸也大いに興味を持って話に聞き入っていた。

「お前も覚えているだろう？ 俺達は若い頃呂州で勝手に放題、無茶苦茶だった。くだらん餓鬼の遊びだったが」

「ハハッ！ 確かに。俺はお前達の知り合いってんで随分名前を利用させてもらったからな」

「どういう事です？」

樊樂と孫伶だけが理解している会話に、劉子旦が割り込む。

「昔呂州にまったくどうしようもない悪餓鬼の四人組が居てな。こいつもその一人だったんだよ。前も言ったが、今、旦那の処に居る夏^かって奴、あれと同じ名の夏天佑^ぼってのもそうだ。他に慕容^ぼって女に馬^ばって男の四人だ」

「孫さんが……？」

劉子旦だけでなく他の者にも意外な話だった。『昔は悪かった』

とは良く聞く話だが、今の孫伶は冷静沈着で普段はどちらかというと物静かな雰囲気のある男である。若い頃暴れていたと言われても、その様子が想像出来ない。唯一繋がりそうなのは孫伶は剣の腕が立つ、そのくらいである。

第九章 十五

「どんな事をしてたのかは聞いてくれるな。頭の悪い餓鬼のする事だ」

劉子旦を見返す孫怜の顔は全くにこりともせず真顔のままだった。そして孫怜は暫く放心したかのように前方を見つめていたが、やがておもむろに口を開いた。

「ある時、俺達は集団に追いかけて逃げていた時に殷さんに出会った。ハッ、匿ってくれるんじゃないかって俺達を捕まえて奴らに突き出したんだがな」

「悪さしてたんなら当然だな」

樊樂がニヤつきながら孫怜を横目で見ている。

「その後かなり経ってから、皆で殷さんと共に挨拶に行こうじゃなかったって盛り上がった。俺達は捕まって散々な目に合わされたんだぞ？ お礼に行かねばならんと言ってな。暴れる俺達を簡単に捕まえた男だ。早速俺達は各々得物を用意して殷さんを探し始めた。すぐに見つかったよ。初めて出会った場所の近くで黙々と土を弄っていた」

「本当に農民の出だったんですね……」

「今でもはつきりと思い出す。殷さんは話を聞いているのか聞いていないのか判らないが、ひたすら黙々と作業を続けていた。だんだん俺達は苛立ってきて、そのうち嬋せん、慕容嬋せんという女なんだが畑から作物を抜き始めた。あれは何だったか……、そして剣を抜いて刻み始めた。俺達も調子に乗って同じ様にやろうとした瞬間、地面に屈んでいた殷さんの体が急にふわりと浮いた。浮いた様に見えたんだな。気付いたら殷さんが嬋の居た場所に立っていて、嬋は数間先に吹っ飛ばされていた。何をしたのか見えなかったんだが、その嬋は血を吐いて地面にうずくまっていた」

「ひでえな。女相手にそこまでするか」

「すぐに俺達は殷さんに襲い掛かった。だが……お前達もう結果は想像がつくだろう？」

「叩きのめされた訳か」

孫伶は少し俯いて笑っている。

「俺達は誰一人まともに剣だの何だのを習ってた訳じゃない。殷さんには赤子の手を捻るところか指先で突付く程度だったろう。皆、暫く起き上がれなかった」

いつの間にか孫伶の横について進む劉子旦が孫伶の顔を覗く。

「でも、その後は親しくなったんでしょ？」

「すぐには無理だ。それに、嬋の体がやばくてな。本当に死に掛けたんだ。何とか持ちこたえて回復の兆しが見えた頃、どうやって知ったのか知らんが殷さんが俺達の処へやって来た。そして『動けるようになったら四人揃って来い。畑を元通りにして貰う』と言われたんだ。嬋を殺しかけておいて何だと俺は憤慨した。仮に畑の全てを無茶苦茶にしたとしてもそれで殺されるなんておかしいだろう？ そう思ったが……結局何も言えなかった。恐ろしくてな。嬋も殷さんを見て怯えてな。知ってるだろう？ あの嬋が人を見て怯えるんだぞ？」

孫伶に視線を向けられた樊樂は頷き返し、

「……相当なもんだな。しかし殺されかけたのならあいつでもそりゃ怯えるよな」

「嬋が動ける様になるまでには時間が掛かった。ある日、天佑が『自分が行ってくる』と言い出した。俺は何とか誤魔化して行かないつもりで居たんだが、あいつは行くと言って聞かず、もう一人の馬ばし少風ようふうって奴も連れて殷さんの処へ行ったんだ。『四人で来い』って言ってたんだから二人だけで行けばまたぶちのめされるんじゃないかと思ってたんだが、聞けば普通に畑仕事をさせられたと言う。それから連日、あいつらは何故か真面目に殷さんの処へ通い始めた。一日を終えて戻ってくる天佑を見ると、『働かされている』といった感が全く無いどころか、むしろ自分で望んでせっせと通ってい

る。どうやら天佑はあのとんでもない強さの農夫に惚れ込んでしまつたらしい。自分も手酷くやられたというのにだ。確かに、何処かの由緒ある剣派の者だったならやられるのも当然で深く考える事も無いが、ただの農夫だ。しかも二、三十代と若い。『一体何者だ?』と俺も興味が沸かんでもない。だが嬋がまだ起きられない状況を見ているとやはり腹が立ってな。嬋が動けるようになるまで殷さんの処には行かなかった」

「孫さん、もしかしてそのお二人はまさかあの殷総監から武芸を教えて貰えたのですか? そうでないならずっと畑仕事ばかりでは嫌になる筈でしょう?」

また劉子旦は興奮気味だ。殷汪と言えば江湖では度々『不敗剣』などとも渾名あだなされる。それは百槍寨はくそうざいでの報復事件の後の事だが、その『不敗の剣』は咸水が襲われてから修行して修めた訳ではなく、その数年前である孫伶と知り合った頃にはもう習得していた筈である。様々な噂が飛び交う江湖、武林に於いて、その武芸を殷汪が誰かに伝えたとは全く聞かれない。太乙北辰教に入ってからも教徒に武芸を教えては居ない。北辰教では七星の武芸が一際抜きん出ているとされているが、それらは七星を名乗った時には既に完成していたもので、しかもそれぞれ全く別の武芸であり、後に入った殷汪とは関係が無い。孫伶の仲間だったという夏天佑、馬少風の二人が殷汪に剣なり何なり教えて貰っていたのなら、今は亡き武林最強と言われた人物の業を受け継いでいるのはその二人だけという事になる。孫伶は色んな想像を膨らませて楽しい劉子旦に笑いかける。

「ハハ、羨ましいとでも言う様な顔だな。さあその頃はまだそんなまともな事は教わってなかった様だな。もっと後になって俺と嬋も殷さんの処へ行った。恐る恐るだったがな。それからだな。色々と教わったのは。やはり嬋がまともに接する事が出来る様になるまでには時間が掛かった。それでも、意外な事に俺達は畑に居るうちにだんだん殷さんに惹かれていった。特に天佑と嬋がな」

「やはり嬋は変な女だな。殺されかけて普通なら顔も見たくないん

じゃないのか？ 嬋の性格なら絶対殺してやるとか言いそうだけだなあ」

樊樂は驚いている。どうやら樊樂の印象では慕容嬋という女は相当なすれっからしである様だ。

「……まずそんな気が起きない程、殷さんとの出会いは衝撃的だった。それにもし再び仕掛ければ、次は死ぬ。確かに恐怖だった筈なんだが、……何故だろうな？ 今も解らない」

「憎しみが過ぎて、惚れちまったか？」

「ハハ、どう過ぎればそうなる？ まあ近いものがあるのかも知れんが、その後の嬋の殷さんに対する感情はそれとは少し違った様だ。若かったし、憧れみたいなものにはなったかも知れん。惚れたというのはどちらかと言うと嬋よりも天佑だな。あいつは殷さんという存在自体に相当のめりこんだ。一挙手一投足をつぶさに観察する程な」

「でも、畑仕事はさせられたんでしょう？ 孫さんも剣とか習ったんですか？ 弟子と呼べる程？」

「畑仕事が殆どだった。お陰で俺は今でも自分が食べていけるくらいの物は作れる自信がある。呂州に畑はあるんだ。……やる気が起きなくて放置したままだが」

「でも、今の孫さんの剣術は——？」

「ああ。殷さんから教わったものだ。厳密には『殷さんの武芸』とは違うんだが」

「どういう——」

「お前の様に殷さんの武芸に興味を持つ人間は多い。武林で最強なんて噂になるのだから当然だが……、具体的にどのようなものであったか誰かが言うのを聞いた事があるか？」

「それは……無いですね」

劉子旦は暫く考えてから首を傾げた。

第九章 十六

「総監になったばかりの、北辰教と真武剣派を中心とする各派が対立して激しく遣り合っていた頃には殷さんと対峙した者は結構居たらしいな。そしてことごとく敗れた。北辰は『最強』と謳^{うた}うだけだし、敗れた方は『邪で悪辣な業を用いる妖人』と言って罵るだけだ。具体的にどんな手筋であったのか口に出す者は居ない。実際は良く解らないのだろう。理解出来ないという事かも知れん。俺達も色々教わったが、殷さんの武芸を理解出来る者など存在しないのではないかと思える。俺は百槍寨で、そう感じた」

「えっ？ 殷総監が百槍寨に乗り込んだ時、孫さんも居たんですか？」

劉子旦は驚きを隠さない。百槍寨こそ英雄譚の始まりの地である。その場に居合わせた人物が目の前に居るのだと思うと一気に興奮が高まる。しかし、その様に感じ入っているのは劉子旦だけの様だ。

孫伶はゆっくりと頭を振る。

「……咸水が百槍寨の者達に襲われたと聞いてすぐにさっき言った仲間四人で向かった。着いた頃には既に百槍寨は完全に無くなっていて、殷さんは何処かに行った後だった。殷さんが一人、乗り込んだらしいと聞いて俺達は百槍寨に上がってみた。……俺達は目を疑ったよ。言葉も出なかった。咸水の村は村人がことごとく惨殺されて惨い光景だったが、百槍寨は……駄目だ。今でも言葉が見つからない。俺達は百槍寨の光景を黙って見続けたが、四人ともきつと同じ事を考えていたと思う。『殷さんは、人か——？』」

今までの、昔を懐かしみながら頬を緩める孫伶は消え、虚ろな視線がほんの少し前方の狭い空間を彷徨っている。

「では、それが殷総監と会った最後ですか？ 殷総監は——」

「おい子旦。今日はそのくらいにしとけ。先は長いんだからな。ほれ、宿を探すぞ」

樊樂が劉子旦の質問を遮って前方を顎で示す。一行は街道沿いの小さな街に差し掛かっている。もう陽は充分に傾いており、何も無い場所で夜を明かす事を避けるなら今夜はこの街に留まらなければならない。

樊樂が後ろの胡鉄らを振り返る。

「ずっと黙ってるからちゃんと居るのか心配になるぜ」

「慕容っていうその女の人の事を想像してたから俺は楽しめた」

胡鉄が真顔でそう答えると、樊樂と孫怜は顔を見合わせる。樊樂は呆れ顔で、孫怜は再び微かな笑みを取り戻した。

雨に会う日が少なくなってきた。黒雲が流れ空が青く晴れ渡った時などは山の緑がより一層濃くなり、景色の中の全ての輪郭がくつきりと浮かび上がる。樊樂らは都より東の土地は殆ど記憶に無い事もあって、新緑の穏やかな風景にどこか気持ちが弾んで物見遊山の気ままな旅の様に感じてしまう。

「都からこっちは、荒れた街が無いですね。氣候が良い事も関係するのかな？」

「そりゃあそうだ。ぶっ潰れちまう街ってのは大抵、旱魃かんばつとか異常な大雨で川が氾濫するとか、天災が殆どだろ？」

劉子旦と樊樂が辺りを眺めながら話している。周りを見るのに首を廻す速さまでも普段よりゆっくりになっていた。

街道は広く人や馬が多く行き交うが、街を少し離れば広大な田畑が両脇に広がり、縦横に張り巡らされた用水路が静かな水音を奏で、その上を蝶がひらひらと舞う。そんな中で馬に揺られていると、つい眠ってしまいそうになる。

「東淵までこんなだったら良いなあ」

胡鉄の間延びした声が後方から聞こえてくる。時にはこんな胡鉄の声でさえ『眠れ』と頭を撫でる様に聞こえてしまう。

「俺達の目的は東淵に行く事では無いだろう？」

孫怜が後ろを振り返る。胡鉄のすぐ隣に比庸の馬。比庸の後ろに

は可龍が乗っており、既に何度か居眠りをして落ちそうになっていた。時折、可龍に手綱を取らせてみたがどうも馬の扱いが中々手くならず、一人で乗れる様になるのはまだまだ先である。

「しかし……樊、こんなにのんびりで良いのか？」

「のんびりって事も無かろうが。普通に進んでるだろ？」

「お前が良いなら俺は従うだけだが、そろそろ北辰やらがうろつく辺りだぞ？ さっさと行った方が良いのでは？ 徐がうろついてるなら有難いが」

すでに北辰教徒の姿を見たという情報を前の街で得ている。真武剣派の人間も時折来ている様だ。

「一緒だよ。この先は行き当たるまでずっと北辰の縄張りなんだからな」

「一応、襄統派があるんだが」

襄統派の本拠、至東山が近付いている。遙か先、街道の南側に薄く稜線が浮かんで見えているのがその至東山であった。

「大人しく普通に進んだ方が、向こうも関わって来ないだろ？ 北辰も襄統も、皆、旗を掲げて歩いてる訳じゃなし、見たって分からないしな」

樊樂は平然とした態度で前を向いたまま引き続き馬を進める。しかし、それから暫くそのままの体勢ではあったが、徐々に険しい表情になっていく。

孫怜も前を向いている。

「……確かに、見た目ではどっちがどっちは判らん。だが、どちらかが北辰である可能性は高そうだ」

「っ……おいおい……」

樊樂は大きく溜息をつき、ゆっくりと振り返って劉子旦と胡鉄を交互に見遣る。

「……やってますね」

「無視しても良いんじゃないか？」

劉子旦と胡鉄は樊樂と孫怜の間から前方に目を凝らしている。その視線の先には、明らかに対立を示す姿勢で向き合っている数人の姿があった。

「徐と関係ないならそれでも良いが……」

もう暫く進んでから樊樂は皆に停止するよう指示した。とりあえず姿形ははっきりと見える位置だが、恐らく向こうは何やら言い合いに夢中でこちらに気付く事は無さそうである。他にも街道を往く旅人達が足を止めて不安げな表情で様子を窺っていた。樊樂はじつと前方を捉えたまま孫怜に話し掛ける。

「あの頭は襄統か。真武剣派は居ないみたいだな」

どうやら一方は二人。どちらも髪を剃り落とし、淡い灰色の簡素な僧衣を纏った尼僧である。だが腰には長剣がある。もう一方は男ばかり五人。着ている物は揃っていないが、腰の帯が皆同じで少し暗めの深紅を締めていた。

「襄統の弟子で間違いないな。二人とも随分若そうだ。……分が悪いな。樊、どうする？」

「あー……関係ねえのによお！ しかも今から東行くつてのにもう北辰に挨拶すんのかよ……」

「もう少し先に行けば襄統派の者も大勢居るんだろうがな」

「樊さん、幾ら何でも襄統派の弟子に危害を加えたりは無いでしょ？ あいつら北辰の奴だとしても結構下っ端の様ですし襄統派を本気にさせたらあいつらのほうが始末されかねませんよ。北辰の上の方に」

「分からんぞ……」

孫怜がじつと男達の方を睨んでいる。

第九章 十七

二人の若い尼僧はぴったりと寄り添い、全身を強張らせている。男達は二人の周りをうろつきながら威嚇しつつ、下卑た笑み^{げび}を向けていた。皆、剣を帯びている。

「間に入った方が良さそうだ。何の話か知らんが、円満に話をつけて別れるなんて事はまず無いぞ?」

「分かってる」

樊樂は孫伶にそう答えながらも頭を抱えた。稟施会は襄統派とは縁も無く、本来なら武林の揉め事などに関わらない。しかし今、目の前に居るのはほんの数人で何も襄統派と北辰教の抗争という程の事も無く、若い尼僧がならず者に絡まれているというだけである。

（じゃあ助けるか? そりゃあ普通は助けるだろ。……しかし、俺達だって北辰に絡まれたくは無い。これから東方に行かねばならんのだからな。目を付けられたら先が思いやられるだろうが。あの尼さん二人はなんだってこんな処に居やがるんだ? 大人しく至東山に籠もつてりゃ良かったんだ。北辰がうろついているのは知ってた筈だろう? 全く……この見物人の中には襄統派の奴は居ねえのかよ! 野次馬ばかり——）

「樊! 行くぞ!」

急に孫伶が馬の腹を蹴り、駆け出した。

「お、おい!」

見ればなんと尼僧二人の方が剣を抜いているではないか。男達は先程よりも間合いを取ってはいるが、まだ余裕があるらしく得物は手にしていない。

「樊さん、行きましょう!」

劉子旦が比庸にこの場で待つ様に言い、すぐに孫伶の後を追って行く。

「おい——」

「樊さん、仕方ない。樂は出来ないって事さ」

胡鉄も樊樂に声を掛けてから駆け出した。

「おまえら勝手に……」

だが、行くなとも言えなかった。やはり争いを止めに行くのが正しいのだ。

樊樂は比庸とその後ろの可龍を振り返り、

「ここでじっとしてろ。いいな？」

「あー、はい」

比庸が答えるのと同時に樊樂は馬の腹を蹴った。

「私達があなた方に屈する事は決してありません！」

「そうむきにならんでも良からう？ 儂らは別にお前さんたちを屈服させるとかそんな事は考えておらん。そもそも何の為に？ 樂しく語らおうではないか。儂らもたまには尼さんのお言葉を聞いて仏の道について学ぼうと言うのじゃ」

「そんな嘘を言っても良いのですか？ あ、あなた方は北辰教徒でしょう！」

「まあそう言わずに付き合ってくれんか。いかにも儂らは北辰を信奉する者だが、仏の教えがどういうものかについても知っておかねばな。お前さんらの様な若くて賢くて、それに美しい尼さんに聞けば話も良く身に入るといふもの」

「いやいや、この方々こそが御仏ではあるまいか？ これほど美しい肌は見た事が無い。きっとその衣の下は光り輝いている事であろう」

「無礼な！」

顔を醜く歪ませて尼僧を眺める男達。話しているのは老人で、残りの四人はまだ若い。周りを囲み、舐める様に視線を尼僧に這わせている。出家の若い娘らは色をなして叫ぶと二人同時に腰の剣を抜いた。

男達は即座に数歩後退したが、二人の剣を構える姿をまじまじと

見つめながら、やはりにやついている。

「うーん、さすがは襄統の弟子。様になるのう」

「なんと神々しいお姿だ。その剣を受ければきっと俺も悟りの境地に至る事が出来るに違いない。肌で直接受けねば勿体無いな」

若い男がそう言つて襟を広げ、毛むくじやらの胸を尼僧二人に見せ付ける。

二人の尼僧は大いに戸惑っていた。剣を向けたところでこの男達は退く筈も無く、次にどうすれば良いのか分からない。逃げるか？それとも切り掛かるべきか？ 自分達を侮辱し、御仏を穢す言葉を吐き続けるこの異教徒どもは悪人であり、断罪に値する。しかし、己の持つ悪を討つべき剣は未だ拙く、このならず者達には敵いそうに無かった。

「私達は戻らなければなりません。もう行つて下さい！」

「なあに、悪い奴らに襲われたと言えば少々遅れたとて師太どのは怒りはせぬ。さて、儂らは何の役をやるうかのう？ やはり悪人から救う役が良いのう」

老人が薄ら笑いを浮かべながら腰の剣に手を遣り、ゆっくりと抜く。その姿のあまりの不気味さに二人の尼僧は揃つて剣先をその老人に向けるもじりじりと後退あとずさつた。

「あ、あなたの様な武林の御先輩がこの様な真似をするとは！」

「まだ何もしておらんではないか。お前さん達は襄統派の弟子。襄統派と言えば武林の一派で剣を使う事は儂も知っておる。剣を抜いたのは挨拶だろう？ だから儂も応えるべく抜いたのだ。で？ 次はどうすれば良いのかな？ 名門襄統の作法を学ぼう」

「おお、じゃあ俺達も——」

他の男達も老人に倣い腰の剣に手を掛けようとしたその時、急速にこちらに近付いて来る気配を察知する。男達は即座に尼僧の周りを離れ、その気配に正対する様に横一列に並んだ。

迫ってくる三騎。だが男達に声は無い。ただじっと馬上の三人の顔を観察する。少し遅れてやって来るもう一騎も視界に入っている。

急に囲みを解かれた尼僧らもやって来る者達を『何事か』と不安の眼差しで見つめた。男達の仲間だったなら益々危うい。

「何事かありましたかな？」

最初に口を利いたのは駆けて来た三騎の先頭、孫怜だった。

「いや、何でも無い」

老人が答える。ごく普通の声色で全く変わった様子は無い。いつの間にか手にあった剣が腰に戻っていた。

「あちらの方々は剣を抜いておられるが……襄統派の方々とお見受け致した」

孫怜は男達を警戒しつつ、その後方の尼僧二人に目を遣った。老人はすぐに気付き振り返る。

「いかにも、襄統派のご出家だ。至東に戻られる道中だそうな。どうやら悪い奴に絡まれたそうだが、もう至東は近いゆえ安心じゃ」

老人はゆっくりと話し、再び孫怜を方へ顔を戻した。

丁度その時、劉子旦と胡鉄もこの場に加わり、少ししてから樊樂も追い付いてその横に並んだ。対峙する男達は皆同様に馬上の四人を睨みつけて凄んでいる。

「私達は東へ向かう旅の者です。あなた方が……あのお二人の手助けを？」

孫怜はそんな男達の視線を無視して老人に訊ねた。

「なあに、手助けという事も無い。無体な輩はどうに儂らを警戒して去った。もう心配はいらん」

「……しかしあのお二人はまだ気が休まらぬ様ですな」

二人の襄統派の弟子は抜き身の長剣を手に、互いに寄り添ってこちらを窺っていた。

第九章 十八

孫伶は馬に合図を送り老人の脇を抜け、尼僧の許へ近付いて行く。男達は一斉に孫伶に注目して後ろを振り返った。その背中に劉子旦が声を掛ける。

「我々はこのまま東に向かうので、彼女達に同行致しましょう。彼女達は何やらまだ怯えている様子」

「おぬしら『悪い奴』ではない証拠があるかな？」

老人が顔だけを劉子旦に向け、冷やかに言った。それから男達は老人を先頭に孫伶の方へと向かい、樊樂はその挙動に注意を払いながら後に続く。

「そちらの方々が急に私達の前に現れて道を塞ぐのです！」

尼僧の一人が叫ぶ様に孫伶に訴えると、

「汚らわしい言葉で私達を辱めて楽しんでる最低の人間です！」

もう一人も気色ばんで男達を指差す。

「襄統派は出鱈目だ！」

男の一人が叫ぶと他の男達も同調して『そうだそうだ』と口々に騒ぎ立てた。

孫伶と樊樂は馬を降りると双方の間に割って入り『まあまあ』だの『落ち着け』だのと言ってはみるものの、襄統派の尼僧二人も孫伶と樊樂という盾が出来て気が大きくなったのか益々口数が増え、それに反応する男達の怒声が辺りに響く。遠巻きに眺める旅人の数も増えてきていた。

「とにかく剣を収めてくれないか？」

樊樂が尼僧二人に向かって言う二人は顔を見合わせていたが、少ししてから頷き合って樊樂の要請に応じた。

「何があったのか知らんが、まだ互いに用があるのか？ 無いならここで別れて後は忘れるって事は出来ないか？ 簡単だろ？」

樊樂はどうやら男達を仕切っているらしい老人とそれを睨みつけ

る尼僧二人を交互に見遣りながら言う。言う事は実に単純で、それを武林のすべての人間が励行したならば江湖は見違えるほど平穩無事となるだろう。

「ホッ、確かに、もう安全じゃな。早う至東山に戻られるが良い」
老人は平然と言う。すると取り巻きの男達は老人に顔を向けた。

その表情にはどこか不満がある様で、もっと尼僧に絡んで楽しみたいという欲求がありありと浮かんている。だが老人はそれらを無視した。孫怜らが現れ、周りにも人が集まって既にちょっとした騒ぎとなっており、これ以上は楽しむどころか新たな騒動に発展して厄介なことになると判断した様である。

「行きましょう」

孫怜が尼僧二人に促すと、

「あの、あなた様は……？」

二人とも今度は孫怜を注意深く観察する。良く考えればこの急に現れた者達も一体何なのか良く分からない。老人と男達、北辰教の連中とは別だからといって何も考えずについて行く訳にもいかない。「失礼。私は呂州から参った旅の……商人で孫と申す。これは樊。あちらの二名も同行している仲間です」

孫怜は隣に居る樊樂と、後ろで馬に乗ったままの劉子旦、胡鉄の二人を指差し紹介した。

「何の商いかな？」

不意に後ろから老人が訊ねた。孫怜はすぐに振り返り老人を見つめたが、咄嗟に言葉が出てこない。樊樂が慌てて口を開く。

「あー、俺達は――」

「怪しいのう？」

「本当だ！ あきもの 新たな商物の調査に東淵辺りまで行く予定だ」

「ほう、東淵とな？ ならば、我が教に話を通しておくべきじゃな」

「あなた方は、太乙北辰教の？」

「いかにも」

孫怜の問いに老人以下男達は皆得意げに胸を反らす。樊樂が僅か

に俯いて、

（確かにそうかも知れんがお前らみたいな下っ端に話したって意味無いだろうが。引っ込めよ）

「しかしまあ儂らも用があつてこっちに居るのでな。ついて行く訳にはいかんが、東淵まで行って街の者に言えばすぐに我が教に渡りをつけてくれよう」

「なるほど。お教え頂き感謝致します」

孫怜が恭しく頭を下げると、老人は満足げに数回頷く。孫怜らの素性の事よりも北辰教の者としての矜持が老人の胸中を満たしたのか、急に態度が変化した。

「ではお二方——」

孫怜が尼僧に向き直り話し掛けると同時、にわかに周囲からどよめきが起こり、この場に居る者は一斉に振り返って辺りを窺う。すると街道を土煙を上げながら駆けて来る数騎の馬が見えた。

「湯長老！ あいつらだ！」

若い男の一人が叫ぶ。それを合図に老人を除く男達四人が一斉にためらいも見せず腰の剣を抜いた。そのただ事では無い様子に樊樂らも驚いたが、孫怜が尼僧二人をこの場から避難させるべく街道の脇に広がる林の少し入った辺りまで誘導して行ったのでそれを追つて林に入る。北辰の男達はこちらには全く見向きもせず剣を構え、老人だけが孫怜の方をちらっと見たがすぐに顔を戻して後ろ手を組み、向かつて来る騎馬を待った。

孫怜達は林の中で身を屈めて街道の様子を窺う。樊樂が尼僧二人をまじまじと見つめ、

「あんたら、名前を訊いても？ 服装も頭も同じだから違いが判らねえ」

「樊さん、それなら名前を訊いてもどっちがどっちな判らないじゃないですか」

劉子旦が樊樂に言うと、尼僧二人は顔を見合せて笑った。とり

あえず敵ではないらしい孫怜や樊樂らが現れて緊張は幾分解けた様である。それから一人が樊樂に告げる。

「私は襄統派の門人、泰正たいせいと申します。こっちは妹の泰和たいわ」

泰正と名乗った方は少しふくらした丸顔、泰和は泰正に比べて僅かに顔が細い。違いと言えはそれくらいのもので服装は同じであり髪があればその形やちよつとした飾りでも見分け易いのだろうが、どちらの頭も綺麗に剃られ形もほぼ同じだった。持っている長剣も全く同じ物である。

「姉妹か」

「姉妹弟子、なんです」

「泰……秀泰しゅうたい様の弟子という事かな？」

孫怜が街道の方を窺いながら訊く。

「そうです。ご存知ですか？」

「いや、名前は聞き及んでいるというだけ」

「おい、来たぞ」

樊樂が目前まで漂ってきた土煙を指差した。皆がそれを凝視する中、泰和が土煙の中の人物を見て声を上げた。

「あつ、あれは」

「何者かご存知か？」

孫怜が訊ねると、泰正、泰和の表情がぱっと明るくなった。

「あれは真武剣派の方々です」

第九章 十九

遠目には結構な数の馬が迫って来ている様に見えていたが、土煙が治まってきたその中から姿を現したのはたったの三騎。先頭を駆けて来たのは長剣を鞘ごと腰から外して手に持ち、赤い袍をなびかせた婦人であった。後の二人は若い男女である。

北辰教の男達から少し離れた位置で止まり、辺りをしきりに窺う。

「師娘！ あそこです！」

若い男の方が真っ直ぐ林の中を指差している。隣の若い女はその方を見るなり驚いた様子であったが、先頭の婦人はちらと見ただけで正面の北辰教の集団に向き直る。

「襄統派は関係無いわ！ すぐに解放しなさい！」

婦人は眼に力を籠めて語気鋭く言い放ち、同時に素早く長剣を抜くと老人に向けた。激昂している様にも見えるが老人に向かってぴたりと止まった剣先と揺るがない視線は泰然と構えており、豪胆ささえ窺える。

「はて、我ら北辰教徒はこの五名しか居らぬがのう？ 襄統派は何処か？」

老人は馬上の婦人を真っ直ぐ見返し、静かに答えた。

「では、あの者達は？ 関係無いとでも？」

婦人の剣が今度は林の中へと向けられた。

「なんだかおつかねえ女だな。真武剣だって？」

「はい。あの方は郭斐林様。かくひりん真武剣派陸総帥の直弟子の方なのです」
尼僧の一人、泰正が樊樂に教える。

「もう心配要りませんね。あの北辰教の者達ではあの方には敵う筈がありません」

そう言って泰正は立ち上がり林の茂みを出て行こうとする。妹弟子の泰和も慌てて泰正に続く。

「お、おい……」

「まだ待て！」

まだ身を屈めたままの孫怜が泰和の纏う深衣の袖を掴み、先を行く泰正に向かって言う。

「だから、あの方は味方で――」

「それは解った。だがまだあそこには北辰の者達も居る。下手に出て行つてはあの郭どのとやらの算段を狂わす事になりかねん」

「それは……そうかも知れませんか」

孫怜の言葉を受けて思い直した二人はまた茂みへと戻った。どうやらこの襄統派の弟子二人はこういった場には慣れていない様である。武林に関わらないごく平凡に暮らす江湖の民であつたならばこんな状況に出くわす事自体が殆ど無いのだが、襄統派はその長い歴史を見てもまず敵を作らないのでその江湖の民と感覚は近いものがあるのかも知れない。かと言って襄統派は総帥以下全てが武林の荒事に慣れていないなどという事では決して無い。単にこの二人がまだ若い、それだけの事である。ちなみに、過去に北辰教との対立があつたのは真武剣派に追隨しただけであり、例外中の例外と言えた。

襄統派の門人が二人。林から出て来ようとした処を男達に遮られ、また虜になってしまった。これほど近くに居るのにこの北辰の男達が関係無いなど有り得ようか？

赤袍の婦人、郭斐林は剣を老人に戻す。

「あなた方、北辰は一体何がしたいの？ 真武剣派と再び事を構えるのが北辰、方崖の意向であると受け取っても？ 湯長老、いかが？」

「ホッ、それはご随意にのう。ただ……儼らは東の地に籠もつて居らねばならんのかな？ 此処は武慶とは程遠いが、そなたが此処に居るのはどういう訳か？ 東に攻め入らんと？ 真武剣郭斐林どの、いかが？」

湯と呼ばれた老人は郭斐林の口真似で返し、連れの男達と顔を見

合わせて笑っている。

「では、あそこの襄統派の方をお連れしても構わないわね？」

郭斐林は老人の問いを無視して話を変える。

「何処の事を言っておる？」

老人がそう言い終えたその時、老人の後ろに居並んでいた男達が一斉に泰正らのいる林に向かって駆け出した。

「おいお前ら！ どけっ！」

男達は林に駆け込むと孫伶らに向かって怒鳴る。襄統派の弟子を拘束して人質にするつもりで、一緒に居る孫伶と他三名は邪魔すれば切り捨てれば良いだけだ。ただの旅の商人である。

「待ちなさい！」

郭斐林は掴んでいた馬の手綱を放り投げるとそのまま馬上から跳び上がり男達を追う。正面に立っていた湯長老は全く反応せず、そのまま主の消えた馬と郭斐林を師娘と呼んだ若い男女の方を向いていた。二人は郭斐林の兄弟子で夫でもある白千風はくせんふうの弟子、孔秦こうしんと呉程青ていせいである。郭斐林を追おうとしたが湯長老がじっと睨むので動けない。

「下がれ！」

孫伶は泰正と泰和を劉子旦らに預け、茂みから飛び出すと同時に腰の剣を抜き男達の真正面に立つ。劉子旦と胡鉄が泰正らを連れて林の更に奥へと離れ、樊樂が孫伶の後ろ数間離れた位置で剣を構えた。

孫伶は鋭い光を放つ宝剣を前方斜め下に向けて構える。まだ新しい艶やかな青袍に包んだその身を反らす様に立ち、顎を引いて鋭い視線でもって男達を迎えるその様はどうみてもただの商人では無い。しかし北辰の男達は逃げて行く襄統派の二人ばかりを見ていた。

「どけ！ 死にたいか！」

先頭の男が剣を勢い良く突き出す。すると孫伶は僅かに半身になり宝剣を男の剣の先に合わせるかの様に位置を変える。左手を伸ば

して男の肩を掴んでそれ以外は全く動いていない様に見えたが、男はそのまま突進し低い唸り声を上げる。孫怜の宝剣は襲って来た剣を這う様にすれ違いそのまま男の胸へ到達していた。

次の男がすぐ後ろに迫っている。前の男がどうなったのかは気付いておらず、高々と剣と振り上げている。孫怜は先の男を支えに勢い良く体を跳ね上げ、足でその腹を突く。その男も『ぐうっ』と唸ると後方へ吹っ飛んで更に後ろの二人を巻き添えにして地面に転がった。全てがほんの一瞬である。

孫怜が最初の男の肩を掴んだ手を放すとその男はそのまま膝から崩れ落ち、最後に顔面から地面に倒れこんだ。既に事切れている。

「おっ、お前……」

仲良く地面に転がった三人の男達は呆然と孫怜を見た。

「いかな一介の旅商人とはいえ、降り掛かる災いは払わねばならん。済まん」

孫怜は男達をじっと見つめる。持っている宝剣の先端から血が滴り落ちていた。

（旅商人？ そんな筈がないわ！）

孫怜の視界の外で、男達を追って駆けつけた郭斐林が驚きの表情で孫怜をじっと観察している。湯長老の言ったとおり、どうやら本当に北辰教とは関係が無かった様だが、それならそれで益々この男の素性に疑念と興味を抱いていた。

（今のは一体……。奇妙……。けどあの剣の使い方――？）

孫怜は剣を『振るって』などいない。単に剣を相手に合わせて持ち上げただけに見えたが、郭斐林には何か引っ掛かる処がある様で自分の手にしている長剣を僅かに持ち上げてそれに視線を落とし、何か考えている様だった。

第九章 二十

「儂らは北辰であると教えたばかりではないか？ 東淵での商いは……いや、北辰に仇を成しては無事では居られんぞ？」

湯長老が近付いて来ていた。孔秦と呉程青はすぐに郭斐林の許へ駆け寄り、孫怜に蹴り飛ばされた男らは湯長老の背後に逃げ込んだ。孫怜は湯長老をじっと見つめ、

「……あなた方が本当に五人だけなら、何とか口を封じる事も出来ましょう」

「フン、ただの商人では無い様じゃな。大した自信。北辰の恐ろしさを分かっておらぬのう」

「確かに北辰教は恐ろしい。しかしあなたを消せばそれも無いに等しい」

孫怜の声がにわかに低く変質し、普段の様子からは全く想像出来ない薄く浮かべる笑みと同時に敵愾心^{てきがいしん}を露にした様な鋭い眼差し。

(怜……)

孫怜の後方で構えている樊樂にはその表情は窺えなかったが、孫怜の身に纏う気の変化は感じていた。

郭斐林はそれをこの場に居る誰よりも強く感じ取る。

「師娘……あの人達は一体？」

呉程青が不安げな声を出して郭斐林の傍に歩み寄ると郭斐林はそれを手で制し、引き続き孫怜を観察する。

(北辰とはどういう関係なのかしら？ また得体の知れない……)

ふと郭斐林の頭に一人の男の姿が思い浮かんだ。それは真武劍派が催した英雄大会、それに清稜派木傀風道長と共にやって来た武大^{みだい}という男であった。

(……私は一体どうしてしまったというの？ 何故今頃になってこれほどまでに気に掛かる?)

郭斐林は孫怜が一人目の男を始末したその動き——ほんの僅かな

動作でしかなかったが――に見覚えがある事を思い出す。武大の時もこれと同じ感覚を覚えたのだった。

（似て非なるもの？ この人は歳は私と近い様だけど……我が師と接点があるのだろうか？）

シャツと勢い良く剣を抜く音が聞こえ、郭斐林は我に返った。湯長老が剣を手に孫怜と郭斐林を同時に警戒しながらも話し掛けてくる。

「郭どの。襄統派など儂らは知らぬ。連れて行くが良い。ただ……この男の仲間が素直に応じればもう」

すぐに孫怜も口を開く。

「真武剣派の郭斐林どのですか？ 先程、襄統派のお二人にあなたのお名前を教えて頂いた処です。我らがこの者達に襄統のお二人が絡まれているのを見掛けて割って入った処にあなたの方が来られた。願っても無い事です。すぐにあの二人をお連れ頂きたい」

郭斐林は『なるほど』と合点がいった。孫怜は既に一人の北辰教徒を殺しておりその仲間である筈がない。もし仲間割れの類であったならば湯長老もその様に言うに違いない。襄統派の弟子に絡んだのはその者らで自分ではないと。

郭斐林はすぐに孔秦、呉程青を連れて泰正と泰和が入って行った林の奥へ向かおうとする。しかしすぐに足を止め、湯長老を振り返った。

「湯長老。剣を抜くなら相手を良く見てからにした方が良かったわね。あなたに、そちらの方の相手が務まるとは思えないわ」

「ホッ、それはどうかのう？」

「まあ、遣ってみるがいいわ。あなたの腕がこの武林で如何ほどのものか――」

そう言った後、顔を戻そうとした郭斐林の視界に樊樂の姿が入る。先の男、孫怜は襄統派の二人を連れて行けと行ったが、その仲間は同意しているのか？ そう思い樊樂の様子を窺う。すぐに樊樂は郭斐林の視線に気付き、腕を上げて林の奥を指し示す。郭斐林は樊樂

に小さく頷き返し、再び歩き出した。

「郭斐林様！」

襄統派の弟子二人はそれほど奥まで逃げては居らず、茂みを少し分け入った辺りに身を隠していた。傍に劉子旦と胡鉄も居る。泰正と泰和が郭斐林の姿を見るなり飛び出した。

「二人とも無事？ 怪我は無い？」

「はい！ この……こちらの方々が来て下さらねばどうなっていた事か……」

泰正が劉子旦らの方に腕を伸ばして郭斐林に引き合わせる。

「あなたが真武剣派の郭斐林のですか。ご高名は予々（かねがね）」

劉子旦が恭しく礼をするので胡鉄も合わせる形で拱手する。郭斐林もそれに礼で応えた。

「旅の方々を巻き込んでしまい、申し訳ございません。元々あの北辰の者達は我ら真武剣派を目の仇にしております、ずっとこの辺りにたむろしていたのです」

「そうですか。しかし、向こうが少人数で良かった」

「今もあなた方とご同行のお二人がああ湯という北辰の者と対峙して居られます。すぐ戻りましょう」

郭斐林は劉子旦と胡鉄を見遣って言った。郭斐林は孫伶の剣技をほんの僅かしか見ておらず近くに居た樊樂については全く知らないが、まずあの湯という老人は孫伶の敵ではないと踏んでおり何の心配もしていなかった。郭斐林も武林の名門真武剣派の高弟で三十年近い武芸の修養があり、彼我の優劣を見極める眼力は並ではない。しかし劉子旦らの手前、放っておく訳にもいかなかった。すると、「孫さんならあいつらが数倍居たってどうって事無いんじゃないかな」

胡鉄が誰にともなく言う。それを聞いた郭斐林は胡鉄をまじまじと見つめた。

「あなた方は一体？」

劉子旦が慌てて、

「えっと、私達は旅の商人でして……あ、でもあの孫さんという人はその、用心棒として雇っているのです。かなりの剣の腕前で……って、真武剣派の皆さんに比べればそれは、まあ、その……」

孫怜が用心棒であるというのは間違いでもない。ただ本当は全員が用心棒なのだがそれでは少しばかり変わった集団と思われかねない。やはり旅をする商人あたりが用心棒を付けているとした方が無理である。

「そうですか」

郭斐林は頷いた。用心棒だと言うのなら剣の腕が立つのは当たり前。そうでなければ稼ぎは無いのである。

「とにかく、戻りましょう」

皆再び街道の方へ向かって歩き出す。少し行けば孫怜と湯長老の様子が見える筈である。すると突然、郭斐林が語気鋭く言う。

「此処に居て！」

剣を手にいきなり向きを変え左手奥へ跳躍する郭斐林。

「えっ？」

「師娘！」

残された者達が慌てて視線で追うと、その先には林の奥に向かって駆ける孫怜とそれを追う湯長老の姿が見える。

「何処まで行く！ もう良いだろ！」

更に後方で樊樂も二人を追いながら何やら大声を出していた。

第九章 二十一

「湯長老！」

郭斐林が湯長老に迫る。一直線に跳躍してきた郭斐林はそのまま長剣を鋭く突き出した。

「お前は関係ない！ さっさと行けば良いじゃろうが！」

顔を真っ赤にして怒り狂った様子の湯長老が孫怜を追う足を止めて郭斐林の突きを受け流しつつ叫んだ。

「ハッ！」

剣先で刻み込む様に細かい突きを入れる郭斐林の手を嫌った湯長老は大きく剣を薙いで後方に跳躍し離れようとする。だが郭斐林はすぐさま反応して間合いを取らせない。明らかに郭斐林の方が優勢であった。

「怜」

「やってくれるなら有難いが……このまま放って置くのは格好がつかんな」

樊樂が郭斐林と湯長老を避けて孫怜の傍に駆け寄ると、足を止めて振り返り二人を眺めていた孫怜は言った。

「格好なんてどうでも良いだろ？ 俺達はただの旅商人なんだよ。」

あの郭つてのがあの爺さんをやってくれりゃあその方が良いに決まってる。真武剣と北辰の喧嘩だ」

「もうあの老人だけだ。片付けてしまえば何も無かったのと同じ」

湯長老以外の男達はまともな抵抗も出来ず、とうに孫怜によって片付けられていた。孫怜は短い気合を発し、湯長老目指して跳躍する。

（何故そんなに気合入ってんだ？）

樊樂は孫怜の後姿を暫く見つめたがその後我に返って再び追いかける。

「儂らが何をした！　少しばかり襄統の弟子と話をしたただけではないか！」

郭斐林を相手に焦り始めた湯長老は孫怜が再び戻って来たのを目にしてうろたえた。

「襄統派は見えてないと言っただけでなかったかしら？」

湯長老は口を噤んでじりじりと後退していく。そこへ孫怜が剣を振りかざし湯長老の頭上から急襲する。

「馬鹿もんがっ！」

湯長老は何故その言葉を選んだのかは解らないがとにかく目一杯昂った感情を剣に込め、孫怜に向けて突き上げる。孫怜はそれをもとも簡単に両足を使って往^いなし、自らの宝剣を湯長老の首目がけて振り下ろした。

「フワッ！」

もはや体裁などに構っていられず何とかその宝剣を避けて地面を転がった湯長老は再び起き上がるとすぐさま自分の首に手を遣り、触って傷が無い事を確かめる。首を三度さすり、三度その手のひらを眺めた。

「お前っ！　たっ、ただでは済まんぞ！」

孫怜は着地と同時に地を蹴って湯長老に迫る。瞬く間に間合いは詰まり、それから暫く互いの長剣が火花を散らし甲高い金属音が林に響く。

「湯長老観念なさい！　あなたに勝ち目は無いわ！」

郭斐林がすぐ傍まで来て二人の戦いを眺めて言う。湯長老はもう完全に余裕を失い、もし郭斐林がそこへ数手加えれば混乱の上に恐慌をきたしてしまうであろうところまできていた。

「剣を捨てなさい！　早く！」

「黙れっ！」

この郭斐林と湯長老の短いやり取りをきっかけに、孫怜の手が鋭さを増した。郭斐林の目にはそれがはっきりと解る。次から次へと

繰り出される孫伶の手はいずれも確実に湯長老の急所を狙っていた。郭斐林は孫伶に向かって叫ぶ。

「待って！ 殺す必要は無いわ！」

すると孫伶は手を止めて後退した。湯長老は呼吸を乱し、前屈みになってふらつきながら孫伶を睨みつけている。

郭斐林がその前に進み出る。手にはまだ抜き身の長剣を携えている。

「湯長老——」

「そいつは既に我が教の者を殺しておる！ お前達真武剣派はそいつに加担した。かつ、必ず後悔する事となろう……」

乾ききった喉から音を搾り出すように喘ぎつつ湯長老が言う。

「……そうね。でももう覚悟は出来ているのよ。あなたが我が派の弟子を傷付けた時から！」

郭斐林が長剣の先を湯長老に向けたその瞬間、彼女の視界の端に居た孫伶の姿が不意に消えた。郭斐林と湯長老に声を出す暇は無かった。孫伶は、何の抵抗も受けずに湯長老の目前まで移動しており、その手の宝剣は完全に湯長老の胸を刺し貫いていた。

今まで切り結んだ数十手は何だったのか？ そう思えるほどあつけなく、終わる。孫伶は湯長老の胸から噴出した返り血を避けて踏み込むのと同じ速度で退き、再び郭斐林の横に平然と立つ。遊びは終わり——そんな孫伶の一手であった。

「なっ……何も殺さずとも！」

郭斐林が目を見張り声を上げると、

「今から東淵辺りまで行かねばならない。真武剣派はお仲間も多く、どうという事は無いかも知れぬが我らは北辰に目を付けられるのは非常に困る。他はもう始末済み。一人でも逃すのは不味いのでね。生かすという選択肢は、無い」

孫伶はまっすぐ郭斐林に顔を向ける事はせずに横目でちらと見遣るだけである。

（それは……分かるけれど……）

郭斐林は何とも言えない釈然としない感覚を覚える。さりとてこの男を嫌うという程でも無い。謎の多い手筋ではあったが、優れた剣術を見せた孫伶に対する印象からだろうか？　もし未熟な腕でありながら相手を殺す事に執着するだけの男であったなら郭斐林は必ず嫌悪感を抱いたであろう。

おかしい事だが武林にあって長い者の多くはその人物評等が武芸の腕前によって左右される事が往々にしてある。正々堂々の剣があれば邪悪で下劣な剣もあり、使い手の心がその技に反映されるといのが全ての武術にある常識である。無論それらは印象に影響を与える程度であって絶対では無い。例外として真武剣派から見た太乙北辰教の殷汪や北辰七星については、口には出さないがまさに凄腕と言える武芸を持つ事は認識しているが、彼らは先の教主、陶峯とうほうの武林制覇という野望に加担し仲間を殺戮した極悪人達であり依然として憎悪の対象である。

これらは極端な例であり、一介の用心棒である孫伶とは全くの別物。『生かすという選択肢は無い』と平然と言い切る態度に郭斐林は密かに眉を顰めはしたものの、その理屈は理解出来なくも無い。それどころか当然の事と言ってもおかしくは無かった。

「おい鉄！　子旦！　片付けるぞ」

樊樂が胡鉄と劉子旦を呼んでいる。今此処で片付ける物と言えば北辰教の五人の軀むくろ以外に無い。湯長老以外は皆街道の近くで倒れており、北辰教の者が殺された事を知る見物人は大勢居た筈であるが、だからといって放置しておく訳にはいかない。林の奥に運んで埋めるしか無かった。

第九章 二十二

初めて、孫伶と郭斐林は互いに正対し向き合う。

「郭どの。もう行かれよ。襄統派の二人をお願い致す」

「いいえ。あなたの仰った通り、我ら真武剣派が遣った事にした方が良いでしょう。あなた方が先に行って下さい。後は我らが。……既に我が派は北辰と対立しているんですからね」

そう言って郭斐林は力無い微かな笑みを浮かべた。

「湯長老……と呼んでおられたが、北辰での身分は？」

樊樂と胡鉄が運び出す老人の死体を見送りながら孫伶は郭斐林に訊ねた。襄統派と真武剣派の弟子四人は郭斐林の傍に集まって来ていた。

「北辰に『長老』は山ほど居ます。あの者は末端の数人をまとめる程度。湯長老自身、末端の一教徒と言っても良いでしょう。同じ『長老』でも北辰を動かす方崖の九人の長老とは話した事も無いでしょう」

郭斐林が言い終えると孫伶は間髪入れずに質問を続ける。

「何故に今、北辰はあなた方を挑発する？ あなたは……今から東へ向かわれるのか？」

「それは……我ら真武剣派は北辰の教主が陶峯の頃からの因縁が深く――」

「未だに？ 陶峯の野望が潰えてもう十年近く。それに今まで北辰はかなり大人しくなったと聞いていたが……まだ終わっていないと？」

郭斐林は言葉に詰まり俯いてしまう。

確かに近年では北辰教と真武剣派には何も起こっていない。互いが接近する事すら皆無であり、かつての抗争は完全に終わったと見て良い。ならば真武剣派の者が此処から東、北辰の縄張りに赴くのは何故か。北辰教徒が再び西進し真武剣派や襄統派と揉め事を起こ

すのは新たな『何か』の始まりか。

その『何か』のきっかけとなるであろう物の事を、郭斐林は口にするだろうか？ 真武剣派が今必死になって追う秘伝書が直接の原因にはならないかも知れないが、確実に火種となる――孫伶はそう考えている。

樊樂らは真武剣派、とりわけ陸皓がそんなにその秘伝書に執着するという事が未だ良く理解出来ない様だ。武林の大多数も同じ意見かも知れない。確かに『秘伝書』となればその中身には大いに興味を抱くだろうが、それが敵対する北辰の縄張りになで流れて行つたとすれば普通は諦めるものだ。北辰教としてその存在を知れば欲しがるに違いない。争いになるのは火を見るより明らかであり、残念ではあるが秘伝を目にするという儚い夢はそこで潰える。しかし、陸皓はまだ諦めない。何故そこまでして？ と思えるのだ。そもそもの秘伝書と真武剣派との関わりについて樊樂らは知らない。

郭斐林は至東山に立ち寄った後、秘伝書の為に東へ行くのではないか？ 陸皓は余程で無いと諦めない筈だ――孫伶だけがその様に承知していた。

孫伶はじつと様子を窺ったが郭斐林が黙ったまま答える様子が無いので、後ろの襄統派の弟子二人に視線を移した。

「すぐに至東山へ戻った方が良い。郭どのもそちらに向かわれる」
郭斐林が顔を上げて振り返り、泰正を見る。

「私達も至東山へ行くわ。悌秀師太にお目通りしてお詫びしなければ……」

泰正が慌てて手を振る。

「お詫びだなんてそんな！ 太師父様は、北辰の者がただ己の欲望のまま真武剣派に仇を成そうとしているのは明らかなのだから、襄統はどんな困難を伴おうともすべからく江湖の安寧の為に立つべきであると仰せです。この前の騒動の際も北辰は何の脈絡も無くただ面白がって我が派の者を傷付けたのですから、決して真武剣派の皆様

最近、真武剣派の弟子が北辰教徒に傷付けられ、その場に襄統派も居た為に北辰教徒達は襄統派にまで難癖を付けては絡んでくる様になっていた。そして襄統派にも怪我人が出ている。

泰和が話を継ぎ、

「あの……今回は私達がぐずぐずしていたばかりにあの者達に目を付けられて……。私達の方が皆様にご迷惑を……」

最後の方は消え入りそうな声になり思い切り肩を縮めている。郭斐林はその様子を見て微笑み、明るい声を出した。

「至東山まで行って師太にご挨拶しないなんて道理は無いでしょう？ 師父から悌秀師太への伝言もあるの。とにかく行きましょう」
「はい」

話がまとまった様なので、孫怜は黙ってその場を離れようとする。まだ樊樂らは北辰の男を運んで林を行ったり来たりしており、孫怜や郭斐林の話は聞いていない。孫怜が歩き出したところを、すぐに泰正が呼び止めた。

「あの、有難うございました。皆さんが来られなければ――」
「いや」

孫怜は腕を差し出して泰正の礼を遮った。だが顔は微笑んでいる。「この先、襄統派の武芸を極められればその時はもう我らの出る幕は無い。今の内に多少は良いところが見せられて良かった」

孫怜の言葉に泰正の心が弾み、自然に笑みがこぼれた。北辰の男達をあっさりと片付けた孫怜のほんの少しおどけた様な冗談に加えて、襄統派の武芸を身に付ければあんな男達など相手では無いという言葉に持ち上げられ、若い泰正は一気に気分が良くなった。

「お名前をお聞きしても？」

「孫。呂州から参った。東へ向けて旅をしている」

「あなたは――」

郭斐林がこの二人の傍に歩み寄る。

「剣を何処で？」

使い手であれば何処かの正式な門弟で無くともそれなりに風聞があるものだ。ましてや郭斐林の様な武林の人間ならばその手の話には自然と興味が沸く。しかし『呂州の孫』とは初めて聞く名であった。

「私は生まれも育ちも呂州。剣は――習ったという程でもないな。知り合いに教えて貰った。剣も使えるという百姓で、あなた方名門の弟子とは程遠い。フッ……あなたの前で剣を抜くなど恥をかくだけだというのに、つい必死だったものでね」

「とても『必死だった』とは思えませんでしたわ。とても素晴らしかった」

「はて？ 俺はそんなに剣を振るったかな？」

「いいえ、全く。あなたは剣を差し出しただけだった。私は――良く似た手を知っています」

（まあ、そうだろうな）

孫怜は心の内でそう呟いたが、顔は少し大袈裟に笑みを作った。

「ハハ、それなら殆どの剣に似るでしょうな。相手を突くには差し出さねば」

「それだけで終わる剣となれば、かなり限られてきます」

郭斐林が真顔で言うので孫怜は話を続けるのが面倒になり、「ハハ」と曖昧な表情を作って首を廻す。

「おい怜！ 終わった！」

少し離れた処で樊樂が大声を出す。胡鉄と劉子旦も横に居てこちらを眺めていた。

（ハハ、樊樂は良い奴だ）

第九章 二十三

泰和が泰正に歩み寄り顔を近付けて何やら話していたが、二人で頷き合ってから泰正が再び孫伶に話し掛けた。

「孫様。出来れば至東山にお越し頂いて礼をさせて頂きたいのですが……」

「いや、我々はすぐまた旅を続けねばならないのでね。気になさらず」

泰正は大きく頷いてから横の泰和に顔を向けると、泰和が小さな紫の巾着を差し出し、それを受け取った。

「これを、お持ち下さい」

泰正から差し出された巾着を孫伶は手に取り、その紫色を眺める。

「これは？」

そう訊ねたのはいつの間にか孫伶の背後から覗き込んでいる劉子旦だった。樊樂はんらくと胡鉄こてつも居る。

「真広散創しんこうさんそう瘕丹いたんと言いまして、我が派が作っている傷の丸薬です」

「おおこれがそうですか！」

またも劉子旦の方が感嘆の声を上げた。郭斐林が泰正の説明を補足する。

「これもまた伝統ある襄統派の誇る靈薬の一つ。その効能は江湖一で、非常に貴重な品と聞いているわ。なんでも、内力の運行にも作用するとか」

「確かにこれを生成するのはとても難しいのですが、靈薬という程の事は……」

泰正は顔を孫伶に戻し、

「孫様程であれば容易に刀傷を受ける事は無いかも知れませんが、旅をお続けになるなら何が起こるかわかりませんから、どうかお持ちになつて下さい。他の種類も出来ればお渡ししたいのですが、あいにく今はこれしか持っていないので……。浅い傷であればこれは

必要ではありません。しかしもし傷が思わしくなく膿んでくるような事があれば、傷の直接の手当てとは別にこれを二粒服用して安静になさって下さい。体内から傷を癒してまいります」

「なるほど。それは有難い。しかし、本当に貴重であれば我らに頂くのは気が引けるが……」

孫怜は巾着から視線を上げ、泰正を見る。噂に聞く靈薬、妙薬というものは非常に希少な薬草を数十種、中には百種以上を用いて調合、長い年月を掛けて作り出す物があるという。また大抵、その調合の法は一流の薬師達によって受け継がれ門外不出である為、その価値は他とは桁違いである。襄統派のそれははたして『江湖一』かどうかは定かではないものの、確かに最高の靈薬の一つとしてその効能を謳われていた。

ちよつとした傷を軽視して運悪く命を落とすというのはわりと聞く話である。すぐに医者に見せればどうという事は無いのだが、江湖を渡り、しかも刀剣を携える旅とは得てしてそんなちよつとした事が困難になる事もあり、実際に命を落とす者があるのだ。靈薬とまではいかなくてもこういった薬は必携の品であり、そして襄統のこれはまさに『宝』とも呼んでもおかしくない貴重な物であった。

泰正は一度泰和の顔を見て再び頷き合ってから言った。

「長い時を経て作り出すこの丸薬は、人の傷を癒す為にこの世に生まれた物。靈薬と崇められてただ眺める為に持つ物ではありません。皆さんは恩人です。このご恩に報いるには今の私達にはこれしか無く、そしてこれが最大の物です。どうか受け取って下さい。もしこんな薬を惜しんだなどと我が派の総帥や師父が聞けば私共はとても厳しいお叱りを受けるでしょう。皆さん。もしまた至東山の近くにお越しであれば、今度は是非我が派をお訪ね下さい。受けたご恩は未来永劫、襄統派は大事に致します」

「それはまた……ハハ、随分大袈裟だな。しかしまあ、これはお言葉に甘えて頂こう」

孫怜は泰正と泰和に笑い掛けながら、小さな巾着を懷にそつと差

し入れた。

「んじゃ、さっさと行こうぜ。此処にあまり長居するのなんだしな」

樊樂が急き立てる様に言う。この場所は街からは距離があるが此処で剣で切り合う程の騒動があった事は通行人に知れているので、役人等を連れて来られては厄介だ。

「北辰は他にこの辺には居ない？」

孫伶は郭斐林に向かって訊いた。郭斐林は首を振り、

「今は居ないかと。しかし湯長老が消えたと知るのは時間の問題。我らも至東山に寄った後、東へ向かうので我らが北辰を引き付けて襄統派には手を出させない様に出来る筈」

「……真武剣派三名で？」

孫伶は僅かに眉を顰める。今居る真武剣派は郭斐林と二人の弟子しか居ない。北辰教は湯長老が消されたと知れば報復に人を増やして遣すに違いない。真武剣派の二人の弟子がどれほどのものかは知らないが、たった三人ではどうしようも無いのではないか。

「いや、他にも我が派の者達が今こちらに向かっていますからご心配無く」

「ほう、真武剣派は皆で東に？ 何かあるのか知りたい処だが…… ゆっくり聞いても居られないので諦めよう。くれぐれも用心なされよ」

「……ええ。あなた方も」

その後すぐに孫伶らは再び街道まで戻った。まだその辺で足を止めている旅人達が林から出て来た者達を怪訝な表情で眺めていたが、それらを見無視しながら至東山に向かう郭斐林らと別れた。真つ先に馬の処に戻った胡鉄が言う。

「あいつら呼んで来るよ」

「あいつら？」

「うちの若い衆だよ」

「ああ。忘れてた。ハハ」

胡鉄は街道に残してきた可龍、比庸を呼びに馬で駆け出した。樊樂らも馬に戻り、胡鉄と若者二人が戻るのを待つ。

「おい、怜」

「ん？」

「この先、もう北辰とは関わらんぞ。少なくともこっちからはな」

「ああ、そうだな。真武剣も東へ行くなら、向こうに目が行くだろう。俺達は遣り易くなる。色々とな」

「お前……剣を抜いたのは久しぶりか？」

樊樂は孫怜の顔を窺うように横目で覗き見ながら訊ねる。

「何故だ？」

「あーいや、何となくお前、さっきの爺さんと遣り合うのに夢中になつてたみたいだからな」

「夢中だと？ そんな事あるか」

「そうだ。あの爺さんは到底お前の相手じゃない。すぐ終わる筈だった。でもそうしなかったろ？」

「……ここ数年、剣は一応持っていたが使う事などさっぱり無かったが、お前達が来て、それから殷さんの話をしたせいかな。剣を使うという事を体が思い出し始めた。あとまだ使えるのか、不安もあった」

孫怜は腰に戻したかつて呉琳が用意した宝剣に視線を落とす。

「お前の剣は全く変わってなかった。普通りだよ」

樊樂は真顔で言い、そして続ける。

「頼むから次からは控えめにいこうぜ。と言うか、次が無い様に注意して進まんな」

孫怜は樊樂に視線を戻し、苦笑いを浮かべて頷いた。

第九章 二十四

樊樂ら一行は至東山を通り過ぎ、更に東へと向かう。至東山近辺には特に怪しい人の動きも見当たらず、本当に北辰教徒は今のところは来ていない様である。この先の大きな街と言えば金陽から続くこの街道の終点、東淵しか存在しないが、一向に『秘伝書』や『徐』という名は聞く事が出来ず、樊樂らには為す術も無い。

「おかしいよな。何故こうも話が出てこない？ 『そんな事があつたらしいなあ』 くらいの事を言う奴が居てもおかしくない筈だろ？ かと言って、皆何かを隠してる様子は微塵も無い。全く伝わってねえのか？ こりゃあ恐らく北辰も全く秘伝書とかに気付いて無さそうだぞ？」

樊樂は半ば呆れている。行く先々の街の住人が何も知らない事と、今まで全くの無駄足を運び、これからもそうし続ける事になるかも知れない自分達に、である。

孫怜が答える。

「それは無い筈だ。真武剣派が秘伝書を一旦手に入れて、それを持ち主に返した途端にその者は殺されて秘伝書が奪われた――これは江湖に知れ渡ったのだろう？ 真武剣が元の持ち主から秘伝書を取り戻す為にその様な芝居を打ったというあらぬ疑いを掛けられる事を恐れるが故に総出で行方を追っている。この一連の流れが知れ渡ってしまったが故に真武剣派は動き続けざるを得んという訳だ。北辰は常に中原を張っているだろう。とりわけ武慶を中心としてな。そういう噂が流れたという事くらいはとうに知っているさ」

「じゃあこの手応えの無さは何だ？」

「……北辰が知ったからといって末端の教徒や街の住人も知る事になるとは限らん。樊、真武剣派は随分と思いついた行動に出ている。俺達の仕事もそれどころではなくなるかも知れんぞ」

「どういう事だ？」

「あの郭斐林をはじめ、既に北辰の縄張りにまで乗り込んできた。どういう算段で居るのか不明だがこれはとんでもない事だぞ？ 本気で遣り合う覚悟は出来ているな」

「それもおかしいだろ？ 昔、北辰と喧嘩した時は真武剣だけじゃなくてあの襄統、清稜、その他の北辰傘下以外を全て巻き込んで何とか五分に持っていったんじゃないか。あれから真武剣は多少は拡大しただろうが、それでも勝てるとは思えねえな」

「まあ、昔の様にまともに正面から向かって行く必要も無い。今の処はまだ秘伝書と人質探しだからな。しかし北辰から見れば、何しに来た？ って事になる。とりあえず人を遣って様子を見ようというのがあの湯長老とやらの仕事だったんじゃないのか。そして襄統派も交えて火種が燻り始めた。何でもない探し物だったのがその本来の目的は何処かへ忘れ去られる事も可能性としてはある」

ここで皆黙り込む。先行きは暗く、周維に命じられた任務を達成する目処が立たない。元々人の搜索というのは計画通りに進むどころかその計画自体まともに立てられる様な物ではない。そこへ更に遂行を遮る大事が起こるかも知れないとなれば、誰でも憂鬱になるというものだ。

「樊さん、もしそんな事になったら、城南に戻った方が良いですよね？ 城南で稟施会がどうするのか決めない内に俺達が変わにそんな揉め事に絡んだら不味いですよ」

劉子旦の言葉に、

「そりゃそうだ。そもそも旦那は俺達を偶然見つけて、『城南を離れるならついでに探して下さい』みたいに言っただぞ？ 危険を冒してまで何としても——なんて命令じゃない」

「『ついでに』とは一言も言っただけじゃない」

「おい、そんないい加減な仕事だったのか？ 本当に『お使い』だったとはな」

孫伶は今になって周維の命令がそんなものだったと知り、呆れ顔である。

「指示が『略式』だったってだけだ。可能な限り秘伝書と人質を追って見つけ出す事に努力する、という仕事だ。おかしくない」

樊樂は孫怜に向かって言い、胸を張る。成程その『略式』というのが樊樂を氣樂にさせる原因であつたかと孫怜は納得した。

「なあ、樊さん東淵でも何も分からなかったらどうする？ まだ先に行くのか？ 長いな」

今度は胡鉄が訊く。流石に延々と進むだけの日々に疲れてきている様である。

「そんな時考える」

劉子旦が胡鉄に向かって、

「惜しいなあ。東淵には紅門飯店という処があつてすごい美人が居るので有名だったけど。きっと帰りたくなくなるんだろうなあ。そこに行けば」

「本当か？ 凄い美人で、どんなだ？」

「当然俺も見た事は無いけど、国中で噂になるくらいだからね。鉄じゃなくても夢中になるだろうね」

劉子旦は笑っているが、胡鉄の方は目を見張って見返している。

慌しく樊樂の横に付くと、

「樊さん、是非見て行こう。そんな美人を見れば皆やる氣を取り戻せるってもんだ」

「別にやる氣は無くしちゃいないんだが……」

「それにその美人とやらは今は――」

孫怜が言い掛けた言葉を樊樂が腕を伸ばして即座に遮る。

「俺達はこっちは初めてだからな。色々と見れる物もあるだろうし、東淵は避暑地だ。俺達城南の住人にとってはこの時期に来られるのは幸運だな。ま、氣樂に行こう」

樊樂は胡鉄に向かってそう笑って見せた。

（秘伝書はともかく、人質が居る。急がねばならんが……仕方ないな）

孫怜は樊樂の言葉を聞いてそう思いながら小さな溜息をついてい

た。

周維に劉建和の息子と秘伝書の行方を探れと命じられたのはこれから春を迎えるという頃であった。そして今、夏になろうとしている。傍目にはのんびり構えている様に見える樊樂でも時折、安県に程近い古い廟で会った劉建和の顔を思い出す事がある。

（諦めるなんて出来ないだろうな。なんたって息子だ。周りの全てが『もう生きてる訳がない』と言ったとしても、『その姿』を見るまでは。もし見つけて連れて帰ったらどんな顔すんだろうな？ 泣いて喜ぶか？ 息子か……。泣くだろうな。……。そんなの見たら俺も泣くな。たまにはそんなのも良いな）

「樊、どうした？」

「あ？」

「あ？　じゃない。何か妙案でも浮かんだか？　頬が緩んだぞ？」
孫伶はニヤリと笑い横目で樊樂を窺っている。

「怜、景北港はまず無いと俺は思う。どうだ？」

「ん？　……そうだな。北辰に秘伝書を献上にでも行かぬ限り有り得んだろうな。そんな物を持って景北港に行くのは危険過ぎるからな」

樊樂は頷く。

「東淵でも何も無かったら、南へ行こう。うちの支店に寄れるし城南からも人を出しているかも知れん。他の場所はどんな感じか知りたい」

「東淵に支店は？」

「無い。北辰の周りには一切無い。うちは北辰には関わらん」

「そうか。とにかく、東淵だな。ここからなら三、四日程か？」

「知らん。お前らもこっちは初めてだよな？」

樊樂は胡鉄らを振り返る。胡鉄が首を縮めて、

「全く分からねえ。此処がどこかもさっぱり」

「私も良く分かりませんが、至東山の先はもう北辰のお膝元とか言われてますし、割と近いのかも知れませんか」

劉子旦の答えに樊樂は大きく頷く。

「お前を信じよう。という事で、そのもうすぐの東淵まで一気に行くぞ！」

「樊さん、寝不足は不慮の事態に対応出来なくなるから夜は寝たほうがいいって」

胡鉄が顔を顰めて樊樂に訴えれば、

「当たり前だ。『一気に行くぜ！』という意気込みを維持しつつ、粛々と進むって意味だ」

樊樂はそんな事を言いつつ真顔を正面に戻した。

孫伶は前を向いたまま樊樂らのやり取りを聞いている。

（こいつらはいつまで経っても相変わらずだな。相変わらずで居続けるのも中々難しいものだが……。フツ、洪が来ていればかなり早く進んでいるだろうが、今更言っても仕方の無い事だ。さて、東淵で何か出て来るか？ ……少風に会えるだろうか？ 天佑は——）

都を出る時には東淵に向かうと言ってもまさか本当に東淵まで行く羽目になるとは皆思っていなかった。それまでに徐騰を見つけれないと考えていたからでは無く、そんな遠くまで行くのは正直勘弁して貰いたいからである。徐騰を見つけるか、他所で捕まったという話を道中で聞か、それらの方が確率が高いという見込み——詰まりは希望であった。それがもう既に東淵まであと数日。今までの行程を考えればもう目の前と言ってもおかしく無い。

（ああ、遊びで来てんならもつと気楽なんだがなあ）

樊樂は何度そう独り言ちたろうか。東淵の街はこの国の多くの人間にとって物見遊山に行く街である。辿り着けば樊樂は更にそれを繰り返す事になるのはまず間違いない。

第十章 一

薄く広がった雲に度々覆い隠されながらも、その雲を自らの光で刺し貫きながら姿を現す東淵とうえんの月が、昂然と湖面を見下ろす。さざ波が打ち寄せる湖岸に佇みつつ酒を愉しむ人々は夜空と湖面に浮かんでいる二つの月を眺めて盛んに感嘆の声を上げていた。何処からか琴の音が漂ってくる。だが何処で誰が奏でているのかを気にする者は殆ど居ない。昨夜もそうであったし、明晩もそうであろう。

南門から北門まで、この東淵を貫く通りにずらりと並べられた提灯が街を赤く照らし、音曲と人々の歓呼の聲が街を満たす。通りを少し外れて東淵の畔にくれば、通りとは対照的に静かな月夜を愉しむ事が出来る。物足りぬなどという事があるうか。各地に名月を謳う地は多くあれども悠久の歴史の中で最も古く詠われたのがこの東淵である。夏を迎えれば此処の気候はこの国で最も過ごし易いと言われ、風光明媚な地に有名な歓楽街を伴い、特に遠く離れた地に住まう者達の憧れの地ともなっている。

ただ、この東淵の住人には月を見上げて改めて感慨にひたる様な暇は無いのかも知れない。中央の歓楽街に居る東淵の人間は空を見上げるよりも客引きに忙しい。夏が終われば訪れる者はかなり減ってしまう為、夏の間だけが貴重な稼ぎ時という訳なのである。冬の東淵湖も美しいとは知っていても、中原から遠く離れたこの街はそう簡単に遊びに来れる場所ではない。

近年になって『東淵に花』という話が国中に広まった。東淵を訪れた遊客辺りが話を持ち帰ったのだろうが、『東淵の月』は聞いた事があるが『花』とは？ と、東淵が改めて国中の注目を集める事になった。月ならばとりあえず何処でも見る事が出来る。しかしこの『花』は東淵にしか咲いていない。たおやかな最上の花。噂話などはおおよそ大袈裟になるもので、実際にそれを見るまでは殆どの方がろくに期待などしていないが、この東淵の花は見るものの言葉

を失わせる程、麗しく咲いていた。

花は、季節を問わず咲き続けた。しかしただ一輪。行けば誰でもそれを目にする事が出来るという訳でも無い。それでも人をこの東淵に惹きつけ、東淵湖の月と並んで東淵の街の宝となった。ほんの数年の間であつたが――。

月が昇らない日があつたかどうか、定かではない。月を誰も見ていない日が有史以来一度たりとも無かつたと言ひ切る事は出来ない。それでも月は必ず昇るものであり、未来永劫続くであろうと漠然と思ひ続ける。山の陰に、雲の上にあると信じる。

終わらない花があるのかどうか、定かではない。枯れない花が今もあると知る者は誰一人居ないと言ひ切る事は出来ない。それでもやはり花は終わるものであり、未来永劫咲き続ける花など無いと考へる。ただ、その生を繋ぎ再び地に萌え出る事を望む。

しかし、その花が生の営みを自然の中に終えるのではなく摘み取られてしまったとなれば、其処に再び花を見る事は無くなってしまうのではないか――。東淵の人々は皆そう考へて肩を落としている。かつて咲き誇つた東淵の花はその美しさ故に摘まれ、失われてしまつたのである。

通りを眺め、着飾つた様な身なりの者は他所からの旅客とみてまづ間違いない。飾るとまではいかずとも明らかに普段着とは違う『見せる装い』である。そういった客を相手にする商人以外で服装がその様でない者は殆どが東淵人であり、それらも数多く通りを往き来している。

客は入っている様だが、着飾つた遠方の客とはあまり縁の無さそうな古びた小さな居酒屋には、案の定『東淵人』がたむろしている。月夜である今夜は窓が開け放たれているので、表の琴の音が質素なこの店にも趣を添えてくれている。

「さて、今年はどうなるかな？ 紅門の入りはどうだ？」

「変わらん。他所の人間が増えてきたってところか……。おかみさんは何も言わないが少しばかり居づらいかな？」

「あんた達は大人しくうちで安酒飲んでいくんだね。傳のおかみさんは優しいから何も言わないかも知れないけど、あんたらに酒一杯だけで延々と粘られちゃたまったもんじゃない。おかみさんを困らせるんじゃないよ」

客の男二人と、この店の者らしき中年の婦人が喋っている。客は多いが皆地元の馴染み、懐具合も知れた仲の連中で当然注文もあまり無く、婦人は椅子に腰を掛けて足を組み男二人の会話に混じっていた。

「紅門に人が集まれば周りも儲かる。このぼろい店までその恩恵があるって訳だな」

「そりゃそうさ。他所のお金持ちにたっぷりこの東淵で金を使って貰わなきゃならない。それにはあんたらが席を明け渡さないかね。だからってあんたらは酒を控える事なんか出来やしない。どうだい？ 有難い事だねえ。うちもあんたらも」

婦人はそう言いながら笑っている。古臭い店にしては客が多く入っていて、確かに笑みがこぼれるのも頷ける。

「ま、同じ金であっちの倍近く飲めるからな、此処は。味は……半分か？ ハハッ」

男の一人が笑い声を上げると、もう一方の男もそれに合わせて笑う。店の婦人まで一緒になって笑っていた。

その時、店の入り口の扉が開き新たな客が顔を覗かせる。

「おっ、超靖」

「趙さん、いらっしゃい」

「大入りだな」

「此処が空いてる。こっち来い」

超靖と呼ばれた男が静かに扉を閉めて入ってきた。身なりは整っており、腰に長剣を下げています。男二人は椅子をずらして超靖の為に席を空けた。

「最近良く来るなあ。まさかお前紅門をクビになったんじゃないな？」

男が冗談の様にそう言うと、超靖はじつと顔を見返している。

「仕事が変わったただけだ」

そう言って僅かに微笑んだ。店の婦人が酒を運んで来る。

「趙さん、何か食べるかい？」

「そうだな……少し貰おうか。少しでいい」

婦人は頷いて厨房に戻っていく。適当にあるものを見繕ってくるのだろう。

「仕事変わったって……もう紅門に詰めてなくて良いって事か？」

紅葵（こうい）が居なくなってもう一年が過ぎたが最近までは紅門だったんだろう？」

「まあな」

超靖という男は、紅門飯店という高級料理店に居る用心棒である。東淵一の富豪で紅門飯店の主、傳千尽（ふせんじん）に雇われている。この超靖には兄が居てこれも同じく用心棒をしているが、そちらは紅門飯店に詰めるのではなく、普段は傳千尽の屋敷に居た。

第十章 二

傳千尽の雇う用心棒達は皆古参ばかりで、若者と呼べる者は一人も居ない。大きな屋敷を構え、多数の客が詰め掛ける人気の店を持つていけばやはりそれなりに人を置いておかねばならず、確かな腕を持つ者達を傳千尽自身が選び必要最小限の人数で確保している。

『確かな腕』とは何も武芸などに限る訳では無いがそれ相応のものは必要で、出来れば何でも任せられる人間であれば頭数を少なく出来るし、給金も抑えられる。今現在、傳家の用心棒は足りており、新たに雇い入れる必要は無い様だ。

「じゃあ、屋敷に戻ったのか？」

男が超靖に酌をする。歳も近く親しい仲であった。

「下の昔の屋敷だがな」

「昔の？ 傳夫人の別荘か？」

傳夫人とは傳千尽の妻、王梨おうりの事だ。

「別荘……まあ、そうだな。どうやら今度はそっちに行く事になりそうなんだ」

「あっちにも人は居るんだろ？ まさか夫人は全くの独りで暮らしてる訳じゃあるまい」

「……紅葵は居なくなった。長い間俺はお付の用心棒役だったが、居なくなったらする事が無くなってしまった。屋敷に戻るかと思いきや、どうやら旦那様は紅門に花が無いままでは困るらしい。次の花を用意するつもりの様だ。紅葵と同様、王梨様の許で……」

超靖が酒を呷る。

「なるほどな。それが、媛えんだな？」

男がそう言ってニヤリと笑ったので超靖は驚いて男を黙ったまま見つめ返す。

「紅門の客の連中の間では多分そうじゃないかって話で持ち切りだったぞ？ あの娘が店で働き出した頃から客は増えてただろ？ あ

つと言う間に人気者だ。それなのにぱったり店に出なくなった。でも何処かへ行った訳でもないと言うしな。あの器量だ。紅葵に次いで紅門を上がるのはあの娘だろうってな」

「……洪さんは何か言ってるか？」

超靖は持った酒杯をじっと見つめながらそう訊ねた。洪といつも紅門飯店で酒を飲んでいる洪破天の事だ。

「全く。その話を振っても完全に無視だ。内心、反対してるんじゃないのか？ 一応、洪の爺さんの娘って事になってるんだろう？

傳の旦那が勝手に決めて良い訳無いよな」

「勝手に決めてなどおらん。旦那様は洪さんと何度も媛の事は話している筈だ」

「ま、紅葵の後を受けて紅門の花を名乗るのに不満など無かろうがな。紅門の舞姫ってのはその辺の妓女とは格が違う。東淵の至宝だよ」

「大袈裟な」

「大袈裟なものか。国中から一目見ようと押しかけて来るんだぞ？ 幾ら金を積んだってそう簡単には見れないのにな。紅門の花はただ一輪。縁が無ければ近付けない。……彼女は東淵の誇りだった。再び咲く事を皆が望んでる。あの媛が傳夫人の弟子になったのならきつとこの望みは叶うと俺は信じるね。あの娘は幾つだ？」

「確か……十四かそこらだったかな？」

男が訊くと超靖は今度は店の天井の隅辺りに視線を投げつつ考えている。男が続ける。

「紅葵はもう少し若い頃から夫人に付いて芸の修行をしてたそうだな。しかしまあ少しの差だ。昔を思い出すよ。紅葵が紅門で酒を運んでた頃をな。良く働uksi機転も利く。その頃から本当に愛らしくてな。この辺の常連は皆が紅葵を守る用心棒のつもりで居たよ。お前だけじゃ不安でな」

男がそう言って肘で小突くので超靖は苦笑いを浮かべてから酒を口へ運んだ。超靖もその頃の事は良く覚えている。その頃から紅門

飯店に行くよう傳千尽に命じられており、いつも真面目に働く傳紅葵の姿を眺めていた。当時、傳紅葵は今の梁媛りょうえんよりも若く自分の娘の様な歳でもあるので、それ以来本当に近い存在として接してきた。その傳紅葵が東淵を去り寂しさを感じたものだが、今度は新しくやって来た娘、梁媛を傳紅葵の後釜に据えるべく王梨の許で育てるという。超靖は梁媛の傍に付く様にと命ぜられたのだが、どうも釈然としない気持ちを感じていた。

（『紅門の花』とは傳紅葵の事だ。それ以外の誰でもない。東淵の誇り――それは同感だ。だが、彼女が一流となったが故に『紅門の花』と呼んだまでの事。客寄せに花を作った訳じゃない。勿論、媛が紅葵の様に大きく咲く事が出来たならそれは素晴らしい事だが……紅葵になれというのでは媛が辛すぎるではないか）

店の婦人が湯気の立っている皿を一つ運んで来た。見ればほんの少しだけ肉らしきものの姿が見えている野菜炒めだった。何もおかしな事は無い。適当なものと言えどもこれなのだ。

「趙さん、紅門飯店はどう？ 昼間おかみさんに会ってねえ。なかなか厳しいみたいなさ言ってたけれど……」

この婦人が『おかみさん』と呼んでいるのは紅門飯店の営業に関する殆どを取り仕切っている傳英ふえい、傳千尽の妹である。店の所有者は傳千尽であるが、紅門飯店を兄から任されている傳英が実質的な女主人と言っても良い。

「厳しい？ そうは見えんよな」

男が意外だという様に少し高めの声を出す。

「だからあんたらみたいな安酒しか頼まない連中が押し寄せるからじゃないか」

「分かってるよ。だから此処に来てるんだろうが。ほれ、結構 अच्छで见かける顔が居るじゃないか」

男が店に居る客を見回す。紅門飯店でも良く見かける連中ばかりであった。

『どう？』と訊かれても咄嗟に何も思い付かない超靖はとりあえず口を開いてみる。

「客の数に変化は無い様に思う。ただ……」

「ん？」

「いや、まだ何とも無いな。変わらない。うん。大丈夫だ」

超靖は一人忙しく自分の言葉に頷きつつ酒を煽ってゆく。

「何だよ。言えよ。紅門に何かあったらこの街の商売という商売に影響が出るんだぞ」

「……大袈裟な」

「大袈裟とは言えないね」

今度は店の婦人が真面目な顔で超靖の言葉に反駁する。

「うちも紅門飯店と同じ様に酒を出して料理も作る。でも、違うのさ。あそこは」

「見りゃ分かる」

「あんたは黙ってな」

男は軽く往なされて首を竦める。

「普通は商売仇って事になるんだろうけど、趙さんも知っての通り、私はあそこでおかみさんに仕込んで貰ったお陰で自分の店を持てた。うちが旨くやっていける様に気を掛けて貰いながらね。紅門は大きい店だからうちみたいな小さい処は商売仇なんて言うだけでも恐れ多い事だよ。それだけ余裕があるから他所まで気に掛けるんだって思うかも知れないけど、そうじゃないよ。同業だけじゃない、この街を豊かにしようっておかみさんも、もちろん旦那様も働いてらっしゃる。今、東淵にあって紅門以外に江湖に名を馳せるものがあるかい？ 此処は良い処だけれど何処から来るにしたって遠い。それでも行ってみようと思わせるのは紅門飯店の名に拠る処が大きいだろうね。とにかく、『私たちの東淵』の稼ぎ頭なんだから、永遠に安泰であって貰いたいよ」

第十章 三

婦人は穏やかな表情で超靖を見つめる。婦人は昔、紅門飯店で女中をしており、後に今の居酒屋を始めた。それ故他の者よりも紅門飯店には特別な思い入れがある様だった。そうでなければやはり商いで競合する相手の存在は忌々しいものである筈で、穏やかでは居られない。

「本当は紅葵の名が人を呼んでた訳だが……」

男がぼつりと呟いた。超靖は軽く頷きながら目の前の皿から小さな肉の塊を探り出して口へ運ぶ。そしてまた次の肉を見つけるべく箸の先を皿へと潜らせた。

「今話してた娘、その子も孤児なんだってねえ？」

婦人が再び椅子に腰掛けて足を組み、超靖を見た。

「媛か？」

「そう。私は会った事無いけど、評判良いみたいだね」

「そのうち紅門に梁媛ありって事になるだろう。うん。間違いない」
超靖より先に男が口を開いて得意げに言う。すると超靖は男を睨む様に見ながら卓上に拳を叩き付けた。

「媛と紅葵は違う！ 紅葵の跡目など勝手に押し付けるな！」

俄かに感情を昂らせた超靖を男と婦人が目を丸くして見つめる。

他の客達も一斉に振り返って超靖の方を何事かと見遣っていた。

「別に押し付けるとか……そういう事じゃない——」

「そういう事ではないか。媛は孤児で苦労して都に辿り着いた。偶然にも洪さんに出会ってこの東淵までやって来たがそれは此処で平穏な生活を取り戻す為だ。紅門で働かせるのが目的ではない。紅葵の様になって貰いたいのか？ 媛自身がそうなるうと考えるのなら口を挟んだりはせん。だが他人がそうなれなどと言える筈が無い！ 誰にそんな事を言う権利がある？ ……フン、『紅葵の様に』など媛が言う筈が無いがな。媛は紅葵を知らんのだからな」

超靖は一気にまくし立てると酒杯を掴んで勢い良く呷った。そして大きく溜息を一つ。

「洪さんも本当は紅門に上げるなんて事はさせたくないだろう」

「……じゃあ、何故そう傳の旦那に言わないんだ？　あの洪の爺さんが言えば旦那も聞かない訳が無い。そうだろう？」

男は超靖の顔色を窺いながら声を抑えて訊く。

「洪さんは――」

話しながら不意に超靖が後ろを振り返る。後ろに席は無く人は居ない。入り口の扉を見ている様だが、既に外は暗いので扉に何かの影が映るという事も無い。

「どうした？」

「洪さんはいつ頃まで紅門で飲んでた？」

「ん？　あー、俺達が此処に来る道中に覗いた時には居たな。結構飲んだみたいで卓に突っ伏して寝てた様だったぞ。夕刻……と言ってももう結構暗くなってた」

男は隣で黙々と酒を飲んでいる連れに確かめるとその男は黙ったまま頷いていた。

「済まん」

超靖は立ち上がると男と婦人を見遣りながら頭を下げる。

「大声を出して申し訳無かった」

「……大声？　ハハ、あっちの連中の方が大声だ。しかも常にな」
男が店の奥の方に居る客達を眺めて言う。何やら大層盛り上がっており歓声を上げていた。

「どうしたんだい？」

婦人が訊くと、

「紅門に用事を思い出した。また明日来るよ」

「ああ。いつでも大歓迎さ」

「じゃあまた」

超靖は男にもそう声を掛けてから、急ぐ様に早足で店を去って行ってしまった。

男はその後姿を見送ってから婦人の方に向き直って首を竦める。

「何か、怒られちゃったな」

「……確かに、今から周りの人間があれこれ言うべきじゃないね。でも……」

「でも？」

「奥様の処へ行つたんならその媛て娘、『並』の娘では居られなくなるのは確かだけどね」

「……そうだな。先が楽しみで仕方ないが、ま、これは胸の内に秘めとく事にするか」

紅門飯店は通りに並ぶ様々な建物の中でも飛び抜けて高く五層に連なった楼閣である。周辺には多くの明かりが灯され、その朱色が夜の空に浮かび上がって見えていた。

正面入り口付近には今から入るのかそれとも出て来たところなのかは判らないが、いつも人がたむろしている。建物の一階はほぼ毎日人で溢れており、席が空くのを待つ客も少なくない。しかし今、表に居る者達はこれから入る客という訳では無さそうだ。紅門飯店で働く中年の男が店の正面を塞ぐその者達を追い立てていた。

「またお前達か。入らないなら、ほれ、そっちの端に行つてくれ」
「客が来たらどいてるって」

「来る前にお前達が正面に居たら敬遠されてしまうわ。んん？
せめて着る物くらい綺麗に洗え」

「何だよ。中に居る奴だって小汚えのが一杯居るじゃねえか」

「中で酒なりなんなり注文してくれるのは皆『お客様』だ。お前達は入ろうともせんだろう？ 席はあるぞ？ 入るか？」
「いや……今日は……」

男達は急に縮こまって仲間同士顔を見合わせている。今日は持ち合わせが無いので酒が頼めないといったところだろうが、それならわざわざ出て来ずに家でじっとして居れば良いものを、それでもこの男達はわざわざこの紅門飯店までやって来る。酒を愉しむ事は出

来ないが、此処にはいつも大勢の人間が居て盛り上がっており、その雰囲気だけでも味わおうというのである。

「とにかく、入り口の真正面に陣取るのは止める。ほれ、そっちだそっち」

男達は店の横の方へと追い立てられ、ぞろぞろと歩いて行く。

その店の者は入り口に戻って来るなり、通りに向かって声を掛けた。

「靖じゃないか。もう上がりかい？　飯は？　そんなところに突っ立ってないで入ったらどうだ？」

通りには紅門飯店を見つめている超靖の姿があった。店の中の様子を窺っている。

「郭^{かく}さん」

超靖は声を掛けた店の者に手招きをする。

「ん？」

郭と呼ばれたその男は首を傾げて超靖を見てから歩み寄った。

「どうした？　何かあったのか？」

ついこの間までこの紅門飯店に用心棒として居た超靖である。どうやら普段の様子とは違うその姿に郭は眉を顰めた。

超靖が郭の肩越しに店の中を見つめ、言った。

「あれ、また来てるのか」

郭は振り返り、超靖の視線の先を確認する。

「……ああ。来てる。北辰な」

第十章 四

二人の視線の先、店の入り口に一番近い卓には二人の男の後姿があった。一人は明るい薄青色の長衫を纏い、その背でまとめた髪を腰まで垂らしている。もう一人は黒の短衣と腰に紅色の帯、北辰教徒、特に方崖の幹部直属の配下となっている者達がする出で立ちである。

「何か変わった事は？」

超靖は郭に訊ねる。視線は中の二人に据えたまま動いていない。

「いや、無いな。洪さんが今も中に居るんだが、じっと監視するだけだ。と言っても洪さんがちょっと表に出て付いて行く事は無い様だな。あくまで、ただの客の振りをしてるつもりなんだろうよ」

超靖は頷き、

「多分、洪さんだけという訳では無いのだろう。傳家の全てがその対象に違いない」

「なあ、本当に殷さんは何処かで無事なのかねえ？ 確かに旦那様や洪さんは義兄弟の様なものだから北辰がその周辺を監視するのも解るが、北辰の縄張りのこの東淵に殷さんが舞い戻って来るなんて有り得ないんじゃないかねえ？」

「……いや、何も殷さんが戻らなくても、旦那様や洪さんが殷さんの居場所を知っていて、何か連絡を取り合うとかそういった事が無いかを調べているんだろう。北辰は」

「まだ今は大人しく酒を飲んでる程度だからいいが、この先不安だよ」

郭は溜息と共に肩を落とし、北辰の二人の男を振り返った。

「郭さん、とりあえず今は気にせず普通の客として扱う方が良い。警戒心を気取られれば向こうも対応を変えてくるだろう」

「ああ、それはちゃんとおかみさんが皆に言ってるよ」

超靖は郭に頷き、

「洪さんに用があつて来たんだ」
そう言つて店に向かつて歩き出し、郭もその後について店に戻つて行く。

超靖は店に入ると真つ直ぐ奥へと向かう。北辰の男二人は恐らくその背に視線を投げたろう。今はまだ何も思ふまい。しかし洪破天の傍に立てば必ず超靖を注視する事は間違いない。

洪破天の丸まった背中を、客で混み合っている奥の席に見つける。辺りは賑やかなのにも関わらず、ただ一人卓上に突つ伏しており全く動かない。超靖は人の間を縫う様に進み、洪破天のすぐ後ろに立った。

「洪さん」

声を掛けるが洪破天はぴくりともせず、卓に頬を付けて目を閉じている。卓上に伸ばした左手が、置いてある酒壺に僅かに掛かつていた。

「洪さん」

超靖は洪破天の肩に触れ、もう一度声を掛けた。

「……ん」

洪破天の口から微かに音が洩れ、瞼がほんの少しだけ開いた。

「んん……」

口が動いているが最初の唸るような声以外は聞き取れない。超靖は上体を倒して小声で話し掛ける。

「洪さん。奥様の処へ媛を迎えに行くのでは？　もう待っている筈です」

それを聞いた洪破天はようやく目を見開いて超靖の方へじろりと視線を向けた。だが頬はまだ卓上に付いたままだ。

「あれは……あそこで暮らす」

「は？　いや、私は夕刻まで居りましたが、奥様が『洪さんが来るから帰って良い』と仰つたので戻ってきたのですが」

「ん……千尽に聞いて来い。そうする事になった……」

洪破天はそう言うのと再び瞼を閉じたので超靖は体を起こして暫く考える。

（旦那様と話して決まったのか？ 奥様にはまだ知らされてないのか……）

もしそうなら恐らく屋敷から誰かそれを伝えに王梨の許へ遣られている筈だが、とりあえず自分が戻って確認した方が良さそうだと超靖は思った。急に『今日からそこで暮らせ』と言われても何の準備も無ければ困るだろう。何より梁媛自身が戸惑ってしまう。

（皆、媛の扱いがぞんざい過ぎるのではないか。洪さんもどうしたというのだ？）

超靖は洪破天の背中を見下ろしながら、ふと背後が気になった。北辰の二人は自分を見ているだろうか？ 恐らく見ているに違いない。

（ん？ もしや洪さんはあの二人が居るせいで媛の処へ行かないのか？）

この店の郭の話ではあの二人、洪破天が出かけても付いては行かない様だが絶対という訳でも無いだろう。何処に行っているのかを確認に出てもおかしくない。王梨は傳千尽の妻。殷汪とも面識がある。その住まいが傳千尽の屋敷とは別にある訳だが北辰はそれも把握済みなのかどうかは分からない。

（媛と北辰には何の関わりも無いが、今の洪さんにとっては何より大事な娘。危険に巻き込まない様にするという意味では少なくともこちらからその存在を知らせる様な真似は出来るだけしないほうが良い。いずれ知られるのは確かだろうが……）

関係が今は無くても、敵が大切になっている人間の存在というものは様々な使い道がある。北辰が洪破天の敵のなるかどうか今の時点では何とも言えないが、傳家共々探られる立場となればそういった事も考慮していかねばならない。ちょっとした油断が後悔を生む。

「洪さん、私はもう一度奥様の処へ戻ります。媛の事が伝わっていないかも知れませんが」

「……」

洪破天は何も言わず僅かに顎を引いて答えた。

「洪さん……あの北辰の二人ですが」

「ん……まだ居るのか？」

「はい」

「もう気にするな。放っておけば良いわ」

「はい。洪さん、今日はこちらに泊まれたらいかがです？ おかみさんに伝えてきますが」

洪破天は相当飲んだようだ。もし帰りにあの北辰の男二人と何かあれば危うい。素面であったならまず洪破天に敵う者はまず居ないと超靖も理解をしているが、この様子では『万が一』が『百に一』くらいにはなろう。とにかく油断が良くない。

洪破天が呟いた。

「……これ以上、そんな真似が出来るか」

超靖は洪破天を見つめたまま暫く黙り込む。何を言ったのか理解出来なかった。

（そんな真似？ 洪さんは俺の言葉を何かと聞き違えたのだろうか？）

とにかくひどく酔っている事は判った。超靖は店内を振り返り傳英の姿を探す。ついでに入り口の方に座る男二人の様子も視線を泳がせつつ確認する。はっきりとは見えないが二人ともごく普通に振舞い何かを摘んで口に運んでいる様だった。超靖はそれ以上見る事はせず、傳英探しを続ける。

傳英は店を取り仕切る立場でありながらいつも率先して店に出て給仕係までこなす。常連への顔見せも殆ど欠かさない。今もこの広間が厨房に居る筈だ。この、目で探している間にも北辰の男達は何度か超靖を見ている筈だが、超靖は出来るだけ普段通りの振る舞いを心掛けながら顔を動かした。

第十章 五

超靖もよく見掛けていた常連数人の処に、傳英は居た。笑顔で言葉交わしている。超靖は洪破天を振り返り、目を閉じて眠っている様なその顔を見てから、そっと離れた。

「あら？ 今日『お客様』かしら？」

歩いてくる超靖を見るなり傳英の方から声を掛けてくる。とりあえずこの紅門飯店での仕事から離れた超靖が今此処に居るのは客として来たか、それとも傳千尽から何か命じられたのか。ともかく傳英はにこやかな表情を浮かべていた。結構細身の女性なのだが、常に店の中を忙しく動き客を取り回す様の中々の逞しさを感じさせる。まさしく東淵一繁盛している店の女主人といったところである。周りで客達の歓声上がる中、超靖は傳英の耳元に顔を寄せる。

「洪さんが随分酔っている。まだあの二人も居る事だし……」

超靖がそこまで言うだけで傳英はその了見を理解し頷いて見せた。「そうね。媛はまだ嫂ねえさんの処？ あっちも泊めて貰わないと」

「俺が今から行ってくる。洪さんは媛はこれから奥様の処で暮らすと言ってるんだが、どうなってるんだ？ 旦那様とそう決めたらしいんだが……」

「えっ？ 聞いてないけど……急ね」

超靖は頷いた。

「とりあえず行ってくる。奥様の処が準備が整えられない様ならこっちの屋敷に媛を連れて帰る」

「ええ。そうしてあげて」

超靖は再び頷き傳英の傍を離れて店の入り口へと向かう。北辰の男二人が正面に見えているが特に変わった様子は無い。歩みを緩める事無くそのまま外へと出て行った。

傳英はすぐに洪破天の処へ向かった。ずっと店に居て飲んでいたので何処に居るのかは分かっている。

「洪兄さん」

傳英が洪破天の肩を揺すって声を掛けると、超靖の時と同じ様に低い唸り声が返って来る。

「洪兄さん、起きて」

傳英が洪破天を『兄さん』と呼ぶのは単に昔から傳千尽が『洪兄』と呼んでいるのでそれに倣っているだけで、本来なら兄と呼ぶには少々歳が離れている。しかしそう呼んでもおかしくない程の、長く親密な付き合いであった。

「……どうした？」

やはり頭を卓上に乗せたまま洪破天は傳英を見る。

「上で休んだらどう？ 媛は嫂さんの処だし、泊まっても良いでしょう？」

傳英は梁媛の事を詳しく訊こうかとも思ったが、目を開けただけでぼんやりしている洪破天とまともに話せる様にも思えず、今は触れない事にした。超靖が行ってくれたので何も問題は無い筈である。相変わらず動くのが億劫だとも言う様に脱力していた洪破天が、傳英の言葉を聞くとすぐさま体を起こした。

「帰る」

顔を洗うように両手で擦り、その両手を勢い良く下ろして膝を鳴らす。

「帰るぞ」

洪破天はそう繰り返して立ち上がる。その時、僅かばかりふらついていた。

「ほら、危ないわ。わざわざ戻らなくてもうちにも部屋はあるんだから良いじゃない。今夜何かあるの？」

「……無い。無いが家に帰るのがそんなにおかしな事か？」

「今までもよく泊まってたじゃないの」

洪破天は傳英の言葉を聞くと視線を床に落として力無く首を振った。

「お前達に面倒を掛けてばかりであったのう……」

「え？」

傳英がすぐに聞き返したが洪破天は何も言わずに歩き出す。時折、近くの客の肩に手を突きながらゆっくりと広間を進む。

「洪兄さん？ 大丈夫？」

洪破天は後ろを付いてくる傳英を振り返って小さく頷いただけで、そのまま店の入り口へ向かって進んで行く。

「洪兄さん、待って。今誰か呼んで――」

「いらん」

洪破天は短く答えた後立ち止まり、黙って広間の一角を指差した。客数人がこちらを向いて傳英を呼んでいる。

洪破天は傳英を見て微かに笑った。

「また来る」

傳英は近くを通った郭を呼び止めて先程の客の処へ行くように伝えてから、洪破天を追った。

店の入り口近く、北辰の男二人が酒を飲んでいる。この二人の事は洪破天は勿論、傳英も承知している。

「英よ。もう仕事に戻ってくれ。儂は大丈夫じゃ」

洪破天は手振りも交えながら『もう行け』と言う。

「そう？ なら良いんだけど……？」

「本当に何も無いからのう。明日も来る」

「……そう？ ええ、分かったわ」

洪破天の表情が、眠そうなのを除けばいつもと変わらないところまで戻った様に見え、傳英はこれ以上引き止めはしなかった。今度はそれよりも――北辰の二人が視界に入り、そちらの方が気になってしまう。あの二人は付いていくだろうか？ それともいつもの様に関係ない振りを続けるのか？

不意に広間の何処からかまた傳英を呼ぶ客の声が聞こえた。傳英が洪破天の表情を確認すると黙って頷いている。

「気をつけて」

「ああ」

傳英は洪破天の傍を離れて声のした方へと向かうが、やはり気になっ
て入り口の方を時折振り返っていた。

洪破天は視線を傳英から北辰の二人の方へと移す。それから真っ
直ぐそこへ向かい、何も言わないまま長杉の男の隣に立つといきな
り片膝を曲げて卓上に腰を引っ掛ける様に座った。長杉の男は酒杯
を持ったままゆっくりと首を廻して洪破天を見上げ、その向かいの
黒衣の男も洪破天をじっと見つめた。

「何か分かりますか？」

洪破天は長杉の男に向かって言う。二人を微塵も警戒していない
様子でとろんとした目つきのままだった。

第十章 六

長衫の男は無言のまま顔を正面に戻して酒杯に口を付け、それからゆっくりと戻す。そしておもむろに口を開いた。

「いや、全く」

低く落ち着いた声。離れて見れば青年の様にも見える風貌であるが近付くと思ったより深い皺が顔に刻まれている。その落ち着き払った佇まいの中に鋭く精悍な眼差しを持ち、何も言わずとも武林の人間である事を窺わせる、そんな雰囲気を漂わせていた。もう一人の黒衣の男はこの長衫の男よりも歳は大きい様だが、長衫の男の部下である事はまず間違いない。

超靖らが不安を覚え警戒しているにも関わらず洪破天はこの二人に対して自然に接している様に見え、眠そうな視線を辺りに漂わせながらとつとつと長衫の男に話し掛ける。「ならば今、北辰は相当暇なんじゃのう。おぬしが、こんな役回りとは」

「……確かに暇でしょうな。しかし私としては気楽で喜んでいるのですが」

「此処には、何も無いぞ？ おぬしらが探す様な手掛かりも全く無い。こっちが知りたいくらいじゃ」

「ならば……何か分かったら洪どのにもお伝え致しましょうか。他にも散らばっているのですね」

長衫の男は洪破天を見上げて笑った。洪破天もニヤリと口を曲げて応える。先程から周囲の客達が洪破天と北辰の二人の様子を気にしているが、どう見てもただの知人同士が親しく話しているという風にしか見えなかった。

全く武林に縁の無い、酒を飲みに来るだけの客でさえこの北辰の二人が何故この紅門飯店に通っているのかを知っている。東淵はさして大きい街ではない。街中の人間が知っていると云っても過言では無く、何か『事』が起きるのではないかと皆が注目している程で

ある。

この街に北辰の人間が居るといふのは何も変わった事ではなく住人に北辰教徒も大勢居る。それ以外でもこの東淵では太乙北辰教は頼れる隣人と捉えている者が少なくない。非常に近い存在なのである。それは変わらず続いているが、今、紅門飯店に居る二人の男は普段とは全く違う理由で此処に来ている。それは超靖や傳家の人間が理解している通りであり、街中に話は広がった。殷汪と繋がりがある人間を監視する――。特殊な、ただならぬ理由である。

ただ、街の住人達は事の次第を把握しきれていない。傳家の人間、それに洪破天が殷汪と深い縁があるのは知られている事だが、殷汪は死んだにも関わらず何故にまだこだわるのか？ まさか生きていると思っている？ だとしても殷汪たった一人をいつまで追うのか？ 何か別に理由でもあるのか？ と、解らない事だらけで話は尽きる事が無く、特に酒の席では重宝する。

殷汪の話はこの東淵では特に盛り上がる。その理由は、殷汪もかつては長くは無いが傳千尽、洪破天と共に東淵の住人であったという事だ。言葉を交わした事のある者も居る。突然北辰教の総監となり方崖へ行ってしまったが、太乙北辰教を悪く思う事が無いこの街の住人にすれば『出世した』という感覚の方が強かった。流れ着いただけとはいえ、その時には既に名を知られていた殷汪を街の人々は歓迎し、そして北辰の総監へ――。『あれは我らの仲間も同然』という、少しおかしくはあるが『誇り』の様なものを感じるのは人情というものである。

洪破天と北辰の者との意外にも穏やかなやり取り――話す内容は全く聞こえていないが――は、見る者を少しは安堵させた。街の誇りであった殷汪が突然北辰を出て今度は一転して追われる者となったと聞いた時には皆、大層驚いた。そして一様に不安を感じる。

（殷汪が北辰に敵対したとなれば、昔から親しかった者はどうなる？）

親しかった者といえはやはり傳千尽とその家族、それから洪破天

だが、同じ東淵の住人として殷汪に期待と誇りを勝手にではあるが抱いていた東淵の多くの者達も実際はともかく身近で親しい様な感覚で居たのであり、北辰の東淵という地に対する印象が変化したりはしないかと嫌な気分になったものだ。北辰教が東淵という街を具体的にどうこうするなどという事はまず無いだろうが、この街にも多く出入りする教徒の素行に影響が出るなんていう事も考えられるのである。今になってみればそこまで考えるのはただの取り越し苦労であった訳であるが、今、洪破天はごく普通に北辰教徒と接している。しかも監視役と、である。とりあえず殷汪に生きている可能性があるのならば調べようとするのは当然の事だし、そしてそれ以上の意図は北辰には無い様だ。そうでなければ洪破天とあの様に接する筈が無い。洪破天にしても基本的に普段から気性の荒い性格である。関係が本当に悪くなっているのなら『事』はとうに起こっている筈。したがって、今はそんな悪い状況にはなっていない——それが今、周りに居る連中の考えであった。洪破天と話す長衫の男を眺めながら、中には完全に安心しきっている者も居る。

（全然関係は悪く無いんじゃないか？　だってあいつは北辰の下っ端なんかとは違う。あれは——）

「おぬしら、儂がこの東淵を出たら……付いて来るのか？」

ただ酔っているだけとも思えない妙な雰囲気醸しながら、洪破天は呟く様に言う。長衫の男はその様子を訝しみ、首を傾げた。

「何処かへ行かれるおつもりですか？」

「さあ。いや、おぬしらはどうするのかと思うてのう」

「何処かへ行かれるのなら、気になりますな。何処なのか。そこに誰が居るのか。しかし、あなたを追う役目が私に廻ってくるかは判りませぬ」

「ハ、それでは面白味に欠けるわ」

「ハハ。無論、洪破天どのに当たらせるとなれば適当に選ぶ訳には参りませぬ。恐らく、我ら六人の内の誰か……」

「フン、本当にする事が無い様じゃな。おぬしらは。六人とは？
いつから減った？」

「……ご存知ではありませんでしたか。まだ一年も経ちませぬな」

「知らん。六人か。格好がつかんな」

「フ、確かに。私はその辺の事はどうでも良いのですがね」

「ま、とりあえずその『六星』あたりが来てくれれば飽きずに済む
やもしれんな」

洪破天は浅く腰掛けていた卓から離れ、ゆっくりと腰を伸ばして
立った。長衫の男が振り返る。

「本当に此処を離れると？」

「まだわからん。とりあえず家に帰って寝る」

「そうですか」

洪破天はそのまま店の外へと歩き出した。北辰の二人は席に着い
たままで動こうとはしない。長衫の男は再び酒を自らの酒杯に注ぎ、
黒衣の男だけが通りに消えていく洪破天の背中を見つめ続けていた。

洪破天と北辰教の二人の様子を窺っていた他の客達は、仲間達と
の雑談に戻る。

「何でも無さそうじゃないか？」

「いや、でも最近の洪さんはちよつと変だぜ？ 何か塞ぎこんでる
様な……」

「あの人が？ しかし北辰がらみて事じゃないだろうな。さつき
の雰囲気からして」

「じゃあ何だ、梁媛か？」

「多分、北辰よりもそっちだ」

各々が乾き始めていた酒杯に酒を満たしてゆくと同時に、彼らの
口は徐々に滑らかになっていった。

第十章 七

大通りから西に入った、明かりの殆ど無い小道。超靖はやや小走りになりながら先を急いでいた。街の中心とはうって変わって聞こえるのは虫の鳴き声と小さな水の音ばかり。人とすれ違う事は殆ど無かった。

暫く進んで超靖はようやく一軒の屋敷の前に辿り着く。王梨の住まう傳家の旧宅である。古く、そして周辺の民家とさして変わらぬ大きさで、街の者は当然知っているが他所の者なら此処が傳家の屋敷であったとは思うまい。

超靖はまだ開け放たれていた門に足を踏み入れた。すると直後、「わっ!」と、男の驚いた声が聞こえ、超靖も思わず身構えた。

「あ、ああ、超靖さんですか。あーびっくりした」

中の暗がりから姿を見せたのは此処の使用人で、超靖も良く知っている若い男であった。

「ハハ、こっちが驚いたわ。どうした?」

「いえ、門を閉めに。超靖さんは? 何か忘れ物でも?」

「あー、媛はまだ此処に?」

「ええ、居ますよ。洪さんがまだ来てないので」

「洪さんは来ない」

「え?」

「奥様も居られるな?」

「はい」

「分かった」

超靖は軽く手を上げて屋敷の中へと歩き出し、若い男はほんの暫くその背を黙って見送ってから門を閉めに向かった。少ししてから門の軋む音が辺りに響いた。

「お迎えは無しの様ね」

まるで待っていたかの如く、王梨は入り口に立っていた。超靖の心の中を読み当てて得意げな小娘の様に笑みを浮かべていたが、すぐに痩せた体を柱にもたせ掛けて腕を組み、溜息をつく。

名妓として鳴らした王梨もすでにいい歳であり元々細かったのもあって今ではやつれた様にも見えてしまう。実際、傳千尽と別居し始めてから疲れの様なものが表情に一層出てくるようになった。そう簡単に一人のんびりと暮らすという訳にはいかない様だ。

王梨は再びゆっくりと超靖に顔を向ける。

「洪さんはどうしたの？」

「紅門に居られました。媛はこちらで暮らす事になったと言っておられましたか、ご存知ですか？」

「……そう」

王梨は黙って宙を眺めながら呟いた。

（知っておられたのか……）

超靖は王梨を見つめ、言葉を待った。

「……洪さんも大袈裟ね。他所の街に行く訳じゃあるまいし、すぐ近くなのにね」

「奥様。媛は今夜から此処に？ 支度がまだでしたら私が旦那様の処へ――」

「いいえ、結構よ。あの人の処に遣る必要は無いの。全くね。ありがとう、もういいわ」

王梨はもたれていた柱から体を起こし、超靖に体を向ける。

「もう戻って休んで頂戴。あと、此処に毎日来る必要は無いわ。他に何も仕事が無い訳ではないのでしょうか？」

「いや、旦那様から此処に居るようにと……」

「何故かしら？」

王梨がじつと見つめてくるので超靖は何故か焦ってしまう。

「それは……やはり奥様や媛に何かあっては……」

「……フ、そうね。私はともかく、媛は大事な娘。洪さんから……取り上げておいて何かあったら大変」

「……取り上げた？」

超靖には意外な言葉だった。洪破天から梁媛を取り上げたなど想像し難い。洪破天と傅千尽や王梨は昔から本当の家族の様であり、喧嘩したという話も一切聞いたことが無い。洪破天があれほど荒っぽい性格なのにも関わらず、である。そしてその洪破天がとにかく大事にしている梁媛を取り上げるなどという事が可能だろうか？

洪破天は怒り狂うのではないか？ ならば先程の洪破天の様子はどいう事だろう。随分塞ぎこんでいる様には見えるので梁媛を王梨に預ける事は正直なところ『不本意』なのだろうが、それでも黙ってそうせねばならない事情でもあるのか。

「そんな感じになるじゃないの」

王梨は溜息をもう一つ。

「洪さんに、媛に顔を見せに来るよう伝えて頂戴」

「はい。……それでは」

超靖が拱手すると王梨は微笑を浮かべて頷き、そして別れた。

超靖は再び紅門飯店に向かう。少し前までは紅門飯店に寝泊りしていた訳だが今は傅千尽の屋敷に移っており帰るならそちらなのだが、戻って寝るにはまだ早い。洪破天に王梨の言葉を伝えておこうと考えた。

（大人しくおかみさんのいう事を聞いただろうか？ あの洪さんの事だ。気が向かなければさっさと帰ってしまうに違いない。……一応家の方に廻って行くか）

洪破天が紅門飯店に泊まらずに家に帰るかも知れないと思った超靖は、大通りに向かう道を逸れて洪破天の家のある集落の方へと行き先を変えた。そこから紅門飯店に向かえば洪破天が帰宅途中であつても出会うだろう。

洪破天の住まいは王梨の居た屋敷とは少し離れた別の小さな集落にある。東淵は東の湖とそこに迫っている西の山との間にある細長い土地で、山の麓にはいくつもの谷があってそれぞれに集落が作ら

れており、歡樂街となっている大通りとは対照的に静かで質素な生活がそこにはあった。

洪破天の家は周辺に比べてひととき質素、というよりは粗末なぼろ屋といった処で、明らかに傾いている柱に穴の開いた屋根、正面の入り口付近を除いて雑草がぐるりと家を取り巻いている。近所の者が「蛇が棲みつくから草を刈ってくれ」と言いに来た事もあるそうだが洪破天は全く聞く耳を持たなかったらしい。「蛇なら農が退治する」と長剣を片手に家の周りをぶらついて数匹の蛇を仕留めるが、そうやって外をぶらつく度に蛇を退治するという事はすでに蛇たちの棲みかとなっている訳で、毎日退治してくれるならまだ良いが洪破天がそんな事するのは月に一度あるか無いか。「もうすぐ冬が来るからもう大丈夫じゃ」と夏が終わる頃には言い出す始末で近所の人も諦めかけていた。その諦めかけていた近所の者達が再び洪破天に言いに来たのは、梁媛がこの家に来た頃だった。

「洪さんは蛇などという事はなかるうが、あの娘が蛇にやられたら何とする？ 娘を家に閉じ込めるのか？ 蛇が入る隙間などいくらでもあるこの家に？」

その話を聞いた洪破天はさすがにそれは良くないと考えたらしく、翌日には家の周りを埋め尽くす雑草を全て刈り取った。腰をすえて草を抜き取るところまではやらなかったそうだが、鎌ではなくやはり長剣で綺麗に刈り取り、それを十日に一度はやる様になったという。一度刈れば十日かそこらではそれほど伸びたりはしないものだが、それでも剣を振るって僅かに伸びた葉を細切れにする。

ようやく近所の者達の願いは聞き入れられた訳だが、
「洪さんは変わったお人だ……」

皆そう言って頑固で単純な洪破天を噂していた。

超靖は洪破天の家の前に立つ。僅かな月明かりの射すその周辺には、雑草が生い茂り始めていた。

第十章 八

長居する必要は無い。中に人の気配は無く、洪破天は帰ってはいないのだ。そう考えて超靖は紅門飯店へと向かう。

大通りに近付けばまだ多くの人々が出歩いており、また一気に別な世界へと舞い戻った様な気分になる。先程までは暗がりの中である程度は好きなように物思いに耽る事も出来たが、此処まで戻ればそういう訳にはいかず、周囲の人間に注意を払わねばならない。外にあって完全に安心出来る場所など何処にも無い。だがそれを常に意識するでもなく、視線が自然にその様に動くようになっていく。これは用心棒稼業の超靖に限った事ではなく、通りを行く者全てがそうであろう。人が集まる場所とはそういうものだ。

紅門飯店に辿り着き店の中に入った超靖は、誰も居ない入り口近くの席を何となく眺めた。

（今日は終わるか。よく毎日飲めるものだ）

北辰の男達はもう引き揚げていく。北へ少し行った処の宿にあの者達は居るらしい。また明日の午後には此処に戻ってくるのだろう。いつもの事である。毎日酒を飲んでるのは洪破天も同じである事を超靖も知っているが、それは今、頭には無い。

視界の端に、傳英がこちらにやって来るのが見えていた。

「どうなったの？」

「どうやら今夜から奥様の処らしい。だが……奥様は洪さんが迎えに来るのを待っていたみたいだった。今夜からとは思っていなかったんだろう」

超靖がそう告げると、傳英は顔を顰めて額をさすった。

「兄さんと喧嘩してから本当に疎遠になってしまってるから。こんな重要な事もちゃんと伝えてないなんて、兄さんもどうかしてるわ。意地っ張りだから嫂さんの処には全く近寄らないし」

「喧嘩してるのに、媛は奥様の処に遣るんだな」

「自分の処に置いててもあの子の面倒を見られないからね。紫蘭しらんが二人になっても困るじゃないの」

傳英が不意にそんな冗談を言ったので超靖は笑ってしまう。

「ハハ、それは困るな。しかしまあ、媛はもう少し大人しいだろう」
「分からないわよ。どうなるか」

そこで何となく会話が途切れたので二人は店の広間を見渡した。
一時の騒がしさは治まっていたがそれでもまだ客が多い。今日は二階にも客が結構来ている様だった。

「洪さんは？ もう休んだかな？」

超靖が訊ねると傳英は首を振る。

「帰ったわ」

「帰った？」

超靖は怪訝な表情を浮かべて即座に聞き返してきたので傳英は少し大きく目を見開いて、

「ええ。泊まるように言ったんだけど聞かなくて。あ、それからあの北辰教のお二人様、洪さんと何か話してたわよ？ こう……知り合いたい」

「知り合い？ ……そうか。そうかも知れないな」

「どうしてそう思うの？」

「ん……洪さんは顔が広い」

「まあそうでしょうね。でも……」

「あの北辰の青い衫を纏った男、あれは方崖しやうの鐘」

傳英は意味が分からないという様に黙ったまま超靖を見続ける。

「あれは鐘文しやうぶん維だ。知らなかったのか？ 北辰教七星の一人」

傳英はやはり黙ったままである。だが意味は飲み込めた様で、目には驚きの色が表れていた。この紅門飯店の客達は最近良く見かけるあの北辰の二人の話をよくしている様だったが、傳英はあまり聞いてはいない。とりあえずただの客ではないとは思っていたので他の客が彼らの話で盛り上がるのを止めさせる方だった。だがまさかそのような人物が遣わされているなどとは思っても寄らない事である。

方崖の人間がわざわざ監視役に来るということは、考えていたよりも傳家は危うい状況にあるのではないかという不安がよぎった。

「でもどうして……そんな人が？」

「やはり、殷さんの消息はそれだけ重要な事と考えているのだろうな。それに張る相手はうちと洪さんだ。洪さんの事は向こうも知っているだろうからいい加減な人選はしない。あの鐘文維なら洪さんの相手が出来るという訳だ」

「ねえ。北辰は殷さんが生きていると思える何かを手に入れたのかしら？ 証拠というか——急に態度を変えて探し始めるなんて、そうでないならきつとうちなんて放っておく筈よね？」

「分からない。洪さんは何を話していたんだろう？」

「さあ？ そんなに長くは無かったけど、ただの挨拶って程短くも無かったわ」

「とにかくだ。洪さんを探してくる」

超靖がそう言ってすぐに店を出て行こうとするので、傳英は少しばかり驚いて後を追う。

「探す？ 何かあったの？」

「俺は今、洪さんの家に寄ってから此処へ来たんだ。途中、会っていない」

超靖は足を止めて振り返って言った。

「洪さんも何処かへ寄ってるのかも」

「どちらにしろ洪さんは随分酔っていた。何処へ行ったのか確認だけでもした方がよい。北辰が帰ったのはいつ頃だ？」

「ほんの少し前だわ。洪さんが出てからも暫く居たから、追うつもりは無いんだって思ったんだけれど」

超靖は頷き、また歩き出す。

「兄さんに伝えた方がよいかしら？ あなた一人で何かあったら——」

普段なら洪破天一人探すくらいという事も無いが、今は北辰の存在も気になる。そしてそれが北辰七星となれば尚更不安が募る

というものだ。傳英は傳千尽に伝えて洪破天を探す人手を増やしてもらおうかと考えていた。

「そうだな……。旦那様に伝える必要はまだ無いかもしれない。兄貴に言って数人来て貰えれば充分だと思う」

「分かった。屋敷に人を遣るわ」

「頼む。俺はとりあえずもう一度、洪さんの家に向かってみる」
超靖はそう言い残し、大通りの雑踏にまぎれていった。

規則正しく寄せる波が闇に僅かな音を染み渡らせる。街が賑やかであろうと、人々の寝静まった深夜であろうともそれは変わらない。月が湖面に敷いた光の帯は街から真っ直ぐ東の水平線まで伸びており、光の橋の様に見えて風情があった。

渡るには長すぎる。たまに雲が月の前を通り過ぎて下に掛かった橋を寸断させるのだ。ほんの僅かな間でもその途切れた場所では足場が消えて、異界の口のような底の知れない漆黒の水が獲物が落ちてくるのを待ち構える。

そんな危うい場所に、かろうじて飲み込まれずに済んでいる一艘の小船が浮かんでいた。岸からは遠く、その存在にはまだ誰も気付いていない。幻の光の橋と死の縁。その間を彷徨い続けた。

第十章 九

木々の隙間を仰ぎ見て

あなたのようにだと今夜も想う

天上に燦然と輝く月は

あなたを包む黄金の鱗のよう

わたしはまた地を這いながら

不安に怯えて身をよじる

あなたが天上へと駆け上がるその時に

わたしが今のままである事を

大地を蹴る足は無く

雲を掴む腕も無い事を

少しかすれた微かな歌声が月明かりの下を漂う。傳千尽の屋敷の中ほど、庭を囲んだ回廊に傳紫蘭が一人佇み、肩を小さく揺らしていた。時折月を見上げては息を呑み、それからまた視線を地上に戻し肩を揺らして口ずさむ。

絶望の深い淵にわたしが沈むと

あなたは底に伏していた

わたしは闇に包まれているのに

あなただけが輝いている

月の光は届かないのに

あなただけが煌いている

あなたの足元で揺らぐ穢れた泥でさえ

黄金の鱗に照らされ光を帯びるというのに

わたしの醜い鱗は嫌らしくぬめり

わたしは総身に黒を纏う

ふと遠くの声に耳を傾ける。耳を澄ますと屋敷の正門の方から呼び声が聞こえた。

「少風、来い！」

それを聞くと同時に傳紫蘭は回廊から庭へと駆け下り、建物の角に身を寄せて正門を窺う。門の前に居るのは屋敷の用心棒頭、超謙であった。

「少風、旦那様は？」

超謙は馬少風^{ばしょうふう}に話し掛けている様だがその馬少風の姿はまだ見えない。傳紫蘭は首を伸ばして前を窺い、すぐに頭を引っ込める。馬少風は超謙の居る正門に向かって歩いていった。

「呼んでくるのか？」

「違う。少風、洪さんが何処に居るか探して来い」

「店か家だろう？」

「それが居ないから探しに行けと言ってるんだ。今、靖^{せい}も探してる。俺も後から行くからな。見つければそれでいい。連れて来なくても良いからな。無事なら良いわけだ」

暫く間が空く。

「いいから行くんだ」

馬少風の返事は聞こえない。だが超謙は建物の方へと歩き出し、馬少風は門を出て行くとしている。

傳紫蘭は超謙が建物に入るのを見届けると僅かに腰を屈めて正門へと駆け出した。

正門を出ると明かりは無い。だが月明かりで充分だった。門から真っ直ぐ伸びている道の先に上背があり長い腕を揺らす人影が見えている。見間違えようも無い馬少風の後姿である。傳紫蘭は早足で、しかし慎重に足音を消しつつその背中を追う。だが次の一呼吸ほどで、「あっ」と傳紫蘭は声を上げた。まだ幾らも近付いていないというのに馬少風が振り返ってじっと傳紫蘭を見つめていた。傳紫蘭はその場で立ち止まり腰に手を当てて首を傾ける。

「お馬さん。こう……もっと遊んでやろうとかそういう気にはならないわけ？」

馬少風は傳紫蘭の傍まで戻って来ると、

「今は遊べない」

特徴的な馬面を殆ど動かさずにぼそと答えてから、月明かりを受けて白く浮かび上がっている傳紫蘭の顔を見下ろしている。

「まあいいわ。ねえ、お爺ちゃんがどうかしたの？」

「居ないらしい」

「……何処かで寝てるんじゃない？ 酔っぱらって」

「かもしれない」

「じゃ、探しに行きましょう」

「紫蘭、今は――」

「お爺ちゃん探すのは遊びじゃないでしょ。ほら、行くわよ」

「何かあったら怒られる」

「私はお爺ちゃんが心配なの。私が探すからお馬さんは護衛ね。さ、来なさい」

傳紫蘭は洪破天の孫同然であり心配するというのは当然であるが、今この場でそう思っているかどうかは疑わしい。鼻歌交じりに大手を振って先に行く傳紫蘭に、馬少風は黙って付いて行く。これが、普段よく見かける二人の光景である。

「紫蘭、店に行ってみよう」

馬少風が声を掛けると傳紫蘭は勢い良く振り返り、ばたばたと袖を振る。

「絶対駄目。叔母様に見つかったら帰れって言われるに決まってるもの。そしてお馬さん、あなたも怒られるんだから」

馬少風はしばし傳紫蘭を見つめてから、

「そうだな。止めておこう」

そう言って長い顔を上下に揺すった。

大通りまで出て来た二人はそのまま東淵湖の畔へと向かう。大通りにはまだ人も多いので洪破天を知る者も多いこの場所で一人危険な目に会う事は考えにくく、人気の少ない場所を先に当たる方が良いと考える。大通りを横断して少し先へ行けばすぐそこが湖畔である。

「あっち」

傳紫蘭は南の方角を指差す。そちらには漁に使う小さな船が何艘も繋いであり、その周辺は漁具を置く納屋などが幾つも建ち並ぶ場所だった。

早速、傳紫蘭は月明かりだけを頼りに、だが全く不安がる様子も無く歩いてゆく。

「紫蘭、先に行くな。横に居ろ」

夜には殆ど人の来ない暗がりです。傳紫蘭を好き勝手に歩かせるのは流石に不味いと感じた馬少風は早足で傳紫蘭の真横に駆け寄る。

「お爺ちゃんがこんな処に用がある筈無いわね……。でも事件って大抵そういうものでしょ？ 慎重に探さなきゃ」

傳紫蘭は真面目な顔をして正面を見据えながら歩いている。馬少風は低く落ち着いた声で話し掛ける。

「心配するな。洪さんは大丈夫だ」

「お爺ちゃんが大丈夫なのは当たり前じゃないの。もし酔った勢いで誰かと喧嘩でもしたらどうするのよ。相手が無事で居られないわ！」

引き続き真顔でそう言って歩を早める。馬少風はほんの少し歩幅を広げて傳紫蘭の真横にぴたりと付いて歩いた。

第十章 十

その後は黙々と歩き続けて、整然と並べられている小船の処まで辿り着く。途中、周囲に注意を払っていたのは馬少風だけで、傳紫蘭は相変わらず小声で歌を口ずさみながら歩いていった。

大通りの賑やかさは全く伝わって来ず、ただ明かりが見えているだけ。此処には人の気配は全く無く静寂に包まれている。今夜は風も無い。

「誰も居ない」

馬少風が建ち並ぶ納屋の周辺であちらこちらに目を凝らしながら独り言の様に言う。

「そうね」

傳紫蘭の方はといえば並んだ小船を眺めながらぶらぶらと歩き回るといった感じでただの散歩、人を探しているという様子は全く無い。

「やはり洪さんがこんな所に来るとは考えられん。紫蘭、戻ろう」

全く洪破天とは無縁の場所と思えるこの船着場におかしな所は無く、それも当然だと思う。洪破天はきつと街の方に居ると最初から考えていた馬少風は立ち止まり、先に居る傳紫蘭を見た。さらに先はずっと湖に面した林が続くだけである。ここまで来ればとりあえず傳紫蘭の気は済んだ筈で、飽きてすぐに戻る気になるだろうと、引き返してくるのを待った。

「夜の湖ってなんだか怖いよね」

傳紫蘭は遠くの湖面に目を遣って言う。

「そうか」

「この先の水の下って真っ暗なのよ？　ずーっと下まで。底も見えないし、何か居るかも」

馬少風は僅かに首を傾げる。

「『何か』？」

「そう」

傳紫蘭は湖を眺めたまま、また何かを歌っている様だ。馬少風は待つのを止めて傳紫蘭の傍まで歩み寄る。

「お馬さん」

「ん？」

「お馬さんはもしかしてこの水の上も走れたりする？」

「まさか。沈む」

「……そうよね」

傳紫蘭の小さな声。普段の明るい声とは違って変わって落ち着いたというよりは沈んでいる様な声音。馬少風はそれを特に意外に思ったりはしない。普段の傳紫蘭を知る者なら「何かあったのか」と慌てるのかも知れない。そんな傳紫蘭の佇まいであったが、こんな傳紫蘭も居る事を馬少風は昔から良く知っていた。

何度この身であがいても

淵の底へと沈んでゆく

わたしは水を掴めない

黒い底へと落ちるだけ

そしたらまた這う日々となる

底が確かにあるのなら

その後、沈黙が続く。馬少風も傳紫蘭と並んで湖面に見える月明かりを眺めた。暫くしても傳紫蘭が何も言わないので、馬少風はそ

つと、まだ幼さの残る丸みを帯びた白い頬に目を遣った。

「悲しい歌だな」

傳紫蘭はようやく湖面から視線を動かした。

「知ってるの？」

「いや、今初めて聞いた」

「……これはうんと長い。歌なんだけど……物語かな？　だから、悲しい時もあるのよ」

微かに笑うが、どこか物悲しい雰囲気表情に残っている。

「どこで聞いたんだ？」

「お母様が舞うのを見た事があるわ。もうずっと忘れかけてたけど、最近また思い出したの」

視線は白い月へと向かう。

「媛に教えてた」

傳紫蘭は呟く。

「媛？　……そうか」

馬少風は湖面の方に延びている月光の帯を眺めて納得したように頷く。そしてまた傳紫蘭を見る。

「底で『何か』に出会うのか？」

「え？」

「その歌、底に何か居るのか？」

「底？」

「さっき紫蘭が言っただろう？　この水の下に何か居るかもしれない――。その歌の淵には何か居るのか？　その沈んでいく奴はどうなる？　底は、あるのか？　水の底で這うとは？」

傳紫蘭は月から馬少風に視線を移し、その目を驚いたように見開く。

「まさかお馬さんが歌に興味を持つなんて！　どうかしちゃったの？」

笑っている。いつもの傳紫蘭らしい、満面の笑み。

「しかも一度にそんなに訊くなんて！　もう疲れたんじゃない？」

「そんなに長く喋ってないだろう」

「ハハッ！　ほんと、可笑しいわ」

「そんなに変だったか……」

ひとしきり笑ってからようやく気持ちを落ち着けた傳紫蘭は微笑みながら馬少風の長い馬面をじっと見つめる。

「この歌の淵っていうのは、実際にある淵じゃないわ。水も無い。でも、そこに沈んでいく様な心境だったって事。沈んでいってるのは……女性よ。彼女は底に向かって落ちていくけど――」

傳紫蘭はそこで口を噤む。

「どうした？」

「……説明するの面倒だわ。暇があったら媛が歌うのを聞けば？　きつと……すぐ覚えるから」

「そうか」

馬少風は短く応え、それからまた二人揃って湖面に浮かぶ金色の橋を眺めた。

わたしは闇に包まれているのに

あなただけが輝いている

月の光は届かないのに

あなただけが煌いている

先程の歌の続きの部分ではなかったが、傳紫蘭は馬少風に聞かせる様に小さく歌う。だがそれはすぐに止んだ。

「あれ、何かしら？」

「何だ？」

「ほらこのずっと先に何か……」

傳紫蘭は湖に移った月明かりから少しはずれた暗い部分を指差す。馬少風は傳紫蘭の白く細い指に顔を寄せる様に身を屈めて、その指の向いた辺りに目を凝らした。

「何処だ？」

「ほら！　ずっと先よ！　あの明るい処の少し右手に黒いのがあるでしょ」

「んー？　ああ……あれは……小船が浮かんでいる？」

第十章 十一

遠くに黒く細い影が漂っている。人影らしきものは見えず、どこかに繋ぎ留めていたものが流されたのだろうか。

「人、居ないみたいね」

「見えないな」

「……」

傳紫蘭がじっと馬少風を見ている。

「何だ？」

「あれ、見に行かない？」

「駄目だ」

馬少風は首を振る。傳紫蘭は必ずそう言うだろうと今しがた考えたところだったが、まさしくその通りであった。早く洪破天を探しに戻らねばならず、遊んでいる暇は無い。

「明日、漁に出る者が回収するだろう。此処の船かどうかは分かんが」

面白くない。傳紫蘭は口を尖らせて忌々しげに馬少風を上目使いに睨む。

「此処から流れてあんな処に行くかしら。夕方に此処の人が船を確認してる筈なのよ？　もしかしたらあそこでお爺ちゃんが寝てたりして」

「馬鹿な」

「分からないじゃないの。もしそうだったらずっと見つけれられないのよ？　大騒ぎになるわ。北辰教の人達に連れて行かれたんじゃないか、ってね」

馬少風はもう一度沖に浮かぶ影を見る。そう言われると確かに洪破天がああ船で寝ている様な気がしなくもない。

「……分かった。確かめてみよう。だがまずお前を屋敷に送ってからだ」

「何言ってるの。今よ。今。さ、どれにする？」

傳紫蘭は聞く耳を持たず、早速並べてある小船の周りを歩きながらどれに乗るかを吟味しはじめ。真剣に選んでいる訳ではなく、そんな格好を見せているだけだ。

「駄目だ、紫蘭。こんな暗くなってからお前を船になど乗せられん。落ちたらどうする？」

「は？ 何言ってるのよ。私が落ちるわけ無いでしょ。そんな鈍臭くないんだから」

「紫蘭」

「お馬さん早くして。お爺ちゃん見つけるのが遅れるのよ？ あそこに居るかも知れないし居ないかも知れない。どっちにしても確認しなきゃ次行けないじゃない。もしかしてお馬さん、泳げないとか言わないわよね？ 私は泳げるわ。万が一落ちたとしてもね？」

もう傳紫蘭は馬少風の制止など全く聞かない。馬少風は毎日の様にこんな傳紫蘭に接しているのだ。その分、諦めてしまうのも早かった。

「分かった。じっとしてるんだぞ」

「あのねえ、子供じゃないんだから」

馬少風は何も言わず、ただ苦笑する。

「その船に縄があるわね。それ持って行きましよ。引っ張って帰って来なきゃ。乗るのはこれ」

傳紫蘭は自分の目の前の小船を指差している。馬少風にはどれも同じに見えたが、何を言ってもそれに乗ると言い張るに違いない。その小船には櫓が一本載っているだけで他には何も無い。馬少風は別の船にあった縄を載せ、舳先に廻って水に向かって押した。

傳紫蘭はさっさと船に乗っている。そうしないと衣服が濡れてしまうからだ。船が水に入って浮かんだ処で馬少風も船に上がるが、こちらは腰の辺りまで濡れとなった。

船が出てすぐに傳紫蘭は櫓を漕ぎたがり、馬少風から奪うように

して暫く動かしたが「重い」と言って早々と交代となる。馬少風の漕ぐ櫓の軋む音が規則正しい拍子を刻み、夜のしじまに浸透していく心地よい響きを聞きながら傳紫蘭は吐息を洩らして月明かりを眺めた。

「怖くないか？」

「え？ 何？」

「この下に、何か居るかも知れないぞ」

馬少風の言葉に傳紫蘭はきよとした顔を向ける。だがすぐに横を向いて膝に頬杖をつく。

「……居るわけ無いじゃないの」

「そうか？」

「そうよ」

傳紫蘭は暗い水面をぼんやりと眺めている。怖くは無い。だが船から身を乗り出して水の奥底に目を凝らす気にはなれない、そんな黒さだった。

二人は黙り込み、ぎいぎいという櫓の音と船が湖面を切っていく水音だけを聞きながら進む。先に見えていた黒い影ははつきりとした船の形になっていた。どうやらその船は今二人が乗るものと殆ど同じ大きさで造りもほぼ同じ。先程の船着場に並んでいたのではないかとも思えた。

「誰も居ない？」

傳紫蘭が腰を上げ、船べりに手を掛けて前方の船を覗こうとするがはつきりとは見えない。

「居なさそうだ」

そのまま真っ直ぐ近付いていく。やはり人の姿は無い。だが船の中は空でもなかった。何かが載っている。馬少風はゆっくりと船の速度を落として真横に付けた。傳紫蘭は背を伸ばして船の中を覗いたが何も言わずに身体を退き、そして黙ったまま馬少風の傍に身を寄せる。

「これ、何よ……」

微かに声が震えている。馬少風は傳紫蘭の両肩を抱く様にしてその場に座らせる。

「……俺が見よう」

二人の目の前に漂っている小船には、麻の袋を裂いて開いたものが広げられていた。その下に、何かがある。丁度、人が布団を頭まで被っている様に細長く盛り上がっていた。

馬少風がその長い腕を伸ばして船を寄せる。だがそれだけでは麻袋には届かない。

「止めて！ そっちに行かないで！」

馬少風が足を上げて乗り移ろうとしたところで傳紫蘭が引き止める。馬少風の衣服を掴んで引っ張った。

「届かない」

「ほら、これで」

傳紫蘭は櫓を掴んで外そうとする。馬少風は頷いて櫓を手にとった。

馬少風が櫓を前の小船にのぼすと傳紫蘭は半身を馬少風の後ろに隠して覗き見る。そこに何かがあるのか、この月明かりならはつきりと確認出来る筈である。

「紫蘭、俺が確認するからそっちに座っている」

馬少風は伸ばした手を休めて自分の腰の辺りにしがみ付かんばかりにしている傳紫蘭に言う。

「……何でよ？ 別に怖くないわ。こっ、怖いものかどうか、見なくちゃ分からないじゃない」

明らかに怖がっているのが見て取れる。馬少風は再び櫓を伸ばす。ほんの少し麻袋に引っ掛けて自分だけが覗き見ればそれで済む事である。傳紫蘭が徐々に首を伸ばして覗き込むので馬少風はわざと背で視界を塞ぐように動いた。櫓の先を麻袋に潜り込ませ、僅かに持ち上げて馬少風は目を凝らす。麻袋が月明かりを遮っているのはつきりとしなない。僅かな沈黙。そして、

「それって……人……よね？」

か細い声が背後で聞こえたが、馬少風はじっと前を凝視し続けた。

第十章 十二

「……何か言ってよ」

「……人だ」

馬少風は短くそれだけ答えたが、少し間を空けて付け足す。

「洪さんじゃない」

「当たり前でしょ！ 馬鹿言わないで！」

「すまん」

傳紫蘭は馬少風の背後から前へと出て来たが、まだ真横にぴたりと張り付く様にして船べりに並ぶ。

「それ、剥いで」

「その必要は無いだろう。この船を曳いて戻って役人に届けるだけだ」

傳紫蘭は馬少風を睨みつける。

「私が怖がるから？ 馬鹿にしないで。こんなの何度も見てるんだから。さあ早く！」

何が出るか分からず不安だったが、人だと分かればもう別にどうという事は無い――。馬少風は傳紫蘭の言いそうな先程までの態度の説明を想像する。

（慣れる程何度かは見てないだろう？）

船の中にあつたのは麻袋に覆われた人間の死体であつた。馬少風が櫓を使って持ち上げた麻袋の下に見えたのは乱れた黒い髪と黒っぽい額。それだけであつたが、ただ眠っているのではない事はすぐに分かった。

傳紫蘭は今までも人の死体を見た事がある。今の江湖では毎夜何処かで数十人は殺されているなどと言われる程、治安は悪化している。程度の差はあれどそれは国中の何処も同じ様なものである。

ただ、傳紫蘭は毎晩出歩いて常に死体を発見している訳ではない。東淵は歓楽街を中心とした生きている街であつて、そこかしこに放

置された白骨が散らばっている様な荒涼とした土地とは違う。殺しにしろ行き倒れにしろ、それらは速やかに処理される。話を聞いて飛んでいけばたまにだが見る事は出来るが、それは本当に『たまに』であった。そして傳紫蘭を含む街の住人は大抵、『たまに』人の死体を目に見ている。

馬少風は傳紫蘭を見返しながら、ふと思い出した。一年程前に傳千尽の屋敷に運び込まれた十数人にのぼる無残な死体。体中が切り刻まれ、臓物が溢れ出した見るに耐えない異様な光景。それを傳紫蘭は目に見ている。どう思ったかを傳紫蘭の口から聞いた事は無かったが、かなりの衝撃を受けた事は想像に難くない。

あの時も傳紫蘭は強がって見せていた。何でもない、という振りをして。だがあの時は屋敷の人間が皆集まって周りに居た。今はこの暗い湖の上にただ二人だけだ。こんな処で死体と対面するなど、馬少風でさえ『怖い』という感情とは少し違うが動悸の高まりを覚えるのだ。

見せて良いものではないと分かりきっている事だが、

(無視してこのまま戻るか――)

そう考えていると傳紫蘭が口を開いた。

「どうせお役人だって大した事も掴めずに処分するだけじゃない。だったら見ても良いじゃないの。船でこんな処を漂ってるって事は殺されたのよね? 切られたのか、殴られたのか、あ、毒盛られたとかだったり。何か持つてるかも知れないし、手掛かりがあるかも」
傳紫蘭は普段からよく喋る方だが、目の前の麻袋の下を覗いてから若干饒舌さが増した様だ。

「ほら、こっち。下の方よ。他に何か載ってないかしら?」

傳紫蘭は死体の腰辺りを指差している。なるほど、何も顔を見なければいけない訳ではない。馬少風は場所を変えて麻袋の別の場所に櫓を差し込んだ。掛けられている麻布はかなり大きな袋を開いたものであり、死体の足よりも下、船の艫ともの方まで掛かっている。だが先程覗いた頭の方はまさしく布団を被せている様な感じで髪が完

全に隠れるといった辺りまでしか覆われていなかった。

先程と同様に櫓を持ち上げる。死体はごく普通に衣服を身に着けていた。だがどうやら全身が濡れている様で黒い。暗くてはつきりしないが、血が衣服全体に染み込んでそう見えている様である。

「変だな」

馬少風が呟く。

「何？ どうしたの？」

傳紫蘭は努めて平常の声を出していたがその手はしっかりと馬少風の着ている短衣の腰辺りを掴んでいた。

「剣を持つてるが腰の鞘に入れてある」

「おかしく無いわ」

「殺されたのにか？」

馬少風が傳紫蘭に顔を向ける。直後、互いの鼻先がかする程接近しているのに気付き、馬少風の方が思わず仰け反るように避けた。

普段ならその様子を見て傳紫蘭が笑うところだが、傳紫蘭は急に遠ざかった馬少風の馬面をじっと見つめている。少し間をおいて「あっ」と小さく声を出す。

「そうよね。剣を持つてるならそれを使って抵抗するに決まってるし、剣を戻したのは殺した奴にしか出来ないわ。そいつは剣を腰に戻してやってわざわざ船に載せて流した……。何故かしら？ 隠すどころかすぐに誰かに見つかるわ」

「俺達が見つけた訳だが、見つけさせる為——か」

傳紫蘭は馬少風の腕を取ってしがみ付く。

「……私達に？」

「いや、違う。多分」

馬少風は櫓を掴んだまま死体の載る船を見つめている。

「このまま俺達は役人に届けに行く。死体が船で流れて来たという話はすぐに広がるだろう。どういう死体だったかも噂にのぼる。それを聞く奴の中に居るんじゃないか？ この者を殺した人物が、『殺した事』を知らせたい者が……。見せ付ける為、か？」

「ややこしいけど、解ったわ」

「想像だ」

「続けましょ」

馬少風が再び櫓を動かし傳紫蘭はその先端を注視して検分を再開する。馬少風は当初、傳紫蘭にあまり見せまいとして櫓を僅かずつしか動かさなかったが、死体は特に惨い状態では無いらしいのと明かりが無い事もあって徐々に麻布を大きく持ち上げるようになる。そうして中に月明かりを導いた。

「身体の正面を派手に切られてる」

「見えないわ」

「腹の処から衣服が避けている。ずっと上まで――」

馬少風は櫓で死体を撫でる様に頭の方へ向かって動かしていく。

「本当ね……胸の辺り、凄い血が溜まって――」

どん！ と不意に船底を槌か何かで叩いた様な音が鳴る。傳紫蘭は不意に鳴ったその音に思わず身体を仰け反らせた。声は無い。そのまま仰向けになって倒れそうなところを馬少風が咄嗟に肩を抱き止めた。

「紫蘭！」

傳紫蘭は目を閉じている。馬少風が身体を揺するが全く反応が無く、完全に気を失ってしまっていた。馬少風も音は聞いた。何の音だったのかと周辺を見回すが、自分達の乗ってきた船には櫓と縄しか積んでおらず、櫓は今も馬少風の手にあるのだ。音を出す様な物は何も無い。死体の載った方の船をもう一度見る。死体は相変わらず麻布が覆ったままである。ふと舳先（おし）を見ると、何やら黒く丸い物が転がっているのが見えた。

（あれが転がったのか？ この人物の持ち物だったのだろうか？）

馬少風は傳紫蘭をそっと船底に寝かせ、その転がった物の方へ身体を寄せて目を凝らす。直後、先程の傳紫蘭程ではなかったが馬少風も不意に身体を強張らせて固まってしまった。

転がっている黒いそれはまさしくこの人物の持ち物であり、先程

までは正しい位置にあった筈の、人間の頭部であった。

第十章 十三

麻布の下から転がり出た死体の頭には流石に驚いてしまったがすぐに平常心を取り戻す。胴から離れた人の頭部を目にするのは初めての事では無い。

「紫蘭？」

馬少風は傳紫蘭の傍に戻ってもう一度肩を揺さぶったり頬を軽く叩いてみるが依然として反応は無く、脈が多少乱れてはいるものの呼吸は正常であることを確かめると再び死体の船の方へ近付いた。

（急いで戻らねば。これはどうする？ 放置は……不味いか）

馬少風は周辺をざっと見渡した。他に船の姿も見えず、此処は街から見える程の位置でもない。つまり誰も見ていない訳だが、恐らく明日にはこの船と死体は誰かに発見されるだろう。今、馬少風らが此処に居る事を誰も知らなくても、夜に船で出て行った者がいる事に気付く者がいないとは断言出来ない。やはり役人に届ける方が良さそうだ。

（……ほぼ毎日、漁の船が出ているのに昼間発見されていないという事は、船で流されてまだ間もないという事か？）

馬少風はふと気付き、再び周りに目を凝らした。死体を載せて湖に流した者が何処からか見ているのではないか……。そんな不安を感じる。だが、変わった様子は何も無く、微かな波の音がいつまでも漂ってくるだけで、少なくとも馬少風の視界の範囲に別の眼は存在していない様に思われた。

馬少風は持ってきた縄を手に取り、自分達の船と死体の載った船に両端を括り付ける。結び目の不恰好な、ただ引っ掛けただけと思える括り方であったがとりあえず引っ張れば良いだけと思い、すぐに括り終えた。

それから馬少風は死体の船の方に移る。転がっている頭部を無造作に両手で拾い上げ、胴の傍に戻すべく足で麻布の端を捲る。

だが麻布は厚く硬いので少し捲つてもすぐに戻ってしまう。いらついた馬少風は足を麻布の奥の方まで無理やりねじ込み、乱暴に蹴り上げる様にして麻布を死体の胴から剥いだ。船は揺れているが片足で立つ馬少風は全く平気な様子でそのまま足で麻布が戻らない様に折り曲げた。

胴の部分が露になった死体は思ったよりも酷い状態であった。衣服をちゃんと身に着けているので先程櫓を使って横から覗き見た時には気付かなかったが、身体を中心に付けられた長い傷はかなり深く、もう少して背に届いて完全に縦に割れるのではないかというほど刃物が奥まで入れられた様だ。戦いの最中にここまでなったのでは無く、恐らく死後に遺体に対して再び刃物を使ったのだろう。どういう意図があるのか不明だが、下手人はかなり悪辣な性格な様だ。馬少風は脇の辺りに頭部を下ろしてまた転がり出る事が無い様に位置を確かめる。それから麻布を元に戻そうと腕を伸ばしたところ、ふと死体の傷に違和感を感じて手を止めた。死体の腹に顔を近づけて見てみると、本来あるべき臓物が取り除かれて代わりに丸められた毛皮の様な物が入れている。馬少風は躊躇する事も無く死体の腹に手を入れた。

血がこびり付いた黒い毛皮だったが、血は完全に乾いている。ふと死体の全体を眺めてみるがこの血も殆ど乾いていた。船に載せられたのはごく最近でも殺されてからはかなり経っているのかも知れない。

再び手に取った毛皮に視線を戻してゆっくりと手の上で開いてみる。中から出て来たのは皺だらけになった古い紙を巻いた物だった。少し厚手の質の悪い物で、端がぼろぼろになっていた。

(これは一体何だ?)

毛皮を死体の上に置き、紙だけを取り上げて月明かりに晒す。少し小振りの本の表紙だったのだろうか、紐で綴じる為であろう穴の跡が窺える。そして文字。しかしかなり薄くなっていた。

「秘笈……」

比較的濃く残っている題字らしき中央の一文の一番下を読む。それからその上の部分に顔を近づけた。

「天……秘笈……」

馬少風は題字を読み取ろうと持った紙の角度を変えながら目を凝らす。

「天……蛇……秘笈？」

一番上が『天』であるのは読めた。一文字分空けて『蛇』ではなにかと思える文字。そして『秘笈』と続く。二文字目はどうしても読めなかった。だが馬少風は目を見開いて呆然と見つめていた。

（天……棲蛇！ まさか『天棲蛇』の秘笈だというのか？ 何故こんな物が此処に……いや、何故これが存在している？ 誰が書いた……？）

紙を裏返す。だがそこには何も書かれていない。これが元々書物であつたとしても此処にはこの表紙しか無く、内容は全く知る事が出来ない。

紙を手にしたまま死体の周辺を探る。覆っていた麻布を全て端に遣り、死体の衣服の中から体の下までくまなく調べる。だが他には何も見つからなかった。腰にある剣まで手に取って眺める。その剣もごく普通の物で何の細工も無さそうだった。

（無いか。これは……洪さんに見せてみよう）

紙を丁寧に折り畳んで懷に仕舞う。麻布を元に戻して死体を完全に覆うと傳紫蘭が寝ている方の船に戻った。

（目覚めるのは帰ってからの方が良いな。……誰かに見つかったら何と言おうか？）

誰にも見つからずに傳紫蘭を屋敷へ連れ帰るのは困難なので目を覚まして欲しいところだが、死体が近くにあるというこの状況のままでは怯えてしまうかも知れないと考えた馬少風は静かに櫓を手に取り、そっと漕ぎ始める。進みは遅い。だがどうしようもなく、馬少風は陸を目指して黙々と漕ぎ続けた。

「洪破天どの？」

大通りの中心から北に少し行った処の、とある屋敷の裏手で波が静かに打ち寄せる音を聞きながら目を閉じている老人に男が声を掛ける。男は北辰教の鐘文維、老人は超靖や馬少風らが探している洪破天である。人の心配をよそに気持ち良さそうに眠っているところであった。

「フフ、洪破天どのが見当たらないと探している者が居りますぞ」

「……うん？ おぬしらでは無く……か？」

「傳千尽どのの用心棒です。我々があなたに何かするとでも思っているのでしょうか。まあ無理も無い事です」

「のう、鐘よ」

洪破天は薄目を開けて正面の東淵湖を見遣る。

「方崖の居心地はどうじゃ？ 此処でこんなつまらん役を任されるよりはましかな？」

鐘文維は洪破天の傍らで立ったまま同じく湖面を見ている。紅門飯店で一緒に居た黒衣の男は今一緒に居る様である。

「ハハ、何かありましたかな？ お悩みが？」

「いやなに、少しばかりじっとしておるのが嫌になってきてな。おぬしらは退屈じゃろう？ 他所へ行きたいとは思わんか？」

「……我らの存在意義は教主と共に在る事こそにあるのです。方崖に教主が居られるのなら方崖に。他に行かれれば従うまでの事」

「今、此処に居るではないか？ 教主は方崖じゃろう？」

「私としては不本意ですが。殷汪どのに教主の身を脅かすつもりなど更々ありますまい。ならば我ら七星が動く仕事ではありません」

「……教主の命では無いのか」

「フ、張新ちやうしんどのです」

第十章 十四

「ふむ、張新か……」

洪破天はゆっくりと顔を持ち上げ傍らに立つ鐘文維を見上げた。

「儂は会った事が無いが、どんな奴じゃ？」

「それは……」

鐘文維は洪破天を見返しながらしばし考え込む。

「難しい質問です」

「難しい？ 何故じゃ？」

「いや……教主を補佐し太乙北辰教を取りまとめる事に熱心であるという事は確か。元々教主の教育係の様なものだったので方崖でも比較的強い立場にあり、色々と精力的に動いておるようすな。それ以外はこれと言って特徴の無い、教主に従順である様に見える男です」

「……難しくはないのう。意外じゃな」

洪破天は鐘文維の瞳を更に覗き込む様に首を伸ばす。鐘文維は眉を持ち上げ、

「意外、とは？」

「その張新、教主に次ぐ地位にある訳ではないのか？ おぬしは今、張新の命に従っておると言うが、その口振りでは心外な様じゃな」

「……心外ですな。私だけではなく七星は今の状態を快く思う者は一人も居りません。九長老も一部を除いて戸惑っている事は確か」
「儂が聞いても良い話かのう？ 後で口を塞がれねば良いが」

洪破天は笑いながら顔を正面に戻して目をしばたかせた。鐘文維はじつとその様子を見つめている。

「洪破天どのには……話しても良い様な気がしたもので」

「ほう？」

「深い意味はありません。今は……」

「思わせ振りのう？ 何じゃ？ 儂と殷の関係からか？」

鐘文維は黙ったまま洪破天を見つめ続けている。その視線に気付いた洪破天は眉を顰めて手をひらひらと舞わせる。

「何じゃ何じゃ。儂は今酔うておるからのう。頭が回らん」

「ハハ、私も多少酔うております」

鐘文維はようやく視線を洪破天から外し、湖に移る月に向かって目を細めた。

「張新は――」

洪破天は酔っていると言いながらも話を止めようとはしなかった。腕を組み、正面を見据えている。

「殷を嫌っておったか？」

「……恐らく。しかしそれほど強い感情を抱くまでには至らなかったとは思いますが。殷汪どのが方崖に在ったのは最初の二年程」

「ハッ……皆、ばれておったのか。殷も詰めが甘かったか」

洪破天が言うのは殷汪が夏天佑という替え玉を用意して方崖を降りた事である。張新も知っていて殷汪に北辰で幅を利かせる様な意思は無いと判断し、それからは殷汪を思い煩う事は無かったと、鐘文維の言葉を解釈した。だが、鐘文維はすぐにそれを否定する。

「いえ、知ったのはつい最近の事。故に『殷汪を探せ』と言い出したのです」

「ほう？ どうやって知った？ 千尽の屋敷で夏天佑を匿った事に気付いたか？」

鐘文維が既にその事を知っていると考えているのか、洪破天は隠す事無くそう言って訊ねた。

「それよりも先に、劉毅が張新に話したのです。劉毅だけは、気付いていた」

「……劉毅か」

「あれはかなり前から知っていた様ですな。殷汪どのが先主に招かれて方崖へ来た時からあの者の興味は殷汪という人物のみに絞られていった……。余談ですが、今、劉毅は方崖に居りませぬ。殷汪どのを探しに出ておりますので」

「殷が『もう北辰には関わらん』と言ってもやはり捕まえるつもりか？」

「劉毅だけは北辰の事など頭に無いでしょうな。あれはただ、殷汪どのが何処に居るのか分からなくなる事だけが心配なのでしょう」

「おかしな事を……。まさか男の癖に惚れておるのかのう？」

「そうでしょうな」

鐘文維は即答する。洪破天は面喰らい、

「本当か？ いや、まあそういう話は江湖にいくらでもあるのだろうが……」

「ハハ、そういった情愛とは違うものです。恐らく。ご存知かと思いますが我ら七星……いや、当時はその呼び名は無く六名でしたな。先主が殷汪どのを招いた折、腕試しと称して殷汪どのと武芸の勝負をさせました。しかも我ら六名同時に殷汪どのの相手をする様にと果たしてどちらの腕を試すおつもりであられたのか……。結末はご存知でしょう？」

洪破天は頷く。殷汪がこの鐘文維を含む教主陶峯選りすぐりの六名を同時に相手しながら難なく下したという話は瞬く間にこの東淵周辺までも広がり、そしてそんな人物が新たに太乙北辰教に加わると聞いて大いに盛り上がっていた。

「我々は屈辱を感じたのは確かなのです。しかし、あそこまで力の差を見せ付けられれば流石に認めざるを得ず、対抗しようなどという意識はすぐに潰えました。殷汪どのも我らを圧倒したからといって見下す様な言動はしなかった……。そんな中、劉毅だけが少しばかり往生際が悪かったと、まあそういう事なのです」

「ふむ、いつか遣り返す為には居なくなつて貰つては困るという事か」

「そういう事です」

「しかしまあ、分からんでも無いか」

「それからもう一人、周婉漣も方崖を出ておりますな。こちらは張新の命のある前から。今思えば彼女も殷汪どのと夏天佑という男の

違いに気付いていたのかも知れませぬ」

「七星はばらばらじゃのう？ 教主を放っておいて良いのか？」

「良い訳が無い」

鐘文維は項垂れて頭を振った。

「今の状態は決して良く無い……洪破天どの」

「ん？」

「あなたとこうして話す機会が訪れたのは私にとってはこの上無き幸い」

「何の事じゃ？」

不意に変わった鐘文維の態度に、洪破天は怪訝な表情を浮かべる。鐘文維は改めて洪破天に向かい正対する。

「洪破天どのは此処にじっとしているのが嫌になってきた——と仰られましたな？」

「うん？ ……まあ、そうじゃ」

「この東淵を出たとして、どちらへ？」

「そんな事は……分らん」

洪破天は厳しい表情を作り正面を睨む。そもそも出ると決めた訳ではなく、そう言ったつもりも無い。実際、そう簡単に決められる事ではない。決められない今の状況が洪破天を思い悩ませていたのである。

（媛児……）

ふと洪破天の脳裏に梁媛の姿が浮かぶ。王梨が用意したという今まで着せた事の無い様な華やかな衣装を纏い、満面の笑みを溢れさせていた。

第十章 十五

「……洪破天どの。私は殷汪どのをどうしても探したいのです」

「何を言っておる？ そんな事は知って——」

「張新とは違います」

「何？」

半ば睨む様な目つきで洪破天は鐘文維を見遣る。

「捕まえるのではなく、殷汪どのに戻って頂きます。方崖へ」

鐘文維も真剣な眼差しを返す。洪破天はそれを見据えたまま立ち上がった。

「勝手にすればよかろうが。儂を巻き込むつもりか。方崖のごたごたが儂と何の関係がある？」

鐘文維は殷汪を方崖へ戻して張新を抑えるつもりで居る。張新が教主の補佐役と称して出張る事に七星は不満を持ち、長老衆も一部を除いて困惑している——これが本当なら方崖は分裂しようとしている。張新派がどれほどのものかは分からないが現時点で七星を動かしているという事から優位にあるのは間違いない。若き教主は張新の手の内にある——。とにかく、いずれ内紛となるかもしれない火種が燻っている事は確かな様だ。

東淵の傳家と洪破天は確かに殷汪と縁が深い。しかしそれ以外に北辰教と特別な関わりがあった訳では無かった。それがここへ来て方崖のいざこざに巻き込まれるなど慮外な事と言わざるを得ない。

「殷汪どののはあなた方を……放置し過ぎた」

鐘文維は声を抑え、静かに言った。

「……」

「もう少しあなたや傳千尽どのに配慮した行動を取っていれば——」

「黙れ！」

洪破天がこれ以上無いという険しい表情で鐘文維の言葉をはね除けた。

「何が分かるというのじゃ！ あれの何が！」

「洪破天どの？」

鐘文維は微かに眉を顰める。

「よいか？ あれはただの百姓じゃ！ 咸水の貧乏人で、儂もそうじゃ！ 方崖なんぞに連れて行って何をさせたかったのか知らんが、何を期待しておる？ ハッ！ 教主だろうが張新だろうが知った事か！ 儂ら二人は余所者じゃ！ 放っておいて貰おう！」

洪破天はそう言い放つと袖を翻して歩き出す。鐘文維がその言葉の意を理解する間も無い。

「洪破天どの！ お許し下され！」

鐘文維はすぐに追いかけて洪破天の前に立ち塞がると頭を垂れた。

「洪破天どのの仰る通り、私は殷汪どのを理解しておりませなんだ。何分、私が長く接しておりましたのは夏という全くの別人。軽々に物を申しました事、深くお詫び致します」

突然の鐘文維のへりくだった態度を怪訝に思い、洪破天の昂った感情は急速に静まってゆく。普段の悠然と構えた七星鐘文維とは思えない物言い。今度は洪破天の方が眉を顰める番であった。

「ただ私は今一度殷汪どのに会い、話をお聞きたいと願っておるのです。これは張新の意向とは無縁のもの。七星や九長老の総意でもあります。ただ私一人の願望なのです」

「……それで、殷の居場所を教えろと？ フン、知らんわ」

「いえ、そうではなくただ……洪破天どのが此処東淵を出られたのなら、私にはそれを追って此処を離れるという口実が作れます」

「口実？ おぬし、追う役目はまた別の者になるとか申しておったのではないか？」

「本来ならばそうですが、そのくらいの事なら私は無視しても構わぬのです」

「ならばいっその事、全てを無視して勝手に行けば良いではないか？ 劉毅も周婉漣も出ておるのじゃろうが」

「それは……」

洪破天は溜息をついて鐘文維の顔を眺める。

「そこまで勝手に動くのは気が引ける、とでもいうのか？」

「情け無い話ですが、どうも私は劉毅や周婉漣の様な思い切りに欠けておる様です」

鐘文維は目を伏せて力なく首を振る。こんな弱々しい姿を他で見せた事は一度も無い。

洪破天は殷汪との繋がりから北辰七星とは多少の面識があったが、この鐘文維の姿には驚いてしまった。

「おぬし……一体どうしたというのじゃ？」

「教主の許しを得ず方崖を離れるのは七星としてあるまじき事。しかしながら、今を逃せば今後は動けぬ様になるやも知れませぬ」

「何故じゃ？ 教主に言うてくれれば良いではないか。張新が探しておるのに教主は了承せんとでも？」

「張新は……我らをも警戒し始めておるようなのです。張新抜きで教主にお目通りする事は困難になってきておりまして」

「……訳が分からん。おぬしらは常に教主の傍にあるのが役目じゃろうが」

「無論、そうでなければならぬ。しかし張新は――」

「あー、もう良い。儂に理解出来る事ではないわ。方崖の事など知らん」

「洪破天どの……」

鐘文維の眼差しは憂いを帯び、口元はまるで悔しさを噛み締める様に結ばれている。

（これは……余程じゃのう……）

少し聞いただけでは理解出来ないほど北辰教内部が複雑に動いている事自体は、鐘文維を見れば明らかであった。この男が必要以上に気を揉む性質でないのであれば。

「方崖の事は知らんが……殷をこのまま放っておくつもりも無い。いや、違うのう」

「違う？」

「あれは昔と何一つ変わってはおらん。今も何処ぞで気ままにやっておるじゃろう。……儂も暇になってきた。昔の様に殷と居れば今よりは楽しめるじゃろうて。此処ですることも無いしのう……」

鐘文維は何も言わずにじっと洪破天を見る。洪破天はいずれ東淵を出る氣でいる——そう感じた。

「しかしのう」

洪破天が大通りに向けて歩き出すと、鐘文維もすぐに付いて歩く。「北辰が千尽とその家族を監視しておる以上、これも放ってはおけん」

「それは、形だけの事。殷汪どのがこの東淵には長らく近付いていない事は分かっております。いや、そんな事よりも殷汪どのと傳千尽どのは義兄弟であられるとか」

「別にそう決めた訳でも無いが、まあそれに近い間柄と言っても良い」

「それほど深い縁がおりなので、張新も手は出せない。ましてや危害を加えるような事は。張新は殷汪どのを恐れておるので。殷汪どのがその氣になれば、たった一人でも方崖の深奥まで容易く押し入って来る。そして……自分の前に立つ」

「フン、もし本当に傳家に手を出す様な事があれば、それくらいはするな。殷一人だけではないぞ。儂も共に乗り込んでやるわい。おぬしら七星が立ちほだかろうが構うものか」

洪破天は顔を鐘文維に向け、不敵の笑みを浮かべる。すると鐘文維は表情を変えずに頷いた。

「張新は『教主』ではありませぬ故、我ら七星の与り知る処ではありませぬな」

第十章 十六

「……おぬし、喋り過ぎてはおらんか？」

鐘文維の話した事は全て、本来ならば決して外に洩らしてはならない筈である。加えて張新などどうなろうと七星は関与せずとまで言つてのける。何処まで本当なのか定かでは無いが、この話を洪破天が誰彼構わず言いふらすなどとは露ほども考えていないらしい。

「私は洪破天どのや傳千尽どのに對してなんら敵愾心を抱いてはおりませぬ。この街では色んな噂が立っておりますが、それは違ふという事を知って頂きたかった。……殷汪どのにも」

二人は大通りまで戻る。洪破天が紅門飯店を出た頃に比べればようやく人が減つてきたといったところ。通りに軒を連ねる商店の中には既に店仕舞いしている処も見受けられ、朝から続いた喧騒が徐々に静まってくると今度はそこかしこに居る酔客の遠慮の無い大声が方々で響くようになる。

そんな中、男達の話し声が洪破天と鐘文維の耳に届いた。

「殺しがあつたつてよ。南の船着場だ」

「なんだつて？ 何処の奴だ？」

「それは知らん。ほれ、傳の旦那とこの、馬——」

洪破天が即座に男達の許へと駆け寄る。隣に居た鐘文維も遅れる事無く続いた。

「おい！ 殺しじゃと？ 『傳』がどうした！」

不意に背後から怒鳴りつけられた男達は飛び上がらんばかりに驚いて振り返り、

「こっ洪さん……。あ、いや、海で死体が見つかったとか、なんとか」

「誰のじゃ！」

「い、いや、分からねえ。馬、馬少風が見つけたらしくて」

「……少風が？　いつじゃ？」

「ついさっき役人が行ったところ……」

洪破天は男を睨み続けている。変わりに鐘文維が落ち着いた声で訊ねた。

「南の船着場、だな？」

「あ、あ」

男達は洪破天の隣に居たのが北辰七星鐘文維であることによりや
く気付いて改めて驚き、皆一様に口をぽかんと開けたままだ。

「洪破天どの、行きましょう」

洪破天が鐘文維を見遣ると、

「私もこの街で何が起きたのかを把握しておかねばなりませんので」
洪破天は頷く。丁度その時、こちらに駆け寄ってくる者が居た。

「洪さん！」

見れば超謙、超靖の二人である。傳家の用心棒が二人揃ってやつ
て来るのを見て洪破天は眉を顰めた。

「何じゃ！　何があった！」

超謙と超靖は洪破天の許まで来ると、二人共ちらと鐘文維を見て
から再び洪破天に顔を向けた。超謙が口を開く。

「少風の奴が海で死体を見つけたんだ。身元は分からないがこの辺
の奴じゃない様だ。船に載せられてた」

「船？　何故それを少風が見つける？　こんな暗くなっておるのに
何をしておったんじゃ？」

「いや、まあ特には何も……ぶらついてただけで」

超謙は言葉を濁す。

「それで、お前達二人揃ってどうしたのじゃ？　少風が見つけただ
けと言うのならどうという事はあるまい？」

馬少風が見つけただけで傳家の誰かが事件に巻き込まれたのでな
いのであれば何も慌てる必要は無い。洪破天の声の調子は普段通り
に戻った。

超謙に代わって今度は超靖が話し始める。

「それが、死体の載った船は沖の方に浮かんでいたらいいんです。少風は船を出してそこまで行き……」

「わざわざ自分から面倒に近寄るとは……全く馬鹿な奴じゃ」

「ええ、まあ。で、沖に船が見えただけで他の船を出して見に行くなど怪しいと……」

「疑われておるのか？」

「今、役人が船着場へ向かっていますが……疑われる可能性は高いかと」

「よし。儂も行くぞ」

「はい」

鐘文維を含めた四人は早速、南の船着場へと向かった。洪破天の足取りは普段と変わらず、酔いは覚めてきている様である。

「海か……。少風は釣りでもするのか？」

「いや、やらない」

東淵湖を『海』と呼ぶのはこの東淵の人間だけであろう。東淵湖は広く、どんなに空気が澄んでいても対岸を望む事は出来ない。水平線の先、遠く東にある本物の海とは分離した湖であるというという話を信じていない者までいる。海と呼んでも特に支障があるわけでもない。

洪破天と超謙が話しながら先頭をいき、鐘文維と超靖が続く。超靖は隣の鐘文維が気になってしょうがない。実は超靖は洪破天を此処で会う前から見つけていた。だが鐘文維が共に居るのに気付き、ずっと二人の様子を窺っていたのである。近付き過ぎれば鐘文維が気配を察知するかも知れないと考えた超靖は随分離れた処から二人の姿を確認していた為、何を話していたのかは全く知らない。

（我らの取り越し苦労であったのか？　ただの顔見知りというだけでは無いようだが……）

洪破天にとっては親しい間柄であったとすれば鐘文維を警戒していたのは自分達だけであり何とも馬鹿らしい。だが完全に裏が無いとも言えず、それを考えると訳が分からなくなる。一度洪破天の口

から北辰教の動きをどう見ているのか訊いてみなければならないと超靖は考えていた。

船が並んでいるその中ほどで、松明を掲げて数人の男が集まっていた。一艘の小船を取り囲んで中を見下ろしている。そこから少し離れた納屋の前に、屈んでいる馬少風の姿があった。すぐ傍には地面に座り込み目を閉じて納屋の扉にもたれ掛かっている傳紫蘭が居る。洪破天らは驚いて駆け寄った。

「何故此処に紫蘭がおるんじゃ！」

「少風！ まだ戻ってないのか！ 早く紫蘭を連れて行けと言ったろう！」

洪破天と超謙が同時に声を発した。超謙は慌てて説明する。

「あ、いや、紫蘭は気を失っているだけだ。死体を見ちまって――」

「少風！ 紫蘭を連れまわして何をしておった！」

洪破天は馬少風に詰め寄りその襟首に掴みかかる。洪破天には馬少風と傳紫蘭が二人してこのような明かりも何も無い処へ何をしに来たのか、真っ当な理由が思い浮かばない。超靖がすぐに二人の間に割って入る。

「洪さん、実は俺達、洪さんを探してたんです」

馬少風の変わりに弁明する。そうしなければこの状況では馬少風にはまた別の嫌疑がかかってしまう。

第十章 十七

「儂を探す？ 何故じゃ？」

「それは……店を出られた後、家に戻っておられないので何か……」
超靖はそう言いつつ、傍に居る鐘文維の様子を肌で窺う。視界の端にある鐘文維の身体は全く動かず、気配に変化は無い。

「何処へ立ち寄ろうと儂の勝手じゃ！」

「まあ……そうですが」

「馬少風！」

不意に背後から声が掛かる。先程この場に到着した役人で、顔の下半分を髭で覆い、既に酒が入っているのか赤ら顔で胴間声を響かせている。何処の街にも居そうな、典型的な小役人といった感じの中年の男である。

「お前、あの死体には触れておらんだろうな？」

「……ああ」

馬少風は立ち上がり役人に応じる。いつも通りの寡黙さで何も変わってはいなかった。

「お前は何故沖の船を見に行こうと思った？ この暗さで、わざわざ船を漕いで行くとは随分と物好きだな。そもそも此処から見て船だとよく気が付いたものだ」

「丁度、月明かりの真下で見えた。船の様に見えただけではつきりとは分からなかった」

「普通、放っておくのではないか？ お前は漁師でもないのにそこまで気になったか」

役人は明らかに不審を抱いている様子で、先程から疑いの眼差しで馬少風の表情を観察している。だが馬少風の長い顔は全く変化しない。そしてそれがいつもの馬少風である。役人も馬少風の事は知っているのこの様子については特に変には思わないものの、とり

あえず他にする事が無いので馬少風への尋問を続けるしか無い。死体の方には全く手掛かりとなるものを見つけられなかった様である。殺されたのは東淵の者では無く、それはまず間違いないであろうというのがこの場に集まっている者達全員の見解であった。

鐘文維が死体の載った船の方へと歩き出す。そこで初めて鐘文維が居る事に気付いた役人は驚いた様子で馬少風を放ってすぐに後を追った。

「鐘文維様ではありませんか！ まさかこのような処にお見えになるとは——」

「見せてもらうぞ」

鐘文維が歩きながらそう告げると役人は追従の笑みを浮かべた。

「どうぞどうぞ。そりゃもう惨いもんですよ。腹を搔っ捌かれて、首は胴から離れてます。全く酷い」

役人はへらへらと愛想笑いを浮かべ、態度と言葉が全く合っていない。

北辰の縄張りと呼ばれる街にも当然の事ながら朝廷から官吏が遣わされている。ただ、実質的にその街を支配しているのは北辰教である。役人の数は少なく形だけの配置であり、果たして朝廷と太乙北辰教のどちらに仕えているのか分らないという程、派遣された役人達は北辰教に対してへりくだり、定期的に景北港方崖けいほくこうへ挨拶に伺う事も欠かさない。北辰七星鐘文維は方崖の幹部であり、役人などよりも遥かに偉いという事になっていた。ちなみに本拠、景北港に至っては今では朝廷の影響は皆無である。この国で最も特異な場所となっていた。

鐘文維は役人には目もくれず船の傍らに立つと腰を屈めて死体を検分し始め、船を取り巻いていた者達は邪魔にならないように身を退いて鐘文維のする事を観察する。

「何も持っておりません。あ、腰の剣以外は。これでは何も分かりませんなあ。誰も見た事の無い奴でして——」

役人が一人で喋っている。鐘文維は黙ったまま死体の血に触れた

り衣服の中を覗いたりしていた。

「殺されてからかなり時が経っているし下手人は隠す気が無い。馬少風は偶然発見したただけだな」

「はあ……そうですね。船で殺したならその場で沈めれば良いだけですからな」

「……早々に持ち帰って検分するのだな。恐らく何も分からんだろうが」

鐘文維は屈めていた上体を起こし、馬少風らを振り返る。丁度、洪破天がこちらに向かって来るところだった。

「……知らんかう」

洪破天は船の中に置かれている首を一瞥すると呟いた。

「他所で殺され、捨てられたのでしょうか」

「さも意味ありげにここまで傷つけた遺体を船に載せて流した……どうせ気の触れた奴が一人面白がっておるだけじゃろうが。見せびらかすのにこいつを知る者が一人も居らんでは話にならないか。フン、馬鹿な奴じゃ」

洪破天はこの死体に興味はあまり持てなかった様で、それだけ言うともた戻って行く。

「ほれ、さっさと帰るぞ。紫蘭を早う――」

洪破天が集まっている傳家の者達に言うのと同時に、鐘文維が役人に告げる。

「何かおかしな事が分ければ報告しろ。馬……あれはあの傳紫蘭と共に居たのだな？」

「はい。そう言っておりますが……」

「おかしくは無いな。馬少風はただの発見者で、関係は無い。これが本当に此処の者で無いのかを確かめてから、後は適当にこの件も死体も早々に処理するのだ。良いな？」

「ああ、分かりました」

何度も頷く役人その他の見物人を置いて鐘文維は傳家の者達を追った。

周りに居る者達、そして役人自身も鐘文維の命令口調に違和感を感じたりはしない。此処ではそれが普通の事なのだ。鐘文維の言葉から『何でもない事だからさっさと片付けろ』という意味合いを聞き取った役人は早速周りの男達を使って死体を運ぶ算段を始めた。

「えらくあっさり解放されたな」

超謙が後ろを振り返りながら言う。超靖も役人の方を眺め、

「さっさと行こう。これ以上面倒なのは御免だ」

「そうだな。後は屋敷に戻るまでに紫蘭が起きてくれれば良いんだがな。旦那様には知られないように……」

「すまん」

馬少風がぼそっと謝る。未だ目を覚まさない傳紫蘭を背負って歩いていった。

もっとしつこく役人の尋問を受ける事になると予想していたが何故か役人はそうはしなかった事を皆、疑問に思っていた。だがとりあえずこの場はさっさと離れてしまいうに限る、と傳千尽の屋敷へと先を急いだ。

「少風、今後は紫蘭が何と言おうとこんな夜に出してはならん。良いな？」

洪破天は傳紫蘭の白い顔を見つめつつ馬少風に言う。先ほどは馬少風を怒鳴りつけたが、本当は傳紫蘭の方が駄々をこねて馬少風を連れまわしていたという事は分かっていた。今までが常にそうであるし、沖に船を見つけそれを見に行こうなどは、いかにもこの傳紫蘭の言いそうな事である。

「洪破天どの」

追って来た鐘文維が洪破天に声を掛けた。

「ん……世話になったな」

（世話？）

超靖は洪破天の言葉を聞いて二人の様子を窺ったが、そこには何

も読み取れない。

「私はこれにて。……是非またお話を」

鐘文維がそう告げると洪破天は黙って頷いてみせる。鐘文維は拱手して礼を施すと、暗い夜道を一人帰って行った。

第十章 十八

鐘文維が去った後、超靖と超謙が洪破天の傍に歩み寄った。

「あの鐘どのは、我らの監視役では無いのですか？」

「……監視しておるじゃろうが。いや一緒にあって助かったのう。あれがあの小役人に口を利いたんじゃろう」

超靖は首を傾げたが、すぐに先ほどの死体発見の事かと納得した。馬少風は関係無いとでも言ってくれたのだろうか。何故そんな事が鐘文維に分かるのか疑問だが、とにかくすぐに解放されたのはありがたかった。

「洪さん、私はもっと、こう……北辰は敵なのではないかと考えておりました」

「敵？ 敵じゃと？ おかしな事を言うのう」

洪破天は眉を顰めて超靖を見返している。超靖はその様子を見て、洪破天と自分たちの北辰に対する意識がはっきりと違うという事を知った。

「傳の家も、そしてお前達も北辰の敵になどならん。向こうにとっても何にもならんわい」

「しかし……連日あの鐘どのが店にやってくるのは――」

「気にするな。お前達は今までと変わらず普通にしておれば良い」

「洪さんはそれで良いのですか？ 鐘どのは主に洪さんを監視している様ですが」

「構わん」

洪破天はあっさりと言ったのける。それはよく知った者であるからだろうかと思っただけだ。

「鐘どのと長く話しておられた様ですが――」

洪破天は超靖の言葉を無視して傳紫蘭の方を向き、

「おい、紫蘭。もう目を覚ましても良からうか？」

そう良いながら傳紫蘭の頬と首の辺りを手の甲で触れる。すると

その直後、傳紫蘭は小さな呻き声を上げて顔を顰めた。

「おっ？ 本当に目覚めるとはのう。紫蘭、気分はどうじゃな？」

傳紫蘭は馬少風の首の辺りに頬を付けたまま目を閉じて呻いている。ただ寝ていた訳ではないので心地良い目覚めとはいかない様である。超謙、超靖の二人がすぐに傍に寄り、傳紫蘭を囲む。

「紫蘭、洪さんはこの通り無事見つけた。すぐ屋敷に着くから、今日はもう皆休もう」

超謙が明るい声を出して笑顔を見せる。傳紫蘭は暫く黙ったままだったが、ゆっくりと手を伸ばして隣を歩いている洪破天の腕に触れた。

「……お爺ちゃん」

「ん？」

洪破天がその手を取ると、傳紫蘭はやはり黙ったままでぼんやりと洪破天を見つめている。

「何じゃ？ まるで幼子の頃に戻ったみたいじゃな」

「何だか……頭が……重い」

「戻ってすぐ横になって休めば大丈夫じゃ」

「私……船に乗って――」

「全く見当違いだったな。洪さんはもっと上^{かみ}の湖畔で寝てたんだぞ？ 全く人騒がせな。ハハッ」

超謙が笑って言う。普段なら洪破天の事をこんな風に話したりはしない。洪破天も多少寝かかってはいたものの殆どは鐘文維と話していたのだが超謙の言葉に調子を合わせた。

「フン、悪かったのう。儂はどんな場所でも寝られるんじや。囲いも屋根も要らんわい。まあさすがに身体がここまで枯れてくると柔い敷物くらいは欲しいがのう」

「……お爺ちゃん」

「ん？」

傳紫蘭は洪破天と繋いでいる手を小さく揺らす。

「うちに泊まっていけば？ ……みんな居るから」

「んん……」

洪破天は言葉に詰まる。だが、傳紫蘭のその小さな声はとても心地良かった。

「……そうだ。私の部屋で寝たらいいわ。ねえ、みんな私の部屋で寝たらどう？ 面白そう」

「面白そうってなんだ？ 寝ちまったら気が付けばもう朝なんだぞ？」

超謙が言うと傳紫蘭はゆっくりと顔を持ち上げて超謙の方を向き、また馬少風の背に頬を乗せる。

「いいじゃない。それでも。きっと、良く眠れる……」

傳紫蘭はまだ頭がぼんやりとしている様で、普段に比べるとかなりゆっくりと喋った。

「旦那様に知れたらどうなる事やら……」

超靖は少し大袈裟に肩を竦めてみせる。

「お爺ちゃんが居ればどうって事無いわ。ねえ、そうしましょうよ。……お馬さん、あなたもよ」

馬少風は傳紫蘭が目を覚ましてからまだ一度も口を開いていない。ただ黙々と傳紫蘭を背負い歩いている。

「ねえ、聞してる？」

馬少風からは何の反応も無い。傳紫蘭は頭で馬少風の後頭部を軽く叩く様にゆっくり動かす。

「紫蘭？」

ようやく馬少風が声を発した。

「なあに？」

「ん？ いや……お前が俺を呼んだのかと思った」
そう言うと馬少風はまた黙ってしまう。

「おい少風、紫蘭の話聞いてなかったのか？」

超謙が話し掛ける。が、返事は無い。

「少風、どうした？」

今度は超靖が馬少風の前に回り顔を覗く。流石にそれにはすぐに

気付き、

「ん？ 何だ？」

「いや、こっちが聞きたい。何か考え事でもしてたのか？」

「いや……」

馬少風の反応は鈍く、超靖は溜息をつく。

（全く……お前がそんなでどうする？ 紫蘭の気分を紛らわせるのはお前の役目ではないか）

「紫蘭」

馬少風がぼそりと言う。

「ん？」

「着いた」

屋敷の門をくぐると傳紫蘭は馬少風の背中から降り、最初は少しふらついたが何とか自室まで歩いた。下男の話によると傳千尽はいつもとより早めに休んだらしく、傳紫蘭が出ていた事は知られてはいなかった。

第十章 十九

「ほら早く。寝台が要るわ。運んで来て」

傳紫蘭は一旦、自分の寝台に身を投げ出したがすぐに身体を起こし、超謙らに向かって言う。身体はだるそうだがその命令口調だけは回復している。

「紫蘭。俺達は流石に此处では寝られん。洪さんの分だけ持つてくるからな」

超謙がそう言うのと超靖、馬少風も共に出て行こうとする。此处には空き部屋が幾つかありそれぞれ寝台が備わっているのです、近いところから一つ運んでくれれば洪破天も休む事が出来る。

「あ、お馬さんは置いてって」

「……紫蘭。駄目だ」

馬少風が振り返って首を振るが、傳紫蘭は何も言わずにじっと見返している。

「少風。まあ言う事を聞いてやらんか」

洪破天は傳紫蘭の寝台の傍にあった椅子に腰掛け、上体を伸ばして震わせている。紅門飯店でかなり飲んでいたのでそう簡単に酔いは覚めない。此处へ来た途端、眠そうな表情に変わっていた。

「洪さんが居るんだからまあ大丈夫だな。少風、お前は此处に居ろ」
超謙と超靖の二人が部屋を出て行った。

流石に寝台を新たに二つ運び入れると部屋はかなり手狭になり、洪破天が腰掛けていた椅子も脇に片付けられた。だが傳紫蘭はこのいつもと違う雰囲気を楽しむ様で、その表情に笑みが戻ってきた。

「紫蘭、もう眠いわい。儂はもう休むぞ？」

「うん。じゃあ寝よう！」

「寝ようと言うのに元気じゃのう……」

洪破天は呆れた様に言ったが、内心は安堵していた。いくら普段

は快活で元気に振舞っていても年頃の娘。ふとした事で心に傷を負ってしまうというのは聞く話である。

（若い娘は大事に育ててやらねばいかん。大事に……）

「でも、なんだか今日は疲れたわ」

傳紫蘭は寝台に横になり天井を見上げて独り言の様に言った。

「儂も疲れた。少風、紫蘭を背負って腰は大丈夫か？　もう昔の様にはいくまいて」

「……ああ、重くなった」

「重いですって？」

「俺が歳を取って腕が細くなったから全ての物が重くなったという意味だ」

三人は同様に天井を見ながら話す。徐々に言葉が減って行き、やがて小さな寝息に変わっていった。

早朝、空が僅かに白み始めた頃に洪破天は目覚めた。余程体調を崩しているのではない限り、必ずと言って良いほど夜明け前に目を覚ます。前日に酒をたらふく飲んでいようと、とりあえず起きるのである。爽快な朝とはならない事の方が多いがこれが習慣であった。

隣に目を遣ると、傳紫蘭は背中を丸めて眠っている。

（ふむ、大丈夫じゃな）

悪い夢を見てうなされるといふ事も無かった様だ。規則正しい呼吸を感じ取ると洪破天はまた安堵した。

そのままそっと寝台を降りて立ち上がる。目の前には馬少風の寝ていた寝台があるが、そこに馬少風は居なかった。もう明け方なので起きていてもおかしくは無い。洪破天は肩に手を遣りつつ欠伸をしながら部屋の外に出てみた。

寒いと言う程では無いが寝台で温まった身体に少し冷えた空気が心地良い。身体の節々を念入りに動かしてから目を閉じて氣息を整える。すがすがしい空気が肺を満たしていく。

暫くそうしていると、人が近付いてくる気配を感じた。洪破天は

目を開く。

「洪さん」

「少風か。早いな」

馬少風はいつもと変わらぬ変化の無い表情で洪破天を見ていた。寝起きの顔という感じでも無く、もっと暗い内から起きていたのかも知れない。庭を囲んだ回廊の欄干にもたれて辺りを眺めている洪破天の隣に立ち、一緒に庭を眺める事も無くそのまま口を開いた。

「殷さんは今、何処だろう？」

「何じゃいきなり？　こんな朝っぱらから」

「昨日見つけた男、殷さんと関係があるかも知れない」

「何じゃと？」

馬少風の突飛な言葉に洪破天の細めていた目が一気に開く。起きたばかりの会話でまさか殷汪の話になるとは思ってもみず、しかも昨夜の事件と関わりがあるかも知れないなどと、寝ている間に夢の中で思いついた新しい冗談かと呆気に取られて馬少風を見た。

「あの死体に、これが――」

馬少風は懷から一枚の紙をそと取り出す。古く黄ばんだ少し厚手の紙。馬少風はそれを折り畳まずに懷に大事に持っていた様である。

「あの男の持っていた物か？　お前……これを黙って抜き取ったのか」

洪破天はそれを受け取り、視線を落とす。

「読めんではないか……」

「天棲蛇」

「何？」

「天棲蛇秘笈と読める」

「てん……本当か？」

眉を顰め、文字に顔を近付けて目を凝らす。

「……誰が書いた？　まさかこんな物があるとは、聞いた事無いぞ！」

自然と声の音量が上がり、辺りの静けさもあって声が響き渡った様な気がした。すぐに口を噤んで傳紫蘭の部屋の気配を窺う。馬少風がそっと部屋を覗く。

「まだ寝ているな」

「少風、これだけか？」

「ああ。他にあの男の持ち物は剣だけだったがそっちは何も変わった事は無かった」

「天棲蛇剣……信じられん。今頃になって出てくるとはのう。いや、待て。殷はこれを『書かれていない』と昔から言っておったんじゃぞ？ お前もそれは聞いておったじやろうが」

「俺も驚いた。だから本物かどうか気になる。だがそれだけしか無い」

洪破天は裏にも目を遣るがそこには何も無い。表にうつすらと題字の一部が残るだけだ。

「洪さん。この街であんな死体と一緒にそれが出てくるといふ事は、やはり北辰も絡んでいるんだろうか？ 天棲蛇という言葉自体、知る者はかなり少ない筈だ。昨日の男を殺した奴は天棲蛇剣を知る誰かと関わりがあつて、その誰かはこの街に、居る？」

馬少風の表情は相変わらずだが声に僅かな焦りの様なものが含まれているのを洪破天は感じ取った。

「……居るではないか？ 儂とお前じゃ」

「殷さんがこの街に、もしくは近くまで来ているという事はあるだろうか？」

「何とも言えんが恐らくそれは無かろう。あとは北辰か……今は居らんじやろうな」

洪破天は眉を顰めた状態で馬少風の顔を見上げる。

「天佑はもう、居らん」

第十章 二十

「天佑……」

馬少風が呟く。昨夜、『天棲蛇』というこの名が頭に浮かんだ時、真っ先に思い出したのが夏天佑の姿であった。殷汪と名乗り、北辰七星の劉毅と対峙したあの夜。

『^{ぼく}穆ご先輩の天棲蛇——』

劉毅に天棲蛇という名だけを告げ、そして死んだ。

（あの時、天佑は劉毅に、殷さんには敵う筈が無いから追うなど言った。『天棲蛇』は……そうだ……穆ご先輩の天棲蛇剣が失われて、もう殷さんには敵う相手は存在しない。当然、劉毅では殷さんの相手にはならないと、劉毅に言いたかったのだ——）

「少風、どうした？」

洪破天の声で馬少風は我に返った。

「北辰の劉毅が天棲蛇という言葉は知っている筈だ。まだ覚えているなら」

「劉毅じゃと？ 何故知っている？」

方崖から逃げてきた夏天佑を連れて、^{りよくこせんがぼう}緑恒千河幫の^{しゅふじん}朱不尽らと共に南へ向かった時の事は当然、洪破天にも伝わっていたが、夏天佑と劉毅の会話など細かい事を話した事は無かった。馬少風は夏天佑が『天棲蛇』の名を劉毅に向かって喋った事を洪破天に教えた。

「ただ、死ぬ直前に『穆ご先輩の天棲蛇』という言葉を口にしただけで殆ど会話にもなっていないから、劉毅には何の事か分からなかったと思う」

「ふむ。穆ご先輩、か。劉毅は穆どのの事など知らぬじやろうな。しかし『天棲蛇』と続けば色々想像は出来るか……」

二人は暫く沈黙し、それぞれ思いを巡らしていた。

「洪さん、ちょっと超謙の処へ行かなければならん」

馬少風が不意に思い出したように言う。

「ん？ ああ……」

「それは洪さんが持っていてくれ」

洪破天が頷くと馬少風は再び戻って行った。超謙ら用心棒達はどう起きているのだろう。こんな朝早くから何の仕事があるのかは知らない。

洪破天は手に持っていた紙を懷に仕舞い、傳紫蘭の部屋へと戻った。傳紫蘭が目覚めた時に誰も居なければ寂しがる様な気がして、起きるまで部屋に居る事にする。日が昇っても起きなければ起こせば良いと思っただけ、

（まあ、好きなだけ寝かせてやっても良いか）

と、傳紫蘭の寝顔を眺めて考え直した。

天棲蛇——この名は全くと云って良いほど知られてはいない。洪破天は殷汪と馬少風以外の者が口にするのを見た事が無い。傳千尽は殷汪が話すのを洪破天と共に聞いていた筈だが、武術に関する事には深く興味がある訳ではなく、今も覚えているかは分からない。殷汪、傳千尽と共に江湖をさすった際には各地の武芸、門派について知り、渡世を送る武芸者達とも交流があったが、やはり剣技なり諸般の武芸の中に天棲蛇なる名は聞かれなかった。

『天棲蛇というのは親父どのが面白がって付けただけで、正式な名称なんかじゃない』

殷汪はそう語っていた。洪破天はまた寝台に横になり目を閉じ、殷汪と話した時の事を思い浮かべた。

『天の蛇、という話は今でも東涼周辺では聞く事が出来る』

殷汪は天棲蛇劍について話し始める。

『東涼……洪淑華の黄龍門じゃな？』

『東涼で聞けるといふその天の蛇の話は単なる物語で、武芸とは殆ど関係が無いな。若かりし頃の洪淑華にまつわる話が伝わってる』
『知らんのう』

首を傾げる洪破天。黙って聞いているだけだった傳千尽が笑い出

す。

『洪兄は本当にそういった話には全く興味が無いんだな。洪女侠とかつての兄弟子、可子慮かしりよとの悲哀の恋物語。有名だぞ？ その話だろう？』

傳千尽に頷いてみせる殷汪。

『有名じゃと？ 知らんもう』

さらに首を捻る洪破天に殷汪は話を続けた。

『今伝わる天の蛇の話というのはそっちの話で、武芸の事は殆ど出てこない。ちなみに洪淑華の剣と黄龍門の剣は全くの別物だ。それが故に黄龍門の弟子だった洪淑華は安県あんけんを追われる羽目になったんだからな。武芸に関しては端折ってあるが悲哀の物語ってのはそのあたりの話だ』

『安県を追われたのは僕も知っておる。ならば洪淑華の武芸の方を天棲蛇と呼んでいるという事かのう？』

『まあそういう事だ。ただ、そう呼んだのは親父どのただ一人で、しかも正式に名付けた訳でもない。他に呼び名は無いから俺もそう言っているだけだ』

『洪淑華自身は自分の武芸に名を付けなんだったのか？』

『伝わってないな。武芸書として記した事も無い。親父どの洪淑華のものを更に発展させたが武林に喧伝する気は更々無かったから名を付けなかった。天棲蛇とは洪淑華と可子慮の話から持ってきたんだ』

『なるほどのう。しかし……東涼黄龍門は既に無くおぬしの養父、穆どのも亡くなられた今、その天棲蛇剣はおぬしか見た事無いのじゃろう？ もうどうしようもあるまい？』

『知る者は僅かに居るんだ。親父どのの域に達する事が出来るかどうかは今のところ望みは薄い』

『誰じゃ？』

『悪いな。名を挙げるのはまずくてな』

『……そうか。ま、別に構わん』

名を挙げられぬというのは自分も知っている様な高名な人物だろうかと考えつつも洪破天は深く追求する気は無かった。この時はまだ殷汪という人物を知ってからあまり時が経っていない。同じ咸水の村に住みながら殆ど接する事は無かったのである。傳千尽の方は咸水の頃から親しくしていたらしかった。

『おぬしが知っておるならおぬしがその天棲蛇剣を修練して穆どのの域まで高めれば良いじゃろうが?』

『……フ、俺はかつての洪淑華さ。天棲蛇の剣は俺も使える。だが俺は親父どのの天棲蛇剣を超える武芸を己の手で創る事を目指している。だが親父どのはもう居ない……。俺の望みは往年の穆汪ぼくわうい威と対峙する事。どうやっても叶わんのだな』

「……お爺ちゃん?」

小さな声が隣の寝台から聞こえた。傳紫蘭が目を覚ましたようである。

「天井見つめてどうしたの?」

傳紫蘭は体を起こし目を擦りながら言う。

「いや、ぼうつとしておっただけじゃ。良く眠れたか?」

「うん。あら? お馬さんは?」

「何やらもう仕事があるようじゃぞ」

「つまらないわ」

傳紫蘭は寝台から足を降ろして座る。洪破天も起き上がると腕をあげて大きく伸びをしてみせた。

第十章 二十一

いつもの事ながら特にする事も無い洪破天は屋敷に留まり傳千尽と会った。傳千尽は常に忙しそうにしており出掛ける事が多いが、洪破天は今、傳千尽が具体的に何をしているのかはあまり良く知らない。元々葉を扱う稼業でこの東淵に流れて来た当初もそれで細々と生計を立てていたが、今では成功を収めて東淵の傳家と言えはこの街の新たな顔役となりつつあり、傳千尽の仕事は昔とは随分と様変わりしている事は確かである。

洪破天がこの傳千尽のやる事をあまり深く知ろうとしないのには彼なりの理由があった。だが洪破天の中にある複雑な心情から来るそれは他人にはよく分からないものかも知れない。

「媛を迎えに行かなかったのか？」

傳千尽は珍しく出掛けずに居間でくつろいでいた。洪破天の記憶の中で最も古い傳千尽は痩せてあまり血色の良くない男であったが、今では胴回りがかつての姿からは想像もつかないほど大きくなり、少なくとも見た目は傳大人の呼び名に遜色は無いと言えるほど変化している。洪破天はその傳千尽の真向かいに座り、雑談していた。

「梨妹に全てを任せる。儂は邪魔になるだけじゃ」

「洪兄、何故そんな風にばかり考える？ 前はそんな事はなかっただろう？ 何があった？」

「何も無いわい。昔から、変わっとらん」

「いいや、儂には分かる。妙によそよそしくなってきたておるではないか。洪兄、言わせて貰うが、これは儂には我慢ならん事だ」

傳千尽は語気を強めて洪破天をじつと見る。その言葉に偽りは無く、咸水よりずっと共に暮らしてきた洪破天は傳千尽にとって特別に近い存在だった。洪破天も殷汪も、自分と同様に突然家族を失い、共に国中を彷徨ったのである。何事も無く平凡に暮らす一家などよりもずっと濃い結び付きを傳千尽は感じていたのだ。それがここへ

きて洪破天は妙に自分に遠慮する様な事を言う。今はまだ些細な変化であったが傳千尽は嫌な予感めいたものを感じていた。

「媛については何度も言ったが洪兄の娘でもあり、もう儂の娘でもある。あれを育てる事は当然の事」

「全て任せると言っておるじゃろうが。遠慮しておるならこんな事頼まん」

「それなら！　自分は邪魔だとか言うな！　邪魔な事などあるものか！」

不意に傳千尽が怒りの声を上げた。見ればその目が潤んでいるではないか。洪破天は呆氣に取られてしまった。

「千尽、お前……？」

「やはり……あれか？　北辰の者がうちに来るようになったのが原因か？」

俯いて頭を抱える傳千尽を見て洪破天は顔を顰める。

「何がじゃ？」

「儂が何も気付いておらんとでも？　洪兄も、そして……殷も。儂の処に居たくなかったのだろうか？」

（……それと北辰がどう繋がると言うんじゃ？）

傳千尽がいきなり何を言い出したのか良く解らない。そもそも何故いきなりこれほど感情的になっているのかも洪破天には想像がつかなかった。

「……馬鹿な。儂なんぞお前と居らんだらとうに飢えて死んでおるわい。儂はこの東淵に来てからというもの、お前に頼っておるばかり——」

「それで良いではないか！　儂らは家族だ。いちいちそんな事を考える事自体が間違っている！　儂はこの街でなんとかうまくやって楽な生活が出来るようになった。赤の他人ならいざ知らず、洪兄も殷も共に居て楽をすれば良いのだ！　儂が良いと言うんだから何の問題も無からうが！　何の問題も！」

傳千尽は真剣な眼差しで洪破天を睨みつける様に見ている。洪破

天は視線を逸らした。

「……殷の奴も、遠慮していたと？」

「そうだ。そうでなければ方崖へ行くなどあいつが言うような事ではない。まだ何処ぞへ放浪を続ける方があいつの言いそうな事だ。あいつは……北辰で良い身分になれば儂がこの街で色々やり易くなるなどと考えたのだ」

「あれがそんな気を使うかのう？」

「フン、深くなど考えてはおるまい。ただ漠然とそんな気がして教主の招きに応じたのだ」

「千尽、考えすぎじゃろう？」

「洪兄は、北辰が自分を張っているから気にしておるのではないかな？ 儂らにも累が及ぶと」

「はて？ 奴らは儂を張っておるのかのう？ 儂だけではあるまいが。殷に関係のある者……お前も同じじゃろう」

洪破天は鐘文維と話して北辰は特別、傳家そのものに注意を払っている訳ではないという事を知っている。特にあの鐘文維はさっさと東淵を離れたいとまで言っていた。それを説明をしても良かったのだが話しが長くなり面倒なので明かす事はしなかった。

「そうだ！ 洪兄だけでは無い。儂らも同じだ。儂は……殷も洪兄も、どうも儂に気を使い過ぎる様な気がしてならんだ！ もっと好き勝手すれば良い。今や儂は大金持ちだ。もっと遊びたいと言えはいくらでも金を出してやるし、媛の面倒を見る事にしても何でもない事だ！」

流石にこれは乱暴過ぎる。話の脈絡にも微妙にずれがあり、昂った感情に任せて言っているに過ぎない事は明らかである。

「千尽よ。儂がお前に遠慮などという殊勝な心の持ち主に見えるかな？ 儂はただ、勝手に連れてきた媛兄をお前が嫌な顔もせずになんと言ってくれるのをありがたく思っておるだけじゃ」

「ありがたがるのがいかん。こんな当たり前の事を洪兄が気にするな」

洪破天はもはや苦笑いを浮かべるしかなかった。どうもこの傳千尽はいつもとは違う様だが、それにしてもやはり傳千尽の気持ちは嬉しかった。

「旦那様」

部屋の外から女の声が呼び掛ける。

「そろそろ参りませんと……」

傳千尽がその声に応じる様子が無いので、洪破天は立ち上がった。

「仕事があったのか。邪魔したのう」

「だから邪魔ではないと言ってるだろう！ 待たせておけば良い！」
何の仕事であるのか聞いていない洪破天は誰を待たせて良いのかも分からない。

「……ハア。あー、そうじゃ。昨夜は媛の処には行っておらんしのうち、顔を見に行くかの。梨妹に怒られるかのう？」

「何故あれが怒る？ 構わん。好きなだけ行けば良い。娘の顔を見るのに留め立てする権利など誰も持つとらん」

「ハハ、まあそうじゃな。では、行って来よう」

洪破天はそう言って部屋を出て行く。入り口には傳千尽を呼びに来た下女が控えていた。自分が帰れば傳千尽はまた忙しく出掛けて行く筈だ。

「そうじゃ。紫蘭は少し体調がすぐれぬ様じゃ。寝ておればどうと
いう事も無さそうじゃからそつとしておくのが良からう」

「全く、いつも遊び呆けておるからだ。……何とかせねばいかな、あれも」

傳千尽の言葉の調子が普段通りに戻っている。洪破天はその顔を眺めつつ、

（遊び呆けておれば儂の様になるからのう。お前もそれでは困るじやろう？）

そう思ったが口には出さなかった。

第十章 二十二

洪破天は一度、傳紫蘭の部屋へと戻るが、予想通り中はおぬけの殻だった。昨夜運び込んだ寝台は無くなっており、恐らく誰かを呼んで片付けさせたのだろう。

（全く……じっとしておらんのか）

洪破天は独り言ちたが、傳紫蘭はいつも通りであり心配する必要は無さそうである。

屋敷を出ようと正門に向かうと、門の処に客であろうか旅装束の男数人に、傳千尽と屋敷の下男、そして傳紫蘭の姿が見えた。

（ハ、紫蘭の奴、千尽に見つかりおったか）

洪破天はにやつきながら門へと近付いていく。すると傳千尽と下男は客の横を通り過ぎて門を出て行ってしまった。

（ふむ、千尽の客では無かったか？）

「あっ、お爺ちゃん」

傳紫蘭が歩いてくる洪破天に気付いて駆け寄る。

「どうした？」

「あの人達、お馬さんに用があるみたい。ずっと遠くから来たんだって」

傳紫蘭は不躰に堂々と客人を指差している。

「少風に？」

洪破天は眉を顰めた。先頭の男がこちらに向かって恭しく礼をする。

（少風の知り合いのう……）

本来何でも無い事なのだが、過去、馬少風を訪ねて来たという人間を見た事も聞いた事も無いのに加えて馬少風が意味深長な紙切れを腹に持った死体を発見したばかりなのもあって、洪破天の目には僅かながら警戒の色が宿る。

（六人……皆、少風の知り合いとでも言うつもりかのか？）

「お爺ちゃん？」

「ああ、少風は何処じゃ？」

「お父様はお店だろうって言ってたけど」

「そうか……」

洪破天は男達の方をじっと見据えながら歩み寄った。先頭の男は背筋を伸ばして抱拳し、再び洪破天に向かい礼を施す。

「私、呂州の孫^{そんれい}伶と申します。こちらにお世話になっている馬少風とは昔馴染みでして、彼が呂州^{りょしゅう}に居た頃、親しくしておりました。所用がありこの東淵まで参りましたので訪ねた次第にございます」

「ほう、呂州とな。後ろの方々も、同じかの？」

洪破天は後ろの男達にも目を遣りつつ応じる。馬少風の昔の知り合いにしては明らかに若すぎる男が二人居る様だ。

「この者達は私の仕事仲間。この者も――馬少風とは面識がございません」

孫伶は後ろに居る大きな体躯と褐色の肌を持つ男を指し示す。

「それがしは樊^{はん}樂^{がく}と申す」

「……南方より参られたか？」

洪破天はその肌を見遣りながら訊ねた。樊樂と名乗った男とその両脇に居た二人は着ている服は普通だがかなり日に焼けた肌をしており、この辺りでは殆ど見る事の無い風体であった。呂州ではこれほど日に焼ける事は無い筈である。

「……ハハ、いや、方々で商いをしておりましてな。南に長く滞在していたのでこんなに日に焼けてしまいました」

樊樂はそう言って笑顔を作るがそれにしてもいかつい顔つきである。それを洪破天はじっと見つめたままだ。

「ねえ、お爺ちゃんも一緒に行きましょ」

傅紫蘭が袖を引っ張った。

（本当にただの知り合いなら良い。しかし違えば……？ 少風にしか確かめられんな。先に知らせておくか）

「ん、ああそうじゃな。……少風は別の処に居るようじゃ。付いて

来られよ。紫蘭、お前は先に行って知らせて来るが良い。呂州の……」

「孫でございます」

「ああ、孫どのが訪ねて参られたとな」

「どうして？　一緒に行ったって変わらないじゃない」

傳紫蘭は口を尖らせる。

「店に居らなんだら手間ではないか。先に行って居るかどうかわかめてくれ。居ればそのままお前も向こうに居れば良い。居なければ戻って知らせてくれ」

洪破天は小声で、しかし何かを隠すそぶりには見えない様に気を使いながら傳紫蘭に話す。

「……分かったわ」

傳紫蘭は洪破天の肩越しにちらつと樊樂の方を窺う。すると丁度、樊樂の大きな眼もこちらを向いており傳紫蘭は慌てて洪破天の体を盾にするように身を引っ込めた。

「じっ、じゃあ、行くわ」

「ああ、頼む」

傳紫蘭が駆け出して行くのを見てから洪破天は振り返る。

「では参ろう」

「お願い致します」

洪破天は少し遅めに歩いて行こうかとも考えたが、孫怜をさりげなく観察しつつ、止めた方が良さそうだと判断した。

（ふむ、……呂州か。少風の知り合いなら殷も知っておるやも知れんな。それにしてもこの男、商いがどうか言うが、一体何の商いじゃ？　やたら気が満ちておるな。僅かな所作がまで明らかに違う……。ただの商売人ではあるまい）

こちらが何らかの警戒の色を見ればすぐに気付くに違いないと判断した洪破天はごく普通に振舞いつつ、紅門飯店へと向かった。

洪破天は孫怜らを連れて大通りへ出る。陽が昇るにつれて徐々に人が増え始めている。

「ほれ、この先に朱の楼閣がせり出しておるじゃろう？ あそこに居る筈じゃ」

「おお、あれが紅門飯店ですか」

「おおすげえ。これはまたでかいな。派手だし」

「樊さん！ ……余計な事言わないで下さいよ」

孫怜、樊樂らは洪破天の指差した方を眺め、感嘆の声を上げている。すると洪破天がつと足を止めて振り返る。

「それほどかのう？」

「ハ……」

「他にもあんな楼閣はいくらでもあろう？」

洪破天はにこりともせず真顔で訊く。樊樂らはへつらいのつもりで言った訳でも無いのだが、返答に窮してしまふ。

「いや、東淵の紅門飯店と言えば有名ですから、是非とも見ておきたかったもので」

樊樂の後ろに居た男が愛想笑いを浮かべつつ答える。

「ふむ。じゃが勝手に期待されて勝手に落胆されても困るからもう。普通の料理屋じゃ」

「ハハ……」

洪破天はまた歩き出す。

（俺達何かおかしい事言ったか？）

樊樂と孫怜は顔を見合わせて洪破天の僅かだが妙なそぶりを訝しみつつ後続く。少し進むと紅門飯店の前で傅紫蘭がこちらに向かつて腕を振っているのが見えてくる。その隣には馬少風が立っていた。

第十章 二十三

樊樂が馬少風を見つけて言う。

「おっ、馬公だぜ。変わってねえなあ馬面」

「フッ、確かにな」

（古馴染みなのは確かな様じゃな）

洪破天は背後から聞こえるその会話を聞いてひとまずは納得する。

「流石にちょっと老けたか」

「おいおい、俺はまだ老けてはおらんつもりだが？」

馬少風と孫怜、樊樂の歳は殆ど変わらない。二人はそんな話をしながら洪破天に従い進んだ。

馬少風はじつとこちらを見ている。感慨深げに微笑むでもなく、嫌そうにするでもなく、懐かしい馬面のまま、ただ見ていた。

「馬はそっちに入った処に繋いでおくが良い」

洪破天が紅門飯店の脇にある路地を指差す。一人では馬に乗れない可龍を除いて他は皆、馬を牽いており流石に五頭を店の前の通りに並べる訳にはいかない。

樊樂らが脇の路地に入って行くと洪破天は店の前に向かい馬少風の許へ歩み寄った。

「呂州の孫、お前と同じ、殷の知り合いか？」

「ああ。……あいつは殷さんから天棲蛇の剣を教わった」

「なんじゃと？ ……ただ、会いに来ただけかう？」

「分からない」

洪破天と馬少風は声を落として言葉を交わしている。

「ねえ、あの人達みんなお馬さんの知り合いなの？ 何しに来たの？」

傅紫蘭が馬少風の腕を捕まえて割り込んでくる。だが訊ねている事は洪破天の持つ疑問とほぼ同じである。

「分からん」

馬少風は同じ答えを傳紫蘭に返した。

紅門飯店の正面までやって来た孫怜が馬少風に声を掛ける。

「少風、元気そうでなによりだ。十数年ぶりか？」

「ああ」

馬少風の返事はただそれだけであった。他人が見れば随分素っ気無い馬少風の態度だが孫怜はそれを気にする様子も無く相好を崩している。

「よう馬公、俺を覚えてるか？」

樊樂も孫怜の隣に並び馬少風と対面する。

「……樊だな」

「そうだ！ いやあ久々に会えて嬉しいぜ。お前変わってねえな。長い顔は言うまでもねえけどよ、その一言ずつしか喋らねえ処なんかな」

樊樂の言葉を聞いて馬少風の隣に張り付いている傳紫蘭がぷつと吹き出してしまふ。孫怜と樊樂は傳紫蘭が馬少風の腕を抱く様にして引っ付いているのを見て、先ほどの屋敷で会った馬少風の雇い主の娘のようだが、本当にそれだけか、と疑問に思った。

「入ってくれ」

馬少風はそう言って店に入っていく。傳紫蘭も同じ体勢のまま馬少風にぴたりと付いて歩き出す。孫怜と樊樂は顔を見合わせたが馬少風がどんどん進んでいくので、「入ろう」と、後ろの四人に声を掛けてから後を追った。

依然として陽は東の空にあるというのに、この紅門飯店には多くの客がおり樊樂らを驚かせた。夜の紅門飯店に比べれば静かな方なのだが東淵に着いたばかりの樊樂らは無論、そんな事は知る由もない。

馬少風は奥の席へと皆を案内し、それから一旦その場を離れた。洪破天が厨房入り口の辺りに居て傳英と話しており、歩いてくる馬少風に気付いて目を向けた。

「少風、気の回し過ぎかも知れんいう。全員、お前の知り合いか？」
「あの孫とその横の樊は知っている。他は分らない。会った事は無い」

「あの孫という男、商人か？」

洪破天の問いに馬少風は首を振った。

「もう十何年も会ってない。何をしてるのかは知らない」

「二人とも、何の話？」

洪破天と馬少風の二人が時折、一緒に入ってきた客の方を見ながら話しているので、傅英がその様子を訝って訊ねる。

「いやなに、少風の古い友人が訪ねて来たんじゃ。酒でも出してやってくれんか。商いをしておると言うから金は充分あるじゃろう」

「そう？　なら早速おもてなしさせて頂きましょうか」

傅英は笑顔を浮かべて厨房へ入って行った。

「少風、儂は遠慮した方が良いかのう？」

「いや、紹介する」

「ではもう少ししたら顔を出そう。……紫蘭はどうするかのう」

傅紫蘭は相変わらず馬少風に引っ付いている。

「私が居ちゃまずい事でもある？」

すまし顔でそんな事を言っているが、馬少風が隣に居るからそんな事を言えるのであって、一人で客人達の前に置かれたらすぐに逃げ出すに違いない。

「まあ、いいだろう」

馬少風は傅紫蘭を連れて客人達の待つ席へと戻った。

樊樂らは朝食を摂ってきたらしく食事は遠慮したが、酒までは断らなかった。

「此処へ来て何も要らんとは言えねえだろ」

真っ先に酒に手を出したのは樊樂だった。馬少風は昼間からこの店で酒を飲む事は全く無かったが、樊樂は再会の杯と称して馬少風にも酒を注ぐ。

「では、再会を祝おう」

樊樂が酒杯を掲げる。皆もそれに合わせて杯を掲げて後、酒を呷った。

「順序が逆だったな。こいつらは――」

樊樂が他の男達を指差す。

「今の俺の仕事仲間だ。劉子旦りゅうしたんに胡鉄こてつというんだ。そっちの若い二人は可龍かりゆうと比庸ひよう」

劉子旦と胡鉄は軽い会釈をし、可龍と比庸の二人は馬少風に体ごと向き直り深々と頭を下げた。

「怜にはたまにうちの仕事を手伝って貰ってるんだ」

孫怜が穏やかな微笑を浮かべながら馬少風を見る。

「たまには帰ってくるだろうと思っていたが、さっぱりお前の顔を見る事は無かった。一度も呂州には帰ってないのか？」

「ああ」

馬少風はそう答えて酒杯に口を付けるが、ほんの少し唇を濡らす程度にしか触れていない。

「ずっと此処で働いているのか？」

「ああ。俺は用心棒だ。だが常にこの店に居るわけじゃ無い。屋敷にいる」

「屋敷？ ああ、この主人、傳どのお屋敷か？ 先ほど立ち寄った」

孫怜の表情は明るく、樊樂とその仲間達の雑談しながら酒を飲む仕草に何の違和感も無い。

（確かに気にし過ぎか）

少しばかり馬少風の頬が緩んだ。

第十章 二十四

「なあ、此処の住人は皆、北辰教の信者か？」

樊樂が他の客達を見渡しつつ馬少風に訊ねる。

「そうでもない。俺は違う。正式に北辰教信者となっている者は半分も居ないと思う」

「そいつは意外だな」

景北港に近いこの東淵は信者だらけであるという印象を他所の者は持つており、樊樂も同様に考えていた。孫怜が口を開く。

「だが、北辰教を嫌う者はまず此処には住めまい。少なくとも理解が無ければ。此処の傳どのはこの街の実力者だそうだが、さすがに北辰教とは近いのだろう？」

この街でただ暮らすだけならともかく、商いを生業とするならば特に北辰教とは無縁では居られない筈である。

「お、お父様はそんな事無いわ」

答えたのは傳紫蘭だった。だが馬少風にしがみ付かんばかりに身を寄せて孫怜を見ており、声を出すのに随分勇気を絞った様である。

「お嬢さん、名を聞かせて貰っても宜しいか？」

孫怜が丁寧な口調で訊ねる。

「傳紫蘭」

速い返答に孫怜は笑みを浮かべて頷いた。その隣で樊樂がにやついている。

「じゃあこのお嬢ちゃんはお前の主筋というわけだが、随分仲が良いなだな」

「悪くは無い」

馬少風はただそう言つて受け流す。『仲が良い』などと思った事は無い。この傳家の末娘のお守りをまかされたまま、やがて傳紫蘭が本来なら守りが必要としない歳まで成長したに過ぎず、しかしながら未だ傳紫蘭は馬少風を放免しようとはしない、ただそれだけな

のである。

「そんな事より」

馬少風は変わらぬ真顔で孫怜を真っ直ぐ捉える。

「仕事とは何だ？ わざわざこんな処まで来る用とは――」

「おいおい何だってんだよ。もし仮に何も無かったとしても別に来たって良いだろうが？」

馬少風には久しぶりの再会を喜ぶ様子は全く見られず、何しに来たと言わんばかりだと樊樂は感じ、少しむっとして唇を突き出す。この馬少風が満面の笑みを浮かべるなど過去にそんな記憶も無く望むべくも無いのだが、それにしてもこの物言いは無い。

「……何か……取り込み中であつたかな？ 俺達が来る事を訝る様な？」

孫怜は頬に笑みを残しつつ、馬少風の目を見つめていた。馬少風は自分の胸の内を探るべく自分の瞳を覗き込んでくる孫怜の視線から顔を逸らして俯いた。

「すまん」

「ほう、何があるんだ？」

樊樂が酒杯を呷って空にした後、その太い腕を組んで馬少風を睨む様に見る。その時、馬少風の背後に洪破天がやって来た。

「儂も良いかのう？」

洪破天は返事を待たずに傅紫蘭の隣に座る。

「儂は咸水の出でな。呂州も知っておる。話を聞かせて貰えれば嬉しいのう。それとも、邪魔かな？」

「咸水……ですか？」

孫怜らの視線は洪破天に集まった。

「儂は洪破天というんじゃ」

「怜、洪……破天さんの名、聞いた事が無いか？ 咸水の」

孫怜は馬少風の言葉を聞いて見開いた目を一度馬少風に戻すが、またすぐに洪破天に釘付けとなる。その後は洪破天を見たまま言葉を失っている。樊樂の方は劉子旦、胡鉄らと顔を見合わせていた。

「ただの死にぞこないの爺じゃ」

「……で、ではあなたは咸水の……殷さんと……」

孫怜にしては珍しく動揺している様である。洪破天の名は有名であり、初めて会ったのなら驚くのも無理は無いのかも知れないが、長く洪破天と共に暮らしてきた馬少風にはその感覚はあまりよく解らない。

「アッ、それでは此処の……傳どのも、咸水の……？」

孫怜の眼は一層開かれる。咸水の生き残りは殷汪、洪破天、傳千尽の三名。この名は江湖に知れ渡っているがまさか此処で会うとは思わず、先ほど会った傳家の主人が傳千尽であるなど思いも寄らなかった。

「ああ、そうじゃ。儂と傳、そして殷。殷は知っておるかな？ あれは元、呂州に居たんじゃが」

洪破天は既に馬少風から、孫怜が馬少風と同じく呂州で殷汪と知り合っていた事を聞いて知っていたがそれは隠した。

「はい。私は若い頃この馬少風と共に殷さんには世話になりました。そうですか……咸水の……」

孫怜は馬少風に顔を戻す。

「その縁でお前は傳どのに雇われているんだな」

「まあ、そうだ。まだ殷さんも此処に居た頃だ」

「そうだったのか……ハハ、納得した」

孫怜は今まで馬少風が何故、東淵に住み着いたのか解らなかったのだが、それを今ようやく理解した。

「ちよつと、いいか？」

樊樂が態度を一変させて妙に遠慮がちな声を出した。

「洪……さん。実は俺達の知り合いに——いや、仕事仲間なんだが、洪破人こうはじんてのが居るんだ……」

樊樂はそう言うのと隣の劉子旦、胡鉄と共に洪破天の様子を窺う。孫怜も洪破人の事は良く知っており樊樂らと同様の好奇心を持っている。馬少風と傳紫蘭も洪破天によく似た名が出てきたので何の話

かと洪破天の方を見た。

「ほう」

洪破天の反応はそれだけだった。表情も普段と変わっておらず、ごく普通に樊樂を見返している。

「いや、もしかして何か繋がりがあつたりするのかと……」

「儂はずっと一人じゃ。儂の家族は殷汪、傳千尽、それからこの傳家の者達だけだな。……この少風らもそうじゃな」

「いや、まあふとそう思っただけで……申し訳ない」

樊樂はそう言っ頭を掻く。

「でも、ちよつと似てるかも」

胡鉄が劉子旦に身を寄せて呟いたが、皆に聞こえている。

「この広い江湖には全く同じ名前だっていくらかもあるじゃないか。ハハ……」

劉子旦は慌てて、似た名前で顔も多少似ているからといって興味本位でしかも不躰に洪破天に聞くのは良くないと思い、笑って誤魔化してこの話を終わらせようとする。

洪破天はその様子をまじまじと見つめてから、

「そんなに似ておるのかな？　ならば……会ってみたいものじゃないか
う」

そう言っ微かな笑みを浮かべ、そして手にしていた酒杯をさすりながらそれをぼんやりと眺めた。

第十章 二十五

その後の沈黙を馬少風が破る。

「怜。今でも剣を？ ……天棲蛇の剣の修練は続けているのか？」

この言葉に洪破天も顔を上げ、孫怜の反応を窺う。馬少風と洪破天が今一番知りたいのはこの孫怜らが昨夜の死体と関連があるか無いか。多分無いだろうとは感じているが、確認はしておきたい。

「剣は握っているが、今以上は望めんだろう」

孫怜は首を振って小さな溜息を洩らす。

「お前も知ってるだろう？ 俺が殷さんから教わったのはほんの一部。そこだけでももっと深く教わりたかった。やはり自分一人では掴めない部分が多過ぎる。殷さん亡き今となってはな………実に、惜しい」

孫怜は顔を上げて宙を見つめた後、目を閉じた。殷汪の姿でも思い出しているのだろうか。

「天棲蛇の剣は他に伝わってないんだろうか？ 例えば……書物とか」

馬少風は鎌を掛けて天棲蛇秘笈の存在を知っているかどうかを探る。すると孫怜は馬少風を、意外だともいう様に見た。

「そんなものは無いと殷さんは言っていた。お前も聞いて知っている筈だが？ 忘れたか？」

「そうだったかな」

「フ、まあ二十年も前の事だからな。普通は忘れる……。俺だけ呂州に残ったから未だによく覚えていられるのかも知れん。もう皆、忘れていられるのかもな、あの当時を。天佑も、てんゆう嬋せんも……」

孫怜は遠い目をして呟く。同時に馬少風と洪破天は顔を見合わせて小さく頷き合っていた。孫怜の話し振りはとても自然で、おかしな処は何も無い。洪破天が聞いた、殷汪の『天棲蛇は書かれていない』という話とも合っているし、何より本当に殷汪が亡くなった事

を残念がる孫怜の心情に偽りは感じられなかった。

馬少風が酒壺を取り、孫怜の杯に近づける。

「お、すまん」

「怜……、今、北辰が人を方々に遣ってる。知ってるか？」

それを聞いた孫怜は眉を顰め、それから隣の樊樂と目を合わせた。樊樂が口を開く。

「それは、真武剣派と関係があるか？」

「真武剣派？」

「真武剣派じゃと？」

馬少風と洪破天の言葉が重なる。思わず樊樂は顔を引いたが、また前に身を乗り出した。

「知らないのか？ まだこっちまで話は届いて無いのか」

孫怜が言葉を継ぐ。

「真武剣派はこの春、武慶で英雄大会を開いたんだが、丁度その時、強盗事件があったんだ。実は……俺達は今その関係でこっちまで来たんだ」

「怜」

樊樂が『言っているのか？』と孫怜を見るが、孫怜は続ける。

「真武剣派はその犯人を何としても捕まえようと今、必死になっている。この近くまでもう来ているかも知れない。どうもこちらの方に逃げているとしか考えられなくてな」

「強盗犯を真武剣が？ 何故じゃ？ 真武剣自体が狙われたと？」

「いや、直接的なものではありませんが……」

孫怜は武慶で起こった話、樊樂から又聞きした話ではあったが全てを洗いざらい説明する。話はそう単純ではなく洪破天の質問に答えながらなんとか一部始終を伝えた。

「……秘伝書のう。少風、これと関わりがありそうじゃな」

「ああ。……真武剣……」

洪破天と馬少風の短い遣り取りに、今度は孫怜が訊ねる番である。馬少風が話す。

「この東淵で『天棲蛇秘笈』という題字の書かれた書物の表紙らしきものを見つけた。昨日だ」

「本当か！」

「やっと出てきましたね！」

樊樂が勢い良く膝を打ってさらに身を乗り出してきた。劉子旦と胡鉄も顔を輝かせて頷き合っている。孫怜は盛り上がる樊樂らを制して、

「待て待て。同じ物かはまだ判らん。少風、何処に、どのようにしてあったんだ？ 誰かが持っていたのか？」

「その前に」

洪破天が唐突に強い口調で声を発する。

「おぬしらは、この事と何の関わりがあるのじゃ？ おぬしら、真武剣と――」

「我らは真武剣と関わりは一切ありません」

孫怜ははっきりとそう答えた。

「先ほども話しましたが、私個人は天棲蛇の剣、すなわち洪淑華の伝えた剣に多少なりとも縁がございます。それ故、この件に無関心では居られなかった。そして真武剣派は一度、その秘伝書なる書物を手にしたのです。今は行方知れずですが、真武剣派がそれを取り戻した後どうするのか――それをずっと考えておりました」

「ふむ。どう考えた？」

「元の持ち主は真武剣派ではありませんが、恐らく陸皓どのは手許に置きたいと考えている事でしょう。洪破天どの。陸皓どのと殷さん、天棲蛇剣の関係はご存知ですか？」

「……ああ。聞いておる」

「元の持ち主には申し訳ないが、実のところ私はこの件、陸皓どのと殷さん二人の問題であると――いや、何と申しますかこれは……」

「ふむ。言いたい事は何となく解る。天棲蛇剣は陸兄弟と殷、とりわけ陸皓と殷の確執そのものじゃ。まあ『確執』とは言い過ぎかも知れぬが」

「そうです。秘伝書が本物であるならば、これが陸皓どのの手に渡るか殷さんの手に渡るか――これはとても重大な事に思うのです。私は殷さんから少しではありますが天棲蛇劍の手解きを受けました。殷さんが亡くなったからといって放っては置けない……。私はとても弟子などとは言えませんが殷さんの側の人間だと今も思っております」

孫怜と洪破天の会話を他の誰一人として理解出来てはいない。馬少風だけは陸皓と殷汪の関係を知っていたが、孫怜の話の意味は理解するに至らなかった。

「まあともかくじゃ。おぬしらは真武劍の使いではないのじゃな？それに商いで来たわけでもない」と

「はい。申し訳ございません」

孫怜は深々と頭を下げ、最初に嘘を言った事を謝った。洪破天はようやく笑顔を見せる。

「いや、こちらこそ済まぬ。実はもう、その秘笈の一部、表紙だけじゃが見つけたのはこの少風でな。昨夜誰か判らぬ死体が見つかった。そいつが持っておった。その殺しの手人が死体と共に置いた様じゃな。しかし、その意図が解らん。天棲蛇を知る者に対する何か……。そして一夜明けておぬしらがやって来た。聞けばおぬしは儂や少風よりも天棲蛇に縁が深いというではないか。それで、ま、何しに来たのかと少風と話しておったという訳でろう」

「そうでしたか……」

第十章 二十六

樊樂が孫怜の肘の辺りを突付いた。

「怜……あとで俺達にもさっきの話、説明しろよ」

単に秘伝書の搜索と武慶の商人、劉建和の息子の救出に手を貸すよう依頼して孫怜はそれを請けたが、その孫怜は偶然にも目的の秘伝書と無縁ではなかった。しかしただそれだけの事と理解しており、最初はそうであつた筈だが今の孫怜はどうやら自分達の全く知らない何かを動機として行動している様である。話がさっぱり解らなかったところからかなり複雑らしいが、孫怜が今まで一度も詳しく話そうとしなかった事が少し癪に障る。

「して、北辰が人を動かしているというのは……？」

孫怜は話を戻す。北辰が動いていると聞いてやはり秘伝書の奪い合いになっているのかと考えてしまったが、話した馬少風も洪破天も、真武剣派の動きについては知らなかった訳でこれは別な何かが起きているという事であろう。

「怜」

馬少風が体を起こして背筋を伸ばし、居住まいを正す。

「何だ？ 改まって……」

「天佑は、死んだ」

「えっ？」

孫怜は突然の事に耳を疑った。馬少風をじっと見つめ、そのまま動かない。

「もうじき一年になる」

「……」

「病だった」

「……病？ あいつはこの、東淵に居たのか？ ずっと？」

「いや、違う。景北港に居た」

「そう……そうか。死んでしまったとは……。しかし、病とはな」
孫伶はそう言って力無く項垂れた。

「まだ若いのに……」

樊樂がぼつりと呟く。多分孫伶に言ったのだろう。慰めになど到底ならない言葉であるのは言う前から分かっているが、他に思い浮かばなかった。樊樂も夏天佑とは互いに面識があったが孫伶ほど長い付き合いではない。だが孫伶、馬少風、夏天佑、慕容嬋ぼようせんという呂州の四人組は幼い頃からよくつるんで多感な少、青年時代を共に過ごしてきたのを知っている。彼らは、間違いなく家族だった。

離れ離れになってから久しいが孫伶はいつも昔を思い出しては考える事がある。かつて殷汪が言った。

『過去の全ての縁が、今の我が身の全てを形作る。無駄じゃないとか意味があるとか、そんなものは改めて言う程の事じゃない。俺の縁した全てが、俺だ』

人との出会いと別れのみならず、あらゆる出来事、縁した全てが自身を作っているのだという。既に去ったもの、そう思い込んでいるもの、既に消えたと考えている存在までも全て、自分なのだと。

人と出会う。別れる。そして忘れる。死ぬまで一度もそれを、その人を思い出さなかったとしても、今の自分はその者と出会って出来たのであり、話して出来たのであり、別れて出来たのだ。更には存在を知らながら近付こうとしなかった事によって、或いは出会いそのものが無かったが故に。それらが今、余すところ無くこの身を構成している。

（一瞬の縁とてそうなのだ。まだ幼かった頃から共にあった仲間だ。俺は、夏天佑と共に生きた。この先お前を居なかった事にしなくてもそんな事は出来やしない。俺の全てはお前の影響を受け続ける。例え忘れたとしてもそれは俺の頭がどうにかなってるだけでお前は俺の中から消えたりはしないのだ）

「天佑が死んだのは、殷さんが死んだとされているその日――」

馬少風が立て続けに孫怜を驚かせる。馬少風はとんでもない事を言い出した。そう、何か重大な事を。どういう事なのかすぐには理解出来なかったが、その突拍子のなさだけは耳にした直後に感じた。

「同じ……日だと？」

「怜、死んだのは天佑で、殷さんじゃない」
「……？」

孫怜だけではない。樊樂らも同様に驚きの表情を見せていた。

「殷さんが……生きている？」

馬少風は頷いて暫し孫怜をじっと見てからおもむろに口を開く。

「北辰が動いているというのは、殷さんを追う為だ。今は何処に居るのか分からない」

「本当に……生きているのか……」

「殷総監が生きているなんて、凄い」

劉子旦が声を弾ませて言う。殷汪を直接知る孫怜らとは違い、江湖の噂によって殷汪を信奉しているらしい彼にとっては一度死んだとされた英雄が実は生きていたなど、これほど血が沸く様な話は他に無い。

「凄いつて何だよ？ まあ……驚きではあるがな」

樊樂の方はまだ比較的冷静である。

「て事はだ。夏は殷総監……というか北辰と関係があるのか？ あいつが死んだ日に殷総監が死んだ事になるなんてよ。本当に、病だったのか？」

「関係はあった。病は本当だ」

孫怜が樊樂に顔を向ける。

「まあそれはそうだろう。天佑が呂州からこの東北に来たのは多分、殷さんが居たからだ。殷さんが北辰に入れば自分もついて行くといい出しても不思議は無い。……それほど殷さんに惹かれていたんだ。憧れと尊敬——」

孫怜のこの話を聞きながら洪破天は夏天佑の事を思い出している。

『――感謝していたと伝えて欲しい』

夏天佑は洪破天と最後に言葉を交わした時、そう望んだ。

（利用されたという考えは最後まで微塵も持ってはおらんのだ。う。殷はあれのそういう処を利用したとも言えるが……）

孫怜らの話が途切れた処ですかさず洪破天が話し出す。

「話が長くなってしまいわい。儂はそろそろ戻らんといかんのじゃ。天棲蛇秘笈の表紙とやら、見ておくか？ おぬしらの追う秘伝書の一部かどうかは知らんが」

孫怜は感傷に浸る間も無く現実に戻された。

「今、お持ちなのですか？」

洪破天がおもむろに懷に手を入れる。

「今、此処にある。前に置くが、覗き込むな。書かれているのは題字のみでしかかなり薄い」

覗き込むな、とは如何なる事かと皆が首を傾げたが、孫怜はすぐに気付いた様で、

「今、我々を見ている者が居るかも知れない、と？」

「まあ……そうじゃ。周りを見回すな」

「分りました」

孫怜が答え、樊樂らも頷いている。洪破天が今持っているという天棲蛇秘笈の表紙、それをこの東淵に持ち込んだ者が今、こちらの様子を窺っているかも知れないと思うと緊張が走る。

（……まあ、誰でも良いわ。鐘の奴に知られるのはまずいかも知れんからのう）

実は洪破天の考えているその『見ているかも知れない人物』は孫怜らの考える者ではなく鐘文維の事である。店に入って来る時には見かけなかったが今も居ないとは限らず、居るかどうかわかめる為に見回す訳にもいかない。いずれにせよ何人にも知られない方が良し訳で、鐘文維の事をわざわざ孫怜らに説明する必要は無い。

洪破天は懷から一枚の紙をそっと取り出すと、卓上の中央へ置い

た。それを孫伶と樊樂が注視する。劉子旦からは少し遠く、何が書かれているのかは全く見えなかった。

「天……蛇……」

「これかも知れねえな」

第十章 二十七

その時、不意に傳紫蘭が立ち上がった。孫伶に名乗ってからその後は一度も口を開かずじっとしていたが、洪破天の取り出した紙を一瞥した直後である。

「……帰る」

「ああ。大丈夫か？」

馬少風が声を掛けると、

「もちろん」

そう言ってさっさと席を離れて行ってしまった。

馬少風と洪破天が振り返ったまま見送っているので孫伶らも傳紫蘭が店を出るまでその後姿を見ていた。

「……まずかったのう。すっかりあれを忘れておったわい。あの死体の話など……」

洪破天は馬少風と共に頷き合っている。

「俺が後で見に来よう」

「大人しく屋敷に帰るかどうかは分からんのう」

「探す」

「少風、何があったか知らんがすぐ追った方が良いんじゃないのか？ あのお嬢さん、気分がすぐれぬ様に見えたが」

孫伶が言うと洪破天が馬少風に向かって、

「儂が行こう。お前達はまだ話があるじゃろう」

そう言って、卓上に置いた紙をさっと取り再び懷に戻す。

「今あるのはこの表紙のみでな。おぬしらの探しておるのは中身のほうじゃろう？ そっちは分からん」

孫伶は頷く。

「おぬしら、暫く居るのか？」

「はい。実はちょっとした手掛かりも掴んでおりますので。とは言ってもその手掛かりも当てが外れればまた先を急ぐ事になります」

「ほう。ならまた今夜、此処に来るが良い。少風、お前もじゃ。話を聞かせて貰おう」

「はい。お話し致します」

「ではもう」

洪破天も席を離れ、店の出口に向かう。店を出る間際、その近くに居た男と二言三言、言葉を交わしてから出て行くのが見えていた。

洪破天は紅門飯店を出ると大通りをざっと見渡した。が、傳紫蘭の姿は見当たらない。

（とりあえず屋敷か）

深くは考えず、再び傳千尽の屋敷へと急ぎ向かった。

大通りから屋敷へ向かう道へと折れると、すぐに先を行く傳紫蘭の後姿が見つかった。見たところ変わった様子も無く自然に、歩いている。

「紫蘭」

駆け寄って声を掛ける。傳紫蘭は驚いて肩を強張らせ、振り返った。

「あ、ああ、お爺ちゃん。……話はもう終わったの？」

「いや、少風達はまだ店におる。随分久しぶりに会った友人の様じゃ。お前もたまには少風は置いて、まあ家でのんびりするが良い」

「そう。そうね」

二人は眩しさを増す陽光が射す静かな道を並んで歩く。屋敷まで真っ直ぐ伸びているこの道に今は他に誰も居なかった。

「お爺ちゃん」

「ん？」

「媛の処に行っていないでしょ？」

「んん？ ……そうじゃなあ」

洪破天は急に梁媛の話が出てきたのを意外に思った。傳紫蘭が先ほどの話の場から逃げ出す様に出てきたのは恐らく昨夜の件を自分が話したからで、きつと聞きたくなかったからに違いない。

（別な話題なら気が紛れる——か）

梁媛の事をこの傳紫蘭と話す事は今まで殆ど無かった。故に傳紫蘭が梁媛の事をどう思っているのか聞くことも無かった訳だが、梁媛が傳紫蘭の母、王梨に、恐らくは芸事を学ぶ為に共に生活する様になって王梨は梁媛に付きっ切りになっている状態であり、傳紫蘭がこれをどう感じているのか知っておく必要がある。自分と梁媛が『傳家』を乱す様な事は、決してあってはならない。

洪破天がそんな事を考えているほんの僅かな沈黙に、傳紫蘭は溜息と同時に肩を竦めた。

「言っとくけど、私、媛を嫌うとか全く無いから。みんな私がお母様を取られて媛を嫌ってるのか思ってるんでしょ？」

「……そんな話は聞いておらんが、そうなのか？」

「時々耳にするわ。有難い事に、頼まないのに勝手に私の胸の内を斟酌しんしゃくしてくれちゃって、そこら中で噂してくれてるの。知らない？」

「僕は知らんのう」

「お爺ちゃんには言うわけ無いか……」

傳家の人間、若しくは特に親しい者以外からは、洪破天が他所で拾ってきた娘を傳家に遣って育てさせているといった程度の理解しかされていない。間違ではないのだが、傳紫蘭の言う話を洪破天に面と向かって言える者は居ない。

「私はね、子供じゃないんだからそんなの気にする訳無い。お母様が私にあまり関わらないのは昔からだしね。紅葵こうき姐様が居た頃もそうじゃない。でも、私は一度も紅葵姐様を憎んだ事なんて無い。ほんとよ？」

洪破天は微笑を浮かべて頷く。傳紫蘭の言葉に偽りは無いと洪破天は感じていた。

傳紫蘭は傳紅葵が好きだった。それは傳紫蘭の彼女に対する振る舞いを見ていれば誰にも分かる事である。誰よりも美しく聡明な義姉を、人に自慢するくらいであったのだ。そしてその傳紅葵を育てたのは、母、王梨。王梨と傳紫蘭は普通の母娘とは少し違ってその

距離が少しばかり離れていたかも知れないが、その母も義姉と同様に懂れる存在であったというのはあながち無いとは言えない。

傳紫蘭は長女である傳紅葵の事を『姐様^{ねえさま}』と呼ぶが、次女、傳朱蓮^{れん}の事は『姐さん』である。僅かな違いだが、傳紫蘭の気持ちの中に某かの区別があるのだろう。だがそれは別に傳朱蓮を傳紅葵と比べて敬わないという事では無い。傳朱蓮とは血の繋がりが有り、傳紅葵とはそれが無い。今でこそ傳朱蓮は東淵を離れている事が多くなり接する機会が減ったが、幼い頃はどちらかというとな傳朱蓮はやんちゃな娘であり、傳紫蘭と性格に近い処もあって共に遊ぶ事が多かった。一方、傳紅葵は歳の差に加えて傳紫蘭の物心つく頃には既に王梨の許での芸事の修行に入っていて接する機会はあまり無かった。かなり事情の込み入った三姉妹ではあったが、それぞれ互にうまく付き合ってきていた。特に末娘の傳紫蘭はこの家庭環境に不服も言わず、『素直な良い子に育った』と評判であり、現に今も馬少風を連れまわして遊んでいようとそれに眉を顰める者は父である傳千尽くらいであとは叔母の傳英が少し注意する程度である。

「媛は妹。妹がいつもお母様と一緒に居たって何もおかしく無いわ。姉である私がそれに文句なんて言うわけ無いじゃない」

傳紫蘭はそう言って小さく鼻を鳴らす。全てが本心という訳では無いのかも知れないが、その傳紫蘭の言葉が今の洪破天には有難かった。

「確かに妹じゃが、一つしか――」

「一つだろうとれっきとした妹だわ。私が、上」

傳紫蘭がそう言って胸を張って見せたので、洪破天は笑った。

第十章 二十八

紅門飯店では奪われた秘伝書について樊樂が話していた。

「この街に、その徐じょって奴の縁者が居るらしくてな。肉親か何か……」

「徐……」

馬少風は首を傾げる。

「探せば幾らでも居そうだが」

「知り合いには居ないか？」

「知り合いというか、この通りを北に行った一番外れに宿……いや、今はやってないな。今は馬を扱ってる親父が居る。その親父は徐だ」
馬少風が表の大通りを指し示しながら言うと、

「よし。そこから当たろう」

樊樂は膝を打って勢い良く立ち上がる。すぐ隣の劉子旦が驚いて樊樂を見上げた。

「え、早速ですか？」

「当たり前だ。この先何人当たる事になるか分からねえんだ。さつさと取り掛かる。おい、案内してくれよ」

樊樂はまだ座ったままの馬少風を見下ろして言う。馬少風の仕事については何も知らないが、その都合やら何やはてんで頭に無い様である。

「俺は一度屋敷に戻らねばならん。今言った徐の親父の家は通りを真っ直ぐ行けば分かる。右側の馬小屋のある家だ」

「そうか。まあ行ってみるか。関係無かったら、別の徐をそこで紹介して貰おう。ほれ、行くぞ」

「皆で押し掛けるのめどうかと思うが？」

孫伶もまだ座ったままで、樊樂を見上げている。

「いや、もし徐の奴が徒党を組んで潜んでたら困るだろ？ こっちも全員居る方が良い」

「そうか。では行くか」

孫伶はあっさりと納得して立ち上がり、劉子旦と若者二人も続く。

「ここの酒は良いな」

胡鉄が手に持った酒杯を勢い良く呷って空にしてから最後に立ち上がった。

馬少風を含む七名は店を出て行く。その後姿を、入り口近くに座っていた男が見遣る。先程、洪破天が言葉を交わしていた鐘文維であった。

店先で馬少風と別れた樊樂らは大通りを歩いて北へ向かった。人が多いが通りの幅はそれほど広くは無く、六人全員が馬を牽くと邪魔になる。ぶらぶらと歩きながら甘い良い匂いを漂わせている露天や立ち並ぶ土産物屋などを眺めながら進むが、目的の目印である馬小屋は中々見えなかった。

「何だよ一番端じゃねえか。すぐそこみたいに言ってた癖によ」

「いや、あの馬^ばさんはすぐそこなんて言っていなかったと思いますけど。『一番外れ』って」

馬少風の言っていた馬小屋のある家は、大通りの北の端、街の内と外を隔てる北門のすぐ手前にあった。門の外は遠くに民家がちらほら見えているだけである。樊樂らは馬小屋と家の外観を眺めたがごく普通の馬小屋のある民家で、馬少風は宿をやっていたとか言っていたが建物は小さく宿には見えなかった。

「よし。じゃあ行くか」

樊樂を先頭に、その家の開け放たれた入り口に向かう。すると丁度中から中年の男が出てくるところだった。

「ん？ ああ、お客さんかな？」

「えーと、徐さんかい？」

樊樂が訊ねると男は笑顔で頷いた。

「そうだよ。馬が要るのかな？ あー、でも今丁度数が居なくてねえ」

男が樊樂の後ろに居る孫伶らを眺めて言った。全員分の馬は用意出来ないという事なのだろう。

「いや、馬じゃないんだ。俺達は人探しをしてるんだが、ちょいと訊きたい事があって来たんだ」

「人探し、かね？」

男はきょとんとして樊樂を見つめ返している。

（……とりあえず、誰かを匿うとかそういう気配は無いな）

樊樂と孫伶はその男の表情を見て同じ事を考えていた。孫伶が男に尋ねる。

「武慶の徐という男をご存知無いか？ 徐騰という者なんだが……」
すると孫伶に視線を移した男の表情が急に硬く変化した。

「徐騰……？」

「この東淵に血縁の者が居るって聞いたんで、徐って人を当たってるんだが、知らないかな？」

樊樂は出来るだけ男に警戒させない様にと声の調子を高くして頬を緩める。

「……そいつは、何かしたのかね？」

男の声は樊樂とは対照的に低くなり、視線も孫伶から逸れて地面をさまよっている。

（いきなり当たりか？）

樊樂と孫伶はほんの僅かだけ視線を合わせる。そして孫伶が男に向かつて口を開いた。

「その者は、武慶で強盗を働いて人を殺し、更に人質を取って逃げてるのです。しかし何処へ向かったのかがさっぱり分からない。

何処か……行きそうな処が分からないものかと……」

「私の甥に、徐騰という男がいる。だが、都に居た筈――」

「都から、数年前に武慶に移り住んだようだな」

「……そうかね」

男は溜息を洩らして顔を上げた。

「同じ名前の人間はきつと他にも居るんだろうけど、その甥も、そ

んな事をしそうな奴だよ……。いや、前にもしてたんだ」

「実は我々はその徐騰の顔を知らぬので、あなたの甥がその徐騰かどうかは確かめられない。あなたの甥が仮にそうであったとして、他に身を寄せそうな場所は？」

「さあ……。私も昔は都に居てね。私一人、こっちに移って来たんだ。親類は皆、都に居たよ。とは言っても皆老いて死んでしまった。あれが行きそうな処なんて、他には分からない」

「あなたを……。訪ねてくる事は考えられますか？」

男は首を振る。

「無いと思うね。もう随分前から会ってない。会いたくないね。あんな奴には。向こうもそう思ってるだろうよ」

男は険しい表情で地面を睨みつける。男の甥が武慶の徐騰かどうかは本当に分からないが、どうやらどちらも同じ類の人間の様である。

「向こうは追われて逃げてる。過去の事なんて構ってられずに頼ってくるかも知れないぜ？」

樊樂が言うと、

「……何を盗ったのか知らないが、もし来たらそれと一緒に北辰に突き出すまで」

「北辰？ 何で北辰なんだ？」

すると男は樊樂を鋭い目つきで見据える。もう先ほどの馬屋の気の良い親父の顔は何処にも無い。

「もし盗ったのが良い物なら、北辰はそれを懐に入れて、あいつを始末してくれる」

男は淡々と、そう言い放った。

第十章 二十九

その甥にはそれほどの憎悪を抱いているという事なのか、男の豹変ぶりに樊樂らは驚いて顔を見合わせた。

「……徐騰はともかく、盗まれた物は返して貰わないと困るんだが」
樊樂が男の顔色を窺いながら言う。すると男はまた表情を変え、今度は微笑を浮かべた。

「ハハ……ま、此処に来るとは思えんよ。もう長く会っていないし交友関係も知らない。すまないが……」

「いや、良いんだ。こっちこそ突然来て……何か嫌な事思い出させてしまったかな？ 申し訳ない」

樊樂はそう言って頭を下げた。

「あんた方は、お役人では無さそうだが……」

男はもう一度樊樂ら六人の姿を眺めている。孫伶一人だけ上等そうな長袍を羽織っているが役人というよりは何処かの良家の旦那の方が近い。他は皆、ごく普通の旅装束姿である。

「俺達は、被害者の息子の依頼で、徐騰を探してるんだ」

樊樂の言葉に男は小刻みに何度も頷く。

「私は何も教えられないが、あんた方が早くあいつを捕まえられよう祈るよ。あいつは……もう居なくなる方が良いんだ」

死んだ方が良い——男の言葉はそういう意味である。近親者である男の言う遠まわしでも何でもないのでその表現が、樊樂らに徐騰という男の非道ぶりを想像させた。男はぼんやりと遠くを眺めている。

「……それでは、これで。突然失礼致しました」

孫伶は男に向かって拱手し、樊樂らも頭を下げる。男は憂いを含んだ微笑を浮かべ、小さく頷くだけであつた。

男と別れ、大通りを戻る。早々と徐騰の親類を見つけ、そして何も得られず、ただ引き返すしかない。あつと言う間にこの東淵でし

なければならぬ事は終了してしまつた。あとは話の聞き込みくらいしかないが、西から来て此処に至るまでに何も出なかった事を考えれば此処での見通しも同様に暗い。

「あの人、もし徐が来たら本当に北辰に突き出すんでしょうね」
歩きながら劉子旦が言う。

「かも知れんな」

「徐騰は手下を連れてる筈だ。そう簡単にはいかねえだろ？」

「いや、この街の北辰の者にちよつと教えるだけで済むだろう。徐騰がちゃんと秘伝書持参で此処まで辿り着いたらの話だが」

「秘伝書を横取りされてたまるか。それよりも先に、何としても俺達が捕まえなきゃな」

樊樂が言うと、皆、頷いて応じる。

「……少風が昨夜見つけたと言う死人が誰なのが気になる。奪われた秘伝書と洪破天どのが持つておられた天棲蛇秘笈の表紙、同じ物なら死体は徐騰に関係が……或いは徐騰本人という事も考えられるぞ？ その場合、何故表紙だけを持つていたのが不可解ではあるが」

「馬公が見つけたんだからどんな奴だったか詳しく聞こう。徐はたしか痩せこけた男だつて言つてたよな？」

「目に特徴があるとか。痩せて眼窩が窪んで、異様な顔つきで事ですすが……」

劉子旦は安県あんけんに程近い廟で周維しゅういと劉建和から聞いた徐騰の特徴を思い出している。

「大抵、人の死骸は皆、そうなつてるけどな」

胡鉄が冗談まじりに言うが、それには誰も応じない。

「とにかく馬公に訊いてみるしかない」

「が、少風が屋敷に戻つたのはつい先ほどだ。あいつも遊んで暮らしてる訳じゃないからな。夜はまたあの紅門飯店で会える事になつてるが」

「話するだけだし、あの屋敷に行きや良いだろ」

「あ」

不意に胡鉄が何かを思い出した様に声を上げた。

「紅門飯店の美人てのは何処に居たんだ？　まだ見てないけど」

「鉄……残念だったな。もう居ねえよ」

樊樂は溜息混じりに言う。胡鉄の肩に手を置いた。

「俺達が来る遙か前に、後宮に召されたってよ」

「ええっ！　何だよそれ！」

胡鉄は本気で期待していたらしく声を上げる。しかしそれなら紅門飯店で酒を飲んだにもかかわらず今まで忘れていたのは何だったのか。

「ま、こんな処まで声が掛かるくらいだ。とんでもない美人なんだろうな。そんなのはそう容易くお目に掛かれないうて事さ」

樊樂らは再び紅門飯店の前まで戻って来た。

「あれ、洪さん――」

劉子旦が通りの先にこちらへ向かって歩いてくる洪破天の姿を見つけた。

（用がある様な事を言っていたが、もう済んだのだろうか）

樊樂らは店には入らず、入り口の前で洪破天が来るのを待った。

「徐の処へはもう行ったのか？」

洪破天は近くまでやって来ると訊ねた。屋敷に戻った馬少風と会って話を聞いたのだろうか。

「ええ。少風から聞いたあの徐という者が我々の期待していた手掛かりだったのですが、特にこれといった情報は得られませんでした」
そう言って首を振る孫伶に洪破天は黙って頷く。そして紅門飯店に入ろうと歩き出したが、数歩行って立ち止まった。

「……おぬしら、後をつけられはせなんだかのう？」

「は？」

洪破天が入り口の手前で顔だけを通りの方に向けているので孫伶は洪破天の視線の先を見遣る。するとそこには知らない男がじつと

こちらを見ながら、佇んでいた。

「あれが誰か知っておるか？」

洪破天は更に首を捻って孫怜を振り返った。

「いや、知りませぬが……」

「ふむ。どうしたものかのう……」

洪破天はそう独り言ちて、また男を見る。

孫怜にはさっぱり訳が分からない。あの男は自分達をつけていたのだろうか。しかし洪破天はただ男を見ているだけで、男の方も見られているにもかかわらず何の反応もせずに洪破天を見返している。警戒も緊張もない。それどころか男はやや笑みを浮かべている様にも見えた。

「……洪どの？」

「いや、こつちの話じゃ」

「樊さん……あれ……」

不意に劉子旦が、樊樂の上着の袖を引っ張った。男を睨む様に観察していた樊樂は反対側に居る劉子旦を振り返って眉根を寄せる。

「何だよ」

劉子旦は男が居るのは反対方向の通りの先を指差している。その先に、行き交う人々に混じって馬に乗ってこちらにやって来る者が見えた。

第十章 三十

洪破天も劉子旦の声を聞いてそちらを向く。孫怜は男の方が気になったが洪破天が全く気に留めていない様子なので、一度男をちらっと見遣った後、通りの反対側を振り返った。

やって来る馬が人の流れを左右に裂いていく。

「何で……こんなところに居るんだよ……」

樊樂らだけでなく、通りに居る者達の殆どが馬上を見つめていた。喪服を想わせる白装束に長い黒髪をたなびかせ、人形のように美しく、感情の無い白い顔。樊樂、胡鉄、劉子旦は凝視しつつも自分の目を疑う。

「周漣……さん？」

「だよな……」

「洪破天どの」

急に背後のかなり近い距離から声が掛かり、孫怜は思わず体を強張らせた。振り返ってみれば先程の男がすぐ後ろまで来ているではないか。

（何だこの男は！ 気配を全く感じなかった！）

孫怜は驚いて僅かに体を退いてしまう。男は孫怜を見る事は無く、洪破天の方を向いている。そして洪破天はのんびりと男の方を振り返った。他の者は皆こちらにやって来る馬の方を見ていて男が近付いたのには気付いていない。

「周が戻って来ましたな。何か土産があるかも知れませぬ」

「誰に、なのかが問題じゃ」

聞こえてきた『周』という名に樊樂が反応する。振り返った樊樂はこの時初めて男がすぐ近くに居る事に気付いて驚いたが、洪破天と普通に話しているの見て、そこに割り込んだ。

「周ってあの、女の事か？」

樊樂はやって来る馬の方を指している。あの馬に乗って進んでくる者はどう見ても、此処に居る筈の無い、城南の周維の屋敷に居る筈の女、周漣しゅうれんであつた。

男は樊樂の問いに答えようとはせず、ただじつと樊樂を見ているだけである。変わりに洪破天が口を開く。

「あれは周婉漣しゅうえんれん。名前くらいは聞いた事があるじやろう？」

「周……婉漣……」

「樊さん！」

劉子旦がまた樊樂の腕に触れた。向かつて来ていた馬が足を止めている。騎乗している周婉漣は顔を真っ直ぐこちらへと向けていた。樊樂らが居る事に気付いた筈だが、表情は変化しておらず、瞳も見えない。

「本当に周漣さんは……北辰七星の周婉漣だったと……？」

劉子旦は周維や洪破人に、城南の屋敷で周漣がかつての同僚、風を切った話をした時の事を思い出す。周漣が剣を使えるという話から北辰教の七星周婉漣の名が出たのだが、殆ど冗談の様なものであり誰も『同一人物か？』と疑うまでには至っていない。しかし劉子旦には妙な妄想癖があり、もしそうだったらどんなにか面白い事になるだろうと、よく想像していたのである。それが今になって本当にそうらしいという状況を目の当たりにし、流石にこれには面食らってしまった。周婉漣が稟施会りんしかいに近付いた理由によっては『面白い事』どころか、稟施会にとって悪夢が始まっているのかも知れないとまで思えてくる。

男が洪破天に話す。

「急ぎ方崖に戻るといふ様子でも無い。此処に寄って行くよう言いましょう」

「まあどちらでも良いがのう」

男は歩き出した。あの周婉漣の許へ向かうようである。

「……あの男は周婉漣のお仲間、鐘文維という」

男を見送りながら言った洪破天の言葉に、孫伶は啞然とする。

（あれが鐘文維？ ……まずい。北辰教に近付き過ぎている。まさか洪破天どのがこれほど北辰教に近い人物であったとは）

自分達が洪淑華の秘伝書を追っている事が鐘文維に伝わっているのかも知れないと思うと、不安が募る。しかしその何がどうまづいのかは、はつきりと把握出来てもいなかった。

今の時点では分からない事が多すぎる。北辰教は真武剣派が動いている事を知っている筈で、それならそれに対抗すべく行動を起こすのが今までの北辰教の姿勢であった。だがはつきりとその様に動いているふしが見当たらない。孫伶らは至東山しとうざんの近くで北辰教の間を見た。その者達がやっていたのは真武剣派に対する嫌がらせみたいなものでただの牽制役であったのかも知れないが、洪破天や馬少風が真武剣派の動きを知らないという事は別途に大人数を動かしているとも思えない。北辰教が事を起こしているのならこの東淵で噂にならないという事は考え難いのである。『北辰が人を方々に遣っている』と馬少風から聞いた時には、秘伝書を真武剣派よりも先に手に入れる為かと思ったが、すぐに『殷汪が生きていてそれを追っている』と言い、想像は見当違いであった。この事から北辰教の真武剣派の動きに対する反応については、未だ知り得ていない。

もう一つ。洪破天が七星という北辰幹部と繋がりがあるとは思っていないかった。あの馬上に居る周婉漣と、それを少し距離を置いてじっと見つめる人々の反応。これが北辰七星である。方崖で教主に最も近いとされている幹部で対等に口を利ける人間というのはそうは居ない。教主直属の護衛という立場は方崖の九長老と違いはあるものの、北辰教の中枢でかなりの力を持っている事はまず間違いない。その一人、鐘文維の洪破天に対する丁寧な口調は何を意味するのか。北辰教は殷汪を背信者として追っているにもかかわらず、その殷汪と最も親しかったであろう洪破天とこうして親しげに接しているのはどういう事か？ 孫伶にはどうもこの関係が読み取れない。（我々が何も知らなかった北辰教にわざわざ知らせてしまったので

はあるまいな？)

不安を覚える孫伶であったが具体的な状況は全く掴めず、またそれを確かめる術も今は見当たらない。

「伶、あれだ」

樊樂が孫伶を振り返って言った。

「何だ？」

「うちの風を殺った女、周……婉漣か？」

「どういう事だ？ 何故、あの女が城南に？」

「そんな事……知るかよ」

また不可解な話が出てきた。孫伶の頭は最早、混乱寸前である。鐘文維が周婉漣に何やら話し掛けている。その二人を距離を保ちながら取り囲んで見ている通りの人々。誰もが七星二人に注目していた。鐘文維と言葉を交わした周婉漣は、馬から降りた。ひらりと舞い降りると言っても良いほど動作が美しい。そのまま二人並んでこちらに向かって来る。孫伶や樊樂らは一度顔を見合わせてから、二人が来るのを黙って待っていた。

第十章 三十一

周婉漣は真っ直ぐ洪破天の前まで来ると両掌を組んで腰の前に置き恭しくお辞儀をした。

「お久しぶりでございます」

洪破天を知らない者は、周婉漣の態度から洪破天を方崖の長老かと勘違いしてしまう事だろう。それほど丁寧な物腰で礼を施した。孫伶は洪破天が方崖の長老では無いと分かっているが、ならばどの様な関係であるのかと、双方が放つ気配を洩らさず感じ取るべく神経を研ぎ澄ます。黙って視線を交わす僅かの間にも、洪破天と周婉漣はまるで言葉を用いずに意思の遣り取りを行っているようにも思えてしまうほど不可解で、氣遣わしい。

一方、樊樂は周婉漣の横顔を険しい表情のままじっと睨み、劉子旦と胡鉄も本当にあの周漣であるのかどうかを見極めんとばかりに食い入る様に見つめている。周婉漣はまだ一度もこちらに視線を合わせようとはせず洪破天の方を向いていた。樊樂らは皆、城南でこの周婉漣と親しく言葉を交わしていた訳だが、何も知らずにこの美しい女を笑わせようと冗談を言ったりしていたのが今となっては愚かしく、腹立たしい。しかしあまりにも突然の事で動揺してしまっていた。そうでなければ樊樂ならば周婉漣に掴みかかるくらいのは既にしているだろう。

「他所へ行くとは珍しいのう？」

「……良い気晴らしが出来ました」

「ハハッ！ 気晴らしか。そなたが方崖を離れるとはそれほど今の方崖は煩わしいか」

周婉漣の口許に微笑が浮かぶ。

「洪破天様」

「何じゃ」

「是非……お話したい事がございます」

そう言つて洪破天を真つ直ぐ見据える。いつもは伏し目がちなその瞳に、はっきりと洪破天の姿が映っていた。

「周よ。私も聞かせて貰つても？」

鐘文維が言うと、

「ええ。他に話せる人も居ませんから。今は……」

「そなた」

洪破天は顔を少し前に突き出して周婉漣の顔をまじまじと見遣る。

「殷に会つたな？」

「えっ」

驚きの声を上げたのは孫怜だった。北辰教が殷汪を見つけた――

？ 洪破天が周婉漣を見て何故、そう勘付いたのかは分からない。とにかく、この周婉漣が殷汪を見つけたのなら是非自分も話を聞きたいと思つた。

「此処で……お話致しましょうか」

周婉漣は今は答えず、紅門飯店の入り口に顔を向けた。

「そうじゃな。上の部屋に行くか」

洪破天が言つて歩き出すと、鐘文維と周婉漣も続く。その時、樊樂が後ろから周婉漣を呼び止めた。

「周！……さんよ」

「何じゃ？ 知り合いなのか？」

洪破天と鐘文維が先に振り返り、樊樂を見る。その後、ゆっくりと周婉漣が樊樂の方を向いた。そして口を小さく開く。

「あなた方の主は、全て知っています。あなた方が不審に思うのも分かりますが、その必要は無いのですよ」

「旦那は……知っている？ あんたが北辰の、方崖の人間だと知つてて城南に連れてきたつてのか？」

樊樂は眼を剥いて語気を強めている。

「そうです」

「それで、あんたを屋敷で使つて、旦那は何がしたかつたんだ？ 何の為に――」

「さて、何でしょうね。あの人には私にも解らないところがある――それも多く。何か目的があったのでしよう」

周婉漣は城南に居た時と同じ、やや俯き加減で静かに佇んでいる。瞳が見えない。

「周さん。では、あなたの目的は一体……」

劉子旦も訊かずには居られなかった様である。だが、やや声が震えていた。

「私の目的は……あなた方、稟施会りんしかいには関係がありません。私の事は忘れて下さい」

「関係無いで済むか！ あんたは普通の女じゃねえ、北辰の幹部じゃねえか。わざわざ城南まで来て何でもないだと？ しかも旦那の屋敷に入り込んで――」

「周維がそのようにしたのです」

「周維？ 稟施会の周維の事を言っているのか？」

鐘文維が会話に入ってくる。洪破天もその後を継いだ。

「遙々城南まで行ったのか？ して、おぬしらは城南の、稟施会の者じゃと？」

樊樂は鼻から大きく息を吐き、頭を振る。

「……ああ。で、この女は城南でうちの旦那の処で雇われてた。ただの下女としてだ」

「そう、ただの下女」

周婉漣は淡々と言葉を吐く。

「旦那様は私に暇を出されたのです。だから戻ってきたというだけ――」

「何が『旦那様』だ！」

「おい落ち着け！」

孫怜が樊樂を制して周婉漣の前へと進み出た。

「失礼。私は呂州の孫怜と申す。周婉漣どの、一つお聞きしたい」
孫怜はとりあえず拱手し、名乗ってから周婉漣に話し掛ける。すると、周婉漣の顔が上がりその瞳が孫怜を向いた。

「孫……？」

「は？ ええ、孫。孫怜と――」

「呂州の？ こちらの、馬少風どのと同じ？」

「同じ？ ああ、まあ同郷で友人ですが」

（少風を知っているのか。少風までも、七星と知り合いとは。これも、殷さんとの繋がりからなのか？）

周婉漣は黙ったまま孫怜を見つめている。一瞬ではあったが周婉漣の視線が自分の全身を観察したのを孫怜は見逃さなかった。

「周……どの？」

「……何でしょう？」

「今、城南には夏天佑と名乗る者が居るそうですが、周の旦那の屋敷に客分として――」

孫怜はちらと劉子旦の方を見遣る。この事は劉子旦から聞いたのであり、劉子旦は孫怜に頷き返す。

「夏天佑じゃと！」

洪破天が驚いて声を上げ、鐘文維と顔を見合わせた。鐘文維が周婉漣に問う。

「周。本当か？ それはあの夏天佑だったのか？」

「それも、お話しますので」

周婉漣はそう言う袖を翻して一人、先に紅門飯店へと入っていく。

第十章 三十二

紅門飯店の中ではいつの間にか客達が入り口を中心に半円状に群がって様子を窺っていた。洪破天はこの店で見慣れているし鐘文維もこの東淵に滞在し始めて、ある程度経っている。注目はやはり周婉漣である。

北辰教の勢力圏に居てもその姿を拝む事は滅多に無く、大抵方崖に籠もっているとされていて、実際そうであった。太乙北辰教と敵対する者には当然であるがこの街の人間にとっても七星周婉漣は謎が多く、美しい女で凄まじいほどの武芸の持ち主という噂によって人々の妄想は勝手に膨らんでいく。この場合、『凄まじい武芸』というのは単なる想像だが、北辰七星の一人に数えられているというたった一つの事実――それだけでその裏付けとするには充分だった。その彼女が突然目の前に現れた。客達は好奇と不安が入り混じった視線を向けている。

周婉漣が店に入ると、客達は何やら小声で言い合いながら後ろに下がり道を空ける。周婉漣は数歩進んで立ち止まり、まるで音でもって周囲の様子を探るかの様に静止して小首を傾げた。その間に洪破天が前に出て階段の方に向かうと周婉漣も歩き出して鐘文維と共に続き、そして孫怜らも後を追う。

階段のすぐ手前まで来た時、洪破天は振り返って孫怜を見た。

「あー、おぬしらは此処で休んでおれ。少風もそのうち顔を出すじやろう」

「洪どの、もし殷さんの話ならば私にもお聞かせ願いたいのですが」「遠慮して下さい」

孫怜の言葉に応じたのは周婉漣。孫怜を振り返りじっと見つめ返してくる。

「方崖の夏^かという者の話です。あなたには――」

「関係がある。あなたは私をご存知の様だ。それに馬少風も。なら

ば、我らが夏天佑とも旧知である事も聞いておられるのでは？ 殷……総監から」

「今、総監の役にある人間は居りません」

周婉漣はそう言って後ろを向く。だが洪破天が前に居て立ち止まっているので、孫伶に背を向けたままその場に立ち尽くした。孫伶はその後姿を睨む。

（……そんな見当違いの台詞を吐いて話を逸らすつもりか。沈着なのが身上の様に振舞ってはいるが、何という事は無い、普通の女だな）

「洪破天様。参りましょう」

「儂がこの孫そんに話すかも知れんじやろうが？ それでも良いのか？」

洪破天は動かず、周婉漣に訊ねる。すると、

「話しても良いと判断されたなら、それは構いません。私からは、この者達を知りませんので話しません」

と言い、洪破天の横を抜け一人先に階段を上って行く。洪破天は肩を竦めて孫伶を見た。

「とりあえず儂が聞くわい。まあ、待て」

「……はい」

孫伶らを残して洪破天と鐘文維も先に行く周婉漣を追った。周婉漣は純白の深衣の袖を揺らしながら音を立てずに上って行く。その後姿を鐘文維が見上げて、僅かに笑みを浮かべた。

（フツ……周よ。そなたらしくもない。これは本当に……殷総監を見つけたか）

「つっ……何だっただよ！」

樊樂は卓を拳で叩いて声を荒げる。すぐ近くに居た客達が何事かと恐る恐る樊樂らの居る方を振り返っていた。その者達にとっては、鐘文維や周婉漣と共に居ただけですでに樊樂らはただの客ではない。「樊さん」

劉子旦が樊樂の名を呼ぶが、後が続かない。普段なら『落ち着け』

と言うところだが、劉子旦自身も周漣が名を騙り正体を隠していた事に衝撃を受けており、胸がざわついて落ち着かない。

「とりあえず……飲もう。もう此処でする事なんて無いだろう？」

胡鉄が酒壺を引き寄せて掴むと、樊樂に差し出した。樊樂は膝をがたがたと揺らしていたが、胡鉄を一瞥してから酒杯を手にとって腕を伸ばす。酒は溢れんばかりに注がれた。

「洪さんが話してくれば良いが……」

孫怜が酒を一口飲んでから半ば独り言の様に言い、樊樂はそれを聞いて『フン』と鼻を鳴らす。

「どうだかな。本当は仲間だったりしてな」

「周……北辰の、ですか？」

「あの周婉漣の態度からしてそうだろう？ それに殷総監をあいつらと一緒に探してるって事はやっぱり北辰教の仲間だろう」

「どうかな？」

孫怜は手にした酒杯を両手で包んで、それをじっと見つめ続ける。「洪破天どのが殷さんを探すのは、何もおかしくはない。咸水に居た頃から知った仲な訳だからな。北辰教にも殷さんを探す理由はある。ただ、完全に協力しあっているのかどうかは何とも――」

「なあ」

一人、手酌で酒を呷っていた胡鉄が少し強い口調で孫怜の言葉を遮った。

「そんなの俺達に関係あるのか？ 俺達は周の旦那の命令通り、秘伝書と人質を探せば良いんだ。他の事は放っておいたら良いじゃないか」

確かに、この東淵に来るまで洪破天の事も知らなかったし、北辰教も秘伝書を探しているだろうとは既に考えていた事である。実際には探してはいない可能性も出てきたが、しかし自分達のやるべきは探し続ける事であり、誰がどうであろうとやる事は同じである。

「関係無けりゃそれでいいさ。しかしあの女は城南まで行ってたんだぞ？ 怜、さっき夏の事をあの女に訊いたな？ あの女、今、旦

那の処に居る夏を、俺達の知ってるあの夏天佑だと思ってわざわざ城南まで行ったという事か？ 馬公の話じゃあいつも北辰に關わってみたいだしな」

「そうでなければあの周婉漣と稟施会に接点など無いだろう？ 夏天佑……全く同じ名の男が城南に居るとなれば調べるだろう。何をしたか知らんが、殷さんとは近い男な訳だから殷さんが逐電したのなら天佑も共に行動したのだろうな。……少風の『死んだ』という話と合わんが」

「何ていうか、どいつもこいつもはつきり物を言わねえって感じだ。誰かすぱっと解る説明してくれ」

樊樂は椅子の背に体を預けて脱力し、顔を天井に向けた。そしてそのまま、

「洪の奴……あの洪破天どのと本当に何も無いんだろうか。本当は……親子かなんかで、実はあいつも北辰教に繋がってるんじゃない？ まいな？」

「まさか……」

劉子旦が頬を引きつらせて笑みを作るが、否定する言葉は出ない。「あいつ、あの女に惚れてたよな……」

「はつきりとそうだとは言えないと思いますよ。あの態度は……」
「洪の奴があの子の正体を知って俺達に黙ってたなら……」

「洪……破人の事を言っているのか？ 内通しているとしても？ 何の為にだ？ 樊、今は何も解らない。そんな時に色々考えても碌な事は無いぞ？ 確実な事を、少しづつ詰めていくしかない。フ、俺もだな。考え過ぎた」

孫怜は背を伸ばして深呼吸した後、酒杯を口に持っていた。樊樂が体を起こして孫怜に寄る。

「怜。絶対にうちにいる夏はあの夏天佑じゃねえぞ？ 俺達より若いし、顔も違う。全くの別人だ。ちゃんと素面しらふの時にもそいつの顔を見たんだからな」

第十章 三十三

樊樂らは周婉漣や洪破天、殷汪の話を続けている。どうしても北辰の事が頭から離れないらしく、話題は変わりそうも無かった。『どうでもよい事だ』と思いながら暫く黙って聞いていた胡鉄は諦めて再び口を開いた。

「周婉漣だの夏天佑だの、その辺の事は周の旦那に聞けば良いんじゃないか？ どっちも旦那が招き入れたんだから、何か裏があるんならそれは『旦那に』あるんだよ。樊さんそうだろ？」

「旦那に裏があるだど？」

樊樂は胡鉄を睨みつけたが、胡鉄は構わずに続ける。

「旦那はもう稟施会の当主なんだから、当然、稟施会の敵にはならない。何かしようとしてるんなら多分、稟施会の得になる事なんだろう。という事は、北辰を使って何かするつもりなんじゃないかな」「何かって何だ？」

「分からない。俺達はまだ聞いてない。知る必要が無いって事じゃないのか？ 今はまだ」

「……確かにそうかも。我々が今、疑問に思っている事は全て、旦那の頭の中に答えが揃ってる様な気がします」

劉子旦も胡鉄の話に賛同し、樊樂と孫怜を見遣る。

「ああ、もう止めだ。俺は頭使う役じゃねえんだ。俺達は旦那の言う通りに行動するだけだ」

樊樂の頭の中はいつもより混乱しているのは確かだった。言葉を放り投げるように吐き出して変わりに酒を流し込む。

適当で、単純なのが普段の樊樂であり、若い頃から知る孫怜もそんな樊樂しか記憶に無い。それほど長い付き合いであつても樊樂が努めてそう振舞う以上、深い処にある心情ははっきりとは捉えられない。

（旦那と北辰だど？ ……稟施会は今まで北辰に関わっちゃいねえ。

先代も、ずっと昔からそうだった筈だ。いや、旦那が今から何かやるというなら俺は従うだけだ。俺は旦那を信じる。いや、そんな事より……今、旦那は攻めてるのか？ それとも守ってるのか？」

「ずっと此処にいたら酒ばかり飲み続ける羽目になる。少風に話を訊きに行かないか？ 俺達の仕事の為の、だ。とりあえず少風が見つけた死体はどのような者だったのかも訊かないとな。こっちが優先だ。洪破天どのには夜にでも訊くさ」

孫怜が一同を見回すと、樊樂以外はこちらを向いて頷いた。

「樊？ 聞いてるか？」

「ん？ ああ」

樊樂の耳に孫怜の声は届いてはいたがずっとぼんやりしたままだった。暫くしてようやく孫怜が自分に話し掛けたのに気付いて顔を上げた。

「樊さん、頭使う役は子旦だ。俺達は体動かそうぜ？」

胡鉄が笑いながら言う。樊樂は口を曲げる。

「考えてなんかいねえぞ。酒で眠くなっただけだ。よし、行くか」

樊樂はいつもの仕草で膝を叩いて立ち上がり、胡鉄、劉子旦がすぐそれに続いた。

「そういえば、酒代はどうすんだ？ さっきも払ってないよな？」

「訊いてこよう」

孫怜が歩いて行く。その先には店の中を歩き回っている傅英が居た。

孫怜と話す傅英は笑いながら顔の前で手を振っている。声の聞こえていない樊樂らにも、『いらない』と言っているのが判る。

「少風と話してた人だな。此処の女将か？」

「給仕でしょう」

劉子旦は樊樂にそう答えるが、傅英がひっきりなしに客の間を往来するのをずっと目にしていたので単純にそう考えたのだった。すぐに孫怜が戻ってくる。

「お代はいらないそうだ。少風が此処に居て得したな」

「なら晩飯も此処で世話になるうか」

樊樂らはだんだん増えてきている客の間をすり抜けるようにして店の外に出た。

「紅門飯店か……。そんなに良い店か？ 評判になるような……。

悪くは無いけどな」

「都ならもっと大きい処がありますね」

「上にも席がある様だったが？ 階段の下から覗いただけだが雰囲気違った。おそらく、『紅門の花』が健在だった頃は特別な宴席でも設けたんだろうが」

「目玉を失ったんじゃあ、此処も先行き不安だな」

「下にこれだけ客が居るんだからそれでも儲かっているんじゃないですか？」

胡鉄が辺りを見回している。

「あーなんだかこう、がっかりだ。美人を拝みたい……」

胡鉄の思う美人は周辺には見当たらないらしく溜息をついた。陽は中天に差し掛かり、通りは既にごったがえしている。着飾った若い女も多く見受けられたが胡鉄の注文は余程厳しい様である。

紅門飯店の横に馬を置いたままで、通りを南下していく。左手に並ぶ店と店の間から東淵湖が見え、子供達が泳いだり水辺ではしゃいでいる姿があった。

「遊んでくるか？」

樊樂が後ろに居る可龍と比庸を振り返る。この二人は東淵に着いてからは紅門飯店の酒に口を付ける以外は殆ど口を開いておらず、樊樂や孫伶の話には入るところか何の話なのかもよく掴めていない。ただついて歩くだけの存在であるのが当人達も正直なところ苦痛ではあったが、まだ何も出来ない事も良く分かっている。だからといって孫伶と離れて好き勝手やっていてはいつまで経っても役立たずのまま。今は何も理解出来なくても孫伶の話やする事を見聞きして

少しずつ学べる筈だと、二人だけでそんな話を話しながら黙々とつき従っていた。

「そんな……子供じゃないですよ」

比庸は少しむっとして樊樂に言う。しかし流石に樊樂の大きな眼を真っ直ぐ見て言う度胸は無く、すぐに隣の可龍の方へ視線を投げた。樊樂は東淵湖の方を眺める。

「ほう、そうかい。俺は水浴びして遊びたいけどなあ」

「子供しか居ませんよ。でも気持ち良さそうだなあ。城南で泳げる処なんてそんなに無いですからね。近くにあるのは汚い沼ばかりだ」
皆、足を止め、水しぶきを上げて走り回る子供達の姿を眺めた。

「無邪気なもんだ」

「そりゃそうでしょう」

「戻れねえかなあ？」

「子供に？」

「おう。しかも此処でな」

「夏は良いけど、冬がちよっとねえ」

「樊。城南組はこの季節にこんな良い処に来れるなんて滅多にないだろうから水浴びしていても構わんぞ？」

孫怜が真顔で言っている。樊樂は顔を顰めた。

「冗談だよ。俺も餓鬼じゃねえ。残念だけどな」

樊樂らは最も南の城南から遙々と東北のはずれとも呼べる東淵までやって来たが、周維の命を受け、まず武慶を訪れたのがもう三ヶ月以上前の事である。秘伝書はともかく、人質の方はとうに解放されたか、或いは殺されたかのどちらかであろうと考えるのが妥当なところであり、それが厳しい現実というものだ。何か手掛かりは無いかと探しながらの旅だったが此処まで何も得られなかったのは全くの予想外であり、己のしている事は物見遊山にしかっていない様に思えて虚しい気分苛まれる。

七星周婉漣が城南まで行って何をしたのか、それも不可解で気が

かりな事であるが自分達の任務についての手掛かりがこうまで出てこないというのも、もはや謎としか言えない程、不審極まりない。東淵に至ってやっと秘伝書に関わりがあるかも知れないという話を馬少風から聞いた訳だが、はたしてそれが目当てのものであるのかはこれからである。

人々が遊ぶこの歓楽街と東淵湖に映る鮮やかな青を眺めていると、通常なら高揚するはずの気分が逆に重石を吊り下げられて沈んでゆくかの様に感じるのだった。

第十一章へ続く

第十一章 一

陽はもう充分に傾いて西方の空が赤く染まっている。雲の殆ど無い空でその赤と濃い青がせめぎあう場面だが、そのどちらも勝利を手にする事は無いだろう。それは太古の昔から決められており、普遍である。この後の空を支配するのは赤でも青でもなく、必ず、黒なのだ。

江湖の古い伝承は語る。東方、西方共に退き、天皇帝率いる闇が空を制する。天皇帝は天の北極に君臨し、何人たりともこの天を侵す事は成らない。北斗真君が天皇帝の御座所、紫微宮を守護しつつあらゆる敵を撃ち殺すのである。

北斗真君とは七つの星。その力は天のみならず地上の生殺与奪までも司るといふ。古くから地上の人々は北斗真君の力に畏敬の念を抱く。北斗真君は天皇帝を守護する堅固な盾、敵を容赦なく滅する最強の剣。

人々は自らの持つ剣に七つの星を刻んで更なる破敵の力を欲し、今でも剣を作る時には七つの刻印を入れる事が多い。一般にこれら北斗七星を刻んだ剣を総じて『七星剣』と呼ぶのである。また、人々は他の身の周りの物にも七つの星を刻み、個人、家、そして一族の守護を願った。

北斗真君を信じ、天地を支配する天皇帝を信奉する――これはこの国で古くから存在し、最も広まっている民間信仰であった。そんな中、天皇帝、つまり北辰たいいつほくしんへの信仰においてまず人々が思い浮かべるのは、やはり太乙たいいつほくしん北辰教であろう。

北辰信仰は各地にあり、その信仰の生活との結び付きの強さに差はあるものの信者による共同体の様な姿を形成している地域は少なくない。信者と呼ぶほどではなくとも積極的に肯定はしないが否定する事もなく、『悪人は地獄に落ちる』程度のごく一般的となりつ

つある概念——この国ではその思想が他国より入って広まり始めてからまだ日が浅く深い理解には至ってはいないが、その道義的戒めの言葉は比較的取り入れ易かった——と同様に漠然と北辰信仰を容認する人々はかなり多い。北辰を信仰する人々は全て、古くから名の知られている太乙北辰教の信者かというところではなく、太乙北辰教とは数ある信仰者の集団の中で最も整然と自らを体系化し、最も巨大化した、北辰信仰における一派である。

今、北辰信仰といえどそのまま太乙北辰教と捉える者も居るが、まだ各地には太乙北辰教とは全く別の北辰信仰が数多く存在している。

太乙北辰教が今の様な巨大な勢力となれたのは、まず北辰信仰というものが遥か昔から広く人々に認められ信じられていた事がある。過去様々な宗教思想が興り、ある程度の広がりを見せたが、既存のものには無い全く新しい概念は、奇抜で怪しいものだと言われ、目には映り易い。今までの道徳観を完全に否定する様な思想と行いを推奨する集団も現れ熱狂的な信者を集める事に成功した例もあったが、長く存続は出来なかった。『邪教』の烙印を施され、彼らの言葉で言う『迫害』が起こる。

信仰心の有無に係わらず、『邪教』の存在は人々を恐れさせた。得てしてその価値観は既存のそれよりも卓越性を増さんが為にやたら複雑怪奇となって、到底理解出来るものではないからである。たんに難しすぎるだけなら邪教とされるには至らないが、それらに比べると空の星の運行を見て天の理の^{ことわり}壮大さに畏敬の念を抱き、地に在って謙虚に人生を送るという、原始的な思想の方が遥かに受け入れ易い。

難解な思想の熱狂的な信者達がすぐ近くで理解不能な振る舞いをする様になれば人々は自然と彼らに嫌悪を抱き、信者が集団を作り始めればそれに対する抵抗が強まるのは自明である。一定の勢力まで成長出来なかった思想集団は生き残る事が出来なかった。その点、太乙北辰教の教えである北辰信仰はある意味無難な考え方とそれに

よって導き出される分かり易い生活法を備えていた。

景北港^{けいほくこう}を中心に広がっている太乙北辰教の信者の生活の中には、意外な程、宗教儀礼的な様式は見当たらない。祭壇を置く家はあるのだがかなり少なく、今の太乙北辰教は信徒に対して日々の礼拝をも命じてはいない。完全に信仰心など失ってしまっているに違いないと思える様な、信徒とは名ばかりの人間も居るのである。それでも教主への忠誠心だけは失わない様であるが――。

この事は良く知られており、これでよく信者を繋ぎ止めておけるものだと思えるが、太乙北辰教が急拡大し始めたのは江湖の認識が『北辰信仰者の集団』から『武林の勢力』へとその本質の比重を変え始めた頃からである。

宗教の組織が変質する時、人々が強い警戒感を抱くのは歴史上の様々な例を見ても明らかだが、太乙北辰教はそれらを全く意に介さず、劇的に拡大した。何故そうなったのか、それは具体的な事は何も分かっていない。恐らく当時の方崖^{ほうがい}の教団運営の舵取りと、対外的な政治的手腕が優れていたと、ただそう推察するしかないが、宗教界から『武林』へ――これが成功の要因であったとする説もある。ただそれも具体的な証拠は示せない。

武林とは武術界の事であり、そこでは文字通り『武』、すなわち力でもって自らの存在の証明を行わなければならない。歴史と伝統を重んじる世界でもあったが当時の三大勢力、清稜派^{しんりやう}と裏統派^{じようとう}、そして丐帮^{かいほう}は伝統と共にその実力を維持し続けていたからこそ武林にその名を謳われていたのであり、ただ名前のみで力を失ってしまったばそれは在って無い様なもの。江湖の尊敬を集める事も無い。

人が集まれば力になるとは言っても、長い歴史の中で独自の武術を磨き上げてきた武林の各派に認められるなど簡単な事ではない。ならば太乙北辰教はどのようにして武林への進出を果たし、拡大したというのか？

信仰の集団がどうやって『武』を確立したのか、当時の事を知る術は方崖の外にあっては殆ど無いに等しい。人々は冗談めかして言

う。

「きっと、北斗真君を地上に降ろしたのさ。紫微宮におわす教主に出来ない事など無い」

「北斗真君は天皇帝の僕だ^{しもべ}」

「教主自身が天皇帝になる事にしたんだよ。武林制覇を思いついてな。自分が神様になりゃあ何でもできるぜ？」

第十一章 二

天の低い位置から差し込む光は部屋を赤く染め、昼間の眩しきとはまた違った色で見る者の目を刺激する。

傳家の旧宅であり今は王梨おうりが住んでいるこの屋敷の中央に大きな広間がある。この広間の床は真新しい。綺麗に磨かれていて敷物は一切無く、窓から入る西日を反射して部屋中を赤に変えていた。

その部屋の中で、北側に位置する壁だけが少し暗めの青色をしている。壁がその色に塗られているのだ。そしてその青の中に小さな金色が点在し、それらは星を表していた。壁一面に広がる星々。その中ほどに、七つの星が天上に見られるのと同じ様に並べられている。その上には他の星より僅かに大きな星が一つ。北極星と北斗七星である。

壁には星以外の装飾は何も無い。ただそこに、北の夜空が広がっている。

「洪さん？ 居ませんか？」

不意に掛けられた声を、洪破天こうはてんは腕を上げて即座に遮った。声を掛けた超靖ちようせいは口を噤んでちらと広間を覗く。それから黙ったまま洪破天に向かって頷き、静かにこの場を離れて行った。

洪破天は広間の端の入り口から体を半分だけ差し入れて奥をじっと見つめる。中央の北辰、北斗七星のその下に、端座して目を閉じている梁媛りようえんが居た。

淡く赤味がかって見える裙くんの裾が床の上に広がり、薄緑の帯が夕陽で赤く染まった床の上を流れる。上は胸当てに紗しゃの衫を羽織り、そこから透けて見える肩と白い胸が光を放っていた。洪破天は夕陽の赤が混じったその光を見つめて眉を顰める。

彼女は美しかった。梁媛は傳紫蘭ふしらんの一つ年下で十四歳になったばかりである。もっと幼い筈であったのだが、今此処に居る梁媛の美

しさは洪破天に、女を感じさせた。

（……梨妹は何を考えておる？ あのような衣装は早過ぎる）

険しい表情で見つめつつ、息を潜める。梁媛は変わらず目を閉じたまま、その白い胸を微かに上下させて静かな呼吸を繰り返していた。

梁媛の顔は普段より一層白く、ぴたりと閉じられた小さな唇は赤い。耳の上を通って背に流れる長い髪は艶やかな黒で、少し大きめの銀の髪飾りで纏められている。

（……これで良いのか？）

洪破天は梁媛と出会った頃に思いを巡らす。衣服は泥まみれで顔の汚れすら落とす事も無く、弟の梁りょうはつ発と共に都の片隅に潜みつつきながらえていた娘が、この梁媛なのである。だがこの一年ですっかり変わった。少なくとも姿だけは。

（儂が勝手に変えたのではないか。媛の意思など、何処にあったというのじゃ？）

洪破天は都で梁媛に綺麗な着物を買いつけたが、それは今、梁媛が身に纏っている様な物ではなくもっと幼い子供が身に付ける様な可愛らしいものだった。そしてそれは良く似合い、梁媛は喜んだし洪破天もその姿を見て満足した。最初に出会った時から放ってはおけないと思いこの東淵に連れて来ようと考えていたが、新しい衣服を買い与えたその時に改めて、梁媛と梁発を『儂が育てよう』と強く心に決めた。そう、決めたつもりだった。

思い返してみれば都を出る前に梁発が死んでしまった事が、今を暗示していたかの様に思えてならない。

（育てようと決めた傍からもう、発を失ってしまったではないか。しかも儂が、媛から奪ったのだ……）

東淵に来てからのこの一年、梁媛に何をしてやれただろうか？ 何もしていない。何も出来なかった。二人で暮らす――ただそれだけを妄想して浮かれていただけではなかったか？ 自分自身が傳千尽の家に生活のほぼ全てを頼りきっているというのに。

（フン、儂が変えた？ 馬鹿な。何も出来ずに傳家に押し付けただけじゃ。ああ……媛よ）

梁媛は身じろぎ一つせず背筋を伸ばして座っている。王梨に芸事を習うべくこの屋敷に来たばかりなのに今の姿勢を見ているとまるで既に修養を積んだ舞姫にでもなったかの様だ。瑞々しく艶やかな肌。大胆に胸元を見せるその衣装に洪破天は戸惑った。自分が都で買い与えた服は今着ても古くは無い。梁媛はそれを気に入っておりよく身に着けていて、とても可愛らしかった。それが今は別人になっている。

洪破天は舞や音律の事など何も知らないが、今、梁媛に『立って舞え』と言っても、一日、二日で既に何かが出来るようになっているとは考えられず、何も出来ないであろう事は分かる。洪破天の知る剣にしてもその修行は遠い道のである。舞などの芸事とて同じ事。幼い頃より稽古を積んでこの東淵で『花』と謳われた傳紅葵ふでこうぎでさえも未だ道半ば、とは母であり師である王梨の言である。

（衣服が変わっただけじゃ。媛はまだ……）

洪破天の顔から険しい表情は消えたが、その視線は一瞬たりとも梁媛から離れなかった。

（何をしておるのじゃ？ 瞑想か？ しかし……）

梁媛は床の上に正座している様で、長い裙の下で膝を揃え、その上に両手を乗せている。その掌が天井を向いていた。

（まさか内力ないりよくを練っておるなど……ハ、まさかのう）

梁媛の掌は何となく自然に上を向いたという形ではなく、明らかに意識して上に向けて置かれている。その掌から気を取り込まんとするかの様だ。

武術の修行においてよく見られる内功の修養する時の姿勢で、両掌と両足の裏を天に向ける形のが良く知られている。結跏趺坐けっかふざの姿勢を取り、両掌も天に向ける。体の中で最も気の出入りが多い掌と足の裏から気を取り入れる為である。武林各派には様々な姿勢

と行い方が存在するが、この結跏趺坐のものが最も基本的な、共通した姿勢であろう。梁媛は正座しているので足は天を向いていないが、掌はしっかりと上を向いているので恐らく気の修養と無縁では無い様に思われた。

（内力は感じられん……当たり前か。しかし梨妹は何をさせるつもりじゃ？）

洪破天はそんな事を考えながら、暫く梁媛を見つめ続けた。

どのくらいの時が経ったのか分からなかったが、広間の外に人の気配を感じた洪破天はすっと体を退いて廊下に出た。廊下の奥から王梨がこちらに向かって歩いて来る。

「洪兄さん。やっと来たのね」

王梨はにこやかな表情を浮かべながら、少し声を落として洪破天に話し掛けた。広間の中に梁媛が居るからだろうと洪破天は想像する。

「邪魔をする気はない」

「余程じゃない限り邪魔になんてならないわ」

王梨はこのところ少しやつれた顔をしていたが、今はどうやら元気が戻ってきた様子で、笑顔が明るかった。

「何を……しておるのじゃ？」

洪破天は顔を広間の方に向ける。

「媛？　そうね……ただの瞑想よ。心安らかにする為に」

第十一章 三

「……儂は今まであまり安らかに過ごさせてやれなんだからもう」
「ねえ。どうしてそう思うのかしら？ 洪兄さん、ちょっとおかしいわ」

「儂一人なら今まで通り好き勝手しておるじゃろうな。しかし、媛にそんな姿は見せられん」

「もう媛は見てるじゃないの」

「だからいかんのじゃ」

「洪兄さん。何が駄目なの？」

王梨は両手を出して洪破天の両腕を掴んだ。

「一体、どうしてしまったというの？ 今まで通りで良いじゃない。好き勝手にすればいいのよ。私達は何も文句なんか言わないわ。だって、それが洪兄さんなんだから。そうでしょう？」

「梨妹、儂は人を育てられる様な人間ではなかった。媛を連れて来た後になって思い出すとはもう……」

「媛は私が面倒を見るわ。紅葵の時と同じ様にね。似た様な状況だったじゃない。うちの人はまだ小さい朱蓮に手を焼きっぱなしで紅葵どころじゃなかった。フフ、じゃあ何故、洪兄さんや殷さんの反対を押し切ってまで紅葵を連れて来たのかって話だけれど」

「そなたは嫌な顔一つせずに紅葵を見ておったのう」

「意外と何でもなかったのよ。だってそうでしょう？ うちの人は背にはまだ赤ん坊の娘、それに拾った孤児の手を引いてこの街にやって来た。洪兄さんと殷さんも一緒に。皆で家族同然に暮らしてたわね。そこに私も加わった――。もう血の繋がりがどうか、どうでも良かったんじゃないかしら。私は私の思い通りに紅葵を仕込む事が出来た訳だし。変な言い方だけれど、私にはそれしかなかったし、それに喜びを感じられた。ね？ だから媛も同じ事。あの娘も私のする事に興味を持ってくれてるわ。洪兄さん、私に任せて。私はそ

うしたいし洪兄さんもその方が都合が良い。何か問題があるかしら？」

「いや……今の儂にはそうするしか無いという事は分かっておる」
洪破天は溜息をついて項垂れる。

（何とも情けない事じゃ）

突然、梁媛を東淵に連れて来て共に暮らすと傳千尽やこの王梨に告げたものの、生活の殆どを傳家に頼る洪破天には結局梁媛も傳家に任せるより他は無い。傳家の誰もが任せろと言ってはいるものの、洪破天は申し訳ないと思う気持ちで一杯だった。

一方、傳千尽や王梨にしてみれば、この事に関して洪破天がこうまで気に病むのが意外であった。時に憔悴した顔まで見せる様になつてはその方が心配になる。『媛は任せた』と言い放つて自分は紅門飯店で酒びたり——たえそうであったとしても、いや、その方が洪破天らしいというものなのだ。

「洪兄さんが気にしてるのは、媛の気持ちかしら？」

王梨の穏やかな視線が洪破天に向かい、洪破天はそれを見返しつつ首を傾げた。

「……洪兄さんは、媛にとって特別だわ。何も気に病む必要は無い」
「何の事じゃ？」

「媛がね、都での話をしてくれたわ。洪兄さんと殷さんが自分と弟を救ってくれたってね。洪兄さんとはとにかくいつもお酒を飲んで、ちよつとおっかなくて、そして優しかったって」

「……」

「だから、変わらない方が良いのよ。今までの洪兄さんのままで」

「……特別、か。特に変な爺ということじゃろう」
「フフ、そうね」

王梨が一際にこやかな表情を見せたので、洪破天もつられてようやく頬を緩めた。

「まあ、そなたの許で芸の修行に励む様になれば儂の事も気にならなくなるじやろう。梨妹の弟子ともなればのう」

「それは無いと思うけど」

王梨は首を振る。

「本当に『特別』なの。洪兄さんも、それから……殷さんもね」

「殷……か」

「洪兄さん。訊きたいんだけど」

王梨は改まってそう告げると、懷から小さく畳まれた紫の手巾を取り出した。洪破天の目に留まる様に一度顔の高さまで持ち上げてから、手の上でゆっくりと開いてゆく。中から出てきたのは二つの緑色の輪。古びた耳飾である。洪破天は目を細めた。

「それは……媛の物じゃぞ？」

「分かってるわよ。まさか私が取り上げたとも思ったの？」

「……その耳飾がどうかしたのか？」

「媛が、これを着けたいと言うのよ」

王梨は一つを摘み上げて眺めている。傷だらけで色はくすみ、壊れかかっている今の状態では『飾り』にはなりそうもない。それにただの輪だけしかなく地味過ぎる。

「これを着けようなんて、普通は思わないわ。特に若い娘は」

「媛はそういった類の物は身に着けた事が無いのじゃろう。まだ子供ではないか。……それはそうと、媛のあの格好は何じゃ。あんな……」

「気に入らない？」

王梨は意外だとも言う様に上目遣いで洪破天を見遣る。

「どうせまだ何も出来んのじゃろう？ あんな衣装はまだ早いわい。それに……大胆過ぎる」

「洪兄さんは——」

王梨は思案顔で宙を見つめ、

「遙か昔に剣を習い始めたのよね？ 剣を初めて手にしたのは、剣術が出来るようになってからだったかしら？」

「何？ それは……剣術以外にも初めにやる事はいくらでもあるわい」

洪破天は王梨の言葉を聞いて顔を顰めたが、何とか言葉を返した。それを聞いた王梨は洪破天に視線を戻して微笑む。

「私達の修行も色んな事をしなければならぬわ。でも此処で媛がまず初めにやらなければならぬ事は、何が美しいとか何が楽しいとか、そういう事を知る事、感じる事なの。あの年頃の女の子は、本来ならもっと色んな事を知っている筈なのよ。他愛の無い事だけれど、例えば自分を飾る方法とかね。今のあの娘にはそういった処が全くと言って良い程無いわ。きっと忘れたのね。生きるのがやつとだったから――」

洪破天は目を見開いた。再び都での梁媛の姿が脳裏に浮かぶ。

あの時、梁媛は弟の梁発と共に食べ物求めて居酒屋に忍び込んだが、何も得られず失敗に終わったらしい。しかしその後の梁媛を見る限り、盗みという悪事を何の抵抗も無く働く様な子供には見えなかった。生きるにはそれしか無い――本当にそれしか無かったのである。

「そうじゃ。暢気に遊んでいられる様な状況では無かったからのう。綺麗に着飾って遊ぶだけで腹が膨れるか」

「フツ、それ、紫蘭に言っちゃって頂戴」

「いや、紫蘭と媛は違う。その……境遇が全く違うというのに比べるのはおかしい」

誰も傳紫蘭と梁媛を比べてなどいないが、洪破天は慌てた様子でそんな事を言った。

（紫蘭は関係ない。それよりも……何もせんで腹を膨らませておるのは儂ではないか）

第十一章 四

「媛は、とても美しいわ……」

王梨が、手に持った耳飾に視線を落として呟いた。

「これ、咸水の硬玉？ もしそうならとてもない耳飾だけれど、これについて何か聞いた事ないかしら？ 殷さんから」

急に耳飾に話を戻す王梨。洪破天は記憶を辿る。

「詳しい事は知らん。ただ、安くは無いらしいな。咸水の物かどうかは聞いてはおらん」

「硬玉にこれだけの傷を付けるなんて、どんな扱い方してたのかしらね。殷さんは」

翡翠の硬玉は強靱で、装飾品として加工するにも苦勞する程である。だがそれ以前にかなりの稀少価値を持つこの宝石を傷が付く様な状態にしておく事自体、王梨には理解出来なかった。

「殷さん……どうしてこれを媛にあげたのかしらね。昔からこれを持ってたらしいじゃないの。私は知らなかったけれど。殷さん自身がこういう物に興味があったとも思えないし、これは何か……思いつきの品？」

「それは――」

洪破天は一瞬言い淀み視線を泳がせたが、王梨がこちらをじっと見ているので、少し間を置いてから告げる。

「咸水で亡くした、妻の遺品じゃ」

「……益々分からないわ。どうして媛に？ こんな大事な物が、もういらなくなったとでも？」

「そんな訳があるか！」

急に洪破天は声を荒げた。だがすぐに次の言葉が見つからないのか、苛ついた様子で体を揺らす。王梨は驚いたが黙ったまま洪破天のその様子を見続けた。

「あの時……媛はじゃな……。何もかも失っておった。いつ、一

生懸命守ってきた弟までもじゃ。その媛が儂と共に新しい土地に行く
と決めた。その……媛を、励ます為じゃ。殷にとって大事な物だ
からこそ媛に……媛にやったのじゃろう」

あまり要領を得ない洪破天の言葉であったが、言いたい事は王梨
にも大体、察しはつく。しかしどこか違和感もあった。

王梨の記憶にある殷汪は、女性に贈り物をするといった姿を全く
想像し難く、また、妻の遺品を大事に持ち続けるという——一般
的にはごく普通の感情なのだろうが——そんな姿もかつての殷汪の
印象とは食い違う。それほど殷汪という人物の言動は、過去も、そ
して未来をも切り捨ててしまっているかの如く、刹那的なものであ
った様に思える。『情』というもののさえも殆ど表に出す事無く——。
(逆……だった？ 凄惨な過去があったからこそ？ 過去を切り捨
てたいが為の……)

「媛はな」

洪破天が続ける。

「もう他人ではなかった。儂と一緒に暮らす事に決めておった。な
らば殷にとっても身内になった訳じゃ。その耳飾は古くて今では見
栄えも良くないが、それには媛を思う気持ちが籠もっておる。殷は
それを形で表したかっただけじゃ。媛もその古びた耳飾を実際に着
けようとは思うまい。大事に持っておればそれで——」

「洪兄さん、私さっき言ったでしょう？ 媛は『着きたい』って言
ってるの」

「んん？ ……べ、別にそれならそれで良いではないか。その耳飾
を着けてはいかん理由など無いわい」

「私もそう思うわ。訊きたかったのは、これに手を加えても良いも
のなのかどうか……。このまま着ける訳にもいかないし、少し手入
れすれば昔の輝きを取り戻すでしょうけど、それでも媛には地味ね。
もう少し飾りを増やしてやれば凄く良い物が出来ると思うけど」

王梨はまた耳飾を持ち上げて光に当て、目を凝らす。たとえ傷だ
らけであっても紛れも無く本物の硬玉であり、目の肥えている王梨

はその真価を見抜いている。

「……媛が納得すれば構わんじやろう？」

「じゃあ、そうする事にしましょう。媛も喜ぶわ。とても大切な、思い入れのある物で我が身を飾る事が出来る――。とても幸せな事よ。あの子ね、耳飾はどうしてもこれをもって言って譲らないの。他は素直に従うのにこれだけはね。……殷さんから貰った物だから。」

「……良いではないか」

「殷さんの、かつての最愛の人が遺した品でも？」

まじまじと見つめてくる王梨に、洪破天は憮然として答える。

「そんな事は……媛には、まだ関係無い」

洪破天は、笑っている王梨の視線がこちらから自分の背後に向かって移動したのに気付いて後ろを振り返った。

「お爺様」

梁媛が広間の入り口の前で真っ直ぐに背筋を伸ばして立ち、姿勢を少し気にしているのか腰の前に置いた手の位置を微妙に変えつつ、洪破天に向かって嫣然と微笑んでいた。その立ち姿はまだどこなく、それでも初めて身に着けた美しい衣装を見せつけて少し得意気な様子の梁媛に、洪破天も微笑み返さずにはいられない。露になった肩と胸元も、この時はさほど気にはならなかった。

「媛、いらっしゃい」

王梨が呼ぶと、梁媛はゆっくりと長い裾の裾を揺らして歩き出す。すぐ傍まで来るまでのほんの少しの間、洪破天は笑みを浮かべたまま梁媛の挙動を見守っていた。

「私はこれからこの耳飾を直してくれるよう頼んでくるから。もう着替えて良いわ」

「あ、はい」

梁媛は今の衣装を気に入っているのか少し残念そうだ。だが王梨が耳飾を紫の手巾に包み直すのを見ながら目を輝かせている。この翡翠の耳飾を職人に預けて手を入れて貰う事を既に梁媛に言っ

るらしく、梁媛はそれが楽しみで仕方が無いといった様子だ。

「洪兄さん、今日はうちに休んでいって。一緒に夕食を。久しぶりでしよう、此処は」

「ん……まあそうじゃな」

「媛。昔は皆、此処で暮らしてたのよ。うちの家族も洪さんも、殷さんもね。家だけはまともなのにほんとに貧しかったわね」

「そなたの親に助けて貰ってのう。よう千尽と別れて実家に帰って来いと言わなんだものじゃ」

「言っただけだね。まあ私は幼い頃から家を出て生活していたから」

洪破天と王梨の会話を聞いている間、梁媛は改めて今居る廊下や此処から見える小さな庭に目を遣っていた。昔とはいつ頃だろう、当時も今と変わらない佇まいだったのだろうか。

（殷汪様も……）

「じゃあ、行ってくるから。すぐ戻るわ。媛、『お爺様』を奥に……案内はいらないわね」

王梨は梁媛に向かって言うのと洪破天にちらと視線を送ってから表に向かって歩いていった。

「フン。まあ『媛のお爺様』なら望むところじゃ。さ、行こうか」

梁媛には何の事か分からなかったが、洪破天が奥へと歩き出したので、急いでその横に付いた。

第十一章 五

その頃、樊樂らは紅門飯店に戻って来ていた。馬少風も一緒に居る。

「食事代くらいどうって事ないんだぜ？」

樊樂が馬少風に向かって言うが、特に意味は無い。せっかくだで夕食を食べさせてくれるというのを断るつもりはなく、それ以上は何も言わなかった。

「しかし、屋敷に泊めてもらって本当に良いのか？」

孫怜が訊くと馬少風は頷き、

「旦那様が良いと言った。問題ない。部屋は余っている」

「ふーん。用心棒風情の遙か昔の連れをあんな良い部屋に泊めてくれるなんて、あの旦那も太っ腹だ。しかも突然来たところで俺達がどんな奴らかも分からんだろうに。ま、怜は気に入られた様だけだな」

先ほどまで樊樂らは馬少風と話をする為に傳千尽の屋敷を再び訪れていた。その後暫くして何処かへ出掛けていた傳千尽が屋敷に戻って来たので改めて話をした。

傳千尽は孫怜が馬少風と共に呂州で殷汪と親しくしていたという話を聞くと大層喜んで呂州の事をあれこれと訊いてきた。すでに馬少風から聞いていてもおかしくないのだが、今まで馬少風はあまり呂州での事を話していなかったらしく、若い頃の仲間四人が殷汪に世話になった話をするると傳千尽は面白がった。

『咸水に居た頃、殷から聞いておった。呂州に面白い奴らがいるとな。懐かしい話だ……。そうか、おぬしがそうか』

馬少風もその一人な訳だが、傳千尽に言わせれば馬少風は『面白くはない』そうである。ただ、用心棒としては重宝しているようだ。孫怜はそれを聞いて、至極もつともな事だと思った。

（殷さんは、少風だけは別に教えていたからな……）

「いつ、此処を発つ？」

馬少風が孫怜に訊き、孫怜は樊樂に顔を向ける。

「なるべく早く、南に向かいたいな。うちの支店に寄りたいし、他にも仲間が徐を探してる筈だから、そっちの情報も得たい。こっちには何もねえしな」

「怜」

馬少風が孫怜の名を呼んだ。ここ最近、そう呼ぶのは樊樂くらいしかいなかったので、孫怜はどこか懐かしい気分になる。

「お前の探している秘伝書の話、もし殷さんの耳にも入ってるなら多分……探してると思う」

「……そうだな。無事でいるのなら」

孫怜は城南に居るといふ夏天佑と名乗る男が気になっていた。樊樂は絶対に夏天佑ではないと言い張っている。馬少風は『夏天佑は死んだ』と言っておりどうやらそれは確かな様なので、それならば城南の夏天佑は別の誰かであるのは当然であり、そして樊樂は殷汪の顔を知らない。加えてあの周婉漣の反応である。

『方崖の夏という者の話です——』

（俺が『夏天佑』とはつきり言ったのに否定しない。別の名なら言う筈だ。方崖の夏天佑？ 殷さんが総監なら、夏天佑は何だったと言うんだ？ いや、こんなややこしい事を考えるまでもない。あの夏天佑ではない方崖の夏天佑。こんな怪しい存在があるか。恐らくそれこそが、殷さんだ！）

孫怜の考えは殆ど確信に近い。実際にその顔を見た樊樂らが言う『若過ぎる』という事については、人の年恰好を量るにはどうしても見た目だけではある程度の幅が出るものだし、特に武芸者においては長く頑健な体を維持する為の特殊な内功の修養法などが知られており、ある程度の若々しさを保つ事は可能である。樊樂らの見たその者がどれほど若いのかは孫怜自身が見ない事には分からないが、自分達より一回りほど歳の大きい殷汪の方が多少若く見えるという

のは無きにしも非ずといったところである。

馬少風が体を傾けて孫伶に顔を近付けた。

「その殷さんを、探す者が他にも居る」

「他？」

「千河幫せんがほう」

「千河幫が殷さんを？ 何故だ？」

不意に出てきた新たな話に、一同は身を乗り出す。特に樊樂の隣に居る劉子旦は樊樂に体を押し付けんばかりにして聞き漏らすまいと目一杯首を伸ばしている。樊樂はその劉子旦を見て眉を顰めているが、それは当人の視界には入っていない様だ。

「千河幫は、北辰を離れる。いや、もう既に……」

「ヒヨウ局、だったな？ その話は少しだが聞いている」

「一年ほど前の、妙な事件だった。千河幫に属する緑恒りょくこうのヒヨウ局が景北港に向かう途中、賊に襲われて十数名が殺された。そのヒヨウ局の頭かしらと傳の旦那樣は親しくてな。うちの用心棒も数名同行した。俺もだ」

馬少風は緑恒千河幫に属するヒヨウ局の景北港行きの経緯と事件の概要を説明する。普段、話を細切れにしてそれを淡々と喋る事が多い馬少風にしては意外に丁寧で分かり易い説明だった。自らもその渦中に居たからだろうか、状況を事細かに話す。

「賊は北辰の手の者という疑いがある。そしてそれは未だ晴れていない」

「一年前……殷さんが死んだとされた頃か。殷さんが関わっている？」

孫伶の問いに馬少風は首を振った。

「いや、関係無い。今のところは……多分」

黙って二人の遣り取りを聞くだけだった樊樂もここで話に加わる。「北辰は千河幫が疑ってる事を知ったら、そりゃあぶち切れるだろうな。本当の処がどうであろうとな」

「知っているとは思うが、今のところ千河幫に対して何かする気配

は無い様だ。千河幫の方から何かしてきたら、その時は――」

「受けて立つ、か。でもよ、千河幫の今の勢力ってどうなんだ？」

北辰相手に何か出来るのか？」

「無理だろう」

孫怜が答える。

「幫会自体はかなりの規模だが、剣を交える抗争となれば北辰の敵ではなからう。千河幫は所詮、商団の集まりだ」

「幫主の范凱はんがいどのはかなりの使い手だそうですが？」

劉子旦が江湖の噂の一つを披露する。緑恒千河幫幫主范凱は名うての剛拳の使い手として名を馳せている。ただこれは特に江湖の噂に耳が聡い劉子旦でなくとも皆が知っている事だった。

「確かに。他にも千河幫の中核を成す幫主の配下には使い手が多いと聞いているが、しかしそれだけではな」

「こんな噂もあるぜ？ 北辰がもしこの先、他にやられて滅ぶとしたら相手は武林じゃなくて、朝廷軍による制圧だろうってな」

「樊さん！ もう少し声を落として下さいよ。こんな処で……」

劉子旦はそっと辺りを見回したが、樊樂の話に気付いてこちらを見る者はどうやら居ない様なので安堵した。劉子旦は樊樂に言ったのだが、孫怜も少し声を落とす。

「ただ、幫主の范凱どのは人望厚く、武林の各派とも広く親交があるそうだ。北辰に近いにもかかわらずだ。さすがに反北辰教の主力とも言える真武剣派とは距離があったが、今は違う。これは予測がつかんぞ？ 何がどうなるか……」

第十一章 五（後書き）

※ヒョウ局Ⅱ＜金票＞局

第十一章 六

「で？ その千河幫は殷汪捕まえてどうするつもりなんだ？ やっぱり殷汪がヒョウ局を襲ったと考えたんじゃないのか？」

樊樂が訊ねると馬少風は即座に首を振った。

「違う。范凱幫主と殷さんは知った仲らしい。殷さんは北辰の内情を知っているから、方崖に探りを入れるよりは北辰を離れた殷さんを探した方が良いんだ」

「方崖に人を送り込むのは危険過ぎるしな。まあ、まず何も掴めんだろう」

孫怜がそう言って目の前にあった茶に手を伸ばそうとしたその時だった。不意に店内にどよめきが起こる。何事かと振り返ると、こちらに向かって駆け寄ってくる数人の男達の黒い装束が目飛び込んできた。真っ直ぐこちらにやって来ているではないか。

(何だ？ ……くっ！)

孫怜と馬少風、樊樂らは傍に置いた剣を掴むと立ち上がる。だが黒装束の男達も素早く、その時には既に目の前に並んでいた。

男達は八名。皆、全く同じ黒装束で、腰の帯は黄で揃っていた。

孫怜らの前に壁を作る様に横一列に並んでこちらを睨みつけている。腰に剣を下げているが、まだそれには触れていない。

「何か用が？」

馬少風が一步進み出ると男達に向かって言う。孫怜らは客であり自分は傳家の用心棒である以上、自分がまず対応すべきだと考える。すると中央に居た二人がずっと横に体を退く。そしてそこに黄色の長衫を纏った老人がゆっくりと現れ、列に加わった。

「余程、我らは嘗められておるようだの」

老人は目を細めて馬少風をはじめ、可龍、比庸に至るまでじっくりと睨めまわす。細身で皺が深く、顎に蓄えた髭は全て白い。纏っている黄衫はかなり良い物らしく身分の高さを窺わせた。

（聞く必要は無いな……。北辰の幹部か。黒装束は配下。方崖の間か？）

馬少風の後ろで、孫伶は老人と男達の様子を注意深く観察する。

「全く、信じられぬ」

老人は引き続き独り言の様に言うが、視線は孫伶に戻りじつところを捉えていた。

「何なんだ？ 用があるならさっさと――」

「樊！」

樊樂は意味不明な言葉を吐く老人に苛ついて口を開いたが、即座に孫伶がそれを遮った。

「本気で言っておるのか？ こうまで堂々とされるとこちらがちと不安になるのう」

そう言ってフッフツと微かな笑い声を洩らす老人。そして直後、その唇が引き締まる。

「捕らえよ」

ぽつりと呟く様な命令だった。だが、黒装束の男達はその声に弾かれるように動作した。

「やめろ！」

馬少風の反応も早い。男達が前に進み出たその瞬間、老人の両脇に居た二人の胸を突き飛ばした。その腕が余りにも速く、突き飛ばされた二人だけでなく老人と残りの男達もほぼ同時に後退する。まるで馬少風を中心に波紋が広がるかの様に揃っていた。その隙に孫伶が馬少風の隣に進み出る。

店内に居た客達は不安げな表情で遠巻きにして様子を窺っていたが、不意に動きがあったので皆驚きの声を上げ店内は再びどよめいた。しかしすぐに動きが止まったのを見るとまた口を噤んで訝しむ。

（馬の奴……何をしでかしたのだ？）

客達の殆どは黒装束が北辰の手の者だと知っていた。

老人は馬少風をじろりと見遣り、

「馬少風、とか申したな？ 匿えばお前もこの者達と同じとみなす」

「何の事だ？」

馬少風には意味が分からず怪訝な顔つきのまま老人を見返した。

「……少風。すまぬ。俺達が馬鹿だった」

馬少風の問いに応じたのは隣に居る孫伶だった。馬少風はその怪訝な顔を孫伶に向けるだけだったが、老人はにやりと笑う。

「ほう、そうか。阿呆であったか。それなら納得だの。そうでなければこの様な処に居られる筈が無い」

「伶、何が――」

馬少風が孫伶に訊ねようとした時、老人が喋り始める。

「その者らは、我が教の者を殺めた。五人もだ。だのに逃げもせずこの東淵で酒を喰らっておるのだからう。もしや我が教に挑むつもりかの？ 六人での。フッフツ」

「へっ……そういう事か。そりゃあ確かに、俺達は大馬鹿だったな……」

樊樂はようやく気付く。此処に来る前、至東山しとうざんの麓で襄統派じょうとうはの弟子が北辰教の者達に絡まれているのを助け、結果、その北辰教の者達を殺した。その場に居た北辰教の人間は五人で、孫伶がその全てを始末したのだが、そこは街道で人の往来に近過ぎた。襄統派の本拠が近いというのに絡まれていた二人の弟子を助けに同門の人間が一人も出て来ないのには苛立って悪態をついた樊樂だったが、北辰教の人間若しくはそれに近い者は居たという訳だ。仲間が殺されれば報告するのは当たり前である。

（くそっ……何て事だ。こんな大事な事をすっかり忘れちゃうなんて！ しかも俺だけじゃなく伶も……子旦！ お前くらい思い出しでも良いだろうが！）

「我らはこの者達を方崖へ連れて行くからの。解ったらお前は下がるが良い」

老人は手を持ち上げて振り、下がれと言う。だが、馬少風は動かない。馬少風には解らず、動けなかった。

「少風、俺達は捕まる訳には……」

孫伶は老人を見つつ、隣の馬少風に聞こえる程度の小声で言う。
すると馬少風は頷く仕草を見せた。

「なら逃げよう」

後ろで殆ど怯えに近い表情を浮かべている可龍と比庸に胡鉄がそつと体を寄せ、呟く。

「いいか。俺達が動いてもお前達はじっとしている。俺達は奴らを引き付けて表に向かう。お前達は様子を見てそつとあっちの客に紛れ込むんだ」

「でも――」

そこで胡鉄は口を噤んで二人から離れ、樊樂と劉子旦の傍に立つ。ほんの一瞬、視線を交わした。

孫伶は一度後ろを振り返り、サツと樊樂らに視線を送ってからまた前を向き、続いてはつきりと声を発した。

「少風、すまない。お前には隠していたんだ。俺達は北辰教の者を――」

ゆっくりと一步踏み出す孫伶。同時に樊樂らも同様に前へと進む。黒装束の男達はこちらを睨みながら身構え、再び一気に緊張が高まる。

馬少風は孫伶の言葉に戸惑い、北辰教の者達と孫伶を交互に見遣るだけである。

「おい、伶……何を――」

「ウーン？」

不意に短い唸り声が辺りに響いた。それは新たな、太い音だった。「これはこれは、謝長老しゃではないか？　こんな処に来られるとは珍しい」

老人が店の入り口の方を素早く振り返り、黒装束の男達は孫伶らを注視しながらも声の方も気になって戸惑っている様だった。老人が声の主を見つけ、喜色満面で甲高い声を出した。

「おお、劉毅りゅうぎよ。これは良いところに来たの。教主の召集に間に合

つ
た
か
」

第十一章 七

（劉毅？ 劉毅だと？）

孫怜が見遣ると店の入り口からこちらに向かつて来る者がある。筋肉が盛り上がるがっしりとした体軀で、肌の色を除けばその姿は樊樂と良く似ていた。ただ樊樂ほどの上背は無く、孫怜とさほど変わらない様だ。

男の歩の進め方を見ながら孫怜は眉を顰めた。

（これが、劉毅か。九宝寨きゅうほうざいの、そして北辰七星の一人。……なるほどな）

「まだ十日もある。早過ぎたかな？」

「フツフツ。ゆるりと行けば良い。つい先ほど、鍾文維と周婉漣の二人が此処を発ったところでの」

「それは意外だったな。周はちゃんと戻って来た訳だ」

「フツ、あやつ、ちゃんと土産を用意しておれば良いがの。何も無ければ張新どのの覚えも悪いわな」

「……で、謝どのは此処で何を？」

「フツフツ、あれよ」

老人、北辰の謝長老は孫怜の方を顎で指し示す。

「我が配下を殺しおった。此処で始末しても良いが、一応方崖に連れて行こうと思つての」

「申し訳ないが」

孫怜は朗々と気を込めた声を発し、それが辺りに響き渡った。

「我らは大人しく従う気はござらぬ。たとえそちらに七星劉毅どのが加わりうとも何もせずに捕まるなど、フツ」

孫怜が不敵の笑みを浮かべたのには周りの黒装束の男達、そして見ている客達を大層驚かせた。

（劉毅様と知った上であの様な口が利けるとは。何者だ？）

樊樂らもこれには驚いた。孫怜の言葉は殆ど挑発に近い。

（おいおい、こいつらは怜の目から見れば大した事無いってか？

へッ、あれが劉毅ってのか。まあどれだけ出来るか見てやるか）

敵は劉毅を入れて十人となった。この人数相手に敵愾心を煽る様な事を言うからには何らかの勝算があるからに違いないと、樊樂は考える。

謝長老は劉毅の隣に立って孫怜の方を向き、

「やはり、阿呆だの。この状況でどう逃れる？」

「この店には申し訳無いが、この場でそちらを切り伏せる他ありませんぬな」

孫怜は微笑を浮かべて柔らかい表情だが、声に込める内力は増している。黒装束の男達はその声を聞いて焦り始めた。

（この男、単なる素浪人風情では無かった——）

「フッフッ、気が変わった……。よし。殺せ！」

謝老人が今度は鋭く叫び、手下達はその場で一斉に剣を抜いて孫怜に切っ先を向ける。そして八人同時に短い気合を発すると孫怜目がけて踏み込んだ。

八本の剣が全て孫怜の体を狙って突き出される。だが孫怜はまだ剣を抜いていなかった。

「怜！」

「孫さん！」

八つの切っ先が体に到達する直前、孫怜は気合一閃、両の腕を跳ね上げた。次の瞬間、迫っていた切っ先は全てあらぬ方向へと弾かれる。

「うわっ！」

男達が驚愕と狼狽によって体勢を崩し、たたらを踏むその間に、孫怜はその場から一步も動く事無くゆっくりと手にしていた剣を抜いた。

その動作を見た男達は混乱からようやく孫怜の手にある剣に思い

を致し、（今のは鞘で払ったのか）と察する。孫怜の腕はそれほど速かった。男達は慌てながらも間合いを取って再び身構える。

「怜、今のは……？」

馬少風が小声で訊ねた。孫怜はニヤリと笑うと、

「さすがにただの真似だけでは天佑の様にはいかな。天佑なら全て折ったろう」

「いや、あれを全ては無理だと思う。殷さんならともかく――」

「かからんか！」

謝長老の怒声が飛ぶ。孫怜と馬少風が暢気に会話しているのを見て一気に頭に血が昇った様で、先ほどの余裕ある表情は消えてしまっていた。

黒装束がじわりじわりと孫怜と馬少風を囲むように左右に広がっていく。が、踏み込める隙はそうそう見つからない。そうしているうちに馬少風、樊樂らも剣を抜いて構え、対峙したまま沈黙が続いた。

「これは手ごわい相手のようですね」

謝長老の隣で劉毅は腕を組み眺めていた。

「かなり出来る。謝どの、大事な配下を失ってしまうのは勿体無い」
劉毅は大袈裟に首を振って見せ、まるで他人事のように暢気に構えている。謝長老は黒装束の八人が一人も動こうとしないのを見ながら頬を引き攣らせていたが、怒りに耐え切れなくなったのか再び怒声を響かせた。

「劉毅よ！ あいつらを殺せ！」

謝長老は腕を伸ばし、真っ直ぐ孫怜を指している。孫怜らは黒装束の男達と対峙する姿勢のまま劉毅の動きを警戒したが、そちらには何の動きも無い。そしてまた沈黙の間。

「劉！」

いつまで経っても劉毅に動く気配が無く、謝長老が劉毅を睨みつける。すると劉毅も腕を組んだ体勢のまま謝長老を横目で見ていた。

「劉毅よ！ 聞こえんのか！」

「いや、聞こえるが」

「あの者らを――」

「それは、教主の命か？」

「……なに？」

「それとも張新どのかな？ 或いは、謝どのの独断か？」

「何を言っておる？ よいか、あの者らは我が教の敵だ！ 命があるが無かるうが討つのが当然であろう！」

「敵……か。この者達が殺したのは――」

劉毅は話しながら歩き出した。そのまま黒装束の男達の前まで出て孫怜の真正面に立ったので、男達は後ろへと下がる。劉毅が孫怜らの相手をするのだと思っていた。孫怜らもそのつもりで、囲んでいた八人から劉毅一人へ向けて体勢を変えた。すると劉毅はそれを無視するかのように孫怜の目の前で腕を組んだまま謝長老を振り返った。

「至東山近くで襄統の者に絡んでいた奴らだな？」

「……何をしておったかなど知らぬ！ とにかく我が配下を五人殺した！」

謝長老は苛立ちを隠さずに甲高い叫びの様な声を上げた。

「偶然、俺もそこに居合わせてな。おっかなくてちよいと覗き見ていただけなんだが」

くっくっ喉を鳴らしながら、劉毅は笑った。

第十一章 八

劉毅にこちらに攻撃を仕掛けてくる様な気配は無い。謝長老を見る時などは背中をこちらに見せたりもするが、それが隙なのかどうか、孫怜にも判断がつかなかった。

「謝どの。この者達が殺したと言う奴らは襄統派の若い尼僧二人に絡んでいた様だ」

劉毅はその場面を思い返しているのか、顔を上に向けてあちこちを眺めている。孫怜は劉毅の言葉を聞いて考える。

（本当にあそこに居たというのか。だが……偶然は無いな。俺達を尾けて来た？ まさか。この劉毅が俺達の何に目を着ける？ 秘伝書を探しているから？ それなら真武剣派……そうか、真武剣派も居たではないか。真武剣の郭かく。あれだ。そっちを尾けていたんだな）
「まともに喧嘩も出来そうにない若い女弟子だぞ？ 襄統の連中が駆けつけるかと思ったんだが、誰も来なかった。だが変わりに真武剣派が現れた。それは聞いたかな？」

劉毅は謝長老に訊ねた。謝長老は鼻から勢良く長い息を吐いて、ただ睨み返すだけだった。

「この者達が襄統の弟子を助けなかったとしても、あんたの配下は真武剣派にやられていただろう。郭斐林かくひりんが居たからな。敵う訳が無い」

（さすがに七星でも真武剣派の高弟の腕は認めるということか？ それとも冗談か？ 確かにあの湯長老とうとやらではあの郭どのには到底敵うまいが）

孫怜は七星劉毅の口から郭斐林には敵わないという言葉が出たのを意外に思った。無論、自分が敵わないと言っているのではなく、あくまで謝長老のあの手下達では、という意味なのは理解している。ただ、北辰教の七星は武林でもその武芸は傑出していると噂されており、また北辰教の武林における影響力や常に強気な態度を示すそ

の姿勢によって、七星という特別な七人の印象も人々の中に勝手に作られていく。冷徹無比の殺人者。他を寄せ付けないその自らの武芸によって立ち、それ故に武林の他派の名手と言われる使い手さえ歯牙にもかけない。これは極端ではあるが、江湖の七星に対する印象はそういう傾向にあった。それは今まで一度も七星を見たことの無かった孫伶も同様である。

劉毅は続ける。

「真武剣が襄統の弟子を助けるのは当然だ。大人しく引き下があれば真武剣もそいつらを殺さなかったかも知れないがね。この者達がやらなければ、真武剣。真武剣も居なかったなら――、俺が始末しただろうな。あんたの手下共を」

「何だと！」

敵も味方も無い。この場で劉毅を囲んでいる者達は皆、その言葉に驚いた。一体どういう事なのか理解し難い。だが劉毅は平然として、謝長老を見遣って言う。

「張新どのにはこの件、もう報告したのか？」

謝長老の顔は一層、険しくなる。

「この様な些細な事、言う必要は無いわ」

「フッ、俺はまた、あんたはすぐ報告するのかと思っていた。『襄統、真武剣の二派に喧嘩を売っておきました』とな。張新どのはお褒めの言葉を下さるかな？」

謝長老は劉毅に対して敵意をむき出しにするかの様に怒りの目を向けている。

「貴様……」

「ハハ、冗談だ。だが、あの者達のやった事は冗談では済まん。真武剣と襄統を刺激するような事になればこれは厄介だ。もうしてしまったがな。こうなったら向こうの出方を見るしかない。末端同士のちよつとした喧嘩って事で水に流して貰いたいものだが、さて――？」

「やられたのはこちらの方じゃ！」

「なら張新どのお伺いを立ててみるかね？ 報復しても良いかな」

劉毅の謝長老を見る目つきが鋭く変わり、謝長老は口を噤んでまた荒い鼻息を洩らした。

この遣り取りを見ながら孫伶は思いを巡らす。

（今、北辰は真武剣派や襄統派とは事を構えたくないようだな。確かに大事になるからな。……教主の名は出てこないがやはり今の北辰の中心は例の張新という奴なのか。教主を操って私欲を満たすだけの輩かと思っていたが、この劉毅の話からすると意外とまともな人物かも知れんな）

謝長老が何も言えずに顔を顰めるのに対して、劉毅はまた微笑を湛え、

「謝どのはその場を見ておらんのかから、配下の、しかも末端が何をしたか知らぬのも当然だ。ま、そういう訳でこの件はこれ以上表沙汰にはせぬ方が良いと思うが。あとは張新どこの耳に届かぬ事を祈るばかりだ」

そう言った後、不意に孫伶の方へと向き直った。孫伶らは思わず体を強張らせる。

「これ以上こちらに関わらず去るのなら、我ら北辰はお前達に用は無い」

「……我々はただ、あの尼僧二人を助けたかっただけ。しかし北辰教の方々は強引にその二人を捕まえようとしたので剣を抜くまでに至ってしまったのです。あの者達が北辰教だろうが何だろうが、関係無かった」

「そうか」

劉毅がまた謝長老を振り返る。謝長老は暫くこちらを――劉毅なのか孫伶なのかは判らないが――睨みつけていたが、フンと鼻を鳴らしてから纏った黄衫の袖を翻して踵を返し、足早に去って行く。黒装束の男達は孫伶らの方を向いたまま後退りしつつ剣を腰に収めると、一斉にその後を追った。

劉毅は謝長老と黒装束の男達八人が店の外に消えたのを見届けた後、店内に居た客達を見廻した。

「すまなかったな。さ、引き続き大いにやってくれよ」

客達は暫くは動かなかったが、少しずつ自分の居た席へと戻っていく。

「さて」

劉毅は孫怜の方に向き直ると、ようやく組んでいた腕を体の両脇に下ろす。

「剣を収めてもらえるかな？ 出来ればその酒を奢ってくれると嬉しいんだが」

孫怜らの居た席にある酒壺を指している。孫怜が剣を収め、他の者達もそれに習う。

「そうですね。我々は、劉毅どのに助けて頂いたことになる。安酒でよろしければ……」

劉毅はニヤリと笑うと先に席に着いた。樊樂が孫怜に寄り、耳打ちする。

「おい、いいのか？ この男……」

孫怜はそれには答えず、ただ頷く仕草を見せただけで劉毅の隣に腰を下ろした。樊樂その他もそれに続く。

「俺が言うのもなんだが、災難だったな」

劉毅は勝手に置いてあった酒壺を掴み、近くの酒杯に酒を注ぎ始めた。孫怜はその所作を観察しつつ、

「いや、我々もどうかしていました。何も考えずこの東淵に来ればこうなるのは当然の事」

「まあそうだな」

劉毅は酒杯を呷る。

「しかし、何故あなたは我々を助けて下さったのでしょうか？ 先ほどの話では、方崖には知られない方が良いと……。ならば此処で我らを始末しても――」

「そいつは俺が困るからだ。俺は、あんたをずっと尾けてきた。都からな」

第十一章 九

樊樂らは一斉に顔を劉毅に向けた。都から尾けてきていたとは全く知らず、皆、一様に驚きの表情をみせる。都から此処までは二十日ばかりかかってしまったのだが、道中そのような気配は一切感じなかった。相手が劉毅であったから——そう言えなくも無いが、今となっては何も知らずに居た怖さというよりは、どこか妙な悔しさの様なものがこみ上げる。

孫伶だけは劉毅の言葉には反応を見せず、卓上の一点を見つめていた。

「我らは、武林の人間ではありません。北辰七星の劉毅どのが我らを尾けるなど思いもよらぬ事。一体、我々の何があなたの目に留まったのでしょうか？」

「そうだな。一つは——」

劉毅は持っていた酒杯を置くと、再び自分で注ぎ始める。

「稟施会がこちらに来る事はそう無いだろう？」

「ど、どうして稟施会だと？」

樊樂は思わず声を上ずらせた。劉毅は樊樂をちらと見遣り、

「それはお前、都の稟施会の屋敷から出て来たからだろうが」

「北辰は……稟施会まで見張っていると……？」

「ハッ、北辰は稟施会などどうでも良い。何か、儲け話でもあれば付き合いまするだろうがな」

劉毅は樊樂の方を見ながら、酒を満たした酒杯をずっと孫伶の前に差し出した。劉毅が最初に掴んだ酒杯は孫伶が使っていた物だったのだ。孫伶はその酒杯を持ち、劉毅に訊ねる。

「ではあなたは何故、都の稟施会へ？」

「用があった訳じゃない。見張ってもいない。だが稟施会が東に向かうというのには興味がある。滅多に無い事だしな。こっちでは商いはしておらんだろう？」

劉毅は孫伶ではなく、樊樂に向かって訊く。樊樂は稟施会の人間であり孫伶は違うという事を把握しているらしかった。樊樂は頷く。

「だがそれは俺個人の興味だ。フフ、俺の稼業は知っているか？」

劉毅といえば九宝寨。その首領であった筈だ。つまり盗賊集團の頭である。そして稟施会は江湖でも屈指の大商団。確かに繋がりはある気がする。嫌な組み合わせではあるが。

「ま、それは殆ど関係無い。ま、ついでなんだが。俺のお目当ては、呂州の孫伶」

不意に劉毅の口から自分の名が語られ、孫伶はさすがに体を強張らせた。口許に運んでいた酒杯が唇に触れる寸前で止まる。

「……益々、分かりませんな。あなたが私をご存知とは」

「真武剣が探している秘伝……探しているのはお前達も同じの様だが、お前はもう持っているだろう？」

劉毅は体を捻って孫伶の方を向きじっと見つめてくるが口許は笑っていた。孫伶にはどういう意味なのか解らなかったが、とりあえず北辰は真武剣派の追う東涼の秘伝書しゅうりょうの件を把握しているという事は確認出来た。七星劉毅が知っているならば既に方崖も知っているか、若しくは未だ伝わっていないくとも今から方崖に戻るらしいこの劉毅から伝えられるだろう。

「私が？ 秘伝書を？」

劉毅は答えず孫伶を見たままだ。

「持っているならわざわざ此処まで来る必要はなかった……」

孫伶がそう言うと、劉毅は視線を孫伶から僅かにずらした。

「馬少風、だったな。久しぶりだな。元気か？」

劉毅が急に馬少風に向かって話し掛けたので、皆、今度は馬少風を見る。

「……変わらない」

馬少風は劉毅に顔も向けずにぼそりと言う。馬少風が劉毅に会うのはこれが二度目。一度目の時の事は今でも良く覚えている。

「そうか。あれから、あそこには行ったか？　俺は一度行った。通り掛ったついでだが」

劉毅のこの言葉を聞いて馬少風はようやく顔を上げて劉毅を見た。だが何も言わない。

孫怜や樊樂らには何の話か解らない。何も言えず皆、黙っていると、劉毅の視線は再び孫怜に戻る。

「一年近く前、俺は殺されそうになってな。フフ、あれは本当に危なかった」

（殺されそうに？　この男が一体、何に殺されそうになるというんだ？）

「もし天佑の体が何でもなかったなら――」

馬少風が呟く。すると劉毅は、

「フツ、そうだな。俺は確実にやられていた」

そう言つて目を閉じ、フーツと息を吐く。

孫怜らは劉毅と馬少風を交互に見遣るのに忙しい。しびれを切らした樊樂は馬少風に小声で訊ねる。

「天佑って、夏^かの事か？」

すると馬少風が答えるより先に、劉毅が口を開いた。

「そうだ。俺はあの時初めて、殷汪の『蛇殺し』の剣の片鱗に触れた。殷汪自身は俺にそれを見せた事は無かったが、弟子がそれを見せてくれたという訳だな。まさか弟子であれ程とは思ひもしなかったが」

弟子とは天佑の事かと思ひながら、孫怜は眉を顰めて俯いた。

（天佑と闘った？　天佑は殷さんと共に北辰を去って……それをこの男が追ったという訳か）

夏天佑と七星劉毅には何の接点も無い様にも思えるが、夏天佑が景北港で暮らしていたと馬少風から聞いている孫怜は、夏天佑は殷汪が方崖に居た頃も付き合いを続けていた筈だと考えており、その事から殷汪が方崖を出た折に一緒に居た筈の夏天佑と劉毅が遣り合ふ事になったのだろうと想像する。しかし『蛇殺し』とはどういう

意味かすぐには解らず、考えを巡らす。

（蛇殺し？ 蛇……もしや天棲蛇の事を言っているのか？ 何故この男は天棲蛇を知っている？ ……確かに天佑の剣はその全てが殷さんから教わった『蛇殺し』の剣。『対天棲蛇剣』なんだからな。それこそが殷さんの、本懐の剣だ。……天佑のものはその片鱗には違いない、か）

「天佑は弟子じゃない」

馬少風は相変わらずぼそりと呟く様に言うだけである。

「似たようなものだろう？ 馬よ。それに、孫？」

劉毅の呼び掛けに孫伶は顔を上げた。

「孫伶、お前が殷汪から教わったのは『蛇使い』の剣の方だな？

東涼天棲蛇剣。どうだ？」

もはや孫伶は驚かない。この劉毅は殆どの事を知っている――。残っている疑問はそれを何故、何の為に知っているのかという事だ。仲間であった呂州の四人は昔、殷汪と縁があったというだけで、今では武林の要人になっているという訳でもない。ただの江湖の民である。北辰に目を付けられる様な事は何一つ無い筈なのだ。

「夏天佑が今際に俺に教えてくれてな。穆ぼくという名の武林のご先輩の天棲蛇剣の存在を――」

「天佑は言っていない！」

馬少風が珍しく強い口調で、劉毅の言葉を遮った。顔を顰めて劉毅を睨んでいる。

第十一章 十

「……ああ、分かっているとも。あの時は意識がはっきりしていたかどうかとも怪しかったが、夏天佑が言いたかったのは、殷汪こそ最強、それに尽きる。だが、それはまあ初めて聞く言葉でもなかったもんでな。あいつが遺した穆という名に興味を引かれたのだ。それで色々調べていくとお前達にも繋がっていた。夏天佑に孫怜、馬少風、それから……慕容嬋ぼようせんか。四人とも何かしら殷汪に仕込まれているそうだな。……何と呼ぶべきかな？ 若き殷汪の……フツ、四天王か？」

四天王——自分の言ったその言葉がおかしかったのか、劉毅はくつくつと喉を鳴らして笑った。

（嬋の事まで知っているのか。だが、知ってどうする？ 殷さんが見つからないから俺達からその武芸を聞きだそうとでも？）

この劉毅のお陰で謝長老は去り幾分安堵したもののだが、劉毅には別の目的があつてわざわざ我らを生かす選択をしたのではないか？

北辰教徒を殺めたのにこれを方崖には報告するなどは、この劉毅自身が自分達に用があるからで、連れて行かれては困るからでは？

と、孫怜は徐々に不安を募らせる。そしてそれはほぼ当たりに違いない。そう考えると一難去ってまた一難。謝長老の用向きの方が単純明快、こちらのやる事も一つだけで、不安という類のものはこれほどは無かつただろう。それにしても劉毅は意外にもよく喋る。

「俺が興味があるのは殷汪の持つ全ての武芸だ。ならばお前達の事も是非知っておかねばと思つてな。折角会ったんだ。話を聞いておきたいと思つたまでだ。これからお前達について行きたいくらいだが、北辰での役目もあるんでな。今から北へ行かねばならん。残念だ」

「我らは秘伝書と人質を持ち去った者を追っているだけです。一緒に緒しても特に何も——」

「そうかな？ お前達の行き着く先には、必ず殷汪も現れる。違うか？」

劉毅の問いに、孫伶は黙り込む。きっとそうであろうと孫伶は考えていた。真の天棲蛇剣を最も求めているのは殷汪の筈だ。厳密には真の天棲蛇剣を使う人物――。そんな人物は今亡き穆ご先輩だけれど殷汪は語った。人物が居ない今、その秘伝書こそが『真』に最も近い存在なのかも知れないのである。

劉毅は黙っている孫伶の前に置かれていた酒杯を掴み、一度中を覗き込んでからまた酒を注ぐ。

「しかし、殷汪とその周辺はやたらと複雑な様だな。いろいろと調べたが、どうもはっきりとしない。お前達は殷汪の生い立ちなど聞いた事があるか？」

劉毅は孫伶と馬少風に言っている。先ほどから樊樂ら稟施会の面々は一言も喋っていない。それもその筈、殆どの話が理解出来ていなかった。馬少風は相変わらず口が重く、孫伶が劉毅に応じる事になる。

「いや、あまり詳しくは……」

（我らの知る事全てを此処で聞き出そうとでもいうのか？）

「穆という人物についてはどうだ？ お前達四人の中で殷汪が『蛇使い』に選んだのはお前だけだそうだな。何も聞かなかった訳があるまい？ 『蛇殺し』の側の夏天佑も知っていたのだからな」

「穆ご先輩がよく用いた技の変化など、そういった事は時折聞きましたが、どのような人であったかは余り……」

「ふむ……そうか。それはそうと、もう一人の『蛇殺し』はどうした？ 呂州か？」

劉毅は孫伶の瞳を覗き込んでくる。その様子に孫伶は僅かに眉根を寄せた。

「……長く会っていないので居場所は知りませぬ」

（そこまで知っていて、探さなかったとでも言うつもりか？ 何処に居るのはこちらが知りたい。本当にこの男が見つけられなかつ

たのだとしたら……一体、何処で何をしているんだ？ 嬋——」

「そうか。夏天佑は死んでしまったし、『蛇殺し』はあと一人だけ。是非そっちからも話を聞いてみたいものだ」

劉毅の口許に笑みが浮かび、そしてすぐに消えた。

「一人じゃない」

馬少風の声だった。

「んん？」

「あんたの言う『蛇使い』は穆ご先輩のものだ。しかし『蛇殺し』は殷さんの編み出した武芸。殷さんは生きている。なら殷さんを見つけて聞けば良い」

「……フッ、それはそうだ」

劉毅は唇を突き出して肩を竦める。

「勿論これからも探す。北辰の用が済んだらな。……もつといういろい
ろ聞きたい事はあるが、お前達とはまた会うだろう。今度は別の地でな。……そこに殷汪も居ると尚良いな。では、もう一つだけ聞いて最後にしよう。……稟施会が退屈そうだ」

劉毅が樊樂らを見遣ると、樊樂は視線を逸らして後頭部を撫でながら、

「いや……別に……」

と小声で言ったが、暫く黙っていたので声がかすれた。劉毅は樊樂に言う。

「ああ、そうだ。一応こちらからも聞かせてやろう。北辰は、秘伝書探しはやらん」

「……え？」

「お前達の邪魔はせんという事だ」

「それは……また、意外というか……」

樊樂の言葉はぎこちなく、劉毅に対してどんな口の利き方をすれば良いのか迷っている様だ。敵の様でもあるし、しかし今の劉毅の話の内容や話し方の雰囲気を見るとそれでも無さそうでもある。ただ、折角の機嫌を損なう事だけは避けなければならない。

（怜も随分丁寧に話してるしな……。馬公は……。特別か）

樊樂がそんな事を考えている内に孫怜が話し始める。樊樂は内心、安堵する。

「北辰教は興味を持っていないと？ 真武剣派が手に入れようが――」

劉毅は肩を竦める仕草を見せ、

「フン。そんな事は我慢ならん。俺はな。お前達が是非手に入れてくれ」

「……我らはもし手に入れたなら持ち主に返すだけで、お見せ出来るかどうかは……」

「ハハ。まあそう深く考えるな。まだ所在も分からのだぞ」

「で、あなたはそう思っておられるのに、北辰教としては動かないと仰るのですか？」

「ああ。動かん。張新――、張新は知っているか？」

「……噂程度は」

「北辰教は今、張新が動かしている。そしてその張新は秘伝書に興味がない。そもそも武芸の類にも全く興味を示さない。フツ……。まあ必要ないしな。大勢身辺警護を従えているからな」

「しかし、その……北辰教は真武剣派に対抗して……」

「そうだな。互いに相手の邪魔をするというのが伝統という訳だ。だが、これからはそれも無くなっていくだろう。暫くはな」

「何故です？ 張新どのにそういう気が無いからでしょうか？」

「ああ。ま、その辺はあまり俺が洩らすのも宜しくない。とにかくだ。北辰教は秘伝書を追う事はない。だが、これ以上不用意に、こちらに近付くのは止めておけ」

劉毅が言った後に樊樂に顔を向けたので、樊樂は何も言わずにとりあえず頷いておく。

「あー、話を戻したいが、何だったかな？」

「最後に一つ訊く、と」

「おお、そうだ」

劉毅は頷きながら勢い良く自分の膝を叩く。樊樂がよくやる仕草に似ていた。

第十一章 十一

卓上に肘をついて顔の前で指を交差させ、考え事をする様にしばらく間を置いた。それから孫怜、馬少風へと顔を向け、視線を配る。

「夏天佑の腕は、殷汪の域に達していたと思うか？」

「……私は呂州に居た頃しか知りませんので。少風、どう思う？」

孫怜はそれだけ言って、馬少風を見遣る。

「どっちだろうと、あんたは天佑の敵ではなかった」

馬少風の言葉に遠慮は無い。劉毅を見る事はせず、正面を向いたままそう言った。

劉毅は意外にも穏やかな表情で大きく頷く。

「……その通り。では、質問を変えよう。殷汪が教えた武芸、それをそのまま会得する事は可能だと思うか？ 孫。例えばお前が教わった『蛇使い』の剣、それはいつか殷汪のそれを越えるか？」

「まさか」

孫怜は首を振り、フツと息を洩らす。

「全てを教わった訳ではありませんので。殷さんは……『こんな剣がある』と言い、一部を私に聞かせ、見せてくれただけ。仕事の合間に……」

「ほう。それだけで、そこまでになるか」

劉毅は訊ねた訳ではなく、感心したかの如く独り言の様に呟いた。

「ただ、天佑は――」

劉毅は孫怜の言葉にすぐさま反応して顔をこちらに向けてくる。

「思い返せば、我ら他の三人よりは少しばかり特別であったのかも知れません。殷さんにとって。資質があると見込んだのでしょうか」

また劉毅は頷く。

「あの夏天佑が見せた剣はかなり変わったものだったが、他にあれと類似するものの存在を俺は見た事も聞いた事も無い。俺達、七星とか呼ばれている連中は皆、殷汪と剣を交えた事がある。一度だけ

だがな。その時の殷汪は夏天佑の見せたものとは全く別の動き……異なる剣だった。あっちは『蛇使い』の方だったのかも知れんな」

孫怜らは当然、その場面を見ていないので何とも言いようが無い。沈黙に構わず劉毅は続ける。

「もう一人の『蛇殺し』、慕容という女はどうだったのだ？ 殷汪は夏天佑と同様に教えていたか？ その者の腕は当時、夏天佑と比べてどうだった？」

「劉毅どの」

孫怜は劉毅に向かい姿勢を正し、

「我らは当時、言うなれば呂州のごろつき。殷さんとは師弟関係でもなく、ただ捕まって半ば無理やり働かされていたのです。武芸について聞く事が出来たのは……殷さんの気まぐれでしょう。私が聞いたものは一部だけ。天佑も嬋も、やはり一部だけなのです。あなたが殷さんの武芸を全て知りたいと仰るのなら、それは殷さんに聞くしかないのです」

「……」

劉毅はそれを聞いて何やら考え込んでいる。体はぴくりとも動かない。

「劉毅どの？」

「『蛇殺し』を相手にするには……やはり『蛇使い』でなければならぬと思うか？」

「……どういう意味でしょうか？ あなたは本当は嬋に……会ったのですか？」

孫怜は思わず息を呑む。いつの間にか劉毅は鋭い視線で宙を見つめていた。

（天佑はもう居ない。今度は嬋を見つけ出して再びその剣を試すつもりか？）

「『蛇殺し』だの『蛇使い』だのと――」

不意に馬少風が口を開いた。苛立った様な、強い口調だった。

「簡単に言うが、何も分かってない。天佑の言葉を聞いていなかった

たのか。忘れたか？ 穆ご先輩の天棲蛇剣が失われた今、殷さんに敵は無い。あんたの言う『蛇使い』、本当の『蛇使い』の剣とは穆ご先輩が使う天棲蛇剣の事だ。殷さんのでもなく、ましてやこの怜のでもなく、ただ穆ご先輩のみが使われた真の天棲蛇剣の事だ。そして『蛇殺し』とはその真の天棲蛇剣を破るべく殷さんが編み出した技をいう。天佑や嬋の剣などとは比べるべくも無い、殷さんのみが見える双刀の法。天佑にすら敵わなかったあんただ。あのお二人の武芸の真髄になど遠く及ばない。フン、『蛇殺し』？ 何をどう調べたのか知らんが殷さんが穆ご先輩を殺すつもりだったとでも？ 穆ご先輩というお方は、殷さんが唯一尊敬する師であられた方だ！ その関係は、そんな、そんな……」

「少風！」

話している内に感情を昂らせていく馬少風のその言葉を孫怜が遮るが、何も言えなかった。さすがに劉毅を怒らせたのではと、姿勢はそのままであったが体中の神経を研ぎ澄ませて劉毅の気配を窺った。

「……その辺は知っているが、結局何が言いたいんだ？」

劉毅の声は変わっておらず、感情を抑えている様でもなく淡々と言う。ただ、その眼差しには力が籠もっていた。

「劉毅どの」

孫怜が劉毅の視界から馬少風を隠す様に身を乗り出す。

「我らは互いに長く会ってはおらず、どの様に生活していたのかも分かりません。天佑がどれほど腕を上げたのかも、それに嬋に至っては生死すらも分からぬ程です。やはり先ほど申し上げた通り、殷さんの武芸については殷さん自身に、お聞き下さい。我らが持っているのは、ごく僅かなのです」

劉毅は口許に微かな笑みを浮かべ、

「そうか。……ではそうするか」

そう言うと言と立ち上がる。すぐに孫怜も席を立ち、劉毅に対して抱拳する。

「我らはすぐにでも此処を離れます。お助け頂いたご恩は――」

「対の宝刀を持った女を知っている」

劉毅は席から離れかけてすぐに立ち止まり、孫怜に向かって言った。

「……は？」

「異国の宝刀を二本、使う女が居る」

孫怜は目を見開いて呆然と劉毅を見つめる。馬少風も立ち上がり、孫怜の横に並ぶ。

「名を聞いた事は無いが――」

劉毅は馬少風に視線を移し、

「どれほどの刀法なのか、はっきりとは分からん。遣り合った事は無い。夏天佑を相手した時の二の舞になる――そんな気がしてな」

「……どうするつもりだ？ 嬋を」

馬少風が言うと、

「やはりお前達のかつての仲間、慕容嬋と思うか？ 何故そう思った？ 双刀使いは珍しくも無いが」

「では何故俺達に言う？」

劉毅は馬少風にニヤリと笑いかける。

「その女は恐ろしい奴でな。会う度に肝が冷える。あれがもし夏天佑と同じ技を使うとしたら、怒らせない様に用心しないと俺の命が危うい。で、どう思うね？」

「異国の、対の宝刀といえど……般さんが百槍寨で……」

孫怜はそう言って顔を上げ、目を細めた。

第十一章 十二

「そいつかどうかは分かんがな」

劉毅はそう言ってそのまま立ち去ろうとする。先ほどから思わせ振りの言葉を口にしながらもその意図は見せず、ただ孫怜や馬少風の反応を見るだけという劉毅の言動は不可解で、劉毅の背中を視線で追う孫怜は眉を顰めた。だがこれでようやく解放されると思い、何も言葉を掛けずに見送ろうとする。しかし、馬少風は黙っていなかった。

「嬋は何処だ？ 何処に居た？」

劉毅は振り返り、

「さあ？ 宝刀を持つ女と言っただけで、慕容嬋というのが何処に居るかなど知らん。だから先ほど訊いたんだがな」

「ごまかすな！」

「じゃあな」

もう劉毅は立ち止まらない。客達の注目を浴びながら、そのまま店を出て行ってしまった。きっとこのまま北へ向かい、景北港方崖へ行くのだろう。

（結局、劉毅どのは何かを得たのだろうか？ 我らから――）

孫怜は暫し考えながら、店の入り口の方をぼんやりと見続けた。いずれにせよ孫怜らは劉毅に助けられたのであり、恩を受ける事となった。

「おい少風、お前凄いな。あのお人にあんな口が利けるとはなあ。どういう関係なんだ？」

劉毅が出て行くのを見届けてから、近くに居た客達が馬少風に話し掛けてくる。この街に住む常連客達で馬少風の事は良く知っている者ばかりである。普段は傅紫蘭に連れ回されているしがない用心棒風情に、片や数百の手下を持つ九宝寨の首領で江湖に名が知られた北辰七星劉毅。一体どういう接点があるのか想像もつかない。た

だ、初めて間近で見た劉毅は想像とは少し違い、意外にも普通の男の样に見えた。あくまで想像よりは、という事であり、劉毅の周りに与える威圧感は強く、気軽に話し掛けられるというものではない。馬少風はその客達を無視して元の席に着く。孫怜も後ろを振り返り、樊樂を見た。樊樂はじつと孫怜を見返すだけで何も言わない。互いに見合ったままの間が続いた。

「これは……すぐにでも此処を離れた方が良くありませんか？」

劉子旦が樊樂と孫怜の顔を交互に見遣り、少し抑えた声で言った。するとすぐに馬少風が口を開く。

「もう日が暮れる。屋敷に居れば手出しはさせせん。用心棒は俺だけじゃない」

「いや、俺達が居るだけで迷惑を掛ける事になる。我らが災いをもたらす様な事になっては……」

孫怜が言うと、樊樂も続く。

「そうだ。出よう。あのなんとかって爺さん、北へ帰ったかどうかも分からんしな。あの感じじゃ相当頭に来てる。……殆どはあの劉毅ってのが怒らせたんだがな」

「どっちにしても怒らせる事にはなつたろう。俺達も捕まる気は無かったのだからな」

「よし。行こう。傳の旦那さんに挨拶して来ないとな」

「ああ」

まず樊樂が立ち上がり、それから皆、一斉に腰を上げた。

馬少風が孫怜に言う。

「怜、俺も行こうと思う」

「なに？」

「天棲蛇の秘笈探しだ」

「……少風、我らはただ徐騰という男を追っているだけ——」

「多分、それだけでは済まん」

「……」

「絶対あの劉毅も絡んでくる。そして殷さんもだ。それと真武劍派。

怜、真武剣派に対して殷さんは、一人だぞ」

「……殷さんと真武剣派で、秘伝書を奪い合う事になると？」

馬少風の眼差しに力が籠もっており、孫怜はその意を汲み取る。殷汪の味方は自分と孫怜だけだと馬少風は言っているのだ。慕容嬋も居たならばきつと彼女もだろうが、今は居ない。それは理解出来るのだが、此処へ来て急に話が大きくなってしまった様に感じ、戸惑ってしまう。

（確かに漠然とそんな風に考えもしたが、本当にそこまでなるだろうか？ 北辰は動かない——劉毅の言葉を全て信じる訳では無いが、あの感じでは本当の様に思える。となるとあとはやはり真武剣派と殷さん……。しかしあれは真武剣派でも殷さんでもなく、武慶の劉という商人の物だ。それを差し置いて奪い合うなど、許されぬ。本当に殷さんは今、我らと同様に東涼の秘伝書を追っているのだろうか？）

「おい馬公。そんな事勝手に決められねえだろう？」

樊樂が言うのと馬少風は頷き、

「ああ。旦那様に言ってみる」

そう言って一人先に歩き出した。

「行けるんなら、良いんじゃないか？」

樊樂は孫怜に言ってから馬少風の後を追う。孫怜は皆の後について歩きながら暫く思案顔のままだった。

「駄目だ。お前は此処を離れてはならん」

傅千尽は馬少風の顔をじっと見つめて言う。絶対に許さないとでもいう様な、厳しい口調であった。傅千尽の居室で馬少風は傅千尽の前に立ち、その後ろには孫怜、樊樂らが控えている。

「北辰教の監視が続いておるのを忘れたのか？ ただの監視が続くだけならまだ良い。だが先の事は分からのだ」

傅千尽は目の前の卓上に腕を乗せ、指でコツコツと拍子を刻んでいる。憂いの表情を浮かべ、溜息をつく。

「少風、とりあえず今はまだ徐を追うだけの事。お前は此処での仕事が大事だ」

孫伶は馬少風にそう声を掛けてから傳千尽の前に進み出た。

「我らはすぐに立ち去ります。本当に申し訳ございませぬ。お許し下さい」

「許すものにも、北辰教徒を殺めたのはお前達で、儂らではない。そうだろう？ 儂らが責めを受けるいわれは無い」

ぞんさいな言葉ではあったが、傳千尽はその口許に笑みを取り戻していた。何も関係が無いのだからこちらの許しを得る事など何一つ無い――。太乙北辰教がそう単純に割り切ってくれるとは到底思えないが、ただ去るしか無い孫伶らは傳千尽のこの態度に救われる思いであった。あとは謝長老が劉毅の言った様にこの件を伏せておいてくれる事を祈るばかりである。

傳千尽は馬少風に、

「既に朱蓮しゅれんが出てもう随分経っている。狗くさんまでもが力を貸してくれているのだ。殷が何処ぞへ隠れ続けているのでなければ、きつと見つけてくるだろう」

「きつと大事になる。ただの秘伝書探し、殷さん探しでは済まないと思う」

馬少風はじつと見つめ返して訴える。だが傳千尽はその言葉を払うように手を振った。

「何を根拠にそう言えるのだ？ 儂にはさっぱり解らぬ。誰か教えてくれないか？」

傳千尽は首を傾け、馬少風の後ろの面々を覗き込む様にして言った。

第十一章 十三

孫怜が馬少風に言う。

「他に稟施会も動いている。秘伝書は元の持ち主に返すべきで、その人は今、稟施会の許に居る。殷さんも探しているとしても、それを奪う様な真似をするとは思えない。真武剣派にしても殷さんと同じ立場な訳だ。北辰が絡んでくるならかなり込み入った事になるが、今のところはまだそれは無さそうだ。この先もし何かあればこちらに知らせを遣る事にする」

「殷なら放っておいてもどうという事は無いと思うがな。ま、とにかくお前は東淵を離れてはならん。良いな？」

傳千尽もそう言って念を押す。馬少風は承知したのか、まだ不満なのか、どちらとも読めない無表情のまま、黙り込んでいた。

樊樂が孫怜に声を掛ける。

「そろそろ行こう。もう暗くなる……」

「そうしよう」

孫怜は振り返り樊樂らと頷き合った。傳千尽がその傍に歩み寄る。「何処へ向かう？」

「とりあえず南へ」

樊樂が答えた。行き先に選択肢は多くは無いが、未だに特に此処と決める事も出来ないでいる。

「そうか。なら緑恒まで行くかな？」

「徐という男が見つからないならその先までも。今、うちの仲間がそっちを廻ってると思いますが、一旦合流しようかと」

「千河幫に儂の友人で朱不尽しゅふじんと申す者が居る。ヒョウ局を率いて国中を廻っている男だ。今は……緑恒だろう」

「ヒョウ局……確か、賊に襲われたっていう？」

「そうだ。その賊というのが何処の誰なのか、まだ目星すらついておらん状態だな。きつと色々調べている筈だ。もう一年にもなる。

お前達の探している者に関連する事柄も何か聞けるかも知れん。千河幫は真武剣派と親密になりつつあるという噂もあるが、幫主范凱どのが完全に真武剣派に吞まれる事は決して無いと儂は思っている。千河幫にも当たってみるのが良いだろう」

「朱不尽どの……、分かりました」

樊樂が頷くと、傅千尽は両腕を広げて樊樂と孫怜の腕に手を添える。

「この先、縁があれば是非、稟施会とも懇意にしたいものだ。そちらの当主に宜しく伝えておいてくれよ。こんな処でも、色々やりようはあるものだ」

傅千尽の顔は商売人のそれに変わっている。樊樂は愛想笑いを浮かべつつ頷いていた。

（他所から来て北辰の影響力が強いこの街で成功したのだ。かなり強^{した}かなお人に違いない）

孫怜は傅千尽を見ながらそう思った。

樊樂らは傅千尽に対して礼を施し、部屋を辞去した。馬少風が最後に部屋を出て扉を閉める。樊樂と孫怜が馬少風を振り返ると、馬少風の方が先に口を開いた。

「洪さんに会って行くだろう？」

「ああ……、そうだな」

「あの周婉漣の話が何だったか、俺も聞いておきたい。洪どのは何処に居るんだ？」

樊樂が訊くと馬少風は歩き出す。

「今、別の屋敷に行っている筈だ」

「他にも屋敷があんのか」

「古い屋敷だ」

「遠いのか？」

「少し離れているが、遠いというほどじゃない」

「おい、ちょっと待ってくれ。馬を取ってくる。洪どのに会った後、その足で出よう」

樊樂らは馬少風を待たせて、紅門飯店からこの屋敷まで連れて戻った馬を取りに行く。他に荷物らしい物は何も無いのですぐにこの東淵から遠ざかる事が出来る。

樊樂ら一行は馬を牽き、馬少風に付いて屋敷の外へ出た。

通りを進む間に、陽の光が弱まっていく。あの謝長老と黒装束の配下が不意に現れたりしないかと周辺の様子を窺いながら歩いていたが、それらしき人物を見る事は無かった。劉毅のおかげで今もこうして無事でいられる訳だが改めて考えると、暢気にこの東淵にやって来るといふ、とんでもない危険を冒したものだと言や汗が出る思いで、皆それぞれに反省しきりであった。まだ油断は出来ない。少なくともこの東淵から離れるまでは。

馬少風に案内された屋敷の門をくぐる頃には、辺りは薄暗くなっていた。最初に門に入った馬少風が、不意に声を張った。

「媛」

誰かを呼んだのか、馬少風は建物の奥の方をじっと見ている様であったが、樊樂らがその視線を追っても何処に人が居るのが分からない。暫く見ていると、中から一人の少女が出て来た。

少女はこちらに向かってお辞儀をする。普段の服装に着替え、まだ幼さの残る容姿に戻った梁媛だった。だが顔には薄化粧をしており、庭に灯された明かりが白い頬を一層輝かせていた。

「えっと、奥様は今出かけておられます。あ、もうすぐ戻られるとは思いますが」

「いや、洪さんに用がある。来ているだろう？」

「はい。……あの、奥に居られますが、皆さん……」

梁媛は馬少風の後ろにいる六人を見て戸惑っている様だ。馬少風と共に居るのだから特に怪しむ必要は無さそうだが、全員を奥に通しても良いものかどうか、判断に迷っていた。

「我らは長居出来ないのです、洪破天どのを呼んで頂けるとありがたいのですが」

孫怜が進み出て梁媛に言う。相手は明らかにまだ子供だが、孫怜は丁寧な言葉で言い、恭しく拱手の姿勢を見せた。

「あ……では、呼んで参ります」

梁媛は慌てて孫怜に対して礼を返すと、小走りで奥へと戻って行った。

馬少風は孫怜を見る。

「怜、一応教えておこう。あの娘も殷さんと無関係じゃない。梁媛といって、都に居たんだ。洪さんと殷さんが此処へ連れて来た。孤児だ。今は洪さんの娘……孫だな」

「殷さんが連れてきた？」

孫怜は怪訝な表情を馬少風に向け、すぐに問い返す。

「いつだ？」

「去年の今頃だったと思う」

「一年前……？ 方崖を離れた頃だろうか？ それが、都から此処へとはおかしい」

「方崖に居たのは……天佑だ」

「なに？ 殷さんは違うのか？ 天佑が方崖だと……？ 方崖に上れるのは北辰の幹部だけなのだろうか？ 天佑は幹部になれたというのか？ 殷さんがそうしたのか？」

「殷さんと天佑は入れ替わっていた。方崖から逃げた殷総監というのは天佑の事だ。殷さんは随分前から方崖には居なかった」

「そんな事が……可能か？ 少風、何故それを今まで言わなかったんだ」

「……お前達が来たのは『今日』だ。まだ居るならすぐにでも話しただろう。だがお前達はもう行く」

第十一章 十四

考え込む様子の孫怜を樊樂が覗き込む。

「怜、その辺の事は今はどうでもいいだろう？ とにかく先を急ぐんだ」

「分かっている」

孫怜は顔を上げ顎をやや前に突き出す様にして大きく息を吐き、梁媛が入って行った入り口のあたりを見据えて洪破天が出て来るのを待つ。

洪破天はすぐに現れた。梁媛もその後ろに付いて戻って来ている。

「何じゃ？ もう発つのか？」

皆、馬を連れているのを見て洪破天は言う。

「はい。実は……」

孫怜は紅門飯店で謝という北辰の長老が自分達を捕まえようとした事と、そこに劉毅も現れて助けられた事、そしてその因である此処へ来る道中の至東山のほど近くでの出来事をかいつまんで説明する。洪破天は特別な反応を示す事無くじっと聞き入っていた。

「謝のう。大人しく引き下がれば良いが。しかしおぬしらがさっさと此処を離れてしまえば問題は無かろう。劉毅は……何処へ行った？」

「方崖へ向かった様です。教主の……召集とか申しておりますが」「ふむ」

洪破天は腕を組み目を閉じる。何やら思索している様で、そこへ梁媛が歩み寄った。

「あの、お爺様。中でお話を……？」

話の内容はよく分からないがどうやら長くなりそうだと思い、洪破天に言う。洪破天が目を開け孫怜を見遣ると、

「いや、本当にすぐ発ちますので」

孫伶はそう言って梁媛に向かって微笑みかけた。

「そ、そうですか」

梁媛は慌てて孫伶から視線を外し、はにかんで俯いたまま洪破天の後ろへと下がる。どうという事も無いのだが、余計な口出しをしてしまった様に感じて洪破天の後ろで恐縮していた。

「孫よ」

洪破天は組んでいた腕を下ろし、孫伶をじっと見つめる。孫伶は思わず背筋を伸ばして洪破天のその真剣な表情を見返した。

「儂を連れて行かんか？」

「え？」

孫伶だけではない。馬少風や樊樂らも驚いて目を見張る。そして洪破天の後ろに居る梁媛も思わず顔を上げた。

「お前達の、徐とかいう男を捜すのを手伝おう。どうじゃ？」

「え、あ、いや、しかし何故ですか？ 突然……」

「天棲蛇の秘笈がおぬしらの探す秘伝書と同じかどうかは知らぬが、その先で殷に出くわすかも知れんじやろう？ 儂もあれが何処で何をしておるのか気になる」

孫伶は返答に窮し、樊樂を振り返る。徐騰を追うというこの任務は稟施会のものであり、それを仕切るのは樊樂である。孫伶が決める訳にはいかなかった。

樊樂はまだ驚いた表情のまま、孫伶と視線を合わせても暫く何も言わなかった。その間に馬少風が洪破天に言う。

「旦那様が絶対止めると思う」

「……言う必要は無かろう」

洪破天はまた目を閉じ、大きく息を吸い込み、そして吐く。

「黙って出ると？」

「儂は今までの事をいちいち千尽に言上した事など無いが？」

洪破天の声が僅かに変化している。苛立ちを含んで、微かに震えている様でもあった。

「お爺様……」

微かな声が、洪破天の背後から聞こえる。梁媛が洪破天の後姿を見上げて不安げな表情を向けていた。だが洪破天は振り返らない。振り返らなかったが、俯いて静かに話し掛ける。

「媛」

「……はい」

「殷を、探してくる」

「……」

「会いたいじゃろう？」

「……会いたい、です。でも……」

馬少風が一步進み出る。

「見つけたとしても殷さんは此処には来れない。今、此処に来る筈が無い」

「そんな事は解っておるわ！」

洪破天は馬少風をきつく睨み、声を荒げた。北辰はまだ殷汪を追っているのだ。こちらに近付く筈が無い。常識的に考えれば――。

だが洪破天は北辰教の事は半ばどうでも良いとも思っている。殷汪は一旦方崖に上がりながら、その後の数年は夏天佑と入れ替わったが景北港を離れてはいなかったのである。何処でどの様な暮らしをしていたのかまでは知らないが、北辰教の本拠の街で方崖の人間に見つかる事無く、恐らくは夏天佑とも密に通じていたに違いない。（此処へ来る事自体は何でもない事。奴の事じゃ。媛に会いに来んのも面倒がっておるだけじゃ）

洪破天は馬少風を視界から追いやって、孫怜の方を見た。

「どうじゃ？ おぬしらの足を引っ張るほど、まだ耄碌もろろくはしておらんぞ？」

すぐにまた馬少風が口を開く。

「洪さんなら、あの劉毅とも対等に渡り合えるからな。今、居なくなれば傅家は――」

「フン、傅家に手を出して北辰に何の利がある？ それに、お前達は何の為に雇われておるのだ？」

「この東淵に現れたあの天棲蛇秘笈、あれはどうするんだ？　まだ何も調べてない」

「表紙だけじゃろうが。仕掛けた者が用があるのは北辰でも傳の家でもあるまい。恐らく儂か、或いはお前であったか、いや、真の目的はやはり、殷じゃろう。撒き餌の様なものか？」

「そうなら洪さんがあの表紙を持って殷さんの許へ行くのは、これを仕掛けた者の思うつぼという事じゃないのか」

「ハッ、だからどうだというのだ？　知った事か。そんな事はどうでも良い。何か不都合が起これば殷が始末をつければ良いだけの事じゃ」

洪破天は馬少風に背を向け、歩き出す。

「洪さん、何処へ？」

「馬を都合してくる。待っておれ」

「あの、本当に？」

孫怜が洪破天に向かって言うと、洪破天は背を向けたまま腕を上げる。

「支度などいらぬ。すぐ戻る」

洪破天はすっかり暗くなってしまった通りへ出て行き、すぐにその姿は見えなくなった。

第十一章 十五

「おい、どうする？ 本気らしいが……」

樊樂らは額を寄せて話し合っている。洪破天が加わったとしても特に障りがあるとは思えないが、此処、傳家は本当にそれで大丈夫なのかも気になる。

「おい、馬公。洪どのが腕が立つってのは本当か？」

樊樂は馬少風の方を振り返って訊ねた。馬少風はいつの間にか、一人取り残されたようになっていた梁媛のすぐ傍に立っている。

「ああ。洪さんの腕は尋常じゃない。北辰の七星くらいなら問題無いだろう」

「おいおい、『七星くらい』って、本当かよ」

「七星云々と言ったのは殷さんだ」

馬少風はそう言ってから隣で俯いている梁媛の肩に手を乗せ、その小さな体を見守る様に視線を送っていた。

孫怜が馬少風に歩み寄る。

「洪破天どのが此処を離れるのは不味いのか？」

「……良くは無いな。引き止めたいところだが、あの洪さんが一度決めたらもう誰にも止められん」

馬少風は、ずっと俯いたままの梁媛に視線を注いだまま答えた。

孫怜もその視線につられて自然と梁媛に顔が向く。暫く誰もが黙ったままだった。

（離れるのは辛いのだろうな……）

洪破天とこの娘の関係がどれほどのものであるのかを孫怜は知らないが、下を向いた梁媛の顔はきつと悲しい表情をしているであろう事が、その佇まいから見てとれる。

（美しい娘だ……）

最初に見た時、そう感じた。幼い様でいて、しかしどこかに大人びた雰囲気も滲ませる可憐な娘。

（この娘を置いて行く、か。いや、考えすぎか。何も今生の別れでもあるまい。暫く旅に出るだけの事だ）

孫伶はそんな事を考えつつ梁媛を眺めていたが、そうしている内に妙な感覚が沸き起こるのを感じ取った。目の前にいる娘の存在感が増していく様な錯覚。孫伶は僅かに顔を引き、しかし視線は梁媛の姿を一層強く見つめる。梁媛は身じろぎ一つせずに変わらず顔を伏せていた。

孫伶は戸惑う。自ら武芸者と名乗る事は無いが若い頃から武術に触れ、その技を頼りに生きてきた孫伶はその身に感じる違和感には敏感である。その対象が人ならば尚の事、発せられる気配、ひいては内功の質までも読み取って相手の技倆ぎりょうを量る。一見、武芸とは縁の無さそうな相手であっても同じである。優れたもののほどその存在を秘するものだ。ただ、この若い梁媛もそうであるとは到底思えない。注意深く観察してみてもやはり力無く項垂れているだけである。孫伶の視線は一層力を増した。無論梁媛はそれに気付いてはいない。その筈である。

（何だ？ 目が……おかしいのか？）

暗くなった庭に点在する明かりが辺りを照らしているが、やはり薄暗い。なのに梁媛の体が光に縁取られてくつきりと浮かび上がっている様に孫伶には見えていた。もし梁媛が堂々として胸を張り、こちらを真っ直ぐ見据えていたのなら、まだその存在感に納得するところもあったのかも知れないが、そうではない。ならばその細い体から重厚な内力が溢れ出しているのかといえば、やはりそういった類のものでも無い様だ。そんなものをこの歳で体内に蓄えているなどとても考えられなかった。

（……あの洪破天どのや殷さんに縁のある娘と聞いたから、何か……錯覚を起こしたのだろうか？ それにしても……この娘は……」

「伶？ どうかしたか？」

馬少風の声が掛かり、孫伶はハッとなって馬少風を見遣った。馬少風は怪訝そうな眼差しをこちらに向けている。

「いや、何でも――」

孫伶はそう答えながらも視線は徐々に梁媛へと戻っていく。するとその時梁媛が顔を上げて孫伶の顔をまっすぐ見上げた。視線が合い、孫伶は息を呑む。

（なんと……美しい娘だ）

漆黒の中にまばゆい星を抱くその双眸に見つめられ、思わずもう一度、そう胸の内で呟いた。

「あら？ お客様かしら？」

門を入ってくる人の気配には気付いていた。皆、振り返って見ていると入って来たのは婦人とお付の下男らしき者の二人連れであった。

「奥様」

まず梁媛がそう言って婦人に歩み寄る。梁媛の耳飾りを持って出掛けていた王梨であった。王梨が恭しく頭を下げると、樊樂らは慌てて居ずまいを正して礼を返す。孫伶も樊樂の横に並んで拱手する。

「私共は――」

「洪さんが街を出ると言っている」

孫伶が挨拶をしようとしたところへ馬少風が前へ出て遮った。

「あら、何処へ行くのかしら？」

「……殷さんの居る処だ」

王梨は僅かの間、馬少風を見つめてから何度も頷いた。

「それが何処かは……分からないのね？」

「ああ」

「で？ こちらの皆さんは？」

「俺の古い知り合いだ。仕事で呂州から来て、これから南へ向かう。洪さんは付いて行くと言っている」

王梨は樊樂らを見遣り、

「もしかして、皆さんはもう発たれるのかしら？ 今夜？」

「ええ、そのつもりなんですが、洪どのが『待て』と言って出て行

ってしまったもんでね」

樊樂は肩を竦めて見せる。王梨は口許を着物の裾で覆い、ホホと笑い声を洩らした。

「困った人ね。まあ昔から思いつきで行動する人だから。またどういう訳か、よくいろいろと思いつくのよ。それにしてもこんな急にはね……。余程思いつめてたのかしら」

「それは、どういふ……？」

馬少風の問いに王梨は微笑を向けただけで答えず、樊樂に、

「では洪さんが戻るまで中でお待ち下さいな」

「あー、いや、実は俺達は……」

樊樂は隣の孫怜を横目で見ながら口ごもる。するとすぐに孫怜が言葉を継いだ。

「我々は、本来なら今此処に居る事さえ許されぬ身でして、すぐにこの街を離れねばならないのです。離れる前に洪破天どのにはご挨拶しておかねばならないと思いましたが、長居しては傳家の皆様にも多大なご迷惑をお掛けする事になりかねませぬ」

「どういう事が良く分かりませんが、洪さんを待つのでしょうか？」

王梨は首を傾げて言う。孫怜は返す言葉が見つからず、思わず下を向いた。

第十一章 十六

洪破天を待つ間、どうしても長く感じられて樊樂らは落ち着かない。実際、洪破天が中々戻らないのは確かで、振舞われた茶を誰もが既に飲み干してしまっていた。屋敷奥の客間に通された一行は言葉少なにただ待っている。下女が更に茶を勧めたのだが皆、遠慮した。

「ちょっと見てくる」

馬少風がそう言って立ち上がる。するとその時、屋敷の下男が部屋へ駆け込んできた。

「洪さんが来られました！」

息せき切って駆け込んできて大声を出した割には、ごく普通の事を口にする。

「やっと来たのか」

馬少風が歩き出すと樊樂らも一斉に腰を上げた。すると下男は馬少風の傍に身を寄せてその腕を掴んだ。

「馬さん、表に北辰教の劉毅様が来てる。今、洪さんが表に居て――」

「劉毅？」

馬少風と孫怜、そして樊樂が顔を見合わせる。

「おいおい、もう行っただんじやなかったのか？ まさか気が変わって俺達を……」

「分からん。とにかく行こう。洪どのが居るのだろうか？」

一同は孫怜を先頭に部屋を飛び出した。その後を梁媛もついて行くこうとするが、下男が呼び止める。何か騒ぎにでもなれば危険である。

「でも……」

「いいから、此处で待つんだ。なに、洪さんや馬さんが居るんだから心配無い」

下男はそんな事を言つて梁媛を止めたが、本当に大丈夫かどうかなど言つた本人も分かつていない。相手はあの劉毅である。何かの
はずみで遣り合う事にでもなれば双方ただでは済むまい。

（大丈夫だ……。洪さんはただ話してただけだ……）

屋敷の正面、門の前に洪破天の姿はあつた。こちらに背を向けて立つ洪破天は小さな包みを右手に下げており、その包みと一緒に一本の長剣を携えている。長剣は包みに引掛つてあるだけで洪破天は特に身構えたりする様子も無く、ただ門の外に向いているだけだつた。孫怜らは洪破天の傍に駆け寄る途中で門の外に馬が居る事に気付く。そして人影。洪破天は話をしているらしい。

洪破天が振り返つてこちらを見た。

「すまん。少し手間取つた」

孫怜らは洪破天に目礼だけしてすぐに外に居る馬上の人物に目を遣つた。辺りはかなり暗かつたが、それでもすぐにその人物が夕刻会つた劉毅である事に気付く。他には誰も連れては居ない。紅門飯店に來た時もそうだったが、ずっと一人で行動している様である。

「もう発つそうだな。賢明な判断だ」

表情はあまり良く見えないが、劉毅は低い声を出した。馬を降りようとはせずにこちらに顔を向けている。

孫怜が一步、進み出る。

「方崖に向かわれたと思つておりましたが、まだ何か……？」

「いやなに、まだ急ぐ必要も無いのでな。この先、恐らくお前達が俺より先に殷汪に会うだろう。言伝を頼もうと思つたんだが、洪どのに会つたのもう済んだ。お前達と共に行かれるそうだな。実に悦ばしい」

「悦ばしい？」

孫怜はちらと洪破天を見遣つたが洪破天はふらりと向きを変え、屋敷の奥に向かつて歩きだした。

「この先、武林が大いに盛り上がる、という意味だ。舞台に上がる

人間は多い程、面白くなるというものだ。無論、誰でも良いという訳では無いがな。やはり、洪どののははずせん。それから、お前達もだ」

クックツと音がする。劉毅は笑っているらしいが、微かに口の端が上がっているのが見えるだけだ。

「意味が良く分かりませんが、我らは……ただ、糧の為に働くのみです」

「それで良い。そんなものだ。どんな大きな流れであろうと、その発端は人知れず密かに始まっている。遠い所だな。俺達はいずれ交わる支流。東涼の秘伝は見えなかったものを浮かび上がらせるきっかけだ。お前達稟施会までもが動き出した」

劉毅の言葉の後に暫く沈黙が続いた。孫伶らは表情こそ変えなかったが、胸の奥にわだかまりを感じ始めていた。劉毅はよく喋るが解り易い部分は何処にも無く、こちらに伝えようという意思は無い様に思われる。

（この男、勝手に喋って勝手に面白がっているだけだな。何が言いたいのだ？ ……これ以上付き合う必要は無いな）

「馬よ」

劉毅は孫伶らの心中を察する事無く、今度は馬少風に目を向ける。「お前自身は別としても、この傳家、傳千尽どのも同様だ。ご友人を襲った者共はまだ見つかっておらんか？」

「……依然として怪しい奴は居るがな」

馬少風は劉毅を見返し、淡々と答える。怪しいのは劉毅――、そう一年前から思い続けている。関わった者は皆、同じ思いでいる筈だ。

「……繋がりが全く無い様でいてその実は違う、そんな事も往々にしてあるものだ。今、想像できんのは無理も無い」

「フン、疑いを他に向けさせたいのか？」

「いや、今のままで構わん。その方が面白くなるという事もある」

「劉毅どの」

孫伶は暗がりの中で劉毅に見えるように大仰に袖を降り、抱拳する。

「危機をお救い頂いたご恩は忘れませぬ。我らは直ちに街を出る事に致します」

そう言つてすぐに樊樂を振り返った。

「支度を」

樊樂は一瞬目を丸くして孫伶を見ていたがすぐに我に返り、頷いた。

劉毅は馬の手綱を手繰り寄せて向きを変える。

「俺も早々に用を済ませて、舞台見物に間に合うように戻るとしよう。もう少し間はある。また会おう」

劉毅の馬が暗闇の中を駆け出し、遠ざかって行く。暫くは通りに点在する灯りがその姿を照らしたが、すぐに見えなくなっていた。「……あの男、とんでもない何かを知ってるか、或いはとんでもない妄想癖の持ち主か、どっちかな」

樊樂が通りの先を眺めながら言う。結局劉毅の言った事は何から何まで解らずじまいであった。

「ま、とりあえず今は俺達にゃ関係ねえな。よし。行こう。随分遅くなっちゃった」

「洪どのは中に入って行きましたけど？」

劉子旦が屋敷の方を指差しているのを見て樊樂は顔を顰め、頭を振る。

（ハア。どうしてこう、思うようにならねえんだろうな？ 何か、もうどうでも良くなってきたな。色々と……）

「中へ戻ろう」

馬少風が言いながら歩き出したので、一同はぞろぞろとその後について再び中に入っていた。

第十一章 十七

王梨の視線を避ける様に横を向いて立つ洪破天。その傍らに梁媛も居たが、ただ俯くばかりであった。

「驚きはしないわ。洪兄さんが都に行った一年前だって、突然出て行ったんだもの。そして突然帰ってきた。でも本当に感心するわ。洪兄さんと言い、狗さんと言い――、ご老人方のその行動力は何処から来るのかしらね？」

王梨は穏やかな視線を洪破天に投げかけ、微笑んでいる。それでも洪破天は横を向いて僅かに唇を突き出し、手に小さな包みをぶら下げて立ち尽くすさまは大きな子供の様でもある。

「洪兄さん。ちゃんと無事に帰って来てくれるのならそれで良いの」
「……ああ。無論じゃ。しかし、千尽は文句を言うじゃろうな」

「それも、洪兄さんにはなく、私にね。居ない人には言えないもの。私は知らなかった事にしようかしら？」

「それでも良いのう」

「フフ、すぐにばれるわよ。まあ、それはいいわ……」

王梨の言葉が途絶える。王梨の視線は梁媛へと移っていた。

「媛児よ……」

洪破天が枯れた手を梁媛の肩に置くと、梁媛は俯いたままではあったがその体が微かな反応を見せる。細く白い手がゆっくりと上がり、洪破天に触れた。

「少しばかり出掛けてくるわい。あー……戻ったらあの耳飾りを着けた姿が見れるかのう？ 楽しみじゃ」

梁媛が顔を上げる。それはまるで何か苦痛に耐えているかの様な、辛い表情だった。

王梨と洪破天が改めて話しているのを黙って聞いていた梁媛は、本当に洪破天がこの東淵を今まさに離れようとしているのを思い知らされたが、動揺を隠すのが精一杯だった。

思えば、洪破天が何故、今すぐ行かねばならないのかを聞いていない。しかももう夜だというのに。殷汪を探してくると洪破天は言うが、それほど急がねばならない理由が解らない。あの殷汪が何らかの理由で窮地に追い込まれているのだろうか？ 北辰教が追っているとは随分前から聞き及んでいたが、洪破天も、傳家の者達も全く心配する様子も無かったではないか。

梁媛は更に考える。洪破天は恐らくかなり奔放な人だ。都へ行ったのも殷汪に――この時は夏天佑という別人の名であったが――ついて来たと言ったが、果たしてその通りであった様で、そして偶然出会った自分と弟を連れてこの東淵に帰る事を決める。ならば今の洪破天もあの時と同じ。これが洪破天なのだろう。

（悲しいんじゃない。そう、出掛けてくるだけなのだから。でも戻るまでに長い時間が掛かる……。でも、ただそれだけ。私はもう幼子じゃない。もし梁発が居たならきつとあの子が泣いて、私がそれをなだめた筈。少し……。不安になっただけよ。私が小さな子供に戻ってお爺様を困らせる訳にはいかないわ。それに、もしかしたら本当に殷汪様と一緒に戻られるかも――）

梁媛はずっとそんな事を繰り返して考え続けていた。

「殷を無理にでも連れて来てその姿を見せてやろうかのう。お前の美しい姿を見れば驚く……。喜ぶじやろうな。うむ」

それを聞いた梁媛の目が潤んできている。洪破天は思わず視線を逸らす。

「媛児よ」

洪破天の声がぐっと低くなる。

「お前はこれからこの王梨の弟子じゃ」

「大袈裟ねえ」

洪破天は王梨の言葉に構わず、続ける。

「お前は故郷、安県あんけんで黄龍門おうりゅうもんの子弟と接した筈じゃな？」

久しぶりに聞いた懐かしい名に、梁媛の伏せがちであった双眸が開かれた。

「儂は剣以外の芸事など良くは解らん。じゃが、何の道であろうと一度、師について道を学ぶからには相当の覚悟でもって師に従い、精進せねばならぬ。解るな？」

洪破天は梁媛へ視線を戻す。

「はい」

梁媛の薄紅色の唇が動き、はっきりと応えた。

「洪兄さん。叩頭こうとうは要らないわよ？」

王梨は笑っている。洪破天はフンと軽く鼻を鳴らし、部屋の入り口の方を振り返った。そこには表から戻って来た馬少風や孫怜らの姿があった。

「行ったか？」

不意に訊かれた孫怜は咄嗟に何の事か解らなかったが、すぐに劉毅の事かと思ひ当たる。

「はい。早々に用を済ませて戻る——と。何の事か解りませぬが」

「フン。まあ良い。では行こうかのう」

「洪さん」

歩き出そうとした洪破天を、馬少風が止めた。

「本当に、大丈夫だろうか？ 北辰は俺達を——」

「お前達の役目じやろうが」

洪破天はそう言ってから溜息をつき、

「心配は要らん。劉毅も言うておったが殷についてはひとまず手を緩めるそうじゃ。張新の意向としてはな。つまりそれが北辰の意思となる。普通にしておれば傳の家に用は無かるう」

「……では、あの死体の件はどうする？」

「放っておけ。もう他に何も出ぬじやろう。関わらねば何も無い」

「もう、関わったが？」

「あの表紙は儂の手にある。その儂が此処を離れるなら、あれの下手人が何か用があるならば儂の処まで来るじやろう。そんな事より」
洪破天は馬少風を軽く睨む様に見ながら、

「紫蘭じゃ。もっと気を付けろ。何でも言いなりになっておらんで

言つて聞かせるんじゃない。もう子供ではない。あの夜の様な事は止めさせるのじゃ」

「あの夜とは？」

そう訊いたのは王梨だった。洪破天は驚いて振り返り、

「いや、……夜遅くに出歩いておったようだな。まあ……とにかくそんな事は止めさせるべきじゃ」

洪破天はまたすぐに馬少風の方を向いて王梨に背を向けた。

「よし。行くぞ」

「劉毅の――」

「まだあるのか。何じゃ」

再び歩き出そうとした洪破天に馬少風が話し掛け、洪破天は顔を顰めた。

「劉毅の、殷さんへの言伝ことづてとは？」

「大した事ではないわ」

「聞いておきたい。殷さんに何と？」

馬少風はそう言って食い下がる。洪破天は頭を振り、

「本当に何でもない事じゃ。劉毅に教えて貰わんでも既に殷も知っておるじやろうて。……陸豊りくほうの居場所じゃ」

「陸豊？」

馬少風が聞き返し、孫怜や樊樂らは顔を見合わせていた。

第十一章 十八

「お前達は陸豊を知らんじやろうが？ 関係の無い事よ。……ああ、孫、お前は知っておったのう」

「お会いした事はありませんが。ですがその居場所は知っています」
孫怜がそう答えたので、洪破天は意外そうに見返した。

「ほう？ どうやって探し当てた？」

「都の――」

孫怜は一度樊樂を見遣ってから、

「稟施会が知っておりまして。そこで聞いただけで私が調べたのではありません。稟施会もただ偶然知っただけの様でした。稟施会が陸豊どのに用があるとは思えませんでしたし、無論我らも何もありません」

「……何も無い事は無からう？ お前は秘伝書の件を殷と陸皓の問題と言うたのう。じゃが陸豊も無縁では無い事は解っておるはず」

孫怜は洪破天の視線を真っ直ぐ受け止めつつ頷く。

「それは……解っているつもりです。我らはこれから南下して緑恒に行く事になると思いますが、陸豊どのも既に動いているのかを確かめようと思っています」

「そうじゃのう」

洪破天は頷き返す。

傍で聞いている馬少風は話を理解している様で、これには何も質問を挟んでこない。樊樂らは真武剣派の陸皓、そして陸豊の事を孫怜からある程度聞いたので、東涼の秘伝書との関わりについて、はっきりとは無いが大筋は掴めていた。王梨は黙って聞きながら何やら思案顔を浮かべていて、恐らく何も解っていないのは一番後ろで声だけを聞いていた可龍、比庸の二人と、梁媛だけであろう。

「では、参ろうか。遅くなった」

改めて洪破天は孫怜らを見渡しながらい、もう一度、梁媛を振

り返ってそつと腕を伸ばした。大して手入れもしない伸ばし放題の白髭と深い皺。その顔を梁媛の目の前に遣り、少し大袈裟に笑顔を作ってみせる。

「行ってくる。此処の夏は短い。体に気を付けてのう」

もうすぐそこまで迫っている夏の間には帰っては来ないという意味なのだ、梁媛は思った。その小さな唇を開いてはみるものの、言葉が出て来ない。洪破天は梁媛の柔らかい頬をそつと撫でてから体を起こし、また一つ頷いた。

「洪兄さん」

王梨が洪破天に歩み寄ってその腕に触れる。

「殷さんに会う事が出来たなら、私達が皆、会いたがっていると伝えて」

「分かっておる」

「それと今、朱蓮が出ているでしょう？ もう戻って来るのかまだなのか分からないけれど、殷さんを探し続けてる事を伝えておいて」

「もう会っておるかも知れんぞ？」

「それなら良いけど、あの子……」

「ああ、分かった。伝えよう」

洪破天は王梨の肩に手を置くと、神妙な顔つきに改まった。

「梨妹、媛児を頼む」

その言葉を聞いて王梨の表情は微笑に変わり、大きく頷いた。

孫怜らは表に出て馬少風を囲んでいた。

「急に来て騒がせてしまったな」

孫怜が馬少風に言う。馬少風は相変わらずの無表情。見ようによつては仏頂面の様でもある。自分が行けない事が余程不満であるらしい。

「何十年ぶりに会ったのに一日も無い」

「少風、まあそう言うな。あの長老が俺の顔を忘れた頃にまた来るさ」

「いや」

馬少風は孫怜の目をじっと見ながら、左右に顔を振る。

「その前に、俺がそっちに出向くだろう。殷さんの許へ」

「……そうか」

孫怜は視線を下に向け、何度か小さく頷いていた。

（殷さんの身がそんなに心配か。天佑ならともかく、お前はそんなに殷さんを気遣う様な奴だったか？ ……まあ良い。また殷さんの許に集まれるなら、それはそれで、面白い）

そんな事を考えていると、自然と口許に笑みが浮かんできた。

「ほれ、もう良いぞ」

不意に声が掛かる。見れば洪破天が馬に乗り、出発を待っていた。その背後に王梨と梁媛が並んでいるのが見える。

（もう良い……か）

「よし。じゃあ出発だ」

樊樂が言い、皆一斉に馬に乗る。樊樂は洪破天の傍に馬を寄せ、「洪さん。俺達は次の目的地をはっきり決めている訳じゃない。道中の宿もどうなるか分からない。今夜だって野宿かも——」

「儂は勝手について行く。お前達は好きに行けば良い」

「分かった。よし、じゃあ行こう」

樊樂の馬が歩き出すと、一同、ほぼ同時に動き出して列を作り、その最後に洪破天が続く。何を準備したのか、遠出する旅人が持つにはあまりにも小さな包みを背に、静かに屋敷の外へと向かって行く。王梨と梁媛の視界から消えるまで、洪破天は一度も振り返らなかった。

「さて、媛。戻りましょう。今日はもう休んで良いわ」

王梨は明るい声を出し、梁媛に話し掛けた。

（ちよっと……じゃないけど、ただ出掛けただけよ。だから、そんな顔をする必要は無いの）

梁媛は僅かに顔を上げ、「はい」と小さく応えて重い足取りで中

へ戻って行く。王梨はその丸まった背にそつと手を添えた。

洪破天の言った短い夏がもう始まろうとしている。辺りに潜む虫達の声量が、それを教えていた。

第十一章 十九

新たに洪破天を加えた稟施会と孫怜ら一行は、灯りの乏しい街道を南へ向かう。遠く武慶に始まり緑恒を経て北端の景北港までを結ぶこの街道は国の中央部とはかなり離れており、辺鄙な土地が大部分を占めている。東淵と緑恒との間が最も長く、そしてこの二つの大きな街の間には小さな集落ばかりが点在していて、東淵の様な賑やかさも、上等な宿も、到底望むべくもない。しかし今はそれ以前に、ただ東淵から離れるという事が重要であった。

北辰の手の者が追って来る可能性は低い、と樊樂らは考えている。しかし油断する訳にもいかない。どの道、暫くはゆっくり出来そうな場所は無いのだ。ならばひたすら南に向かうしかない。

いつもの様に樊樂と孫怜が先を行き、その後ろに胡鉄、劉子旦、そして可龍、比庸。洪破天はさらにその後ろについて行く。

比庸と共に一頭の馬に乗り、馬を操る比庸の後ろに掴まっている可龍は背後が気になって仕方が無い。偶然後ろを振り返った時に洪破天と目が合い慌てて顔を前に戻したが、洪破天はまるで睨む様にこちらを見ていた。多分そうだった。何分、急いで視線を逸らしたのではっきりと見ていないのだが、そんな雰囲気であった気がする。（ああ、くそっ。俺も馬に乗れたらこんな一番後ろであの爺さんの視線に晒される事も無かったのに！）

孫怜が随分丁寧に喋っていたのは聞いているので、『ただの爺さんではない』などと勝手に想像しているが、話はさっぱり理解出来ていないので『どのようにただの爺さんではないのか？』はよく分からない。とにかく、東淵を出てから一言も喋らず、あの決して親しみ易いとは言い難い『気性の荒そうな老人のしかめっ面』でじつと自分を見ているのだとしたら――。可龍は思わず背筋を振るわせた。

「ん？ どうした？」

可龍が身をよじらせたのに気付いた比庸が、後ろを振り返る。

「いや、何でも――あ、いや」

「んん？ 何だよ？」

「前と後ろ、変わってやろうか？」

可龍の申し出に、比庸は口を開けたまま眉を顰める。

「はあ？ お前何言ってるんだ？ お前が前になつたら邪魔でしようがない」

「いや、まあ、そうか」

可龍はハアと溜息を洩らし、背を丸める。すると、

「お前達、ずっとその馬に二人で乗っておるのか？」

背後から初めて声が聞こえ、可龍は驚いて思わずその背筋を伸ばした。それからゆっくり後ろを振り返ると、洪破天がすぐ傍まで近付いて来ていた。

「は……はい？」

「ずっと同じ馬か？」

「あー、いや……」

急に話し掛けられてしどろもどろな可龍は、前の比庸をチラチラと見遣っている。その比庸にも洪破天の声は聞こえており、後ろを振り返ろうとすると丁度、洪破天が横に馬を並べてきた。

「いえ、時々換えて貰ってます。さすがに長いと馬もへたばりますし」

比庸は洪破天の問いにはきはきと答えている。後ろの可龍はそれを聞いてホッと安堵の息を吐いた。

この若者二人は容貌が似通っていて特に特徴らしいものは見当たらず、樊樂などは今でも名を呼ぶ時にどちらが誰だったかを考える為に間が空く事があるが、二人が口を開けばその話し方から若干性格の違いは感じられた。ただそれも『二人は別人である』という認識を補うだけに過ぎず、やはり名前はすぐに出来ない時が割とある。

「こいつは馬を躁れないので」

比庸が自分の肩越しに後ろを指す。一瞬、可龍は眉を顰めたがすぐに洪破天に向かって愛想笑いを浮かべた。

「ハハ、まあ、今はまだ――」

「お前の、その――」

洪破天は可龍の言葉が終わらない内に、腕を伸ばして可龍の方を指差す。

「持っておるのは何じゃ？」

「え？」

可龍は洪破天の指先から視線を真っ直ぐ移動させ、自分の腰の辺りを見る。自分の手があり、自分の得物、呉琳ごりんから受け取った短槍を掴んでいる。

洪破天がその棒状の物が何なのか分からないのも無理は無い。この短い槍の穂の部分は布を何重にも巻いて膨らみ、その布がまた薄汚れたぼろ切れなのに加えて柄の部分が一般的な槍と比べて異様に短いので、たんなる杖の様に見えていた。

「これは……槍、でして……」

「槍？ それがか？」

「はあ」

「お前だけ、それか？」

「は？」

「他は皆、長剣を提げておるが」

「ああ、こいつは槍術を――」

また比庸が代わりに応えるが、可龍は比庸の肩を掴んでしかめっ面をする。

「ほう、槍術とな？」

洪破天は明らかに興味を示し、可龍をじっと見ている。

「ええ、家伝の槍術――」

「おい、……やめろよ」

可龍は話を止めさせようと目を剥いて比庸を揺さぶった。

家伝の槍術というのは偽りではないし、昔つるんでいた仲間内で

はそれを自慢げに話した事もあったが、それは殆ど武芸に縁の無さそうな者達だけを相手に話しただけである。孫怜と出会って仕事について行き始めた頃、孫怜含め周囲の大人達にも知られてしまったのだが、実際にその腕前を披露した事は一度も無い。可龍はそれを残念に思うどころか、孫の幫会では日常茶飯事の荒事に巻き込まれる度に周囲に守られ、（助かった）と胸を撫で下ろす日々であった。今回のこの長旅で、再びその荒事に巻き込まれる可能性は充分にある。しかも今回は自分も含めてたったの六人しかない。一緒に来た比庸は剣も使えないので残るのは五人。じつのところ、自分がこの槍で敵に立ち向かう場面が否応無しに迫ってくるかも知れないと思うと、とても不安で仕方が無かった。

（孫さんが居るんだから、敵は全部孫さんが始末してくれるかも）
などと期待しつつも、

（こんなに少ない人数なのに俺が何も出来なかったら、孫さんの足を引っ張る事になる。そんなの……絶対に駄目だ）

と、密かにその胸の内で熱い葛藤を繰り広げていた。ちなみに今は、

（あの爺さんは凄く腕が立つってあの馬^ばって人が言ってたしな……。孫さんと二人、無敵かも）

と、心中はかなりの樂觀傾向にある。

第十一章 二十

「家伝——か。お前は、何処の者じゃ？ 城南か？」

洪破天は質問を続ける。可龍に興味を持ったという感じでは無いが、話を終える気は無いらしい。

「いえ、私とこの比庸は呂州です。孫さんの帮会の——」

「帮会？」

「はい。あ、でももう……」

可龍はそう言った後、項垂れた。

「今は潰れてしまったというか……」

「おい！ 潰れてなんかないだろう！」

すぐさま比庸が首を思い切り捻って振り返り、色をなして可龍の言葉を否定する。

「孫さんと呉琳さんと、俺達二人が居るじゃないか！ 勝手な事言うなよ！」

辺りは暗く静まり返っており、声がよく響く。前に行く孫怜や樊樂らも何事かと一斉に振り返ってこちらを見る。

「おいおい、どうした？」

比庸と可龍のすぐ隣には洪破天が居る。聞こえたのは比庸の声で、何を言ったのかは聞き取っていたが一体どういう会話の脈絡なのかと孫怜は眉を顰めた。

樊樂と孫怜が馬を止めたので当の比庸は慌てて、

「いやっ！ 何でも！ 何でもありません！」

「本当か？」

樊樂はちらっと隣の洪破天に目を遣ると、何も言わずに少し下を向いて笑っている様な表情に見えた。

「ならいいけどよ……喧嘩するなよ？」

「ハハ……まさか」

比庸と可龍は揃って愛想笑いを浮かべている。

樊樂と孫怜は顔を見合わせてから、再び馬を前へと向けた。

「琳とあいつら二人……。俺の、幫会か」

孫怜はぼつりと呟いた。それは隣の樊樂にしか聞こえていない。

「……そうだ。お前の幫会はまだ健在だ。お前が辞めたくても琳が承知しねえからな」

「フッ、そうだな」

「もうそろそろ比庸の奴に『更にもう少しマシな剣の振り方』を教えてやる段階だな。可龍の方も……一応お前が見てやった方が良いな」

「家伝とは珍しいのう」

可龍と比庸の、『孫の幫会』のくだりを無視するかの様に、洪破天は話し出す。

「お前の親は健在か？」

洪破天は可龍を見ている。

「いえ、亡くなりました。父も、母も」

「兄弟は？」

「ありません」

「……ならば、その槍術はお前の頭の中にしか無いという訳じゃない？」

洪破天は自分の額の中央辺りを指先で小突いて見せた。

「ええまあ。……多分」

可龍はそう答えたものの、あまり自信が無い。確かに一通り教わったが真に理解に至った部分は僅かで、他は父親が見せた型の演武の様子を何とか記憶している程度であった。人に『教えろ』と言われても何とも言い様が無い。

「その槍で、技が使えるか？」

「これ……ですか？ これはさすがに……」

可龍は手に持った短槍を眺めてみる。昔、家にあった槍は全て短

槍と呼ばれる物ではあったがそれはごく一般的な短槍であり、今、手にしている物の倍近くはある。構え、動作は全てその長さを考慮したものであり、習った通りの事をやるにはこの得物では無理がある事は明らかだった。

「確かに、その短さは極端じゃが、そういった得物を好む槍の達人もきつとおるんじゃないだろうのう」

洪破天は宙に視線を投げ、呟く様に言う。

「ハア、聞いた事は無いですけど……」

「絶やす訳にはいかんのう」

言いながらこちらを向いた洪破天の目がまるで自分を射すくめる様に鋭く見え、可龍は思わず上体を後ろに遣る。

「長い道のりじゃ。じっくり修練出来よう」

洪破天の表情は至って普通である。可龍は何に怯えてしまったのだろうかとうと頭を掻いた。

「修練といっても……父が槍を振り回すところを覚えているという程度で……」

「ならば、その記憶を真似れば良い」

「ハア、でも、実は遙か昔のうちの先祖が編み出したとか何とか……。孫さんの剣とか見ると、家伝とか言ってるけどうちの槍ってどうなんだろうと――」

「お前が本物にすれば良い事じゃ」

「えっ？」

「長い年月を経れば、何でも古くなり、綻ぶ」

「ハア」

「弟子が師を越える事が無ければ自ずと衰退していくのが道理。お前が父を超え、その槍で名を立てるのじゃ。ま、その異様に短い槍でなくても良いがのう」

「でも、真似だけでは……」

「孫^{そん}がおるではないか。天棲蛇の剣の話は聞いておったな？」

「……まあ。よく分かりませんでしたけど何となく……」

「元は剣術じゃ。あれはな。だがすぐ衰退した。東涼黄龍門の始祖の業に、弟子が追いつけなんだ為^{むき}じゃ。その後長らく名は消えた。しかしその業を再び蘇らせる者が現れたのじゃ。いや、始祖を超えたのかも知れぬ。東涼とは遠く離れた呂州でな」

「それって……」

可龍と比庸は驚きの表情で互いに顔を見合わせた。

「あの英雄殷汪様でしょうか？」

「ハッ、違う違う」

洪破天は笑っている。可龍と比庸がまた顔を見合わせていると、洪破天は続けた。

「殷も孫も、そのご先輩の業を継いでいる。厳密にはそのご先輩から殷へ、そして殷から孫へとう。孫が教わったのは一部だけと言っておったが、お前達は孫の剣技を目にした事が？ どうじゃ？ 平凡な剣か？」

「いえ、もう何て言うか、凄いです」

「ハハ！ 『凄い』か。うん。まあそうじゃろうのう。ま、それはともかく、その天棲蛇の剣を再び蘇らせたご先輩は、当時、剣は持たなんだそうじゃ」

「剣術なのに、ですか？」

洪破天はその期待通り、この話に興味津々といった二人の顔をじっくり眺めてから、

「そうじゃ。そのご先輩の得物は、なんと鍬^{くわ}じゃ」

「……は？」

可龍と比庸の口から全く同じ音が全く同じ間を空けて後に、小さく洩れた。

第十一章 二十一

「そのご先輩は若い頃、東涼黄龍門に入門してその武芸を学んでおったそうじゃ。当時、東涼は武林では全く注目されてはおらんのだ。う、その師が何というお方であつたのか、他にどれ位の門人がおつたのか、定かではない。ただ、始祖洪淑華に連なる正当な筋であつたという」

可龍、比庸はただ黙って洪破天の話に耳を傾ける。声は少し前を行く胡鉄、劉子旦にも届いており、時折、後ろを振り返って洪破天を見遣りながら興味深げに聞き入っていた。

「その武芸の真髓をその身に得ておられたのじやろうな。その真髓とは剣技に非ず。ご先輩は得物を選ぶ事は無かつたというから、果たしてその通りであつた訳じゃ。東涼を離れられた後、呂州へと移って一生を一介の農民として送られたが、その技を絶やしてはならないと考えておられたという。ご先輩には二人の実子があり、他にも身寄りの無かつた三人の子を引き取つた。その子らに、自らの持つ技を伝えていかれたのじゃ。『技』だけではなからう。心、技、体とはよく聞く言葉じゃ。ご先輩がその全てを余すところ無く伝える為にはどれが欠けてもならぬ。それらを、日々の生活の中で教えられた。呂州のあの広大な土地を耕しながらのう。剣もあつたそうじゃが、剣では耕せまい？」

洪破天が話を止め、じつと若者二人を眺める。二人はただ頷き返すだけで何も言えなかつた。何か気の利いた質問でも返したいところであつたが、何も思い浮かべる事が出来ない。

洪破天はそんな二人の様子を窺いつつ、頬を緩ませた。

「まあその辺はともかく、儂はお会いした事は無い。他にそのご先輩を直接知る者は恐らく、今言つた五人の子だけかも知れぬ。だが、そのご先輩の武芸の素晴らしさは儂にも想像に難くない。何故か解るか？」

「その……ご先輩の子供達の武芸が素晴らしいからでしょうか？」
可龍がそう答えると、洪破天は天を仰ぐ様な大仰な仕草で笑い出した。

「ハハ！ ハァー、あーいや、子と言うたのは儂じゃな。子供達とは言うても、上はもうかなりの高齢じゃがのう。まさにその通りじゃ。受け継いだ者が優れているのはひとえに、師が優れていたからと言えよう。どの様な天賦の才を持って生まれた者でも、それを導く優れた師が居らねばその才を開花させる事は出来ぬ。……ん？ いや、儂が今、言いたい事はそうではない……」

急に笑い出したかと思えば一転眉を顰めて考え込む洪破天を、可龍と比庸は訝しげに眺める。ほんの少し間を置いて、可龍はハッとなって目を見開いた。それから暫し考えて後に、

「うちの槍など到底、黄龍門とは比べ物になりません。元々――」
「何故分かる？ お前は先祖の技を見たというのか？」

洪破天はじろりと可龍を睨みつけ、可龍はそれを見て黙り込んでしまう。

「儂の話を聞いておらんのか？ 東涼黄龍門は暫く途絶えた。厳密には細々と続いていたが、殆ど廃れておった。武林の名声とはその武芸の優劣で決まってしまう。つまり劣ったのじゃ。しかしそれは始祖洪淑華の技が劣っていたという証拠にはならぬ。お前や、父の槍が大したものでは無かったとしても、お前の先祖が編み出した槍が劣っていたとは決して言えぬのじゃ。そうじゃろう？」

語気を強めていた洪破天の言葉が、徐々に柔らかくなっていく。
「未だ、東涼黄龍門の名誉は回復されてはおらぬ。殆ど消え去ったと思われておるからのう……。しかしそれは真実ではない。華々しくその名を轟かせた始祖、洪淑華。師の業を体現するには至らなかつたものの、それを絶やすまいと誓った弟子達。そして今話したご先輩へと引き継がれ、その業は復活しておる。殆ど知られてはおらぬがのう。この真実を知る者は武林に確かに居る。ほんの僅かではあるが。しかも今では武林に強い影響力を持つ者達じゃ。故にこう

して動き始めておる。東涼黃龍門の秘伝と、天棲蛇劍の秘笈」

可龍は聞きながら、呆然としている。余りにも――違い過ぎる。自分の家に伝わる無名の槍術と東涼黃龍門と一緒に語るなど、荒唐無稽とまでに思えてしまう。だがそれを洪破天の言葉が即座に否定する。

「……洪淑華とお前の先祖は何か違うじやろうか？ お前に至るまで伝えてきた血筋は、東涼黃龍門の弟子達とどう違う？ 何故、お前に至るまでに消えなんだのじゃ？ お前の家は代々何をしておった？ 皆、武芸者で名を売っておったのか？」

「とんでもありません。うちは昔から貧乏百姓で――」

「そうか。先祖伝来の槍術に相当な自負があったのじやろうのう。同じ呂州じゃ。お前の祖父あたりは、儂の言ったご先輩、穆^{ぼく}どのを知っておったやも知れぬな」

「……聞いた事はありませんが。穆……？」

「……殷汪の事はどうじゃ？」

「父が『咸水の英雄殷汪は呂州の出身だ』と度々言っていました」
洪破天はそれを聞いて頷く。

「殷汪が居なければ、穆ご先輩の凄さを証明する事は出来なんだかも知れぬのう。お前達の知る『英雄殷汪』の業は穆ご先輩の存在あってこそ。殷汪は穆ご先輩の五人の子の内の、末子にあたる」

「えっ」

驚きの声を発したのは、前を行く劉子旦だった。可龍と比庸などは即座に話を理解する事が出来なかったのか、何の反応も無い。

劉子旦は身体ごと捻って洪破天を振り返っている。

「では、殷汪どのには他に四人の兄弟があつて、皆、その穆ご先輩の業を継がれているのですか？」

劉子旦は孫伶からもまだ聞いていない『真実』を前にして、心を躍らせている。その隣の胡鉄は劉子旦ほど興奮したりはしないが、一応、同じ様に後ろを振り返って洪破天を見遣っていた。

「んん？ いや、皆ではない。五人の内、実子である二人は姉と弟。

どちらも武芸は学んではおらぬそうじゃ。後から引き取った三人は武芸に強い興味があってな、その三人に教えたのじゃ。その内二人は実の兄弟じゃが残る一人は違う。その最期の拾い子、これが殷じゃ」

洪破天がそう教えてやると、劉子旦は「ほう」と感嘆の声を洩らす。特に感心する様な話でもない筈なのだが、劉子旦の頭の中に於いてはとても大きな価値を持っているらしかった。

「ちなみに」

不意に、今は後ろを向いている劉子旦の背後から声が掛かる。いつの間にか傍に近付いていた孫怜であった。洪破天の話を孫怜もずっと聞いていた様である。

「その穆ご先輩の実の娘というのは、我らは皆、此处に来るまでに会っている」

孫怜はそう言ってニヤリと笑った。

第十一章 二十二

「え？ 会っている？」

劉子旦が孫怜を見遣ると樊樂や胡鉄も傍に寄って馬を止め、一行は停止した。

皆が顔を見合わせて考える中、洪破天は孫怜に、

「会った？ 来る道中にか？ そうか、おぬしは知っておるのか」

「はい。しかし殷さんから聞いた訳ではなく偶然お会いし、その折に互いに殷さんを知っているという事が分かりましてそれから付き合があるのです。私と妻は随分と世話になっております」

「そうか……。まだご健在であられたか。もうかなりのご高齢の筈」
「……はい」

孫怜は俯いて眉根を寄せ、沈痛な面持ちとなった。だがすぐに劉子旦が声を上げたので気を取り直してその顔を向ける。

「もしかしてあの堯家村ぎょうかそんのお婆さんですか！」

「ああ」

孫怜はまた微かな笑みを浮かべて頷いた。

「あの穆さんが殷さんの義姉、という訳だ」

劉子旦はホウと息を吐き、孫怜をじっと見たままである。

（孫さんの周りには面白い話が一杯だなあ）

新たな情報を得て彼の想像——或いは妄想——は幾らか膨らんだに違いなかった。

樊樂らもこの話に幾分驚きはあった様だが劉子旦ほどの感銘を受けてはいない。思いがけず耳にした話であり、想像の世界に入り浸りになる事の多い劉子旦とは違い、そううまく即座に整理など出来ない。

「とりあえず進もう。話は出来るだろ？」

樊樂は馬首を翻し、立ち止まった一行に進むよう促す。皆、頷き合ってそれに応じ、再び先へと進み始めた。

「……何じゃったかのう？」

洪破天は呟き、また可龍を見遣る。それから何かに納得したかの様に一人頷いた。可龍は何の事か解らず目を瞬かせて洪破天を見返している。

「名は何じゃ？」

「は？」

「お前の名じゃ」

「あ、ああ……可龍と――」

「私は比庸と申します！」

ぼそぼそと答える可龍に対して、訊かれていない比庸が随分元気に割り込んでくる。二人共もう既に話の中で名乗った様な気がしないでも無かったが、はつきりと思い出せないので改めて自分の名を口にしてみた。

洪破天は顎を突き出して目を細め、二人を交互に眺めつつ小さく何度も頷いた。

「ごちゃごちゃと取り留めの無い話をしたが、まあ、どうでも良い」

「……ハア」

「しかし、お前の習ったと言うその槍、それは忘れるでないぞ。お前の親父どのが槍を振るう姿だけでも良く思い出しておくのじゃ。その技が優れておるかどうかなど、今のお前が考える事では無い。良いな？」

「……はい」

可龍はとりあえず返事というよりも曖昧な相槌で洪破天の言葉に応じた。

（どうして俺の槍の話になったんだろう？）

東淵を出てよりずっと黙ったままだった洪破天が急に話し出したかと思えば、意外にも自分の事に興味を持ったらしく話を続けた。

（何を……思っているんだろう？）

そんな事を考えてみても、やはり気難しそうな老人である事には変わらない洪破天の心中など解る筈も無い。

視線を上げて洪破天をチラと窺う。話し方や声色からして機嫌は悪く無さそうだがやはりしかめっ面の様にも見える。今はそうなだけかも知れないが。ただ、後ろから睨んでくるだけであつたのが、「話せる」と分かつただけでも、可龍は心が幾らか安らいだ様な気がした。

可龍と洪破天の会話が途切れ、暫く沈黙が続く。辺りは殆ど暗闇で馬蹄の歩を進める音しか聞こえず、どうしても重苦しい雰囲気が漂ってくる。そんな中、胡鉄が洪破天を振り返った。

「あの、娘さんは――」

洪破天はすぐにじろりと胡鉄を見返したが何も言わない。その様子を見て胡鉄はいささかたじろいだが、それを誤魔化すように少し高い声を出す。

「あの傳婦人に弟子入りとか何とか……」

ずっと可龍が感じていた睨みつける様な視線を今度は胡鉄に向ける洪破天。口を結んだままで何も言わないその様子に胡鉄は益々焦つたが、話し掛けておいて今更引つ込めるのもばつが悪い。

「あの、あの方は何とも上品なご婦人でしたが、何をされている……んでしょね……ハハ……」

そこへ助け舟のつもりなのか全くの個人的興味なのかは分からないが劉子旦が口を挟む。

「傳どのの紅門飯店といえは、紅門の花、傳紅葵……さん、ですよ。江湖一の舞姫という噂は、あの南の辺境、城南でも聞く話ですから」

劉子旦が話を継いでくれたおかげで胡鉄はホッと胸を撫で下ろす。そしてまた洪破天の顔色を窺ってみるが、表情に変化は無さそうである。だが、小さく唇が動いた。

「それが、何じゃ？」

洪破天の吐き捨てるような物言いに劉子旦と胡鉄は僅かに肩を竦めて顔を見合わせると、洪破天はやはり二人を睨んだまま続けた。

「もう居らん。お前達も見ておらんじやろうが」

「……ええ、まあ。後宮に召されたそうですね。でもあの、梁媛――さんですか？ あの娘さんの美しさも素晴らしいですね。傳婦人はもしや、傳紅葵さんに舞などの指導をされたのではありませんか？ あの物腰、というか雰囲気はそうではないかと……まあ勝手な想像なんですが」

劉子旦は睨まれているせいか努めて明るい声を出しているが、それに効果はあまり無い様である。

「それと媛に何の関係があるんじや」

「あーいや、ですから、あの娘さんが弟子、というのもしや、『紅門の花』を継がれるのではと……まあ勘ぐっただけでして……。あっあの娘さんなら……と」

「……媛なら、何じゃ？」

洪破天の声が、徐々に低く、そして荒くなっていく。

（あの娘の話はまずかったのか？）

何故かは分からないが洪破天は明らかに機嫌を損ねている。とにかくこれはまずいと考えた胡鉄は不意に大袈裟なほどの愛想笑いを浮かべ、

「い、いやあ、何でもありません。それにしても、あの梁媛さんはとても可愛い――いや、美しい娘さんですね。こう、何と言うか、ちょっと驚いてしまいましたよ。ハハ……。本当に……素晴らしい娘さんで……」

「誰にもやらん」

「……ハ？」

「媛は、誰にも渡さん」

少し話が噛み合っていない様に思われたが、とにかく洪破天はまるで唸る様に声を出して凄み、胡鉄と劉子旦の口を塞ぐ。そんな中、（頼むから怒らせないでくれよ！ もう！）

可龍が、そう心の中で独り言ちた。

第十一章 二十三

東淵を出て孫怜や洪破天と反対に北へと向かう劉毅は、特に急ぐ事も無く一人、馬を進めていた。

今回の七星の召集というのは何も特別な事では無く、かなり前から取り決めてあった事である。北辰七星は常に教主の許にあるというのが本来の役割であり、命めいがあればすぐにそれは届き、即座に七名揃って教主にまみえる訳だが、今の七星は前教主陶峯の頃と違はかなり自由に動き回っている。周婉漣などは北辰教の勢力範囲から最も離れている城南にまで行っていたのだ。劉毅は昔から北辰傘下の九宝寨という勢力を率いている事もありそれほど方崖に留まっていなかったが、それにしても現教主の代になってからは更に思い通りに動き廻れる様になった。しかしその分、今回の召集には大人しく従って方崖のご機嫌伺いをしっかりとっておかねばならない。同じ七星でも他の者とは違う。今は一人で方々へと動いているが桁違いの多くの配下を持つ身である。当然、方崖は自分を他の五名――七星の一人喬高は既に居ないので六名ではない――よりも注意深く自分の挙動を観察している筈だと、劉毅は考えている。

劉毅は一旦、喬高に寨主の座を渡したものの、その喬高が死に、目ぼしい後継が今のところ見当たらず再び寨主とならざるを得なかった。今の九宝寨は昔とは次第に変わってきており殆ど北辰教そのものとなったと見る向きも多い。九宝寨側はあくまで別の勢力であると主張する者が殆どだが、寨主劉毅が殷汪出奔の一件以来九宝寨を離れている事が多い事と、既に北辰教の人間も多く九宝寨に入り込んでいる為、九宝寨の者達は皆、それぞれ北辰教から役目を戴いているのが現状である。その為、先の主張はあまり意味を成していない。そんな状況にあっても方崖は、九宝寨に対して表には出さないが完全に警戒を解いてはいない。寨主劉毅に具わる求心力は未だ衰えてはいないのである。

周婉漣が今回戻って来たのがこの定例の召集の為であったかは定かでないが、彼女がそれを失念していたとしても運の良い事に充分間に合った。決められた日に方崖に戻っていれば教主や張新——今は張總監と呼ばねばならないが——の心証も幾らかましであろう。

劉毅は一人、馬上で思いを巡らせる。

（さて、何と言うつもりか？ 教主は、まあ良い。張新にどう思われるかが問題だ。幾ら教主の覚えが良いと言っても張新の傀儡では——。あの女の事だ。他が心配するだけ無駄か？ いやいや、俺は心配なんかしてはおらん）

劉毅は三江村へと差し掛かった。

（ああ、ここか……）

一年前、緑恒千河幫のヒョウ局（金票 局）が賊に襲われた場所。無論、当時の痕跡など微塵も無い。道のすぐ脇を流れる川の畔に馬で近付き、暫しその流れを眺めた。

（此処から東淵まで、俺ならどの位で戻れるだろうか？ ……どう

頑張っても二日が限界だな。だがあいつは一日。そりゃそうだろう。

『馬』だからな。あれは、あれだけのものだろうか？ 殷汪にも同

じ芸当が出来る……出来るんだろうな。全ては洪淑華、そして穆：

穆汪威の神業か。まったくもって……人じゃない）

劉毅の旅は景北港に至るまでのんびりとしたものだった。急いでも仕方が無い。それより途中で引き返して中原に戻りたいという欲求の方が強く、それを抑えるのに苦労した。景北港自体には何の魅力も無いのだ。強いて言うなら北辰教の今後、とりわけ周婉漣などの七星を弄って自分の思い描く舞台に上がらせたり出来るかも知れないという点くらいか。

孫伶に対して初めて『舞台』という言葉を使ったが、他にそんな事を話した事はない。ただの妄想、こうなれば面白そうだという考えただけで人に聞かせるようなものでは無い。ただ、今の自分はそ

れに夢中になっている。それだけが、劉毅にとって楽しい事であった。

景北港市街から少し外れた処に巨大な屋敷があり、そこが今の劉毅の棲家である。九宝寨の景北港屋敷とでも言うのだろうか。九宝寨とは劉毅率いる組織の名であると同時に発祥の地の名でもあり、そこはこの景北港から少し離れている。九宝寨が昔のままなら、今でも劉毅は九宝寨の山で暮らしていただろうが、北辰教前教主陶峯は景北港に立派な屋敷を用意して半ば強引に劉毅とかなりの数の部下をそこに移す。劉毅一人だけでは無い為、市街地の真ん中では土地が用意出来ないほど大きかった。だがそれでも九宝寨の全ての人間を移せる筈も無く、またそれに意味がある訳でもない。配下の大多数は今も九宝寨で暮らしており、景北港へ来た劉毅以下幹部達も両方を行き来して生活していた。

「劉寨主がお戻りだ!」

威勢の良い、そして少し荒っぽい口調の叫びに似た声が屋敷に響く。するとそれに呼応して建物から男達が飛び出してくる。門を入ってすぐの庭が、瞬く間に飛び出してくる男達で埋まっていく。まるで劉毅が帰ってくるのを待ち構えながら中に隠れてじりじりとしていたかの様だ。

「おいこら! 道を塞いでどうする! おらっどけっ!」

後から新たな数名が悠然と現れ、しかしこれも荒い口調で門に押し寄せる人だかりに向かって怒鳴りつけると、門の正面に僅かながら小道が出来る。門の正面にはそれを待っている劉毅の姿があった。「悪いがな! 土産は無いぞ! 分かったらそんなに物欲しそうな面を並べて見るな!」

劉毅は中に向かってそう叫んだ。すると何故か、屋敷から溢れんばかりの『ワー!』という歓声なのかそれとも『ウォー!』という怒号なのか、それらの入り混じった声が辺りを揺らした。

その中を劉毅は馬でゆっくりと奥へと進む。後から出てきた幹部

ら数名が歩み寄って囲むとそこで馬を降りて一人に手綱を渡し、その者達と言葉を交わすが周りの男達の発する声でかき消されていた。

劉毅は幹部らを見回し、

「とりあえず休ませてくれ。後で、皆と酒を飲もう」

「ハ！」

と、そんな遣り取りをしてから建物の中へと入って行った。

第十一章 二十四

劉毅はまっすぐ屋敷奥へと向かい、自室に入る。留守の間この部屋を使う人間は居なかった訳だが、全てに手入れが行き届いており綺麗なものだ。背に負った包みを降ろすとまず奥の寝台に腰を下ろし、脚絆を解きにかかる。外は相変わらず騒がしかったが『休ませろ』と言っておいたので誰も部屋に近付く事は無い。

それほど疲れを感じていた訳では無かったが寝台に腰を下ろしてから次第に体が重くなっていく様な気がした。

（ひと眠りするか……）

そう思って素足を寝台に放り出した丁度その時、部屋の前に人影が現れ、声を発した。

「寨主。華でございます」

「おう、入れ」

劉毅は嫌な顔一つせずすぐにそれに応じ、同時に部屋の扉が開いた。

入って来たのは丸襟の上品な衫を纏った初老の男。この九宝寨屋敷に住まう連中とは随分と違った雰囲気があった。だがこの華という男、れっきとした九宝寨幹部である。

華は寝台の上の劉毅を見ると、

「とり急いでご報告するべきものは何もございませぬ。また後にも」

「いや、構わん。方崖はどうだ？」

劉毅は寝台に横になると手枕で華の方を向き、訊ねた。

「張総監のご機嫌が宜しいので、至って平穩無事でございます。あの蔡長老の軟禁状態も解かれました」

「ほう。どうなった？」

「以前と変わらず、九長老の職にあります。つい先日、教主様に目通りしたとか」

「ふむ。それは意外だったな。蔡どのは結局、出て行ったあの殷が本物か偽物か、解っていたのか？」

「それは何とも……。ただ、蔡長老はあの偽の殷汪、『夏天佑』に騙されていた、という事で張總監のお許しを得た事になっております」

「あの人物に裏表がある様には見えんが、長年、夏天佑と共に居た事は確かだからな。よく観察する必要があるな」

劉毅は寝そべったままではあったが、その眼差しは鋭いままで華を真っ直ぐ見据えている。

「はい」

「他は？　そうだ、七星……方崖に居た奴らは変わりないか？　俺より先に周と鐘は戻った筈だが」

「数日前に屋敷の方へ戻られました。周婉漣……意外でした」

華はそう言つて顎を撫でた。何か思いを巡らす様なその顔には薄っすらと笑みが浮かんでいる。

「そうか？　俺はまあそうでもないな」

「それはともかく、慮りょどの、侯こうどのは随分と張總監と親しくなられたご様子。これも意外です」

「ほう。……さすがにそれは俺も同感だな。何をしている？」

「今のところ特には何も。ただ張總監に度々呼び出されている様ですな」

「あの二人、誰かになびく様な者達では無い筈だが……。フン、今は張新と互いに何か利用出来ないか探るといったところか？　調べ必要があるな」

劉毅は体を起こして胡坐をかき、脛を擦る。それから首を捻った背を伸ばしてみたりと体を盛んに動かした。

「既にやっております。ただ、相手はあの慮りょ元沖ちゆう、侯こう且しよの七星二人。余程慎重にしませんと……」

劉毅は頷いた。その後、華が何かを思い出したのか込み上げる笑いを抑えるように言う。

「そう、林玉賦^{りんぎょくふ}なのですが」

「ん？ あれも何かあるのか？ ずっと方崖に居た筈だな？」

「ええ。彼女は相変わらず気ままにやっておるようです。他の二人の様に張新にはなついておりません」

「名を変えたのではなかったか？ ……何だったかな」

「林^{りん}汪^{おう}迦、ですな。寨主もお忘れになる程です。誰も呼ばぬのでふてくされて撤回してしまいました。ま、その方が良かったでしょうな。今のこの状況で『汪迦』は無いかと」

「まったく、あれはお気楽なものだ。フツ、ある意味羨ましい」
劉毅と一緒に笑っていた華が続ける。

「林どのといえば面白い事がありました。寨主。喬高様が欠けた今の『六星』を元の七星に戻すべく、張總監が何処からか一人の男を連れて来たのですが」

「何？ ……どんな奴だ？ 今、七星を名乗るのに相応しいと言える人間など俺は思い浮かばん。知られておらん奴か？」

「ええ。どこの馬の骨とも……。それで、張總監は『北辰七星は何をおいてもまず武芸。せめて林玉賦並みには使えねばならん』とか申されたそうです」

「ハハッ！ 張新に武芸が解るか。あの林の武芸が」

「その事が、当の林どのの耳に届いてしまったようだ」

林玉賦は喬高を除く六人の中では最も七星入りが遅く歳も四十前で、三十代半ばの周婉漣に次いで若い。しかし一番若い周婉漣は十代から方崖に居り最も古い七星である。次に劉毅。この周婉漣と劉毅の武芸が一際評価が高い事から、何となく古くから居る者ほど優れているという様な印象を持たれていた。実際は互いに遣り合う事の無い七星の優劣を比べるのは難しい。

林玉賦の腕前にも高い評価がある。派手な衣装を好み、見る者を圧倒する程鮮やかな舞の如き立ち回りに、そこから繰り出される冷酷無比な技の数々、数千とも表現される毒針^{どくしん}の嵐。北辰信徒の間ではそんな彼女の手に心酔する者も少なくないのである。これが敵で

あれば忌み嫌うべき最たる者であろうが――。

「フ、怒り狂ったか？」

「張総監は、林どのにその男と手合わせするよう命じました」

「林は素直にそれに従ったのか？」

劉毅は華を見ながらニヤついている。

「そこは張総監も考えました。教主様をお迎えして御前試合としたのです。七星とは教主様に最も近い存在でなくてはなりません」

「……それは俺への皮肉か？」

劉毅は華を少し睨む様に見たが、華はお構いなしである。

「こうなれば林どのも遣るしかありません。で、その試合は行われました」

「林を倒せる、或いは引き分ける事が出来れば相当な腕前だが……そんな奴を張新が見つけられるとは思えんな。どうなった？」

「どうもこうも――」

華は両腕を広げて大袈裟に首を振って見せる。

「開始直後、……男は瀕死となりました」

劉毅は黙ったまま華を見つつ続きを待つ。

「林どのの怒りは全て対峙したその男に叩き込まれてしまった訳でして、全くなす術も無く倒れたそうです。災難では済みませんな。

その男、瀕死のまま方崖から叩き出されたそうですから、不憫ではありません」

「まあ、当然の結果だな。林とまともに遣り合える様な奴ならとくに名が知れ渡っている筈だ」

劉毅はそう言って再び寝台に四肢を放り出した。

第十一章 二十五

張新が何処からか連れてきた男――。

（『七星に』と連れて来たからにはその辺で見かけた奴という訳ではあるまい……。あれに武芸の知識があるとは思えん。何処の、張新とどういう縁があったのか？）

劉毅は暫し宙を眺めながら考える。

（誰かが張新に薦めたのか？ それにしても林に対して数手も抗えぬような者を七星に推すとは、そいつも何も解ってないな）

「寨主」

華の呼び掛けに劉毅はゆっくりと首を回す。華はニヤリと笑みを浮かべ、

「瀕死の男、蔡長老が拾いましたぞ。何とも……お人好しと言いましようか、相変わらずです」

「今も蔡どのの処に？」

「はい。それで調べたところ、どうやらその男、真武剣派で剣を習った事があるらしいのです。昔の話で、かじっただけなのか本格的に真武剣の誰かに師事したのか……。歳は若くないので師事するとすれば真武剣の総帥かその高弟辺りという事になるのでしょうか、どちらにせよ今は殆どまともに使えないところをみると、たんに若い頃縁があったというだけの様です」

「若い頃だと？」

劉毅は華を見返しながら眉根を寄せた。

「そいつは幾つくらいだ？」

「五十前後かと」

「そんなにいつてるのか。そいつが若い頃といえば、真武剣はまだ草創期と呼んでも良い頃だ。弟子の白はくでもまだ弟子を取るなどんでもない」

「白千雲はくせんうんですな。確かにあの白の最初の弟子もその男よりはかなり

若い筈です」

「解らん事が……増えていくな」

劉毅はそんな事を言ったが、顔は笑っている。劉毅が今最も注目しているものの一つは、方崖で力を増さんとしている張新という人物についてである。

劉毅は太乙北辰教が先主陶峯に率いられていた頃からそうであったように、今も当然九宝寨は独立した組織であると考えており、方崖の権力者が誰に変わろうとこちらは付き合い方をうまく調整していけば良いだけの事で方崖で教主の教育係であった者が力を持って台頭してこようがそれはどうでも良い。自分らを敵視し、支配を目標まない限り――。ただ、殷汪が居なくなつて突如として表に飛び出してきたかのような張新の今の快進撃とでも言うのかその出世ぶりは奇妙な処も多く、劉毅の注意を引いている。

教主の下に九人の長老衆があり、太乙北辰教の全てを取り纏める。それらは皆、先主の代からそうであり、更にそれ以前も同様であつたらしい。『総監』とは殷汪以前には存在していない。陶峯が殷汪を方崖に迎えるにあたり用意した職名であり特別なものである。殷汪自身も方崖で手に入れられるであろう権力と言うものには全く頓着する事無く、事実、方崖において力を得たのだがあくまで自分は客であるという意識があつた様で九長老をないがしろにする事は無く、それ故に九長老の方も『殷総監』に対する印象はすこぶる良いものであつた。陶峯が亡くなり息子の陶光が新教主になると世間は『殷総監が北辰を動かしている』と噂したが、これは九長老側の、無双の武芸で対真武剣の旗印となり名を轟かせた殷総監が若い新教主を常に傍で補佐しているという印象を対外的に知らしめる為の方策である。気性が激しく豪腕で知られた陶峯の急逝で柱を失つたと思われない為にも、殆ど無名に近い新教主を支える必要があつた。そしてその頃の方崖は九長老と殷汪の十名によって動かされていたのであり、総監が上でも九長老が上でも無い。

では殷汪が方崖から姿を消せば、そこに張新が入つて来れるのか

？　　というと、殆ど不可能に思える。教主の教育係を長年勤めたという事で、教主の一存で総監の役を得る事はあるかも知れない。しかし、九人の長老は『殷汪の代わりに張新』などとすんなり納得出来ようか？　それこそ方崖、紫微宮の奥に籠もりきりの全く世間に名の出ていない張新である。教主の傍に殷汪を据えたその効果を、張新に期待するのは到底無理というものだ。

（どうやって今の立場を作った？）

劉毅に限らず、誰もがそう思っている事だろう。だがその真相は出て来ない。方崖でそんな事を探る事も出来ない。張新本人にその様な事が知らればたちまち捕まってしまうだろう。武芸は出来ないうというが今の張新なら太乙北辰教の誰でも動かせる。教主でさえも――。

今の北辰を知るという事は、張新を知るという事である。何を考え、何をしようとするのか。とりわけ九宝寨の様な、無数にある北辰傘下ではあるが基本的に独立した組織にとってはそれこそ劉毅の様に方崖との付き合い方を慎重に考える必要があった。しかし劉毅はただのお付き合いを続けていければ良いと考えている訳ではなく、更に深く張新を知りたがった。

（張新とは何者か？）

劉毅は個人的な趣味も相まって益々のめり込んでいく。景北港という街には飽いていたが、その中方崖という処だけはやはり特別な場所なのである。

（傘下最大の組織、九宝寨が自分の手にはあるのだ。他の七星や、九人の長老とは違う）

「その男に興味が沸きましたかな？」

「ん？　ああ、大いにな」

「忙しい事ですな。中原では何か得るものがございましたか？　寨主。うちの中も変化がおきておりますが」

「……そういうのを真っ先に俺に言うのが普通じゃないのか？」

「いやそれ程ではありませんな」

華は劉毅の配下であるが、基本的に丁寧に喋る以外は話す事に特に遠慮は見られない。歳も他の幹部らに比べて上であり、劉毅との付き合いは長い様である。

「喬高様が七星になられたばかりであつたというのに、残念ながら亡くなられてしまいました」

「……」

劉毅は何も言わずじつと華を見つめ返している。

「先程も言いました通り、張総監は七人目を探しておられます。その七人目、再び我ら九宝寨から出せないか、という話が出ております」

「ほう、誰が言い出した？」

「発端は解りませぬが、今では皆、これで盛り上がっております。流石に幹部連中は滅多な事を申すなど言つて廻っておりますが、それでもやはり、喬高どのの無念を思うと末端の者達がそう望むのも無理はありません」

「……張新にも聞こえているのか？」

「それは解りませぬがおそらく。しかし喬高様という前例があるのですから向こうも不審には思いますまい。教主をお護りする七星に人を出したいと言うんですから、結構な事でしょう。まあそう思つて頂いている事を祈るばかりですが」

第十一章 二十六

劉毅は思案顔を浮かべていたが、それは直ぐに消して頭を振った。「俺が言うのもなんだが、七星は特別な存在だ。今、うちにそれ程の者は居らん筈だが？」

すると華は大きく頷いて同意した。

「確かに。そう考えると、喬高様は……実に惜しい事をしました」

喬高は九宝寨において劉毅を除けば間違いなく最も武芸に秀でており、故に七星入りが出来たと言われていた。無論、劉毅が推したという事も大きな要因であった訳であるが、実際の処は更に理由があった。

喬高は劉毅の後を継いで九宝寨の寨主となる程、実力を備えた優秀な人物だった。劉毅が九宝寨を留守にする事が多くなって以降、正式に寨主となる以前から既に九宝寨の全てを仕切っていたと言って良く、多くの部下達も彼を慕って九宝寨は寨主喬高の新たな時代を迎えた。

非常にうまくいったと言える。新寨主が前寨主を追い出したのである。九宝寨の采配について劉毅が口出しする事は殆ど無かったように全て喬高の自由になった。劉毅は自分の気の向くまま方々へ出歩く様になり、完全に九宝寨を喬高に任せていた。

九宝寨に属する全ての者達にとって劉毅は事実上『隠居』の様な存在となったが、依然として劉毅は北辰七星として方崖に上る人間であるし、永く自分らを率いてきた劉毅への尊敬の念が消える筈もない。しかも劉毅は喬高に対し完全な信頼を寄せている様だ。劉毅によって北辰教との繋がりも磐石である事に変わり無く、九宝寨は益々安泰だと考える者も少なくなかった。

喬高は劉毅をどう思っていたのか。後に喬高も北辰七星の一人に加わり、それからの二人の関係は微妙に変化していった様で、喬高

が亡くなる直前には『あまり宜しくない』と噂されるまでになっていたが、普段、双方互いを悪く言う処を第三者に見せてはおらず実際の処は良く分らない。少なくとも喬高が七星として方崖に上がるまでは、喬高は劉毅に対し昔と変わらぬ態度で慕い、仕えるという気持ちを持ち続けていた様だ。劉毅は師の様な存在でもある。それに彼は野心家では決してなかった。九宝寨の首領となったにも関わらず、劉毅に従順で有能な部下であり続けたのである。

喬高の武芸は確かに優れていたが、北辰七星ともなると先任者達は皆、桁違いの凄腕で敵対者からは『化け物』と罵られる様な者達ばかりである。張新の言う『林玉賦並み』とは武林の常識で捉えればとんでもない話で、喬高はどうであったかというところと正直、林玉賦には届かないのではないか、といったところであった。

では、それでも七星になれたのは何故か？ それは、劉毅に対してそうである様に従順で実直、命令に忠実で私欲の薄い、そして有能な人物であるという処を、張新が目をつけたからであった。

九宝寨の数百の勢力は事実上喬高の手に移っている。この男なら職務に忠実であろうし七星にすれば教主の名の許に動かし易い。本来なら劉毅とて七星である以上同じなのだが劉毅はどうも自分の思う様には使えず、気に入らない。劉毅が薦めてきたという処には少し引っ掛かるとこものがあつたが、慎重に周囲を調べて最終的には喬高を北辰七星とする事に決めた。

こうして喬高は劉毅と肩を並べて方崖に上がる事となつたのである。

「まあ、推せる人物が居ない以上、何の意味も無い話なのですが」
「……張新は次の候補者を探しているのか？」

劉毅が訊くと華は頭を振った。

「分かりませぬ。あれ以来、そっちの話は聞きませんな。すぐに用意せねばならないという訳でもないでしょう。七星なら……先程申しました通り、張総監は慮、侯の両名と親しくなる事に成功した

ようですから」

劉毅はじっと宙を捉えて黙り込み、暫く間が空いた。

「寨主。殷汪の件ですが」

「んん？ 何だ？ どうかしたのか？」

劉毅はすぐに顔を戻し、鋭い眼差しを華に向けた。この景北港で『殷汪の件』でまだ何かあるとは意外であった。殷汪に関係する事は是非知っておかねばならない。

「いやいや、大した事では――。あ、いや、我らにとっては捨て置けませぬが」

「早く言え」

「張總監は殷汪搜索の手を緩める事を決めましたが――」

「ああ、知っている」

「張總監は殷汪の件に触れる度に『そもそも寨主が、逃げた夏天佑なる者を殷汪と間違えて死んだと報告したのが殷汪を追うのを遅らせた原因だ』と言っているそうです。これは……寨主が居ない間に……」

「ハハッ！」

劉毅は不意に笑い出す。

「確かに、その通りだな。全く、とんだヘマをやらかしたもんだ」

「……また心にも無い事を。寨主、我ら九宝寨の者はその話を耳にする度に齒噛みする羽目になるのですぞ？ 寨主の意図を是非聞ききたいものですな」

「意図？ フフ、そんな大層なものはない。ただの、思いつきだ」

劉毅は華から視線を外して下を向いたが、笑みは消えていない。

「フツ、すぐに追えたところで――何が出来る？ 張新が殷汪に対して何が出来ると言うんだ？」

「それはそうですが。……喬高様が亡くなられたのも同じ頃でしたな。寨主。この事は皆、不審がっております。未だ喬高様の死の真相が全く分からないのですから。殷汪が絡んでいるのではないかと考える者も居る様です」

これを聞いて劉毅はようやく笑みを消した。華は続ける。

「寨主のお考えを皆に聞かせる必要があります」

劉毅は黙って答えず、再び間が空く。

暫くしてから華は少し高い、明るい声を出した。

「教主様の招集は四日後。まだ日はありますが、寨主が戻られたら直ぐに伝えるよう方崖からの使者が煩く言ってきておりまして。またどこかに出掛けられては困るののような。念を押されました」

「フン。何処も行く気は無い。それが終わるまではな」

劉毅は大きく伸びをして大の字になって寝台に横たわる。華は頷いて微笑んだ。

「結構でございます。行けばきっとその張總監のお言葉を直に聞かされる事になるでしょう」

「お前、笑って言うな」

「ハハ。まあ、面と向かってでは張總監のお言葉も少しは和らぐでしょう」

劉毅は目を閉じる。華は拱手して一礼し、

「ではまた、後ほど」

「ああ……」

華は音を立てずに下がり、そっと劉毅の部屋を離れて行った。

劉毅はそのまま動かず、眠りに落ちていくのを待つ。そんな中、ぼんやりと人の顔が頭に思い浮かぶ。だがその顔ははっきりとしていない。

（……暫くまともに見てないな……張新が……邪魔だ……）

その顔をもっと見ようと思い巡らす、その思い浮かべた絵が徐々に薄くなっていくばかりで、そしてそれは完全に消えてしまい闇だけとなった。

第十二章 一

景北港はすこぶる快晴である。中心部から少し離れて広い田畑の間の小道を歩いていると、最早自然の生み出す音しか聞こえてはこない。周囲を見渡せば作業をしている農夫の姿を確認出来るがそれは遠く、音は無い。

田舎の農村。まさにその典型といった風景であった。太乙北辰教の本拠で十数万の信徒がひしめき合う宗教都市——訪れた事の無い者はきつとそう想像している事だろうが、それを期待してこの街を訪れたならきつと落胆してしまうことだろう。多くの信者達の持つ信仰心を感じる事の出来るような立派な施設も、祭儀の様子も余程探さねば目にする事は無い。

（本当に此処の人々は『信仰』などしているのだろうか？）

そう疑う者も居よう。そういった者は立派な寺社が建ち並びそこかしこで出家の僧が連なって歩く姿を目にすればなるほどと納得するだろうが、それは根本的に認識が間違っている。太乙北辰教は仏門ではなくその指導者となる者達はいわゆる僧侶ではないので、見て分かり易い袈裟を纏っている訳ではない。托鉢もしない。いや、それ以前に、信仰とは人々の心の中にあるもので、街の風景を称したもののなどでは決して無いのである。遠くで地面に座り込んで何やら作業に没頭している農夫の更にその心の奥。そこにあるのだ。

（私には、分らない——）

暫し足を止め、遠くの農夫を目を細めて見つめていた周婉漣は、再び歩き出した。街の中心部に程近い大きな屋敷に向かい、そしてそれはもう見えている。

屋敷の門の前に立つと、中から周婉漣の姿を見つけた少年が驚いたように目を丸くし、それから駆け寄って来た。

「長老様に目通りを」

「は、はい。どうぞ……こちらへ」

少年はやや急ぎ足で奥に向かうが、その後を周婉漣は辺りを眺めながらゆっくりと進む。外が眩しいほど明るい分、中は暗く感じられて少しひんやりとした小さな部屋に通された。そこで少年は少し待てと言ったが、屋敷の主が出て来るまで殆ど待つ事は無かった。

「周……どの」

部屋に入るなり主はそう小さな声で呟く様に言った。蔡元峰^{さいげんほう}。太乙北辰教、方崖の九長老の一人である。

周婉漣はその顔を見て思わずいつも伏せがちな瞳を見開いた。歳の割に若々しい精悍な顔つきはそのままの様だが、口許に蓄えられていた黒々とした髭がいつの間にかやら白くなってしまっている。黒がまだらに残っているといった感じで、それだけで随分と老け込んだ様に見える。頭髮に目を遣れば耳に掛かる辺りや襟足も白いものが目立っていた。

「……お久しぶりでございます」

周婉漣は一礼する。蔡元峰はその様子をじっと見つめた後、
「掛けられよ」

そう言いながら席を勧めた。

蔡元峰は椅子の背に体を預けた姿勢でぼんやりと周婉漣を眺め、黙っている。暫く見つめ合う様な状況だったが、周婉漣が口を開いた。

「この後方崖に参り、教主にお目通りする事になっております。その前に……ご挨拶を」

「私に、かね？」

「はい」

蔡元峰は溜息を鼻から洩らして目を閉じる。

「私にはもう何も無い。この街に——居てもしょうがないとまで思えてきた。そなた……何故戻った？」

「蔡長老様。私が戻りましたのは、殷汪様の命でございます。方崖へ戻るようにと」

周婉漣の思いがけない言葉に蔡元峰はこの上ないと言うほどの驚きの表情を浮かべ、周婉漣を凝視する。その後我に返ったのか辺りの様子を窺う様に素早く首を左右に向けた。

「誰も、居りませぬ」

周婉漣は真っ直ぐ蔡元峰を見つめ続けている。

「……まことか？」

顔を周婉漣の方に突き出して訊いたその声は掠れ、聞き取り辛かった。

「はい。夏ではなく、殷汪様でございます」

「殷汪どのは何と？ 方崖でそなたに何をしろと？ 今……何処に？」

その蔡元峰の問いに、周婉漣は答えず、

「やはり蔡長老様は、殷汪様とあの夏天佑については知っておられたのですね？ ……最初から？」

「……」

蔡元峰は黙り込む。眉間に皺を寄せ奥歯を噛み締めるが、視線が泳いでるその様は明らかに焦りを表していた。

周婉漣は表情を和らげ、語りかける様に言う。

「蔡長老様。私は張総監の側の人間ではありません。それだけは知っておいて頂きたいと思います。殷汪様の命である事を明かしましたのは、これより先、蔡長老様にお知恵をお借りせねばならない事もあるかと思いましたので――」

「待て。待ってくれ。何が起きているのだ？」

「『何が』――？」

「私には解らぬ」

蔡元峰は両の手で頭を抱え込む様にして下を向く。周婉漣はその様子に眉を顰めた。

「何も起きてはおらぬ。殷汪どのの出奔は確かに大事ではあった……。だが、既に殷汪どのは……殷総監は表には出なくなっていたのだぞ？ 外に出たからといって我が北辰教の敵となった訳ではある

まい。それ以外には……何も起こっていない。しかし……方崖は徐々に変化してきている。この、不安は何だ？ 解らぬ。解らぬのだ」

周婉漣はこの蔡元峰の言葉を全て理解出来た訳では無かったが、何となく言いたい事は解る様な気がした。

方崖に変化と言える出来事と言えば、一年前殷汪が居なくなり、代わりに張新が総監となった——ただそれだけである。そしてその後、方崖は何事も無かったかの様に平穏無事に見える。あの緑恒千河幫の真武剣派との関係の変化も決して捨て置ける事ではないが、それに対して方崖は今のところ特に何もしていない。己の知り得る限りでは——。

変わっていない様に見える。或いは誰かが努めてその様に振舞わせているのか。蔡元峰の感じている不安とは、目に見えていない処で徐々に変質していく違和感。多分そういう事なのだろう。しかしその細部は周婉漣にも解らない。恐らく蔡元峰は九長老として周婉漣では知り得ない方崖の内部について思うところがあり、こうまで憔悴してしまう程の不安、或いは猜疑心の様なものを抱いているのだろうか。蔡元峰は最近まで張新によってこの屋敷に監禁状態であったという。

（この方の知る事とその考えを全て、私も知っておく必要がある——）

周婉漣は自分だけでは知り得ない方崖を、この蔡元峰を通して見ようと考えている。加えて蔡元峰の掴んでいる、そして悩まされている『何か』について、知っておかねばならない。再び殷汪に会うその時まで——。

第十二章 二

「張總監が私を監禁したのは――」

蔡元峰はそう言ってから周婉漣をじっと見て、

「それは……知っておるかな？」

「はい。私が此処を離れる直前の事でしたので。ですが、まさかこれほど――」

周婉漣の視線が一瞬逸れた事に蔡元峰は気付き、ほつれた糸の様に額に垂れ下がっていた白い前髪を撫で挙げると力なく笑った。

「フ……やっと自由の身になれた。ついでに方崖でのお役目からも解放して貰えればよかったのだがな」

「……教主様の許を離れたい、と？」

周婉漣の言葉にまた蔡元峰の溜息が洩れる。

「……いや。戯言だ。忘れてくれ。もうこうなれば思う事を遣り尽くすまでだ。以前の様に方崖への出入りが自由になったのは幸いだ。た。もし、殷汪どのがこの方崖に戻られるのならば、……それはとても困難な事だが、しかし希望は持てる」

「それは……殷汪様が戻られるかどうかは分かりません。ですが、私に『方崖へ』と言われたのは、そう考えておられるという事ではないかと思います」

周婉漣は城南で稟施会りんしかいの当主、周維しゅういに言われるまで全く気付いていなかった。

『なぜ「方崖へ」としか言わないんです？　――方崖に何かあるんですかね？』

城南を離れてこの景北港に着くまで延々と考え続けてきた。周維の言葉は恐らく当たっている筈だ。

『あなたが方崖に居た方が良いとは思われませんか？　今は何もしなくても良いのかも知れない。内部に味方となる者が居る事で随分違ってきますよ？』

『戻るから方崖で俺を待っている——』

（そんな事を、あの方が言う筈が無い。『そんな』意味じゃない。……愚かな。思い上がりも甚だしい……）

幾度重ねたか知れない、そんな己の声をまた此処で繰り返した。その間、周婉漣の切れ長の瞳も、朱の唇も、微動だにしていな。胸の内はこれほど熱くなるというのに——。

「周どの？」

蔡元峰の言葉にハツとなり我に返る周婉漣。そして上体をやや前に出して蔡元峰を見つめた。

「蔡長老様。私にお教え頂けませんか？」

今までに見た事の無い周婉漣の表情だった。瞳を大きく見開き蔡元峰に向けている。座っというが歩いていようが常にやや俯き加減で目を伏せている周婉漣の表情をこれほどはつきりと見たのは初めてかも知れないと蔡元峰は思った。

「……何をだね？」

「蔡長老様が抱かれておられる懸念とは、一体どの様なものでございますか？ 方崖で、何かが起きている……起きようとしている？」

蔡元峰は暫く黙って見つめ返すばかりであったが、やがておもむろに口を開いた。

「張……総監の事だ。何かを——」

周婉漣から視線を外して顎を突き出し、宙を見据えて大きな息を吐くと、

「いや、表面的には単純な事なのだ。張総監が、我らと教主様の間に立ち塞がっている。方崖の他の長老衆でさえ直にお声を聞く機会を激減したらしい。総監という立場上、我ら九長老と共に太乙北辰教を纏め動かしていくのは当然だが、そこに、教主様のご意思は無い。殆どな。私の監禁は数ヶ月に及んだ訳だが、久しぶりに方崖に上がってみれば更にそれがひどくなっている様だ。真っ先に教主様

にお目通りを願ひ、先の――夏天佑の件についての釈明……いや、お詫びしかないのだが、そう申し出てなんとかその機会が得られた。しかし、その場で教主様がお声を発せられたのはほんの二言三言。その場には当然の如く張総監が立会い、まるで張総監を介して言葉をお伝えしてもらっているという様な有様だったのだ。以前ならば考えられぬ。御簾まで下げられていたのだぞ。そう、明らかにおかしい」

話しながら蔡元峰の顔つきが徐々に険しくなりつつあったが、次の瞬間にはそれがふっと消える。

「そなたら七星は教主様の招集という事だそうだが」

「はい」

「そういう名目で、実際に会うのは張総監だけという事もあり得る。そなたや、劉は暫く此処を離れていただろう。フツ、『総監様』の小言を聞かされに行くだけかも知れんぞ」

「そうかも知れません」

周婉漣は既にその心づもりが出来ている。本当にもう戻らないというつもりで出たのだ。遙々城南の地まで行きかなりの月日が経った。今こうして戻って『最初から戻るつもりだった』と言っても、随分と勝手な行動である。無断で教主の許を離れたのは七星の役目を放棄したも同じなのだ。本来、小言どころでは済まない。

（それでも、どんな罰を受けようとも、何としても方崖に留まらなければ。何としても……）

蔡元峰が言葉を続ける。

「それでもまだ、張総監はあくまで教主様の補佐という立場を強調して振舞っている。九長老には『教主様のご意思を伝えている』そうだ。本当にそうなのかは解らぬが。そういう意味ではうまく動いている。何も――起こしてはいない。頭を低く低く下げたまま、隙を見せない。表面上はな」

周婉漣は眉を顰めて僅かに首を傾げた。

「つまり蔡長老様は、張総監は表立って何も事を起こしてはいない

ものの、いずれ教主様を傀儡として方崖の実権を掌握しようとしているとお考えなのですね？」

「既にその状態に近いがね。そして我が教の大部分の人間がそう思っている事だろう。しかしそれを誰も口にはせぬ。隙が無い。掴める尻尾をまだ出してはおらんからだ。『何も起きてはいない様に見える』と言ったのはその事なのだ」

「先程、『思う事を遣る』と仰いましたが、今、その尻尾が見えてきていると？」

周婉漣の視線が鋭さを増した。すると蔡元峰は俯いて、

「……そなたが本当は張総監の命で私の様子を窺いに来たのなら、既に大きな墓穴を自ら掘った訳だな。後は、大人しく底に横たわるだけだ。まったく私は妄想ばかりで実が無い」

「何をすれば、私を信じて頂けるでしょうか？」

「いや、今更何を言っても遅い。信じるしかない」

蔡元峰はそう言って静かに笑う。暫く何かを考え、頭の中を整理しているのか時折小さく頷く仕草を見せてから、再び周婉漣を見た。「張総監が私を監禁した理由だが、私の考えでは二つある。一つは、あの夏天佑の件だ。偽の殷総監に騙され続けた失態……。そういう事になっているのだが、まあ妥当な処と言えよう。それにしても少し長い気もするが」

周婉漣はそこで殷汪と夏天佑の入れ替わりについて、蔡元峰はいつ、どの様に知り、どういった考えでそれを受け入れたのかを訊きたいと思ったが、短く済む話ではあるまいとも考え、黙って続きに耳を傾けた。

第十二章 三

「それからもう一つ。こちらの方が重要であつたのだろう。先の――千河幫のヒヨウ局襲撃の件」

蔡元峰の淡々とした声に周婉漣は一層深く眉を顰め事になる。

「『ヒヨウ局襲撃』？ どう関係が……」

すぐに周婉漣の表情は一転し今度は驚きの色が浮かぶ。

「まさか、あれは北辰……張総監が？」

「……いや、証拠も無い。まだだ。まだ見つからぬが私は監禁される直前、七星の劉が張総監の命を受けてその賊を片付けに向かった事について調べていたのだ。そなたはあの事件を覚えているかな？」

「……詳しいところまでは分かりませんが、何があつたのかくらいは」

蔡元峰は小さく頷いた。

千河幫の朱不尽しゅふじん率いるヒヨウ局が北辰の縄張り、しかも景北港にかなり近い土地で賊に襲われてかなりの死傷者を出したというその事件については当然、周婉漣も聞き及んでいた。だが、周婉漣にとつては久しく記憶に留めておく程の出来事でもなかった。似た様な事件はこの広い江湖では起きない日は無いのである。太乙北辰教のお膝元と言える地での賊の狼藉という点においては多少は注目を集める出来事ではあつたが、瞬く間に広まった伝聞を小耳に挟んだ程度の周婉漣にはどうという事も無い。景北港を離れる事を決めた、直前の出来事であつた。

同じ北辰七星である劉毅が賊を始末したと聞いても、それは命令ならば当然であり何も感じない。劉毅が何処で何をやろうと興味は無かつた。改めて思い返すと出てくるのは、『被害に遭つたヒヨウ局は殷総監が副教主になるその祝いの品を運んでいた』という事くらいか。

（真武剣からの祝いの品――。確かに不自然ではあるけれど……）。

私は……？ それを誰から聞いたのだろうか？

「あの荷は謎だった」

蔡元峰の言葉が回想に偶然にも重なり、周婉漣はハツとなった。

「真武剣が何故、殷総監に祝いの品を送るのか？ 先主様から代が変わって血で血を洗う抗争は終わった。陶光様はまだお若く、あのご性格だ。争いなど好まれぬ。真武剣としてはこれを機に……まあ友好とまでは考えまいが互いに不可侵とする約定を取り付けたいところであつたろう。あの頃は双方疲弊していたからな。『祝いの品を送る』というその方策だけをみれば、まあ納得は出来よう。しかし……殷総監に、とは如何なる事か？」

「殷汪様は……陶峯様が掲げた対真武剣の旗印……」

周婉漣の呟きに蔡元峰は大きく頷く。

「私は、千河幫のヒョウ局の者から話を聞き、その荷の目録も見た。その者の話では真武剣から『殷総監へ』ではなく『方崖へ』とだけ聞いたそうだ。武慶で預かった際には総帥陸皓もその場に居たという。さて、陸皓は誰にあの祝いの品を届けたかったのか？ 当時、方崖でそのような祝い事と言えば、殷総監が副教主に……それしかない。では『殷総監へ』と告げなんだのは何故か？」

「本当に、『祝い』であつたのでしょうか？」

周婉漣は上体を前に押し出し、真剣に聞いている。当時は全く気にも留めずに殆ど忘れかけていた一年前のヒョウ局の事件が、今になってとても気になり始めていた。あの殷汪が関係するというその一点に於いて――。

（すぐに調べていれば……。でも、あの時既に殷汪様は……）

「真武剣も中身についてはヒョウ局の者に目録を手渡しただけで祝いとは一言も言っておらぬようだ。しかしあの目録を見ればそれ以外考えられぬ。実用に足る物と言えば絹の反物があつたがそのくらいか。恐らく上質のものであろうが量はそれ程無い。後はよく集めた物だと感心するが、各地の名産として名の知れた細工が数十点にも及ぶ。だがあれを見る限り……ただ祝いとしての体裁だけを

考えたと思えん。あの陸皓が用意したとすれば、少しばかり粗末な、とも言えなくも無い。ただ集めただけの――」

「蔡長老様。張總監はその件に……どのように絡んでいるのでございましょう？」

周婉漣は先を急いだ。蔡元峰の話は複雑な様で細かに話を聞いておきたいのは山々だが、周婉漣はこれから方崖へ上がらねばならず、あまりゆっくりもしてられない。この地に留まり続ける事を決めたのだ。再び蔡元峰と話す機会は幾らでもある。

「荷が方崖へと届いた場合――」

蔡元峰は声を低く抑え、卓上を指し示すように指を伸ばしてコツコツと鳴らした。

「張總監が荷の中身を確認しただろう。恐らく私同様、祝いの品であると判断し、そして真武剣から殷總監への送られた物であると理解する。その荷には目録以外に何の書簡も無い。我が教に副教主が新たに立つその祝いのつもりならば、まず教主陶光様へ祝辞を述べる書状の一つもあって然るべきではないか？　これは何とも、無礼な話であろう。教主様を無視した、真武剣と殷總監の遣り取り。張總監――いや、当時の張新はこの事をどう扱うかな？　あの頃は既に殷總監は隠居も同然の状態であったが張新にとってその存在は邪魔であつたろうな。教主様を連れまわす様になり我ら九長老に対してもその発言力を増さんと知恵を働かせておった様だからな」

「張總監はあの夏天佑を、殷總監と？」

「信じて疑わなかっただろう。滅多に顔を合わせる事は無かつたと思うが、張新は殷總監のあの内功、特にいつまでも若々しい姿を保つ功夫を気味悪がっておつてな。その奇妙な内功の副作用で体を壊したという噂も手伝つてか、たまに顔を合わせると怪訝そうに『顔付きが変わって来たな』と申しておつたそう。無論本人に直接言う訳ではない。取り巻き連中にだ。しかし、喜ばしい事だ。殷總監が弱っていくのはな。そろそろ止めを刺したいところであろう。長老衆も大方……頭は撫でてある」

「ですが、荷は届きませんでした。『それ』を使う事は出来なかった……」

「荷は方崖に届いた」

「えっ？」

周婉漣が眉を顰めて見返してくるその視線を蔡元峰は真っ直ぐ受け止める。

「ヒヨウ局は壊滅状態で三江村から退き返したが、荷は殆どを劉毅が方崖へと持ち帰った。荷は届けられたのだよ」

周婉漣は思わず息を呑んだ。それでは——劉毅は賊を追ってこれを討ったのではなく、その賊が劉毅という事か。しかし記憶ではヒヨウ局が襲われたという報が方崖に届いて後に劉毅が九宝寨の配下を率いて出た筈である。勿論、九宝寨は多勢であり先に人を遣る事は容易なのだが。

「しかし、届いて間も無く、殷総監役の夏天佑が自ら方崖から消えてしまった。張新の望みは叶ってしまった訳だな。……これが私の考えた事の一つだ」

「他にも？」

「私を監禁する理由としてはこれで充分だ。賊は劉毅か否か、つまり劉毅に命じたであろう張新の意図か否か。これについて私は調べようとしていたのだからな」

「ではやはり、張総監には隠したい事実があったという事ですね？」

「そう考える事も出来る、という段階だ。まだな。それに、真実はそう単純では無い。劉毅が荷を届ける役割を果たしたのは事実だが、何故劉毅でなくてはならぬのか？ 放っておいても荷は届いたのだ。ヒヨウ局が運んでくるのだから。それを考えれば劉毅の容疑は晴れる事になる。フツ、襲う必要性が無い。では張新が私をこの屋敷に閉じ込めたのは単に腹を探るような真似が気に入らなかっただけだろうか？ まさか本当に『夏天佑に騙されていたから』という理由か？ ……合わせてもう一つ、真武剣の方も謎だ」

第十二章 四

「真武剣……でございますか？」

「陸皓は、何を思つてあの品を方崖へ送つたのか？ まさか、張新がその様に荷を利用すると読んで、殷総監の失脚を狙つたのか？」

しかしそれにしては余りにも……策が単純過ぎるように思えてならぬ。陸皓……」

蔡元峰は考え込むように卓上の一点を見つめている。

張新という人間を陸皓が何処まで知っているのか、蔡元峰には想像もつかない。というよりも殆ど知らない筈ではなかったか？ 真武剣派は常に太乙北辰教に探りを入れ動きを観察している筈であり、張新という人物が今、方崖を動かしている事は当然掴んでいよう。

しかし、張新の台頭はほんのごく最近の事である。その直前まで若き教主の側近でしかなかった男であり、方崖は紫微宮しびきゅうの深奥に潜むかの様に生きてきたのだ。真武剣派が方崖へ祝いの品を送つたのは殷総監が北辰を離れる直前。自分を含む九長老こそ張新の威を不本意ながらも認めざるを得なかったものの、当時のその状況を外から眺めている真武剣派が既に察知していたとは考え難い。

「真武剣が祝いを贈る理由、張新がヒョウ局の到着を待たずにこれを襲つた理由。何か繋がりがあるのではないかとずっと考えておるが、未だ解らぬ」

「ヒョウ局の件が起きた時――」

周婉漣が訊ねる。

「あの夏天佑は何か申しましたでしょうか？」

蔡元峰は周婉漣をじつと見つめ返し、

「襲つたのは劉……、そう申しておつた」

「しかしあの時、殷汪様は既に景北港を離れておられました。それはつまり……夏天佑が勝手に考えた事では？」

「殷汪どのはあの時、都に行つておられたようだな。それから戻つ

てはおられぬ。殷汪どのはヒョウ局の件をご存知無い可能性もある。確かに、夏の考えであろうな」

「そう考える理由は何だったのでしょうか？ 夏天佑はずっと、全て殷汪様の指示通りに動き、言葉を伝えるだけの役目であった筈」

「私は夏がそう言ったからそれを全て信じて劉が下手人だと考えた訳ではない。探りを入れるきっかけにはなったがね。夏の体は既にかんりの変調をきたしておった。精神的にも不安定であった様だ。

……全く表にも出なくなったあの者が何故そう考えたか、今となつては知る由も無い。しかし、適当に考えたとも思えぬ。張新が『殷総監』という存在を疎ましく思っているという事に憤慨しておった。自分は『殷総監』であり、『殷総監』は殷汪どの。殷汪どのの敵は、己の敵——」

「……」

暫く沈黙が続く。考えを巡らせる、というより互いにぼんやりと物思いに耽っているという様な面差しであった。

「方崖へ？」

蔡元峰が思い出した様に訊いた。周婉漣は小さく頷く。

「はい。これから参ります。教主様にお目通りする事になっておりますが、果たして叶うかどうかは……」

蔡元峰の話では張新に邪魔されるかも知れないという事だったが、とりあえず今はどちらでも良いと周婉漣は考えていた。この景北港に残る為にも今は張新の前では大人しくしていなければならぬ。

「忠告、という訳ではないが、一つ言っておこう」

「何でございましょう？」

「北辰七星、その七番目だが——」

周婉漣はその言葉を聞いて、少し前に耳にした七星の七人目に関する話を思い出した。張総監が七番目にと連れてきた男を林玉賦りんぎょくふが一撃で打ちのめしたという。

「張総監が何処からか連れてきた男の話は聞き及んでおりますが……」

…」

「まだ続きがある。前は林であったが、今度はそなたか劉あたりが働かされる事になる様だ」

周婉漣は首を傾げる。

「林に負かされた男の話は随分と広まってしまつてな。北辰教は七星の七番目を探していると。それを聞きつけた一人の男がなんと方崖まで乗り込んできた」

「それは……自分を七星に加えろと？」

「そうだ。フフ、北辰七星に志願するという。なんとも凄まじい自信だ。しかしこの男、武林での経歴などは全く分からぬ。どの門派の出であるのか……いや、それ以前に武芸を修めているのかどうかさえ――」

「それならば少し相手をすればその辺りはすぐ確かめられそうなものですが……。今度は私か劉がその腕試しをする事になるという事でしょうか？ その男はいつ方崖へ来たのですか？」

「ひと月……にはならんな」

「では今まで試しもせず置いているのですか。張総監は」

「張新は……ハハ、いかなな癖がついたらまずい。『張総監』は、とてもその男が気に入らないらしいな。おかしい話だ。自分では七星にどうかと突然人を連れてきておいて、今度はわざわざ来てくれたというのに『追い返せ』とえらい剣幕で怒鳴っておったそうなの。誰にも試させようとしなかった」

「……知らない者は七星に入れたくないのかも知れませんか」

前の七番目、喬高きょうこうは先に七星となつていた劉毅りゅうぎとの縁で七星に加つた筈、と周婉漣は記憶していた。当時この事に注目していた訳でもなくおぼろげな記憶ではあるが。この教主直属の北辰七星に思いがけず空席が出来、そこに自由に人を配置出来るとなれば自分に近しい人間、理想は思い通りになる人間を置きたいところであろう。「しかし今もまだ居るという事は、張総監は追い出すのを辞めたの

ですね」

「そなたと劉がやっと戻って来たからな。張総監は勝手に行方をくらましたそなたらを、快く思っておらん」

「当然、そうでしょうね……」

「かといって劉については張総監も直接はあまり強く言えまいな。フツ、劉もその辺はうまく立ち回っておるようだが」

周婉漣は黙って聞いている。だが恐れてもいない。

（私は一人――。追放の命を下す事は容易。でもそれをしないのなら、私にも遣りようはある）

「その男、口はすこぶる達者の様だ。七星の誰が相手でも構わんと言う。頭がどうかしているのではない限り、腕に相当の自信があるのだな。案の定、林が先の男同様方崖から叩き出すと息巻いておるが張総監はそれを許していない。恐らくそなたにさせるつもりだ」

「敗れば、私を処分し易くなる――」

「張総監はそなたの腕前を理解しておらぬだろうから、そういう算段ではないか？ 男の言う事を信じてこれは凄腕かも知れぬと思っているのだろう。フツ、しかし万が一そなたが敗れる様な事があれば、これはとんでもない事だな。方崖に殷汪どのが現れた時以来の衝撃を目の当たりにする事になるかも知れぬ」

蔡元峰が笑顔を見せて言うので周婉漣は俯きながらも僅かに頬を緩める。蔡元峰の言う『その時』の事は、周婉漣は今でも鮮やかに思い返す事が出来た。

第十二章 五

その後暫く話は続いたが、後はそれ程重要な内容ではなかった。解っている事は未だ少ない。

「また、寄らせていただいても宜しいでしょうか？」

周婉漣が訊ねると蔡元峰は黙って頷いたが、

「頻繁に顔を合わせるのは避けた方が良いでしょう。更に探るには時間が掛かる故、そう話せる事も無いだろう」

「はい」

「私は方崖への復帰が許されたとはいえ、この屋敷に居る事の方が多い。たいした役目も回って来ぬのでな」

周婉漣は頷き返す。方崖で張新に気取られぬ様に気を使いながら会うよりはまだこの屋敷の方が易しい。

「それでは、またいずれ……」

「先程言った七星志願の男と遣る事になれば、私も見に行く事になるだろう。張総監はより多くの者にそれを見せたいだろうから。次にそなたを見るのはその時かな？」

返事の代わりに周婉漣は此処へ来て初めて、はっきりと口許に笑みを浮かび上がらせる。薄く開いた瞼に覗く瞳と唇の紅い光が周婉漣を飾る。周婉漣の表情ではあまり見る事の無い、不敵な微笑であった。

来た時と同じ、周婉漣は一人静かに屋敷を辞去し、蔡元峰はこれを見送った。

（いかな張新とてあの者に手荒な真似は出来まい。あれは……ただの『七星が一人』では無いのだ）

「旦那様」

背後から声が掛かる。この屋敷で蔡元峰に仕える少年が、周婉漣が屋敷を出るのを見届けてから傍らに近付いて来ていた。

「初めてあの方を間近で見ましたよ」

少年は大きく見開いた目を輝かせながら蔡元峰に顔を向ける。

「そうか。この景北港に住まう教徒でもあの七星周婉漣を近くで見た事のある者は多くは無かろうな」

蔡元峰は誰も居ない門の外を目を細めて眺めつつ言った。

「最初、来られた時はびっくりしてしまいました。でも……そんなに恐ろしそうな感じは無かったなあ」

「恐ろしい？」

「街の人の噂では、あの人七星の中でも最も腕が立って、最も北辰教を知り、最も冷酷で——」

「馬鹿な。そう言う者達の中であの周と言葉の一つも交わした事のある奴がどれだけ居るといふのだ？ 武芸が優れているといふのは北辰七星に選ばれている事から想像出来る。そして教主様に……仕えて久しい。あれはまだ若いが他の幹部連中と比べても方崖に上がったのは随分と昔の事。古参と言っても良いな。北辰教を知るといふのは……陶峯様に最も近い存在であったという事から連想しておるだけだ。フン、あまり表に出ないが故の噂に過ぎぬ。街の者達はその手の話が好きなのだ」

街の人間とはこの景北港の住人の事であり総じて太乙北辰教徒である。信者が方崖の人間の噂話をする事は殆ど禁忌であり、慕い敬う言葉を用いる事はあっても『冷酷で——』等とは口が裂けても言える事ではなかった。周婉漣を揶揄するかの様な物言いが出来るのは、彼女が突然この景北港を離れたので（ついにあの周婉漣が北辰教を捨てた！）という噂が教徒達にまことしやかに囁かれた為である。あくまでも仲間内で『囁かれた』のであって表向きは沈黙を守っていたが、その裏で瞬く間に広まった。そういう話ほど拡がるのが速い。実際、もう戻らないだろうと思える程の時間が経過していた。

（勝手に方崖を離れたのは教主様に対する裏切りではないか！ やはり『あの』周婉漣は腹に一物あったのだ！ やはり——！）

「陶峯様、ですか？ 先主様の……？」

少年は首を傾げる。蔡元峰は相変わらず視線を門の外に送り続けている。

「……周は先主陶峯様に見出され方崖へ上がったのだ。まだ……幼い頃に」

「そんな小さい頃にですか。じゃあそんなに長く方崖で教主様に仕えておられるのに、どうして街の人達は『やはりあの周婉漣は』なんて言ったんでしょうか？ 裏切る様な……本当は全然そんな事無かった訳ですけど、どうしてそんな風に思われてしまったんでしょうか？ 前にも同じ様な事が？」

「……知っているつもりでしかない者達の口はよく回る。そもそも方崖にも上がった事の無い者が教主様に仕える七星の何が解ると言うのだ。あれらは皆、方崖にあって特殊な存在。よいか。その様な話に耳を貸してはならぬ。虚言で教徒を惑わす者は厳罰をもって処す」

蔡元峰は語気を強めて少年を睨むと、踵を返して屋敷の中へと戻って行く。少年はまるで自分がその様に言い触らしているかの様に蔡元峰にたしなめられ、納得がいかず口をへの字に曲げて蔡元峰の背中をじっと見ていた。結局質問に答えは出なかったが、周婉漣の件が自身に関係がある筈も無くすぐに忘れてもどうという事は無い。実際、蔡元峰の後を追って駆け出す時には既に頭から離れていた。

周婉漣は蔡元峰の屋敷を出た後、そのまま真っ直ぐ北へ向かう。人の多い大通りには出ず、先程と同じ様に田畑の間の小道を一人歩いていた。辺りに人は居たが皆それぞれ自分の仕事に勤しんでいる。昔から変わらないこの街の風景。

顔を上げ正面に目を遣れば、樹木が削ぎ落とされたかのように露出する岩肌の帯が山を上下に二分している。人が手を加えてこうなったとも、人がこの世に現れる以前からこの景観なのだとも言われ

ており、真相は定かではなかったがどうも自然にそうだったとは思えない程、見事に整った方形の崖が、その帯の中程にある。しかし誰かが手を加えているのを見た者は居ない。遙か昔からこの様になっているからだ。

その崖の上には陽の光を受けて輝く黄金色の屋根瓦が見えている。黄金色に見えているのは陽の光の加減であろう。実際のその屋根は明るめの朱であった筈だ。

（細工は不要。今まで通りで。私はあの方崖を捨てる気など更々無かったのだから――）

周婉漣は自らに暗示を施すかの様に胸の内を呟くと、少し歩を早めてその輝く黄金色を目指した。

方崖紫微宮。太乙北辰教の中枢に、周婉漣は舞い戻る。

「他は？ まだ来ておらんのか？」

「さあて、婉漣はまだ見ないけど、あとの二人はとくに着いてる……というより、此処に入り浸りさ。今や総監様と仲良しだからねえ。知らなかったのかい？」

「少しは聞いているが、確認はしておらんのでな」

「……周は来る。東淵から共に帰って来たが、何も変わった様子は感じられなかった」

「さあそいつはどうかな？ あれがもし何か考えを秘めているとしたら、お前だけじゃなく他の誰にも気取らせたりはしないだろう」

「あたしはそっちの方が面白そうで良いんだけどねえ。一体、何処で何をやってたのやら。あんたは知らないのかい？ 婉漣を追ってたんじゃないのかい？」

「まさか。何処まで行ってたのか俺も是非聞きたいもんだ」

第十二章 六

薄い扉に影が映る。髪の長い女らしき影。部屋に居た林玉賦、鐘文維、そして劉毅の三人はほぼ同時にその影に一瞥をくると、すぐにまた何事も無かったかの様に視線を戻した。

扉がそつと開き一人の女が顔を覗かせる。総監付きの侍女であった。

「お揃いになられましたら、尊星そんしょうの間へとお進み下さいますよう……」

侍女は部屋には入らず扉の横でじつとして頭を下げ、か細い声でそう言った。

「揃う、とは？」

劉毅が訊ねる。すると侍女は顔を挙げ、怪訝そうな表情を浮かべた。

「此処にはあと、誰が来る事になっている？ 慮と侯の二人も待っているれば此処に来るのか？」

「……いえ。慮元冲様りよげんちゅう、侯且様こうしよは既に参られまして張総監様にお会いに——」

「ほう。ならば我らもそこへ行かねばならんのでは？」

劉毅は言いながら林玉賦と鐘文維に視線を送る。

「いえ、あの、張総監様は皆様と尊星の間で会うと仰られました」

侍女は慌てた様子で少し早口になる。

「ほう。そうか」

劉毅は侍女の方を向いて大仰に首を縦に振る。林玉賦はその様子を見てフツと鼻で笑い、鐘文維はただじつと侍女の様子を窺う様に見える。

「では——」

「ならば、あとは周が来れば揃う訳だな。それはそうと、尊星の間とはどういう事だ？」

「えっ？」

侍女は早々にこの部屋を離れたいとも思っていたのか腰を折って後退りする途中であったが、まだ劉毅が話し掛けてくるので密かに眉根を寄せた。

「我らは教主の命によりこうして集まったのだが……尊星の間で拝謁がかなうのか？」

尊星の間とはこの紫微宮にある広間の一つだが、教主との謁見に用いられる事は一切無い場所である。教主の命により個人が特別に呼ばれる場合を除き、通常、教主にまみえる事の出来る謁見の間はこの建物の中央部にある広間というより巨大な空洞とでもいうべき処で、元々その場所のことを紫微宮と呼んでいた。

最奥に何層にも重なる壇が設けられており、その上に教主の玉座がある。その壇を下りた手前に方崖の幹部達が並び、更にその手前には建物の内部にもかかわらず十丈もの幅のある堀が造られており広間の奥と手前を隔てていた。その堀は左右に二本の細い橋が掛けられているが、誰も渡る事は許されておらず紫微宮の警備にあたる武装した男達が守っている。

拝謁が叶い訪れた者は教主から遙か遠く入り口を少し入った場所に並んで地に膝をつき、教主の姿を一目見たならば七度叩頭した後、地に額をつけたまま教主の言葉を待つ。教主が退出し、総監の声が掛かるまでじっと同じ姿勢でおらねばならずかなり辛いものがしきたりであり、僅かでも粗相があれば即刻つまみ出されてしまう。

あくまでこれは一般の教徒の場合であり、方崖の九長老など上級の幹部らがこの謁見の間で改まって教主とまみえるという事は無い。総監は勿論の事、北辰七星も同様である。教主の謁見が行われる場合、常に彼らは教主の傍に立つ。

それにしても尊星の間はあり得ない。外から訪れる客も通せない程何も無く、今、劉毅らが待機している部屋と殆ど変わらずしかも教主の居室からも遠い。広いといっても同じ屋敷内で遠いものにも

無い様なものだが、教主にお出ましを請うには相当の気を使わなければならぬ。教主の意向はさておき、そのようにしなければならぬ事になっている。とにかく、客間にもならないその部屋を教主が訪れる事は一切無い。

「教主様……でございますか？」

侍女は何も知らされていないのか、口を閉じるのも忘れてぼんやりと劉毅を見返している。

「ああ、もういい。行って良いぞ」

「え？ あ、はい……では」

劉毅に言われて侍女はそそくさと部屋を出て行った。

「林、教主に最後にお会いしたのはいつだ？」

劉毅が林玉賦に訊ねる。林玉賦は気だるげに椅子の背にもたれかかったまま少しだけ腕を動かした。

「何であたしに訊くのさ？」

「ずっと此処に居たんだろう？ 鐘、お前は東淵だったな？」

鐘文維は黙って頷くだけだ。林玉賦は顔を顰めて今度は大きく袖を振ってみせる。

「フン。あんたらが好き勝手に出歩いてるおかげでこっちは此処に押し込められてたのさ。全く退屈でしょうがないよ」

鐘文維は口を開く。

「私は勝手に出て行った訳ではないが……。お前も武慶まで行ったろう？」

「もう随分前じゃないか。あたしは誰かさんと違って真面目だからねえ。用が済んだらさっさと戻って来たんだよ。どこかで遊んでれば良かったよ」

「俺は遊んでた訳ではないんだが……」

劉毅が言う。

「周はどうだったか知らんがな。で？ どうなんだ？ 教主は？」

「声を聞いたのなんてずっと昔の気がするねえ。あんたが此処を離

れてる間は一度も無かった。ひと月……もっと前だったか？ 姿は見たけどね」

太乙北辰教において絶対である教主に仕える身にしては林玉賦の言葉は不遜である様にも聞こえるが、これがいつもの林玉賦であり決して教主を軽んじているつもりは無かった。

「御前試合、か？」

「ハ、試合どころか余興にすらなりやしないよ」

劉毅が景北港に残っていた配下から御前試合の話を既に聞いていたとしても何ら不思議は無い。林玉賦はまた袖を振った。

「様子はとうだった。変わりは無かったか？」

「さあてね。張総監が邪魔で良く見えなかった」

首を竦めてみせる林玉賦に、劉毅はニヤリと笑う。

「フツ、お前口に気をつけた方が良いぞ。そんな事、俺なら恐ろしくて到底口に出来ん」

「へえ。変だねえ。あたしら七星は教主様にのみ従っていれば良い筈だったのに、いつから他の奴の事まで気にしなくちゃいけなくなっただんだい？」

「じゃあ何故お前は総監に言われただけで試合に立ち会った？」

「……教主様の名を持ち出して来るから仕方なくやってやったのさ」
林玉賦の真っ赤な唇が小さく尖る。

「だろうな。これは……問題だぞ？」

劉毅は林玉賦と鐘文維を見遣りながら言う。その視線には僅かに力が籠もっていた。

「その話は――」

鐘文維が言葉を返す。

「出来るだけ此処ではない場所でするのが良いだろうな」

丁度その時、扉に影が映る。また、女の影である。三人は同時にそれを見遣り、今度はじっとその影が扉を開けるのを待った。

「フフ、まさか本当に、戻ってくるとはねえ」

第十二章 七

また、扉がゆっくりと、小さな音を立てながら開く。扉の向こうに居たのは数百日ぶりにこの方崖へと戻って来た周婉漣だ。他に人は見当たらず扉を開けたのは周婉漣自身である筈だが、その手はいつもの如く腰の前で組まれており、ひとりでに開いてゆく扉が完全に開ききるのを待つかの様にじっと佇んでいた。一見すると不思議な光景であったが、中の三人は特に驚く事も無く久しぶりを見る周婉漣の顔をまじまじと見つめていた。

「少し遅れたかと思っただけだ……まだ揃っていないのね」

まず、周婉漣が口を開いた。すると、

「いや、もう揃ってるさ。あとの二人はとくに総監の許に居るらしい。どういう事なのか知らんがな」

久方ぶりの再会にも拘らず劉毅は毎日顔を会わせる仲間に話すかの如く、淡々と言った。鐘文維だけが少し早く東淵で再会を果たしているだけで、林玉賦も劉毅同様、周婉漣を見るのは随分と久しぶりの事だ。だが視線を交わすと僅かに頷いて返すだけである。

周婉漣は劉毅の言葉を訝しみ僅かに首を傾げる。

「尊星の間へ来いと言う。お前を待っていたんだ。さて、もう行くか」

劉毅は立ち上がり、林玉賦と鐘文維に目を遣る。鐘文維が立ち、少し遅れて林玉賦も億劫そうにゆっくりと腰を上げた。

「尊星？」

周婉漣が呟く様に言うと、鐘文維が部屋を出た処で周婉漣に少しばかり頭を近づける。

「どうやら教主にお目通りする事は叶わん様だ」

「……」

そこへ林玉賦も近付き周婉漣の前に立った。左手を腰に当て、首を傾けて周婉漣を見つめるその表情は少し笑っている。

「あたしは総監の話なんかよりあんたの話が聞きたいんだけどねえ。確実にそっちの方が面白いに決まってる」

林玉賦は周婉漣が景北港を離れて何処へ向かったのか、おおよその見当をつけていた。具体的な場所についてではない。それは分らないが、周婉漣がどの様な欲求でもって此処を離れたのか――それは幾つかの理由が考えられたが――理解しているつもりであった。「……特には何も無かったけれど」

「そうかい？　じゃあ……その何も無い様子を後でじっくり語って貰いたいもんだね」

林玉賦はそう言うってから踵を返し歩き出すと、周婉漣は何も言わずそれに続き尊星の間へと向かう。その後方では鐘文維と劉毅が周婉漣の後姿をじっと眺め、少し間を置いてから歩き出した。

（どうする？　周よ）

劉毅は腕を組み歩きながら周婉漣の後ろ姿を窺っている。しかし何処にも変わった様子は見られない。

（フッ。当然か。こいつは方崖に居る他の誰より、最も優れた役者だ。俺達などとは『経験』が違う。普通に考えれば当然、俄かに出て来てでかい面し始めた張新如き、手玉に取るなど容易い筈だが、さて――？）

尊星の間。そこには案の定何の用意もされていなかった。ただ、中には四人の従者が正面の壁を背にこちらを向いて整列していた。皆、武器を帯びている。教主が現れるならばこれほど近くに並ぶ事はあり得なかった。通常であれば――。

今此処に呼び出されている北辰七星にも表向きには武器の携行は許されてはおらず、皆、従っている事になっている。が、果たしてそれが本当かどうかは実のところ不明である。これは非常におかしな事であるのだが、北辰七星という特殊な立場がこのような奇妙な状態を生んだ。

今、尊星の間に入った四人は通常、得物は長剣を用いている。だ

が、部屋に入り正面の従者四人と対峙するかの様に横一列に並んだ周婉漣ら北辰七星四人は今は長剣を帯びていない。衣服の中に隠せる筈も無く、間違いなく持っていないだろう。少なくとも長剣だけは。しかしそれに何の意味があるだろうか。剣が無ければその武功を行使出来ないような北辰七星ではない。林玉賦が針を飛ばすのは誰もが知っている。身に纏う衫の下にはどれほどの針が仕込まれているのか？ それには毒が塗ってあってもおかしくは無く、一度その技を見れば周りはただでは済まない。そういった暗器の類を皆隠し持っているかも知れないのだが、部屋に入る前にそれを調べる事は、七星に対して行われる事は今まで一度も無かった。

北辰七星とは太乙北辰教教主の守護者である。常に教主の傍らに身を置き、教主に刃を向ける者達を退けるのが本来の姿。今でこそ武器を所持して教主にまみえる事は許されないとされているが、前教主陶峯は七星だけには常に武器を携帯する事を許している。幾ら武芸に秀でた者を揃えたとしても向かって来る賊に対して丸腰で当らせるのは守りを自ら弱らせる様なものだ。しかし、これは諸刃の剣である事は自明である。この剣が自らに向かって来た場合、陶峯はどのようにするつもりであったのか？

後に一人加わって北辰七星と呼ばれる事になる自らを守護する者達を選出するのに陶峯が最も重点を置いたのは、その身に付けた武芸である。武林で最も優れた者達でなければならぬ――そう考えていた陶峯は国中を探し自らその技を見て、六名を集めるに至った。周婉漣を除いた他は皆、他所からこの景北港に連れて来た者達である。劉毅にしても九宝寨は比較的景北港に近い場所にあったがその活動範囲は北辰教との関係もありその勢力外へと避けていたので、陶峯と出会うまでは景北港に近付く事は殆ど無かった。

得体の知れない余所者をかき集め、しかも凄腕であるその者達を近くに置くなど、危険極まりない――そう考える者も居ないではなかったが、これを知った北辰教徒の殆どは当時そうは思わなかった

様だ。何故ならば北辰教主陶峯こそが武林最強であると信じていたからである。

『教徒達を導く徳の高い人物であるのは当然で言うまでも無い事だ。古くから武林最大の武装集団と化した太乙北辰教の首領である教主は武林最強の武芸を修めており、だからこそ教主たり得る』

事実、教主陶峯の武芸は代々の教主のみに受け継がれるもので武林では一目置かれており、その陶峯が武林制覇を唱え始めると各門派は内心は戦々恐々としたものだ。教主陶峯の野望を打ち砕くには、その技を凌駕する強力な武芸で対抗せねばならない。当時北辰教に對抗する門派では北辰教主の武芸だけでなく教徒達に伝授される様々な武術についても研究がなされていた。

教徒達は信じていた。

『陶峯教主を傷つけるのは不可能だ』

信賴して傍に置くのではない。裏切り者が現れたとしても、どうせ何も出来ない――。それに集めたのは武林の有名な門派とは何の縁も持たない、しかし信じがたい事にそれらに匹敵するどころか上回る程の腕を持った無頼の輩達。そんな人間を見つけ出し北辰教に引き込む事に成功したのはやはり教主の徳であり、また一癖も二癖もあるその者達が大人しく従った――本当にそうであったか分かる筈も無いのだが――というのは教主の徳に感じ入ったからこそで、全くの危険な存在では無い筈だという訳である。

『無敵の教主様がわざわざそんな奴ら集めずとも……』

『お前は馬鹿か？ 敵の雑魚を一々教主様が相手になさる訳が無いだろうが。あれだけの凄腕を従えとけば、教主に齒向かうなんて奴らはそのうち居なくなるってもんだ』

第十二章 八

それから時が移り陶峯が急逝すると、北辰七星は新教主陶光に仕える事となる。既に北辰七星は教主守護の役目について久しく、暫くはその存在を危ぶむ者など殆ど居らず方崖での地位は変わらなかった。陶峯という存在が消えた事で相対的に北辰七星の力が増す事になるにも拘らず、それでも九長老ら方崖の幹部達が北辰七星をそのままにしていたのは、陶峯が後の備えと考えていたのかどうかは知らないが、殷汪という人物を方崖に遺したからである。

陶峯最強説が浸透していたその生前ならばともかく、選りすぐりの六名を牽制する存在がたった一人などというのは無茶にも程があるというものだが、陶峯が殷汪の腕試しと称して七星と遣らせた時には六名全てを同時に相手にしてこれを退けるなど、武芸天下第一とは評判通りであり――陶峯最強云々とは矛盾する事になるのだが、何故かこれに触れる者は居なかった――七星に対して力を示した事は申し分無い。七星の様にずば抜けて武芸に秀でた者達にとって修めた武芸の精妙さは、それを得るのに費やした月日、ひいてはその者の生き様を現す。武林屈指の使い手が互いの技を交える時、それは単なる力比べでは無い。北辰七星はその時、殷汪という人物を知り、そして総監として方崖に立つ事を認めたのである。

それだけでなく殷汪は新教主を立てて体制を整備すると他派との外交の方針を指し示すなど総監としての役割を果たして方崖を掌握した。そうした上で教主を補佐する同志として北辰七星とも良好な関係を築いていると九長老は判断したのである。

殷汪が方崖に上がって後、北辰七星は随分と気が楽になったに違いない。『新しく入った余所者』役は殷汪に移ったからだ。ただ、そう見る向きも割と早い段階で消え去る。こうして北辰七星の地位はまた暫く安泰となった。殷汪が消えるまでは。

今、部屋に居る四人の武装した従者達の役割は、何も劉毅や周婉

漣ら北辰七星に目を光らせて牽制する為ではない。七星から見ればこの者達など部屋の飾りの様なもので、その様な効果を期待して張新も待機を命じてはいまい。

劉毅は考えを巡らした。これがもし教主との謁見となれば更に警備の人間を増やし、七星が教主に近付く事を許さないのではないか。今回、教主の招集で集まったというのに教主に目通りさせる気が無いという事は、既に張新はそう考えているに違いない。何故教主が出て来れないのか、誰も未だ聞かされてはいない。

陶峯の作った北辰七星はその役を終えて形を変えるのか、或いは消されるか。張新という新総監が従来形の北辰七星を必要と考えているとは思えなかった。陶峯も、殷汪も居ない、自らの支配する新たな方崖に――。

部屋は静まり返っていて、この尊星の間に人がやって来る気配もまだ無い。七星の四人は並んで立っているが言葉を交わすでもなく、周婉漣と鐘文維はぴくりとも動かずその場に立ち、林玉賦は退屈そうにしていたかと思えばなにやら手の爪をいじくるのに没頭したりしている。

劉毅は腕を組みじっと前を見ていた。正面には従者の一人が向かい合う格好で立っているのだが、劉毅があまりにも鋭い視線を向けて観察する様に見るのでその男は思わず視線を逸らすと同時にごくりと喉を鳴らした。すると周婉漣、鐘文維、林玉賦の視線が即座にその男に向かう。他の従者達がそれに反応して体を強張らせると、七星の顔はまた揃って向きを変えてそちらを見る。更にそれを見て従者達は一様に体を仰け反らせると息を止め、互いに目を合わせて平静を装いながら姿勢を正した。

「どうした？ 肩が上がってるが、まあ力を抜けよ。静かに総監を待つとしよう。もう来るんだろう？」

劉毅が従者達を見遣りながら言う。最初は平然としていたかに見えたこの男達は、どうやら少しばかり怯えている様だ。恐らく張新

が多く居る従者の中から適当に選んだ者達だろう。見知った顔は無い。七星達は四人の従者の立ち姿を一目見るだけでその武芸が粗末なものである事を見抜いていた。

従者達は何も言わず、とにかくじっとしている。

（もっとましな者が居る筈だが……。フ、警戒などしていないという意味か？）

劉毅はチラと周婉漣を見た。すると周婉漣はすぐにそれに気付き見返した。劉毅はただニヤツと笑うだけでまた正面に向き直ると、周婉漣は何も言わずその横顔をじっと見てから顔を戻し、瞼を伏せた。そしてまた暫く静かになった。

ようやく部屋の外に人が近付く気配がした。四人の従者が改めて背筋を伸ばして姿勢を整える。と同時に正面左手の扉が開いた。

「おお。久しぶりに揃ったな。結構結構」

部屋に入るなり目を細めて微笑みながらそう言ったのは薄緑の深衣を纏った初老の男、侯且こうしよ。北辰七星の一人であり一番の年長の者である。伸ばした髭はまだ黒いかなり伸びている。

続けてもう一人の男が姿を現した。部屋の入り口を塞いでしまう様な巨軀の男で、比較的大柄な劉毅でも話すのに見上げねばならぬ程だ。七星が一人、慮元冲りよげんちゅう。

「戻って来なかったら俺達が追わねばならんところだった。気を揉ませるな」

慮元冲はその容姿に変わらず低く辺りを震わすような声で言い、大きな目を動かした。

「それは済まなかったな。今から南に出向くには暑過ぎるしな。ん？俺か？それとも周か？」

劉毅が言うと同時に侯且、慮元冲の二人は列に加わるべく歩き出す。

「どちらもだ。帰ってくる気があるのならもう少し考えて行動するべきではないか？」

侯且が劉毅らの前を歩きながら言う。そのまま端まで行き林玉賦の隣に並び、慮元沖はその反対の端、劉毅の隣についた。

「総監どのがご機嫌は？」

劉毅が正面を向いたまま誰にともなしに言う。だがそれは先に会っていたであろう侯且と慮元沖にしか解らない事である。これには少し離れた侯且が答えた。

「さて、悪くはなからう。しかし良くもなからうな。おぬしらの顔を見れば変わるかも知れぬからな」

おぬしらとは劉毅と周婉漣の二人で間違いない。

「まだ待つのか？」

「もう来られよう」

何の前触れも無く、張新は静かに姿を現した。入り口に立ち、中で整列する六名を無言で眺めている。

官吏が用いる様な金の冠を着け、艶やかな紫の長衫を纏い、赤と金の派手な帯と銀の靴が光を放っている。痩せていて細身の顔と肩腹回りだけが貫禄充分の、衣装を除けば何処にでも居そうな中年の男。これが、今方崖を掌握している太乙北辰教総監、張新である。

張新は何も言わないまま中へと進む。その後ろには二人の従者が居り、張新が六名の正面に立つとその者達は先に居た四人の従者とは別に張新のすぐ後ろに控えた。

部屋には何も無く、椅子も用意されていない。だが張新は構わずに立っていた。劉毅は張新と視線を合わせる事無く正面を見続ける。（フン、一応まだ俺達に気を使ってんのか。それともすぐに走って逃げられるようにか？）

第十二章 九

まるで、誰も居なくなってしまったのかと思えるほど、辺りは静寂に包まれていた。周婉漣は瞼を閉じたまま待っている。正面には張新が居り、彼がまず口を開く筈である。しかし、いつまで経っても静かなままだった。一体どうしたのかと気になり、そっと目を開いてみる。張新は、黙り込んだまま周婉漣をじっと見つめていた。周婉漣は表情を変える事無くそのまま視線を受け止め続ける。すると張新はすっと顔の向きを変え、口を開いた。

「襄統と揉めたそうだな？」

細く、少し高い声で張新は第一声を発した。視線は劉毅に向いている。

その言葉を聞いて劉毅がフツと鼻で笑い下を向いた。張新は眉根を寄せたが何も言わずに劉毅を睨んでいる。劉毅は心の中で独り言をつ。

（もう良い頃合って訳か。随分と、偉くなったもんだな）

張新は明らかに上から物を言っている。総監となる以前はただの教育係であり、この方崖で九長老は勿論の事、劉毅ら北辰七星と顔を会わせれば黙って低頭しこちらが通り過ぎるのを待つ、一介の従僕に過ぎなかった。総監の任に就いてからも暫くは他の幹部の機嫌を窺う様にへりくだった物言いをしていたが、張新はそれを徐々に変えようと意識し始め、敬称を付けて呼び掛けたかと思えば急に命令口調になってみると、話し方が変になる時期があった。

方崖幹部の中で厳密には北辰七星は九長老よりは下となるがこの辺は非常に微妙であり、九長老も氣を使っただけ、あからさまな高姿勢で七星に接したりはしない。総監は九長老と同列で、これは前教主陶峯が定めた事である。だが張新は自分を地位を北辰七星の上であるとはつきりさせたいらしく、これはその話し方一つで容易に察しがついた。

劉毅が方崖を離れてから再び戻った今まで数ヶ月が経ち、その間に張新が何を考えたかは知らないが、どうやらもう遠慮は微塵も必要ではなくなった様である。その眼にも劉毅の顔色を窺うような色は現れない。

普通では考えられない程の張新の豹変ぶり、これはいかに新教主陶光との繋がりが強いかという事の表れでもある。陶光が教主の座に就いてもうかれこれ十年に及ぼうかというところだが、未だに教内のみならず江湖において『新教主』という印象を多くの者が持ち、現にそう口にする者も居た。教主の座に上ると同時に陶光の名は瞬く間に広く流布したがそれは名のみで、どのような人物であるのか知る者はかなり少ない。何しろ教主となった当時、陶光はまだ幼少であり、陶峯亡き後の俄かに浮き足立ち始めた太乙北辰教を纏めるべく九長老と殷汪によって方崖は動かされており幼い教主の出る幕など当然無かったのである。

張新は陶光が生まれて間も無い頃から今までずっと傍で接してきた。方崖の奥に仕舞われたままの時期教主陶光に、張新は何を話して聞かせてきたのだろうか。そして育っていった陶光には表で光を浴びている殷汪や九長老がどう見えていたのだろうか。

今、陶光は成長し、教主として方崖の表に立つ時期が来ている筈だった。しかし、未だそうなっていない。姿を見せてもほんの僅か。言葉を交わすのも方崖のごく一部の幹部と、ほんの短い間だけである。

張新が、そうさせている。それは明らかだった。常に教主の前に張新が立っている。陶光が今も『新教主』と呼ばれる原因はこの張新にあるのかも知れない。張新の後ろに隠されているせいで、その存在感が依然として薄い。教主の言葉は張新を通して発せられる事が決められているかの如く張新は振舞い、誰もそれに口を挟まない。教主はまだお若い——張新はそう言い、九長老もまた、そう考えていた。長い間、必要なのは教主の名であり、その口では無かつ

たのである。

そして教主陶光自身も、それに不満を洩らさない。張新は親同然——そう感じていても不思議ではないだろう。張新が教主である自分の意向を方崖に反映させてくれると、そう信じているのだろうか。こうしてある教主との繋がりが、張新に力を与えている事はまず間違いない。

劉毅は真顔になり再び顔を上げ、張新を見た。

「揉めた？ 俺じゃない」

劉毅はそう言って鼻から大きく息を吐いた。

「そうらしいな。だが、近くに居たのだろう？ なぜ止めなんだ？」

「謝どのからご報告が行ったかな？」

「誰でも良い。我が教の者が襄統派に手を出すのを見て何も思わなんだか？ しかも至東山でだ」

張新はすつと顔を引き、冷やかな目で劉毅を見ている。

「俺は至東山になど上がってはいないがね。それに、方崖から某かの命が下っているのかも知れんと思ったのでね。謝どのの配下のする事だ。下手に首を突っ込まないほうが無難かと——」

「今襄統と事を構える事などあり得ぬわ！ 真武剣もその場に居たそうだな！」

突如、張新が目を剥いて声を荒げる。劉毅は一瞬呆気にとられた様に目をしばたかせ、その後大袈裟に肩を竦ませた。ついでに舌も出しそうな体であったが流石にそれは自重した様だ。

「イヤァ、そう言われても俺には何とも……。では、謝どのは何故あんな処に人を遣っていたんでしょうなあ？ 謝どのは何と？」

劉毅の言葉に張新は暫く黙り込んだが頬が僅かに震えている。

「……謝長老は知らなかったそうだ。直ぐに儂の処へ報告と詫びに来た。おぬしが丁度その場に居合わせた様だが何故止めてくれなかったのかと申しておった」

「ハ……」

劉毅は呆れてしまう。あの謝長老が張新の前でそんな台詞を吐いていたとは。悪さをした子供の変わりに詫びに来たにも関わらず、まだそんな餓鬼を庇い立てする馬鹿な親の様ではないか。責任転嫁も甚だしい。

「……襄統と揉めていたそいつらは始末した。俺じゃなく旅の者が、だがね」

「その者達も、放っておいたのか？」

「ハア、まずかったかな？ その者達は武林門派の人間では無かった様だし、都合が良いと俺は判断したんだが？」

劉毅が発したとぼけた様な甲高い声に、張新の頬の震えが一段と強まった。しかし言葉は出てこない。

「まあ、総監どの」

張新と劉毅の間に別な声が不意に割り込む。一番端にいる侯且が一步進み出ていた。

「とりあえずそれで良かったのでは？ もしその場で劉が出張っておればきつと至東山からもっと人が出てきた筈。相手は劉毅……下手をすれば悌秀師太自ら駆け下りて来たかも知れませんか？ 真武劍派の郭も居たとなれば話が大きくなってしまいうでしような。相手は末端の弟子。こちらも――いや、元教徒のごろつきのちよつとした諍い。そういう事において、ま、何か言ってきたら適当な対応を考えれば良いだけの事」

張新は侯且を見遣って鼻を鳴らすと体の向きを変え、何も無い壁の方を向いて黙り込んだ。

第十二章 十

劉毅は張新と侯且を交互に見遣りながら、

（ふむ、あいつの言う事は聞く気がある訳か。侯の台詞、少々芝居がかつてる様な気もするが。……しかし変だな。あの謝の配下は命令でもないのにあんな処まで行つたのか？ 秘伝書の件、知らぬ訳ではあるまいが。まさか秘伝書も殷汪も、どちらも放置するつもりか？ 殷汪には最初あれほど拘って俺らにまで探させたくせに、もう飽きたか？ 今度は俺達を、か——）

と、そんな事を考えていると、張新が七星から顔を背けたまま言つた。

「方崖は、変わらねばならん」

話は変わったのか続いているのか、周りには判断しかねる。張新は構う事無くゆっくりと向きを変え、七星を見渡して続けた。

「我が教は——」

張新はそう言って話し始める。方崖の人間が太乙北辰教をそう呼ぶのは特に変わった事では無かったが張新がそれを言うのになどこかしら引掛かりを覚えるのは、張新が方崖を支配したいという願望を持っているというその事が今、劉毅の頭の中の大部分を占めているからだろう。

（考え過ぎだな。俺もどうかしてる）

劉毅が一瞬頬を緩めるのを張新は目ざとく見つけ、ジロリと睨みつけたがすぐにまた話を続けた。

「先様のお力により江湖に於いて大いに栄えるまでに至った。この事はおぬし達の方が肌で感じておろう。真武劍、清稜、しんりょう、じょうりゅう、襄統、武林の名門と呼ばれた勢力が皆、先様の前にひれ伏した」

（はて？ そんな事があったかな？ 聞いた事も無いがお前はそれを見たのか？）

「我が教の悲願であった武林制覇はもう殆ど成っていたと言って良

い。しかし惜しい事に先主様は倒れられ、この武林に大号令をかけられる事は叶わなかった」

（大号令とは何だ？ 陶峯教主が次に何をしようとしていたか、そんな事を当時子守のお前が知る筈があるまい）

「我らは先主様に詫びねばならぬ。全ては先主様の御威光あったればこそ、我が教は躍進出来たのだ。先主様亡き後、再び真武剣を筆頭に力を盛り返してきておる。千河幫も切り取られた。これはまことに由々しき事態。先主様がご健在であられたならこの様な事、決して許されはすまい。……我らは先主様のお導きにすぎるだけの無力な存在であったことを認めねばならぬ」

（千河幫？ あれはお前がそう仕向けたのではないか。フン、あの時、俺を差し向けた事をいずれ後悔することになるだろうよ。お前の目論見が何か、そのうち暴いてやる）

劉毅は張新が口を開く度に胸の内であざ笑う。突っ込みどころには事欠かず、楽しみすら感じ始めていた。

「殷総監は――」

次に張新は殷汪の名を口にすると反応を窺う様に一度七星を見渡した。一人だけ下を向いてつまらなそうに話を聞いていた林玉賦も含め、七星の視線はサツと張新の顔に集まる。今、殷汪を総監と呼ぶのは如何なる事か？ 表情には出さないものの七星は皆、張新の発言を訝った。それを察知したかどうか定かではないが、張新は淡々と言葉を続けた。

「確かに先主様の後を受け、そのご威光を損なう事無く我が教を掌握し、安定を保っていた。力を盛り返しつつある各派が未だ我が教に対して慎重な姿勢を見せているのは殷総監の手による我が教の体制が維持されているからだ。これは誰もが認める処。……まさかその殷総監自身が離反してしまうとは、残念な事だ」

張新は呟いて宙を仰ぎ、目を閉じた。

（ハ……よくもまあ）

全く以って白々しい芝居だ、と劉毅は思った。恐らく劉毅だけで

はなく皆、似た様な事を感じているに違いない。これまで張新が殷汪の太乙北辰教における功績についてなど一言も言及したことは無く、それどころか方崖を出た殷汪を追う事には消極的であった九長老ら方崖幹部の中で『逆賊討つべし』と一人、気を吐いていたのがこの張新である。確かに勝手に方崖を離れ、しかも替え玉を置いて総監を名乗らせていた事は、教主以下、太乙北辰教を欺く重大な罪には違いない。しかしながら、それによって太乙北辰教に害を成そうとしていたふしは無く、発覚する何年も前から殷汪は消えていたのだ。張新の連呼する『逆賊』という言葉と、急に自らの存在を主張し始めたその態度に、他の幹部達は眉を顰めていた。

（ようやく自分の地位も固まってきて、余裕が出てきたか？ 殷はもう近くには居ない。気にする必要も無くなったか）

劉毅はそんな事を考えながらふと横に視線を走らせる。丁度その時、周婉漣の張新に向いていた視線が下がり、瞼がそつと伏せられるのが見えた。そしていつもの様に微動だにせず静かに佇む。劉毅はまた視線を戻す。

（何も思わぬ訳ではあるまいが……。ま、今は大人しくしておくに限る。お前が、次に動く時の為にな。……。フ、楽しみに待つとしよう）

張新の話は続く。

「先主様のご威光も、殷総監の名も、既に無い。そう心して我らは新しい太乙北辰教を盛り立てていかねばならぬ。先主様のご意志を陶光教主様が継がれる。我らが実現するのだ」

張新が切り口上で言うのと、間を空けずに侯且が一步進み出た。

「我ら七星は先主様のご遺命を受けております。先主様のご恩に報い、陶光教主様への忠誠をお誓い致します」

侯且は真っ直ぐ張新に向かい抱拳してそう述べた。最早、何処から見ても従順な部下といった姿勢である。

「うむ」

張新は唸るような低い声を返す。無理やり押し殺した様な声で、

不自然な音であつた。

（ハハ、なるほど。俺達より先に会つたのはこの芝居の用意という訳だな？ てことは、こっちの慮にも台詞が――）

劉毅が隣の慮元沖の顔を覗き見ようとしたその時、張新が劉毅を見た。

「おぬしはどうだ？」

「んん――？」

劉毅は少しばかり慌てた様に顔を戻す。

「是非とも九宝寨には引き続き、我が教に力を貸して貰いたい」

張新の言葉に劉毅は首を傾げた。七星劉毅ではなく九宝寨寨主劉毅に、張新は話している。

「九宝寨が北辰に加勢するのに特に期限を設けてはいない筈だが？俺が北辰七星である限り、そうなる。それとも、俺は七星から外れる事になるのかな？ 或いは――もう外れてるのか？ 俺が方々を徘徊している間に？」

劉毅がそう言うと、張新はフツと鼻で笑う。

「まさか、それは無い。北辰七星は教主様によって任ぜられる。如何な総監であつても勝手にその任を解く事など出来ぬ」

（誰もあんたが――など言っておらんのだが）

「もし教主様がおぬしの任を解くと言われたのなら、何人たりともその命に逆らう事は出来ないがね」

張新は引き攣った様な不気味な笑みを浮かべたまま言った。

第十二章 十一

「今、大きく体制を変えるつもりは無い。しかしこれから教主陶光様のもと、我が教は一段と結束すべく様々な見直しをしていく必要がある。それにはまずこの方崖だ。そなた達北辰七星も心して貰いたい。先主様亡き後、随分と気楽に動けるようになったというのは解るが、だからと言って皆好き勝手に行動していたのでは行き過ぎであろう？ これからは総監である私と、それから長老衆、そして七星は関係を更に密にし、方崖の結束をより強固にしていきたい。よいかな？」

張新が言い終えると、やはり即座に侯且がはつきりとそれに応える。他の者は声を出してはいないが張新の視線が自分に回ってくれば軽く首肯し、賛同の意を伝えている。劉毅も肩を竦めながらではあったがそれに応じた。

「周よ」

張新が周婉漣の正面までやって来て声を掛ける。その面差しは意外にも柔らかい。

「教主様は、ずっとそなたの身を案じておられた。一年もの間無断でこの方崖を離れた事、すぐにでも長老衆を集めその場で説明してもらう事になるが、今は一先ず置こう。近い内に教主様に目通り出来る様調整する。ご心配をお掛けした事、重々お詫びするのだ。そなたが再びこの方崖に上がる事が出来たのは、教主様のご意向あつての事。この事、ゆめゆめ忘れてはならぬ」

周婉漣はただ腰を折って深々と頭を下げた。方崖に上がれば即座に張新の責めに遭うであろうと予想していたのだがそうならなかったのは意外であつた。改めて九長老の前に引き出されて後、何らかの処遇が決まるのかも知れないが、それについては気にしてはいない。そんな事よりも、教主陶光が自分を気に掛けていたという話を聞いて胸が痛んだ。

（たった一年程で忘れられる筈もない。解ってはいたけれど……。しかも突然消えたのでは、割り切りようも無い？）

「今日は教主様の体調がすぐれず叶わんだが、改めて七星揃ってのお目通りの支度を整える」

張新は周婉漣の前から離れるとそう言つて七星を見渡した。

「皆それまで景北港を離れてはならぬ。また個々にこの方崖へ呼ぶ事もあるう。おつて沙汰する」

「ハ」

侯且の返事と同時に張新は身を翻し、舞台から引けていく役者の様に大仰に袖を振ってから早足でこの尊星の間を出て行つてしまった。すぐに張新と共に入ってきた二名と部屋に最初からいた四名の従者達も後を追つて消える。

「……おい、これだけか？」

あつと言う間に張新は行つてしまい、半ば呆氣に取られたように劉毅は他の七星達の顔を眺めた。

「まあ、我ら七星、こうしてまだ集まる事も出来ると言う事は分かつた訳だ。総監どのもおぬしや周には言いたい事もあるうが、此処でそれを我らも一緒になつて聞く必要は無い。残念ながら、そのうち呼ばれる事になるう。待つておれ」

直前に張新と会つてゐる侯且がそう言うので、まあそういう事なのだろう、と劉毅は思った。本当に当初は教主陶光に見える手筈まみになつてゐたものの、急に教主の都合が悪くなり張新が代わりに会う事になつてしまつたのかも知れない。張新にも今この場で言う事など大して無かつたのだろう。

（教主が出て来てもどのみちあいつもくつついて来て、結局喋るのは殆どあいっただけだな。教主に会つても出来るのは子供の他愛ない世間話。それに意味が無いとは言わんが……）

劉毅は再び周婉漣の方を覗き見る。すると周婉漣ははっきりと劉毅に向かい視線を合わせてきた。

「良かった。色々と言ひ訳するにはもう少し時間が欲しいから」

周婉漣は乾いた声で淡々と言いながら一人、部屋を出て行くようにする。その後ろから侯且が声を掛けた。

「周よ。こうして集まったのは久しぶりだ。一度皆で一献傾けようではないか。是非そなたと劉の話を聞かせて欲しいものだ」

「そうね。私は良いけれど……」

周婉漣は立ち止まって後ろを振り返り、その視線が劉毅を指し示した。

「俺も構わんが？　たいして面白い話も無いけどな」

「そう？　あなたは常に面白いと感じる事しかやらないのではなかった？」

「本当にそれだけ考えて動けりゃどれだけ良いか。こんな処に居るくらいだ。察してくれ」

劉毅は肩を竦めて見せる。殆ど癖みたいなものだ。それを周婉漣はじつと、睨むという程ではないが顔色を読むかの様に見つめていた。侯且が双方を僅かの間だが眺めてから、

「とにかく、近い内にまた会おうではないか。私が準備しておく」
「分かった」

周婉漣は侯且に視線を移しそれに応じてから再び歩き出した。

「いつもの――処か？」

劉毅がそう訊ねたが、ええ、と周婉漣は短く答え、足を止める事は無かった。

周婉漣は紫微宮を出る。この方崖で他に用事がある訳でも無く、後は帰るだけだ。すぐ隣には林玉賦が歩いていた。

「最近特にそうさ。ハッ。殆ど遊びじゃないか。全て形だけ。飯事まめいごとだねえ。真武剣やら他の奴らが知ったらきつと笑い転げるに違いないよ」

林玉賦は、周婉漣が居ない間の方崖をそう説明した。

「結局、あの総監も大したことは出来ないのさ。とりあえず自分の存在を認めさせて、後は好きに出来ればそれで良いんじゃないのか

ねえ。九長老だって内心、現状維持でいくと思うね。先主様の真似をして武林制覇なんて言いださない限りね」

まだ方崖の真っ只中だというのに、林玉賦の声には遠慮が無い。相変わらずだ、と周婉漣は思った。

「確かに、悪くは無いね。特にあたし達はのんびり出来るんだしねえ。あんたや劉はすぐ飽きるようだけどさ」

周婉漣がそつと唇を開く。

「……もし、陶峯様の頃の様に争うばかりの日々に戻る事になったら、あなたはどうするの？」

俯いてゆっくりと話すさまが何かを逡巡している様に聞こえるが、周婉漣には良くある事で普段なら林玉賦も深くは考えずに軽口で返す事が多い。だがこの妙に思わせ振^まりな間と言葉に、林玉賦の眼差しが力を帯びた。

「どういう意味だい？」

林玉賦はサッと前に出ると振り返り、周婉漣の行く手を遮った。

「何か、起きるとでも？」

「まさか。……そんな事は、無いわ」

仕方なく周婉漣は立ち止まる。林玉賦はまだ動こうとはしなかった。

「あんた、総監……殷汪様に会えたんだろう？　だから、帰ってきた。違うかい？」

林玉賦が真っ直ぐ見てくるので周婉漣もじっと見返したものの、言葉が暫く出て来なかった。

第十二章 十二

林玉賦はじつと返事を待っていたが、この場所で言えるはずも無く周婉漣は口を噤んだままである。林玉賦は溜息をつき、そして顔を逸らす。

「あたしはねえ、殷汪様がこの方崖に戻る事ばかり考えてるんだ。婉漣、あたしは何も変わっちゃいないよ。だから――」

顔を上げ、遠くを見つめる。普段は気だるげな雰囲気を滲ませてあまり人を寄せ付けないような林玉賦だが、今はどこか微笑んでいるような口許と光を帯びた頬が精彩を放っている。久しぶりに見る『林玉賦』だ、と周婉漣も頬を緩ませた。

「まだ当分の間、あんたの味方でいられるはずさ」

「……そうね。私も多分、あなたと同じだと思う」

林玉賦は周婉漣の言葉を聞いて、今度ははっきりと口許に笑みを浮かべた。

「それはそうと、またあたし達を使って勝手に遊んでるのが居るみたいだねえ」

林玉賦は遠くを眺めたままで言う。周婉漣が何の事かとその横顔を見つめていると、林玉賦の顔がこちらを向いた。視線は周婉漣ではなくその背後を窺っている。

「ああ、そうね」

林玉賦が言ったのは今この場の話なのだと合点がいき、周婉漣は後ろを振り返った。

視界に人の姿は無い。林玉賦同様、周婉漣も気付かない訳が無かったが、放っておいてもどうという事は無い。用があるならそのうちそう言う筈だった。しかし『彼女』は暫く遊ぶ事にしたいらしい。

「^{えい}叡！ あんたまさかあたし達二人を相手に気付かれないとか思っちゃいないだろうねえ？」

林玉賦は紫微宮の一角、建物の隅に向かつて少し鋭い声を出した。辺りに響き渡るような大声では無く、彼女は唇を小さく動かすだけで離れた相手にその声を飛ばすという功夫を身に付けている。確実に、届いている筈だ。

辺りは夏の虫の喧騒が山から響いて来るくらいで、他には何も聞こえない。林玉賦の呼び掛けに対する反応は一切無かった。

「あんたが帰って来て、余程嬉しいのかねえ」

「まさか」

「叡は相変わらずさ」

林玉賦は久しぶりに戻って来た周婉漣にその叡という者の近況をたった一言でまとめて聞かせると、先程声を掛けた一角に向かつて歩き出した。

「叡。あたし達相手じゃこの遊びは楽しめないよ」

林玉賦は叡が隠れているらしい場所の手前で足を止め、また声を掛ける。するとあっさりと、一人の女性が姿を現した。

「あなたが気付かない振りをするだけで私は凄く楽しめるの。もう少し気を利かせてくれても良かったのではないかしら？」

叡はにこりともせず、かといって表情にも声にも棘がある訳でもない。ただ真顔で林玉賦に言い、それから周婉漣にも同様の眼差しを向けた。

女性にしては上背があり三人の中では一番高く、しかも背筋を伸ばしてすらりと立つ姿は上品さを感じさせた。林玉賦と同じ世代の、この方崖に仕える侍女の一人なのだが、ただこの叡は特別な、侍女である。

先程、尊星の間に集まるようにと伝えに来たのも侍女の一人であったが、一応この叡と身分は変わらない事になっている。無論、仕えている年月の長短がその上下関係を作るという事はあるが、それでいっても叡より長く居る者はごく僅かであり、方崖に居る期間は幼い頃から居る周婉漣とそう変わらない。しかしそれを特別というのではない。彼女は、侍女の中で最も教主に近づく事を許されている

る唯一の侍女なのである。

「あたし達はもう降りるんだよ？ 何処までついて来るつもりだったのさ？」

「まだ此処を出たばかりじゃないの。ほら、もう少しあるでしょう」
方崖を下る道に至るまでには確かに『もう少し』距離がある。しかしそれは本当に少力で、二人を尾けてそれが楽しめるとは到底思えない。

子供じみた事を――と林玉賦は思うのだが、今更口にはしない。叡にはこういうところもある、とよく知っていた。

教主の身の回りの世話をするには多くの人間が必要になってくる。実際多くの侍女が紫微宮の奥で働いているが、教主の姿を遠目にはする事があっても言葉を交わす事は殆ど無く、また原則許されてはいない。その侍女達と教主の間には、この叡を介さなくてはならないのだ。前教主陶峯の時にはそんな事は無かったのだが、その陶峯自身が息子である陶光が教主となる時にはそうする様にと指名して命じており、その点が叡を特別な存在たらしめている。

教主と口が利ける侍女がたった一人などというのは無理があり、教主自身も不便極まりない。陶峯亡き今、厳密にそれが守られているとは言えないのだが基本的にはそのようになされており、やはりこの叡が多く居る侍女達の中で飛び抜けてその地位が高い。教主と共にある事の多い叡は一介の侍女とは違い、鮮やかな色使いの上物の衫を纏い、控えめではあるが宝飾品を身に着けた、秀麗な女性であった。

「どっちにしてももう終わったねえ。教主様は……お休みかい？」

叡が教主の傍を離れる事は滅多に無く、ほんの少しの間、外に出る事があったとしてもかなり気を使う事になる。自由になれるのは教主が寝ている時くらいものだ。勿論いつ呼ばれるか分からないので夜中であらうとあまり離れられないが、幸い教主陶光は至って分別のある、あの陶峯の息子にしては意外なほどに心根の優しい青年へと成長しつつあった。叡にとっては楽な仕事であるのかも知れ

ない。

「私は教主様のご命令で来たの」

「命令？」

叡はゆっくりと頷いた。

「ハハ！ まさかあんたに、『外で遊んでおいで』とでも仰ったのかい？」

林玉賦は腹を抱えて笑い始めた。それがそんなに面白い事なのかと後ろで聞いていた周婉漣は首を傾げたが、確かに、もし教主がこの叡に向かってそう言ったとしたらそれはとても微笑ましい光景であるように思える。そう考えると周婉漣の口許も自然に綻んだ。

「婉漣。教主様があなたに会いたいそうよ」

叡は林玉賦を無視するかのように一切表情を変えず、周婉漣に向かってそう告げた。すると、それに真っ先に反応したのは林玉賦の方だった。

「何だって？」

林玉賦の笑いは直ぐに消え、眉を顰めて叡と周婉漣を交互に見遣る。

「張総監——じゃないよねえ？ あんたを遣すんだから、本当に教主が？」

「勿論」

叡はようやく此処でにこりと微笑んで二人を見た。林玉賦も周婉漣の様子を窺ったが、表情からは何も読み取れない。周婉漣はじつと地面を食い入るように見つめていた。

「張総監は知ってるのかい？」

「総監はもう此処を降りられたわ。教主様もご存知よ。だから私がこうして出てきたの」

全て問題は無いとでもいう様に、叡は平静そのもので急ぐ様子も無い。だから本人以外には何の意味も無い、後を尾ける様な真似事などしていたのだろう。この叡ならば本気で遊んでいたに違いない。

「降りた？ 何しに何処へ行ったっていうのさ？」

「さあ？ それは分からないけれど夜まで戻らないでしょうね。いつもの様にあの侯と慮の二人を連れて行かれたわ。何しに出掛けなのか、逆に私の方があなた達に聞きたいのだけれど？」

それを聞いて林玉賦は顔を歪め、視線を逸らした。

第十二章 十三

「という事だから、来て頂戴。もうお待ちなの」

「……わかった」

周婉漣が顔を上げてそう答えると叡はまた微笑んだ。もしこの場に他の幹部一人でも居ようものなら叡の言葉遣いもここまで碎けたものにはなるまい。教主の命をこのように軽々しく告げるなどあり得ないのだ。この三人の間においてのみ許される、そんな空気が此処にある。

「婉漣、今何処にいるのさ？ また拝宮長老の処かい？」

拝宮というのは方崖にある場所の事で、そこを司るのが拝宮長老である。九長老筆頭で、堯ぎょうという。林玉賦は周婉漣のこれからの居場所を尋ねている。周婉漣は長く暮らした方崖を降りた後、拝宮長老と呼ばれている堯長老の所有する景北港の屋敷で世話になっていた。他にあてが無ければ行く処はそこしか無い筈だった。

「あんた一人の頃を見計らってお邪魔するよ。どうせ何処にも行きやしないんだろ？」

「ええ、そうね。ここのところ堯長老はずっと戻られていないからいつでもいいわ」

「何？ あなた堯長老は苦手？」

叡が笑いながら顔を覗き込むので林玉賦は横を向くと、

「教主様のお話も是非聞かせて貰いたいねえ」

そう言って、二人を残し去って行く。彼女こそ普段何処で何をしているのか周婉漣にも分からなかったが、きっと夜にでもふらりとやって来るのだろう。

「聞かせられる話だと良いのだけれど」

ふと呟く様に言った叡を周婉漣は視線を向けるが、すぐに叡は踵を返す。

「行きましょう」

先に行く叡に、周婉漣は何も言わずに従った。

叡は人目を避けようとはせずに紫微宮の中央を通り、教主の居室に向かう通路を進んで行く。途中、多くの者とすれ違ったがその殆どはこちらを見るなり低頭して畏まり、二人が通り過ぎるのを待っていた。方崖幹部には一人も出会わなかった。

「教主様は体調が優れずお休みになられているという事になっているから」

そう話す叡の歩調は、少し緩やかであるように周婉漣は感じた。奥へ進むに連れて周りから人が消えていった。方崖での身分により立ち入る事が許される場所は制限される。

「それで、外はどうだったの？ まさか此処の方が良かったから戻ったという訳ではないわよね？」

歩きながら話す叡はまっすぐ前を向き、ずっと真顔のままだった。周婉漣は何と答えれば良いのか分からず黙っていたが、叡はそれを気にするでもなく続ける。

「教主様は、あなたが戻った事を本当に喜んでおられた。多分……教主様はもう、心をお決めになられたんだわ。もう何も知らない子供じゃない。婉漣、此処へもう戻ってしまったのだから、覚悟を決めて教主様のお気持ちを聞かなければならないわ」

周婉漣はそれを聞くと体を強張らせ、立ち止まってしまった。するとすぐに叡は振り返った。

「勿論、聞くだけじゃない。あなたも、お話するのよ。どうしたいのか、あなたの気持ち」

「私は……私は何も……」

周婉漣は言葉を詰まらせたが、叡はその続きがはっきりと聞こえている様だ。

「何も変わらない方が良く？ 今まで通り？」

「どうして、急に……そんな……」

周婉漣は視線を彷徨わせてぶつぶつと呟いた。心持ち肩が上がり

力が入っている。これほど動揺するなど滅多に無い事だ。

「婉漣、ごめんなさい。確かに急だわね。戻ったばかりというのに」
叡が腕を伸ばし、そっと周婉漣の細い体を包み込む。幼子をあやす様に小さく体を揺らしながら、小刻みに震える周婉漣を抱き止めていた。

「だったら……どうしてそんな事を言うの？ どうして忘れたら……いけないの？」

周婉漣の洩らす声は殆ど泣き声で、今にも消え入りそうだ。叡に体を預け、震え続ける。まるで別人の様だった。周りがどんなに騒ぎ立てようともぴくりとも動かず瞼を伏せて黙ったまま——それが周婉漣である。口の悪い者は『あれに感情というものは無いのではないか』と揶揄するほど、沈着を通り越して物言わぬ人形の様になただそこにあるというだけの存在。周婉漣に近い一部の人間にはそんな事は無いという事が分かるのだが、あまり人と接する事を自ら進んですることの無い周婉漣をそう思う者は少なくなかった。口を開かないからといって頭の中に何も無いという事になるわけでは無い。逆に強烈な感情が渦巻いていたのかも知れない。だが、周婉漣はその胸の内を体外へ微塵も洩らす事は無かった。

近くには叡以外に誰も居ない。この光景を見ている者は居ない。周婉漣がそれを確認したのかどうかは分からないが、もし誰かが潜んでいたりしたとしても彼女がその気配に気付かない筈が無い。

仮に誰かが話を聞いていたとしても、何の事が全く分かるまい。「でも、聞いて。婉漣、間に合ったの。あなたは戻って来た。そして全てが張総監の思い通りになる前に、教主様は決心をなされた。二度と、自分の知らないところであなたが苦しんで、一人消えてしまふ事が無い様に。まだ、今なら間に合うの」

「忘れてしまえばいいのに……。私は、忘れようとしていたのに……」

「婉漣。教主様はきつとあなた以上に、あなたを忘れられない筈よ。それに、殷汪様も——」

周婉漣は思わず顔を挙げ、叡を凝視する。

「殷汪様が、何？」

叡も視線を逸らす事無くじっと見つめ返す。

「殷汪様は何度も、教主様に言い聞かせるように仰られていたの。『お前は何をおいても守らねばならない。可能かどうかなど関係なく、ただひたすらに彼女を傷付けようとする者から守る意思を持たねばならぬ。間違いなくそれは、内から現れる。それを退けられるのは、教主たるお前の力だけだ』と」

周婉漣は叡を見つめたまま、また顔を歪ませていく。見開いた瞼から涙が零れ落ちた。

『教主となつて間もない今は困難かも知れないが、心を通わせる事の出来る者を探せ。まだ見つかる筈だ。九長老は張新と距離を置きたがつている者が殆どだ。そして皆、事情を知っている。堯長老とも良く相談するように。いいか、怠るな。知ってしまった以上、もし怠ればお前は、『不孝の子』である――』

「それは、いつの事なの？」

「あなたが、この方崖を離れる直前」

「嘘！ あの頃既に殷汪様は街を出られていた筈だわ！」

叡はゆっくりと首を振った。

「当時、殷汪様が此処に出入りしているのを知っていたのは多分、教主様と私と、あとはあの夏^かという者だけだった筈。もしかしたら蔡長老もご存知だったのかも知れない」

第十二章 十四

「そんな……」

周婉漣は何も聞いていない。その後、殷汪と再会は出来たが何も教えてはくれず、ただ方崖に帰れと言われたただけだ。まさかあれはただ教主から離れるなという意味でしかなかったのかと考えると、やるかたない思いを感じずにはいられなかった。

ならば全てを、話してくれば良いではないか。教主陶光にその様に話していたのなら、自分にも言って欲しかった。何でも良い。陶光の傍に居るべきだと諭してくれたなら。あの人が言うのなら、こんなになっってしまった自分でも――。

「婉漣？」

周婉漣は黙り込んで確かに何かを考えている。叡はこのような姿を昔から何度も何度も目にしていた。

周婉漣はとにかくその胸の内を人に明かそうとはしない。彼女には、どのようにしても忘れ難い過去があり、それは育った場所と言っても良いこの方崖での事で、九長老とそれに非常に近い者達だけが知っている。その中に叡も、そして殷汪もいた。

九長老らがそれを口にする事は今まで一度も無く、少なくとも今の状況が続く限りこれからも考えられないだろう。個人的に親しいと言える間柄の叡も、他言する事はあり得なかった。親友として、というよりもそれは容易く口に出来る様な事では無いのである。

周婉漣が顎を引き、瞼を伏せ、殆ど物も言わず、じっと立ち尽くす今の姿勢でいるようになったのは、前教主陶峯が亡くなりその息子陶光が新教主として方崖の奥深くから表舞台へと姿を現した丁度その頃からであった。自分を語らない。周婉漣を知り、その過去を知る叡に向かってさえも、自分からは一切それに触れる事は無い。まるでそれが無かった事のように。そしてその姿勢が功を奏したとで

もいいうのか、本当にそのようになっていき、そのまま方崖の時は進む。

何があったのか――。それは周婉漣と、それを知る者が口を開かない限り誰も知り得ない。

（最初に口を開くのは……恐らく教主様に違いない）

叡はそう思っていた。

二人はゆっくり先へと進み、方崖の奥深く、教主の居室に至る細い通路の中程まで来た。

「大丈夫。教主様はただ帰って来てくれたあなたと、久しぶりに話したいと仰っただけ。あなたは外で見てきたいろんな事をお聞かせして差し上げなさい。何でも良いの。静様せいも一緒に、表に出られているわ」

「静様も？ ……そう」

周婉漣はぽつりとそう言い残し、一人先へと進んで行く。表というのは教主の居室の隣にある庭の事で、すぐ傍に山が迫っているので窮屈に感じる程の小さな空間である。少しも『表』といった感じでは無いのだが、教主がいつでも勝手に行く事の出来る部屋の外といえは其処くらいしかなく、彼が表と言えはその庭の事であった。

「婉漣」

叡は後を追わずに立ったままで周婉漣の背中に声を掛けた。周婉漣が振り返ると、

「確かに、変わらない方が良い事はある。あなたはこれから、教主様に仕える北辰七星の一人よ。教主様はこの事をしっかり理解していらっしゃる。それがどれほど大事な事を。だから、心配しないで」

まるで視線にも重さがあるのだろうかと思えてしまうほど、周婉漣の叡へと向いた視線はすぐ下に落ち、転がった。周婉漣は何も言わないまま、また歩き出す。普段と変わらないように見える、沈黙した背中が叡から遠ざかっていく。

（張總監があなたを七星から排除すれば、もう此処に居る事は許されない。だから、急がなければならないの。でも、大丈夫。教主様がきつと、あなたを守って下さるわ）

叡は暫く周婉漣の後姿を見送った後、踵を返し早足でこの場を立ち去った。

周婉漣と劉毅が戻り七星が揃って方崖へ召集された事は、景北港ではもう殆どの者が知っていた。何も特別な出来事では無いが、他に話題の乏しかった最近の太乙北辰教の、久しぶりの噂話で少しは盛り上がる事が出来た。

「今、真武剣は国中をうろついているらしいじゃないか。全くもって目障りだな」

「ん？ お前、街から一步も出てないってのに目障りとはおかしい。まさかこの景北港にも入り込んでいるのか？ 俺は見ないがなあ」

「そうじゃない。こちらが大人しくしてる間に向こうはでかい顔して江湖を闊歩してるってのが気に入らないと言ってるんだ」

「闊歩してるというのは当然だろう？ 良く分かんが何か不始末起こして右往左往って話じゃないか」

「そうらしいが……。こう、どうなっているのかははっきりしない今の状況はおかしいとは思わんか？」

「分かって無いのは俺達だけだろう？ 方崖では把握しているのだ。……七星集めたのは関係があるかも知れないな」

「どうだろうな。しかし、何をする？」

街で教徒らしき二人の初老の男が、何度話したか知れないいつもの話題で暇を潰している。

「見つけたら喧嘩でも売ってやればいいんだ。あいつらは油断というか、もうこちらは弱くなって手を出して来ないと高を括っている。舐められているんだよ」

「喧嘩って。もう昔とは違うんだぞ？ 殷——」

男の一人は相手に顔を寄せて声を落とした。

「殷総監は相当苦労なされたんだ。陶峯様が散々喧嘩を売り歩いて、それはもう最悪な状況だったからな。互いに顔を合わせても言葉が通じない。他派を見れば剣を振るうしかないなど、尋常じゃない。俺達は当時、多勢であつたせいもあるだろうが、武林で孤立している事に気付かなかつた。興奮しすぎて、気付かなかつたんだよ」

「孤立？。武林の大半を我ら太乙北辰教が占める事のどこが孤立だ」
「ああ……まあそれはいい」

また話が長くなるし、もう何度もこれを言い合つた気もする。男は手を振って口を噤んだ。

「殷総監も――」

相手の男も声を落としてそう切り出した。

「あれはやりすぎではなかつたか？」

殷汪を未だに殷総監と呼ぶ教徒は少なくない。殷汪の方崖を離れた理由が詳しくは分からないのであまりぴんと来ないのだ。『裏切り者』や『反逆者』という言葉を誰かが言ってもやはりそれらの言葉と殷汪とが結びつかない。声をひそめる必要はあつたが、殷汪はまだ張新よりも総監として教徒の話題に上る事が多く、そこでは張新の出番はまだあまりない。

「いや、そんなことはない。あそこまでしなければ次の陶光様中心の北辰教の体制が整うまでにこっちは弱体化してしまう。奴らは陶峯様が居なくなりさえすれば北辰は取るに足らんと思つていただろうしな。ある程度関係が修復出来たのは僥倖だ。殷総監以外に出来たと思えん」

「それは、まあそうだ。しかしそのツケ、反動とでもいうのか、猫を被つたつもりが、それが長すぎてすでにその猫は死んでしまった。今、俺達北辰教は猫の死体に見えているのではないか？」

第十二章 十五

「長老衆も、あの時は殷総監に頼り過ぎたのだろうか。陶峯教主に似て奔放で好き勝手に動き回る事が出来る。桁違いに腕は立つし一人で武慶に乗り込む事だって可能だというのだからな。教主が亡くなつてすがりたくなる気持ちも分からんでも無い。ただ、下駄を預けて長い間そのままにしておいたのが不味かったな。急に殷総監が消えてしまつてまた混乱だ。そうこうしてる内にいつの間にやら新総監誕生で、余所様の事より方崖が分からんという教徒もまだ多いはずだ」

男は一人一気に喋ってから酒に手を伸ばし、喉を潤した。

「おい酔つてしまつたんじゃないだろうな？ 張総監はよく方崖を降りる事があるらしい。滅多な事を言わぬ方が良い」

「お互いにな」

二人はそう言い合うと揃つて僅かに身を縮めた。

此処は景北港市街に数ある酒楼の中でも大きい部類の店で、他にも客が多く入っている。店は三階まであり、この二人は一番上の三階で食事を摂っていた。良く晴れているこの日は東西に面した戸口を連ねた様な大きな窓が開け放たれ、東に海の水平線を望む事が出来た。

見えている水平線の位置はまだ東海ではなく、大きな湾の内側である。景北港では船を使った南方との交易が行われているが、船で出発して暫くはひたすら東に向かわねばならず、南に進路を変えるのは随分先の事だ。今も多くの船が行き交っているがここからは遠く、小さな船影が木の葉の様に見えた。

「これ以上大きくなる必要もあるまい……」

一人が目を細めて明るく光る海を見つめながら呟く。

「ん？」

「我らが武林に進出する事になったのは陶峯様が教主となつてから

の事だ。本来ならば太乙北辰教と武術界に接点など無かった筈。歴史は長い。多少なりとも武装して迫害から北辰教を守るべく多くの先達が戦いを繰り返す時代もあった。それは我が身を守る為。武林などというものは何の関係も無かったのだ。陶峯様がたまたま武芸に優れていて武林の諸派に勝ちたいと思われたからあのような事になったが、……誰にも止め立てなど出来ぬわな」

前教主陶峯がまず始めたのは、太乙北辰教という集団による強引な道場破りみたいなもので、初期の頃は陶峯自ら相手と定めた武林門派の拠点に乗り込んだ。形式的には真つ当な腕比べであるというのが陶峯の言い分だが、集団で乗り込んで荒らしまわった挙句、死傷者を多数出すというその行いは即座に武林諸派の反感を買う事になる。ちよっかいを出して面白がる遊びはすぐに終わり、真武剣派など武林の中核であった門派がその他各派に結束を呼び掛けて太乙北辰教に対抗する事を決めると、それは本格的な抗争へと発展した。「その、武力を身に付けて様々な迫害に抵抗してきたという歴史――、もしそれが無ければとうに我らは絶えていた。何とか存続出来たとしてもこの景北港で細々と続いているだけだったろう。守りの力は必要だ。しかしこちらがわざわざ敵を作りに行くなど、あり得ない考えだ」

「ほう、陶峯様は間違っていたか？」

「間違うとかそういう事ではなく、付け火のいたずらが取り返しをつかない大火事になってしまったという事だ。陶峯様の武芸が武林でも類も見ない秀でたものだったというのが――」

「優れていたのがまずかったか？　しかしまあとにかく、火はあらかた消えたらう。殷総監が武林をなだめてくれた。どうやったか知らんがな」

「それも謎だな。そもそも殷総監は一介の農民に過ぎなかったが何故、武林の重鎮とそのような話が出る？　うちの内部の事は、実際に動いたのは長老衆だっただろうから分かんでも無いが、殷総監はそんなに頭が切れるのだろうか？　話には学問の方はさっぱり

出て来ぬが」

「腕で脅したとか」

一人が笑って言う。あくまで冗談だという様に大袈裟に唇をひん曲げている。

「まさか。話が余計こじれるわ」

「だろうな」

二人は同時に外に視線を移し、揃って目を細めた。話は途中の様だが自然に会話が中断し、しばらくそのままだった。

夏、この広い江湖でこの街ほど涼しい土地は他に無い。丁度海から上がってくる風がこの酒楼にも届き、緩やかに吹き抜けていく。ぼんやりと外を眺めているといつの間にか瞼が自然に落ちてしまう、そんな日和であった。

「……殷総監は、武林制覇に興味は無かったんだろうか」

「んん？」

「陶峯様と殷総監、武芸の腕はどちらが上であつたろうな？」

「俺は、殷総監だと思うね」

「何故だ？ 見た事も無いのに？」

「ハハ、見ても分からんかも知れんな」

「で、何故そう思うんだ？」

「そりゃあ、あれだ。陶峯様が殷総監と腕比べをしようとしたという話を聞いた事が無いからだ」

「それは、やって負けるのは嫌だからとかそんな単純な理由か？」

「それで充分だろう？ 陶峯様が今の七星を方崖に集めた時、あれは多分、力で従えたんじゃないかと俺は思う。ただうちに来いと言って、はい分かりましたなんて言う連中ではあるまい」

「そうだな。周婉漣以外はな」

「殷総監が方崖に来たのは陶峯様が会ってみたいと仰ったからと聞いているが」

「そうだ。当時は東淵に住んでいた」

「かつての陶峯様なら絶対に自ら剣を交えてみたいと考える筈だろ

う？ 一夜に千を斬るなどと言われる男だ」

「ん？ 少し増えてるぞ」

「殷総監には大した差ではあるまい。で、陶峯様は当然その腕前を見てみたい。だから七星にやらせてみた」

「しかも全員同時に当たらせてな」

「それだ。陶峯様は一目見て分ったんだろう。一人ずつ相手させても無駄だとな」

「ほう、分かるものかね。そういうのは」

「らしいな。真に優れた者は相手の技量を即座に見抜くという。つまり俺にはさっぱり分からんというのはそういう訳だ。ハハ」

「それほど殷総監は武術に優れる——か」

「ん？ 何だ今更。謎の多いお人だが、それだけは確かな事」

「それ程の腕があるのに、殷総監は武林制覇に興味は無かったのだろうか……最強の剣……不敗剣……」

「なあ」

呼び掛けの声がどこからか聞こえたような気がする。しかし二人は特に気に留めなかった。風は穏やかで音を立てたりはしないがその風に気分を良くした客達の陽気な話し声が店内に充満していた。

第十二章 十六

「お二人さんよ」

声である事は分かったが、まだ随分遠くの声であるような気がした。しかし次の瞬間、二人はそろって肩を強張らせた。すぐ後ろに人の気配が感じられたからだ。

「ハハ、そんなに驚かずとも」

二人の肩が飛び上がらんばかりに速い動きであったのでそれが滑稽に見えたのかもしれない。声の主はそう言って笑った。

「な、なんだおぬしは……」

二人の男は勢い良く振り返りはしたものの、明らかに警戒の色を見せつつ体を仰け反らせ、声を発したその男を観察した。

若い男。派手な色使いの目立つ装束。それが薄汚れていて良い身形とは言えなかった。腰まで届く長い髪を背で一つに束ねているがそれも埃っぽく暫く洗ってはいない様だ。適当に剃り落としただけでまばらな無精髭。しかし顔や首の肌を見ればかなり若い事は間違いなかった。

「あんたらはこの街のお人かい？ 北辰教？」

軽い調子の少し高い声で訊いてくる。体をふらふらと動かしてじっとしていないのは、もとからそうなのか、或いはわざとそんな軽い調子を演出する為か。

「……そうだ。此処に居る者は殆どが……そうだ」

二人の男は顔を見合わせながら言い、また怪訝な表情を若い男に向けた。

（まさか方崖の者ではなからうな？）

二人が一番心配するのはまずそこだ。先程まで自分達は方崖の話をしていた訳だが、前教主陶峯や北辰七星、張新総監の名まで出している。何も不味い事は口にしていないつもりだが、他人にどう聞こえたかは当人達の想像を超えているというのもよくある話で、こ

の目の前に居る若い男が方崖の人間で、自分の言葉を使って報告するとなれば不味い事になる可能性も大いにあるのだ。

（北辰の人間では……ないはず……）

大いに自分の希望が盛り込まれてはいるが、方崖の者では無い様に見えてきた。方崖に居る者で、この若い男の様に好きな格好をしていられるのはかなり上の人間だけだ。幹部以外の者は皆決められた装束を身に着ける。暇を貰って方崖を降りているとしてもこのような薄汚れた身形で出歩くなど許される事ではない。

この若さで既に方崖の幹部であるならばかなり特殊な存在だ。幹部の身内だろうか？ それにしてもこんな格好で出歩くような者が居ればすぐこの景北港の噂に上がる筈だ。そんな者は居ない。皆、どちらかと言えば自分の身分を誇示するかの様に着飾る様な者ばかり。この若い男についてはどんなに記憶を探っても見当がつかなかった。

「他所から……参られたか？」

若い男を眺める視線が、その腰で止まった。剣を帯びていた。

「ああ。うんと南だ」

そう言いながら二人の座っている卓の、空いている椅子に腰を下ろそうとする若い男。それと同時に二人の内の一人が腰を上げた。

「私はあるので失礼する。お若いの、この街は良い所だ。ゆっくりしていかれるが良い」

それだけ言うと、返事を待たず足早に離れて行ってしまった。

「お……お……」

残された方はその後姿を呆然と眺めながらそんな音を口から洩らす事しか出来ず、気がつけば若い男が椅子ごとにじり寄って来ていた。一人だけでも逃すまいということか。

「お、酒か。いいねえ。昼間にこの景色を眺めながら呑むのはさぞうまいだろうな。もう無くなりそうだ。俺が奢るよ」

若い男は話す間、景色になど目を遣りはしなかったが、そんな事を言って近くの給仕に声を掛ける。この店で二番目に安い酒と何か

つまむ物を少し求め、それから視線を一人残されて顔を顰めながらどうして良いか分らないといった風の初老の男に戻すと、満面の笑みを浮かべた。

「俺はリンってんだ。あんたは何ていうんだ？」

若い男は馴れ馴れしく、相手は遙かに年上であろうと誰が見てもわかるのだが、とにかく言葉を選んだりはしないようだ。言葉を発する前に全く間を置いている様子が無い。

「リンと今言われたか？ イン？ ジン？」

「リンだ。リン」

若い男の言う名が微妙に聞き慣れない音で、これは他所から来たのは間違いないと納得したが、そんな事は当人自らそう言っているのだからこちらの不安を和らげる効果は大して無い。

「どのような字を書く？」

そう訊ねると、リンと名乗った若い男は顔を顰めて視線を逸らす。

「字なんて関係無いだろう？ 口で呼び合えば良いんだから。で、あんたの名は？」

「……沖だ。皆からそう呼ばれている」

リンというのが姓か名か、或いは字かは不明だがそのどれか一部である事は間違い無いので、こちらも名の一文字だけを教えてやった。

「チュウさんか。いやまあ良かった。此処に来てもう十日は経つのに誰も知り合いは居ないし困ってたんだ。此処の事をもっと知りたくてさ。あんた……いや、チュウさんは詳しくそうだから声を掛けたんだ」

リンは椅子の背に体を預けてだらしなく脱力すると、疲れているといった意味の演出なのか、しきりに顔や肩を揉むような仕草を繰り返し、それからおもむろに口を開いた。

「北辰教の事、詳しいみたいだけど、教えてくれないか？」

沖はそれを聞いて反射的に口を噤んだ。

（詳しい？ やはりさっきの話を聞いていたのか。しかしあんなの

はこの街の者なら誰もが日常的に話してる事だ。何も俺じゃなくても良からうに……)

運が悪い、そう思うしかない。まずこのリンなる者が何者かを知らねばならなかった。

「詳しいとは言えん。この街の人間はほぼ全て、太乙北辰教の人間だ。方崖はその中心。人々の関心は常にあそこを向いているからな。その辺の誰もが同じ様な事を話している」

「それでいいよ。俺は知り合いが居ないからその誰でも知ってる事すら分らない」

「此処へは……何か仕事かね？」

「仕事？ んーまあ仕事といえば仕事かな。これから働くんだけどな」

リンはニヤリと笑いながら沖を見返す。どうみても良からぬ事を企んでいるとしか思えない顔つきである。しかしリンはすぐにそれを打ち消すように言葉を続ける。

「俺は北辰教に入りたいのさ」

沈黙の間が空いた。沖はリンの口から出たその意外過ぎる言葉を咄嗟に理解出来なかった。

何処から見ても素行の悪そうな若者が、急に信仰の道に入ると宣言したとして、それを信じる事が果たしてあり得るだろうか？ 身形を整え、「心を入れ替えました」と叩頭でもするなら分かるが、口をひん曲げて不気味な笑みを浮かべたまま発する言葉ではない。

「……それは、つまり、太乙北辰——天皇大帝様に帰依すると、そういう意味、かな？」

沖の問いに、リンは腕を組み、暫し考える様子を見せた。

「場合によっては、それも有り得るだろうな。ま、今は全くその気は無いけどな」

第十二章 十七

信仰を始めるかもしれないし、そうでないかもしれない――。どういう意味なのか、良く分からない。どういった状況になればそう考える時期が訪れるのか？ このリンという一見、信仰の世界とは全く縁の無さそうな若者は、実はその心の奥に自らの生に迷いを抱いているのだろうか？

ただ一つの面からその人物の全てを理解する事は出来ないが、出会ったばかりのこの妙な状況で、沖にこのリンの心の内まで斟酌する気は更々ない。何か考えあってその様に言ったのだろうか、リンは詳しく説明する気も無さそうだ。こちらからお訊ねしなければ教えない、とでもいうようにリンは歪んだ笑みをこちらに向けていた。沖は顔をそらして聞いていないような振りをする。

（煩わしい奴だ。お前なぞ知った事ではないわ。まったく……ああ煩わしい）

「ああ、あれ！ あれだよ。でっかい船があそこにあんだろ？」

リンが急に立ち上がり、下に見える港の一角を指し示す。座っている状態ではその示された先を見る事が出来ないので沖は面倒そうに上体を伸ばしてみると、確かに一際大きな船が停泊していた。

「あれは……南方との交易で年に二度やって来る」

「あれに潜り込んだのさ。つっても勝手に忍び込んだって意味じゃないぜ？ まあ色々手回してだな」

（そんな事どうでも良いわ）

「見かけは立派だけど乗り心地は最悪だ。すぐ気分悪くなってよ」

「……船は苦手か？」

沖はあからさまに面倒そうな声色で取って付けたように言葉を返すが、リンは全く気に留めなかった。

「初めて乗ったよ」

「あれはあと数日で再び南方に帰る筈だが？」

「俺は帰らないからもういい。二度と乗らねえよ」

余程辛かったのか、リンは交易船を睨みつけるように見つめていた。沖はその横顔を窺いながら、ふと思いついて言う。

「……あれが此処に来たのはもう……ひと月ほど前になる筈だが？ おぬし、来て十日程と言わなんだか？」

早々にぼろを出し始めたかと、沖はまた警戒心を強める。

（やはり何か偽ってこの街に――）

「十日なんて言ったか？ あー、とにかく昨日今日来た訳じゃないって意味だよ。もう随分待たされてる」

リンはそう言いながらまた椅子に腰を下ろす。

「待たされる？ 誰に？」

「北辰教」

「……もつと分り易く説明して貰えまいか？ そうでなければこっちは一向に話が見えぬ」

それに回りくどい物言いは止めて訊きたい事だけをさっさと訊け、とも言いたかったが、この得体の知れない者の機嫌を不用意に損ねる訳にもいかず、一先ずそこで言葉を区切った。するとリンは沖に体を寄せながら、

「あの方崖つてどこに、『俺が力を貸してやるから使え』って言うのであるのさ。ハハッ」

何がおかしいのか沖にはさっぱり分らない。おかしいのはこの男の頭だ。あの方崖に？ 力を貸す？ 『俺が』の俺とは一体誰だ？

お前は一体どちら様だ？

とにかく正気でない事は間違いない。何も言わずポカンと口を開けたままの沖に、リンは続けて言う。

「ま、手っ取り早く言うのだ。俺を雇えって事さ」

「方崖へ、行ったというのか？」

沖は驚くというよりも呆れて眉をへの字に歪めながらリンの顔を眺めた。確かにこの男は余所者だ。この景北港も、北辰教の事も何も知らないのだ。方崖がどういう処なのか知っていたならいきなり

あそこへ行こうなど考える筈が無い。太乙北辰教信者となり、何かお役目を授かる程になれたとしても方崖を訪れる機会など滅多に与えられないのである。

「ああ。この街に着いてその足でまっすぐ行ったださ。まあ道は教えて貰ったけどな」

「それで……？ まさか上がったと？」

そんな筈が無い、と沖は思いながらも一応訊いてみる。すると予想通り、リンは顔を歪めて首を振って見せた。

（フン、当然だ。お前など相手にされる筈が無からうが）

「あの、入り口の見張りが馬鹿なんだよ。うん、あれは替えたほうがいい。結局あの崖の上に行けるまで四日――、いや五日かかったかな？」

「入れたのか！」

沖は思わず目を見張って声を上げた。一体何をどう言えばあそこを通されると言うのか？ この男、でたらめを言っているのではないかと沖が疑うのは当然の事だった。

「あんな崖の上、疲れるだけなのに何を好き好んで北辰教の偉い奴らは住んでんだろうな？」

本気にして良いものかと思案しながらリンを観察する沖であったが、ここで『そんな筈は無い』と主張したところで何もならない。一先ず言いたい事を言わせておく事にして、一つ深く呼吸しながら心を落ち着ける。

「それで、誰に会った？」

「えらく待たされたんだが、そしたら奥からぞろぞろと出てきたよ。あの格好を見る限り、うんと偉そうな奴らだった。中でも一番態度でかい奴が居てさ、なんかこう……親玉って感じだな」

「……親玉などと呼ばれる様な者は北辰教に存在せぬが」

「総監って奴だよ。周りがそう呼んでた。勿論、俺だって一番偉いのは教主って事ぐらい知ってるさ。でもよ、あの総監って奴であんなに偉そうなら、一体教主はどのくらい踏ん反りかえってなきやい

けないんだろうな。多分もう、ずっと寝転がってるしかないぜ」

リンの物言いにほんの僅か、笑いが込み上げそうになってしまった沖であったが、それはすぐに治まった。このリンはとんでもない事を言っている。

（総監だと？ 張総監がこの若造に会った？ 馬鹿な！ お前は一体何者だ？ 張総監が会う気になるなど考えられん）

「で、俺はその場でそいつに言ったんだ。俺は役に立つ。だから仲間に加えろってな」

まさか総監に向かって今言ったそのままを言い放った訳ではあるまいが、どこか得意げになっている様な表情でにやついているリンを見て、沖は苛立った。

「おぬし、自分を使えと言うからには何か、これという才に自身があるのか？ 張総監がお会いになったという事はそれだけ興味を引くものがあつたという事になるが……」

小汚い若造で、他所からの流れ者。どこをどう見ても理知的な部分を窺わせる要素は微塵も無く、自分の名をどう書くのか言わないのはおそらく自分も知らないからだろうと思われるこの男は、一体何を張総監に売り込もうというのだろうか。

「俺は――」

リンが口を開く。

「誰にも負けた事がねえんだ」

リンは左手をすつと降ろし、自らの腰に提げた剣の柄に置いた。

「ハ……」

（愚かな。粗野で知恵の無い、世間知らずの田舎者。喧嘩しか能の無い若造の典型だ）

沖は呆れ、殆ど侮蔑に近い眼差しをリンに向け、黙り込んだ。

第十二章 十八

「何だ？ あんたも疑ってんのか？ ま、仕方ねえよな。まだ此処では見せてないんだからな。そこをどうにかしてえんだ……」

「どうにか？ その腕を披露するという事か？ 張総監に会うところまでいったのだろう？ ならば腕を見せろという事になったのではないのか？」

「いや、その時は何も無かった。また呼ぶから待ってろってよ。で、それから何も言ってこねえ。ちゃんと宿も教えてあるのにな。遊びで来てんじゃねえってんだ」

リンは口を尖らせて宙を睨みつける。それから思い出したように、自分が注文した『この店で二番目に安い酒』の入った酒壺を取ると、沖の目の前の空になった酒杯に近づけた。

「何かねえかな？」

沖は黙っている。『何か』と言われてもそんな方法は簡単に思い付きそうも無く、頭を捻る気にもならなかった。リンは勝手に酒を注いでいく。

「例えばあの方崖で一番、仲良くなれそうな奴とか居ねえかな？ 気難しいおっさんとかじゃなくてさ。でも小物じゃ駄目だ。影響力の強い奴じゃねえとな」

（そんな話を聞く方崖の幹部など居る筈が無かろうが。それこそそんな事をして遊んでる暇などあるか）

「知らないか？」

沖はそれに首を振って答えた。

「そもそも何故、北辰教に入ろうと思うのだ？ 近年、この北辰教周辺は至って平穏だ。昔に比べればな。今は特に武芸の優れた者を集めようとしている訳でもない。おぬしが名を挙げたいのならもつと他の……、そうだな、例えばおぬしは南方から来たそうだがあつちには荒廃した街が無数にあり賊徒の類が威勢を張っておるそうで

はないか。その辺をいくらか片付けてやれば即座におぬしは江湖の英雄と認められよう」

「あれは駄目だ。切りがねえよ」

リンは鼻で笑って沖の意見を即座に一蹴する。

「そんな事して名が広まりでもしたら、奴らずっと俺にすがりっぱなしさ。『今度はどこそこで盗賊が――次はあそこにおかしな奴らが住み着いて――』。知らねえよ。ちったあお前らも根性見せてみろって話だ。まあ無理な話だけだな。あいつら端から戦う気なんざ持ち合わせちゃいねえんだ」

奴らだのあいつらだのというのはその南方で賊に苦しめられている住民達の事だろう。大抵の悪党どもは土地の者を力と数で脅し、その生活を破壊していく。そして被害を被る住民達は何の力も無い平凡な民。戦う気概を持つのは結構な事ではあるが、現実にはそれは非常に困難である。気力だけで抗う力など手にする事は出来ないのだ。リンの言葉は半分はその通りであり、もう半分は無理な話。全てひっくり返して救ってやれば江湖の英雄と呼ばれる事は間違い無いのだが。

江湖ではとりわけこの類の話が非常に好まれる。江湖は広く、遠く離れた処の出来事を伝聞する頃には事態は全く変わってしまったている事が殆どであったがそんな事はお構い無し、あたかも自分達が体験しているように勝手に事件の謎を解き、またある時は全く見ず知らずの名しか聞いた事の無い者のその人物評まで熱く議論してしまう。暇つぶしの娯楽である。

まるで乱世であるかのように荒廃した土地が存在し、そういった場所には常に悪人が蔓延るが、時としてそういう土地にこそ英雄と人々に謳われる人物が現れるものだ。今の武林で各派を取り仕切っている長老衆なども皆、若かりし頃に厳しい修練を積みながら正義の剣を振るい、大いに名を江湖に広めた。そういった英雄好漢が活躍して一たび名を挙げれば、その名は瞬く間に江湖を駆け巡る。今、

国中がそんな人物を待望しているという証でもあるのだ。

リンはまるで経験済みだというようにそう話した。実際に助けてやったらそうなったと言うなら分かるが、沖にはどうしてもこの若造がそこまでした事があるとは到底思えない。そもそもリンなどという名はまったく聞こえてこなかったのだ。やったとしてもこの景北港まで届く程の事はしていないのは確かだ。

「北辰は今、千河幫と揉めてるんだろ？」

「いや、揉めてなどおらん」

沖はいかにも何でもないといったふうには、努めて冷静に答える。

「敵の味方に付く奴は、やっぱり敵だろう？」

「……若いおぬしには分らんかも知れんが、そう単純ではない」

「フン、どうだかな。まあいい。……今、七星には空席があるだろう？」

「七星……空席？ ああ、確かに七星は今『七』ではないが」

「そこに入れてもらおうかと思ってるんだ」

「ハ……」

いよいよ沖は言うべき言葉を失った。この街の子供らが同様の事を口にする時期があるがそれは現実的な目標となる筈も無く、単なる憧れからくる夢物語に過ぎない。いい歳になってまだそんな事を言っているような者はこの景北港には居ないのである。

（七星も昔の様にその腕を見せる機会は殆ど無くなってしまったかな。こんな若造にまで舐められてしまう……）

そう考えたところで、沖の頭にふと考えが浮かんだ。それはただ目の前の、自分の腕を過信していい気になっているらしい若造を懲らしめる為の悪知恵の様なものであったが、現実というものを知らしめるには都合良く、尚且つこの単純そうな男はすぐ食い付きそうである。

沖は考え込む様子を見せておいてから、

「ならば……」

言葉の後に間を置いてリンを真っ直ぐに見た。

「おぬしの腕をこの街に喧伝するのに良い場所がある」

「おっ、いいねえ！ 何処で何するんだ？」

案の定、リンは間髪入れずにそう言って身を乗り出した。沖は微笑を浮かべて頷き返す。

（喧伝……そう、どんな結果だろうと、この街の人間が嫌でもおぬしの事を喧伝してくれよう）

沖は立ち上がり、街を見下ろせる窓の傍に寄るとリンを振り返った。すぐにリンも続く。

「あそこに――」

沖の指差した先は、陽の光を受けて輝く屋根が密集した市街中心部から少し外れていた。

「周囲より幾らか黒っぽく見える屋根の、大きな屋敷があるだろう？ 庭も広く緑が此処からでも良く見える」

「ああ、あるな。あそこは何だ？ 北辰のお偉いさんの屋敷か何か？」

「まあそんなところだ。そしてあそこには多くの人間が居るんだが確かに皆、北辰教の仲間。しかも、おぬしがその腕を試したいと言えは恐らく、喜んで相手になってくれるであろう男達が大勢……というより一人残らずそんなのばかりでな」

「ほーう」

リンは沖の言う屋敷に目を凝らしている。口許には笑みを浮かべていた。

「なんでそんなのが集まってんだ？ 俺が行って全部負かしちまったら、そいつは流石に不味い……よな？」

「あーいや、まあそうだったらそうだったでおぬしの名は、きっとこの景北港で知らぬ者は居なくなるな。あそこで勝てば……間違い無くそうなるだろう」

第十二章 十九

「おぬしは、そうだな……、道場破りのようなつもりでのり込めば良からう。あそこは道場では無いがまあ気にするな。ただ、相手に死人を出してしまえば、その時は北辰教入りは諦めるしかない。おぬしは、北辰教相手にその腕を見せ、そして北辰教に認めさせねばならんという訳だ。北辰教の人間を殺せば認めるどころか報復が待っている。特に、あそこはな。微妙な匙加減が必要だ」

「フフ、この俺が加減も出来なくなるほど向こうに腕があれば、それはそれで楽しめるんだがなあ。ま、今はとにかく北辰に雇ってもらうのが第一だ。間違っても殺しちまう様なヘマはしねえよ」

相当の自信である。あの北辰七星の一人になろうかというのだから当然といえは当然の事。あそこに居る全てに勝たなければ到底認められるものではない。

「じゃあ早速行こうぜ」

リンは立ち上がり、酒杯の残りを一気に飲み干した。

「……一緒に行けと？」

沖は露骨に嫌がる素振りを見せるがリンはお構い無しで頷く。

「こんなところから見ただけじゃどう行けばいいか分らねえよ。まだ全然この街を理解してないからな。宿以外で知ってるのはこの店くらいだ。道を曲がらずに来れるからな。ハハッ」

沖は溜息を一つ洩らしただけで何も言わず席を立ててすぐに歩き始める。リンがその後ろを店の給仕や他の客達に愛想良く笑顔を振り撒きながらついていき、二人は店を出るべく下の階へと降りていった。

沖は少しばかり早足で全く後ろのリンを振り返る事無く先を急いだ。昼間の街中は人目が多過ぎる。後ろの若いのは連れではないぞというふりである。途中ではぐれたとしてもそれはそれで一向に構

わないのだ。とにかく一刻も早くあの変な若造とおさらばしたいと思っていた。しかし残念な事に、リンはしっかりと離れる事無くついて来る。

表通りを離れて脇道に入って行くとそこからは何度小さな辻を右へ左へと折れて進む。確かに口で説明するのは面倒だった。リンがああ屋敷から帰る時に迷わず宿に戻るか怪しかったがそれはどうでも良い事だ。第一、無事に屋敷を出られるかすら疑わしい。

（殺されても知らんからな）

その可能性は大いにある。だがそれも無駄に血気盛んな若者の自業自得、全く同情する気は無い。そんな『死』は普段からそこら中に転がっていた。自分がそこへ追いやる事になるが、それを躊躇う良心よりも、まともとは思えない動機で太乙北辰教に急接近しようとする得体の知れない者を警戒する気持ちの方が勝っていた。それを事前に排除出来れば北辰教に忠誠を誓う己の自尊心に大いに適うというものだ。

ふと沖の足が止まる。目的の屋敷はもうすぐそこという処まで来ていた。後ろを振り返り、真剣な表情でリンをじっと見る。

「この先の屋敷を教えるのはおぬしの望みを叶えるのに一番手っ取り早いからだが、あの屋敷の事を誰に聞いたかは言ってくれな」

「ああ、分ってるよ。お仲間なんだろう？ そんな奴らを俺がぶっ倒しちまったらやっぱり不味いよなあ」

（確かにお仲間……とも呼べるな。微妙に違う気もするが。あまり近付きたくない連中だ）

細かな部分で異論はあるものの、沖ははっきりと頷いて見せる。

「絶対だぞ？ おぬしがもし勝ったら尚の事、こちらまで恨まれる事になりかねん。この街に居られぬやも知れぬ」

「ああ。心配要らない。あんたは恩人だ。迷惑は掛けない」

恩人とは大袈裟過ぎるが、リンには方崖からの沙汰を待つ以外に出来る事が見当たらないので沖の提案は願っても無い事だったのだろう。

「うまくいって俺が七星になればあんたにも少しは良い思いさせてやれるな」

そう言って笑うリンに沖は愛想笑いで応じた。

（馬鹿としか言いようがないな。どんな環境で暮らせばここまで能天気になれるのか？）

沖はそう考えながら、つい先程までは一切無かった微かな憐れみすら感じ始めた。

沖が再び足を止めたのは目的の屋敷の門から少し離れた処だった。
「あそこがそうだ」

沖は視線だけでリンに場所を示す。門の前には四人の男が居る。位置的には門番のような役目の者達だろうがその内の二人は地べたに座り込んで何やら話しており、ただ、たむろしているだけの様にも見えた。男達はどれも屈強そうな体躯で、皆一様に上着の袖を捲り上げて見せている太い腕には墨が入られている。だが、日差しは明るく、少し暖かい僅かな風が心地良い。閑談に興じる男達の際る景色は平穩そのものだ。

「ああ、あんな連中よく居るよな。ああいうのは大した事無い。怒鳴り声だけはまあまあだけだな。なあ、あそこは何する処なんだ？

誰の屋敷だ？ 何だか柄の悪い連中だな」

リンが首を伸ばしてあからさまに門の前を注視するので、沖が慌ててその視界を遮るように立った。

「いいか。もう行くぞ。あとはおぬしの好きなようにするがいい」
見つかって顔を覚えられると不味い。リンの話など沖は聞いていなかった。

「では、また……な」

沖は自分が『また』などと言った事に戸惑いながらも、早々と身を翻した。するとリンが素早く袖を掴んでくる。

「ありがとう。本当に感謝するよ」

リンは真顔で沖をじっと見ていた。

「あ、ああ……」

沖は声にならないような小さな音を発して、ようやくリンと別れた。

（まったく、変わった奴だ）

また足早に歩を進める沖は、あの若者がこの後どうなるのかが気になって仕方が無い。どうやってあの門をくぐるのか見てみたい。あそこならすぐに大騒動になるのは間違いないだろう。あの門前に人だかりが出来れば中の様子が見れるかも知れない。

（無事で居られるか？ まさか。だがあれが万が一、本当に七星並みの腕を持っているとしたら？ もしそうなら中に入るなど容易い。殆ど雑魚だ。しかし……『七星並み』では駄目だ。超えておらねば死闘は免れぬ。もしもあの屋敷に、劉寨主が戻っていたら――？）

沖は暫く行って後、ぴたりとその足を止めた。

第十二章 二十

沖と別れた後のリンに躊躇いの如きものは微塵も無く、すぐに教えられた屋敷の門へと進む。

門前の通りを斜向かいから真っ直ぐ近付いてくる男の存在に、たむろしていた四人はすぐに気付いた。どの顔も一樣に眉を顰め、鋭い視線を送ってくる。地面に座り込んでいた二人もゆっくりと立ち上がった。

明らかに威嚇の体で、無言でリンを睨みつけている。こういった態度を見せるならず者は何処の土地でも必ず居るもので、街の者も『ああ、またか』と身を避けて足早に去るのが日常の所作の一つとなっているのだが、此処では少し様子が違った。それ程多くはなかったが通りを行く者達は足を止め、門前の四人と、そこに真っ直ぐ向かっていくリンの様子を興味深そうに見つめていた。

リンの顔には僅かな笑みが浮かんでいるが、余程注意深く見なければ判らないほどであり、殆ど無表情に見える。威嚇の効果は無く歩を緩めないリンに対し、男達の方が先に声を発した。

「止まれ」

一人が意外にも冷静な、低く太い声で言う。

リンは立ち止まらない。次の声が発せられる時にはもう四人のすぐ前に立っていた。また同じ者がリンに訊ねる。

「此処に何か用か？」

「そうだ」

ここで初めてリンが口を開き、短くそう答えた。互いに視線を外さずに見つめ合う格好になっている。

この四人には役割分担でもあるのか、一人だけが前に出てリンと対峙し、あとの三人はその後ろに整列するかのように横に並んで黙っていた。視線だけは変わらずリンを真っ直ぐ睨みつけている。

「で？ 誰に用事だ？ 此処には大勢の人間が居る」

そう話す男は後ろの三人よりは若干、年長者であるようにも見えるが、それでこの役目なのかは定かではない。

リンは視線を動かして四人をまんべんなく見渡してから、口許にはつきりと判る笑みを作った。

「全て、呼んで貰おうか」

「何言ってるんだてめえ」

後ろの一人が半身の上体を前に押し出すようにリンに迫るが、リンはそれに何の反応も示さず、

「ま、それは冗談だけだな。あ、でも全員に用があるのは本当だ。相手をして貰いたい」

「相手？」

「中に入れてくれ」

「意味が解らん。何の相手だ？」

「またまた。もう予想はついてんだろ？」

ハハ、と少しばかり芝居がかった笑い声を上げるリンは次の瞬間いきなり両腕を持ち上げて前に突き出し、正面の男の両肩を突いた。間合いは狭く、リンは踏み出してもおらず腕が前に出されただけであったが、リンの薄汚れた上衣の袖が風を切る音が鋭く発せられた。それと同時に両肩を打たれた男は真後ろに位置していた一人を巻き添えに思い切り後方に飛び、そして崩れ落ちる。

同時にリンはその上を飛び越えるとそのまま門をくぐってから数歩進んで立ち止まり、それから振り返った。

「全員、だからな。あんたらもすぐに来てくれよ？」

リンは門前で呆気にと取られている男達に向かって言うときまた前に向き直り、正面にある建物の方へと駆け出す。

「まっ、待ちやがれ！」

リンの侵入をあっさりと許してしまった門前の四人だったが、すぐにリンの後を追った。地面に打ち倒された二人も特に傷を負った訳では無いようである。

この四人の『待て』だの『この野郎』だのと叫ぶ声はこの屋敷中

に賊の存在を知らせるのに充分だった。リンが建物に到達するより前に、閉められていた戸が少々乱暴に、一斉に開け放たれた。

「うわっ！ これはまた凄いな。何人居やがるんだ？」

戸が開け放たれて中の様子を目の当たりにしたリンはすぐに足を止めて独り言つ。

入り口周辺に中から溢れ出たかのような男達。善良な街の人々とは一線を画す、見るからに荒々しそうな者達ばかり揃っている。ざっと見ただけでも、四十、いや五十近くは居るだろうか。中だけではない。建物の脇を通ってこの屋敷の奥の方からも駆けつけ、増えていく。その全てがリンを凝視し、そして間合いを詰めてくる。

（ここは……一体なに屋なんだ？）

「何だ、小僧！ 何しに来た？」

大勢居る中の一人が声を張り上げながら歩み出て、リンの正面に立つ。他の者達が体を退いてその男の歩みを妨げぬようにと動いていたのを見る限り、この男がこの得体の知れない集団の中心人物で間違い無い様である。ぎよろ目で髭面、これでもかと言うほど鍛え上げられた隆々とした筋肉で、なるほどそれらしい風貌である。ただ、着ている物の粗末さはリンとさほど変わりはない。

リンはスッと背筋を伸ばし、にこやかな笑顔を作ってその男に言う。

「此処に居るのはどれも腕に覚えのある者達ばかりと聞いた。俺は他所から来たんだが、ちよいと事情があって自分の腕を試しておきたいのと、この街の人間にそれを知らしめたい。ちよいと人から聞いたのさ。あんたらこの屋敷の人間を倒せば、この街……北辰教に名を広められるってね。いやあ、まさかこんなに居るとは思わなかったよ。フフ、これだけ居ればそりゃあ……有名になれるよな」

それを聞いた男達は口々にリンを罵り始め、余りの騒々しさに結局誰が何を言っているのか解らない程である。拳を振り上げる者、リンを指差し激しく非難しているらしい者。だが、その誰もが中心

に居る髭面より前に出てくる事は無かった。

男達の怒声は当然、屋敷の外にもうるさく響いている。屋敷の門に人だかりが出来るのにそれ程時間は要らなかった。

「ほらほらあの男！ あれが乗り込んで来たんだよ！ 私最初から見ただんだから！」

「何者だ？ まだ若そうだな」

「こりゃあ……無事では済まんな、あいつ……」

門の外から覗き込む者達が中の騒ぎに同調する様に口々に喋っている。そんな中に、リンが今どうなっているのかと、人の隙間から中の様子を窺おうと屈んだり首を伸ばしたりする沖の姿もあった。

第十二章 二十一

「他所者か。此処がどういう場所か理解してないようだな。だが、此処を選んだ事は間違いじゃあ無い。確かに名を売りたいなら此処で暴れるのが手っ取り早いぞ。まあ、生きて出られればの話だがなあ。お前、何処から来た？ 本当に俺達を知らねえのか？」

顔は微かに笑っているがそのぎよる目を上下させてリンの全身を観察しながら、男は数歩進み出る。

丁度それに合わせる様に集団の中からもう一人、こちらはわりと身形の良い、目立つ赤い袍を纏った中年の男が歩み出て来ると、先の髭面の男の横に立った。それから二人は互いに額を近付けて何やら言葉を交わしている。雰囲気からその者もどうやらこの集団の中では身分が――身分と呼ぶ程の区別がこの男達の中にあるのか定かではないが――幾らか上であるようだ。

また髭面の方がリンに訊ねる。

「お前は……喧嘩を売りに来た、という事で良いのか？」

「ああ、そうだ」

リンはにっこりと微笑んで頷いた。するとまた男二人は小声で何か話し出す。リンは溜息を一つ吐いてそこへ口を出した。

「なあ、ややこしい事は何も無い筈だろ？ あんたは今お集まりの皆さんに、『やっちゃまえ！』とか何とか、号令してくれるだけで良いんだけどな」

「……そう急くな。お前は今さっき来たばかりだろうが。お前が何なのかさっぱり分らん。何処の者だ？」

「何処だって良いだろう？」

「そうはいかんな。一人で乗り込んで来るなど怪し過ぎるわ。何処から来たか言え」

意外にもこの髭面が警戒しているのか慎重な態度を見せるのでリンは落胆した。すぐに自分を捕まえようと動いてくれれば即、乱闘

になって自由に暴れられると思っていたからだ。

（ああ面倒だ。何も言わず適当に殴っとけば良かったか？ 無視して始めるか……）

やり過ぎるのは不味い。問答無用で始めて向こうが本気でこちらを殺しに掛かると、あらかじめ自分の意図を伝えておくのでは、やり易さに違いがあると考えた。もっともその差は殆ど無い様に思われるが、とにかくリンはそれを妙案だと思っていたらしい。

「言えんのか？ お前、此処を九宝寨と知って来たんだろう？」

「……九宝寨だって？ 景北港だろ此処は」

リンの反応に偽りは無さそうである。また髭面と赤袍の男がひそひそと話す。

九宝寨とは土地の名。そしてそこを本拠とする集団の名でもある。リンが沖に教えられて来たこの屋敷はその九宝寨が、誼を結ぶ太乙北辰教の本拠景北港に置いた出先の拠点であった。

「九宝寨なら知ってる。場所も。此処より西の、山賊か何かだろ？ 此処と関係あんのか？」

リンが問う間も、二人は視線を送ってくるだけで話を止めない。

「あんたら、九宝寨の仲間か？ 北辰と組んでるから、こんなところにも居るのか？」

「おい、聞いてんのかよ」

それにしてもこの屋敷の者は皆、見るからに気が短そうで、厳つい顔の男達ばかりというのに、皆押し黙ってリンを睨むばかり。最初あれだけ騒がしかったのが髭面が出て来て話し始めた辺りから静まり、後は一切動こうとしない。表に居た四人の態度も同様であった。リンはこういった集団を見慣れていたが、どうも此処の連中からは他所と違う毛色を感じていた。

「若いの」

今度は赤袍の男がリンに話し掛けて来る。

「九宝寨の本拠を知っているのなら、そこへ行く事を勧める。腕試しと言ったな？ 向こうならすぐにお前の相手になるだろう。お前

が何処の誰であろうとな。此処とは比べ物にならん数がお前を歓迎する。……この街どころか、武林に広くその名を轟かせる事も出来るよう」

此処で良いという先程の髭面の言葉とは反対の事を言う。髭面は赤袍の男とのひそひそ話の中でたしなめられでもしたのか腕組みしながら口を噤み、異論は挟まなかった。

「此処じゃ駄目だったのか？ いや、もういい。俺は頼みに来たんじゃないねえ。勝手にやりに来たんだ。始めさせてもらう」

リンは言い終えると不意に地を蹴り身を躍らせ、正面の髭面に打ちかかった。

それほど距離があったわけではない。髭面と赤袍の二人は言葉を発する間も無く、弾かれるように後方へ退く。それが合図となり周りの男達は待ってましたとばかりに再び怒号を上げ、リンへと襲い掛かった。これを赤袍の男が止めようとしたとしてもそう簡単にはいくまい。リンの視界は周囲から押し寄せる男達で一杯になり、先の二人の姿は見えなくなっていた。

門前は人で膨れ上がっている。極めて平穏なこの景北港の街ではちょっとした騒ぎが一たび起これば瞬く間に人を呼ぶ。今回はこの九宝寨の屋敷、というのもそれを助長しているのかも知れない。他はともかく、この屋敷及びその周辺で何らかの騒ぎが起きるなど人々の記憶には無い。

門の正面に居場所を確保した一部の者にしか中の様子は見えないのだが、塀を越えて聞こえてくる荒々しい怒号に呼応するかのように表の群衆の熱も高まり、かなりの騒ぎになりつつあった。

「何事だ？」

「何でもへんな若造が此処に突っ込んで行っちゃったよ。中で暴れてるらしい」

「何だと？ 何処の奴だ？ まさか真武剣とか言うんじゃないかな？」

「知らん。だがたった一人らしい。何処かの命を受けた刺客かも知れんぞ。もう結構な時が経ってるが中の騒ぎが収まってないという事はかなりの使い手じゃないか？」

「劉寨主はどうした？」

「今、屋敷には居られぬ様だ。寨主が居られたならとうに収まっておるわ！」

「一体、何の騒ぎだい？」

「ハッ？ 何を聞いてたんだ？ 邪魔だ！ 向こうに行って――、

……あ？」

人だかりの後方でさっぱり中の様子が窺えないこの男は次から次へとやって来る野次馬への説明役と化していたのだが、ついに苛立ちが頂点に達し声を荒げる。そして後ろを振り返って睨みつけた新たな野次馬である筈の声の主を認めると、思わず目を見張り言葉を失った。

「あんたの方が余程、往来の邪魔だと思っけどねえ？」

「り、林……」

「んん？ あんた、あたしの知り合いかい？」

「こっ……これは失礼を！ 林玉賦さま！」

男が半ば叫ぶ様に呼んだその名前に、前方に夢中になっていた群衆の顔が一斉に後ろを振り返った。

第十二章 二十二

屋敷の中は変わらず騒然となっているのに対し、門前の集団は一気に静まり返る。皆、一樣に後ろを振り返り、殆どが口を開けたまままるで時が止まってしまったかのようなのである。

「フ、いつの間に九宝寨がこんなに大人気になったのかと思ったけれど……入りたいって訳じゃなさそうだねえ」

林玉賦は屋敷の門に群がった人々を悠然と見遣りながらそう言うて笑う。

この日の林玉賦は薄い沙羅の衫に素肌を薄っすらと浮かび上がらせていた。衫の下には赤い胸当てがあるだけで、とても大胆な姿である。好んで身に着ける真っ赤な裙は緩やかな風を受けて広がり、肩に掛けられた披帛と共に舞う。

この林玉賦の身装には皆大いに目を引かれたが、この姿が特に珍しいというわけでも無かった。林玉賦がこの様に華やかで女性らしい衣装を纏うのを好むという事を、この街の者は良く知っていた。

武林には女武芸者も数多く存在するが、荒事に臨むにあたって裙を着けるのを好む者は殆ど居ないだろう。不測の事態を除き、色や刺繍、装飾品はそれらしくともやはり下は禪子スボンの武術着、或いはそれに近い動き易い衣装を身に着ける。常に男装する者も居る程で、武芸の妨げにならず、そして敵に侮られぬ事を念頭に置いている。

林玉賦もその様な装束を纏う事もあるのだが、それに拘る事はない様だ。むしろ『それ』っぽくない姿で現れ、或いは宮廷女子の如く、或いは芸能者の如く、目に鮮やかな色目の大きな袖、長く広い真っ赤な裳裾を舞わせる事を好んだ。

そして、その艶やかな姿が、相手に恐怖を刻み付ける。複雑に入り組んだ、林玉賦の肢体を包む布の襞ひだ。その奥を覗こうとするのは危険極まりない。そこにあるのは果たして蜜か、毒か――。

成熟した色香を放つその肉体に具わる、歳を経て円熟味を増したその体術は時に官能的ですらあるが、それこそが対峙する者を死地に招き寄せる林玉賦の罠であるのかも知れない。その誘う様な肢体に吸い寄せられる敵の眼を、同時に彼女の持つ無数の得物もまた狙い定めているのである。

「おい、道を空けろ」

誰かが発したその声に群衆が身動きを始める。門の中央を境に徐々に人の塊が二つに割れていき、林玉賦の前には中へと続く一本の道が現れた。

「ハ、これは大した見世物だ」

門の中の様子を一瞥した林玉賦はそう言うだけで動かなかった。

門の手前からだけでは中の全体を窺う事は出来ない。しかし門に縁取りされた視界にはひっきりなしに男達が現れは消え、現れは消えして相当慌しく動いている。右から左へ、地に足を着ける事無く吹っ飛んで消えていく者さえ居た。無手の者、或いは長剣を振りかざして駆ける者。本来なら近付きたくない現場ではあるが、成る程、門を隔てて見物するにはとても良い見世物である。ただ、中で演じられている何かの、話の筋は誰も理解していない。

「滅多に無いことだからねえ。皆、楽しんでいきなよ。あたしも邪魔はしないさ」

林玉賦は群衆が作った屋敷への道には一步も進まず、そう言って横を向いて歩き出した。

（おいおい、中のあれを止めるんじゃないのか）

誰もがその姿を半ば呆然と見送りながらそういった意味の事を胸の内で呟いていた。

しかし林玉賦はそのまま立ち去るつもりは無かったらしく、少し行つてその足を止める。屋敷の塀を左手に眺め、視線を上げると次の瞬間、その身体が跳ねる様に飛び上がった。ほんの一瞬である。塀の上に文字通り舞い降りるかの様にふわりと広がる真紅の裙に人

々の目は釘付けになり、ホウと溜息を洩らす者さえ居た。

林玉賦は裙を堀の上に広げたまま腰を下ろす。どうやらそこで中の様子を見物しようという事らしい。そこで群衆は我に返り、再び身を寄せ合って門の中へと向きを変えた。

騒がしかった屋敷の中の様子が、徐々に変化していく。激しかった動きが少しずつ減り、それに伴って音も減っていく。声を荒げる者は殆ど居なくなっていた。

（こいつ何なんだ？ くそっ！ 寨主に何て言えば良いんだ……）

髭面の男がその太い腕を戦慄かせつつも前にかざして構え、正面のリンを睨み続けている。

状況は大した説明を要しない程、単純だった。单身乗り込んできた若い男はいきなり喧嘩を仕掛けてきて、数十居る男達をいとも簡単に打ちのめしていく。何処の武芸で、どの様な技であるかなど考えるのは全く意味が無く、精妙さも、美しさも一切関係の無い、ただ闘争本能しか持たない原初の人間同士の争いに見えていた。

リンとその周りを取り囲む九宝寨の男達は、やがて睨み合いの硬直状態となる。リンに飛び掛ってもまた弾き飛ばされるかその場に崩れ落ちるしかない様に思われた。

「ちよいと、休憩するか？」

リンは髭面に向かってそう笑いかける。戦い始める前と比べて声も息遣いも、そしてその余裕の表情も全く変化が見られない。

「……正直、その言葉に甘えて一休みしたいところだがそうもいかん。お前は確かに腕が立つようだな。だが関係無い。お前がどうあれうと俺達は命尽きるまで戦わねばならんのだ」

「いや、だから命まで取らねえって。そう大袈裟に考えるなよ」

リンの物言いは変わらずお気楽そのものだが、訳も判らず迎え撃つ九宝寨にしてみれば仲間を次々と打ち倒されて悠長な事は言ってもらえない。乱れる気配すらないその息の根を止めてしまわねば全滅の可能性まで出てきてしまった。数百居る九宝寨のほんの一部だけ

がこの屋敷に集まっているが、此処でそんな事態が起これば江湖に知られた九宝寨の名が地に落ちてしまう。

表に人が集まり、自分達が一人の若造に手玉に取られているのをすっかり見られている。もうこの時点で景北港九宝寨の名声が崩れ落ちるのは間違いないかった。

（油断……？ いや、あの若造のせいだ。なぜあれほど腕の立つ奴が突然やってきて俺達を襲う？ 油断も何も、何か考える暇も無くこの様ではないか）

武芸の応酬というよりはただの喧嘩。腕が立つという表現を用いるのはどこか違う気がしないでもないが、全く齒が立たないこの状況を見るとやはり、そういう事なのだろう。

（寨主がお戻りになれば……）

髭面の男がふとそんな事を考えると同時に、門の横、塀の上にある人影が目に入った。

（あれは？ くそっ、何で今此処に居やがる、あの女……）

さらに焦りが込み上げる。思い切った様に勢い良く腰の長剣を抜き、その切っ先をリンに向けた。

「殺せ！ 何としても生かして帰すな！」

第十二章 二十三

残念ながら髭面の男の吼える様な号令は、普段ほどの効き目は無かった。まだ無事に立っていられる手下達は悉く怒り心頭に発しているのは間違いないが、慎重になって踏み込む事も出来ずにただ足をじりじりと地に擦り付けるばかりである。

誰もが目を瞪る様な華麗な武芸をリンが披露したのならば、或いは恐れ慄いて抵抗を止めたかも知れない。だがそうではなく見慣れた喧嘩でこれほどまでに一方的にやられているのが納得出来ないのだ。男達には得物がある。リンは腰に長剣を提げているが一度も手を掛けていない。それでいて何故、既に半数以上が地面に転がって唸っているのか？ 改めて『殺れ』と命じられたものの、一体どうすれば良いのか見当がつかず半ば混乱していた。

一時見えなくなっていた赤袍の男が姿を現し、髭面の男に駆け寄った。

「今、寨主を呼びに遣った」

「今？ 今だと？ 寨主は何処だ？」

「知らん。だがすぐ戻るかも知れんぞ」

「ハ！ 待ってられるか！ ……いや、寨主が戻られるまでに俺達であいつを片付けねばまずいぞ！」

髭面の男がそう言ってリンに目を向ける――が、先程の位置にリンの姿が無い。

リンは男達の群れに向かい体を躍らせ、まさしく殴り込んだ。自分に向けられている十数本の長剣を意に介する様子も無く、瞬く間に残る男達を片付けていく。この辺りでようやくリンを囲む男達の様子に変化が現れる。迫るリンから逃げ出し始めたのである。

一人駆け出せば周りも慌ててその後を追う。

「こらっ！ お前ら！」

大の男達が慌てふためく姿は滑稽で、眼をひん剥いた髭面の男が

怒鳴るその科白もどうも締まらない。

(……終わりだね。まともに出来る奴が揃って出払っちゃってるなんて、あいつも運が悪い。ま、あの若いのは狙って来たんだろうけどねえ)

門の外が再び騒ぎだす。九宝寨の男達はどうやら屋敷の外にまで逃げ出し始めたようだ。

「邪魔だ、どけっ!」

「寨主を呼んで来る!」

「何処か知ってんのか? 手分けして探すんだ!」

門を封鎖するかのように群がっていた見物人達を押し分け、なんとか表に転がり出た数人が大声を上げながら通りを二手に分かれて駆けて行く。寨主を探すというのは本当だろう。一刻も早くこの場から、そしてリンから離れたい男達は一目散にこの屋敷から遠のいていった。

「あー……。もうあんたらも行っていていいぜ? これだけやりやあ充分だ。俺も疲れてきたしな」

リンは肩に手をやって腕を回す。残ったのは髭面と赤袍の二人と、あとは数人がその後ろに隠れる様に身を寄せているだけだ。周りは地面に転がって動けない男達だらけで、九宝寨屋敷には何とも無残な光景が広がっていた。

「舐めやがって小僧がっ!」

顔を怒張させた髭面の男は長剣を振りかざし、その重そうな見た目とは裏腹な速さでリンに迫った。丸太のような腕が唸りを上げてリンの肩を狙うべく振り下ろされるが、リンはそれを軽く後方へ跳躍して避けた。

「何見てんだ! お前らも来ねえか!」

髭面の男はリンに背を向けると、自分が無防備なのも忘れて後方

で縮こまっている手下に怒鳴り散らす。

「お、おう！」

赤袍の男が右手に長剣、左手は剣訣を結んでそれらしい構えを見せた。ただ、如何せん目立つのはその真っ赤な袍だけで髭面の男と並ぶと細身で迫力は無く、構えもぎこちない。その後ろの数人は髭面の男の激しい剣幕でさらに怯えてしまったのか目を逸らすように俯いてしまっている。こういう窮地に立たされた場面で最後まで残っているのは最も役に立たない者というのは意外と良くあることだ。この者達は逃げ出す事すら出来なかったらしい。

もうどう考えても終わりだ、と表の見物人達は思いながらこの見世物の結末を見届けようとしていた。

リンは後ろを向いてがなり立てている髭面の男の大きな背中を襲うでもなく、ただ薄く笑いを浮かべながら眺めていた。

（注目は集めたし、まあ良いが……こいつら本当にあの九宝寨の間か？ 俺が噂を聞き違えたか……。フン、まあ俺が強過ぎるんだな。あの七星になろうかってんだ。こんな奴ら——）

「おい小僧！ 我ら九宝寨を敵に回して後悔する事になるぞ！」

「後悔？ いや、それはないな。あんたらじゃ何人居ても俺に勝てねえよ」

「仲間はいただけじゃない！ 九宝寨には此処の数十倍もの人間が居るんだからな」

「あんた俺の話聞いてるか？ 何人居ても、って言ったろうが。あんたら程度ならな」

本気で九宝寨など歯牙にも掛けないといったリンの態度に、髭面の男は驚き、顔を顰めた。

「お前、寨主を、九宝寨寨主、劉毅様を……知らんのか？」

「ん？ 誰だって？」

「寨主だ！ 我らが寨主、そして北辰七星でもある劉毅様だ！」

「劉毅……七星劉毅？ それがあんたらの親玉だって？ ……冗談じゃないよな？」

リンは少しばかり考える様子を見せた後、驚きの表情を作る。劉毅の名は知っているらしい。

「このっ、何も知らん田舎もんが！　いいか、北辰の七星ってのはな！　武林で最も強い七人の事だっ！」

「六人だろ？」

「七人だ！　その中の二人は我ら九宝寨から出てんだ！　覚えとけ！」

リンは腕を組んで髭面の男をじっと見つめる。

（七人だって？　今も七人居るのか？　……そいつらは……こいつらよりもちゃんと強いんだろうな？　不安になってきた……）

第十二章 二十四

再び髭面の男が雄たけびを上げながらリン目がけて飛び掛る。リンも今度はそれを避けようとはせず、前へと踏み込んだ。

「よし、これで終わろう」

長剣の切っ先が風を切る音を響かせてリンに迫ったが、体に触れる事は無かった。髭面の男の剣の腕が他の者と比べて如何ほどであったかを知るには余りにも時が短すぎる。振り下ろされた剣が地面に触れる時、既にリンの拳は思い切り髭面の男の腹に叩き込まれていた。

「吐くなよ」

リンはその後素早く後ろに退き、また元の間合いで立つ。髭面の男は苦痛に顔を歪めつつ、腹を両手で押さえてそのまま地面に突っ伏した。

後に残された赤袍の男と手下数人はしきりに口を動かしていたが声にならず、体を震わせている。リンはじっとその様子を眺めてから、行け、と短く言うとその者達はその言葉を待っていたかの様に一斉に駆け出した。

（……こんなので良かったのか？　なんだか……拍子抜けだな）

リンは改めて辺りを見渡した。気を失って倒れている者は相変わらずそのままで、まだ何とか動けるといふ者達は皆、門の外を指指して身をよじっていた。

「九宝寨、か……。嘘だろ」

リンは建物に上がる石段に腰を下ろすと溜息を洩らし、ぼんやりと辺りに視線を投げる。

（不味いかもな。劉毅か……。しかし何で劉毅の手下がこんな奴らばかりなんだ？　役に立たねえ奴らばかり此処に集めてあったのか？　本拠は此処じゃねえもんな。ああ……今更、遅えよなあ。あの

おっさん、もつと詳しく教えといってくれりゃあ良かったのに)

この屋敷の連中が街の者にどう思われているのかリンは知らない。門の外にはかなり人が集まった様だが、あいつは凄いと思って貰わないと乗り込んだ意味が無いのだ。この屋敷をリンに教えた沖という男は此処の人間相手に腕を見せれば間違いないというような事を言っていた筈だが、ここまで弱い者ばかりでは何十人居たところで大した事では無い様に思えてくる。

リンは七星についても良く知っているとは言えなかった。一応、現在の六名の名くらいは知っているが、全ては噂のみで得た知識である。九宝寨の寨主が七星の一人だという事も此処へ来て初めて知ったのだ。

(こりゃあ……北辰の七星って大した事無いのかもな。くっそーこんなところまで来てやったってのによ)

リンは肩を落として項垂れるが、またすぐに顔を上げた。

(……ん？ まてよ？ 七星がこれだけしょばいなら……俺、どうなっちゃうんだ？ 少なくとも北辰教の縄張りの中じゃ最強って事だよな。おいおい、俺が教主様になっちゃうかあ?)

今度は目を輝かせながら頬を緩める。

(あ、でもなあ。北辰の奴らが総出で襲ってきたらさすがに不味いな。あの崖に上がっても話どころじゃねえかも。とりあえずはこっちから乗り込んで先手を……うーん)

リンは頭を抱えた。

門の外から中を覗いている街の者達は座り込んだリンのその意味不明な動きを怪訝そうに眺めていた。

(……運が良かったただけだ。寨主以下、目ぼしい幹部も居ない。だが、それにしてもあの小僧……)

沖は人だかりの中から抜け出し少し離れてから門を振り返った。胸の鼓動がまだ治まらない。よもやあのリンが一人残る事になるうとは想像だにしていなかったのである。腕を示したいという目的は

聞いていたが、まさかとんでもない裏があつてそれに加担してしまつたのではあるまいかと不安で仕方が無い。とにかくこの場を去らねばと歩き出したが、ふと横の塀の上にいる人物を思い出した。

中の騒動は収まつた。だが、彼女はずっと変わらない姿勢で表に背を向け、じっとしている。

（何故、手を出さない？ 劉毅様とは特に不仲とも聞かぬが、九宝寨には関わらぬと？ あの小僧が北辰の敵であつたなら何とする？）
彼女がこのまま去るのか、それともリンを捕らえるのか。彼女――林玉賦が相手をするとなればあのリンもここまで。抗いようが無い。幾らなんでもそれだけは間違いないと思つている沖は今すぐ去るか最後まで見届けるか悩み、足を止めたままだった。

リンは空を見上げる。まだ青空に真つ白な雲が浮かんでいたが、もう少し待てばその雲も徐々に赤味が差してくる筈だ。

（どうする？ 宿に戻るよりはこのまま行くか……。まだ伝わってなけりやまた追い返されるだけだが、さすがにそれは無いだろう？

あの総監とやら、怒り狂つてるかもな……）

リンが門の方に視線を戻すと、未だ多くの見物人達がこちらを覗き込んでいる。リンの視線に気付く度に、それを避けようとでもしているのかうごめいているのが分かる。

（おっさん、居ねえかな？）

沖も見ているのではないかと思つたが中から見えるのは群集のごく一部であり、その中には見当たらない。沖に訊けば何か次のうまい手立てを教えてくれるかも知れないなどと考えていた。

『もう、終わりがいい？』

不意に声がする。それもかなり近い。付近に人の気配など一切感じていなかったリンは思わず飛び上がる様にして石段から立ち上がった。

すぐに辺りを見回して声の主を探したがそれらしい人影が見当た

らない。呻き声を上げている男達は居るが、先程聞こえた声は女のものだった。それにまるで耳元に囁かれたかの如く、すぐ近くに感じた。

（どこだ？ 中に隠れてんのか？）

リンは石段を上がって建物の中を窺う。

『物盗りなら急いだ方が良いねえ』

リンは思わず耳を塞ぐように手で押さえ、首を回した。声が近づいて一体どの方向から聞こえたのかがさっぱり分からない。初めて経験する、異様な感覚である。

リンは意を決して勢い良く建物の中へ飛び込むとすぐに辺りを確認するが、顔を上げて天井まで視線を遣ったものの誰も居ない。この屋敷は大きく建物にも多くの部屋がある様だがリンは奥まで探そうとはしなかった。声の主はすぐ近くに居る筈なのだ。

「何処だ！ 出て来い！」

『此処には大した物は無いと思うけどねえ』

「俺は盗人じゃねえ。くそっ……何処に隠れてやがる」

『もう少し声を張って貰わないと聞こえないよ』

女の淡々としたその声が、リンの耳に捻じ込んでくるように響いていた。

第十二章 二十五

此処へ来て初めて、リンは全身が緊張するのを感じた。今まで触れる事はなかった長剣の柄に手を掛けている。全神経を研ぎ澄ませて辺りの気配を窺っているが、気の遠くなりそうな静寂があるだけだった。

「此処の、九宝寨の仲間か？」

『一応仲間、と言っておこう』

「……へッ、それなら出てきてくれよ。続きをやるまでだ」

『お前と遊ぶ気にはならないねえ』

「あんた……まさか劉毅……って、女じゃねえよな」

『あんな男と一緒にするんじゃないよ。それにあたしは九宝寨の人間じゃない』

「でも北辰教、だろ？」

『盗人じゃないなら何故こんな真似をした？ お前は九宝寨に恨みでもあるのかい？』

女の声はリンの問いには答えず、別の問いを返してきた。

「此処の奴らが九宝寨の人間だとは知らなかった。相手は誰でも良かったのさ。派手に暴れさえ出来るなら」

『何の為に？』

「北辰のお偉いさんに俺の腕を認めさせる為だ」

リンは長剣から手を放し、近くにあった椅子を引いてそこへ腰を下ろした。相手は依然として何処に居るのか定かでなくどっちを向いて話せば良いのかも分からない状態だが、とりあえず会話は成立しており女の声も殺気立っている訳でもない。こちらばかり気を張っても疲れるだけだと考えた。

（やる気になれば向こうから出てくるだろ）

『方崖にその腕を売りに来たっていうのかい？』

「ま、そうだ」

『その程度じゃ要らないと思うけどねぇ』

「へッ、そうだろうよ」

リンは溜息をついて項垂れる。

「此処の奴らがこんなに弱いとは思わなかった。これじゃ俺の腕を証明する事にならねえもんな。……あんたはどうやら此処の男共なんかより遥かに出来そうだな」

『何故そう思う？』

「あんた、妖術使いかなんかだろ？」

『――』

返事が無いのでリンはまた辺りを見回した。

「声は聞こえても気配が無い。どうやったらそんな事が出来る？」

『……方崖で、何をする？』

「何、と訊かれても困るが……とりあえず、北辰七星に入れてもらう。空気があんだろ？」

『……そうか。フン、お前か』

「ん？ 何がだ？」

『こんな所で遊んでないで方崖に行ってみるんだね。此処の連中を相手にしたって何の足しにもなりやしないよ』

「いや、もう行った。けどもうずっと何の音沙汰も無しなんだよ。だから此処に来た」

また女の返事が途切れる。リンは立ち上がりもう一度辺りを見回して何も感じないのを確認すると表の庭に出た。

（まさかこいつらと一緒に寝転がって隠れてる訳じゃないよなあ）

目の前に転がっている連中に混じって女が居ないかと探してみるが、やはりそれらしい者は居ない。

（当たり前か。本当に居たら笑っちゃまうよな。何で一緒になって地べたに寝転がる必要がある？）

『劉毅が此処に居たならお前の算段は狂ってた。まあ元々あまり意味は無かったけどねぇ』

リンがまた石段に腰を下ろしかけた時、再び女の声が耳元に響い

た。先程よりも声が鋭くなったように感じられる。

(外に居るのか?)

リンは一瞬動きを止めたが、結局そのまま座り込む。

「やっぱり劉毅——七星は強いかい?」

『無駄口叩いてないで、此処を離れるんだね。劉毅がお前を放ってはおかない』

「別に相手してやっても良いんだけどな」

『……今夜生き延びる事が出来たなら、明朝、方崖へ来るがいい』

「今夜? 何があるんだ?」

『九宝寨がお前を探す筈さ。殺す為にねえ』

「そいつらはもう少しマシかい? 俺は別に隠れるつもりはねえよ。何だったらこのまま此処に居たって良い」

『そうかい。まあ好きにすれば良いさ。しかし二度と方崖には近付けない』

「何で」

『九宝寨の敵は北辰教の敵。まあ、この街でだけの話だけどねえ』

「だったら一緒にやねえか。今夜の内に俺のした事が北辰にも知れるだろ? もう誰か報告に行ってるんじゃないのか。此処の奴らも幾らか逃げてったしな」

『もう一度方崖に上がりたいなら、黙って聞くんだよ。入れる様に手配しておいてやるから』

「へえ、そいつはえらく親切だな。そしてあんたはただの北辰教徒じゃあない訳だ」

『覚悟を決めて来るんだね。お前の望み通り、七星がお前を試す事になるからねえ』

「本当か? 誰だ? 劉毅でも良いぜ? あ、もしかして、あんたかい?」

『何故そうなる』

「七星には女が居るよなあ? 武林に名高い北辰七星だ。こんな妖術が使えてもおかしくない」

『馬鹿馬鹿しい。妖術などあるものか』

「じゃあ今こうして話してるのはどういうからくりなんだ？」

『あたしはずっと前から隠れてもいない。お前の良く見える場所でお前に話し掛けている。ハ……お前のような鈍い奴が相手なら誰だって妖魔にも神仙にもなれる』

視界の片隅に不意に赤い色が現れた——ような気がした。リンの視線がその赤に吸い寄せられる。今まで全く気に留める事の無かった場所、そこに、一人の女が立っているのをリンは初めて知った。

この屋敷の庭は広く建物から正門とそれに繋がった塀までの距離は近くはない。だが全てが霞んで見えるほど遠い筈もない。ただ、門に集まっている人の群れに自然に目が行ってしまいその周辺が見えていなかったのだろうか。リンは門の脇に伸びている塀の上など見ようとしていなかった。気付いたのはその赤が動いたから——赤い裳を着けた女がそこで立ち上がり、動きがあったからである。

（あれが、そうなのか？ でも何で囁くような声がこの距離で届く？）

『いいかい、方崖に来るまで劉毅に見つかるんじゃないよ』

女は塀の上でこちらに背を向ける。

「待ってくれ！ あんたの名を教えてくれ！ あんた！ 七星だろ！」

リンは勢い良く立ち上がったが、女——林玉賦はそのまま塀の向こうへと姿を消した。

第十二章 二十六

夜が更けた。だが、街は一向に静まる気配を見せない。通りをひっきりなしに行き交う松明の炎を、リンは街に程近い山の中腹から見下ろしていた。

（どっから湧いて来てんだ？ さっさと帰って寝ろよ……）

女の言った通り、九宝寨の者達が何処からとも無く一斉に大挙し、リンを探し続けていた。あの屋敷に居た者の他に、恐らく本拠からも人を遣しているのだろう。通りを照らす松明で空までもぼんやりと赤く染まっている様に見えた。

ここまで大事になろうとは思ひもしなかった。単に考えが足りなかったただけなのだが、たかがあれだけの事でこれほどむきになるあの連中が疎ましい。そして、これで本当に夜が明けたら方崖に上されるのかどうも信じ難い。

（九宝寨だけだろうか？ まるでこの街が奴らに乗っ取られたみたいじゃないか。北辰教の奴らがこんな事を許すつてのか？ 一体、どういう関係なんだ？）

九宝寨が北辰教の一部と化している事は周知の事実であるが、全くのよそ者であるリンの目には眼下の光景が奇妙に映る。その気になればこの街を如何様にも出来るといわんばかりの大人数が街中に散らばっているのだ。無論、住人も北辰教の人間も九宝寨屋敷で起こった事は知っており、リンを見つけ出す為に動いている事は承知しているだろうが、未だ『九宝寨』を名乗り続けるあの集団を見てこの街の北辰教徒達は不安を抱く事が無いのだろうか。その頭領は北辰七星として北辰教教主のすぐ近くにいます。

（劉毅は既に、北辰の急所に手を掛けていても同然だな。……まさか、それもあの香主きゆうしゅの計画の内とか言うんじゃないかな？ もしそうなら、あー何だかやばい事になっちまいそうだ）

リンは暫く暗い茂みの中で足元を確認しつつ辺りを歩き回ったが、

街へ降りる事も出来ず、このまま夜が明けるのを待つしか無かった。夏が近いとはいえどもこの景北港では薄着で居ると朝晩はかなり冷える。しかも茂みに埋もれるようにして横たわっているのは満足に睡眠を取る事など出来よう筈もない。何度も目覚めては空を見上げ黒い夜空に顔を顰めていたが、ようやくその色に明るさが増し始めた頃、リンは体を起こし街を見下ろしてその様子を窺った。

（静かになってるな。単に疲れて引き上げたか、それともあの女が手を回してくれたのか、さて……？）

まだ陽が上るには早過ぎたが、リンは方崖の入り口に向かうべく歩き出し、用心の為に街には降りずに山の斜面の道なき道を北へと進んで行く。するとやがて方崖へ上がる為の小道の入り口、張り番が詰めている筈の小さな東屋が見下ろせる場所まで辿り着いた。初めて行った時、すぐ追い返されてしまった場所である。

（手配するって事は当然あそここの奴にも話を通す筈だよなあ？もう大丈夫なのか？ まだだったら不味いか……。あ、でもあそこで捕まれば連れてかれるのは多分、上だな。まさか上の連中に何も言わずにいきなり九宝寨に引渡したりしないよな）

そんな事を考えながら、じつと下に目を凝らす。見張りは数人で、特に警戒している様子は無い。暇そうに辺りをぶらつくだけである。（どうする？ 行くか？ まだ早すぎるか……。せめて陽が昇るまで……）

リンは判断がつかずそのまま身を低くして様子を窺い続ける。そして結局、朝日が視界に差し込んで来るまで動かなかった。

（お？ 誰か来る）

方崖に掛かる朝もやの中を下の東屋に向かって降りて来る人影が見える。この時分に上から来るのだから方崖の人間、北辰教の幹部か何かの筈である。リンはじつとそちらに目を凝らした。

濃い緑の衣服を身に着けた者が一人、静かに降りて来る。それに合わせて下でぶらついていた張り番の男達が慌てた様に東屋の前に

整列するのが見えた。リンは観察を続けるだけだ。

（んー……どうしたもんか？　もっとちゃんと段取り決めとかねえときっかけが掴めねえよ）

東屋まで降りて来たのはその身形と雰囲気からして方崖の幹部であることはほぼ間違い無い。張り番の男達と言葉を交わした後、先程までの張り番同様、辺りをまるで散策するかの様に歩き回り始めた。

（おいおい何だよ。用が済んだらさっさと戻れよ）

緑の衫を纏った幹部らしき者は後ろ手を組み、時折立ち止まっては辺りを眺めたりしている。リンは方崖とは反対側の山の斜面に身を潜めているが、その者の顔が見えそうになる度に首を縮めて隠れなければならない、顔を確認する事が出来ない。

（ま、見たって知らねえけどよ。あの女の名前さえ聞いてりゃあなあ。呼ばれたって事で出て行けるんだが……）

『……』

（ん？）

何かが聞こえた気がする。リンは辺りの気配を窺いながら耳をそばだてる。だが、朝を迎えた山の中はあらゆる生き物達が自らの存在を競って主張するかの様に声を上げており、何が普段の山の音で何がそうでないのか、山に生きる^{てまびと}仙人の類でもない限り判別がつかない。

リンは再び下へ視線を戻す。先程まで張り番の男達も何やら会話をしていたがその声は全く聞こえず、声を張り上げれば充分に聞こえようが、見た感じではそんな雰囲気は無く平穩そのものだ。

（あっ、もしかしてあの女が来たのか？　でも何処だ？）

リンは首を目一杯動かしてその姿を探すが人影っぽいものすら見つからない。そこで今度はじっとして耳に神経を集中させる。何処からかまた昨日の様に話し掛けて来ているのかも知れないのだ。昨日、屋敷の中と表の庭では声が変わったのを思い出す。

（少し遠くて、真っ直ぐ俺に声が届けられないのかも知れない。動

くより此処でじっとしてた方が良いな。入り口は真下だ……)

だがその後、一向に人の声らしきものは聞こえて来ない。辺りの気配にも変化は感じられず、気のせいだったのかと思いつながらまた下へ視線を移したその時、突然昨日と同様の圧力がリンの耳を覆った。

『劉毅に見つかる前に総監に会わないと、死ぬよ』

「うわっ！」

リンは思わず耳を押さえて立ち上がった。と同時に目に飛び込んできた光景に更に驚く。下に居る緑衫の男が不意に駆け出し、こちらへ向かって来るではないか。真っ直ぐリンの居る山の斜面を飛ぶ様に迫ってくる。明らかに常人とは違うその挙動。北辰教方崖の、武者者。

リンは逃げ場を求めて慌てて周りを見回す。そんな僅かの間にも迫り来る緑の影が徐々に大きくなってくる。

「くそっ！」

リンは必死の形相で山の更に上を目指して駆け出した。だがすぐに絶壁の様な岩肌に行く手を阻まれる。迷っている暇は無い。すぐさまその岩肌に沿って駆けながら何処か身を隠す、或いは緑衫の男を攪乱出来る様な進路は無いものかと視線を辺りに巡らせた。

「ハッ！」

リンは跳躍した。恐らく何も考える余裕は無かったのだろう。前方斜め上の岩肌から一本の木が横に伸びていた。そしてその先は岩肌が途切れ、緑の斜面が見えている。木が視界に入ったとほぼ同時にリンはその木を使って更に上の斜面に登るべく飛び上がったのだが、その木はリンの両手が掛かった瞬間音も立てずに折れ曲がってしまいリンを振り落としてしまった。そしてリンの背中が岩の上に叩きつけられるその直前、今度は別な力がリンの服の襟を後方に引っ張り、そのままリンは地面に転がった。

余りにもあつと言う間の出来事で何がどうなったのか、リンは混乱した。岩場の上を転がって体中のあちこちが痛んだが、折れた木

から直接叩きつけられるのは免れたのでどうにか立ち上がる事は出来た。

だが、それ以上は動けない。目の前に、緑衫の裾がひらめいている。

「フフ、お前、中々人を笑わせる才能があるんだねえ」

リンが眼を見開いたその直前に立っていたのは、男物の緑衫で身を包み悠然と笑う、あの女だった。

第十二章 二十七

リンは大人しく方崖への小道を歩いていった。まだ体の節々に痛みが残っていたが、先に行く林玉賦の足取りは早く、時折顔を顰めながらもついていく。

「なああんた、親切だな」

「何が？」

「何処の誰とも知らない俺を連れて行ってくれるんだから、あんたは優しいよ」

「じゃあ感謝しな」

「してるさ。あんたの名は何だい？　俺はリン」

「……イン？」

「リンだよリン。何で此処の奴らは皆、一度は聞き返すんだかなあ」

「何処の出身だい？　あまり聞き慣れない音だねえ」

「んー……生まれた処なんて知らねえよ。育ったのは……色々だ。

南方の街は大概行った事あるぜ。で、あんたは？」

「フフ、お前と同じ、リンさ」

「リン……七星でリンと言えば、林玉賦！」

「劉毅は知らなくて、あたしは知ってるのかい？」

本人を前に、しかも北辰七星林玉賦の名を声高に呼び捨てにするリンだったが、当の林玉賦の機嫌は悪くは無かった様で、ごく普通に会話が続いた。

「いや、劉毅って名前はよく知ってたさ。九宝寨の事は殆ど知らないってだけだ。あんたの事は……七星に女が居るって聞いて興味があつたんでね。どんな奴だろうってね」

「……」

林玉賦は何も答えないままで暫く沈黙する。まだ夜が明けたばかりの小道には他に誰も居らず、ただ鳥の声が響き渡るだけだった。リンの前に行く林玉賦は足音一つ立てていない。リンはその後姿を

じつくりと観察する。

昨日は遠目でしか見ておらずどんな姿かはつきりとは分からなかったが、すぐに女と分かる衣装を纏っていた筈だ。だが今は随分と落ち着いた雰囲気に着物でしかも明らかに男装であり、ただ歩くだけだがその動きのどれもが力強く感じられる。リンは久しぶりにいかにも武芸者らしき者に会った気がした。

「いいねえ。惚れそうだ」

林玉賦に聞こえるようにそう言って反応を窺ってみる。だが林玉賦は振り返りもしない。ただ一言、

「殺すよ」

何の抑揚も無い、平坦な声が返ってきた。

「あんたなら出来るんだろうな。やっぱりあんたみたいに腕のある女は皆、自分より強い男じゃないと駄目かい？」

「腕はともかく、お前のようによく喋る餓鬼が一番嫌いだね」

「そりゃ……どうも」

林玉賦が更に歩く速度を上げる。しかしその上体を見れば無駄に振れる事無くまるで物の怪が宙に浮くかの如く、つーっと前へ進んで行く。リンは引き続きその姿をじっと見つめていた。

「フッ。何とか無事に来れた様だな」

不意に前方から声が聞こえ、リンが林玉賦の背中越しに首を伸ばして先を見ると、一人の男が小道を登り切った場所に立ち、微笑を浮かべながらこちらを見下ろしていた。林玉賦が何も答えずに進んでいくのでリンが小声で林玉賦の背中に声を掛ける。

「お仲間かい？」

「ハ、そうじゃないのはお前だけさ」

「だろうな」

二人は男の傍まで辿り着き、そこで林玉賦が男に話し掛けた。

「劉は？」

「屋敷だろう。まさか、この者が今此処に居ると思うまい」

「あんたは誰だい？」

リンが不躰に男に名を訊く。だが男はまた微笑を浮かべてリンを見る。

「私は鐘しやうという。お前は？」

「俺は……『リン』だ」

「そうか」

リンはまた聞き返されるだろうと思っていたのだが、この鐘しやうぶんい——鐘文維はすんなりと理解出来たらしい。あえていつもと同様の発音で言ってみたが、これには少しばかり嬉しくなった。

「じゃあ、もしかしてあんたも七星の？」

「一応、そういう事になっている」

「なあんだよ。あの北辰七星だぜ？　もっと勿体ぶって出てきてくれないと」

「もうこの江湖では名が消えかかっているものでな。昨今はこちらから進み出て行かなければ本当に消えて無くなる」

鐘文維はそう言って笑っている。その物言いは少しばかり大袈裟で、恐らく謙遜だろう。少なくとも武林では北辰教といえばまず七星の名が出てくる。だからこそリンの様な若い世代でも知らない者は殆ど居ないのだ。

「がっかりしたかい？　武芸の腕を喧伝したいならこんな処じゃなくて中原に出るんだね」

林玉賦が言いながら歩き出すので、リンと鐘文維も後に続いた。

「しかしまだ早過ぎるぞ？　どうするつもりだ？」

鐘文維が林玉賦に訊ねる。すると林玉賦は歩きながら両手を少しばかり持ち上げて空を仰いだようだ。

「さあて。どうしてやろうかねえ」

「お前の期待するほど面白い事にはならんかも知れんな」

鐘文維の言葉に林玉賦は振り返る。

「何かあったのかい？　婉漣は？」

「堯長老ぎやうらうの処だ」

「昔からじゃないか。よく知ってる」

「それがな、昨晚珍しく堯長老の方から総監を訪ねて来られたのだ」
「何だって？　それは……『周婉漣の取り扱いについて』かい？」

「かも知れぬ」

「……フツ。それはそれで面白そうじゃないか。で？　総監はどんな様子だった？」

「侯こうどのの話では、どうやらまだあの総監も堯長老相手には下手に出るしかないらしいな。話の内容までは聞き取れなかったそうだ」

「へえ……。さすがは拝宮長老様だねえ。というか、本来なら九長老は皆それくらいでなくちゃいけないよ。そうだろう？」

「はて、どうだろうな」

鐘文維が首を傾げる仕草でそう答えると林玉賦は、

「ま、確かに、あたしらの知ったことじゃないねえ。本来なら、ねえ」

そう言ってまた前に向き直る。

ずっと黙って二人の会話を聞いていたリンは恐らく何の話か理解出来なかっただろうが、一人考え込む様な顔つきで大人しく歩き続けた。

第十二章 二十八

方崖、紫微宮しびきゅうのある一室に通されたリンに出来るのはとにかく待つ事だけだった。林玉賦と鐘文維はどこかに行ってしまう、リン一人だけが残される。ただ、中は一人だがそのまま放置される筈もなく、部屋の入り口には数人の見張りらしき者が立っていた。

恐らく命じたのはあの林玉賦だろう。九宝寨屋敷で暴れ、居合わせた者を一人残らず殴り倒した事を知った上で人を用意したという事は、今居る見張りはかなり腕が立つという事になる、とリンは考えた。どの程度の者なのかという事にとっても興味が湧いたが、此処へ来てちよっかいを出してまた騒動を起こす訳にもいかず、ひたすら暇に耐え続けた。

この方崖が一日どの様に動くのかリンには分からないが、とにかく辺りが静まり返っているのはまだこの方崖は目覚めていないという事なのだろう。

（もう陽は昇ったってのにいつまで寝てやがる。惰眠を貪りやがって。働けよ）

前に会った張新のあの偉そうな態度と表情を思い出し、リンは口を曲げてしかめっ面をする。誰も見ていないのだから何の遠慮も要らなかった。しかし他にすることもないリンは徐々に眠気を感じ始め、そのままそっと眼を閉じる。昨晚はまともに寝ていない。程無くリンは座り心地の宜しくない硬い椅子の上で寝息をたて始めた。

昨日の九宝寨屋敷での喧嘩はリンにとって拍子抜けする程の生ぬるいものだったが、全く疲れていない訳では無い。それに加えて睡眠不足でずっと体のだるさを感じる。しかし此処での仮眠も全てを回復させてくれる程は取ることが出来なかった。幾らかは眠れた筈だが不意に部屋の外から聞こえた人の声がリンを起こした。

両腕を伸ばつつ大きな欠伸をしながら見遣った部屋の扉がいきな

り大きな音を立て、弾け飛ぶのではないかと思われる程、激しく開く。

「ふあっ！」

リンは間の抜けたおかしな声を洩らしながら慌てて椅子から立ち上がり身構える。入り口には仁王立ちでリンを睨みつける男――。リンは大層驚いた様子で眼を大きく見開いた。

「あっ！ えー……、劉……さん？」

「昨日は失礼した。所用で出掛けていたのな。わざわざうちへ寄ってもらったというのに申し訳ない」

険しいままの表情を全く変えず、そう言って冷やかな眼差しを向けてくるその男は、九宝寨寨主劉毅である。

「あー！ くそっ！ 騙されたあ！ あの女あ……」

リンは大声でそんな事を言いながら跳ね上がった胸の鼓動を抑えるつもりなのか知らないが部屋の中を歩き回り始める。科白も変にわざとらしい。そんなリンを劉毅は黙って眼で追っている。

「あの林を簡単に信用するとは、愚かとしか言いようが無いな」

劉毅が前へ一步踏み出し部屋の中へと進もうとすると同時に、リンは慌てて腰を折って両手を劉毅に向かって突き出した。だがそれは攻撃の一手などではない。

「ちよっと待ってくれ！ 昨日あんたの屋敷に行ったのは、その、勘違い、勘違いだったんだよ！」

「ほう？ 何をどう違えたと言うんだ？ 違う屋敷を襲撃するつもりだったとでも言うのか？」

「襲撃って……大袈裟な」

「うちには昨日五十一名、俺の部下が居た。この辺りでそれだけの人数が一所に集まっている場所はそう多くは無いな。違いに気付かずうちの者全てを相手にしたお前は、うちと似た様な場所へ行く事が目的だったという事になるな。何れにせよ、この街の何処かを襲うという事は、北辰教に仇名す事に他ならない」

劉毅は意外にも冷静に喋っているが、それがまたリンには不気味

に感じられる。九宝寨屋敷で見たその配下のあまりの弱さに劉毅の腕をも疑いかかっていたリンだったが、実際にその姿を間近で見るとその気配の尋常ではない様を感じ取れる。その鋭い眼光に捉えられると何処までも強気であった筈のリンもさすがに焦りと不安を覚えずにはいられなくなっていた。

「襲うって俺一人なんだぜ？ 幾ら、何でも――」
「お前……」

急に劉毅の発する声が僅かだが変化した。

「え？」

「お前は……何処かで会ったな？」
「は？」

「俺を一目見て劉だと分かったようだが、俺を知っていた訳か」

「いや、あんたは有名じゃないか。名前くらいは俺も――」

「しらばくれるな。顔を見て分かったのだろう？ お前は俺を見た事が以前にもあった筈だ。そして俺もお前を……何処かで……」

劉毅は眉間に皺を寄せリンの顔を一層凝視する。会った記憶の無いリンは困惑するばかりである。

「いや本当に無いって」

暫くの沈黙。そしてその後、

「――なるほど。フ、思い出した。はっきりとな」

（何をだよ。そっちこそ思い切り勘違いしてんじゃねーか。あんたなんか知らねえよ）

劉毅は目の前の椅子を引くとリンの方に向け、そこに腰を下ろす。リンはというと部屋の隅で壁に背中をつけたままじっとしていた。

「九宝寨を片付けて来いとも言われたか？」

「誰にだよ……」

「フン、で？ 次は張新に会うのか。何を言うつもりだ？」

「もう何日も前に会った。今日はあの林って女に連れて来られただけだ」

「ほう、……張新に会い、そしてうちを襲ったと言うのか」

劉毅の顔が益々険しくなっていく。全身に殺気をみなぎらせ、今にも椅子から飛び上がらんばかりである。

「話を聞けよ！ 何勝手に妄想して興奮してんだよおっさん！」

もはやこれ以上無いという程の火に油を注ぐ煽り文句である。リンは劉毅が襲い掛かってくるのを警戒して一層体を硬くしたが、劉毅は動かない。すると程無くして部屋の入り口に林玉賦が姿を現した。

「邪魔したかい？」

林玉賦は劉毅の背に向かって話し掛けている。

「続きが見たい気もするけど、総監がそいつを呼んでてねえ」

「お前は、こいつを知ってるのか？」

劉毅はリンを見たまま、後ろの林玉賦に言う。

「いや、知らないよ」

「おいあんた嵌めやがったな！ このおっさん呼んだのあんただろう！ なんか怪しいとは思ってたんだよ、……本当はな！」

リンが林玉賦に向かって捲くし立てるが、林玉賦は笑って、

「フフ、お前が見つかった劉と遣り合うのも面白そうだけどねえ、もっと面白い役があるんだよ。まあ無事に舞台に上げれるか怪しくなってきたけどね」

「林、何の話だ？」

ここで劉毅はリンから視線を外すと振り返って林玉賦を見る。林玉賦は腕を組み近くの壁に背をもたせ掛けた。

「こいつが例の、北辰七星になりたいって奴さ」

「何？」

林玉賦は口を曲げて笑いを堪える様な顔をしている。劉毅は驚いた様だがどこか困惑した表情で、改めてリンを見遣った。

「お前が……七星、だと？」

第十二章 二十九

「ああそうだ。何か文句があるか？ 俺を使うかどうか決めるのはあんたじゃないよな」

それだけ言うとしんは劉毅を無視するように部屋を出ようとして林玉賦の傍まで行き、

「もう良いんだろ？ 総監とやらは。本当にちゃんと会えるんだろうな？」

「ああ。何故か——今日はすんなり会う気になったみたいだよ。こんな朝っぱらからってのに、ねえ」

林玉賦はニヤリと笑って見せるとすぐに表の見張りにしんを張新の処へ連れて行くよう命じる。それから劉毅の様子を窺うが、劉毅は何故か黙ったまま動かず、しんの方を見ようとしなない。

しんはそのまま部屋を出たのだが、数歩行ったところで後ろを振り返りまた戻ってきて劉毅に歩み寄った。

「どうせまだ勘違いしてるだろうから言っとく。俺はあんたの事なんか香主から一言も聞いた事——」

「後で聞かせて貰う。さっさと行け」

劉毅はしんの言葉を遮って手で追い払うような仕草を見せる。

「何か仕事くれて言ったら、急に北辰の七星は今一人足りないとかなんとか言い出したんだよ、あの人が。それはつまりその残りの一人に俺が——」

「黙れ！」

劉毅が声を荒げ、しんの首を鷲掴みにする。余りの速さに全く対応出来なかったしんは呻き声すら上げられずに劉毅の太い腕を掴んでもがく事しか出来ない。

「ほらほら、『後で』って言ってんだから、話は後にしな」

林玉賦が言うがその顔は実に楽しそうだ。腕を組んだまま薄笑いを浮かべて二人を眺めている。

不意に劉毅がリンの首を掴んだその腕を勢い良く伸ばすとリンはそのまま首に掌打を喰らって後方に転がり、首を押さえて喘いだ。

「ほら、立てるか？ さっさと行きな」

林玉賦が言うと言張りの者がリンに手を伸ばすがリンはそれを払い除け、ゆっくり立ち上がると劉毅をひと睨みしてから張新の許へと向かった。

「あんたの姿が見えたからもう終わったと思ったんだけどねえ。知ってる奴だったのかい？」

リンの姿が見えなくなり、林玉賦が壁にもたれていた体を起こして劉毅の前に立つと、劉毅は苛立ちを隠せないその顔を林玉賦から逸らし、黙ったままにいる。

「それで？ 『香主』って誰なのさ」

「香主？ 知らん。何処のだ」

「でもあんた――、分かったんだろ？ あいつを遣した奴が居るって事をさ」

よりによってこいつに聞かれるとは、と劉毅は閉口する。何も無い床のただ一点だけを見つめながら何をどう言おうか、または言わずにおくかを思案していた。

（秘密にする程の事は無い……筈だ、今は。知っているだけで特に関係は無いと言えばそれまでの事――。だがあれがあ的小僧を送り込んできたという事は必ずこの先更に北辰内部に食い込もうと企んでいるに違いない。張新では心許無いと判断したか？ 面倒な事になるのは目に見えている。それにしてもあんな小僧一人に何をさせようというのだ？ どうやら俺達と並ぶ程の腕は無さそうだが……。七星に入れさせて――いや、待て。本当にあの女の考えか？ もしや……。殷汪と接触したのではあるまいな？）

劉毅は顔を上げ林玉賦を見る。だが開きかけた口を再び閉ざしてしまう。

（こいつが知ったら……何をする？ わからん。あっちも謎だが、

こつちも不可解さにかけては全く引けをとらん。しかも殷汪の影がちらつきでもしたなら更に始末が悪い)

「何だい？ 随分考え込んでるじゃないか。あんたは……退屈する事が無さそうで羨ましいねえ」

林玉賦は呟く様に言う。と部屋の外に眼を向ける。その声色がどこか物悲しげな感じがしたのは気のせいでは無い。あまり見る事の無い林玉賦の横顔だった。

ともあれ話が逸れるのは劉毅には大歓迎だ。改めて椅子に座り直した劉毅は落ち着いた低い声で林玉賦に話し掛けた。

「そろそろ、此処に居るのが辛くなってるんじゃないのか？ 今の七星は殆ど存在価値が無い。教主の為に体を張る事など、この先も無いかも知れんしな」

「フツ。もし仮に総監があの小僧を七星に入れたら、めでたく七人揃ったとか言って何かやらされるかも知れないね。どうせそれもなくならない事だろうけれどねえ」

「それは無いだろう。七星をどうするか決められるのは教主だけだ。恐らく教主は今更もう一人加えるなど考えもすまい。万が一張新があれを入れるとか言い出したとしてもまだ今なら九長老で止められる。今は、な」

「鐘が言ってたけど、堯長老が総監に何か言いに行ったらしいねえ。聞いているかい？」

「いや？ どういうことだ？」

劉毅は即座に聞き返した。方崖の事なら大抵の事はその日の内に耳に入れる事の出来る劉毅だったがこれは初耳だ。ごく最近の事であるのは間違いない筈である。

「恐らく婉漣の事さ。総監は足枷を嵌めたがってる。あの小僧を使うのも手だよな。最初はすぐ追い返したのに婉漣が戻ったもんだから腕試しをさせて、婉漣が負けるような事があれば七星としての今の地位に難癖つける事も出来る。まああれが婉漣に勝つなんてあり得ないけど。もし万が一にもそうなれば総監には儲けものだよ。」

逆ならあの小僧は今度こそこの街からつまみ出せば良い。とにかく使えそうなものは皆使って総監はどうにかして婉漣の立場を悪くさせたいだろうさ。だから堯長老が釘を刺した――。堯長老はああ見えて今でもこの方崖の事をちゃんと把握してるんだねえ。あたしは婉漣が仕合うのを久しぶりに見たかったよ。だからわざわざ此処に案内してやったのさ」

「無くはないな。先代と違って教主は中々信心深い様だ。毎日必ず拝宮に参るらしいからな。堯長老と教主の関係は良好、つまり長老衆筆頭の地位は依然揺るいではおらん。そして周を我が子の様に思っている。ハ、お前も中々想像を楽しんでいる様だな。最初はお前があの小僧を始末したがつっていると聞いていたが？」

「もうそんな気は失せたよ。志願するのは好きにすりゃあ良い。でもあんな腕じゃあねえ」

「周にはいい迷惑だな。仕合うも何も、恐らく見るものは無いぞ。周とあれではな。お前と違って瀕死にまでは追い込まんとは思うが」ハッ、と林玉賦は短い笑い声を上げた。

「さて、ちよつと様子を窺ってくる。あんたは話したくない事だらけの様だけど、あの小僧は言いたくてたまらないみたいだしねえ。あっちから聞くら」

林玉賦はそう言って明らかに劉毅の反応を窺っている。劉毅は立ち上がり、

「まあ、良しさ。お前も知れば、きっと楽しめるだろう」

「へえ、何を？」

「この景北港はくそつまらんが、江湖はまだまだ愉快で、不可解な事が山ほどあるという事だ。特に武林はな。終わったと思っていたのが実は始まりだった、とかな」

「なるほど。その山ほどある話を聞かせるのは億劫だ、って訳だね？」

「……そういう事にしといてくれ。それから言っておくが俺が何かやっている訳じゃない。やましい事は皆無だ」

それを聞いて林玉賦がニヤリと笑う。

「あんたがリンを始末する動機は昨日ので充分だねえ。口が封じられないか心配だよ」

「……七星云々はともかく、張新が小僧を使う事にしたなら手は出せん」

「九宝寨の寨主様は意外と気を使うんだねえ」

「全く使えない手下ばかり抱えているのだからな。早々に代わりを探さねば。喬高の……代わりを」

「手を貸した方が良かったかい？」

劉毅は暫く無言で林玉賦を見つめてから、

「お前に借りを作るのも出来る事なら避けたいところだ」

そう言い残して先に部屋を出て行った。

第十二章 三十

紫微宮の奥へと一人進んだ林玉賦はリンが張新と会った後に戻ってくるであろう通路の脇で待っている事にした。付近を行き交う下女達は普段は見る事の無いこの光景を訝しんだがそれを口にして問う事は無い。こんな朝早くに林玉賦がこの紫微宮に居る事自体、珍しい事だった。

先にある張新の部屋は以前、殷汪の居室であつた場所である。中庭をうねる様に進む回廊の先にひっそりとある様な扉。その更に奥で、殷汪は生活をしていた。実際に居たのは最初の数年で、あとはずっと身代わりの男が居た訳だが――。林玉賦は扉の近くまでは行ったことがあつたが、その先を見た事は無かつた。そして今も、遙か手前の中庭でぼんやりと佇んでいる。

（昔はよくこの辺りで陶靜様とうせいが遊んでたね……殷汪様と……）

中庭は職人の手で見事に整えられていたが、人の姿の無い今となつてはそれがかえって此処だけ異質な空間に思える。よく笑い声を響かせていた陶靜も今ではこの場所に近付く事は無く、兄である教主陶光の傍を離れないと聞いている。

（確かに、あの張新に近付きたがる娘なんてこの江湖に居るものか）
林玉賦は庭の先をちらと見遣つて鼻を鳴らした。

淡い紫が見える。小さな萩の花。分かるのはそれだけだ。萩には数種あるが林玉賦はその違いなど知らない。それにしても、地味だ。小さな花びらが緑の中に僅か点在しているだけで、とても物足りない。初夏が訪れ萩は花の季節を迎えたばかりでこれからというところなのだが、林玉賦の視線は既に外れ、頭の中から紫は消え去つた。

張新の部屋の扉が開くまで思つたよりも時間が掛かり、回廊の先に人の気配を感じたのは林玉賦がもう戻ろうかと思ひ始めた矢先であつた。

顔を上げた林玉賦は目を見開いて驚いた顔をする。

「おやまあ」

現れたのは周婉漣である。その白い装束の後ろにリンの姿も見える。

（えらく話が早く進むじゃないか）

周婉漣もすぐに林玉賦に気付く。静かに回廊を渡って林玉賦の傍まで来て立ち止まった。

「いつ来たんだい？ 呼ばれて来たには早すぎるけど？」

「陽が昇る前には来ているわ」

周婉漣はいつもより少しばかり小さな声で言った。周りの静寂をより強調する様な、囁きに似た声だった。

「堯長老様をお願いして拝宮でのお勤めを私もさせて頂いているから」

「へえ、お祈りしながら時を待つ、って？」

「続けていれば、そうなるでしょうね」

「で、どういう話だったんだい？」

林玉賦はそう言いながら、周婉漣の後ろに居るリンを見る。黙って林玉賦と周婉漣の遣り取りを聞いていたリンは待っていたとばかりに身を乗り出した。

「なんかさ、前とはえらい違いだよ。やけに上機嫌なんだよ。総監様はさ」

「そりゃそうだろうよ。劉の処に一人で突っ込む奴なんてそうそう居ないからねえ。余程面白い話に違いないさ」

周婉漣は二人が普通に会話しているのを聞いてほんの僅か首を傾げた。

「あなた達、知り合い？」

「いいや、知らないねえ。こんな怪しげな小僧はねえ」

「でも、今日からは晴れてお仲間って訳だ。宜しくな」

リンはにやりと笑って七星二人を交互に見遣った。

「お望みの七星にはなれたのかい？」

林玉賦はそう訊ねてみたが無論、冗談である。劉毅も言っていた様にそれは張新如きが決められる事ではなく、本当に七星に入れると言ったのなら大問題で、林玉賦自身も認める気は毛頭無い。

「無理だってさ。北辰の為に働いていつか教主に認められればなれるかも知れないとか何とか……。いつの事だよ。今度は真武観にでも喧嘩売るかなあ」

リンは肩を竦めて言う。いつもの軽い調子で、本気なのか冗談なのかは分からない。

「ハハ！ そいつはいいね。行く時は声を掛けておくれ。見物に行くからねえ。道案内くらいはしてやるよ」

「いや、場所は知ってる」

周婉漣が改まってリンに向かって立つ。

「大人しくする気が無いのなら、今の内に言っておきなさい。聞き分けの無い子供の面倒を見る気はないわ。總監の命令でもね。使えない者は要らない」

「いや、分かってるよ。でも——」

「行きなさい」

周婉漣の口調が珍しく強まった。

「何処へ？」

「宿に荷があると言っていたでしょう。取りに行つて、また戻りなさい」

「あー、九宝寨の連中が多分宿行ってるだろうからも無いかも——」

「行きなさい」

「いや大した物無いし——」

「もう反抗するのね」

「まだ危ねえよ。奴らに見つかったら——」

「そんな事は知らないわ。そもそも、彼らにやられてしまう様な者は私には必要無い」

周婉漣の言葉を聞いてリンはまじまじとその顔を見返した。

「……逆にやっちゃまうかも？」

周婉漣は少し間を置いて、

「少しだけなら総監も面白がるでしょうね。さっさと片付けて戻れば問題無いわ」

「おいおい良いのかよ」

「私の命令を忘れたら、あなたを捨てるから、覚悟しなさい。私が、切って、捨てる」

周婉漣の表情は穏やかである。静かに、そう言った。

「あんたら七星って……」

リンは周婉漣と林玉賦に言う。

「やっぱり普通じゃねえよな。変わってる」

「早く行きなさい」

リンの言葉を見無視する様に周婉漣が再び命じる。リンは林玉賦に向かつて肩を竦める仕草を見せてから、分かった、と小さく呟く様に言う。と一人この場を離れて行った。

「あいつの面倒を見るのかい？ 総監の命令で？」

林玉賦が訊くと周婉漣は数歩進んで庭に向かつて立つ。だがいつもの様に俯き気味のその視界に庭の花が映っているのかどうか定かではない。

「そうね」

「あんな得体の知れない奴をそんな簡単に引き受けちゃうのかい？ あれが何か問題起こせばあんたが責められる事になる——って、あたしが言うまでもないだろうけど」

「どうでも良い事だわ。そんな事は——。拒んでわざわざ総監の機嫌を損ねる真似をする必要も無い」

「ま、そうだろうね。あいつがただの小僧だったならそれでいいさ」「違うの？」

周婉漣は林玉賦の顔を覗き込む様に見た。少しは不安を覚えたのだろうか、珍しく眉根を寄せて怪訝そうな面持ちだった。

第十二章 三十一

「誰かの差し金のようなだね」

林玉賦はあっさりと言う。それを聞いた周婉漣の表情は一層険しくなった。

「何か知ってるの？」

「あたしより劉の方が良く知ってるよ。あたしはまだ聞いてない。向こうも言う気は無さそうだけど。でもあいつ——リンの口から聞けるんじゃないかねえ？ 何が何でも隠さなきゃいけない事じゃないみたいだからね。早々に聞き出しておいた方が良いよ。で、あたしにも教えておくれ」

口調はいつも通りだったが庭の方をぼんやりと見ている林玉賦を、周婉漣はじつと観察するように見つめた。

「いつもならあなたが率先して動くのに、どうしたの？ 本当は何か知っているのかしら？」

「知らないよ。何も」

林玉賦の視線が庭から離れないので、周婉漣も何気なく同じ方向を向いて眺めてみる。緑が鮮やかなのは分かるが、花の目立った明るさは見当たらない地味な庭だ。昔からそうだった。林玉賦には到底興味も沸かない庭の筈だった。

「劉毅があの子を捕まえるかしら？」

「総監があんたに預けた事はすぐ知るだろうから、まあ手は出さないだろうよ。それにしても、久々に何か起こりそうだって期待してたのに何も無く終わっちゃったねえ……」

本当に何も知らないようだと思つた。リンが此処かの回し者だと知った上での林玉賦のこの態度、という事は、大した事ではないと彼女は踏んでいる——そう考えて間違いないだろう。林玉賦は少々変わった人物ではあるが、周婉漣は林玉賦に裏があると考えた事は今まで一度も無い。

「……向こうから、飛び込んでくるのを待つだけじゃ……ねえ」
「え？」

林玉賦の弦きがうまく聞き取れなかった。

「あんな小僧一人じゃ来ても大した事は起こらない。でもあれ以上の何かが今後また此処にやって来るとも思えない」

「何の事？」

「殷汪様は……本当にこんなつまらない方崖を、北辰を望んでたのかねえ……」

不意に出た殷汪の名に周婉漣は少しばかり驚いたが、林玉賦の白い横顔を見る内に微笑を浮かべた。

「殷汪様？」

そっと聞き返す。林玉賦は何も言わずじっとしている。

周婉漣は分かっていた。林玉賦は周婉漣がこの景北港に戻ってから二人になるとよく殷汪の話を持ち出した。それは大抵ちよつとした昔話で、どうということのない会話で終わっていたが、林玉賦の本心は、もっととはっきり訊きたがっている。殷汪の今を。今、何処に居て何をしようとしているのか。いや、それ以前に、元気になっているのか、という直接的な、殷汪個人の様子を一番知りたがっている。

だが林玉賦はそれを口にして問う事はしない。いつもやや遠まわしに殷汪に触れるのだ。無論、今の北辰教にとって殷汪は殆ど反逆者の様なものであり責めずして触れる事は宜しく無い。当然林玉賦も周婉漣としか話す事は無く、それに加えて林玉賦の個人的な感情も多分にある。殷汪について知りたいが、知りたがっている事は余り知られたくないという、他では到底見られない林玉賦の胸の内の繊細な襞——周婉漣だけが感じ取れる林玉賦の一面である。

周婉漣はまだはっきりと殷汪に会って来たとは言っていない。しかし林玉賦は会った事を信じて疑わない様である。林玉賦は、周婉漣が自分から殷汪の話を洩らさないかと期待しているのだ。

「陶峯様の頃の荒れた状態を今の様に変えたのは……殷汪様さ。勿

論、教徒達も喜んでる。それに適応出来ないあたしは……おかしいんだろうね。あの殺伐とした北辰教を、私は再び望んでいるのかも知れない」

林玉賦が何を言わんとしているのか、まだ分からない。何処に持って行こうとしているのかを探るのも彼女との会話では重要な事だ。「それでもあなたは、出て行く事はしない。何故かしら？　あなたなら誰もが納得してしまいそうだけれど」

「……教主を……裏切れないよ。これだけは……陶峯様への義理がある。他はどうなろうと知った事じゃないけどさ」

「殷汪様は、教主様を裏切ったのかしら？」

周婉漣がそう訊くと、林玉賦が顔を上げ周婉漣を食い入る様に見つめた。だがすぐには言葉が出てこない。暫くしてから周婉漣に訊き帰す。

「あんたはどう思う？　殷汪様は出て行く事を教主に話したのかい？」

「それは分からないわ。教主様に直接尋ねてみない事には……」

「まあ……無いだろうね」

「今の方崖って――」

周婉漣の声の調子が急に変わる。

「殷汪様が作った今の方崖は、殷汪様の心の内そのままに出来ている様な気がするの」

「……どういう、意味だい？」

「陶峯様と殷汪様は殆ど正反対と言って良い程違ってたわ。力で武林を支配する事を目指す陶峯様が望まれたその力の象徴と、それそのものでもあるのが殷汪様だけれど、殷汪様にはその事には全く興味が無かった。あの人はきつと……武林の武芸者でも何でもない、一介の農民に過ぎなかったのよ」

「……そいつはまた、随分な言い草じゃないか。あたし達七星を手玉に取れる程のお人だよ」

「そうね。あなたなら怒り狂いそうなもののに。そんなあなたで

さえ大人しくさせてしまふ殷汪様は特別な人だったわね」

「何が言いたいのさ」

林玉賦は短い言葉に僅かな怒気を滲ませているが周婉漣はそれを感じ取りながらも続ける。

「殷汪様自身がそう考えていたのだと思うわ。陶峯様が遺された北辰教は、あの人には厄介すぎる——というよりも面倒な事ばかり。それもその筈、殷汪様は元々呂州の農民で、北辰教はおろか、どんな組織も動かすような事はしてこなかったのよ？ 出来ないとかそういう事ではなくて、きつとそんな事、したくないんだと思う。だから、まず真武剣と話をつけてあれほど悪化していた関係の中で休戦にまで持っていった——。それだけは出来る立場だったから。誰も知らなかった、殷汪様と真武剣派総帥の関係がそれを可能に出来た」

「その話と、今の方崖と殷汪様がどうのって話はちゃんと繋がるのかい？」

林玉賦は苛ついた口調で言葉を放り出す。自分はさておき人に回りくどい話をされるのは好まない様だ。周婉漣はそんな林玉賦に微笑み返す。

「平穩無事な暮らしを望む。そしてそれが一応、訪れた。殷汪様はほんの少しの間だけれど、この庭に鍬を入れて畑を作ってたのを知ってた？」

周婉漣は腕を上げて目の前の庭を指差した。

「……見た事は無かったけどね」

「張総監が造り替えて今では見る影も無いけれど……。こんな狭い所ではきつと大した事は出来なかったでしょうね。でも昔を思い出すように熱心に鍬を入れていたようね」

「夏^かじゃないのかい？」

「いいえ。殷汪様だわ」

第十二章 三十二

「この庭を畑に、ねえ……」

確かに全く見る影も無い。だが、陶峯亡き後のこの方崖で、殷汪がする事など殆ど何も無かった筈だ。この奥まった場所で土を弄ってはみたもののこの狭さでは大した事も出来ず、その内あの夏天佑という替え玉が用意出来たので徐々に方崖を離れる事が増え、そしてついに、そのまま去った――。これは林玉賦にも容易に想像が出来た。

「望んで得た平穏……。でも、どこか物足りない……。ちよつと違うかしら？　漠然とした不安かしら。方崖はこれで良いと思いつつ、そして本来自分の居るような場所でもない」

「でもそれで出て行つたんなら、もう戻る事なんてあり得ないじゃないか。あんたは、待つつもりなんだろう？」

「さあ……どうかしら」

「何だいそりゃ」

「とにかく、今あなたが胸の内に感じている心のつかえも同じ様なものだわ。私も戻って来てまた此処での生活を始めたけれど、やはりこの先の不安感は拭えていない。方崖自体を見ても何かが起きようとしているのか、それとも何も無いのか――」

「方崖、というより北辰教の今の変な空気はさ、一気に変わる可能性も無いわけじゃないだろう？」

「それは何によって、かしら？」

「そりゃ勿論、教主様さ」

太乙北辰教を司る者は誰か――。それは当然、教主陶光であるべきだが今はそうはなっていない。後見として現総監の張新があり、その立場は正当であるとは言えども近い将来、必ず教主自らが上首として立たねばならないのだ。そしてその時、再び太乙北辰教は正常な状態へと戻る事になるのである。

林玉賦は『絶対に裏切れない』と言うほどである。忠誠を誓う教主が名実共にこの方崖に君臨する日を強く望んでいるに違いない。その教主が何を始めるかは今はどうでも良い事で、まずは張新の上に立つ事が先決である。そしてそれは可能な時期に来ている筈だ。教主陶光はもはや幼子ではない。

「どんな感じだい？ 教主様と……話せたんだろう？」

林玉賦は周婉漣に訊ねてみた。周婉漣はそっと俯いて、

「教主様はとてもお若いわ」

「まだ見込みが薄いつてのかい？」

「そうじゃない。ほんの少しの間離れただけなのに、もう随分と変わられた。今は力を、蓄える時。若いからこそ大きく伸びていける。教主様は先の事をしっかり考えておられるわ」

「へえ、そいつは……喜ばしいねえ。北辰にとっても、あんたにとっても」

「……そうね」

「でも、その教主様のこれからつてのを万全にする為には、少なくとも張総監にこれ以上力を持たせちゃいけないわけだねえ」

二人の視線の先、その少しばかり奥に今も張新が居る。これほど近くでこの様な話をする者など他には居ないだろう。無論、辺りの気配を窺う事は常時怠りはしない。この紫微宮の奥まった場所はたとえ昼間だろうと人気は少なく、誰かが近付けばすぐに察知出来る。

「それと——」

周婉漣は林玉賦に改まって向き直るとその顔をじっと見つめ、

「ん？ なにさ」

「殷汪様が戻られる事は、今後あり得ると思うの」

「……まさか教主様との話の中で出て来たつてのかい？ その——殷汪様の話が？」

林玉賦は怪訝な顔をする。教主の話からいきなりその名に飛ぶのだからそういう事である筈だが、まさか、一切表に出て来ない教主と何処へ行つたか知れない殷汪に今も繋がりがあるなど想像だにし

ていなかった。

本当なら林玉賦の好物と言える面白い話に間違いない。方崖に教主が立ち、それを殷汪が補助するならば、今の張新ならどうでも出来る筈である。九長老として全てが張新側に立つ訳ではない。少なくとも、今の状況なら――。

「約束事のようなものは何も無いわ。ただ、私達が知る以上に教主様と殷汪様は頻繁に会って話されていたのね。それも多分、あの夏という者が入れ替わった後にも」

「じゃあやつぱり、教主様は殷汪様が此処を出る事を容認していたんだね？」

「それは言われなかったわ。でもお話を聞いてると、恐らく殷汪様は教主様だけは放って置く事は無いように思えるの。教主様の今後について、お二人で話される事がよくあったそうよ」

「ということはつまり、殷汪様が此処を出たのにはちゃんと理由があった、と？　ただ嫌になったとかじゃなくてさ」

「そのどちらもあるんじゃないかしら。この先、教主様を助ける事はあっても、やつぱりこの方崖はあの方の居場所にはならないのかも知れない……」

不意に人の気配がする。侍女の一人が近くを通ったがすぐに通り返ぎ、消えた。

「こんな所で立ち話す事じゃないわね」

周婉漣はそれだけ言うとの前の触れも無くそのまま立ち去ろうとする。その白い袖を林玉賦が捕まえた。

「本当に一度、じっくり話をしようじゃないか。あたしは頭が悪いからねえ、断片だけかき集めたって良く解らなくてね」

「私にもはつきりと解る事なんてそうないわ」

林玉賦は真っ直ぐ周婉漣の瞳を捕らえていた。

「あたしは、知りたいんだ。殷汪様の事を――」

林玉賦は周婉漣と別れた後、街に戻るべく一人歩いていた。

（もうちょっと言い方があったらうに。まったく馬鹿だねあたしは……）

周婉漣はどう思っただろうか？ 彼女は何も答えず微かに微笑んで、そのまま去っていった。リンの件を忘れるな、と最後に言っておいたので少しは先の言葉を濁せたか？ と考えたが、殆どその効果は無かったようにも思える。

（まあ、いいか。良いじゃないか。あたしだって……）

「林」

不意に背後から声が掛かって林玉賦は思わず肩を弾ませる。

「ハハ、珍しいな。お前がそれほど驚くとは。考え事か？」

声は鐘文維のものである。誤魔化そうとしたところで、きつと全てをつぶさに見られたことだろう。林玉賦は面倒そうに顔だけ振り返った。

「こう見えてあたしは全く何も考えない日なんて無いんだよ」

「ま、それはそうだろうな」

鐘文維は林玉賦の隣までやってきてそのまま一緒に歩き出す。

「帰るのか？」

「そりゃそうさ。する事無いしねえ。それに今日は随分と早く起きたからね。帰って寝直さなきゃ」

「あの男、周が預かるそうだな」

「婉漣に訊いたのかい？」

「ああ。ほんの少しだけ話した」

「そういえばあんたさ、東淵の洪さんについてかないのかい？」

急に林玉賦は話題を変え、そう訊ねた。鐘文維は小さく首を振る。「もう東淵を離れたそうじゃないか。またも劉が見逃したとか。あなたの役目は、もう終わりかい？」

「それとなく張総監に、洪破天どのをどうするかと訊ねてみたが……、放っておけと言うだけだった」

「やる気無いねえ」

「どうも、変だ」

「ん？」

鐘文維は後ろ手を組み、まるで今歩いている小道の先に何か落ちていないかと探す様な目つきでじっと地面を見つめている。

「総監の態度だよ。北辰の外の事には関わるなど言わんばかりで、何にも興味を示さない様だ。しかも急にそうなったような気がする。真武剣がにわか騒がしくなったあたりからと思うが」

「まあ、面倒なのは分かるけどねえ」

「総監となつて一気に力を増したとはいふものの、まだその体制は磐石とは言えない。九長老の懐柔も思ったより進んではないようだが、当人自身あまり積極的に動いている気配は無いな。どこかおかしいと思えんのだ。北辰を大きく動かせるようになるまであと一息というのに手を緩めるのは何故だ？ 殷汪殿を探すのも、洪破天どのの行き先を探れば糸口を掴める可能性は高い。実績を作る上で有効だと思うのだがな。結果云々というよりも、人を使うという前例だよ」

「へえ、あんたって張新派かい？」

「まさか。ただ、今の時期なら張総監は権力に貪欲な方が自然で、分かり易いだろう？」

「確かにね。でもあれは絶対、方崖を意のままにする力が欲しくて仕方ないって顔さ。実は張総監はその辺がとんでもなく下手だったりしてねえ。そのおかげで、今の方崖は何だかまとまりに欠けるっていうか……。ほんと、良いんだか悪いんだか」

「とにかくだ。放っておけと言うのだから、わたしもこの街に居るしかない」

この鐘文維も自分と同じだ、と林玉賦は思っている。色々考えるとところはあるものの、劉毅の様に思い切った行動を起こせる人間では無い。この太乙北辰教を生きる拠り所として随分の時が経った。江湖を自由に渡り歩いた、この街に来る以前と比べると弱くなってしまうのかも知れない。

「ハッ。……じゃ、寝てなよ。おやすみ」

林玉賦はそう言うと言くと歩く速度を早め、後ろに置いた鐘文維に袖を振って見せた。

武林においての太乙北辰教はまるで息を潜めるように沈黙していた。武林にとってそれは歓迎すべき事だ。本来の、信仰の世界に帰って貰えばこれほど良い事は無い。しかしながらそれは単なる希望であって、すでに形を変えてしまった太乙北辰教が昔に返るなど絵空事でしかなく、今の沈黙は逆に不気味に映る。教主は隠れ、にわかにな力を持つ事になった男が方崖の中心に座る。北辰七星に象徴される、太乙北辰教の武林における存在感の要である武の力の行方は今後どうなるのか。

黙っている者の事こそ、注意深く見つめなければならぬ。武林が安定するのか、再び混乱の時代が訪れるのか、もしかすると沈黙し微動だにしないその者の手にこそ、鍵が握られているかも知れない。

第十三章へ続く

第十三章 一

地図を書くことも出来るほどに熟知したつもりが、また以前と異なる処を見つけて驚く。最後に訪れたのはついこの間の筈だというのに――。一瞬首を傾げはするが、だからこそ、いつも此処なのだと納得もする。此処は楽しい。そして飽きない。だからといって長居は出来ない事を、経験上知っている。

前を見れば、背丈の三倍はゆうにあるであろう巨岩が道を塞いでいた。こちらは見慣れた景色だ。

「さて、急がないと」

何気なく上を見たといった感じの傳朱蓮ふしゆれんは次の瞬間、その巨岩の遙か上方を舞っていた。

山の斜面の雑木林を、駆けるというよりは木々を縫って飛ぶ様に登っていく。此処でしか感じる事の出来ない強い向かい風を全身に浴びるのだが、それは自らの速さの証明でもあった。此処を通る度に傳朱蓮はあの馬少風ばしょうふうの事を頭に浮かべた。彼ならばどれほどの速さで此処を抜けるか？ あのだの、どれほど上まで跳躍するだろうか？ そんな事を考えながら、傳朱蓮は一人笑う。

（馬さんでもこの速さじゃ追いついて来れないでしょ。どう考えたってこれほどの軽功、在り得ないもの。馬さんを負かすところを紫蘭らんが見たら何て言うかしら？ これも無いけど。紫蘭自身が私を追って来れないんだもの、見れやしないわ）

突然、視界が一気に開け、先程までの鬱蒼とした林とはうって変わって陽の光が燦燦と降り注ぐ山の頂きへ、早々と辿り着いた。傳朱蓮は足を止めずにそのまま跳躍する。正面には再び巨岩が現れるが、それは最初に超えたのとは違い人の手によって丹念に形を整えられた巨大な台座の様な形をしていた。

これが此処にある事も傳朱蓮は最初から知っている。素早く近くまで駆け寄り、短く気合を発してこの台座の上へと飛び上がると同

時に背負っていた長弓に手を掛けた。台座の上を見渡せる高さまで到達した時にはその弓が完全な形でもって最大に引き絞られていた。

傳朱蓮の視線が捉えているのは岩の上で向かい合うように座っている二人の人間。一人は真っ白な袍に真っ白な頭髮、真っ白な髭を蓄えた痩せた老人で、こちら側を向いている。もう一人は真っ赤な袍を纏い、黒々とした長髪を背に垂らした若い男。ただしこの者はこちらに背を向けているので若い男かどうかを見て確かめる事は出来ない。だが傳朱蓮はこの二人を目にするのも初めてではなく、いつも此処に居りいつも同じ格好をしたその男の顔を確認するまでも無く老人でない方の赤い衣装の者は若い男である事を知っていた。

傳朱蓮の引き絞った弓には、黒い矢がしっかりとつがえてある。つまり、攻撃の意図があるという事だ。しかし、まず最初に傳朱蓮のその姿を眼にした筈の白の老人はなんの反応も示さず、じっとしたまま、ただ傳朱蓮を見ているだけである。そして赤の男は背を向けたままでぴくりとも動かない。傳朱蓮は赤の男の黒髪に狙いを定める。

そしてその黒々とした矢は何の躊躇いも無く放たれた。

人が、『夢を夢であると知りながらその世界を楽しんでいる』と言うのを聞いた事がある。だが傳朱蓮にはそんな経験は一度も覚えが無く、どうにも信じ難い。一たびその世界に潜り込めば、『いつもの風景』と認識するのはいつもの『夢』だからではなく、自分が本当にそこで暮らす住人であると思ひこんでいるからだ。

何の躊躇いも見せずに次から次へと行動を起こす。愛用の長弓から凄まじい唸り声を上げて空を裂く矢が人の頭を粉々に粉碎する――その強烈な印象により自らの力を顕示するには絶好の『的』。やりたい事を、特に深く考える事も無く平然とやる。やっている事の是非はともかく、爽快な気分になれる事は間違い無かった。後であれば自己嫌悪に陥るというのに、此処に居る傳朱蓮は毎度の事ながらすっかり忘れている。いや、忘れていたのではない。いつ

も後悔するのは別な場所の、別な傳朱蓮なのだ。知る筈も無い。

自分の手にある長弓と漆黒の矢は特別なものである。そう信じていた。貫けないものなど無い。この世のものであるならば――。故に尚更、傳朱蓮は執拗に狙う。目の前の、人の姿をした人では無い何か。何度試みてもその体を貫けない、信じ難い存在。

何故その男を射殺さねばならないのか？ 『外』からみれば当然の疑問だが、『中』に居る傳朱蓮にとっては理由など無くても構わない。在っても良いのだが、つまりどうでも良い。だがあえて言うならば、倒せない存在が気に食わない、といったところか。

先程放った矢はまだ男の体に届いてはいないが傳朱蓮は既に二本目をつがえていた。息を殺して凝視しているその一本目は、狙い定めた男の頭部目がけて真っ直ぐ進んではいるものの、ひどく遅い。なのに音だけは相変わらず凄まじい唸りを辺りに響かせていた。本当ならばあり得ないその光景。しかし傳朱蓮はそのおかしな矢の挙動の事など気に止めずに、ただひたすらに念じる。

（行け！ 当れ！ あの頭を吹き飛ばすのよ！）

矢は益々遅くなっていく。しかしその軌道は全く変化せず、文字通り一直線に進んでいる事は確かであった。そしてついに矢は止まってしまう。男の頭部に触れるか触れないかの距離で、見えない何かに遮られた状態のまま眼前の獲物を捕らえられず怒り狂った猛獣の唸り声を上げて、矢は激しく震えていた。

傳朱蓮は構えていた長弓を外して急いで背に戻すと、気合一閃、両の腕を袖を巻き上げながら勢い良く突き出した。すると次の瞬間大きな破裂音を伴って止まっていた矢が再び前方へ飛び出す。的は既に鼻の先――、矢の先端は、男の頭蓋に到達する。念じ続けたそのままに、男の頭部が傳朱蓮の矢によって弾けた。

真っ赤な鮮血が男の首から天に向かって柱を作り、粉碎された頭骨と脳髓が傳朱蓮の上にも雨の様に降り注ぐ。傳朱蓮は顔を上げ頬を血で染めながら恍惚の表情を浮かべていた。

(ハ……ついに、やった!)

顔を拭うと粘り気のある真っ赤な肉塊が指に絡まる。手を持ち上げると唇をそっと開き、真っ赤な舌の上にぼとりと血の雫を落とす。
(フ……フツ……)

後は傳朱蓮の甲高い狂気じみた笑い声がしばらく辺りに響き続けた。

やがて男の首から噴き出ていた血は勢いを失い、時折沸々と真っ赤な色を首からのぞかせる。男の正面に座っている老人はその様子をじっと眺め続けているのだが、感情というものを持ち合わせていないのではないかと思うほど、全く表情が無い。

「逃げなくても良いのかしら？」

傳朱蓮が老人に声を掛けた。すると老人は再び視線を傳朱蓮に戻しはしたが、やはり何も言わず、顔の筋肉を微塵も動かさない。

「フン、面白く無いわね。ま、あなたの方は放っておいても近いうちに死にそうね」

傳朱蓮が言い終わると同時、男の胴がゆらりと傾いた。当然死んでいる筈で、そのまま倒れるのだろうと思われたが、大きく傾いたその後はこれもまた非常にゆっくりとした動きで、徐々に減速していく。通常ならば逆で最後には勢い良く地面に突っ伏してしまう筈だが、男の胴体はそうはならない。傳朱蓮は怪訝そうな表情でその様子を観察した。男は既に無くなってしまった頭を正面の老人に向かって下げ、礼をしている様な格好になったところでその傾きを止めた。

ふと老人を見ると、老人は先程から全く視線を動かしておらず傳朱蓮を見続けており、互いの視線が重なった。

「何? 言いたい事があるなら言いなさいよ」

すると老人は左腕をゆっくりと持ち上げ、小枝の様な人差し指を傳朱蓮に向ける。だがやはりそれだけで言葉が無い。

「何? 何よ! やめて!」

傳朱蓮は叫ぶが、老人に反応は無かった。

「目障りだわ。腕ごと切り落としてやるから！」

傳朱蓮は怒りの形相で老人を睨み、腰の長剣を勢い良く抜くと甲高い金属音が辺りに響く。

劍には名があった。古代の王が造ったという。それは隠しておかねばいらぬ災いを招く事は必定であるが、傳朱蓮は自分の腰にそれがあるというのが自慢であった。大闘争の末に勝ち取ったという訳ではなく単に人から譲り受けただけなのだがそんな事はどうでも良い。今、この『青？』せいこうは他の誰でもない、我が佩劍である。間違はなく武林のみならずこの江湖において最高の名劍の一つを手に入れているのだ。誰がこれに勝てるだろうか？ 誰が、これを手にした自分に勝てるだろうか？ 傳朱蓮はそれを考え出すと笑いが止まらない程だった。

第十三章 二

傳朱蓮は飛び上がり、音も無く老人に迫った。手にした長剣を振りかざして言う。

「最高の切れ味を味わいなさい。堪能してから殺してあげるわ」

長剣が鋭すぎるのか風を切る音も無い。傳朱蓮がにやりと笑う。

だが次の瞬間、その笑みがそのまま凍りついた。

時が、減速する。老人に向けて振り下ろす長剣も、それを手にする傳朱蓮の身体も、次第に速度を緩めていく。

そしてまた例の如く、時が止まった。傳朱蓮の身体は老人に向けて長剣を振り下ろす姿勢のまま宙に浮いて固まっている。奇妙な現象は此処では珍しくはない。傳朱蓮は思案する。止まったあの矢は――何故そうなるのか考えてすらいらないが――再び解き放つ事が出来た。では今度は？ 今度は身体が動かせない。どうすればこの老人の腕をすっぱり落とす事が出来るのか？

目の前の老人は相変わらず指をこちらに向けている。傳朱蓮はハッとなった。老人は顔を正面に向けている。つまり、飛んで襲い掛かる前の傳朱蓮の居た場所に向いており、頭上に迫っている傳朱蓮は見えていない。だが、老人の指は上を向き、真っ直ぐ傳朱蓮の顔を指しているのだ。不意に嫌な気分襲われる。こちらは動けない。老人の方も同じであるのか、確証が無い。最初から殆ど動かないこの老人にも同じ現象が起きているのだろうか？

顔も動かせない傳朱蓮は今見えている視界の中をくまなく意識を巡らせて観察する。動いているものは何も無い――。そう思った矢先、小さな光が真下に現れたのを感じ取った。それは、老人の前で傾いて今にも倒れそうदैて倒れない、赤い袍を黒く血で染めた男の背中にあった。

不意にブツリと何かが布を突き通した様な音がする。

「アッ」

視界の中で唯一動きを見せていたのは先程現れた一つの光のみ。少しずつ光が大きくなっている様に見えるのは、光を放つ何かの背を突き破って出てきたからだ。それは男の血で濡れ、キラキラと赤味がかかった眩い光を放ちながら上に向かって徐々に伸びていく。

傳朱蓮は叫ぶようにその名を呼んだ。

「倚天^{いてん}！」

何故それが、その名であることに気付いたのかは分からない。見ればそれがよく磨かれた剣身であることは確かであったが、傳朱蓮は何かを感じ取ったのだろう。

「これの切れ味も知っておろう？」

初めて耳にする声が聞こえる。細く、しわがれた声。老人のものであることに間違いない。

「お前の剣に勝るとも劣らぬ、雌雄一对の片割れ――」

突如現れた宝剣、倚天。その切っ先は少しずつ、そして確実に傳朱蓮の眉間へと近付いていく。

「さて、この宝剣を防ぐにはそなたのその『青？』が必要だが……、その様に振り上げてしまっているのははやな術が無いのう」

老人に斬りつけるべく大きく頭上に振りかざした剣は傳朱蓮がどう力を込めようとぴくりとも動かない。剣だけではない。ゆつくりと下から迫ってくる宝剣を足で払う事も叶わない。傳朱蓮の顔面からは血の気が引き、いつの間にか噴出していた大量の汗が頬を伝った。

「待って！ 待ってよ！ 私の、私の負けよ！」

「果たして耳もどこへ飛んだか分からぬこの者に、その言葉が届くと思うか？」

淡々と告げる老人の顔を、傳朱蓮は凝視した。今、倚天を操っているのは誰なのか。まさか頭を失い動かなくなったこの男ではあるまい。この老人が、死んだこの男に代わって自分を殺そうとしているのだと、傳朱蓮は思っていた。

「こっ、こんなの卑怯だわ！ 人の……人の技じゃない！」

「そうかな？ この男の首を奪ったそなたが次にその首を落としたところで誰が口を出す？ 手段など――。少なくとも、この儂^{わし}には関係の無い事。この倚天には触れてもおらぬ。儂の物でもないしのう」

「待って！ ごめんなさい私、こんな、つもりじゃ――」

「儂に言うておるのか？ それともこの男にか？ もうじき、もうじきじゃ。倚天がそなたの、額に触れる。諦めよ」

老人の言葉通り、倚天剣の眩い光がもう間も無く傅朱蓮の眉間に触れる。

（どうして！ こんな！）

傅朱蓮は迫る光から眼を逸らせない。首を痙攣させたように頭を小刻みに震わせてただ見つめるしか出来なかった。

老人は諦めろと言ったが、そんな気は更々無い。なれる訳が無いのだ。この奇妙な場所、不可解な出来事、男の首を落として興奮し笑い声を洩らすこの傅朱蓮は、本当の自分ではないのである。傅朱蓮はこの場所を何度も訪れているが、今初めて、本当の、己の意識を取り戻した。

（早く！ 早く眼を覚ますのよ！）

声になったのかは分からない。とにかくそう強く自分に命じる。するとその傅朱蓮の叫びに応じる様に、また新たな低く小さな声が現れた。

『朱蓮。俺にお前の剣を避ける力など無い事は分かっていただろう？ 朱蓮。俺に出来る事はただ報復のみ。これさえも出来なくなれば俺には何の価値もなくなってしまう。降りかかる災いを防ぐ事も出来ぬのとお前は笑っているだろう。だがそんな事はもうどうでも良いのだ。さあ、いつもの、後手の番が回ってきた。粗末な手で悪いが、お前には絶対に避ける事の出来ぬこの剣でその命、貰い受ける。ただ憎しみのみでお前を殺し、理不尽にも奪われたこの魂を

慰めるとしよう——』

若い男の声。そう認識すると同時に、傳朱蓮の身体に今まで経験した事の無い衝撃が走る。倚天が、傳朱蓮の額に触れた。

口から声が洩れ出るがそれは意識とは全く無関係の、身体が壊れる音だった。視界はいつの間にか失っている。先程までぴくりともしなかった傳朱蓮の全身が次第に痙攣を起こし始め、ありとあらゆる筋がこれ以上無いというほどに強張っていく。振りかぶっていた長剣『青?』は傳朱蓮の手から外れると地に落ちてカラカラと音を立てた。

傳朱蓮にはもう意識は無かった。暫くした後、痙攣は徐々に治まっていき、ゆっくりと地面に向かって降りていく。そして完全に力の抜けたその身体はついに、男の背から現れた宝剣、倚天に貫かれたその頭部にぶら下がる様にして静止した。

「そなたの死が、こちらでは僅かではあるが安定をもたらす。今のそなたはそういう存在であったという事じゃ。さて、次はどうであろうか? それも楽しみではある——」

老人は目の前にある宙に浮いた倚天剣とそれからぶら下がった傳朱蓮の亡骸に向かって呟いてから、ゆっくりと立ち上がる。それと同時に、陽の光の降り注いでいたこの山頂は一瞬にして完全な暗闇と化した。

「朱蓮——」

自分の名を耳にして急速に意識が覚醒に向かう。

「朱蓮! 朱蓮!」

老人の声。老人は老人でもこちらは常に耳にしている聞き慣れた声。

「朱蓮! 呻いたり泣いたり忙しいな。どっか痛いんか? 朱蓮?」

傳朱蓮はゆっくりと瞼を上げてみる。するとすぐ目の前に人の顔

が迫っている事に気付いて驚き、一気に目を見開いた。

「おお朱蓮、やっと起きたか。どないしたんや？ まさか怖い夢見
て泣いてしもたと言うんちゃうやろな？」

「く、狗さん、近い」

「お？ ああ」

眠っていた傳朱蓮を起こしたのは一緒に旅をしている狗不死である。隣にはこの宿で給仕をしている婦人が立っていた。当然の事ながら狗不死と傳朱蓮は別々に部屋を取っているのです、その婦人が傳朱蓮の異常な状態に気付き、狗不死を呼んで様子を見に来たのだろうか。婦人はまだ心配そうな面持ちで傳朱蓮の様子を眺めていた。

「目え赤なってるで。腫れてへんか？」

狗不死が言うので指先を当ててみる。すむと思いの外、睫毛も、そして頬まで濡れており、少し驚いた。

（一体いつ、私は泣いたのだろうか？）

傳朱蓮は両の手のひらで濡れた顔をそっと覆った。

第十三章 二（後書き）

※ 携帯で表示できない文字があるようです（機種に依存？）。

「青」と空白になっている部分があるのを確認しています。
青に「金工」でセイコウと読みます。

この物語では剣の名称として使っています。

第十三章 三

傳朱蓮が部屋を出た時にはすでに狗不死は出立の準備を済ませ、茶を飲みながら待っていた。傳朱蓮の方もそのまますぐに発てるようにと自分の荷を抱えている。だが常に背負っている長弓はまだその手にあった。

「ま、急がんでもええわな。今日もええ日和や。のんびりしていこ」
狗不死が振り返り、そう言って笑う。傳朱蓮は少し曖昧に、小さく頷いて狗不死の隣で荷物を降ろした。

外を見遣れば確かに燦燦と陽が差して気持ち良さそうな風が草木を撫でている。山間の小さな村で寂れてはいるが、とても穏やかな場所だった。

「ごめんなさい。寝過ぎしちゃって」

「そんなんも若い内やで。儂なんか寝たあてもすぐ目が覚めてまうんや」

「私、うなされてた？」

傳朱蓮が狗不死を横目で見ながら訊ねると、

「そらああんた！ こんな狭い宿や。何事かおもたで」

「そ、そう……」

「ええ夢なわけ無いわなあ……」

狗不死がそう言いながら顔色を窺う様に見るので傳朱蓮は肩を竦めた。

「疲れてるのかもね……。疲れる事なんて何もしてないのにね」

傳朱蓮の今回の旅は、見事に何も起こらない、平穩無事な旅だった。途中、武慶^{ぶけい}に立ち寄り真武劍派^{しんぶけんぱ}の催す英雄大会に狗不死に連れられて行った以外は、陽が登れば進み、暮れば眠るの繰り返し。そして西へ行けば行くほど北辰絡みの話など殆ど出て来ないのである。ましてや今は真武劍派と例の徐^{じょ}という男に係る噂話で持ち切りであり、少々うんざりする程であった。

額を押さえながら卓上に伏した傳朱蓮に狗不死が訊く。

「調子、悪いんか？」

「……大丈夫」

傳朱蓮は小さくそう答えて、額を撫でている。

（倚天劍……、今、何処にあるのかしら？）

「なあ、朱蓮？」

「なに？」

「いっぺん、東淵に戻るか？」

「えっ？」

傳朱蓮は驚いた顔を狗不死に向けたが、体勢は変わらず伏せたまままだ。

「まだ何も見つけてへんけど、あんまり長いこと家出たままやったら親父さん心配するがな」

「大丈夫よ。今までも……もっと長い間戻らなかった事があるわ」

傳朱蓮は身体を起こして背筋を伸ばし、短く息を吐いてみせる。
狗不死は自分の調子を氣遣って言っているのだ。少しばかり悪い夢を見ただけで何の問題も無い、そう言いたくて氣合を入れる。

「ほんでも、儂らだけで殷の手掛かりなんて難し過ぎるわ。あれの昔の事もよう知らんし、何処の何を目指せばええんか分からへんやろ。それよりあそこ、千河幫せんがぼうやで。幫主は『難ばうしゅしい』みたいな事言うとったけど、少しは何か掴んどるかも知れへん。人も仰山おるんやし」

「千河幫……緑恒りょくこうか……。遠いじゃない」

「何言うてんねん。帰り道やないか」

「随分遠回りの、ね」

「なあ？ 何で避けるんや？ 緑恒」

「別に避けてなんかないわ」

「范幫主はんの倅、何ちゅうたかいな、アレ。嫌いなんか？」

狗不死は真顔で訊いてくる。傳朱蓮は眉根を寄せた。

「は？ どうしてそこで撞ぶつさんが出てくるわけ？」

「ああ、そんな名やったなあ。いや、仲良さそうやったのに何で近くまで行ってんのに会いに行かへんねやろなあおもてな。名で呼ぶ程の仲やのに？」

「別に、呼んでないわ。……『范さん』って言ったら幫主も同じ姓なんだから狗さんが混乱すると……思ってる」

何故、名の方が口をつけて出たのか、と傳朱蓮は焦る。勿論、本人にそう呼び掛けた事など一度も無かった筈だが、随分と自然に出てしまった事に面食らってしまった。

「ま、まあ、帰りに寄って話を聞くのも良いわ。？局……そう、？局の皆さんにもお会いしたいし。そうしましょう。でも、まだ行っておかないといけない処が残ってるわ。そこに行ってからよ」

「ん？ 何処やそれ」

「都よ。都に行つて、殷兄さんが何の為に行つたのか探れないかしら？ 何人か、殷兄さんを総監つて呼んでた人が居たつて媛えんが言つてたでしょ？ 何か、分かるかも知れないと思つて」

「媛？ ……ああ、あのお嬢ちゃんやな？ 都か。緑恒とは反対やな」

「……それと、咸水かんすいにも」

「咸水かあ。人、おるんかいな？」

「前に行つた時は、誰も居なかったわ。相変わらず、ただの廢墟だった……」

「殷が行つてへんか——つてか？」

「望みは薄いけど全くあり得ないつて事も無いでしょう？ それに、やっぱり……私の生まれた処だから……」

傳朱蓮はそう言つて薄く笑う。人が居なくても、かつて人の住処があつたという痕跡が全て消え失せたとしても、やはり咸水は自分の『帰る』場所の一つなのだと傳朱蓮は考えている。

幼い頃は咸水の話聞かされてもそれはどこか遠い処で縁などというものを感じる事は無かつたが、東淵を出て自分の足で咸水の荒

れた地を踏んだ時の、初めて覚えたあの感覚は――。全く記憶に無い風景と匂い。だが確かに感じたそれは、『母』であつた。この地の上に、自分を生んだ母が生きていたのだ。

東淵には王梨おうりという綺麗で、優しい母が居る。これからもずっと彼女は自分の母であり続ける筈である。ただ、自分にはもう一人の特別な母が居る事を、咸水で改めて感じた。こちらの『彼女』は姿を持たない。記憶の何処を探しても見当たらないからだ。だが姿を探す必要も無い。咸水の地に立った時、そこかしこに母を感じたのである。草木を奔放に育てているその大地も母の様であつたし、吹く風もまた、母の吐息に思えた。

人には解るまい。だが誰が何と言おうと、かの咸水の地は特別で、大切な『存在』――。

「そうか。実は儂、咸水行つた事あらへんねん。なんせ人おらへんやろ？ 用事がでけへんがな。見てみたいなあ」

狗不死は明るい声で言い、笑う。全く屈託の無い、子供の様なその笑みに傳朱蓮はつられてしまう。

「フフ、本当に何も無いけどね。だから、咸水にまず寄りましょ？ それから北上して、都へ」

「それから緑恒に向かうとなるとまた此处通る事になるなあ。ま、しゃあないか。あ、武慶もまた通る事になるなあ。今度は素通りでええか。陸の奴はこないだ会つたし、しばらくは見んでもええわ。よし！ ほんなら行こか！ こっから咸水いうたら……ええわ。そのうち着くわ！」

狗不死は勢い良く立ち上がると荷の包みを掴んでそのまま歩き出す。あまりに急だったので傳朱蓮は呆氣に取られてその背中を眺めていたが、狗不死が足を止める気配も無くそのまま行つてしまいうなので慌てて立ち上がった。

椅子に立て掛けていた長弓を手にとると勢い良く一振りしてから背に担いで紐で結わえ、長剣と荷を掴み取り、颯爽と歩き出す。こ

の時にはもはや嫌な夢の事など傳朱蓮の頭から何処かへと消え去っていた。

第十三章 四

狗不死が同行していなければ、これほど楽な旅にはならなかっただろう。そう傳朱蓮は感じていた。江湖を当ても無く彷徨う様な旅はまだ多くは無いけれども何度か経験済みであった。だが今までのそれと確実に違うのはどこもなく漂う安心感である。

女の一人旅なら尚更、危険に晒されるのが常であるのは言うまでも無い。不埒な輩は女と見ればすぐさま擦り寄ってくる。無論、いきなり猛々しく襲い掛かってくる者もある。では傳朱蓮の様に武器を携え、一目で女武芸者と分かる者にはどうかというと、意外にも同様なのである。

多少の警戒は生まれようが、女が獲物を帯びて堂々としているのが癪に障るらしい。その女武芸者が『本物』であるなら危険極まりないが、大抵の場合どうか出来ないという程の事はない筈だと思つてちよっかいを出してくる。偉そうにしている女を征服するというのは余程気分の良いものらしい。何をする訳でもない。偉そうにするなど全く身に覚えの無い事だが、ただ剣を持つだけで生意気だというのだ。

ならば剣に加えて目立つ長弓を負う傳朱蓮などは、羽虫をおびき寄せる闇夜の灯火の様なもので、実際、過去に幾度と無く男達が群がってきた事もあった。だが幸いな事にそれらは皆、粗末な男達で、傳朱蓮の剣で追い払えない様な者は混じっていなかった。

今回の旅ではそういった類の男達を何度も見かけはしたが、近付いては来ない。傳朱蓮はある時、試してみた。そんな男達の集団をじっと見遣るだけという簡単なものだが、それだけでいつもならすぐに数人同時に反応して寄ってくるところが、何故か向こうが目を逸らすのである。初めて見る男達で、傳朱蓮を知っている筈も無い。今まで来た事の無い土地だ。腕に多少の自信がある傳朱蓮は拍子抜けしたが、ひとつじっくりと考えてみる。

すぐ近くには狗不死が居る。この老人が同行者である事は向こうにも解っているだろう。同じ速さで進み、時折言葉を交わすのだから当然である。今回違うのはその一点だけなのだが果たして、この老人一人が居るからといって彼らが遠慮したというのか？ 女、子供、そして老人といえは一般的に広く江湖で称されるところの三大弱者であり傳朱蓮にしてみれば大いに遺憾であるが、男達がこの老人一人のために手出しを控えるなどあり得ないと言っても良い筈である。

或いは狗不死を知っているのか。丐幫かいほう前幫主を見知っているならば男達が黙って通り過ぎるのもうなずけるが――。

狗不死という人物はどこから見ても好々爺然としていて人を威圧する事など考えられず、傳朱蓮はそんな狗不死を一度たりとも見た事が無い。これが洪破天こうはてんの様な風貌であつたなら――傳朱蓮は既に見慣れて何とも思わないが――黙っていて人も人が避けていく事はあり得るかも知れない。ならばやはり狗不死を知っていたか、或いはもっと他の何かがあるのか。

「あれ、うまそうやなあ……」

狗不死は通り掛かった店先に並べられた色鮮やかな菓子を眺めて、まるで子供の様に指をくわえている。傳朱蓮はそんな狗不死の姿をまじまじと見つめながらまた考える。

（引退したといってもあの丐幫の前幫主じゃないの。武林最大の勢力の頂点に君臨してたんだから、並みの人間じゃないわ。……見た目は全く並みのご老人だけど）

丐幫に属する人間は江湖にあまねく溢れんばかりに居る。無論、組織にとって何の役にも立たない人間も相当多いだろうが、それでも仮に半数を差し引いたとしても、丐幫に次ぐ勢力である太乙たいいつ北辰ほくしん教きょうにはまだ引けを取らない程である。彼らは皆、いわゆる乞食こじきと呼ばれるが、彼らから言わせれば乞食行こじきぎょうを行う修行者である、という事らしい。丐幫の人間と名乗る、か弱い乞食に見えるその者達の実力は少なくとも武林における『並み』以上である事は確かであ

った。

（今も、この周辺に居ないとは限らないわね。狗さんはいつも一人で居るけど、本当に一人かどうかは解らない。丐幫の幹部達も狗さんには気を使うでしょう。江湖で生きていく為の最大の武器は『顔』——それなら狗さんは今でも武林の誰にも引けは取らない？ 武林から完全に引退した訳じゃないんだから、周りは放ってはおかないわよね……）

傅朱蓮は首を廻して辺りの様子を窺う。傅朱蓮が想像したのは、狗不死の後ろに隠れて見えない丐幫という組織がずっと離れずに旅に同行している、そんな絵だった。普通ならあり得ないと一笑に付すような考えだが、かつての幫主がこの狗不死という一風変わった老人であるのと、他に類を見ないほど桁が違うその勢力。そしてその組織の具体的な活動と目的は傅朱蓮にとっては謎のままであり、そんな想像を繰り返せば繰り返すほどに『あってもおかしくない』と思えてくるのである。むしろあったほうが『謎』にも更なる箔がついて面白い。幫主が狗不死だったなら、組織そのものも似た様なものになるのではないか。

武慶に寄った折、丐幫現幫主の休達きゅうたつという人物に会ったが、狗不死に対するその姿勢から想像するにどうやら丐幫内での狗不死のその地位は些かも変化は無さそうである。あの時集まっていた武林の重鎮達の対応も同様だ。

印象の部分はさておき、武林の実力者に違いない狗不死には、自分などには想像もつかない様な『力』が具わっている——傅朱蓮にはそう思えてならなかった。その力は自ら発するものと、外から自然とその身に集まってくるものの二つから成っている。武林においては前者の最たるものは体得した武芸である。武林で己の看板を上げるつもりならまずその武芸を題字として掲げねばならない。これとはとても単純でその価値も解り易い。それよりも傅朱蓮が注目しているのは後者、狗不死が身に纏うその空気である。あまりに抽象的だが、簡潔に言い表すならばその様なものではないかと傅朱蓮は考

え、それはいわば他者から狗不死に流れ込む力の様なものを指していた。

狗不死の名は武林で知らぬ者は無いだろう。真武剣派の陸皓、清稜派の木傀風、襄統派の悌秀といった武林の最長老たちと世代を同じくして常に対等以上の勢力を維持してきた狗不死は武林の敬慕の念を集めるひとかどの人物であった。あの真武観での狗不死の振る舞いと、集まった名門各派の総帥らが見せた反応を観察するに、これこそが力ではないかと傳朱蓮は思い始めたのである。確かにそれは空気の様なもの。武林屈指の実力者達は皆、一様に狗不死という人物を認め、存在を尊重する。武林はその事実に従い、狗不死も実力者の一人と見るのである。

これは、結果である。武林を駆け抜けた若い狗不死の全ての行いが、この結果へと導いたのだ。その身の内に何も持たない者が人を惹き付ける事などあり得ない。狗不死の内なる力が、更に他の力をその身に呼び込んだ――。随分と大袈裟な表現ではあるが、つまりそういう事なのではないかと傳朱蓮は考える。

傳朱蓮は今まで『力』といえば、洪破天から教わった剣と体術の事しか思い浮かばなかった。確かにそれは大いなる力だ。危険がそこかしこに転がっている様なこの江湖を女の身でありながら一人旅する事が出来るのもその力の恩恵に違いない。だが、いつまで迫り来る困難を切り捨て続けられるだろうか。しかも一人で？ それを思うと、自分にはまだ足りないものが確実にあるという事を痛感させられる。狗不死には丐帮の護衛か何かが密かに付いている事があったとしても、自分ごときには絶対にあり得ない事だ。

「なあ。ちょっと買っていこうや。甘いのが好きやろ？」

狗不死の伸ばした指が真っ直ぐ店先の菓子を狙い定めていた。

「ええ……好きよ」

狗不死は満面の笑みを見せてから馬を飛び降りた。

（私も狗さんを好きな一人だけど……私は力になれるのかしら？

まだ早い？
)

第十三章 五

早速、狗不死は乗っていた馬をそっちのけにして菓子選びに夢中になっている。傳朱蓮も自らの愛馬、飛雪ひせつの背から降りると狗不死の馬の手綱を取り、二頭を従えて待つことにする。

先に泊まった山間の村からは随分と降りてきたので人通りも増えている。この街道は武慶から北へ向かう二つの街道の内の一つで、直接、金陽きんようの都へ向かうのではなく少し西にずれた堯家村ぎょうかそんという宿場町へと通じている。とは言ってもその堯家村から都はそう遠くなくちよつとした回り道といったところだ。ここから北へ向かえば目的地である咸水に寄った後、堯家村を経て都に入ることが出来る。南へ下れば呂州りしゅうである。

武慶で木傀風から殷汪が呂州の出である事を聞いた傳朱蓮は呂州にも行っておきたいとも考えたが、どうやら呂州で殷汪を知らぬ者は無いらしく、まさかそのような場所に殷汪が戻るとも思えなかった。殷汪の英雄譚を江湖に触れ回ったのは呂州の民であり郷土の誇りとしてもいいのかその扱いが尋常ではない——とは呂州を旅した者の言葉だ。当の本人が身を隠すには最も困難な土地であろう。

とりあえず今回は予定に入れなかったがいずれ訪れてみたいとは思っている。木傀風の言った、殷汪を赤子の頃から知る人物とは誰か。その手掛かりは恐らく呂州にあると踏んでいた。

「なあ朱蓮」

「ん——？」

何気なく辺りの風景に目を遣っていた傳朱蓮が狗不死の呼びかけに顔を戻そうとしたその時、こちらへと駆けて来る馬の姿を視界の端に捉えた。すぐさま傳朱蓮は視線をそちらへと回す。

やって来るのは二騎。騎乗しているのはどちらも身形の良い壮年の男である。最初はそれだけしか判らなかったが勢い良く駆けて来

るその二人は瞬く間にこちらへ近付いてくるので、程無くしてその片方には見覚えがある事に気付いた。

（あれは……真武剣派の？）

「ん？ どないしたんや？」

「狗さん、あの人——」

流石に指す事はしなかったが視線で狗不死にやって来る男の存在を知らせる。すると狗不死は即座に男の名を言い当てる。

「白やな。何やろ？ お、相方は丁か。都に戻るんかな」

「都ならこっちは通らないでしょう？ 普通は」

やって来るのは真武剣派の白千雲と丁常源の二人で、どちらも今は都にあって真武剣派の拡大に努めている。先の武慶で行われた英雄大会を終えて金陽へ戻るところであった。

「おお、これは狗不死様ではありませんか」

すぐ傍までやって来た白千雲は二人に気付き、そう言って馬を降りた。その弟子である丁常源もこれに続き、二人揃って抱拳する。

傳朱蓮は流石に身形を気にするが狗不死は一切構う事が無い。真武剣派の高弟二人はかなり上物の着物を身に付けており、こうして向かい合っていると対照的でなかなか面白い。しかも身形の良い方が檻樓を纏ったような老人に恭しく礼をする光景はあまり無い。

「お二人は——」

白千雲はちらと傳朱蓮を見てから言葉が続ける。

「どちらへ向かわれるのですか？」

「ん？ 適当や。思いついたらそこ行く旅や」

「ハハ、それは宜しゅうございますな」

破顔する白千雲だが、それでもどこか厳めしい雰囲気がありあまり親しみを持てる顔ではないと傳朱蓮は思う。髭を綺麗に剃り上げて微塵も残っていないあたりが非常に几帳面そうだ。真武剣派の後継者という点でみれば、なるほどそれらしい面構えとも思える。

「あんたらは何処行くんや？ 都に帰るんやろ？ 道、間違えてへ

んか？」

「いえ、確かに都へ戻る途中ですが……。ご存知かと思いますが我が派は今、総出で賊を追っております。こちらにも既に人を遣っておりますが一向にその行方は知れず、我らも総帥のお叱りを受けておりまして。しかしこれがなかなか……」

「まあ、難しいやろなあ」

「それでもこれは何としても捕まえねばなりません」

「真武剣派の面子にかけても――やなあ」

「ハハ……。今の状況では既に我が派の名は地に堕ちていると言っても良いでしょう。情け無い事です」

白千雲はそう言って目を伏せると、横に居た丁常源もそれに合わせるように俯いた。

「んでも、あんたら二人だけか？ 弟子も連れんと」

「弟子達は他の道を行かせております」

「なるほど。真武剣派の白と丁。足手纏いも無いし向かうところ敵無しっちゅう訳や！」

「敵が見当たらなければ話になりませんが」

この二人の実力は武林では相当、上等の部類に入る。真武剣派総帥の直弟子でその筆頭と二番弟子である。修行に積み重ねた年月は真武剣派四十年のその長さにはば等しい。狗不死の言う敵無しの言葉を否定する様子は無く、聞いていた傳朱蓮もなるほどその通りであらうと納得した。

「偶然にもお二人に此処でお会い出来てようございました。少しお伺い致したき事があるのです。……傳朱蓮どの」

不意に名を呼ばれた傳朱蓮は驚いて白千雲を見返した。

「私、ですか？」

「ええ。お二人は休息を取られるところでしたかな？」

言いながら白千雲の視線は狗不死の手に向いた。狗不死の手には派手に着色された菓子が握られている。装飾のせいでそれが何で出来ているのかまでは一見しただけでは分からない。

「これは儂が買うんやで。あんたらも欲しかったら店はそこや」

狗不死は背後の店先を顎で示し、手に持った菓子を取られまいと身体の後ろに回した。

「傳朱蓮どのは……少し宜しいかな？」

白千雲は辺りを見回して腰を下ろす場所を探しているようだが、あいにく椅子の類は一切無い。

「では、あの木陰辺りで少し休むとしよう」

丁常源に向かってそう言うてから、傳朱蓮も共に来るよう促した。

「儂は？ 儂には用は無いんか？」

狗不死は白千雲の着物の袖を引いて訊く。

「狗不死様にも是非聞いていただいて、もしご存知の事があればお教え頂きたい」

「そうか。ほんなら先にこれ買ってくるわ。あんたはいらんのやな？」

「ええ。私共は――」

店に戻っていった狗不死をおいて、傳朱蓮と白千雲、丁常源の二人は近くの立ち木を作る小さな木陰へと移動した。

まず先に、傳朱蓮の方から口を開く。

「真武剣派の方々が、何故、私の事をご存知なんでしょうか？ 私
は武林のどの門派にも属しておりませんし、交流も殆どありません。
あの狗さんも……家族の知り合いです。丐幫の事など殆ど知りませ
ん」

傳朱蓮の言葉に白千雲はほんの少しだけ頬を緩めた。

「気を悪くしたなら申し訳無いが――、武林の人間ならば、そなた
には興味を持たざるを得ない。私はそなたが襄統派の悌秀師太と面
識がある事を知っている。それにあの狗不死様と共に旅をしている。
それだけではない。北辰の総監であった殷汪どのはそなたの身内で
あるし、洪破天どのもまた、武林では名が知れ渡っておる。そんな
そなたの存在を知れば注目を集めるのは当然なのだ」

そこは傳朱蓮にも、自分の周りには有名な人物が集まっていて、その故というのは理解出来る。ただ洪破天については何故武林で有名になったのかは未だ知らなかったが――。

第十三章 六

傳朱蓮は溜息を一つ洩らして言う。

「親しくても、みなを知っているとは限りません。今、名を挙げられた人達に比べれば私はまだ――。私の人生より長い時間を、この江湖で過ごしてきたのですから、私などには及びもつかない過去があるのでしょうか。……話したくなる様なものばかりではないと理解しています。私が知るのは、皆、優しく、私を育ててくれた父たちなのです。父であり、兄であり……。誰も昔の話をあまり積極的に話そうとはしませんし、私にもあまりそれは必要ではなかった」

「兄というのは、それは殷汪どのの事かな？」

「変ですか？ 実際に間近で接していない人には当然でしょうけど、私には違います」

傳朱蓮は、歳の事など何の問題にもならない、といった風に平然とそう言った。容姿も、その言葉も若々しいままの彼自身が己の年齢に言及しない限り、問題など起こり得ないのだ。

「いや、それは理解出来る。……傳朱蓮どの、我々が訊きたいのはその辺の……そう煩わしい話ではない。そなたの記憶の中に、ある武芸について聞いた事がないだろうか、というものののだ」

「ある……武芸？」

白千雲は頷き、隣の丁常源は傳朱蓮の反応を窺うように傳朱蓮をじつと見据えていた。

そこへ狗不死が小走りで戻って来る。

「儂を待たんと話進めたらあかんで」

白千雲は笑って狗不死を迎え入れる。

「ハハ。いや、今から本題に入るところです。といってもそう大した話でもないのですが」

「で、なんや？」

白千雲は小さく咳払いをしてから、傳朱蓮の方へ顔を戻した。

「その昔、東涼の地に興った黄龍門おうりゅうもんをご存知かな？ 元は安鼎黄龍門あんけんの弟子であった女侠、洪淑華こうしゅくかが開いた武芸門派だが」

話は全く思いがけない処から始まり傳朱蓮は少し驚いたが、
「もちろん、洪淑華の名は知っています。ましてや女性でありながら武林に名を馳せた方ですから、同じ女として……その、恐れ多いとは思いますが、憧れを抱かずにはいられません」

「そうであろうな。いや、男女の別など、彼女ほどになればもはや関係無い。武林全てが認める偉大な先達だ。我が師も長い武林の中で最も優れた武芸者の一人であると度々その名を挙げられる」

「ほう。あの陸がか？ 儂は聞いた事ないなあ」

狗不死が口を挟むが白千雲は僅かな笑みを浮かべて見せただけでまた傳朱蓮に向かう。

「師は様々な武芸の成り立ち、その時代背景についても探求しておられる。洪淑華の使った武芸そのものについてもかなり熟知されている様だ。残念ながら、我らは東涼黄龍門の弟子ではなく真武剣派なのだから教えては頂けぬが……。その師が言われるには、そなたのよく知る殷汪どの――彼の武芸は洪淑華の武芸の影響を多大に受けている、らしい」

「えっ？」

傳朱蓮はこの突拍子も無い白千雲の話に驚き、なかば口を開いたまま白千雲を見つめ返した。

（殷兄さんの武芸に、元となるものが存在する？）

白千雲は考える暇を与えてはくれなかった。

「そなたは、武芸を殷汪どのから教わった事はあるかな？」

「ありません」

傳朱蓮は即答する。武芸に関する事を教えてくれたのは全て洪破天であり、殷汪はそれに何か口を挟む事すら無かったのだ。むしろ完全に無関心であるかのようにであったと記憶している。

「なにかしらの助言など一つも？」

「はい。ありません」

「ふむ」

白千雲は目を閉じ、何か思案している様だ。ここで丁常源が初めて口を開いた。

「殷汪どのの武芸は、武林において無敵、不敗の剣であるとして広まっているが、当然それはあなたも聞き及んでいたのでは？」

「それは……噂ではそう聞いていましたけど」

「あなたは武芸を洪破天どのから習っている間、殷汪どのにも何か教わりたいとは思わなかったと？」

まるで尋問でも受けているような気分になった傳朱蓮はむっとして眉間を寄せる。

「そんな事、あなた方と何の関係があるんですか？ 訊いたとしても殷兄さんは……きつと何も教えてはくれなかったでしょう」

「何故？」

「何故って……」

傳朱蓮は質問ばかりの丁常源が鬱陶しく、腹立たしく思えてきた。そこへ、

「はあ、あれやな？」

狗不死が菓子を放り込んだ口を動かしながら言う。

「あんたらが盗まれた秘伝書、洪淑華のやつやったなあ？ それには殷が絡んどるかも知れん。朱蓮は殷と繋がりがあるわなあ。ええと、ほんなら犯人と――」

「そんな！」

狗不死の言葉が終わらぬ内に傳朱蓮は思わず声を張り上げ、それに反応して白千雲が慌てたように両腕を持ち上げた。

「いや、待て待て。そうではない。そうではないのだ」

「何が『そうではない』のですか！」

白千雲は首を振った。

（まったく余計な事を言ってくれる。やはり真面目な話は狗不死様には遠慮してもらうべきだな）

「まさか、私も疑われているのですか」

傳朱蓮の声は僅かに震えている。そうさせているのは間違いなく怒りであろう。

「とんでもない。今、話したその繋がりだけでそう考えるなどあまりにも……荒唐無稽だ。我らは微塵もそなたを疑ってなどおらぬ。先の事件とは全くの無関係。洪淑華の秘伝そのものへの興味から、そなたに尋ねておるのだ。内容がどのようなものか、何か聞いた事は無いかと」

「そんな事は……、陸総帥に訊けば良いのでは？ 既に良くご存知なのでしょう？」

傳朱蓮はそっぽを向いて鼻息を荒くしている。

「総帥は……知識の全てを弟子にお教え下さる気は無いようだな」
白千雲の低く沈んだ意外な言葉が傳朱蓮の興味を少し引いたが、傳朱蓮はそれに抗う様に語気を強めた。

「ほ、本当に盗まれたのか確かめたらどうですか？ 弟子に隠し事する人が本当は持っていたりして。しかも秘伝書なんてこれほど貴重な資料は無いでしょう？ ……人まで死んで、一体どんな裏があることやら」

これを聞いた丁常源が勢い良く立ち上がり、

「なんだと！ 何を言ってるのか分かっていいのか！ 口を慎め！」

「何故？」

傳朱蓮にはもう遠慮する気など一切無い。丁常源の言葉を聞いて怒りは一気に高まる。

「江湖の大抵の人間はそう思ってます。だってその方がありそうな話でしょう？ そうでなければこんな処で無駄話してないでさっさと下手人を捕まえて、そうじゃない事を証明するべきでは？」

「黙れ！」

「真武剣派の人って噂通り、偉そうにしてるんですね。私は真武剣派と何の関係も無いのに。そんな命令なんて聞きませんから！ 気に入らなければさっさと帰って弟子達に怒鳴り散らして鬱憤を晴らせば良いわ！ いいですか。あなたのその偉そうな態度に黙ってい

るのは真武剣の弟子ですからね！ 勘違いしないで！」

傳朱蓮も立ち上がり、丁常源に負けじと睨み返す。言いながら怒りが限界に達したのか、もはや元の話など頭に無い。あるのは丁常源に対する嫌悪のみであった。

第十三章 七

「常源」

淡々とした、白千雲の太い声が丁常源を下がらせる。

「後一つだけお聞きしたい」

弟弟子の態度に何も言うつもりは無いらしく、それがまた傳朱蓮の怒りに油を注ぐ。だが白千雲は傳朱蓮に口を挟ませる隙を与えなかった。

「天棲蛇劍てんせいだけんを？」

ただそれだけを言って傳朱蓮をじっと見る。

「知りませんから」

傳朱蓮の反応も早かった。ちゃんと聞いていたのかも怪しいと思えるほどの速さ。険しい表情で横を向く傳朱蓮に、白千雲は小さな溜息と共に苦笑する様に頬を緩めた。そして今度は狗不死に顔を向ける。

「狗不死様はご存知ありませんか？」

「何やて？ もういつぺん言うてくれ」

「天棲蛇劍です。洪淑華の劍を言うらしいのですが」

ちらと傳朱蓮をもう一度窺う白千雲。だが傳朱蓮の様子は変わっていないかった。

「知らんなあ。そんなん聞いた事無いわ。洪淑華の劍て黄龍門やろが。安県あんけんを離れても黄龍門の名前に拘っとったのは有名な話やないか。そんなけったいな名前を後から付けたっちゅうんか？」

「どうやら、そうらしいのです。わが師によれば奪われた秘伝書は確かに洪淑華の興した東涼黄龍門の物で、それを天棲蛇劍と呼ぶのだそうです。ですがそのような名、今まで一度たりとも聞いた事が無い。それ以上は何も仰らないのでどういった経緯でその名が出てきたのか、師父は何故それをご存知なのかも、分かりませぬ」

眉間に皺を寄せた白千雲は項垂れたまま首を振る。白千雲も既に

長く武林に生きる人間である。武林に関する事柄で知らぬ事など殆ど無い筈であった。

「そらあんた、朱蓮やないけどいっぺん陸に問い詰めてみるとあかんのちゃうか？ 何隠しとんねん！ ……っちゅうてな」

白千雲は押し黙ったままで、横に居る丁常源も何も言わなかった。流石に狗不死に向かって怒鳴る事は出来ないらしい。

「そろそろ先に行かれた方が宜しいのでは？ 此処に居ても何も得られないと思いますけど？」

不意に傳朱蓮がそう言って歩き出す。傍らで草を食んでいた愛馬、飛雪の傍まで行きその白く艶やかな背を撫でた。

白千雲は再び狗不死に向かい袍拳し、

「留め立てをして申し訳ございませんでした。それでは我らは此処で……」

「都か？ それとももういっぺん武慶か？」

「ハハ……。いや、都へ参ります。では」

陸皓に問い質す為に武慶に戻るか？ という狗不死の問いであったが、とてもそんな事は出来よう筈も無く、白千雲は師弟間の微妙な状態を自ら吐露してしまった事を恥じて頭を掻いた。

歩き出した白千雲の後に続く丁常源が後ろを振り返り傳朱蓮に睨むような視線を送る。傳朱蓮は気付かなかったが狗不死はそれを見逃さず、鼻を鳴らした。

「丁よ」

不意に名を呼ばれた丁常源は驚き、狗不死を振り返った。

「ハ……。何か？」

「あんたの弟子、元気か？」

「え？」

「張とかいう若いの、達者か？」

丁常源は何が何だか分からないといった困惑の表情で呆然と狗不死を見つめている。白千雲も振り返ると、何の話かと狗不死と丁常

源を交互に見遣っていた。

「張……張撰修ちようせんしゅうでしようか？ あれをご存知でしたか？」

「あー、そんな名あやつたなあ。都か？」

「はい……都に居りますが」

「ふむ」

狗不死は腕を組み、じっと丁常源を見ている。訳の分からない丁常源は白千雲をちらちらと見遣るが、白千雲とて何も分からないのは同じである。

「……あの、張が何か？」

「若いのは血の気が多いっちゅうんはまあ仕方ない事やけど、帰ったらよう面倒見たった方がええなあ」

「狗不死様」

白千雲が再び狗不死の前に戻ってくると呆然としている丁常源の代わりに口を開いた。

「張撰修が何かしでかしたのでしょうか。お教えいただけませぬか。……もしやあの者が丐幫に無礼を――」

「丐幫のモンに礼なんて端から要るかいな。違う。ウチやない。ウチや無いで」

「では……？」

「ほんま、知らんのか？ 張がやった事を？」

「……」

白千雲は険しい表情を丁常源に向ける。丁常源は固唾を飲み込み首を振るだけだった。

「あんたらには災難やけど、弟子を放つといったツケちゃうか。まあ黙って差し出すんやなあ」

「何をでしようか？」

明らかに焦らして楽しんでいる狗不死に苛立った丁常源の声は僅かに怒気を含んでいた。ここでまた、狗不死はフンと鼻を鳴らした。「洪破天が張撰修を殺すで」

狗不死が真顔でそう言い放つ。いつものにこやかな表情は消え失

せ、瞳に鋭い光が宿っている。白千雲と丁常源は驚愕し思わす身体を強張らせていた。

「さて、止められるモンがおるやろか？　んー、やっぱりその張とやらは死んでまうなあ。どう考えても」

小芝居の様に大袈裟に首を捻ってみせる狗不死はもう元に戻っている。

「張の奴だけやったら物足りんかもなあ。そうになったら、厄介やで。なあ、白よ」

「何故、洪破天どのが張を殺すのです？　あれはまだ拙い若者。そもそも洪破天どのと関わる事すら無いと思いますが……。ずっと都から離れてはおりませぬし……」

そう話す白千雲の横で丁常源が心なしか身を縮めているように見えた。

そこへ傳朱蓮が肩をいからせて大股で迫るように戻って来るとそのまま白千雲を睨み付ける。

「それはそうでしょうね。いかに名高い真武剣の子弟と言っても洪小父様から見れば赤子同然。相手にする筈も無いでしょう。その張だって洪小父様に直接何か出来るほどの器量なんてあるわけがないわ。でも……洪小父様の大切なものに手を出されたら……傷付けられたら……そのせいで失ってしまったら！　絶対に許さない！　洪小父様だけじゃない！　私も、私の家族も絶対にその張とやらを許さないわ！」

抑えていた感情を一気に解放したような傳朱蓮の怒声を浴びながら、白千雲はただ困惑するしかない。洪破天に加えて傳朱蓮とその家族までも張を許さないというのだ。一体いつどのようにして張撰修はこれほどの怒りをかう事をしでかしたのか。

白千雲はつい先程まで張撰修という者の事をはっきりと思い出していた訳ではなかった。同じ都には居たが甥弟子でありそれほど頻繁に顔を合わせる訳でもない。姿形ははっきりしてもどのような者であったかその中身までは記憶に無かった。

「張撰修は……何をしたのでしょう？」

「私の弟を殺したのよ！」

傳朱蓮がまるで目の前の白千雲を声で斬りつけんとばかりに鋭く
気を放った。

「そっちは知っとるんやろ？」

狗不死が丁常源に目を向ける。

「洪が都に行った時、あんたに会った言うとったしなあ。殷と一緒に
おった、一年前の春の事や。そんな時連れとった子供、あれ洪の子
——、いや孫かなあ？ 姉弟の二人の内、弟の方を張撰修が殺した
言うてたけど、どうもほんまらしいわ。あんたは知らんのか？」

「まさか！ そんな筈は……」

丁常源は額に汗を浮かべながら視線を地面に彷徨わせる。白千雲
は弟弟子の不審な様子に苛立ちを募らせた。もしこの話が本当なら
ば狗不死の言うように厄介極まりない。相手は洪破天。

（万が一それが真実ならば報復は……張撰修だけでは済まぬ……）

第十三章 八

「はよう帰って確認した方がええな。弟子が無事かどうか。ほんま、難儀なこっちゃなあ」

「しかし……」

白千雲は呟く。

「一年前という事ですが、あの洪破天どのがすぐに事を起こさなかったのは何故でしょう？ 私の記憶にある洪破天のならば即座に我らのもとまで来られた筈。それを一年も？」

「そやなあ。すぐ暴れだしとるわなあ。それをせんかったんは、殷が止めたからや。あの洪がそう言うんやからまあそうなんやろ。……一体何言うたらあの洪を止められるんか知らんけど」

狗不死はしきりに頭を捻っている。洪破天が怒りを爆発させれば誰にも手が付けられないという事は彼を知る者なら誰もが知っていた。

（しかも幼子を奪われないというやないか。あれの事や。これ以上のもんは無いで……）

おそらく殷汪は洪破天のその怒りをなだめる様な事を言ったのではないと、狗不死は考えていた。そもそもそんな事は無理な話なのだ。洪破天はいずれ必ず事を起こす。殷汪はもっと違う方向から、何かものを言った筈だ。狗不死は洪破天からそれを聞き出そうとしたのだが、洪破天はその内容を明かす事は無かった。

「狗不死様？」

白千雲の声で狗不死は我に返ってまたにこやかな表情を作る。

「ま、とにかくはよう帰り。弟子が無事ならそれでええがな。もしあれが都行ってもあんたらがおったらそう簡単には動かれへんやろ」

「狗さん！ 一体どっちの味方なのよ！」

傅朱蓮の怒りの矛先が不意に狗不死にまで及び始める。狗不死は首を縮めて、

「どっちで……儂は別にどっちも……いや、言われへん」

「私は洪小父様に加勢するわ」

傳朱蓮は白千雲に改めて向き直り、大きく深呼吸すると先程までとはうって変わって落ち着いた、力強い声で話し始めた。

「殺されたその子は私の弟です。私は仇を討たねばなりません。お二人からみれば私はまだ剣を振り回すくらいしか出来ない小娘に見えるかも知れません。真武剣派の子弟を相手に何が出来るとお思いでしょう。でも洪小父様と一緒になら、必ず弟の為に戦えると信じています。もしその時が来たら、例え無謀と言われても洪小父様と共に剣を抜きます。真武剣派の高弟筆頭と呼ばれるあなたが私の前に立ち塞がったとしても私は絶対に退きません」

声にも、その眼にも、力が満ちている。白千雲はそれらを受け止めながらゆっくりと頷いた。

「私はまだ事実を把握していない。出来ればその様な時が来ぬ方が望ましいが、事実であればきっとその時は、そなたのその思いを私は理解することだろう」

事実なら受け入れるという事だが、その時、自身は傳朱蓮の前にして剣を抜くか否か――。そこまでは白千雲の言葉には無かった。

白千雲らはその後改めて挨拶を済ませるとすぐさま馬を走らせ去っていった。恐らく真っ直ぐ都へと駆け戻る事だろう。張撰修という弟子が素直に事実を認めるかどうか知らないが、結局は洪破天が再び都へ乗り込むまで事態の進展はあるまいと狗不死は踏んでいた。

「狗さん」

傳朱蓮の声に狗不死が振り返る。傳朱蓮は飛雪の身体を撫でながら呟くように話し始めた。

「あの人達は仇の仲間よね？」

「ん？ ああ……まあそうなるんかなあ」

「さっき切り掛かってたら、どうなったと思う？」

「そらああんた……別に何もならへん。あの二人相手にして何が出

来んねん。向こうかて儂らなんか真面目に相手しても面倒なだけやろ」

「私なんかじゃきつとそうだろうけど……、狗さんだったら――」

「おんなじや」

「嘘」

傳朱蓮は顔を上げてじつと狗不死の顔を見据えていた。

「嘘ちゃうわ。朱蓮、真武剣を舐めたらあかんで。少なくとも陸とその弟子はなあ。他は……まあええけど」

「……そう」

傳朱蓮は消え入る様な呟きの後、飛雪の背を軽く二度叩いてからその背にひらりと飛び乗った。

「私達も行きましょう」

「追いかけるんちゃうやろな？」

「まさか。私達は咸水でしょ」

「せやな」

二人はようやく再び進み始めた。ただ、しばらくは交わす言葉も少なく、それは咸水の村に近付き朱蓮の気がにわかに昂ってくるまで続いた。

「いつかきつと、お父様と一緒に咸水へ帰るのが私の望み」

咸水はもう間近だった。真っ直ぐその方向を見つめながら、傳朱蓮は言う。

「また咸水に住むんか？」

「それは無理ね。家は直せても、やっぱり人の居る処じゃないと暮らしていけないし。それに咸水と繋がりのあるのはお父様と私だけ……。お母様や紫蘭にしてみれば何を好き好んであんな辺鄙な場所について思うでしょう」

「英は咸水の出とちゃうんか？」

狗不死の言う英とは傳千尽の妹である傳英ふえいの事だ。

「叔母様は違うわ。まだ子供の頃にお父様と別れて叔母様は東淵、お父様は咸水で、離れ離れになったそうだから」

「またえらい思い切った別れ方やな。その前は？」

「呂州に近い処らしいわ。今はもう無いみたい。咸水とは違って徐々に人が減っていつて自然と廃れてしまったそうなの」

「……あんたの家族は皆、苦労人やなあ」

「私の家族だけじゃないでしょう？ 江湖には本当に辛い思いをした人で溢れかえってる。今もそこから抜け出せない人も大勢居るじゃない。だから私は多分、まだ恵まれてるんだわ」

そう言う傳朱蓮の表情はどこか物悲しそうで、言葉とは裏腹に納得しきれない処があるのだろう。そんな思いを吹っ切るかの様に勢い良く顔を上げ、空を見上げる。

「……嫌な雲ね」

青々とした空が広がっていた筈が、いつの間にか厚い黒雲が何処からか姿を現していた。今まで眩い光が辺りを照らしていたのが、かえって陽が陰ると随分薄暗くなる様に感じられる。

「降るなあ。風もなんかぬるうなってるわ。咸水ってもうすぐやろ？」

「ええ。この先から西に折れて暫く行けば着くわ」

「周り、何も無いんやろ？」

「無いけど」

「なあ、ちょっと休んでいこうや。ほれあそこ、茶店があるで」

「休んでる間に降りだしたらどうするの？」

傳朱蓮が言いながら狗不死の指す方へ顔を向けると、古びた民家の様な建物がそこにあった。目を凝らすと随分控えめな『茶』の文字がある。よく見つけたものだと感じる。探していたのでなければきっと気付かないだろう。

「多分、『一応、茶店ですけどそんなに客は来て欲しくない』って意味よ。あれは」

「絶対あかん訳や無いんやな？ ほないこか」

狗不死はさつさと馬を進めてその店に向かう。

「まだ降らへんて。夕方頃やろ」

空を見上げて顔を顰めた傳朱蓮に狗不死は振り返って言った。

第十三章 九

しなびたと言っては失礼だとは思ったが、傳朱蓮は店に一步足を踏み入れて見回してから、やはり客を歓迎する様な処ではなかった事を確信した。だがどんな店主が現れても即座に追い払われることもあるまいと思ひ、歩を進める。何故なら隅の方に先客の姿を認めたからだ。旅装束の男二人がこちらに氣付いてか、肩を寄せ合い何やらひそひそと言葉を交わしていた。

「朱蓮、こっちや」

その場所にいた理由などあるまい。狗不死は部屋のほぼ中央の席に歩み寄って傳朱蓮を呼んだ。

狗不死の後に続いた傳朱蓮は荷物を卓上に置いて腰を落ち着ける。すると丁度店の主人らしき初老の男が奥から顔を出した。

「あー、お客さん。すまんが食事は用意出来ない。茶で良いかね？それならある」

主人は二人をさっと観察する様に視線を動かしながら言った。

「『茶』て書いてあったから入ったんや。身体休められたらそんでええ。茶おくれ」

狗不死の返事に、笑みに近い曖昧な表情を浮かべた主人はまたそのまま奥へ引っ込んだ。

傳朱蓮はちらと隅の男達に目を遣る。すると丁度こちらの様子を窺っていたらしいその二人は慌てたように顔を向こうに戻したがその顔ははっきりと見る事が出来た。かなり若い。まだ子供といったも良さそうである。傳朱蓮は小声で狗不死に話し掛ける。

「あの二人、随分と若いみたいだけど、旅をしてるのかしら？」

狗不死が見ると二人は背をこちらに向けていて顔はわからない。だがその体つきを見ればある程度の事は分かる。

「この辺のモンかも知れへんで」

「でもあの格好はどう見ても旅装束だわ」

「ま、そんな事もあるやろ。あんたかて若いのに旅しとるがな」

「まあ、そうだけど」

他愛無い会話だ。若い二人の男も特に怪しげという訳ではなく、しかも傳朱蓮よりも若いと知って警戒する気持ちも幾分和らいだ。

「しかしあれやな。あんたも思い切った事よう言うたなあ。あの白にやで。儂らあんなんよう口に出来へんわ」

狗不死は傳朱蓮の顔をまじまじと見つめながら言う。

「でも、事実だもの。洪伯父様は必ず事を起こすんでしょ？ 発^{はっ}の為に。私は顔も見する事は無かったけれど、媛はもう正式に私の妹。なら、発は弟なんだもの。必ず仇を討たなければ……。私には洪伯父様に教わった剣がある。他の皆には出来なくても、私は発の為に剣を抜く事が出来るわ」

「そやかて、そういうんは『時』が重要なんやで？ それに、力やな。張とかいうんはその辺のごろつきやない。どんなへたれやったとしてもあの真武剣の内の一人や。洪の奴がどんだけ腕が立ったかて、いつでも、どこでも事が成せる訳や無い。そう思わへんか？」

狗不死が傳朱蓮に向かってこんな真面目な話を真面目な顔で言うのはとても珍しい。傳朱蓮は狗不死のその真面目な顔に刻まれている深い皺に目を遣っていた。その無数の皺が言葉に説得力を持たせている様な気がする。

いつも狗不死の口調は軽く平易な言葉しか用いないが、しかしだからといって傾聴に値しないとは言えず、『丐幫前幫主であるところの狗不死』に興味を抱き始めている傳朱蓮はその言葉を注意深く聞くようになってきていた。

「もちろん、そうね。それに私の剣の腕だって、あの人の前ではきつと赤子が喚いているくらいでしか無いわ。きつと捻り潰される」

「ま、仇の討ち方なんちゅうもんは、相手に斬りつけるだけやあらへん。いろいろあるわ」

「例えば？」

傳朱蓮が訊ねた丁度その時、店の主人が近付いて来る氣配を二人は感じた。

「お、ええところに来てくれたわ。おおきにおおきに」

狗不死が満面の笑みを店の主人に向けて両腕を差し出す。主人の手には茶を乗せた丸い盆がある。それをわざわざ立ち上がって受け取って、卓上にそっと置く。粗末な器で見た目はあまり良くなかったが、はなから期待していた訳でもなく、香りは間違いなくちゃんとしたお茶のようである。

「咸水、久しぶりか？」

どう考えてもわざと話題を変えたに違いなかった。下手な芝居のようだったが狗不死はばれていようが何だろうがお構いなしで、当然恥ずかしがることだって無い。傳朱蓮は続きを聞く事は一先ず諦めることにする。

「まだ、そう何度も行っていないけど、二年ぶり位……？ もっと前だったかも？」

「一人でかいな。親父さんはようそんなん許したなあ。二年前で幾つやねん……」

「勝手に飛び出したんだけど。で、せっかく出てきたんだから色々見てこようと思って」

「あんた、恵まれとんで。普通、あんたみたいな若い娘がこんなとこまで来て何とか変なんに襲われなかったとしても、また戻れる程の路銀があらへんがな。家出娘っちゅうんは大概、金に困って終わリや。旅を諦めて大人しく帰るか、それも間に合わんと命が終わるか」

「もう甘さが身体に染み付いちゃってるかもね……」

「あんたが好きな、かの洪淑華かて安県の黄龍門飛び出したんはもうちいと歳いつてからやな。そんな頃にはもうその武芸は殆ど完成しとったっちゅう話や。名は既に売れてたらしいし、食わせてくれる奴も多分そこいらにおったんやろなあ」

「腕に自信もあって、きつとなんの迷いも無かったんでしょうね」

「迷いが無かったら飛び出さへんのちゃうか？」

「……」

暫く無言で当時の洪淑華に思いを馳せる。とは言っても傅朱蓮の抱く洪淑華像は人の噂のみを基に出来ているというその程度である為、ほぼ全てが傅朱蓮の理想で作られている。暫くそうしている内に、ふと思いつく。

「天棲蛇……、『剣』？」

「ん？ 何や？」

「狗さん、東涼に伝わってる洪淑華の話をもとにした歌があるのを知らない？」

「あん？ 何やそれ」

狗不死は身を乗り出して傅朱蓮の予想以上に話に食い付いてきた。だがそれは知らないという答えでもある。

「あの白……、真武剣の白さんの言ってた天棲蛇剣っていうの、たぶんその歌というか話と関係があると思うんだけど」

「どういうこっちゃ？ 儂はそもそも天棲蛇剣ちゅう名すら初耳や。その歌に出てくるんか？」

普段、狗不死は武林の長老の一人とは思えない程、武芸に関する話をする事が少ない。相手が傅朱蓮だからなのかは分からないが、興味が無いという事も考え難く、武芸に明るい洪破天と共に酒を飲んでいいる時にはそんな話もしているのかも知れない。ともかく、あの白千雲らも知らず、狗不死も聞いた事が無いというのだから余程知られていないのだろう。或いは本当の幻か――。

「歌……。元々は歌じゃなかったのかも知れないわ。洪淑華の事を伝える物語を誰かが作って、更に後からそれに節を付けたのかも知れない。でね、その話の中には『天棲蛇剣』という言葉は出て来ない筈なんだけど、天に昇る白い蛇の話なのよ」

狗不死は明らかに全く理解が進んでいない事を表す歪んだ表情を固めている。

「天と、蛇はある。そして天に棲む事にもなる。『天棲蛇』と呼ぶ

事は出来るわ。でも……、『剣』は無い。出てこないの。剣に関する話は」

「ほんでも……、洪淑華の話なんやろ？ その剣術に一切触れへんなんて不自然や。洪淑華といえばまずその剣やないか。他ゆうたら……、黄龍門の兄弟子との色恋話しか残らへん。んん？ そもそも洪淑華にまつわる話が何で白蛇なんや？」

「龍が出てくるわ。金色の龍よ。それはきつと、黄龍門を指してるんだと思う。黄龍門の、洪淑華の兄弟子、可子慮かしりよをね。白い蛇はずつと金色の龍を追い続けて、ついには天にまで追っていくというお話。だから——」

「蛇は洪淑華、か」

第十三章 十

「その歌——物語は全て、その白蛇が心情を吐露するその言葉なの」
狗不死はじつと考え込むように黙り、暫くしてから口を開いた。

「作者は洪淑華本人っちゅう訳か」

「必ずしもそうとは言えないとは思うけど。でも、そうね。人に自ら聞かせたとは思えないような、そんな箇所もあるから」

「ほんでも残ってるっちゅう事は書いて遺した部分があるとか、そういう事やろなあ。で？ 天棲蛇剣て何や？」

「解らないわよそんな事。ただ、関係ありそうだって思っただけよ。いえ、絶対にあるわ」

傅朱蓮はそう言ってから茶の入った器を手にとって、香り確かめてから少し口に含んだ。

狗不死は禿げ上がった額を撫でつつ目を細め、宙を眺めている。

「黄龍門なあ……。安県の方はまだかうじて弟子が残ってるし失われてへん。全部はな。言うてもその弟子も皆方々に散ってしまってるけど。東涼の方は……。あかん。何も無い筈や。せやから陸も躍起になっとんや」

「ねえ、狗さん。狗さんは本当に歌の事、知らなかったのよね？」

「そうや。初めてやそんなん聞いたんは」

「じゃあまだ他に東涼黄龍門に関わる何かが何処かにひっそりと残ってる事も有り得るんじゃない？ 武林の誰もが気付いてない、何か」

「……まあ、そらあ無いとも言えへんなあ。ほんでもな、そんなんがあつたとしても、多分真っ先に見つけるのはあの陸やで。あれはちよつと変わっ тоннねん。自分の編み出した真武剣を仰山人集めて教えとる。もう、あー、四十年か？ せやのに、まだ納得してへんねん。あの総帥様は。もつとすごいモンがあるんとちゃうか？ どこぞに落ちてたりせえへんかなあ？ ってなあ」

狗不死が顎を突き出して辺りを見回す仕草を見せるが、もしあの白千雲がまだ居たなら流石にこれには腹を立てるのではないかと思えるほど滑稽な動きだった。

「せやから秘伝書や。そんなあるなんて聞いたらもう、我慢でけへん。で、ちよつと借りたらあんな事になってしもた。いや、陸は殺されたあの何とかちゅう爺さんなんかどうかどうでもええ、とにかく秘伝書、何が何でも秘伝書——とか考えてんのんとかやうか。うん。多分そうやで」

狗不死の言う陸皓という人物は随分と節操が無い様に聞こえる。しかもそれを隠す事無く貪欲に求めているという。武林に生きる一人の武芸者としてみるならば何もおかしい事では無いが、彼の場合、既に特別な場所に居るのである。人を集め、自らの持つ最高を伝授してきた筈であった。本心がいかようであろうとも、そんな胸の内は秘しておくべきであろう。

尤も、白千雲の言葉から想像するとあからさまに他所の武芸を漁る姿を見せている訳ではなく、ただ、真武剣派総帥という姿以外にも長年、武学の泰斗と呼ばれた探求者の一面があり、本人は双方を区別しているという事のようなのだ。それを教え伝えるべき人間は、何も真武剣派の弟子とは限らない。何もおかしくは無い。それが『真武剣』とは違うのならば——。

「でも、意外だわ」

「ん？ 何がや」

「あの陸総帥が東涼黄龍門の事を認めていたなんて。有名だけど……、創始者は女性だし」

「んん？ あれは少なくとも男や女やいうて分けて考えたりはせえへんで。そやなあ、陸は黄龍門っちゅうより洪淑華個人を評価しとんやろな。その後にはなあんも残らへんかった。指導者としては評判はあんまりようないけどな」

「どうやって当時の事を知るの？ その剣術がどんなだったか、陸総帥はどうやって調べてるのかしら？」

「さあ、東涼で昔話が無いか訊きまくる、とかか？ ……それはそうと白の話、なんかおもしろい事言うてたな」

「え？」

「白千雲が言うてた、殷の剣はその洪淑華のなんたらしいのんに影響受けとってどうたらこうたらしいやつや」

「本当かどうかは怪しいわ」

「変やなあ」

そう言うって天井を見上げた狗不死は、何か面白い想像でもしているらしく口許が笑っている。

「陸の奴、いつ、それ考えたんやろ？」

「え？ 考えた？」

「儂らにとってはな、洪淑華に関係のあるらしい書なんちゅうのは、それこそ初めて聞く話なんや。この武林の人間、殆どがそうや思うで」

狗不死は大きく両の腕を広げ、宙に円を描くようにしながら、武林の、とその大きさを強調した。

「陸だけはどうなんか解らへん。初めてやないかも知れん。この間出てきた秘伝書見て、『あ、これ殷のやつや！ あいつのんは洪淑華の武芸やったんか！』とか思ったとでも言うんかいな？ そんな、うまい具合に秘伝書の中身と殷の剣術がぴったり合うもんやろか？

陸の利口な頭にだけ、そんな短い間にそれが解るんか？ 多分、

陸は秘伝書がどうのいう前から洪淑華の剣がどういいうもんか知ったんや。『優れた人物の一人』いうて常々口にするいう常々ちゅうのは、秘伝書が出てきたついこの間からこっただけの話か？

んな訳ないやろ？ そうすると、何も陸は洪淑華の武芸について、今回初めて知った訳や無い。他にも何か、陸にまで伝わるに足る状態の何かがあんねやで」

「陸総帥と――」

じっと聞いていた傅朱蓮は真剣な眼差しで狗不死を見返している。「殷兄さんは、直接剣を交えた事があるの？」

「んー、いや」

狗不死は一度首を捻ってからそう答えた。

「少なくとも一、二回——北辰と真武剣が本気で喧嘩しとった時に会うてる筈やけど、互いに剣を向け合う場面があったとは聞いてへんな。せやから、無い」

あれば武林はその話題で騒然となった筈だ。その頃既に洪破天に剣を教わっていた傳朱蓮の耳にも当然入る筈であり、傳朱蓮はそれもそうだと狗不死の断言するその答えに納得した。

話は尽きない。傳朱蓮が興味を持つ事柄は皆、良く解らない、謎である、そんなものばかりだった。だがとりあえず今は時に限りがあるののでいつまでも話し込んで居られない。

「そない急がんでも」

「狗さん。この店で寝るなんて選択肢は今のところ無いのよ？。そしてほら、あの雲、絶対にあたし達を困らせるつもりでいる。ようやく辿り着いた此処は咸水と目と鼻の先。私達が村に着くのが先か、あの黒雲があたし達に襲い掛かるのが先か、どちらが勝つか今が勝負どころよ」

「勝負で……朱蓮、あんたはやっぱりまだ子供やな」

そう言って笑った狗不死だったが、傳朱蓮はそれに構うことなく続ける。

「どうかしらねえ。私達が負けたらどうなるかしら？ 見てよあの黒さ。相当一気に降らすわよ？ ちよつと濡れていくつてだけじゃ済まない。随分とみつももない負けになるわ」

「雨に濡れるんがそんなみつももないんか？ 儂なんか全然平気や。狗で乞食で——」

「ハア……狗さん。子供みたいな『若い娘』の私にも、もうちよつと気を使って頂戴」

傳朱蓮が背を向けている窓からは確かに厚い黒雲が東の空から押し寄せてくる光景がはっきりと見えていた。

第十三章 十一

咸水はもう目前だが、追ってくる黒雲もいつ激しい雨を落とし始めてもおかしくないとどこまできている。茶店を出た二人は少し進むと街道を逸れ、人の気配の全く無い細道へと入っていった。

川があり、その上流へと向かえばその先は咸水の村しか無く迷う事は無い。本当に他には何も無いのだ。そして少し進んだだけでもう道と呼べるような場所も消える。傳朱蓮の記憶にある道は背の高い草で覆われ、そこからは想像で進むしかなかった。ただ右手に流れる川だけは昔と変わらないままなので、それが唯一の案内となる。馬が踏み分ける草の音を暫く黙って聞き続けていたが、不意に狗不死が声を出した。

「なんや、人おるがな」

傳朱蓮は視線を上げ先を窺うと、自分達と同様、馬でこちらに向かって来る数人の姿を認めた。こちらに来ると言う事はまず間違はなく咸水の村へ行ったに違いない。馬に乗って行動しているという事はこの付近の住人ではないだろう。咸水の名は有名である。通り掛かった旅人がちよつとした興味で立ち寄ってみたといったところだろうと傳朱蓮は思った。

向こうがほんの一瞬、進む速度を緩めたのを傳朱蓮たちは見逃さなかった。こちらを窺いつつ言葉を交わしたようにも見えた。

「なんや、警戒してんなあ。こっちのほうが怖いっちゅうねん。なんかでっかいのおるで」

「『あの咸水』から出てくる者と向かう者、怪しさはお互い様よ」

傳朱蓮がそう言って気にも留めない様子で馬を進めていくのを狗不死は眺めながら笑みを浮かべた。

「失礼致します——」

意外にも傳朱蓮からその集団——といっても旅人風の男四人だけ

であつたが――に声を掛けた。男達は注意深く傳朱蓮を観察するよう
に視線を送つて来たが、特に不審な挙動を見せるでもなく落ち着
いて堂々としていた。聞けば咸水の村へ行つた帰りだという。当然
だ。この道で出会うという事はそれしか考えられないのだ。

誰かを探しているのか、と先頭に居た一人が訊いてきた。傳朱蓮
は何故いきなりそんな事を訊くのだろうと疑問に思う。ただ意味も
無く咸水の村に向かう事は有り得ないとも思っているのだろうか。
ではそっちは何の用があつたというのか？

傳朱蓮は何かを訊きたかつた訳では無く、ただ言葉を交わして何
ら敵意など持ち合わせていない事を示し、何事も無くすれ違ふ事が
出来ればそれで良かった。何か特殊な用事があつたとしても、彼ら
に教える必要などない。

狗不死はというと、にこやかに笑いながら男達と言葉を交わして
いる。その姿を見ながら、こんな些細な事で余計ないざこざを招く
ような事があつてはならないと思ひ直した傳朱蓮はとりあえず丁寧
な言葉を返しておき、一人早々とこの場を離れようとした。

その時である。四人の内の一人が意外な事を口にした。『老婦人
と若者を見た』というのだ。男は続けて訊いてくる。

「あなた方も真武剣派の？」

この男はまず最初に『誰かを探しているのか？』と訊いてきた。
初めから傳朱蓮たちを真武剣派の者で武慶の殺人犯――真武剣派に
とつては秘伝書の強奪者か――を追っていると踏んだのだろうか。
真武剣派の話は知れ渡っている。男達がどこか遠い場所から旅して
来た者達であつたとしても、知っていてもおかしくは無い。ただ、
傳朱蓮がその男の口調から想像するに、武林と全く無縁の者ではな
い様な気がした。

狗不死がその男の問いを否定すると男の方もそれ以上言う事は無
いらしく話は終わり、そのまま何事も無く男達と離れた。男達は傳
朱蓮と狗不死の後姿を暫く見送ってから去つて行つた。

傳朱蓮の頭の中はその老婦人と若者とやらで一杯になっている。

最近住み着いたのだろうか？　しかしあんな場所でどう生活するといふのだろうか？　何より、昔の事とはいえ、多くの人間が惨殺されたあの村に居るといふ事に抵抗は無いのだろうか？

とにかく行けば解る筈である。傳朱蓮は先に見える咸水の入り口となつてゐる谷間をじつと見つめた。

「あいつら絶対この辺のモンやないなあ」

狗不死の言う通り、確かに先程の男達は少し人目を引く風貌をしていた。先頭に居た男は肌が白く良い身形をした壮年であったが、あとの三人は中原ではあまり見かけないほど肌が焼けており南方から来ている事は明らかだった。その内の一人は体格が一回り大きく、傍に居るだけで息苦しさを覚えそうな迫力を持っていた。

「どこかしら？」

「言葉は普通やったし、こつから真南に行つたら城南あるけど、あの辺やったらあんななるかもな」

「城南？　相当、遠いんでしょ？」

「東淵から此処まで来るんとあんなり変わらへんのとちゃうか？　どっちも遠いがな」

「城南か……」

「行かへんで」

「まだ何も言つてないけど」

「北国育ちがあんなところ行つたらな、一日もたへんで。血い沸いて死んでまうわ」

傳朱蓮は狗不死の軽口を適當に聞き流しながら、あまりにも広いこの江湖に思いを馳せる。父、傳千尽と、洪破天、殷汪の三人が赤子の自分を連れて江湖を渡り歩いた話は何度も聞いているが、咸水から流浪の旅に出て東淵に辿り着くまで、十年彷徨つたという。自分にも記憶に残っている出来事は幾つかあったが、その土地が何処でどのような処であったかまでは覚えていない。それに殆どが旅の後半である。傍にはいつも姉、紅葵（あかぎ）の姿があった。彼女はもつと覚えてゐるだろうか。

（こんなに広いのに、簡単に見つかる筈がないわよね……。ましてや人なんて……）

「朱蓮！」

不意に狗不死が語気を強めて名を呼んだ。

「えっ？」

「行かへんで！」

咸水の入り口、天然の門の様な谷に分け入ると、天候が崩れてきているのもあって辺りは更に薄暗かった。川のせせらぎや鳥のさえずりもどこか寂しげに聞こえてくる。

「なあ、村で野宿とかなっても……出来るんか？　せめて屋根無いと嫌やで」

「贅沢な丐幫幫主様ね」

「そら、『幫主様』やし。前のやけど」

「大丈夫よ。それに……人も居るそうじゃない」

「ほんまに人やったらええけどな。ちゃうもんやったらえらいこっちゃ」

「……今は人じゃなかったとしても、私と同郷なら仲良くなれたりして」

「頼むで。ちゃんと話つけてや」

二人が話している間に谷は徐々に開けていき、村は姿を現し始める。広く江湖に知れ渡った廢墟、咸水は勿体ぶる様子もなくその無残な姿をあっけなく二人の前に晒した。

「ここが……咸水の村」

呟くように言った傳朱蓮の隣で、狗不死は呆然と辺りを見回していた。

「なんや……古いんか新しいんか、ようわからんなあ」

朽ちた家々の隙間を覆い尽くす新緑。確かにとうに枯れ果てた廢墟ではあるのだが、すぐ脇の若葉に目を遣ればその艶やかさが際立っている。その組み合わせが時の流れというものを強烈に感じさせ

た。

「やっぱり、何も変わってないわ。此処はもう変わりようが無い……、変わる必要もないのかもね」

「どんなもんでも人が変えるもんや。待つつてもしゃあない」

そう言っ先を行き始めた狗不死の後に続いて、傳朱蓮も村へと入っていく。

第十三章 十二

大手を振って先を進む狗不死だったが、暫く行くと不意に足を止め、傳朱蓮を振り返った。

「どっち向いてもおんなじやないか。何処に向かったらええんや？」

村の痕跡である朽ちた民家はどれも同じに見え、まるで侵入者が方角を見失うのを狙って配置されたかの様に思えてしまう。まだ人が住んでいた、傳朱蓮が生まれる以前ならばそれらはきつとそれぞれ違う形をし、違う色であつたろうし、商いをしていた処ならば客を呼び込む旗指物くらいはあつたに違いない。傳朱蓮の生家であればきつと商材である薬の文字を掲げていた事だろう。傳朱蓮はその生家がどれなのかも知らなかった。それを知るには傳千尽か洪破天を此処へ連れて来て教えて貰うしかないが、二人ともこの村を離れて以降一度も、此処へ戻った事があるとは聞いていない。

「とりあえず一回りしましょう。誰か居るならすぐ気付く筈よ」

傳朱蓮はそう言って自ら先に立ち、進み始めた。

全てが同じに見えようと、往年の姿を一切記憶していなくとも、この村は特別な場所である。懐かしいというのではない。村を奪われ悲しいわけでもなく村の息の根を止めた邪悪な者達への怒りでもない、しかし確かにある、他の場所では生じなかった湧き出でる感情。それが何なのか傳朱蓮には良く解らなかったが、崩れた廃墟に送る眼差しにはその何かが多分に表れていた。

だがその視線はすぐに変な違和感へと引き付けられる事になる。

視界の端に、動きを捉えたのだ。すぐさま狗不死が低く抑えた声で傳朱蓮の名を呼んだ。

「誰か居る」

傳朱蓮も声を落として言ったが、二人とも身を隠そうとはしない。隠れる必要が無い。それに、当の『誰か』はこちらに気付いておらず、二人の向かっている先で何やら作業をしている様だ。草むらの

中なので何をしているのかはつきりとは見えないが、その姿から危険な気配は感じ取れない。この村の民――この村が生きていた二十年以上前ならば当然そう思っただろう。

暫く様子を窺う傳朱蓮と狗不死であつたがその者は一向にこちらに気付かないままで、どうやら何かを引き摺ってこちらへ来ようとしているらしいのだが思う様に動かせずいらついている、そんな挙動を見せていた。黒い服を身に付けた男で、伸び放題の髪を振り乱し、引き摺っているその何かに向かって時折悪態をついている。声は聞こえないが遠目に見てもその様子が良く分かる。

「此処のモンなんやろなあ」

どう考えても傳朱蓮たちの様に村に立ち寄った旅人ではない。やはり暮らしているのだろうか。この咸水の村で――。

「話を聞いて見ましよう」

そう言つて傳朱蓮が馬の腹に足を当てたその時だった。先の男が飛び上がるように体を仰け反らせ、こちらに顔を向けた。余程驚いたのだろう、急に走り出したその男は体勢を崩して地面に転げそうになるのをかろうじて堪えながら、朽ちた民家の陰へと飛び込んで姿を消した。

「あつ、待って！」

「逃がさへんで」

二人は同時に馬を駆つて後を追ひ始める。

（聞こえてたら益々必死に逃げるじゃないの！）

傳朱蓮は狗不死を横目に見ながら文句を呟いたが、狗不死の方は眼を輝かせながら一目散に駆けていく。

男が逃げていった先には村を囲む山の斜面が近くまで迫っており、そのまま山の中へと逃げ込んでしまふかも知れない。男が身を隠した民家まではすぐに来れたがその陰を覗くとやはり男は更に逃げた様でその姿は無かつた。

「いくで」

狗不死は馬を降りると地面に足を付けた次の瞬間、身を躍らせて

民家の屋根へと飛び上がる。

「崩れるかも知れないわ！　気を付けて！」

「あ、そや」

狗不死は飛び上がってしまった後で傳朱蓮に言われて気が付いたらしかったが、好運にも屋根は狗不死の小柄な身体を受け止めるくらは頑丈さを保っていた様だ。狗不死が屋根に着地した時、音は全く無かった。

（そういえば、狗さんの軽功、初めて見たわ……）

民家の屋根に飛び上がるというのは軽功と呼ばれる武功に属するものだが、武林で功夫を学ぶ者にはまず必須の技と言って良いだろう。何も屋根に上がる為に学ぶわけではないが、そのくらいの身体能力を身に付けなければ武林に数多ある武術を有効に用いる事は難しい。当然、武林の重鎮の一人である狗不死にその程度の事が出来ぬ筈は無く、まさに字の如く兎戯に等しいわけだが、何故か傳朱蓮がそれを目にする事は今まで叶わなかった。狗不死が武功を披露する場面に出くわす事が皆無だったのである。着地に全く気配を感じなかった傳朱蓮は感心しきりであったが、それを口に出せばかえって武林の大先輩に対して失礼にあたると思い、口を噤んだ。

「あっ！　登っていきよるで」

狗不死は屋根の上で山を指差している。傳朱蓮はそれを見て再び駆け出した。

斜面を駆け上がっていく男の姿がはっきりと見て取れる。傳朱蓮はその動きに注目した。男は意外にも機敏に木々の合間を縫って駆け上がっていく。

（あの人……心得があるのね）

逃げて行く男は間違いなく軽功を用いている――そう思った途端、傳朱蓮は無意識の内に自らの体内の気に意識を集中させた。無理に追う必要など何処にも無い。しかし傳朱蓮は追わずにはいられなくなってしまうのである。そして気合一閃、衣服の裾が風を切る音と共に山の斜面に飛びつかんとばかりに跳躍した。

(追いつける)

すぐに傳朱蓮は確信する。男の軽功は自分のそれほどではない。それに男は早くも息が乱れているらしく時折体勢が不安定になっている。先程まで何やら重い物を引き摺っていたのだから当然だろう。傳朱蓮が男のすぐ背後に迫るまで、時はそれほど必要ではなかった。再び傳朱蓮は短く鋭い気合を発して跳躍し、軽々と男の頭上を飛び越えてそのまま男の前に舞い降りた。

男は驚いて地面に崩れるようにして止まったが、声は出さなかった。傳朱蓮はその様子を見てついニヤリと不敵な笑みを男に向けてしまう。何も勝負をしていたわけでは無かった筈だが相手に心得があると思っただけで妙な闘争心に駆られてしまったのである。

傳朱蓮の脳裏には、前に見た夢の場面が蘇っていた。山の斜面を飛ぶ様に駆け上がるあの爽快感。男が自分より僅かに劣っていた事でより強く自分の技に酔う事が出来たのかも知れない。地面に這いつくばる男を見下ろす。

「あっ！」

男の第一声は心底驚いているといった感じのうわずった叫び声だった。男の目は真っ直ぐ傳朱蓮の顔へと向いている。その声で傳朱蓮は我に返った。

「ごめんなさい。驚かすつもりは無くて――」

初めて男の顔を近くで見た傳朱蓮は、目を丸めて、あっ、と小さく驚きの声を返す。

「あ……あ……、ほら……あの……、ほら」

傳朱蓮は男の顔を指差しながらしきりに口を動かすが言葉が続かない。

「会って早々、ほらって何だよ……」

男がそう言っただけでと項垂れた。とりあえず驚きは収まったらしくそんな事を言う。傳朱蓮は慌てたように男に駆け寄った。傳朱蓮は男に見覚えがあったのだ。

「だっ……て、ほら、私、知ってるでしょ！　ほら！　あなたは……」

…」

「つまり…名は忘れたわけだ。そうだよな。忘れられる為にこんな処に居るんだから」

そこへ狗不死も追いついて来た。笑みを浮かべながら、

「速いなあ、二人とも」

「狗さん！ ほら！ この人…」

傳朱蓮は狗不死に向かって言いながら、男の肩を掴んで揺すっている。男の方は揺さぶられながらも後ろの狗不死を振り返って、また驚きの表情を固めていた。狗不死も身を屈めてまじまじと男の顔に見入る。

「おお！ 真武剣の。あんた、田^{でん}いうたか？ こんなところで何しとん？ 逃げたんちゃうんかいな」

狗不死の方が若い傳朱蓮よりも覚えが良かった様である。

第十三章 十三

「そう！　そうよ！　田さんどうして此処に？」

傳朱蓮が一層力を込めて男の肩を揺さぶった。男は一年前、朱不^{しゅふ}尽^{じん}の？局と共に武慶からやって来た真武剣派の門弟、田庭閑^{でんていかん}だったのである。当時は真武剣派の門弟らしくそれなりの身形をしていたが、今は殆ど浮浪者と言って良い。衣服に見覚えがある。この一年の間に檻褌布へと変化してしまう程、酷い生活を続けてきたに違いない。

「……どうしてかな」

田庭閑はそう言って首を捻った。

「こんな処に居て、大丈夫なの？　真武剣派は今、方々をうろついているのよ？　知らないの？」

「知ってる。何度か来てるしな。此処にも」

「じゃあどうして？　都だって近くはないけど、此処では……」

「見つからないよ。心配ないさ」

「私達には見つかつてるじゃないの」

「ついさっき変なのが来たんだ。そいつらがもう行ったから油断したのさ。こんな入れ替わりで更に人が来るなんて今まで無かったんだ。でももうしない。今、学んだから」

田庭閑は言いながら若干ふらつきつつ立ち上がった。

朱不尽の？局が得体の知れない賊の襲撃を受けた時この田庭閑も同行していたが、多くの者が殺され田庭閑も自らの真武剣でもって抵抗したが賊の数とその力の前になす術が無く己の無力さを痛感した。？局は仕事を断念して引き返す事にしたが、田庭閑は再び武慶に戻る気にはなれなかった。自分は通常の弟子ではなく思う様に修行も出来ない。それまではそんな境遇に甘んじて遊んでばかりだったが、？局の事件でこれでは駄目だという事をまさにその命に力づくで刻み込まれてしまっていた。そしてそのまま？局と東淵で別れ、

一人、江湖を彷徨い始めたのだった。気ままで甘い人生に浸かってきた田庭閑は、いきなり過酷な世界に飛び込んだのである。一日を無事生きる事さえ容易くは無かった。それが今、一年の時を経て傳朱蓮と再会出来たのは運が良かったと言えるだろう。だがまだ終わりではない。この廢墟である咸水は人が生活するのに適した場所などでは到底無いのだ。

「来る時、すれ違った人たちが居たわ。何者だったの？」

「さあ、真武劍派じゃない。知らない奴らだったよ」

「何をしていたの？」

「特に何もしないで帰って行ったよ。ちょっと見に來ただけだった」
「でも……その度にこうやって隠れるの？ やっぱ此処は……」

「此処に居るのは、……俺だけじゃないんだ」

「あっ！ そう、お婆さんが居るって聞いたわ。今、何処に？」

傳朱蓮は興奮気味で再び田庭閑の肩に掴みかかろうとする。田庭閑は身体を退いてそれを避けた。

「あ、ごめんなさい」

「いや……」

互いに沈黙して見合っていた。

「その……、元氣……だよな。そんな、感じだし」

「ええ。あなたも一応、元氣そうね。随分汚れてるけど」

そんな会話の後、互いににやりと笑い合う。それを狗不死が横から覗き込んだ。

「なあ、住める家がどっかあるんやろ？ とりあえずそこ行っかって話したらどうないや？ 雨、もう降ってきよるで」

見上げれば木々の隙間に見える空は煤の様な黒さだった。田庭閑が言う。

「とりあえずうちに……うちって言っても家の様には見えないだろうけど。あ、でも……」

田庭閑は何かを思い出して顔を顰めている。

「その、お婆さんってのがちょっと普通じゃなくて、追い返そうと

するかも知れない。いや、多分する」

「私達は別に何もしやしないわ。ただ立ち寄っただけで――」

「いや、あの人はとにかく誰でもすぐに出て行かせようとするんだ。此処に入って来た者には」

「なんでや。この村はその婆さんのモンなんか？ んなあほな」

「一応、昔、この村の住人だったらしくて。俺には本当かどうか確かめようが無いけど」

「そんなんこの朱蓮かておんなじや。れっきとした元住人やがな。

此処に住み着いたって文句言われる道理が無いで」

「まあ、それを話せば、なんとかなる……かも知れない」

「相手が真武剣でも？」

傳朱蓮がそう訊ねると田庭閑は改めて二人に向き直り真剣な眼差しで、

「本当に普通じゃないよ。充分に警戒した方が良い。此処から先は今だって……何処かで見てるかも知れない」

「えっ」

思わず傳朱蓮と狗不死は辺りを見回す。

「そんな危険なんか？」

「いきなり襲ったりはしないけど、その気になれば出来ると思う。恐らく」

「つまり、そのお婆さんは武芸が出来る……って事？」

田庭閑は傳朱蓮に頷いて答えた。

「ま、とにかく行ってみよか。会ってみんと何もわからへん」

「そうね。最初に話が出来るなら何とかなるでしょう」

それから三人は田庭閑を先頭に山を下り始めた。登ってきた時には何とも思わなかったが、意外にも随分と高い処まで登っていた事に、傳朱蓮は今になって気付く。それほど田庭閑を追うのに夢中だったのだろう。その間、周りが一切見えていないのだ。

（これでは、駄目ね……）

山を下りながら傳朱蓮は一人反省していた。

「あー、ちょっと待って。これを……」

山を降りて民家の傍までやって来た時、田庭閑がそう言って草むらに向かう。その先には黒々とした塊が草に埋まるようにして在る。田庭閑が引き摺っていた物だった。傳朱蓮が近寄って見てみると、それはかなり大きな猪で全身が血で黒く染まっていた。

「これ、田さんが捕まえたの？」

「いや、罠だよ。俺にはまだそんな芸当は……。き、君ならその背中
の矢で容易く捕まえられるんだろうけど」

田庭閑が言くと、傳朱蓮は急に笑い出した。

「田さん、変。変よ」

田庭閑は怪訝に思い、傳朱蓮を見つめる。

「……何が？」

「だって、私の事、『君』とか。あー可笑しい」

「そっ、それは、いや前もそう言ってた筈だ！ 他に、何て呼ぶんだよ！ 前から、『君』だったろ！」

「嘘。ちゃんと名を呼んでたわ。『朱蓮』ってね」

「……それは、あの范はんだろ」

「え？ ……そうだったかしら？」

「そうだよ。俺の名前も忘れてんのに、そんな事まで覚えてる筈がないさ」

「そう、だったかなあ」

「范はいつも君を『朱蓮』て呼んでた。ちょっと馴れ馴れしい感じ
でさ。楊ようは『朱蓮さん』。真面目だしな。俺は……、『君』……」

「良く……覚えてるのね」

「たかだか一年前じゃないか。……あいつらの事は、忘れないさ。
きつと、……一生」

第十三章 十四

田庭閑は猪の足を両手で掴んで体重をかけながら引き摺っていいこうとするが、あまりの大きさに遅々として進まない。滅多にお目にかかる事はない大物に違いないが、既に異臭を放っており血みどろのその姿は傳朱蓮の目を背けさせるのに充分だった。

「急がないと。狗さん、手伝ってあげてよ」

「儂かいな！ 老人に何さすねん」

「私なの？ 私がこれを引っ張るの？ この格好の私が？」

傳朱蓮は旅装束とはいえ薄緑の上等な衫を纏っている。狗不死はといえば常に同じ、古い襤褸の野良着だ。どちらがこんな作業に向いているかは比ぶべくもない。

「……この肉食わせてくれるんやったらまあ手伝わん事もないけど？」

狗不死がちらと田庭閑を見るが、

「これはあのお婆さんの獲物だから……何とも」

「婆さんの獲物で、これ食うんやろ？ あんたも食えるんちゃうんか？」

「さあ？ 俺は何もしてないから。罨を仕掛けたのは俺だけとお婆さんの指示というか命令で……、罨そのものもお婆さんが作った物だし」

「どんな罨やねん。朱蓮、見てみいな。腹のど真ん中にでっかい穴空いてんで」

狗不死の言うとおり猪の腹は無残に破れ、飛び出した臓物を引き摺っている。よく見れば前足が一本、今にも千切れそうな程その付け根が大きく裂けていた。狗不死が指差すが傳朱蓮は一層顰めた顔を背けた。

「狗さん！ もう雨が来るわ。早く家に入りたいでしょ？」

「雨に濡れる方がよっぽどましや！ なあ、これ置いていったらあ

かんのか？ 何にもかかってませんでした言うたらええがな」

田庭閑は力なく頭を振る。

「今までかからなかった事は無いんですよ。一度も」

「それがどないしてん？ 『おかしいなあ』とかなんとか言うて首捻ってたらええやないか」

「今晚は良くても明日、殺されます。俺が」

そう言う田庭閑の表情からして冗談では無いらしい。そしてまた少しずつ、一人で引き摺りながら進んでいく。

「お婆さん、村を毎日見廻るから。それも一度だけじゃない」

「そらご苦労なこっちゃ。儂の村に変なんが入ってへんかいうて見てんのかいな」

「まあ、そんな感じかな」

『お前も一緒に出て行くが良い。明日、死なずに済む』

「……なんや？」

「聞こえてない訳が無いか……」

田庭閑はそう呟くと、掴んでいた猪の足を放り出した。

「聞いてくれ！ この人たちは、この、お嬢さんはこの村の生まれなんだよ！ 俺が言っただろう？ 東淵の、傳さんの娘なんだ！」

急に叫びだした田庭閑を、傳朱蓮と狗不死は呆氣に取られて見つめていた。だがすぐさま辺りに視線を配りながら気配を探る。不意に聞こえた自分達とは別の声を、聞き逃してはいなかったからである。田庭閑も声の主が何処に居るのか判っていないようで、首を盛んに回していた。

田庭閑はすでに東淵の傳家の話を老婆に聞かせていた。そうでなければこの村に居付く事は叶わなかったのだ。この村の出である傳千尽に世話になった事、同じく洪破天の事も知っているという部分を強調して老婆に嘆願したのである。行き場の無い自分をどうか此処に置いて欲しいと。

傳朱蓮が声を上げる。

「父はこの咸水で薬の商いをしていました！ 傳千尽を覚えておられますか？ 私は娘の傳朱蓮と申します！ 姿をお見せ下さいませんか！ どうかお話を！」

『あと一人の名も、聞いておこうか』

少しの間はあったものの、返って来たのは感情が読み取れない低く抑えられたしわがれた声。どこに居るか判らないというのに耳元で発せられているかの如く明瞭な声は、益々こちらの不安を煽ってくる。

「儂か？ 儂の事やな？ 儂はこの傳朱蓮の連れや。丐幫……いうても知らんか——」

狗不死はというと、特別警戒している様子も見られない。普段通りである。

『丐幫の……狗幫主』

「知つとるんかい！ 『前』幫主やけどな。あんた、武林のお人やな？ こっちも分かってんで？ あんたとよう似た事しよる奴、知ってるしな」

狗不死も声を張るが、相手が何処なのか分からずに会話するというのは非常にやり辛い。

（これで真後ろから出てこられたらめっちゃ格好悪いなあ……）

そこへ傳朱蓮が近付いてきて顔を寄せた。

「ねえ、狗さん本当に分かるの？ お婆さんが誰なのか？」

「そんなん知るかいな。でもこの息針そくしんの功夫は珍しいで。使うもんは限られるわな」

「……北辰の林玉賦りんぎょくふ？」

「当りや」

「まさか。こんな処に――」

「いや、ちゃうがな。林がおる訳無いやろ。ほんでも、無関係とは思えへん。そんだけ貴重なんや、この技はな」

田庭閑が驚きの表情で二人の会話に聞き入っていた。

「お婆さんが北辰七星の縁者？ そんな、馬鹿な……」

『もしそうだったらどうするね？ お前を傷付けた北辰教の仲間だ。復讐に挑んでみるか――』

「まだ北辰かどうかは判って無い！ ……だろ？」

田庭閑が言葉の最後に傳朱蓮に同意を求める。傳朱蓮はそれに頷いて答えた。？局を襲った下手人は未だ不明のままである。

その時、ついに空から雨粒が落ち始めた。

「あー！ もうあかん！ 一先ず逃げや、逃げ」

狗不死が急に走り出した。といっても向かったのはすぐ傍の崩れた民家の軒先、かつては屋根の一部であったであろう部分のその下へと身を屈めて入って行ってしまった。

傳朱蓮と田庭閑は戸惑って顔を見合わせる。今話している老婆を無視して移動して良いものか？ しかし何処にいるのかも判っていない。老婆は雨に濡れない場所に居るだろうか？

「二人とも早う！ そいつはそこに置いといたら雨が綺麗に洗ってくれるて」

狗不死が指差すのは寝そべった大猪。確かにいつ止むか知れないこの雨に打たれれば全身の血は洗い流されるだろう。その雨は急激に激しさを増していく。傳朱蓮と田庭閑は仕方なく狗不死のいる民家へと揃って駆け出した。

「これ、数日止めへんかも知れんで？ どないすんねん。朱蓮、あの婆さんと仲直りせえ」

「喧嘩とかしてませんから」

「いや、あんたが来た事でこの村の主の座が危うい事になってもうてるんや。そらあ婆さんにしてみたら生きるか死ぬかやで。まさか村の生き残りが他に現れるなんてなあ。これから何処で生きてけばええんや？」

「私は村の主になんかならないし、仮に住んだとしても追い出す必要なんて無いでしょう？ そんな事より、お婆さんどうしたかしら？」

老婆の声は聞こえて来ず、辺りは激しい雨音が響くだけだった。

「どうかな。君が傳朱蓮だっていうのが少なからず効いたとは思うけど……」

田庭閑はそう言って外を覗く。

「そんならもつと懐かしがってもええやないか。何であんな陰のある物言いなんや？」

「何十年も経てば、誰だって……戸惑うわ」

傳朱蓮がそう呟いた後も、やはり雨音以外何も聞こえなかった。

第十三章 十五

その後も老婆の声はしない。

「今すぐ追い出すのは考え直したんじゃないかな。普段は手を止めないから」

こわ、と言って狗不死が首を縮めて見せた。

傳朱蓮はもう一度表を覗いてから田庭閑に視線を戻す。

「田さん。此処へはどうして来たの？ もう何も無い、誰も居ない場所なのは分かってたんでしょう？」

「何処でも良かったけど、思いつく場所といっても大して無かったんだ。でも、咸水の村には一度行っておきたいと考えてたから。君から聞いて記憶に新しかったしね。君の生まれた場所……、大きな事件のあった場所……、殷總監も此処で……」

田庭閑の声は小さく、激しい雨音が響く中でかろうじて傳朱蓮の耳に届いているといった程度であった。

「……私達、殷兄さんを探してるの。？ 局の件も何も解ってないし、あれをきっかけに北辰教と千河幫、それから真武剣派も……何て言えれば良いのか分からないけど、動き始めたのよ。少しずつ。変わり始めた、っていうのかしら。何か知ってる？」

「殷總監の事かい？ それとも、武林が今どうなっているかを？」

「殷はもう總監ちゃうで」

狗不死がそう口を挟む。だが田庭閑は殷汪の事を他に何と呼べばいいか分からず戸惑った。傳朱蓮は『兄さん』と呼ぶ。歳がどうであらうとそういう存在だと、東淵で聞いた筈だった。その傳朱蓮を前にして『殷汪』と呼び捨てるのも気が引ける。田庭閑は真武剣派に居た人間であり、そもそも殷汪は敵視すべき存在と認識してきた。今でこそそんな見方も薄らぎつつあった田庭閑だが、とにかく傳朱蓮の気分を害する様な事は避けたかった。

「君の……殷兄さんの話は何も聞かなかった。たまに此処に来る連

中も、別の人間を探してる。俺は何も知らないよ。武林の事は何も。この村にずっと籠もっているだけだから」

「……そう」

「あの偽総監は、どうなったんだい？」

今度は田庭閑が傳朱蓮に訊いた。田庭閑が東淵を離れるより先に、朱不尽ら緑恒千河幫の？局が殷汪の替え玉となっていた夏天佑を連れて緑恒へと帰っていった。その後の事は何も知らない。

「緑恒までの道中で亡くなったそうよ」

「……そうか。やっぱり、殷……殷汪どのの功夫を他人が用いるのは無理があつたんだろうな」

「北辰教の劉毅が追ってきて戦つたらしいの。劉毅って人は北辰七星の一人で相当腕が立つ筈だから、あの人もあんな状態ではとても相手にならなかつたんじゃないかしら」

田庭閑は頷いたが、劉毅云々の話よりも自分が『殷汪どの』と言つた事に対して傳朱蓮が何も変に思わなかつたらしい事に安堵していた。

「田さんって、殷兄さんに興味があつたのよね？」

傳朱蓮は田庭閑の顔を覗き込む様に見たが、淡い笑顔で、優しくつた。田庭閑は思わず俯いて視線を逸らす。

「まあ、人並みにね。殷汪どのが噂通りの強さを持っているなら、ほんの僅かでも近付きたい……。だから此処で何かの縁が得られないかと――」

そこまで言つたところで田庭閑は何かを閃いたかの様に勢い良く顔を上げた。

「確かに、縁はあつたんだよ。あのお婆さんがそうだ。俺、本当に驚いたよ。まさか本当に此処へ来ただけで――」

田庭閑が急に一人興奮し始めたので傳朱蓮は驚いた。

「お婆さんがどうしたの？ 殷兄さんと関係があるの？」

「おおありだよ！ あの人、一緒に暮らしてたんだ。此処で、殷汪どのと！」

傳朱蓮はすぐさま怪訝な表情を作り、田庭閑を見返した。

「それ、本当なの？ 此処での話はお父様にも洪小父様にも何度も訊いたわ。もちろん殷兄さんにも。でもお婆さんと一緒に住んでたなんて話は――」

絶対に聞いた事が無いとは言い切れないが、傳朱蓮はいくら頭を捻ってみても思い出す事が出来ない。

田庭閑が急に笑い出し、

「ハハ！ 当時からお婆さんな訳無いじゃないか。今が何歳なのかよく判らないけど二十年以上前なんだから当時はきつと『お婆さん』じゃ無かった筈さ」

傳朱蓮と狗不死はまだ老婆の容姿を見ておらず、二十年程前には『お婆さん』では無かったのかどうか知る由も無い。それ以前に、お婆さんでなかったとしてもそんな存在はやはり聞いた事が無い。

「信じられない。殷兄さんには奥様と子供が居て……でもどちらも殺されてしまったわ」

「堯家村ぎょうかそんって知ってるかな？ 此処からは北に……結構あるけど、わりと大きな街だよ。此処から都へ向かうなら必ず通る事になる」

「行った事は無いけど知ってるわ。それが？」

「殷夫人は、その堯家村の名家のお嬢様だったそうだよ。お婆さんはその家で女中をしていたらしい」

傳朱蓮はその話に大層驚いた。全く他人の田庭閑がそこまで知っていて自分はそれを初めて聞く。そんな事があるだろうかと思えない。何気なく狗不死の方に顔を向けると、同様の大きく見開いた目が傳朱蓮を見ている。

「女中やて？ あの婆さんがか？」

先程まで珍しく話を聞くだけだった狗不死が田庭閑に訊いた。狗不死はあの老婆の用いた功夫から、ただの老婆ではあり得ないと踏んでいたのだ。

「多分、嘘では無いと思います。一度に全部話してくれたわけじゃなくて、ここ半年程で少しずつ聞いたお婆さんの話をまとめるとそ

うなる、というか……」

田庭閑と老婆は未だ全てが話せるほど打ち解けたわけでは無かった。老婆は田庭閑を下人の様に扱い、口を開けば命令するのが常であり、田庭閑も追い出されまいと大人しく言う事を聞くだけの毎日だった。そんな中で老婆はほんの少しずつだがこの村の昔話を田庭閑に聞かせる事があった。歳をとれば誰でも昔話を人に聞かせたくなるものだ。そして田庭閑はそれに多分な興味を持っている。最初はそれぞれの繋がりが見出せなかった老婆の話も、聞き貯めるにつれて辻褄が合い、理解出来るようになってきたのである。

「ほんなら殷の嫁が此処へ来る時、一緒にについて来たっちゅう事か」
「殷夫人は本当に裕福な家の出で、殷汪どのと一緒にいる時にはかなり揉めたらしいですね。でも結局そうなったんですけど、お婆さんも一緒にこの村に来る事が殷夫人のお父上が出した条件の一つだったようです。お婆さんは武芸が出来たから。大事な娘を辺鄙な処に行かせるなんて相当不安だったというわけですよ」

「普通、やらんやろ。こんなトコに嫁に」

「……そうですね。それにその当時は殷汪どのはただの無名の農民に過ぎないわけだし」

「娘が殺されてからその夫が英雄やったとか言われてもなあ」

「そもそも殺されたから殷汪どのがその名を上げたわけだし……」

狗不死と田庭閑の遣り取りを聞いていた傳朱蓮が、拳を硬く握り締める。

「……何よ。殷兄さんが、悪いの？」

「え、いや」

田庭閑は傳朱蓮のただならぬ様子に驚き、視線を彷徨させた。

「名家のお嬢様を奥様に迎えて、それが殺されたら英雄と呼ばれるようになって……殷兄さんが良い思いをしたとでも？」

傳朱蓮の声は震えている。田庭閑は俯き、少しの間を置いてから傳朱蓮が膝の上に置いている手の甲をじっと見つめ、低く、穏やかな声で言う。

「違うよ。そんな事、言っていないだろ？ お婆さんは、昔起こった悲しい話を……一部だけ聞かせてくれたんだよ。でもそれだけで何が解る？ 何があつて、人の気持ちはどうなったとか……少し聞いただけの俺達に解る筈も無いさ」

傳朱蓮は何も言わず項垂れるだけだった。田庭閑は続けて、

「君から聞けば、余所者の俺より色んな事を聞かせて貰えると思う。君の親父さんの事を色々聞かれたけど、ほら、俺は？ 局にくつついて行ってそんなに長く東淵に居た訳じゃないから。お婆さんもきくと君と話したいと思ってるんじゃないかな」

「お婆さん……家に戻ったかしら？」

傳朱蓮は独り言の様にそう言ってゆっくりと腰を浮かせ、雨の飛沫が激しく舞って視界の悪くなった外の様子を窺った。

第十三章 十六

「いつまでも此処に居ても仕方ないわ。行きましょ、あのお婆さんの処」

立ち上がって出て行こうとする傳朱蓮に、田庭閑と狗不死も続いた。幾ら待った処で雨は止むどころかその勢いを弱めそうにも無い。もう陽も傾いている筈で、辺りは益々暗くなっていくばかりだった。

「あ、居ない」

一人、雨の中に飛び込むようにして草むらまで戻った田庭閑が言う。辺りを見回しているが、血まみれの猪が何処にも見当たらずになつていた。田庭閑は傳朱蓮の傍まで戻って来ると、

「お婆さんが持って帰ったみたいだ」

「嘘。一人で？ あれを？」

「……それ以外考えられないよ。血の跡だけは残ってた。行こう。こっちだ」

田庭閑は返事を待たずに再び雨の中へ駆け出し、傳朱蓮と狗不死は一瞬躊躇ったが覚悟を決めるとその後を追った。

時々、崩れた家に逃げ込むように雨を避けるが足を止める事は無く、走っている時の方が遥かに長いので三人ともあつと言う間にずぶ濡れとなつてしまった。皆同様に足元を泥で汚している。傳朱蓮は時々衣服に目を遣りながら眉間に皺を寄せていた。

田庭閑が足を止めたのは、他に比べれば幾らかましという様な一軒の民家の前だった。壁の穴に一応の修繕がなされているが隙間が空いていて、しかもそんな箇所がそこかしこに見受けられる。風通しの良さそうな家だ。

「もう、どうするのよこれ」

傳朱蓮の羽織った衫の袖がまるで錘おもりの様に下がっている。

「中で火が焚けるんだ。乾かせるよ」

「あつ、飛雪！」

傳朱蓮は置いてきた愛馬の事を思い出し、何気なく狗不死を見た。

「ああ、儂か。儂やな」

狗不死はそれだけ言うともた、雨の中へと歩き出す。

「狗さん、ごめんね」

「こんだけ濡れたらもうこれ以上は無いわ。あんたら先に入るとき――」

狗不死が傳朱蓮らを振り返った時、二人はまさに中へと入っていくところだった。

「誰も……居ない？」

中は暗く、人の気配は無い。部屋が幾つもある様な家ではなく、確かに誰も居ないようだ。田庭閑が一人奥へと進み、傳朱蓮は入り口で待つ。走って温まっていた体が冷えていくのを感じ、肩を震わせた。

田庭閑が部屋の真ん中辺りでしゃがみこみ、その直前で小さな火が灯る。

「えっ？ 火、そんな処で大丈夫なの？」

「ああ。此処は……焚き火の周りを壁と屋根がただ囲ってるだけの場所だからな」

田庭閑が脇に積んであった木の枝の束から幾らか引き抜いて焼べると火は瞬く間に大きくなった。慣れない傳朱蓮は辺りに燃え移りはしないかと不安になったが、田庭閑は特に気にする風でもなく、そのまま奥へと歩いて行く。

「火に当たるといいよ」

傳朱蓮は何故か忍び足になりながら火に近付いて行き、ようやくほっと一息ついた。辺りを見回してみる。置いてあるのは皆、農作業に使う道具ばかりでそれ以外の用途のありそうな物は見つからない。土の匂いのする家だった。

（此処にお婆さんが住んでいるのなら……此処が殷兄さんの家だった？）

二十数年前は全く違う姿をしていたに違いない。今のこの家は人

が住めると思えないからだ。では老婆と田庭閑はこの家の何処で休んだりするのだろうかと思ひながら、ゆらゆらと光が揺れる室内を眺めていた。

田庭閑は老婆を探しに出たのか、気配が無い。奥にも入り口があるのだろうかと思ふと傳朱蓮が目凝らしていると、不意に物音がして思わず息を呑んだ。正面に人影が現れる。一体何十年着ているのかと思うほどにぼろぼろになった袍を纏った、老婆がそこに居た。

何も言わず射すくめる様な視線を向けてくる老婆に、傳朱蓮は身体の芯から起こる震えを感じた。

「あ、あの……」

ようやく搾り出した傳朱蓮の声にも反応せず、老婆は傳朱蓮を観察している。するとその後ろから田庭閑が姿を現したので傳朱蓮は安堵の吐息を洩らす。このまま老婆と二人きりが続けば息が止まってしまうような気すらしていたのだ。田庭閑は老婆の脇を抜けて傳朱蓮の傍に立った。

「こちらが傳……傳朱蓮さんだよ。傳千尽さんの――」

「お前は、武芸者か？ それとも獵師か？」

田庭閑の言葉を無視して、老婆が声を発した。『獵師か？』という言葉の意味が解らず、思わず田庭閑を横目で見ながら助けを請う傳朱蓮。田庭閑にも解らないらしく、怪訝そうに老婆を見ていた。

「その背にあるのは何か？ 弓ではないのか？」

老婆の声は少し怒っている様にも聞こえる。傳朱蓮は思わず背にある長弓に手を伸ばした。

「これは……、弓です。すみません」

何故か謝ってしまった傳朱蓮は恐縮しきりで怒られた子供の様に俯く。

「山で狩りをするにはちと長過ぎる。その劍は？ お前は劍が出来るのか？」

傳朱蓮は顔を上げられないまま、腰に提げた長劍を掴んだ。

「あの……教わりました。……洪破天、小父様に」

老婆は傳千尽の娘という言葉に反応を示さない。ならば洪破天の名はどうかと傳朱蓮は試してみたのである。それから傳朱蓮は恐る恐る顔を上げたが老婆の表情は微塵も変化が見られなかった。老婆の灰色の薄い唇が開く。

「だが、その衣服に滲みた雨を散じる程度の内息ないそくの運行は出来ぬのか」

「あ……そこまでは……」

体温を上昇させ衣服の湿気を蒸発させてしまう程の内功は残念ながら傳朱蓮は未だ持ち合わせていなかった。それは簡単な事ではなくそこまで到達するにはかなりの修練を必要とする。内功についても洪破天から教わってはいたが、どちらかと言うと剣術を主とする外功一般の方が修練の主体となっていた。

老婆はつと顔を横に向け、そのまま部屋の間戸に歩み寄って何やら手を動かし始めた。それは傳朱蓮とは何の関係もない日常の作業であるらしく、傳朱蓮は完全に無視されたまま時間が過ぎていく。

「座って」

田庭閑がいつの間にか粗末な小さい椅子を用意してきて傳朱蓮に差出し、傳朱蓮は小声でありがとうと言ってそれに腰を下ろした。

田庭閑は老婆に向かって言う。

「傳さんは殷汪どのを探しているんだ。死んでなんかいないんだよ。嘘じゃない」

田庭閑は東洲で知った殷汪の話を、前に老婆に聞かせていたのだろう。老婆は信じていなかったのか、田庭閑は死んではいないと強調した。

すると老婆はすつと立ち上がり、火の傍まで音も無く近付いてきた。火の光に浮かび上がる老婆の顔。手入れをするなどという概念は老婆には皆無なのだろう、無数の皺で覆われたその肌は浅黒く、土の色と同じだった。

老婆は右手を傳朱蓮に差出し、剣を、と掠れた声で言った。傳朱

蓮は剣を受け取ってどうするつもりかと思ったが、この長剣は青？という名の、殷汪に貰った剣であるという事に思い至って、それを腰から外し老婆の痩せ細った手に渡した。

老婆は殆ど特徴らしき処もないその鞘を一瞥してから、剣の柄に手を掛ける。その瞬間、様子をじっと見ていた傳朱蓮と田庭閑は揃って、あつ、と声を上げた。何の変哲もない黒い鞘がにわかには青白い光を帯び始めたではないか。薄く広がった炎の様な光によって、その像が揺らぐ。

老婆はその手ごたえをじっくりと味わうかの様に目を閉じ、長く息を吐いた後に、ゆっくりと剣を抜いていく。姿を見せ始めた剣身も鞘と同様、青い光に包まれていた。

第十三章 十七

いよいよこれから青？が姿を現すという処で、老婆は微かに開いた唇から長い息を吐きながら、剣を鞘へと戻してしまった。小さく頷く様な仕草を見せた老婆は、本物だ、とても確信したのか、改めて鞘全体を眺めてから傳朱蓮に向かって剣を差し出した。この時にはすでに青白い光は消え失せていた。

「青？は昔から殷汪様が持っていた。倚天^{いてん}は、此処を離れてから手に入れられたと聞いている」

老婆の口から『殷汪』という名がようやく出てきたので傳朱蓮は不意に感慨を覚えた。

「あの……」

「お前が裸で生れ落ちるのをこの目で見たのがもう……いつの事か？」

考え込み遠い目をする老婆に、傳朱蓮が言う。

「二十……二年になります」

震える声でそう告げた傳朱蓮を老婆はじっと見ていたが、何故かわわらず感情らしきものを一切面に出さない。二十余年振りの再会というのに何も感じないのは当時傳朱蓮がただ泣き喚く赤子でしかなかったからなのか。或いは、二十余年が長過ぎたか。

「お婆さんはこの、朱蓮さんが生まれた時を知ってるのかい？」

田庭閑が傳朱蓮を助けるべく会話を繋ぐ。

「傳家は隣だったからね。良く知っている」

老婆は左の腕を挙げ、真横の壁を指差した。その先が当時傳千尽夫婦が暮らしていた場所であったのだ。傳朱蓮はこの家に入る前に見えた風景を思い返してみた。だがそこには何も無かった気がする。

「もう無い。何も」

老婆は冷たい声で、そう言った。

直後、老婆は顔を上げて入り口の戸を凝視する。するとまもなく

その戸が軋んだ音を立てて開き始めた。狗不死が戻って来たのである。

「なんや固い戸やなあ。邪魔するで」

狗不死はちらと部屋の中を一瞥しただけで特に何かに注意を払うわけでもなく、焚かれている火に向かって駆け寄った。

「すみませんなあ。急に来て」

狗不死が手もみしながら言うのと、老婆はゆっくりと拱手して頭を下げた。今までと随分違う態度に、特に田庭閑は大層驚いた。老婆は低い声で、

「狗幫主にまみえるなど全く想像すらしておりませなんだ。ご縁といえ^{しにぞこない}ば、不死の二字でございますが、はたしてどちらが真なる不死であるか、是非お姿だけでも拝見しとうございました」

これを聞いた傳朱蓮と田庭閑に緊張が走る。姿勢はともかく、到底まともな挨拶ではない。まさか狗不死に挑みかかるつもりかと気が気でないが、狗不死もこんな前口上を聞いて油断はすまい。二人は狗不死の反応を窺った。だが、狗不死に変化は無かった。

「そらああんた、どうやら歳は儂とそう変われへんみたいやけど、こんなとこに引っ込んだまま不死^{しにぞこない}を名乗っても意味無いわ。此処から出て勝負せんとなあ。あんた、勿体無いで」

いきなりそんな話を、と傳朱蓮は焦ったが、老婆は意外にも頷いて応じていた。

「確かに。このところ、この村にやってくる者が増えておりますが、皆、武林の人間を自称しながらその殆どが小物ばかり。今ならこんな不死^{しにぞこない}の婆でも良い思いが出来るかも知れませぬな」

「どっから大物か知らんけど、そんなんは用無いわこんなとこ」

狗不死も遠慮などせず、言いたい事を言っている。老婆もただにやりと笑うばかりで、不思議な間で辺りは満たされていた。

「殷、来てへんか？」

狗不死が単刀直入に、しかも不意打ちの如く訊く。すると老婆は顔を僅かに曇らせて、ゆっくりと間を置いてから訊き返した。

「本当に、生きておいでですか？」

「そうらしい。せやからこうして確認の為に探しとんねやけどな」

老婆は田庭閑を見る。そして田庭閑も頷いて答えた。狗不死の言葉によって田庭閑の老婆に伝えた話はその信憑性が幾分増す事となった。

「殷汪様が、この咸水を再び訪れる事はありますまい。他所を探しては如何か。それも、ずっと、遠くを」

老婆はそう言うと言を返し、そのまま家を出て行こうとする。

「何処へ？」

田庭閑が老婆に問うと、今夜だけは此処を貸す、とだけ言い残して裏口を通り、雨の中を出て行ってしまった。

「あの肉……は、無理なんか？」

田庭閑は狗不死に向かって力なく首を振って見せた。

結局、老婆は傳朱蓮の存在など殆ど無視するかの様に、なんら感情の変化を見せなかった。

「まあ、人なんていつどうなるか分からへん。あの婆さん、壊れてもうたんかも知れへんで」

「止めて！……そんな事、言わないでよ」

「朱蓮、人ってなあ。そんなもんなんやで？　そうなくても仕方ない事なんやて。此処が襲われた時を記憶してる筈のあの婆さんがこの村に居続けるなんて、普通やない」

「お婆さんは襲われた時は村を離れていたようですけど」

田庭閑が口を挟むと狗不死はフンと鼻を鳴らした。

「そんなんでもええ」

傳朱蓮はその後殆ど口を開かず、じっと何かを考え続けている様だった。この家には何も無く、食べる物の用意も無い。狗不死ですら傳朱蓮の口を開かせる事は出来ずに、あとは土間に横になって眠る以外する事が無かった。田庭閑も傳朱蓮の為に老婆から何の良い話も引き出す事が出来ず、落胆する中で眠りに落ちていった。雨音

だけが響く中、傳朱蓮は目の前の炎をぼんやり眺めながらただ一人起きていた。

夜明け前、先に起き出したのは田庭閑だった。昨晚の焚き火がまだ燻っているのを見て暫くぼんやりしていたが、不意に目を見張って辺りをしきりに窺った。

何も変化が無い。家中に充満する筈の煙が殆ど無かったのである。田庭閑はすっかり失念していたのだが、いかな穴だらけの家とはいえ、一晩、家の中で火を焚き続けてその傍で寝ている人間が朝まで無事で居られる筈が無い。この家は壁や屋根の一部が容易に外せるようになっていて、火を焚く時は殆ど開け放つのだが、昨日からの激しい雨で屋根はそのまま、壁に幾つもある穴は塞がれてすきま風程度にしか外気は入って来ていない。

「朱……朱蓮、朱蓮」

田庭閑は念の為、火の前で横になり丸まって眠っている傳朱蓮の肩を揺すった。煙を吸う事は無かったとしても気分の良い目覚めとはいきそうもない。煙の匂いは家中に充満しているのだ。

うん、と小さく唸った傳朱蓮がゆっくりと目を開けた。

「ああ、……寝てたのね」

「良かった。危うく俺達、燻製になるところだった」

冗談のつもりが傳朱蓮の反応は起きたばかりというのにすこぶる良い。

「まさか！ お婆さんが？ 狗さん！ 狗さんは？」

傳朱蓮の見遣った先では狗不死が何やら口を動かしながら、まだ夢の中で遊んでいる様子である。

「お婆さんじゃないよ。多分、お婆さんが時々見てくれたんだと思う。俺達が火を焚いたまま眠ってしまったから」

傳朱蓮は改めて家の中を見回した。確かにこの広さではあつと言う間に煙を吸って動けなくなるところであった。今は煙はあまり無いが匂いはきつい。

狗不死は問題無く眠っている。二人は外の空気を吸う為に外へ出る。まだ暗く、雨も降り続いていたが、もうその勢いは和らいでいた。

第十三章 十八

表に出て傳朱蓮がまず向かったのは、昨晚、老婆が言っていた『隣の傳家』である。向かうといつてもそこは既に視界にあり、そして目指すべき目印になる物も存在しない。ただ濡れた草むらが広がるだけである。

「此処で……私が生まれたなんて、信じられないわね」

傳朱蓮の呟きに、田庭閑は何も言えなかった。自分も傳家がそこにあつたというのは昨晚初めて聞いたのである。

よく探せば柱の立っていた痕跡ぐらいはあるのかも知れない。しかしそれを探して傳朱蓮に教えるべきか、それすら田庭閑は迷ってしまう。表情を失つたような今の傳朱蓮がどこまで知りたいのか、計りかねた。恐る恐る、傳朱蓮に訊いてみる。

「此処での暮らしの事は、何も聞いてないのかい？」

「お父様に？ ……たまに話してはくれたけど、詳しく思い出す事自体、あまり気が乗らないみたい。でも、どんな暮らしぶりだったかくらいは教えてくれたのよ」

「君の……お母さんの事は？」

「東淵の、お母様と一緒にあったから、お父様も此処での事を口にするのは躊躇いがあつたと思うわ。私がまだ何も解らない赤ん坊のままだったら、いつそのこと何も言わずに済んだかもしれないのね。でも、そうじゃなかった」

「でも、君が一番知りたいのはやっぱり……」

田庭閑が言うに傳朱蓮は不意に笑みを浮かべ、田庭閑へと向ける。ただ、それはどこかきこちなかった。

「私なんか、まだましよ。お父様が居る。この村の事を知っている洪小父様も、殷兄さんも居る。でも、紅葵姐こうきさんは……両親も、生まれた場所も、全く何も解らないんだもの。紅葵姐さん、知ってるわよね？」

「ああ、会ったというか、一目見ただけって感じだけど」

「やっぱり、これでも私は恵まれてる方なんだわ」

傳朱蓮は此処で何も探そうとはしなかった。何も無い、と諦めているのだろうか。それを見ている田庭閑も立ち尽くしたまま、傳家の跡地を眺め続けた。

「あの婆さん、何処行ったんや？」

辺りが明るくなり始めた頃、狗不死も目覚めて表に顔を出した。

「判りません。出掛けたかも。本当にこの村だけでは生活するのに足りないから。たまに買出しにも行くし」

「そんな金、あるんかいな」

「まあ、あるんでしょう。俺には隠してるだけで」

馬の様子を見ていた傳朱蓮が戻って言う。

「お婆さんに、お礼を言っておいて。それに、お詫びと。あんな酷い雨の中に追いつく様な事になって、申し訳なかったと」

「えっ、もう行くのか？ まだ、何も聞けてないじゃないか」

「いいの。これが最後って訳でもないし、今回は殷兄さんを探すのが旅の目的だから。のんびり行くという訳にもいかないし」

「そうか……」

がっくりと項垂れる田庭閑の肩を狗不死が叩く。

「一緒に行くか？ 次、都やけど」

「都なんて無理ですよ。……俺はまだ此処に居ます」

「ほうか。あの婆さんの功夫、何とかして聞き出すんやで。あんなに出会える機会はまず無いしな」

「万が一、聞けても理解するのは到底――」

「若いくせに何言うтонねん。この先、何十年もあるやないか。羨ましいわ」

田庭閑はハハ、と乾いた声で小さく笑うが、『何十年』と聞き落胆した。武林の修行で何十年というのは何も特別な事では無い。だが、まだ若い田庭閑には手に入れるのに何十年も掛かるなど我慢出

来そうもない。

早々と馬を引き連れて戻って来た傳朱蓮の姿に、田庭閑は更に落ち込んだ。

（ちよつとぐらい未練があるらしいところを見せてくれてもいいじゃないか）

だがすぐに思い直す。この場所から、離れたくなったのかも知れない。嫌いである筈は無い。だが、此処はやはり傳朱蓮の心情を掻き乱すのだろう。それもあの老婆の態度が柔らかかったなら違っていたろうに――。

「また……来るかい？」

「ええ、もちろん。いつか、皆揃って此処に来れたら……。今はまだ夢でしかないけれど」

傳朱蓮は田庭閑に微笑を返した。皆、とは傳千尽、洪破天、殷汪の事である。

「君は若いけど、でも急がないとあの洪さんなんかはもう歳も――」

「洪小父様はまだまだ元気よ」

傳朱蓮が口を尖らせたので田庭閑は少しばかり焦った。ふと、緑恒千河幫の范撞の顔が思い浮かぶ。范撞なら多分、笑って別れられる様な何かを言うだろう。田庭閑は慌しく口を開いた。

「都、都に行けばきっと、君の姉さんの事、聞けるんじゃないかな」笑える話とはかけ離れていたが、きっと傳朱蓮にとって喜ばしい事に違いないという確信が田庭閑にはあった。

「紅葵姐さんの？」

「今、都では傳夫人が懷妊したって噂が流れているらしいんだ。まだ公布は無いみたいだけど、都の人達にとっては今、最大の関心事の一つだよ」

「そう……姐さんが……。元気で居てくれるのね」

傳朱蓮がまた笑顔を見せたので、田庭閑はほっと胸を撫で下ろした。

「朱蓮、ほな行こか。とりあえず飯屋や。腹減ってしゃあない」

狗不死が馬に乗り傳朱蓮の横に着ける。

「ええ、行きましょう。田さん。また会いましょう。きつとよ」

「あ、ああ。次、次会う時には、そうだな……あの猪、運べる様になつてる筈さ」

田庭閑はそう言つて反応を窺っていると傳朱蓮が此処へ来て一番の笑顔を見せてくれたので、一緒になつて笑つた。

傳朱蓮と狗不死が小雨の中、村の入り口の谷間を進んでいる時だった。風と、それに揺れる木々のざわめきの中に、声が混じつていた。

『その剣が危ない』

「お婆さん！」

傳朱蓮は辺りに目を凝らすがやはり姿は見当たらない。声は間違はなくあの老婆のものだった。

「何でいつも隠れてんねん。出てきたらええのになあ」

狗不死も言いながら首を廻す。

『ちと遠いものでね。お許し下され』

「お婆さん。昨晚は失礼を——」

『青？を探す者が居るよ』

「これを……？」

傳朱蓮は思わず腰の剣を握り締めた。

『殷汪様が亡くなったという話が広まっつてすぐ、倚天が現れた。ならば青？も何処ぞへ現れるやも知れぬとな』

「私はずっとこれを帯びて旅をしています。でもそんな人には会つた事ありません。それにこれは一見しただけでは青？剣だなんて誰も……」

『判る者は一人も居らぬと？ その剣はお前より永くこの江湖に生きているんだよ』

「探してる奴をあんたは知っとんか？」

『此処へも来た。その剣はかつて殷汪様と共に此処にあったのですね。今まで無事であったのは運良くまだ気付かれていないからだね。奴らは集団だ。一度目を着けられたら厄介だよ』

「奴ら、とは？」

『黒ずくめの男達だね。何処の者かは判らない』

黒ずくめとは確かにはっきりとした特徴ではあるが、あまり当てになる情報でもなかった。

第十三章 十九

「そいつら、いつ頃此処へ来たんや？」

『倚天が都に現れた後』

「まだ最近やな」

倚天が現れたなら青？も、と考えたのなら当然の事だ。今までは無く、そしてこれから傳朱蓮の腰にある青？剣を狙う者達が姿を現し始めるのだ。

『お前にその剣が守れるとは思えない』

老婆にとって守るべきは剣であって、傳朱蓮では無い様である。

「でも……、どうする事も……」

『この婆が預かってても良い。だがお前は嫌であろうな』

傳朱蓮は答える事が出来ず、代わって狗不死が言う。

「あんたは殷を知っとるみたいやけど、まだ信じたわけや無い。この剣が欲しいだけかもしれへんやないか。渡すわけにはいかへんなあ」

『狗どのがその剣を守って下さるのならば、これ以上は言いますまい』

「狙っとるんがどんな奴らか知らんけど、そらあ儂かて手出されて何もせんなんちゅうつもりは無いけど？」

『ならば結構。気をつけて行きなされ』

その後、暫く狗不死と傳朱蓮は黙ってその場に佇んでいた。しかし老婆はもう何も言わない。去ったのかどうかも全く判らない。

「朱蓮、行こ」

狗不死の呼びかけに頷いた傳朱蓮はその瞳を潤ませていたようだったが、顔を上げて大きく息を吸ってから、再び進み始めた。

それから数日、進んでも進んでも雨からは逃れられず、狗不死で

すら随分と口数が減ってしまう程、気の滅入る旅が続いた。加えて老婆の言った青？剣を狙う者の事が気に掛かり、どうにも気が休まらない。だが一向にそれらしき怪しい影も見えず、あの話は出鱈目だったのではないかと思い始めていた。

「雨はじきに止みますよ」

宿の下男が、軽い調子で言う。

「いや、信じられへんわ。もう儂は死ぬまで青い空拝む事なんて無いんや。絶対そうや！」

「そんな……いや、この辺は毎年こんなもんです。もうじき嫌というほど晴れますよ」

「『嫌』なんはもう嫌や！」

「……」

男は呆れ顔で連れの傳朱蓮を見るが、傳朱蓮は黙って肩を竦めるだけだった。

「何処まで行かれるおつもりで？」

宿は人も疎らで、この男は暇の様である。

「北へ少し行けばもう堯家村ですが、その頃には青い空が拝めるでしょう」

「そうならどれだけ有難いことかしら。私ももう雨は当分いいわ」

傳朱蓮は小雨の降る表に目を遣って呟く様に言った。

「お客さんは武慶に行かれましたか？」

不意に男がそんな事を言うので傳朱蓮は男を振り返った。

「何故？」

「お客さんは武芸がお出来になるのでは？ そんな立派な弓は私は初めて見ます。それに剣も提げてらっしゃる。道行く者が振り返っていたんじゃないかもしれませんか？」

傳朱蓮は、随分と馴れ馴れしい口を利くものだと思いを留めたが、男が話し掛けたがるのも無理は無い。傳朱蓮の身形は他の旅の者達と比べて一際垢抜けて見えるのだ。珍しい反りを持つ長弓も人目を

引く。子供の様に駄々をこねるおかしな老人を連れた若い娘。奇妙というより珍妙、そんな二人に興味は抱いても警戒する気など起こらなかった。

「武慶というのは？ 私は真武剣派とは関わりが無いわ」

「ああ、そうですか。いえ、武慶では真武剣派のお祝いがあつたと聞きましたのでね。真武剣派が大勢のお仲間を集めて大変な賑わいだったとか」

「そう……らしいわね」

何故か傳朱蓮はそう答えた。特に深く考えた訳でもなく、何となく、である。

「太乙北辰教までもが人を遣ったとか。凄いですねえ」

真武剣派は——という事なのだろう。ついにあの北辰教までも真武剣派の顔色を窺うまでになったとも思っているのだろうか。

「私も初めて北辰の七星とやらを見ました。やつらがこんな処まで来るなんてかつては考えられなかった事ですよ」

「あなたが……見たの？ この辺りで？」

「はい。ついこの間ですよ。いや、本当は私は何も知らなかったんですがね。そいつに気付いた旅の人が教えてくれたんですよ。この近くに北辰が居ると。武慶に行った後、こっちに来たんですかねえ。何でも名の知れた奴だと言うんでちょっと此処を抜け出して見に行っていましたよ」

男はそう言って笑っている。傳朱蓮の視線は自然と、丁度顔を上げた狗不死に向いた。

「北辰の誰や？」

「ええと……」

「林玉賦いう名ちゃんか？」

「いや、あー……」

男は名を思い出せないようだ。本当に北辰七星の誰かが居たならそれなりの騒ぎがあってもおかしくない。そしてその七星とは林玉賦である筈だ。傳朱蓮らは武慶に現れた林玉賦を見たのである。

名がすぐに出てこないところをみるとこの男は本当はあまり興味が無かったのかも知れない。七星の名は広く知れ渡っている筈だが、太乙北辰教はこの土地の者からすれば遥か彼方にある辺境の集団であるし、武林に縁が無ければ尚更、記憶から消えるのも早いだろう。周りで人が騒いでいるのを見て、ただ覗きに行っただけといったところか。

「なんだかおっかなそうな厳つい男でしたよ。でも、本当に偉い奴なのかは知りませんよ？ お供も一人も連れてないし、本当かあ？
って感じで」

「一人で？ ……もしかして、劉という人では？」

傅朱蓮が言うと、男は目を見開いて手を打った。

「そう、それです！ みんなそう言っていましたよ。まあ確かに腕っ節は強そうでしたね。腕がこんな、いや、これくらいありましたから」

男は両手で輪っかを作りながらそう言った。

「……七星の劉なら、腕っ節が強いなんて程度じゃ済まないわ」

男が急に弱々しい小声を出す。

「あの……もしかして、お知り合いで？」

「噂はよく耳にするわ」

傅朱蓮の答えを聞いた男は明らかに取り繕う様な笑みを浮かべて、
「ハハ、そうですそうです。いやあ、とにかく何やら凄そうなお人でした」

そう言いながら男はそそくさとこの場を離れようとする。見ず知らずの者に下手な事を言うものでは無いと今更ながら気付いたのか。だがそれを傅朱蓮は引き止めた。

「この近くで見たの？ 北辰七星の劉に間違いないのね？ 背は大きかった？」

「え、あー、このくらい、だったか……」

男は腕を頭上に伸ばして高さを示した。確かに大柄そうだ。

「この前の通りに行きましたよ。北へ。私らは遠巻きに眺めてただ

けで」

「北へ……」

「劉毅^{りゅうぎ}やな。『厳^いつい』なんて鐘^{しょう}や侯^{こう}では言^いわんやろ。慮^{りょ}やったらもつとでかい」

「方崖から出てきたのは林玉賦だけじゃなかった……やっぱり殷兄さんを追^おってるのね」

「一人でか？ 殷相手に一人では話にならへんいうのんはあいつら七星が一番よう知^しとんやで？」

「でも、他にあの人^{ひと}が今、こんな処^{ところ}に居る理由があるの？ 他の七星も来ていて何処^{どこ}かで会うかも」

「そらあ殷の居場所探^{さが}るくらいはするやろけど、見つけても手は出さへんやろな。……北か。何やろ？ しかしいつも色んなところ、うろついてんなあ。忙しいこっちゃ」

第十三章 二十

劉毅が北へ向かったなら間違いなく堯家村を通り、そこから東の都、金陽へ行くだろう。逆に西に向かう可能性は低い。その先は荒涼とした砂漠が広がるのみで、そこをあえて進むのは国外へと向かう商団くらいのものだ。過酷な旅である。ただ一人の人間を探して行くには、時も、そして命をも賭ける必要がある。

「離れすぎや。此処かて既に遠いけどな。景北港になんかあったとしてもすぐ戻られへんし、恐らくこのまま戻るとちゃうか」

狗不死の言う通りに違いない。ましてや北辰教の末端に命じるのでなく七星が教主陶光の許から離れてこんな処まで来る事自体考えられない事である。林玉賦は命令によって武慶に姿を現したのだろうが、ならば尚更、他は教主の傍に置く筈だ。少なくとも、七星という存在が以前と変わらぬものであるならば。

傅朱蓮と狗不死は武慶を離れてから暫く大きな街には立ち寄っておらず、殆ど新しい情報に触れてはいなかった。そもそもそんな物は無いのかも知れない。しかし、日が経つにつれ、早く都へという気持ちが強まった。国中から人が流れ込む都、金陽。何の根拠も無いが期待は膨らむ。

（殷兄さんだって、『人』だわ——）

雨季が去った都、金陽は例年の如くその熱気を取り戻し始める。特にその南半分、都の最奥にある王城から距離を置く様に広がった市街には人が集中し、湿気を帯びた熱が充滿している。長雨からようやく解放された人々はこれまでの鬱憤を晴らすかの様に、通りを闊歩していた。

子供を引き連れた豪奢な身形の富豪と、一枚の布切れすらも纏わず立ち尽くす汚れた幼子が、全く視線を交わらせる事無くすれ違う。

そんな様子を目に留めて、何かに思いを致す者は無い。

その幼子の脇を掠める様に足早に通り過ぎた男と女。その者達もかなり良い身形の者達だった。女はこれといった特徴も無かったが、男の方はその衣服の上からも分かる丸々とした太鼓腹を揺すっている。二人はただ真っ直ぐに通りを進み、そのまま一つの建物へと並んで入って行く。そこには『宿』という文字が見える。

二人は同じ動作で中をさっと見渡して誰かを探している様だったが、見当たらないのかすぐにまた揃って歩を進め、そのまま奥へと向かった。

「史よ、居るか？ 何処だ？」

太鼓腹の男が何処ともなしにそう呼ばわると、そこへ酷く疲れているらしくふらついてゐる痩せた男が姿を現した。

「おお、無事だったか。心配したぞ」

「……ああ」

痩せた男は柱に身を持たせ掛けたまま、息を吐く。

「……いや、久しぶりに酷く緊張したもんだから、戻った途端、力が抜けてしまつてな。いや、情け無い」

女が怪訝そうにその顔を覗きこむ。

「本当に大丈夫かい？ 何も、されなかったかい？」

「何も。何もされなかったよ」

「当たり前だろう。されてたら今頃生きてはいまい」

太鼓腹の男は先程までの険しい表情をようやく緩めるとそう言つて笑つた。

この丸々とした腹の持ち主の名は王喜勝おうきしょう、女はその妻の李軍りぐんで、痩せた男はこの宿の主人、史小倚ししょういという。この金陽に住む数少ない太乙北辰教徒である。

王喜勝が史小倚に訊ねる。

「用向きは何だ？ わざわざこの都まで来られるという事はやはり……あの事か？」

「まあ……そうだ」

「で？ お前は何を喋った？」

王喜勝はじつと史小倚の目を真っ直ぐ見据えて返事を待っている。すると史小倚は慌てたように腕を振った。

「言える様な事など殆ど何も無いではないか。我らは何も知らぬ。か……夏天佑と名乗る者と……あの洪破天様を泊めただけで……」

「でも真武剣の奴らが絡んできたじゃないか。それも誤魔化せたと言うのかい？」

李軍も問い詰める様に史小倚に迫る。

「だから早々に引き上げていったと伝えた。そもそもあの方は真武剣の事には興味があまり無いようだ。全部……殷汪様に関する事だけ訊かれた」

「それでお前は解放して貰えた……ということとは？」

「お咎め無し、で良いのだろう。我らは都に居るが方崖から見ればこっちが辺境のようなものだ。向こうで何があるうと知るのは……下手すればひと月、いや、もっと……なんて事もある。我らに何が出来る？ 突然来て、数日泊まって、そして帰っていった。それだけだ」

史小倚は首を振って溜息まじりに言うと、そのまま地べたに腰を下ろした。

「意外だったが、穏やかな感じだった」

「何が？」

「無論、話すなど初めてだったが、随分と気さくなお人のようだった。責める様な事も言われなかった。不思議だ」

「まあ、我らは噂程度しか知らぬからな。七星劉毅……」

王喜勝と李軍も部屋にあった粗末な椅子を引き寄せ、腰を落ち着ける。史小倚は変わらず地面に足を放り出し、しきりに顔の汗を拭いた。

王喜勝らがこの宿へ来る前、史小倚は北辰七星の劉毅と会っていた。宿に突然現れた劉毅に半ば強制的に連れ出された史小倚は、一

年前に殷汪がこの都へ来た時の事について訊かれていたのである。王喜勝らが知ったのは史小倚が密かに下男を使い知らせる事が出来たからだ。

自分らには何が出来るでもない。ただ、劉毅が捕らえに来た可能性はある。太乙北辰教を裏切った殷汪と繋がっているという嫌疑がかかっているのではないか？　ならば、釈明するか、それとも逃げるか――。既に劉毅に見つかった史小倚はどうにもならないが、王喜勝や他の数少ない同志達にはまだ逃れる余地はある。しかし、それを聞いて此処へ来たこの王喜勝、李軍の夫婦は逃げる事を選ばなかったようだ。

「それで、いつまで此処に居ると？」

「すぐに方崖へ向かわねばならんらしい。他に手掛かりも無いし、居続ける理由は無いだろう」

「他にもあるではないか。倚天劍の事はどうか？　触れなかったのか？」

「いや、俺はただ知らないと答えるしか無い。本当に知らないんだからな。方崖から劍を持ち出した女とやらがその後何処へ言ったかも不明だ。買った者の身元も――」

「それは城南の稟施会りんしかいだろう？」

「噂じゃないか。それにその事は既に知っていた。『噂があった』というのはな」

「ならば残るは一つ。殷汪様の――」

王喜勝が睨みつけんばかりに見るので史小倚は地面を叩いて声を荒げた。

「言うものか！　絶対に言わぬ！」

「馬鹿、声が大きいよ！」

李軍が慌てて表の方を窺いつつ、部屋の扉を閉めた。そこで王喜勝が大きな丸袖を振って居ずまいを正し、改まった口調で言う。

「いいか、もう一度確認しておくぞ。我らはこれから変わらず太

乙北辰教徒だ。そして教主様に忠誠を誓う。そうだな？」

ああ、と史小倚も当然だと言う様に大きく頷いた。王喜勝は続ける。

「忠誠を誓うのは教主様に、だ。それは全ての教徒にとっての義務だ。殷汪様でも、張新様でもなく、教主様にのみ、だぞ」

「そうだ。だが、……殷汪様を売るような真似はしない。絶対に」

「無論だ。殷汪様は方崖を離れ、わざわざ此処に立ち寄られたあの時も尚、教主様の身を案じておられた。更に我等の様な者の事までもだ。張新様がどの様な方であるのかは判らぬが、殷汪様には二度も直にお会いして我らは感じた。絶対に教主様の、太乙北辰教の敵ではない」

言ってから王喜勝、史小倚、李軍の三人は大きく頷き合っていた。

第十三章 二十一

これ以降、三人は度々この史小倚の宿に集まる様になった。とは言つても特に何をするでもない。普段通りの雑談に終始するだけだが、それによつてこの都にいる僅かな太乙北辰教徒の今後について思い致す事となり、薄れがちだった『仲間』という概念をより意識するようになった。時には他の同胞も呼んで話す事もあるが、大抵が史小倚、王喜勝、李軍だけであるのは、あの殷汪とまみえた事があるのがこの三人だけだという事もあるう。

北辰教の本拠、景北港から遙かに離れたこの都では教徒といえどもその信仰も薄れがちである。敬虔な、そして中には狂信的とも言える者達が作り出した街とこの都では、同じ国にありながら生活文化の差異は小さくない。

日々の営みに追われる様に信仰から遠ざかっていた『辺境』の教徒の前に突然、教主の傍らで采配を振るう総監が姿を現す。突然現れ、しかも偽名を使った彼をよくは知らない。ただ本物の殷総監であつたというそれだけで、眠っていた彼ら教徒の目を覚ますには充分だった。ただ、目覚めたとはいつても此処は辺境、何の状況も確かな事は分からない。自分は太乙北辰教徒なのだという事を思い出す、まだそんな段階であつた。

殷汪の去つた方崖は今どうなっているのか？ 教主のお出ましはその後あつたのか？ などとは繰り返し三人の口に上る話題だが、さっぱり分からない。何の手掛かりも持たないのだ。史小倚の家は宿を営んでいる。東から来たと客が言えば、東はどんな様子であつたかを訊くようになったが、詳しい人物は殆ど居ない。そもそも都に数多ある宿の中で史小倚の商いは繁盛しているとは言えず、情報を持ってやって来る客など極めて少なかった。

「張総監の噂を聞いたよ」

そう言つて李軍は話し始める。今夜は珍しく新たな話題がある、と李軍の口振りは少しばかり勿体を付けた。王喜勝と李軍夫婦も自ら商いをしており、衣服から装飾品、或いは様々な調度品を扱う店を持っている。李軍の聞いたという話は客との雑談から出た噂話の一つだった。

「張総監だつて？ 一体何の話をすればそんな名が出て来るのだ？」
夫である王喜勝も初耳なのか、怪訝な表情を妻に向ける。李軍は三人集まるこの時まで隠して驚かせてやろうと目論んだのだろう。内容はともかく、北辰教の総監、張新に関わる話が出て来る事自体、非常に貴重な事だ。

「傳夫人の話から東淵辺りの話になつてね。傳家は今でもあんな田舎に引ッ込んで勿体無いじゃないか。傳夫人が本当にお子を、しかも男子をお生みになれば傳家は田舎の小金持ちなんか辞めてこの都でとんでもない権勢を揮えるんだよ？ 桁違いだよ」

「馬鹿な事を。そもそも東淵の傳家というのは豪族でも何でも無い。権力を収めきれ程の一族を持ってもいない。言わば我らと同じ、一商売人の家だ。何が出来る？ いや、端からそんな気など無いのだ。分をわきまえておるからこそ商業で成功しておるのだ」

「そんな事まだ分からないじゃないか。子はまだ生まれて無いんだよ？ 人はどうなるか分からないよ。ま、商才つて事では私も認めるね。傳夫人は実の娘じゃないって話だろう？ 孤児を拾うならやはり極上の美人が良いというわけさ」

「待て待て。傳家の話はまず置こう。張総監の話はどうなんだ？」
話が逸れていく事が一目瞭然である夫婦の会話に史小倚が割って入る。李軍は残念そうではあったが頷いた。

「最近、この辺じゃ真武剣が色々動いてるだろう？ 武林の噂なんて最近無かつたからこの都の人間も色々想像するんだねえ。真武剣といえは北辰、北辰といえは真武剣、向こうも何かやり始めたんじゃないか、だから真武剣が、ってね。まあ東淵云々は北辰教の事を思い出すきっかけさ」

「お前、何を今更言っておるのだ。そんな事は一年も前から言われている事だ。傅夫人と殷総監——いや、殷汪様は非常に近い存在。そして我が教の要であられたのだぞ」

「此処の人間はそう深く考えないよ。東淵や景北港の事なんてこの街の者には異国と変わらない。東方を気にするのはあたしたちくらいのものさ」

「だから、張総監の話は——」

「北辰教の教主がいつの間にか変わったらしい、ってあたしに教えてくれたのさ」

李軍にそう教えたという者はまさか李軍がその北辰教徒であるなどとは露程も考えなかった事だろう。

「教主が、だと？ 出鱈目言いおって……」

「だから、そんな認識なのさ。よその者には教主も総監も分からない。でも当たってるんじゃないかい？ 北辰を動かす人間が変わったのは事実だからねえ。で、その新しい教主は張と言って——」

「違う！ そんな事があってなるものか！」

王喜勝が拳を自らの膝に叩きつけ、怒声を発する。

「あたしに怒鳴らないでくれよ！ 聞いただけさ！」

「二人とも落ち着け！ とにかく続きを聞こうじゃないか。教主とというのは間違っているが、その人となりについての噂なんだろう？」

史小倚は懸命に間をとりなし、話を続けさせた。

「今度の教主はとても穏やかで思慮深く、争いは好まないそうだよ」

「フン、何を根拠に。殷汪様が去って一年程、まだ北辰教の情報などそれ程この都には入って来てはいまい」

「その噂は——」

史小倚は李軍の話を聞いて首を傾げた。

「その話には他にも勘違いがあるんじゃないか？ 今度の教主が穏やかで云々、とは明らかに陶峯前教主とうほうとの比較じゃないか。陶峯様が亡くなられて十年は経ったが、その後は陶光様が教主となられて殷汪様が補佐された。かつて無い程、北辰教は穏やかな時代を迎え

たじゃないか。最近の事じゃないだろう？」

「その辺は知らないよ。とにかく、これから昔みたいな争いは起こらないだろうって話さ。火種はまだ色々ありそうだけどさ。何か、武慶であつたんだろう？ 真武剣が何かしでかしたとか何とか」

「真武剣の間抜けが、秘伝書を賊に奪われたという事だ。真武剣が何かした訳では無いらしいぞ」

王喜勝がそう言って最近耳にしたばかりの真武剣派の噂を披露する。武慶で何かが起き、この都に居る真武剣派の連中も慌しく動き始めている事は知っていたが、詳しい事情は分からない。奪われた物を探しているとも、人を探しているとも聞いていた。

「でさ、その新教主は裏切り者の殷汪様も追わずに許す事にしたとか何とか——」

李軍の話に王喜勝は鼻を鳴らした後、冷笑を浮かべる。

「そいつの話は出鱈目しかないな。現にあの七星が追っているではないか。所詮、この街の噂は真実かどうかなど構わんだ。面白ければ……いや、もはやそれすらどうでも良い。適当に間を埋めるのなら何でも吐くのだ」

「成る程。それに比べて——」

突如、この場の三人とは違う声が部屋の入り口の方で響く。三人は揃って飛び上がらんばかりに驚き、肩を強張らせて振り返る。そこには見覚えのある若い男の姿があつた。

「あなた方は真実を追って真摯に語り合っておられる。さすが、北辰教徒の方々は違いますね」

「おっ、お前、真武剣の——」

「ええ。真武剣の。ただし同じ真武剣派でも、『間抜けでは無いほうの』真武剣派ですが」

言いながらせせら笑う様な表情を見せて一人ゆつくりと入ってきたのは、真武剣派丁常源の弟子、張撰修ちやうせんしゅうである。同じ都に居ながらその姿をこの三人の前に現したのは一年ぶり、殷汪や洪破天らが都に来ていたあの時以来であつた。

第十三章 二十二

真武剣派の弟子の姿は何度も目にしているが、この張撰修の身形は少し変わっていた。史小倚らの記憶にある一年前も同様であったが、同輩の弟子達は絶対に身に着けられないであろう上等な衣服に身を包み、瀟洒な書生風を努めて装っているかの様な出で立ちと身のこなしは本当に真武剣派の一子弟かと疑うほど異質であった。その衣服の派手さが幾らか増している様にも思える。腰には長剣を提げていたがそれにも派手な装飾が施され、よくもこんな姿を師父が許しているものだと思小倚ら三人は呆れた。

「フン、まだ無事で居られたか」

王喜勝が睨みながら言う。張撰修はゆっくりとした動作で後ろ手を組み微笑んだ。小僧のくせに妙に落ち着き払ったその雰囲気、三人は苦々しく見つめる。

「無事？ はて、私は何か危機に晒されていたのですか？ 自分の知らぬ間にまさかそんな事になっていようとは。何かありましたかな？」

芝居がかった張撰修の反応に王喜勝らは怒りを覚える。こんな人間を好む者が居るだろうかと思える程の太々しさだ。

「何の用だ？ こちらはお前なんぞに用は無い。消えろ」

まともにこの奇妙な小僧の相手をするのは面倒だとばかりに、王喜勝は吐き捨てる様に言う。だが張撰修はそんな王喜勝を気にも留めずに相変わらずの調子で口を開いた。

「言われずとも、此処を去るので、まあご挨拶に寄ったままでですよ」「ほう？ 何かありましたかな？」

王喜勝はわざと先程の張撰修を真似て訊き返した。

去るとはどういうことか？ 恐らく洪破天の報復から逃げる為だろうと想像するが、それにしては遅い気もする。新たに、洪破天がこちらに向かっているという情報でも得たのだろうか？ と王喜勝

ら三人は同様の事を思い浮かべていた。

「武慶が私を必要としているようでね。この都も中々面白くはありませんが、ここですべてまでも遊んでいる訳にもいかず、そろそろ真武剣派の事を真面目に考えねばと思う処もあるのでね」

お前は怎樣だ？　とこれを聞いた三人は怪訝に思う。張撰修は真武剣派総帥の高弟丁常源の弟子という事は知っているが、数多く居る下っ端の一人の筈だ。武慶が――つまり、真武剣派がこの張撰修を必要となり呼び寄せるとは、どういう意味なのか。あるとすればこんな小僧一人、所詮何かに利用されてそれで仕舞いだろう。それはそれでいい気味というものだ。だが自分達の希望としては、洪破天に八つ裂きにされて惨死する様を晒してくれたほうが遥かに気が晴れるというものだが――。

（武慶に行けば、洪破天様から逃れる事は可能になるな……）

史小倚はそう思いながら、ふと殷汪、洪破天と共に居た梁発の姿を思い出していた。

「私などより、あなた方こそ無事で何よりですね」

「俺達が……何の事だ？」

王喜勝が訊き返すと張撰修は口許の歪んだいやらしい笑みを浮かべて、

「今、北辰の新総監の話をされておられたようですが、お優しい方様であなた方も救われたものではありませんか？」

「何だと？」

「あの裏切り者の殷汪――あれに関わったのですから、本来あなた方も敵と見なされて当然なのでは？　張総監が許したというのはまさに僥倖としか言いようが無いではありませんか」

「ハ！　お前に何が分かる？　余所者が知った口を利くな！」

王喜勝らは生意気なこの張撰修に腹を立てていたが、こんな小僧の口から『張総監』という名が出る事に変な違和感を感じていた。教徒である自分達でも殆ど知らないが、真武剣派の情報収集の能力は一体、どれほどなのだろうか。張撰修ごときでさえも耳にするほ

どというのに、自分らがいかに孤立しているかを思い知らされる。

だがそうは言ってもこの都を捨てて太乙北辰教のお膝元まで参じるまでには思い至らない。教主への忠誠心はある。しかし、張新という急に現れた新総監を信用する根拠も無い。普通なら疑いなく受け入れるのだろうが、自分達三人は違う。それはあの殷汪に会ったからだ。殷汪が離れ、張新なる者が現れる。何があつてそうなったのか、それを知らねば納得出来かねた。

「ですが、未だにあなた方は新総監を受け入れる気は無さそうだ。遠く本拠から離れたこの場所で、教徒の一部が叛心を育てているとなれば流石に放つてはおけないでしょう。殷汪と接点があるともなれば尚更です」

「黙れ！ 何だお前は！ 真武剣なぞに関わりの無い事だ！」

「そうなんです。いえ、先程言いましたように私は此処を離れるのでね。最後ですから少しばかりご忠告にでもなればと……、まあ、用心したほうが良いですよ。せめて、私の様な者にまで聞かれるこんな処でそのような話をされるのは、不味いとは思いませんか？」

終始、笑みを絶やさず話している張撰修を、史小倚はぼんやりと眺めていた。

（あの時……、梁媛様は私を家族の様に思うと言つて下された……）

史小倚は鮮明に覚えている。『あなたを忘れない』と。洪破天も『媛児と家族というなら儂もおぬしの身内となろう』と言つたのだ。

（ならばこの男、俺の仇でもあるのではないか？ 梁媛様、梁発様の身内ならば当然、これを討つ義務があるのではないか？）

史小倚だけでなく王喜勝、李軍にとつてもあの姉弟はすでにただの孤児ではなかった。総監殷汪と洪破天と共に居る、それだけでその前に跪き礼を尽くすに足る存在であるのだ。殷汪は反逆者などでは無い筈だと信じる三人にとってそれは変わっていない。

（武慶に行かせれば、手が——出せぬ——）

洪破天でもそれは難しくなる、そう考えた史小倚の拳が次第に固くなり、普段は力の抜けきつたその目が急に息を吹き返すように光

を集め始める。

目の前の張撰修は相変わらず口許を緩め侮蔑するかのような眼差しを見せている。史小倚が全身に熱を感じ始めたその時だった。

『誰か、居ないのか？』

広間の方から呼ぶ声がある。史小倚はハッと我に返り、声のする方に目を向けた。急速に身体 of 熱が退いていくのが解る。

「おや、お客が来たようですね。結構な事です。では私はこれで失礼するとしましょう」

張撰修は史小倚に向かって言うと言おうと抱拳し、更に冷笑を三人に浴びせつつ踵を返し、さっさと行ってしまふ。

史小倚はただ、あ、あ、と言葉にならない音を口から洩らしながら見送った。

「何しに來たんだいまったく！ ねえ、あたしらであいつを縛り上げて洪破天様の処まで届けないかい？」

李軍の荒げた言葉にも史小倚は何も言えずただ見返すしか出来なかった。

『誰か、居ないのか。客だ。部屋を借りたい。誰か』

客の男が呼んでいる。史小倚は、はい、ただいま、とうわずった声を出しながら慌てて表に向かう。そうしながら再び身体が熱くなるのを感じていた。それは先程とは違う、羞恥の熱であることに、史小倚はその身を震わせた。

客の男が、走り出てくる史小倚を見つけ、

「おう、すまん。暫くこの都に滞在したいんだが、何日になるかまだ判らない。部屋を貸して貰えまいか？」

「あー、部屋はございますよ。さあどうぞどうぞ」

緊張など殆ど無い日常に戻る。丁度客が来てくれた事に安堵する自分が居る。あのままだ感情だけ昂らせてあの若造に挑み、どうなった事か？ 仮にこの場合は首尾よくいったとしても真武劍派に真正面から喧嘩を売ったことになる。

「二人だ。宜しく頼む」

客の男はもう一人居て、全く同じ黒の衣装を纏った旅人の様だつた。史小倚はいつもの様に愛想笑いを浮かべながらその二人を空き部屋へと案内する。

（やらなくてよかったのだ）

そう思った矢先、自分は何と情け無い男なのかと、史小倚は項垂れた。

第十三章 二十三

都を囲む巨大な長城を、傳朱蓮は黙って見上げていた。初めて見る訳ではない。だが見慣れる程訪れてもいない。これを人が造ったのか、と、前に見た時と同じ事を思いながら眺めている。

傳朱蓮と狗不死が辿り着いたのは、金陽の西門である。咸水から北上して宿場である堯家村に着けばあとは都から西方へと続く街道があるのみで、その街道はこの目の前の西門から始まっている。傳朱蓮の様に此処へ辿り着いた者は皆一様に、この巨大な城壁を見上げ、感嘆する。そして此処を去る者であれば、今から失う物の巨大さに、大いに落胆することだろう。荒れた大地が拡がりつつあるこの国で唯一、この都だけは永遠に失われはしないと人々に思わせるに充分な、見事な城壁がそびえている。

「やっと、やなあ。久しぶりにええ宿、泊まりたいわ」

「丐幫の前幫主様のお言葉とは思えませんが？ 幫主を退くと同時に丐幫からも抜けられたのですか？」

傳朱蓮の狗不死に対するこんな丁寧な言葉遣いは、明らかに冗談でしか有り得ない。そして当然の如く狗不死は大いに笑う。

「泊まりたいなあゆうただけや。別に丐幫は思うのもあかんなんて決まりないで？ 朝から晩まで『腹減った何かええもん食いたい』しか考えへんようなモンの集まりや」

「で？ 狗さんの思う『ええ宿』ってどんな処をいうわけ？」

「知らん。泊まった事無いもん」

「あら、そう？ 昨日の処なんてかなり高級だったわよ？」

「んなわけあるかいな。あんなきつたない布団、よう客に使わせるわ。なんか匂ったで」

「え、狗さんあれで寝たの？」

「しゃあないやないか。他に何もあらへんかったやろ」

「さすがは狗前幫主様。私は無理だったわ。絶対無理。椅子に座っ

たまま寝たわ。おかげで体中が少し痛いんですけど」

「何やそれ。どこが高級やねん」

まだ都の西門をくぐってはいない。だが辺りは大勢の人間がたむろし、傳朱蓮と狗不死はそれらの視線に晒されていた。しかしそれは傳朱蓮らに限った事ではなく、行き交う者は皆、周りからの視線を浴びるのである。何の色も、熱も無く、弱々しく、だが確かにこちらを向いている。それらはすべて、故郷を捨てて遙々この都へとやって来た者達のものだった。

城門の外は見渡す限りと言ってよい程、そんな人々で溢れかえっている。此処まで来て何故街に入らないのかと思ってしまうが、殆どが一度は城門をくぐったものの、再び外へと追い出されてしまった者達なのである。

梁媛と梁発の二人が荒れた安県を逃れてこの都に辿り着いた時の事を、傳朱蓮は聞き及んでいる。彼女らも洪破天と殷汪に出会わなかったら、この中に居る事になったのだろうか。安県からなら辿り着くのは南門だろうが、違いなど無いだろう。しかしながら一年を経過した今でもこんな場所で無事に居られるとは思えなかった。この者達は寄り添う様に其処彼処にうずくまっているものの、互いに助け合う気力がはたして残っているのか疑わしい程に、彼らは弱っていた。

「都は広いのに、どうしてこんな……」

傳朱蓮の問いに、狗不死は首を振った。

「広いけどその分、人かて多いんや。国中の民が皆押し寄せたらこうなんのも当然やで」

「でも、それでも何とかする手立てを考えるべきでしょう？」

「儂が？ それとも朱蓮、あんたがか？ 言うとかけど、お上の考えた方策は、今のこれやで。これだけでも、難儀なこっちゃ。国中の人間が減っていく。ほんならお上の懐も同じや。皆一まとめに救ってくれる様な力を持つ人間は、今はおらへん」

「でも……」

「この今の状況は天から降った災いが大きい。大き過ぎるわ。人は幾らか知恵持ってきたかしらんけど、天に逆らう力はない。……ここから城門入るまでに皆を救う方法を言えなんてゆうても儂、そんなん知らんで？」

狗不死はいつもの軽い口調でそう言いながら、城門へと馬を進めていく。傳朱蓮は何も言えず、人々の視線を避ける様に俯き加減で後を追った。

城門の兵士達の睨む様な視線に耐えつつ都の中へと入った傳朱蓮は、辺りの様子を見渡すが暫く無言だった。外と、この中の違いは一体何なのか。都を包む城壁があまりにも大きいが故にこれほどの差を生むのだろうか、そんな事を考えながら行き交う人々の合間を縫って進む。賑やかさで言えば東淵も負けてはいないだろう。だがこの広大さは比べるべくもない。

「山が無いわ」

「ん？ ああ、そうやな。無い訳でもないけど、此処からは見えへんな」

東淵は山と湖に挟まれた細長い土地である。傳朱蓮が見慣れているそんな風景とは全く違う、ひたすら平たい大地の上に、金陽の街は築かれている。西門の真正面からおそらくは遙か先の東門まで真一文字に伸びているであろうこの大通りを傳朱蓮は目を凝らして見るが、その先は霞んで空と同化している様に思えた。

「さて、何処行くんや？ なんも無い場所にはなんも無い。逆にあり過ぎて何も無いのと同じや。探しもんするなら尚更や」

「洪小父様たちが泊まった宿を探すわ。殷兄さんに連れられて行ったって媛は言ってたけど、お父様も知ってる人がやっている宿みたい。史小倚っていう、北辰教徒」

「ふうん。北辰か。それを堂々と名乗っとるんやったら見つけ易いかも知れへんけど、此処でそれは無いわな」

二人がそんな話をしていると、通りの人を掻き分けながら慌てた様に駆け寄ってくる数人の姿があった。

「狗不死様！ 狗不死様ではありませぬか！」

狗不死はそれを聞いてあからさまに顔を顰め、すぐに馬を降りるとその手綱を強引に引っ張りながら脇道へと向かう。

「ちょっと狗さん、何処行くの？」

傳朱蓮も慌てて追うが、狗不死は答えず進んで行く。しかし、名を呼んで近づいてくる者達が二人を見失う事は無かった。

「お待ち下さい狗不死様！ 何故お逃げになるのです？」

口々に狗不死様、狗不死様と叫びながら追ってくるので、ついに狗不死は立ち止まり、振り返る。脇道には入ったがまだ大通りからはあまり離れていなかった。

「お前ら、声が大きいねん。儂に恥かかせるつもりか！」

「え？」

狗不死と傳朱蓮に追いついた男達は、何を言われているのか分からないといった様に互いの顔を見合わせていた。

傳朱蓮は一目見ただけで納得する。この男達は間違いなく丐幫の人間だと。彼らは、まるで貧しさを争うかの様に檻樓を身に巻きつけ、髪を振り乱し、まったくもって異様な集団としか言い様が無い。こんな姿でこの都の大通りを、しかも集団で闊歩する神経を持ち合わせるのは丐幫の者しかあり得ないのである。

だが、彼らが本当に貧しいのかは甚だ疑問である。真に貧しく明日をも知れない者達はこの丐幫の者達の様に、到底、元が衣服であったとは思えない選り抜かれた檻樓布を幾重にも巻いてなどおらず、裸同然の者の方が圧倒的に多い。似ている処といえば、『太ってはいない』という事だけだ。

（丐幫には力がある。本当に飢えた人たちしか居ないなら何千、何万居ようととくに飢え死にして消えて無くなってるわ。本当の姿は——でも、それを演じる意味であるのかしら？）

傳朱蓮は酷い身形の男達を観察しながら、狗不死の脇で黙ってい

た。

「僕は用があるんや。お前らとは関係無い」

「そんな……、あつ、休^{きゅう}！ 休幫主も狗不死様の事を心配して――」

「もう話したわ。ついこの間な。武慶で」

武慶で丐幫の現幫主、休達^{きゅうたつ}と会ったのは確かだが、ついこの間と言うには無理がある。

第十三章 二十四

「武慶のほれ、真武剣の英雄大会や。そんな時に休ともじつくり話してきたがな。ほんまやで？ 休に訊け」

丐幫の男達はまた顔を見合わせ、そして、はあ、と溜息の様な返事を寄越すだけであった。

「あ、う、狗不死様。こちらの……お嬢さんは……」

前に居た一人が傳朱蓮をチラチラと見ながら遠慮がちに訊いた。すると他の者も随分と興味を持っていた様で、皆一斉に視線を向けてくる。少しばかり驚いた傳朱蓮だったが顔を下げる事無く、こちらを見ている男達を数えてみると最初三人ほどであったのがいつの間にか九人にもなっていた。

「知らんのかいな。お前ら都に籠もって何も知らんのやな」

狗不死は吐き捨てるように言うが、東淵などという遙か彼方の街に住まう、ましてや何の名も上げていない若い女を知らないのは当然であろう。

「……東淵の、傳や。傳朱蓮」

「おお、」

名を聞いた丐幫の男達は皆が同様に口を開けて、そんな音を洩らした。しかしそのまま沈黙してしまう。

「ハ、知らんのかいな」

「あ、いや、そんな事は……。あの、狗不死様」

「何や」

「その、千河幫の？ 局が賊の襲撃を受けられた件は、休幫主からお聞きになりましたか？」

勝手に話題に上らせておいて名を聞いただけですぐ別な話に持っていくこの男に傳朱蓮はムツとしたものの、その男はまだ時折、傳朱蓮の方に視線を送り反応を窺うようにして話しているところを見ると、傳朱蓮はその男が何を言い出すのか否が応にも興味を抱き真

剣な眼差しで見返した。無論、無関係などではない。あの？局の話なのである。

狗不死の返答までには少し間があり、傳朱蓮は狗不死の横顔を窺う。するとそこには苦虫を噛み潰して不機嫌そうな顔があった。

「ああ聞いたわ」

狗不死は短くそう言って言葉を仕舞った。それだけだが、傳朱蓮はそれを聞いて怪訝に思う。

（一体どういう話を？ 私には何も言わないなんて。何も新たな事は分からなかったから？ それにしても……）

傳朱蓮は狗不死の様子を益々訝しがった。丐幫の休幫主と武慶で会っていた事は知っている。その時話題に上ったとしても特に不思議でもない。そして、狗不死はあの頃東淵に居たのだから丐幫の誰よりもその事には詳しく、休幫主の言った事は全て既知の事柄のみであったのだろう。だから、休幫主と話した事を自分に伝える必要は無かったのではないか。だが、今横に居る狗不死の、この話題には触れるなどとも言うような険しい表情は何なのか？ 狗不死はどうやら芝居は得手では無いらしいと傳朱蓮は思った。

「その……では……、我ら丐幫は今後北辰と距離を置くという事でございますか？」

「ああっ？ 何でそんなねん」

「いや、こちらの……傳家のお嬢さんと共に居られるという事は……その、あの？局と共に東淵の傳家の方々を襲った北辰教とはもう――」

これを聞いた傳朱蓮がすぐさま一歩進み出て口を開いた。

「あの件を北辰教の仕業だと断定されるのですか？ 何か証拠があったのでしょうか？」

「え？」

傳朱蓮の言葉は早く、勢いがあった。男が戸惑っている間に再び傳朱蓮は続ける。

「確証が欲しいんです。？局、千河幫も調べている筈ですが確かな

ものを掴めたのかどうかはまだ知りません。皆さん——丐幫は何かを得ておられるのでしょうか？ 教えて下さい。お願いします！」
迫る傅朱蓮に、男は仰け反って接触を避けようと必死である。その視線は狗不死に助けを求めていた。

朱蓮、と狗不死が声を掛けると傅朱蓮は狗不死を振り返り顔を顰めた。

「狗さん、何か知ってるの？ 私にまだ言っていない事が？」

「言うてへんけど、別に改めて言わんでも——みたいなこっちゃ」

「それは何？ それが聞きたいのよ！ 今まで考えた事が確かにその通りだった、って言うのならそれを聞かせて欲しいのよ！ 教えてよ！ 確かだって事を！」

狗不死は肩を縮めてしょんぼりする仕草を見せるが、そんな狗不死を無視するように傅朱蓮は再び丐幫の男に向き直り、改めて訊いた。

「ええわ」

傅朱蓮は狗不死が一言だけ言うのを背後に聞く。すると、目の前の男は口を開いた。

「証拠も何も……北辰の喬高（たか）が手下を連れて千河幫（せんが）の？ 局を襲うのを丐幫の人間が見ております。何人もが、見たと申しておるのです。丐幫は人が多く、北辰の幹部全ての顔を見知っている者も少なくないのでまず見間違える事は……喬高という者などは特にそうです。身体的な特徴がはっきりしておりますので」

「それは、いつですか？ ？ 局が東淵につく前か——」

「前ですな。あの辺はまだ千河幫の縄張り——、？ 局が宿にした古寺を襲った時の話と聞いております。その様な処であの喬高が手下を連れて何をするのかと後をつけたという訳です。喬高以下、頭のとっぺんからつま先まで黒の装束だったそうで、あの闇夜に何人居るのか数えるのに苦労したと申しておりました」

「何人居たのですか？」

「とりあえず五十は居たそうで。まあ、その辺で諦めたらしく——」

（五十？ やっぱり、あの山にもっと隠れて居たんだわ！）

間違いない、と傳朱蓮は思った。まさか下手人を直接知る第三者が近くで見えていたとは驚きだったが、これで単なる想像に過ぎなかった北辰教の仕業であるという事がはっきりしたのだ。無論、それを知ってどうするかはこれからの事だが。

傳朱蓮はまた狗不死を振り返ると項垂れた。

「狗さん……ごめんなさい。丐幫はやっぱりどっちにつくとか出来ないわよね？ 最初から関係無かったのに私が――」

「朱蓮。うちが分かってんのはこんだけや。ま、予想通りやけど」
狗不死はそう言うのと丐幫の者達に向かって、

「はいご苦労さん。もう行け」

「え？」

「はよう」

「は、はあ」

狗不死はまた厳しい表情を作って男達を追い立て始めた。すると傳朱蓮が、待って、と狗不死の腕を取る。

「皆さん、有難うございました。もう一つだけお尋ねしても？」

男達の顔に喜色が浮かぶ。この娘がまだ居ると行ってくれば狗不死も無理は言えないらしい事を感じ取っていたからだ。何故かというのも気になるが、とりあえず今は置いておく。

「はいはい、何なりと」

「史小倚という人がやっている宿はご存知ありませんか？」

丐幫の男達は何故か大いに張り切っていた。最初に現れた九人の中には知る者が無かったが瞬く間に丐幫の人間は更に増殖を始め、早々と傳朱蓮の質問の答えは得られてしまう。そして今度こそ集まった者全て、綺麗さっぱり狗不死に追い払われる事になってしまった。

「まさかあんなに人が集まるなんて」

「そこらじゅうにおる。それだけが取り柄の丐幫や」

「でも、本当に良かったの？ あの人達、丐幫の皆さんは戸惑ってるんじゃないの？ 狗さんが私なんかといたらやっぱり、北辰教と距離——というよりも下手をすれば敵対する事に？」

「朱蓮。そんなんは丐幫のモンが考えたらええこっちゃ。気にせんでええ」

傅朱蓮はこれ以上何も言えなかったが、気にしないなどという事は出来そうも無かった。

丐幫の者から教えられた史小倚の宿までは距離があり、二人は馬を牽いて歩きながら都の大通りを見物しながらゆっくりと向かった。傅朱蓮の目には珍しい物ばかりが映っていたが、頭の中は先程思い出された千河幫の？局と共に賊の襲撃を受けた時の事をばかりを思い返していた。そんな中、ふと咸水の村で会った老婆の話を思い出す（私の剣を探している黒装束の集団……。悪者は大抵黒づくめじゃないの。でもだからって黒を着ている人に一々気を取られてなんか居られない。そんなことしたら、宿に着けないじゃないの）

傅朱蓮は辺りを見回して視界に居る人間の衣服を確認する。そして溜息をついた。

第十三章 二十五

史小倚の宿と教わった場所に辿り着いたのは陽が西の空で赤味を増し始めた頃だった。昼間と変わらぬ多くの人通りがあり、何か食べ物を売っている出店が白い湯気をあたりに撒き散らし、それに誘われる様に群がる人々の姿があった。その景色は遠く離れた東淵の繁華街と何ら変わりはない。

客を呼び込む女の甲高い声のするその反対側に、史小倚の宿は静かに建っていた。

「なんやパツとせえへんな」

狗不死の言葉にほんの少しの微笑でのみ応えた傅朱蓮は先に足を踏み入れる。

「あつ、どうもどうも、いらっしやいませ」

愛想笑いを浮かべて傅朱蓮の許へやって来る痩せた中年の男。客以外の、宿の者らしき人物は他には見当たらなかった。傅朱蓮は丁寧にお辞儀をしてから、

「こちらは史小倚さまの宿でしょうか？ 私は東淵から参りました傅朱蓮と申します」

「えっ」

愛想笑いが途端に消え、男はあからさまに驚いた様子でそんな音を口から洩らして動かなくなってしまった。

「あの……」

傅朱蓮は狗不死と一度顔を見合わせて後、また男を見たがその表情は全く変わっていない。

「傅……、東淵の……、傅……千尽さまの？」

「はい。傅千尽は私の父で——」

「わ、私が史小倚でございます。あの、あの、……ようこそお越し下さいました」

男、史小倚の声は若干震えているようにも聞こえる。恐れる、と

いうのでは無さそうだが、大いに戸惑っている。一体、何にそれほど戸惑うのか傳朱蓮には判らなかった。

「そうですか、東淵から……わざわざこの都までお越しで……お疲れでございます。その、どちらへ参られるのでしょうか？」

史小倚は言う間、一度も傳朱蓮と目を合わせなかった。

「どちらで、もう陽も傾いとんがな。宿ちやうんか？ 此処に、参ったとこや」

「ああ、左様でございますね。お泊りで……。部屋は空いてございます。すぐ支度をして参りますので……」

史小倚はチラと視線を上げて狗不死を見たがすぐに顔を逸らして言う。そしてそのまま後退るとくると体を回して店の奥へと早足で去って行った。

「で、儂らはここに突っ立って待つとらなあかんのか？」

狗不死は口を尖らせて文句を言っているが、傳朱蓮は何も言わず宿を隅々まで観察する様に眺めていた。

（此処に泊まったのね。殷兄さんと洪小父様は。媛と、発も一緒に）華やかさとは全く無縁の、古い宿だった。だが今までの旅で泊まった宿と比べればこちらの方が幾らか広い。しかしその広さのせいで、客の少なさが目立った。ほんの数人が広間の端で酒杯を片手に食事を摂っているのが見えるが、外の喧騒が不思議なほど中は静かで、あまりにも質素な宿だった。

その後、史小倚の案内で部屋に通され、とりあえず暫く此処に留まれる手筈となったのだが、史小倚は余計な事は一切喋ろうとせず、早く話をしたい傳朱蓮が史小倚を捕まえたのは夜も更けて狗不死の寝酒に付き合い広間に降りた時だった。

傳朱蓮に呼び止められた史小倚は緊張の面持ちで振り返る。

「もうこんな時間や。ちょっと付き合ってたってえな」

狗不死は自分の隣の席を指差し、座るよう促す。

「あの、史さん。私からもお願いします」

傳朱蓮にもそう言われ、はあ、と小さく頷いた史小倚は仕方ない、といった様子で狗不死の隣に座ると同時に肩に掛けていた手拭いで顔を擦った。

「傳千尽さまはお元気でございますか」

以外にも史小倚が先に話し掛けてきた。何かを案じて機先を制するつもりなのだろう、と傳朱蓮らは感じたが、一体何を案じているのか？

「ええ、変わりありません。一年ほど前、こちらにお邪魔した洪小父様も無事に東淵に戻りましたし、梁媛も元気でおります」

「あ、はあ……」

やはり史小倚はどこか変だった。酒のせいか狗不死が早々と苛つき始め、史小倚に向かって言う。

「何や。儂らを警戒してんのか？ あんた北辰やろ？ 殷汪がとんずらして傳の家も敵になったっちゅう事か？ もう、仲間に儂らが来たんを知らせたんか？」

すると史小倚は目を丸くして、

「とんでもない！ 私は殷汪さまを敵など――」

「そんな事言うてええんか？ あんた、裏切り者を庇う様な事言うてたら、危ないんちゃうんか？」

史小倚は言葉を失うほかはなかった。己は北辰教徒だが、殷汪を敵と見なすつもりも毛頭無い。この二人は、どちら側なのか、どんな言葉を望んでいるのか、史小倚は必死に考えを巡らすが余計に混乱していくだけだった。傳朱蓮という娘は殷汪の義兄弟とも言える傳千尽の娘。殷汪の味方につく筈だが――しかし此処は遠く離れた金陽の都。正直、今の東淵や景北港で何がどうなっているかなど解っていないのである。

同時に、傳朱蓮にも同様の迷いが起こっていた。殷汪の今の詳細を知るべくして旅をしてきたのだが、この史小倚に正面切ってそれを訊ねる事はまだ出来ないのである。一年前、殷汪や洪破天が此処へ来た時にはこの史小倚という男はよく世話をした様で、それもそ

の筈、当時はまだ殷汪は北辰教総監であつたのだ。だが、今はどうなのか？ 殷汪は方崖で人を斬って出奔したと広く伝わった今、この男は殷汪は裏切り者で敵と思っているかも知れない。そう考える方が北辰教徒として自然な事である。

このままでは一向に話が切り出せない。意を決するしかない。今さっきこの史小倚は『殷汪を敵とは思っていない』という事を口にした。殆どの北辰教徒はそんな事は言わない筈だ。傳朱蓮はそれを信じる事にする。

「私は、殷さんを探しています。あの人は、私の家族ですから。北辰教徒であるあなたに訊くのは変に思われるかも知れませんが、最後の消息を知るのはあなたしか居ない様なのです。あなたに、するしか無いのです」

傳朱蓮はそう言うのと、反応を窺いつつ史小倚を真っ直ぐ見つめた。整った切れ長の、傳朱蓮の真剣な眼差しに史小倚は思わず視線を逸らす。そして呟くような小声で訊き返した。

「探して、どうするおつもりで？ 殷汪さまはもう……表に出る事を望まれないでしょう。何処かで、このまま——」

「そう、殷さんが言ったのですか？ あなたは直接聞いたのですか？ 一年前に？」

「……」

「史さん。どうか教えて下さい。私は知りたいんです。今もちゃんと、殷……殷兄さんが無事なのか。ただそれだけを——」

「一年前の、あの時ではありません」

史小倚は顔を伏せたまま、静かに言った。

「え？」

「あなたの仰っている一年前というのは、あの梁媛というお嬢さんを連れて東淵に帰られた時では？」

「……その時ではないと？ もっと後、最近の事なのですか？」

殷汪が最近になって此処を再び訪れていたというのだろうか？ それなら傳朱蓮は一気に手掛かりに近づいたという事になるう。

「いえ、最近でもありません。殷汪さまが方崖で騒動を起こして行方を眩ましたとこの都に伝わって後の事です。当然ながら、長居はされませんでした」

「何か、何か言っていましたか？ 何処へ行くとか」

「まさか。一応私も北辰教徒ですから……」

「あんたも、北辰教に殷汪が来たっちゅう事を言わへんかった訳やな？ 何でや？」

狗不死の言葉にようやく顔を上げた史小倚は、幾分緊張が解けた様で、逆に目に力を取り戻した様だった。

「色々お話を聞かせて頂きました。そして思ったのです。あの方は――教主様の敵になった訳では無いと」

第十三章 二十六

狗不死が頷いて言う。

「確かに、方崖でひと暴れして飛び出したんは、ほんまは殷汪やないしな」

これを聞いた史小倚は大いに驚いて、

「殷汪さまではなかった？　　どういう事なんでしょうか？　　誰が……」

そう言いながら俯いて頭を掻いた。

「いやまったく……この都には方崖の事などまともに伝わっては来ないのです。私は今でも北辰教徒と言えるのか……、まったく、情け無い」

「そんなん気にせんでもええで。景北港の教徒かて誰も知らん事や」
「史さん」

傅朱蓮が話し掛けようとした丁度その時、宿に二人の男が入って来るのが見え、その二人がこちらを見たのに気付いて口を噤んだ。揃いの黒の衣服に身を包んだ中年の男達である。

傅朱蓮の様子を見て狗不死と史小倚も振り返り、史小倚だけが立ち上がる。

「ああこれは、おかえりなさいませ」

史小倚がそう言うという事は二人は此処の客なのだろう。何も言わず視線だけを史小倚に送った二人の男は二階にある部屋へと向かい階段を上がって行った。

「客か？　いつから居るんや？」

狗不死が訊ねると史小倚は再び椅子に腰掛けながら、

「えー、二日……いや三日になりますが、それが何か……」

「二人だけか？」

「はあ、見ての通り、うちはいつもこのような状態であまり客が無いもので。この都は三方の各門を中心に賑わっているのですが

そちらにはもつと良い宿が外から来る客を待ち構えているのです。

此処は中途半端な場所です――」

「ちやうがな。さっきの二人や。他にも居るんか？ 同じ格好した奴とか」

「いえ、あのお二人だけで……何か……？」

「何処から来たとか聞いてへんか？」

「何処、とは聞いてはおりませんが、ずっと長旅をしていたとか。

暫く都に居るので部屋を借りたいと……それだけです。あの……何者でしょう？」

「知らんわ。こっちが知りたいわ」

「狗さん。気にしなくていいんじゃない？ 一々気に留めてたらきりがないわ」

傳朱蓮の言っている事も何の事かさっぱり分からない史小倚は不安になってくる。怪しい二人組だったのだろうか？ 全くそんな気配は感じなかったが――。

「そんな事より」

傳朱蓮が改めて史小倚に向き直り、

「殷さんが此処に戻って来たのはいつ頃ですか？ 一人で？」

「かなり前の事です。洪破天さまと一緒に東に向かわれた後――、本当に方崖まで行かれたのかと思うほど早く、此処に戻って来られたのです。今度は別な方と一緒に」

「別の？」

これには驚かざるを得ない。まさか殷汪が洪破天と別れてすぐにまた別の誰かと共に行動しているなど傳朱蓮には思いも寄らない事だった。一体何処の誰なのか――そして、殷汪は一体何をしているのか？

「名前は……本当の名は知りません。殷汪さまは私に、自分はいまさら名を隠しても仕方ないが今度はこの者が夏天佑という事にしておいてくれ、と仰られて……まあ冗談で言われたのだと思いますが、その方は重い病気なのか、大怪我なのか、とにかく話はおろか自分

で歩く事も出来ず、最初見た時は……死人ではないのかと疑ってしまつた程で……。しかし殷汪さまは随分とその方の体を気に掛けておられるご様子でした」

「一緒に来たというより、殷汪が運んで来たんやな。ほんま何しとんやろな。夏天佑か……。本物の夏天佑やったら死んどるけど」

今度は史小倚が目を丸くする番だった。殷汪が仮名として出した『夏天佑』が――広い江湖に同名の者が居ないなどという事は有り得ないと思われるが――その身边に実在する人物のものとは考えていなかったからである。

傳朱蓮が質問を続ける。

「そんな人を連れて、何をしに此処へ？」

「医者です。此処には平大生へいだいせいという医者が居りまして、名医として名が知られているのですが――」

「発を、梁発りょうはつを診てくれたという人ですね」

「そうですそうです。殷汪さまはその医者 of 処へその……夏と呼ぶお人を連れておいででした」

狗不死が傳朱蓮に目を向ける。話している内に寢酒の効果は完全に消えてしまった様だった。

「朱蓮、あんたの知る殷汪は全く知らんモンをわざわざ名医に見せる為に遙々都へ戻ってくるような奴か？」

「助けられそうなら放って置かないとは思うけど、でもちょっと戻るって距離でも無いわよね……。洪小父様の話では別れたのは東淵の手前よ？ 殷兄さんは名前も知らなかったからまた『夏天佑』って言ったのかしら？ それとも本当に名を隠さないといけない人だった……？」

「どこぞで偶然拾つた死に損ないでも無さそうやな」

これ以上の事は史小倚にも分かりかねる様で、その者については医者 of 平大生を訪ねてみるより他は無さそうである。

「長居はしなかったという事でしたが、殷さんはまたその人と一緒に都を出て行ったのでしょうか？」

傳朱蓮の問いに史小倚は首を振った。

「分からないのです。あの方がどうなったのか。少しは良くなったのか、或いは駄目で、置いて行ったのか。殷汪さまがただ一言、『世話になった』とだけ言われて行ってしまうました。その時にはお一人でした」

殷汪の後を追う事を楽しんでいる自分が居る事に、傳朱蓮は気付いていた。最初の動機であった？局の事件に関する何かを得る為に、直接は知らずとも北辰教の内部をよく知っているであろう殷汪を探すという目的は忘れはしないものの、方崖を離れた殷汪のその後はどうなっているのか、何をしているのか、或いは何をしようとしているのかという部分に強く興味を引かれている。

重症を負った謎の人物を連れて都に戻るのは北辰教から逃げる人間のする事では無さそうである。おそらく『逃げる』などという考えはあの人には無いに違いない、逃げ隠れする必要などあの殷兄さんには無いのだ、と傳朱蓮は思っていた。

「狗さん。明日、その平先生を訪ねてみない？」

「ん。そやなあ」

「平先生は洪小父様と古くからの知り合いだそうだけど、狗さんは知らないの？」

「洪と知り合うたんかてそんな昔やないわ。ほんでもその平大生ちゅうんは名だけは聞いた事あるかも知れん」

「あの、そろそろ私は……」

史小倚がまるで二人の機嫌を伺うように上目遣いで言いつつ、椅子から腰を上げた。もう夜も更けている。急に引き止めたのでまだ仕事が残っていたのかも知れない。傳朱蓮も立ち上がり、

「まだまだお聞きしたい事はありますが、暫く此処でお世話になりますから、またお願いします」

「ハハ……、それでは、おやすみなさいませ」

そそくさと立ち去っていく史小倚を、傳朱蓮と狗不死はじつと見送っていた。

「なあんや、まだ態度がぎこちないなあ。何かあんのかもな」

「とりあえず、今日のところはもう休みましょう。お酒、まだあるの？」

「もうちよつと」

「じゃあ私が片付けておくわね」

傳朱蓮は狗不死が取ろうとしていた酒杯をサッと奪うと、一気に飲み干してしまう。

「あっ！」

「狗さん、おやすみなさい」

傳朱蓮は空の酒杯を狗不死の手に戻すと、一人、部屋へ戻って行った。

第十三章 二十七

朝、傳朱蓮は部屋を出ると真っ先に史小倚を探し、呼び止めた。一晩中氣になっていた、殷汪が連れて来た者が男だったか否か——ただそれを訊く為である。夏天佑という名を用いたと言っていた筈だが、史小倚ははっきりと『男』とは言っていない。女が男装してはいなかったかと訊くと、確証は無いが男だったと思うとだけ返ってきた。顔をちゃんと見ていればはっきりしそうなものだが、史小倚はその者には近づきもしなかったとでも言うのだろうか。とにかく女の様では無かった、とのことだった。

「何で女かも知れんなんて考えたんや？」

「ほら、武慶で清稜派の木道長さまが仰ってたでしょう？ 倚天劍いてんが売りに出されたって。方崖から持ち出した女が居るとか。殷兄さんが此処に戻った頃と似たような時期じゃないかしら。あの劍は殷兄さんが持っていた物——。方崖から持って来た女は、一緒に居たとも考えられると思わない？」

「怪我だか病気だかも判らへん容態の女なあ……。方崖飛び出して北辰のモンに追っ掛けられてやられてもうたんやろか。よう生き延びて此処まで来れたな」

「殷兄さんが助けたとか」

狗不死は唸りながら首を傾げている。

「その、倚天劍持って逃げたっちゅう女な、多分、夏天佑の女やと思うけどなあ。殷と入れ替わった事なんか知らんのちゃうか。おそろく女の方は殷の事、知らへんで」

「誰の女とかそういう事言ってるんじゃないの！」

急に傳朱蓮の声が大きくなったので狗不死は首を縮める。

「ま、医者に訊いたらはっきりするやろ。平先生とやらのところ、はよ行こ」

狗不死は傳朱蓮から逃げる様に、一人先に外へと飛び出して行ってしまった。だがどうせ宿の前で待っているに違いない。狗不死も平大生の屋敷の場所を知らない筈である。傳朱蓮は劍を腰に提げ、いつものように長弓を担ぐと急ぐ事も無く表に向かって歩き出した。その時、昨夜見たこの宿の客という黒装束の二人の男が居る事に気付く。と、同時に一人と視線が合い、傳朱蓮は焦りを隠しつつ思わず明後日の方向へと視線を彷徨させた。努めて自然に、などと考えているとどうしても他所ばかり見ていられないものである。何気なく視線を男達の方向へと戻す。視線を合わせない程度に、しかし視界の端で男達はこちらを見ているかどうかとも確認しながら。だが、傳朱蓮の目は男達から逃れる事は出来なかった。彼らが揃って自分をじっと見ていたからである。

「何か？」

焦りもあつてか、傳朱蓮の方から声を掛けてしまう。じっと見てくるなど失礼ではないかと言わんばかりの語気の強さだった。男の一人が口を開く。

「いや、その――背にあるその弓が気になったのでね。失礼致した。全く見かけない珍しい形をしている。私はそういった武器に興味があるものでね。いや、実に素晴らしい」

言いながら男は傳朱蓮の顔では無く、その肩越しに見える弓を注視していた。

傳朱蓮の持つ弓は確かに他には全く見かけない特殊な成りをしている。通常なら弓の中央を握りとするところをその弓は中央より下方に握りがあり、その上下で形状が異なっているのである。何を意図してそのように作られているのか、持ち主である傳朱蓮にも全て理解出来ているわけではなかった。それと同時に目立つのがその長さである。今、傳朱蓮の背にあるその弓は七尺から八尺はあるだろうか。

黒を基調に塗られた地味な色ではあるがその存在感は常に注目の的となってきた。そしてそんな特殊な得物を背負う事で傳朱蓮もそ

の矜持を保てるといった面もある。言わば自慢の一品であり、褒められれば当然だと思いつつも気を良くしてしまうのである。

「これは、この国の物ではありませんから、他にはおそらく無いのでは。私は旅をしていますですが同様の物を目にした事はありません」
まるで長年方々を旅して探し続けて来たかの様に喋ってしまふ傳朱蓮だったが、ここはこれが非常に貴重なのだという事も自慢しておきたかった。その弓をじっと見ていく者はあるが、実際に声を掛けてくる人間はそう多くは無いからだ。

男の一人は弓から目を離さないまま腕を組んで唸った。

「異国の弓……しかし何処の……これほど他に全く見ないというのはどういう事か？ お嬢さん、どうかその長弓、近くで見せてはいただけまいか？ 決して傷つけたりはせぬゆえ何卒、お許し頂きたい」

男はそう言って立ち上がって恭しく頭を下げた。もう一人の方は興味が無いわけでもなさそうだが頭を下げてまで見ようとは思わないらしく、何も言わず遣り取りを眺めている。

この二人、全く同じ型の衣服で揃えており、髪を結った布の色まで全て黒で同じである。腰にも同じ長剣。それに加えてもう一本、何かは判らないが同様の棒を長剣とは反対側の腰に差していた。体格も似たようなもので、違いは顔しかない。立ち上がって礼をした方は角ばった厳つい顔、もう一人の方は細く長い顔で無精ひげがあった。

ふと傳朱蓮は思い出す。今、自らの腰に提げている青？剣を探索者達ではないのかという最初の疑惑である。そして、それはどうやら違ったようだ、と傳朱蓮は見なした。何故なら彼らはどちらも長弓の方にしか興味を示しておらず、見せてくれと頼んできた男も、そして座ったままの男も、腰の剣には一度たりとも視線を移さなかったからである。武具に興味があるという目の前の男でさえ目に留めない、訝えない姿をした青？剣。傳朱蓮はその隠れた名剣を不憫に思いながら心の中で苦笑した。

「おい、不躰にその様な事、失礼ではないか」

座っている方の男が初めて口を開くとそう言って相棒をたしなめたが、傳朱蓮は既に見せてやろうという気になっており、

「少しだけなら――」

そう言つて背の長弓を外し体の正面に持つてくると床に立ててみせた。

おお、と声を洩らしながら目を細める男二人。座っている方も無関心では居られなかった様で、上体を前方に傾けて傳朱蓮の長弓に見入っていた。

「西方では無さそうだな。あちらからの物はどれも単純で美しい。だがこれは……」

「この成りはどういう意味を持つ？ 真っ直ぐ飛ばせるのかも怪しい……。お嬢さん。あなたはこれを実際に用いた事が？」

傳朱蓮はその質問に大いに満足げな笑みを浮かべた。

「勿論、何度もあります。実際に射てご覧に入りたい処ですがそうもいきません。残念ですが」

「これは、国内で求められたのかな？ 西方でないとなれば南方……」

一人が言うともう一人が膝を打ち、

「稟施りんしかい会か！ 有り得そうだぞ」

そして二人は揃つて傳朱蓮の回答を待っている。傳朱蓮は首を振った。

「買ったわけではありません。私の……知人が長く持っていたものを譲り受けたのです。その人がどの様にして手に入れたかは聞いておりません」

「左様か……。まさかこの世にただ一つというわけでも無かろうが、この国では本当に唯一かも知れんな……」

「まさかそこまででもないでしょう？」

傳朱蓮は口ではそんな事を言いながらも、そうかもしれない、いや、そうであつて欲しいと思つていた。

「異国に豊富にある、というなら稟施会も数を仕入れるだろうしな。仮にこの一張しか存在しないとしたら、取り引きがあった時点で知れ渡るだろう。きつと法外な値段が付く。弓が引けないような奴でも、こんな美しい姿を見れば欲しがる奴は出るだろうからな」

「だろうな。倚天の時は奴ら、買い手だった訳だが」

倚天、と聞いて傳朱蓮はハツとなった。男達はその表情を見逃さず、

「最近、この街に来られたか？ 少し前に、この都にとんでもない剣が現れた。倚天剣という非常に価値のある剣でしてな。とんでもない額で取り引きされたのだが」

「ほんの少し噂で聞いた事があります。でもそれがどのような剣かは知りません」

「あちらは知名度もあって値が釣り上がったが、おそらくこの弓もいずれ名を知られる事になるのではあるまいか」

「私は売りませんが。あの、その倚天という剣は誰が持って……誰が売りに出したのでしょうか？」

これはいい機会と、傳朱蓮は逆に訊ねてみた。武慶で木傀儡風もくかいふうから聞いた話では方崖から逃げた女が持ち出したとの事だったが、それ以上の事をこの男達は知っているかも知れない。だが、男達はそんな傳朱蓮の期待を即座に打ち碎いた。

「さあ？ あんなものを誰が売ろうとしたのか興味は大いにあるが、仲介をした商人は相当口が堅い様でね。とにかくお嬢さん、あなたは正しい。この弓、絶対に手放すべきではない」

「ええ」

傳朱蓮は努めて平然と、笑みを返した。

「またとない機会を得てこれこそ眼福というもの。そういえば、お連れが居られた様だが……」

「あ、ええ、もう行かないと——」

「いや、留め立てして申し訳ない」

傳朱蓮は弓を背に戻す。宿の入り口に目を遣るが狗不死の姿は見

えなかった。

（まさか一人で行ったんじゃないでしょうね！）

傳朱蓮が顔を戻すと、男達は揃って黙ったまま笑みを浮かべていた。何か別れの挨拶でもと考えてみるものの、相手は何も言う気配が無い。変な違和感を覚えつつ、では、と呟く様に言って、傳朱蓮はその場を離れ、宿の外へと向かった。

第十三章 二十八

「なんや、何の話してたんや？」

傳朱蓮が表に出ると、狗不死は案の定すぐ近くに居たらしく駆け寄って来てそう訊いてくる。おそらく何度も中の様子を窺っていたのだろう。

「あの人たち、この弓に興味を持ったみたい。珍しいから少し見せてくれて言うから見せたわ。それだけ」

「ふうん。怪しいところは無かったか？」

「ええ。彼らは全く、こっちには――」

傳朱蓮は言いながら腰の剣に手を遣り、狗不死もつられて傳朱蓮の剣に視線を遣る。

「……剣、何処や？」

狗不死が再び顔を上げてみると、傳朱蓮は自らの腰に視線を落としたまま硬直していた。そこには剣の抜かれた古びた鞘が下がっているだけである。

「朱蓮！」

狗不死が呼びかけると同時、傳朱蓮は身を翻して再び宿の中へと飛び込んだ。狗不死もほぼ同時に後に続く。が、追うべき者達の姿は既に消え去っており、傳朱蓮は愕然として立ち尽くした。広間には傳朱蓮と狗不死の二人しかおらず、あの二人組の行方を知る者は皆無である。

腰にある剣を、どのようにして抜き取ったというのか？ 全く気が付かなかったという事実が信じられない。それはいつだったのか？ 弓を背に戻す、その一瞬か？ まさか己はそれほど感覚が鈍かったのかと思うと、眩暈を起こしそうな程である。

「諦めるんか？」

狗不死が問う。その口調はいつも同様、深刻さのかけらもない。そしてそんな事は聞くまでも無い事であった。

「まさか」

傳朱蓮は短くそう答えるとまた身を翻し、表へと跳躍する。

狗不死の指笛の音が辺りに甲高く響いていた。ただ鳴らすのではなく、少々変わった音調があり、一つの節を何度か繰り返している。傳朱蓮には振り返って訊ねる暇は無かったが、狗不死が仲間を、丐幫の者を呼んでいるのだろうと察する。程無くしてそれらしき者達が音に引き寄せられる様に集まってくるのが見えた。それもかなりの数である。そこかしこの路地から湧き出す様に現れる者達。都に入った時に会った数名などまだまともな方だったのだろうと思える程、醜さにかけては誰にも譲らないという様な、まさに異形の者達でもあった。

丐幫の者達に取り囲まれて傳朱蓮たちの足も止まる。

「黒衣の二人組、見たな？」

狗不死が一步進み出て言った。すると何故か丐幫の者達は皆、口々に『見ました』だの『はっきりと覚えております』などと言い出した。何故この者達が皆、あの二人組を知っているのか傳朱蓮には解らない。この者達があの史小倚の宿の近くをうろついているような事も無かった筈である。そんな傳朱蓮の疑問をよそに、狗不死は続けた。

「この朱蓮の剣を奪っていきおった。鞘から剣だけ抜いてな。おそろく都の外に逃げよるんちゃうか」

「狗不死さま。あれは他所に仲間が居ると思われます。全く同じ姿をした集団を他で見た者が何人も居ります」

「武慶からこの都の間で時折姿を見せるようで。どういった集団なのかはまだ不明でございますが」

「そんなんはよ言わんかい！」

狗不死が珍しく声を荒げるのを、傳朱蓮は少し驚きながら見ている。た。

「申し訳ありません。そうではないかと皆で話していたところでし

て……まさか傳お嬢さんの剣を盗むなど——」

「狗不死さま！　すぐ追いかけてませんと。我らは三方に別れ、まず各城門へ向かいまする」

狗不死が頷くと同時に、丐幫の者達は蜘蛛の子を散らす様に一斉に駆け出していく。薄汚れた衣と髪をより一層振り乱しながら、瞬く間に散開していった。

手を貸してくれるという事に違いは無さそうだったが傳朱蓮には理解出来ない事ばかりである。

「どうしてみんなあの二人を知ってるの？」

「んん？　まあ、あいつらはお節介が過ぎるんや」

「狗さん。もっと端的に言って貰えないかしら？」

「儂らがあの宿に泊まるって知ってもうたからな。他の客はどんなんや、とか確認したんやろ」

丐幫の者達が狗不死の存在を知りながら放っておく事など有り得ず、怪しげな者が近づいてはいないかと宿の客も探っていた。幸いにして史小倚の宿は閑散としており客などあの二人組くらいしか居らず、一安心していた事だろう。そしてまさかその二人が事を起こすなど想像もしていなかった筈である。

「朱蓮、どうする？　このまま追ったら都から暫くおさらばせんならんかも知れへん。まだ何もしてへんけど、ええんか？」

狗不死の言葉に一瞬、逡巡してしまふ傳朱蓮だったが、やがて首を振った。

「もし殷兄さんを見つけたとしても、青？を盗まれたままなんて会わせる顔が無いわ。絶対に、取り戻さない」と

そう言って勢いよく袖を翻しつつ後ろを振り返り、歩き出す。

「ん？　何処行くんや？」

「飛雪を連れてくる」

「ああ、馬な」

「なんとかあの婆さんの耳には入らんという欲しいなあ」

狗不死の言葉に傳朱蓮は黙り込んでしまう。婆さんというのは咸水で会った老婆の事だった。

『お前にその劍が守れるとは思えない』

老婆の言葉が蘇る。その感覚がまるであの咸水の時の様に、老婆が何処からともなく話し掛けてくる錯覚となり傳朱蓮の身を震わせた。

（守れなかった――守る為に戦う事すら出来ずに大切な劍を――失ってしまった！）

「お前が居ってその体たらくかい！　とか言いよるやろなあ……。はあー参った」

狗不死の口調はいつにも増して軽い。それも傳朱蓮を氣遣つての事であるのは明白である。

「本当に……呆れるわよね」

傳朱蓮はぽつりと言つて、愛馬飛雪の背に跨った。

「ちよつと油断しただけやがな。きつちり取り戻したる」

「私が、よ」

「ほんなら行くで！　とりあえず一番近い西門や。うちのんがもう着いとる」

狗不死の馬が駆け出すと同時に傳朱蓮も飛雪の手綱を絞り、氣合を發した。

西門に向かつて駆けながらも、まだこの辺に潜んでいるかも知れないと辺りに注意を払う傳朱蓮だったが、それらしい姿は見えない。だが、今日は黒い衣服の人間が辺りに多い氣がしてならなかった。

「とりあえず外に出たかどうかが先や。都の中はうちのモンに虱潰しに調べさせる」

「でも既に人が多いわ。出たかどうかも――」

「ほんなら江湖中を探し尽くしたる！　ハ！　真武劍派は泥棒一匹に難儀しとるけどな、丐幫は逃がさへんで！」

第十三章 二十九

丐幫の手を煩わせる事はさすがに心苦しく感じる傅朱蓮ではあったが、狗不死と彼らの遣り取りを見ているとこの者達なら何でも出来てしまうのではないかと思わせる程の数の力とその熱気に当てられて、つい甘えてしまいたくなる。実際、自分一人ではあの盗人達を捕まえるなど到底出来そうも無く、あの剣を取り戻すには彼らに頼るより他は無いのである。

傅朱蓮はふと考える。狗不死は丐幫の人間を集めて動かそうとしているがそれは丐幫においては何の問題も無いのだろうか。丐幫の現幫主は休達という武慶で会った人物だが、彼以下、幹部達は前幫主狗不死の言う事は無条件に従うのだろうか。休達という人物は武慶での短い遣り取りを見る限りそうであるかも知れないが、他の幹部も同様とは限らない。

先程狗不死の許に集まった者達の中にはどうやら幹部と呼べそうな人物は居なさそうである。休達は武慶の真武観で良い身形をしていたが、やはり丐幫でも偉くなっていけばそれなりの身形を許されるということだろう。真武観だから汚い格好では入れない、というのも充分考えられるが――。

傅朱蓮は思い浮かぶあれこれを振り払う。

（私はまだ一人じゃ何も出来ない子供同然じゃないの！ 半人前の癖に丐幫の組織がどうか恥知らずもいいとこだわ。『子供』らしく大人しく助けてもらえば良いのよ！）

何の警戒もせず大事な剣を易々と奪われてしまった事に忸怩するを超え、半ば自暴に陥りかかっている傅朱蓮である。

傅朱蓮と狗不死はまずこの都の西門に着くが、既に待っていた丐幫の者達からは何の情報も得られず続いて南門へと向かう。仲間かも知れないという黒衣の集団を丐幫の者達が時折見かけるといのは、その南門から真っ直ぐ南下する街道である。もしその情報が正

しいのならば剣を盗んだ二人はその街道を通って南下する可能性が高い。

「ほんでも、あの街道で何かの拠点になつとる場所なんて知らんなあ。武慶も超えて更に南側やったら幾らかあるけど、こっち側や言うてたしなあ」

狗不死はしきりに首を捻っている。黒衣の集団とやらは拠点を持つのか、それとも江湖の流れ者か。狗不死も知らないのであるから、その集団を知る者はまだかなり少ないと思われた。しかし徒党を組んでいる処を複数回目撃されているのだから確実に存在しているに違いなく、何かの目的があり、そしておそらく中心になる人物が居たりもするのだろう。

江湖には分からない事が山ほどある。そしてそれだけ危険でもあるという事だ。全てをよく知って上手く渡り歩くのと、運良く危機に出くわさなかったのとは雲泥の差であるが、己はそのどちらであるのか――傳朱蓮は今になってそれを思い知るところとなった。

傳朱蓮は腰にある、中身を失った黒い鞘を握り締めていた。

(……いい気になって旅をして、何かを得るところか大事な物を失ってしまうなんて。丐幫の人達を前にこんな恥を晒して、まるっきり馬鹿な、小娘だわ。江湖は危険に満ちているのに、今まで大丈夫だったからって舐めていたのは私……。嗚呼、もう何処かへ隠れて……しまいたい)

少し離れて狗不死と丐幫の者達が話し込んでいる。

「狗不死さま、如何なされますか？ この都をさらに尽くすにもかかりの手間が掛かりますが……」

「休幫主へ伝えますか？ 幫主は武慶に寄った後、各地を回ってから此処へ戻られる予定でございますが、かなり先の事。取り急ぎ幫主の耳に入れ、やはりここは幫主から直々に皆に――」

「それは、そこまでしていただく必要はありません！」
不意に傳朱蓮が声を上げる。

「やっぱり……私なんかの為に……。丐幫の皆さんがそこまで手を煩わせるような……そんな価値は私にはありません」

「どないしたんや。急に弱気やなあ」

狗不死はすぐに傳朱蓮の傍に戻り、その顔を覗きこむ様に寄り添いながら話し掛ける。

「いっぺんに色んな事考えすぎてへんか？　こんなん勢いでいったらええんや。人間は揃うとるんやしな。他所と違うて丐幫は暇なんや。あいつらにも仕事させたって――」

「狗さん」

顔を上げて見つめてくる傳朱蓮に、狗不死は困惑した。傳朱蓮の切れ長の双眸には涙が溢れんばかりに浮かんでいたからである。

「私……帰りたい。私……東淵に……」

「朱蓮……」

狗不死はまじまじと傳朱蓮の顔を見つめ返す。ついさっきまでの、今までの常に強気な傳朱蓮のこの急な変わり様は一体どうしたことか？　そっと手を狗不死の胸に置き、小柄な狗不死の肩に額を寄せ、身を震わせる傳朱蓮。その背に戸惑いながらも腕を伸ばす狗不死であった。

「朱蓮、どないしてん。そう泣かんと。儂が、傍に居るがな」

赤子をあやす様な狗不死の腕の中で、傳朱蓮の嗚咽は暫く止む事は無かった。

（朱蓮、すまん。すまんなあ）

狗不死は傳朱蓮の背を撫でながら、思いを巡らせていた。ようやく、ずっと共に居た自分に対して傳朱蓮は本当の姿を晒したのだ。

劍と長弓を身に着け、胸を張って江湖を進む傳朱蓮の姿は決して本来のものではなく、虚栄に過ぎない事を狗不死は知っていた。だがそれを全く無駄な、無意味なものとも思っていた訳ではない。若い者なら特に抱き易いある種の自尊心であり、誰もが経験をし、何をおいてもこの江湖で生き抜く術を身に付け成長する為の欠かせな

い力の源となる。そして傳朱蓮のそれは理想と現実の差に脅かされながらも今まで彼女の心を覆い、守ってきた筈だった。

この江湖において、それらは幾度と無く打ち碎かれるという事も狗不死は知っている。ましてや本来なら無関係である筈の武林に、洪破天や殷汪といった人物を通して多少なりとも触れて育った傳朱蓮の価値観は、剣などの武術の力に重きを置くようになっていく。それは傳朱蓮自身に理想の姿と現実の己の実力の乖離をまざまざと見せつける事にもなるのだ。

今まさに、傳朱蓮を覆った自尊心が音を立てて崩れ、中から小さな、か弱い少女が姿を現したのである。多分、青？剣を奪われた事はそのきっかけの一つに過ぎないのだろう。綻びは常に抱えていたのだ。あの二人を追って駆け出した時の傳朱蓮は、もう演技しか出来なかったのかも知れない。

ただの剣ではないあの青？を失って涙する傳朱蓮にはもう、何も纏うものが無くなってしまった。家に帰りたい――。そう言って泣く傳朱蓮の方が、東淵の良家に育った若い娘として自然ではないかと狗不死には思えた、

「朱蓮……いつペン帰るか。東淵に」

傳朱蓮が答えたか否か、嗚咽で判らない。

（あんたは頑張ったで。？局の事やら殷汪の事やら、自分の事みたいに思い悩んでなあ。ちよつとは気晴らしもさせたらかいななんておもて付いて来たけど、儂がおってこんな目に遭わせてまうなんてすまんこつちや。……堪忍してな）

丐幫の者達は周りで二人を怪訝そう見つめていた。そんな中、一人が進み出て、

「狗不死さま。傳お嬢さんを東淵までお連れ致しますようか。我らがお供致しますが……」

「いや……ええ。儂が行く。すまんけど剣の方、頼んでええか？」
「勿論でございます。奴らの顔も知っておりますし、必ず捕まえて

取り戻してみせましょう」

傳朱蓮が顔を上げてその者の方を振り返ると、薄汚れたその男は笑顔を見せた。

「我らは武林の徒として当然の事をするまで。賊を知って追わぬのは義侠の道に反します。それでは」

男は急に真顔になると仰々しく抱拳の礼をし、丐幫の者達に向かって高々と杖を持った拳を上げた。すると辺りは『応』という咆哮に包まれ、やがて何処かへ向かって行進し始めた。

「……狗さん」

「ほんならいこか」

狗不死は傳朱蓮の愛馬、飛雪の首を撫でる。

「次は東淵や。宜しゅう頼むで」

「狗さん、ごめんね」

またしても傳朱蓮の涙が溢れそうになっている。

狗不死はその枯れた手を、俯いている傳朱蓮の黒髪の上にそっと置いた。

第十四章へ続く

第十四章 一

夏の強い日差しが肌を焼く感覚が続く。足元には白い砂地がどこまでも広がり眩しかったが、楊迅ようじんの視線は眼前に広がる青に釘付けとなっていた。

東涼とうりょう、汪沙わうさと呼ばれる西端の浜に楊迅は立っている。緑恒りょくこうを出てひと月余り、かなり悠長な旅となり時は既に真夏、しかも緑恒よりも南方である東涼一帯は湿度も高く、幾らか辛さを感じる道中でもあった。しかしこの旅が単なる遊山ではない事は最初から分かっていた事である。

（もう修行は始まっているんだ）

楊迅はそう自分に言い聞かせながら此処まで辿り着いた。

これほどまっさらな景色は記憶の何処を探しても見つからない。辺りは限りなく青く、白く、鮮やかな緑。それだけだった。だがこれらは全て、太古の昔からあるものだ。

（不思議だな。何よりも古いものののに、どれもまだ染めただばかりの様な鮮やかさだ。どうして……記憶にある他の風景はくすんだ色しか無いんだろう。どうして……何もかも崩れかかって……）

楊迅は目を閉じる。そこに見えるのは幼い頃の記憶、生まれ故郷である安県あんけんの朽ちゆく街並だった。その記憶の中で幾ら首を廻してみても、此処の様に明るく開放的でどこまでも広く、自由を思わせる風景は無い。

「どうした、海を見るのは初めてだったか？」

背後から声が掛かる。緑恒から共にやって来た陸豊りくほうである。

「はい。本物の海は初めてです。こんな……こんなに広くて、青いんですね。向こうに何も見えない……」

「本物とは？ 偽物ならあるのか？」

「あ、いや、前に東淵とうえんまで行った時、東淵湖を見ましたが最初はあ

れが海かと間違えてしまつて……。すぐに違つて教えてもらったんですが」

陸豊は楊迅の隣に立ち、何処までも青く光る海に目を細めた。

「青いのが海という訳ではないぞ。今日はよく晴れておる。空が青ければ水も青い。空が曇れば水も曇る」

「そう……ですね。でも素晴らしいです。来て良かった」

「そうか」

陸豊は隣で汗を垂らしながらも海に目を奪われたままの楊迅を見て微笑に笑った。

暫く眺めて後、陸豊が歩き出したのでその後を楊迅もついて行く。ふと前の陸豊の灰色の頭髮や細い首筋に目を留めたが、やはり汗をかいている様には見えなかった。自分はいえばもう全身が濡れて衣服がそこら中に張り付いて歩くのにも違和感を覚えるほどである。（汗をかかないように身体を制御出来るのは凄いけど、それは身体に良い事なのかな？ やっぱりこんな時は汗を書くのが普通の人間じゃないか）

一体何をどうすればこの暑さの中で汗をかかずに済むのか想像すら出来ずに、ついそんな事を考えてしまふ。だが本心は今すぐにでもその功夫を授けて貰えるよう請いたいところだ。もしあと数刻でもこうしていたなら確実に身体の水分も、気も、失ってしまうだろうと不安すら感じていた。

楊迅は前に行く陸豊の背中を、改めてじつと見た。若く無い事は確かだが老人と呼ぶにはまだ早いその四肢はやはり武芸者らしく筋骨が盛り上がり力強い。既に楊迅はこの陸豊が武慶真武剣派総帥、りくこう陸皓の弟であると感じ及んでいた。

かつては真武剣派の一番弟子でもあったというこの陸豊に剣術を教わる事となり、あの名高い真武剣を身に付けられると大いに喜んだ楊迅だったが、矢先、陸豊は言った。

『真武剣は教えられぬ。あれは儂の剣ではない。お前には、儂が子供の頃から修練し、今際まで続くであろう唯一つのものを伝えよう

と思う』

これを聞いた時、楊迅には意味がよく判らなかった。あの真武剣派に居て一番弟子を名乗る程であったのに、自分の剣は真武剣ではなく他にあるとはどういう事なのか。

『心配するな。これから教える剣は、儂が知る最も優れた技であり、知恵でもある。これは恐らく、あの真武剣派総帥すらも認めるところであろう。言える立場では無いが』

不意に陸豊が立ち止まり、右腕を前に伸ばしている。

「あそこだ」

白い砂浜が途切れた先に、海から急激にせり上がったかの様な崖が見えており、その上に木々が生い茂っている。そこに何があるのか楊迅には想像出来なかった。しかし陸豊が指し示したその場所こそが、この旅の目的地である事は間違いない。

「何があるんでしょうか？」

人の手によって造られたものは此処からは見当たらないが、楊迅が訊ねてみると陸豊は目を細めて懐かしむ様に前方を眺めている。そしてまた歩を進めながら言った。

「目に見えるものはもう殆ど失われてしまった。だが、儂にはとても大事な場所だ。お前にとっても、そうなるだろう」

これを聞いて楊迅はふと、『黄龍門』おうりゅうもんという名を思い出した。

（これから習う剣術に深い関わりがあるという事かな？ 東涼……東涼といえば黄龍門じゃないか。先生の言う剣とは黄龍門の剣術なのか？ でも前に少し教えてもらったあれは俺の知ってる黄龍門のじゃない）

楊迅は黄龍門ならば多少習った事がある。子供の頃に住んでいた安県では武芸と言えば黄龍門であり、そこでは殆どの住人がその教えを耳にし、多少なりとも武術に親しんでいた。

（でも、東涼の黄龍門か……。本当にそんなに凄いものなんだろうか？ 安県黄龍門から離れた異端の――）

楊迅は疑念を振り払う。

（先生も真武剣派を辞めて離れたんだ。先生の求めている物とは違ったからだろうな。安県を離れて此処に別の黄龍門を立てた洪こうって女弟子もそうだったのかも知れない）

崖の上へと続く坂道には辺りの木々が影を作り、幾らか暑さも和らいだ。坂といってもなだらかな丘を登るといった感じで、時折吹く風が湿った肌に心地良かった。

「もうすぐそこだ」

陸豊の言葉に楊迅が前を窺うと、建物の類はやはり無いが小さな石碑の様なものがぽつんと建ててあるのが見える。形も整っておらずかなり古そうな石だった。

そのまま真っ直ぐその石碑の傍まで辿り着いた二人だったが、陸豊はそれを眺めて無言のままであり、楊迅は本当に此処が旅の目的地なのかと辺りを観察する。するとどうやら此処には確かに建物があったらしく所々にその存在を窺わせる石積みがある事に気付いた。だかどれも崩れていて何かが建っていたのは遥か昔の事の様だ。

陸豊が歩き出し、崖に向かったので楊迅も黙ってついて行く。たいてい登って来た感は無かったがその崖は意外にも高く、恐る恐る下を覗いて見ると海から押し寄せた波が崖下の岩にぶつかって激しく弾け飛ぶ光景が繰り返されていた。

不意に陸豊が膝を折り地面に跪く。楊迅は驚いて急いで陸豊の後方へと下がりそれに倣った。が、それが何の礼であるのか全く解らない。黙ったまま後ろから様子を窺っていると、陸豊は地面に膝を付いたままで話し始めた。

「此処は、かつて洪淑華こうしゅくか、洪女侠が東涼黄龍門を開いた場所だな。お前は知っておろう？ 元は安県黄龍門の始祖、梅慈心ばいじしんの末弟子であつた」

「はい。聞いた事があります」

「安県では洪女侠を良くは言うまい」

「……そうですね。どちらかといえば、その、安県を捨てたという

か、裏切った……」

言ったところで楊迅は慌てて、

「でも此処で、黄龍門を名乗る事を許されたんですから、本当は裏切りとかそんな感じで離れた訳では無い……なんですよね？」

「確かな事はもう誰にも解らぬが、そう考えるのが妥当であろうな。ただ一人で此処まで来た末弟子に黄龍門を名乗らせるのじゃ。黄龍門の始祖は余程、洪女侠の非凡の才を認めておったのであろう」

陸豊はまた海を眺めて沈黙する。楊迅にはまだ師の心の内を察する事は出来ない。ただ、これから自分が教わるのはその洪淑華の剣で間違いないと確信していた。

第十四章 二

再び石碑の前に戻り、陸豊が何も無い土の上に座り胡坐をかいたので楊迅もそれに倣う。

「さすがに疲れた。だが、まずお前に聞かせておかねばならぬ事も多々あってな。それに、少々格好をつけておきたかったのだ。お前をいわゆる弟子とするわけだが、儂の、我らの武芸は他と違い形式的な流派というものを成してはおらぬ。しかし歴史が無い訳ではない。直系とは言い難いが、全ての始まりは梅慈心の黄龍門、そして洪淑華が編み出した新たな黄龍門の武芸なのだ。特に東涼黄龍門発祥の地は、我らにとって今の江湖においては唯一の象徴たる場所だ。今はこんな碑しか無いがな」

陸豊は石碑を指差して笑ったが、楊迅はこれを聞いて正座し直して畏まるべきかと悩んだ。今がどんな事になっていようと、祖が武芸を編み出した始まりの地は全ての弟子にとって聖なる地である。何も無くなっていたとしても、当時、この海までも無かったなどという事があるだろうか？ 安県を離れこの地へとやって来た洪淑華がこの波の音や風の感触を知らなかった筈は無い。この場所で何を思い、何を得、何を棄てたのかを無視して祖師の全てを継ぐなど有り得ないのだ。

楊迅はようやく、陸豊が自分を此処に連れて来た意味を知った。武林に数多ある武芸門派ならば入門が許されると祖師への礼拝でもって正式にその流派に弟子入りとなるのだが、自分にとってはこの旅がその儀式に代わるものなのだ。今まで単に個人的に剣を教わるつもりでいた楊迅だったが、それでも形式としてこの地に赴く機会を与えてくれた陸豊に、感謝の念で胸がいっぱいとなった。立派な肖像などは無いが、目の前の小さな石碑が何か神秘的なものに見える程だった。

「あの、先生……あ、師父」

楊迅は言い慣れない言葉を初めて口にした。正式に弟子となるならばやはり陸豊を師父と呼ばねばならず、思い切って口にしたが声が変にうわずってしまふ。陸豊は笑い、

「恥ずかしからう？　今更そう呼ぶのはな。呼ばれる儂も体中がむず痒くなる。今まで通りで良い。それに……、お前が儂の剣をものに出来るかまだ判らぬ。勘違いするな。お前の才を言う前に儂がうまくお前に伝えられるかどうか、お前の師となれるのか判らぬ。前にも言ったが儂もまだ完成させてはおらぬのだ」

「……」

「で、何だ？」

「え、あの、この石碑には何と書いてあったのでしょうか？」

石碑の表面は確かに人が彫った形跡があり文字があった事は疑うまでもないが、既に読み取れぬ程に崩れていた。陸豊は石碑をじっと見つめ一呼吸置いてから、

「知らぬ」

「ハ……」

陸豊は至って真面目に答えたようである。

「此処に何が書かれていたか、今や知る者はおらぬ。この土地の者ですらな。ただ、洪女侠が確かに此処に居たという証だという伝承だけが残っておる」

「そう……なんですか」

「儂はそう聞いた。儂の師からな」

「あの……先生は此処で学ばれたのでしょうか？」

「いや、儂は呂州りょしゅうで育ち、そこで武芸も学んだ。後に武慶に住み着く事になったがその前に各地を放浪した。此処を訪れたのはその時が初めてであったな。師は若い頃この東涼に住んでおったが後に呂州に移り住み我らを教えた。東涼黄龍門、最後の弟子じゃ」

「えっ、ではもう此処には黄龍門の武芸は残っていないのですか？」

「無い。師も実のところ正式な弟子とは言えなんだが、なんと失われかけておった洪女侠の武芸を蘇らせる事に成功した。細かく分断

され消えかかっておった技の数々を統合し、更に発展させ、新たな体系を生み出したのだ。フッ、信じ難いことであろう？ 武林でも知る者は少ない。聞いても信じられまい。己の目で見ぬことにはもう」

当然、楊迅も初めて聞く話である。しかしこの広い武林で、優れた武芸はなにも名の売れた大門派の専売でなくとも良い筈だ。野に優れた絶技が埋もれていてもおかしくない。むしろその方が面白いではないか――そんな隠れた凄腕の侠客に自分が成れたならさぞかし愉快だろうと楊迅は思った。

「だが……、今のままでは本当に消えてしまう。今や師の業を直接知る者はこの江湖にたったの三人しかおらぬ。儂を含めて、のう。東涼黄龍門は一度消え失せた。それがただ一人の手によって再び復活し、更なる飛躍を見せるなど有り得ようか？ その教えを直に聞き、見ることが出来た我らの幸運は得難き事なのだ。まこと、天佑とはこれを言うのだろうか」

（天佑……）

「儂がお前に教えるのは、再び消え去る事を防ぐ為。たとえ、完全な会得が成らずとも――」

陸豊の視線がふと上を向き、遠くを見つめる眼差しとなる。

「はい」

楊迅は決意の程を込め、力強く返事をしてみせた。しかし、陸豊に反応が無い。

「あの、先生？」

陸豊はただぼんやりと遠くを見ているのではなかった。楊迅の頭越しにその先を凝視している。楊迅は思わず後ろを振り返った。

人が来る。男が四人、馬に乗ってこちらに向かって来ていた。楊迅は此処を訪れたばかりで地理を把握してはいなかったが、男達がこのまま行けば先は砂浜があるだけの筈。どうやら四人とも旅装束の様で、他所から来た物見遊山の客でなければ他に何があるだろうか。

「先生、馬が通りますが……」

やって来る彼らが迂回してくれば問題ないがこのままでは今座っているすぐ脇を馬が通る事になる。楊迅はいつでも避けられるようにと腰を浮かしたが、陸豊は胡坐をかいたままじっと彼らを見つめている。

男達四人は何か言葉を掛け合うでもなく黙って進んでくる。楊迅は立ち上がり、脇に避ける様に立つ。陸豊に付き合って二人揃って座っていたのでは男達の機嫌を損ねる事に成りかねないが、せめて自分一人でも避けていれば少しはそれも和らぐのではないかと期待したのだった。陸豊は動かない。そして男達は陸豊の前までやって来ると馬を停めた。

先頭に居た男が陸豊を見ながら微かに笑った。

「まさか此処で会えるとはな。我らの縁はそう簡単には潰えぬということか？」

男の言葉を聞いて楊迅は違和感を覚えた。この男の口調とその雰囲気が見た目の印象と異なっていたのである。陸豊にまるで古い友人の如く話しかけたその男は壮年と呼ぶにもまだ早そうな若々しさを持っていた。

「それは僕の言う言葉だ。こんな処へ来ても良いのか？ まさか、お前に会えるとはのう」

「フフ、思いがけず会えたのだ。素直に喜んでおこう。互いに先が短くなってきたしな。次があるかは分からん」

「僕はともかく、お前も先が短いとは思えぬがな」

男達は馬を降り、陸豊もようやく立ち上がった。先頭の男は横に立つ楊迅を一瞥し、すぐにまた陸豊へと視線を戻す。

「これは楊迅といって千河幫せんがほうの者でな」

「二人だけで此処へ来たのか？」

「そうだ。僕は……この者に剣を教えようと思う」

「ほう、見込みがあるわけだな。なるほど、それで此処へ来たのか。まったく律儀なことだ」

男はもう一度、今度は楊迅を値踏みするが如く丹念に観察する。
楊迅はというと男の鋭く厳しい視線に思わず生唾を飲み込んで身体を強張らせている。

「ふむ、俺には判らん。判らん。が、あんたが間違うとも思えん。まあ覚えておくとしよう」

「お前の名を聞かせても？」

今度は陸豊が男に問う。

「そうだな……名など何でも良いんだが。俺は最近まで夏天佑かてんゆうという名を使っていたんだが、どうやらその名が知れ渡ってしまったらしく役に立たなくなった。ま、甥弟子になるという者に名を騙るのも気が引ける」

「夏天佑というのはあの、北辰の総監だった人ですか？」

楊迅は驚いて、思わず口を挟む。？局の朱不尽しゅふじんや范撞はんどうと共に東淵りよくしゅうから緑恒りよくしゅうに向けての帰路を同行した夏天佑。楊迅はその最期も鮮明に記憶していた。

第十四章 三

男は楊迅をじっと見ながら、無言だった。全くの無表情に見え、楊迅はただ、すみませんと小さく言って縮こまった。暫くして、

「そうだな。北辰教で總監をしていた男も夏天佑という。俺の名は殷。^{いん}フツ、こっちはただの、流浪人だ」

（殷！ この人があの殷汪^{いんおう}なのか！ この人が、本物——）

夏天佑と名乗っていた殷——それはまさしくかの殷汪しか有り得ない。楊迅は東淵で傅朱蓮^{ふしゅれん}から聞き、？局が襲われた際に受けた傷の養生の為に傅家の屋敷に留まっていた折に世話をしてくれた梁媛^{りょうえん}という少女からも——彼女は本当の名を知らなかったが——都で夏天佑を名乗った殷汪の話は聞いている。何より夏天佑本人にも会っているのである。ついに本物を見る事が出来たと楊迅は胸を高鳴らせた。

初めて見る殷汪の一番の印象はやはり、若い、という事だ。聞いた数々の話から推測するに殷汪は此処に居る陸豊とは近い歳の筈で、そろそろ還暦を迎えるという歳でなければならぬ。その若さは、『人じゃない』という噂にも思わず首肯してしまう程だと楊迅は感じた。

ふと夏天佑の顔が思い出され目の前の殷汪と比べてみるが、替え玉に用いるほどには似ていると思えない。殷汪の容姿は年齢との乖離そのものは別としてごく自然であり、夏天佑の異常をきたした若返りの法とは無縁にも見える。実際あの時の夏天佑は病を押して戦ったのもあるが直後命を落とす程の状態であり、そんなやつれ方が周囲の目をうまく誤魔化すのに功を奏したのか。そう考えるとあの夏天佑の衰弱までも入れ替わりの計画の内にあつたとも想像する事が出来る。全てこの殷汪の所為であつたのか——。

夏天佑が生きて緑恒まで行けたならもっと詳しく北辰教の内部や？局襲撃に関する話を得られた筈——そう考えたところで楊迅はハ

ッとなった。今、千河幫による、？局襲撃の下手人探しも行き詰っており、北辰教内部をよく知る筈の殷汪の行方も同時に追っているところである。幸いよく知る仲であるらしい陸豊がいる。陸豊も千河幫のやっている事はよく知っており、殷汪に縁恒まで来るよう言ってくれるのではないかと楊迅は期待した。

「それでお前は、何故此处へ？」

陸豊は殷汪に訊ねた。

「近くを通っただけだ。此处には何も無い」

そう言っただけで殷汪は先程陸豊が跪いた崖の近くへ歩いて行き海を眺め、そして振り返る。

「俺はあんたが此处に居るのは東涼の秘伝書探しを始めたんだだろうと思っただが、違うようだな」

「武慶のあれか」

陸豊もゆっくりと歩き出し、殷汪の傍で海に向かって立った。その後ろには楊迅が控える。殷汪と共に来た男達は話が聞こえるか聞こえないかといった場所で身に着けていた荷物を降ろして銘々休息するつもりの様だ。時折短く何かを話しているが、こちらにはあまり構う様子も無かった。

「興味は無い、か？」

殷汪の問いに、陸豊は薄く笑う。そして小さく首を振った。

「無い訳があるまい。どうせ偽物であろうが、それを確認するまでは気が休まらぬ。かといって奪った某を追ってみるかという気にもなれぬ。一体どれほど時が要る？ 真武剣は多く居る弟子を使えば良からうが儂にはそんな者はおらんしのう。……お前はどのようなのだ？ 探しておるのか？」

「探す者に付き合っている。見つければ覗き見てみようという魂胆なわけだ」

「探す者？ 何処の者だ？」

「真武剣なんかとは違う、真にそれを取り戻すべき者。元の持ち主さ」

そう言つて殷汪は同行してきた内の一人に声を掛けた。

殷汪に呼ばれて傍に來たのは武慶の商人、劉建和りゅうけんわである。どこか緊張した面持ちでやって來た劉建和に殷汪が陸豊を指差し、

「あんたは武慶の住人だから知っているんじゃないか？」

「勿論、武慶の者は皆存じております。真武劍派陸豊どの……」

劉建和の口調は商人らしくかなり丁寧で、頭を低くして陸豊に向かつて礼をする。長旅のせいもあつてかその顔には疲れが見えており、加えてこの暑さの中、楊迅同様汗を滴らせていた。涼しげな表情でいられるのは陸豊と殷汪の二人だけだ。

「武慶の住人で劉建和と申します。殆ど行商で方々に出払っておりますが」

「おお、おぬしがそうか。……なんでもお子までもが行方知れずとか。何とも氣遣わしい事だ」

陸豊の言葉に、劉建和は頭を掻いて、

「真武劍派をはじめ、多くの人達に動いていただいております。しかしもう半年にもなろうかというところ、申し訳無く……」

「真武劍派は秘伝書しか見てないがな」

殷汪は淡々と言つて一人、海に視線を投げた。

「真武劍も一人失つておろう？ 弟子ではない様だが」

「どちらにしても追わぬ訳にはいかんよな。向こうが先でも悪くはないが、こっちが直接取り戻せればそれに越した事は無い」

「何か手掛かりはあるのか？」

陸豊が訊ねると殷汪は一緒にやつて來た残りの二人の許に近づき、何やら言葉を交わす。そしてその二人を連れて戻つて來た。

「探してるのはこの劉さんと、搜索の依頼を受けた城南稟施会じょうなあんしかい。稟施会の洪こうと……助きゆうつ人の求、ということにしておくか」

殷汪の簡単な紹介と同時に、二人は陸豊に抱拳してみせる。その様が、この二人は商人である劉建和と違い武林に近い人間であることを窺うかがわせた。

「稟施会の洪破人こうはじんと申します」

そう挨拶したのは夏の日差しで肌の焼けた一同の中でも一際濃い褐色の肌を持つ若そうな男、洪破人。見た目は殷汪と似た年恰好である。

「洪……破人と申されるか？」

陸豊の眉間の皺が一層深くなる。

「ハ……、稟施会の内の……いわば？局の様な処で働いております。こちらの劉さんの依頼を受け、稟施会は奪われたご子息と東涼の秘伝書なる物を探しております」

「左様か……」

陸豊の怪訝そうな表情は変わらないが、短くそう言って視線は隣に移る。そこに居た男はやや俯き加減で、

「求持星きゅうじせいと申す……」

小さく籠もった声でそう名乗り、それだけで口を噤んだ。

紹介を打ち切り殷汪が言う。

「手掛かりとなるかどうかはまだ判らんが、怪しい男達がこの東涼に來ているらしい。それを今、探している」

「ほう。どう怪しい？」

「東涼黄龍門の秘伝書の一部を買えとこのあたりの商売人や金持ちに持ち掛けているそうだ」

「一部？それで役に立つ様なものなのか？」

「さて、どうかな。恐らくその一部分しか持っておらんのかもな。全て揃っていればそれを高値で売りたいところだが、分けてその価値を下げれば尚更買い手などつくまい。更にそれは古文字で書かれている。簡単には読めず、全ても読めず。東涼ならばかの洪淑華の物だからそんな状態でも欲しがる奴が居るかも知れんと踏んでやって来たのかもな。他所では話にならん」

陸豊は頷いて、

「劉どのの子息の方はどうなのだ？」

「二人の男以外、まだ判らない」

殷汪が答え、劉建和が溜息をつく。

陸豊の後ろでじつと話をしている楊迅は武慶で起きた事件について聞き及んではいたもののその内容を把握し切れてはおらず、ただ話に出てくる『秘伝書』という言葉に、密かに胸を躍らせていた。

第十四章 四

「ならば、急がねばなるまい」

陸豊が言々と殷汪は小首を傾げ、

「どうかな。奴らもそう簡単に諦められんだろうから暫くこの辺りで粘るだろう」

これを聞いた洪破人は慌てて、

「夏さん！ あ、いや、殷さん。のんびりしてて他所に行かれたら大変だ。この先はうちの店も無い。足取りも掴めなくなるんだ」

ようやく此処まで来て掴んだ情報である。すぐにも確かめ、本当にそんな者達が居るのならさっさと捕まえたいところだ。

「だそうだ」

「ならば僕も手を貸そう。まあ相手が二人なら必要無いだろうが、囲むなら多い方が良からう？」

「もう用事は済んだのか？」

殷汪はそう言って僅かに楊迅を見た。陸豊も楊迅を振り返り、「用事という程の事も無い。……僕がもう一度来ておきたかっただけの様なものだ。話すのは此処でなくても出来る事だ。だが、此処の事は、この地の事は覚えておいて貰いたい」

陸豊の言い含める様な口調に、楊迅は改まって大きく頷いた。

「楊といったな。何か今までに武芸の類を習ったことがあるのか？」急に殷汪に訊かれ楊迅は動揺しながらも答える。

「私は安県で育ったので黄龍門の剣術を少しだけ……」

「安県？ ……お前は安県の者なのか」

「はい」

殷汪が陸豊に目を遣り、陸豊は溜息交じりの頷きで応じた。それがどういう意味なのか、楊迅には解らない。安県の出であることに何か問題でもあるのかと訝しむが、それを口に出して二人に問う勇氣は無かった。

「入門したのか？」

「いえ、私は――」

「弟子では無かったのだな？」

「ええ、まあ……」

「家族は、一緒に出てきたのか？」

「いえ、私一人です」

楊迅は淡々と、落ち着いた声でそう答えた。楊迅は若いがもう子供では無い。一人で生まれ故郷を離れたのは辛い出来事であったに違いないが、その記憶を消し去る事は出来ずともうまく心を整えてきたのだろう。答えた時に感情の揺らぎが微塵も無かった事を、殷汪は意外に思った。

「安県……、安県か」

殷汪の呟きが気に掛かる楊迅だったが、言葉を発する間を与えては貰えなかった。

「とりあえず俺達は行く。まあゆっくりしていつてくれ。かの洪淑華も若い弟子を見て少しは気が紛れよう……。今夜はこの辺りに泊まるのか？」

陸豊が既に決めてあった宿について教えると殷汪は微かに笑って、「ならばまた夜にでも。酒でも飲もう」

「ああ。そうしよう」

また夜に会うとなればこの場に未練など微塵も無いとでもいう様に、殷汪ら一向は先程降ろしたばかりの荷を拾い上げると、再び馬に乗ってさっさと行ってしまった。

本当にまた会えるのか、楊迅は不安になった。偶然にもあの殷汪に会っておきながらこのまま何も言えずにまた行方を眩まされては、今まで散々、彼を追っていた千河幫の皆に何と言えば良いのか。

「偶然か必然か、『人』に分かる筈も無い……。が、天に住まえばこの様な事も可能であるのかのう？」

陸豊の呟きを、楊迅は理解出来なかった。どうやら陸豊は傍の小

さな石碑に向かって言ったらしく、楊迅の返事を待っている気配は無い。

「あの、先生」

「ん？」

「本当にあの、殷さんは……私の師叔ししゆくという事になるのでしょうか？」

「それは……まあそう言えぬ事も無いな。確かに我らは同じ、呂州の穆汪威ぼくおういという師に学んだ兄弟であった。それをお前にも伝える。通常の武芸門派であれば師叔と甥弟子で間違っておらぬ」

「穆……」

楊迅は穆汪威という名を耳にするのは初めてであったが、『殷汪に関係する穆という人物』には思い当たるふしがあった。かつて殷汪の身代わりであった夏天佑が太乙北辰教七星の劉毅りゅうぎに向かって言った言葉を覚えていたのである。あの時、夏天佑は『穆んせいだご先輩の天棲蛇』んせいだと言い、それが無くなって殷汪に敵は居なくなったという様な事を口にした筈だった。

それが無くなったので――敵が居なくなった――？ 陸豊と殷汪の師であったという穆汪威という人物と夏天佑の言った穆んせいだご先輩というのは別人なのだろうか、師匠が敵であるというのは変だと楊迅は思い、訊いてみる。

「先生、天棲蛇という何かの名称を聞いた事があるのですが、その穆汪威という方に関係がありますか？」

すると陸豊は驚いて、

「そのような名を誰から聞いた？ 知る者など殆どおらぬ」

楊迅が先の夏天佑の言葉を伝えると、陸豊はそっと目を閉じ何かを考えているようだったがやがて楊迅に向かって頷いた。

「確かに、汪の技に対抗しうる唯一のものであったと言える。師、穆汪威の編み出した新たな東涼黄龍門の武芸、それを天棲蛇の剣と呼ぶ。いや、呼ぶならば、こうであろうと師が言ったのだ。儂ら兄弟が学び、そしてこれからお前に伝えるのも、師が天棲蛇と呼んだ

それなのだ。天棲蛇というのはな、この東涼一帯では洪淑華をいう名でもあるのだ。そうだな……我が師、穆汪威の境地にまで至る事が出来たなら……あの『不敗剣』にも劣るものではないだろう」

陸豊は本当に愉快そうにフツツと笑い声を洩らし、目を細める。

「先生のご兄弟はその穆ご先輩に学ばれたのですか。殷……師叔も？　なのになぜ敵などと……」

「他に武芸を学んだ兄弟は血の繋がった兄が一人と、儂ら同様、師に拾われた弟、汪の二人。しかおらぬ。穆汪威というお人は武芸の師でもあるがその前に、我らの父だった。……汪が昔から望むのはただ一つ。往年の師に、自らが編んだ武術で勝つ事だ。汪の考える当世髄一、武林最強は今も、師、穆汪威なのだ。憎んでいるのではない。師を、父を越えたいというその一心が、今の殷汪を生み出したのだな。師はとうに亡くなってしまわれたが、さて、天棲蛇の剣は再び潰えるだろうか？」

訊かれて何と答えてよいものやらと楊迅が戸惑うのを見ながら、陸豊は首を振った。

「まだ消えぬ。お前に、伝えるのだからな」

「私に……出来るでしょうか」

楊迅が不安を覚えるのは当然の事だ。江湖に名高い殷汪や真武剣派を興した陸皓までもが突然、近しい存在となり、陸豊を合わせたその三人だけが受け継いだという先師穆汪威の、洪淑華より繋がる武芸を学ばせて貰える事になってしまったのである。優れた武芸を身に付けたい楊迅には願っても無い事ではあるが、話が出来過ぎではないか。

「さて、出来るかどうかを判って道を決める事などあるか？　何処まで出来るかに挑むのが道であり、人の一生であろう。地を這う蛇が天にも昇ろうかというのだ。出来そうだななどと考える奴は頭がどうかしておるのだ」

楊迅は今まで何度も殷汪の英雄譚を聞き、武林の至高、最強は彼だろうと漠然と考えていた。だが夏天佑の言によって知った、その

『最強』を揺るがすやもしれぬという天棲蛇の剣を、これから学ぶ事となる。あの田庭閑でんていかんが聞いたら何と云うだろうかと思像する。
(特に興味が無いふりをするんだろうな。でも、本心では思い切り羨ましがるぞ。田さんも緑恒に来て、一緒に学べば良いんだ。先生が教えると言って下さったのはなにも俺が特別だからじゃないさ)

第十四章 五

小さな石碑の前は再び陸豊と楊迅の二人だけとなり、暫く陸豊の話は続いたが先師穆汪威の話は陸豊にとっても遠い昔の話で、楊迅がすんなり理解出来るものではなかった。確かな事は、これから習う武芸は間違いなく東涼黄龍門の流れを汲み、しかしそれを東涼黄龍門と呼ぶにあたわず、『穆汪威の天棲蛇剣』であるという事のみ。それ以外、自分からは改まって話すような事は何も無い、と陸豊は告げた。

「あとの二人はどうか知らぬがな。それぞれ思うところもあるう。汪とは話せそうだが……もう一人、真武剣派総帥と話せる機会があれば良いが、当分は無理だろう。そもそもあちらは話せる立場ではない。今はな。とにかく、そのような背景を持ったものである事を理解しておくことだ」

とんでもない話だった。そのような剣に縁するなど未だ信じ難い。腑に落ちないという以前に飲み込めても居ない楊迅の表情を見て陸豊は笑った。

「そんな事よりも中身が肝心だな。ハハ、他は忘れようとも構わぬ」
そうは言われても、これほど興味を引かれる話が他にあらうか？
陸老兄弟には更に弟が居てそれがあの殷汪などと、人に言っ信じて貰えるとは到底思えない。陸豊は武慶を去って久しいが、陸皓と殷汪の関係は真武剣派と太乙北辰教という二大勢力の対立の構図に等しいと言っても良い筈であった。それが実は兄弟の間柄であるとは驚きである。だがこの陸豊はそれを何でもないという様に淡々と語る。事実、何でもない事なのだ。ただ、他には誰も知る者が殆ど居なかったというだけの――。

その後、陸豊と楊迅はその場を離れたが、特に見るものがある訳でもないこの片田舎では暇を持て余すばかりで、結局自然と足は宿

へと向いていた。しかしこの東京一帯は他所とは違って飢饉や疫病の類によって土地が荒れたりもせず、のどかで、緑の鮮やかな山野は楊迅の目を楽しませた。此処には楊迅の遠い故郷である安県に似た風景が広がっていた。

「かの洪淑華が安県を離れて此処へ落ち着いたのはやはり似たような土地だったからでしょう」

戻った二人を迎え入れた宿の下人はそんな事を言った。

「偶然、知った者に会ってな。ここを教えたのだが……来たかな？」

男ばかり――」

「四名、居られました」

楊迅が陸豊の言葉を継ぐ。するとその下人は何度も頷いた。

「来られましたよ。でもすぐに出られましたが。あ、お泊まりにはなるようです」

殷汪ら四人は件の逃亡者らを探しに出たのだろう。行き先を知らぬのに追っても仕方あるまいと、陸豊と楊迅の二人は確保しておいた部屋に入った。とはいっても他に客の気配は無く、今夜は自分達と殷汪らを合わせた六名だけかも知れない。

その後、少し早めの夕食を摂り、何をするでもなく辺りをぶらついたりしながら過ごしていたが、一向に殷汪らが戻らない。それからすっかり日が暮れて月明かりが照らし出す道の先を眺めてみても、やはり彼らの戻る気配は無かった。

「あの者達が手間取るような事があるのか？　ならば相手は中々のやり手とみえる」

宿の薄暗い灯りの下で陸豊と楊迅は共に酒杯を手話している。

「逃げられて追っているのかも知れません。このまま此処から遠く離れてしまうなんて事は……？」

「無いとは言えぬな」

もしそうならあの殷汪を再び見失ってしまう事になる。それは困ると楊迅は思ったが、では追いましょう、とも言えずにいた。そもそも此処からどの方角に行ったのかも分からない。

「北に行けば此処よりは大きい街があります。そこに行けば多少は遊んでいけますしね……」

下人の言葉に陸豊は首を捻る。

「儂らはそこを通って此処へ来た訳だが、ちと遠くないか？ 確かに此処へ戻ると言うておったのではないのか？」

「まあ少し遅くなるかも知れないとは言っておられましたし、じき戻られますよう」

その後、下男がそう言い残して下がってから数刻、ようやく表に人の気配が現れた。外は闇夜で何も見えなかったがその物音を聞いて、やっと帰ったかと思ひながら陸豊らは酒杯に口を付けるが、そこへ姿を現したのは全く見知らぬ、険しい顔をして睨む様に見渡す二人の男だった。

客は陸豊と楊迅の他には無い。男達はゆっくりと歩を進めながら二人の席へと近づいてくるが、楊迅は緊張の面持ちで視線を逸らし、陸豊の方は少なくとも見た目は氣にも留めていないといった体で酒を呷っていた。その真正面に男二人が立つ。

あまり良い身形とは言えない、旅の者ではなくどうやらこの地元の人間らしい中年の男二人。一人は背丈ほどある棒を持ち、むき出しの肩と腕の盛り上がった筋肉を披露せんとばかりに力を込めている様に見える。もう一人も似た衣服で筋骨隆々なのは同じだが、得物らしきものは手にしていなかった。腰にも見当たらない。尤も、武林には暗器あんぎの類を主たる得物とする者も少なからずおり、この男が本当に丸腰であるのか否かは不明である。

陸豊が持っていた酒杯を静かに置く。

「何かな？」

「稟施会か？」

陸豊と男の一人の口から同時に言葉が発せられ、互いを打ち消した。陸豊が眉を顰めて首を傾げて見せると、男がもう一度口を開いた。

「稟施会か？」

「稟施会？」

鸚鵡返しで応じる陸豊をじっと見つめた男はその後楊迅の方にも目を向けてその形を觀察する様に視線を動かしている。思わず表情を隠す様に俯いてしまった楊迅は稟施会という言葉について思い返した。

（そういえば、あの殷……殷師叔と一緒に居た人が稟施会って言うてたな。稟施会って確か商売人の集まりの筈だけど……何だろう？ 敵対してるのかな？ でも稟施会なんてこっちじゃ殆ど聞かないけど）

「稟施会の人間が、あんたらと接触した。そうだろう？ 仲間なのか、と問うたつもりだ」

少しばかり変な物言いをする無手の男はそう言って静かに反応を待つ。だが陸豊は改めて首を傾げた。

「我らは商売人でもないし、稟施会など知らぬが」

「洪という男に、昼間会っていたようだが？ 海の傍の、洪淑華の碑の前で」

「あー……」

陸豊はようやく思い出して得心したとばかりに大きく頷いて見せた。

「あれは偶然会った儂の身内が連れていた者。知らぬ者だ。我々は緑恒の人間でまだ来たばかりだが会うなど思ってもおらなんだ。儂の身内というのは稟施会ではない筈だが……儂の説明は解るかな？」

「……何を話した？ あんたの身内の事はいい。稟施会の洪という者は何を言った？」

「何を？ ふむ、名乗ったな。稟施会の洪――？」

陸豊が楊迅を見る。

「洪破人と名乗られましたか？」

「洪……破人というのか？」

楊迅の言葉に男はすぐさま反応し、もう一人と顔を見合わせた。

陸豊はその二人を交互に見ながら、

「おぬしらもその者を知っている訳ではないのだな？　だがその名に何かを感じると？」

「来た目的は何だ。わざわざ此処へ来た理由は」

「知らんと言うておろう？　そんなに知りたければ此処で待つが良
い。昼に会った者達はとりあえず此処へ戻って来る事になっておる。
何か予定を変えねばならん事態が起きておらねばな」

「此処に戻って……あんたらと合流し、何をする？　或いは何処へ
行く？」

「儂らもあの者達も全く別の旅をする者よ。儂らも、あの者も、此
処で何をする？　寝るだけだ。此処は宿だ。当然であろう？」

第十四章 六

微妙に噛み合わない会話が暫く続くかと思われたその矢先、急に表で馬の嘶きが聞こえ、続いて慌しく宿へと駆け込んでくる人影。それは先に現れた二人の男を見つけるなり大声を張り上げた。

「あいつら、かしらの屋敷まで押し込むつもりだ！　すぐ来てくれ！」

急いだからなのか、それとも元からそうなのかは判らないが存分に髪を振り乱してそれらしい慌てっぷりを披露するその男も、先の二人のお仲間のようなのである。

「かしらに何の用があるというんだ？　あの二人をかしらの処へ遣ったのか？」

「秘伝書とやらだ。かしらが見せろって言うもんだから屋敷から何人か来てあの二人を連れてったんだ！」

楊迅と陸豊は当初男達の言っている事がさっぱり分からなかったが、秘伝書という言葉聞いて幾らか想像する事は出来た。この者達がかしらと仰ぐ人物が居て、秘伝書を見たいと言い、その手下か何かがやって来てその秘伝書を持つ者を連れ帰った。秘伝書を持つ者——おそらくは殷汪らが行方を追う逃亡者——はそれまでこの男達の許に居たようであるが、それが何故かまでは分からない。とにかくその者達が別の場所に移ったので、殷汪や稟施会の洪らもそれを追い、帰って来ないという事なのだろう。

再び男が振り返って陸豊をじっと見たまま黙って思案顔を浮かべている。陸豊はそれを見返しながら、

「何か……問えばよいのかな？」

「……いや、邪魔したな」

男は連れのもう一人に同意を得る事も無く、一人足早に立ち去っていく。連れも何も言わないままその後を追ひ、結局何だったのかと首を傾げながら陸豊と楊迅は顔を見合わせた。

「海沙党でございますよ」

宿の下男が寄って来て陸豊に耳打ちする。

「海沙？ ふむ。聞き覚えはある、が――」

「海沙党というのは確か……千河幫に属している人達だと聞きました……」

楊迅が言々と下男が答える。

「ええ、そうです。と申しますか、この辺りで千河幫に与しない集団はおられません。海沙党も一応、商団ですから、千河幫の庇護を受けないと……まあ彼らはそんな事は言いたがらないとは思いますが」

「なるほど、商団か。……それで稟施会がどうのと言うたのだな」

陸豊は納得し、楊迅は頷いて、
「稟施会がこっちに乗り込んできて商売を始めたら、その海沙党には厄介な相手になるんでしょうね。稟施会というのは今凄く勢いのある集団だとか」

「しかし、稟施会と名乗ったのはあの洪という者一人だぞ？ そこまで警戒するか？ 海沙党の商いは何だ？」

陸豊が下男を振り返って訊ねた。

「もう、何でもやりますよ。元々は海運業を中心にこの辺りで栄えました。が今は殆ど仕事がありません。一時はとても荒れましてね。皆、消えて無くなりそうなところに手を差し伸べて下さったのが緑恒の范凱幫主はんがいでして、今はもっぱら陸です。はっきり言って千河幫の仕事を手伝わせてもらって何とか繋いでいるといったところですがね」

「海の仕事が無くなるなどという事があるのか？ もう何十年、いや百年以上、この国の海は北辰教が仕切っておるではないか。千河幫もまだ北辰から離れたわけではない。ならば海沙党とやらも変わらず恩恵を受けるのではないのか？」

「漁なんかはしておりますよ。小さな漁港が多いですからね。しかし海沙党の稼業は北との交易が殆どだったんです。相当儲けていたんですが……」

「交易が無くなったわけではあるまい？」

「そうなんです、その交易自体を全て北辰教が仕切るようになってたんですよ。海沙党や同業の者達は交易船を出す事も許されない。いや、出しても良いんですが、北の景北港には入れてもらえないそうです。どうしてそうなったのかは――」

下男は肩を竦めて首を振る。

「いつからだ？」

「もう……何年も前から、ですよ」

それから陸豊が口を閉じたままなのを確認してから下男は仕事へと戻っていった。

陸豊が言った、この国の海は太乙北辰教が仕切っている、というのは大袈裟な表現のようだが殆どその通りであり、千河幫など国の東に位置する海に接した地域を縄張りとする勢力を傘下に置いてからはその支配力を一層増した。太乙北辰教の本拠、景北港と南方との交易はかなり大規模で国中に知られていたが、下男の言ったとおり海沙党などの他の商団を締め出し北辰教のみで行うのは手間も金も多く必要になりかなり難しくなる。更には規模が縮小してしまい、旨味が減るのではないかと思われた。

交易は北の北辰教徒の生活にも直結した事業であるし、何より教団の懷を潤す大事な役目がある。止める事はまず考えられない。しかし何故縮小するような事になったのか、それは分からない。

「数年前からというなら汪が……決めた事なのか？」

「先生？ 何か仰られましたか？」

陸豊の声は小さく、楊迅が訊く。すると陸豊は手をゆらゆらと振って薄く笑った。

「さて、あいつらは戻って来ぬようだ。少なくとも今夜はな。儂らは休むとしよう」

「……そうですね」

楊迅にとってはまだ、殷汪や稟施会の洪が今、何処でどうなっ

居ようとも追って駆けつけるほどの関係ではない。今日初めて会ったばかりで当然なのだが、それでもどこか落ち着かない気分を感じていた。あの殷汪という人物について、真偽のほどはどうであれ今までに数多くの事を耳にし、彼を兄と呼ぶ東淵の女性と知り合って話し、彼に助けられたという少女からも話を聞き、これから師と仰ぐ人物は彼の兄であり、彼は間違いなく楊迅の事を『甥弟子になる者』と言った。

（普通、甥弟子と言えば……いや、師叔とか目上じゃなくても同門の身内に何かあれば駆けつけるものじゃないのか？ 武林のみならず江湖で義侠を行う者は皆そうするものじゃないか。まだあまり知らない人だけど……先生が行こうとしないのは……やっぱ『あの殷汪』という人だからだろうか）

夜の静寂に包まれた古宿に、特に何か娯楽がある訳でもない。酒はもう腹に収まっている。ほんの少し思案した後は深い眠りがあるだけだった。

楊迅はこの夜、見知らぬ屋敷で剣を抜き、縦横無尽に飛び回りながら無敵の剣術を振るう男の夢を見た。敵は両手に刀を持ち盛んに振り回していたが無敵の男にはどうやっても届かず、逆に男の一剣によって崩れ去った。まともな敵など居ない。それを無敵という。

朝、早くに楊迅は目を覚ました。そしてすぐに近くで休んでいる筈の陸豊を見て、そのまま大きくその目を見張った。陸豊は既に身体を起こして瞑想しているように見えたがそれはすぐに終わる。楊迅が目を覚ましたのを陸豊は目を閉じたまま気配でもって知ったのだろう。首を廻し、楊迅を見と言う。

「まだ早い。もう少し休んだらどうか？」

「いえ……」

「儂が早く起きるのは何でもない。年寄りだからだ。瞑想する為に起きたのではない。起きてしまったから瞑想するのだ。何故瞑想なのかといえ、半分眠るような心地で居られるからであって、修養

を欲しているのでは断じて無い」

陸豊はそう言いながら笑みを浮かべまた目を閉じた。

「今朝は珍しく心地良い貴重な朝だ。起きるのは惜しい。布団をかぶって、背を丸めてゆっくり自分の呼吸だけを感じておれば良い。そうすれば——また寝られる」

何かの修行の一部かと思われた陸豊の話は特に何でもなかったらしい。再び部屋には静寂が戻る。日の出が近づき暑くなりだすまでにはもう少しありそうだ。

（殷師叔と一緒に居た人たちはどうしたかな？ きっと何らかの決着はついてるんだろうな……。あの、殷汪、だもんな……。）

楊迅は再び訪れたまどろみの中で、つい先程見た筈の夢の事を思い出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0990d/>

流浪一天

2012年1月14日23時53分発行